艦魂物語,魂の軌跡～こんごう～

火星明楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～

【Ｎコード】
Ｎ２０８４Ｆ

【作者名】
火星明楽

【あらすじ】
大東亜戦争終結。栄華を誇った帝国海軍連合艦隊は壊滅し「艦魂」達は死に絶えた。あれから６０年近くたった日本には海洋防衛のための軍団「海上自衛隊」が組織されていた。これはその護衛艦たちの「艦魂」と人の物語。＜要注意事項＞この小説における「艦魂」という存在は筆者である火星明楽が諸説とは別に創作したものです。原初正しい艦魂設定を愛する方には不快な部分が多々ありますのでご注意下さい誤って読んでしまったとしても一切の責任はとれません

第一話　鋼の女神（前書き）

初めて「艦魂」を扱った小説を書きます
火星明楽です
「海上自衛艦」を設定に現代風パラレルで書いていこうと思っております
自衛艦隊の設定において艦艇名など実在するものが多数でますが全てこの小説内での物語としての存在です
また年号などの特定はしません
これは物語ですのでそのアタリは平にご容赦ください
知識においても足りぬ点が多いと思いますが優しい目で見て下さい
助言等々などはありがたく受けたいと思っております

＜要注意事項＞
原初正しい艦魂設定を愛する方には不快な部分が多々ありますのでご注意下さい
誤って読んでしまったとしても一切の責任はとれません
この小説における「艦魂」は筆者である火星明楽が正しい設定とは別に諸説を織り交ぜて創作したものですですので
また，この小説では，これ以降の章で艦魂そのもの「正体」探る部分が出てきますが
以降書かれる「艦魂」の設定は
私，火星明楽の個人史家としての研究の元に書かれております
故に，ココで書かれるこの設定は私個人の物であるため，他所で使うことを厳重に禁止します
（私の著作，権利とします）
理由としましては
個人レベルで調べられた「民俗学」を基本とした仮説で話しを構築

しているため，本来あるべき民俗学や考古学の発展の妨げとなってはいけない事，不必要な誤訳，誤解を世に広めてはいけないと，考えているからであります
また，これから艦魂小説を書こうとされる方に無用な混乱をさせないための処置と理解してたくださいけして占有を目的としての禁止事項でない事をご理解ください

これはあくまでこの「艦魂物語」内での設定としての存在でありますから，事実とは一切の関わりはなく，実在の民俗学にも考古学にも一切関わりはありません
あくまでこの小説内における仮説に基づいた設定である事をご理解ください

また
設定の作成に関わった「民俗学」等々の資料に関するご質問にはお答えできません
それらを元に誤解，誤訳を増やすことを望んではいないからです
色々と堅苦しい注意書きとなりましたが
純然に物語として楽しんで頂ける事を心から願います

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～
筆者
火星明楽

第一話　鋼の女神

「なっとらん…」

そういうと彼女は不機嫌そうに船の甲板へ上がるラッタルの手すり
に置いていた指を見た
冷たい滴を伴い湿った手すり
少しずつなぞるようにぬぐいとりながら手を払うと

上に向かう側に目を向けて小さな溜息を落とした
年の頃１０代後半
すらりと伸びた美しい手足に栗色の髪の彼女は海上自衛官の制服を
しっかりと着込んだまま
澄みきった青い空を思わす目を持つ美しい顔をしかめていた

天気の悪さが全てではない
だが曇っているのは同じ、心の心境をよく現す空に目をくれながら
何度目かのため息をこぼす

佐世保から出て
硫黄島にての演習を済ませたときに、彼女の憂鬱は始まった
本来なら休息を得るための帰港として横須賀の基地に止まるハズだ
ったのが、長い休暇を続け体をだるくゆるませる程に船は出港の日
をすでに何日か送らせていた

横須賀基地Ｙ１バースに付けられたまま曇り空の下に構えた影を見
せる艦
日本国の護りの亀として存在する艦艇達の中で
少女は酷く腹を立て

そして呆れていた
彼女が腹を立て、さらにこの基地に居続けになっている理由は

「イージス艦機密情報漏洩」

思いだした事件にモデルのように美しい足がラッタルを蹴飛ばした
音は狭い通路に軽く響き木霊する

苛立ちのまま上を見るのをやめ部屋に戻る道を歩くが、また足を返す
何度も続くこの動作、忙しく動いている隊員達の間を縫うように彼
女は何度もこの通路を行き来していた

憂鬱の元である事件は先月発覚した
彼女達が硫黄島で重要な演習にまっすぐ打ち込んでいたさなかに起
こった
幸いに海上自衛隊幕僚長の判断は速く、マスコミに蜂の巣を突かれ
る前に関係者の隔離はできたのだが
隠蔽にはいたらず、結果
「事情聴取」と公安部との「取引」が長引いていた

「士気は下がるばかり、仕官も出来損ないばかり」

口からでる言葉は「硬く」
およそ１０代の女の子からでる言葉には遠かったが顔には誰よりも
真剣さが伺えた
真面目に「自衛隊」の行く末を考えている少女は頭を振った
憂鬱を振り切るためか、何度も歩いた通路に行き場を無くしたのか
彼女は歩を早め甲板に駆け上がった

栗色の髪を揺らして
息を切らすことなく一息に

外は静かな雨
濡れる事もかまわず船首に向かい走る
曳航されて「謹慎の身」になっているとはいえ甲板の上には作業の
手を従来通り忙しく動かす「隊員」たちがいる
どの顔を無感情なまま、課された業務に打ち込むが、彼女の言うと
おり覇気はない
男達は黙してただ仕事を続けているのだが

不可思議な事に
誰一人として少女に気を止めない、最新鋭のイージス艦にいる美し
い少女の姿に目もくれぬほど沈痛なのか？
だが少女もまたそんな事に気を止める様子もない。男達の間を軽や
かな足取りですり抜けてゆくとまっしぐらに船首のそれも一番の舳
先に立った

見渡す港に手をかざしてみる
桟橋から向こう
雨は勢いはなく、ただゆっくりと町を湿らせて行く程度の中
潮の匂いと雨の甘い香りの中
やはりでるのは溜息ばかりだった

「申し訳ありません、私には…見えないのです」
誰に言うでなく
港にむかって小声であやまる
静かに手を下ろした少女はその場に立ちつくした
「私も、きっと出来損ないだから」
と項垂れて

大東亜戦争終結
あの悪夢の戦争からすでに６０年近くの年月が流れていた
戦勝国であるアメリカはこれから「隷属国としての日本」というプランが何案かあり
長期的に服従させるための下準備に入っていたが
そんな気長な立案が通ることはなかった

戦争は戦争を呼ぶ
太平洋を間に賭けた戦争が終わり
日本を焼け野原にした火の全てがやっと下火なった頃にそれは飛び出してしまった

朝鮮戦争

色々な思案と困惑の中
アメリカは日本を「隷属国」の扱いから一時的に「同盟国」という扱いに戻す
もちろん
本当に色々な意味での急増の扱い
すぐ隣の飛び火が返り火になって「日本」がまたも戦争に逆戻りする事を恐れたのだ
そのため
格下とはいえ同盟国として扱う、見返りのように自分たちの最前線基地化を進める隠れ蓑として

海上警備隊を承認した

これが後に「海上自衛隊」になる
とにかく
共に戦え自分の国を守れ。。。。
戦争で勝ったアメリカは矛盾した「平和憲法」を押しつけた後にさらに「追加」の難題である「軍」の設立を認め
現在に至った
いびつなる「軍隊」は、存在の意義をみつけられないまま発足した
自分達の国を護るという責務によって存在した帝国海軍。同じ責務を負う者として存在するハズだった海上自衛隊は、見せかけの平和享受に踊らされた市民に受け入れられるハズもなく

米国の意志だけにより作られた軍団と見下げられたまま日本国民には受け入れられなかった

理由は色々だが
戦争から復興をめざす日本国民にとって栄光輝かしい「帝国海軍」とは違った志から出来てしまった「軍隊」だったからかもしれない

艦の全てを失った日本の再生海軍は
艦船の多くをアメリカ軍から貸し付けられたものだった

極東を赤の侵攻から護るために、今更になって日本の戦争を理解したアメリカだっが、今更日本にあの強靱な軍隊を再設立させるのは恐怖の一つでもあった
だから自分達の手の中に収まる軍隊を作るという事を念頭に置き、自国で船を建造はさせなかった

日本に「海軍」を復活させるための条件の一つの条件として
だが考えるまでもなく
もはや日本製の船はなかった
最後の戦艦だった「長門」は水爆実験に使われ
同じように残された「帝国海軍」の艦船は標的にされたり
他国に賠償として払い下げられたり
そのまま物言えぬ体をバラされたりして死滅していた

日本には最早日本を護る戦船はいなかった
みんな死んだのだ
もはや純血の日本の魂を持つ「艦魂」はいなくなったのだ

「風邪ひくわよ」

どのぐらい船の舳先に立っていたのか
髪を軽い水玉で飾り
なおも雨に濡れ悲しげに横須賀の町を見つめていた少女の背に
少しばかり年上と思われる少女が声をかけた
ショートボブの茶色の髪
年上らしく落ち着いた笑みを浮かべた彼女も「海上自衛隊の制服」
をしっかりと着込んでいる

「姉さん」

「船室にもどりましょ」

優しい声は悲しげな顔の少女に向けて傘を差しだした

「解決したみたいよ、きっと明日には出港できるわ」
「ええ」
一つの傘の中に肩を寄せ合い歩き出した少女達に
やはり船員は誰も気にもとめない

連れられるまま無言であるく彼女に姉とよばれた彼女は伝えた
「もともとマスコミ向けの問題を解決するの時間がかかっていただけだから、ねっ」

「自業自得だ」
責めるように
自分を律する彼女の厳しい声に
姉は苦笑いをした
「そうね」

お互い思うところがあるのだろうが
声にだすには辛いのか
二人とも俯きながらゆっくりと船室に向かった
階段を下りた通りは先ほど彼女が駆け上がった通路
白い清潔感漂う中にも緊張のある作り
角を曲がった先の船室からはすでに集まっている「女の子」の黄色い声が響いていた

「しま姉～～明日出港ってホント？」

傘の雨粒を払いたたみながら部屋に入ったショートボブの彼女に年下の
それもおそらく１０代前半とも思える少女は鼻にかかる舌足らずな声と共に駆け寄った
髪は一本にまとめたものを三つ編みにしてお団子にアレンジした茶

髪。。。どちらかと言えば「幼女」そんな彼女も大きすぎる「海上自衛隊の制服」を着ている
彼女はまとわりつきながら姉に問う

「『さわぎり』、声が大きいわ。。」

部屋の中もっとも年下と思われる幼女をイスに座らせる彼女に
「ココにずーといんのも息苦しいからいいじゃん」

そう言ったのは
部屋の壁側にあるイスに座る少女
髪は黒のロングを引っ詰め，少し垂れ目で色白の彼女は白の第三種夏服を着ている

「相変わらずねぇ、そのかっこ。寒くないの？『むらさめ』？」

冬の近づく季節に入っている事を思い
夏服の彼女を見る目は笑いながら聞いた

「鍛え方が違うの！それにこれは伝統の「海軍セーラー」なんだぜ！」

だからそれが何？という顔で雨に濡れたままの少女もイスに座る
不機嫌な顔の彼女を無視したまま『むらさめ』は聞いた
「ところで『しまかぜ』出港の情報どこで手に入れたの？」

『しまかぜ』
そう呼ばれたのは雨に濡れていた妹を迎えに行った彼女
「さっきよ、間宮艦長が基地指令に呼び出されたらしくて艦橋で溜息つきながら言ってたわ」

「あくびじゃねーの？」
『むらさめ』は皮肉な合いの手をいれる
女の子とは思えない乱暴なしゃべり方だ

「あたい、雨の海はイヤだなぁ～～怖いもん…」

『さわぎり』は、淡いピンクの唇を尖らせてイスに垂らした足をばたつかせた
たしかに雨の続く海は気持ちの良いものじゃないが
隣に座っていた『むらさめ』は『さわぎり』の甘ったるい声に眉をしかめると、彼女の頭を抑えるような態度で

「護衛艦隊の一員が情けねー事言うな！」
「だってぇ…」

『むらさめ』に、上から言い含められふて腐れ気味の『さわぎり』はイスから飛び降りると
壁を背に立ったままの『しまかぜ』の元に走った
昔から『むらさめ』が苦手なのだ
足元にへばりつくと上目遣いに姉に聞く
「ホントに明日出るのぉ？」

「ホントでっせぇぇぇ！！」

『さわぎり』の問いに答えたのは急に部屋に現れた「光」だった
流星の粒を空間から振らせるように飛び散らせ
滝の中から姿を現す

「『いかづち』？」

突然と現れた光に部屋の中の少女達は誰も驚かない
足下にまで転がる光の粒にさえ目もくれぬままだ

眩しく光った光は部屋の白い壁に大きく反射するとすぐに小さくなり
優しい霞のような輝き変わった中から『いかづち』と呼ばれた少女が現れた
場違いにもコックの姿で

「あら、『いかづち』もう出港情報の通達されたの？」

突然の訪問者に驚くことなく『しまかぜ』は優しい微笑みで聞いた
丸眼鏡をかけた茶髪の跳ねっ返りの癖毛は愛嬌良く関西弁というか
関西のアチコチの地方が混ざったしゃべりで返事した

「そりゃもう！みなはん知ってますわ！！明日の夜出港でっせ！！」
「夜か」

濡れた髪をタオルで拭いていた不機嫌顔の少女がつぶやく
「夜の出港」
誰も見送りにこない港

「やる気失せるなー」
『むらさめ』は「夜の出港」という言葉にテーブルにうつ伏せながら愚痴った
「栄えある横須賀鎮守府から、夜のうちに出て行けってかぁ」
「う～～雨なのに、さらに夜だなんて。あたい泣いちゃうよぉ」
『しまかぜ』の足元にしがみついたままの『さわぎり』も、しょげた

「アカンアカン！！そんな風にしょげたら！！力つけな！！今日は金曜やで！！『いかづち』特製の海軍カレーで喝いれな！！」

つねに必要以上に明るい事を心がけている『いかづち』はそう言い
飛ばして
手元にもった小皿を誇らしげに上げた

「わてが『いかづち』が誇る海軍伝統のカレーは艦隊一ィィィィィィ！！」

伏せていた『むらさめ』が瞬間的に達あがると景気よく小皿を挙げている『いかづち』の前に走った

「馬鹿野郎！！！カレーは私！！『むらさめ』のが一番にきまってんだろ！！」

コックの襟首を絞り上げる

「なに言うてはりますか！！うちが一番です！！」

顔を歪めながらも小皿は上に

そんな二人の間に負けじと走った小さな『さわぎり』も大きな声で

「ちがうのぉぉ！！『さわぎり』のが一番おいいしんだよぉ！！」

突然カレー騒動勃発

落ち込み始めていた場は金曜カレー自慢で一気にうるさくなった

それはもう

女の子特有の黄色い声の喧噪、本人達の本気具合とは別に部屋は一気に華やいだものに変わった

そんな騒がしさに釣られた「蛾」が飛び込む

部屋に突然「男」の声が掛かった

「やあ！！こんにちわ！！」

少女達は目を丸くしたままピタリと止まってしまった

まるで時間がとまったように
そんな様子にかまうことなく男は部屋に入った

「雨が酷くなっちゃったね」

それは聞かなくてもわかるほどだ
背丈は１７０ちょっとぐらいで，黒の短髪の彼はバケツの水でもかぶったのかと言わんばかりのずぶ濡れた姿
唯一ビニールを被せていた黒いアタッシュケースだけが無事な様子で濡れた上着を引きはがすように脱ぎながら
静まりかえってしまった少女たちに話しかけた

「いやぁ～～まいった。金曜カレー食べたさに急いで乗船したんだけど、やられたよ」

雨水滴る上着を部屋の片隅にある観葉植物にかけ
未だ凍り付いたままの少女たちに屈託無く続ける
「嵐になってるの、気がつかなかった？」
手で外を指して

「誰だ貴様？」

カレー騒動の中も我感ぜずで座っていた無愛想な少女は立ち上がると
目の前、掴み合ったまま固まっている『いかづち』と『むらさめ』
を押しのけて男に近寄った
睨む視線に取り出したタオルを頭に被せながら彼は答えた

「こりゃ失礼！僕は今日からこの艦にのる「粉川（こがわ）」…」
「オマエなど見たことも聞いたこともないないぞ！内部調査官だな」
不機嫌と苛立ちの目は相手の目的を見透かし睨みながら詰め寄った

「例の事件」

あれで「相互監視」が行われるのでは。。。。という噂話しを彼女は聞いていた
はっきりとした口調で断じられた彼は気まずそうな顔で

「いやいや視察官だよ…」
「聞いたこともない」
睨まれたままの彼は怯んだ
目の前に迫った女の子は自分とそれほど変わらない身長に澄み切った青い目
タオルで目線から逃れようとしたくもなる

「誰この人…」

そんな二人の攻防の後ろで蝋人形のように固まっていた『さわぎり』が後ずさりして『しまかぜ』の後ろに隠れた
逆に『むらさめ』と『いかづち』は気押されないように仁王立ちをした
震える指先、『さわぎり』は彼を指さしてもう一度言った

「見えてるの？あたいたちが…」

怪異な質問
この部屋、この空間には彼と彼女達しかいないのに
その問いに
彼は首を傾げたが
少女の我に返って目は大きく見開いた

「見えるのか？私が？」

詰め寄った少女が慎重に聞く
「ああっ、もちろん見えてるよ」
彼の対応はどこかぎこちなかったが
少女から距離をとるとタオルで濡れた髪を拭きながら笑って言った

「やっぱりそうなんだ。君たちは「艦魂」なんだね」

顔には余裕が蘇っている
逆に少女たちは，より固まっている

「驚いた、２０年近くは生きてきたけど「艦魂」が見える人に会うのは初めてだわ」

静まった場に声をかけたのは『しまかぜ』
足下に隠れるようにしがみつく『さわぎり』の頭を撫でながら

「あはっそう、でも考えてもみなよ「最新鋭のイージス艦」の中で馬鹿騒ぎができる。それも「女の子」達なんて「艦魂」しかいないでしょ」

愉快そうに少女達を見回す
「そんなに硬くならないでよ。僕も緊張したけど「美人」が多くてたすかったよ！！これから仲良くやってこうね！とりあえずカレーで固めの杯ってのはどう？」

今までカレー自慢で騒いでいたのに誰も動けない

「ほら、えっとそうだなぁ、そっちお子様はあれだけど」
場を和まそうと彼はキョロキョロしながら続ける
「ああっこっちの美人さん！他の艦艇のお嬢さんも呼んで僕の歓迎会なんてどう？」
美人と言われたのにもかかわらず目の前で睨みを効かせ続けていた碧眼の少女は怒鳴った

「馬鹿者！！！官姓名もわからん不審者のくせにヘラヘラと！！」

強い勢い
襟首を掴むとさらに
「死にたくなければさっさっと降りろ！！」
女の子の力とはいえ「艦魂」という一つのエネルギーはすさまじいらしく
首根っこを万力で掴まれたぐらい締め上げる
その中で彼は苦しそうに返事した

「そうは言ってもねぇ、今日からこの艦に乗るって決まってるから」
「私はオマエなど乗せない！！！」

そのまま床に叩きつけた
怒りに相乗された力はそうとう強かったのか
彼は息をつまらせてもんどりうち
目を白くしろさせたまま彼女を見上げた

「じゃあ、君がこの艦の？」
見下す目線は忌々しそうに

「汚らわしい」
そういうと怒（ど）のこもった足音をたてながら部屋を出て行ってしまった

「まいったな…」
静まりかえった部屋の中
叩きつけられた顎先をさすりながら彼は部屋の中に目をむけた

「あ～～嫌われちゃったかな?」

助け船を求めて
みっともなく頭を掻きながら
声を殺した笑いを見せている『しまかぜ』に目を向けた
両手をおどけてあげて

それに了解したように
「初めまして、そしてようこそ「海上自衛隊第一護衛艦群」へ」
年上の余裕をきかせた『しまかぜ』は自己紹介を始めた
他の二人は警戒して沈黙を守っている
「私は『しまかぜ』護衛艦しまかぜの艦魂よ」
そのまま足元にしがみついたままの幼女に代わり
「この子は『さわぎり』護衛艦さわぎりの艦魂」

年長者の落ち着いた自己紹介に後の様子を見ていた二人も続いた
「私は『むらさめ』だ。護衛艦むらさめの艦魂だ」
斜に構えた態度を崩さず初めて自分たちを見た男に警戒しながらも
強気に、ちょっと怒った風に名乗った

「わては『いかづち』…護衛艦いかづちの艦魂でさ。おおきによろしゅうたのんます」
一応「官」とつく役職に遠慮したのかはコックの帽子を脱いで挨拶した

「やあ、どうも!どうも!」

やっと立ち上がった彼に
「粉川さんね、よろしく」
一巡した自己紹介の後。お姉さん各の『しまかぜ』が微笑みを返した

「ははっおどかしちやったみたいで、挨拶しときますね」
立ち上がりながら
通路の向こうに消えていった彼女を探そうとした
「今日はやめとけ、「鋼の女神」は気が立ってるぜ」
そんな粉川の態度に『むらさめ』が釘をさした

「そうね。。。今日はやめておいてほしいわ」
『しまかぜ』も首を振って
粉川に注意を促した
「彼女は?」
締められた首もとをさすりながら粉川は聞いた

「あの子はこの艦の艦魂」

「彼女がこのイージス艦の艦魂?」
「そっ」
簡潔な返事と会話は
普段と変わることのない日常に見える
だが今まで見ることの出来なかった艦魂を見られる男と
それを冷静に見る艦魂たちの間で止まっていた時は動き出した
『しまかぜ』は続けた

「彼女は国の楯。日本初のイージス護衛艦、その艦魂。。。『こんごう』」

それが粉川と『こんごう』そして多くの艦魂たちの物語の始まりだった

第一話　鋼の女神（後書き）

「艦魂」

火星は同じ「小説家になろう」掲載の黒鉄先生の作品で初めて知りました
昭和の戦争を書くことは歴史ジャンルを選択してきた私には辛い事ばかりで
目を向ける事から避けてきたジャンルでしたが

新しい発想で
新しい物語
そこにある悲喜こもごもに心が動かされこうして筆をとるに至りました

右も左もわかない火星に「艦魂同盟」へのお誘いまでいただき
快くココに新たな連載作品として「艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～」を始められたことに感謝します

初めてのジャンルへの挑戦です
至らぬ事も多々あると思いますがよろしくお願いします

火星明楽

第二話　水の瞳（前書き）

たくさんの「艦魂小説」作家の先生達からの祝砲もうけありがたくも嬉しい出発ができました！！

第二話　水の瞳

「艦魂」それは、どんな艦艇でも宿る船の魂である
「艦魂」その姿は霊感の強い者、魂の精神波長が近い者だけにしか見えない
「艦魂」それは全て若い女の姿をしている

「艦魂」それは女神の模倣でありながらも「人」と「船」を結びつける温かき魂である

「おてやわらかに」

粉川（こがわ）の控えめな挨拶に艦長の「間宮」は意味深な笑みと共に一言添えて握手をかわした
シーマンシップを現すさわやかな挨拶の置くに潜む思案は見え隠れする狂気だが、間宮はみじんもそれを感じさせない笑みで

自分の艦に訪れた新たな同行者である同業者粉川に挨拶をした

おてやわらかに、と
だがそれを願っているのは粉川の方だった

「視察官」

そんなふれこみが今更通用するわけがなかった
外気の冷たさも去ることながら空調の管理も厳しい
ＣＩＣの手前で握手した手に汗を握った粉川は事の経緯を思い浮かべていた

「イージス艦機密情報漏洩」

国家機密の漏洩という大事件の中、海上自衛隊幕僚長のとった苦肉の策は
「内部調査員の設置」だった
どう苦肉なのかと言えば

「相互監視」という名で「政府監視員」をシャッタアウトした事

国家機密の漏洩なのだから
本来なら「政府監視員」の出入りなどあたりまえの処置がとられるところだったが
そんなことをされたら「別の問題」を掘り起こす事になりかねない
「専守防衛」を掲げる日本におけるイージス艦の「必要性」
高度な疑問はともかく

「予算」の問題

叩けば誇りまみれになる集団と食ってかかって有らぬ嫌疑で「軍備縮小」などとバカげたことを声高くに叫ばれたのではたまったものではない

幸いにして
政府もそこまで無能に軍備を否定はしておらず、それでもマスコミ向けの答えを必要としていたところで折半された回答がこれとなっていた
隙を縫った借地としてだされたもの

「内部調査官」の設置を打診し、うまくを難を避けた形になった

薄暗い通路
ＣＩＣに入る手前で基地から戻ったばかりの間宮を捕まえた粉川はこの難役の中で護衛艦の艦長にあたる男には早めの挨拶をして印象を少しでも和らげたいと願っていたが、丁寧すぎる間宮の対応に逆の冷や汗をかいていた

「君が早くに乗船してくれたおかげで明日の昼過ぎには出港できそうだよ」

難役を買った「同業者」粉川は見慣れぬ艦内に目を走らせながらも恐縮しつつ、少しの冗談をとばした

「いやぁ、金曜カレーの日ですし何事も早め早めの対処が大切ですし」
話しをはぐらかし、難し方向から逃げたい粉川は「カレー」に会話を運ぼうとしたが

「早め早めか…」

黒の幹部常装服の上着を肩にかけネクタイを弛めながら感慨深げの対応と、少しの含みと影を見せる間宮、笑わない目がそれでも笑顔で労をねぎらって

「お互い自衛官としていらぬ苦労しますな」
「いえいえ」

粉川の居心地はＭＡＸに悪かった

言葉平らで笑顔の裏側を見せない「間宮一等海佐」は幕僚長の覚え

も良い「狐」だ
防衛大学卒の切れ者四十五歳を目前にしての准将になるとも言われているほどだ
だからこそ「最新」のイージス艦の艦長でもある
歳に比例して崩れる腹回りが多い将官クラスの中にいて
崩れる事のない筋骨逞しい姿に
弛まぬ高い志をもっている姿が見て取れる

なのに
のらりくらりとした態度で相手をはぐらかす

今回の事件
直接『こんごう』の機密が漏洩したわけではなかったが事件のせいで全てのイージス艦が足止めをくらっていた
昨日の昼に世論を絡めた見地からなどと、やたらに長引き引きずるだ間延びさせられた「審議委員会」が終わり
やっとの出港が決まった。横須賀基地司令に挨拶をして帰ったばかりの所を粉川は伺ったのだ

後回しにはしたくない厄介な相手として認識している艦長間宮を

会話の端々に緊張を走らせている粉川の前
術達者である間宮はリラックスと肩を揺らしてみせると

「カレーは我が『こんごう』のが一番うまいぞ！何せ帝国海軍時代から鬼と称された規律厳しい『こんごう』の目の元で作られるのだからな！」

笑顔が軽く肩を叩くと間宮は叩くとクルリと向きをかえてＣＩＣに入ろうとした

「待って下さい」
「まだ「質問」が？」
ドア前で歩を止めた間宮は首だけ後ろに向けた

「あのひょっとして艦長は。「艦魂」が」
「我ら海上自衛官の魂はいつだって船と一緒って事だ」
そういうと自分の胸を叩く仕草をして
「そういう思いで船に乗ってるっていれば、感じられないかな？」

警戒な受け答えはドアを開け青白い光とオレンジのぱねるに満ちた部屋の中に消えていった

外部から来た「士官」である粉川にはＣＩＣに入る権限がない
本来ならば事件の経緯から職務権限としてＣＩＣへの立ち入りを行う力もあったが、そこはそれ
自分達の艦の頭脳に「勝手知ったる」と言わんばかりに入る事を拒絶する厳しい目線とかち合う、中で働く隊員達に睨まれ退散するほかない状態

たとえ、権利であってもそこまで「舐められてたまるか」という意志に粉川は両肩をすくめたまま退散した
間宮の意味深な言葉に頭を掻きながら
それでも久しぶりの楽しみである「カレー」にありつくために粉川は食堂に向かった

開けた翌日も雨は威力を落としたとはいえ降り続いていた
艦内にまで響く潮騒

白い雨雲は夕方に向かっての天候をどうするか決めかねているように忙しく流れている中
同じぐらい忙しく護衛艦こんごうの乗員も動き回っていた
長く足止めされた停泊から解放されたのだ

そもそも佐世保から出向してきていた護衛艦隊には別の仕事があり
長くココに引き留められる訳にもいかなかった
その遅れを取り戻す為にも早くの出港が必要とされていた

「ひどいもんだよ」

粉川は船内での就寝から他の自衛隊員と同じように起床
業務に移つろうと通路を歩いていたが
昨日カレーを食いっぱぐれた事に少なからず自分の立ち位置の悪さにぼやいていた

結局「同業者」の監視役なんてのは「恨まれ役」みたいなものだ
仲間を疑うなんて、そんな気はなくとも
そういう扱いをうけるのは道理
昨日食堂で「カレー売り切れ」と無言のカードを出されていた時にイヤと言うほど思い知らされた

目の前大型の寸胴に満ちる程作られているカレーがどうして売り切れなのかと突っかかったが

「『こんごう』に乗る全ての乗務員に行き渡るってから出直してこい」

乗艦隊員三百人
全ての隊員の食事を預かる第四分隊補給課の長は、鬼の形相で腕組

みしたまま粉川を追い返した
冷ややかな隊員達の笑い声を背に食いっぱぐれの腹を押さえた粉川は、艦を一度降り基地ないの食堂にて食事を済ませるというなさけない事態になっていた

「損な役に飛びついちゃったなぁ～～」

独り言を口に出してぼやきながら部屋をでる
赴任したはいいが
そもそも仕事があるわけでもない、むしろ無い
粉川はラッタルをのんびりと上に登った

千切れながら流れる雲の中、雨は静かに降り続けていた
見渡せば周りの艦艇も忙しく出港の支度に入っている
トラックヤードと桟橋には少ないながらも人が集まっていた
夕方近くの出港時間になれば、もっと人も増える事だろう

寂しい出航に少しの花を添えてくれる基地の仲間達が

甲板上の隊員にも煙たそうな顔を向けられながらもあちこちと見回していた粉川は船の切っ先に立つ彼女を見つけた
凛とした後ろ姿
第一種正装に身を包み栗色の髪も綺麗に纏め上げている

「昨日はどうも」

粉川は昨日締め上げられた首根っこを守りながら基地を見つめ背中を向けている『こんごう』に控えめなトーンで話しかけた

「貴様、まだ降りてなかったのか？」

粉川に顔を向ける事なく返事は返された
「降りないよ悪いけど、僕の仕事だし」
顔色をうかがうように近づく粉川は続けた
「仲良くしないかな?君の美しい姿を見ることのできる唯一の「男」として…」
「断る」
『こんごう』の返答は簡潔すぎで相手に遠慮がない、まるで寸切りの会話で後が続かないが、ここでかいわの出来る相手はとりあえず
『こんごう』だけの粉川はのらりくらりと歩を進めて彼女に近寄り
「なんでかな、僕は君たちと仲良くなりたくてココにきたのに」
「ふざけた事を」
整った薄いピンク色の唇は会話にはまったく興味を示さない
ただ横須賀の町を見つめ続けていた
少ない雨の靄に曇る町はソフトフォーカスの中、柔らかく見えるヴェルニー公園を
「誰か、見送りにくるのかな?」
『こんごう』の視線先を見ながらそれでも粉川は恐る恐る彼女に近づいた
「近づくな」
そろりと近づく足取りに釘をさし怒りの声も高く彼女は続けた
「オマエが見ていい景色ではない」
「そんな、一緒にみたい…かなぁ?」
猫なで声ですりよる粉川に『こんごう』は無機質で尖った返事を返した

「オマエのような裏切り者が見ていい景色などない」

辛辣な意見に粉川は苦笑いしながらも『こんごう』の言葉に従い舳先の方には進まなかった

「裏切り者なんて、傷つくなぁ」

イタイ思いをしても『こんごう』に取り入りたいのか、周りをウロウロしてみる粉川まるで反応をしめさず、関心もない様子の彼女愛想笑いでも懸命の粉川だが

相反するように

ツンとすました顔は美しく長い睫毛にまで雨粒を飾っている

「目障りだ早く降りろ」

「それは無理、しばらくは一緒させてもらうよ。だから仲良くしようよ!!ねっ!!」

振り向かない背中に空振りもいいところだが手を伸ばし握手を求めるも見向きもしない

「手も洗ったし汚れてないよ、オヤジ臭もまだしてないとおもうけど?」

それでも粉川は諦めることなく話しかけるが、反応はひたすらに薄く

「そういえば君の目は、青いってより透き通ったガラスみたいだね」

口説き文句を並べたかった訳ではなかった

空振りの握手をひっこめた粉川は

何を話しても意に介さない『こんごう』におべっかをつかうの止めて、彼女の特徴的すぎる「瞳」の事にふれた

実は祭司よに出会った時から気になっていた点だった
日本国籍を持ち、日本を代表する艦艇である彼女
姿形もどこか日本人女性的でなく、精錬されたプロホーションと大
人びた体に長い手足
モデルにしてもおかしくないような姿は外国の女性のようにも見え
それを一層際だたせている瞳の色

さらに澄み切った目の玉さえも同化しているような色には、少なか
らずの驚きもあったのだ

「だからなんだ」

子が初めての疑問に『こんごう』は素早く振り返って胸ぐらを掴み
あげていた

友好的な顔は自分より身の丈のある男の顎に怒りの亀裂である眉間
の皺を立たせたまま
自分の気にしている部分を突かれたことに対する本気の苛立ちを吐
きだしていた

「目が青いから帝国海軍を継ぐにはふさわしくないとでも言うのか
？」
対峙した目、近すぎる顔で見る瞳

『こんごう』の目は透き通った湖のようだ
水の瞳
海のように深い闇を持たぬ目
ともすれば目の玉のないレンズをつけているような顔に見えてしまう
粉川はつかみかかられた姿勢のまま軽く手を振った

「そんな事はないよ、ただホントに綺麗な色だなって」
「うそだ、気味悪いと思っただろう」

「いいや」

手を離した『こんごう』は顔を背けた
粉川にしてみれば意外な反応だった
強気な『こんごう』にとって目の話しをされるのはイヤな事だったのかもしれない

日本国に籍を置く彼女にとって、青い目である事は何かしら障害になっていたのかもしれない
俯く姿は寂しそうに見えた

そんな姿に
粉川は大人の余裕を見せた
「気味悪いなんて思ってないよ!!ホントに綺麗だと。初めて会った時に思ったんだ。すごくキレイな目だって!!」
そう言うと急に『こんごう』の前に回り込み両頬に手をよせ顔を上げさせた

「すごい美人だよ、いやまだ美少女かな」

息が届く距離
真ん前に立った
不意の粉川の行為に『こんごう』顔は一瞬で真っ赤に染まった
今まで
自分達「艦魂」を見る事の出来る者はいなかった
だから「男」なんてものは見慣れていて、むしろお互いが「空気」の存在だったハズ

なのに今、粉川の大きな手が自分の頬を優しく包み
真面目に瞳を見つめている
体に触れている

体温
脈拍
味わったことのない高揚感に
『こんごう』は

ダイナミックかつ美しいフォームで粉川の顔面に迷いのないフルスイングの拳をぶつけた

「きっきっきさぁまぁぁぁぁ！！軍人に対して何をするかぁぁぁ！！！」

周り
「艦魂」を見ることの出来ない隊員からすると滑稽な姿に違いない
粉川は大きく吹っ飛ばされてぼた餅が投げ出された鈍い落下音と共に何回転かして甲板にくたばった
雨で足を滑らすにしてもあり得ない錐揉みの果ての姿に、隊員の誰もが声を失ったまま見つめている

その前で今までは誰にも見られる事のなかった魂は吠えていた

「外洋に出たら沈めてやる！！！」

そう言うと
悶絶の坩堝に入っている粉川を置き去りに光の中に消えていった

「手加減してよ…君イージス艦なんだから…」

未だ甲板から立ち上がる事の出来ない粉川は
涙と鼻血の顔面を抑えたままうずくまり
痛みとの格闘という見苦しくも滑稽すぎる「一人芝居」を甲板作業員に晒していた

『こんごう』が戻った後、ラッタルの端から事の成り行きを見ていた『しまがぜ』は笑っていた
隣に立っていた『むらさめ』は冬の雨の中だというのに相変わらず第三種夏服のまま腕組みして
「あいつ、鹿児島に着くまでに死ぬんじゃねーの？」
傍らの『さわぎり』は『しまかぜ』の足にしがみついて
「『こんごう』てやっぱり怖いよねぇ」
心配そうに粉川を眺めた

「気長にいきましょ、あわてちゃダメよ初めて私達を見ることのできる「人」なんだからね。そのうち『こんごう』もうち解けるだろうけど、注意は必要ね」
『しまかぜ』は
終始微笑みながら雨の具合を手で確かめて言った
大騒ぎの二人をよそに雨は足を速めココからは去っていく様子だ
このままなら夕日の綺麗な出港を迎えられそうだ

「夕方には晴れるわ、良い船出になりそうよ」

そんな傍観をかます「艦魂達」の前
粉川はただひたすらにうずくまって、誰からも救助の手を得られないままでいた

「まいった、こんな至近距離でトマホークくらうなんてあり得ない、

誰か助けてよ」

奇異な目で見る作業員達の中一人愚痴り続けた

第二話　水の瞳（後書き）

少しずつ登場人物のデータとかも書いていきたいものです

第三話　夢の花園

横須賀港からの出港が迫る時の中で
粉川は他の護衛艦に比べれば広くなったベッドルームにいた
二段式になった水兵部屋だが、これでも一昔前の護衛艦に比べれば
格段によくなった居住性
特に『こんごう』艦は有事の時に司令旗艦にもなる事を想定して作
られているため、部屋数も多い
その開いた一つの部屋を粉川は占有していた。というより隔離とい
うのが正しいのかもしれない
規律厳しい海自の中でも最新鋭の護衛艦、最新の防衛システムを持
つ船にて、部外者を艦無いで働く者の誰であれ一緒に起きたくない
という間宮の私案の下でそうなっていた。

「痛い・・・マジで本物だ」

『こんごう』にぶん殴られ頭の回りにキラキラ星の衛星を回したま
ま医務室に向かった粉川はそのまま自室に引っ込めと指示され、追
い出され自己治癒にまかせてしばし横になっていたのだが
本庁勤務でも規律正しき生活をしている彼が簡単に眠る事など出来
るハズもなく
鈍痛なり響く額を抑えたまま天井を眺めていた
眠れない理由は他にもあった

「艦魂」を見たという事

粉川は体を鞄の方にかえし、枕元に古びた手帳と
自前の真新しい手帳を並べ片眼で中身を確認していった

「艦魂ズ、いたねぇホントに」

痛みの顔から手を下ろし顎を掻きつつ
革表紙の煤けた古い手帳を何枚かめくる、色あせ紙も乾燥している
ため軽いこすれる音が静まった余剰兵員室に響く
手帳の中、万年質で書かれた字黄色く変色している
ところどころに赤い鉄分を浮かび上がらせている文字は達筆で十分
過ぎるほどにペンを使いこなした後は流れるように記録を綴ってある

粉川はその中、戦艦金剛の名を記したページに指をとめた

「金剛…」

開いたページの所狭しと書かれる記録に目をこらしながら、小さな、
誰にも聞き取られないような声で音読すると

「確かに、金剛だね」と顔をあげ
しおりを入れると自分の胸ポケットから新しい手帳をひらいて寝返った

顔の腫れは水タオルを当て続けたおかげで幾分引いていたが
あの味わったことのなか衝撃のパンチ
体の芯に届いた痛みは、なかなか消えそうにはなかった
思い出すに恐ろしい剛速球、ため息を細くつくと、開いた手帳の側に

「『こんごう』」

復唱しながら書き込む

書きながらも
あんな可愛い顔からあんな苛烈なパンチを出すとはと眉をしかめる
あり得ない状況の拳、目の覚めるというか
今までナンパであんな酷い思いをした事のなかった粉川は溜息がでたが

「さすがに戦艦金剛の魂と言ったところだったなぁ」

手元に広げた手帳と古い手帳を見つめつつ

「しかし本当に「夢の花園」は遠いな、どうやって「手なずける」んだ？「艦魂」って？」

女ばかりの魂達と鼻の下を伸ばしていた自分を悔い改めるように愚痴るともう一度、古い手帳を何枚かめくる
手垢の付いた紙は急な動作では破れてしまいそうな程感想した古い紙だ
カサコソと擦れる音をゆっくりと立てつつページを進ませる中
粉川は繰り返し何かを探すように見入る

「大日本帝国海軍高速戦艦金剛、艦魂金剛は」

「お～～怪我はどうよ？」

寝ころんだまま書き物と捜し物に没頭していた粉川の背中に景気の良い声を掛けたのは『むらさめ』だった
相変わらずの「海軍セーラー」で晴れ上がった粉川の顔を眺め笑い

を堪えている
一連の「殴打事件」を影で見ていたのだから怪我の理由はわかっているが、実際やられた本人とそのダメージの大きさには笑ってしまう
『むらさめ』の笑った口元に機嫌悪そうに答える

「痛いよ」

ペンを振って
ちら見で相手を確認して起きあがった

「スケベな事考えたか？」
『むらさめ』はわざと話題をそらして聞いた
「どうやって？」
粉川は起きあがると手帳を閉じて聞いた

「彼女は、照れ屋なの？」
「へっ？『こんごう』が？」

おかしな事を聞くヤツだと
『むらさめ』は両手を上げて呆れたように答えた
「慣れてないんだよ！そんな事、今まで言ってくれるヤツいなかったんだから！」
「慣れてない？今まで本当に艦魂を見れた人はいないのか？」

粉川は『むらさめ』はあまり警戒を持たず正直に、こざっぱりと話しをしてくれるタイプと見切って聞いた
事務的な質問
『むらさめ』は疑う事なく返事した
「そんなのいねーよ、オマエが初めてさ『しまかぜ』がそう言ってただろ？」

「そうだったけど、それにしたって僕は「目」が可愛いいねって言ったただけだよ。殴ることないじゃない？」

粉川の返事に『むらさめ』の動きは止まった

「目の事にふれたんか？」

顔に困惑を浮かべて

それがイケナイ事だったと態度で表している

「ダメな事だ・・・」

確信に迫ろうと聞き返した粉川の声をぶった切って光りは参上した

「ありゃ～～粉川はん、だいぶ腫れ引いたね～」

光の塊が目の前で眩しく輝き消えたと思った瞬間

細い指先が腫れ上がった頬をなぞり鼻先を撫でる感触と

女の子特有の柔らかな香りが粉川の目の前に現れた

「『いかづち』ちゃん？」

まぶしさで瞬時に上げた毛布をゆっくりと除けた

そこには艶やかな花たちが粉川を珍しそうに覗き込んでいた

右も左も女の子だ

この無骨な艦艇の中に急に花畑が現れたとしか言いようのない数

「うれしいねぇ、横須賀最後の夜にわざわざ僕に会いに来てくれたの！！」

目の前には昨日見た倍近くの艦魂たちに粉川の心は飛んでしまった
そこには、上は「護衛艦隊」から下は「掃海艇」に横須賀港内で働く船達まで
とにかく
しつこいようだが「女の子」ばかりが集まっている
そして粉川を見つめている
みな初めて自分たちの姿を見ることの出来た男に興味津々で目を輝かせて
誰から話しをしようかとざわついている

「なんだあ!!なんでこんな所に急に集まってんだよ!」
通路に溢れるほどに集まってしまった艦魂たちの中
『むらさめ』が、息苦しそうに叫んだ

「わてが呼びましたねん」
相も変わらずコック姿の『いかづち』

「だぁほ!!何で，んな事すんだよ!!」
「だって初物やし・・・ほれ『しらね』はんに頼まれて。。。。」
どうにも手の早い『むらさめ』は『いかづち』に飛びかかった
「余計なことしやがって!!」
振り上げる拳を、後ろから受け流す光の手、花園の中でもひときは目立つメイクの艦魂が割って入った

「あんた達だけで楽しもうって魂胆だったの?」
群れなす艦魂達の間を割って入ってきたのは日焼けした肌のかなりグラマーな女の子

「初めまして私は『あけぼの』『むらさめ』よりピチピチの艦魂よ」

「なんだと！！」
勢いアチコチに手を伸ばしそうな『むらさめ』はまだ目の前の『いかづち』をひっ掴まえたばかりで反転がきかない
そんな馬鹿をよそに
粉川に迫る彼女は、今時ピチピチと自慢気に言うほどに確かなバディーのまま近づく
胸にもたっぷりと女らしさを蓄えた彼女はは粉川のベッドの横に座るウェーブのかかっ栗色の髪に、ぷっくりとふくらんだ唇にはグロスが入り、とろけるように輝いている
睫毛もしっかり跳ね上げメイクまさに今時の女の子だ

「ねぇ私、見えるぅ？」

急な質問だが
悪くない
声にも色気たっぷり
それこそ粉川の鼻の下はゆるみまくって胸元を見ている

「いゃぁもちろん見えてるよ、うん、すっごく」

見えているのは胸だけでは？
そのぐらい目尻も下がっている
『あけぼの』の手は粉川の顎をさすりながら聞いた
「ねぇ私キレイ？」
「もちろん～～」

「私の方がキレイでしょ！！」

すっかり手なずけられ弛緩していた粉川の首を顎ごと反対側にひねったのは

黒のストレートのヘアーにシャギーを内側に入れた少女
制服の前ボタンをはずした彼女はダイナマイトバディの（あけぼの）
に比べればおとなしめの胸だが、ミニスカートからのぞく脚は

「『す・ず・な・み』、なみって呼んでぇ」

ひときは目立つ潤んだ瞳に細い指先
ネイルも磨き上げられ美しい、六本木や銀座に生息するクラブホス
テスかと間違うほどだ

「いゃあ、素敵だよ～～なみちゃん」

「だぁ！！！うぜぇ！！何しに来たんだ！！オマエらぁぁぁ！！」

すっかりキャバクラ顔負けの様相になっている二人の間に怒鳴り声
と共に『むらさめ』が戻ってきた
「このお色気シスターズ！！きもちわりぃんだよ！！」

怒鳴り散らす『むらさめ』の顔に『あけぼの』の張り手が口をふさぐ
「うるさいわね、色気の「い」の字もない女に言われたくないわよ」
「そうよ！！自分の色気の無さを棚に上げて、変な「あだ名」つけ
て回らないで頂戴！！」

ふさがれた口から手を剥がしながら『むらさめ』は仁王立ちで怒鳴
った
「うっせえ！！オマエら姉妹といい『しらね』の取り巻きと下っ端
連中はみんなお色気魔神だ！！」
一声に巻き起こるブーイング
それもそうだココにいる半分の艦魂に言たったも同然だ

「ひどわそんな言い方」
嵐の会場になりつつある粉川の真ん前に今度は清楚な黒髪
スタンダードロングの少女が立った
悲しそうに揺れる目と口元に当てた手

「『しらね』姉様」

粉川の両脇を陣取っていた二人の声がステレオで名前を呼ぶ
「初めまして、わたくし第１護衛隊司令旗艦『しらね』と申します」
礼儀正しくお辞儀をする
薄い化粧にぱっちりお目々、なのに古式ゆかしい日本女性的な慎ましさ
そんな『しらね』は急に横座りに粉川の足下に座り上目遣いに言った

「粉川さん・・・わたくし、子持ちにみえます？」
「ええっ、そんな事ないですよ」

和服でしなだれられたのなら粉川の理性はぶっ飛んでいたかもしれない
こぼれた黒髪の間から隠れていた首筋
細い肩
『あけぼの』と『すずまみ』から姉と呼ばれたのだから年上だろうハズの『しらね』の体は二人より小さくおそらく１５０センチ台の背丈
しかし
顔は二人より色気を醸し出している
細い肩から伸ばされた手が粉川の足を這うようになぞりながら

「酷いのですのよ、この『むらさめ』ときたら、わたくしがＤＤＨだからって「こぶつき」ってあだ名を・・・」

「ＤＤＨ、ああっ『しらね』さんはヘリコプター護衛艦でしたねぇ」
頭では彼女達の艦艇である姿を思い浮かべ、きちんと顔と名前を一致させようと努める粉川だが、男の差がに近づく指には逆らえなくなっていた
少しずつ足の根本に近づく繊細な指先、必死の粉川は何本か骨をブチ抜かれている

「そう、それも3機乗せているから「三つ子のこぶつき」なんて、わたくしまだ誰にも体を許した事ありませんのに、ひどいですわ」

「そっそっそれはいけませんねぇ～～～こんなにキレイな貴女に」
「嬉しいですわ、そう言って下さると」
両手に花のうえ
膝元にまで
さっきまでは遠かったハズの桃源郷
楽園は後少しだ
粉川はいつ自分がルパンのように全脱ぎダイブをするか真剣に考えていた

「いいかな?」

完全崩壊で緩みきった顔をさらしていた
粉川の室のドアをノックしながら顔を見せたのは間宮だった

「甲板で転んだんだって?神経の方まで痛めたのかな?顔、ずいぶんと緩んでるみたいだけど」
粉川は慌てた
今までピンクの花園で抜かれてしまった骨を集めて立ち上がって敬

礼しようと

「いえ、あのご迷惑を」
自分の伸びきった鼻の姿、粉川の焦りはそのまま不注意に上げた頭を打擲した
金物のいい音が通路にまで響く
二段ベッドの下枠に景気よく後頭部をぶつけたまま涙目で敬礼を

「いいよ、ハハハハハ」

思わず間宮も吹き出してしまった
「甲板で転んだのもそのせい？「役職」からは考えられないほど、おっちょちょこちょいだね」

間宮はぐるりと部屋を見回す
「あっ、見えますか？」
涙目の粉川はその仕草が「艦魂」達を見ているように見えて聞いた
「そう見えるよ君、一応一等海尉なんだからしっかりしてくれよ」
「あっ、自分の事ですか」
「君以外だれの事？」

改めて間宮が「艦魂」が見えるのか聞いたが
目の見えているのは「間抜け」な自分だけだと言われて気まずく目を泳がす
そんな粉川の仕草にまで吹き出しそうな間宮だったが

「ところで、ご飯は食べられそう？」
しょぼくれかかった粉川に含み笑いの間宮は聞いた
「あっはい、それは大丈夫です」
「そう、じゃ一緒しないか？ココの食堂で」

「あっ」
間宮のテンポの早い語りに真抜けた返事しかできない粉川

「時間はまだあるけど、基地の食堂のほうに君がいったらさっそく僕たちが「袋」にしたのか?て言われちゃいそうだからね、その顔じゃ」

まったくだ
おそらく「内部捜査官」として船に乗った粉川にいきなり護衛艦こんごうの乗員がリンチなんて、どこぞのゴシップ新聞の見出しになりそうだと顔をさすった

もっとも顔の腫れはこの艦本人の『こんごう』によって作られたのだから間違った見出しでもないが

「転んだにしては殴られたみたいな怪我だし、ココで食事してくれると僕は助かるんだけど」

「ありがとうございます!!是非に、ご一緒させて頂きます!!」
断る理由もなかったがそれ以上に静かな威圧感を粉川は感じていた
策士間宮、本庁でも名前のしれる切れ者艦長に

艦長の誘いでココで一緒に食事が出来れば粉川にかかる乗務員からの火の粉は激減するだろう
助け船、それとも自分を疑っているからの牽制?

花園の夢に、鈍りだらしなく回転を止めていた頭を目覚めさせる
目の前で男盛りの笑みを浮かべる相手に警戒しながら
頭をひねる、まだまだ本音を見せない人だと

「じゃ先に行って待っているよ」

相手の私案を読ませない瞳は笑いながら、軽く手をふると通路を歩いていった

間宮の消えた後、粉川は背伸びをし自分の姿勢を正した
やり手の間宮の一面を少し見られた、この航海は色々な意味で楽しみになりそうだと大きく息を吐き出すと
後頭部に残る痛みを手で押さえながらもう一度ベッドに座った
「まいったな・・・」
そう言うと緊張にため込んだ息をもう一度深く吐きだした

「素敵、間宮艦長」

一思案し自分の身の振り方や、この先の事を考えていた粉川が見たのは
朝顔？
間宮という太陽を追うように顔を通路に向けた艦魂たちの異常な姿だった

「どうしたの？」
一同揃いもそろった花のため息に、少し驚く粉川の問いは軽く却下された
「素敵！！！素敵！！！もう！！間宮艦長～～～」
黄色い声は一声に間宮一色に

「お姉様！！！実験は成功しましたわ！！」
そういって『あけぼの』と『すずなみ』は手を取り合って飛び上が

った
「私たちの色気!!!きっと艦長にも通じますわ!!!」
二人の向こう
さっきまで粉川の足下で色香を発生させていた『しらね』は通路に出て両手を乙女チックに組みうっとりとしている

「ああっ艦長～～～もうしばらくのご辛抱ですわ～～～『しらね』が貴方を『こんごう』の魔の手から救ってさしあげますわ!!」

話しが見えなくなっている粉川の隣にいつの間にか『いかづち』が座っている
「どういう事?」

「あ～～ほらあれでっせ、艦魂が見える人が船にいる。そうなると「波長」が伝播するかもしれんやないでっか」
「それで?」

ようは
ココに揃った艦魂は例外なく「間宮狙い」という事だ
そこに初めて艦魂を見る事のできる男、粉川が現れた
それにより憧れの艦長である「間宮覚醒」、あわよくば自分を乗艦指名して貰えぬかという思いが肥大し「眉唾」な話しが流れていたのだ

ちなみに艦長が好き嫌いで艦艇を選ぶことなどない
そんな基準もない

しかし今まで「生身の男」に接した事はない彼女達にはそういう考えはないようで、自分達を確認できる人がいるという事は・・・ぐ

らいの認識から間宮にも見て欲しいという思いを爆発させ粉川を実験体に「色気」が通じるかを試したのだ
「なんでそんな事・・・」
呆けたまま粉川は『いかづち』に聞く
「ほら、やっぱいきなり失敗せーへんようにでしょ」

「僕は実験台か？」
「メロメロに効果出てましたなぁ～頼まれた甲斐がありましたわ～
～ええもんみれましたわ」
言い訳のしようもない
最初からそれ狙いで『しらね』達を連れてきた『いかづち』は口を押さえて笑って粉川を見ている

その肩をバンバンと遠慮なく叩いて『むらさめ』も笑っている
「ハハハハハ夢見ちゃってたなぁ、アハハハハハ」

粉川は肩を落とした、言い返す気力もない
あれほどまでに夢見た花園に隠れた毒牙にかけられた気持ちのままフラフラと立ち上がった
騒げば哀れになる
そう思わざる得ない景色
敗北感で影も濃くなった粉川の前

「これで艦長がお目覚めになったら・・・」
「胸で！！」
「脚で！！」
『あけぼの』と『すずなみ』はさっきまで粉川を誘惑していた武器をたたえ合う
『しらね』はその真ん中に立ち

「フフフ、わたくしの色業は１０８式まであるわ（意訳．色気の数）負けませんわ～～」

足取りも元気なく出て行く粉川に声を掛けるのも忘れるほどに「間宮籠絡」に声を挙げる艦魂たち

「酷いよ」

悲しみに暮れる姿の粉川に取り巻きの女の子達が手を伸ばしている「何？」

ペタペタと触る小さなヒトデ（手）の持ち主達は生の男に別の意味で興味津々

「生きてる．．．」

「動いてる．．．」

粉川はめちゃくちゃに情けなくなった

おそらくこの小さな少女たちは「掃海艇」や「海洋業務群」またはタグボートの港内小挺の艦魂なんだろう

目上の艦魂たちの実験が終わったのを確認して「お触り」に来たのだ

「実験動物か、僕は」

まるでラットか何かになった気分

粉川は女の子の「不可解さ」を十分過ぎるほどに味わった

「粉川さん！！！貴方のおかげで，わたくしたち自信がつきましたわ！！」

「艦長に通じますよね！！私達『こんごう』よりキレイですよね！！」

『しらね』達はうれしさに飛び跳ねながら言う
もはや
それが褒め言葉なのか、なんなんのか
粉川は手だけで挨拶する
もうげんなりだ
早くこの場から逃げたい・・・
そして先ほどまであった世界を忘れてしまいたさに
いいよいいよといい加減な事を言ってしまっていた

「皆さん十分キレイですよ、『こんごう』なんかよりずっと可愛いですよ。是非がんばって艦長落としてください」

そんな粉川に声がかかる

「汚染生物・・・」

聞き覚えある声に粉川の体は硬直したまま顔を上げた。そこには鬼の形相の『こんごう』がとがった目を輝かせて立っていた
顔の痛みが恐怖を思いだして体を震るわす
笑う顔さえ引きつったまま粉川は小さな声で

「いまのは無しの方向で」

間抜けな返答を

恐怖の間合い
粉川の前に集まっていた女の子達が急に逃げだしたというか
通路の端によって固まったかと思う先から光に変わって姿を消すそれほどに恐ろしい鬼の『こんごう』

「貴様・・・いったい何をしている？」
「何って・・・」

粉川は恐る恐る『しらね』達の方を見たが
すでに消える気満々なのか体が光っている

「いいこと！！艦長のお目覚めは近いわ！！その時こそ勝負よ！！
『こんごう』！！」

窮地に立っている男を見捨てながらも自分達の言いたい事はちゃっかり言う
宣戦布告か、捨てぜりふか？言うだけ言って『しらね』『あけぼの』『すずなみ』は消えた
呆然である
粉川の前に
今まで広がっていた夢の花園はあっという間に消え、目の前にあるのは特大のラフレシアか、地獄の門番か

通路の向こうには最後まで事の成り行きを笑いながら見ていた『むらさめ』が
「し～～らない」と姿を隠してゆく

粉川は隣を歩いていた『いかづち』を掴まえ
「助けて」
と頼んだが
『いかづち』も光の中に消えながら

「最後の一言は、粉川はんのせいでしゃろ、ほなさいなら」

無情にも消えた
一人残された
笑い顔も引きつったままの粉川に『こんごう』は怒号が聞いた
「貴様！！海上自衛隊の風紀を乱すためにやってきたのか！！！」
「ちっちがう」

後ずさりする粉川の前で、『こんごう』の拳は熱く握られている、
灼熱のミサイルが目の前に
青く澄んだ瞳に炎が見える

「これには、深い訳が」

「歯食いしばれ！！」
「待って！！今から艦長と食事・・・」

音速のパンチは躊躇無く粉川の顔面にヒットした
振り抜いたスイングの美しさは誰にも見られる事はなかった
今度は来る事を予想はしていたが、痛いことには変わらない
粉川は膝から崩れ顔を押さえたまま悶えた

そんな姿を『こんごう』は見下ろしたまま言った
「悪かったな！！可愛くなくて！！！」

「そんな事は・・・」
涙目の粉川に『こんごう』も姿を消しながら怒鳴った
「艦長と食事をしろ、歯食いしばって！！！飯を食え！！」
最早「はい」としか答えられない粉川だった

数分後
食堂に現れた粉川の顔は先ほど間宮が見たときの倍に腫れ上がっていた

「またぶつけたの？」

そんな風に言いながらも理由は聞かずお薦めの小皿まで取ってくれた間宮の男っぷりが
今の粉川には恨めしい出港の日だった

第四話　秋の波濤（前書き）

一章節，四話転結という体勢で話をサイクルさせてますが
なかなかボリュームが決まりません。難しいものですが駆け出し素
人作家としてがんばってまとめていく方向でｗｗｗ頑張ります～～

第四話　秋の波濤

「聞いたわよ、大騒ぎだったようね」

帽振れの指示の下
横須賀を出る護衛艦達の中
『こんごう』のところにやってきたのは『しまかぜ』だった

短く切りそろえたショートボブの髪、年上の女らしい柔らかい笑みが、厳めしく自分の眉間に亀裂をはしらせたままの妹の肩を叩く

太陽はもう海影に消え
水面にだけ光の輪を残す。美しい景色に目を落とした『こんごう』は姉の優しい気遣いに少しばかり申し訳なさそうに目をゆるませて
無言で頷ずいた
気は強い
だけどひたすらに不器用な妹は初めてであった「人」はおろか魂の仲間達ともうまいコミニュケーションがとれていなかった
それでも誕生して十年近くたつ今は、それなりにやってきていたが

「もうちょこっと手加減してあげないと粉川さん顔から壊れちゃうわよ」

やれているというよりも、なんとかやって見せているの『こんごう』予想外の存在の予想外の行動に血の気がかつてのぶっきらぼう一直線だった彼女に戻ってしまってもしかたのない事と知りつつも『しまかぜ』は注意を促した

返事はなくただ頷く彼女の隣で

黙り込んだの顔を覗き込みながら続けた
「戸惑ってるんでょ？」
「何を？」
『しまかぜ』の不意の質問、意味がわからないと即答しながら顔を姉にむける
「別に、何に戸惑うの？」
「粉川さんに」
『こんごう』は否定と大きく首を振った
見透かされた思い、初めての出来事に自分が動転して、いつも注意される
「すくに手を挙げない」という約束を破り、誤りを隠そうとした行為に、気まずそうな顔がまた膝に向かって伏せられる
「戸惑ってなんかいない、私は…あれが…」
「何かわからないから、つい？そうよね」
後部２０ミリ機関砲
近代軍艦のゴールキーパーとして多くの船にみられる汎用兵器の隣は海に身を沈づめて行く太陽の燐光を見る特等席
『しまかぜ』は『こんごう』の手を引いて二人でそこに座ると、変わらない笑顔で
「良いのよ『こんごう』貴女だけが戸惑ってる訳じゃないから。みんなも戸惑ってるのよ。こんな事存在する記録を見る限り５０年はなかったもの、私たちを見る事の出来る人の存在なんて」
『こんごう』は姉の膝の上に置かれた古いファイルを見ると

「日記に関係あるんですか？」と訪ねた

『しまかぜ』は抱えていたファイルを手でなぞりながら、感慨深い目で
潮風の下で使用さたであろうファイルの表紙をなぞった
中身の紙もかなり傷んでいる様子の音が響く中で

「日記ね…『あまつかぜ』姉さんの日記が残っていれば５０年じゃ無かったかもしれないけど、「帝国海軍」が死滅してからと考えれば、奇跡に近い出会いなのかもしれない」

遠い瞳が離れてゆく横須賀の景色を見つめながら、慈しむようにファイルを抱きしめる
押し黙ったままの『こんごう』を横に『しまかぜ』は続けた

「５０年、この間私たち（護衛艦）と人（海上自衛官）を繋ぐ糸は切れてしまって、お互い近くに、うんう同じ場所にいるのに「空気」のようにただ「居るだけ存在」になってしまってた」
「でも元々「艦魂」を見られる人は少ないのでしょ」
「そうね」

元来、船の魂は人を見ることが出来てもその生活に関わる事は絶対になかった
同じ世界に存在していても、同じ場所に仕事得ていても
存在の違いから関わる事はなく、ただ同じ場所に共存しているというだけの存在だった

だけど
船の役割は人の歩む時間の流れの中で大きく変わってきていた
大量の荷物を運ぶ者

多くの客を運び、共に喜びを得る者
一対一の関係はすでに無くなり、多くの者、物を乗せる事が普通となり
荒海を越えね未知なる土地を求める人達と共に冒険をする船は今の世には居なくなった

そしてそれらの中でもっとも不必要で、もっとも絶大な力を持つ者達が産まれた

「戦艦」

国家存亡のために海を戦う船の魂達
木造帆船の時代から続く「戦いの血脈」が行き着いた形として
それは生死の切っ先に立ち会う魂と「人」を再開させた

太平洋を巡る戦いの記録
多くの戦船達が人ともに戦った記録を残していたハズだった
だが、全ては敗北により喪失され、五十余の時に流れ忘れ去られた
大切な出来事だった

二人とも顔を見合わすような事はしなかった
ただ、水面の闇に姿を消して行く燐光と代わりに空に現れる星を見ながら会話した

「艦魂を見る事の出来る者は少ない、というよりも「帝国海軍」と共に船の「魂」を見られる人も死滅したのかもしれないと私は思ってたのよ。昨日、粉川さんに会うまで」

今ならの最初に聞かれた「戸惑っている?」という意味が『こんごう』にもわかった
自分が産まれた時
それ以前から「人」との関わりは断絶していた
共に何かをそういう意思の疎通などは一切無く、なのに国家の防人であり、仕事は相手を撃ち殺すという苛烈な世界で
自分は「護衛艦」で、向こうは「人」で「兵器と兵士」という殺伐とした関係に何故自分たちのような船を守る魂が必要なのかと

「きっとね、みんな会いたかったのよ「人」に『むらさめ』も『いかづち』も、『さわぎり』に『しらね』も、『しらね』が貴女のところに来るなんてどのくらいぶり?そのぐらいに、この出会いは奇跡なのよ、きっと」
「奇跡…」

まだ『しまかぜ』が語り求めているものには遠いらしいが、人を恐れたり存在に動揺する理由はなかった
みんな同じように初めて出会う人という存在に驚いている事を聞かされた『こんごう』は「奇跡」という言葉を信じた
五十年ぶりの出来事に護衛艦達には驚きと動揺は当然のように起こったが、悪い事ではないという事実
一人頷く姿の妹に『しまかぜ』手を重ねては頼んだ

「だから、粉川さんの制裁は手を抜いて」
顔には笑み
本気の懇願ではなく楽しく行こうと促している

解らぬ者に対する警戒心

だけど危害を加えようと自分に乗り込んできたわけではない人
目を点にして、困ったと眉を下げる『こんごう』の顔に『しまかぜ』
はただ優しくほほえんで返事を待っている

「わかった、了解」
慌てふためい上で犯した失敗劇を許すという姉の心配りに『こんご
う』は居心地悪そうに返事した
「責めてるわけじゃないから、ケンカもコミュニケーションだけど
本気の貴女の鉄拳じゃ『むらさめ』の言いようじゃないけど鹿児島
までもたないわよ、彼」

攻撃艦として攻撃力を特化した者である『こんごう』は魂にもその
特性が持たされていた
だが
同時に戦いにおける全てをコントロールする優秀な指揮艦である事
も事実
そちらを魂の自分にも実戦すれば、簡単に手を挙げる事などあり得
ないこよね、と
前を歩いてきたＤＤＧの姉である『しまかぜ』は言う
優しい忠告に赤面する『こんごう』は

「わっ、わかった」

小首を振りながら顔をふせ
自分の馬鹿力を窘められ耳まで真っ赤になったした『こんごう』は
立ち上がって顔を横須賀に、離れて行く町を見た

「まだ、手を振ってる？」
「うん」

立ち上がった妹に並び『しまかぜ』も目を細めて遠ざかり小さな煌めきの粒となってゆく横須賀を見た
「いつも、最後まで送ってくれているね」
「うん」

顔を合わせた二人『しまかぜ』は『こんごう』の肩を叩いた
「大丈夫よ!きっとうまくやっていける」
「うん」
そういうともう一度町にむかって敬礼した
「無事に行って参ります」と

朝の課業が終わった時間に間宮は艦橋にて船務長の「和田」と話しをしていた
他の艦に比べると巨大な艦橋を持っている護衛艦『こんごう』だが中身は最新鋭の機器の多くに占拠されており、それ程に拾いスペースを有しているわけでもない
操艦を部下に任せた間宮は双眼鏡を片手に、もう片側の手には報告書を見つめていた

「以外と経歴は隠されていませんでしたね」

熱いコーヒーを入れたタンブラーを持ち、間宮との会話のための一口をすすった和田は海原をみわたしながら伝えた
二人の手元には「粉川一等海尉」のいわゆる履歴書がファイルに挟まれる形で置かれていた

「すまんな、パソコンを使うと色々と面倒事になるから」

昨日の朝から出港のギリギリまでの間、和田は間宮の依頼で「粉川」の経歴を調べていた
デリケートな問題だった
「イージス艦機密漏洩事件」から向こう船内のパソコンを使えば「何処で?何が?」というものはすべて基地に筒抜けになる

何もせず
「捜査官」を素通りさせた方が良いに決まってはいるが「えもしれぬ者」である粉川をそのまま乗船させるのは気味が悪い

間宮は切れ者だった

自分の知らぬ事があるのは「落ち度」にしか思えない
だから
昨日、自ら粉川の足止めのため食事に誘った
自らが足止め役をやる代わりに、和田に足で粉川の資料を集めさせていたのだ

「海軍一家だったのは意外でしたが、やはりそういう「コネ」でこの仕事を引き受けたのでしょうか?」

双眼鏡を胸に下げ、和田から手渡されたコーヒーに口を付け間宮は集められた資料の中「粉川家」の欄を見ていた
「オレと一緒だな、オレのオヤジも「海上自衛官」オヤジのオヤジも「海上自衛官」…いや帝国海軍の士官で戦艦乗りだった」

手書きでしたためられた資料の中
粉川の父のところで手を止めて

「聞いたことのある名前だとおもったが、粉川准将の息子だったか」
粉川の経歴を調べるにあたり最初に出てきた父親の名前
すでに退官してはいるが、将官までに駆け上がった男の名前に間宮
は目を細めた

「こう言ってはなんですが、あまり活躍された方でなかったので息
子に「こうい仕事」が回されたのかも？」
和田は嫌味な笑いを浮かべた

親のコネで防衛大学に入る者。そういう者がいないとは言い切れない
ましてや「准将」の息子ならそれなりのパイプもあろうし
だがそういうものは「親の活躍」にも大きく左右される
准将が退官されれば当然「こういう仕事」にお鉢が回される可能性
も高い
和田は笑みはそういう事を指摘していた

「そうかな？」

間宮は目の前で皮肉な笑みに太い眉を動かす和田を避けるように

「粉川准将はどちらかと言えば、清廉潔白な方だったと覚えている
な僕は」

将官を得て活躍をする者、そういうものが絶対だという考えは間宮
にはなかった
大口を叩き、国防談議を国内の企業体などにぶちまけ右よりな国防
族と結託し、出世街道を歩む者もいる
この国は大戦以降平和過ぎる時間を過ごしている
それ故に組織には大なり小なりの腐敗があるし

その腐敗さえもを利用する切れ者も存在する

「とてもまじめな方だったと覚えてる」

清廉潔白というのはどこか間違った感じだが、間宮は自分が航海士だった時に、横須賀で海に出る事のなくなった自衛官としての余生を、若い士官達にむけ教鞭をふるっていた粉川准将の姿を何度か目にしていた
出世街道などに目もくれず、市ヶ谷の背広族に仲間入りする事もなくひたすらに基地にて士官を育成する仕事を続けた

間宮は直接関わった事はなかったが、その姿勢は見習いたいと思うところがあった

それに、息子がいたことを今日知った事にも感心を覚えていた
将官にまでなった男が自分の息子に出世への近道を用意していなかったこと
それどころか、こうやって調べる事でやっと彼の息子だった事を知ったという事実に、粉川が左遷でココにやってきたわけではないと確信できたというものだった

間宮は、そのまま家族構成記載の欄に指を走らせると
「粉川くん、御祖父も帝国海軍で戦艦乗り、本物の海軍一家だな」

「何か思うところがありますか？」

語る言葉の間に思案を巡らせる表情、和田は間宮との付き合いが長い資料を見る目
紙面に走らせる指の感じから「何か」考えている事を察して耳を近づけた

「まあ、なんて言うか損な仕事だろ、身内の監視なんて」
「はい、あの歳ならこれからが出世街道に入る良い時期ですのに」
粉川は今「一等海尉」
この上である「三等海佐」になれば「護衛艦の艦長」にはなれなくとも「小型艦艇の長」にもなれる
ただ事務付の彼がそこを選ぶとは思えないが、市ヶ谷にしても待遇はだいぶんと向上する
なのに身内の監視という「特別で特殊な任務」についた
もちろんこの仕事が終わればなんらかの「昇級」が約束されているのかもしれないが
それにしても

「なんでそんな「歳」でこんな仕事をえらんだか？気になるんだよね」
和田も首をひねった
「内部捜査」そんな仕事をするのは頭ごなしに艦長を非難できる「年寄り」かまたは悪い意味「海上自衛隊」と縁遠い者であるのが普通だ
粉川の年齢では艦長のやり方に点数をつけるのは難しい

「幕僚長は「苦肉の策」と、捜査官の配置の発表に「年齢」は記載されませんから」
「それかな」

間宮は顔を上げて和田に笑って見せた
イージス艦の中身を「他人」に見せるぐらいならば「相互監視」の下に置く
嫌な役職をする者の年齢は関係ない
手配をしたという事が「政府」に届けばいいし、それで一時的にも

マスコミを黙らせる事もできる
「海尉」という尉官「名称」なら世の中は納得しやすそうだった

手元の資料をまとめると和田に礼を言った
「助かったよ」
和田は艦橋から「艦上体育」をしている複数の部下達を見ながら聞いた

「それにしても甲板ですっころぶなんて」
呆れたように
「まったくだ今時珍しい海兵だな」
「それから何やら「独り言」が多いみたいだと部下が言ってました」
「この船じゃ渦中の人だから、みんなよく見てるな」

そういうと艦橋から空を見回した
昨日の雨からうって変わり青天の下を護衛艦隊は優雅に進んでいる
雲のない青い天は透き通りすぎて上空が寒くなっている事に気がつく

「鹿児島は寒いかな？」
「まだまだでしょう」

和田は彼の父親から譲られた双眼鏡で遠い海を見ながら

「粉川一尉どうしますか？」
粉川の扱いをそれとなく背中越しに聞いた

「通常通りでいいよ、悪いヤツじゃあなさそうだしな」
間宮は空を見ていた目線を下におろし微笑み
和田の肩を叩いた
「秋の波濤だな、警戒を怠らず首尾良く巡航してくれ」

「了解しました」

そういうと窓の下、船首のアタリを「何か探して歩く」粉川の姿を
ただ見つめた

「昨日はごめんなさい」

顔に湿布を貼った粉川は後部ＣＩＷＳ２０ミリ機関砲の隣に立ち
海に描かれた船の波跡、引き波を見ていた『こんごう』を見つける
なり急にあやまった

凛とした姿勢
日本人の少女というには白すぎる肌に、栗色の髪と透き通る水色の
瞳は
当然のことのように返事をしない
海風に揺れる栗色の髪だけが動き
彼女自身は微動だにしない
長い足、短めのプリーツスカートを揺らす姿はかたくなに背中を向
けたままだ

「昨日は、色々と立て込んで」

あれこれし言い訳を並べても振り向いてくれる気配はない
覚悟を決めた粉川は『こんごう』の隣まで歩いていった
一日の内に二回の弾を食らった顔は潮風を受けると口の中まで痛む
ようで、何度も舌で傷をなめながら
それでも本気の覚悟を決めて

もう一発受けないと彼女の機嫌を直すのは不可能と理解して歩を進めた

横に並び

「反省してます。君の事、可愛くないなんて言ってごめんなさい！！」

直立の姿勢から深く頭を下ろすお辞儀の粉川に

「そんな事言ったか？」

振り向かない『こんごう』の顔

「目」が海の色と相まって深い青に見える

「えっと、それに近い事かな？」

やっとの対応に顔を上げた粉川だったが相手は見向きもしないままに、棘のある声が返る

「気にしていない、さっさっと失せろ」

なんともぶっきらぼうな対応、だがこれで「はいそうですか」と下がらない男は

「気にしてない！！じゃ仲直りはしようよ！！」

素早く握手と手を伸ばした

粉川は深刻な顔はすでに投棄、腫れ上がった頬のまま笑みを浮かべて

「仲直りの握手しようよ」と声をあげるが『こんごう』はやはり顔を向けず、むしろいらだつように

「気にはしてない…だからもうほっといてくれ」

昨日あったほどの苛立ちは無くとも、やはり心の内にのこる響き

粉川は既に耐性が出来上がっていた

何度、どつかれても引き下がらないという
回り込むように前に立つと、しかめっ面の『こんごう』と顔をつき
あわせて

「そんな、ほっとけって言い投げ?やっぱり「可愛いくない」って
言葉気にしてるんでしょ」
「気にしてない!!」
素早い反抗に、素早い切り返し

「じゃ殴っていいよ」
怒鳴った『こんごう』の前、粉川はストンと座ると続けた

「1失礼、1パンチ、すっきりして許してよ」

真面目な目線が、まるで武士が責任をとるための介錯を待つように
語るが
『こんごう』の方は引きつった顔のまま固まっていた

どこで混線した?と

目をぱちくりさせている彼女の前、粉川は覚悟を決めた目で大きく
手を開くと

「さあ!!かかってこーい!!トマホーク!!」
「馬鹿!!!私はトマホークなんて搭載していない!!」

手を広げた「バチコーイ」のポーズを取っている粉川についに『こ
んごう』は乗せられ顔を向けてしまった
「あれ?そうだったっけ?」
「貴様!!それでも一尉たる者か!!」

座ったままの粉川の首を締め上げた

「了解!!了解!!!理解しました!!!」
首を絞める手にタップしながら、雪崩のように崩れた堅い態度に和んだ事を確認した粉川は笑いながら答えた
手を離した『こんごう』は疲れていた
今までこんな事で疲れた事はなかった

まず人との関わりがなかったから、つねに縦横つながる姉妹達としか会話がなく
それも海自に必要な任務の話しぐらいしかなかったのに
突然現れた人は自分達魂の女におどろくどころか、無理矢理にでも仲間になろうと押し込んでくるという始末に

「貴様、いっい何がしたいんだ?」
長い栗色の髪を振り乱した『こんごう』は額を抑えながら聞いた

「仲直り」

襟首の乱れを直しながら「当然」とばかりの返事

「なんで?」
うんざりと顔を背けながら

「なんで?いやあ、当然でしょ可愛い女の子と仲良くしたいのは「男」としての義務みたいなものだし」
「わけがわからん」
「わかんないかな~~~そうだ!笑ってごらんよ!!きっと可愛いよ!」

やっと弾んだ会話に事に気をよくした粉川は立ち上がると一歩近づいた
「笑って!!ねっ!!」
「だから!!オマエ!!いったい何しに来たんだ?!」

『こんごう』はかなりびっくりして近づく粉川から距離をとった

空気の存在として
お互い触れる事もなく同じ空間にいるだけの者だったのに
粉川はあっけなく当たり前の事とその壁をやぶって来ている

「仲直りだよ!!しかしそれはもう終わったから今度はもっと「親密」になろうと」
「違う!!オマエ仕事は!!」

粉川は持ち歩いていた手提げカバンに手を突っ込み何か捜しながら
「前にも言ったしょ!君達と仲良くなる事!」
「違うわ!!馬鹿!!」
きょとんとした表情でとんでもなく場外れ的な返答をした粉川の顔を指さして『こんごう』は怒鳴った

「海上自衛官としての仕事だ!!」
デジタルカメラを取り出した粉川は同じ事を言った

「君たちと仲良くなるのが仕事なの」

絶句
言葉をなくし、硬直したままの『こんごう』をよそに粉川は肩を並べて彼女の腰に手を回すと自分体に引き寄せて
「ほら!!ココ見て写すよ」

右手に持ったカメラのレンズ指さした
「何？」
まったく対応のきかない『こんごう』は粉川にされるまま写真に収まってしまった
「何…」
呆然としてしまった

「仲良くやってこうね！！」

取った写真を見せながら粉川は笑顔で言う
そこには
初めて男とのツーショットに戸惑いの顔のまま写っている自分
「もう一枚いっとこう！！今度こそ笑ってね！！」
「かえせ！！！」
あまりの早さに呆けたが
取られた写真の自分に顔を真っ赤にした『こんごう』はカメラを取り上げようとした
その時

複数の光は集まり姿を変えて舞い降りた
「ひゃっほ～～い！！ええもんもっとりますなぁ！粉川はん！！」
常備服のコック姿は『いかづち』
「私たちも撮って欲しいわ」
ｗａｖｅの正装に見を包んだ『しまかぜ』
「あたいも撮って！！」
その足もとに青の作業服の手足をたくさん折って着ている『さわぎり』
「集合でいこうぜ！！」
海からの肌寒い風にもなんのその海軍セーラーの『むらさめ』

護衛艦隊の面子

「もちろん!!みんなで撮ろう!!」

有無を言わさぬ流れの中、すでに自分の反抗は何処吹く風と化し呆然としている『こんごう』の手を『しまかぜ』が引く

「一緒に」

どうしたらと悩んだ顔の『こんごう』はデジカメに大興奮の他の者達を見ながら小声で聞いた

「これも奇跡？」

「そう、ささやか奇跡」

ショートボブの髪を揺らし彼女は微笑む

「みんな笑って!!!」

これから始まる試練の波を共に渡って行くメンバー達

だけど

今日はうららかな日

粉川の撮った集合写真は「艦魂」達にとって新しい絆となる

ひとり恥ずかしそうにそっぽ向いた『こんごう』も配られた写真は大切に部屋に飾った

第四話　秋の波濤（後書き）

火星（カセイ）ウラバナダイアル

コンバンワヒボシです
「艦魂同盟」ではウラチャンネルが流行しているようですが
こちら「艦魂物語」ではまだネタがありません
こまったものです

ネタよりも
日々の少しの事とか
小説にまつわるｅｔ　ｃｅｔｅｒａなどを中心にやって行きたいな
ぁと、考えているヒボシでした

ウラバナダイアル第一話（混迷の夜明け編）

第五話　花の名前

「ねぇ。。。。みんなさ（何かぜ）とか（何ゆき）っ名前が多いんだけど船としての名前以外で可愛い名前を欲しいとは思わなかったの？」

それは朝の課業が終わった後
護衛艦こんごう内部にある一室でパソコンをいじっていた粉川の質問だった
部屋の中にはいつものメンバーが揃っている

（こんごう）（しまかぜ）（むらさめ）（さわぎり）そしてコック姿の（いかづち）

ちなみに
この部屋は「艦魂」でなければ入ることの出来ない部屋で
粉川が初めて乗船した時にココに入れたのは「艦魂」を見ることが出来たからであり
本来「あるべき部屋」ではないそうだ
だから彼女たちが馬鹿騒ぎをしていても誰に咎められる事もないわけだ
とわいえ，そもそも見ることが出来なければ咎めようもないのだが

部屋の中は至ってシンプル

真ん中にテーブルが一つにイスが６つ。。。本来は５つだったのだが粉川が入った事で１つ増やした
入り口近くに観葉植物が３つ並んでいて，これは（むらさめ）が「貰ってきて」置いているらしい

曰く「自然がないと落ち着かない」
となりにはハンガーフックが，かけられており「雨衣」などがかけれるようになっている
向かって窓側。。。

なんとイージス艦こんごうの艦内にあるのにココでは海を見渡せる窓がある
本来「舷窓」を持たない護衛艦なのに。。。
どういう原理かは謎。。。。
その窓下に小箱があり側面に（さわぎり用）と書いてある。
スケッチブックや色鉛筆。。本が少し入れられていて（しまかぜ）曰く散らかさないように管理箱という事らしい。。。まるで（さわぎり）の扱いが「幼稚園児」
となりの本棚には大半が料理の本が並んでいて
これは（いかづち）の物らしい
残りの一カ所に（むらさめ）の本「強化筋トレ特集」「月間アスリ○ト」（なんだこの伏せ字）
などが置いてある

昼過ぎに集まったメンバーが
各々が色々している中での粉川の質問だった

「名前？カレーで言うならキーマとか？」
「それは種類」
完全にボケた（いかづち）に
以外と素早いつっこみの（しまかぜ）
この面子では長女的存在である（しまかぜ）はまるでＯＬのような姿，本を閉じると顔をあげた
顔には柔らかなオーバルをもつ眼鏡をかけている姿に粉川の顔は緩む

「いゃぁ。。（しまかぜ）さん。。眼鏡も似合いますねぇ」
「ありがと。。。歳かしらね，目を守らないとね」

彼女はけして目が悪い訳ではないが本や資料に目を通すときは必ず
眼鏡をかけるようにしているらしい

「名前ねぇ。。私はこの名前の他に欲しいと思った事はないけど」
「わても（いかづち）でええですよ」
「今晩のおかず」という本をめくっていた（いかづち）はコックの
帽子を横に答えた
跳ねっ返りの癖毛を手で触りながら

「雷，撃たれて感電したみたいな頭でっしゃろ！」

言わなくても言いそうだった（むらさめ）が笑いながら（いかづち）
の頭をいじる
「ホント！癖毛だよなぁ！！名は体を表す！！そのまんまだ！！」
「ほんなら（むらさめ）だってそやないですか！！そんな黒髪のば
しはって。。幽霊みたいやわ！！」

ドツキ漫才の相方（むらさめ）は粗暴な言動とは別に確かに美しい黒髪を持って
いる
それもかなり長く伸ばしているらしい
普段は後ろで引っ詰めて団子にしてしまうからわからないが，下ろ
していたら腰のあたりまであるそうだ

「妖怪村雨～～白の着物羽織って柳の下で木刀もって立ってなはれ」

「なんで木刀!!」

それは確かに怖い
たしかに幽霊というより妖怪だ。。。それも武闘派?
柳の下でいったい何を狙っているんだ?

だけど
(むらさめ)はそう「武道家」と言われるほどに体力作りに熱心だ
今朝も一汗流した,シャワーを浴びたまま来たのかタオル持参である
おそらく海自の平隊員の誰よりも筋トレに命を賭けている「スポコン少女」だ
そして服は伝統の海軍セーラー
雨が来ようが,雪が来ようがこの姿だそうだ

「あたいは(さわぎり)でいいよぉ」

作業用青服の手足を幾重にも折って着ている姿
多分何を着てもサイズオーバーのおちびさん。。。。未発達(さわぎり)少女は
折り鶴に執心していたが手を離すとニコニコしながら

「(さわぎりたん)でもいい!」

「げっなんだよそれ!!」
素早い(むらさめ)の突っ込みに怪訝な表情をしながらも(さわぎり)は作業服のポケットから小さな人形を出した
「ｗａｖｅが作ってくれたの!!」
それはＵＦＯキャッチャーでつり上げられる人形に似た小さな人形
手足をパット開いた体の真ん中に護衛艦さわぎりのワッペンが縫い

つけられている

「あら。。。可愛い」
「でしょ！！ココ見て！！」
まるで子供の世話をしている様子
（しまかぜ）に興味を持たれた（さわぎり）は人形の背中の方を見せた

「ｓａｖｅ　ｔｈｅ　Ｊａｐａｎ　Ｌｏｖｅ　ｍｅ　ＳＡＷＡＧＩＲＥ」

キレイに刺繍された文字
「（さわぎりたん）って船にもたくさんいるのよぉ！！」

粉川も乗り出して見た
「可愛いの作ってもらったね～」
「いいでしょ！！」
はしゃぐ（さわぎり）の横で呆れていた（むらさめ）は素早く人形を奪い取ると眺めながら

「最近そういうの多いよなぁ～～でっあれだろ。。（さわぎりたん）ハァハァとかやってんだ」
「ちがうもん！！」
（むらさめ）に取り上げられた人形を奪い返して（さわぎり）は頬をふくらませた

「（むらさめ）！ダメでしょそういう事言ったら」
「だってさぁ～～最近多いじゃん「萌え」っての？なんでもかんでも「女の子」にしちゃってさぁ～～キモイじゃん」
「そら（むらさめ）は可愛ないからイヤなだけなんやろ。。せやけ

どホントは可愛い（むらさめたん）人形作って欲しいんやろ～～」
後ろから事を眺めていた（いかづち）は，人形を見ながら突っ込んだ

「馬鹿こけ！！私のを作るときは逞しいヤツ！！可愛いなんて二の次だ！！筋骨隆々のムッキムキモデル！！」

「そっちの方がキモイわ！！」
粉川は苦笑いした
そんな「兄貴人形」みたいなのが艦橋に置いてあったらドン引きだと

「（こんごう）はどうなの？名前，可愛いのが良かった？」

テーブルではいつも通り（むらさめ）と（いかづち）の取っ組み合いが始まって騒がしくなっている
部屋の中一人だけ窓から海を眺めていた（こんごう）に粉川は話しかけた

「私は。。。（こんごう）で。。。いい」

（こんごう）の答えは何か別の事を考えているようで歯切れが悪い浮かない返事だ

「う～～ん，あんまり好きじゃないか？やっぱり花の名前なんかが良いよね！」
「そんな事はない！私は（こんごう）でいい。。。」
顔を覗き込もうと近づいた粉川と逆の方向に顔を逃がして
「僕は花の名前の艦艇があっても良かったんじゃないかな～～なん

て「常に」思ってるんだけど」
そっぽ向いたまま（こんごう）は答えた

「そんな弱々しい名前の船に日本を守る事はできない」
「そうかな。。艦艇名は通称として，本名みたいに自分で名乗るものとして考えて。。たとえば（薔薇）とか」

「センスねーな」

（いかづち）の首にチョークスリーパーを掛けた状態で（むらさめ）が突っ込んだ
「そうか?。。。じゃ（百合）とかどう?」
顔を背け続ける（こんごう）の反対に回って聞く

「センスないな。。。ホントに」

呆れた顔
「でもさ（こんごう）て硬そうじゃん。。。もっと柔らかい名前のほうがいいって!ソフ○ン見たいなさ」
「。。。。洗剤だろそれ?そんな名前の方がイヤだ」
相変わらず連れなくし
顔を向けようとしない（こんごう）を粉川はねばっこく追い回すといってもイスの周りを回っているだけなのだが

「じゃ僕が，つけてあげようか!!」
そういうと顎に手を置き次々とこれまたセンスのかけらもない花の名前?のようなものを上げだした
「パンジー，躑躅，ガーベラ」
「バラバラでんがな」
首を締め上げられても突っ込みは忘れない関西風魂の（いかづち）

「う〜〜ん，やっぱ和物がいいかぁ？。。。枇杷とか梨とか」
「うちらは食い物かぁ〜ぁ。。ぁ？」

顔を真っ赤にし，語尾の呼吸も絶え絶えながらもさらに突っ込む（いかづち）に粉川は関西スピリッツをかいま見ながら
「林檎ちゃんってのは？」
笑いながら（こんごう）の顔に向かって指さした

「私は（こんごう）で良いんだ！！私が（こんごう）だと，何か「問題」あるのか！！」
粉川の提案を蹴倒しその場に立ち上がった
いきなりの激怒に粉川は目を丸くして驚き抑えてと手をかざす

「林檎は。。。イヤだよね。。。」
「（こんごう）じゃダメなのか？！！」

「（こんごう）！」
明らかな苛立ち
目を尖らせている姿は。。なのに目が揺れおぼつかない視線の姿に（しまかぜ）の制止が入った
いきり立ってしまった（こんごう）は周りを見て気まずそうに小さな声で粉川に言った

「（こんごう）でいいんだ。。。別の名前はいらない。。。それだけ」

顔に少しの苦痛を見せながら
粉川は一歩引いて

「ごめん。。。名前気に入ってたんだね。。ごめん」
謝る粉川に一別するとそのままイスに座った
「ごめん」
「もういい。。。わかった」

気まずい空気

「あ～～。。。じゃみんな自分の名前が好きなんだね。。良いことだ。。ね」

場を和まそうと手を振って見せた
固まった場に（しまかぜ）は助け船をだして

「最初に貰った名前が一番よ。。赤ちゃんが自分で名前つけるなんて事ないでしょ。。。粉川さん」
「そっ。。。そうですね」
かしこまってしまった

「そういやもうじき入港だろ」

ギブアップ寸前の（いかづち）の首を放した（むらさめ）は壁に掛けてある時計を見ながら
止まってしまった喧噪をつまらなそうに言った
それは合いの手的助け船である事は確かだった

「もうそんな時間？」
（しまかぜ）は手元の（さわぎりたん）人形を（さわぎり）のポケットに返して
「じゃ解散ね。。。忘れ物しちゃダメよ」
その言葉に合わせて（むらさめ）はパッと輝くと一言「じゃ！」と消えてしまった

粉川は腕時計を確認してパソコンの方に歩きながら
思いついたように振り返った

「あ～ねぇ海上保安庁との合同演習でさ。。。。保安庁の船にも「艦魂」っていらっしゃるの？」
「いますで」
ヘロヘロの状態で肩で息していた（いかづち）がテーブルに手をかけながら言った
「やっぱり女の子ばっか！！」
「艦魂は「女」しかおりませんて」

沈みかかっていた粉川はちょっといい顔に戻る（いかづち）の肩をつかんで
「じゃ今夜とか僕の歓迎会やろーよ！！」
「なして？」
料理の本とコックの帽子を手にした（いかづち）
（さわぎり）を返した（しまかぜ）も顔に笑いを浮かべて

「だってさ！僕の歓迎会ってまだやってないじゃん！！保安庁船艇のお姉さん達も読んでさわぎましょ～よ。。。。ねっ！」

凍ってしまった場をなんとか取り持つような言い回しだが
半分は自分の楽しみを織り交ぜ

努めて陽気に粉川は話した
急に陽気を取り繕う粉川の顔を怪訝な顔で覗きながら（いかづち）は
「こないだやったやないでっか?ぎょーさん艦魂きたでしょ?」
「あれは騙しだろ?」
「失敬な」
テンポのよい切り返しをしたところでコック帽をかぶった（いかづち）は
「でも歓迎されませんで。。。わてら」
困った顔をして見せた
「なんで?」
「合同演習なんてめんどくさい事ばっかやし。。。。「護衛艦隊」は何処に行っても歓迎されませんて」
そういうと一瞬光って消えてしまった
そっけのない（いかづち）の態度に粉川は（しまかぜ）に理由を聞こうと顔を向けた
そこにはもう（こんごう）の姿はなかった
行き場のなくなった顔。。。
口を尖らせて。。。。
「どうして歓迎されないんです?」
（しまかぜ）は眼鏡を外し胸ポケットにしまうと言いにくそうに答えた
「護衛艦隊は，特に保安船艇には歓迎されないの。。。。そういうものなんです」

悲しそうな目線に粉川はそれ以上聞き出す事はできなかった

夕闇が港に掛かる頃
第一護衛艦隊は油津の港から近くに姿を現した

「デカー!!やっぱ護衛艦隊デカイ!!」

港の先端にある「油津海上保安部」の小さな庁舎の上で小さな影は
手を大きく振ってはしゃぐ
横に座っていた
年上の少女の肩を揺すって指さしながら聞いた

「（はやと）!!あれかな。。。例のイージス艦って?」

およそ人の目ではまだ見ることの出来ない位置「艦魂」の能力なの
か望遠鏡などなくても水平線に姿を現した小さな粒を指で数える

「（あかいし）。。。はしゃぐとおっこちる。。」
屋上のポーチに座りタバコをくわえていた年上の少女，背の高い影
は立ち上がると夕闇の中に手をかざして眺める
「今日は近くでみられないの?」
「あんなの近くで見たいの?」
「（はやと）は見たくないの?」

はしゃぐ（あかいし）をめんどくさそうに手であやし
（はやと）と呼ばれたベリーショート。。。一見すると少年のよう

な彼女はタバコを吐き捨てながら

「ただの金食い虫だよ。。。仕事なんか，なにもしないくせに偉そうに」

冷たい返事に（はやと）の側をはなれ
もう一人，髪をポニーテールに縛った少女に（あかいし）が走る
前髪を少しあげ
「内港には入ってこないね。。。あんだけの大軍じゃチップヤードの営業妨害になるからねぇ」
二人の間に止まってしまった（あかいし）は口を尖らせて
「（おおすみぃ）見たくないのぉ？」

（おおすみ）は両手を上げて「別に」と
（はやと）は尖った声で

「見たくもなければ会いたくもねぇよ。。。。威張りくさった「にわか軍人」どもなんざ」
唾を吐きながら言った

「そんな事言わない」
３人の姿を見ていたおそらく一番年上の少女が捨られたタバコを拾いゴミ箱に捨てると海に目を向けた
年長の少女の優しい声に（あかいし）は走り寄った
クルクルとソフトウェーブのかかった柔らかな髪をかき上げ
風の向こうに見える護衛艦隊を見る

「それにしても。。。やっとで到着ね」

足もとにまとわりつく（あかいし）の頭を撫でる
「ねぇイージスって（りゅうきゅう）ねーちゃんよりデカイの？」
「大きいよ。。。。排水量だって私の倍近くあるしね。。。何よりも「神の楯（ａｅｇｉｓ）」を持つ最先端の船だしね」

目を輝かせて（あかいし）は聞く
「それって強いの？」
「強いよ。。。きっと」

「そんなの役にたってから威張れる事だろ」
（はやと）口の中に溜まった苦みを吐き出しながらポーチを蹴飛ばした
「デカくても。。。何の役にも立ってないなら「宝の持ち腐れ」ってやつだよ」

「待たせるだけ待たせて，自分達がついたら「即」演習かぁ。。。」

（はやと）と（おおすみ）はつまらなそうに水平線に見える護衛艦隊に愚痴ったまま階段を下りていった

そんな後ろ姿もなんのその
元気印の（あかいし）は（りゅうきゅう）に張り付いて
「じゃ。。。アブナイ船とか来ても守ってくれるんだね」
「そうね。。。そのための船だから」
そういうとキレイに切りそろえた，おかっぱ頭を撫でた

「楽しみだね！！！ねえちゃん！！」

（あかいし）は庁舎の屋上で嬉しそうに笑った
「どんな人かな?イージスさん。。キレイな人かな?」と

日の落ちた海の向こうに停泊した護衛艦隊を見つめていた

第五話　花の名前（後書き）

カセイウラバナダイヤル。。。。。（無理矢理（爆））

こんちゃ～～ヒボシです
ご機嫌いかがですか～～
「艦魂小説」を扱う先生達のバイタリティに日々圧倒されてます
すごい勢いで，お書きになるんですね。。。見習わねば
それにもつけて
今「同盟」の先生の作品めっちゃ読みあさってます
同盟に入れさせて頂いた以上は作品を知らねば「切腹」ですよ！！
しかしぃ
も～～～
艦魂少女達が可愛いこと可愛いこと
某所の大和さんのように持ち帰りたくなるばかりです（藁）

さて。。。。。
それはとりあえず，家のほうでも少しずつでも自己紹介とかに出て貰おうかと思いつき（思いつきです）
で唐突に

第一回「艦魂物語自己紹介編（↑？）」

どうぞ～～

（しらね）さん～～～いらっしゃ～～～い
で
ヒボシは失せます

しらね　「ちょっと。。自己紹介，自分でやれって事ですの？」
ヒボシ　はい。。。だって下手に紹介すると作者が艦砲射撃で瀕死の目に遭うという設定がココの「艦魂小説作家の常識」みたいなので。。。」
しらね　「私はそんな事はしないわよ。。。発砲には上層部の許可が必要だし。。。自分たちから攻撃する事は許されてないし」
ヒボシ　「う～～む。。専守防衛ってやつですね」
しらね　「戦時中と違って私達は規則が多いのよ」
ヒボシ　「窮屈そうですね」
しらね　「別に。。。戦争は好きじゃないからいいじゃない」
ヒボシ　「ぬ～でも戦争が好きな「艦魂」って少ないと想いますけどね」
しらね　「こんな感じで貴女としゃべってればいいの？」
ヒボシ　「いやいや自己紹介してくださいよ。。。（こんごう）より先にしといた方が，他の先生方の覚えも良いですよ」
しらね　「そうね。。。でわ！海上自衛隊，第一護衛隊群，第一護衛隊旗艦ＤＤＨ「しらね」にございましてよ！！」
ヒボシ　「。。。あれ？（しらね）さんって旗艦でしたっけ？」
しらね　「あら，私いつだって旗艦になれる能力をもっている船よ」
ヒボシ　「旗艦じゃないんですね。。」
しらね　「第一護衛隊では旗艦みたいなものよ！！」
ヒボシ　「嘘はダメですよ。。。ココの先生達軍事マニアなんだから。。ごまかせませんよ」
しらね　「。。あっそう。。そうね嘘はダメね。。いい女は嘘も嗜むものなのに。。。冗談の通じない女ね。。」
ヒボシ　「ところで（しらね）さんは作中でも見た限り（こんごう）の事がキライみたいですが？実際どうなんですか？」
しらね　「はっきり言ってキライだわ」
ヒボシ　「はっきり言い切りましたね」
しらね　「だいたい。。。あいつ初めて私に会ったとき，口も聞き

ゃしなきゃ挨拶も出来ない女だったんだから!!」
ヒボシ「（こんごう）は無口だったんですか?」
しらね「無口っていうか愛想のない女で。。。なんか私を見下してる顔なのよ!!」
ヒボシ「外人顔ですしね」
しらね「そこは別に問題じゃないわ。。。私達だって部品やシステム，武器なんかを「アメリカ軍」と共用しているから，毛色に顔つきが外人っぽいやつなんか結構いるし」
ヒボシ「そうですね。。。純血の日本艦艇っていないんでしたね」
しらね「そんな事より私があの女が気に入らない最大の理由は。。。名前よ!!」
ヒボシ「名前?。。。名前って（こんごう）って名前ですか?」
しらね「そうよ!!!大日本帝国海軍にあって誉れも高き「戦艦金剛」の名前を。。。あの小娘が!!!」
ヒボシ「でも（こんごう）の名前襲名では色々と揉め事もあったらしいじゃないですか?」
しらね「そんな事はどうだっていいのよ!!そもそもあの輝かしき御名前は私が頂く予定だったのに!!」
ヒボシ「えっ，そうなんですか?」
しらね「そうよ!!途中まで私が拝命する予定だったのを。。。。あの「金丸信」（当時防衛庁官，後に，建設大臣）が!!自分の実家にちなんだ名前にしようって!!「白根山」から取った（しらね）になってしまったのよ!!」
ヒボシ「あんまりメジャーじゃない名前だったんですね（藁）」
しらね「死にたいの?」
ヒボシ「撃たないんですよね。。。専守防衛。。。でも。。。まあほら。。（こんごう）って上で粉川くんが言ってたように「硬い名前」じゃないですか。。」
しらね「そうね。。女らしさという意味では私の名前は素敵だわ」
ヒボシ「じゃ。。別にいいじゃないですか」

しらね　「そうね。。。国内で活動している内は。。それでもよかったんだけど。。。」
ヒボシ　「海外勤務で支障があるのですか？むしろ（こんごう）の方が海外勤務では支障のでそうな名前ですが」
しらね　「海外では私は「Ｍｉｓｓ　ＳＨＩＲＡＮＥ」となりますわね」
ヒボシ　「ええっなんか（しらね）さんぽくって良いじゃないですか。。ｈｉＭｉｓｓ（藁）な感じで。。。そこいくと（こんごう）は「Ｍｉｓｓ　ＫＯＮＧＯＵ」って事ですよね。。。硬い！！」
しらね　「。。。。。それがそうならないのよ（イライライライライライラ）」
ヒボシ　「何故でしょうか？（後ずさり）」
しらね　「何故か！！！海外ではあいつ（こんごう）は「Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄ」になる！！なんでそっちに訳すのよ！！って感じ！！」
ヒボシ　「おおっｄｉａｍｏｎｄ！！なんか高貴になりますね」
しらね　「とにかくそういう事からして私は（こんごう）がキライなの！！。。。それにもう一つ！！私の「間宮艦長」を！！」
ヒボシ　「（しらね）さん。。あのお怒りはごもっともですが今回はこのぐらいにしときましょうよ。。」
しらね　「なんで！！」
ヒボシ　「自己紹介から逸脱してるし。。。ヒボシも忙しいので。。。この話しは次回に持ち越しという事でどうでしょうか？」
しらね　「。。。。いいわ。。。いっぺんにしゃべると爆発してしまいそうだから」

ハアハア
こういう。。。会話って大変なんですねぇ。。。
先生方の苦労を肌身で感じましたよぉぉぉ

さて
五章に入って雲行きの怪しくなってきた本編ですが。。。「戦闘シーンはないんですか?」というメッセージに。。。あんまりないとおもいます。。。と答えておきます
でも
現代艦魂が現代の荒波を戦うという意味では「戦記」とヒボシは認識しておりますので
温かい目でみてやってくださいませ!!!

それではまた

ウラバナダイアルでお会いしましょ〜〜〜!!!

第六話　海保の勤（前書き）

後書きに色々かきましたが。。。。。
知識が付いていくか。。。想像力が勝つか（藁）
とにかくがんばりますぅ～～～

第六話　海保の勤

朝を待ち港に入った「護衛艦隊」
だが
のんびりと事を構えている時間はない
昼には出港「合同訓練」に出る

間宮は船をおりるとと，白髪の小男と握手を交わしていた

「お待たせ致しました。。おひさしぶりです浜田船長」
「待っておったよ。。。。間宮艦長！！」

熟年の域に入った小男は浅黒く潮焼けした顔をほころばせた
まるで息子が帰ってきたかのように大仰に手を広げてから握手をした

「最新鋭艦隊の長となられましたな」
「まだまだです」
帽子を横に抱えた間宮は，浜田の歓待に心苦しそうに。。本音を言った
まだまだ
それは海上自衛隊の全てにそうだと。。。思った事がこぼれてしまったのだ

「そういいなさるな！！手の届かぬ所はどこにでもあるというもの。。。今回は少し「事」が大きかったがの」

浜田は年長者らしい余裕の受け答えで場を和ます

合同演習が遅れた理由は。。。
「イージス艦機密漏洩事件」
まことにもって不名誉な事件のせいだ
浜田は「手の届かぬ事」と一笑にふしたが。。。国防という任務を
司る側からすれば笑って良いことではなかった

そんな間宮の姿を
一応幹部総員らしく制服に着替えた粉川も。。。苦笑いを殺した顔
で間宮の心内を理解しつつも見つめていた
表向き，こんごうの乗務員というわけにはいかないが挨拶もまた「
調査」の一つ
組織というものがいかに敏感になっているかがわかる行動だった

「保安庁庁舎」に向かった間宮の姿を見届けると粉川はネクタイを
弛め走り出した
後2時間もしたら出港
慌ただしい一日は始まったばかりだった

「高槻さん乗船！良かったね」
周りを気にしつつも明るく振る舞う（おおすみ）は（はやと）肩を
叩いた
「うるさいな」
顔を赤くした（はやと）はそのまま（おおすみ）の手を掴まえた

「いつもどおり。。。。。部屋真っ二つの会議だったら。。私達な

んか居なくてもいいんじゃないのか？」
ベリーショートの（はやと）は赤く染まった頬を隠しながら
脇から目を向け照れ隠しをした

ココは
「ｐｌａｎｎｉｎｇ」と書かれた別紙が置かれた会議室の中
「海上自衛隊，護衛艦隊，艦魂」と「海上保安庁船艇，艦魂」達は
同じ部屋の中にいながらも距離をとった形で。。。極端に両壁によ
った形で入っていた

唯一真ん中で話しをしているのは
海保の（りゅうきゅう）と護衛艦隊の（しまかぜ）だけ
二人は前にも合同演習をして仲だ
お互いも似た雰囲気

「以前より柔らかい雰囲気になった？」
（りゅうきゅう）も別に行動計画書の事で話しをしたいわけでなく
（しまかぜ）の顔を見ると微笑みながら

「そうかな？。。。」
（しまかぜ）は何度もの演習。。。何度もみた離れた二つの集団を
見回し
「変わらないところも。。。相変わらず」
「違うわ。。。貴女の雰囲気の事」

（りゅうきゅう）は計画書をテーブルの端によせ
顔を近づけて

「初めて見る人もいるけど。。。そのおかげな？」
視線の先は（こんごう）に（しまかぜ）は軽く首を振って否定しながら
「ああっ後で挨拶させますね。。。。できるだけ仲良くしてあげて」

二人の会話はスローで
セレブなお嬢様同士のように見えた

そんな華やかな一角から右側に固まった海上保安庁船艇，艦魂（おおすみ）は
行動計画書などなかったもののように端によせて

「いいんじゃないの。。ただ形式だけだし。。。結局は「人」に従ってやるだけだし」

高く結んだポニーテールを揺らし会議室に持ち込んだファッション誌のページをめくりながらつまらなそうに言うと気持ちを切り替え雑誌に指をすべらせ「特集」に手を止めた

「そんな事より今度はこっちの発色！！新商品のルージュの方が気になるでしょ」
「やめろって！」
（はやと）の背中に張り付いて（おおすみ）は耳打ちする
「せっかく高槻さんがくるんだからキレイにしときなよ～～」
「うっさいよ。。。会えたって。。。見えるわけじゃないし」
「でも嬉しいでしょ」

短く刈り込んだ髪で一見かると少年のような容姿の（はやと）だが

高槻という名前に，恋する乙女の顔を赤くして言葉を濁らせる
「そりゃ嬉しいよ。。。奥さんより付き合い長いんだから」

海保の（はやと）は潜水隊員でもある高槻の事をずっと心に思っていた
（はやと）が女の子なのに異常に短髪なのも高槻のマネをしているからだ

「いつも私に挨拶してくれる人だし」

そういうと手をもじもじとさせた
「船体にむかって「おはよう」ってね～」
（おおすみ）は男勝りの（はやと）の初々しい顔をからかった

そんな二人の後ろにいた（あかいし）が小さな手で（はやと）の服を引いた

「ねぇ。。。。どうして離れちゃってるの？」
テーブルの雑誌に興味を持つには早すぎる年頃の（あかいし）は今回が初めての合同演習だった
だから不自然なほどに距離をもちお互い顔も見合わせない集団に疑問があった
（おおすみ）はそんな彼女の身長に合わせて腰を降ろして説明した

「簡単に言えば。。。。仲良くないの！」
「なんで？」
「色々気に入らない事があるの。。そのうちわかるわよ」

（あかいし）は顔を（おおすみ）の影から「護衛艦隊」の艦魂たちのほうに向けて

「イージスさんとお話したかったのに」
口を尖らせてしょぼくれた

「イージス？」
テーブルの雑誌を隠しながら（はやと）が反対側の壁をクルリと見回してチビの彼女に相手からはみえないように指さして言った

「あれだ。。」
「前に来たのと違うね」
（おおすみ）もチラリと確認した
壁にもたれ掛かった（こんごう）の姿に

「キレイ」
（あかいし）は第一印象を素直に口にだした，途端に走っていった

「こんにちわ!!イージスさん!!」

動きの早さは（おおすみ）の制止の手を空回りさせ
（はやと）はしまった。。という顔になった

（こんごう）は目の前に来た「少女」に対応できなかった
幾度かの合同演習をしてきたが
きまって「真っ二つ」に割れ会議とは名ばかりの会合，誰かと話す事などない空間のハズ
しらけた気持ちでぼんやりしていた所に突然の挨拶

しかも相手は「興味津々」と「崇敬」の眼差しで自分を見上げている

「初めまして！！海上保安庁船艇ＰＬ型です！！」

「。。。初めまして。。。。。」

目の前のおかっぱに（こんごう）は握手していいのか迷い，手をスカートにつけたまま固まってしまった

「日本で一番強い船なんですよね？」

未だ目の前の小さな彼女にどうしていいか困っている（こんごう）に（あかいし）は
まったく素直に前に出てくる
真っ直ぐな目はとまどう（こんごう）の顔をじっと見つめると

「目。。。。青い」

少なからず驚き
これまた素直な印象を口に出した

「青いと。。。何か問題があるのか？」

（こんごう）は目を開いて苛立ちを現してしまった
素直な印象をそのまま口に出しただけ
なのに相手の顔に浮かんだ険に今度は（あかいし）が戸惑う
身の丈は（こんごう）より３０センチは低い（あかいし）は目の前にいる人が怒っている事に気がついたが
何故，気分を害したのかわからず

「全然！問題ないですよ！！」
笑って見せたが
（こんごう）は顔を背けてしまった

「何！！お高くとまってんだよ！！！」

わずかな沈黙の間に発された怒号は（はやと）だった
海保の男性用制服に身を包んだ姿で大股で（こんごう）の前に飛び込んだ
（あかいし）は可愛い妹だ
それを無視された事に
気に入らないと
顔に表された事に黙ってはいられなかった

「前から。。。気に入らなかったんだよ！！お前ら護衛艦隊ってヤツらは！！偉そうに！！」
「てめえ！！」

突然の激高に目を見開いたままの（こんごう）とは別に
急な激怒にいち早く反応したのは（むらさめ）だった
珍しく正装を着た（むらさめ）は怒鳴りながら（あかいし）の前に出た（はやと）と顔をつきあわせた

「何が海上防衛のプロだ！！海難や安全を昔から！！今までだって

実践してきたのは私たちだ!!」
（はやと）はかまうことなく（むらさめ）の胸ぐらを掴んだ
「だまれ」
出された手もそのまま（むらさめ）も（はやと）の胸ぐらを掴む

周りでは（しまかぜ）が制止を叫び
（りゅうきゅう）も止めに入ろうとしているが二人の激怒は止まらない

「海難救助とかしたことあんのか!!有事なんて何時来たよ!!いつだって海の仕事は私達が出張ってやってんだ!!揚収も不審船も!!オマエらいったい何守ってんだよ!!えっ!!何もしてないくせに偉そうにしやがって!!」
「ざけんな!!短髪女!!私達のは仕事はそんな安くねぇーんだ!!」
「海保の勤を馬鹿にするな!!」
（むらさめ）は拳を振り上げた

「まあまあ。。。。」

後一歩で激突の現場を止めたのは粉川だった
沸点の頂上に至っていた（むらさめ）の手はそのまま（いかづち）に抑えられ
粉川は二人の間に割ってはいると深呼吸した

「イイ匂いだ」

粉川の顔は。。。。緩んでいた
（しまかぜ）は（むらさめ）をおさえ
（りゅうきゅう）は（はやと）を抑える中
粉川は満足そうに両者の顔を見て
改めて部屋に集まっている艦魂たちを見回して

「キレイなお姉さんの多い職場は。。。。大好きです!!」

満面の笑み
「粉川さん。。。」（しまかぜ）の呆れた顔
それに続いたのは驚きの声

「なんだこいつ。。。。見えてんるのか?」
今まで怒りの声を張り上げ目を尖らせていた（はやと）は（あかいし）を連れて後ずさりした
驚きは「海上保安庁船艇」の艦魂達に波のように伝わる
今までだって右の壁にべったりだった集団がさらに粉川に驚いて壁による

（おおすみ）は持っていた雑誌を落として
「生きてるの?。。。。それ」
粉川を指さす

それは
横須賀で粉川を見に来た艦魂たちの反応，そのものだ
そんな顔を前になおも粉川は話しを続ける
手振りなどまでして

「皆さん。。。。いい女はケンカなんかしちゃダメですよ!!さっ仲良く!!演習終わったら仲直り会も兼ねて僕の歓迎会とかしましょ!!」

「何を言っている」

何処を見渡しても女ばかりの部屋に緩みまくった顔をさらしていた粉川の後頭部を（こんごう）の手が掴んで引っ張った

「いゃぁほら。。。僕，他の乗務員と違って仕事ないからね。。「本業」の皆さんとの仲良くなる仕事をしに」

「馬鹿かオマエ」

（こんごう）にそのまま引っ張られ倒れそうになりながら

「ちょっ!!ちょっと!!挨拶挨拶!!ってか!!頭，引っ張るの止めて!!髪のこと気にしてるんだから!!」

容赦のない力でズルズルと退場させられる粉川

あまりに滑稽な姿に（むらさめ）の力は抜け（はやと）の襟首を離した

「アホだな」

「アホでんな。。。」

（いかづち）も苦笑い

引きずられて連れて行かれる粉川は

「あっあのね!!演習終わったら!!終わったら飲み会でもしましょうね!!僕は粉川って言いますから!!気兼ねなくお誘いください!!」

懲りる事なく艦魂の女の子たちに笑顔を振りまく

そんな「人」を初めて見て呆然とし言葉をなくしている海保の艦魂たちに（しまかぜ）が取り繕うように前にでて

「アハ。。。アハハ。。ビックリしたよね。。海自名物艦魂の見える男なの。。。よろしくね」

そういうと（りゅうきゅう）に挨拶して部屋を後にした

「なんだあれ」

（はやと）は固まったまま

粉川と海自の艦魂達が出て行ったドアにむかってつぶやいた

部屋の中は初めての「人」に海保の艦魂達が固まっていた

「初めて見たよ。。。私達が見える人なんて」

肩を落とし乱れた襟を直す（はやと）に（おおすみ）も呆然としたまま粉川の消えたドアを見た

そんな中

「海自。。。おもしろい人がいたのね。。。」

（りゅうきゅう）は驚きと同時に何かに気がついた様子だった

「だからかな?前に会ったときより（しまかぜ）も「柔らかく」感じたわ」

足もとで目を輝かせている（あかいし）の頭を撫でながら

「イージスさん。。。。やっぱり強いんだ」

ケンカの発端になった事などすっかり忘れた（あかいし）は

男の頭を片手で掴み引きずって退場した（こんごう）の事を思いだ

していた

第六話　海保の勤（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～

ちゃ～～すヒボシです
なかなか話しボリュームを決められず。。。苦労してます
女の子が多いと区別を付けるのも大変
みんな思い思いのファッションがあるだろうし
同じ髪型なんてほとんどいないだろうし

海上自衛隊にかぎらず「公務員」は
ヘアスタイルなんかは色々と規則がありそうですが「艦魂」は目に見えない存在ですから
そこは多目に見て貰って
服装も一応制服だけど（こんごう）はスカートはプリーツの入ったミニに，ニーソとかって感じにしようと思ってますよ（爆笑）
絵とかにしたら。。。かなりヤバイ感じですね（藁）
いつかイラストアップが可能となった時は是非に（藁藁藁）

はっ！！
そんな事やってたらイカン！！
というわけで！！

しらねとヒボシのウラバナダイアル！！！

しらね　「なんで私なの？」
ヒボシ　「いいじゃないですか。。活躍の場があったほうが。。。
ゴニョゴニョ」

しらね　「まあいいけど。。。今日も私の怒りを炸裂させて！！」
ヒボシ　「ちょっとまったぁぁぁ！！今日は「大本営海軍本部」からおたっしがあったのでそちらから」
しらね　「何それ？大本営って何よ？防衛庁じゃないの？」
ヒボシ　「。。。。。防衛庁があるのはココだけです（爆）後はみんな大本営です」
しらね　「何？いったい？」
ヒボシ　「黒鉄大元帥からね，姉妹艦の事をくわしく説明せよとのお達し」
しらね　「姉妹艦。。。。私の妹は（くらま）よ」
ヒボシ　「まだ登場してないですよぉ」
しらね　「佐世保にいるでしょ」
ヒボシ　「ええっだから近いうちに（こんごう）に会いますね。。。そうじゃなくってちょっと誰が誰の姉妹か？って所をデスよ」
しらね　「とりあえず簡潔にいうなら（むらさめ）の妹が（いかづち）よ」
ヒボシ　「あっそうなんです？でも（いかづち）は（むらさめ）の事「姉」と呼んでませんね」
しらね　「変わり者が多いからでしょ。。あそこは（むらさめ）はむらさめ型っていう船のネームシップで彼女を原型に９人姉妹。つまり（むらさめ）は長女で（いかづち）は七女になるわね」
ヒボシ　「おおっなんか多いんですね姉妹」
しらね　「うちの（あけぼの）も（むらさめ）の妹に当たる八女よ」
ヒボシ　「なのに誰も（むらさめ）を姉と呼ばないのは？」
しらね　「別に意味はないんじゃない，同型艦は横つながりの姉妹で産まれた者順。。。他の子では「姉」と呼んでる子もいるし「双子」みたいに上下の無い関係が多いのよ」
ヒボシ　「（あけぼの）さんは（むらさめ）よりピチピチなんて威張ってましたが」
しらね　「（むらさめ）が産まれてから約４年後に産まれてるから

ね」
ヒボシ　「それでも同列なんですか？」
しらね　「あのね。。。私達の世界じゃね「戦艦」とか「空母」とか代名詞的船がいないの，だから階級も無い。。。そういう弊害なのかもしれないけどあまり「姉妹」で上下ってのも無いのね。。まっ私はちゃんと「姉」をしているけどね」
ヒボシ　「なるほど。。でも（こんごう）は（しまかぜ）さんの事「姉さん」って呼んでましたよね」
しらね　「ああっそれは「縦の姉妹」関係からきてるの」
ヒボシ　「縦の姉妹？」
しらね　「さっき説明したように横の姉妹はネームシップからの同型艦のつながりなんだけど，縦の姉妹ってのは同種艦のつながりなの」
ヒボシ　「同種？（しまかぜ）さんはどこも（こんごう）に似てませんよ。。性格も顔立ちも」
しらね　「そういう所は問題じゃないの！！血統よ例えば私は前回の自己紹介で言ったようにＤＤＨ（ヘリコプター護衛艦）でしょ（こんごう）はＤＤＧ（ミサイル護衛艦）という血統の違い」
ヒボシ　「という事は。。（しまかぜ）さんもＤＤＧ」
しらね　「そう。。（しまかぜ）は（こんごう）の前のタイプのミサイル護衛艦で第三次ＭＤ計画の護衛艦になる。その血統を継いで産まれた第四次ＭＤ計画の申し子が（こんごう）なの」
ヒボシ　「でもそうなると姉というよりは母？って感じもしますが」
しらね　「馬鹿！！艦魂は若い女しかいないのに次世代に母親呼ばわりされたらキレるわよ」
ヒボシ　「すいません～～～」
しらね　「とにかく，そういう意味で（こんごう）は（しまかぜ）を姉と呼んでいるってわけ」
ヒボシ　「わかりました。。。ところで（さわぎりたん）は？（藁）
しらね　「（さわぎり）については。。ヒボシ？なんか設定があっ

て詳しくはなしちゃダメなんでしょ」
ヒボシ　「そこは伏せて何人姉妹とか誰の血統とか」
しらね　「（さわぎり）は，はつぎり型ネームシップの姉妹で（はつぎり）はもうこの世にはいない。。。で八人姉妹の七女。。。汎用護衛艦以上！！」
ヒボシ　「佐世保に何人かお姉さんがいますね」
しらね　「そうね上の二人のお姉さんは練習艦になってるし」
ヒボシ　「ああっそこまででいいです（藁）」
しらね　「私の血統はＤＤＨで横の姉妹は（くらま）縦の姉妹で姉は（はるな）と（ひえい）。。。。。。」
ヒボシ　「ああっまたそこに」
しらね　「いかに私が（こんごう）を襲名したかったかわかる（怒）」
ヒボシ　「いやぁ。。。しらねさんの説明はわかりやすくて～～～」
しらね　「あんたイラストアップの時，私を可愛く描かなかったら殺すわよ」
ヒボシ　「肝に銘じて。。。」

そんな感じだそうです！！！
よくわかったような？わからないような？（ヲイ）
で
海保の姉妹関係などはまた機会がありましたらという事で

ウラバナダイヤルはしらねさんとヒボシでしばらくやって行こうとおもってます！！
なんでか。。。
ココだけの話し
しらねさん。。。この小説では活躍してますが。。。Ｈ１９．１２

にＣＩＣからの不審火による火災でお倒れになっており（実話）「脳卒中」で現在病院に入って復旧のみこみも。。。かなりあやうい状態なのですが
お姉様の（はるな）から脳移植をして延命するのではと言われてまして

こういう夢と現の間の話しにはもってこいの存在になっていて。。。。

もちろん。。。
ココにいる本人は知りませんが（爆死）
大本営も内緒という方向でお願いします

しらね「なんかしゃべってた？」
ヒボシ「いえいえ大本営に（しらね）さんの事売り込みしときました（藁）」
しらね「ああっよろしくお願いします！！」

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～～！！！

第七話　闇の迷走（前書き）

今回。。。。ＣＩＣとか出てきますがこういう通信なのか？それは謎です
むしろ多分間違ってますがそこは突かず（藁）やさしい眼差しでお願いします～～～
ところで特に「海上自衛隊」の用語に詳しい本などがあれば欲しいです
知っていらっしゃる方メッセの方にこっそり教えに来てください～～～まってます！！
は～～～勉強！勉強！！

第七話　闇の迷走

「酷いよ」

演習海域に進む船の中で粉川は，ひっぱられ髪型も崩れた頭をさすりながら（こんごう）に言った

「わけのわからない事をするからそういう事になる」

タンブラーのコーヒーに口付けながら

指定席の窓際に座った（こんごう）は粉川を見ることなく眉をつり上げたまま突っぱねた

「髪は男の「命」なんだから。。。もっと優しく扱ってよ～」

手櫛で頭を整えながら愚痴る

「女だって命でっせぇ～～髪」

跳ねっ返りの癖毛を

粉川の手くじを真似して茶化す（いかづち）

「まあまあ」

演習のプログラムに目を通していた（しまかぜ）が間に入り

「粉川さんのおかげでケンカも収まったし。。。みんな和んだでしょ」

「アホっぽかったけどな」

ケンカを始めた張本人（むらさめ）はすでに制服から海軍セーラーに着替えた状態で笑っている

「女の子はケンカなんかしちゃダメだよ～仲良くしなって。。。ねぇ」

眼鏡の（しまかぜ）に少しばかりの色目を使いながら粉川は人差し指を立てて説教した

「うっせぇよ！あんな奴らと仲良くなんかできっかよ」

ケンカの事を蒸し返されて（むらさめ）は食ってかかった

「私らの仕事をだなぁ」

「もうええやないでっか」

イスから中腰になった（むらさめ）を抑えて（いかづち）が制止した

会議室では海自の制服姿だったが

今度は青色の作業服に着替えている

「そうよ。。。訓練の時はちゃんとしてるのよ」

「余分な事しないでさぁ。。テキパキおわっちゃおうよぉ。。。あたいは早く佐世保に戻りたいよぉ」

（さわぎり）は言い争いさえ嫌気がさしているのか

大きく溜息をつきながら海を見る

まわりの「制止」反応に従い

（むらさめ）はテーブルにあったタンブラーを乱暴に取るとも，しょっぱい表情で

「遅れちまったんだから。。。やらなきゃいんだよ。。。合同で演習なんか。。。」

そんな低空飛行な気分を顔に出した彼女たちに

粉川は溜息を吐く

「なんでそんなに仲悪いの？」と

その姿に（しまかぜ）は肩をすくめて小声で

「さっき海保の子が言ってたでしょ。。。。そういう「感情」があるって事なの」
そう言うと
それ以上は言わないようにと粉川の口に指を当てた

「それより粉川さん。。。頼んでおいた物，手に入りました?」
（しまかぜ）に口を止められたままの粉川は思いだしたように紙袋を前にだした
ビニールを被せた二重の袋の中から出されたのは「花」だった

「時間いっぱいだったんで，あんまり良いの集められなかったけど。。。。」

コスモスにコルチカル。。。バラバラではあるが色とりどり
「スタンダードに菊と。。。彼岸花も」
たしかに
急な買い物だった事を良く現しているかのように種類もまちまちだが，取り出された花束はキレイに5つに分けられていた

「演習場所からは少し距離があるけど。。。それでも港よりは近いでしょ「坊の岬」。。」

並べられた花束に部屋に集まっていた5人の艦魂は立ち上がった
「花か。。。。」
（むらさめ）は一つを持つと遠い目をした

「ほらっ！忙しいのに時間を作って買い物してくれた粉川さんにお礼を言って！」

「戦争」のあった場所

日本の「艦魂」最後の地を目の前にさらに気持ちが深く沈んでしまったみんなに（しまかぜ）は手を叩いて喝をいれた

「ありがとう！！粉川さん！」
最初にお礼したのは（さわぎり）だった
大事そうに花束を持つと胸に抱いてお辞儀した
「ありがとさんです」
（いかづち）も帽子をとって礼をした
（むらさめ）も礼を言うと各々の船に帰っていった

演習の定刻が近づく中
静かになった部屋の中で
（こんごう）も置かれた花束に目を走らせながら

「東シナ。。。。」

東シナ。。。。
かつて栄華を誇った大日本帝国「連合艦隊」最後の戦場
大戦末期の。。。もはやどうにも挽回のできない戦線の中
日本海軍の象徴。。。
最後の軍神だった「大和」は「一億総特攻の先駆け」となり沖縄に向かった

向かった。。。。帰るあてのない戦いへ

「どんな。。。。思いで，沖縄に向かったんだろう。。。「大和司令長官」は。。。」

花束を手に，今は静かな海を見つめる（こんごう）
粉川は，その顔を見つめた
さっきまでの怒りの眉は下がり，泣いてしまいそうなほど悲しげな顔
長い睫毛の下，うっすらと浮かぶ涙は
波の光に反射して小さな宝石のようにも見える

「大和にも。。。艦魂はいたんだろうね。。。」

海上自衛官である粉川も十分過ぎるほどに知っている「戦争」だ
ゆっくりと（こんごう）の隣に立ち「争いの海」を見つめると「大和の艦魂」という存在に心を痛めた
無謀な作戦の前に
大和は。。。。。死ぬ。。。いや死ぬ事はわかっていたハズだ
それでも「一縷の希望」となるために
苦しみに喘ぎ
筆舌しがたい地獄の向こうに進もうと走るが
刀折れ，矢尽き。。。
多くの総員もろとも大爆発を起こし深い海に消えた

並ぶ粉川に聞かすでなく
独り言のように（こんごう）はつぶやく

「この海に。。。。。」
「この海に。。。眠っている」

（こんごう）の花束を持つ手は震えていた
それを（しまかぜ）が支えながら

「やっと。。。私達も。。花を捧げられるわ」

何度もの演習地で「敬礼」はしてきたが「花」を捧げられるのはこれが初めてだった
自分たちの手で作り出した幻の花ではなく
帝国海軍の彼女たち「艦魂」が愛してやまなかった。。。日本の大地から持ってきた花を

「だから。。ねっ！ちゃんとお礼は言って」

（しまかぜ）は（こんごう）の手を握り，その甲にポンと手を打って微笑んだ
目頭を押さえるといつの間にかとなりに立っていた粉川に（こんごう）は向き直った

「。。。。そう。。。。悪いな。。。」
「はっ？」
変な言葉に，変な声を出してしまった粉川の顔に（しまかぜ）は吹き出した
「こんな時ぐらい素直に「ありがとう」って言えばいいじゃない！」
何故か真っ赤な（こんごう）は俯き加減の顔で
「だって。。」

先ほど会議室から後頭部を引っ張って退場したりと，結構杜撰に扱ってきた粉川だ
今更。。。そんな顔で素直にお礼の言えない（こんごう）
「だって。。。こいつ。。わけわかんない事を。。。」
「それはもういいじゃない」

何故かこういう部分に敏感な粉川はちょっと調子に乗った
（こんごう）の横に顔を近づけると

「言葉があれなら。。。ほっぺにキスでもいいよ」
「粉川さん。。。ほっぺ無くなるよ」
（しまかぜ）のありがたい忠告の甲斐もなく音高い被弾音は部屋に鳴り響き
粉川はまたも間宮たちの前に情けない顔をさらすことになった

「安らかに眠ってください」

演習海域に止まった船たちの上
空は曇り，亡き連合艦隊の涙を溜めているように見えた
ココは。。。。死の海
激しい戦いの末に消えていった「英霊達の海」
（こんごう）は花束のリボンをほどき，丁寧に一つ一つ海に投げる
同じように各護衛艦の船尾で艦魂達が花を捧げる中

「全護衛艦隊，坊の岬に向け敬礼」

護衛艦隊に
全艦放送が流れた
演習時間が押している事もありみんなが並んで敬礼はできないが
間宮は演習海域にかつての「軍船」が眠っていれば必ず敬礼を捧げていた
これは礼儀であり
今ある「海上自衛隊」の守るべき日本の礎となった者たちへの儀式

隣に並ぶ海上保安庁船艇りゅうきゅうの艦橋で，浜田船長も礼をしている

「時間押してるんじゃなかったのかよ」

そんな海自の艦魂たちの姿をみながら（はやと）は愚痴った
（はやと）は海自のこういう行動がキライだった
いかにも自分たちばかりが「伝統」に乗っ取った「海の守り」だと主張しているようで
でも
悪口を言うような反対はしたくなかった
そこは。。。やはり「日本を守って死んだ艦魂」への最低限の礼儀だから
目深に作業帽をかぶり目だけつむった

「いいじゃん～～天気も悪いから考えてるより早く終わるよ」

各々の船に乗船しているのに（おおすみ）の声は努めて明るく（はやと）に届く
電信が発達した現代の艦魂ならではのネットワークだ
（おおすみ）だって邪魔をしたいわけではない
全体が湿っぽくなってしまうのがイヤで。。。明るく振る舞って見せている

（はやと）は顔を上げて，手で空気を感じる。。。。湿った感触
「雨。。。。きそうだもんな。。。」

（あかいし）は海自の敬礼を物珍しそうに眺めて，真似しながら（りゅうきゅう）に聞いた
「誰か亡くなったの？ココ？」
（りゅうきゅう）も同じく敬礼しながら
優しい声で教えた

「私達の大先輩達がココで，日本のために亡くなったの。。。だからお祈りしてるの」
「ココで？」
「そう。。。」
敬礼の手を下ろした（りゅうきゅう）は海を指し
「この海であった戦争で。。。日本を守りたいという心で，戦って死んだの」
「。。。。」
艦齢の若い（あかいし）には，まだよくわからない事のようだったが敬礼の代わりに両手を合わせた
それは本当に一瞬
雨の前の静かな海の墓標に祈る姿だった

「間宮艦長！喜界島通信所より入電！東シナ海域に不審な電波あり！！」

静まっていた
艦橋に響き渡る通信士の声に緊張は一瞬にして全ての幹部に伝わった
間宮は艦橋受話器を持ち

「ＣＩＣ，通信入ってるか？」
「こちらＣＩＣ，喜界島からの通信入ってます」
艦橋とＣＩＣの会話が終わる前に，それまで窓の外にむかって敬礼していた総員は己の席についた
同時に船務長の和田は艦内放送のチャンネルを取り
総員配置の号（号令）とアラームを発した
危機に際しすぐに行動できるように。。。。当たり前に指示である

「間宮艦長！！こちら海上保安庁ＰＬＨ巡視船りゅうきゅうの浜田だ！！海上保安庁第十管区と七管区から入電，東シナ海域に「不審船」あり近海を行く漁船に威嚇発砲をした，との事」
「発砲？」
和田は驚き声に出したが間宮は冷静だった

「ＣＩＣ！違法と思われる電波は目標の物か？通信所はどこまで捉えている？」
「ＣＩＣから艦橋へ！通信所も目標「不審船」である事を確認しています」

通信を重ねる間宮のとなり和田は海域をレーダーで捕捉さるため通信士への指示を始めた
不審船が東シナにいるのなら海に出ている自分たちが一番近い
「ＪＯＤＣは？」
「情報を抑えています。。。。波高しという事で海に「警報」を発令」
「がぶるか？」

通信の間，ちらりと見た空に間宮は忌々しそうにこぼした

空模様は急転している明らかに時化の雲が流れている方角に「不審船」はいる事になる

矢継ぎ早に情報を集める
顔を上げた間宮に，和田は眉間に深刻な皺を集めて聞いた
「海上保安庁はこちらに情報を開示しているでしょうか？」
間宮は艦橋から向こう，早くも船を旋回させ始めた巡視船を見ながら

「この距離だ「隠すような事は」できない」

旧友とも言える保安庁船艇船長，浜田がこの距離で自分たち隠し事などする理由がない

「浜田船長！こちら海上自衛隊護衛艦こんごう艦長，間宮です。通信所から送られた座標を送ります。相互確認願います」
そこまで言うと
次は艦内放送を待つ和田に指示した
「演習中止！！水上戦闘用意！！重ねて言う！これは訓練ではない！！」
指示の合間を縫って浜田から返事が入る

「座標確認！ズレなし！！これより不審船の追尾に入ります」

慣れた海域
海保の動きは速い
目の前で一斉転進をする海上保安庁船艇を見ながら
間宮は応答した

「了解」

一方のこんごう内は
アラームの後。。。緊迫の艦内を操員達が走っていた
だが
平隊員の中には未だ「実戦」という「演習」かと?緊迫が伝わっていないのか足並みは遅い
艦橋の受話器を握る和田は声も高く繰り返した

「これは実戦である!!演習はこの時間をもって終了!!繰り返す!!これは実戦である!!」

間宮は和田の手元を確認しながらＣＩＣに繋いだ
「統合情報部と連絡はとれたか?」
「現在はまだ」
「繋がるまで通信所を叩き続けろ!!」

「護衛艦隊用意良し」
受話器を下ろした間宮の前，和田が確認のサインを出した

「護衛艦隊もこれより不審船の追尾に入る」

調度で艦橋に入った粉川は忙しい人の動きを器用に避けながらも
目の前にある状況に厳しい表情になっていた
さっきまでの静かな海は顔色を変え牙を剥いているようにも思えた

「有事なんて何時きた」

粉川の頭によぎったのは海保の艦魂(はやと)の言葉

何時それはくるかわからない
だがその為の備えである組織「海上自衛隊」は海保に遅れをとりながらも現場に向かう
艦橋の窓に近づき空を見る

「闇の迷走。。。。。」

不吉を暗示するように重くのしかかる暗雨の雲はさっきより色を濃くし
風を呼び始めていた
その中
粉川の視線が甲板に走る

すでに小雨がふり始めたこの海域の海上
（こんごう）が船首に走っていた
雨衣も無しの彼女は風に晒されたままで暗闇を鋭く睨んでいる
そこにある「脅威」に向かって
そして護衛艦隊もその脅威に向かって走り出した

第七話　闇の迷走（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～

実は。。。。ヒボシはこの小説を「書き始めるまで」イージス艦って何か知りませんでした（爆死）
ってかヲイ！！！って感じですね
イージスっていうからわからなかったのが正解なんですが
ａｅｇｉｓ（ぁ（小さく発音）えぃじーす）というのだったらすぐにわかったかもしれません。。。。
大差ない程度ですが（死）
で

「亡国のイージス」のＤＶＤを買いました（藁）
すぐに映像に頼るアタリが現代人です
見て思ったのは「四角い船」だ（爆）
ていうか。。。。主砲がちっさい（イージスの性能において主砲の善し悪しは大きささで決まらないそうですが）
うしろが平らい（藁）（意訳，たいらい。。。平らなのよ。。。。ぺろっと）
帝国海軍の船に比べるとなんとも「色気のない船」でした

映画の感想は。。。。真田さんが役作りのためなのか？異常におじんくさい（爆）
中井貴一が全然某国の工作員に見えない
寺尾聡が。。。。。何とも言えないｗｗｗ
一人だけ寡黙に狂っている安藤君が。。。。ぬ～～～

そんなところです（何）

それもさる事ながら
実は「自衛隊」そのものを全然知りませんでした（ダメ作者）

しかし
知識と想像力で（爆笑）
後。。。大人の余裕で（何処？）現在も執筆中です
というか
本やら映像やらをやたら収拾しているので。。。。。そろそろ相方さんに殺されます（藁）
部屋をかたせぇぇぇぇ！！！て。。。ごめんなさい。。。。。

この章で「坊の岬」の事を少しだけ書きました

子供の頃
近所の大きな家の玄関に大きなプラモデルとなり鎮座していた大和なんだろう？とぼんやりすごしていた存在がそれでした
今はその家のおじさんが大和の生存者だった事は知っていますが（もう亡くなられました）
その頃は知らなかったので

たしか。。。

「外国の船？」

そう聞いたと覚えています
おじさんはシワシワの手でヒボシの頭を撫でて

「違うよ。。。。日本の船だよ」

そう答えた後
ヒボシの顔をじっと見て
「あんたの国に負けて。。。沈んでしまった」

そう言った
ヒボシは気味悪くなって離れたけど
帰りに
「ごめんなさい」ってあやまったんだと思う
おじさんは慌てて
ヒボシの頭を何度も撫でて，お菓子まで袋に入れてくれた
「嬢ちゃんはなんにも悪くないよ」と

本当にぼんやりとしか覚えてないだけど
そんなやりとりがあったように。。。。あんまり小さい時だったからいまいち信用ならん記憶ですが。。。。
記憶に。。。思い出すと痛いという事は。。。。
そういう事があったと心が覚えているという事なのだろうと今では思っています

「男たちの大和」を見て泣きました
あのおじさんが乗っていた船だと思い出して

そんなヒボシは今
イージス艦の「艦魂」の話しを取り上げています
「守るべき戦い」というものに主眼を置きこの先も「苦難」の中達(こんごう)

と戦っていきます
派手な戦闘シーンはあまりないと思いますが
そんな思い出も織り交ぜがんばって行こうと思ってます！！！！
よろしくおねがいします！！！

～～～ぬ～～～
ヒボシ　「すいません（しらね）さん今回はウラバナ占有しちゃいました（藁）怒りのはけ口は次回という事で。。。。」
しらね　「てか寝てたわ。。。。最近夢うつつで。。。早く出番頂戴よ！！（脳卒中近しか（爆））」
ヒボシ　「すいませんねぇ。。。まだしばらくはないみたいなんですが。。。ああっ怒らないで～～」
しらね　「てか佐世保に行ったら余計に出番ないじゃない？このままだとただのお色気キャラだと思われるじゃないの！！」
ヒボシ　「でもココで色々しゃべってれば色んな先生の所にお呼ばれできるかもしれませんよ！！（こんごう）より先に！！」
しらね　「（こんごう）は。。。。呼ばれたらカチコチに固まって何も答えられなくなるわよ。。きっと」
ヒボシ　「そうなんですか？」
しらね　「だって。。。あの子にとって大本営とかね，連合艦隊って雲の上の「神様」だもの」
ヒボシ　「そういえば今回，泣きそうでしたしね」
しらね　「そぉねぇ～～意外と泣き虫だしねぇ～～あの子はぁ～～ふぁ～～今日はもう寝るわよ～～」
ヒボシ　「。。。。大丈夫か？不審火に気を付けてねぇ～～～（藁）」

そんなこんなの短縮型ウラバナダイアルでした！！！（藁）

それではまた後書きでお会いしましょ～～～～

第八話　赤の眷属（前書き）

後書きのウラバナダイアルに姉妹艦の事少し書きましたぁぁぁぁ
頑張れ頑張れ自分頑張れ！！
楽しいことの一生懸命なヒボシであります～～～

第八話　赤の眷属

さっきまで晴れていたから。。。。
そんな事はこの海には関係のない
何処までも見えていた水平線は，黒い緞帳に隠され，まだ昼を少し回ったばかりの世界を急激に「暗闇」へ導いていた。

艦橋とＣＩＣでは「情報戦」ともいえる喧噪に包まれたまま，海上保安庁船艇の後を追い波の壁を蹴散らし走り始めた
張りつめた空気が，落ちた気温と同期する
顔色わ変えた空の向こうにある「虚位」の存在にだけ。。。。全ての熱が集まる
船の舳先に立った（こくごう）は自分の体にかかる雨の冷たさで
自分が熱く滾り始めている事に気がつき

手を。。。何度か開き。。。閉じる

護衛艦隊の艦魂たちは皆，前方の見える場所に立っている。

（しまかぜ）は雨衣に着替え，横殴りに変わった雨を払いながら艦隊を見回した
いつも通り
練習通り
（むらさめ）も（いかづち）もふざけた表情を消し荒れた波の向こうを睨んでいる
後攻の（さわぎり）の顔には幼さなど微塵もない
警戒に徹した出で立ちで指示を待つ

（しまかぜ）はぐるりと全員の顔を一巡してから，前を行く（こんごう）を見つめた

視線の先，船の舳先に雨衣も着ずに立つ後ろ姿に湯気が見えた
心身共に熱を帯びているのがわかるが。。。。
（しまかぜ）は胸を押さえて，まるで自分にも言い聞かすように告げた

「冷静に。。。。冷静に行くのよ。。。。（こんごう）」

「とろいな」

一方で慣れた海にいち早く旋回した海保の艦魂達の中
最後尾を走っていた（はやと）は自分たちのさらに後ろを追うように走る護衛艦隊を見るとやじった
何かと「上」に上申しなくては身動きのとれない海自の出方を馬鹿にしていた

「追いつく前に事は終わる。。。出る幕なしだ！」

凪いだ海であろうと荒れた海であろうと巡視を怠らない海保の動きは速い
「不審船」だって初めての出来事ではない
これを領海から追い出す任務はココ何年か増えている

ただ世間が知らないだけだ
見えない部分の仕事とはいえ，十分過ぎる責任と自信を持っている
なんだかんだと出張ってくる海自だが今までだって「接敵」出来たことなどなかった。。。

いつだって海保が追っ払った後で「警戒警備」をするのが海自の仕事

かぶった帽子のひさしを人差し指でチョイとあげて舌を出すと
（はやと）は大きな声で笑った

「にわか軍人!!騒ぎの終わった海でドサ周りでもしやがれ!!」

先頭を走るイージス艦である（こんごう）に中指を立てた

「浜田船長。。。。」

巡視船りゅうきゅうの船橋の中，ひときわ騒がしい中で
窓から離れ一人，天気情報を確認していた浜田の袖を引いたのは長い栗色の髪をキレイに纏め第四種服に着替えた（りゅうきゅう）だった
浜田は周りを確認すると（りゅうきゅう）の手を握った

「周りの目があるからな。。。頭に話しかけてくれ」と

「不審船。。。ほっておいても追いつくまでに領海を出るのでは?」

それは事実だったこの海域から追ったとしても「不審船」は明らかに違法改造を施した船。。。全速力を出せば３０ノットは軽く出てしまう
追いつく前に見失うのは確実だ

壁にもたれ情報の整理をしながら頭に響く柔らかな声に，浜田は小さな。。。人には聞こえないような声で返事した
「だからといって「見逃す」ような事はできんよ」
そういうと横目で不安な顔で長い睫毛を揺らしている（りゅうきゅう）を見て苦笑いした
浅黒い顔に白い歯を見せて

「頭で会話できるとわかっても口が動く。。。こまったものだ」

「海自は前には出られませんよ」

説得の言葉にそれでも（りゅうきゅう）の顔が晴れる事はなかった
水色のラインの入った四種制服の前に手をまるで不安で飛び出してしまいそうな心臓を抑えている姿

「海自が出られない事など百も承知だ」

そういうと壁によって（りゅうきゅう）の肩に自分の肩を寄せた
「夫を信じろ。。。女房なんだろ？（りゅうきゅう）？」

浜田と（りゅうきゅう）の付き合いはココ５年ぐらい
奥さんを亡くしてもから突然（りゅうきゅう）が見えるようになった
それ以来「妻」のように寄り添うようになった彼女恋しさに長く勤めた第十管区から移動した
実家の枕崎を後にし第十一管区。。。（りゅうきゅう）のいる沖縄

に移った

誰かに説明してわかる事ではなかった
他の者には見えないのだから
見た目１８～９の小娘である（りゅうきゅう）に自分が入れあげている事に恥ずかしく思った事は事実だったが
妻に先立たれ心に大きな穴を作っていた浜田にとって「公私ともに」いつも一緒にいられる（りゅうきゅう）はまさに「女房」そのものだった

不安に微かに震えている彼女の手を強く握る

「オマエの言うとおりだ。着くまでには姿を消している。。。きっと」
そう言うとさらに，肩を寄せて
やはり頭で通じているとわかっていても小声で聞いた

「海自の艦魂には会えたか？」

熟年の域にいる浜田にとって彼女を不安から遠ざける言葉はいくつでもあり余裕があった
潮焼けで小じわの多い目を愛嬌たっぷりにぱちりとさせて聞いた
「ええっ。。。会えました。新しく来たイージス艦の子は，気が強そうでしたよ」
彼の優しい顔に，少し心の緊張を解いた（りゅうきゅう）は嬉しそうに応えた

「そうか。。ワシも見てみたい」
「まぁ他の女の子にも興味が？」

軽い嫉妬のジャブに浜田は苦笑いし
「ははっ。。。ワシにはオマエしか見えない。。。残念だ」

浜田は（りゅうきゅう）を見ることは出来たが他の艦魂を見ることは出来なかった
そして
他の艦魂も浜田を見る事ができても。。。
それはいつも通りで触れることも話すことも出来なかった
だから二人はこの事を，二人だけの秘密にしていた

「浜田船長！！「第二花山丸」が見えました！！」

船員の声に浜田の顔は一瞬で引き締まった
前に進み自ら双眼鏡で確認する

「止まっているな？無線は？」
「あります。。。繋ぎます」

応対のスピーカーの向こう漁師の声がノイズと砂を噛んだような音の中で繰り返し叫んでいる

「船艇部。。。。。横を。。撃たれて。。浸水。。。」
「撃たれてるのか？」

聞き取りにくい音の間
隣に並ぶ船員に聞く
「最初の連絡で「穴」がと。。。たぶん船体に穴が開き浸水しているのではと」
浜田はもう一度望遠鏡で見回したが
波の大きさは雨の激しさに比例し視界さえも大きく曇らせていた

「ココからではわからん。。。（あかいし）に救助と補助を開始させろ」
「了解」
「後(おおすみ)にも救助に。。」
矢継ぎ早の指示を飛ばす浜田の声を通信士が遮った

「目標。。。。止まってます」
「何？」
艦橋の船員達
指示に素早く動き出した手が止まる「目標」さっきまで逃げていた
「目標」
「何で止まっている？見えるのか？」
通信士はレーダー画面を指しながら「わかりません」と首を振った

「機関故障か？」
浜田は窓に顔近づけ波の高い海を睨んだ。
目で見ることはできなかったが
ここより少し進んだ先で「不審な目標」は停船しているらしい
双眼鏡に手を掛けたがそのまま腕を組み，何度も顎の下をこすり考えた

「行くしかないな」と
振り返ると船橋の一番角で胸を押さえている（りゅうきゅう）をチラリと見て
手で安心しろと合図を送り

「護衛艦隊と連絡を」

そういうと受話器を取った

一方の護衛艦内艦橋には不穏な空気が臭うほどに漂っていた

「こんごうは目標を捉えています。。。。我々を先行させてください」

何度目かの交信

海保の船艇の後ろに一定の距離を保ったまま走り続ける護衛艦隊

統合情報部に繋がったのは走り出して直ぐで対応は早かったが

内容の鈍さに間宮は静かに苛立っていた

「発砲有りと通報があったのです」

「護衛艦隊は海上保安庁船艇の後ろに一定の距離をとりつつ現場に向かえ」

受話器の向こうの統合情報部局員の声は努めて抑揚無く，何度も同じ事を繰り返していた

間宮の静かな焦りは顔には表れないが操員には伝わっていた

みな持ち場を離れる事なく刻々と進む状況と睨み続けている

「専守防衛」

この言葉に基づく「縛り」の中で間宮はすべき仕事の選択をしていた

「発砲」については再三にわたり告げているが

情報部の返事は決まって「確認していない」だ

事実。。。。。

発砲は見たわけではない。。。。そういう連絡があっただけだ
「発砲の確認が海上保安庁から入れば次の指示を出す」
後手後手の選択。。。。
顔に出さなくても拳は握り固め過ぎて真っ赤になっていた
粉川は艦橋でのやり取りを聞きながら窓の外を見ていた

船の切っ先に立つ（こんごう）の姿もまた
ただ指示を待っている

「間宮艦長聞こえるか？こちら巡視船りゅうきゅうの浜田だ」
前方を走っていた海保の浜田から緊迫していた護衛艦の艦橋に通信が入った
「確認して欲しい。。。。目標「不審船」が止まっているようなのだが？」
艦橋，通信士の隣にいた和田は直ぐにＣＩＣに問い合わせた
「止まってます」
即座の返答に
間宮は浜田に答えた

「停止してます。。。こちらでも確認しています」
通信用の受話器の向こう浜田は唸った
間宮にも理由はわかった
目標が停船している場所は領海内であり外海にはまだ距離のある場所だ

「ではこれより，りゅうきゅうは停船した目標に接近します」
領海を出ていないのならば取り調べまたは，事情聴取なども必要となる
雨足が強く波が高いからとこちらが停止するわけにはいかない
「浜田船長!!発砲はあったのですか?」
間宮は簡潔に事実をしろうと切り返した
この事実が海自にとっては大事だから
「発砲の確認は今(あかいし)がしている。。。。海が荒れているから。。。直ぐには確認は出来ない」
間宮の顔は曇った。。。。。
「了解」
そのころ海保は編成を改め
（りゅうきゅう）と（はやと）を前に（おおすみ）と（あかいし）を救助にと分けていた
波の荒れ狂うデッキに（りゅうきゅう）は顔を出していた
ほんの一時間前まで青空こそなかったが。。。。
白く薄い雲の張った空だった
帽子を飛ばされないように押さえながら後ろを見つめた
救難信号を出していた「第二花山丸」を囲むように（あかいし）と（おおすみ）が減速する中
間を縫うように静かに航行し姿をあらわした護衛艦(こんごう)と（しまかぜ）

残りの二挺（むらさめ）と（さわぎり）が救難補助で残る事になり後攻を（いなづま）が入る
海保船艇の動きも速いが，海自の艦艇達も静かに精密に動いてゆく中
風と雨に顔を押さえたまま視界を確保していた（りゅうきゅう）の
前に光りが二つ舞い降りた

「これより後方からの警戒支援を行います」

（りゅうきゅう）の目の前に降りたのは雨衣姿の（しまかぜ）だった
会議室で会った柔らかさは微塵もなかったが
海自の責務を果たさんとする使命に顔は張りつめている

「絶対に「目」を離すことはありません」

（りゅうきゅう）は（しまかぜ）の隣に立つ（こんごう）を見た
濡れる事を厭わないのか海自の制服のまま髪を風に揺らして立つ青い瞳。。。。
その
青い目の中に赤いマーカーのライン
全ての景色が無彩色となった世界で煌々と輝く目に驚いたが，それがレーダーのラインである事はすぐに理解出来た

「。。。ＳＰＹ－１Ｄ。。。。フェイズドアレイレーダー」

護衛艦こんごうの艦橋を飾る八角の最新鋭レーダーと同じ形を現す
輝きが
（こんごう）の目の玉に輝いている

「心強いです」

（りゅうきゅう）は二人に向かって敬礼すると「作戦」を話した
「お聞きになっているとは思いますが，これより私と（はやと）が
先行し「目標」を囲みます。相手は「銃器」を所持している可能性
が高いですが。。。船が動かないのならばこの天気です抵抗はあま
り賢い行動ではありませんので。。。」

（こんごう）と（しまかぜ）は一言も逃さぬように
暴風の中で耳を尖らせて聞く

「逮捕。。。船の拘留が我らの最重要任務となります」
「了解」

少しずつ船団は前に進んでいる
もうしばらくすれば「目視」できる位置に入る中
天候は決して変わらぬという意志を示すかのように暗い

「旗を振っているとの報告でしたが」
（しまかぜ）は顔を叩く雨を払わず海の向こう，波の間に少し見え
た照明を睨んだ
「赤の。。。」
（りゅうきゅう）は言葉を濁らせたが（こんごう）は吐き捨てよう
に続けた

「赤の眷属」

リンク１６により（こんごう）の頭には今まで以上に大量の情報が
入り始めていた
「やっかいね。。。」
情報は（しまかぜ）にも同じく入っている

「赤の旗を掲げる不審船」
海を隔てた大国の旗の意味は？
緊迫する三人
「甲板に人がいますから。。。。接近しなければなりません」

そこまで言うと
「仕事に入ります」と（りゅうきゅう）は姿を消した

「私達が。。。先行すれば良いのに。。。。」
姿を消した（りゅうきゅう）のいた位置を睨むように見たまま（こんごう）は絞り出す，本音をもらした
その手を（しまかぜ）が抑えて

「発砲の確認が間に合えば。。。。。」

二人は近づき始めた目標である船を見た
荒れた波の中
何かを誘うように揺れる船に人の影が確かに見える

長い夜が始まる

第八話　赤の眷属（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～プエ～～

コンバンワ艦魂小説を書く先生方のバイタリティに追いつきたいヒボシにございますぅぅ

てか

すごいよ独立機動艦隊「紀伊」の草薙先生とか本伝書きながらさらに外伝二本を同時進行で書くなんてネ申ダヨ

がんばって読まねば！！！そして色々学ばねば！！！

そんな猛省中のヒボシですが

とりあえず今解っているわかりやすい「姉妹艦」をかき出してみましたハアハアハアハアハ

息キレそうです

艦魂物語を読む上での少しの助けや，楽しみとなってくれれば幸いです～～

汎用護衛艦むらさめ　艦魂（むらさめ）

第三世代のヘリコプター搭載汎用護衛艦で、９隻就役中の長女

実は（こんごう）より年下なのだけど「自称姉御肌」（藁）

汎用って言うぐらいだから幅広い仕事をしており経験値も馬鹿にならない

多くの仕事をこなす彼女は，日夜体力作りを惜しまないアスリートのようで，愛読書は「月間アスリート」（藁）

（しらね）と仲が悪いのは彼女が自分を「旗艦クラス」と言い放ち（むらさめ）の仕事を馬鹿にした事がある（らしい）に起因する
また
相手の言われたくない言葉でのあだ名を付けるのが好きで結構ケンカの元になったりもしている

容姿はスレンダーだか体力作りの賜物か腹筋は割れている（爆）
身長１６５センチ
年齢１８歳（艦魂流見た目年齢）
豊かな黒髪を持っているが，いつもは引っ詰めて団子にしているせいで腰まで届くほど長いなどとは誰も知らない
垂れ目で色白
常に海軍セーラーを着用している
座右の銘は「戦って死ね」

海上自衛隊の仕事を心から誇りに思っており，栄えある「帝国海軍」末裔である事を強く信じている
（こんごう）のいきすぎなまでの責任感に自分の中身を見るようで辛いと思っている
（いかづち）（あけぼの）に呼び捨てにされているが実の姉
呼び捨ての理由は「お姉ちゃん」とか呼ばれるのはくすぐったいから。。。。。
褒められるとのぼせ上がる

汎用護衛艦いかづち　艦魂（いかづち）

むらさめ型ネームシップからの七女
まだ本編では言ってないが（こんごう）の事を（金さん）とよぶ（

藁）

このつながりから（こんごう）の妹を（ちょうかい）（鳥さん）

（きりしま）を（霧さん）（みょうこう）を（みょん）と呼ぶ

彼女に言わすのなら全部親しみがあってそう呼んでいるとのこと

基本，年上は「何々はん」と呼んでいるらしい。。。

（（こんごう）達が「さん」なのは単に語呂が悪かったからしい）

やたらいろんな地方の言葉の混ざった「関西弁」もどきのしゃべり

ノリももちろん関西

姉である（むらさめ）の事は呼び捨てているが本心は「良き姉」と

理解している

特に（しらね）がキライという事もなく誰とでも仲が良い

ムードメーカーでいつも明るい

趣味は料理

そもそもはおしゃれ雑誌の「カレー特集」に採用されたくて始めた

のだが

いまやシェフの領域であらゆる料理に精通する

（本編未収録だがカレー特集は（こんごう）のが採用されたという

経緯があり，特にカレー作りにはこだわっているところもある）

身長１６２センチ

年齢１７歳（艦魂流見た目年齢）

雷に打たれたようなと自称するほどに茶髪の癖毛で肩に届く程度の

ショートヘア

伊達眼鏡をしているときもたまにある

色白だけど顔にはそばかすと，王道的太陽娘である

常備の服はコック服（藁）

姉である（むらさめ）が自分を鍛える事で「帝国海軍」の末裔であ

る事を信じようと努力している事から

自分たちのありかた

「断絶」の向こうの世代である「海自」が本当に「帝国海軍」の末裔であるのかを疑っているところがあったりもするがそれを口に出して言った事はなかった
粉川と出会い初めて話す事になる

汎用護衛艦あけぼの　艦魂（あけぼの）

同じネームシップから派生している姉妹で（むらさめ）の妹，八女なのに（しらね）に懐いていてこちらは（むらさめ）の汗くさい生き方を嫌って呼び捨てている（藁）
（しらね）の側の護衛艦はクリエイティブな仕事が多い「横須賀」勤務のため
今更「帝国海軍」の末裔としてうんたらかんたら～～なんて事を嫌っている者が多く（本心ではそういう呪縛から解かれようと努力している特に（しらね）が）
俗に「サービス業の１群」と呼ばれるほどメディアに出ることの多い彼女たちはおしゃれに，ものすごく熱心である（藁）
（あけぼの）も当然そういう先進志向で（しらね）を尊敬して「姉様」とまで呼んでいるが（もちろん（しらね）は（あけぼの）より年上だから姉様で正解なのですが。。。）
（むらさめ）の事は呼び捨てである。。。実の姉なのに。。。

身長は１７２センチ
年齢１６歳（艦魂流見た目年齢）
小麦肌（焼いている）でアイメイクもバッチリ，リップグロスもバッチリ
立派なＪＫスタイル（爆死）
海自の制服にバーバリーのプリーツミニを会わせて着ているところ

からも女子高生を意識しているとしか思えない
（とはいえこのスタイルは近年産まれた艦魂少女たちにはスタンダードなカッコともいえる）

（むらさめ）との関係は必ずしも良好とは言えないが（いかづち）が間に入っている事でその心を自分なりに理解しようとは思っているらしい
（しらね）のシンパのため（こんごう）を良くおもっていないが（しらね）が（こんごう）とどうしてケンカしてしまったか，本当の理由はしらない
良くも悪くも現代っ子な艦魂

プェ～～～疲れましたぁぁぁぁ
今度は（しらね）さんの姉妹を紹介しますよ～～
現代っ子の艦魂少女たちは
お目々バッチリのハーフ顔！！
グラマラスからスレンダーまでみんなスタイルいい！！（一部例外もあります。。。（さわぎりたん）とか）
タイトもプリーツもスカート短い！！の三拍子

（こんごう）もしっかりプリーツミニにオーバーニーソですからねぇ。。。
そんなかっこで船の先端に立ったらパンツ見えちゃうよぉ～～～
しかし
そこは小説なので見えません（良かったね（藁））

それではまたココでお会いしましょ～～～

ウラバナダイアルでしたぁぁぁぁ！！！

第九話　血霧の舞（前書き）

後書きに（しらね）さんご紹介～～～～

第九話　血霧の舞

市ヶ谷に移築された防衛庁は真新しい輝きの中にあったが
夕暮れ時の近づくこの時間
人の足が副都心に向かう頃に合わせたように
内部機関の職員達の足は庁内を忙しく動き回っていた

新調されたビルの鏡面ガラスの前
その男は排煙ダストの付いた銀色の天皿を持つ灰皿のポストの前で
思案に暮れていた
幕僚クラスの服が十分に身に付いた白髪頭
額に手を滑らせ窓の外を見つめる

「羽村局長」

夕日が照らし出すガラスで
自分の後ろに立つ背広の男を確認した羽村は，振り返る事なく聞き返した

「動きあったか？」
潮に焼けた黒い顔に，余計に深く見える眉間の皺をさすりながら

「部屋に戻ってください」

目元鋭い背広は質問には答えなかった
庁内とはいえ
今起こっている「事件」を口にする事を拒んだ

「ココに来てくださるのなら。。。。部屋に戻ってください」

羽村は，もたれかかっていた灰皿から体を起こし背伸びすると
すでに部屋に向かって歩き出している背広の後に従った
奥まった通路の中に厳重な警護の付いた部屋，禁煙パイポを口にくわえたまま

開けられた室内は暗闇と静寂と，機械が作動する「パ」音の世界
誰も彼もが
青く光るモニターと横並びに黄色に赤などの光を伴った機械の反射の顔でにらめっこをしていた

足もとを探すように羽村は部屋の正面にある巨大なモニターを見ながら
自分の席の隣に座った，さっき自分を呼び出しにきた男に聞いた

「変わってないか?」
眼鏡にパソコンの反射を映した背広は小さな溜息と共に顔をあげた

「変わってません。。。。ただ」
「変わってないならいいんだ」

眼鏡の彼は顔をしかめた
メインモニターに映っている日本列島のライン海洋，空域の境界線と，気象情報と，基地の情報
細かく分けられたマーカーを睨みながら，羽村に作業を続けろと指さされた彼は思いあまったように聞き返した

「局長。。。（こんごう）を前に出すべきです」

パイポを持った手で白髪の頭を掻いていた羽村は

暗闇に光る列島地図に目を細めながら
「まったく。。。暗い中でこんな光り物の地図を見ろなんて。。。。年寄りに優しくないな」
「副長！」
背広は羽村の対応に少し声を尖らせた

「護衛艦が前に出る理由は？何か変わったのか？」
「現状は何も。。。ただ「銃器」の保持を危惧される船に海上保安庁を先行させるのは危険では？」
「彼ら（海保）が自分達で判断した事だ。。。それに銃器は見つかったのか？」

眼鏡の下の目が吊り上がる
こんな押し問答がココで行われている事に苛立ちを隠せない
「佐々木君。。。。自衛隊が先に動くことは望ましくないらしい。。。」
他人事のような返事に

佐々木
眼鏡の鼻の部分を抑え，こもる不満に耐える彼は溜息と共に正論を吐いた

「国防の問題です」
「そうだ」

若い次官の憤りにブレのない返事
「何か起こってからでは遅すぎます」
「何もおこらない事を願おう」

自分の耳元に顔を寄せた佐々木を煙たそうに羽村は払った

「何もないうちから争う事を考えてもきりがない」
佐々木はメインモニターに顔を戻すと嫌味のように聞いた
「それが内閣府からの指示ですか？」

ココ何年か「不審船」の情報は十分過ぎるほどに海上自衛隊には入っていた
何もしらない訳ではない
だが
何が出来た訳でもなかった

常に後手後手の防衛「まがい」を続けているのがココの現状で
領海内での問題に真っ向勝負をしているのは事実「海上保安庁」だった
佐々木は腹立たしく思っていた

国民が国を守る楯である自衛隊という最上級の防備を「嫌悪」している事に

いくら海保が，がんばっても「足りない」事は多くある
それを補ってあまりある自衛隊を使をない事
またそれに甘んじている自衛隊の体勢に
最新の設備をもって移築された防衛庁だったが。。。。佐々木に言わせば「隠したい物を増やした張りぼて」だった
佐々木は自分の額に手を当てた
何故わかっていて防衛しないのかと。。。。熱くなる自分の思いを抑えるように冷えた手で額をさする

羽村はその仕草に
静かにゆっくりとした口調で答えた

「佐々木君。。。。これは「民意」だ。。。。自衛隊が率先して守る事を「国民」が望んでいない」

何度も口にパイポを運ぶ羽村もまたモニターに視線を向けた
不審船と（こんごう）の距離はモニター越しに測るなら人差し指一本その先の領海外までは指三本。。。。。

暗闇の情報部の中で「アレ」が何事も行わず外にでる事が望ましいと羽村はパイポのケツを噛んだ

一方荒れ模様もより激しくなった海の中，海上保安庁巡視船りゅうきゅうから外の轟音にも負けぬような大きな声が拡声器から発されていた
近隣三カ国の言葉での呼びかけはどれも同じ内容の「警告」をかれこれ数十分にわたっておこなっていた
発煙筒と光通信もしたが，先ほどまで見えた人影は今は何にも応じない状態だった

目標の船は誰もいない無人船になってしまったかのように波に漂っている

「４０トンぐらいか？」

浜田は灰色の海の上を漂う
わざとらしい青色船体に茶色の小さめの船橋構えた「不審船」のサイズを手で測ってみた

「射撃警告しますか？」
横に並ぶ船員は間近に迫った「目標」に目を凝らしていながら
「止まってるしな。。。人がいるのか？」
「赤い旗振ってましたが。。。。」

船員の顔は苛立っていた
止まっている。。。人がいる？中身のわからない相手に警告を流し続けても無駄
踏み込む以外の解決法はないにしても
あまりに不気味だ

しかし
旗を振っていた人間がついさっきまではいた
人が確認出来た以上こちらから発砲するわけにもいかない

浜田は通信士に
「船。。。確認できたか？」
「船舶の確認は「中国船籍」。。。まだそこまでしか照会できてません」
言われなくてもそこまではわかっていた
船首両舷に書かれた表記で「長漁３０３０」

情報は逐一「海自」「海保」ともに流されているが船籍照会確認の報告はまだ無い
目視だけで見つけた情報の信憑性はあまりに薄い

だが
日本の領海「違法侵入」している事だけは確定だ

船橋では船員たちがライフジャケットにヘルメットを装備し
箱に「威嚇弾」も用意された
見えない「的（まと）」に向かって備えを改める

「急に体当たりしてくるかもしれませんよ」
元七管区勤務の航海士は漂う船から目を離さずに告げた

浜田は顔をしかめた
（りゅうきゅう）の体に傷は付けたくないが
対馬あたりの「不審船」や「他国籍漁船」は平気でそういう行動をとる。。。。
第七管区の船はみな船首から横っ腹まで傷が絶えない
経験上
そういう荒技を相手が使ってこないとも言い切れない

「接舷しよう」

浜田は手早く指示を出した
待っていて逃がした
そんな事になればそれこそ日夜，対馬海域で働く七管に顔向けもできない

「こちらは大型船だ。。。向こうも抵抗はしまい」

多少の怪我は覚悟

そう思いながら船橋の端で自分を見つめる（りゅうきゅう）に頭を下げた
小型巡視船なら相手も嵐に乗じて体当たりという無謀を冒すかもしれないが，りゅうきゅうは１００メートルを超える大型船
至近距離でのアタリならなんら意味をなさない
手で船員に安全を確認だけさせた

船員達は速やかに船縁に集まり，目標との距離は１０数メートルを切った
激しい横風と降りかかる波の中

目標は沈黙を守っている
近づきつつある中でも各国語「警告」を何度も続けた

風が少しだけ凪いだようにも感じる中

浜田は船橋から下を見下ろしながら横に並んだ（りゅうきゅう）を気遣った
「接舷で体を痛めたら。。。すまないな」
「大丈夫です。。。そんなヤワじゃありません」

巡視船りゅうきゅうと，はやとは目標不審船を挟むように接舷した
目標の右側に船をつけた（はやと）は制圧隊として構えてる高槻の後ろ姿を見ていた
熟年船員の高槻は海保の逮捕術を教える教官でもある
逞しい背中を持つ男の手が（はやと）の船体にいつもの儀式をする

「さあ帰ろう」

（はやと）はいつもの無愛想顔から乙女の顔に変わる
「帰ろう。。。。無事に一緒に」というおまじない
小さく返事する
「はい」と

海保の両船は目標船を挟み接舷し
個人で拡声器を持ち「乗船者」への警告を呼びながら飛び移ろうとした

それは（はやと）の目の前で急に，灰色の世界に色を着けた

血霧の舞

赤い点線が目の前を飛ぶ

湿って鈍った水の音の間に響く，乾いた破裂音と共に（はやと）の目の前にいた高槻が不自然な角度で崩れた
同時に，はやとの船縁に並んだ男たちが倒れる

タン！タン！タン！

複数の音の後
（はやと）の体に刺さる衝撃
ニブイ金属を叩き付ける音に顔を歪めた。。。
（はやと）の左腕に血が爆ぜる

皮膚を裂く亀裂が走って叫び声を上げた

「うあああぁぁ」

衝撃にすくんだ体がそのまま風と雨で揺り動く船体に彼女を転がしたときに見えたのは

「高槻さん！！！」

それはさっき。。。。帰ろうと微笑んだ彼

目を開いたまま

危険なほどに早い呼吸が聞こえる

首もとから真っ赤な血を流し倒れた姿に

自分の腕に走っていた痛みなど吹き飛んでしまった。

そう

冷静さを保っていた（はやと）の心までもが吹き飛び

触ることの出来ない彼の肩に手を置いた泣き叫んだ

「いやぁぁぁぁぁ！！！いやぁぁぁぁ！！！」

「発砲！！！」

船員の声

足音，風

騒音の中は高槻（はやと）の体の上に伏した

何が出来るわけでもないが，これ以上彼に何もされたくないという気持ちで伏した

「（はやと）！！！」

その姿は（りゅうきゅう）にも見えていた
それどころか（はやと）の甲板を染めた高槻の血まで克明に映っていた

「撃て！！」

並んでいた浜田が前の船員にのスピーカーを奪うと叫んだ
りゅうきゅうから不審船を警戒していた船員が銃を構えた時
彼らの目は
目の前にある景色を疑った
目標の船橋から鉄板が吹き飛んだ事に怯み頭を下げた先に見えた物
そこにあったのは。。。。

「対空機銃。。。。」
（りゅうきゅう）は青ざめたそれは自分の頭である船橋に狙いを付けていた

「ダメ！！！」

前に走っり窓縁に立つ浜田の背中を（りゅうきゅう）はただ夢中で押した
つんのめる浜田はその場に倒れ
それを追うように
船橋を鉄板を削り取るような激しい弾幕が波を切り裂いてぶつかった
激しい火花が，赤く白く散る
甲高い破壊音は遠慮なく窓ガラスを割り広範囲にわたって，りゅうきゅうの左側面を撃ち続けた

「あああぁぁぁあああああ」

最初の弾が当たったとき
風と雨の音だけを鳴らし続けた海に（りゅうきゅう）の短い悲鳴が
響き

考えられない最悪の光景が（こんごう）と（しまかぜ）の目の前に
広がった

第九話　血霧の舞（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～Ｖｏ９（藁）

なんだかんだで９回って
連載回数なんですけど。。。。
すいませんヒボシはめっちゃ楽しくてお酒飲んじゃいました～～～
（藁）

でもキーボードは打て。。。

ヒボシ　「ガプゥゥゥゥ！！！」突然蹴られる
しらね　「ひさしぶりね。。。。ヒボシ。。。。」
ヒボシ　「ゴエェェェ（吐血しまくり）なっなっなっんですかぁぁぁぁ」
しらね　「あんたさ。。。わたくしを大本営に売り込んでくれたって言ったよね？」
ヒボシ　「。。。。。。ハッ。。。ハッア（超絶焦り）」
しらね　「ねぇ。。。売り込みしてくれたんじゃないの？」
ヒボシ　「。。。。すいません（こんごう）が売れました（爆死）世の中売りたい物が売れるとはかぎらないんですよぉぉぉぉ。それはねぇ～～草薙先生の小説を最初から清く正しく読みながらもフェンリルがめちゃめちゃ気になって読んでしまったりするのと同じで。。」
しらね　「そこが気になるのは正常な反応だけど。。。それとこれは別でしょ？」
ヒボシ　「はいぃぃぃぃ」
しらね　「で？。。。なんなの？」頭，万力中」

ヒボシ　「オゴォォォォォ」射撃はしなくても力業，頭蓋外郭変形中
しらね　「伊東先生のところに（こんごう）が呼んで頂いたのは何故？」
ヒボシ　「わぁぁぁぁん～～～だって一応メインヒロインなんですから。。。当然の結果なんですよぉぉぉ」
しらね　「。。。。。じゃわたくしは何時呼ばれるの？」
ヒボシ　「毎回呼びます。。。ヒボシが（藁）」
しらね　「ココに？」
ヒボシ　「はい。。。しらねさんとヒボシで頑張っていきましょう！！」
しらね　「（こんごう）は呼ばない？」
ヒボシ　「はい。。。。。（小さく）多分。。。。。。」
しらね　「考えたげる。。。。執行猶予みたいに（爆）」
ヒボシ　「ありがたき幸せ～～～～（注：酔ってます）」
しらね　「じゃまず清く正しく射命丸。。。じゃなくて私の自己紹介しなさい！！」
ヒボシ　「合点承知のすけでさぁ～～～（注：酔ってます）」

というわけで僭越ながら我らがプリンセス（注：酔ってます）しらね様をヒボシが紹介しますねぇ～～

ヘリコプター搭載護衛艦しらね　艦魂しらね

第二世代ヘリコプター護衛艦の長女で妹の（くらま）との二人姉妹
第一世代ヘリコプター護衛艦として縦の姉妹の姉と（はるな）（ひえい）がいる
世界的にみても珍しいタイプの船で
大型ヘリコプター（対潜型も合わせて）３機も運営できるのも（同時離発着はできないが）物語中においてそんな離れ業使えるのは彼

女だけであり＊１　艦橋部などの充実した施設の規模からも本人曰く「いつでも旗艦になれる」というのはあながち嘘でもなく観艦式では総理大臣を乗せたりもする
事実，横須賀の第一護衛隊では彼女が旗艦である
名前からわかるように彼女は自分が（こんごう）を襲名するものだと信じていたところがあり
後にそれが「金丸信」（当時の防衛長官）の個人的趣味で白根山からとられた（しらね）と変更された事を未だに根に持っているところがあると言われているが。。。
実はそういう表層的な事で（こんごう）とケンカしてしまったわけではない。。。らしい

身長１４８センチ
年齢２２歳（艦魂流見た目年齢）
色白，狐目で黒の長髪（スタンダードロング，前髪が眉毛パッツンみたいな（藁））
古典的日本美を現したような容姿で着物なども着れば似合いそうだ
海自の制服をきちんと着ているがタイトスカートにスリットが入っているのはご愛敬（藁）
頭の先から足の先まで一貫しておしゃれで清潔感ある事をめざし
「サービス業の一群」を代表する彼女の下にはキレイ所の艦魂が多く揃っている
特に自分の身辺警護兼親衛隊のように（あけぼの）と（すずなみ）を連れて歩いている事が多い

派手でお色気キャラ的登場をした彼女だが
実務に置いては誰よりも実直で「不審船事件」の事で妹（くらま）とリンク６０を使って連絡を取り合ったりもしている
大日本帝国海軍の末裔という問題に際して真っ向ある人物＊２に問いかけたことがあるのも彼女だ

本当はどの妹にも崇敬される姉なのだが
どうしても（こんごう）の生誕に際しての事件があり（こんごう）との仲を悪化させてしまっている。。。彼女もまた悩みをもっているのだ
（しまかぜ）とは旧知の間柄で彼女がある出来事＊3で立ち直れないほどの状況にあったのを助けたのも（しらね）だったそのため（しまかぜ）も（しらね）の事を尊敬しているし（しらね）も（しまかぜ）を頼りにしている間柄
多くの艦魂達の姉としての責務を担う彼女は実はいい人なのだ

＊1　H20，現在ヘリコプター搭載護衛艦（ひゅうが）が就航しているこの艦は世界的にも珍しい対潜ヘリ同時離発着4機というもので，（しらね）を軽く凌駕する性能を有している

＊2　ある人物。。。。。後々出てきます

＊3　これはミサイル護衛艦に産まれた（しまかぜ）の試練ともいえた事件だったが，深い意味では現代を生きる海上自衛隊艦艇の全ての艦魂にも通じる悩みでもある。。。この事件もそのうち出てきます

ヘリコプター搭載護衛艦くらま　艦魂くらま

（しらね）の妹にして佐世保の重鎮
第二護衛艦隊群，第二護衛隊の旗艦
姉の（しらね）をネームシップに産まれた次女
「伝統墨守，訓練の2群」と大冠が着くほどに訓練と修練の基地である佐世保を守る艦魂達の姉で，「くらま隊司令」と呼ばれている
同列の妹はいないが基地に勤める全ての艦魂を妹とみなし責務に徒

事していて
厳格な階級をもって厳しく躾ている
ちなみに（こんごう）も佐世保が寄港地であり（くらま）の傘下という事になる

身長１８２センチ
年齢２１歳（艦魂流見た目年齢）
黒髪のカジュアルショート（髪が顔にかかるのは許せないらしい）
姉と同じく狐目
大柄のため基地にいる時，普段は男性用第一種制服（例の詰め襟の制服）を着ている
朝から晩まで艦魂達を鍛えて回っている
そのため
佐世保の艦魂はスポコン少女系と，変わり者系（藁）が多い（しらね）とは相反している（むらさめ）だが（くらま）とは師弟（師妹）の契りを結んだ仲，晩酌（注．船での飲酒は禁止です）まで付き合っている＊１

まだ。。。。未登場の（くらま）ですが
実務に対する姿勢は（しらね）に劣ることなく実直で（こんごう）達にとっても頼れる姉である
姉の（しらね）がクリエーティブ思考で「サービス業の一群」を率いている事には少し抵抗をもっているが
心では（しらね）が片意地をはって過去からの脱却に邁進するために努力している事を理解している
（しまかぜ）とも仲が良く（しらね）ほど行きすぎてないおしゃれ感覚は（しまかぜ）かに習っているのだが。。。。
彼女の容姿があまりに「宝塚的」なため（しまかぜ）とは危険な関係なのではと噂されていたりもする（藁）というか。。。。佐世保のほとんどの妹達が（くらま）に抱かれたいとか思っていたりもす

るらしい（爆死）
本人の意志とは関係なく女にモテモテの（くらま）
粉川の事は（しらね）から聞いているようだ
まだ活躍していない（くらま）だけど佐世保の艦魂達にとっては無くては成らない大きな姉である

＊1　艦魂は飲酒する（藁）だけど酔うわけではなく雰囲気を楽しむだけなのかもしれない（くらま）曰く酒補物品のなごりらしい。。。変なところだけ帝国海軍な艦魂

（くらま）さん。。。。まだ登場してないけど
姉妹艦紹介なので出て頂きました～～～

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～～

第十話　千里の目（前書き）

やっとで登場！！！
後書きに（こんごう）の簡易プロフィールあげました！！
物語の捕捉とお楽しみに読んで頂けたら幸いですぅ～～

第十話　千里の目

「私を殺して！」

その声は（りゅうきゅう）の悲鳴とは違った
苦痛に悶え
苦しみに歪む悲痛な声の懇願
それは
（りゅうきゅう）の船橋から左船腹に火花を散らし弾丸を打ち付けた「不審船」が叫んでいた
ほんの一瞬だった（しまかぜ）は心が凍る思いで自分が動くことを「拒んだ」事に気がついた

炎のよおに揺れた白い「不審船」の艦魂を見てしまった時
（しまかぜ）の脳裏に覚えていた影が重なり，思い出の人の姿とかさなってしまった
「あっ！！」

だがそれを「何？」と確認している時間はなかった

咄嗟の事に我を忘れ不審船に向かって手を伸ばしてしまった（しまかぜ）の隣を走っていた（こんごう）が速度を上げ波を割ったからだ怒りで全身に赤い禍々しいオーラを纏った（こんごう）は船と切っ先で相手を射落とすための銀色に光る「弓」を手に現していた

「あれは。。。。？」

今一度自分心を落ち着け目頭に掛かった雨を拭った（しまかぜ）の

前にあったのは。。。。
起こってはいけない「惨状」だけになっていた
数多の被弾により半壊した船橋と甲板に舞い落ちる火の粉。。。。。
「（りゅうきゅう）。。。。。」

「目標船！！速力上げ！！逃げます！！！」
こんごうの艦橋では粉川が呆然としていた
こんな事が起こってしまうなんて考えられなかった。。。。そういう表情だが
目の前には被弾，炎上した巡視船の姿が。。。現実が見えるだけだ

「追尾！！」
間宮は短い指示を，船務士の和田に飛ばし
受話器のラインを切り替えた
「ＣＩＣ！！聞こえてるか！！」
「ＣＩＣ！聞こえてます！！」
外の景色を肉眼で見る事のない暗闇の艦橋であるＣＩＣだが「何が」
今起こっているかわどこよりも正確に把握していた

「目標を捕捉しているな？」
「目標捕捉してます！！」

ＣＩＣ内部，青白いクリアマップと黄色の作業マップの間
数人の男達が急転した事態にありながらも冷静さを保ち各々のコン

ソールを睨んでいる
航海士，安藤の声が返る
「絶対に逃がしません！！」

力強い返事に受話器のラインをさらに変え間宮は護衛艦達に指示を出した

「今より，こんごう，むらさめにて追尾を開始！しまかぜは，りゅうきゅうの救助，補助を海域警戒をいかづち！さわぎりは後攻！！」
リンク１１のマーカーが光る
「こちらＣＩＣ！！佐世保から，くらま！あまぎり！出動！」
上部艦橋の通信士も同じ情報を確認，間宮に目で伝える

「ハープーン準備」

揺るぎない怒りを内側に秘めた間宮の声が指示を出した
「ハープーン準備」
各オペレーターの返事が返る

「待ってください！！」
横を過ぎていった痛々しい，りゅうきゅうの姿にこの時まで呆けていた粉川は我に返って間宮のイスに寄ると

「ミサイル攻撃はダメです！」
にじり寄る粉川の襟首を和田は掴むと怒鳴った

「相手は発砲している！！りゅうきゅうを見ただろ！！黙ってろ！！」
それは怒りだ

明らかな
冷静さを欠いている
青筋を浮かべた和田は「鬼」と呼ばれるあだ名のように目を光らせているが，粉川は怯まなかった
掴まれた手を切り返し

「ミサイル攻撃は内閣府と防衛庁の許可がいります！無許可では撃てません！！」
和田を見ず
間宮に伝えた
怒りを「心」に秘めたまま「冷静」にそれを指示した張本人に

「ハープーン準備。。。目標捉えているな」
「ＣＩＣ，ハープーン準備良し，目標を完全に捕捉中」
間宮の目が粉川を睨む
お互いの役職か？お互いが強い意志を持っている

「通信士！防衛庁に攻撃の許可を」
「艦長！」
和田は驚き二人の間に割って入ったが
粉川はそれを制止した

「発射は許可されます！！手順を省かず冷静にいきましょう！！」
「後何海里だと思ってるんだ！！」
大きな和田の体が。。。腕が雨に曇る海を指さし怒鳴る
焦りは通信士達に伝わっていた
後，１０分もない内に不審船は領海を出てしまうのではないかという勢いだ

「海の境界までに答えが出るのか？」

和田は責めるように粉川を睨んだ
「それが出来なければ防衛の意味を失います」

艦橋から向こう
海をウサギのように跳ねて逃げる不審船の速度は３０ノットに近づく勢いになっていた

不審船，
巡視船りゅうきゅうへの発砲との報告から緊急要請に従い前に出た巡視船おおすみと，その艦魂（おおすみ）は目の前にある惨状に言葉を無くしていた
今まで幾度となくこの海を守り戦ってきた
だから。。。。多少の怪我は覚悟していたが

「こんな。。。。。」

首をふり目の前の現実を振り払おうとするが
船橋まわりからの火災の熱を感じれば。。。それだけが現実である事を否応なく気がつかされる
船艇の上では海自の隊員たちが消火活動を続け
怪我をした船員たちが運ばれていく

「（はやと）！！！（りゅうきゅう）！！」
どんな場面でも明るさを失わないように振る舞ってきた（おおすみ）だったが今は無理
目に涙を浮かべ仲間の名前を呼んだ

「（おおすみ）。。。」
小さな声
（おおすみ）は聞き逃さなかった。自分の後ろに小さく体を抱え込んだまま泣いている（はやと）を見つけた

「（はやと）！！！大丈夫なの！！」
手を掴む
左腕。。。青色の制服が裂け肌を赤く切らした姿でうずくまった（はやと）は（おおすみ）にしがみついて泣いた

「高槻さんが。。。。高槻さんが。。。。」

強気な顔はどこにもない
ただ怯え泣いてへたり込む（はやと）の後ろには真っ赤な「血」がまだ生暖かい感触を残す後がある
（おおすみ）はもう何も言えなかった。。。考える事さえ恐ろしく励まそうにも自分の手さえ震えているのに
（はやと）を抱きしめた
お互いを離さないように，この恐ろしい海域から離されてしまわぬようにと

その頃，りゅうきゅうの船橋は壊滅状態の中にあった
機銃掃射の被害は凄まじく
左側面の窓ガラスは元より，反対側も，正面もガラスの一枚もまともな形では残っていなかった
これでも強化ガラスを全面に入れた新品だったが。。。。５メート

ルもない至近距離での対空機銃の前では何の役にも立たなかった

それどころか船橋の壁には拳大の穴がそこら中に開いており
機銃から放たれた弾が「通常」の物ではなかった事をよく物語っていた
船内のあらゆる器機が火花の下で灰色にかわり
焼けただれた匂いがそこら中に漂う

浜田は右肩に走るニブイ痛みで自分が負傷した事を感じたところで声をあげた
うつ伏せに倒れていた体を回し
チカチカと残光となった照明を見ながら周りを確認した

「おい!!!誰でもいい返事しろ!!」

上向きに上げた顔に雨がかかる。。。。船橋部屋根にまで貫通跡が見える

「おい!!返事しろ!!!」
恐ろしい事だ
ココに詰めていた少なくとも8人の男達の誰からの返事もない
まさか
あの貫通力を持つ弾に撃たれているなら。。。「死」を免れるのも難しい
最悪の事態。。。。。
浜田は首を振った

「誰か。。」

「岩田!!ココにおります!!」

声は残された船内照明の輝きの下から聞こえ
浜田はやっと聞こえた船員の声に気力を取り戻した
「岩田!!無事か!!」
「無事です!!自分のとなりに下谷さんと，沖津さん。。。少し離れてますが小谷さんが見えます!」
自分の周りの暗い浜田は手探りで這いだした
「怪我は?」
「自分は大丈夫です。。。。周りは。。。わかりませんが?船長は?」
浜田は上がった息を整えながら答えた

「ワシはたいした事ない。。。。他の者を探してくれ」
浜田の位置からでは岩田の体を見る事ができなかった
岩手は了解すると少しずつ動き出した
彼もどこか負傷している音だった

少し前までは無駄のない整然とした内装の船橋は瓦礫の山になっている
手を何度も動かす
どうにも右の指先が痺れてうまく動かない中の事(りゅうきゅう)を思いだした

発砲の直前
自分背中を押した彼女はどうなった?

「（りゅうきゅう）?」

浜田の顔は土気色に変わった
血を流しすぎたとかそういう事ではない。。。。自分の足もとの方

に顔を向ける
左手で床を探り，暗闇に目を細め手見た時。。。
人の形が転がっている事に気がついた

「誰だ？」
震える声
目を細める。。。。長い髪が。。。床に広がっている

「（りゅうきゅう）！！」

浜田の指先が床に乱れた髪に触れた時，戦慄が走った
ヌルリと手に絡む感触
髪の毛は血を十分に含んだ嫌な重さを感じさせた

恐れ
だが何もしない訳にいかない
浜田は胸ポケットからライターを取り出した

そこには見るも耐え難い光景があった
帽子を吹き飛ばされた事で髪が顔にかぶり表情はみえなかったが。。。。

頭部左側から水分量の少ない塊のような血
右肩から胸の部分にかけては制服が引き裂かれているのに。。。。
肌の色などどこにも見えない
血と弾かれ裂けた肉の跡。。。赤く黒い焼かれた肌

「。。。（りゅうきゅう）。。。。」

細い肩をかまわず抱くが返事はない
むしろ

力がまるでない
体は弛緩していて各部分は下に引かれるようにフラフラと彷徨う

「嗚呼。。。嘘だ。。。なんて事。。。何故。。。」

浜田は隠された顔事に自分顔を擦りつけた
滲む血が頬につたう
「返事してくれ。。。（りゅうきゅう）。。。頼む。。。頼むよ」

愛した女房は自分の手の中で動かぬ姿になっている
何度も血にまみれてしまった頬に顔をつける
「頼むよ。。。目を開けておくれ。。。」
（りゅうきゅう）の真っ赤な唇が少しだけ動いた
「。。。（しま。。。かぜ。。。）。。。お願い」
その細い。。息まで焼ききれてしまったかのような掠れた声を浜田は聞き取った
「（りゅうきゅう）！！（りゅうきゅう）！！！」

浜田には見えなかったが（りゅうきゅう）の目の前には救助で船体を接舷させた護衛艦しまかぜの艦魂（しまかぜ）が立っていた

「。。。。（りゅうきゅう）。。。。」

（しまかぜ）にもかけるべき言葉が見あたらない
朝。。。あった時に楽しく話しをしていた彼女の姿はココにはない
体の半分をボロ切れのようにしてしまった姿は正視に耐えられない
それでも
声の聞こえるところまで顔を近づけた
彼女の唇が微かに動いたのを見たから

「ココにいるわ!!すぐに助けるから!!大丈夫よ船体が沈まない限り。。。死んだりしない!!」
沈まなければ死なない。。。。
だけれど。。。痛みがないわけではない。。。。。
浜田の腕の中は答えた
「船長を。。。。助けて。。。。。お願い。。。。（しまかぜ）」
息は。。。細すぎて止まってしまいそうな声

「しま?かぜ?」
（りゅうきゅう）が何かに話しかけている事に気がついた浜田は見えない姿を追い視線を動かした

「（しまかぜ）?。。。護衛艦の艦魂?いるのか?」
浜田は泣いていた
「頼む!!（りゅうきゅう）を助けてくれ!!」
（しまかぜ）は（りゅうきゅう）の姿を浜田が見えていた事に少しの驚きを見せたが
浜田には（しまかぜ）は見えないもの。。。代わりに（りゅうきゅう）が答える

「大丈夫。。。。（しまかぜ）が。。。ココにいるから。。。。大丈夫」

そういうと左手で弱く浜田の指を握った
「大丈夫。。。」
（しまかぜ）は頷いた
「心配しないで。。。船長も貴女も助けるから」と

「貴様を絶対に許さない！！」

飛ぶウサギのごとく波間をはね回る「不審船」に（こんごう）は濡れた前髪を払って叫んだ
右手には「銀色に輝く弓」を持ち
後は「矢」を現すだけの状態だ

青い目の中レーダーの赤いラインが煌々と輝き狙いは少しもはずされていない
ぶれる事なく「攻撃」の声を待っている
だが
悪天候の波は無謀なスピードで逃げる不審船に有利に働き始めていたのだ

「不審船」と（こんごう）の距離は少しずつだが離され始めていた

「ミサイル攻撃は許可できない」

ＣＩＣと通信士に入った防衛庁の返事に艦橋は呆然としていた
間宮は受話器をとると直接，統合情報部に打診した

「後，少しで領海から逃げられます！！！ミサイル攻撃の許可を！！」

だが

無機質なスピーカから返る返事は変わることはなかった
「ミサイル攻撃は許可できない」
「局長!!」
「繰り返す，ミサイル攻撃は許可できない」

粉川でさえ驚く返事だった
「何で?」
粉川は艦橋から外を見た
荒れて大きくかぶさるように揺れる波間。。。。不審船の姿はみる
みる小さく，不明瞭になっている

和田は乗り出した
「撃ちましょう!!あれは「敵」です!!」
和田の大きな声と顔を押し返し間宮は情報部と向かい合っていた

「このまま。。。逃がせという事ですか?」

スピーカの音はとまり思考した
「撃ちましょう!!!」
粉川の肩越しに領海の境を今にも越えてしまおうと逃げる不審船を
指さし談判を繰り返した

「海保は死人が出ているかもしれないんですよ!!」
それは艦橋にいる全ての人間が理解していた
あれだけの損傷を受けた巡視船だ。。。。死人が出ていないのなら
奇跡としか言えない

間宮の額には汗が浮かんでいる
冷静に言葉を選ぶ。。。

「逃がせ?それが命令ですか?」

「繰り返すミサイル攻撃は許可できない。主砲による艦砲射撃にて目標を停止させよ。」

防衛庁の答えは
耳を疑う指令だった
この荒れた海の中いくらオートにて発砲の高性能単艦砲とはいえ当てることはもとより，相手を停止させる事など出来るわけがない

目標である不審船は波間を飛ぶように走っている
こんごうのいる場所もまた同じ波の間なのだ

不審船が境界を突破するのに後3分。。。。。。リミットギリギリの位置で
沈痛な面持ちを下げた男たちの艦橋は「決断」を迫られていた

一方
波をまともにかぶる船首で（こんごう）は今や遅しと弓を握りしめていた
標的の前にいくら雨風波が舞おうとそれを突き抜ける「千里の目」が赤く燃え上がる

第十話　千里の目（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～Ｖｏ１０

ぬ～～ん

結構長く続いてしまった「不審船編」（いつのまにやら「編」なんて（藁））

ホントは一章

４話転結という方法でいきたかったのですが

文字数と情報量の摺り合わせがうまくいかなくて。。。。。

ダダダダッテ機械に弱いんだもんヒボシわぁ！！

自衛隊の機械の名前難しいよぉぉ～

ホント自衛隊の船ってイーパーイいますよ

現存護衛艦数５１隻。。。。（ぐらい（注．ヒボシ調べ））ｗｗｗ

全部出ませんけどね

下手すると（こんごう）の妹の内２人ぐらいは全編通して出番ないかもしれません（爆死）

でもね５１隻もいても

日本をミサイルから防衛するには足りない

戦力も火力も。。。。。

調べれば調べるほど

一国平和主義で茶の間のニュースキャスターに影響されて「兵器のない国に」なんて言ってるのが

いかに恐ろしい事かと気がつかされます

世界は日本だけで出来てませんから

世界は多様な民族が相容れない状態のまま生きているのだから。。。
。
一方的に日本が嫌いな国だって存在していて
その武力で襲われたらどうするんでしょう。。。。。
「平和大好き」って。。。叫んだって撃たれたらおしまいですよ
だから
「守る戦い」を続けている護衛艦達の姿をよく見て欲しいのですよ
～～～
これを機会にでも
といいつつ
ヒボシもこの小説を書くために色々調べて知りましたが（藁）
さて（話変わって）
１０話になってやっとで紹介！！！（こんごう）です！！
対空誘導弾搭載護衛艦，イージス艦こんごう　「艦魂」こんごう
この物語の主人公にして
国の楯。。。最新鋭のイージスシステム搭載
あのほっぺに八角のレーダー搭載艦の彼女（藁）
（こんごう）を長女に四人姉妹で
妹に（きりしま）（みょうこう）（ちょうかい）がいる
普段は無口で無愛想なため「怖い人」に見えるが。。。
本当はとても繊細で泣き虫
襲名で頂いた「こんごう」という誉れ高き名前の重圧で心をすり減
らしてしまっている
これには色々と理由があるのだけどそれは後日（藁）

上記のごとく名前の重さに常に苦悩している
本来
繊細な部分が多く
人付き合いが苦手というか。。。付き合い方が下手（「人」も「艦魂」も含む）だが本心では，いつも仲良くしたいと思っているのだが。。。。。
口べたなため，つい「反対」の言葉を発してしまったりで。。。。（ツンデレ？）（いやいやデレの部分ないし（藁））それが有らぬ「争い」を呼び込んでしまったりする時もある

身長１６８センチ
栗色赤毛の碧眼
モデルのような四肢と白い肌。。。
クリアスカイの瞳を持つところからも「日本人」という純血度は低いが
大日本帝国海軍の末裔であると自分の事を信じている
そのためか？目が青い事を指摘されるとキレる
（ちなみに（こんごう）四姉妹はみんな目が青い。。。レーダーの関係上そういう事で）

「守るための戦い」という生き方がどういうものなのか？
専守防衛という言葉に縛られながらも「愛する国」を守るために先進の武装した彼女にとって。。。「戦いとは」
高次元で難しい「理屈」にいつも悩み。いきすぎなぐらいの責任感で作戦中にテンパったりする
思春期で反抗的でもある（藁）
酒好き（艦魂に未成年という枠はない）（ビールオンリー）でタバコは吸わない
酔うとこっそり泣く（藁）こまったちゃん

キライなものは「粉川」
今までいなかったタイプ。。。。といか「艦魂」の世界に初めて飛び込んできた彼の事をどう理解していいか困っているが「粉川」の存在により（こんごう）が生き方の転機を迎える事になったのも事実
後。。。。「幽霊」がキライ（爆笑）
自分の存在だって何かいまいちわかってないくせに。。。「お化け」「幽霊」に強烈な拒絶反応を示し
泣いて気を失う。。。。こまったちゃん。。。。
（しらね）とは何やら因縁があるようだけどそれはこれから後に書きます（藁）
（しまかぜ）を姉と慕い（しまかぜ）の言うことは比較的聞く（藁）

ふ～～やっと紹介が書けましたよ～～～
（こんごう）もそうなのですが色々と伏線設定が多いので「コレ」と割り切ったものがすぐにはかけなくて。。。
お待たせしちゃいましたぁ～～
後メッセで3サイズ書いてくださいってのありましたけど。。。。
自分の彼女に照らし合わせて考えてください（藁）
だいたい標準的なボディですよきっと（藁）
ただ現代艦魂なので服装が派手だったりとかする程度ですよ～～

次回はみんなのおね～さん（しまかぜ）さんを紹介しちゃうぞ！！
粉川くんのプロフィールとかはいらないよね（爆）ただのヤロウですし

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第十一話　目の前（前書き）

ウラバナダイヤルはヒボシの独り言～～～

第十一話　目の前

（こんごう）の目は雨に晒されても風を受けても閉じるどころか瞬きの一つもしないまま
目標である「不審船」を睨み続けていた。

同時に「海の境界」が近づいて来ている事に焦りと苛立ちを現して初めてもいた
どんなに波の壁がそそり立ち不審船との間を割っても
（こんごう）の目の前では見えなくなる事などない
天の目もつ彼女から逃れる術など無い
後は敵を打ちのめす「矢」を手にするだけ。。。。。

それだけの接戦の位置にいるのに，事は一向に進んでいなかった
「攻撃」の声はいつまで待ってもかけられない

叩きつける雨に燻る思いと
頭をかける情報に頭痛を覚え手で額をさすった
情報は逐一自分の中に入ってきている
そもそもイージス艦である彼女は汎用護衛艦に比べると格段に高い情報集積能力を持っている
だからわかる

この敢然たる攻撃の位置にいる自分を動かさない
艦橋を。。。。「人」の方が攻撃を躊躇している事が

「撃ちましょう！！このまま逃がす事になる方が危険を助長する事になりかねません」

船務士の和田は揺れる艦橋内で，間宮のイスにかじりつくと大きな声で進言した

「この距離で。。。。この揺れの中で主砲を当てて「足を止める事は不可能」です！！防衛庁もその事はわかっているハズです！！」

暗雨の空を睨みながら間宮艦長は沈黙を守っていた

主砲で止められない事は百も承知だった

だからこそ考えていた

ミサイルでの攻撃を許可しない。。。。

しかし

今や不審船は「銃器保持」の疑いどころか銃器による攻撃まで確定した「危険な船」

なのに攻撃を許さない理由は？

緞帳のニブイ空の下とは対照的に間宮の明晰な頭脳はフル回転で考えていた

アレは。。。。「国籍の確認が捕れない事」本当に中国の船なのか？

それとも「あの国」の工作船なのか？

どちらだったとしても「攻撃」を許可しない理由はなんだ？

「撃ちましょう！！ハープーンを」

額に手を当て考えをまとめようとする

間宮の真横に顔を寄せた和田は，時計と海里モニターを指さした

「この距離での艦砲射撃は確実とは言えません。。。後1分でこの事件を処理できるのはミサイル攻撃だけです！！」

後1分

正確な数値でないにしろ
それだけしか攻撃のチャンスはない
主砲を撃つ？
波の壁を突っ切り真っ直ぐに掃射したとしても。。。。
おそらく艦砲射撃は当たらない。。。。。
では。。。

1分で不審船は「何処にいる？」

和田の顔を睨む
間宮は汗こそかいてはいるが顔は冷静だった
モニターと外を交互に見ながら言った

「間に合わないな」

冷静な判断を

実際。。。間に合わない
ミサイルを撃ったとして1分で当たる？領海を越えたところで船を沈めてしまえば「問題」となる
おそらく防衛庁の情報部もそれを見越している
それも10分前から。。。

「海の境界」はこの天候の中であまりに曖昧過ぎる

あの大きなモニターの前で情報部の隊員達は「色々な」計算したに違いない
ハープーンを撃ったとして曖昧になった海の境界でどうなるかを
隣の国「判断」も含めて
いくら高性能の兵器で確実に敵を屠る事が出来たとしても
相手の位置が悪すぎる
この大雨。。。。。「領海内」だっと言い切れるか？
機械的証拠があると言っても。。。。あの国が「そうですか」と言うか？

相手の足もとを見てペコペコしたくない
いつまでも「あの国」に頭を下げて仕事はできない

「藪を突くな」。。。。。。今は。。。。。か？

あるいはココで手を引かなくてはならない状況があるの「かも」しれない。。。
任務として「追い出し」までを成功と，とるかは苦渋の判断だったが
間宮はもう一度モニターを見て。。。首を振った

「間に合わなかったな。。。。」と
そのままイスから立ち上がると和田を制して続けた

「護衛艦隊はこれより警戒警備に移る。。。。。ただし「不審船」の航路は捉えたままにしておけ」

「艦長。。。。」

和田の顔には悔しさが滲むどころか全面にあらわれていた
同じように船内に詰めた幹部たちにも苦い思いが伝わる

「和田船務士。。。。頼む」

怒りに震える彼の肩を叩いた
和田は顔をあげ間宮に「怒り」を訴えていたが。。。。何も言わなかった
間宮の顔にも苦悩があった事に自分の感情を押し殺した
間宮は無能な艦長ではない
その事を良く認めたうえで。。。命令に従った

「攻撃用意は中止。。。これより護衛艦隊は警戒警備行動に入る」

艦長の命令を復唱した

粉川は艦橋の窓から最早，姿を確認する事のできなくなった「不審船」を
それでも見つめていた
荒れる海の壁の向こう。。。。。逃げた「狂気」。。。。。

同時に船の先端を見た
（こんごう）はまだそこに立ちつくしていた

粉川は警戒警備に入ったとたん，和田に艦橋から閉め出されていた
そんな事をされなくても飛び出ていたかもしれないと思いながら
艦内の赤いランプの下を歩いていた

あの交信に逆らってやれば良かったと拳を壁にぶつけた
後味の悪い防衛庁の判断に，船務士の和田と同じぐらい腹が立っていた

「なにがための防衛。。。駆け引きで防衛だなんて?」
溜息
粉川は順次を踏み正しい報告の元に，ミサイル攻撃は許可されると思っていたから
余計に落胆していた

「粉川!!!!」

そんな落ち込み加減の粉川にヒステリックな女の声が
艦橋を降りた通路の先で二人の女が揉み合いになっているのが見えた
一人が暴れる一人を抑えようとしている様子で必死になっている

「（むらさめ）ちゃん?。。。何して」

そこにいたのは（むらさめ）と（こんごう）だった
「いいから!!手伝ってくれ!!」
（むらさめ）に抑えられ廊下の壁に体をぶつけたまま，大声でわめき散らしている（こんごう）
尋常でない暴れ方にすでに一発くらったのか（むらさめ）の頬は赤く腫れて口から血が出ている

「どうしちゃったの?!」

「攻撃停止命令に狂っちまったんだよ!!」

粉川は首をひねったが
（むらさめ）の力では（こんごう）は抑えられない様子に手を貸した

「（こんごう）ちゃん!!落ち着きなって!!」
粉川が（こんごう）の体を押さえたのを確認して（むらさめ）は手
を離し

「頼んだぜ!しばらく抑えてくれ!!私はこれから警戒警備で別の
方向行かなきゃなんねーからよ!!」

上から抑えているのに恐ろしいほどの抵抗に顔を歪めた粉川は聞き
返した
「どうなってんの？」
「とにかく頼む!!」
（むらさめ）は質問には答えず急速旋回して行く自分の船に飛んで
いった
消える（むらさめ）を追うこともできない，男である粉川が驚くほ
どの力が抑えている腕わはね除けようとする（こんごう）
「ちょっと!!ちょっと!!落ち着きなよ!!」
「オマエ。。。。。」
自分にのしかかっている粉川
両腕を掴んだままの顔に（こんごう）はわめいた

「オマエはいったい何をしているんだ!!!目の前に敵がいるんだ
ぞ!!」

怒鳴り散らす（こんごう）に，粉川は見開かれた目に驚いた
青い目の中に真っ赤な光りライン

八角の目の玉の中で危険な輝きを大きくしている赤い光

見たことない目
人とは違うものに
驚きで怯んだ粉川を（こんごう）が押し返し馬乗りになったまま首
を絞めた

「オマエ！！！オマエ！！！邪魔をしにきたのか！！」
危うく全部を締められそうだった首を片手で守りながら粉川は答えた

「もう領海にいないんだよ！！もう僕たちの前にはいない！！」
「嘘だ！！！」

呼吸もガタガタにくずれ
肩を大きく震わし息も整わない（こんごう）の目には大粒の涙があ
った
今まで雨をかぶっていて気がつかなかったが（こんごう）は泣いて
いる

「まだ。。。。目の前にいる。。。。私には見える。。。。」

粉川は気がついた
それは
（こんごう）の見えすぎる目
通常なら見えない。。。いや見ない
領海の向こうに消える船など。。。。そこでおしまいの追跡劇のハ
ズなのに
彼女の目がそれを許していない事
レーダーが領海の向こうとはいえ未だ逃走し続ける不審船を逃して
いないことに

降る涙と一緒に
繰り返し（こんごう）は言う

「まだ。。。目の前にいるんだ。。。。私の前にいるんだ。。。」

首を押さえていた力が緩む
溢れた涙がいっぱいになり，粉川の顔に遠慮なく降り注いだ
苦痛と悔しさに顔はゆがみ
涙は止まらない

「（こんごう）ちゃん。。。。もう追えないんだ。。。。」

少しずつ抜けていく（こんごう）の力
首にかかった手をどけて体を起こした粉川の前で（こんごう）は泣き続けた
雨と風に濡れ続けた体を震わせながら

「見えてるんだ。。。。見えて。。。」

粉川は静かに（こんごう）の肩を抱きしめた
冷たくひえてしまった体は，涙でできているとも思えた
雄々しく船の先に立っていた彼女だが
触れた体は本当に細い普通の女の子の肩。。。。
その肩にのしかかった「国防」という勤めの重さに，震える彼女に
何もしてあげられない事，励ます言葉を見つけられない自分にただ
腹が立った

その頃
鹿児島港に帰港した巡視船りゅうきゅうの周りには船員の家族やマスコミ。。。ニュースを聞いた地元の人たちで人だかりになっていた

「不審船がいる」

海上波高しで一般船が出港する事に注意を促し続ける事は難しい

不幸な事だった

巡視船りゅうきゅうが不審船に接舷するギリギリに報道公開された情報で全ての日本人が事件を知る事になっていた

港に入るりゅうきゅうの姿に集まった人達はみな顔をしかめたり声をあげて驚いたりしている
弾痕を無数に残した船体は見る者に恐怖を与えていた
平面的で白く塗られていた船橋部のガラスは一枚も残っていないうえに
ぶち抜かれた穴により面板は波打ち，止めビスをはじき出した状態になっている
「戦争」
テレビの向こうにある戦時中の船のように

それは耳で入る情報以上に「凶悪な船」が海にいる事を良く示していた

牽引と混乱を避けるための離された港に係留するために，無数のボートが近づき始めたところで
護衛してきた（しまかぜ）は船を止めた
りゅうきゅうは船橋を破壊されたため自身のカジが効かないが，動力は下で何とか出来たので護衛艦しまかぜに牽引される形で港に入ったからだ

その間は（しまかぜ）（りゅうきゅう）の体に治癒を施し続けていた
船の中にある彼女の部屋で
（りゅうきゅう）の性格を良く現した部屋はシンプルながらもキレイな花が飾られていた

写真立てに収まる「彼女と船長」から目を下ろし

痛みに伴って発する熱の中にいる（りゅうきゅう）を見た
具体的な治療方法があるわけではない
船体を「人」の手によって直す事しか。。。ただ痛みを和らげる事は艦魂の力で出来る

そんな中にありながらも頭にはリンク１６による情報が流れ続けていた

「。。。。。逃げられた。。。。」
口惜しくこぼれる言葉
攻撃用意停止。。。。
護衛艦隊が不審船に追いつかず。。。。その上相手を停船させるための攻撃もしなかった事に溜息がでた

「最悪の結果ね。。。。」

（しまかぜ）の前に寝かされた（りゅうきゅう）。。。
体の右側に火傷と，肉を弾けさせた銃弾の跡。。。
血と火傷で赤黒くなった肌を全てキレイに拭き取り艦内のベット用
の大きなシーツでその体を包んだ
傷の大きな所にはガーゼをつけ
体から熱が奪われないように処置した
美しい顔にも怪我をしていた事に（しまかぜ）は耐え難い悲しみの
中にいた

不幸中の幸いと言えば

巡視船はやとで，銃撃に巻き込まれた人と
（りゅうきゅう）の船橋乗組員が全員無事だったこと
大なり小なりの怪我はしていたが命に関わるようなものはなかった

それは（りゅうきゅう）の起こした奇跡だった

（しまかぜ）には，わかっていた
対空機銃が見えた時。。。。（りゅうきゅう）の必死の願いが船を
少しだけ左にそらした。。。。それが船長達を助けたことを
愛する船長の命を助けるために自分を楯にした事。。。。
（しまかぜ）は危篤の状態に入っている（りゅうきゅう）の頬を優
しく撫でた

「あなたが楯になるなんて。。。。私たちこそ「国の楯」なのに。。
。。」

近づく港の灯を見て（しまかぜ）の頬に涙がつたった
あまりに無力な護衛艦隊。。。。。
いや
有るべき力を行使できない自分たちの存在を呪わしく思った

外海とは違い，緩やかな雨の中にある港の景色が涙で滲んで見えていた

第十一話　目の前（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～Ｖｏ１１

なんだかんだと長くつづいているこのコーナー。。。。（てか小説）
本来なら今回は（しまかぜ）さんの紹介をしたかったのですが
（しまかぜ）さん。。。。まだ色々と伏線設定があるためコレ！！
って書けないのが現状なんですよ
事実（くらま）さんなんてまだ一行しか登場（それも佐世保から出動したって
言われただけ）してないのに設定が先行してしまったりで読む楽し
み抉ってる気がしてねぇ。。。

もちろん
登場と同時に随時追加していきたいし
いずれは一章丸々つかって「登場人物評」みたいなものもだしたい
とおもいます
これからは海外の艦魂もチョコチョコ出てきますからね

ところで
連載を始めてからメッセージを色々と頂くようになりました
なかに
「元海上自衛隊」という方もいて嬉しくなりました
「自衛隊をあつかった物は，なかなか見ませから応援しております」
と
大変立派な方なのでしょう「守秘義務」を守りつつ応援させて頂き
ますとメッセ頂きました
是非そうしてください～～～（藁）守秘義務は守りつつアドバイス
ください！！

心温まるメッセージもあれば
期待の大きさから非難的なものもあります
「戦記を語る以上はもっと戦闘シーンを」
「イージス艦で○○を攻撃してください」など

ジャンル戦記で登録している以上「戦闘シーン」は絶対という縛りがあるのかもしれません
ですが
「力」で戦うのが「戦記」だという縛りはないと思います

大東亜戦争の事はそれなりに研究してはいますが
そこに至るまでの「日本，世界に出てゆく」という経緯から
幕末から向こう「日露戦争」を特に調べていくと解ることがたくさんあります
いかに頭の良い人たちが苦労しながら戦争への道を進み準備をしてきた事や
至る道程により「戦争以前」からどれほどの犠牲を払ったか。。。。

頭で戦った人たちの「戦記」というものが必ずあります
ヒボシはどちらかと言えばそういう方向でこの作品を書いて行こうと思っております
うまくそれをココで表現できればいいなぁと思いながら（藁）

「艦魂」という存在を入れたのはそういう硬く成りがちな「頭の戦記」に柔らかさを入れる為でした
もちろん
私はココで艦魂を書く先生たちの作品にものすごく感銘を受けたのも事実です
船に心とも言える「彼女」達がいたなら

戦争という道を歩くその想いはいったいどういうものだったのだろうか。。。と

後。。。。メッセで悲しいかな。。多いのわ。。。
「女性作家に現実戦争のなんたるかがわかってたまるか」
「女の人は海軍を書くには向かないですよ」

え～～～まいったぁぁぁぁって感じ（藁）
作家紹介のところ性別隠しておいた方が良かったかな？
どうも「現実的戦争」というものを書くのは「男」と相場が決まっている，という風潮があるようで。。。。（それも基本大東亜戦争物などが）
それはなんとも言いようのない事なのですが「女」ですいませんってあやまった方がいいのでしょうか？（爆）

ですが
ヒボシの近くには「戦争」というものがあります

我が家の血筋には未だ「徴兵」を受け戦場に向かう家族がいます
そのたびに
家族は泣き恐れます
私自身は日本に暮らしているので深くそれに関わる事はないのですが。。。。
歳の頃合いから
上の従兄弟達は「イラク戦争（第二次湾岸戦争）」に従軍
海兵でないため長く上陸参戦のため海に居続けて病気になったりで大変だったようです
この「アメリカの陰謀的戦争」を皮切りに多くの従兄弟や友達が戦争に徒事しました

後の戦争にも「彼らなりの」責任を感じて従軍しています

これが
ヒボシが今まで「大東亜戦争」ならび明治からの日本の戦争に目を
つむり続けた理由でもあります
実際

怖いのです
恐怖がつきまとっているのです

ヒボシの母の父
おじいちゃんは「大東亜戦争」の時「アメリカ合衆国第八軍，マッカーサー元帥旗下」の技術伍長でした
占領した日本にいち早く渡り「厚木基地」に情報司令部を作った人たちの一人です
おじいちゃんの従兄弟は「第六軍」で名古屋から神戸までを占領下に置いた「情報将校」でした
従兄弟の計らいでジープを駆り占領した日本を走り回ったみたいです
その時の写真がたくさん残っています
そんな中で見習い美容師として占領された基地にやってきたおばあちゃんと出会い結婚しました
（ただしこの頃アメリカ軍の命令で米兵と日本人の結婚は許されていませんでした。。これが後に悲しい別れにつながってしまう）
そういう事もありアメリカにも従兄弟たちがいます

戦争は。。。。私の家にものすごく近く
ものすごく痛い記憶です
だから
「力」の戦記を書くことにはものすごくためらいがありますが
「戦争」をまったくしらないわけではありません

勉強もしてますからそれなりに知ってます

逆に

私の想いは「艦魂」という女の目線に近いと思います

だからどうした（爆）

と

言われてしまえばそれまでですが

とにかく色々～～～

色々～～～頑張ってます！！頑張ります！！！

優しい目で見てやってくださいょ～～～

って事です（メイクジャ）

後一つ

「基本的知識が欠如している」

コレについては平謝りです。。。。

今，一生懸命いろんな雑誌読んだりして情報集めてます！！！

家の中に「海上自衛隊，スーパービジュアルガイド」とか「Ｊｓｈｉｐｓ」とか転がってます（藁）

ホントこの小説かくまで自衛隊の事なんて何もしらなかった。。。

とにかく「艦魂」という存在から入ってしまったため軍艦の事なんて。。。

「大和」や「武蔵」は知っていても。。。。何を知っているかは謎なぐらいに（爆死）

幸いにしてかつて防衛庁に勤めていたという年配の友達がいて

ちょこちょこ聞いて回っているのですかがコレがあれです上記の「元海上自衛隊」の方と同じで「守秘義務」を立派に守る人なのでなかなか。。。教えてくれません（藁）

執筆の横から「変な顔」で信号送って「それはない」みたいな合図が最大限のアドバイス（藁）
難しいね～～～～（照）

近いうちに一度，海上自衛隊の基地に行ってみようかと計画中です
（こんごう）に会ってみたいな～～～
（いかづち）にあいたいなぁ。。。
（しらね）さんの病院見舞いしたいなぁ（爆）
なんか小説で出した事もあって思い入れがありますよねぇ。。。
でも
海は遠いのでとりあえず近場にある「陸上自衛隊」の駐屯地に行ってみようと思ってます
あの缶詰のご飯とか販売しているのでしょうか？
是非に頂いてみたいものです

で
来年ある「観艦式」に行ってみたいなどとも思ってます
誰か誘ってください！！あれって抽選らしいんでヒボシも頑張るけど。。。
くじ運ないから当たらなそう～～～（涙）
当たったら誰か一緒に行きましょう～～～
来年の観艦式一番人気はきっと（ひゅうが）です！！！あの空母みたいなの！！
ヒボシは（こんごう）に乗ってみたいですが。。。。ふ～～～

そんなこんな
なんとか頑張っている「艦魂物語」です
これからもよろしくお願いします～～～

。。。。（しらね）さん。。。。
また今度一緒ですよぉぉぉ〜〜〜
遠くに叫びながらダッシュダッシュゥゥゥ（藁）

第十二話　涙のわけ（前書き）

「不審船編」終了。。。。。
どうして守りたいと願う者が守れず。。。
守らなくてはいけない者達が傷つく。。。

第十二話　涙のわけ

警戒海域の警備引き継ぎが行われたのは，不審船が海を去ってから
２時間後の事だった
入れ替わりで警備に入ったのは『あまぎり』と『ゆうぎり』『さわ
ぎり』の姉達だった
哨戒ヘリを上げた『くらま』はそのまま佐世保に戻り随時交代で海
自の艦艇は「警戒警備」の準備に入っていた

すでに夜は深い時間
海と空の境界を見ることが出来るのは艦艇のサーチライトの光のみ
になっていた
水面を走る光が今は穏やかになった波に揺れる

雨は意地悪くも静かな霧にかわり
なま暖かさの残った海を冷やしてはくれない様子の静寂の世界

護衛艦隊は鹿児島港に帰港する事になった

艦隊の面子は誰一人として口を聞く者はいなかった
何を語っていいか
目の前で起こってしまった事件
『りゅうきゅう』の安否

逃げて行った船

『むらさめ』と『いかづち』は各々の船の舳先に立ち船の責務に徒

事した
『こんごう』もまた
凪いで今更「嵐」を見つける事などできない海に光る目を向けていた
ただ泣きながら

粉川は『こんごう』を諫めた通路に一人たったまま
赤い照明の下で拳を壁に小さくぶつけていた

「間宮艦長には事情聴取と・・・・」

艦橋では鹿児島海上保安庁からの要請が入っていた
一つの嵐が過ぎた後・・・後味の悪い解決の中で男達はもとして仕
事に打ち込んでいるが
無線を聞くのも辛いのだろう
和田船務士も力無く事務的に海保からの連絡を告げる

事情聴取は
演習から向こう海保と行動をともにしていたのだから・・・当然の
流れだった
疑われるような行動はなくとも
まるで
犯罪を「見過ごした」という後ろめたさか?
艦橋内は沈痛な顔の隊員たちの姿

間宮は夜という事でそれらの顔が明確に見えない事が救いと思って
いた
連絡を続ける最後に
やっと気にしていた事を聞いた

「浜田船長はご無事ですか?」

無事という報告は入っていたが，やはり自分の耳で確認したかった
海保の無線からすぐに返事は返った

「無事です．．．．」

無事の向こうにある言葉が曇る理由は．．．見え隠れする「罵倒」か?
間宮は汗で冷えた自分の背筋を正し「了解」とだけ返事した
今はそれしかいいようがない
その上で防衛庁からの聴取に対する指示に
間宮はイスの下で握りしめていた拳で
自分の頭を小突いた

「あくまで、海上保安庁の先導の元に行動したとする」

護衛艦隊とまで名の付く者達が
海保の指示の元に動いたから「行動できなかった」という言い訳しろと、防衛庁の指示はあまりに屈辱的だった

だが気持ちを切り替え
感情を殺す。
それもまた「軍属」の成すべき仕事と自分に言い聞かすように口を閉ざし
キャプテンシートから立ち上がると窓の方に歩いた

深夜にも近い鹿児島港は事件を聞きつけたマスコミ等々により

嬉しくない輝きで満ちているのが見えていた
こまごまと人の走る姿
フラッシュの多くが傷ついた船体をさらした『りゅうきゅう』に光
の花を咲かせている

これからがもう一つの戦い。無責任なマスコミと無知を振りかざす
「人」と、現状では「無力」な自衛隊という本質との戦い

「タバコが欲しいな」

艦橋の窓に手をかざし
痛む心、沈めたさに間宮は和田に苦笑いしてみせた
和田もまた
間宮の肩にのしかかっている「苦労」に口惜しそうに返事した

「私も一服したいです」

男達の「戦いの夜」は終わった

海保の『はやと』達は港を上がった待合いの一角に集まっていた

『りゅうきゅう』の治療のため
海保の基地に残った数人の艦魂が船に向かっていた
船体を治す「人」の治療とは別
精神を持たせるための治療が必要だからだ

上も下も関係なく海保の女の子達は走り回っていた
その中『おおすみ』に肩を抱かれたまま頭を伏せた『はやと』はずっと泣いていた

まさか
自分の目の前で「高槻」が血を流すなど考えられない事態だった
スローモーションの出来事
肉を裂いた「凶弾」が彼の背中を貫き弾き出した血の点は『はやと』の顔を素通りして甲板にブチ撒かれていた

動力を切らした人形のようにゆっくりと倒れた彼の体に縋った
『おおすみ』が居てくれなかったら『はやと』は自分は狂ってしまっていたかもしれない。そうまで思った

「高槻さん・・・まだ意識もどらないらしいけどきっと大丈夫だよ・・・大丈夫・・・」
『はやと』の細い肩と
短く刈り込んだベリーショートの髪を『おおすみ』の手が優しく何度も撫でた

背丈こそひょろりと高いが、体全体の作りが細い『はやと』は一見すると「男の子」のような体つきだが
まぎれもなく「女」だった

自分の前で倒れた彼を守りたくて、彼の体に覆いかぶさった
お互い見ることも話すことも出来ない存在なのに、彼を失ったら生きてはいけないとまで思った
だから
ただ必死で体が前に出た

それが「奇跡」だったのかどうかはわからない
嵐の中の
豪雨の音を劈く乱射の中，高槻に当たったのは最初の一発だけですんだ
それも体に弾は残らず「貫通」していた

出血の多さから意識は無くなり
海自の船に収容されたが命に別状はないという見立てだった

「『はやと』が守ったんだもん・・・大丈夫だよ・・・」

肩を落としたままの彼女のとなり
まだ雨に濡れたままの『おおすみ』は体を寄せて心身を冷やしてしまった友達の心と体を暖め続けた

「海自の連中が戻ってきたよ！！！」

雨の中『りゅうきゅう』の帰港を手伝った巡視船艇の女の子（船魂）は本港新町に急遽帰港した護衛艦隊を指さした
本来ならしかるべき基地に入るところだが
合同演習中の重大事件でもあるため鹿児島海上保安庁舎に近い港に入ったところだった
マスコミをさけ一番遠い所に並んだ艦艇に多くの人たちが指を指している

「到着」の言葉にいち早く反応したのは『はやと』だった
今まで俯いたままでいた様子から電源が入ったかのように立ち上がるとそのまま港の沖に停船した艦隊めがけて飛んび『こんごう』の

甲板に集まった艦魂達の前に走っていった

「オマエら!!」

（はやと）は自分「怒り」を抑える事ができなかった
艦艇の前で話し込んでいた『こんごう』の背中を押し分け
勢い会議室でもぶつかった『むらさめ』の胸ぐらを掴み上げた

「オマエら!!あの船どうなったんだよ!!逃がしやがって!!!」

すでに領海から「不審船」が逃げてしまった事は聞き及び
報告の時から「苛立ち」は募っていた
『はやと』は目の前で無惨にも血にまみれて倒れた高槻の事を思って
あの瞬間、傍観を決めていた護衛艦達を許せなかった
その上で・・・・
取り逃がしたなど

今まで冷え切っていた体に怒りという電気が走り
真っ赤に燃え上がっていた

「オマエらのせいで!!オマエら・・・」

わめき散らした『はやと』の顎を口事『むらさめ』はぶっ飛ばした
瞬間何が起こったのかわからないほどの早さ
『むらさめ』より少しばかり背の高い『はやと』は風に煽られた木
の葉のように体を浮かべそのまま吹き飛んだ
問答などなく
無言の鬼の拳はフルスイングで的確に自分胸ぐらを掴んだ女を殴る
とうなった

「黙れ・・・」

雨の滴る髪の間から吊り上がった目を見せた
「好き勝手な事言ってんじゃねーぞ」

冷徹な顔に怒りが燃えている

殴り飛ばされた『はやと』の肩を制止のために『おおすみ』が支え、
ケンカを止めようとしたが一瞬の差で『はやと』の方が早く動き自分の前、動じる事のない仁王立ちを見せる『むらさめ』に殴りかかった
ケンカには多少の腕の覚えがある。海保では名の知れたケンカ屋
殴られてただ泣くなんて『はやと』の怒りは安く無かったが

相手が悪かった
海上自衛隊
いわゆる軍属である『むらさめ』は己を鍛える事に余念のない女
護りの主であるという自負によって鍛えられた目に
ヒステリーで飛ばされる『はやと』の素早い拳などスローに見えていた

振り上げられ自分の顔に一直線に向かってくる弾を受け止めるがごとく『はやと』の拳を軽くつかみ取る
拳を平手でがっしりと掴むと
そのまま自分より身の丈のある彼女の動きを止めてしまった

渾身のスイングで襲いかかった『はやと』はガクンと膝が折れた
何か硬い鉄板にぶつかってしまった衝撃で体が跳ね返されたように痺れる

「オマエ・・・」

十分に力は入っているハズなのに
微動だにしない『むらさめ』怒りに染まった目・・・・
その目の中にあるのは「ケンカ」などという安い「怒り」ではなかった

もっと深い・・・闇の色

『はやと』は腕を引こうと体をそらしたが
動かない
むしろ、拳が万力で締め上げられる痛みで体がすくんだ
その一瞬を『むらさめ』は見逃さず彼女の踏み込み左足に蹴りを食らわせ
自分の下に跪かせた
眼前に見下す目線にそれでも『はやと』は吠えた

「オマエらは!!そんだけの装備持ってて何で守らなかった!!なんで!!」
ゴツン

『はやと』の拳は『むらさめ』に掴まれたまま自分の顔の位置まで下ろされた

「ふざけんなや!!手前(てめぇ)中指立てながら私の前を走ってただろ!!そんだけの余裕かましといて・・自分たちを守る事ができなかったからって!!私達のせいにするんじゃねぇ!!」

体を押しつぶされる圧力

拳と腕、体に入る『むらさめ』からの力の電撃に言葉をつまらせた
顔に遠慮を超えた罵倒

「銃撃があった時!!手前，何してた!!アホ面さげて泣き叫んで
!!」

声高い激高に『いかづち』が制止に入ろうとしたが

「手前のありもしねぇ、くだらねぇ余裕が『りゅうきゅう』を半殺
しにしたんだ!!」
「アカンて!!」

力で押さえ込まれ
跪かされたまま罵倒を受ける『はやと』の前、姉の拳を止めたのは
『いかづち』だった
掴まれていた拳を解いた

捕まれていた手に赤い痣を残したまま
『はやと』は膝を屈したまま体を丸め込むように泣き出した
わかっていた
あの銃撃の時・・・何も出来なかった
相手が銃器を所持している可能性が高かったのにいつも通りの仕事
と高をくくった

「慢心」だった

でもそれを知っていたとして「船魂」『はやと』に何が出来た訳で
もない
あらゆる矛盾と無力さに『むらさめ』の前に屈して泣いた

「糞ヤロウ!!」

そんな背中にぶつけられた憤りを倍返しするかのように
『むらさめ』は唾を吐いたが、懸命に間を取り持つように『いかづち』は首を振った

「アカンて!!わかってやらな!!わてかて『むらさめ』が瀕死の状態になったら普通でなんていられへんのや!!」

心の問題

連なる姉妹の誰が撃たれても痛むもの
ましてや海保の彼女達は自分達にとっての優しい大きな姉を撃たれたばかり
それを考えた『いかづち』は自分が目の前の姉を撃たれたらと同じぐらいに辛いと心を痛めていた
だが
その言葉が終わる前に姉から出された答えは鉄拳だった。

「馬鹿野郎!!!」

近寄った『いかづち』を叩きつける拳は上から振り下ろされ妹はその場に倒れた
すかさず胸ぐらを掴みあげ引き起こすと姉『むらさめ』は怒鳴った

「オマエは!!私の妹だが・・・・・その前に「護衛艦」だ!!私が沈んだとしてもオマエは泣いたりする余裕は無い!!オマエは任務に向かって前に進むんだ!!!」

薄暗く光りを失った怒りの目

姉『むらさめ』の心に涙はあった
だが
決してそれはいわない・・・自分達が国の盾である事を誇りに思う
彼女の涙は怒り

目で・・・殴り倒した妹『いかづち』の心に告げる

「返事しろ!!」

周りに集まった海保の船魂達には言葉がなかった
妹にさえ「自分の死を越えろ」と命ずる海上自衛隊・・・護衛艦の
姿に彼女たちの覚悟を感じるしかなかった
首を締め上げられたまま『いかづち』は敬礼した

「了解・・・・」

小雨降る中，両陣営が固まってしまったところに泣き声が響いた
それは
幼い声の持ち主は素早い足取りで
一直線に『こんごう』の前に走り

飛び上がった殴った

『こんごう』の顔を

「うわぁぁぁぁぁぁぁ」

『はやと』と対峙していた『むらさめ』の間を縫い

一瞬で飛び上がったのは『あかいし』だった
幼い小さな手はきつく結ばれたまま今度は届かない顔ではなく『こんごう』の胸を殴打した

「なんで!!なんで!!助けてくれなかったの!!なんで!!」

左頬を殴られたままに、雨に濡れた薄暗い照明の下に立ちつくす『こんごう』の前『あかいし』の力無い拳が何度も胸を叩いて
軽い音がポコポコとする
周りを囲んでいた海保の船たちの目にも涙が浮かんでいた

みんなやり切れない思いで・・・・どこに向けて良いかワカラナイ「怒り」と「悲しみ」に

「日本で一番強い船でしょ!!なんで『りゅうきゅう』ねーちゃんを助けてくれなかったの!!」

『こんごう』は答えない
間を抜かれた『むらさめ』は振り返って『あかいし』に掴みかかろうとしたが、その手を『いかづち』が止めた
「アカン・・・」
『いかづち』の制止に合わせたように『あかいし』の体を『はやと』が守った

「『あかいし』ゴメン・・・『あかいし』・・・」
一生懸命『はやと』は幼い妹を抱きしめた
抱きしめて共に泣いた。
『こんごう』は顔を上げると何もなかったかのように前に進んで雨の中に姿を消していった

誰も彼もが、涙のわけをさがしていた

『しまかぜ』が護衛艦隊が詰めている部屋に戻ってきたのは一時間ほど後の事だった
『りゅうきゅう』の怪我と苦痛を和らげるために「力」を注ぐ役として集まった
保安庁船艇に処置の説明と引き継ぎをしていたからかなり遅くなっていた
同時に。。。
護衛艦隊の面子の心が心配で急ぎ足で戻ってきたのだが
灰色に張りつめたグループルームの中に『しまかぜ』を待っていたのは『いかづち』だけだった

「おつかれさま・・・『むらさめ』は？」
イスに座り膝を抱えていた『いかづち』は『しまかぜ』の声に顔を見せた
眼鏡の向こう・・・泣いて腫らした目の主は小さく首を横に振った
『むらさめ』はココにはいないと

自分の怒りを制御できなかった『むらさめ』は自分の辛さを他人にぶつけてしまった事を恥じていた
事の経緯は聞かなくても『しまかぜ』にはなんとなく理解し頷いた

「そう・・・？『さわぎり』・・・」

『しまかぜ』の後に続いて部屋に向かっていた『さわぎり』は
最後まで警戒警備に徒事していたために体の芯まで水に浸かった姿
で立っていた

『しまかぜ』はタオルを取ると肩に置いて
濡れた上に風に晒された髪を拭きながら
「シャワー・・・行きましょ・・・いくら私達でも体を冷やすのは
良くないわ」

艦魂である
雨に濡れたぐらいで健康を害したりはしないが，この場合は心に掛
かる負担を癒すためにも温かい湯に触れていた方がいいと判断した
『しまかぜ』は立ち上がると通路に向かって歩き出したが手を引く
『さわぎり』は首を振って拒否した

「・・・『こんごう』が・・・・」
髪から見ずをしたたらせながら『さわぎり』は小さな声のまま俯い
て足もとに涙をふらせた

「『こんごう』がね・・・・かわいそうなの・・・・」
『しまかぜ』は何かに気がついたように顔を上げた
「『いかづち』お願い」
そういうと走った

部屋の中、イスに座っていた『いかづち』が『さわぎり』の髪に乗
ったタオルを受け取りながら凍えた声で・・・それでも相手を励ま
すように
「『さわぎり』はん、暖かいもん作りますから・・・あったまりま
ひょ・・」

揺れる声
励ましたくても自分が泣いてしまう
『いかづち』は泣きながらもがんばってみせる・・・
その手を（さわぎり）が握り
「辛いよ・・・」と零した

シャワールームの前
水の流れる音だけが通路に響いていた
蕩々と流れ吸い込まれて行く音が続く中・・・急に壁を叩く音がした
「うっうっう・・・・・」
ボックスの中、片隅に崩れるように座り、制服を来たままシャワーを浴びる『こんごう』は『あかいし』に殴られた顎に手を置きその痛みに震えていた

たいした衝撃じゃなかった
小型船艇である『あかいし』の力など『こんごう』を物理的に痛めつけるに値しない
なのに

心に言葉が刺さって、立っていられなかった

「日本一強い船」「なんで助けてくれなかった!!」

頭にかぶる湯水の中に一緒に涙を・・・止められない涙を流し叫

んだ

「何が！！何が護衛艦！！何がイージス！！！」

見えていた
射程に入っていた・・・なのに
目の前に残ったのはあの「惨状」だけ
何度も頭を壁にぶつけた

「何が為の国の楯・・・・」

守るために・・・守りたいからこその備えを持った自分たちが無傷で返ってきた事は不名誉でしかなかった
『こんごう』は勢いを上げたシャワーの中で声を挙げて泣いた

通路の前に立った『しまかぜ』は心を押しつぶされる思いだったそのまま
『こんごう』の入っているボックスの前に立つと
誰に言うでもないように静かに告げた

「私達は・・・命令に従い出来ることをした。必要以上に自分を責めないで」

長い夜の中・・・たくさんの涙が行き場なく流された

第十二話　涙のわけ（後書き）

セイウラバナダイアル～～～お客様を呼ぼう大作戦（前哨戦）

ちゃ～～す
元気ですか。。。
本編がめっちゃシリアル（違）ｓｅｒｉｏｕｓで気が滅入っている
今日この頃です
物語ってのは山があれば谷があって。。。谷ばっかの人生のヒボシは。。。日陰者（死）

てか
前回，ちょっぴり泣き言みたいな事言ったのに
たくさんの励ましもらっちやって！！！ありがとうございます！！！がんばりま～～す！！

しらね　「で？。。。ヒボシお客様を呼ぼうってのは？」
ヒボシ　「おおっ！！（しらね）さん。。。黒鉄先生の所には出られましたね！！良かったです！！」
しらね　「ホントねぇ。。。黒鉄先生は最後まで気を遣ってくださって。。わたくしに目をとめて頂いて。。。美しいって罪ね」
ヒボシ　「。。。。。。ぬ？」
しらね　「そこ！！拍手でしょ！！」
むらさめ　「ウザイ。。。」
しらね　「！！何！！なんで（むらさめ）がいるのよ！！」
ヒボシ　「いや。。。ほら。。上の表題からいったらみんなで相談したほうがいいじゃないですか」
むらさめ　「（しらね）なんか大して活躍してないんだから出る意

味ねーだろ」
しらね　「。。言ってくれるじゃないの！！だいたいあんた！！ずっと年下の妹なんだから！！敬語つかいなさいよ！！」
むらさめ　「ケッ！」
いかづち　「もめるなや～～」
むらさめ　「うっせぇや！！今回なんて大変だったんだからな！！（しらね）が横須賀で温々している間にこっちゃ不審船と激闘だわ！！」
しらね　「何処に激闘があったのよ！！予想通り（こんごう）がテンパった，だけじゃないの！役たたず！！！」
むらさめ　「死にてえのか！！！（激高）てめえ！！」
しらね　「わたくしのような優秀な旗艦を有していればあんな失態を見る事もなかったハズだわ！」
むらさめ　「てめぇの顔面にプレットをたたき込んでやる！！」
しまかぜ　「はいはい！そこまでよ」
いかづち　「ふ～～あぶなかった」
しらね　「（しまかぜ）！！あんたの教育がなってないから，こんな無礼者ばかりが育っちゃうんじゃなくて？！」
ヒボシ　「ふ～～もっと平和的にいきましょうよ」
しまかぜ　「（むらさめ）も女の子なんだから言葉遣いは直しましょうね」
むらさめ　「女所帯なのになんでそこだけ「女の子」強調？私はそういうとこ理解できねーよ」
しまかぜ　「粉川さんが聞いてるわよ」
むらさめ　「あんなの男にはいんねーよ」
いかづち　「酷い言いようですなぁ～～それにしても話しすすまへんで。。。。このままやと」
しまかぜ　「そうそう！今回の議題は他の先生の小説から「艦魂」のお客様をお招きしようって相談をしなきゃね」
いかづち　「わては順番から行くと最初にお招き下さった「伊東先

生」のところから呼ぶのがええと思うんやけど」
ヒボシ　「ヒボシもそう思う～～～」
しらね　「わたくしは，そちらの艦魂には会ってないわ」
いかづち　「「黒鉄先生」とこのお茶会におりましたよ。。。あの。。。騒がしい集団（藁）」
さわぎり　「なんかおっきな女いた。。。。あれ「大和長官」なの？」
いかづち　「せやで，お茶会ではうちら新規参入者やから大人ししとったでね～，うちらのほうにきーひんかったけれど」
さわぎり　「猫耳，何セットも持ってたよ」
いかづち　「艦魂誘拐する人やもん（爆死）あの耳つけてハアハアして」
しらね　「あのハアハアしてた方？。。。「大和長官」なの？わたくしの持っているイメージとはだいぶん違うんだけど。。。」
しまかぜ　「「黒鉄先生」のところの「大和長官」は遠目でみたけど（さわぎり）ぐらいの女の子。。。そんな感じだったかな？」
いかづち　「わてもひょ～って見てましたけど，大人しそうな方でしたね」
しまかぜ　「う～ん，可愛い感じの方だったわね。。お話してみたかったけど。。（こんごう）が緊張して固まっちゃってね（藁）」
むらさめ　「それは。。。「大和長官」のとなりに「金剛」さんがいたからじゃねーの？」
いかづち　「あっ！！きっとそれや！！」
しらね　「それこそ「黒鉄先生」のところの「大和長官」を呼びましょうよ，いきなりハアハアする「大和長官」は怖いわ（藁）」
むらさめ　「そっか。。。私は結構好きだな「大和長官」。。。自分に正直っていうか。。フリーダム（爆）」
しまかぜ　「話しも楽しいし，いい人よね～とっても」
いかづち　「。。。。。微妙。。。。フリーダム過ぎへんか？」
むらさめ　「いいじゃん！！一度お会いしてるから気兼ねもないし

！！」

しらね　「（さわぎり）が横抱きにされて連れ去られそうじゃない」

むらさめ　「可愛がってもらったらいいじゃん」

さわぎり　「怖いよ。。。。あたい」

むらさめ　「怖くないって！！（さわぎり）あの豊かな胸に抱かれてみ！！たまんないだろーな！！」

いかづち　「おっさん臭いなぁ（むらさめ）しかし見事な爆乳でしたなぁ「大和長官」。。。うらやましいわ」

しらね　「そう言えば。。（こんごう）は艦魂ラジオの時に「大和長官」に抱きしめて頂いたのでしょ？今日はどうしたの？」

しまかぜ　「それがね。。例の不審船の事で落ち込んじゃって。。。部屋に引きこもっちゃったの」

さわぎり　「（こんごう）泣いてたよ」

しまかぜ　「もともと繊細な子だから。。。ちょっと辛すぎたね。。今回は」

しらね　「フン」

むらさめ　「なんだよ！！（しらね）！！」

しらね　「なんでもないわよ。。。」

いかづち　「まあまあ。。。その事はとりあえず置いておいてやな。。伊東先生とこの「大和長官」呼んだらどやろ？わても会ってみたいし」

しまかぜ　「そうね～～（こんごう）もまた抱きしめてもらったら落ち着くんじゃないかな？」

むらさめ　「で，猫耳つけられたら笑えるな！」

いかづち　「（こんごう）に猫耳。。。。ギャハハハハハハハハ」

さわぎり　「想像できない！！いつも無愛想にしてる（こんごう）に猫耳！！」

しまかぜ　「顔真っ赤にしちゃいそうね」

しらね　「わたくしは絶対に猫耳は断るからね」

いかづち　「わてもつけてみよかな（藁）」

しまかぜ　「ウエルカムフラワーみたいに，みんなでウエルカム猫耳とかしたら喜んでくださりそうじゃない？」
むらさめ　「（しまかぜ）ってさ。。。たまにスゲー事言うよな。。。」
しらね　「わたくしは絶対にイヤだからね！！！」
しまかぜ　「そんな事言わないで！その時には（くらま）に猫耳もしてもらったらいいじゃない」
むらさめ　「。。。。。。。。。。。」
いかづち　「。。。。。。。。。。。」
さわぎり　「。。。。。。。。。。。」
しらね　「。。。。。。。。。。。」
さわぎり　「（くらま）司令に。。。猫耳。。。」
むらさめ　「恐ろしい。。。。そんな事，私頼めないぞ。。。」
いかづち　「現代艦魂史史上，日本では一番デカイ女に。。。猫耳？（注：（くらま）さんは身長１８２センチ）」
しらね　「。。。。それだけは止めて。。。（くらま）の姉としてのお願い（泣）」
しまかぜ　「可愛いかもしれないのに～～」
ヒボシ　「。。。。それはちょっと。。。ヒボシあやまっちゃう」
さわぎり　「はいはいはいはいはいはいはいはい！！！あたいも呼びたい人います！！」
しらね　「そうよ。。。大和長官の事はまたという事で。。。」
むらさめ　「猫耳は。。。」
さわぎり　「聞いて！！！聞いて！！！」
しまかぜ　「はいはい（さわぎり）は誰をお招きしたいの？」
さわぎり　「長谷川翔輝さん！！」
いなづま　「。。。。艦魂じゃないやないですか（爆）」
しらね　「あら。。。男の方はウエルカムじゃない」
むらさめ　「なんでよ？人じゃん？」
さわぎり　「だって！！だって！！艦魂年代史史上一番モテた男で

しょ！！会いたい会いたい！！！」
ヒボシ　「（さわぎりたん）が男に会いたいなんて。。。意外。。。」
さわぎり　「おにーたんになってもらうの！！」
むらさめ　「それはやめたほうがいいぜ。。。おとなしく伊東先生とこの大和長官のを呼ぼうぜ。。。長谷川さん呼ぶと黒鉄先生のとこの大和長官の４６センチ砲くらう事になりそうだぜ。。。」
しらね　「いきなり攻撃する事は認められてないわよ」
むらさめ　「だほぉ！！帝国海軍の艦魂様たちにゃ「専守防衛」なんて頭の片隅にもねーよ！！気に入らなきゃいきなりズドンだ！！」
いかづち　「てか。。。ちまたを大騒ぎに陥れてた「武蔵長官」とかきそうで怖いで」
さわぎり　「会いたいよぉぉぉ～～～あたい，会いたいよ！！長谷川さんに～～」
しまかぜ　「だから！平和的にみんなで猫耳ウエルカムすれば大丈夫よ」
全員　「。。。。。。。。。。。。（何で？）」

そんなこんな
ウエルカム猫耳。。。。やったら怖いよ～～～
どうなるご招待！！！

次号，激闘編（爆笑）

第十三話　防衛の鍵（前書き）

お客様を呼ぼう大作戦。。。。
ヒボシが頓挫寸前で一時中断んんんん
すいませ～～ん（涙）
代わりに海保ギャルズの紹介かきましたぁぁぁ（涙）

第十三話　防衛の鍵

「まことに遺憾であります」

羽村は目の前
長い囲み型のテーブルに居並ぶ「幕僚府」の歴々に対して「事件」
の経緯とあらましの説明をすると腰掛けついでに一言添えた

ココは防衛庁の大会議室
天井の高い広大な部屋は，惜しむことなく豪奢な木目調などをあし
らった贅沢な司令部の中に聞こえるのは
見苦しい怒声

「有事」という非常事態が起こればここが国家防衛の司令部になる
ところとすれば
当然，声を上げているのは「国防」の専門家であるべきところなの
だが。。。

今，声を張り上げているのは「政治屋」だった

沈黙を守っているのは
並ぶ幕僚，顔にはそれぞれの苦悩を浮かべ目の前に置かれた資料を
熟読している
「国防」という問題を「政治屋」の言うがままに触れられたくはな
いが
この国に根深く残る「戦争アレルギー」の前では守るべき戦いにま
で「悪」の烙印を簡単に押されてしまう

官僚全てがこの「事件」に複雑な思いを持ち，慎重な対応を試みよ

うとしている中
「防衛」に疎い内閣府の繋ぎだけが事の次第に慌てていた

「遺憾」

羽村が使ったこの言葉は
使い古された「政治屋」の謝罪の符丁，それを添えたのは軽い嫌味だった

「護衛艦は発砲しなかったそうだが?」
内閣府との繋ぎ役である官僚は，必要以上に厚く書き纏められた資料の表紙を叩きながら問いただした

「発砲はしませんでした」
末席に座る
羽村は制服のポケットに忍ばせたパイポを左手で捜しながら，右手で資料を指さすと
「３２ページにその旨が書かれております」
「君に聞いているのだ?君は統合情報部のまとめ役だろう?事の経緯をしり，事件に徒事した護衛艦と「通信」を取り合っていた?聞いていたのだろう?発砲不許可の指示は君がしたのかと聞いているのだ」

羽村は資料のページをめくり
ゆっくりとした口調で
「ミサイル攻撃の要請を却下し。。。艦砲による攻撃を許可しました」
「つまり発砲は許したと?」
羽村の後ろに座した，佐々木は内閣府官僚たちの聞かんとしている

言葉に苛立ちを覚えていた
護衛艦が国を守れなかった事より「発砲」をしたか？しなかったか？が問題である事を問いつめる「政治屋」というものに腸が煮える思いだった

「残念ながら撃ちませんでしたが」

そんな若さをみなぎらせる佐々木とは対照的に
変わらぬ表情のまま羽村はページをめくり
「３８ページに通信記録を記載してあります。。。目を通して頂けましたか？」
「直接君に聞いている！」
「大事なことは資料にまとめてあります。。。。「それ以外」の事をおたずねください」

羽村に比べれば，若輩の団塊世代は防衛庁会議室で一人いきり立っていた
その姿は政府が「別の意味で」この問題に神経を尖らせている事を良く現していた

「あんな会議にどんな意味があるのですか？」

事の重大さからするとあまりにもあっけない閉会をした部屋を後におきまりの喫煙ポストの前でタバコを吹かしていた制服姿の羽村の背中に向かって，資料用のファイルを抱えた佐々木が尋ねた

「発砲の有無を知りたかった。。。それだけだろ？」

情報部が事件の概略をまとめたのはこの日の朝方だった
物理的な事件である「船」の方は夜半には交代制「警戒警備活動」に移行したため指示はおわり
朝までにくるであろう内閣府への対応のための資料作りに徹夜したばかりだった
佐々木の目の下は黒ずんでいた
緊迫の夜から向こう心が安まる所などになかった。。それは情報部に詰める全ての職員にも言えた
そんな労苦の果てに作られた資料はろくに目を通される事なく
政府側の一方的に「質疑」だけで会議は終わっていた

「何故。。。。間宮艦長は発砲しなかったのでしょうか?」

佐々木の頭の中には「少しでも」護衛艦隊が国防のために手を下すべきだったという残念があった
混乱の中での徹夜。。。糊のきいたスーツもくたびれていた。。。
ネクタイを少し弛めながら

「あたらないと判断したんだろ」

情報部の見るディスプレイの前に数字と現場の状況は提示されていた
波の高い海の上で艦砲は当たるか?
それは現場レベルでも難しい判断だというのはわかっている

「ならば。。。。何故ミサイル攻撃を許可しなかったのですか?」
「特に理由はないが。。。強いて答えるのなら情報不足だったからかな」
羽村はグラスエリアから下の靖国通りを眺めながら煙を顔のまわりに浮かべ，何事でもないように答えた

護衛艦隊が不審船からの海保に対する砲撃を受けて，転進，前にすすんだ時から
不審船が領海を突破した時間は２０分弱しかなかった
最初の時点で「攻撃」を許可していたのならば相手を沈める事が出来たハズだった

「国防の問題ではないのですか！！」
「国防の問題だ」

佐々木は抱えていた資料を自分の足もとに下ろすと，喫煙ポストに寄りかかったままの羽村に詰め寄った
「では何故最初に」
「内閣府との連絡が取れたのは？」

ミサイル攻撃は内閣府の許可がいる
内閣総理大臣に「事件」が伝わったのはその８分後だった
残り１２分弱。。。不審船は荒波の中を３０ノットオーバー（およそ５６キロ）で走っている
波の高さ（６メートル）（参考記録数）を考えれば４０トン程度の船が出すにしては「狂気の沙汰」のスピードだ
艦砲はどう見ても無駄だし
総理が「決断」するまでに事は過ぎてしまっていた

納得のいく答えは佐々木の前にはなかった
「こういう「有事」の中でも私たちは沈黙を守らなければならないのですか？」
眼鏡の後ろで睨む目
「政府による，政治的な防衛がしたいのだろう？」
自分より遙かに若いのに眉間に深い皺を刻んだ佐々木に
羽村は左手で制止を合図しながら答えた

「1つ。。チャイナ・スクールの連中に「いまさら」騒がれたくない，来月予定しているアジア大洋州局長会議が近い事。。。事務レベルの窓口を増やす必要がある事」
「そのために防衛庁は，今は黙れという事なのですか?」

佐々木も懸念していた事だった
中国とは外交の折衝(すりあわせ)がうまくいかない。。。国家主席などでの大事業的会談は常に出来レースで「イベント」でしかない
しかし
水面下では事務レベル会議が熱く燃えている
いくら中国が「唯我独尊」を通そうとも「荒唐無稽な戦争」でもしない限り世界経済との折り合いはつけられない
必然的に外洋の目の前にある国「日本」との交渉を避けては通れない
この「事件」を無視は出来ないという事だ

防衛庁が横槍を入れないのは
間宮が発砲をしなかった事も大きな理由にあるが
そういう窓口会談という「外交枠」を活かしたいと考える政府の意向そったものでもあった

「政府には。。。イージス艦機密漏洩の件で「片目」をつむってもらったしな」
つまり
すでに政府の方から「この件」につて防衛庁に指示が来ている。。。という事だ

「だから今度は我々が片目をつむるという事ですか?」
「そう言うことだな。。。それに「国民的」にもその方がいいらしい」

「事件」に対する問題は日本の方にもある
シーレーンを守るというのは無資源国家である日本にとって絶対の
「防衛」であるが
この国
日本の国民が持つ戦争アレルギーが，今一歩のところで自衛隊の存
在をを拒否している
これは由々しき事態だった
国民の持つ国益を守るという認識は甘すぎる

「起こるべくして事件は起きた。。。。」

羽村は煙の中でつぶやいた
それは誰に問いかけ羅れているの仮?
自分に問いかけているのか。。。まだわからない問い

佐々木は鈍っていた頭を少し早く回してみた。。。
これは?
何か「事件」があれば。。。。国民の危機感を身近に感じさせる「
事件」があれば。。。
それに乗じて
相手の窓口を増やし
自らの手を広げる事ができるのでは。。。

羽村の会話は何かを隠しているように見える

「間宮艦長はそこまで考えて発砲しなかったと?」

「それはわからん」

「力を示す必要はなかった。。。とお考えですか？」
佐々木は煙の中に顔を浮かべた羽村に矢継ぎ早な質問をした

「力で外交はしない。。。それは最後の方法だ」

外交の最後の手段が「戦争」
「撃たなかった事で。。。我が国が無力なる国家と蔑まれる」
熱弁する佐々木の口に羽村はタバコの煙を流し込んだ

「君のような責任職の者が「小事」にいきり立ってはいかんよ」
周りを見回す
「しかし」
「力の楯がその力を示すときは必ず来る。。。。来年とかな」
それは来年行われるイージス艦によるＢＭＤｐｒｏｇｒａｍの事だった
ミサイル防衛構想の頂点に立つ「イージス艦」からの弾道ミサイル迎撃実験

顔に掛かった煙を払った佐々木は，むせた涙目ながらも質問を続けた

「中国は不審船の情報を隠匿したと考えられますか？」

根本までをふかしてタバコを捨て
矢継ぎ早に新しいタバコに火を着けながら羽村は首を振った

「隠した。。。かもしれない。。」
遠い目線
情報局は中国船籍のこの船の事を，中国政府に確認してくれと通達

していたが
結果が来たのは事件が終わった朝の事だった
「該当する船舶は無い」
手落ちのような事後通達だったが
大国である中国が全ての船舶の洗い直しにかかる時間を考えると。。。

「違うのかもしれない。。。」

羽村のどちらともとれない返事
「だが。。。。それも一つの「手段」に変えることはできる」
「海保への対応はどうしますか?。。。海上での「有事」に匹敵する出来事です」
気になった事を余すことなく聞こうとする優秀な情報局司令部次官である佐々木を
羽村はめんどくさそうな顔で見た

「海保は。。。今まで通りの仕事として前に進んだ結果，痛い思いをしたわけだ。。。もう少し我々との信頼関係と連携がとれるようになればいいと思っている。。。後の事は政府に任せよう」

「何を探していらっしゃるのですか?」

タバコの煙の向こうにある
とぼけた眼の羽村に佐々木は今まで以上に真面目な顔で聞いた

これまでの会話では掴めない何かを羽村が探しているように見えたからだ

「防衛の鍵」

正面をきってみつめる佐々木に羽村はそれだけを答えた
口から大きな煙を吐き「真実」を眩ませて
胃のあたりを指すってみせた

「酒が欲しいね」
「ダメです。。。。今日もまだ仕事が残っております」
佐々木の厳しい切り返しに
「年寄りに優しくない職場だな」と溜息を吐いた

「ところで。。。。こんごうの調査員は誰だったかな?」
部屋に向かう通路で思い立ったように羽村は聞いた
「イージス艦機密漏洩事件」で相互監視として乗船している調査員
にも「事件」の事を聞きたかったからだ

「粉川一尉です」
羽村は何かを思い出したように
「粉川。。。。くん。。。」
「そうです」

「彼にも一度，東京に戻ってもらわんにゃならんなぁ。。。」
今来た道の向こう。。。首都を覆う曇り空を眺めてそう言った

護衛艦隊は鹿児島港を出港，一路「佐世保」に向かう航路に入っていた
護衛艦は「軍事機密」も多く持つ船のため

長く一般の港に係留したくはなかったが「人」の方はそういうわけにはいかず，長い時間の拘束をされていた
「事件」からはすでに3日がたっていた
これから佐世保に向かった後，間宮と和田には「審議委員会」が待っている

「お疲れ様でした」

艦魂達が集まるいつもの部屋でパソコンを開いた粉川に（しまかぜ）がコーヒー持って現れた
部屋の中に（こんごう）の姿はなかったが，他のメンバーはいつも通りに揃っていた
「どうも」
コーヒーを受け取った粉川に（しまかぜ）は礼を重ねた

「大変でしたでしょ。。。お花」
粉川の横に座った（しまかぜ）は出港直前の時間に（りゅうきゅう）の元を尋ねていた
その時に「花」を持っていったのだが基地と，決まった世界にしか足をおろせない艦魂である（しまかぜ）に代わって粉川が買い出しに入ってくれたのだ

「いやいや。。僕，自身には何の質疑もありませんでしたから。。大丈夫でした？（りゅうきゅう）さん？」
パソコンのモニターを伏せながら
受け取ったコーヒーに口を付けた粉川は心配そうに聞いた
（りゅうきゅう）は嵐の前。。。。会議室で見ただけの存在だったが。。。

美しい軽やかなウェーブヘアのお姉さんだった事は覚えていた

人の姿をした存在
それも若い女である彼女が銃撃に晒され，大けがを負ったのは人ごとには思えなかった

「中には入れませんでしたけど。。。花は渡せました。。。ありがとうございます」

（りゅうきゅう）の自室前には警備のメンバーから負傷で外された
（はやと）が立っていた
力無く壁にも垂れかける姿は（しまかぜ）を見つけても変わらない
（はやと）と（むらさめ）のケンカは（しまかぜ）の耳にも入っていた

「お花を。。。。」
現場検証と写真の日々で今は乗務員のいない船になっている，りゅうきゅうの通路で向かいあった二人
（しまかぜ）は（はやと）に強い抗議を受けると思っていたが
（はやと）の細い手は素直に花を受け取った
「まだ。。。意識が戻らないんで。。ココで勘弁してください」
（はやと）の腕に巻かれた包帯，彼女もまた銃撃で怪我をした一人

「ごめんなさいね。。。力になれなくて」
（しまかぜ）の謝罪に（はやと）は首を振った
「もう。。。勘弁してください。。。。」

（はやと）には敵無き謝罪の方が辛かった
誰が。。。。誰が悪いの?それを責める場所が誰にもなかった

「意識が戻らない。。。か」
マグカップを手の中に顔を伏せてしまった（しまかぜ）に粉川は
「艦魂の怪我ってどうやったら治るんですか？」
「特に今回は「頭」を撃たれてしまったから「意識」の方はどうやって回復させるかは，わかりませんが。。。体の方は「人」の手によっての修理が早くなされる事ですね」

「修理，頑張ってもらいましょう！！」

粉川には適切な言葉が見あたらなかったがとにかく
自分の隣で心細くなってしまっている（しまかぜ）を励ましたかった
「佐世保に着いたらゆっくり休んで！！」
「佐世保に着いたら。。。もっと疲れますねん」

対面側のテーブルに座っていた（いかづち）が口を挟んだ
いつものコック姿で置いた料理本の上に体事伏せて

「佐世保に着いたら。。。ねぇ」
（しまかぜ）も困ったように眉をしかめて見せた

「なんかあるの？」
テーブルに溶けるように伏せた（いかづち）の手を引く粉川の質問に答えたのは観葉植物に水を与えていた（むらさめ）だった

「佐世保は伝統墨守．唯我独尊！の港だ！！到着次第，修練走があるんだよ！！」
「修練走？」
聞き慣れない言葉に首を傾げる粉川の前が頭だけ起こしてつぶやいた
「やんのかなぁ。。。良くて５０周。。。悪くすれば２００周。。。かなぁ～～」

癖毛の髪に指を通し
ガシガシと描く。。。。眼鏡が鼻っ柱から浮いたままになっている

「１４：００には佐世保に着くからね。。夕方まで時間あるし」

窓縁に歩き海を見ながら
波の反射で（しまかぜ）の顔の白さは際だち。。。唇が美しく光る中
この面子では一番お姉さんの彼女は粉川にとってもっとも「女性」
であり
つい鼻の下も緩む好みのタイプだった
風に揺れるショートボブの髪を手で払い

「がんばろうね」と（さわぎり）の頭を撫でた
「ふぇ～～ん。。先にあやまっとくね。。。もしあたいが「袋役」
でも許してね」

作業用の青服に体が沈んでしまいそうなぐらい肩をすくめた（さわ
ぎり）はすでに涙目だった

「袋って。。。何？」

自分のタンブラーを取った（むらさめ）はテーブルを飛び越すと，
へたっていた（いかづち）の頭を殴った
「しっかりしろ！！ダッシュ！ダッシュだ！！」
「そないな事いうても。。。。」

「今度の回航は色々有りすぎたから」

それには粉川も溜息がでた
そもそも

佐世保を寄港地とする（こんごう）達護衛艦隊が横須賀にきたのだって「ヒマ」で来たわけでなく
その上で「イージス艦機密漏洩事件」で足止めをくらい
遅れを取り戻すために急ぎ参加した海保との合同演習で「不審船事件」
心身に十分過ぎるダメージを蓄積していた
思いだしてみれば艦魂でなくても七転八倒の数日間に粉川も溜息が出た

溜息仲間になった（いかづち）は粉川を指さしながら
「佐世保にゃ，こわ～い司令がいるんですよぉ」
「こわいの。。。」
ほおづえついた（いかづち）に（しまかせ）の膝に抱っこされた（さわぎり）
「群司令？」

基地司令の事かきいた粉川に（しまかぜ）は首を横に振った
「（しらね）の妹，（くらま）が佐世保の。。私達の司令なの」
「（しらね）。。。ああっ横須賀のＤＤＨ（ヘリコプター搭載護衛艦）の彼女」

粉川は記録していた物と合わせるためパソコンを起こしながら
この破天荒な航路の始まりに出会った「彼女」を思いだしてみた

横須賀にいたＤＤＨの艦魂（しらね）はお色気魔神なんて（むらさめ）に罵倒されたりもしていたが
実際に，美人だったし小さな身の丈ではあったが「規律正しい」姿をしていたなぁと
同時に（くらま）もまたＤＤＨであり佐世保の旗艦ともいえる存在だから

姉妹揃って美女ならば。。。などと少しばかり顔を弛めた

「（しらね）さんに似てるんでしょうね」
「目だけな」
（むらさめ）の即答
「目だけ？。。。後は？」

（しまかせ）は微笑んで
「後は見てのお楽しみかな？」
「その方がいいや！」
（むらさめ）はさもありな顔で笑った

「港に入ればすぐにわかりますよ。。。桟橋に必ず集まるんです，お迎えで」
（しまかぜ）は近づく陸地の先を眺めながら言った

「（こんごう）ちゃん。。。。大丈夫なんですか？」
入港時間までに支度を調えるようにと他の艦魂を返した部屋の中
（しまかぜ）と二人きりになった粉川は尋ねた
あの日以来はこの部屋には来ていなかった
嵐の夜
澄んだ瞳に怒りの炎を赤く光らせたまま。。。。泣いていた彼女のことが少しばかり気になっていた

「大丈夫。。。とは言い難いけど。。。しかたのない事だから」
そう言うと粉川の隣にすわり顔を近づけた
粉川は自分の顔に触れた柔らかな髪に。。少し動悸が高まり，少し

下心が動いた

「ははっ。。。僕で出来ることがあればねぇ。。」

艦隊勤務は「男所帯」。。。。そんな中にあって（しまかぜ）存在は男心を大いに刺激するものがあった
他の艦魂はイマイチ「女性」という目で見ることはできないが彼女はそういう「女」を無性に感じさせる
笑う端から手が（しまかぜ）の細い腰に回りそうになる

「粉川さんが来て。。。あの子，少し変わったの」
「変わった？」
（しまかぜ）は部屋をクルリと見回して続けた

「あの子。。。結構しゃべるようになった」

粉川は驚いた
（こんごう）はこの部屋にいてもほとんどしゃべる事がない
たまに口を開けば辛辣な言葉を吐くぐらいだ
「あれでも。。しゃべるようになったんですか」
「そうよ！特に粉川さんの事で。。あれこれと話すようになったわ」
粉川は（しまかぜ）の腰に向かっていた手を自分の頭に戻した
何度も星が出るような殴打を受けた。。。（こんごう）に

「きっと。。汚染生物とかって。。。言ってるんでしょうね～～」
（しまかぜ）は嬉しそうに首を振った，小さな笑い声とともに

「それは。。。ごめんなさい。。。でもね，私達は少なくとも５０年「人」と話しをした事がなかった。そんな中から急に現れた「人」。。。」

（しまかぜ）の繊細な指が粉川の鼻の頭に触れる
「粉川さんが来た。。。だからみんな戸惑ってる（こんごう）も。。。戸惑いながらも今までなかった事に興味を持ってる」

長い睫毛
リップクリームが無くても艶やかな唇
面子のお姉さん格と言われる（しまかぜ）だが，歳をみれば２０歳ぐらい。。
それより少し幼く見えるところもある「女性」と「少女」の中間
その顔が無防備に優しく笑う

「ぼ。。。ぼくも興味津々です」

粉川の視線は危なく（しまかぜ）の体を凝視してしまいそうになり
慌てて天井に逃げた
「だからこれからも（こんごう）の事。。。よく見てあげてください」
「ああっ。。。（こんごう）ちゃん。。。」
「あんなだけど。。。凄く繊細で。。。寂しがり屋な子だから」

美人の頼みは断れない
「任せてください！！ははっ頑張っちゃいます！！」
粉川は自分の悪い癖だと思いながらも大見得を切ってしまった

１４：００

護衛艦隊はついに佐世保基地に入港した
艦橋からバースの周辺を見ていた粉川の目に映ったのは

「お迎えに揃った一軍」

男臭い港にあって
あきらかに普通の集団ではないものだった
黒の海軍セーラーを着た少女たちの真ん中，男物の詰め襟，司令官服を着た女。。。他の艦魂より頭2つ分は大きな体躯。。。（くらま）司令の姿だった

「伝統墨守。。。唯我独尊。。佐世保の二群か。。。」

久しぶりの陸だった

第十三話　防衛の鍵（後書き）

カセイウラバナダイアル。。。。反省中（爆）

海上保安庁ギャルズ！！
お客様を呼ぼう大作戦はどーなった（藁）
あれは只今混線中です（爆死）

色々呼びたい方がいてもね。。。もっとヒボシが勉強しないと呼べないッすよぉ
だって。。。すいません（素直にごめんなさい）
他の先生の艦魂のイメージ壊したらどうするのよぉ！！
いきなりズドンになっちゃいそうで。。。怖くって。。。。

なので
海保ギャルズ！！！！（爆死）

（逃避してます。。。。）
登場から
退場までなんの紹介もなかったので。。。いまさらな感じですが（爆）

海保の艦魂紹介！！！
てか。。。。
海保は「艦艇」とはいわないから本来は「船魂（ふなたま）」になるんですが。。。
船魂だど。。。漁船の魂みたいなので（藁）

海上保安庁巡視船りゅうきゅう　艦魂（りゅうきゅう）

海上保安庁第十一管区所属の大型巡視船
なんとヘリコプターも搭載!!
沖縄を本拠地に東シナ海域，シーレーンの防衛を担当している彼女
身長１６３センチ
年齢２０歳（艦魂流見た目年齢）
茶色にふわふわのユル～～イウェ～ブヘア
いかにもお姉さんって感じの彼女は浜田船長だけに見えるという一風変わった艦魂
これには色々な理由や理屈と。。。伏線があったりなので今はスルー（藁）
（しまかぜ）とは何度か合同演習で会ったことがあるようで
海自の堅苦しさはそれなりに理解していてくれる人
浜田船長に初めて自分の姿を見られた時に。。。実は失神している（藁）
そのぐらい艦魂を見える人が現代は少ないという事だ
それでも
初めて自分と話しのできる人として仲良くなって。。。。いまやラブラブ（爆）
（りゅうきゅう）と浜田はお互いを認識する事ができたが
その他の艦魂たちはやはり空気のような存在にしかなれなかった事で
他の艦魂に自分たちの関係の公表は控えている様子です
不審船事件では自らを楯に浜田を救い
重傷の身となってしまった彼女
早くよくなってもらいたいものです。。。。

海上保安庁巡視船はやと　艦魂（はやと）

海上保安庁第十管区所属の大型巡視船
東シナ海域という七管区とも同じぐらいに激戦地の海を守る艦魂
身長１７２センチ
年齢１６歳（艦魂流見た目年齢）
ベリーショートの赤毛（染めてます）両耳にはピアス
見た感じの風体は男の子のような彼女
艦魂にはめずらしく喫煙するが（艦魂の喫煙に年齢制限は無い，お酒も同じ）実はこれも密かに思っている「高槻」のマネだったりで。。。

中身はベタベタなほどに乙女な（はやと）
同期の（おおすみ）に比べると女らしい部分が少ない自分の体にコンプレックスを持っている
お胸の薄いこと。。。つるぺたちゃん（爆）
ケンカ早く，男勝りで調子が乗っている時はガンガン行けるのだが一度落ち込むと，どん底までとことんの方で自分の感情に振り回されるタイプ
不審船事件では憧れの「高槻」を撃たれ危うく我を見失い，その事を（むらさめ）に罵倒されたりと。。。ちょっと可哀想な彼女でした
現在は（りゅうきゅう）と共に修理のためドックに入っている

海上保安庁巡視船おおすみ　艦魂（おおすみ）

海上保安庁第十管区所属の大型巡視船
（はやと）と同じく激戦区の海，十管区を守る艦魂
身長１６８センチ
年齢１６歳（艦魂流見た目年齢）
頭の上に大きなポニーテールで，茶髪の長髪（絵にするなら（ひぐらしのなく○にの魅○みたいな（藁））
ナイスバディの彼女はファションに非常に熱心

（はやと）の行きすぎな彼カジ（彼氏カジュアル）に本音ではドン引きしている（藁）
仕事とプライベートきっちりわけちゃうタイプで本来はしっかりした人なのだけど
海自の合同演習を仕事と認識していなかったそれは
かなり海自を見下していた事に端を発するのだが。。。。
結果として見ることになった惨状は予想を上回り（はやと）同様身動き出来なくなるほどの恐怖を味わう事になった
お調子者で常に明るく振る舞う彼女だが
落ち込み泣くばかりの（はやと）を思いずっと付き添ったりと思いやりの深いところも持っている
現在は警戒警備を強めた十管区の海を七管と十一管のメンバーと警備中

海上保安庁巡視船あかいし　艦魂（あかいし）

海上保安庁第十管区所属の新鋭艦
東シナ海域の不審船対策の一貫としてあらたに鋳造された船
艦魂の（あかいし）は艦齢が若く１０代前半の女の子で容姿的には（さわぎり）に近い
身長１３８センチ
年齢１３歳
ショートボブなんだけど何故か，おかっぱっぽい（藁）
真っ黒な髪にドングリ眼の元気娘
本来なら「不審船対策」として作られた彼女が先行するハズだったが合同演習からの流れで救助活動に徒事した結果被弾（りゅうきゅう）という惨状を見るには至らなかった
ちびっ子のため甘えんぼ
なかなか相手をしてくれない同じ管区の（はやと）や（おおすみ）

よりも（りゅうきゅう）に懐いていた事が（こんごう）への殴打につながってしまった
現在は警戒警備のため各管区と連携をとって警備にあたっているが。。。
（りゅうきゅう）に合いたくて夜な夜な泣いたりもしている。。。
可哀想な（あかいし）

も～～
前章のキャラ今更紹介だったりですが
彼女たちもこの後もまた登場予定ありますから！！！
よかったら覚えておいてあげてください～～～

さて。。。。お客様呼ぼう大作戦は。。。。どうしたものか。。。。
ただいまヒボシ逃走中～～～

ではまた
ウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～（涙）

第十四話　修練の港（前書き）

偉大な艦魂小説家の先生の二人目が有終の美を向かえました。。。
色々なアドバイスなどもいただき励ましてもいただき。。。
今回のウラバナダイヤルはそんな伊東先生の作品から艦魂様をお呼びしました。。。。
お目汚しにならない程度でやりたかったのですが。。。温かい目でみてやってください

ヒボシ

第十四話　修練の港

佐世保

古くは江戸時代「南蛮貿易」の拠点として一時的に発展したが
藩主失脚により衰退
長い時を閑散とした漁村として過ごしていたこの港が大きく発展したのは，江戸という時代が幕を下ろし
日本という国が世界に出て行く事になった１８００年代後半

海洋防衛の発展のため
帝国海軍期に「海軍佐世保鎮守府」として開庁され，あの戦争の最後までを支えた
戦後は米軍の占領下に置かれ
一度は「軍港」という重責と過去を払拭するため市民により「転換」を要求，選挙により賛成多数を得て産まれ変わる予定だったが。。。

「朝鮮戦争」の勃発により
特に米軍の指導の元，再び軍港という任を科せられ現代にいたる

海上自衛隊の地方総監部が置かれたのは意外と遅く，１９５３年に入ってからでそれまでは全て米軍占有の軍港であった
現在も港の八割が米軍と自衛隊の「物」として扱われる制限水域である

ＣＶＮ空母の入港に激しい反対運動（ＣＶＮの入港はイデオロギーとトラウマも混ぜ合わせたデリケート問題であるから政府には慎重な対応を必要としたい）があったりと市民との関係は良好とは言い

難いのが現状である

基地内には昔ながらの赤煉瓦倉庫なども残っており
情緒的な部分も多く見受けられるが
景観に対する配慮の少ない米軍の「士官クラブ」のようにアパートメントや個人居住区など市民との摺り合わせの出来ていない部分もまた多い

「なんか。。。ゴテゴテしてるね」

入港と同時に船艇に並ぶ隊員たちとは別に
粉川と（こんごう）は艦橋下部の通路端から外を見ていた
粉川の初めて見る佐世保の感想は横須賀に比べてたしかに複雑な地形ともあいまったもので
無規則であり
統一感のないザッパな建築物が小高い丘に向かって多数立てられている姿をよくあらわしていた
所狭しと立てられた米軍施設と，どこが海上自衛隊との使用境界線なのかわからなくなるほどだった

「地図で見ると端っこの方しか制限水域を解かれてない感じなんだけど」
「護衛艦にはそんなもの関係ない」

粉川が手にしている地図は一般のもの
（こんごう）は間抜けた粉川を無視して通路の外に出た
モデルのようにすらりと伸びた長い脚で船首に向かって闊歩する姿

は美しいが
置いてきぼりをくらう者には
フラレた男みたいで，もの悲しい
それをさらに際だたせる秋の昼下がり。。。。

「あっちょ。。」

通常勤務の乗務員でない粉川は入港時に外に出る事ができないので
足早に船首に向かう（こんごう）をただ見送るだけだった
長い髪を揺らし風の中に立った（こんごう）は基地の方向に向かって敬礼した

残された粉川は
艦内の壁を手で小突きながらつまらなそうに息をついてみた
（しまかぜ）には（こんごう）を見て欲しいとはいわれたものの
自分に対して好意は無くとも敵意か。。。むしろ興味さえ持ってくれない（こんごう）と向きあうのは苦痛だ
何度も話しかけてきた結果がそうだったのだから
額に手を当て
少し勢いのある風の中，基地を見つめる彼女の姿を見る

「ホントに繊細なのかな?」

三日前から向こう一度も集まりの部屋に姿を現さなかった（こんごう）の顔は確かに少しばかり窶れて見えたが
厳しい目線が変わったようには見えなかった

一人ごとをつぶやきながら
外に出られない時間，艦内を歩くと
港の正面側から見えない反対側のドアの隙間から例のアレを眺めた

「フェイズドアレイレーダー」
チャフランチャーの上に位置する八角の最新鋭レーダー。。。
粉川は指を上げて空でその形をなぞった

「アレ。。。。目の中にあったね。。。」

不審船を追った嵐の日
（こんごう）の目の中にあった輝きはレーダーの八角の赤いライン
人の黒目とは明らかに違った「兵器」の目
「気味悪いと思っただろ」

初めて（こんごう）に会ったとき水色の目をキレイだと言った
だけど返事は「気味悪い。。。」
そうは思わなかったが今にして思えば彼女が「兵器」の目を持つ自分に。。。。
何かしら抵抗を持っている発言だったのではとも思えた

「いやなのかな。。。。」
そんな考えを廻らしながら港を向いた粉川の目に映ったのは。。。
かなり異形な集団だった

向かえに出ている海上自衛隊の隊員の列とは別の集団

黒の海軍セーラー，それだけなら別に不可思議でもないものなのだが
（とはいえ基地業務中に作業青服以外を着用は珍しい）
風になびく髪を持つ多数の影
男の港というイメージの強い軍港に似つかわしくない集団は。。皆，
女の子達だった

「佐世保の艦魂？」

整然と並ぶ集団
（しまかぜ）がみんなでお迎えをすると言っていた事を思いだした
それにしてもかなりの数
指で少し数えてみるが少なく見ても２０人はいる
どれも年若い少女にも見える子達

（こんごう）の事で落ち込んでいた粉川は少し気持ちが緩んだ。。。
。そうじゃなくも苦難の続いた回航だったのだから
少しぐらい自分が良い思いをしても良いのではと思いたくなるほどに
そんな思いで今一度ドアの隙間から自分に見合った年齢の女の子を
捜そうと指を流した
前列に並ぶのは多分「護衛艦」の艦魂達，冬服のダブルスーツに。。
。これまたミスマッチなミニスカート姿だがそれはご愛敬というもの
じょじょに緩む鼻の下の落下を止まったのはその隊列に見えた大き
な姿に目がとまった時だった

「（しらね）さんの。。。。妹？」

あきらかに異質な風体
並ぶ少女たちの身の丈からすると頭二つは大きな姿
その艦魂は今では見ることになくなった「第一種正装」の詰め襟，
それの黒
つまり冬服を纏っていた
冬服の詰め襟は現在はないが
それ故に「帝国海軍」という血脈を色濃く現して見える

「男？」

髪もキレイに切りそろえているのか帽子からなびくことのない姿に
粉川はあまり良い印象を持てなかった

「敬礼！！」

艦橋をおり整列した隊員たちは基地司令に向けて礼をした
秋風と潮風はどちらも冷たく，この海にも冬が近づいている事を良く知らせていた

「回航ご苦労。。。。」
その寒さに乗ずるような対応
「イージス艦機密漏洩」「不審船」事件続き
おそらくどの基地司令の顔にも疲れが見えている事だろう
木枯らしに吹かれるまま眉間に秋の日差しの低さから深く掘られたように見える皺
その顔が間宮に告げた

「司令室に着ていただこう」

黒の常装に着替えた間宮も疲れていた
「すぐに伺います」
それを答える声は力がなかった
だがそれは間宮だけがそうと言うわけでもなかった
やっとで帰港したのに。。。どの隊員にも「悔しさ」が残ったままの回帰となっていた
みな一応に頭を下げていた

「不審船」を逃がしてしまったという苦みを口の中でかみ殺した姿
隊員名達のが解散した後まで船内で待っていた粉川はまばらになった人影にやっとデッキを降りた
周りは係留の任務の者達から
船内警備と雑務の者たちの出入りで顔を知った隊員はいなくなっていたが
粉川のスーツ姿には戸惑いの目を向け
胸にかけられたバッチで「触らぬ神」のように避けられた

「ふ～～～」

少しだけ斜めに傾いた日差しの下
深く息を吐き出す
肌寒い風に粉川は肩をすくめた

上陸前に連絡を取ったように
間宮たちの「審問」への後を追うように歩いていた
結局同業の間宮達に「落ち度はなかったか?」という事を上層部は聞きたがっている
そんなつまらない話しをしなければならない事に粉川の背筋は肌寒さも相まって丸くなっていたところだった

「敬礼!!!」

その声は女の声
さっき聞いた艦艇常務の隊員の声よりも張りつめたもので「怒り」さえ感じる

粉川が自分が呼び止められたのかと思い前のめりになっていた姿勢を急に正した。。。が
周りに自分を咎めているものがいない事に振り返って気がついた

桟橋にお迎えに出ていた「艦魂」達。。。それは「人」の解散が終わった今も整然と並んでいる，場所を移し赤煉瓦の倉庫近くに

到着したばかりの（こんごう）達の前，先ほど海から見たときにも「大きい」と感じた司令服の人物に向かい挨拶をしているのが見えた

「回航ご苦労であった」

その声はゆっくりとした口調
何にも動じない態度で寄港地に帰った護衛艦隊の面子を睨むように見回した
鋭い目に，きつく結ばれた口
「司令」と呼ばれるにふさわしい姿は返礼をしつつ彼女たちの前に出た

（しまかぜ）を一線前に
一歩退いたラインに（こんごう）（むらさめ）（いかづち）（さわぎり）と並んでいる
司令の後ろにはダブルの常装を着た「護衛艦，艦魂」と思われる少女たちと，さらに後ろに並ぶ海軍セーラーの一軍
緊張のせいか（さわぎり）は膝が震えている

「ではさっそく修練走５０周を行ってもらう。。。「袋」は（さわぎり），終了は2時間とする，準備出来次第始めよ」

敬礼をしていた（こんごう）達は顔色を変えず礼をしていた手を下ろすと，（しまかぜ）が（さわぎり）を背負った
「ごめん。。」
小さな声であやまる（さわぎり）

粉川は少し離れたところで様子を伺っていたが
彼女たちのまわりに漂う空気が張りつめているのは容易に解る
並ぶ海軍セーラー達の前
制服の上着をたたみ，所定の位置につく（こんごう）達に，誰も帰還の挨拶をしようとしない
それどころか沈黙のままみな「休め」の姿勢ではあるが整然と立ちつくしている

「護衛艦の艦魂」が一人前に出ると時計をチェックして声をあげた
「開始!!」
その声と共に（こんごう）達は走り始めた
まだ船から降りたまま，上着は脱いだが制服姿の状態で，それもかなりのスピードで倉庫の前を走り始めた

事の成り行きをココまで見ていた粉川はこれが「懲罰走」である事に気がついた
これは
「不審船事件」の罰
直感だったが，それによる罰があるのは間違っていると思えて
真っ直ぐ大柄の司令官の前に走っていった

「あの?」

近づいた粉川は。。。。。
ホントに目の前にいるのが「艦魂」なのかと戸惑ってしまった
確かに大きい
「あ。。。」
自分を見下ろすように立っている姿につい言葉が止まった

「敬礼！！！」

そんな驚きで止まってしまった粉川に大きな罵声が飛んだ
目の前の青い瞳。。。小さいながらもキツイ眼差しをもった女の子（艦魂）が睨んでいる
「司令に敬礼しろ！！」

相手は「艦魂」と，ふらりと近寄った粉川に容赦のない命令
かなり驚いた顔をさらしてしまった粉川だったが素直に命（命令）に従い敬礼した

「挨拶を忘れるな。。。。官姓名を名乗れ」

声はゆるやかではあるが紛れもなく「女」，だが。。。まったく初めての経験ともいえる
自分より大きな女に粉川は意識してはいなかったが体が一歩後ろに離れた
その位置で背筋と足を整えた
背広姿とはいえ
敬礼は自衛隊でも基本の挨拶
背筋を正し拝礼で右手をあげたまま

「防衛庁「情報部所属」粉川一等海尉であります」

背筋を正した粉川の前には
真っ直ぐ見ても相手の詰め襟しか目に入らないほどの長身の相手

「私は「佐世保鎮守府」第2護衛隊群旗艦だココの艦魂達の司令でもある」

粉川の口元は何とも言えぬ思い出引きつった
帽子を取った彼女は確かに。。。。（しらね）に。。。目は似ているがそれ以外は。。。体の大きさからして「規格外」だった
詰め襟の制服を優雅にまったく違和感なく着こなす姿は「宝塚」の男役のようにさえ見える
髪も短く，刈り上げにこそなってはいないが襟足も短く切りそろえられ
前髪も眉に掛からない長さだ

「鎮守府。。。ですか？」

上から見下ろす視線は粉川の質問に平然と答えた
「伝統墨守，唯我独尊。。。これらの海軍の血脈を伝えるのに「基地」などと品のない言葉は使いたくないのでね」

粉川が聞き返したのも無理はない
「鎮守府」という名称を使ったのはあの戦争が終わった時までで今はそんな古めかしい名前で呼ばれる事はないからだ
だが
佐世保基地が「鎮守府」。。。そう呼ばれていた頃ココにに着任した司令官はそうそうたる面子を持っていたし
たしかに伝統と強い血脈を受け継いだ土地とも言えた
かの東郷平八郎，南雲一忠も司令として着任している

「粉川一尉。。。姉から我らを見ることの出来る「人」の存在は聞いていたが?私に何かようか?」

(くらま)の態度は冷たい
自分たちを見られる「人」を。。。という話しだが初めて見るハズの相手なのに突き放されている

「あの。。。懲罰走は間違っていると思います!!今すぐ中止してください」
「どこが間違っているのだ?」

任務に対する罰を肉体的苦痛で与えるのは「旧軍隊的な罰」だと粉川は認識していた
ましてや
今回はまったくのイレギュラーだ

「彼女達だけで任務をこなしているわけではありません。。。我々人間にも責任のある事ですから。。。疲れて帰ったばかりの彼女達に罰を与えるのは良いとは言えません」

(くらま)の目は笑ってはいない
だが口元に卑屈な笑みを浮かべると斜めに粉川の顔を見下すよう視線を流し

「人よ。。人の任務は上下のつながりによって左右される物で,私に言わすのなら誰が責任を取っても一緒だ。事実この事件に君は関係しているのに責任を取ることはなく。。艦長や監部が取るだけで痛むところもなかろう」

多分に含まれる棘
（くらま）の言わんとしている責任の問題
自衛隊が問題を起こせばすぐに現場レベルの人切りが行われたりする事で対処してきていて「根本的な部分」では何も変えられていない。。。現場で。。同じく事件に関わったとしても逃げる者すらいるのが現状だ
その事に不満はあれど未だ改善策があるわけでもない
言葉の中に真実がある事に，二の句を無くした粉川の前「司令職」を持つ彼女は続けた

「我々は人とは違う。。。責任は常に「一艦一命（いっかんいちめい）」で取らねば成らん。そしてそれが艦隊行動であるのなら護衛艦隊の連帯責任であるのは明白だ。。我らは船の魂であるからな。。船が心を乱してどうなる？船に乗る物の命に関わる時もあるのだ。。だからこそ「修練」をさせる」

高度な責任の問題
（くらま）の意見はその奥にある物を見つめているのは解るが
粉川は反抗した

「ですが。。。護衛艦の魂だけで任務を遂行する事はできません。僕たち，人の命令あって任務と作戦行動は動く物です。彼女達だけが責任を取らされるのは納得出来ません」

（くらま）の視線には揺らぎが無い，口から出る信念には力さえ感じる

「しかし「人」は責任をとらん。。。。かつての「軍人達」は責任をとることが出来る己を名誉としてきたが今の貴様らは？どうだ？だからこそ我らだけでもその「責任」を忘れぬように修練する」

「責任は。。。。これから調査があって。。わかることで。。。。」
話しを続けようとする粉川の前に（くらま）は制止の手を出す

「人が責任を取ることを恐れていても。。我々が。。実戦にでる船が己の責務から解かれる事はない。艦隊を維持し，戦いの前に強く徒事する心を持つ「艦魂」を育てるのが私の任務だ」

「いや。。。だからと言って。。。。彼女達だけが」
粉川は倉庫の前を走り続ける（こんごう）達を見た
「袋」という役になった（さわぎり）を交代で背負いながら息を上げる護衛艦隊の彼女たち

「もういいか?私は忙しいのでな」
見下す目線がつまらぬ時間を取ったと粉川から顔をそらした時
「。。。。じゃ，僕も走りますよ。。。。」
突拍子もない返事に初めて（くらま）は表情を変えた

「走る?貴様が?」
今まで動かなかった眉を片方あげ反抗的な顔つきになった粉川を睨んだ

「責任をとれと言うならば。。。。僕もあの現場に居たわけですから，一緒に走るのが筋ってもんでしょう。。。「人」は責任も取らずに護衛艦に乗っている訳じゃありませんから!」

（くらま）は鼻で笑った
「好きにすればいい。。。ココは修練の港だ」
粉川は自らを立たせて敬礼をすると，その後ろで走り続ける（こんごう）達の元に走っていった
返礼をする前に自分の前に背中を見せて走って行く粉川を（くらま）

は不思議な物を見た目で暫し見つめていたがすぐに踵を返した

「（ちょうかい）！！」
「はっ！！」
（くらま）の横に従っていた青い瞳の少女はキリリと敬礼した
「時間内に修練が終われば（しまかぜ）に私の元に来るようにと伝えよ」
「はっ！！」

それだけの指示を飛ばすと（くらま）は倉庫の前を今一度だけ見た
走る艦魂のスピードにやっとでついて行く「人」。。。。

「くだらぬ「人」だ」

そう言うと赤煉瓦倉庫の中にある司令室に戻っていった

「何しにきはったん！！！」
すでに全身に汗を流し蒸気さえ発生させていた（いかづち）は自分の隣に並び走り出した粉川に声をあげた

「責任とって！！君たちと一緒に最後まで走る！！」

（さわぎり）を（しまかぜ）から受け取り背負っていた（こんごう）が怒鳴った
「オマエに関係ない事だろ！！」
「いいや！！関係大あり！！」

粉川はスーツを脱ぎ捨てネクタイを投げた
さっきまで木枯らしに丸まっていた体は燃えている

「無理しちゃダメですよ」

（しまかぜ）もすっかりびしょ濡れになった汗の顔にそれでも笑顔で

「途中で倒れるぞ!!」
（さわぎり）を背負いながらも馬力は断トツの（こんごう）は振り向くことなく言う
「心配してくれるの!!うれしいね!!こう見えてもラグビー部所属だったんだからいけるさ!!」

「何年前の話し～～」
「バカ!!誰がオマエの心配なんか!!」
（こんごう）は速度を上げた

粉川の中には解消されなかった蟠り
不審船事件での晴れぬ思い
（くらま）との責任の問題色々な不満が渦巻いていた

「頭で考えるよりスッキリする方法なんて!!!体動かすしかないって事だろ!!」

護衛艦隊プラス「人」は今，猛烈に走っていた

第十四話　修練の港（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～お客様を呼ぼう大作戦（激闘編）

やっと佐世保に着きました～～
長かったぁ
もちょっと短くてもよかったのですが。。。「不審船編」で頑張りすぎました
しかし。。。佐世保って言ったこと無いんですよね（爆死）
いやいや
そもそも九州に行った事がないんですよヒボシは。。。
だから
九州出身五島列島から来たって友達に色々聞きましたよ

漁場に「潜水艦」入りま～～す通信はいるとか（藁）
かけ網していい場所とか厳密に決まっているらしくて
それ以外の場所でやって例えば潜水艦に引っかけられて被害がでても弁償してもらえないとか。。。
まぁ
これは違反区域でそんな事やる砲に問題があるんでしょうがね

佐世保バーガーとか有名らしいですが
カレーも，有名なものもあるそうで一度は行ってみたいものです

さて。。。。
お客様大作戦。。。。。頓挫してるんですが。。。

いかづち　「アカンで弱音吐いとったら」
ヒボシ　「いや。。しかし。。。怖い」
むらさめ　「いつまでもウジウジやってんじゃねーよ!!そんなこともあろうと私が呼んだ!!（爆）」

全員　「。。。。。。。。。何?」
ヒボシ　「今なんていいました?。。。。。寝耳にジャムが（注.寝耳に水は痛いですむが（それもどうなの）寝耳にジャムが入ると三半規管を失います（よい子はマネしないでね））
しらね　「やっ。。。「大和長官」?。。。。。」
むらさめ　「おうよ!めでたく大円団を向かえ感動の最終回をご招待!伊東先生のとこから!!」
しまかぜ　「まあ!!「大和長官」!!」
ヒボシ　「逃げて!!!（さわぎりたん）!!」
むらさめ　「じゃぁぁぁぁぁああああん!!!」

全員　「。。。。。。。。。。誰?」

いかづち　「大和長官?。。。。でないような?」
さわぎり　「なにか雰囲気違うよ。。。。」

神龍様　「ココ何処ですか?」
むらさめ　「あっ!ココ艦魂物語のウラバナダイアルってとこ。。で,誰だったけあんた」
いかづち　「アホ!!!誰かわからん人つれてくんな!!!」
神龍様　「誰ですか!!あなた達は!!」

くらま　「たわけもの!!!!（怒）」鉄拳に吹っ飛ぶ（むらさめ）&巻き添え（いかづち）

ヒボシ　「ぬぉ！！」
くらま　「オマエたちは揃いもそろって！！何を無礼な事をしているか！！こちらにおわすお方は，あの「大和長官」と共に沖縄特攻作戦に参加された護衛戦艦「神龍」様だ！！」
ヒボシ　「おおっ！！神龍様！！」
しらね　「ヒボシなんであんたが知らないのよ！！厳罰じゃないの！！」
くらま　「部下の非礼をお詫び致します」
神龍様　「。。。。大きな。。。人ですね」（くらま）さん身長１８２センチ
くらま　「あちらのテーブルに紅茶を用意しております。。。どうぞ」
しまかぜ　「まぁ。。。（くらま）たら。。まるでお姫様を迎える王子様のようだわ」
いかづち　「マジにそう見えるから怖い」
しらね　「お茶会なら安全だしお話に参加しましょ」

しまかぜ　「急にお呼びだてしてすいませんでした」
しらね　「粗暴な艦魂が多くて困っておりまして。。ようく言いつけておきますのでお許しくださいませ」
神龍様　「前。。私が居なかったときに艦魂ラジオに来てくださった方ですよね」
しまかぜ　「はい。。そのせつは大和長官に良くして頂きました」
神龍様　「。。。。大和さん。。。。とんでもないことしませんでした。。」
しまかぜ　「いいえ～～ちまたで聞くような御武勇は私たちにはまだ早いとご披露くださいませんでしたわ」
神龍様　「よかった。。。」
しらね　「ちょっと。。（しまかぜ）私も紹介してよ！」
しまかぜ　「あっ，ご紹介しますね，こちら（しらね）と言います」

しらね　「初めまして。。。艦魂物語では美貌の司令官として活躍して。。」
むらさめ　「鬼のいない内にか？ああっ！！しらね！！」
いかづち　「嘘はあきまへん！！」
くらま　「二人とも。。。もう一度飛ばされたいのか？おとなしく座れ」
しらね　「いいじゃないのよぉぉ！！私だって司令なのよ！！」
神龍様　「（しらね）さんは司令官なんですか？」
しらね　「はいわたくしと。。この妹の（くらま）とが司令の任についております」
神龍様　「。。。。妹。。。。。女の人。。。だったんですか」
むらさめ「（カキーン）固まる」
いかづち「ブホォ。。。（お茶吐く）」
くらま　「どちらでも，神龍様のお好きなように思ってくだされば結構です」
ヒボシ　「話し進めて良い？。。。このままだと神龍様と（くらま）さんでバラの花園とか出来そうだから（藁）」

というわけでご紹介！！！
先ほども勘違い（むらさめ）が言ってましたが「護衛戦艦神龍～護りたいものがそこにある～」から
今回は。。。めっちゃ無理矢理来て頂きました「神龍様」です！！！

神龍様　「どうも初めまして。。。」
いかづち　「初めまして。。（いかづち）いいます」
さわぎり　「どうも。。（さわぎり）です」
ヒボシ　「ついに連載が終わってしまいましたがどうですか。。。」
神龍様　「う～～ん，連載が終わる前に私の体は死んじゃってるし。。魂だけで邂逅していたりで結構長く彷徨った果ての終わりでしたからまだ実感が持てないですね」

ヒボシ　「神龍様は秘匿で作られた特殊な戦艦という姿で登場されましたが。。。ご自身は意外と常識人ですよね」
神龍様　「どうでしょう。。。大和さんみたいに派手な方もいらっしゃれば，ちょっぴの気性の激しいお姉さんがいたり。。。本の虫の妹がいたりの中ですから「普通過ぎ」って感じにも見えたかもしれません」
しらね　「過酷な時代を走り抜けた生き方ですよね。。。普通である事は大切だっと思いますわ」
神龍様　「でも。。みんなが一生懸命で。。。みんな仲の良い姉妹で。。。（涙）」
くらま　「どうぞ（ハンケチ渡す（藁））」
しまかぜ　「ゆっくりお話いたしましょう」

むらさめ　「なぁ。。。私達ハブにされてるぞ」
いかづち　「そないな事いうても。。。（くらま）司令の前で暴れるわけにいきまへんがな」
むらさめ　「ちっ。。神龍ちゃん（ちゃん付け）大人しいなぁ。。（しらね）や（しまかぜ）向きで私達じゃなんか迷惑かけそうだな。。。」
いかづち　「わて，（しらね）はんが黒柳〇子に見えたわ」
むらさめ　「で。。なんで今回も（こんごう）はいないんだよ?」
いかづち　「声は掛けといたで。。。まだ引きこもっているのかな?」

その頃『こんごう』マイルーム

こんごう　「。。。。。。。。スキマ。。。。」
大和　「フフ元気にしていたか平成の撫子」

こんごう　「壁のスキマから。。。。。」
大和　「やはりココはいいな大和（伊）の字がなくて（藁）」
こんごう　「どうなさったりのでありましょうか。。。大和長官」
大和　「うん。。（こんごう），君の仲間が我らが姫君「神龍」を誘拐したのでちょっいとボーダー商事に頼んでココまでやってきたという次第だよ」
こんごう　「そんな不届き者が。。。私が打ち倒して。。やります！！」

飛び出して行く（ヲイヲイ）

一方お茶会

神龍様　「今はみんな仲良く温泉にいったりしますよ。。アメリカの艦魂とも仲良く」
くらま　「我が鎮守府にもアメリカ軍の強襲揚陸艦エセックスなど多くの艦が帰港しております。。毎年クリスマスは盛大にやる程に仲良くしております」
神龍様　「そうなんですか！！私達の時代の後は。。。そんなふうになっていくんですね」
しまかぜ　「そういえば。。神龍様の。。。お好きだった方」
神龍様　「へっ。。。そのその話しは。。」
しまかぜ　「いえいえ異性間プライベートの事はお聞きしませんわ。。その方の妹様？お子様達が海上自衛隊に入隊なさったと聞きまして」
神龍様　「そうなんですよね。。。嬉しいです」
しらね　「じゃあ私達に会う事があるかもしれませんわね」
しまかぜ　「是非お会いしたいわ」
さわぎり　「あたいの姉ちゃん達に先に会うね」

神龍様　「そうなんですか？」
さわぎり　「うん！！あたいの姉ちゃん2人，今練習艦になって「呉」にいるから」
神龍様　「呉。。。。。。。（涙ぐむ）思い出。。。いっぱい。。。。」

こんごう　「貴様ら！！！！」

お茶会の手前でたむろっていた（いかづち）と（むらさめ）の前に登場！！（こんごう）
むらさめ　「何？何？」
いかづち　「怒ってるで！！」
こんごう　「貴様ら！！神龍様を誘拐してきただと！！！」
むらさめ　「いや。。。大和長官がいなかったから。。。ボーっとしてた人ひっぱったら。。」
いかづち　「アホ！！（むらさめ）殺される！！」
こんごう　「大和長官から誘拐されたと届け出がきた！！問答無用で成敗する！！」
むらさめ　「マジか！！（こんごう）！！ちょっと落ち着け！！そんな位置からハープーン撃つのか！！」
こんごう　「全方位だ。。。どこにもにがさん！！ココなら「人」に邪魔される事はないから思い切りヤル」
いかづち　「ヤルなぁぁぁぁ」

しらね　「何やってんのあの子！！」
しまかぜ　「まあ。。。大変」
さわぎり　「しま姉！！落ち着いてるバヤイじゃないよぉぉ！！」
ヒボシ　「ああっついにココでも艦砲戦に突入なの。。。。」

こんごう　「死ねぇぇぇ！！！！」

神龍様　「だめぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

俊足の早さで（こんごう）の目の前に手を広げて立つ神龍様
目と鼻の先の二人
神龍様　「ダメ。。。。。」
こんごう　「う～～～～」目を回して倒れる
むらさめ　「倒れた。。。。。」
いかづち　「いきなりフェイズドアレイレーダーの真ん前遮られたから情報がフィードバックしてパンクした」
神龍様　「ダメです！姉妹であらそうなんて絶対に。。ダメです」
くらま　「（こんごう）！！」（なぐりかかろうとする）
神龍様　「ダメです！！（くらま）さんも。。。やめてください」
くらま　「しかしこんな無礼を」
神龍様　「どんな事があっても姉妹で争ったりはしないでください」

大和　「フハハハハハ，とんだ誤解でお茶を濁してしまったようだな」
しまかぜ　「大和長官。。。。」
しらね　「大和。。。長官。。。スキマから出てきたわよ」
くらま　「初めまして。。。佐世保鎮守府艦魂司令長官の（くらま）です」
さわぎり　「どーして平気で挨拶できるの。。（くらま）司令って」

大和　「でかいな。。。」
くらま　「いえ大和長官も。。。豊かな」
大和　「フフなかなか，わかっているな」
神龍様　「大和さん。。。。どんな登場ですか。。」
大和　「急にいなくなったから榛名が心配していたぞ」
くらま　「申し訳ありません。。。不出来な部下が」
大和　「妹達だろう。。。部下などと言うなよ」

しまかぜ　「長官おひさしぶりです」
大和　「おおっ（しまかぜ）殿。。やはり良い女ぶりだ」
神龍様　「大和さん！！」
大和　「向かえに来たぞ。。。各先生方と艦魂がお祝いに来てくださっている」
しまかぜ　「すいません忙しいところを無理矢理」
大和　「いや。。良い物もみれた」

しまかぜ　「（こんごう。。。相変わらずなんですけどね」
大和　「いや。。。責任感が強いからこうなった神龍も許してヤレ」
神龍様　「わかってます。。。」
むらさめ　「すいません。。わたしが突然ひっぱっちゃったもんで。。」
神龍様　「ううん。。ほんのちょっとの時間だったけど今の日本を護る艦魂達にあえてたのしかったです！！」
いかづち　「わてもあえて嬉しかったです」
しらね　「まったく（こんごう）は。。。」
大和　「良い良い。。。（こんごう）。。私の命令で飛び込ませてしまったから許してやってくれ。。。では帰るとしよう」
神龍様　「はい！！」
大和　「（くらま）君，今度飲みにこい」
くらま　「喜んで」
神龍様　「また機会があれば！！」
ヒボシ　「ありがとうございました！！！」

ヒボシ　「。。。。ふ～～一時はどうなってしまうかとおもいましたが。。」
しらね　「ホントよ。。ココでも草薙先生のようにタフガイにならないと生きていけないような日々起こるのかと。。。心配しちゃっ

たわ」
しまかぜ　「（こんごう）は大丈夫？」
いかづち　「パンクしてます。。。。大丈夫かな？」
むらさめ　「今のうちにハープーンはずしとけ！」
さわぎり　「もらしちゃいそうになったよぉぉ」

みんな　（爆笑）

そんなこんなでお茶会終了～～～
私は楽しかったです。。。。
どんなでしょう
有終の美を飾った伊東先生の作品を汚してなければよいのですが。。。。

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～（涙）

第十五話　生誕の楔（前書き）

これまで。。。
艦魂の名前を（〇〇）と入れてまいりましたが，これだとふりがなの扱いになってしまう事が発覚！！
元帥よりもご指摘もありこれはイカン！！という事もあり今回より改変で『〇〇』になりました。。。。。ふ～～
よく考えなくてもウメ様がそうなりますって書いてましたよね。。。。（反省）。。。

第十五話　生誕の楔

「アホでしたなぁ。。。」

滝を通り越した汗で制服のブラウスが肌に張り付いた気持ちの悪さにボタンを弛めながら，秋の空のしたに発熱と蒸気を揺らし『いかづち』は「解散」の号令で終わったばかりの「修練走」を振り返った最初の感想をもらした
１０周を回ったところから急に「一緒に走る」と飛び込んできた粉川は２０周を向かえたところで
司令部の呼び出しに掛かってしまい，今はココにはいなかったが

「戻ったら！！絶対最後まで走るから！！」

と
息が上がり絶え絶えの呼吸の中にも
空元気フル回転の声で，誰に聞かせたいのか？大声で叫ぶと。。。
これまた走って司令部室に向かっていった
その後ろ姿はすでに膝が笑っているようにも見えて
思いだした姿に『いかづち』はアホなと漏らしたのだ

緊迫していた「修練走」は終了の合図で
並んだ艦魂たちも解散になり夕刻の時までの自由時間に入っていた
そもそも朝の課業が終われば，よほどの事がないかぎり昼からの時間は自由に過ごしている艦魂達だ
終わりと同時に煉瓦倉庫にある部屋に戻る者達
護衛艦隊に挨拶する者たちとバラバラと行動していた

「何がしたいんかな？わてらと一緒に走るなんて無謀やで」

外にもかかわらずブラウスを脱ぎブラトップだけの状態になった『むらさめ』は立ち上がる自分の湯気の中で言った
そもそも海の上を３０ノットで走る護衛艦の艦魂。。。。
修練走の５０周を二時間で走るなんて考えて見なくても「人」には無理な話だ
そんな
足もとには『さわぎり』
自分が走った訳ではないが，人の背中に何もせず，逆に負担とならずに背負われ続けるのもかなり辛いのか
汗にまみれて肩で息していた

「粉川って。。。。今まで見た「人」と。。。。なんか違う感じだな」

キラキラお目々の後輩の艦魂に囲まれ
どうぞどうぞと水やらタオルを差し出され『むらさめさま』と騒がれる間を抜けて
ボトルを口に付けていた『むらさめ』は腰に手を当てた仁王立ちで
司令部室のある煉瓦倉庫上部を見ていた

「ほんなん。。。５０年も，わてらを見られた人がおらんから。。
変わって見えるんとちゃうのん？」
『さわぎり』の背中をさすりながら『いかづち』はタオルを探した
「ホレ」
後輩から貰ったタオルを妹に投げて

「とにかく船から荷物持ってくるぜ！！」
「わてもそうしょ」

そう言うと
タオルだけを肩に羽織って歩き出した
「。。。。５０年。。。。。なんでそないに「人」と会うことがなかったのかな？」
振り向き
粉川が走っていった道をみながらつぶやいた

「お疲れ様。。。。お姉ちゃん」

へたり込む事なく立ったまま息を整えていた『こんごう』にタオルと水を差しだしたのは『ちょうかい』だった
身の丈は『こんごう』に比べると１０センチは低く，髪も黒のショートヘア
ただ二人が同型の姉妹である事を現す「青い目」が際だって見える

『こんごう』は笑顔の妹から差し出されたタオルを見つめた
他の護衛艦達と変わらず汗で肌に張り付いたブラウスの胸ボタンをはずす，姉に

「風邪ひかないように早くお風呂に行こう！」

努めて明るく『ちょうかい』は話しかけるが『こんごう』は目で妹を見るだけで声をかけようとはしない
走ることで赤くなった顔だが
表情には「暖かさ」がない
どこか張りつめたように暗い眼差しのままタオルだけ受け取ると背を向けそのまま光の中に消えていった

「酷いな。。せっかくタオルまで持ってきたのに無言なんて。。」

『ちょうかい』の隣に立っていた『はまな』が目の前，妹に対しても無言のまま消えていった『こんごう』の姿に愚痴った

「いいの。。。お姉ちゃん。。今，いっぱいいっぱいだから」

『ちょうかい』は今度の回航で色々な事が有りすぎた護衛艦隊の心を気遣った
自分がその場に居合わせていたとしても。。。きっと同じぐらい目の回る事だっだろうと思っていた

「そんなもんかね。。。姉妹なんだからもっと仲良くしててもいいじゃない」

『はまな』は三人姉妹の一番末の子
だけど「補給艦」という任務の関係上滅多に会うことのできない姉妹だから
近くにいる同型艦の「姉」の存在を羨ましく思っていた

「お姉ちゃんは，責任感が強すぎるから。私達の分まで色々背負い込んじゃって大変なの」

そういうと
笑顔で振り返り
もう一つの任務に走った

「『しまかぜ』一佐！回航お疲れ様でございました！」

両手をあげ伸びをしていた『しまかぜ』は自分の前で敬礼する『ちょうかい』に笑顔で答えた

「あ～～お疲れ様！普通に普通に！」
堅苦しい敬礼を解くようにと手で合図
汗で濡れた服の上にバスタオルを掛けた『しまかぜ』は息を十分に整えた様子で

「元気そうね。。みんな」

この基地でもお姉さんとして慕われている『しまかぜ』
「はい！！みな変わりなく頑張っております！！」

伸びた手をおろし微笑む『しまかぜ』は
「お土産はないわよ」と笑った
「いえ。。そうではないのですが。。『くらま』司令からです！修練走が終わったら司令室に来るようにとの事です！」

何もいわれなくても手荷物を運ぶ『はまな』と『ちょうかい』に挟まれながら歩く『しまかぜ』は腕時計を見ながら答えた

「１５分後でいいかしら？」
両手をあげ汗まみれでシャワー必須とゼスチャーして見せた
「了解です！！今，電信しておきます」
電信
その言葉と同時に『ちょうかい』の目が一瞬だけ光った
艦魂の持つ「テレパス」の力は現代では不可思議語の領域を抜け「電信」という堅苦しい言葉になっていたが便利な能力である事にかわりなかった

「ご苦労だった」

15分後，司令室に入った『しまかぜ』の前『くらま』は相変わらずの制服姿で窓の外を眺めながら背中越しに言った
煉瓦倉庫
佐世保基地の中にいくつも並ぶ骨董級の倉庫の一つが艦魂達が寝泊まりする寄宿舎兼司令部になっていた
もちろん，この事は艦魂以外が知ることはなく「人」の目にはただの倉庫にしか見えないのが現実だ

部屋の中には執務用の大きなテーブルがポツンと置かれ
パソコンというような現代の必需品的な機械はない
書棚には「大日本帝国海軍史」と黒表紙に金字で書かれた本。。。
それに準ずるように並ぶ，大東亜の戦争を戦った艦たちの本，写真と資料
テーブルの横には大きな「日本国国旗」と「自衛艦旗」が掲揚用のポールに着けられ並べられている。。。その上に佐世保鎮守府の色あせた記章が飾られている
テーブル前に
応接用に作られたソファーは革張りだが，どこかアンティークな暖かみの曲線で装飾された作り
全体を見回すと現代的ではなく
古い海軍の時代をそのまま移築したような部屋

「座ってくれ」

まだ濡れた髪のままタオルを片手で隠すようにして立っていた『しまかぜ』に『くらま』は手で着座を促した
「髪を拭きながらで良い」
対応はやわらかで部下に対するものとはあきらかに違っていた

「君にまで修練走を科さね成らなかった事を」
「連帯責任！」

まだ硬い謝罪の文句を並べる『くらま』の言葉を『しまかぜ』は遮った

「いい運動になったわ，何もしないで年寄り扱いなんて御免だから」
「そう言ってくれると助かる」
対面するソファーに腰を降ろした『くらま』は初めて苦笑いにも似た表情を見せた

『しまかぜ』と『くらま』は少しのタイムラグをもってはいたが
同期の桜ともいえる仲だった
お互い艦としての用途が違う『くらま』は誕生当時から各艦隊群の旗艦として産まれ
『しまかぜ』は護衛艦隊の要「ミサイル護衛艦」として産まれたためお互いが役割に徹していたが
気心しれる仲としても長い

テーブルに用意されていたポットから
琥珀色の紅茶を注ぐと『くらま』は慎重な面持ちに戻って
「私が生きているうちは修練を墨守する方針は守りたいと思っている」

今までも自分の使命としてきた言葉を口にした
「わかっているわ」
『しまかぜ』はその決意に変わらぬ同意を告げた
「ありがとう」

『くらま』は同意を確認した事で少し安心したようだったが
表情に残る暗さは変わらなかった
重い口調

「『こんごう』の事だが。。。。」

ティーカップを持つと目の前に座る『しまかぜ』に書類を見せた
それは
「不審船事件」の経過を記したものだった

「人の判断するところでの停止命令は絶対だが，それに対応する事のできない精神状態には問題があると，私は判断している」

攻撃準備停止命令

防衛庁から発された艦砲の許可とは別に下された間宮（間宮艦長）の命令
その後の『こんごう』の状態を『くらま』はリンク１６によって正確に把握していた
『こんごう』は。。。。停止のという命令に耐えられなかった
それどころか自分を律する事が出来ず『むらさめ』に殴打を加えるという失態まで晒していた
それが長じて海保の『はやと』に対する殴打事件を『むらさめ』が起こす事になった事は『くらま』の知るところになっていた

「前にもこの事は討論したが『こんごう』の事は『しまかぜ』。。。君の負担にもなりかねない。。人の下す「人事」にまで私達が介入する力は無いが，鎮守府にいる内は私が鍛え直す事もできる」
「ダメよ『くらま』。。。『こんごう』の事は私に任せて。。。そう決めたハズでしょ」

慎重に言葉を選ぶように話す『くらま』に
『しまかぜ』は笑顔ながらも断ずるように言った

「しかし。。。『こんごう』はあまりに不安定だ。。。これからの防衛の要となる艦があんな事ではこまる」

「忘れたの？」

事実に基づく危惧
司令官としての勤めを的確に果たそうとする『くらま』の前
優しい顔の中にも厳いしく瞳を光らせた『しまかぜ』はカップを下ろして

「真っ白な姿で産まれてきたあの子。。。その心を過剰な期待で押しつぶした時の事。。。忘れたわけじゃないでしょ」

『くらま』は反論を口の中に留めた
とても続けて責務を説くことは出来なかった
カップを手にしたまま。。。テーブルの横に掲げられた自衛隊旗を見つめつぶやいた

「生誕の楔。。。。。」

それは『こんごう』誕生の時の。。。。。思い出

『こんごう』

その名前が艦魂達の元に届いたのは新造艦の進水式の一年も前だった
名前の選定が人の手によってに成されている以上
自分たちが関わる事はないものではあったが

この名はどの艦魂にとっても驚きと期待があった事は事実
それ以上に「人」の反応は過剰だった

戦艦金剛

かの戦争当時艦齢３０という長きにわたり日本の国防を勤めた有名艦であり
『大和』『武蔵』のように秘匿戦艦でなく
当時一般的に国民に知れ渡り，名ある戦艦としては一二を争う

国民的「戦艦」

四姉妹の中でも特に有名であった「金剛」
人の過剰な反応は対岸の赤き国にも飛び火していた
「大日本帝国海軍復活」
反日の煽り文句として「赤」を支援する新聞や無責任なマスコミに
書き叩かれる事も多かった

そんな中で「彼女」は産まれた

「今度こそ。。。。。」

青天に恵まれた中ではあったが
ドックヤードのコンクリート壁に走る風は冷たく変わり始めていた，

その日
進水式典のために寄港していた『しらね』はスカート姿にもかかわらず黒の詰め襟の制服を来て
今と比べると髪も幾分短く，バレッタでキレイに纏めた姿の彼女は，興奮の中にいた
何度も身だしなみを整え
目の前にある船体を羨望の眼差しで見ていた

艦魂たちには古い逸話があった

「同種，同業の任に着く船の魂は受け継がれる」

どこよりか?逸話として流れていた話しではあったが
数多の艦魂達によって語り継がれたこの話しに『しらね』は希望を求めていた
産まれおおよそ３０年で「死」へ向かう艦魂たちにとって「魂の引き継ぎ」は希望であった
そして
その魂「戦艦金剛」という名を受け継ぐ『こんごう』に帝国海軍の艦魂が受け継がれる事が望みだった
「大東亜戦争」で死に絶えた栄えある帝国海軍の「魂」それが受け継がれる事は
海上自衛隊と名を変えたが自分たちが帝国海軍の末裔である事の立証
断絶により，まるで別物のように言われる自分たちにとっての生きるべき指標だった

だが現実はままならないもの

『しらね』の姉であるＤＤＨ（ヘリコプター搭載護衛艦）の『はるな』『ひえい』はその名を継ぎながらも帝国海軍の魂。。。。。心

を継ぐことは出来ていなかった
理由は「戦艦」という業務を継ぐ艦ではなかった事。。。。そう『しらね』は考えていた
だからこそ。。。今度は願いが叶うのではという希望があった

「今度は絶対に魂を継ぐわ。。。だって戦艦に匹敵する艦(ふね)なんだから」

「国の楯」イージスという名の艦

今まで見た艦とは大きく違うシルエット
巨大な艦橋部に着けられた，最新鋭のレーダー「千里の瞳」を持つ
戦いの女神はすぐそこに見えた

ドックから海に向かい斜めに船体を構えた艦の舳先に「女神の結晶」が輝いて見える
灰色で無機質な「軍事に携わる船」を現す無彩の中，宝石のように輝く結晶
これは人には見ることのできない「艦魂」の誕生を現す光
プリズムのように角張った円筒の中
まだ眠りの中にある裸の女神の姿は七色の光の中に隠されていた

人が並ぶドックヤードとは別の位置に
『しらね』『はるな』『しまかぜ』その他の艦艇は整然と並んでいた

「防衛庁長官より。。。。命名『こんごう』」

栄えある名前は音高く宣言され，三貴子(みはしらのうずのみこ)の銀の斧により支綱を切ら

れ船体は滑らかに海に入る
その時
人には見えぬ女神の結晶は輝きを増して，割れ
微塵かけらを海に落とした。「日章旗」をはためかせた船首の元『こんごう』は目を開いた

『こんごう』の前に世界が開かれた瞬間だった

「ココ。。。。。何処？」
眼前に広がり遠ざかって行く世界
多くの手に握られた「日の丸」。。。困惑の顔の中にある「笑顔」と歓声の中にある「罵倒」
あきらかに『こんごう』は混乱していた
それは『しらね』の目にも映っていた
魂を受け継いだのならこんな混乱はあり得ない。。。。もっと威風堂々と日章旗をはためかせ。。。
自分達の魂をかつての海軍の繋ぐ旗手となるべき存在は，目の前にある状況に震える少女に過ぎなかった

「嘘よ。。。立って！！」

『しらね』は叫び隊列から飛び出した
その声に反するように『こんごう』は困惑のまま船首に蹲った
震える体，裸の自分が何故ココにいるかがわからない。。。。。
たくさんの声と「心」が自分の中に入り込む
「帝国海軍」「軍国主義の復活」。。。。「期待の艦」「国の楯」
頭を抱え，耳を塞ぐ，目を回し助けを探す

何故。。。。自分がココに産まれたのか？

「『こんごう』！！」

船首に蹲った『こんごう』に声を掛けたのは，たまらぬ想いで船に飛び移った『しらね』だった

「何？何？これ。。。。私。。。どうしてこんな所にいるの？」

「立って！！！」

自分の目の前に現れた『しらね』にさえ恐れをなしている『こんごう』は裸の体を隠しながら

叫んだ

「ココは何処！！！なんでこんな所に私はいるの！！」

『しらね』の目に大粒の涙

震える手が蹲ったままの『こんごう』の頬を平手で殴った

「嘘よ！！！嘘！！！あなたは「金剛」！立ってよ！！！」

「何？。。。なんで。。。殴るの？」

殴られた意味さえわからない『こんごう』は立つことなど出来なかった

ただ手を甲板につき『しらね』を睨み，わめき散らした

「怖いよ！！！怖いよ！！！何！！！なんで怒るの！！！私が何したの！！！」

産まれたばかりの魂

何もわからない世界

手探りで掴む冷たい風の中『こんごう』は己の身に起こった不条理に怒鳴った

そんな姿にら遠慮する事なく
『しらね』は相手の顔を掴まえると涙の目で怒鳴り返した

「ねぇ!!どうしてなの!!「金剛」の魂は。。。何処にあるの!!帝国海軍の魂は何処にあるの!!」

そのまま手を大きく振りかぶった
苛立ちと怒り
どうにもならない気持ち
大きかった期待に反した結果の前『しらね』は自分を律する事が出来なかった
止められない。。。。切なる願い

音高い殴打

目の前『しらね』の平手を受けたのは『はるな』だった

「殴るなら。。。。私を殴りなさい。。。私も魂を継ぐことが出来なかったのだから」
『はるな』の目にも涙があった
それが殴打による痛みで出たものではないのは誰の目にもわかっていた

期待と希望
戦争による絶滅。。。断絶の向こうに新たに歩み出した護衛艦達の魂は。。。。帝国海軍のそれとは違うのか?
『しらね』は崩れた

「どうして!!どうして,わたくしたちは。。。魂を継げないの!!」

『こんごう』の船首に集まった艦魂達にあったのは悲しみだった
『しらね』は甲板に手を打ちつけて泣いた

「わたくしが。。。わたくしこそが『こんごう』を継げば。。。魂は繋がったのよ!!きっと」
「『しらね』!!」
『はるな』は妹の頬を張った
「なんて事を言うの!!」

そもそも
『こんごう』と言う名を継ぐのは『しらね』だった。。。。
だが
人の意志がそれを変え彼女の名前は『しらね』になった。。。。
産まれた時から司令官という任を義務づけられていた『しらね』にとってそれが一番の残念であり
それ故に希望はだれよりも大きかった

冷たい風の中
震える女神は。。。。
自分誕生が一部の人と，多くの艦魂に望まれていなかった事に，ただ呆然としていた
誰も自分を見てはくれない。。。。
なのに産まれてしまった

涙でいっぱいの目は
言葉を閉ざしてしまっていた
『こんごう』と言う名前により
目の前で行われた争いが恐怖であり悲しみだった

「初めまして，『こんごう』」

裸のまま体をすくませた肩に，制服を掛けた手は優しく『こんごう』の体を覆った

「私は『しまかぜ』。。。。。貴女の姉よ」

猜疑の顔しか向けられないほど傷ついた『こんごう』は，優しい笑みで自分の前に立った『しまかぜ』を信じる事ができなかったがその疑いは彼女の温かい胸に抱きしめられた事で消えた

「ごめんなさい。。みんな貴女が産まれてくるのを待っていたのよ。。。それだけは信じて」

優しい微笑みと温かい抱擁
震えた体を覆う

『こんごう』は大きな声で泣いた

それは悲しすぎる誕生の産声だった

第十五話　生誕の楔（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～（小説という世界）

今回。。。。『こんごう』生誕の話しに際して

艦魂の誕生という。。。。なんかとってもデリケートな部分を書きました

艦魂の設定についての論議は元帥のところで少しなされていた矢先だったので。。。

実は迷いましたが

これがないと後の話しを続けてイケナイので書きました

なので。。。。

ヒボシは。。。。はぐれ者の扱いを受けてしまう可能性もあります（涙）

後。。。

快くこの作品を読んでくださる皆様に，今回の誕生という設定は「艦魂物語」においての物でありますから，他所でこういう話しは無いのが当たり前ですから!!

他の先生に迷惑はかけないでくださいね～～～

心からお願いします～～～

さて次です。。。

期を取り直して。。メッセーから。。。

「イージス艦が出てくるのは楽しいのですが，あたごや，あしがらの名前を見ないのですが?あしがらは佐世保にいますよ～～」

そうです
現在Ｈ２０『あしがら』は佐世保にいます！！が。。。
この物語ではまだ。。。いません（爆）
まだ作られてないんです！！
つまりですね。。。。
『あたご』『あしがら』が出てくる以前の話しという事になりますが。。。
これも小説設定に基づくものです

一応
最初にこの小説を書くときに注意書きしました
年号を断定しませんと
ですが
『あしがら』が出てこない，『おおすみ』が出てきても『くにさき』が出てくる事がないような時間帯と理解して頂きたいとおもっております
厳密に年代設定をすると
「事件」の有無にまでに及んでしまう事が多々でてくるので
そこはフィクションという事でご了承ください。。。。

さてと。。。。。
お客様を呼ぼう大作戦。。。。この先を考えるのが怖くて逃げているヒボシ～～～～

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第十六話　金剛の影（前書き）

忙しいです～～
めっちゃ忙しいです～～～
寝られないのは何も『こんごう』だけじゃありませんよぉぉぉ

第十六話　金剛の影

『こんごう』は殺風景で何もな自室に戻っていた
四角四面の部屋の中は小さな照明が一つと一人で寝るには少しばかり大きめのベッドだけがある

ココにくるまでの3日間。。。。。眠れなかった
嵐のあの夜から，『あかいし』に殴られ責められた日から一睡もできなかった
部屋に閉じこもり続けていたのに眠ることはなく
目が光り，むしろ冴える感覚。。。。。
まだ。。。。自分の目の前を逃げて行く「不審船」の姿をはっきりと覚えていた
網膜に写った姿は日を追えば追うほどに鮮明になる一方で。。。。。
心に負担をかけ続けていた

そこにきての「修練走」
走ることで目に残っていた船の姿は霞んだが
休まなかった精神と体に残っていた疲労が
両肩に乗り瞼をゆっくりと上下させ始めていた

ぼんやりと小さな照明を見つめる
やっと
闇に消えて行く「不審船」

肩で息していた自分が疲労で，足をふらつかせている事に気がつくとボタンを千切ってしまいそうな勢いで，汗で肌に張り付いていたブ

ラウスを脱ぐ
片手でスカートのホックを解き
身につけている何もかもを脱ぎ捨てると，灰色の部屋の中にある唯一の家具であるベッドへ
キレイにメイキングされたシーツの波間に頭から飛び込んだ

「寝ちゃダメ。。。。」

枕に置いた頭
乱れた自分の髪を見ながら「無理な注文」とわかっていながらもつぶやく
今の時間から2時間
夕刻，今日は戻ってきた艦隊をかこんで食堂にて食事会がある
それまでの少しを眠りたい

白い肌は汗のままシーツに張り付き
散らばった栗毛を顔から除ける
床に落ちたままの掛け布団
後は何もない部屋

繰り返すように
ゆっくりと落ちてくる瞼の中で

「寝たら。。。。ダメ。。。」

疲れという錘がベッドの上にうつ伏せた体にのしかかる
でも
眠りたくない
『こんごう』は何度か首を振った

こんな時に寝ると。。。見る夢は決まっている
「あの日」の夢を見てしまう。。。。

あの日。。。。。
近寄る冬の足音と，最初の寒風が吹いた日

産まれてしまった日の夢。。。。。

進水式を終えて
海上での最終艤装に入ったイージス艦こんごうの中『こんごう』は
誰に会うこともなく部屋の中。。。片隅に蹲っていた
眠っている訳ではなく
目は開かれたまま。。。。空虚に四面の部屋片隅を見つめていた

そのころこの部屋には
まだ照明はなく薄暗い中で膝を抱え「音」を聞いていた

船内に響くのは
艤装の工事のための音と
海の波

自分の近くを走る船の音

産まれてしまった日から向こう『こんごう』は
一度も外にでる事はなかった
外は。。。。「恐怖」でしかなかった

自分の前に立つ「艦魂」達の目を思い出すと涙が出た

歓迎ではない白い目線が
何もわからない自分を刺し通す
小さく身を丸め見上げた前にあった「絶望」。。。。。悲しみに崩れた艦魂達の姿。。。

「金剛。。。。。」

口々に放たれた「罵倒」にしか聞こえなかった雑音の中。。。。唯一覚えていた単語
それが何なのかもわからなかったが
艦魂達がそれを「欲していた」事だけがわかり。。。
自分の誕生がそれに「足りなかった」事だけが理解できた

「『こんごう』」

ドアのない部屋の壁をノックする人
艤装に入ってから一度も部屋でない『こんごう』の元に課業が終わればかならず訪れる人がいた
『しまかぜ』
この日は珍しく朝から尋ねて来ていた

「いるんでしょ。。。今日は良い天気よ。外で一緒にご飯食べよう！」

もう半年は部屋にこもっている
基本的には飲食を必要としなし艦魂だが
現代では食べることも一つの行事として行われていた

人まねで行われたこの行事はお互いの親睦を深めるのにもってこいのコミュニケーションであり
リムパックなどに参加すれは他国の艦魂達との交流として欠かせないものとなっていた

「木の芽時だよ。寒くもないし，お茶しましょ」

『こんごう』は『しまかぜ』とだけ少しの交流を持っていたが
後は誰が尋ねても返事もしなかった
最初の頃は『くらま』司令と呼ばれる艦魂が，．その力で無理矢理部屋にドアを作ろうともしたが
そういう自分に与えられる「恐怖」を『しまかぜ』が抑えていてくれるのがわかってから少ないながらの交流を持つようになった

「姉さん。。。。「金剛」て何？」

『しまかぜ』は部屋の向こうの壁の前で驚いた
今までは話しかけられる言葉にオウム返しのような返事しかしなかった『こんごう』が初めて自分に質問をした事に一瞬止まってしまった
「姉さん？」
帰らない返事に，声は震えていた

「金剛は。。。前の戦争の時に日本を守って戦った「お姉さん」の名前よ」

相手を不安にさせない優しい声は返事と共に壁に顔を寄せて続けた
「ねぇ。。外に出ない？今日は演習で『くらま』司令はいないのよ。

「金剛姉さん」の事を教えてあげるから」

その日
誕生から半年を経て『こんごう』は初めて外の世界に出た
ずっと部屋にこもっていたため
着慣れない制服姿の自分が恥ずかしい，スカートの裾を何度も気にしながら歩いた
あの日と違う外の世界
寒さを近づけていた風は力を失い，緩やかな小春日和の暖かさを感じる
二人は佐世保の煉瓦倉庫にある司令部兼寄宿舎に向かう細道を歩き図書のある部屋に向かった
街路樹に宿り始めた新しい命の緑に目を白黒させて驚き
灰色の箱から出た『こんごう』はゆっくりと外の世界の景色を味わった

途中，何人かの護衛艦や佐世保基地内の艦艇にあった。
気まずさからか俯くだけで敬礼もできなかったが，あの日と違い，みんな元気に挨拶をしてくれる事に気がついた

煉瓦倉庫の一階
吹き抜けの講堂を横切ったところに，人の目には見ることの出来ないテラスを持つ日当たりの良い図書室兼奥まった書棚があった
『くらま』は修練と共に色々な事を学ぶ必要がある事を海外の艦魂達から聞き
文武両道としてこの部屋を設置していた
並ぶ書物は「洋書」も数多くある，佐世保に寄港するアメリカの艦魂や観艦式に訪れたついでにココに立ち寄る，西側の船達から寄贈された物も多い

朝の課業の時間のせいか誰もいないガランと開けた大テーブルの向こうにある小さなデスクに『しまかぜ』は予備のイスと一緒に本を何冊か持ってきた

「座って」

手元に持った何冊の方を下ろすと
煤けた古いデスクのへりを名残惜しそうに触りながら，最初の本を出す
分厚い革のブックカバーの下
「大日本帝国海軍全艦艇」と書かれた本を開いた

モノクロの写真と図面化された艦艇の姿

「これが「戦艦金剛」よ」

『こんごう』は写真を覗き込んだ
自分とは似ても似つかない船体
ＣＶ鋼板と錨を幾重も重ねた無骨な体ながらも曲線を活かしたキレイなラインの船底
木目の甲板を持ち
小山のように折り重なる「主砲」その上にある艦橋の姿は「骨」の顔のようにも見えた

「金剛？」
「そう，古い船でしょ。でもね３０年もこの国を守って戦ったすごい船なんだよ」

『こんごう』は指を写真の上に滑らせ「金剛」の体をなぞった
この艦の名前を貰った事

この艦の魂は？

「顔の写真はないの？」

それは艦魂としては当たり前の質問だった
この戦艦の艦魂の顔が見たい
『しまかぜ』は悲しそうに目を閉じた
「ないの。。。。激しい戦争だったからね。。残ってはいないの」

眉間による悲しみは幼い妹についた「嘘」による自責のもの
いずれそれは知ることになる
艦艇の写真が残っていれば「顔」の写真は艦魂ならば見える。。。。
そこには「断絶」があった事の証拠が残っている事を。。。。『しまかぜ』は今は言えなかった

「でも。。きっとキレイな人だったと思うよ。そしてね，この人も貴女と同じ「青い目」をしていたハズよ」

『しまかぜ』の言葉に顔を上げた『こんごう』は自分の目が青い事も気にしていた
「どうして？」
『しまかぜ』は目の前にある本のページをめくって「戦艦金剛」の出生の説明を指さした

「金剛姉さんはイギリスで生まれたの，ヴィッカース社に日本海軍が頼んで作られた。当時最高の戦艦であり。最後まで最高であり続けた人なのよ」

最高の戦艦。。。。
『こんごう』はゆっくりとその記事を読んでいった
華々しい戦績と，船としての人生を終えるまでの全てに渡る「戦争」
終焉の日まで海を走り続けた姿
食い入るように何度も写真と記事を見ると，低いトーンで答えた

「死んだんでしょ」

写真を見る虚ろな目の答えは『しまかぜ』の予想していた答えとは
違った
「ええっ。。。前の戦争でね」
「もういない人なんだ。。。死んだ人なんだ」
自分に言い聞かすように『こんごう』は肩を震わせながらつぶやき
続けた

「もう。。。こんな人はいない」
「『こんごう』？」

名前を呼ばれた顔は。。。涙で一杯の瞳で『しまかぜ』を睨んでいた

「私じゃない！！！こんな人知らない！！私じゃない！！」

そう言うと目の前にあった本を突き放して立ち上がった
「『こんごう』？」
首を横に激しく振る「拒絶」の合図

「こんな！！死んだ人と私を一緒にしないで！！私はしらない！！

こんな人知らない！！」
手に痙攣が走っている
猛烈な拒否反応が呼吸を奪うほどに。。。怒りとも迷いともとれるが
明らかな混乱

「『こんごう』！！落ち着いて！！」
『しまかぜ』は目の前で今にも泣き出しそうな妹を抱きしめようと
手を伸ばしたが
体はすり抜け書棚の向こうに逃げた

「イヤ！！イヤ！！そんな名前いらない！！呼ばないで！！」

日当たりの良かったテラスから闇に続く積層された書庫の中へ
体のあちこちをぶつけながら『こんごう』は逃げた
自分の身の丈以上に大きな期待
それが「金剛の影」であった事に恐怖した

『しまかぜ』は走り書庫に入るとまず扉を閉めた
お互いが走り回って彼女を見失ってしまわないように鍵を下ろすと
呼んだ

「『こんごう』！！『こんごう』！！」

『しまかぜ』の予想していた結果とは違った
「金剛」の姿を見ることで。。。彼女の中にあるわだかまりを少し
でも溶かす事が出来ると思っていた自分が甘かったと頭を小突いた
図書室と同じぐらいの広さの中
対照的に灯りのない部屋に向かい名前を呼んだ

「『こんごう』！！」

「イヤ！！！！」

ヒステリックに掠れた声
涙という水では心に入った亀裂を潤す事が出来ない事を如実に現していた
積み上げられた書籍が崩れ，彼女が走っていた跡がわかる

「落ち着いて。。。。『こん』」
「そんな名前で呼ばないで！！！」

静まる闇に荒れた呼吸が響く
涙としゃくり。。。。
『しまかぜ』は感覚を研ぎ澄ませ迷わずに真っ直ぐ『こんごう』が蹲った本の山を見つけた
名前を呼べば彼女はまた逃げてしまうかもしれない
静かに手を伸ばす
「驚かないで」小さな声ささやくように崩した本の壁の向こうに座る妹を呼ぶと
『こんごう』はその場に立ち上がった

「私は，あの人じゃない」
書棚に積もった埃をかぶり，顔をつたった涙の後がはっきりと見える
「もちろんよ。貴女は」
「私は「金剛」じゃない！！！」

闇を照らす青い瞳が光る
それは。。。多分レーダーの持つ輝きだけではなく
耐えられない重圧に流される涙の輝きでもあった

「みんな「あの人」が欲しかったんだ。。。。」
「違うわ」
「違わない！！！」

『こんごう』は自分の周りにある本を蹴飛ばした

「あの人に戻ってきて欲しかったんだ！！！」
「違うの！！『こんごう』！！」

傷に触れた
ノイズの中に唯一明確に聞き取れた単語「金剛」
それをこの幼い妹がどんな思いで聞いていたのか『しまかぜ』は今
更のように知った
体こそ17歳の姿を持つ彼女が自分の「心」を律する事のできない
ほどの稚拙な抵抗をする理由
「魂の引き継ぎ」という期待の中
迎え入れられた
喜びではなく。。。。悲しみと追随する「絶望」

無垢な姿のまま産まれてきた妹の心を押しつぶした

「あの人を。。。作れば良かったじゃない！！！昔の船なんだから
！！作れたハズでしょ！！」
「聞いて！！」

周りに散らばる本を容赦なく投げる
でも
力はなく，ただ滅茶苦茶に投げつけるだけ
妹は。。。『こんごう』は自分の居場所を見つけられなくなっていた

抵抗は長くは続かなかった
投げられる本を払いながら真ん前に来た『しまかぜ』の前『こんごう』はへたり込んだ
舞う埃の中
頭を抱えて狂い泣く妹

「私なんかいらないのに。。。なんで作ったのよ。。」

「貴女が必要だったのよ」

『しまかぜ』は手を伸ばし肩を抱こうとしたが『こんごう』は，はね除けた
「嘘つき！！」
睨む目の中に赤いライン。。。。。最新鋭の護衛艦は自分の誕生を呪っていた
こんなにも深く
彼女を傷つけていた『しまかぜ』は自分が産まれたときの事を思いだした

ミサイル護衛艦として産まれた自分は一般の「人」はに歓迎はされなかったが
海上自衛隊の隊員たちと
前を歩く姉達の艦魂が温かく迎え入れてくれた

「初めまして『しまかぜ』私が貴女の姉よ」

思い出の姉の姿
笑顔で産まれたばかりの自分を強く抱きしめてくれた人『あまつかぜ』姉さん
何故。。。。

この子を同じように向かえてあげられなかったのか
心細い船の先端で産まれた自分を姉が包んでくれた日の事を思いだして涙がこぼれた

「ごめんなさい」

手を伸ばす
何度はね除けられても。。。。。
「近寄るな!!」
「お願い。。。私を信じて。。。。」
「うるさい!!」
崩れた本の山の上『しまかぜ』は『こんごう』の手を掴みそのまま覆うように抱きしめた

「離して!!もうイヤ!!イヤ!!」

拒絶の力で，かぶさる『しまかぜ』をはね除けようと暴れる『こんごう』は何度も『しまかぜ』を殴ったが外れる事はなかった
「『こんごう』聞いて!!」
「イヤだ!!そんな名前イヤ!!イヤだ!!殺して!!」
必死に逃げようとする『こんごう』と顔をつきあわせた『しまかぜ』は言った
「ダメ!!『こんごう』!!生きるの!!」
そう言うと肩を強く掴んだまま続けた
「私達は貴女を待っていた!!信じて!!」
「違う!!みんな「金剛」を待っていたんでしょ!!」

『しまかぜ』も溢れる涙を止められなかった
それでも声は優しく。。。。怯える妹を諭して

「待っていたわ「金剛」姉さんの名を継ぐ，強い艦である貴女を。。。『こんごう』を」
大事な言葉だった
泣き叫ぶ前の『こんごう』にもう一度強い意志で告げた

「『こんごう』貴女を待っていたのよ!!」

抵抗していた力は無くなった
誇りをかぶってドロドロになった髪と顔
その額に『しまかぜ』は額を擦りつけると

「強い艦であって欲しいという願いを込めて。。。あなたにつけた名前なの。。。『こんごう』である事を誇りに思って欲しいの」

泣き続ける妹を胸に強く抱きしめた
「貴女を待ってたの。。。。」

自室の中
微睡みの眠りの中で蘇る過去に『こんごう』は泣いていた
起きている自分の意志とは別の思い出
「強い艦であってほしい。。。。」
その願いの楔として自分に与えられた名前『こんごう』

いつの間にか体を足を抱えるようにきつく丸めて眠る
涙は閉じられた瞼の下をとめどなく流れ，寝言を小さな声が続ける

「私は『こんごう』。。。。私は『こんごう』」

それはまだ拭いきれない悲しみの記憶の呪縛にも聞こえた

第十六話　金剛の影（後書き）

カセイウラバナダイアル～～色々を作ろう！！（意気込み編）

こんちわ～～ヒボシです
今回は『こんごう』の心の中を少し堀下げて書いてみました
こういう
人の保つ「感情の根元」みたいまものがないと
彼女がただ寡黙な人になってしまいそうなのでそこまでの経緯みたいなものを書いて見たという次第です。。。。

しかしながら
戦闘物とはほど遠い展開なので。。。。ちょっと焦ってます。。。。
フ～～～困ったぁ困ったぁ～～～（マジで）

ところで
ヒボシは結構な凝り性です
と言っても好きな物，興味を持った物に一直線なタイプなので「器用」とはほど遠い凝り性です（藁）
先週一週間だけで「自衛隊関連の本」を2冊
Ｊｓｈｉｐｓを3冊
Ｊｓｈｉｐｓの特別号で海上自衛隊「こんごう」型護衛艦と，アレイバーク，タイコンデロガ型イージス艦と買いました。。。。。
（中に一つ。。初恋の連合艦隊というのがあったのは内緒です（藁）
）

ご飯が食べられません。。。。お金なくて

ですが
このぐらいまでの書籍を買うことは。。。。とりあえず相方さんに
許されていると信じています（爆死）
たまに。。。。処分の瀕死にあったりしますが
それはヒボシの管理が悪いからです。。。ごめんなさい

ところで
実際小説を書いていたりして。。。。欲しくなるモノはもっとあります
ヒボシはココ「艦魂」を扱った小説を書く前は
現在も書いてますがジャンル歴史で戦国時代を扱った物を書いています
もともと
そっちが本業です（藁）
というか
実家が史家なので歴史には無駄に詳しく
頭に無駄な事がイパーイつまってます（藁）。。。。。。フゥ
個人的に今燃えている歴史の中では「民俗学」と「化学」です！！
コレはかなり面白いです！！

そんな事はさておき。。。戦国時代欲しいものといえば
「甲冑」。。。。。。。
アレですよ。。。。鎧兜です
武士が着けてたアレ。。。。
それも「等身大」のやつ（爆死）

売ってるんです！！！欲しいんです！！！

そして
どこぞで行われる戦国祭りなんかで自前の甲冑つけて参加したいんです
（注．甲冑の重さは２５キロ。。。。そんな筋肉持ち合わせてません）

しかしながら
当然の結果なのですが相方さんから「不許可」となり
現在手元にあるのは「刀」だけです
ホントは居合い刀を自分に合わせて作りたかったのですが。。。。
それは不許可とあいなりました（爆）

で
艦魂物語を書いて欲しくなったのはプラモデルです
アレ
戦艦のプラモ
なんか最近熱いらしいのか？Ｊｓｈｉｐｓの誌面広告なんかで「長門」が出てました
ものすごく精密なキットでした
後！！なんと「金剛」もでてます！！イージス艦じゃない方ですよ！！帝国海軍のですよ！！
どちらも精密なキットなので。。。。ヒボシには無理っぽそうです（涙）
（当方極めて不器用）
逆にイージス艦のこんごうは作れそうです。。。
なんか四角くて（藁）色っぽくないので今いち触手が動かないのが難題ですが。。。
「戦闘シーン」の再現のためには欲しいと思ってます

（それほどに戦闘シーンはないが。。。）
絵を描くにはもってこいだと思ってます。。。。
その昔。。。。嗜む程度絵が描けたヒボシに「戦艦大和」を書き続けさせた男子がいました。。。。
アレはなんだったのでしょうか？
おかげで大和様はそらでも書けます（装備の変更点など細かい事は無視の方向で）

ＨＰを立ち上げたら（昔から言ってますが。。。なんとか今年中には実現化したい）
『こんごう』達のイラストもあげていきたいと現在なまった指を叩いてます。。。
パソコンで絵を描くの難しいよぉぉぉ
ｐｈｏｔｏｓｈｏｐで乗算だけで描くなら早いのですが。。。今いち。。。良いのが描けないので練習中です。。。

しらね　「で。。。当然わたくしは可愛く描くのでしょうね」
ヒボシ　「。。。。がんばります！！がんばります！！」
しらね　「わたくしのプラモデルも買ったらいいわよ」
ヒボシ　「検討します！！検討します！！（『しらね』さん。。。結構マイナーだと思ったのにプラモ出てるんですね（藁））」

そんなこんなウラバナダイヤル～～～
それではまたお会いしましょ～～～

第十七話　正義の嘘（前書き）

仕事にまみれてヒボシが沈没しそうです。。。。タシケテ

第十七話　正義の嘘

『こんごう』が微睡みの淵に落ちた頃
男達は眠らぬ討論のまっただ中に入っていた

昼過ぎ１６時を回ったばかりの閑散とした基地
波の音が静かに流れ秋の日々を感じさせる緩やかな日和なのに
佐世保地方隊の監舎の中，誰よりも大きな声を挙げていたのは
基地責任者である佐世保司令の宗像(むなかた)司令ではなく。。。。

粉川だった

折りたたみの簡易テーブルとイスだけの部屋の中
イスを蹴倒し立ち上がったままの力説に「事情聴取」として呼び出
されていた間宮と和田，そして東京の防衛庁から出向で来ていた今(いま)
泉(いずみ)は唖然としていた

「。。。。落ち着いて」

壮年に入った宗像は司令職にしては熱血なタイプで
二群の最高職にはうってつけの人物だ
真っ黒に近く日焼けした顔に左眉毛の上に切り傷。。。これが何の
傷なのかはわからないが
ゴツゴツとした厳つい顔に箔を付けている事はたしかだ
その宗像が
手に持ったタバコを耳に挟み両手を平に上げて，熱弁を振るう粉川
に静かにと注意した
本当なら。。。。こんな大事件になってしまった出来事に対する
やり切れない思いを一番最初に恫喝したかったのだが，すっかり気

が失せてしまっていた

「我々が問題としている事は。。」
粉川とは問い面に座る今泉の声を同じ返事で断ち切った
「艦長の指示は迅速にして的確な判断でした！」

粉川は立ち上がったまま力強く念を押した
それは聞く側の
佐世保の基地司令にとっては「良い答え」なのだが

「粉川一尉。。。。調査部の質問を混ぜ返さないで頂きたい」

宗像と対面するイスに座っていた今泉が厳しい口調で命じた
今泉は防衛庁調査部で，今度の事件の「犯人捜し」をしに来ている
それはココに並んでいる全ての者が知っている
切れ長の目，オールバックにした髪と自衛隊のイメージとは遠いスーツ姿
バッチリキャリアですと，体で示しているかのような男は痩せた頬を歪ませて立ち上がったままの粉川に告げた

「何も間違った事は言っておりません」

憮然と切り返す粉川に
パソコンを前に置いた今泉は冷たく返す

「あなたの話しは感情論すぎるという事です」

調査部がココに来た理由は一つ，外の空気に敏感な防衛庁がマスコミ向けて作らねばならない「言い訳」の作成のためだ
「不審船」は逃げてしまった

それも大陸に向かって，ただ逃げてしまったのならば「追いつかなかった」と言えるのだが
不運な事に海上保安庁船艇が撃たれてしまった
その上で怪我人が１１人という２桁
加えて報道協定により中継に踏み切った瞬間に事件の山場が来た事で「国民」の全てがこの事を知るところとなっていた

「冷静に考えてください，目に見える答えが必要なんですよ」

切れ長の目は冷たい
額に手を当てて未だ立ち上がったままの粉川を見上げると
両手を広げて「アメリカ人」のように説明した

「いいですか？国民は，自衛隊は何をやっていたか？とあれやこれやとマスコミの無責任な情報と憶測に踊らされてるんです。確固たる態度でこの事件の始末をつけるのが今の我々の優先すべき仕事ではありませんか？」
「それはわかります。。。が！これを全て海自の責任とする事は納得できません！！」

事件から向こう公開された『りゅうきゅう』被弾の映像はショッキング過ぎるものだった
この画を見た，いわゆる「軍事評論家」という者達はどの番組でも引っ張りだこではあったが
その言い分はまったく的はずれなものが多かった

「海上自衛隊の護衛艦ならばこんな酷い被弾はしなかった。何故，前にでなかったんでしょうか？」
「護衛艦の装甲は厚いから，海保の船のようにはならなかったハズなのに守らなかった」

などなど。。。
対空機銃が５メートルもの近くで艦橋を狙ったのならば結果は大差ないのに間違った理屈をひけらかすという具合
あげく。。。。
「凶悪とわかっていながら取り逃がした」と言う始末だ

「言いたくはないのですが，九州の新聞社が『りゅうきゅう』の横をすり抜けていく護衛艦の姿を捉えているんです」

そういうと新聞社に文書停止を求めた「草書」を見せた

呆れた話しだった
まるで映画のワンシーンを取り出して全部の話しを作ったかのような
『りゅうきゅう』の被弾を見過ごすように横を走って行く護衛艦。。。。

あんまりな見出しに
粉川は元より，間宮も和田も宗像も呆れて，疲れた
あの嵐の中
わざわざ根掘り葉掘り自衛隊の悪口いいたさにヘリを飛ばしていた新聞社がいた事に疲れ
そして
このヘリがＤＤＨ『くらま』から上がっていた哨戒ヘリＨ－ＳＳ２に「領海から追い出し」をくらったと騒ぎ
「悪質な記事」を掲載しようとしてきたことに疲れた

「自衛隊が自分たちの追尾失敗を隠蔽しようとしている」とまで言われそうな勢いだ

「報道協定を結んだのは海上保安庁です！自分たちで結び，解禁し

た時に事件が起きた。。。その事実は無視のまま，事件の責任だけを自衛隊にとれというのはおかしな話しです」

隣り合うテーブルの上
粉川と今泉は睨み合う
宗像司令は粉川の言う事は全く道理にあっていると思い，うんうんと頷きはするが意見はしなかった

「粉川一尉。。。海保はけが人を出している。十分な装備を持つ海自が無傷であれば「非難」も浴びざる得ない」
「詭弁です！ならば，どおして防衛庁は護衛艦隊を海保の前に進ませなかったのですか？十分に時間はありました」

今泉は顔を曇らせた
「現場レベルでの解決」
目の前で起こった事の判断
その善し悪しで「首切り」ないし「更迭」という自分たちの懐（防衛庁）が痛まない解決が望ましいとされる
つまり
事件の火種が大きくなって防衛管理の仕事を「外」からの圧力で首切りするのは避けたいし
政治屋にそれを漬け込まれたくはない
粉川の意見が正しくても
それより上のレベルで物事をスムーズに判断したい

「粉川一尉は防衛庁の判断ミスである。。。。そう言いたいと？」
「はい」

あまりにあっけない返答に今泉の顔は引きつった
同時に首を振った

「バカげてる。。。。。」今泉は本気でそう思った。そしてついにキレた

「誰かがどこかで責任をとらなきゃならん!!どうしてそれがわからないか!!」

上記の問答は何もこの一通りが一回行われていたわけではなかった
粉川がこの会議室に着いてから，かれこれ1時間はこの状態だったのだ
その間
先に呼び出されていた間宮は自分の進退にも関わる責任問題に晒されていたのだが。。。
目の前で行われる「情報部」と「調査部」のケンカに笑いを堪える事に終始する事になっていた

「わかりません!!どうしても責任をと言うのならば負うべきは防衛庁です!!現場の指揮には，どこにも問題はありませんでした!!」
「じゃ国民にどうやって説明する!!」
「ありのままを」

思わず立ち上がっていた今泉は絶句したままふらりとイスに落ちた
これほどにバカ正直過ぎる人間をどおして「情報部」が使っているのかわからなくなった
防衛内部局の人間ともなれば「正義の嘘」も見通すぐらいの頭があってもいいものだ
座ったまま手をフラフラとふって聞いた

「君が。。。そうやって説明するのか?」
「お望みならば」

何故か仁王立ちの粉川の方が自信満々だ
頭で仕事をしている今泉に
同じ背広組である粉川が力で挑んでいるようにもみえる

「そもそも責任責任って言うのならば!!内閣府が事件の通達に返事をよこしたのが発生から1時間後てのにも責任があるハズです!!」

正論

自衛隊の行動に縄をかけている内閣府が「不審船」現るに気がついたのは発生から15分以上もたってからで
むしろ海に出ている他の機関の方が迅速に事に対処していた
その一つが報道協定で海保は内閣府に連絡と同時にその行動を取っている
それほどに慎重な周りをよそに「不審船」からの攻撃を受けてから8分過ぎやっと総理大臣に「事件」が繋がるという不手際，（この情報は伏せられている）
その上リミット10分の間に「決断」を下せなかった事が「不審船」を取り逃がすという失態に繋がっていたのだから

責任うんぬんを話すのなら「国家レベル」の問題だった

「それも君が説明する気か?。。。内閣府と言い争うのは得策じゃないとは考えられないのかね?」

今泉の返答は皮肉にも聞こえた
現行の自衛隊に「内閣」の非難など出来る訳がない。。。。
そんな事をすれは，「軍主導の国家」への先導だと罵られる上

その言動が国民に広まればまたも軍備縮小と叫ばれるのがおちだから
だが目の前の男は違うようだ

「僕に内閣府との話し合いの場をくだされればやります。。。変に隠したりするより良い打開策がみつかると思います」

表情さえ変えぬ粉川の返事と
どこから出ているのかわらぬ自信に今泉は溜息がでた
逆に間宮と，宗像は笑いを堪えるのでいっぱいいっぱいだった
今まで
背広組の質疑は色々とあった
大抵は「理想的決着」と称した首切りと更迭で手打ちにするという
忌々しい思いをしながら「御上」の命令を聞くのが関の山だったが
間宮は少しだけ顔をうつ伏せた
もはや口元に登った，にやけ顔を隠すことが出来なかったからだ

「参ったね」

それは今泉が言いたい台詞だったが
これほどに愉快な問答を見るのは初めてだったからだ
目線だけで二人のやり取りを追う中，自分の面前に座る宗像と目があった
宗像もまた。。。
渋い表情の中に。。。なんとも言えない笑みを浮かべていた

「とりあえずお茶を。。。」

普段なら一番にいきり立っているハズの宗像はお茶をつぐと緊迫し

た二人の間に置いた

「それでもどうしても海自に責任をとれというなら，防衛庁みんなで反省して走ったらいいんですよ!!」

「ハァ?走る?だから。。。そんなバカげた事ではなく，明確に誰のミスで，犯人が」

今泉は頭を抑えたまま「任務」を続けようとしたが，言葉は粉川に絶ちきられた

「犯人はとっくに海の向こうです!!海自に犯人なんかいません!!」

そう言うと

纏められた書類を手持ちのアタッシュケースに放り込んだ

「もし防衛庁に呼び出されてもそう言うかね?」

うんざりした表情でタバコに火をつけた今泉に，粉川はカバンと上着を担ぐと部屋のドアを開けながらハッキリと答えた

「指示があれば東京に戻ります!!その時も同じ事を言います!!」

激しい音で締められたドアの向こう

部屋に残された間宮，宗像．和田は，眉間を抑え苦々しい表情のまま沈黙してしまった今泉を少し哀れに思った。と同時に今時あんな熱い男がいた事に微笑ましくなった

「つかれた。。。。」

煉瓦倉庫内の寄宿舎通路を歩く『いかづち』と，『むらさめ』は風呂上がりで弛緩した体のままフラフラと歩いていた
激走の５０周の後の湯は体の疲れに良く滲みる
珍しく長髪を解いたままの『むらさめ』はコーヒー牛乳を飲みながら前を歩き
鼻にかかった眼鏡のまま『いかづち』は歩き寝しそうな勢いだった

煉瓦倉庫の寄宿舎の部屋割りは艦隊同士，同じ部屋で大きなスペースを共有部とし中で個別の部屋に別れているという形だ
司令である『くらま』の部屋は一番上にあり
下は準じ艦艇の部屋という作りで三階建ての仕組み
一階と二階は吹き抜けになっており一番奥に図書室がある

もちろん外からはただの倉庫にしかみえないが，見晴らしもよくなかなかに良い場所だ
倉庫の裏手は海べりになっていてそこからは「アメリカ第七艦隊」の艦艇が見える
「機密」の関係上あちらの基地には挨拶をしてからじゃないと入れないが
海自の方は一部出入りを無許可にしているところもある

「それで。。。私，お茶を持っていったの。。。」

通路の窓から外を見ながらフラフラとした足取りで歩いていた二人の前，『いそゆき』『はるゆき』『あさゆき』。。『ゆき』三姉妹の艦魂が通路に広がってはしゃいでいた
午前の課業につけて加わった「修練走」が開けたのだから後は自由な時間とはいえ

規律を重んじる生活の中，通路を遮るように広がって話し込むのは見苦しい事だが

黒のセーラーを着たまま，お盆をもった『いそゆき』を中心に
3人の艦魂達は小娘らしくきゃんきゃんと弾けている
みな15歳ぐらい
髪は右にならえなのか引っ詰めで一本に纏めている

「『くらま』司令。。。『しまかぜ』一佐と今，二人きりなんだよ～～～」
「あの二人はいいよねぇ～～お似合いだしぃ～～」

後ろから見ていると妙に腰をクネクネさせた『はるゆき』の会話に『いかづち』は内容を把握した様子で口に指を当てると『むらさめ』にシーって合図した

「『しまかぜ』一佐は髪を洗ったばっかでぇぇ。。。もうバッチリって感じぃ。。ねぇ～～」
「まじぃ～～じゃそのまま？ねぇねぇ～～」
三姉妹の真ん中『はるゆき』は事の成り行きに興味津々名お年頃

「わたしも『くらま』司令に抱っこされたい～～」

『あさゆき』身をくねらせて絶叫
それに向けて2人がパンチ！

「あんたなんか相手にしてもらえないわよ！！チビ！！」
「酷い～～」
両頬を張られ涙目の『あさゆき』『ゆき』型艦艇では一番の末っ子で超がつくほどの甘えんぼは，おそらく話しの「意味」がわかって

ない

「『くらま』司令かっこいいもんなぁ～～私とか相手してくれないだろうなぁ～～」

同型艦の中で，佐世保では一番上の姉になる『いそゆき』は指をくわえてなまめかしく揺れる

向かい側の通路からゆっくり抜き足で近づく護衛艦の2人には未だ気がつかない3人は通路にひろがったまま寸劇を始めた

「やっともどってこられたわ『くらま』」

髪をかき上げ，キスまねをする『いそゆき』

「『しまかぜ』。。。危険な任務に君がいってしまって心配していたよ！！おおっセニョリ～タ」

調子を合わせて『くらま』役を演じる『はるゆき』

「『くらま』。。ごめんなさい，でもお仕事なのよダーリン」

「寂しかったよ，だ・か・ら！今夜は眠らせないよ『しまかぜ』～～」

「ああっ貴女の胸で花になる～～」

そういって抱き合って飛び上がり

「きゃ～～～～」黄色い声の合唱

直ぐ後ろで『むらさめ』『いかづち』も揃って「きゃあああああ（棒読み）」

一瞬にして固まる三人

「通路にひろがって！くっちゃべってんじゃねぇ！！」

いきなり護衛艦『むらさめ』に怒鳴られ端に吸い付くようにさがって敬礼する3人

「すっすっすいません。。。」

3人とも顔は真っ赤だ
聞かれてはイケナイ愛の話しに耳まで真っ赤にして敬礼するが，目は涙目だ

「聞かれて恥ずかしいならやるな！！」

むしろ聞いてて恥ずかしかった『むらさめ』は怒鳴りながら通路を通った
『いかづち』は固まってしまった『ゆき』三姉妹に笑いながら
「もうええで」と手で散れと合図した

「たくよぉ。。。女所帯ってくっだらねぇ噂が長く続くもんだな～」

『くらま』×『しまかぜ』はココ佐世保では百合ップル（ユリップル（カップルの造語））の噂が絶えない
どちらも同じぐらいの世代だし
どちらも頭脳明晰の秀でた大人の女だ
その上で『くらま』は容姿が宝塚的で身長も１８２センチ，並の男なんて目に入らないぐらいカリスマ

ちなみに艦魂は女しかいないので付き合う相手が「女」である事に異議を唱える者はほとんどいないが，あまり褒められたものでもないらしく
やはり「秘め事」の愛だが。。。。
さすがに『くらま』や『しまかぜ』ぐらいになると想像の領域で「噂」にされる（藁）

「『しまかぜ』はんも，司令に抱かれてる噂まで立てられてるなんて思ってへんでしょうなぁ」
お疲れ眼にピンクな笑いを浮かべた『いかづち』

そこにオンブで運ばれる『さわぎり』が見えた

「どなんしたん？」

姉『あまぎり』は同じぐらいの身の丈の妹をバスタオルで包んでおぶって自分も湯アタリしたのか蒸気した顔で苦笑いしながら答えた

「お風呂で溺れた～～」

言わなくてもわかる事だった

激走の錘役はそれなりにしんどい。。。。そんな状態で風呂に入って沈んだ『さわぎり』は目を回して伸びていた

何人かの艦魂が手を貸して部屋に連れて行く姿は微笑ましい

「だらしねーなぁ。。。護衛艦隊の一員が。。。」

肩をすくめて笑う『むらさめ』の姿に『いかづち』は珍事件の中，仲良く歩く『あまぎり』達を見て，あの日の事を思いだした

「なあ。。。『むらさめ』」

少し前を歩いていた『むらさめ』は振り向くことなく背中越しに返事した

「なに」

「あんな。。海保の子の事なんやけどな」

「ああ？」

急に不機嫌になった声

それでも『いかづち』は静かに続けた

「わては軍属やから『むらさめ』の言うように『むらさめ』が怪我しても任務を続ける。。。せやけど『むらさめ』が死にそうな怪我

したら。。。あの子と一緒や任務はしよってもわても泣く，だからあんな酷い事を言うたらアカンと思うんや。。。姉はん」

『いかづち』の声は湿っていた
そのせいもあって『むらさめ』は立ち止まりはしたが振り向く事が出来なかった

『いかづち』は思いだしていた
目の前で溺れた『さわぎり』を助けおぶって行く，姉の『あまぎり』の姿を見たときに，あの日の事が胸を締め付けた
姉とも慕った『りゅうきゅう』を撃たれた妹達の気持ちはどんなものだったのだろうと
泣くことまでをも否定されたらどんなに辛い事かと
『はやと』を罵倒した『むらさめ』。。。誰もがやり切れない気持ちであった事はわかっていたが
もし。。。そんな悲しみの中で自分があんな風に言われたら耐えられないとも思っていた

「あれは。。。」

妹が泣きそうになっている事に気がついた『むらさめ』は言葉を一度は濁したが
「わかったよ！もうあんな事はいわねーよ」と告げ
直ぐに場を明るくするためか大きな声で言った

「姉はんとか言うな！！くすぐってぇんだよ！！」
「わかってくれたんならええねん」
「わかったっつーの！！」

くすぐったさのせいか？やけに粗暴に振る舞う『むらさめ』の姿に

笑った
心に残っていた思いを告げたことでいよいよ眠気も増した『いかづち』は大きく体を伸ばした
食堂に向かう廊下
急に黄色い声が響く

「『むらさめ』さまぁ！！」
食堂に繋がる面前の通路を駆けてくる複数の艦魂達
「ああっ！！お風呂もご一緒したかったのに～～」
「お背中流しましたのにぃぃ～～～」
『むらさめ』は自分をかこんだ女の子達を煙たそうに

「なんてカッコしてんだ？オマエら？」
目の前に並ぶ彼女たちは，みょうにヒラヒラのエプロン姿
「メイドですよ！！メイド！！」
「何でメイド？」
「流行ってるんです！！」

流行ってる？
『むらさめ』は首を傾げた
大抵こういう意味不明な流行は基地内の隊員が読む雑誌から始まる

「また。。。なんで男所帯の基地でそんなカッコが流行るよ？」

「ご主人様にお仕えするから」
「ご主人様ぁ～～？」
黒を基調としたスカートにフリルをあしらったエプロンと，ズン帽（メイドキャップ）
姿の少女たちはスカートの両端を持ち上げてポーズをとると

「可愛いでしょ！！」

満開の笑顔がズイと迫る
「はぁ？」
可愛いというものにあまりに無頓着な『むらさめ』は迷惑そうな顔をしたが
彼女たちはおかまいなく両腕にからみつき
「お風呂は一緒できませんでしたけど！！料理はお任せくださ～～い！！私作りました！！」
「私も作ったの！！お口までお運びしま～～す」

両手に花になった『むらさめ』は，様付けの扱いを受けながらも助けを求めて後ろを振り向いた

「『いかづち』？」

だが
そこには居るはずの妹の姿はこつ然と消えていた

第十七話　正義の嘘（後書き）

カセイウラバナダイアル。。。。。（少数派編）

プーーーーーー
突然ですが元気がありません

仕事が忙し過ぎて死にいたりそうです。。。
なかなか他の先生の作品を読みに行けない事が悲しい毎日ですが
執筆活動がスランプとかそういうものではなく元気がないです。。。
。

何がと言われますと。。。。
まず
パソコンです
ヒボシはパソコンを持って以来ずっとＭａｃｉｎｔｏｓｈなのですが
まわりがＷｉｎｄｏｗｓばっかなので色々なものや，事が共有できま
せん
実際。。。。Ｍａｃをつかっているからという事で困った事はない
のですが
コレまでの活動で使ってきた限りではむしろ便利なぐらいなのです
が。。。。。

半端な事には，なかなか使えない

たとえば
ニコ動のＮＮＭが使えない
動画を作りたいと思ったら本格的なソフトを起動させるならば有利

なＭａｃなのですが。。。ちょっとした楽しみ程度のものは使えない
昔取った衣笠（注．違）（昔取った杵柄が正解）でイラストを書く
手を鍛え直しているのですが
これも結構めんどくさい
ｐｈｏｔｏｓｈｏｐはだんだんなれてきたのでボチボチイラストは
上げられそうなのですが
ペインターの簡易ツールが使えない。。。。ｅｌｅｍｅｎｔもいい
のですが。。。

音楽ならそこそこ出来るのですが
画の方はなかなかうまくいきません

それで
ちょっとした事のできるソフトを探すのですが
大抵アメリカのだったりで使用条件が厳しい。。。。。
しかも変なメールが来るようになる。。。。イヤだぁ
ｂｏｏｔｃａｍｐを使ってＭａｃの中で窓を動かすこともできるら
しいのですが。。。。
窓を使用したくない（爆）
生粋のＭａｃｉｎｔｏｓｈ党のヒボシ
なんか。。。良い方法はないかな？
かなしいねぇ～～

しょぼくれてます

ところで
自衛隊のごはんというものを通販してみました（藁）
明日か明後日には到着予定なのですが今から楽しみです！！！
ただ

缶ご飯は販売がないようでちょっとショックです。。。
あの緑の缶に入ったのが欲しいのですが。。。。ぬ～～

とにかく気になったらとことん買ってしまう悪い癖が出まくってます
相方山に絞められるのも時間の問題か？

しらね　「海自のご飯は売ってないわよ」
ヒボシ　「ええっ。。。。残念な事に亡国のイージスで真田さんが食べてたのがほしかったのですが。。。」
しらね　「亡国のイージスといえば。。。。『みょうこう』が出てたわね」
ヒボシ　「出てましたね『みょん』（藁）『いそかぜ』の役で」
しらね　「最後盛大に沈んでたわね」
ヒボシ　「泣いてましたね。。。。『みょん』（爆）」
しらね　「お腹，爆破されたら泣きたくもなるわよ。。自分自身じゃなくたって」
ヒボシ　「あれはモックでしたが。。。見ていると痛々しいですよね」
しらね　「宮津さん（寺尾さん）。。「許せって」。。。。許せないわよ！！わたくし達まで死んじゃうんだから！！」
ヒボシ　「『みょん』は映画のＤＶＤ見て寝込みましたからね」
しらね　「しかも『いかづち』も出てたよね」
ヒボシ　「ええっ『うらかぜ』って役で出てましたね。。。。。言うも恐ろしい様でしたが」
しらね　「撃沈でしたわね」
ヒボシ　「ええっ，ハープーンで，ものの見事に」
しらね　「ありえないわ！！私たち魂の存在をなんだとおもってるの！！」
ヒボシ　「でも『いかづち』は転げ回って笑ってましたよ。。。「

わて沈んだ!!!」って」
しらね　「神経太いわね。。。あの子」
ヒボシ　「亡国のイージスはロケで横須賀に来てますよね」
しらね　「わたくしの居ないときにね」
ヒボシ　「。。。。。。それはそれは。。。。」
しらね　「ねぇ。。。。前回わたくし出番があったんですけど。。。
まるで『こんごう』を虐めるロッテンマイヤーさんみたいに見えたんですけど?まさかそこで出番はまた終了なの?」
ヒボシ　「。。。。。いや!近々ありますよぉ～（声踊ってます～～）」
しらね　「そうよね。。ないと困るわ。。まるでお色気魔神でイジメの大将みたいで。。。イメージダウンだから」
ヒボシ　「ハハハハハ」
しらね　「笑い事じゃないわよ!!そうじゃなくても佐世保じゃ妹の『くらま』があんな扱いなんだから!!」
ヒボシ　「いやぁ。。。それはまぁあの人の上に立つ者の。。。ねぇ。。」
しらね　「良いことヒボシ再三にわたって注意しているけど，この上イラストが可愛くなにかったら。。。。わたくしがハープーン撃つからね」
ヒボシ　「。。。。めっちゃがんばります!!!」

ハフ～～
色々大変な近況でした

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第十八話　裸の少女（前書き）

時間がある時に。。。自分の情熱を信じて書きます。。。
しかし
資料本買いすぎて。。。夜のご飯がたべられません。。。困ったぁ
～～困った（爆）

第十八話　裸の少女

女の子たちのに囲まれた，姉の後ろから姿を消した『いかづち』はグラウンドへの道を歩いていた

「我が姉はんも，自分の意志に反してモテモテや！！いずれ噂になりますなぁ～」

自分でない「うわさ話」は女子にとっては愉快な話でしかない
『いかづち』も自分の姉とわかっていても笑える
もともと『むらさめ』は年下の艦魂や，横つながりの姉妹達の間で「粗暴の王子」と呼ばれるほど「男役」な存在だ

体つきは自分より豊かな胸を持つ姉だが。。。。実態としての態度と風体は女らしくないし。。。言葉使いなんてまんま「男」だ
趣味に可愛らしいものは一切なく，唯一の楽しみは体力作り
狙って男役をやっているとしかおもえないような存在

『くらま』がエレガンス路線を追求したタイプならば
『むらさめ』はワイルド，ガテン系タイプって事だ

このままいけば
面白いカップリングができそうで「噂」なりに楽しめそうだと『いかづち』は悪い事かな？と首を傾げながらも，口元は笑っていた

一段と夕暮れ時が進み
風も冷たくなってきた空の下を『いかづち』はスキップしていた

そんな
『いかづち』の前を猛烈な勢いで走って行く影が見えた
基地の玄関を出た粉川は，手荷物を玄関に預けたまま上着だけを肩に引っかけてグラウンドを目指していた

「粉川はん!!」
『いかづち』は緩く飛んでいた足取りを速め粉川を呼び止めた
「どないしたのん?」

『いかづち』の呼びかけに振り返った粉川の顔は空調の効いた会議室から出てきたばかりなのに汗をかいていた

「やあ。。やっと用事が終わったんでね。。修練走の続きをしようと思って」
「はぁ?」
『むらさる』は口に手を当てて笑うと
早足でグラウンドを目指す粉川の横に並んだ
粉川は風呂上がりの彼女を一瞬誰か見間違えてしまっていたが
鼻にかけられた丸眼鏡で『いかづち』だと気がついた

セーラーの胸をステップの足運びで揺らして『いかづち』は笑うと
粉川の腕に自分の手を絡めた
赤毛の癖毛にまだ風呂上がりの湿り気
ぺしゃんと落ち着いた髪になった姿はいつも陽気に弾けた彼女を大人びてみせる
だが
声や話し方は変わることなく子供だ

「なして?そんなアホな事するの?」

たしかに粉川は「後でかならず走る」と入っていたが。。。本気だったとは思っていなかったからだ
「アホ」と切り替えされた粉川は肩をすぼめながらも上着をグラウンドの芝生に放り出して怪訝な顔で聞き返した

「アホはないでしょ。。。」

「だって。。。別に粉川はんは，悪くないんやろ？わてらと一緒に罰をうけんでもええやん」

粉川の中には色々な人物が口に登らせた言葉が残っていた
「責任」
最初はこの基地の艦魂達の司令である『くらま』に見下されるかのように白い目で見られる中で聞いた
その後は
お定まりの犯人捜しで「責任」という言葉を連呼した今泉。。。。

「今回の事件は。。」

『いかづち』はストップと手をあげて
「今回の修練走は，作戦中に『こんごう』がテンパッた事と，『むらさめ』が海保の子に手ぇ挙げたことが問題やったんでぇ。。。粉川はんに関係あらへんやん」

深刻な顔に頬を強張らせていた粉川に
陽気に首を傾げて説明をした

粉川は既に陽が海に飲まれ始めている紫の空を見上げて言った
そこに至るまでに自分たちが解決出来なかった問題を思い浮かべて

「『こんごう』ちゃんが混乱しちゃったのは，停止命令のせいだろ。あれが防衛庁の正しい判断だったかには疑問があるし。。それを」
「でも粉川はんに関係あらへんやん」
「あるよ」

あくまで粉川には関係ないという意見を悪意なく続ける『いかづち』に粉川は顔を厳しくし，彼女を真正面で捉えて返事した

「あれは。。。あの事件は国の問題であるべきなんだ！君達「艦魂」たちだけの責任じゃない！僕たち「人間」の側に大きな責任があるんだ，だから。。その。。。少なくとも君達だけを懲罰だなんて事，僕はしたくないんだ」

真剣な眼差しで自分に向かう粉川に『いかづち』は困った顔になった
「そないな難しい考えんと。。。気にせなええやん！！」
一応相手の態度に会わせて，困ってみせたが『いかづち』にとっては終わってしまった事はどうだって良いことのようで
目の前をクルクルと回って見せ
軽い声で笑いながら粉川の肩を叩いた

「今までだって「人」は誰もそんな事せーへんかったんやし！！気にし過ぎやて！！」
「いや，でもさ！！一緒に国防を担う者として」

姉である『むらさめ』に少しばかり似ている垂れ目の光は「本音」を吐露した

「撃たんのやったら国防も，一緒も，ありゃしませんわ！」
粉川は陽気な態度で自分を指さした『いかづち』の言葉に固まってしまった

今。。。ちょっと前に
今泉と揉めた時の事を思いだした。。。撃つ?撃たない?それより
撃たれた責任を問うのが「国防」?
粉川は自分の中にあった嫌悪すべき「正統を名乗る国防論」に首を
振って答えた

「いや。。。撃たなくても国防は出来るよ」
苦い言い訳に『いかづち』は少しだけ粉川の顔を見つめたがクルリ
と回って背中を向けてその場に座った

「今回みたいに仲間やられてまっても敵さんを領海から追い出せた
ら「国防」成功ちゅうなら。。。。それでええやん?ちゃうのん?」

『いかづち』は声のトーンとはあきらかに下がっていた
仲間。。。。海保の船艇達は傷つき，その姿を目の当たりにした海
自の艦魂達
せめぎ合いがなかった訳じゃないのだろう
粉川は恥ずかしくなった。。。。船たちは傷ついても「人」に何も
いえないんだと

秋の冷たい風が芝生を揺らす中，答えをだせない粉川に

「あんまり。。。その事は考えたないから。。。わてらは走るんで
すよ」

濡れていた髪が風に少し揺れる
目の前にいる１０代の女の子が「艦魂」という魂として艦に乗り「
国防」という責任の矢面に立たされていて
本心ではあの事件に関わった全ての子達が傷ついていた事に粉川は
気がついた

守りたいという気持ちの前，あざ笑うように逃げていった「凶器」
みんな。。。。護衛艦という職務の重荷の中で「忘れたい」と願っ
ている。。。少しでも早くあの事件を。。。。。

粉川は自分から少しだけ距離をとったところに背中を向けたまま腰
を降ろした『いかづち』を見た
細い。。。。肩も体も。。。心だってへし折れてしまいそうに苦し
んでいる
だから走ると言う彼女の横に静かに腰を降ろした

「すまない，だからこそ僕は，君たち「艦魂」だけの責任にはした
くない。。。僕も共に責任を取りたいんだ。。同じ想いだと信じて
欲しいんだ」

少ない沈黙の間に流れる波の音の後
「粉川はん!!」
真面目な話しを続けた粉川に急にテンションを上げた『いかづち』
は瞳を開いて顔を寄せた
いくら真剣な会話が苦手でもこの逃げ方はどうか?というほどに大
声で
「粉川はん。。。。わて聞きたい事あったんです」
「何。。。。」

鼻の頭にかかる眼鏡越し『いかづち』はただでさえ近い顔をさらに
近づけた
肩を並べて座ってしまった位置，引くに引けない腰で
もう少し近づいてしまったら間違いなく

彼女の唇に触れてしまう
粉川は相手が自分よりかなり年下の女の子だという事でなんとか自分を律して
「どっ。。。どうしたの？」
自分の息がかからないように小声で聞いた

「なんで粉川はんって，わてらの事「艦魂」ってわかったんですか？」
「はい？」
『いかづち』は少し下がって粉川の顔をマジマジと見つめながら
「あんな普通，船の中で，わてらに気がついてもいきなり「艦魂」やなんて思わんやろ？」
粉川は目をはずした
何かを探り出そうとする瞳は眼鏡越しに輝きを増して近づく

「そっ。。。そう？」
自分の顎下に迫った顔に焦りの汗を拭う
そういう仕草を怪しむのか，さらに声高く問いつめるように聞く『いかづち』
「そや！！大抵幽霊が出た！！っていう話しになるハズやのに。。。」
粉川は目を泳がせたまま
「いや。。だってあんな部屋にたくさんいればね。。。」
「そんでいきなり？「艦魂」なの？」

確かに
わかっていたとしてもあんな大所帯で部屋を使っている女の子達を

いきなり「艦魂」と確定するのは難しいものだ
むしろ若手モデル系芸能人の
「体験イージス艦ツアー控え室」と考えた方が自然なほどの中で
普通に「君たち艦魂でしょ」と言った粉川

動悸の高まる中，開かれた口はたどたどしい答えを出した
「児童図書の本に。。。載ってたの」
「は？」
攻勢に出ていた『いかづち』の目が点になる
粉川は身振り手振りを加えて話した
「昔！！昔ね，児童図書館にあった「妖怪大百科」に載ってたの！！船に憑く妖怪って」
「わてらは妖怪か！！」

粉川は近すぎた『いかづち』から体を離すと
「いや。。ぼくはそうは思ってないけどね。。。それにぼく元々霊感体質だから」
口をとがらせたままの『いかづち』
「霊感体質～～しかしぃ。。妖怪扱いとは遺憾ですなぁ～～」
「ねぇ。。。。こんな可愛いのに」

そんな一瞬息をついた粉川の腕に掛かった時計を見て『いなづま』は絶叫した
「わぁぁぁぁぁ」
「今度は何？」

下りきったどん底の会話から飛躍的にテンションを上げてゆく『いかづち』の態度に粉川は目を回し始めていた

「あきまへん！！こんな事やっとる場合じゃないねん！！」

『いかづち』立ち上がると護衛艦の並ぶ桟橋を見て，もう一度粉川の腕時計を見て
ずり落ち始めていた眼鏡をチョイとあげると

「粉川はん!!『こんごう』呼んできて!!」

急に頼み込んだ
そもそも『いかづち』が煉瓦倉庫を抜けてこちらに来たのは．，未だ艦から降りてこない『こんごう』を呼び出すためだった
理由は簡単，今日は護衛艦隊の無事帰港と題した食事会があり
当然『くらま』が主席にすわって会食になるからだ

時間にしたらまだ４０分の余裕はあるが，そこは5分前の心得。。。。全員が準備万端で揃ってなかったら。。。。。

今日の『くらま』司令は恐ろしいかもしれない。。。。

『いかづち』は自分の手持ち時計も確認しながら粉川を急かせた
「急いで!!」
「わかったって!『こんごう』ちゃんはいつもの部屋なの?」
地面に腰を降ろしたまま話すの粉川の腕を『いかづち』は引っ張った

「飯会に遅刻したらまた走らされる!!」
「そんな事まで修練走なの?!」
「当たり前ですがな!!ココは修練の二群でっせ!!」

急かされて立つ粉川は歩いて護衛艦に向かおうとしたが『いかづち』が間逆に手を引く

「こんな遅くに簡単に船に乗れへんでしょ!!こっち!!」

煉瓦倉庫からグラウンドに入る並木の方にひっぱりながら
「『こんごう』多分寝てるからな～～この3日間寝られへんかったみたいやから，起きられへんと大変な事になる～～」
「逆，行ってどうするの？」
離れる護衛艦を指さしながら聞く粉川に

「送ったりますよ！」
そう言うと『いかづち』の手のひらから細かな泡沫のような青い光が溢れ出した
粉川の顔は引きつった
「それは。。」
言い訳無用の手が粉川の背中を押す
「たのんまっせぇ～～～」

『いかづち』の手に溢れていた光は一瞬で粉川の体を包むと，明るい青い輝きを増やし小さくなり消えた

「うわ！！」

一瞬で消えた夕日の港から次に粉川の目の前にあったのは灰色の壁だった
本当に
鼻をぶつける摺り切りの位置に両手をついて衝突を防いだ形で立っていた
「あぶない。。。。」
喉につまっていた緊張の息を呑む

腰が退けてガニ股になっている自分がなにやら情けない

「まったく。。。。これだけは「いつになっても」苦手だ。。。」

引きつった状態で壁に付いていた手を剥がし，額を拭う
走る以上に色々な事で汗まみれになっている自分に苦笑いを浮かべ
ると足もとを見て青ざめた
瞬間的に飛ばされるから足の踏み場まで自分で確保できるわけもなく
そのままの勢いで踏みつけにしてしまった衣服に
「あっ。。。あ。。。。。？」

『こんごう』の着ていた海自のダブルジャケットを拾い上げた
「？」
手に掴んだものに冷や汗が出た
ジャケットと折り重なるようにあったもの。。。。。
「ブ。。。。ブラジャー。。。。。」
粉川の悪寒が背筋を駆け上る
防衛本能にも近いガードが腕を上げて振り返る

「はぁ！！？」

攻撃を警戒して振り返った粉川の前あったのは。。。。。
大きめのベッドの真ん中，一糸まとわぬ姿で体を丸めて寝ている『
こんごう』

「うぁ！？」

大声で叫びそうになる口を喉で押さえるから
最初の叫びだけがゲップのように吐き出される

振り返った粉川はそのままさらに半回転してその場に座り込んだ

「なんで裸なの？」

自問自答
手に汗握る閉鎖空間
見渡す限り四角四面の部屋には出て行くためのドアがない
粉川は全身に冷や汗をかいていた
逃げ場のない場所に「裸の少女」。。。。。。。自分の背中にはベッドの上，おしりも露わな『こんごう』

一度見てしまった女の裸体が目に焼き付いてしまうのは「健全な男の性」
粉川は何度目かの唾を飲み込んだ
横須賀から佐世保まで，ココまで来る間『こんごう』とは面と向かって多少なり口をきき，体罰的なコミュニケーションもあったがそれはあくまで服を着ていた彼女の姿で。。あらゆる意味では「子供」だと思っていたのに

「なんで。。。最近の子てあんなに発育いいの」

両手で頭を抱えた
最早相手が艦魂である事などぶっ飛んでいる状態だ
裸の彼女は間違う事なく「女」だ
当たり前の事なのだがその生々しいほどに艶やかな肌と全身にほどよく丸みをもった体は「大人」そのものだ
それをピンナップ写真のように豪華な彩りを添える乱れ髪
横に寝ころび両足を体の中に抱え込むように寝ていたウエストからヒップのラインは網膜に焼き付いていた

「助けて。。。。誰か。。。。。」

そこまで「女」を意識してもさすがは「大人」の粉川
自分の歳から少なく見積もっても１０歳以上年下の彼女に鼻の下を伸ばすわけにはいかない
目だけで周りを見回す
最初見たままドアのない密室
這うように壁に手を擦りつける
「ないの？ホントに出口無し？」

粉川の頭の中に混乱が現れ始めていた
「ヤバイ，ヤバイ，ヤバイよぉ」
相手は１０代の少女だ。。。。こんな所を誰かに見られたら「懲戒免職」じゃすまない
ましてや「海上自衛隊」のイージス艦の中で。。。。「淫行」。。。。
何もしてなくたってこんな所を踏み込まれたら職を失う危機的状況だ

走っていた時を遙かに凌駕する汗の中
粉川は息を大きく，そして静かに吹き出した
その時
小さくな声が後ろに聞こえた
「ああ。。。もうダメだ。。。」
粉川は両手をついて静かに結果を待った
ココで彼女が起きて悲鳴でも上げられればそれで全てが終わる。。。。
この歳３１まで真面目に（？）に自衛隊に勤めてきた自分の全てが，世界に否定される瞬間を待った

「わたしは。。。。」

だがその声はかからなかった
声はしているが。。。。悲鳴でも罵声でもない
『こんごう』の声は小さく何かを繰り返している

粉川はその声に力がない事に気がついた
いつもの自分に向かって張り上げている冷たい罵声ではなく。。。。
震える小さな声は何かを繰り返し告げている

粉川は思いだして出来るだけ『こんごう』の頭のあった側に動き耳を傾けた

「私は。。。。『こんごう』。。。。『こんごう』。。。。なの」

「寝言？」

散らばった衣服とは別に掛け布団を見つけた粉川は立ち上がって振り返ると手早く裸の『こんごう』に被せた
今まで一人で挙動不審になっていた心が急に落ち着いた目で眠る彼女の顔を見つめた
『こんごう』は泣いている
目を閉じたままなのに流れ出る涙，眉間に浮かぶ少しの苦悶ときつく噛んだ唇の間を。。。。小さな声は

「私は。。。。『こんごう』。。。。。」

小さくしゃくりを繰り返す姿にいつも見る無口でキツイ『こんごう』の姿はない

体をすっぽりと布団に覆った中
顔から乱れた髪を除ける
少女は何かに怯えるように自分を守って眠っている事に気がついた

「どうしたの？」

粉川は眠りの中にいる『こんごう』を起こさない程度の小さな声で聞いた
返事が返らない事がわかっていても
何にそれほど苦しんでいるのか。。。。。聞いてあげなくてはいけないと思う気持ちが素直に言葉にでた

粉川はそのままベッドの端にもたれかかるように座った
「繊細な子」
『しまかぜ』の言葉を思いだして
護衛艦隊の全ての女の子達がこの事件で大きな傷をおった事を改めて確信した

自分が苦痛でも，出来ることで相手を励まそうと頑張る『しまかぜ』
人前では明るく振る舞いながらも，今の防衛のあり方に「涙」した
『いかづち』
ぶつける相手を見つけられない怒りで，殴打事件を起こしてしまった『むらさめ』
小さな体ながらも荒海を最後まで哨戒し続けた『さわぎり』

イージス艦という責務の重さを，誰にも言えない辛さを背負った『こんごう』

粉川は閉鎖された部屋に暗く輝く照明を見上げた

「ごめんね。。。直ぐに力になれなくて」

両手を顔の前で重ねた

少しでも。。。。『こんごう』が静かに眠れるのならば時間に遅れて共に懲罰を受けてもイイと思い時計をはずした

第十八話　裸の少女（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～Ｖｏ１８

ふ。。。。。。

前書きにも書きましたが出せるときに出す！！

出来る時に徹底的に。。。。これが社会人クオリティーってヤツですね（死）

ホント。。。。。

情熱って冷めちゃうとねぇ

どうにもならん未練にしかならないので魂が燃えているうちにせっせと執筆ですよ

ところで

話しのボリュームはだいたい均一化してきたのですが

バランスがうまくいきません

今作はそういう部分を特に注意しながら書いているのですが。。。。

なかなかうまくなりません

一章のテーマが決まっている所はそれなりにうまくいってくれるのですが。。。。

要素が絡むとかなりアブナイ。。。。

修行でしょうねぇ。。。こういうのってのも

後。。。。コメディー面がめちゃ弱いですねぇ。。。

なんとか

ならないものかと。。。フニフニしてます（藁）

しらね　「ところで粉川さんこの後どうなるの？」
ヒボシ　「どうなるんでしょう。。。一緒に寝過ごすかな？」
しらね　「後五分で起きるわよ『こんごう』」
ヒボシ　「ぇぇえええ！！！なして？」
しらね　「わたくしたちは常に規則正しい生活をしているのよ，たまに居眠りしたぐらいで寝過ごすなんて事は絶対にないし。。。そもそも体内時計が極めて正確なのよ」
ヒボシ　「。。。。。。どうなるんでしょう。。。目が覚めたら」
しらね　「死ぬんじゃないの？」
ヒボシ　「そんなあっさり。。。。」
しらね　「まあ。。。裸で寝てる方もどうかと思いますけどね」
ヒボシ　「『こんごう』なかなか良い体してましたね」
しらね　「そんなの国防のなんの役に立つのよ！！」
ヒボシ　「ところで。。。あれです「艦魂物語」はすでに最終話までのプロットが出来ていて本来ならこの章で3分の1は消化してないといけないのですが。。。」
しらね　「ちょっと。。。ココで3分の1だったらわたくしの出番はどうなるの！！」
ヒボシ　「だから。。。本来はですよ。。伸びちゃったんです！！話数が！！」
しらね　「フ～～危ういわね」
ヒボシ　「当初の予定では『みょうこう』と『きりしま』は登場の予定がありませんでしたがメッセで出して欲しいというのがあったり，一つの艦が仕事をし過ぎるような事がないよう割り振った結果少ないながらも出番が出来ました！！」
しらね　「かなりバッサリ切られてたのね」
ヒボシ　「そうですよ～～～出ない予定だった人たくさんいたんですよ」
しらね　「例のエリー大将とか？」

ヒボシ　「いや。。。エリー大将は元々出る予定ありました。。むしろ（仮名．サイファ司令）と（仮名．ケイティ大将）が出る予定になかったのですが出ます，地理の関係で（藁）」
しらね　「あら，海外の艦魂が増えたのね」
ヒボシ　「国際的事情により（藁）」
しらね　「他に出る予定の出来た人は？」
ヒボシ　「長門様です」
しらね　「えええええええええええ！！！どういう事！！」
ヒボシ　「。。。。色々な事情で。。。。（藁）」
しらね　「長門様って。。あの帝国海軍の長門様よね？」
ヒボシ　「はい。。。。色々な事情で出て頂く事になりました」
しらね　「競演！！競演！！」
ヒボシ　「そんな事あるわけないじゃないですか！！年代違い過ぎですよ！！」
しらね　「他には？」
ヒボシ　「（仮．エンタープライズ）（爆）」
しらね　「マジで。。。。あれほど色々な先生がお書きになったエンタープライズをヒボシが書くの？命知らずね」
ヒボシ　「すいません。。。先にあやまっときます」
しらね　「がんばってね。。。。」
ヒボシ　「実は。。。本当に当初の予定より出る艦魂が増えたため物語の最初と最後の変更はないのですが中程はだいぶんボリュームが増えました，それと「考証」の部分にメドがたったのでこの部分が加わることで物語りの核が出来上がりましたから。。。かなり量がふえました。。。しかし」
しらね　「いいじゃない！！たくさん出られるのね！！わたくし」
ヒボシ　「。。。。。。。。さぁ（爆死）」
しらね　「ちょっと！！」
ヒボシ　「いやいやもちろん出られますよ。。。ですが問題が。。。」

しらね　「何？」
ヒボシ　「これほどに内容が増えたのに。。。戦闘シーンの追加はほとんどありません（爆死）。。。。。困ってます。。。」
しらね　「まあ。。戦争が好きってわけじゃないからいいけど，わたくしは」
ヒボシ　「ええっそういって頂けると助かります（マジで）」

そんなこんなで年末までには終わらなそうな「艦魂物語」です！！
これからもよろしくお願いします～～～

それではまた
ウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第十九話　本気の男（前書き）

良作の多い艦魂小説を全部読める日はいつくるのか。。。
自分と戦っておのま～～ぅすぅ。。。眠い～～～

第十九話　本気の男

浅い眠りの中
何度も繰り返した言葉のせいか舌に粘りけ粘着な感覚と少し乾いた唇
舌を出しゆっくりと舐めてみる
『こんごう』は目を少しだけ開けた

真横に転がったままの視界の前
薄暗い自室の壁が見える，またいつもの「夢」を見てしまった。。。
。

体を丸めていた手を解き顔の前に持ってきた
自分の手を少しずつ動かす，指を順番に。。。。夢と現実の狭間

生きている自分の手

動かすことで「現実」の世界に自分が未だ生きている事を実感する。
。。

行き場のない自分
夢はいつも同じだった

生まれた日の事を何度もモノクロのフィルムに掠れたラインを走ら
せたキネマのよう
カタカタと揺れる画面はたまに歪み飛ぶ。。。。
海をと切り離された日の出来事

軽く頭を振る
振り払いたい悲しみ。。。。

「悲劇？」

自分に問いかけるが
やっと意識を現実の世界に取り戻し始めた口元が。。。笑う
自分を悲劇のヒロインに落として。。。慰めるなんてと気持ちが卑屈になる

頭を枕に押し付けてゆっくりとした思考で物事を追う

あれ現実だったのだから。。。
自分の前で崩れ泣いた『しらね』の姿が。。。。いや，もっと多くの艦魂の姉達
自分は誰よりも苦しんで。。。。生きなければならない
『こんごう』の思考は緩く放たれていた夢から，現実の世界に戻るために自分を縛り始めていた
それが自分への皮肉と，戒めと信じていた

たくさんの希望に答えられなかった自分への戒め。。。。
科された任務。。。。最新鋭のイージス艦の「心」として生きる事を義務づけられた「魂」なのだと

いつものキツイ睨む眼差しとは違い，夢の中から彷徨い出たばかりの目は潤みとろけるように艶めかしいが，自分の手を確かめながらつぶやく声にはいつものトーンが戻り始めていた

「。。。。。ダメ。。。。。」

正確に動く自分の中にある時計に
微睡みからの脱出

ゆっくりと体を解き
起きあがる，緩やかに乱れていた髪が後に従い，裸の体に滑る。。。
。
顔を上げた『こんごう』はいつものように自分が泣いていた事に気
がつき
鼻を強くかんだ
外にではなく中に自分の。。。悲しみを外に出すことは恥ずかしい
事に思えたからだ

涙で濡れた頬を手のひらで拭う
軽い動作で
目が赤くなっていたり，拭ったことで腫れたりしたら。。。誰にも
顔を合わせられない。。恥ずかしい。。。
そういう思いがゆっくりと手を動かした

涙の跡を払った『こんごう』は大きく欠伸をした

そもそも飲食も入浴も必要としない艦魂
肌は汗で汚れた皮脂は眠る事で，生まれ変わったように滑らかな輝
きに満ち汚れなどどこにも無くなっていた
食事と同じ
海外の艦魂達から得た知識で人まねをするようになっただけの事で，
船にいる限り必要のない事なのだ

それに
『こんごう』は入浴というのもが，かなり苦手でもあった
煉瓦倉庫の寄宿舎2階にはシャワー兼風呂が設置されてはいるが
港に艦艇が集まれば大勢の女の子達と一緒に入らざる得ない

コミュニケーション

『くらま』司令はリムパックや佐世保に寄港するアメリカの艦から
学んだ艦艇同士の意思の疎通を深めるためにと，人まねのような生
活共同体をつくりあげていた
艦隊活動が主となる護衛艦群であるならばそれも大切な任務ではあ
るのだが。。。。
未だ自分の居場所を明確に得られない『こんごう』には苦痛も多か
ったのだ

だけど
共にしない事で「悪い」と思っている事も多々ある

『ちょうかい』
『こんごう』型同型艦の中で一番年下の妹
自分より少し小柄で黒いショートヘアを持つ妹はいつも笑顔を絶や
さず
不出来な姉に対しても良くしてくれている事は実感していた

長い髪をかき上げる
体にかぶさった布団を払うと，張りのある若々しい二つ果実が揺れる

「『ちょうかい』。。。。。」

修練走の時も自分を労ってタオルと水を持ってきてくれていた
なのに自分の事で。。。。とても，妹の要請に応える事はできなか
った
風呂もそうだ『ちょうかい』は背中を流すからと今までも何度も言
ったが，苦笑い程度の答えしかだせない

「姉失格。。。。」

背伸びして
上に伸ばしていた腕を下ろし頭を抱える

『むらさめ』達『あめ』姉妹や，佐世保では長女にあたる『いそゆき』達『ゆき』姉妹のように多くの妹を持つわけでもない
むしろ姉妹が一同に会する事さえ難しい数少ないイージス艦の妹たちの中，同じ港に席を置く妹に優しさを示せない自分を恨めしく思うと同時に
自分のような姉をもった『ちょうかい』に申しわけなく思った

肩の力を抜いて大きく溜息
少しの余裕を持った時間，身支度に入ろうと振り向いた

「。。。。。。。」

『こんごう』の部屋は大きめのベッドを置いただけで跡は四角四面で灰色の壁に囲まれた部屋だ
振りかえる先には無機質な壁があるだけなのに。。。。

「人」の頭が見えるなどありえない
とっさに
はだけてしまった自分の体を隠すために布団を引く

目覚めの音を聞いていた影の主はおどおどと初めてしゃべった

「あ。。。。起きた？」

聞き覚えのある声の主は背中越しにゆっくりと両手を挙げた

「あの。。。。迎えに」

「汚染生物！！なんでココにいる！！」

背中に沸き立つ殺気

粉川は息を呑んで振り向いた

「いや，あのね」

「いやぁあああああああ！！！」

囲われた鉄壁の部屋に響き渡る悲鳴はハウリングを起こすほどの大きな声

思わず耳を塞いだ粉川の前

ペシャンと潰れてしまうかのように体を隠して伏せた『こんごう』は勢いよく頭を「拒否」と振りながら叫んだ

「こっち向くなぁぁぁぁ！！！」

そりゃそうだ

裸で寝ていた女の子が羞恥にかられて叫ぶにはふさわしい台詞

「変態！！！」

枕が粉川の顔面にヒット！

初速の早さから拳の飛ぶような衝撃によろめきながらも，本来ココ

に来た目的を話そうと片目で『こんごう』を見ながら説明をした

「聞いて!!『いかづち』ちゃんに頼まれたの!!」

「出てけ!!」

「どこに?」

出られるものなら出たかった粉川は困った声で聞き返した

『こんごう』は初めての事にパニック状態になっていた

「人」が自分の。。。この艦艇内部にある部屋に入ってこれるなど考えた事もない上に，寝起きたばかりのニブイ回転の頭と，急な粉川との対面にまともな思考がなされてないせいも相まって反応が普通に女子高生になっている

「見るな!!変態!!」

布団で体を隠しながら涙目になった『こんごう』は粉川を睨みつけた

取り繕う言い訳に天井を見ながら泡泡している粉川に聞いた

「。。。。いつからココにいた。。。。」

天井から視線を戻したまま，固まった粉川は嘘をついた

5分前からいて。。。。一瞬とはいえバッチリ，ヌードを見ましたなんて口が裂けても言えない

言ったときに自分の命の花が散ってしまう

「今。。。来ました」

みるみる目に溜まる涙

体を布団の中に丸め込んだ『こんごう』は低いトーンで威嚇しながら

「嘘つくな。。。。」

状況は粉川にとっていっそう悪い。。。。

「いや。。。ホントに」

「嘘つくな!!」

ヒステリックな罵声とは裏腹に『こんごう』の目にはこぼれ出る寸前，涙が一杯になっている

それは粉川が直前にココに来たわけでない理由がわかったていたから

『こんごう』は習慣的に布団をかぶって寝る事がない

だから最初自分に被されていた布団に気がついたときは『ちょうかい』が来たのかと思っていたが

ココにいるのは粉川だけ。。。

つまり

裸を見られた

今までこんな事はなかった。。。

自分たち艦魂を見られる「男」などいなかったから

『むらさめ』なんかは課業で海にでれば，ごく希にではあるが「全身日焼けする」などといってトップレスでいる事もあるが（それはそれで問題だが）

『こんごう』はそんな事はけしてしない。。。なのにこの「人」に「全裸」を見られてしまった

「もう。。。やだ。。。。」

眠っている自分の姿と。。。「夢」にうなされる姿。。。
そんなものを普段からぞんざいに扱っている害虫粉川に見られたという恥ずかしさと。。悔しさ
押し寄せる涙に
『こんごう』は泣いてしまった

「もうゃぁぁぁだぁ。。。。」

泡を食ったのは粉川の方だった
このまま打撃戦に入り自分はめった打ちの刑にあうものと覚悟を決めていたのに
まさかの号泣に目を疑う
「泣く。。。。。？」
あの『こんごう』が泣いてしまうとは思わなかった

あの，とまで思っていた「気の強い女の子」が泣いてしまったのだから今度は対応策がない

両手で顔を覆ったまま小さな嗚咽をあげる『こんごう』に粉川は本気で焦った
「いや。。。あのごめんなさい！！。。。あの。。ちょっと前に来ました。。。でもホント。。」

酔ってないのに呂律が回らない
泣き出した女の子に年上の余裕なんか通用しない

「。。。。ごめんなさい。。。ほんのちょっとだけ。。。見ました。。。わざとじゃなくて。。。偶然に。。」

「やだあ！！！！もぉやぁ！！！！」

泣いているテンションがじょじょに上がり怒りが混ざり出す
顔を手で押さえてはいるが体が揺れて
四角い密閉された部屋の中に甲高い悲鳴にもにた声が響き渡る
癇癪玉だ
パニックとヒステリーを併発させた

粉川は目の前でただ，ひたすら謝った

「ごめんなさい。。。ごめんなさい。。。」

その内泣き声は少しずつ小さくなり布団の中に顔が沈んでゆく
粉川は両手を挙げて彼女に近寄った。。。何かが爆発する寸前の予兆だとわかっていても今は少しでもはやく機嫌を直して泣きやんでもらう。。。それぐらいしか思い浮かばなかった

一歩前に出た粉川の足と同時に
泣き声が止まった

「『こんごう』ちゃん？」

蹲っていた顔が下から光る
ものすごい視線が睨みつけている，瞳の中には赤く光るフェイズドアレイレーダーがバッチリ標的を捉えている
粉川は背筋に今度こそ悪寒が全速アップで走った

「。。。ごめんな」

布団が落ち『こんごう』の白い胸が露わになり
瞬間目に映った青い果実に
男の本能的視線が釘付けになり。。。。余計な事を考えて。。。それと引き替えに体はぶっ飛んだ
轟音と共に
至近弾を顔面にうけて3回転ひねりで壁と情熱的で熱くて，燃えるように痛い口づけをした

「あああ。。。。。」

壁に手をつきそのままズルズルと落下して行く男。。。。
顔の半分が消しゴムになったようにピタリと鉄壁についたまま倒れた背中に
裸のまま仁王立ちの『こんごう』が怒鳴った

「死ね!!!汚染生物!!!」

「すいません。。。でした。。。」

これだけのダメージを背負ってもさすが元ラグビー部。。。気を失わなかった粉川
その余力は愚痴になってこぼれた

「やっぱ。。。イージス艦。。痛いよ〜〜『いかづち』ちゃん。。。恨むぜ。。。」
痛む全身を男泣きの涙で散らした

「はい。。。だから今，言ったままです『いかづち』ちゃんに迎えに行ってくれと言われて。。。気がついたらココに飛ばされてまして。。」

ベッドの側で急いで着替える『こんごう』の前，捕まったゲリラのように，うつ伏せに寝ころばされた粉川は事の経緯を話していた場を和ますために意識的に笑いながら。。。。。

「だから。。。ホント意識して見たわけじゃないから。。。ごめんね」

対する『こんごう』は
苦々しい声で
「『いかづち』。。。。余分な事を。。。」

真新しい制服を揃え，ブラウスに袖を通しながら
手早く服を身につけてゆく

寝かされたまま痛む顎を抑え，殴られた事でひねった首を鳴らしながら
「心配してたんだよ〜〜『いかづち』ちゃん。。。『こんごう』ちゃんが3日も寝てないからって」
「余計なことだ！」

先ほど理騒ぎから一変
いつもの冷徹な声は本気で苛ついた返事をした

「ちょっと。。。そんな言い方ないでしょ，友達を心配してわざわざ迎えにまで出てくれたんだから。。。それに君も疲れてたでしょ色々あって僕も心配してたからね。。。」
怒りを買って当然の状況にいる粉川はあくまで柔らかく話しかけるのだが
『こんごう』の対応はそれに反比例するような声だった

「心配?外敵に対して戦うのが私達の勤めだ，職務に疲れたりなんかしない!!むしろ「有事」を見逃したオマエ達「人」の対応に疲れただけだ!」

明らかな侮蔑で
尖った言葉に一瞬，粉川は自分の対応を硬くして聞いた

「人間に対して怒ってるって事だよね?」
「はぁ?」
制服の埃を払いながら『こんごう』は気のない返事をした
薄暗い照明に映る影が上着を着たのを確認したのか粉川は座り直すと振り向いて続けた

「とりあえず『いかづち』ちゃんの心遣いにはお礼は言っておこうよ!!気に掛けてくれていた訳だし」

俯きながら左頬と顎下を真っ赤に腫らした粉川はしゃべりにくそうに，何度も切れた唇を唾で湿らせ，指で伸ばしながら自分を見下ろす『こんごう』を見た

「わかった。ならオマエも次からは『いかづち』に言われたからな

んていってココには来るな!!私に「人」の世話焼きは不必要だから!」
「了解。。。」
苦笑いを浮かべ粉川は敬礼して見せた

「仲良くやってきましょ。。。ねっ」と

その姿に『こんごう』は余計な忌々しさを覚え
横須賀から向こうココまで来る間にあった出来事が頭の中に廻っていた
それはこの場においては八つ当たりにも近いものなのだが
こんなくだらない事に世話焼きをしながらも「事件」の一つにもまともな解決を得られない「人」の存在に対する怒りが溢れてしまっていた

「ヘラヘラとしやがって。。。気楽なものだ。。。私達は自分の存在を否定される程の。。。。。悔しい想いをしているのに。。。オマエたち「人」は終わってしまえば無かった事になる程度なのだからな!」

「それは違う!!」

皮肉を口に滑らせた『こんごう』の前，粉川は急に立ち上がると両肩を手で掴んで

「みんな悔しい思いをしてる!!」

いきなり立ち上がった粉川に間接照明程度の明るさしか持たない光は隠され

光を閉ざした男の影の中に『こんごう』は立たされていた
「ちょ」
粉川の腕を振りほどこうと動くが，お構いなく訂正の声が飛ぶ

「そこは間違わないで!!!みんな。。。艦長も，船務士も，君に
乗船している全ての隊員も。。いや!!陸海空!全ての自衛官が悔
しいと思ってるんだ!!!」

粉川の中には
ココにくるまでの間で会話した『いかづち』の想いも含まれていた
撃たれても。。。。敵を追い出せたら防衛は成功?
船は傷ついてもそれで成功として「痛み」を忘れる。。。。「人」
は常に忘れ
艦魂は忘れるために走る。。。。

それはあまりに悔しい現実だったから
軽口で『こんごう』に返された意見に燻っていた想い弾けてしまった
粉川の大きな手が『こんごう』の肩に力を与える
痛みと。。。。これが本音である事を示す熱さのためか

「離せ!!」

『こんごう』はこの部屋に入ってきた侵入者に自分のペースを未だ
乱されていると思い，激しく突き放そうとしたが外れない
今までふざけていた粉川の顔が急に「人」を非難した自分を睨んで
いるように見えて腹が立った

「だけど!!何もしてないじゃないか!!私達はみんな傷ついた!
!オマエたちは!!何もしなかった!!」

「わかってるよ!!何も出来なかった。。。それで君達を傷つけた。。。悔しいよ!!君たちにそんな思いをさせた事も!!全部が悔しい!!」

粉川は本気の男だった
先ほどまでは司令や間宮の前で熱弁を振るった
調査部の今泉に対してもだ。。。それは政治的ゼスチャーでも自己満足でもない事をココに吐露していた

「あの日，君の目から消えなかったあの船は。。。今だって僕たちの心から消えてないよ!!」

真剣な眼差し
さっきまでおふざけのように笑っていた男は妥協の出来ない心を『こんごう』に打ち明けた
あの荒れた海の中
粉川は遠く離れて行く目標の姿に涙した『こんごう』を抱きしめた時の強さで

「本当に。。。みんなが悔しい思いをしているんだ。その気持ちまで嘘だとは言わないで」

射るような眼差しの前『こんごう』は初めて男の力に驚きながら答えた
「わかった。。。。だから離して。。。。」と

小さく俯いている『こんごう』に

興奮した自分が熱くなり，掴んだ肩に力がこもってしまったことに
粉川は恐縮して，慌てて手を離した

「ごめん。。。痛かった?」

俯いたまま何もいわない『こんごう』

「あ~あ。。いや。。。ごめんめ」
粉川は困った顔相手をあやすように聞いた

「わかったから。。。もういい!!」
『こんごう』の声は先ほどの時ほど尖った感じではなかったが粉川
の顔を見ようとはしなかった
離された肩をさすりながら粉川から距離をとると早足でベッドの正
面にある壁に向かった

「とにかく会食に遅れるから。。。」
泡沫の青白い光が溢れ『こんごう』の体を覆い始めた

「置いていかないで!!」
光の輪に囲まれた『こんごう』の手を掴んで粉川は
「ココに置いて行かれると。。。。僕ココに住む事になるよ。。困
るよね」
確かにと光の発生を抑えた『こんごう』は
掴まれた手を振りほどくと
指先をチョイとつまんだ

「そんな。。。汚い物つまむみたいにしなくても。。。。」
「うるさい！」

二人を包む青い光
外の世界に走る雷光が真っ直ぐ走る中
『こんごう』は隣で目をつむっている粉川を見た。。。。。
彼の本気の言葉だけは心に残った

第十九話　本気の男（後書き）

カセイウラバナダイアル～～お客様を呼べ!!ダラダラ編

ヒボシ　「。。。。。。命令形ですね。。。。。」
むらさめ　「あたぼうよ!!テメェいろんな先生方に世話になっときながら自分だけ投げっぱなしジャーマンってわけにいかないだろうや!!」
ヒボシ　「投げっぱなしって。。。てかプロレスに詳しいな!!」
むらさめ　「おおよ!!最近，粉川と共通の趣味を見つけてな!!あいつ大人しそうな顔してるけどめっちゃ格闘技マニアなんだぜ!!」
ヒボシ　「粉川くん。。。そんな設定がありましたね。。。」
いかづち　「そうじゃなきゃ『こんごう』の至近弾に耐えられるわけがないでっしゃろ（藁）」
ヒボシ　「いやいや至近弾に耐えられる理由は他に設定があってね。。。」
いかづち　「とにかく草薙センセエばりにタフや（藁）」
むらさめ　「おおっ!!鍛えてるぜ!!腹筋割れてるしいい体してるんだ!!」
ヒボシ　「背広組なのにねぇ。。。ってなんで体見てるんですか!!」
むらさめ　「風呂場にチョイと（幕）」
ヒボシ　「痴女ですね。。。。。」
むらさめ　「でもよ。。粉川はさ，背広組なのに一等海尉ってのもなんか変でないか?」
ヒボシ　「それはね。。。ご都合主義なんだけど（ぶっちゃけ）。。元々は海自にちゃんと席もったんだけど結婚を期に丘の勤務に移り防衛庁内局の仕事に入ったから海自から出向で丘勤務って事です」

いかづち　「えええぇぇえええええええ!!!粉川はんって。。。結婚してるの?」
さわぎり「びっくりだよ。。。。」
むらさめ　「なんで結婚してんの?（藁）」
ヒボシ　「なんでって。。。相手がいらっしゃったんじゃないですか?」
いかづち　「ショックやわ。。。。」
ヒボシ　「あのね。。粉川くんって今年で31歳なんだよ，結婚もしてない男だったらなんか気味悪いじゃないですか」
むらさめ　「気味悪い?なんで?」
ヒボシ　「ああ～君たちはさ艦魂だからさあんまり歳とらないし，基本女所帯の生活だから結婚って概念がない。イコール男と一緒に暮らすなんて考えた事もないでしょ」
さわぎり　「考えたこともないよぉ」
ヒボシ　「人間の男が30になるまで「女」の一人も知らなかったらキモイよ!!」
むらさめ　「わからん。。。。別にいいんじゃねーか」
ヒボシ　「現在日本は晩婚型が増えてるからいちがいにそういう事はないようですが。。。ヒボシの弟ニボシ（仮名）なんかは「男は30までに一度は結婚してなかったら欠陥商品の烙印を押される」とまで言ってました（爆笑）」
いかづち　「ヒボシの弟ってリミット近いの?」
ヒボシ　「いや。。まだまだだから多分仕事場の先輩の受け売りでしょうね（藁）」
しまかぜ　「男性は結婚していると落ち着きがあっていいわよねぇ～～」
むらさめ　「おわっ!!なんだよ!!」
いかづち　「『しまかぜ』はんは粉川はんが結婚してた事知ってはった?」
しまかぜ　「うんう，知らなかったわよ」

むらさめ　「驚かねーの？」
しまかぜ　「うん，別によほど若い自衛官でないかぎり大抵結婚してるし，粉川さんの歳ならねぇ。。。不思議でもなかったけど」
ヒボシ　「結婚する事も国家公務員としての義務に近いものもあったりするしね。。。。（いやですねぇ）」
むらさめ　「じゃヒボシも結婚してるの？」
ヒボシ　「。。。。。。。。。。。。。。。」
いかづち　「無言かい！！」
ヒボシ　「ほっといてください。。。（涙目）」

いかづち　「そんな事よりお客様を呼ぼうはどーなった！！」
むらさめ　「前回。。。爆発発言したよな」
しまかぜ　「物語に登場する新たな艦魂名「長門様」。。。。。ホントなの？」
ヒボシ　「ホントですぅ～～～（ウゼェ丸）」
いかづち　「めっちゃ緊張するわ。。。。」
しまんぜ　「どういう形で出演なさるのかしら？」
ヒボシ　「内緒ですぅ～～（ウゼェ丸！！ウゼェ丸！！）」
むらさめ　「じゃそれは待つしかんねーとして，鋼鉄の男，草薙氏のところから「長門様」を呼ぶというような話しじゃなかったっけ？」
しまかぜ　「草薙先生って。。。ホントにタフ方よねぇ。。。」
いかづち　「草薙センセエ呼んだらええやん」
ヒボシ　「また！艦魂じゃないじゃないですか！！」
いかづち　「せやけど。。草薙先生とこの艦魂の皆さんはめっちゃテンション高いで！！ついてけへんで！！」
むらさめ　「凛様とかエリーゼ様とか呼んだら。。。。撃たれるだろうな～～ヒボシが」
ヒボシ　「えええええええええ！！ヒボシが撃たれるんですか！！」
しまかぜ　「そりゃねぇ。。可愛い私達が撃たれるよりはヒボシさ

んが撃たれて強くなったほうがいいでしょ」
ヒボシ　「『しまかぜ』さん。。。なんかいい話にすり替えようとしませんでした？」
さわぎり　「あたいはエリーゼ様に会ってみたい」
いかづち　「なぬぅ！！『さわぎり』はんって意外な人に会いたいんですね～～」
さわぎり　「会ってあたいも強くなるの！！」
むらさめ　「会ったら強くなる。。。なんかの神様かよ？御利益あり？」
いかづち　「とりあえずプロフとか送ってもらったらええやん。。。あんまり相手の趣味もわからんようなお茶会しても失礼やし」
むらさめ　「草薙氏に見合う女か～～」
ヒボシ　「コラコラコラコラお見合いじゃないから！！」
しまかぜ　「そうね～～お招きする艦魂様のプロフは欲しいわね，趣味とか色々わかれば楽しいお茶会になるだろうし」
さわぎり　「エリーゼ様の武器を分けて貰うの」
いかづち　「我が道いってるなぁ。。。『さわぎり』はん」
ヒボシ　「『さわぎり』たん。。。エリーゼ様の武器着けたら沈むよきっと。。。着装のシステムが違うから（藁）」
しまかぜ　「ホント色々な意見ばっかで話しがまとまらないあたりが女の会話だねぇ」

そんなこんななダラダラ状態。。。。
ホントにお招きとかできるのでしょうか？

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第二十話　姉の希望（前書き）

佐世保上陸一日目がやっと終わりました
長い！！長いよぉぉぉ！！
なんできっちりまとめられないのよ
泣きそうに成りながらも自分の情熱を信じて書き続けてます。ヘタレなヒボシに応援よろしくですぅ～～～

第二十話　姉の希望

司令室となりの会議室を出た間宮は軽めの溜息をついたが、自分が考えていたほどのダメージはなかった
むしろ心が躍ってしまいそうな気持ちになっていた

廊下から見る景色は夕日を無くしすっかり暗く、緩やかな風と静かな波の音
軍港を彩る単色の光が波間に揺れる姿を見る事で心を穏やかになる
根っからの海の男である自分達を思い返しながら、息の詰まった調書取りを思い出して和田は肩を鳴らすと

「結局、書類に書くだけ書いてきましたね」

ドアを後ろ手で締めながら背伸びをして見せた
粉川が会議室を後にしてから一時間半程、当初予定していた会議の自国を大幅に過ぎた時間だった

「それが今泉の仕事だからな」

超過した時間の中、調査部の切り込み隊員でもある今泉は、狂われた調子のまま
怒りを万年筆の先に集約させていたのか、台紙の紙を引き裂かんばかりの筆圧でまとめの調書を手短にして最初から変わらぬ質問をしながら書き綴ると足早に帰って行った

あの細い背中が刺々しく、ロボットのようにぎくしゃくした動きを見せながら帰って行く姿は、思わず吹き出しそうにもなる光景だった
一堂に会していた宗像もしかりで、男臭い太い顎をゆるまぬように

さすりながらも「気の毒そう」に見つめ口元を抑えていた

それにしてもと、和田に続き背伸びをした間宮
現場で働く者と，事務方ではいつの時代になっても意見のすりあわせは難しいものだが
今泉の壊れたレコードの様なお手本的「説教」聞く耳も疲れるもんだと苦笑いをして

「まあ、問題があればまた来てくれるんじゃないかな」

結局手落ちの状態で帰った相手を思い、和田と顔を見合わせて笑った

「不審船事件」という現在日本ではもっともホットな事件でありもっともクールな対応を要される事件の中
当事者である艦長間宮に下る「罰」は何なのか？
目の前から消えた犯人のために
「目に見える責任」をとれという不条理の中
冷たい廊下に立たされるような圧迫感で、もっと顔色を悪くしていてもいいところだが

間宮の口調は軽かった
理由はそれほどに重要視された会議の半分をぶち壊した粉川と今泉のケンカ

「今泉、参ってたな」

司令監部を離れたところで間宮は片方の眉をおもしろおかしく上げていつもの余裕をもった静かな笑みで言った

お堅い書類審査のような時間の大半をぶち壊し
現場に責任はないと言い捨てた粉川の姿に、あの冷徹で知られた調
査員の今泉がキレたのは思いだしても笑い話にしかならなかった

「良い薬ですよ、現場に出たこともないやつに根掘り葉掘り有るこ
と無いこと「原因」を探されるのはただの嫌がらせにしかおもえま
せんよ！」

制帽を頭にもどし
「そうだなぁ」
「艦に戻りますか？」
和田も大きく背を伸ばすと街路樹の向こうに停泊した，こんごうの
方にむかって歩き出した

「しかし、粉川くんには驚いたね」

グラウンドに近づく細道を通りながら、忘れられない衝撃の問答を
思いだした間宮は
今日の出来事は苦痛ではなく楽しい栄華を見たような気持ちになっ
ていた
どうだ？と和田を見る

「あんな暑苦しい男、久しぶりに見ましたよ」
そう言うだろうと期待していた顔はうなずきながら

「和田船務士に言われるんじゃ、たいがいだな」

まったくな返答だった
イージス艦こんごうに置いて一番熱い男を自負していただろう和田

をして「暑苦しい」とまで言われた粉川
もともと「イージス艦機密漏洩事件」を期に船に乗船して彼を見る
船員、隊員の目は今泉と同じ背広組に対する冷たい視線にも近かった
それもそうだ「相互監視」という名目を持った「情報部」の職員、
ともすれば自分達の小さな不手際を誇大広告のように言いつけられ
るのではと顔に苛立ちも募りそうなもの
良い目で見られるわけ絶対になく

それ故に、艦内での冷遇から今泉と歩調を会わせた意見を出されて
も不思議ではなかったハズ
なのに

この

粉川というのがあまりにも変わり者過ぎた
乗艦当日から甲板で一人すっころぶという珍事
この程度の事なら内勤務の人間だから仕方ないか？ともおもえるも
のだが
この後を次から次

調べたところ

元々海自の士官だったようで海での勤務も十分にしているから船酔
いなどは一切心配ないのだが
二日に一度の頻度で「船」にぶつかっているのか？と思うような怪
我をする

そんなおっちょこちょいな彼だが
「不審船事件」では毅然とした態度で「ミサイル攻撃の許可」を手
順通りにと激した

その態度は「防衛庁」の顔を立てろ!!という指示ではなく
堂々と「撃ちましょう」と言っているようにも聞こえた

間宮は
誰に言う事でもなかったが「ミサイル攻撃」の是非については政治
的思案を持っていた
あの時間
残ったタイムリミットで相手を確実に沈黙させる方法があるとする
なら、それしか手はなかったが
許可なく撃つつもりなどもサラサラなかった
ギリギリの状態で防衛庁がどうでるか?という自己的な賭けと
もう一つ
自分を守るための賭けをしていた

それは「ミサイル攻撃が不許可ならば一切の艦砲はしない」
嵐の波間で艦砲
確実に相手を仕留める事が出来る方法を選べず相手に損傷を与えた
という程度の事で「国防という意識」を満足させてしてしまう事が
イヤだっというのもある
そして
もう一つに無駄な情報を増やしたくなかったというものがあった

あそこで艦砲して運が良ければ「不審船」を停船させる事ができた
かもしれない
だが
止まりながらも領海を越えたところで「自沈」されたのならば
証拠の提示問題で「赤の国」と揉めたうえに，こんどは「弾の無駄
遣い」とマスコミに非難され，いよいよ海上自衛隊の立場を悪くす

るための無駄な情報を増やしていただろう

ミサイルを
撃てないならば
撃たないという意志を貫いた

逃げた船の処遇に関しては
逃げた方角にある領海の国に対しての窓口を開く方が得策なのでは
？とまで考えていた

日の落ちた港の空を見上げた
嵐の日には一切見られなかった星

「静かだな」
それでも考えは机上の空論なのかもしれない
星をみながら
自分の思案通りに行く事などないとわかっていても「抵抗」した事
を、誤ったとは思いたくなかった
だから今泉に自分の考えを主張する事はなかった

というか今日は粉川にうまく守られた形になったとほくそ笑んだ

「艦長？あれ」

深く考えの中に没頭していた間宮に先を歩いていた和田は、グラウ
ンドを走る人影を指さした

「粉川くん？」
それはスーツ姿のまま黙々と走る姿
「何してるのかな？」

「さあ？」

間宮と和田はお互い顔を見合わせた
粉川が走っているという事は確認できたのだが、何でそんな事になっていかがわからない
だが粉川の姿に少なからず騒ぎが起こっている事にきがついた
佐世保基地のグラウンドは入港した護衛艦達が並ぶバースに近い、
そのせいで各艦の隊員達が走る粉川の姿を見ている
当直で上陸しなかった者達も走る粉川の姿を眺めている

間宮は粉川に少しの興味がわいていた

「聞くしかないな」

そう言うと
帽子を脱いで和田に手渡し走っていった

「何してるの？」

横に併走して間宮は彼がかなりの時間を走っていた事と
またも顔に怪我を負っているのを見て吹き出しそうになりながら聞いた

「走ってるんです！」
「見ればわかるよ」

間宮は粉川が意外と鍛えられた呼吸をしている事に気がついた
かなり走っていると思われるのに乱れない

「何で走っているかを知りたいんだけど」

左頬顎下から赤く腫らした顔が走ることに支障のない程度で間宮に向く

「今回の事件の責任とって…」

間宮は目が点になった

なんでそこまで自己満足的なと瞬時に思ったが顔に出すのは控え

「なんでそこまでするの？」

自己満足でただひたすら走る事などなかなか出来ないし

粉川は先ほど会議室で見たように「熱い男」だ、計算してそんな事をやっているとは思えなかった

「艦艇ばかりがイタイ思いして、自分たちがなんの反省もなく艦（ふね）にのるなんて事、僕には許せないから」

不器用な言葉の意味

それが間宮に通じる言葉だっかは微妙だが

粉川の頭の中には

人には見ることが出来なくても確かに船に宿る魂の「女の子」達の姿と，その苦しみだけが今は映っていた

『こんごう』『しまかぜ』『むらさめ』『いかづち』『さわぎり』

そして

海保の子達『りゅうきゅう』『はやと』『おおすみ』『あかいし』

みんな苦しんでいた事を知った今、自分達だけがのうのうとする事などできなかったし

心に残ったモヤモヤを消したかった

顔を上げ
煉瓦倉庫を見ると「艦魂」達が住む寄宿舎を睨んだ
誰に言うでなく
走るべき自分の道を見て「悲しいハズの思い」を「責務」と「人」は「責任」をとらぬと罵倒した『くらま』の姿を思い浮かべて

「絶対!!走りきってやるからな!!」

そういうと間宮を無視して速度を上げた

会食の終わった後『しまかぜ』は『くらま』の部屋にいた
執務室の隣
煉瓦倉庫の三階は会議室やら資料室やらと「艦魂」の住む領域はないが唯一『くらま』だけが居を構えていた

部屋は執務室と同じようにシンプルに纏められている壁の一方はクイーンサイズのベッドと（『くらま』は身長１８２センチなので通常サイズだと足が出てしまって寝られない）間接照明を一つベッドの横には小さな書棚兼ローボード
対する壁側に小さめのテーブルとイスが二つ

「ワインでいいか?」

自室に戻って初めて制服の襟を弛めた『くらま』は部屋の出入り口に並べられた木製のワインーセラーから口当たりの甘そうなものを一本取り出した

「カリフォルニア・エサー・ヴィニヤード、白だ。『リーバ』が良く届けてくれる」
「『リーバ』？」

制服の上着を脱いだ『しまかぜ』は聞き慣れない名前に首を傾げた
「隣に鎮座している強襲揚陸艦の『エセックス』だ。自分の事は『リーバ』と」

日本の艦魂達にも，あだ名のようなものは有れども自分に愛称を付けたりはしないが、アメリカ艦艇の妖精（艦魂）達は割と簡単に自分たちに愛称を付けていて、そう呼んで欲しいというのは多い

「ああ、彼女ココにも来るんだ」
『しまかぜ』は優しい笑みの中に含みを持った返事をした

「回航からココに戻って来るたびに土産を持ってきてくれる。それだけだ」
無愛想な『くらま』の返事に『しまかぜ』は口元をおさえて笑った

「彼女、貴女の事好きなんでしょ。もっと良くしてあげればいいじゃない」
グラスにワインを注ぐ
優雅な仕草の中で

「軍務と基地の関係上よく合いはするが、それ以上の感情はない」

素っ気のない声、港を同じくする同盟国の艦のちょっとの要望は日中蹴ってし叶えない『くらま』は夜の時間の駆け引きに彼女の名前を使ったが、『しまかぜ』相手に無駄な洒落だっと息をつくとグラスを渡して対面のイスに腰掛けた

「回航ご苦労だった『しまかぜ』」
「ありがと」
グラスを持っ手とは別に『くらま』の指先は『しまかぜ』の頬に近い髪をゆっくりと撫でた
「明るいな、苦労続きだったのに何か良いことでもあったか？」
小さなテーブルを挟んだ二人はお互いの表情を確かめ合えるほど距離をさらに詰めていた

「あったわ。「人」に会えた」

『しまかぜ』の頬に降りていた『くらま』の手が止まった
顔には厳めしさを残したまま
「そんなことが良い事なのか？」
「おおよそ五十年ぶりの事なのよ」

「それだけの事だ」

「人」の存在に『くらま』は真新しい反応は示さなかった
五十年ぶりと言われれば確かにスゴイ事なのだが，彼女はそれが自分たちにとって「良い事」とは思えていなかった
そんな態度の『くらま』の手を『しまかぜ』が握る

「「希望」を見つけたのよ」

頬に寄せた『くらま』の手を自分に強く引く
「『しまかぜ』いまさら「人」に出会えたぐらいで何も変わる事などない。今回の事件もそうだ」

『くらま』はこの手の事件がけして少ない事ではなく
そして「人」が事件を解決出来ずに終わっている事を日常的に見て

いた
ココ何年かの間
佐世保の近海から舞鶴に至る「日本海」では立て続けに事件は起こっていた
去年は例の「赤の眷属国」である独裁国家から「弾道ミサイル」を撃たれた
いち早くそれを察知したイージス艦『みょうこう』は軌道を捉えていたが

捉えただけだった
何が出来た訳でもない

「海に落ちて終わり」

お笑い草のような回答
『みょうこう』は見えすぎる目で愛する日本に向かって飛ぶミサイルを見続ける事しか出来なかった
その日、悔しくて『みょうこう』は泣き崩れた。最新鋭艦の自分の存在の意味を見失う程に
なのに「人」は
何も出来なくても「被害」がなければ「国防」は成功という理論を振りかざした

だから、自分達と対面できる「人」が居たとしても何か助けになるなど塵ほどにも思っていなかった

「人」に何かを変える事は出来ないだけれど自分達が産まれてきた意味が変わる事もない以上、そんな状況にも心を強くして生きねばならないと
それが護衛艦に宿った艦魂の宿命だと『くらま』は結論づけていた

「確かに「人」と「艦魂」を分けて考えていた今までのままなら何も変わらないかも知れない」

ワインで蒸気した頬に『くらま』の手を押し付けたまま真剣な眼差しは続けた

「魂の引き継ぎは私達だけでは出来なかった。どうしてだと思う？」

それは『こんごう』誕生以前からの問題だった

戦艦の名前ほどではないが「海上自衛隊」は発足以来，艦艇名に「帝国海軍」からの古の名を使ってきている艦は多いなのに誰も魂を引き継げない

「魂の引き継ぎ？まだそんな事があると考えていたのか？」

『くらま』にとって余迷い子とのような台詞に聞こえたのだろういぶかしく顔を伏せ自嘲気味に歯を見せると

「よせよ『しまかぜ』まさか、それには「人」が必要だっとか言うのか？」

下からのぞき込み睨む目、『しまかぜ』はグラス片手にひるむことなく

「そうよ。きっとそうなのよ『あまつかぜ』姉さんが言っていた事は正しかったのよ」

掴まれていた手を引き、ワインを一気に飲み干した『くらま』は態度を変えることはなかった

「『しまかぜ』今更『あまつかぜ』の残した言葉に惑わされるな」
立ち上がった『くらま』は自分のグラスにワインを注ぎながら背中で言った

「魂の受け継ぎに引き継ぎなどありわしない。そんな事はもう忘れろ！私達は私達でいいじゃないか」

言い捨てた言葉ではあったが決して強い否定をしているようには見えなかった
背中を向けたままの『くらま』だったが、自分達の前に立っていた姉が探していたもの
それが心を大きく支配していた時代を知っているからこその、無理をしてをの拒否反応
自分たちが断絶の向こうに出来上がった「強き帝国海軍」の末裔ではなく別物の存在である事をまだ認めたくもないという虚勢は

悲しい反抗のようにも見えた
背中の相方に『しまかぜ』は聞くも苦痛を現されているにも関わらず続けた

「『くらま』貴女だって「帝国海軍」の栄光を忘れたくないからこそココで「修練」を怠らぬ魂を育てているのでしょ！だったら聞いて、そして信じてよ」

恋人の懇願
弛めていた自分の制服。詰め襟に触れた
帝国海軍司令官の黒の詰め襟
栄えある艦魂たちの姿を、今背負わなければならない自分達

「間違えるなよ。かつての栄光の元、志高き国防の魂としてありた

い。心意気を残したいと思っているだけだ」
「残せるわ、きっと。繋ぐ事だってきっとできると思うのよ！！」
立ち上がってしまっていた『くらま』の腕をとり『しまかぜ』はイスに導いた
「今回の事件でね私「不審船」の艦魂を見たわ」
「不審船の？」
カラになったグラスをお互い注ぎ足す
不審船の艦魂、この場合は「船魂（ふなだま）」というのが正しいが『しまかぜ』はとりあえず話しを進めた
「自分をあんな風に扱う者たちの中にいて、それでも「自殺」はしなかった」
『しまかぜ』は耳に残っていた言葉を思いだしていた
「私を殺して」
それは『あまつかぜ』の最後に似ていた
「『あまつかぜ』姉さんは、ミサイル攻撃の実験標的になったのに「自殺」はしなかった。それは「自殺」すると魂は引き継げなくなるからと『メイコム』から聞いていたからよ。その証拠を見たわ、あの船の魂もどんな非道な働きに徒事させられていても自殺はせず、自然の流れの中で殺される事を願ったのだから」
硬い態度を崩さず『くらま』は煽るようにワインを飲む前
『しまかぜ』胸の前に手を合わせ、まるで祈るように言葉を紡ぐ

「そして『あまつかぜ』ねえさんも探せなかった最後の引っかかりである物が解ったの、私達だけでは届かなかったもう一つの壁を打ち破るためには「人」と手を繋ぐことが必要だと気がついたの、今度こそ魂を引き継ぐことが出来るかもしれない」

懸命に説明をする瞳に『くらま』は申し訳ない事と思いながらも切り返した

「『しまかぜ』、『あまつかぜ』を撃った事は今でも重荷になっているのか？」

『くらま』の静かに自分を見る目。言葉に『しまかぜ』は息を呑んだミサイル護衛艦として姉を撃った

「ち、違うわ」

『しまかぜ』は目を閉じた
胸が締め付けられる思いが蘇る
姉を撃った日の事を思いだしたから、凪いだ静かな海に全ての武装をはずした姉は囚人のように白のラインで線引きされた船体の上に立っていた
風は生ぬるく冷たくもない
気味の悪い日と覚えているのは、自分の心にかかった複雑な思いを反映していたからだろう

第三次ＢＭ計画のミサイル護衛艦であった『しまかぜ』は新しい兵装の試験も兼ねて姉を撃つという悲劇に立たされていた
だが、それをどうして回避ができるか？
艦魂は只の艦の魂だ、ミサイルを撃つことも止める事は出来ないのに

「撃たないで！！！！！」

「人」の決めるスケジュール通り時はやってきて
泣き叫ぶ『しまかぜ』の前
自分の目の前、手を広げ最後の時を迎え入れた姉の姿を忘れた事なんてなかった

「『しまかぜ』…」

『くらま』はイスから立ち、悲しい思い出に身を震わす彼女を抱きしめると髪を撫でて額に口づけた

「『あまつかぜ』の事も『メイコム』の言葉も忘れろ。私達にもその「死」は来る。受け入れるしかない、もし希望があるのなら『あまつかぜ』は何故私達にそれらを記録した「日記」を残さなかった？それが現実なんだ」

息がつまる思い、堪える事で言葉を絞り出せなくなった『しまかぜ』に『くらま』は優しい抱擁をした

「魂の受け継ぎなど、ただの寓話なんだ」

抱きしめられた胸の中で『しまかぜ』は首を振った
「ちがう、ねえさんには時間が足らなかった。確定できない漠然とした記録である「日記」は後を継ぐ私達に混乱しか与えないと思って残さなかった」
「『あまつかぜ』の探し当てた物が希望だったと、どうして言える？」

自分を諭そうとする言葉を否定する

「違うわ、姉さんは私達に「希望」を託したの」

『くらま』は、きつく自分の意志を継げた彼女の顔を右手ですくい上げると口づけた
ゆくっりと躊躇う口の奥に甘美なワインを流し込むように唇を塞ぎ舌を絡めて，逆らう言葉を絶ちきった

離される口に光る露

「忘れるんだ昔の事を探す事に意味などない。今を共に生きる事の方が大切だ、だから自分を傷つけるような事を探すのに没頭するのは止めろ」
『くらま』の手は『しまかぜ』の胸のボタンを解き
白い胸元に手を滑らせた

「やめて…」

服の中に入った手を、宝を護るように引きはがすと『しまかぜ』は体を離した
抵抗に『くらま』は逆らわなかった
静かな足取りで窓辺に向かいながら自分の手を離れた彼女は、外されたボタンの奥、自分の胸の飢えで輝くネックレスにかけられた指輪を見つめた

「三十年。限られた時間の中をお互いを慰め合いながら生きる事だけが救いだなんて思いたくないの」

三十年。それは護衛艦の寿命
これ以上に長いものは希だが、いずれもそこがリミットであり終焉の時間だ
『くらま』は何も言わずワインを注ぐと窓辺に立った『しまかぜ』の元に歩を進めた

「私は少しずつでも、必ず希望を探すと決めたの」

姉の託した、姉の希望
月の光が差し込む窓の前
『しまかぜ』はとびきりの微笑みで『くらま』を見た
「希望か…」
軍務の元、忠実に歩む『くらま』には雲を掴むような話しだったが最愛の彼女の言葉をこれ以上否定したくはなかったのか口を閉ざしグラスを渡した

「『くらま』見て」

窓際により『しまかぜ』の腰に手を回した『くらま』に細い指先は外をさした

「何してんの？アレ？」

寄宿舎の前から背伸びしてグラウンドの方を伺っていた『むらさめ』はスポブラ、スパッツという秋の夜長には寒すぎる姿で、となりで様子をうかがっている『いかづち』に聞いた

「走ってますな…」

目線の先
粉川を中心に間宮と和田，その他護衛艦隊の船員達が声をあげて走っている
「アホやなぁ」
『いかづち』は眼鏡をそっと触わると
「共に責任を取りたい」粉川の言葉を思い出して目頭を押さえて唇を噛んだ
本気だった彼の力走に景色が少しだけ滲む

「ほんまに、アホや…」

その隣『さわぎり』は姉の『あまぎり』にもたれかかったまま
「粉川さん…」

就寝近い時間なのに未だ制服姿の『こんごう』のとなり、ラウンジドレス風の寝間着を着た『ちょうかい』は首を傾げて姉に聞いた

「何してるのかな?」

走っている事はわかったが「何で今時分」という意味で
だがその問いに答えない姉は静かに手で胸を押さえた姿でグラウンドを見る

『こんごう』は粉川が言った言葉を思い出していた
「自衛官はみんな悔しい思いをしている」
「何もできなかった事が悔しい、まだ心からあの船が消えない」
粉川の真剣な眼差しを思い出した
その想いで自分の肩に痛みを残すほどの本気をぶつけてきた彼の姿を見つめた

「間違わないで」

汗だくになり「公約」を果たそうとする粉川の姿

「バカ…」
『こんごう』は小さくつぶやいた

「後十周!!!!」

両手をガッツポーズのように挙げて気合いを入れる粉川の後ろ
護衛艦隊の隊員達の意気を上げ夜の空に気を響かせる
みな心に残った悔しさを吹き飛ばしたくて自主的に粉川の後を追っていた

窓辺からグラウンドを見つめる『しまかぜ』は自分の体を抱いたまま外を無言で見つめる『くらま』に言った

「「人」も変わってくれようとしてると思うの、だからこそ信じたいの」と

この夜

多くの艦魂は初めて自分たちを罰する「人」を見た
それは大きな変化となる、夜の小さな事件だった

第二十話　姉の希望（後書き）

カセイウラバナダイアル～～Ｖｏ２０（結婚と恋愛とｅｔ　ｃｅｔｅｒａ編）

いかづち　「ぎゃあああああああああ」
むらさめ　「うおおおおおおおおお」
ヒボシ　「きゃあああああああ」

ヒボシ　「ってなんですか？いったいいきなり絶叫コーナー？」
いかづち　「いやいやいやいや、あんた恐ろしい事を」
むらさめ　「おいおいおい、百合疑惑肯定か？」
ヒボシ　「何が？」
むらさめ　「おいっ！しらばっくれるなよ上の！！司令と『しまかぜ』の描写はなんだ？」
いかづち　「本気で百合やったんやぁぁぁぁ」
ヒボシ　「いやいや、別にそんな事書いてないよｗｗｗ」
むらさめ　「いや！！書いてる！！めっさ書いてる！！キスとかしてんぞ！！」
ヒボシ　「やれやれキスは挨拶ですよ」
いかづち　「うそや！！ベロ（舌）絡ますような濃厚な挨拶なんか見たことないわ！！」
むらさめ　「濃い、あの後はどうなったんだよ！！」
いかづち　「『むらさめ』それは考えたらイカン領域やで…」
ヒボシ　「おや～～『さわぎり』たんがいないな～～ｗｗｗ」
いかづち　「アホぉぉ！！こんな過激なシーンに『さわぎり』はん連れてこれるかい！！」
むらさめ　「前回の粉川が結婚してた話しといい、何か凄くねーか

？」

ヒボシ　「いやぁ普通でしょ、五十年も女しかいない生活してたら付き合いなんてそんなもんでしょ」

むらさめ　「おい…」

いかづち　「ふ～～そう言われればそうなんだけど、あの『しまかぜ』はんが、司令と付き合ってたなんて」

むらさめ　「『しらね』は知ってるのかな？」

ヒボシ　「知らないでしょ、これだって小説に書いたから発覚して後書きで君たちが知ったぐらいなんだから」

いかづち　「しかし、アイアン草薙wも言ってましたが艦魂小説の主人公は艦魂と結ばれるために独身である事が基本らしいやない？」

むらさめ　「粉川はあれか只の添え物か（爆）」

ヒボシ　「いやいや結ばれるのに既婚者はダメって事はないでしょ、むしろ経験豊富で」（ゴス！！殴られました）

むらさめ　「だまっとけ！！」

いかづち　「いいのかそれで…」

ヒボシ　「しかしだいぶん初期艦魂の設定を逸脱したからねぇ、そろそろ組合から首切りにあいそうで怖いですよ」

むらさめ　「元帥にあやまっとけ！！」

ヒボシ　「すいません、これからもチョコチョコ逸脱すると思いますが許してやってください」

いかづち　「しかしあれですな、艦魂物語はアダルトな部分が結構ありますね」

ヒボシ　「そりゃ、艦魂小説を書く先生の中で唯一女で。。。年寄りですから（悲）」

むらさめ　「ちっ！司令が私をお望みならなぁ！！私だって脱ぐわ！！」

いかづち　「アホ！！変なところで対抗するな！！」

ヒボシ　「でもさ女所帯の艦魂に恋愛はともかく「結婚」って概念

は絶対にないでしょ」
むらさめ　「男と一緒になるってのは考えた事もねーな」
いかづち　「そもそも一緒になってどうするの？」
ヒボシ　「子孫作る」
いかづち　「…なんやそれ…」
ヒボシ　「結婚ってのは自分の人生を寄り添う者を決める事、恋愛とは違いその証明である「子」を作る事も含まれる。という事」
むらさめ　「わからん！！！」
ヒボシ　「うんヒボシも経験ないから、もういいや（投げやり）」

いかづち　「ところでお客様を呼ぼうはどーなった？」
ヒボシ　「決まりましたよ！！！大和様三姉妹でどうと！！」
むらさめ　「大物だな」
ヒボシ　「後は正式に打診するだけなのですが、今日はもう疲れたので明日にでもいたします」
むらさめ　「ちゃんと挨拶はしろよ！」
ヒボシ　「オーゲー。コッソリ「長門様」も来て頂けないかとも思ってますがとりあえず明日には打診します～～～」

そんなこんなでウラバナダイヤル
ホント今週は辛かった～～～
マジ死に至りそうでした…

それではまたココでお会いしましょ～～～

第二十一話　その距離（前書き）

前章で『しまかぜ』『くらま』事件。。。。
いろんなご意見の飛ぶ中
元帥の所の大和様にまで知られてしまい。。。
ヒボシはフルボッコになりました。。。。
プライベートはホドホドにって事ですね。。。。。タシケテ（藁）
ところで今回は後書きに「紀伊」からのお客様登場～～～しかし
もう。。言語『』だけで物語りを構築する事ができず。。。大変な
事になってしまいました。。。
アイアン草薙先生は元より。。「紀伊」のファンのみなさん。。。
ホントに優しい目でみてやってください！！！！お願いします！！
！（激しく陳謝）では～～～

第二十一話　その距離

慌ただしかった佐世保基地帰港第一日目が終わり
開けた朝
透明度の高い青い空の下を「総員起こし」の号令の下，課業開始，
朝食と続き護衛艦船員上陸組はグラウンドを走っていた

ココは修練の港

昨日，粉川の後ろを追い走った船員達は今日もまた走る
護衛艦の上では「訓練事項」に添い艦内待機組の総員達が的確にこなしてゆく

毎日の課業
昨日は，あの日以来。。。「悔しさ」に澱んでいた総員達だったが
今朝には何処にもなかったかのように晴れた顔になったいた
高く青い空に同じく清々しさを取り戻した隊員達は声も高らかに課業をこなす
そこかしこと走る男たちの姿はどこにも濁りがなくっていた

昨夜の珍騒動

帰港を迎えたばかりの隊員達が夜の最中にグラウンドを走った
寄宿舎管理の所長が何事?と問えど返事はなく
あえてあげるのならば

「明日のために」

と言うへんてこな答えだった
いつもなら課業外勤務という事で「おしかり」を受けそうな夜の激走
所長は正しく事の次第を基地司に告げたハズだったが
司令の宗像からはなんのお沙汰もなかった
それどころか隊舎の玄関には習字で書かれた達筆な月間標語が書き直されていた

「良く励め！！」

何に？とか書かないあたりが宗像の心苦しさを現していたが
言いたい事は良くみんなに伝わっていたかのように，全てが秋の晴れた空のよに澄んだ気持ちで動き出していた

「おはようございます！！」
ご多分に漏れる事なく。。。。
背広組の一員である粉川は「何故か？」隊員たちの課業に混ざってグラウンドを走っていた
事務方である粉川の奇異な行動は見る者を選ぶが
ココの隊員たちには心強いものに映っていた

防衛庁内局の人

それは現場仕事を理解しない人。。。。体を張って「戦わない人」
そう言うイメージをぶっ飛ばす存在

走る粉川の姿に艦艇の上で課業を続ける隊員達から挨拶がされる
粉川が示した「責任」に感化された隊員達には，彼はただの「内局

の人」ではなくなっていた
共に走り
共に「悔しい思い」をした人。。。それを頼もしいという目が見ていた

ある意味防衛庁内局のイメージを良くするという絶大な効果を現した彼に
その官位にふさわしく，みな敬礼の挨拶をする

「おはよう！！」

走りながらも返礼する粉川がそれに気がついているかは別として

一通りランニングをすませた粉川は玉粒のような細かな汗を散らしながら，自分にあてがわれた隊舎に向かって歩いていた

「気持ちいい。。。。」

もともと海自に席を置き日々を海で過ごしていた事のある粉川にとって課業は習慣ともいえたが
自分の体を熱くさせる事が自分の一日を良くする事とも学んでいた
子供の頃から培った自分に対する教訓
昔から「母親代わりの人」が自分を鍛える事に手抜きを許さないという教育を施していた。。。それは今の粉川という人格を作り上げた「賜物」になっていた

隊舎に向かう途中煉瓦倉庫が見る
そこに「艦魂」達が住んでいる事を知っている粉川は多くの艦魂達

が外に集まり
「人」と変わることなく課業に入っているのを見た
中央には昨日と変わらず『くらま』が立ち倉庫の周りを走るという，
まさに「人」の訓練に準ずる練習が行われていた

。。。

昨日とは違いみんな「青服」を着用している姿は粉川の目には新鮮だった
衆群の中，断トツのスピードで走る『こんごう』の後ろを『むらさめ』と『しまかぜ』そして『ちょうかい』が入っている
後には『なみ』姉妹と『あめ』姉妹の二人『きり』姉妹の『さわぎり』達

前を走る姉達に比べるとかなり小柄な『ちょうかい』は足数の多いピッチ走行をさらに早回しにした感じ
フィルムでいうなら前の集団が普通なのに『ちょうかい』だけは４分の１スローみたいな早さ
一生懸命に姉についていこうとする姿を見るに，粉川は微笑ましく思った

前日
『くらま』と初めて会ったとき「敬礼！！」と自分を怒鳴りつけた時は彼女の姿をじっくり見る事はなかった
走り終えて息を整えるために膝に手を置いた姿
ショートカットの黒髪に姉と同じ青い瞳を持つ
『こんごう』に比べると姉妹といってもあまり顔立ちが似てはいない，背丈も一回りは小さい背中がスピードの速い持久走を終えて揺れる

「どりゃ！！」

遅れてゴールにに入った『いかづち』と『はるさめ』にプランチャーをかます『むらさめ』
ココに来て初めて見る艦魂の姉妹達

「おっそい！！魂込めろ！！」

先に走り終わった『むらさめ』は，なぎ倒す勢いで横っ飛び
走り終わったばかりの二人が避けられるハズもなくそのまま崩れる

「ぐわぁぁぁ」

二人より遙かに鍛えている『むらさめ』は受け身も巧い，妹達はそのまま押しつぶされてダウンする

『いかづち』のとなり『はるさめ』は『あめ』姉妹で言う次女だが
直ぐ上の姉にはやはり体格等々全体はあまり似ていない
肩に届く程度のショートポニーの茶髪は目を回して倒れていて
似ている唯一の部分は垂れ目な事

「おネエ～～痛い～～～」

緩いしゃべり方が悲鳴まで緩くあげる

「おネエゆうな！！」

腕まくりの長女は遠慮なく二人を起こす

「気合い入れろ！！！護衛艦たるものが！！！」

スパルタな発言と共にタオルを顔にぶつけるとゴシゴシと力任せに顔を拭ってやる

「痛いて！！痛い！！」

右で騒ぐ『いかづち』と，されるがままの『はるさめ』は
「痛いよお～～おネエ～～痛い～～～」と相変わらず緩くトロい悲鳴

その後ろをやっとでゴール，お互い手をつなぎ肩で息した『きり』
の姉妹である『さわぎり』と『あまぎり』
事件の時には顔を出していた『ゆうぎり』はすでに大湊に帰ってし
まっていないが
全体を通して似ているのは，体が小粒な事，護衛艦の中では『ゆき』
姉妹達の次に小さな体の艦であるからなのか？

ちなみに『きり』姉妹の八人の中では『あまぎり』が四女で『さわ
ぎり』は七女になる
到着と同時にヘタレた『さわぎり』に姉は水の入ったボトルを手渡
すと

「ゆっくり飲んで」

すぐに水を喉に注げないほどに上がった息を整えるために背中をさ
する姿はこれまた微笑ましい

激走の後，怠らぬストレッチに入っていた『しまかぜ』の元には『
たかなみ』と『まきなみ』の『なみ』姉妹が揃っていた
『なみ』姉妹と言えば，横須賀の『すずなみ』を思い出す
潤んだ大きな瞳に内巻きに入るシャギーの美脚少女

『なみ』姉妹は割とお互いの外見が似ているようにも見える
二人とも黒目の大きなぱっちりお目々で均整のとれたスラリとした
プロポーション，髪の長さにいささかの違いがあるが顔付きはよく
似ている
いかにも「お姉様」という感じの余裕のある態度で，上の姉である

『しまかぜ』とストレッチに入る

「追いつけませんでした。。。。」

イタズラっぽく舌をチョイと出したのは『たかなみ』，姉妹の中では長女にあたる
三人分の水をもって戻ってきた五人姉妹の三女『まきなみ』は

「しびれるぅ。。。。」

少しばかりしゃべり方が『むらさめ』達に近い
元々『なみ』姉妹達は『あめ』姉妹の発展型として出来た護衛艦達だから本来は似たもの姉妹達なのかもしれない
だがどちらもクリエイティブに徹した一群勤務の五女『すずなみ』より健康美溢れる
「お姉様」といった感じだ

「まだまだ。。。負けないわよ」

そんな二人に囲まれながらも，さらに上の姉として余裕の笑みを浮かべる『しまかぜ』の顔は輝いていた

みんなが各々朝の課業最後の激走をたたえ合っている中
粉川の目は距離をもっている二人を見つけた

『こんごう』と『ちょうかい』

同じイージス艦の姉妹

同型艦の姉妹では長女と末っ子の妹は微妙に離れた状態で息を整えている
『こんごう』の背中を見つめながら。。。。渡そうとしているタオルを握ったままの『ちょうかい』
海の方を見たまま自分の存在に気がつかないふりをしているのか。。。。『こんごう』は後ろを見ずに肩を揺らす

「お。。お姉ちゃん。。。。」
少し歩み寄った妹は小さな声をかける
この秋空の下，少し冷えた風で汗は急にひきはじめている
振り返った『こんごう』は目の前に出されているタオルに気がついてはいるが。。。。

課業を終えた艦魂達が寄宿舎に戻り始める中
二人の間は相変わらず微妙で。。。見ている粉川がじれったくなるように進まない

『こんごう』は差し出されたタオルを開くと自分にではなく妹の頭に被せた
「風邪ひく。。。」
そういうと気恥ずかしそうに目をそらし，そのまま帰ってしまった

帰る足取り組の中一人ポツンと残される『ちょうかい』

「『ちょうかい』ちゃん？」

被されたタオルの下。。。足もとを見ながら倉庫の方に向かっていた『ちょうかい』に一連の流れを見ていた粉川は声をかけた

「？」
運動の後のせいか?呆けていた『ちょうかい』は不意に声をかけてきた男を怪訝な目で見た
最初顔を上げた時は少し驚いた顔をしていたが今は目つきもキツイ

「何?」
怒鳴った時とは違い小さな。。。幼さの残る声はそれでも邪険にした返事を返した

「挨拶は敬礼でしたほうがいい?」

粉川は自分より遙かに小さな『ちょうかい』に視線を会わせるために膝を折り，腰を降ろした
「別にいらない」
ぶっきらぼうな返事
そんなところは姉の『こんごう』に似ていると思った

「私は一応，ココでは二佐になりますけど。。。「人」と艦魂は違うから。。敬礼はいりません。。ただ司令にはちゃんとしてください」

テンションの低い声は機嫌悪そうに続けた
粉川は目の前できっちりと敬礼した
「僕の上司にあたるわけだ!!敬礼!!『ちょうかい』二佐!おはようございます!!」
目の前の男は優しい笑みの中で敬礼して見せた
恥ずかしくなったのか『ちょうかい』は言い直した

「だから。。。別に「人」には関係ない事ですから。。。」
「じゃ普通に話ししてもいい?」

小さな姫様の前，粉川は安心感を与える柔らかい声と笑顔で返事した

昼下がり，煉瓦倉庫の裏手
少しの堤防の向こうには「アメリカ第七艦隊」の姿が見える
澄んでいるとは言えないが，秋空の斜陽の太陽を水面に反射させる
景色は美しい
だが
海を行く船はほとんど無い。。。。ココは軍事基地の重要拠点であり「制限水域」
無断で入れば即座に捕縛されるという物々しい港だ
だが晴れ渡った空，雲のない青の下は極めて自由にも思える

「お姉ちゃんとの事で，なんか悩んでる感じだっから」

倉庫の寄宿舎から隠れた木陰の下に粉川と『ちょうかい』は座っていた
二人とも汗を落としココに待ち合わせた形だった

粉川の。。。。的を得た質問に体育座りをしていた『ちょうかい』は体をすぼめた
第三者の誰から見ても。。。。
姉と自分の関係は微妙に見えていた事

「別に。。。あれが普通だから。。。。」

見透かされた悩みに恥ずかしさか頬が赤い
「そうかな?普通なら。。。あんな寂しそうにならないでしょ」

「寂しくなんか。。。。。」

寂しい。。。。

他の姉妹艦達が仲良くしている姿を見れば

その思いはいっそう強くなる。。。。

回航で他の港に行っても必ず会えるたの数の多い姉妹とは違う「イージス艦」の姉妹

「なんで。。。そんな事聞くの？」

顔を膝の間に隠してしまった『ちょうかい』は小さく聞いた

「僕は君たちと仲良くなりに来たんだよ！！なんだって力になりたいんだよ！！」

小さな艦魂『ちょうかい』の隣，どこから溢れるのか自信満々の粉川はあっけにとられつい顔を上げた『ちょうかい』の顔に指さした

「言って！！一人で悩んでないで話してごらんよ！！」

「人」と話したことはなかった

近くにいるだけの存在。。。自分たちの操艦にいる人達。。。それだけで

何故「人」がいて「艦魂」がいるかなんて考えてもしかたのない事だと思っていたのに

「人」が自分の悩みを聞こうとしている。。。。

不思議な感覚なのか『ちょうかい』は目を丸くしたまま固まった

そして今まで起きたことの無かったこの奇蹟に自分の心をゆだね

ゆっくりと「姉」と「自分」の話しを始めた

それは逸話のように広がっていた「魂の引き継ぎ」という話しと。。。それをめぐる「姉」の誕生の悲劇

「なるほど。。。。。」

粉川にはわからなかった艦魂たちの悩み

『こんごう』の。。。眠りの中で繰り返していた言葉の意味を理解した

自分以外の魂。。。。

栄光の帝国海軍という魂を望んだ「艦魂」達にとってそれは。。夢だった

「金剛の魂」

自分たちが大戦という断絶の向こう。。。アメリカという庇護の下に産まれた「妾の連れ子」とあだ名された情けない艦隊として設立した事

それ故にこそ。。。。。自分たちが純然たる魂を引き継いだ者と思いたい。。。

そうして引き起こされた「悲劇」

「お姉ちゃんは。。。。自分が苦労したから私達には絶対にそんな思いをさせないために。。。自分に厳しい人なの。。。だからあんなふうなだけ」

非難の矢面に立った『こんごう』が自分の妹を守るためにとった方

法は。。。
常にストイックな程に誰よりも責務に身を投じる事だった
それは痛いほどにわかる
「不審船事件」の時。。。。離れていく敵を見逃さなかったあの瞳
の意味
でも

「それちょっと違うと，僕は思うよ」
いつの間にか『ちょうかい』の目には涙が浮かんでいた
「違わない。。。そうなの。。」
自分に言い聞かせるようにする態度が。。。。

「違うよ。。。。たとえ責務のために前しかみないとしても，妹を
見る目線が一緒なわけないだろ？」
小さな肩は震えるままに涙を零した

「違う。。。私達は他の艦とは違う。。お姉ちゃんばかりが辛い思
いするぐらいなら。。姉妹のなれ合いなんか。。。」

イージス艦に産まれた
国の楯として産まれた
たくさんの期待に応えなきゃならない。。。。
艦魂達が復活を期待していた「かつての魂達に」答えるためにも

「『ちょうかい』ちゃん。。。嘘ついたらダメだよ」

嘘じゃない。。。。でも必死の言い訳だった

自分に強い否定ではなく，笑顔で嘘を溶かした男の前で涙は止められなかった
「だって。。。」
「お姉ちゃんと普通に話しがしたいんでしょ」
不器用な姉妹。。。。。
粉川は『こんごう』の不器用さを，ホントに痛い思いをする程に知っていたが
その妹も。。。。ホントに不器用だった
姉を思い普通の「妹」として甘える事を我慢し続けた末っ子の『ちょうかい』

一生懸命に『こんごう』の背中を追う姿を見た時から粉川にはわかっていた
姉しか見ていない幼い瞳の。。。。ささやかな願い

二人ではどうする事もできなかった，その距離

「お姉ちゃんは優しいんだよ。。ホントにホントに。。。」

『ちょうかい』は押しとどめていた思いを吐き出した。。。だまっていられなかった
今まで
言いたかった自慢の姉。。。優しい姉
粉川は小さな手を握りながら一つ一つの思い出を聞いて言った
思い出
無口ながらも姉がくれた優しさ
生誕の時，誰よりも先に抱きしめに来てくれたこと
艤装の時も時間があれば色々外の世界の物を持ってきて

自分が居ないときは。。。他の艦魂に運ばせて。。。
配属が決まれば。。。バラバラになる運命の特殊な姉妹，誕生日に。
。。プレゼントを。。。

『ちょうかい』は思い出したように顔を上げた

「プレゼントしたいの。。。。」

涙で，ぐしゃぐしゃになった顔は粉川に手を握られたまま初めて自分の意見を言った
「プレゼント。。今までもこれからも。。。お姉ちゃんの妹である事が誇りだから」
自分たちの前に立ち続けた姉に対する感謝と。。。。
これからは共に前立つという願い
普通に話しを出来る姉妹になりたいという思いで

「了解!!お祝いしよう!!」
「ホントに？」
「ああっ!!さっきね『いかづち』ちゃんが僕の所に来て明後日，歓迎会やってくれるって言ってたんだ!!それのスペシャルサプライズ!!決まったね!!」

粉川は『ちょうかい』の手を引くと立たせた
「お姉ちゃん驚かせてやろう!!ねっ!!」

泣いていた顔は一気に華やいだ
明日，買い物に行くことにした粉川と，それに自分なりのプレゼントを細工すると決めた二人は満天の笑顔で約束を交わした

第二十一話　その距離（後書き）

そのお茶会は緊張に包まれていた。。。
華やかな庭園の鳥かご，それを模したステージに作られた席に
アイアン草薙氏の艦魂『大和』様，真名『撫子』と『武蔵』様，真名『桔梗』が迎え入れられ
対するイスには『くらま』『いかづち』『むらさめ』が座っていた

春ウランラ（藁）の会場にあって。。。『いかづち』の緊張はピークに達しているのか眼鏡の奥の肌にじっとりと汗

「。。。なあ。。。どうしたらええのん？」
テーブルの下で姉である『むらさめ』の袖を引く
「ご機嫌でもうかがっとけ。。。」
隣に並んだ『むらさめ』は背筋にじっとりと冷たい汗を這わせながら答えた

面前
おしゃれな英国式ティータイムセットの前
並ぶ艦魂は「紀伊の世界」からはるばるやって来た「大和級艦艇の姉妹」達。。なのに招待した妹達2人が遅刻している状態に『桔梗』嬢の苛立ちはピークに達していた。。。
遅刻なのだから。。。面前で苛つくのは不本意なのだが。。
妹達の到着はあまりにも遅い
心配する心でテーブルを叩く指先の音は『いかづち』と『むらさめ』には怒りのカウントダウンをしているようにも見えた
何度も指を羅列する音を止めたのは『撫子』様

「落ち着きなさい。。。桔梗。。。『しまかぜ』さんに『こんごう』さん。。それに『鈴』さん（長門様真名）が迎えに行って下さったのだから」

今日は。。。。晴れての他小説での活動をしている艦魂との交流会だったのだが
紀伊からのメンバーはこちらへの航行中，妹君2人とはぐれるという，不可思議な状況になり現在に至っていた
不思議なものだ空間をつなぐ通路は，ココまで一つの経路しかないのに

「とりあえずティーどうぞ」

慌てる事を見苦しいと感じる司令職の『くらま』はゆっくりとした口調と態度で冷めてしまわぬ前にポットに出されていたアップルティーを注いだ
同じくゆるりとした態度で『撫子』様がそれを受け取る

「いただきましょ。。。。『桔梗』」
「うがぁぁぁぁぁぁあああ！！！」
自分を宥めた姉の態度に反発するように爆発した『桔梗』嬢はイスを蹴飛ばして立ち上がった

「アカァァン！！小雪（『信濃』様真名）と零（『近江』様真名）を呼んでくるぅ！！！」

入れられたばかりのアップルティーを満たしたカップが転ぶ
『桔梗』様にあって
命よりも大切な妹達の安否不明などあってはならないこと！

そんな状況下でのんびりとお茶など，すすれるわけもない
勢い右手からは閃光と共にに槍を出しそうだ

「落ち着きなさい」
「アカン！なんぼなんでも遅すぎるて！！私も迎えに行く！！」

走り出す妹の手を掴んだの姉を振り解こうとするが『撫子』様は極めて冷静に言う
「戦場に彷徨ってしまったわけじゃないわ。。。ココまでは一本道。。きっと途中で道草しているだけよ」
穏やかに
しかし力強く『桔梗』の手を引く

「司令官補佐たる貴女が慌てるなんて。。。見苦しいわよ」
チョイと士官服の襟をさする
ベタ金の記章は「大将たる者」という態度を無言で語っている

「そうです。。。私達の方でも迎えを出しておりますから，今しばらくお待ちになってください」

歩調を合わせるように鎮守府司令である『くらま』は転がったカップをとり，ティーを注ぎなおす
目の前に作られた水たまりを『いかづち』が手際よく拭く

「大丈夫ですよぉ！！『しまかぜ』はんも『こんごう』も行っとりますから～～」
和みの一発をいれたつもりだったが
立ち上がったまま『桔梗』様に火に油（藁）
「だまれ！！！『いかづち』だったけ？オマエと違って『小雪』や『零』はめっちゃカワの妹なんだぞ！！それゃも～～とろけるよう

なマシュマロのような!!あああああ『大和（伊）』とかに攫われたりしたらどーすんじゃ!!」
「うは!!わて可愛い無いですか?『むらさめ』どないしょ～～」
「オマエ?とりあえずマシュマロじゃーねぇな。。どっちかって言えば，たこ焼き?（藁）」
「うは!!たこ焼き!!せやけど粉物やったら一緒やで!!」
「アクセサリーがマヨネーズじゃダメだろ」
何故か自慢げな『むらさめ』
ボケる『あめ』姉妹（爆）の前テーブルを踏みつけて怒鳴る『桔梗』様
「アホ!!!たこ焼きは，うまいだろ!!」
「ほな愛して下さい」たこ焼きとあだ名された『いかづち』は素早く切り返す
「うは!!無理!!」
高いテンションを維持したまま「ダメ，絶対」と手を出して固まる『桔梗』様

「『桔梗』。。。。。。」

静かな炎が揺れている。。。。
『撫子』様は満天の笑顔の中でテーブルにのった『桔梗』様の足を打った
「いたたあああ!!」
「ふふ。。。行儀がなってませんわ」
軽く叩かれたように見えたがダメージは甚大なのか?飛び上がった勢いからイスに着地した『桔梗』様の目に涙

「。。。撫子姉さん。。。。」
「すいません。。この子ときたら，ついはしゃいでしまって」
テーブルを拭き直す『くらま』の表情は変わらないが『桔梗』様の

心配は体滲み出ていてカタカタ揺れる

そんな緊張した場所に『さわぎり』が
小さなワゴンに「ケーキ」を乗せて
珍しく制服ではなく，メイド服でやってきた（藁）

「まあ，可愛らしい」
『撫子』様の微笑みに，照れながらもスカートの端をチョイとあげて挨拶
「初めまして，『さわぎり』ですぅ」
「うおおおおん!!!!」
その仕草に何かを思い出したように『さわぎり』に抱きつく『桔梗』様
頭をグリグリ撫でられて目を回す『さわぎり』の向こう

「うは。。。。ココにも大和長官が（大和（伊））（藁）」眼鏡越しに驚く『いかづち』に『桔梗』様，手を止めて
「ちがうわ!!!大和（伊）と一緒にすな!!」
「はにゃ〜〜〜」クルクル眼の『さわぎり』を指さし
「こんな可愛い妹，見たら!!『小雪』や『零』が今どうしてるかと。。。。」
姉という生き物がこんなにも妹を心配する者なのかと眺める『いかづち』
「わても妹やんねぇ」『さわぎり』を撫でる『桔梗』様に自分を指さして
「オマエら『あめ』姉妹は変なのバッかやないか!!」
「うは!!変なの言われで!!」
のけぞる『いかづち』向こう渋い表情の『むらさめ』は
「でもホントの事だしなー」

『桔梗』様は戦艦武蔵とい司令長官付き参謀だこちらの艦魂の事はすべてチェック済みだ
『むらさめ』を長女に八女までの姉妹でまともな妹などいない事など確認済み

「うわぁぁもう，心配でお茶なんかやってられへんわ!!」

「いい加減にしなさい」
流れる黒髪姿の姉の目はわらってはいなかった
「ご招待にあずかっているのに。。。。怒りますよ」ゴゴゴゴゴゴゴゴ
大和撫子。。。。
その怒りは静かなる言葉を発し，とりあえず争乱のお茶会を沈めた

「いませんね〜〜」
騒がしいお茶会の場から離れた「空間航路」をお迎えに向かった『しまかぜ』は隣にきりりとした帝国海軍軍服を纏った『長門』様，真名『鈴』と捜索をしていた
「空間航路」はただっぴろいが，違う次元を結びつける道となるため大抵は一本道として開けられる
そうしないと次元軸が揺らぐからだ
安定のためにこその一本道。。。。なのに真っ直ぐに繋がる道の中「大和姉妹の妹2人」の姿はどこにも見えなかった

「こんな場所で道草?」
お茶会遅刻についても規律違反であると『撫子』様に言いはなって迎えを買って出ていた
その『鈴』様は顎に手を当てたまま考えを廻らしていた

一本道。。。何度も行き来したが何処にも見えない二人？

「お帰りになられたのかしら？」
「いや。。。それはないと思うが。。もしそうならば向こうからメールが来ていて良いはずだ」
『しまかぜ』は現在一佐なので（大佐）そんなにかしこまられる事をくすぐったそうに思った
相手は帝国海軍七代目旗艦。。。司令職の艦魂
「『鈴』様。。。よろしければ会話は普通に致しませんか？」
笑顔で
気をきかせた

「すまない。。。気を遣わせて」
「いいえ。。私も硬くなってしまう方なので」

お互い熟知ある女としての会話
「さて。。『こんごう』は気になる事があると言ったきり戻ってしまったし。。。どうしましょう」
困った顔のなかにも穏やかさを絶やさぬ『しまかぜ』に徹頭徹尾の軍人である『鈴』様は少しの不満があった

「しばしココで待とう」
そういうと航路に手を組んだまま浮いて

「『しまかぜ』殿は。。。。『くらま』司令殿とお付き合いをしていると聞いているが？」
静まった航路で核心をそのまま聞いた
遠巻きに相手の事を知ろうとしない，いかにも軍人らしい質問に『しまかぜ』は少し目を大きくして

「『ヒボシ』さんにはお灸が必要ですねぇ。。。」

笑って返事した

少しの沈黙

「ダメですか？」

『しまかぜ』も実に素直に自分の「恋愛」の是非を聞いた

「いや。。単刀直入に言うならば，そんな心持ちで「国を守って行けるのか？」という事なのだが」

「それとこれは違いますからご心配には及びませんわ」

『鈴』様は危惧していた

『しまかぜ』と『くらま』司令の話はココに来る前から紀伊の世界でも多少噂になっていた，それをアブノーマルととるか？ノーマルととるか？は別として「恋愛」をしているという事実が気になっていた

自分たちは「戦争」という向かうべく一方通行に立たされていて「恋愛」というものなど厳禁というか無い世界にいた（一部別ですが）だからこそみんなが一致して「戦い」に向かっていけた事を誇りにさえ思っている

史実通りに進んだのなら自分たち亡き後に『しまかぜ』達の時代が来ていた

その時に「国」を守る職務にある「艦魂」が自分の上司と「恋愛」などしている事など。。。気持ちの良い話しには聞こえなかったのだ

「耐えられない気持ちは今も昔も変わらないと思います」

『しまかぜ』は自分に厳しい視線を向ける帝国海軍軍人『鈴』に告げた

「耐えられない気持ち？相手を想ってか？」
『鈴』様は「熱愛」ならば盲目と言うことかと聞いた

「相手に？違いますよ「守る」という職務の艦生にです。。。。満足を得られる職務ではないのです。。。。むしろ」
「生きるためにか。。。。」

それは寂しい告白だった
『鈴』様には『しまかぜ』が言わんとしている事がすぐにわかったから言葉を絶った

「すまなかった。。。不躾な質問をした」
「いいえ。。。「噂」になっちゃいましたからね。。。「妹達」には内緒にしておいてくださいお願いします」
やんわりとした対応『鈴』様は中身がこれだけしっかりした艦魂ならば大丈夫だと。。自分に納得すると返事した

「了解だ」
そういうとまた航路の道の遠い先を妹達を見つけるために睨んだ

その頃。。。。『こんごう』は自室にいた
四角四面のドア無き部屋の壁を指で探るように触って

「やっぱり。。。。スキマ」

当初『しまかぜ』達とともに空間航路をレーダーで捜索していたのだが，その時に違和感を感じていた
「別の航路がある」

それは前回のお茶会の時，大和長官（伊）が姿を現したボーダー商事謹製の個人用空間航路だった
「残ってた？」

指先でスキマの端をつまみ恐る恐る開ける
中は通常の空間航路に比べると暗い
狭いのか？広いのか？もワカラナイ曖昧灰色の壁。。。自室の鉄壁のように鉄でできている灰色はわかりやすいが「歪み」の見える時空は余計に気味の悪い配色に見える

『こんごう』はゆっくりとスキマの中を覗いた
ひたすら揺れ動く空間。。。。？

「泣き声。。。。」

微かな声
反射を許さない撓みの壁の中，小さすぎる音を『こんごう』の耳は追った
子供？女の子？二人の声。。。。
「ココにいる！！」
それはおそらくお茶会に来る予定だった2人の声
『こんごう』はスキマに向かって飛び込んでいった

第二十二話　妹の笑顔（前書き）

私の書く艦魂は正しい設定を破壊している
という注意を頂きました
事実これからも正しいといわれる設定からは逸脱してしまう可能性が高いためココに但し書きをさせて頂きます。。。。長ったらしい文でごめんなさい～～～（涙）
今回だけ。。。ココも読んでくださいませ。。。。
＜要注意事項＞
原初正しい艦魂設定を愛する方には不快な部分が多々ありますのでご注意下さい
誤って読んでしまったとしても一切の責任はとれません
この小説における「艦魂」は筆者である火星明楽が正しい設定とは別に諸説を織り交ぜて創作したものです
ですので
また，この小説では，これ以降の章で艦魂そのもの「正体」探る部分が出てきますが
以降書かれる「艦魂」の設定は
私，火星明楽の個人史家としての研究の元に書かれております
故に，ココで書かれるこの設定は私個人の物であるため，他所で使うことを厳重に禁止します
（私の著作，権利とします）
理由としましては
個人レベルで調べられた「民俗学」を基本とした仮説で話しを構築しているため，本来あるべき民俗学や考古学の発展の妨げとなってはいけない事，不必要な誤訳，誤解を世に広めてはいけないと，考えているからであります
また，これから艦魂小説を書こうとされる方に無用な混乱をさせないための処置と理解してたください

けして占有を目的としての禁止事項でない事をご理解ください

これはあくまでこの「艦魂物語」内での設定としての存在でありますから，事実とは一切の関わりはなく，実在の民俗学にも考古学にも一切関わりはありません
あくまでこの小説内における仮説に基づいた設定である事をご理解ください

また
設定の作成に関わった「民俗学」等々の資料に関するご質問にはお答えできません
それらを元に誤解，誤訳を増やすことを望んではいないからです
色々と堅苦しい注意書きとなりましたが
純然に物語として楽しんで頂ける事を心から願います

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～
筆者
火星明楽

第二十二話　妹の笑顔

「見てしまったの。。。。」

煉瓦倉庫2階にある艦魂達の部屋に続く通路
窓のない倉庫の一番端はお風呂から出てきた所に少しだけ広いスペースをもっている
課業が終われば汗を流しに艦魂達はココに集まるが
長風呂も多いため，ちょっとした，社交場にもなっている

籐のイスに座ってお茶を啜っていた姉妹達に話しかけたのは『はるゆき』。。。『ゆき』型汎用護衛艦という艦魂姉妹での一大勢力ともいえる１１姉妹の七女
前は一本に引っ詰めた髪をしていたが，風呂前という事もあり解かれた髪はショートの茶色，毛先だけが内側に巻いている癖毛の彼女は，上目遣いのイタズラっぽい目つきのまま姉の前のイスに座った

「何があったの？」

意味深な台詞とともにお風呂道具を足もとに置いた妹を見る姉の『いそゆき』は六女，佐世保では一番上の姉になる
すでに風呂から上がった彼女は真っ黒な髪を，蝶をかたどった鼈甲のバレッタで纏めた姿で，ラムネを口に聞いた
「今度のはスゴイよ」
主語の抜けた会話
いかにも女らしいはじまりで姉妹は顔をさらに近づけて話し出した

「『ちょうかい』二佐なんだけど。。。」

艦魂達には階級がある。。。。が
戦争があった頃のように厳格な規則に基づいてあるわけではないため割と忘れられがちなのだがココ佐世保ではかなり厳しく守られている
『ゆき』姉妹達艦艇から見たら『ちょうかい』は１０年以上も年下で実質のクラスは一緒なのだが
それとは別に仕事の重さでつけられる階級で上司という事になる
『ちょうかい』は最新鋭のＤＤＧ，ミサイル護衛艦で将来的にも「旗艦」になるクラス

「二佐はいいだろ？休憩中なんだし」

方眉をチョイと上げた『いそゆき』は小声で返した
「まあまあ。。。スゴイ事になってるよ」
「もったいぶるなよ」
自分の肩を突く姉の前『はるゆき』は課業が終わった後の出来事を話し始めた

走ること
それはどんな運動に置いても切り離せない基本のような物
佐世保ではほぼ毎日，激走型持久走が行われている
だけど
逆にいえばそれしかない。。。。「人」と違って身体的な機能の得手不得手を決めるのは姿である自身の決める事でなく「艦」の持つ力で決まる艦魂にとって走るというのは「心」をひたすら鍛える作業というだけの事だから

今日もよく晴れた秋晴れの下での持久走を終えた『こんごう』は足早く部屋に戻ってしまっていた

いつもなら無口な姉の姿を後ろから見ている『ちょうかい』だったが今日は違った
煉瓦倉庫の寄宿舎に姉の姿が消えたのを確認すると
青服のまま街路樹の道を突っ切り，基地から町に出るゲート近くにある金網のところまで走っていた

金網の塀には外側に向かった有刺鉄線が張られている
棘を輝かす太陽の下，粉川が待っていた『ちょうかい』は姿を確認すると飛ぶような喜びと共に。。。。

それを『はるゆき』は偶然見ていた
激走でダラダラになった『はるゆき』は，お風呂が込む時間を嫌って木陰で体を冷却していたのだ

「で？」

すでに関心のまっただ中に入った『いそゆき』の顔は，妹と鼻があたるほどに近づいていた
空気を奪い合うほどに共有する間合いの中で聞く
姉の関心が自分に向いたことで話題の主導権を握った『はるゆき』はニヤリと笑って続けた

「『ちょうかい』がね。。買ってぇ～～って，ねだってた」
「何！？」
「それに男の方は。。。鼻の下伸ばしてた」
「何と！！」

輝く瞳

人差し指を立てた『はるゆき』は自分の予想を話した

ぶっちゃけた話し
疲れきって木陰で休んでいた『はるゆき』のレーダーは自分から数百メートル離れていた豆粒の程度の影である『ちょうかい』と粉川の会話を正確に聞き取る事など出来ていなかった
部分的に聞き取った言葉に自分の「理想的予想」を当てはめ
呆然と見ていた景色の中，卓越した妄想が突っ走りあられもない話しと変化していた

要約するならば
自分に冷たい姉に対しての挑戦か？『ちょうかい』が粉川を狙ってアタックしているというもの
根も葉もなければ，茎もウテナもないような話しだ

「『こんごう』一佐はあんまり『ちょうかい』と仲良くないじゃん。。。そこにあの男，登場！！日頃，自分に冷たい姉の男に『ちょうかい』手を出す！！！」
「あの「人」って。。。やっぱり『こんごう』と付き合ってるの？」
「付き合ってると見たね。。。。」

どこで？
誰もが聞きたくなる
ココ佐世保に着いて粉川と『こんごう』が一緒にいたところなど一度もないハズなのに
横須賀から共に回航してきたという話しの拡大解釈妄想版は激走ばりにの猛威を振るっている

そして
誰かが言葉に出して言う訳ではなかったが

妹に対してぶっきらぼうな対応をする『こんごう』は『ちょうかい』と仲が悪いのではと予想をし

「しかも。。。相手の男もまんざらじゃなかった所を見ると。。実はかなり年下が好きなんだよ！！」

「やばくないか。。。」

ヤバイなどと良いながらも噂にノリノリの姉『いそゆき』

粉川のイメージ
粉川がどういう人間なのか？
５０年ぶりではと言われる「人」の存在に対して司令の『くらま』は関心を示さなかった
そのせいで艦魂達の前，。。。ほぼ全ての艦魂が初めて自分たちを見る事のできる「人」と出会ったというのに「何者」であるか？という情報は一切与えられていなかった
それが『はるゆき』の素敵な妄想に拍車をかけていた

「あの男は。。年下の可愛い艦魂と。。。。ハアハアするのよ。。。」

「まさか。。。」

それこそ「噂」程度でしかない人物像は『はるゆき』の脳によって危険な男に変換されていた

「私も買ってぇ～～って言う～～～」

姉二人が興奮の坩堝の中にいる会話にお風呂から上がったばかり，濡れた髪にタオルを巻き付けた末っ子『あさゆき』が会話を端折った台詞を言った

「バカ!!」
急に間を割られた『いそゆき』は驚いたが，高まる自分の興奮を抑える事は出来ていない
「奪い愛!秋だね!!」
理解して言っているか?『あさゆき』の顔は笑顔で輝く

「あんた。。。人間の男はアブナイよ～～」
熱を上げた『はるゆき』はいつものように体をくねらせながら口元を隠して
「よくさ。。。裸の女の写真とか見てるしねぇ。。。」
「いやぁぁぁ」
声を殺した笑いと悲鳴でイスの上に体を浮かせて足踏みする
二人は向き直ると

「『ちょうかい』!!この泥棒猫!!私の男に手をだすなんて!!」
『いそゆき』は『こんごう』のまねをして寸劇を始めた

「ふん!彼，お姉ちゃんより私の方が好きだって!言ってくれたわ!!」
間髪開けぬ素晴らしい合いの手『はるゆき』が『ちょうかい』のまねをする

「ふざけないで!!私と彼は海の上で愛し合った仲なのよ!!」
髪を振り乱し
妹を見下すように指差す姿
斜に構えたカッコはいよいよ『こんごう』の普段の立ち絵だ

「ふん!!アレはお遊びよ!!哀れねそんな事にも気がつけないなんて!!」
差し出された指をキリキリと握りしめ目線を会わせ「火花」のまね

を『あさゆき』がする
「バッチバッチ！！」

「離れなさーーい！！姉の言うことが聞けないの！！キィーーーー！！許さないわ『ちょうかい』！！」
大きく手を開き怒りのポーズ

「イヤよ『こんごう』姉さんこそ手を引いてちょうだい！！妹だからって遠慮なんかしないもんね！！！」
迎え撃つように手を掴むと三人は飛び上がって
「きゃあ～～～～」
そこに風呂から上がって目の前の寸劇を見ていた『むらさめ』と『いかづち』『はるさめ』が
「きゃあああああ（棒読み）」

風呂上がりの熱気と高潮した気持ちが一瞬にして冷める三人

「またオマエらか！！！くだらねー事，くっちゃべってんじゃねぇ！！」
すっかり自分たちの世界に没頭して風呂の出入り口を塞いでいたなんて気がつきもしなかった『ゆき』三姉妹はその場にすっころんだまま敬礼した
「すっすっすいません。。。」
聞かれてはイケナイ禁断の愛の話し，真っ赤な顔で立ち上がると最敬礼して

「申し訳ありませんでした。。。」

小さく
頭にタオルを置いたまま呆れた表情の『いかづち』は直立不動にな

っている『いそゆき』の肩を叩くとチョイと親指を後ろに向けて

「言い訳は。。。後ろの人にな。。。」

湯の暖簾の向こう
怒りなのか?湯アタリなのか?顔を真っ赤にして,プルプルと小刻みに揺れる『こんごう』

「私と。。。汚染生物がなんだと?」

秋を通り越した真冬の突風,絶対零度の射程が目の前に君臨する
最早,血の気も無くなった『ゆき』姉妹達は涙目
まさかまさかの。。。「鬼のこんごう」がココにいる
強く握りしめた拳の姿で

「制裁は受けとけ。。。。」

固まった三人の間を冷ややかに抜ける『むらさめ』の言葉の後。。。。
廊下には大きな爆弾の落ちる音が3つ響いた

「アホ姉妹やな。。。。」

『いかづち』は鼻に掛かった眼鏡の奥で呆れた目をしながらつぶやいた
色恋の話しになると自分を見失うほどの状態に陥る事で『ゆき』姉

妹は有名だった
『むらさめ』が産まれる前からいる姉妹達だが。。。。
女所帯が長すぎる弊害みたいなものを如実に現している

「なんで，あいつらって演じるのかな？」

まったくだ
『むらさめ』はタオルを肩に掛けたまま顔をしかめた
見ている方が恥ずかしくなる。。。
人の目を憚る事を忘れて「恋愛活劇」に没頭する姿は笑えるという事を通り越している

「ね～～～粉川って誰ぇ～～」

『むらさめ』のお風呂セットを一緒に持って歩く『はるさめ』が湯船にとろけた体をフニャフニャさせながらゆる～～い声で聞いた

「横須賀から「監視員」で乗船してきた「人」だよ」
肩にタオルを乗せ，コーヒー牛乳を飲みながらこたえた

「「人」かぁ～～珍しいねぇ～～横須賀ぁ～～～『しらね』さん元気～～～」

質問の答えなど，すでにどうでもいいのか？無造作に茶髪を下ろした『はるさめ』はフラフラ揺れて『いかづち』にもたれかかる

「姉はん。。。フラフラすんなや」

どうしてこんなに個体差の激しい姉妹なのかと『いかづち』本人が

疑問に思うほどに誰とも性格が一致しない『あめ』姉妹

『むらさめ』は常にテンションの高い体育会系，ガテン系なのに，
年の差も少ないすぐ下の妹である『はるさめ』は常にこういう，ゆる～～いテンションだ
のんびりが信条なのか
どんな事が起こっても慌てない（任務は別）。。。ほっておくとよくお風呂に沈んでいる
それに
定期的に佐世保に来る四女の『きりさめ』なんかは，機械が友達と言うほどのメカフェチで常に何か改造していて
煉瓦倉庫に監部庁舎の電話線を引っ張ってきた強者だ
（どういう原理なのかは内緒）
もちろん無許可。。。。護衛艦隊の艦魂は「リンクシリーズ」が頭の中に入っているから繋がりさえすれば（非常事態とか通常演習などでオープンリンクすれば）会話など日本の何処にいてもできるのだが，それ以外。。。プライベートで繋がりたい。。。。またハイパーリンクを持たない姉妹達のためにとかと言って煉瓦倉庫の壁に電話機を接続したのだ
他の基地にも寄港するたびに違法改造を施したため，今ではどの姉妹も電話で繋がる方法を知っている
もちろん電話代はこっそり監部庁舎ツケて。。。。（と言っても明細にも残らない使途だからバレる事はないようだ）

「それにしても。。なして『鳥さん（ちょうかい）』は，粉川はんと一緒にいたのかね？」
（注．『ちょうかい』の名前は漢字にすると鳥海である，『いかづち』はあだ名をつけて『鳥さん』として呼んでいる）

長いすに座った途端，頭を自分の肩にのっけて居眠りに入ろうとす

る『はるさめ』を押しながら
「しらねーよ」
足を放り出し座る『むらさめ』は関心なさそうだったが，3人に追いついた『こんごう』はそうはいかなかった

「汚染生物。。。。。」

まさか自分の妹が粉川と会話していたなど
耳を疑う出来事だった
立ったまま一階からの上がり階段を見つめる姿。。。まだ戻ってこない『ちょうかい』を待っているのは見ればわかる

「あんがい『ゆき』姉妹の言う事も間違ってねーんじゃねーか?粉川と相性が良くて，付き合い始めたとか?」

『むらさめ』の顔は正面を向いている
背中の側にいる『こんごう』の顔を窓ガラスの反射で伺いながら顔をニヤリとさせた
堅物護衛艦の反応を試した

「付き合う。。。。。」
重い雰囲気に一気に染まる『こんごう』
「アホな事言うなや」
姉の突拍子もない発言に即座に釘を刺した『いかづち』は自分の前で額に亀裂を走らせ「怒り」と「焦り」を蓄積し始めた『こんごう』をなだめた

「どうせいつもの事やで。。。粉川はんが『鳥さん（ちょうかい）』に挨拶がてらに話しかけたとちゃうのん?」

『こんごう』は血走った目で『いかづち』を見る
「話しかけた。。。。それだけ？」
その姿をしっかり背中越しのガラスの目で見ている『むらさめ』は
嗾けるように
「でも笑ってたんだろ？『ちょうかい』。。。結構「人」との相性
が」
「やめえな。。。」
姉の意図を理解しながらも風呂上がりに問題発生！！
などという事態が来ることを嫌がる『いかづち』は手で思案を払う
ように言葉尻を蹴飛ばす
だが
それさえも楽しむように
「艦魂と「人」のカップル成立かぁ」
「いいねぇ～～～カップルンルン～～～」
どこまで話しを聞いていたのかワカラナイ合いの手『はるさめ』は
トロンとした目で『こんごう』を見ながら
「ちゅーしてたりぃ～～」
「やめえ！」
口をタコのように尖らせながらもゆる～～く笑う『はるさめ』の顔
を『いかづち』が抑えて
「挨拶しただけやで。。。。多分」
「痛いよぉ～～～『いかづち』ぃ～～～」
手のひらで押さえられた顔。。。スキマから漏れるような間抜けな
声の向こう

「。。。『ちょうかい』に限って。。。そんな事」

『いかづち』の制止はすでに手遅れになっていた
『こんごう』は粉川の図々しさを思い知っている。。。。何度も自分に声をかけ
あれほどドツキ倒したのに挫けず前に来る「人」並外れた根性で。。。
もし。。。。小さな妹に。。。。。
手が震える

「だけどさ。。。『こんごう』は妹，可愛がってないんだから別にいいじゃねーか。。。粉川が世話してくれるなら」
顎を突き出した顔
振り向いた『むらさめ』は挑戦的な目で伝えた

「私が。。。『ちょうかい』を可愛がってない。。。だと？」
「おおうよ。。。だってせっかく同じ港にいるのに，無視され続けたんじゃ辛いぜ」
「『むらさめ』そないな言い方せんでも」

「無視。。。した。。。」

最早『こんごう』の頭の中に『いかづち』の言葉は入ってこなくなっていた
『むらさめ』の言葉は腹の立つ事が十分に含まれていたが
否定は出来なかった
事実。。。妹とどう顔を合わせていいか。。。いつの間にか解らな

くなっていた
無視してきた訳ではなかったが。。。。
じゃ。。。

最近いつ。。。。『ちょうかい』としゃべった?。。。。。思い出せない
その時。。。。妹はどんな顔をしてた?

思い出せない。。。。。

姉達を黙らせながら笑顔で「冗談やで」と言おうとした『いかづち』の前『こんごう』は走った

「ちょ!!『こんごう』!!」
手渡そうとしていた水のボトルは，すでにその場から消えた影の跡に落ちて転る

「あ。。。。」
階段を一足飛びしたのか下の階の艦魂立ちの驚きの声が聞こえる

「アホ!!!なして噛けるの!!!」
爆走で姿を消した『こんごう』の姿をイスから首だけ逆さに垂らした『むらさめ』は人差し指でチッチッとすると答えた

「アイツがあんまりかてーから『ちょうかい』も遠慮しちまってんだろ?これで『こんごう』がぶつかって行くきっかけってのが出来たべ?」
「硬いよねぇ〜〜『こんごう』ちゃん〜〜硬い〜〜〜」

『いかづち』は間抜けた二人の姉の前で仁王立ちをして聞いた

「で。。。ぶつかっていって，粉川はんはどうなるの？」
「。。。。。。。」

そこは忘れていた
そういう顔をする『むらさめ』と，それさえどうだっていいのか頭を右左とユラユラさせる『はるさめ』
このまま『ちょうかい』と会話していただけで。。。。天高く殴り飛ばされる事にでもなれば。。。

『むらさめ』は咳払いをして
「発展には。。。。犠牲もつきものだし」
「アホ。。。。」

『いかづち』は大きな溜息をつきながら『こんごう』が走っていった先をただ見つめた

全速力の『こんごう』はせっかく風呂で磨いたばかりの肌に玉の汗を飛び散らせていた
秋の空はだいぶんと傾き，小涼しい風が肌を冷やしていくが，心の方はもって冷や汗でいっぱいに満ちていた

自分的には。。。。妹に良くしていた「つもり」だった
だが
客観的に言われてみれば，あまりに溝のある姉妹なのかもしれない
走りながらも頭を振る
自分でもどうしていいかワカラナイ事が多すぎた

。。。。『ちょうかい』。。。。。。

あっという間に『はるゆき』が妹を目撃したというポイント近くまで来ていた
息を整える
もしも。。。。。あの『ゆき』姉妹が言っていたように『ちょうかい』が粉川と付き合うなんて言い出したら。。。。そんな汚らわしい事を許せる訳がない
幼気で可愛い妹を守るために鬼にでもなる覚悟は出来ていた

拳に力がこもる
レーダーを全方位にこんなに焦っている
フェイズドアレイレーダーのラインを持つ輝くの目がは周囲を捜査する
全身にじっとりとした熱
息を整えながらの散策

「『ちょうかい』！！」

冷たい風のふく中
国道３５号に面した側にある騒がしい基地出入り口近くの金網に『ちょうかい』は青服のまま，・ぼんやりと空を眺めていた
少ない風邪に揺れる髪のまま

『こんごう』はホッとした
粉川が近くにいない事に強張っていた心が緩みレーダーの光を落とすと

もう一度周りを見回した
こんな吹きっさらしに。。。まだ汗も洗い落としていない『ちょうかい』は何をしているのか？

とにかく
早く確保と足が前に出たとき

「おまたせ！！」
聞き慣れた害虫の声に。。。。。拳に力が宿る
「おのれ！！汚染生物！！」
『こんごう』はダッシュ力を加えた殴打で粉川を妹との間から吹き飛ばすつもりで一歩前に出たが。。。それ以上足を前に進める事はできなかった

粉川を見つめる
妹の笑顔

それは今まで『こんごう』に見せたことのない微笑み
見えすぎる目に映った笑みは。。。嘘の笑いではなかった。。。
『ちょうかい』は。。。。粉川と。。。。お互いを向きあわせ笑顔で会話をしている

勢い前に出ていた足は素直に後ろに下がり
そのまま木陰に『こんごう』は尻餅をついて倒れた
ノイズ混じりに聞こえる『ちょうかい』の声は。。。。明るく少女という年齢にみあった高い笑い声

「ありがとうございます！！」

手渡された何かにお礼をする『ちょうかい』。。。。。
小躍りして渡された何かに喜ぶ『ちょうかい』。。。。。

木に頭をコツコツと小さくぶつける『こんごう』にとって。。。。。
見たことも聞いたこともない妹の姿と声
手を取って笑いを分かち合う粉川

「驚くかな。。。。僕たちが一緒に。。。。たら!!」

聞こえない。。。聞きたくない
『こんごう』は首を振った
現実の前に耳を塞いでしゃがみ込んで
そのまま二人が隊舎に消えて行くまで動かなかった

夕暮れが空を赤く染め始めた頃
不意に出てしまった涙と共に『こんごう』はトボトボと部屋に戻ると
悲しくて誰にも会わないままベッドに飛び込んだ

第二十二話　妹の笑顔（後書き）

カセイウラバナダイアルＶｏ２２。。。。反省

前書きにも大仰な事を書いたように反省中です

「艦魂」の設定を破壊している

原初の設定からすると私の書いている物は大きく逸脱していて美しくないというご意見でした
好き勝手とまではいきませんが
確かに自分の「情報」を織り交ぜ書いてきたわけですから
そこはスイマセンでしたと言うしかないのですが。。。。

私はこれからも逸脱してしまうと思うので前書きのような但し書きをしたという次第です
黒鉄元帥が当初の艦魂の設定というのを挙げていらっしゃいましたが
私はきっともっと，かけ離れていってしまうと思います
元帥にも断りはいれてありますが。。。。

不快に思われる方もいると思われますから
その場合はもうお読みにならない方が良いとをお薦めします

作品事態は最後まで出来ているので最後まで書いていこうー！！と思ってます
それでも応援してくださる方がいるなら心強いです

この件では
黒鉄先生に草薙先生と迷惑をおかけしました
それ以外にも原初艦魂の設定をもって小説を書いておられる艦魂作家の先生達にもお詫び致します

至らぬ力で書いた後書きで迷惑をかけましたが
草薙先生には続きを書いても良いと言われているので頑張って番外の「お茶会」も書いていこうとおもっております！！！

色々と騒がせてしまった事に反省しつつ
これからもがんばっていこうと思いますのでよろしくお願いします！！！

火星明楽

第二十三話　理想の姉（前書き）

リハビリ中にて（色々と問題があったので）紀伊の皆様とのお茶会は今回も見送らせて頂きます

草薙先生ごめんなさい。。。。

頑張りますから温かい目でみてやってください！！

第二十三話　理想の姉

夕刻の食事時
『いかづち』は不透明になった事の顛末に少しばかり苛々しながら料理の支度をしていた
大部屋を壁で隔てた寄宿舎（隊舎）の中，角部屋にあたるリビングで『むらさめ』はスパッツとスポブラという下着と変わらない姿で愛読書の「月間アスリート」を熟読しながら筋トレのデモをしている
何故か一緒に付いてきていた『はるさめ』の方は下着はつけず，バスローブのままダラリとイスで寝入っているというザ．女所帯という見立ての悪い状態になっていた

もちろん
女しかいない世界だからこそダラしていても良いともいえるのだが
部屋の中は煉瓦のしきい壁をもつ作りになっていて，現代的に考えるなら割とおしゃれな感じ
倉庫という大型建築物の関係か天助の高い作りになっているところなど見ればおしゃれな喫茶店のようにも見えるのだが，照明は裸電球というアンバランスさ

「なあ。。。『こんごう』帰ってきーへんで。。」

メインの料理を皿に分け，キッチンのブースに並べた『いかづち』は目の前各々好きな事で時間を潰している姉達に聞いた

「部屋にいただろ?」
かぐわしい香味に顔を上げた『むらさめ』はリビングから向こうに繋がる通路にあるドアに顎を向けてのんきに答えた

「いーへんねん。。。。」
渋い返答をする妹に感心なさげな姉達
『いかづち』は通路に並ぶ各部屋のドアの中。。。。『こんごう』
の部屋のドアを見つめて溜息を吐いた

事件発生
『ちょうかい』の動向を廻ってあらぬ噂を立てていた『ゆき』姉妹
の話から
『むらさめ』は
「姉妹の仲を良くしてやろう」と『こんごう』を嗾けた
同じ港にいても言葉も少ない姉妹なのだから。。。粉川に懐いても
仕方ないのでは?みたいに。。。。
その言葉に即座に行動を起こし外に飛び出していった『こんごう』
は。。。
今,この夕暮れ時になっても部屋に戻って来ていなかった
ご飯の支度に『いかづち』が部屋に戻った時には『しまかぜ』がいた
『こんごう』は少し前まで部屋にいたらしいが入れ違いでいなくな
っていた

「どうしたの?」

簡易的に回航から向こう佐世保までの記録を整理していた『しまか
ぜ』は提出のために『くらま』の部屋に向かうところだったが,心
配そうな顔をしていた『いかづち』に事の次第を聞いた
ファイルを片手に

「大丈夫じゃない。。。粉川さんは心配だけど『ちょうかい』はそんなに気楽な子じゃないから」

『ちょうかい』が粉川に接近。。。。
そんなのただの噂と『しまかぜ』は笑った
「挨拶してたぐらいの事でしょ？」
『いかづち』もそう思っていた。粉川とは少なくとも佐世保にいる艦魂達より付き合いが長いし。。。
彼が責任感の強い男である事は例の「激走事件」で十分に知っている

「鳥さん（ちょうかい）も重責の艦魂やし。。わてもそう思うんやけどな。。。」

『しまかぜ』はそのまま，食事はいらないと言うと
「『こんごう』もすぐに帰ってくるわよ」と笑い部屋を出た

「なあ？『しまかぜ』は帰ってこないんか？」
『こんごう』の心配をして考えこんでいた『いかづち』の前，仕上がった飯を運ぶためにキッチンブースまで来た『むらさめ』が声をかけた
『さわぎり』は姉の元に居て寝る時間までは帰ってこない

「飯はいらんて。。。『くらま』司令に報告書だしたら，飲むんだって。。。」
「司令，疲れてんのか。。。」

『くらま』は自分では人間の集団生活をまねた環境を艦魂達に進めてはいたが，自身はご飯も食べない艦魂だった（会合の時には食べ

る)
その代わり司令職の重さからか飲酒はする方で『しまかぜ』は付き合いによく呼び出されていた

「『しまかぜ』さんも～～大変～～～司令はめちゃ酒飲むらしいからねぇ～～」

ご飯の香りに目を覚ました『はるさめ』がソファの上でフラフラしながら言った
とりあえずでも配膳を手伝うつもりはなさそうだ

「司令。。。今でもめっちゃ飲むのか。。。」

『くらま』の飲酒の量の多さは有名だった
おそらく日本の艦魂の中では一番飲むのではと言われていて，呼び出された『しまかぜ』は大抵「朝」まで付き合う事になり
いつもフラフラして帰ってくる
それが例の『くらま』司令と『しまかぜ』は付き合っているという「噂」に繋がっていたりもするのだが

「私も，もう一度酒の付き合いしたいなー」

トレイに料理をのせ運びながら『むらさめ』は溜息混じりにこぼしたかつて一度だけ『むらさめ』は『くらま』と酒を飲んだ事があったが。。。結果は無惨なもので次の日の朝，艦は機関故障を起こし，艦魂である『むらさめ』は二日酔いで吐き続けた
結局その不祥事から酒の付き合いに呼ばれない。。。当然と言えば当然だが
『くらま』には

「艦，本来の仕事に差し障るぐらいなら飲むな!!」と怒鳴られていた

「あれから結構鍛えたんだけどなー」
「そんな事，鍛えんなや」

呆れる話しだったが以来『むらさめ』は大酒を食らっても次の日にケロリとした表情で執務をこなす『くらま』に，より崇敬の念を持つようになったのは事実できっと
かつての帝国海軍の艦魂達も大酒飲みが多かったに違いないという自分なりの結論を出してしまうほどに頑張って「酒」を飲むようになったが

そんな『むらさめ』は。。。。。『いかづち』より酒が弱いという事実もあったりもする

「朝まで飲みてーな。。。司令と」

秋の夜長
胃袋を暖めるボルシチ
佐世保にロシアの船が寄港した事はないが，世の中では十分に流通している料理
ビーツを手に入れたはいいが日持ちの関係上，歓迎会には使わず今日で使い切り

「ふ〜〜相変わらずイイ匂いしてんなぁ」
『むらさめ』は目の前かぐわしい湯気を上げているボルシチにスプーンを入れた

「よろしいですか？」

相変わらずフラフラしている姉『はるさめ』にスプーンを渡し
小皿の準備にブースに戻っていた『いかづち』の耳に小さな声とノックの音が聞こえた
すでに飯に熱中している姉達が動いてくれるハズもなく
エプロンの前で手を洗いながら「ハイハイ」と『いかづち』はドアを開けた

「鳥はん。。。。」

目の前には就寝用のラウンジドレスに着替えた『ちょうかい』
意外と可愛いパジャマ姿
「『こんごう』やったら。。」
姉の名前を出したとたん『ちょうかい』は『いかづち』を引っ張り外に連れ出した

「内緒の事です！！」

口に手をあてて

「なんや！！一緒に食べてけよ！！」
後ろ手で締めるドアの向こう「客」に声を掛ける『むらさめ』だったが
呼ばれた『いかづち』は姉が介入する事で事態が悪化すると思い手早くドアを閉めた

「なんや？」

寄宿舎の廊下には部屋と同じく裸電球が１０メートルぐらいの感覚で付けられている
基本，大きな倉庫なのでこんな電気では薄暗いを通り越し，暗いぐらいだが「人」とは違う視力を持つ艦魂には問題は無かったが静かすぎる。。。

「お姉ちゃんには内緒です。。。」

『ちょうかい』は自分より背の高い『いかづち』に上目遣いで言うイージス艦の艦魂とはいえイージス姉妹の中で一番チビでもある『ちょうかい』はこのままならホントに１０代前半の女の子だモジモジと手を前でさせ，周りを伺いながら

「明日。。。粉川さんの歓迎会するんですよね」
出来るだけ他に聞かれないように意識した小さな声で『いかづち』の耳に届かせようと背伸びする
「あっ。。そや。。粉川はんに聞いたの？」
膝を折り相手の身丈に合わせた『いかづち』も小さな声で答えた

「私も参加させて頂いてよろしいですか。。。。」
「もちろんやで！！ええで！！」

『こんごう』達姉妹の事で嫌な悩みの中にいた『いかづち』は問題が大きなものになっていなかったと核心して心を和ませた

「それで，ですね。。。。私が参加する事。。お姉ちゃんには内緒

にしておいてくれませんか？」
「なして？」

緩んだ心に警戒が蘇る
イタズラっぽい『ちょうかい』の目と。。。。ほんのり赤く染まった頬が意味するものは

「スペシャルサプライズ。。。したいから」
「サプライズ。。。」

『いかづち』は後ろ手で締めたドアが少し開かれていた事に気がつき背筋に悪寒が走った。。。誰かが聞いていると
途端追っていた膝を立て，ヒッププッシュで閉じた

ドアの向こうおそらく姉の内どちらかがこの話しに耳を立てていたらしく
押されたドアに顔をぶつけたのか転げる回る音
しかしそれを『ちょうかい』に気づかれるわけにもいかず即座に切り返し

「何するの？」
「。。。。内緒です。。。。」
無垢な微笑みは騒ぎには気がつかなかったようで嬉しそうに体をクルリと回すと通路を駆けた
「絶対に内緒にしておいて下さいね！！」

そう言うと光になって消えていった

光が完全に目の前から消えたのを確認した『いかづち』は自室のドアを開けた

目の前に転がっている姉は『はるさめ』だった

「姉はん!!何してんの!!」

いつもはユルユルの姉がすっ飛んでドアまで来ていたことに驚きながら

「痛い～～～『いかづち』ぃ～痛いよぉ～～」

顔を両手で押さえながら。。。痛い割りには嬉しそうな声

。。。

なんでこんな時ばっか瞬発力が動くのか呆れる

「いや～～～ん『ちょうかい』ちゃん～～スペシャルサプライズ～～恋人宣言かなぁ～～～」

「アホ言うなや!!」

やはり女所帯。。。。色恋の話しには耳が立つ

「なんや!!『ちょうかい』来てたんかよ!」

スープの皿を持ったまま歩いて来た『むらさめ』

「もう!!ちょっとだまりーな!!」

足もと転げながらもウキウキした目線で鼻を押さえている『はるさめ』を邪険に『いかづち』は姉達に釘を刺した

「『こんごう』には内緒にしといて言われたから。。。だまとっきーなよ」

「恋人宣言する事をか?」

すでに情報が混線している

「アホ!!ちゃうわ!!」

ボルシチを啜りながらも真顔で聞き返す『むらさめ』の前

ユラユラと揺れる『はるさめ』は頬をピンクに染めている。。。。

これがドアでぶつけてなっているのか。。。。それともピンクな思考でこうなっているのかは知りようもない

「だったてぇ〜〜スペシャルだよぉ〜〜ちゅ〜〜した宣言だよぉ〜〜」
「マジかよ!!『ちょうかい』。。。。。やるな。。」
「ちゃうちゅうの!!」

こんな事ばかりに目敏い。。。
『ゆき』姉妹と何の違うがあるの?と頭を抱える『いかづち』の隣，ソファに戻った『むらさめ』は足らぬ頭でアレコレ考えながら聞いた

「でも。。。内緒なんだろ?何するかなんてわからねーじゃんか?」
「だから。。。それは。。。」
実際，聞かれるとおり『ちょうかい』が何をしようとしているかはワカラナイ

「ちゅ〜〜するんだよぉ〜〜ちゅ〜〜」
「だまってぇな!!はる姉!!」

タコのように口を尖らせた『はるさめ』はソファの上，足を上げて1人ベーゼ状態になっている
なんとも気持ちの悪い姿だ

「とにかく。。。黙っときーな!!わかったか!!」

すでに何かが手遅れ気味な中，それでも『いかづち』は懸命に太い釘を刺す事に終始する夕飯になった

その頃
『こんごう』は図書室に来ていた
一度は部屋に戻り，膝を抱えて考え込んでいたが夕刻が近づけば食事の支度やら何やらで声が掛かる。。。
無視するのは「仲間」との溝をつくる事にしかならないからと逃げてきていた

夜の近づく時間
テラス作りになっている図書室は裸電球の照明さえない暗い部屋だった小さなデスクの場所に腰を降ろして

昔。。。『しまかぜ』が自分を連れてココにやってきた時に座

「姉らしい事。。。。」
つぶやきながら。。。デスクに爪を立てた。。。

「無視している」『むらさめ』に言われた言葉は。。。事実だった心に刺さった
自分では。。。出来ることをしている「つもり」だった
自分がしっかりしていれば妹達に言いがかりをする者などいなくなると思っていたし
事実それが功を奏したのか。。。「イージス艦の姉妹」達に対する辛辣な言葉は聞いたことがなかった
自分が。。。産まれてしまった時に受けたような。。。痛みを与えたくない。。。
だから
進水式の時。。。近くにいて参加できる時は一番に抱きしめに行った
目の見える世界に涙など見せてほしくない
産まれた事を喜んで欲しいと思って

自分が参加できない時は。。。。信頼出来る姉である『しまかぜ』
や古参の姉である『ひえい』司令や『はるな』司令にも頼んだ

妹を守りたいから。。。自分の誕生を非難した『しらね』の姉である二人の司令にも頭を下げた
『くらま』司令の下に付くことになった妹にも。。。細心の注意を払ってきた。。。。「つもり」だった

「。。。。『ちょうかい』。。。。。」

なのに
粉川と一緒になって。。。あんなにはしゃいでいた。。。
あんなに笑っていた顔。。。。初めて見た

「私は。。。ダメな姉。。。。」

イスにうつ伏せた
『ちょうかい』の歳を考えれば。。。もっと笑っていても言いハズだったのを。。自分がダメにしていたと気がついた

デスクをさすり
あの時の『しまかぜ』を思い出した
誕生から向こう誰とも顔を合わせなかった自分を光の下に連れ出してくれた「姉」
パニックに陥った自分を強く抱きしめ慰めてくれた人。。。
あれほどに良いお手本がいたのに。。。。自分は妹に何もしていなかった

「金剛姉さん。。。。」

月夜の下，微かな光の中で思い出してみた
初めて自分ではない，自分の名前の持ち主であった「金剛」の姿を
見た日
あの時は冷静さを失い「死んだ人」に恐怖して逃げたが
月日がたち。。。自分で「金剛」の事を調べた

３０年を戦った姉は。。。。
どんなふうに姉妹達と。。。そんな過酷な時を生きる妹達と話しを
していたのだろう。。。
国が一丸となって戦った戦争だ
最古参とも言われた「金剛」という姉は多くの妹達と。。。どんな
生き方をしたんだろう

少なくとも今の自分のような不器用な人ではなく
妹達にも，きっと好かれていたんだろう

涙がこぼれた
あらゆる意味で「その魂」の一つもを繋げなかった自分に
出来損なったまま産まれてしまった事に

「ごめんね『ちょうかい』。。。ダメなお姉ちゃんで。。。」

このまま。。。『ちょうかい』が粉川と付き合いたいと言ったとし
ても。。。
とても反対など出来ない気分だった
自分は妹の笑顔を引き出す事ができなかった

粉川には出来たのだから。。。。。敗北は認めざる得なかった
夜の帳の下『こんごう』は自分の不器用さに泣いて。。。寂しさで
いっぱいの心に押しつぶされて眠りに就いた

「理想の姉？」

司令室となりの私室のベッドの脇でタバコをふかしていた『くらま』
は怪訝な表情で聞き返した
白いシーツの大きなベッドの中，気怠そうに寝ころぶ『しまかぜ』
は小耳に挟んだ『こんごう』姉妹の話を第三者的見解で話していた

「悩んでる見たいなの。。。」
「そんな事にか」

ローボードの上に置いた酒のグラスを取り
いつもはオールバックにしている髪がほどけ，前にこぼれた髪を戻
すために頭をさする
「『くらま』は。。。悩んだことないの？」
「考えたこともない」
素っ気ない回答

「『しらね』は姉として不足だった？」
『しまかぜ』の裸の手が自分の前に座る『くらま』の背中を滑る
「姉上は十分に自分の仕事をしている。。。理想の姉と言うよりは
「対外的に理想の司令」と言ったところだろう」

『しらね』や『くらま』は産まれた時から司令官という宿命を背負

った姉妹だ
お互いが近くにいる事などほとんど無い
お互いが基地と大群の長として君臨する事が「義務」だ

「寂しいとか。。。。思ったことない？」
今日はワインではなく「Ｅａｒｌｙ　Ｔｉｍｅｓ」をストレートで
入れていたグラスを煽ると顔を後ろに向けた
「無いな。。そんな事を考えながら職務は遂行できない」
そのまま
片肘のまま顔を起こした『しまかぜ』の口に酒を運んだ

「私もそうだった。。。。数少ないミサイル護衛艦の姉妹なのに。。
。ホントに仲が悪くて」
運ばれるまま口を付けて起きあがる
『しまかぜ』のショートヘアでは裸の肌を隠すことは出来ない
輝く白い肌を見せたまま自分の姉を思い出した

『しまかぜ』の姉は『はたかぜ』と言った
本来なら後二人，下に妹が出来るハズだったが急転する時代の脅威
である「ミサイル防衛構想」に従い予定は変更され
第四次ＭＤ計画の基幹として『こんごう』が産まれた
受け取ったグラスを回しながら思い出す
姉『はたかぜ』。。。。。。何か全てを達観してしまったような姿。。
。。
諦めたように艦魂という魂の職務を続ける姿
思えば「魂の受け継ぎ」という最初の被害者だったのかもしれない人

「今でも仲は悪いのか？」

グラスを渡すとそのまま背中を向けた『くらま』は新しいタバコに

火を着けながら聞いた
普段
執務中も，他の艦魂の前でもけして喫煙しない彼女だが「夜」だけは心をほどき自分の趣向を愛して吸った

その背中に
クスリと小さな笑い

「会わないから。。。わからないわ」

そう言うと『くらま』の肩に手を回し，裸の胸を押し付けた
「私の理想の姉は。。。。『あまつかぜ』姉さんよ。。。」
口から煙りを吹きながら
「『あまつかぜ』か。。。あの変わり者がか」
今日はその事に文句は言わなかった
灰皿にタバコの残り火を叩くと，手を自分の背中に頭を預けた『しまかぜ』の元に運んだ
『くらま』の指にかかったままのタバコに口を付け深く吸うとゆっくりと煙を吐いた

「タバコ。。。。ほどほどにしてね」
「心配してくれるのか？」
体を返し向きあう
「司令でしょ。。。それより粉川さんの歓迎会は許可してね。。約束守ってココに来たんだから」
大人の眼差しは消してホントの気持ちを打ち明けない。。。言葉に出すなど野暮な事だ
『くらま』は口元に笑みを浮かべ
自分の前にいる裸の『しまかぜ』を抱きしめ。。。。額を会わせると口づけた

「かまわんよ許可する。。。。」
「ありがと」
二人は見つめ合うと笑った
「『しまかぜ』私には姉以上に君が必要だ。。。近くに居てくれ」
そういうと二人はベッドに沈んでいった

第二十三話　理想の姉（後書き）

カセイウラバナダイアル～リハビリ編

本当なら
この回に紀伊の皆さんとお茶会～～～ドキ！！女だらけのお茶会スペシャル！ポロリもあるよ（？）を掲載する予定だったのですが
前回の反省から
じっくり煮詰めてと今回は見送りました
草薙先生すいません
色々ショックな事だったので
すぐに復帰できなくて。。。ハアハア

それにしても文章の部分までたくさん注意されましたから
今更ながら今まで書いてきた物を総チェックしたりで。。。時間がかかりそうですよ
最近。。。。

「原子力空母の実態」という本を読みました
アレは最高機密の下で動いている船なのでなかなか中身はわからないのですが
読むとそこそこ面白いものでしたし。。。。想像力の糧になりましただ
アレって記念艦とかには絶対になれなくて
就航の運命が終わると必ず解体という事になるらしいです
それもいきなり船体真っ二つに斬って。。。。。残酷ですね。。。
怖い怖い

そして

昨日は「ジョージワシントン」ＣＶＮが横須賀で公開中でしたからいきたかったのですが。。。。無理でした。。。
いつになったら仕事から解放されるのでしょう。。。こういう部分にもリハビリが必要な感じのヒボシでした

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～

第二十四話　鏡の自分（前書き）

なかなか
お茶会の続きが書ききれません
次回には間に合うように入念に推敲したいとは思っているのですが。。。。

すいません
一度言われたぐらいで怯えてしまって。。。。がんばってます！！！がんばります！！！。。。。仕事も。。。。師走。。。ですし（爆）
みなさんはテスト頑張ってください～～～い（藁）
後書きは，佐世保から新たに出てきたキャラ紹介です！！

第二十四話　鏡の自分

静まった夜
『しまかぜ』が自室に戻ると決めたのは，月が頂点の時間を過ぎた頃だった
隣で布団をかぶったままの『くらま』がベッドの中で目をさましている事は知っている
名残惜しそうに手を絡めはするが，朝までを共にいした事は一度もない
それが「噂」に拍車を掛けない方法
ローボードの上にあったａｌｌｅｙを一息に飲み干し，お酒の香水を自分にかけるとそのまま部屋を出た

煉瓦倉庫の寄宿舎の照明は全てが眠りに入り
冷たい温度の
寒さで透き通った道を，静かな足取りで部屋に向かって歩いた

「？『こんごう』？」

３階の階段を下りたところで２階からつながる吹き抜けを通して１階までを見通す事ができる
１階ロビーの身だしなみをチェックするために立てられている鏡の前に佇む影
こんな時間に身だしなみ？
鏡の前
自分と睨み合うように止まった『こんごう』
『しまかぜ』は自分吐く息を確かめると，自室のある階層を通り越

し階段を下った

「『こんごう』。。。どうしたの？」

乱れていた襟元を正しながら
小さな声で呼びかけた
静かな中でも近づく足音には気がついていたのか『こんごう』は返事はなく，クルリと頭を下げたまま『しまかぜ』に向いた

「『こんごう』。。。。」

小さく頭を振る
言葉は返らない中で，足もとに涙が落ちる
「どおしたの？」
『しまかぜ』は例の「妹の事」というのを思い出した

「『ちょうかい』と何かあったの？」

項垂れたままの『こんごう』の手を引き，ロビーにあるイスに連れて行った
引かれるまま歩く中でも返事はない

「どうしたの。。。。聞くよ」

引いた手を両手で優しく包み，下がった顔を覗き込んだ
そこには
いつものように厳しく自分を律して口を閉じた顔。。。
だけど眉間によった皺とは別に涙でいっぱいの目

「姉さん。。。私。。。ダメな姉で」

「どうして?良くしてるじゃない?」
「私は。。。妹たちに。。。」

「『こんごう』貴女は良くしてるよ」

返される励ましに，涙しか返らない
そんな姿に『しまかぜ』は肩を抱いて言った

「今までだって誰よりも「妹」の事を思ってきたじゃない。。。思い出して」

『しまかぜ』は『こんごう』が自分の事では泣かない子だという事を良く知っていた
誕生の時に起こった事件で『こんごう』は名前と共に色んな意味で有名人だった
配属先での衝突は繰り返され
他の艦魂ともうまくやって行けなかった。。。やたらにぶつかりケンカと孤独の日々を送った

それでも職務に対する態度は誰よりも厳しかった事で認められていった
代わりに
自分の心を必要以上に押さえつけ。。。表情を変えず。。心を語らず表に出すことは「弱味」だと思い違いをする程に自分に厳しく，他に迷惑を掛けない程度の付き合いの中で生きてきた
だけど
その実「妹」達の事は人一倍大切にしてきていた

「不器用」ならば。。。。「不器用」なりの方法で，配属が決まれば普段はリンクできても会話などしない「司令職」の姉達に挨拶をし，頭を下げ
一番の苦手である相手の『しらね』にさえ挨拶までしている
その甲斐はもちろんあった
『こんごう』から下に続くイージス艦の3人の妹は他の艦魂達と衝突する事なく各隊群に入って行けた

もちろん。。。。

『こんごう』の誕生の時に騒ぎを起こしてしまった『しらね』の少ないばかりの「罪滅ぼし」もあった
産まれたばかりの艦魂を殴打するという前代見物の事件を起こした『しらね』だが
実質4隊群の司令の中では海外の艦魂達の面前に立つ一番の地位にある者だ
各地の司令職にある「姉2人」と『くらま』に，それとなく口添えしていた
その事を『こんごう』は知らない

それでも最初に手を尽くしたのはやはり「姉」であった『こんごう』だった

自分の中に刻みつけられた傷から始まった作業
産まれた後。。。。。
まだ自分に続く妹が建造されている事を知らされたとき。。。
『こんごう』の目は点になり『しまかぜ』に聞いた

「また。。。あんな目にあわすの？」

『しまかぜ』はあの時の顔を忘れていなかった
自分の妹が。。。。酷い思いをさせられるのは絶対にイヤと泣いた
日のことを

「ねぇ。。。思い出して。。貴女ほど「妹」達に尽くした姉がどこ
にいるのよ」

実の姉との仲が悪かった『しまかぜ』にしてみれば驚くほどの努力
だった
考えるまでもない事だったのに
目の前にいる『こんごう』は眉を下げた顔で泣く

「『ちょうかい』。。。。笑って。。。」
「『ちょうかい』がどうしたの？」

聞き返した『しまかぜ』に掴まれていた手をほどくと
顔を隠して。。。。。

「『ちょうかい』が。。。笑ってたんだ。。。」
「笑って。。。？」

「私には出来なかったのに。。。。」

顔を隠した手の下で，涙の雫は顎をつたい落ちる
抑えていた
自分では。。。。最善を尽くしてきたハズだったのに。。。と言う
残念

粉川と一緒になって笑う妹の姿は。。。正直に眩しかった

自分が「何から」妹を守っていたのかわからなくなってしまっていた

端々でしかわからない会話で答えを出せない『しまかぜ』は『こんごう』の頭を抱いて自分の胸に迎え入れた

今は泣くばかりの『こんごう』を落ち着かせる事が大切

「落ち着こう。。。。ゆっくり話し聞くから」

月の光が柔らかく届く図書室のテラスに二人は場所を移した

古いデスク

かつて二人で。。。「金剛」の写真を見たときに座った場所に

事の経緯を聞いた『しまかぜ』には事件は考えているほど大事ではなく，むしろ微笑ましい出来事に映った

要は妹を盗られたと『こんごう』は思っていると言うことだと

「大丈夫よ。。。『ちょうかい』も初めて会う人が粉川さんみたいに気さくな人だったから，笑っただけよ。。。きっと」

手の平でまだ止まらない涙を何度も払う『こんごう』は寂しそうな顔で

「でも。。私には出来なかった事だ。。。」

「笑いは自然に出るものだから。。。笑わそうなんてねぇ。。コメディアンじゃないんだから。。。気にしたらダメよ」

繊細な心を持つ妹『こんごう』

どんなに強がっていても心が，あの時のまま。。。
あの時。。産まれてしまった自分の姿に驚いた時のまま
『しまかぜ』は自分を姉と慕ってくれ。。。誰にも見せない涙を自分には見せる『こんごう』が可愛かった

いつも
怒ったように眉をつり上げ
きつく口を結び
無駄な話など一切しない
他の艦魂達からは今や恐れられる程の存在になった彼女は。。。妹を盗られた悔しさで泣いてしまう程に繊細な心の持ち主

「私がもっとしっかりしていれば。。」
「違うわ。。『こんごう』。。。そうじゃないよ」

対面で座る『こんごう』に笑いを交えて話す
「貴女がしっかりしていたおかげで，妹たちは護衛艦の，それもDDGとしての仕事をしっかりとこなしてる。。これはスゴイ事なのよ」

事実だった
DDGとはいえ，初のイージスシステム搭載艦である姉妹達は特別な艦魂と見られがちで，ともすれば誰もが溝を作ってしまいそうな存在だったのに，根回しされた挨拶は功を奏し緩やかに仲間の中に入る事も出来たし
『こんごう』が演習で作ったデータのおかげで演習にもすんなり入れるという良い結果をうんでいた

「『こんごう』がしてきた事で。。。『ちょうかい』はみんなと仲良くやっていけてるのだから。。」

「でも。。。『ちょうかい』の歳から考えたら。。笑えないなんて」

自分の前で顔をしかめ
いったいこの冷徹で通った女の体の，どこからあふれ出てくるのか？と考えてしまうと同時に，その歳で未だに上手に笑う事の出来ない『こんごう』がたまらなく愛おしく感じた自分の前で止められない涙で顔を覆う姿

「だから，笑いは自然にでるもの。。。『こんごう』の責任じゃないでしょ」

「でも。。。」

最後に残った残念は
粉川に出来て，自分にできなかった事。。。。。
それこそ微笑ましい事件
それでも『こんごう』にはまだ余裕がないらしい

「もっと私が姉さんみたいに。。なれれば」
「誰も理想のどおりの姉になんかなれないわ」

自分を見本と言う『こんごう』に，さっきまでの自分を思い浮かべて少しの後ろめたさ
純粋な妹の姿に嫉妬してしまいそう心を抑え

『しまかぜ』はデスクをゆっくりと触った
もう何十年と使われた古い傷跡をたくさん残すデスク

「このデスクはね。。。私の尊敬する姉さん物だった」
『しまかぜ』は不安の顔で晴れる事を知らない『こんごう』に自分

の。。。大好きだった姉の話しを聞かせた
テラスに注ぐ月の光の下で

「『あまつかぜ』姉さんって言ってね，名前は知ってるでしょ」
『こんごう』は素直に頷いた
『しまかぜ』がずっと追っている人。。。。初代ＤＤＧの遠い姉で，
その「日記」に艦魂の行く末が書かれていたのでは?という疑惑の
文書を作ったとまで言われる人

「すごくいい加減な人だったのよ」
「いい加減?」

名前ばかりは聞く人で
何故か
誰もが語らず，語りたがらない姉の実像に『こんごう』は興味が湧
いた

「とにかく大雑把!!演習に出ると早く終わらないかって，貧乏揺
すりとかしちゃって乗ってる隊員が「揺れが酷い」ってクレーム出
すぐらいに」
言葉と一緒に揺れて見せる

「そんなの。。。」

良い訳がない
基本，艦艇の魂である艦魂が船に及ぼす影響は些細な物だ
攻撃も迎撃も自分では出来ない存在なのに
機械の些細な故障には大きく関わったりする
『むらさめ』の二日酔いで起こった「機関故障」などがそうだが
意識的に揺れるなんて。。。。考えた事もない

今までだって事務的とはいえ演習で気を抜いたことのない『こんごう』には驚くような話しだ

「それも毎回するのよ」

困った顔で『こんごう』は聞いた

「それいいの？」

「ダメダメ！！」

『しまかぜ』は人差し指を立てて

「『しらね』とかはね。。。毎日怒ってたよ」

「そんな人を尊敬してるの？」

当たり前の質問

護衛艦という国防の第一線にいる船の魂が，そんなふざけた事をするなんて堅物の『こんごう』には理解出来なかった

質問に柔らかな微笑み返し『しまかぜ』は懐かしい思いも相まって遠い目をしながら続けた

「そんな人だったけどね。。艦魂が問題を抱えたり，悩み事で落ち込んだりすると，飛んでくるの！！「どうした！！話してみろ！！」って」

『しまかぜ』は痛快な『あまつかぜ』の話しを聞かせた

演習にはちっとも熱心じゃないのに

他人の悩み事から「恋」の相談までいろんな事に首を突っ込んでは，運良く解決できたり。。。出来なくて大事になったり

毎日を運動会のように騒がしく過ごした人の事を

自分の思い出の中にある姿を。。。。話して言った

『こんごう』はただ唖然として聞くばかりで。。。。けれどもそのおかげで涙は止まっていた

「退屈しない人だった！」
「それでいいのか？」

心配になってしまう程の，破天荒な出来事を連ねられ呆れたように聞き返した

「ダメよね。。。でも。。あの頃には必要だったと。。今なら思う」

ダメと答えて，『しまかぜ』は自分たちの前に突きつけられていた世界を語った

時代の背景

『あまつかぜ』が就航した頃は東西冷戦のまっただ中だった
その頃，産まれてきた護衛艦達にとって。。。。国内も，国外も，張りつめていた時代だった
超大国は「大陸間弾道ミサイル構想」という，ボタン一つで世界を終わらせてしまう兵器の増産による「力」の均衡に躍起になっていたそんな時代に産まれても。。。敗戦から向こう「戦力」を持つ事さえ疎まれる世の中に
自分たちが実際「国防」の役に立つのかどうかもワカラナイ

なのに

海を隔てた赤いカーテンはの脅威は去ることがなく
日本海側に配備された護衛艦達に心休まる日々などなかった

そんな中のささやか悩みに憤激して騒ぎ，心を和ます事に終始した姉
それも最先端の防衛システムを搭載した，ミサイル護衛艦だった『
あまつかぜ』

「でも。。それじゃ実務は?」
「もちろん根っこは真面目な人だから出来たと私は思うけど。。。
それでも「そこ」は大事じゃなかったって事よ」
「そんな」

「そういうものなのよ。。。実務に必要な事ばかりが全てじゃない
し，笑わせる事ばかりが全てでもない。。。相手を思ってしてあげ
られる人である事が大事だと思うのよ」
漠然とした答えだが
説得力はあった
自分が「理想」と思った姉『しまかぜ』の笑顔の元がそこにあるの
なら。。。信じるしかない

「『こんごう』鏡の前で自分を見ていたら，何か別の物に代われる
って訳じゃないわ。。。貴女はちゃんと妹達に出来る事をしてあげ
てる立派な姉よ。。。自信をもって」

鏡の自分

ロビーにあった鏡に写した自分を見ながらアレコレと悩んでいた事
を『しまかぜ』に見られていた事に急に顔が真っ赤になった

「でも。。やっぱり笑いとか」
「これからそうすればいいじゃない」

真っ赤な顔のまま上目遣いで姉を見る
初めてココで『こんごう』は癇癪を起こして。。。
『しまかぜ』とぶつかった
自分以外の自分の影に怯えていた自分を抱きしめたくれた『しまかぜ』は思い出して
納得した

「今回の事はいい教訓だったと思って。。。『ちょうかい』と会話も楽しめるようになれば良いのよ」
「そうかな。。。」

「そうだよ。。。そこからまたスタートでいいじゃない」
「わかった。。。了解」

相変わらず硬い返答
でもそれが『こんごう』らしさが戻ってきた証拠
月慌て居た顔に微笑みと，髪を優しく撫でた

「さあ!!部屋に戻ろう!!早く寝ないと涙の後消えないよ!」

そう言うと手をつないで部屋に戻った
「お酒臭くてごめんね」としっかりアリバイづくりも忘れずに

姉が悩みのどん底にいた頃
『ちょうかい』は慣れない夜鍋をしていた
食事が終わった後『いかづち』にサプライズの話しは付けてきた
後は自分の仕立てをすませるだけの状態になっていた

昼間，粉川に買って貰った「姉」へのプレゼントはシルクのハンカチだった
基地の隊員が希に置いてゆく雑誌の中から探し出した物を，本当は自分の「力」で具現化させてみようとおもっていたのだが，粉川曰く

「僕が買ってあげるよ！！本物のほうがいいでしょ！！」

最初は拒んだ
自分で何かしてあげられた方がとおもったし。。。値段にびっくりしたからだ

「エルメス．ハンカチーフ」

だけど粉川は顔色一つ変えず
真面目な言葉を返してくれた
「給料の使い道なんてほとんどないんだから，『ちょうかい』ちゃんや『こんごう』ちゃんに喜んでもらえるならそのほうが嬉しいよ」

「人」と話する事が初めてだったし
向こうだって艦魂なんて「何か」よくわからない者の頼みに応じてくれるかもわからない中で
粉川はまるで普通に「女の子」を相手するように扱ってくれる

余計に安心してしまい。。。つい法外な値段のプレゼントを頼んでしまった
粉川が買い物に出て返ってくるまでの間
自分の無茶な注文で人を困らせたか？
それにブランド物なんかこんな田舎に売っているのか心配になったがいざ手元に届いたそれを見たとき。。。ホントに嬉しくて良かった

と思った

「ありがとう粉川さん」
素直な心で例を言う『ちょうかい』に粉川も笑って
「驚かせてやろうね！！」と

手元の小さなランプの下
手製のメーセージカード。。。。
いつも言えないありがとう。。。。切り絵にして細かい包装を作り
上げてゆく

明日。。。。これを渡したら姉はどんな顔をするだろう。。。。
喜んでくれるかな？
『ちょうかい』は何度も一人で笑った
声を殺して小さく
ウキウキする気持ちで夜の遅い時間を楽しく過ごしていた

第二十四話　鏡の自分（後書き）

カセイウラバナダイアル～～臆病者の挽歌編

本当ならココにお茶会
ドキ！！女だらけのお茶会！！ポロリもあるよ（？）を掲載する予定だったのですが
おもいのほかダメージがでかいのか
書いても書いても納得しません。。。。
何度も草薙先生とこに小説を読みに行くのですが。。。

しかし
ダラダラしているけにもいきませんので次回こそは掲載します！！！
こうご期待（ちょっぴりで）

で今回は人物評のせときました

実は人物評にも伏線につながる設定がチョコチョコ書き込まれてますから。。。。。。。。。フフフフフ府（？）

対空誘導弾搭載護衛艦ＤＤＧちょうかい　艦魂『ちょうかい』

こんごう型イージス艦４姉妹の末っ子『ちょうかい』

『こんごう』から遅れる事，5年というバンクを経て産まれた末っ子の『ちょうかい』はシステム事態が姉妹の中では抜群で最初からベースライン5を搭載
さまざまな期待をもたれて産まれるイージス艦の姉妹だが
例の『こんごう』の事件以来「魂の。。。」は沈静化していたため誕生に際してのパニックはなかった
『こんごう』は自分が受けたトラウマを回避するため妹達には細心の注意を払っていた。そのため基地に配属されてから，姉の身の上に起こった悲劇を知ることになる

『ちょうかい』
身長１５５センチ
年齢１５歳（艦魂流見た目年齢）
髪はショートヘアの黒髪，目は青い（イージス艦の姉妹は例外なく目は青い）

姉を廻る一連の事件を佐世保配属になってから知った『ちょうかい』は
その事からも近くにいる姉『こんごう』を崇敬の念で見ているが
『こんごう』は自分のせいで妹が肩身を狭くしてしまってはいけない。。。そう思っているのか，距離のある付き合い方しかしない
姉が色々と自分たちの事を気遣ってくれているのが痛いほどにわかる『ちょうかい』もまた必要以上に姉妹の仲を縮め，姉の立場を悪くしないように勤めているが。。。
それはちょっと悲しいし切ない。。。。
いずれは佐世保の司令になる『ちょうかい』ではあるが，今はまだ妹でもいたいのだ
そんな二人の間に粉川が入ってきた事により。。。。

汎用護衛艦ＤＤさわぎり　艦魂『さわぎり』

『こんごう』達の編成では一番小型の護衛艦になる『あさぎり』型護衛艦で，『きり』姉妹の８人姉妹の七女
この姉妹は全員が揃って小柄で年齢も１０代前半の姿が多い
全員が揃いもそろって髪を大きなリボンでとめているのが特徴ともいえる
自身がチビな艦魂という事を良く知っているせいなのか？意識的にそうしているのか？はワカラナイが甘えん坊が多く
自分たちより大きな体を持つ護衛艦艦魂にいつも甘えている（藁）

『さわぎり』
身長１４２センチ
年齢１１歳（艦魂流見た目年齢）
髪は三つ編みにして後ろでお団子にしている，ほどくとかなり長い

普段の艦隊行動中では『しまかぜ』について回り，甘えまくっているが
ひとたび任務に入れば！そこは護衛艦ちゃんと職務に入り顔もビシッと！
現在の話しの流れの中では，目立つことのない彼女だが
意識的に目立たないようにしているところがある，その理由は
彼女達が他の艦魂とは違う「特殊な能力」を持っている為とも言われる

汎用護衛艦ＤＤいそゆき，はるゆき，あさゆき　艦魂『いそゆき』『はるゆき』『あさゆき』

佐世保を騒がせる3姉妹だが，正確には『ゆき』１１人姉妹という
護衛艦隊の中でも一大勢力的人数の六女，七女，十一女
年齢（艦齢）的には『しまかぜ』より年上のハズなのだが。。。。。
どこかチャランポランな姉妹達
姉妹はそれぞれ容姿に違いがあるが，全般的には１５~１８の間ぐらいで例外として『あさゆき』だけ１１歳ぐらいなる

『いそゆき』
身長１５５センチ
年齢１６歳（艦魂流見た目年齢）
髪は黒で肩に届く程度，ストレートヘア
『はるゆき』
身長１５２センチ
年齢１６歳（艦魂流見た目年齢）
髪は茶髪で肩に届く程度，毛先だけが内側に巻いている癖毛
『あさゆき』
身長１４１センチ
年齢１１歳（艦魂流見た目年齢）
髪は鎖骨の下あたりにとどくフワフワヘア

話題の少ない軍隊生活と女所帯
色恋なんかどっかで発生していると聞けばすぐに耳をたてて。。。。
何故か寸劇をする姉妹
よく見かけられる光景らしいので多少の事が起こっていても他の艦魂は気にしていないようです
底抜けに明るい姉妹達だが実は艦齢からいけば準じ引退しなければならない時期に来ているため（日本の護衛艦は他国に売却は出来ないため（武器輸出三原則により）原則的には解体。。。またはミサイル標的になるというのが最後の時なのだ）

明日の「命」は？という不安から騒ぎ立てているのかもしれない
だからなのか『くらま』もあまりこの姉妹達の素行を叱ったりはしていないようだ

補給艦ＡＯＥはまな　艦魂『はまな』

イージス艦の姉妹も数少ないが（現在は船体構造物の違いはあるものの『あたご』『あしがら』なども合わせて６姉妹），補給艦『はまな』もまた少ない（現在は増えて６姉妹）
３姉妹の末っ子
燃料や水などの海上補給を担当している事もあって，しゃべり方なども結構硬いし，物事がキッチリと割れていない事がキライという言語数学系の少女
艦魂には珍しく眼鏡をかけているが目が悪い訳ではなく
常にミリ単位の精度が必要とされる海上給油などの作業で自身の精度を高めるための補助として愛用しているようだ

『はまな』
身長１５４センチ
年齢１６歳（艦魂流見た目年齢）
ショートヘアの茶髪，眼鏡愛用者

見た感じからして「妹系」の彼女は結構「姉系」の艦魂に夜のお誘いをされたりして困っている
そのせいか割と『ちょうかい』にひっついて歩いている所が目撃されている
『こんごう』の事が苦手のようで，寄港した今は隅っこを歩いている（藁）

実はかなりの寂しがり屋で前の配属では『はるな』司令の部屋奴（注．へややっこ，同室に住み衣食を共にする事でこの場合は『はるな』司令が姉代わりだったという事（夜の相手はしない（爆笑））をしていた
寂しいから俯きがちな姿をしているせいで。。。余計に狙われている（爆）
佐世保では部屋割りで『ちょうかい』や『はるさめ』と一緒でよく『はるさめ』のベッドで巨乳に顔を埋めて寝ている（藁）（『はるさめ』はそういう事は気はないし，気にもしない艦魂）

そんな感じで

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第二十五話　妹の企み（前書き）

色々な問題を経てもどってまいりました。。。
まだしばらくは続く艦魂物語をよろしくお願いします

火星明楽

今回後書きはお茶会続編です～～～

第二十五話　妹の企み

秋晴れの日々は続いていた
風こそ冬を近づけるために少しずつ冷たさを増してはいたがそういうものに負けない熱さがココにはあった

佐世保の士気は例の事件から向こう上がる一方だった
隊員たちは課業に。。。その後の時間を自身を鍛える事に積極的に使うようになったし
艦魂達もそれに合わせるように自分達を磨く激走に打ち込んでいた

いつも通り
走りを，終えた艦魂達の中，昨日の今日ではまだ心が定まらないのか『こんごう』は妹からタオルを受け取りはするが気まずそうな顔を隠し切れてはいなかった
「『ちょうかい』。。。。あのな」
何か話そうにも言葉が巧く出ない
思い切った態度で，一緒にお風呂に入ろうと言うだけのことが。。。言えない

言えない
という事
それほどに自分が「日常」において妹と距離をもっていた事の証明にしかならないから
余計に自分に腹が立ち拳にばかり力が入ってしまう

一言が。。。言えない

「『ちょうかい』！！」

妹の名前を呼んだのは『こんごう』ではなく『くらま』司令だった
ぎくしゃくした姉妹の関係など，我感ぜずの態度で部下を呼びつけた司令は

「１０分後に司令室に」

そういうと踵を返し消えていった
呼ばれるまま姉に手を振り，急ぎ隊舎に消えて行く姿を『こんごう』は唇を噛んで見送る事しか出来なかった

「防衛庁から呼び出しが，君にも近々あるかもしれない」

渋い表情のまま司令室のイスに座った宗像（むなかた）の前
隊員達と同じ青服を着た粉川は敬礼とともに了解と答えた

「まあ。。座って」

不審船事件の経緯の公表，各方面のマスコミにおける「場違い」な非難を最小限に交わすべく
防衛庁は程度の情報操作に入っていた
実際では「調整」という作業段階である
昨日。。。「運良く」大物芸能人の不倫会見が重なったため事件に対する世間の目は反らすことは出来ていたが，事件そのものが無くなる事ではない

「海保との関連においての「間宮艦長」の対応などについて聞かれると思う」

粉川は目の前に並ぶ書類を見ながら
「調整」のために情報部がアクションを起こしている事に顔をしかめたが
司令の宗像に対する対応は落ち着いていた

「艦長の指示は正しかった。。。。これが僕の意見であり，見たままです」

宗像は片手をあげ
自分が喫煙者である事を示すと火をつけながら

「責任の問題が上がるようならば。。。私にも覚悟はあるという事は示しておきたい」
「司令に責任はありません」

粉川の態度は毅然としていた
目の前に置かれたガラス製の灰皿を宗像の側に押し

「責任を追求するならば「下」ではなく「上」の問題です」

宗像は粉川がただの熱血漢ではなく
あまりに理性的な人物である事を危惧していた
正しいがまかり通る程，世の中の仕組みはきれい事ではない

「優秀な艦長の育成には時間とお金がかかります。。。。間宮艦長は立派な方です，そして宗像司令も「その態度」を通して頂きたいと思います」

「しかし。。。君はどうなる？」

手元の灰をはらいながら
ココまできたのなら心配であるのは粉川の進退である事に宗像は額に残る傷をさすりながら聞いた
宗像の手元の資料には「調査部，今泉」の中間報告が入っていた
内容については手厳しい見解が多い中，個人の名前として粉川の名前が挙がっている項目を指差して

「調査部は。。。君にも，有りもしない「疑い」をかけているぞ」
「慣れてます」

佐世保での最初の質疑応答をぶち壊しにした粉川に，今泉は「任務妨害」と正しい見識の無い人物というレッテルを張っていた
粉川の側には「今泉に関わるな」という苦言を調書の翌日，情報局次官，佐々木からパソコンの方にメールではいって来ていたが
たとえ当日に入っていたとしても，あの反論を控えるつもりなどさらさらなかった

自分の立場を悪くするかも知れないという心配に「慣れている」と切り返した粉川の顔は苦笑いにも似ていたが
宗像には好ましいものだった

「もし。。本庁（防衛庁内局）に居られなくなったら。。頼ってくれ。君は海の方が似合うと思うぞ」

内局の事務机の前に粉川がいる姿は宗像には滑稽にしか見えなくなっていた
それほどに割り切りのいい男に見えた

「大丈夫ですよ！僕には「艦（ふね）」の加護が付いてますから！！」
立ち上がりながらも，あっけらかんとした態度で笑う粉川に，宗像は方眉をあげて笑った

「うらやましいな！！艦の加護か。。。。海の職務に徒事する私も欲しいものだ！」

豪放で知られた宗像は，それを余すことなく示す大きな声で笑った
「まったく羨ましい！！」
席をたった粉川の目には司令室に掲げられた予定黒板の文字に驚いていた

「『ちょうかい』ち。。。」
危うく「ちゃん付け」のまま名前を呼んでしまいそうだった口を塞ぎ，改めて

「ＤＤＧちょうかいは，明日長崎に回航ですか？」
タバコを口にくわえたまま宗像は大きく煙りを吹き上げながら答えた

「例の事件で遅れていたが「ＳＭ－３」の実装が決まっていてね。。。。防衛庁「長官」が騒ぎ出す前に動こうと言うことらしい」

もっともらしい話しだが宗像の態度には「皮肉」が現れていた
浮かぶ煙の狭間の思案
事が煙にまみれているうちに「必要な事」は前に進ませようという防衛庁の古狸達の知恵の戦い見えた

イージス艦の兵装

そもそも『こんごう』が横須賀に寄港していたのは，硫黄島演習で

「ＳＭ－３」の実験をしていたからだ
そしてその実演は来年のリムパックと連動した演習項目にある，海自の春一発目の目玉となっている

だがまだ日本の防衛という点では実験段階であるミサイル兵装に対する「否定的意見」は多いという現状での見切り発車
何より金食い虫なイージス艦だが現実的問題を直視しているという意味では日本は明らかに平和呆けである

現実はアメリカ海軍の実験データの統計とＮＩＥ（米国国家情報見積もり）による警告が鳴らされている
２０１５年には赤の眷属国は，米国本土に届くミサイルの配備を完了するだろうとされている
と言うことは
当然日本は直下の射程に入る
米国的には本国に届く前の迎撃の第一段階を日本で迎えたいし，それは日本を視野に入れたミサイルを迎撃する為に必要不可欠ともいえる「防衛戦略」とも言えた
だが。。。。再三にわたり「ミサイル防衛」に重点をおく事をアメリカから通達されながらも自分のポストを気にした政治屋と国民感情によって計画は鈍行になっているのが現状だ。。。

さらに運の悪い事にココに来て
例の「イージス艦機密漏洩」と「不審船事件」というダブルパンチをうけ，現行の「長官」の対応は難色を示していた。。。。だが。。だから「国防」に手を抜きますなどとは言えない，存在の異議まで問われる防衛庁は，さらに遅れる恐れが出る前に。。。。

「国防族」とも世の中から野卑される古狸達が先手を打ったという形になったわけだ

「本来なら。。。建造準じで，アップしてゆく事だが国際協力「だけには」熱心な政府の意向を汲んで『きりしま』はペルシャにいるんだ，ちょうかいの方を改装した方が有利だろう。。。ライン5を搭載する最新鋭艦だし。。。。兵器への対応もそのほうが早いと睨んだ。。。というところだ」

「なるほど。。。。。」

黒板の前，佇む粉川に宗像は

「上の決めたことだが?問題になりそうかね?」

「いいえ。。。懸命な判断です」

自国を守るという事に極めて消極的な国民
それを選挙活動の項目に堂々と上げる政治屋
「防衛費削減」。。。。。
そして現行の防衛庁の頂点に立つ政治家上がりの「長官」。。。。。。
粉川は宗像に一礼すると部屋を後にした

「政治屋ってのは。。。何が守りたいのかねぇ。。。」

大きく背伸びをしながら愚痴った

「粉川さん!!」
司令部の監舎を出た粉川の足を止めたのは『ちょうかい』だった
珍しく黒のセーラー姿で

「どうしたの?」
「私，明日」

「長崎に行くんだよね」

粉川は先ほど司令部で見た予定で『ちょうかい』が明日，長崎に回航，兵装の改装に入る事は知っていると告げた

「。。。。クリスマスには返ってこられそうですけど。。。」

元々関東生まれの『ちょうかい』だには長崎はココ佐世保から近いとはいえ。。。知らない土地に身をゆだねるという旅になる。

三菱重工長崎造船所は数多くのＤＤＧを手がけた実力のあるドックだ。艦魂達にとってはちょっとした故郷にもなるほどで
船体に対するデリケートな対応は慣れているし
姉の『こんごう』を始め，ココの生まれで，『きりしま』『みょうこう』もいるのだから心配は少ないハズ

それでも。。。。

俯いた顔
久しぶりに会った仲間達と離れ，長崎のドックに入らなくてはならないのは。。。寂しい事だと思う

粉川は『ちょうかい』の頭を撫でた

「じゃ戻ってきたら！クリスマス会やらないとね！！」

どう見ても幼い『ちょうかい』イージスシステムが最新鋭で姉達よりも優れた部分はたくさん持っていても。。。。。
『くらま』に付いて司令の任に当たる者としての心得を教えられいづれは多くの艦魂達の面前に立つ者となるとしても。。。。。

まだ甘えたいところもいっぱい持っている

小さな身の丈が前に折れる
俯いてしまった目は寂しそうに眉をしかめ続けていたが，粉川は元気づける意味も含め
彼女の体を抱き上げた

「元気だして!!それより。。。今日を騒がないと!!」

大きく
小さな『ちょうかい』の体を高く挙げ肩車した
「粉川さん〜〜」
「そこに乗ってて。。。話しやすいんだよ。。並んで話してると独り言を下に向かってしゃべってるみたいにみえるらしいから!」
そういうと走り出した
速度を上げた粉川の頭にしがみつく『ちょうかい』は

「走るんですか!!」
「倉庫の裏でサプライズの計画たてよ!!」

努めて明るく，相手を思いやる粉川の心に『ちょうかい』も柔らかい態度になる
姉の驚く顔がすぐにでも見たい
二人は微笑み合いながら海に向かう道を下っていった

「少しは手伝ってーな!!」

『いかづち』にどやされた『むらさめ』と『はるさめ』そして『はまな』は青服に着替えてバースの方に向かって歩いていた

料理を一手に受け持つ『むらさめ』は課業が終わった後はキッチンに，こもったきり仕込みで忙しいらしく
メイン以外の魚のつまみを『うずしお』のところに取りに行くのを部屋でゴロゴロしていた姉達に任せたのだ
何故か『はまな』まで付いてきてしまっているのかは。。。。本人の事情らしい

「よく司令が許可をくれましたね」
『はるさめ』の隣を歩く『はまな』は『くらま』司令が感心を示すことのなかった「人」の歓迎会をする事の許可が出たことに割り切れないものがあったようで聞いた

「『しまかぜ』が飲みに行ったついでに許可もらったらしーぜ」

髪を引っ詰め頭の上に洒落のような大きな団子を作った頭を揺らして前を歩く『むらさめ』はクーラーバックを背負っていた

「ただ。。。騒ぐと問題になるから少人数でって話しだったんだけど。。。。」
後ろを歩く『はまな』は自分が招かれざる者である事に肩をすくめた

「いいじゃ～～ん，はーちゃん（『はまな』）お部屋で一人だと寂しくて泣いちゃうんだよ～～」
『はまな』の肩を抱きながら，相変わらずフラフラ歩く『はるさめ』は彼女が一人で居られない理由を良く知っていた

小動物系のうえに妹系を具現したような『はまな』この上，メガネっ子という最強のコンボを持つ艦魂
しかも本人は極度の寂しがり屋でマジに一人で部屋に残されたりなんかしたら布団に潜って泣いてしまうし
その身（体）がアブナイ
一人でいるといつもモジモジしていて上目遣いになってしまう彼女
の癖は「姉系」の艦魂達にとっては「誘ってサイン」にしか見えない
何度も誤解を招いて襲われそうになり，そのたびに『はるな』司令が助けたりしていた事もあり
前の配属では『はるな』司令にべったりだった

配属が変わって佐世保に来た頃は寂しくてよく泣いていたが
同室に，生まれた年数は違っても
歳の頃合いの近い『ちょうかい』がおり
このボケボケの『はるさめ』が意外と『はまな』を可愛がってくれるおかげで今に至っている

「はーちゃんがいないと～～私が呆ける～～～」
「オマエは，元々ボケボケだろ！！」

『むらさめ』は強烈な突っ込みをしながら，昼下がりで小寒くなってきたバースに向かって走った
風は夕方に向かって強くなっていきそうな感じ
潜水艦達のいるバースまではまだ遠いからか，体力作りの一貫なのか走る『むらさめ』を早足で追う2人

「あ。。。あれ『こんごう』一佐」
『はまな』は佐世保に移ってからあまり外に出たことがなかったせいか
周りを見回しながら歩いていた先に『こんごう』を見つけた

前を走っていく『むらさめ』は聞く耳持たずだったが『はるさめ』は『はまな』の指差す先を見た

「お～～～『こんごう』ちゃんだ～～～」（注，『はるさめ』は『こんごう』より年下です（藁））

大きく手を振る

離れた突堤にしゃがみ込んだ『こんごう』に何度か声を掛けてみるが体育座りのまま顔は上がらなかった

「呼んできますか？」

実は苦手な『こんごう』だが呼ばない訳にもいきませんよね

という目で『はまな』は『はるさめ』を見上げたが

「いんじゃな～～い，ご飯の時には，くるよぉ～～～」

そういうと姉の後をフラフラしながら追った

「ところで「人」が参加する事は『こんごう』一佐には知らせてあるのですか？」

こんな質問をボケの『はるさめ』にまじめにしてしまう『はまな』

「さぁ～～～知ってるんじゃないかなぁ～～」

自分の知らない事には努めていい加減な返事『はるさめ』は『はまな』と手をつないでバースに歩いていった

その『こんごう』は突堤の風に己の身を晒したまま。。。。実は涙にくれていた

課業の終わった昼過ぎ。。。。
お風呂にこない『ちょうかい』の事が気になって
煉瓦倉庫3階にある司令室に近い階段だ待っていたのだが，ふと息をついた瞬間に『ちょうかい』は階段を一足飛びに越え寄宿舎にも向かわずそのまま外に出て行ってしまった

さすがはイージスの血統などと，その時は関心したりもしたがそう言う問題ではない！！と後を追って走り付いた先に見たのは。。。。

粉川に肩車されて楽しそうにしている妹の姿だった

言葉では。。。なんとも言い表せない悔しい気持ち
ココに来て3日たらずの間で『ちょうかい』が笑う姿は何度も見た自分の前では見せたことのない。。。。素顔

話すことからもう一度スタートしたらいい

『しまかぜ』はそうは言ってくれたが。。。自分の行動はもう後手過ぎてただの「媚び」にしか見えなかった
今日は。。。パーティーをする
『いかづち』からはそれだけを聞いていたけど
もう何がめでたいのか？何でパーティー？理解が出来なかった

「。。。『ちょうかい』。。。。。」

思い出せば反省の必要な姉だった事ばかりだ

『ちょうかい』が産まれたとき。。。。運良く横須賀に寄港していたことで，結晶から産まれ出た妹を一番に抱きしめる事ができたはいいが。。。。。

石川島播磨重工横浜第一工場で誕生した他の姉達を押しきり（『しらね』『くらま』もココの産まれ）

まるでラグビーのボールを奪うようにひっ掴まえる形で抱きしめた

結果

なにもワカラナイ『ちょうかい』は腕の中でフルフルと震えながら

初めての姉である『こんごう』との対面をする事になった

「私が姉だ。。。。」

仁王立ちのまま

裸の妹に自分の服を被せた『こんごう』だったが

とことん一生懸命が空回りしている『こんごう』の姿に『しまかぜ』は笑いを堪えるのに大変だったらしいし

『しらね』目頭を押さえて零した

「私くしって。。。そんな酷い事したの。。。見てて悲しいわ。。。」

『しらね』はたった一度の暴挙で自分がお迎えもろくに出来ない姉と烙印を押されたと嘆いたらしい

後日注意された事を思い出した

「びっくりしちゃうわよ。。。あれじゃ」

そうは言われても。。。。また『しらね』のように暴挙におよぶ者がいるのではないかと思うと，いてもたってもいられない。。。。

だが
今思い起こしてみれば。。。確かにダメな行動だっとわかる
あれでは
妹は緊張するばかりで。。。。

「う。。。。ごめんね。。。『ちょうかい』。。。。」

昨日もあれほど迷った
だけど
鏡を見ても代われない。。。自分がいまさら「優しい姉」になれる
自信はなかった
「何かに代われるわけじゃない」
『しまかぜ』の言葉
代われるわけじゃないからこそ!自分のままで新しいスタートをし
たらいいという忠告が
悪い考えに傾いていた

「代われないよ。。。。。私には無理だよ」

代われない限り。。。『ちょうかい』の笑顔を自分で見ることは出
来ないと
膝を抱えたてやっとパーティーの意味がわかった
きっと今日のパーティーは。。。『ちょうかい』が粉川と付き合う
事になった記念の為に開催されたんだと

もし付き合いが本当だとしたら。。。。祝う事になる
『こんごう』は首を振った。。
頭の中にある思いを整理できない

『むらさめ』に言われるまで気が付けなかった自分の落ち度にただ蹲り
そこから動く事が出来なかった

姉に日頃の感謝とプレゼントをという妹の企みを。。。。まったく誤解したまま夕暮れ時は近づいていた

第二十五話　妹の企み（後書き）

カセイウラバナダイアル～～Ｖｏ２５
戦うお茶会！！！

『こんごう』は。。。。それなりに注意を働かせて時空トンネルに入ったつもりだったが
泣く相手の声は。。。四方から聞こえるという「歪み」の中で，何時間か彷徨う事になっていた
見上げれば自分が降りてきたスキマは見えるのだが

「こまった。。。。」

そのスキマに向かって上がっていけない事にもいまさら気がついていた
通常時空トンネルは自分達が通ためにあったとしてももっと規模が大きい
そうしないと「安定」が得られないからだ
なのにスキマ程度の穴でつなぐというのは。。。。何か欠落している証拠だ

「こんにちわ」
ゆらゆらと揺れる好き間の出入り口を睨みながら思案に暮れていた
『こんごう』の前に。。。
柔らかく上部に結んだ二つの髪の少女と，長いサラサラの髪がまだ

真新しい天使の輪を輝かせている少女が立っていた

「こっ。。。こんにちわ。。。であります」

おもわず変な返事を返してしまった『こんごう』だったがココにいる人といえば!!

思い出たしたように足を揃えて敬礼した

「初めましてであります!!海上自衛隊ＤＤＧこんごうであります!!」

大きな返答に

姉の後ろに隠れる『零様（近江真名）』と余計に固まってしまった

『小雪様（信濃真名）』

「こんにちわ。。。。信濃の艦魂，小雪です」

「。。。。近江の零です。。。」

目の前で固まってしまう大和型2姉妹

実は彼女達以上に『こんごう』も固まっていた

勢いよく挨拶したはいいが。。。。

巨大戦艦の艦魂ともあれば。。。

そして

栄光の帝国海軍の姉様達とあればという思いこみ（藁）

もともと頭の固い『こんごう』はその思いこみから，目の前にいる可愛いかたまりにどう対処していいかと迷ってしまっているが

小雪様　「あの。。。お茶会に行こうと」

こんごう　「はい!!お迎えにあがりました!!」

零様　「。。。こわいよ。。。この人」

くそ真面目に敬礼のまましゃべる『こんごう』に怯える2人

小雪様　「あの。。。ココどこ？」超涙目の状態
こんごう　「時空航路の別ルートと思われます！！」
零様　「おねーちゃんこの人怖い～～～」半泣き状態
こんごう　「こわい。。。ですか。。。」
小雪様　「あの。。。もうちょっと普通にしゃべってもらえませんか」涙目崩壊寸前
こんごう　「了解しました！！」
小雪様　「普通。。。。」
こんごう　「普通であります！！」
零様　「こわいよぉぉ～～この人怖い～～」涙目崩壊！！

こんごう　「あああっ～～どっどっとどうしたら。。。」
自分の妹にさえまともな関係を持てていない『こんごう』には予想外にして攻略不可能な展開になっていた

その頃
鳥籠のお茶会ステージに珍客が訪れていた
甚だしく評判の悪い『あめ』姉妹の一人『きりさめ』はパソコン片手に姉妹達に挨拶していた

きりさめ　「異常な事態が発生してるんダゼ」
突然来た『きりさめ』は前に大和姉妹がいる事もかまわず『むらさめ』に話しかけたが
返事は拳だった

むらさめ　「お客様の前で何しとんじゃ！！テメエ！！」
もう一歩遅かったら『くらま』司令か。。。。『桔梗様（武蔵真名）

』に蹴りをくらっていた事だろう
突然訪れて日常会話とは。。。やっぱり非常識な『あめ』姉妹

くらま　「まったく。。。礼儀がなっていないぞ!!」
撫子様　「かわった方がおおいのですねぇ」
笑ってはいるが。。。。
むらさめ　「すいません!!このアホ妹!!」
桔梗様　「やっぱ，あめ姉妹ってのはろくなのおらへんな」
頭から煙りを出して沈黙していた『きりさめ』だったが急にエンジンが掛かったように起きると敬礼した

きりさめ　「『くらま』司令にお伝えしたい事があります!!」
くらま　「こんなところで任務をするな!!下がれ!!」
不機嫌に輪を掛けた『くらま』は手で下がれと合図したが
桔梗様は『きりさめ』の持っている少しばかり古いパソコンが気になったご様子

桔梗様　「ちょっとパソコン見せろや」
きりさめ　「いいぜ!」
切り返しは早かったが状況判断に置いて言葉使い失格な『きりさめ』に鉄拳の準備をしてい『くらま』だったが

桔梗様　「なんだこれ!!零と小雪だ!!」
開かれたパソコンの中にへんてこな図面とアイコンが書き込まれている
撫子様　「あらあらあら。。。零と小雪のアイコンね」
桔梗様　「やい!!きりさめ!!コレなんだ!!」
きりさめ　「時空航路の航行図ダゼ」

今回の時空航路の作成には『きりさめ』と『ゆうだち』が関わって

いた
二人とも揃ってヲタクだ（爆）『きりさめ』ｈａｒｄ．ｓｏｆｔ区別のないメカフェチ
『ゆうだち』ｓｃｉｅｎｃｅ．ｔｅｃｈｎｏｌｏｇｙ等々のマッドくらま「何故，本線航路と別の場所にアイコンが出ているのだ？」
きりさめ「異常事態だからダゼ」
桔梗様「異常て。。。。」
きりさめ「穴あいたようダゼ」
くらま「なんだと？穴が開いたとは？」
きりさめ「誰かが航路にｃｌｏｔｈｃｈａｒｇｅしたっぽいんダゼ」
桔梗様「それって。。。何だ！！！何だぁぁ！！テメエ！！！
小雪と零はどーなったんだ！！！」

興奮の桔梗様『きりさめ』の襟首を掴まえて怒鳴る
頭をクランクランシンクさせながら
きりさめ「違法航路のスポットに落ちたらしいゼェ。。。。」
桔梗様「スポットに落ちただぁ！！！」
撫子様「まあ。。。そんな事もあるんですね」
桔梗様「姉さん！！落ち着いてる場合じゃー」

くらま「緊急事態発生！！！全護衛艦隊に出動命令！！」

お茶会開催から1時間！！！事態は急転する
どうなるお茶会！！いいのかこれで！！

なかなか進まなかったお茶会編（藁）ですが。。。ポロリはあるんでしょうか（爆）

それにしましても
今回ココにいたるまでに
大変たくさんの先生方にご迷惑をかけ
たくさんの声援と温かい励ましを頂いたことで作品を投げ出さずにすんだことに感謝します
一時はホントに。。。もう止めてしまおうかと思ったりもしました
全部を書き溜めて
出来上がったものを一度に掲載して終わって終おうと考えたりもしましたが
そんなに神経が持つともおもえなく本当にヤバイ状態だったところを
先生方から読者の皆さんに助けて頂きました

ホントにありがとうございました
まだしばらく書いていけそうです
頑張ります

火星明楽

第二十六話　落陽の港（前書き）

今回は、後書きが本編ぐらいのボリューム（爆死）
お茶会激動編を掲載
なんかＦＦのダブル連載やってる気分になってきました！！！
こういうのをランナーズハイっていうんでしょうか（注．おそらく違う）
ヒボシはちょっと灰になったよｗｗｗ

第二十六話　落陽の港

「なぁ、『こんごう』はどうしたんよ？」

メインディッシュを作り上げた『いかづち』はキッチンブースから顔を出すと部屋を見回して聞いた

港の景色が薄暗くなったのは部屋に灯る明かりの影でわかるもの

『いかづち』の定に返らぬ返事、と足らぬ人数

部屋の中には昼間メイン以外料理を作る魚の受け取りに出かけていった面子だけがいる

無駄に走ったせいか？ソファで眠りこけた『はるさめ』と彼女の大きな胸に顔を埋めるように寝る『はまな』

反対側のイスには足を放り出し、アタマをガクンと落としたままブラブラしている『むらさめ』

『こんごう』の姿はない

「なあ、どうなっとんのよ」

「『しまかぜ』なら１８００には帰ってくるっていってたぜ」

めんどくさそうに欠伸をしながらも、部屋の中に充満し始めた香ばしい匂いを追う『むらさめ』は「筋トレ道」という本を煽りながら答えた

「いやいや『こんごう』がどこ行ったかって、きーてんねん」

「部屋にいんだろ？」

それはない

『いかづち』は昼から向こうずっと部屋に詰めて料理の仕込みをしていた
誰かがドアを開ければ気がつくがココを出入りしたのは『こんごう』以外の面子ばかりで，当の本人は風呂から上がって以降の姿は見ていない

「なぁ、１９００には粉川はんと『ちょうかい』来るんやで？誰か呼びにいきーや」

ディナー用の小皿を拭きながら重ねる、隣にはメインのスープが仕込みの最終に入って小気味の良いクツクツという音を立てている
来客の心配までしている『いかづち』の手はまだ空きそうにないのに、目の前はだらけきった姿をさらした艦魂ばかりで、不安に答えてくれる者はいなそうだ

「『しまかぜ』が向かえに行ってるんじゃねーのか？」

イスに体を起こした『むらさめ』は背伸びして香り始めた料理に顔を弛める

「『しまかぜ』はんは、図書室に行ってんねん。呼びになんか行ってへんよ」
「またかよ、そんなに本も入れ替わってねーだろうに。調べ物ばっかだな」

背中のストレッチを軽くしながら安直に『むらさめ』は答えた
手足をブラブラ揺らして窓の外
少しずつ夕闇に染まった海を見ながら

「もちっと待って返って来なかったら「艦(へや)」に行ってくらよ」
そういうとイスを使ったストレッチに精を出した

基地内の街灯が一斉に付く時間１８：００

『こんごう』はバースから少し離れた基地と佐世保みなとの境界に
近いテトラポットに座っていた
夕日が波に映ってキレイ。。。悩んだ事でトロンと落ち込んだ瞳は
そんな事を考えながら
水面に指を伸ばして仰いでみる
波に揺れる陽が空だけでなく，地上にも一斉に咲く中。。。。落ち
込んだ気持ちに歯止めがきかなくなっていた

「。。。。。。」

潮風に長い茶髪は揺れる
頬に流れる髪を払う。。。。
現実とは
目に見えるものだ。。。目の前にあった妹の姿が幸せに見えたのな
ら。。。
姉である自分が与えられなかったものを粉川が与えられたのなら。。
。
それは。。自分の至らなさを認めざる得ないが。。
それでも
どうにもならない苛々と自分のもどかしさ。。。それ以上にモヤモ

ヤした感情で胸が熱い

「『こんごう』？」

ぼんやりしていた『こんごう』の背中に声が掛かった
振り向くそこには，メガネをかけた『しまかぜ』

「どおしたの？そろそろパーティーの時間じゃなかった？」

図書室から夕暮れを眺めていた『しまかぜ』はグラウンドの向こう
にある係留から向こうを行ったり来たりしていた『こんごう』の姿
をずいぶん前から気がついていた

「別に。。。なんでも」
「何でもないなら。。早くパーティーに行こう」

『しまかぜ』は『こんごう』が相変わらず悩みの中で定まらない気
持ちの中にいる事を察していた
「パーティーは良いきっかけよ，『ちょうかい』と話したらい
いじゃないの」

「もういい」
返されたそっけない返事と
自分の方には向かない寂しげな『こんごう』の背中に
「どおしたの？まだ悩んでるの？」
『しまかぜ』が思いの外，繊細な心の妹に近寄った

「悩んでない。。。。」
自分の背中近くに座った姉に。。。強がった声で答える
「悩んでないなら。。。行こうよ」

「行かない」
早い返事

「なんで?。。。行こうよ，せっかく『いかづち』が色々と支度してくれてるのに」
背中を押す『しまかぜ』に

「とにかく。。。行きたくない」
『しまかぜ』が近づいた事で体をさらに硬く締め
頑な姿勢を見せる『こんごう』
後ろから見ているとすこし大人げなくも見える姿に『しまかぜ』は聞いた

「『ちょうかい』に合いたくない?。。。それとも粉川さんに合いたくないの?」

解っている大人はちょっと意地悪な質問をしてみた
『こんごう』の妹に対する蟠りがココまで深い理由が。。。ただ一つの理由と『しまかぜ』は思っていなかった
それは「恋愛」を知る女のちょっとしたイタズラ心から試みだった

「なにそれ!!どういう意味!!」

しゃがみ込んでいた『こんごう』は立ち上がると意味深な笑みで自分を見ている『しまかぜ』に向き直った
まるで釣りにひっかかるような『こんごう』の態度に笑いを堪えた笑みは
余計に意地悪く見える

「言ったままよ。。。ホントは粉川さんと仲がよくなった『ちょう

かい』に合いたくないんでしょ」
「違う！！」

『こんごう』は否定と示しながらも自分の胸に刺さる「何か」に初めて気がついて驚き。。。顔を真っ赤にした
違う
違う。。。何度かの胸の動悸を抑える
なのに
プレイバックされる絵。。。。。どんな時も笑顔で話しかける「人」は
アタマを激しく振る
あれは。。違う。。。アレは。。。ウザイんだと
目の前自分に微笑みを向けている『しまかぜ』に怒鳴りはするが

「絶対に違う！！！」

仁王立ちのまま
やはり顔を合わせ続けられない。。。何かを読まれてしまった感じが。。。
顔を大きくそらせながらも，睨む態度で強く言う
「そんな事は断じてない！！」
「そんな事って？」

『しまかぜ』は本当だったら大声を上げて笑ってしまいそうな自分を抑えた
あまりに可愛い妹の反応に。。。つい意地悪な気持ちも楽しく動く

「別に。。。。汚染生物なんかに合いたくないから」
「『ちょうかい』にも合いたくないって事？」
「そっ。。。それも違う。。。」

「だったら行けるよね」
人差し指を立てて合図する，メガネ越し少し意地悪く笑う『しまかぜ』に逆らうように怒鳴る
「行かない！！」
「どおして？」
首を傾げ座ったまま下から仰ぎ見る
ぎこちない動作
顔を対面に向けないように海に向けたまま二の句を告げられない妹

「行こうよ。。。みんな楽しみにしてるんだから」

少しイタズラが過ぎてしまったか？
これ以上『こんごう』が片意地を張ってしまったら本当にパーティーに参加しなくなってしまうかもしれないとて　引こうとしたがすでに時遅しだったかもしれない
固まったままの『こんごう』の顔から悩みの黒さは薄れ，赤い怒りが溢れ始めていたが，落陽の港の景色を眺めた『しまかぜ』にはわからなかった

「どうぞ！！いっらっしゃいませ」

１８：４０
待ち合わせの場所
少し冷たい秋の風の中
『ちょうかい』は粉川を迎え入れるために出てきていた

きちんと着替えた姿
冬服のダブルスーツに『こんごう』に比べると長めのプリーツスカート
少女らしい可愛い出で立ち

一方，呼び出された粉川は黒のスーツに身を固めしっかりネクタイという出で立ちでパーティーに揃えましたといった感じ
「さっ！」

無機質な煉瓦倉庫の壁の前不思議そうに入り口を探す粉川に『ちょうかい』は手を伸ばし腕を取った
いつも艦魂達が消える青い泡沫の光が一瞬走り
粉川は目を細めたが次に目を開いた前にあったのは
別の世界だった

只の煉瓦壁だったそこは産業革命以降イギリスでよく作られた赤煉瓦の官邸に姿を変えていた
どこか懐かしい色合いで。。。どこかで見たことのある景色に粉川は呆然と周りを見回した

「スゴイね。。。。」
「そうですか。。。私はもう最初からココが港なので」

手で煉瓦の壁を触る
本物の赤の粗目を感じる，正面に鎮座する門
大きな正門に
粉川はこれが何を模しているかに気がついた

これは「江田島基地」にある海上自衛隊第1術科学校のような作り
これが何故，江田島なのか?というのは粉川にはすぐに理解が出来た

『くらま』司令はココを「鎮守府」と言っていた
艦魂達にとって。。。。規範となるものは今も変わることなく「帝国海軍」であるという事。。。それを示す寄宿舎の存在

海軍に入る事が国家にとってもっとも優秀な男とされた時代のなごりがココには残っていた

鋼鉄製の黒い扉の向こう吹き抜けの広間を持つ大きな部屋，左右に階段

「ココで食事会とかもするんですよ」
プレゼントの小箱にピンクのラッピングをした袋
嬉しそうに胸の前に持って歩く『ちょうかい』の後ろを挙動不審なほどに色々と眺めながら粉川は進んだ
それにしてもガランとしていて誰もいない通路

「誰もいないの？」
「この時間になるとみんな自室でご飯だったりするし，消灯が２２：００ですからね」
「早いね。。。」
「今日は特別に２３：００まで。。。『しまかぜ』一佐がお願いして下さったようで」
ご飯。。。。
粉川は艦魂の実態がまだわかっていないかのような顔

「おかしいですか？艦魂の私達がご飯って」
「いやぁ。。別に「酒好き」なのもいますしね」
『ちょうかい』は歳に見合った笑みのままで
「良く知ってますね！『くらま』司令は日本の艦魂では一番の酒豪って事」

粉川はアタマを掻きながら
「あっ。。。。いや。。そうなんだ」

少女は早足で階段を登って行く
小気味の言いステップが良く喜びを表している事は粉川にとっても
好ましい事だった

高い天井
江田島にある古いシャンデリアとよく似た照明が，今時の蛍光灯と
は違うほのかな光をホールに降らす
そこから先に続く通路はホールとは異なり急にかなり暗い
裸電球をそのまま通した道にかわり「坑道」を歩くようにイメージ
になる
粉川は手を壁につけて足もとを確かめながら歩く
それに合わせたのか？
前を歩く『ちょうかい』の歩測が短くなり立ち止まる

「どうしたの？」

止まった『ちょうかい』の位置に同じく止まった粉川は胸に抱えた
袋を持って目をつむってしまった彼女に聞いた

「よろこんで。。。。くれるかな。。。」

可愛い悩み
大切な妹
尊敬する姉に渡すプレゼント。。。

「喜んでくれるよ。。絶対に」

粉川は華麗に駆り揃えられたショートヘアの髪を上から撫でた

「こんばん」

「だぁぁぁあああ!!!鍋!!鍋!!!」

軽いノックで姉の共同部屋のドアを開けた『ちょうかい』と粉川の耳に入ったのは絶叫する『いかづち』の声だった

どうやら一人でブース内の切り盛りをしていた最中に寝ぼけた『はるさめ』が，はこべと言われた皿とは別にスープの入った寸胴をそのまま抱えてぶちまけそうになっていたらしい

片手で寸胴を抑える『むらさめ』と後ろからよろめく『はるさめ』を止める『いかづち』の姿が

開扉一発目の見せ物になるとわ。。。瞬間ドアをあけた二人も固まった

「バーロー!!寝ぼけんじゃねぇ!!」

力仕事はお手の物の『むらさめ』は，寝ぼけ眼のまま事態が飲み込めてない『はるさめ』から寸胴を奪うとハッチの方に戻して，妹を小突いた

「たくよぉ。。。静かにやれっていわれてんのに!!おめーが惨状引き起こしてどーすんじゃ!!」

まったくだ

そんな熱モノのスープをばらまかれたんじゃ火傷じゃすまない

『いかづち』は仕込みに4時間は掛かったスープを危うく客の前で

ぶちまけられる所だったせいか，へたり込んでいた

「あはは。。。あっ!!粉川はん!!」

「おっ『ちょうかい』！」

思わぬハプニングの後。。。やっと気がついた二人の姿に

「のわぁあああああ!!!」

さらなる絶叫の『いかづち』は『むらさめ』を指刺してて言った

「『むらさめ』!!『こんごう』は?!!」

「あっ。。。。。」

固まる二人

「あの。。。。どうしましたか?」

粉川の前を進みダイニングに入った『ちょうかい』は周りを見回しながら聞いた

「鳥はん（ちょうかいのあだ名）。。。あんな。。。」

鼻先のメガネが落っこちそうなほど驚いている『いかづち』の後ろまでを見回した『ちょうかい』は聞いた

「お姉ちゃん。。。は?」

見えない姉の姿に急に眉に元気がなくなる

「ちょっと出かけてんだよ!!なっ!!」

「せや。。。今から呼びにいくんよ。。。なっ『むらさめ』」

キッチンを騒がせたハプニングのせいもあったが

姉妹揃って『こんごう』を捜しに行く事を忘却の思考から思い出し

顔を見合わせる

「『むらさめ』。。。あんた３０分になったら捜しに行くって。。」
「バーロー。。。『はるさめ』に食器運べなんてオメーが言うからあんな事になって。。忘れちまったよ，それに。。探すってったって。。何処にいるかわかんねーぞ」
小声とはいえ十分聞こえる
お互いど忘れしていた事を責任追及しても始まらない
だが目の前に『ちょうかい』が来てしまった今は気まずい事このうえない状態だ
そんな二人の間を割り姉の部屋のドアにノックする

「お。。。お姉ちゃん。。。お姉ちゃん。。。」

目の前にいない姉の姿に不安の鼓動は大きくなる
『ちょうかい』持ったプレゼントを胸に押し付ける
声は。。。。。涙声に

「お姉ちゃん。。。。。」

額をドアにつける
涙がこぼれる

「ちょっ！！ちょっと待ってりゃ返って来るって！！」
自分の妹にこんなタイプを持っていない『むらさめ』は焦って言った
「飯さ！！先に食って待ってりゃ。。。なっ」
隣に並んだ肩を押されて『いかづち』も
「せやで！！パーティする事は伝えてあるからな！！先に。。。」

二人の必死な言い訳の中『ちょうかい』は『こんごう』の部屋のド

アの前に崩れ蹲ってしまった。。。。
「お姉ちゃん。。。うっうっ。。。」

「どうなってんの。。。」

崩れた『ちょうかい』の後ろ，慌ただしい展開を見せた部屋の中に
向かってやっと第一声を発した粉川は足もとで泣く『ちょうかい』
の肩を撫でながら
部屋の中で泡食っている二人に聞いた

顔を合わせて言い訳を考える二人に粉川は，はっきりとした声で聞
いた
事態の収拾を急ぐなら
どうなっているのかを即座に理解する必要があるからだ

「『こんごう』ちゃんは何処にいるの！」

今日のこの日を楽しみにしてきた『ちょうかい』を思えば目の前で
涙にくれる姿など見ていられない
その思いが気迫として宿る本気の粉川の目には凄みがあった

「わからへんのや」
ホントの事
すまなそうな顔で答える『いかづち』の隣をフワリとピンクな影が
横切った

「人だぁ〜〜〜〜」
緊迫の間に，抜けた声
粉川の顔に白い手が触れる
それもコネコネと体の部位を遠慮なく

突然の緊迫から緩みきった艦魂。。。。目の前に現れたナイスバディーにも驚きながら後ずさりする粉川さえ構う事なく

「なあ。。。これ～～～粉川はんって～～～いうのぉ～～～」

「『はる』ねぇ！！」

目の前で泣いている『ちょうかい』も置いてきぼり，てんでお構いなしの主は焦る姉妹を尻目に続ける

「パーティーやろ～～～今日は人の歓迎会なんだから～～～」

実際『はるさめ』は人，事「粉川」の歓迎会としか聞いていなかったのだからそこを責める事はできないのだが。。。

この状況ではあまりに無神経過ぎる

「いやぁ。。。。ヤダ。。。。私。。明日になったら長崎に行かなきゃいけないのに。。。今日お姉ちゃんに会えなかったら。。。もう」

手からこぼれるプレゼント

顔を覆って泣く『ちょうかい』の言葉に

「バカ！！！そういう事は早く言え！！今から引っ張ってきてやる！！！」

立ち上がったのは『むらさめ』だった

長崎に行く。。

聞くだけでわかる

改装のためにドックに入れば，あの限られたスペースの庭の中を独りで過ごす日々になる

『むらさめ』には。。。。自分が嗾けた責任というものもあった
拳をにぎり
「心配すんな!!すぐ見つけてきてやる!!」

「僕も捜しに行くよ!!」

『ちょうかい』の事情と明日までのリミットを知っている粉川も立ち上がった
「せやけど。。。。何処に行ったかわからへんのに。。何処探すよ？」
「基地の中にいるんだ!!そんなに時間かからねーよ!!」

「『こんごう』一佐なら南の突堤にいましたよ」

けたたましい部屋の喧噪に
自分の枕になっていた『はるさめ』の巨乳をなくして起きた『はまな』が眠そうな目で
つかみ合いに近くなっている集団を見つめて答えた
一瞬で言葉をなくした空間で寝ぼけた目をこすりながら

「どうしたんですか？」

その返事は返される事なく集団は駆けだした
後に残ったのはとぼけた眼を晒した二人。。。。『はるさめ』と『はまな』だけだった

第二十六話　落陽の港（後書き）

カセイウラバナダイアル～Ｖｏ２６
紀伊の皆様とお茶会激動編
もう、なんかあんまり似てなくなってしまったキャラもいると思いますが。優しい目で見てやって下さい！！頑張りました！！！

お茶会転じて非常事態

護衛艦隊の面々は期せずして「帝国海軍」の姉達と対面する事になる

くらま　「只今より，大和型艦艇２姉妹の救出作戦を開始する！！」
大きく手を挙げ司令として指示を出す『くらま』の隣
お茶会の存在を隠されていた『しらね』がいそいそと大和姉妹に近寄って
元気よく敬礼する
「初めまして！海上自衛隊第一護衛隊群第一護衛隊旗艦『しらね』にございます！！」
場違いな明るい声に顔を歪める桔梗様
「は、初めまして」（非常事態に何しとんじゃー的挨拶（藁））」
どんな時にも落ち着いている撫子様はにっこりと微笑む
「まあ旗艦の方ですか。私，戦艦大和の艦魂『撫子』と申します。。。しらね様初めまして」
あくまでマイペースな撫子様とは『しらね』は話しが合いそうとつづけようとするが

「姉上。。。非常事態です！！」
背中に迫る巨大な妹（注．くらまさんは身長１８２センチ（藁）し

らねさん身長１４８センチ）
仮にも司令官なのにどこか場違いな『しらね』は妹に向き直ると怒鳴った
「挨拶は必要でしょ！！だいたい。。わたくしがいないところでお茶会なんて。。。酷いじゃないの！！」
切迫した状況の中で撫子様に握手を求める『しらね』快く応じて下さる撫子様
撫子様「司令の任についてお話ししましょう」
しらね「感激ですぅ～～～」
くらま「姉上。。。。抑えて！！」
桔梗様「だぁぁぁぁ！！挨拶はいいから！！零と小雪はどーなってんだよ！！」

混乱する指揮系統の中で状況説明が行われた

「現在「仮名」違法時空航路内に妹様２人と『こんごう』が落ちてますゼ」
『きりさめ』の開いた旧式のパソコンの前，怪訝な表情の桔梗様
「なんで映像でねーんだよ」
画面のアイコンを指差しながら睨む
「インテルしか入ってないんダセ！！」
それが良いことなのか？悪い事なのか何故か自慢げな回答の『きりさめ』にうんざりしたように桔梗様は
「ふるくせえパソコンだなぁ～～うちらのヤツを持ってきたらよかったのに」
紀伊の世界は未来のテクノロジーが一杯だ！！
ｔｅｃｈｎｏｌｏｇｙヲタクの『ゆうだち』のハートが燃える（藁）
「どんなコアがはいてるの？未来のパソコンって？」
ショートヘアの『ゆうだち』は瓶底メガネの目を大きくしながら桔梗様ににじり寄る

たじたじと退く桔梗様をよそに会議は続行!!
「。。。。。。やっぱ『あめ』姉妹って変なのばっかや。。。」

きりさめ　「とりあえず本線航路も安全とは言えないから『鈴様「長門真名」』を待避させたほうがいいぜ!!」
くらま　「聞いたか!!『しまかぜ』鈴様を待避させよ!!」

その頃
異変が及び始めた時空航路本線の中

しまかぜ　「聞いたとおりです。。。確かにさっきほど本線が安定してまいませんから，鈴様，待避して下さい」
入ってきたときより歪み始めた時空障壁を指さしながら落ち着いた表情で出口を見る目に鈴様は抵抗を覚えた
鈴様　「『しまかぜ』殿はどうするのだ?」
二人でいると安定が得られない?だったら一人がココに残っても安定する可能性があるとも言えない，そういう事ぐらい帝国海軍元旗艦の鈴様の回転の速い頭で答えをはじき出していた
だが当然の事なのだが「客人」優先の指示を守ろうとする『しまかぜ』は，やんわりと続ける
「私はココに残ります。。。違法航路のｃｌｏｔｈｃｈａｒｇｅ.ｓｐｏｔ部分から妹様達が出られるかもしれませんから。。。その時のために」

「だったら私も残る!!」
誇り高き姉である鈴様は自分が，妹達の危機を置いて退くことなど考えられなかった
鈴様にとっては時間軸こそ違うが『しまかぜ』だって遠い妹にあたるわけだ

「二人とも残るのにメリットはありません」
「『しまかぜ』！早く鈴様を！！非難させるんだ！！」
自分を逃がそうとする『しまかぜ』の向こう『くらま』の指示が矢継ぎ早に飛ぶ
「正気か！！貴様！自分の。。。。。」

あやうく「恋人」と叫びそうになった口を『しまかぜ』が止めた
目で「ダメですよ」と柔らかく微笑む
「任務が第一です」
冷徹を貫く『くらま』の声の前，『しまかぜ』は笑う
「鈴様。。。。大丈夫ですから」
笑う者。。。。戦いにおいてもっとも必要のない感情で自分を諫めようとする女に対して
鈴様は睨む目のまま聞いた
「大丈夫か。。。。そうか。。。大丈夫なんだな」
「ですからどうぞ」
周りの景色は色を悪くし始めている
明るかった本線航路は灰色に変わり始めている
「ココに残る！」
『しまかぜ』の手から指し示された出口方向
目もくれぬ態度で鈴様は続けた
「一人で残ったのでは広い航路の中でｃｌｏｔｈｃｈａｒｇｅのスポットを探すのだって難しいぞ！二人で残る方が零と小雪を探し出すにも有利なハズだ。。。大丈夫なんだろ？」
日本刀を持った軍服の貴人はその場に座った
意地でも動かないという意思表示
だが目には怒りはなく。。。。『しまかぜ』が見せたような柔らかな微笑みがある
「鈴様。。。。」
『しまかぜ』のレーダー越し。。。『くらま』の声が聞こえる

「泣き虫な妹達を連れて歩くのは慣れている」

「。。。。わかりました『しまかぜ』くれぐれも鈴様の身に危害が及ばぬように頼むぞ！」

救出作戦の各段階が迫っている以上長い交信は出来ない

一言の命令を後に交信は一時切れた

静まる航路の中，相対する二人。。。座ったまま鈴様は聞いた

「薄情なヤツとは思わん。。。だが寂しくはないか？」

秘めた愛の二人。。。『しまかぜ』は失礼とわかっていたが背中を向けて答えた

「いいえ。。。寂しくなんかありませんよ」

鈴様に顔を見せなかったことが答えだった

その頃『こんごう』は空前危機に達していた

小型の時空航路の伸縮は大きくなっているのか？小さくなっているのかさえわからない底抜けの状態で

視界は限りなく悪い上にレーダーの反応もいまいちの状態だが。。。。

もっとも深刻な問題は

目の前で大泣きになってしまった大和型４姉妹の妹様達。。。。

肩を寄せ合って泣かれる前

手をアワアワさせている『こんごう』

「泣かないで。。。。」

職務には忠実に，挨拶も敬礼でしたのに。。。何故に怖いと言われるのかが理解出来ない石頭（藁）

「こわいよぉ～～～」
泣きじゃくる妹，零様を抱きしめながら警戒の目に涙をゆらしたまま小雪様
「怖い。。。」
なんとか場を和まそうとすれども。。。。『いかづち』のように饒舌になれるわけもなく
ただひたすら途方にくれていた所に電信が入った

「『こんごう』聞こえるか！」

落下から３０分，早い行動を起こしていた『くらま』の声は至って冷静だ
「空間は非常に不安定だが幸いにして出口は見えているはずだ。。。そこに向かえ」
交信しながらも『くらま』は排水量の多い艦艇の姉妹達とスキマの入り口である『こんごう』の部屋に向かっている
横を同伴する桔梗様は聞く
「アンカー入れて引っ張り上げるのか？」
「そういう事になります」
桔梗様には何もかもがもたついた対応にも思えた。。。。
未来からの技術の多くを実戦投入している，しかも強き帝国海軍の艦魂だ
現代の艦魂達の立ち回りは，あまりにもスローに見えて苛立ちは募る一方だった

ノイズ混じり『こんごう』の返信
「了解。。。ですがスキマまで上がれません」
「わかっている！見える場所までこい！」
何時途切れても不思議ではないほどの流砂的ノイズの中『くらま』

は的確に命令だけしていく
部屋の一面にあるスキマに到達と同時に『きりさめ』と『ゆうだち』が調査を開始した

「いた。。。。」
スキマを覗き込んだ桔梗様の前
遙か向こうに妹たちと『こんごう』が見える
「零!!!小雪!!!」
声は聞こえないようだ
見えるのに声も視線も届かないのは，かなりしんどいらしく桔梗様は『きりさめ』の怪しいパソコンとにらめっこ
旧式のパソコンではあるがマッドな使用になっている画面は目間ぐるしく動く

「変振動空間に近い構造だと思われるゼ！（注．空想科学です）」
スキマの中身に投錨するアンカーの強度計算しながらスキマの正体を考えていた『きりさめ』は立ち上がると親指を『ゆうだち』に向けて立てた
「ステキー!!ユニバース!!テキサース!!」
（注，ユニバースがわかったら「冨野ガンダムマニア」テキサースがわかったら「ニコ厨」（爆死））
瓶底メガネが輝く!!
何かわからんが大興奮の二人は。。。。踊る（爆死）

「バロー!!このマッドサイエンティストども!!はよ!妹達を救出しろ!!」
当然即座にボコボコにされる

「それで策定された救出案は?」
顔を腫らした二人に『くらま』は聞いた

「重力場が不安定で各所に歪みがあるから引き上げる方法がいいんだダゼ」
「じゃあそうしろよ」
即答の桔梗様
ココについて１０分。。。スキマの向こうに見える妹達の様子は正確には見えないが『こんごう』との交信の中に泣き声のようなものが聞こえた事が苛々に拍車をかけている

「無理ですよ。。散らばる重力場の影響だけなら良いのですが？何故か本来持っている艦艇の重量が加算されているようで。。。上から引くだけじゃ上がりませんよ（注．空想科学です）」
ヒビの入ったメガネを押しながらグラフィックに変換した図面を指差す『ゆうだち』
「アンカー落としてそれを上で引きながら下も目標に自力で上がる方法しかないゼ」
桔梗「なんで？オマエ，私のパワーをなめてんのか！！」
拳に力を込める桔梗様の前
テンボーで図面を刺して説明し始める『ゆうだち』
「無位置空間の合力がバラバラで（注．空想科学です）うんたらかんたら。。。説明ダラダラ～～」
げんこつ落ちる
「わかるように説明せぇ！」

つまり重力の壺に落ちていて，かかる重量が何故か？場所によって（注．空想科学です）倍になったり半分になったりと変化するという筒になっているという事
桔梗「。。。。プラズマ拡散型電磁棒みたい。。。」
指をならす『ゆうだち』「おしい！でもあれは力を加えれば一定方向にもむくから」
「もおいい！！私が行く！！」

えも知れぬ説明ばかりで進まない物事に痺れをきらした桔梗様はスキマに飛び込もうとしたが
その手を『きりさめ』が止めた
「ダメダゼ！」
「桔梗様と撫子様が上で引かないと上がらないと思われますよ」
「なんでだ！！」

「わてらでは出力がたらへんのですわ」
手を挙げた桔梗様を止めたのは『いかづち』だった

「わてら現代艦の出力では1人アタマ艦体排水量6万トン以上を持つ妹様2人を引き上げられへんって事やろ？」

現代艦魂達の最大排水量は最高でも最新鋭護衛艦『ひゅうが』の１３５００トン
最高出力１００，０００ＰＳ
大戦時の大和だって排水量6万5千トンにして出力１５３，５５３ＰＳなのに
足し割りをすれば勝る部分は多いが「排水量」を締める重さはカバーできない
そして現状あの小さな体に「何故か」その比重がそのまま移ってしまっている
ジェットエンジンや分厚い甲板を装備する大和型2姉妹を持ち上げる事は基本的に不可能だった
それよりも重力場がアチコチに働いているのだから
妹様達当人に点火で発進してもらいそれを振り切り進み，その上で桔梗様と撫子様が引くが最善の策で。。。その補助ぐらいしかできないのが護衛艦達だ
現代艦魂の能力ではとうに限界を突破している状態

「なさけねーな!!オマエらホントに大日本帝国海軍の末裔なのか!!」

桔梗様の激怒に誰も顔を上げられない
策を講じても手も足も出ない
力がないという事実は認めざる得ないから
「わかった!!それでいい!!私が引き上げてやる!!」
そういうとアンカーを撃てと指示した
手際よくアンカーを投げる『きりさめ』だったが。。。。

「せやけど無位置空間で台座もないのにどうやってアンカー固定すんねん?」
『いかづち』の当たり前の疑問に作戦を立てていた『きりさめ』の顔は曇ったが
『くらま』はそのまま指示を出した

「『こんごう』にアンカーを固定させる。。。発射も『こんごう』を足場にして飛べばいい」
「司令。。。じゃお姉ちゃんは。。いいえ『こんごう』はどうなるのですか?」
駆けつけていた『ちょうかい』の顔が青くなった
ジェット推進を使った後。。。。この不安定な空間が無事でいられる保証はない
「妹様達を救出したら「次に」助ける」
『くらま』は『ちょうかい』を決して見なかった
ぶれることなく客人を救う事に終始する視線が，他の護衛艦艦魂達に二の句を告げさせなかった

「アホ!!見捨てるのか?そんな事が出来るか!!『こんごう』

だって私らの遠い妹なんやぞ！！」

『くらま』の襟首を掴んだのは桔梗様だった
「他に。。。方法はないのかよ！！」

沈痛な面持ちの艦魂達
静まりかえった部屋に優しい声が響いた

「あるわよ」
それは大和艦魂，撫子様の声だった

次回　感動の最終回！！！
どうなる護衛艦隊！！！妹様達は！！！鈴様は！！！桔梗様は！！！
そして鍵を握る，撫子様は！！！

ただ頑張ります。。。色々すいません（涙）

第二十七話　愛のバカ（前書き）

師走に向かってレッツゴー～～～
今回はお茶会はお休み
次回掲載します～～～
時間がある時しか駆けない大人の都合で爆心中！！！

第二十七話　愛のバカ

「お姉ちゃん。。。。。」

先頭を走っていた集団から。。。。『ちょうかい』の足取りは重く
引き離され，今はゆっくりと歩いていた
暗がりの街灯の下を小さな力のない足取りで歩く
ショートの黒髪を揺らす風にさえ押し戻されてしまいそうなほどに
肩を落とした姿は痛々しい

「お姉ちゃん。。。私の事キライだったのかな。。。」

思わぬ言葉に心が凍ったのは，残された『ちょうかい』に連れ添っ
ていた『いかづち』だった
そもそも。。。。。『ゆき』姉妹のくだらない「噂」から。。。『
むらさめ』が『こんごう』を嗾けてしまった
単純な。。。いや。。全く持っての冗談だったハズが
この姉妹。。。イージス艦の姉妹達には通じない程に意思の疎通が
遠かったのか?とも思える結果になってしまっていた
「どうして。。会ってくれないの?」
鼻声で誰に問いかけるでなく零す『ちょうかい』

『いかづち』は，このまま考えを纏めて話しをする時間など余裕わ
探す事が出来なくなっていた
沈黙が酷な距離にいる2人

「そんな事あらへんで。。。『こんごう』は，粉川はんと。。。」

ホントのところを話そうと近寄った『いかづち』だったが。。。そ

の先に触れる事が。。。
自分たちの撒いた種を刈り取るという結末につながってしまう。。。
冗談で始まった事なのに。。。
「冗談でこんな事，言って。。。。」なんて今更言えないこの空間
口が重くなり，とまる顔に

声が聞こえなくなる事に不安を増すのか『ちょうかい』の目から涙
は落ちるばかり

事。。。ココに至って「噂」を助長して事態を悪化させたなんて口
が裂けても言えないのも事実だった
しかも。。。
『はるさめ』に『むらさめ』は余分な事まで言ってしまっている

『ちょうかい』と粉川が付き合う。。。。

『いかづち』はアタマが痛くなった
結果的に『ゆき』姉妹よりもタチの悪い姉妹になってしまった『あ
め』姉妹。。。

もし。。。ココでイージス艦姉妹の絆を自分たちの手で断ち切って
しまうなんて事になったら。。。
だけどこのままでは。。。ホントに国防の要であるイージス艦の姉
妹の仲を断絶に追い込んでしまった張本人にならざる得ない
『いかづち』は癖毛のアタマを掻きむしると言った

「あんな！！『こんごう』は粉川はんの事，ちょっと気になってん
ねん」

最悪の事態を回避したかった『いかづち』は，自分の思う事とは別の言い訳を『ゆき』姉妹のあるところ『はるゆき』バリに素敵な妄想の言い訳を口走ってしまった

「何それ？」

涙に揺れる青い瞳は，突然降って湧いたような言葉にキョトンとした

「初めて会うた「人」やろ。。。それにずっと『こんごう』のとこに一緒にいたやろ。。。でな。」

立ち止まった『ちょうかい』は訝しげな顔に変わっていたが
それ以上に色々な事を明晰に整理し始めていた
何故かそんなところは，しっかりしている末っ子『ちょうかい』

言われてみれば

今回。。。帰港してから見る姉の姿は何かぎこちなかったし，不可解な部分もあった
今まで
激走が終わった後，お風呂に誘っても苦笑いして自分の部屋（イージス艦内部の部屋）にこもってしまっていた
通常佐世保に寄港する艦魂は『くらま』司令の命令の下，寄宿舎に寝泊まりが義務付けられているが。。。『こんごう』は割と規則を破って自室（イージス艦内）に戻ってしまう場合が多かった
寄宿舎にいても誰とも話しもせず。。。共同部屋の中にある，個人の部屋にこもったままの姉が

珍しく『いかづち』達と話しをし

この3日寄宿舎に出入りしている
見ていないようでしっかり姉の背中を追っていた『ちょうかい』は
色んな変化に気がついていた
基地にいても孤独でいた姉は。。。回航から戻った今は何かが違っ
ていたと。。。思えた
涙の頬に手を当て考えをまとめた『ちょうかい』は目の前。。。気
まずい展開に事が転び始めたと感じ取り。。。
目を合わさぬように空に高く視線を泳がせている『いかづち』に聞
いた

「お姉ちゃん。。。。ひょっとして粉川さんの事，好きなの？」

極端な答え。。。。
涙に濡れた瞳は純真な顔で『いかづち』を見つめて返事を待つ

「いい。。イヤそれは。。かわらへんけど。。。」
「じゃ。。どうしてなの？」

想像以上の極論回答に。。。。ついて。。。とんでもない事を口走っ
てしまった
今更のように
どこにも逃げられない言い訳地獄にはまってしまった『いかづち』
はメガネの下で目を回した

「ちょっと。。気になってるだけ。。かなぁ。。って思ったの」
「だから。。。。好きになりそうなの？」

色恋。。。

何故そういうものに対する反応が良いのだろう
しかし
話題の少ない女所帯ではやはりそういう方向に転んでしまってもしかたないのか？
自分が言いたかった事の半分が。。。この答えを引き出し
半分は明らかに違っているのだが。。。。

口元を引きつらせ，二の句を告げられない『いかづち』に『ちょうかい』は，にじり寄って言った

「私！！お姉ちゃんが粉川さんの事。。。好きなら応援するよ！！」

トドメの一撃
ひっくり返るような
『いかづち』の想像を覆した発言
完全に否定したい。。。姉の姿を追い続け微妙な変化にまで気がついていたなら。。
何故。。。佐世保で粉川と『こんごう』が一緒にいたところなど一度もない事に気がつけないのか？と聞きたくなるほどに

涙を振り切った『ちょうかい』は引きつった表情のまま固まってしまった『いかづち』の襟を掴まえるとさっきまで失われていた力を取り戻して強く引き寄せた

「粉川さんの事。。想いだしたから，お姉ちゃん変わったんだね！！そうなんだね！！」

『ちょうかい』のアタマはフルスピードで回っている
五段活用をぶっちぎり一直線の結論
今まで不器用な自分という姿をさらし，仲間との間に壁を持ってい

た姉が。。。。変わった
その実感を『ちょうかい』自身が感じていたことで良い方に思いが
加速してしまった

思い出さなくてもわかる実感
たった2日。。。今日を含めて3日，初めて会った「人」は今まで
空気のようにすれ違い続けた「人」のイメージを覆し
自分に向けた真剣な眼差しでこのサプライズを本気で考えてくれて。
。。協力してくれた
そんな「人」なら姉の。。。。
誕生以来の傷ついた心を温める事もきっとできたと信じられた
輝く目は続けた

「私。。嬉しいよ。。。」

喜びに彩りを変えた涙は小さく輝いた。。。。が

目の前の『いかづち』は喜びを分かち合うという状況からは，ほど
遠く
何がどうして。。。。こうなってしまったのかと目を回して倒れそ
うになっていた

「良かった。。。そんな事，照れなくたって良いのに。。。」

1人何かに納得してしまった『ちょうかい』の前。。。。
『いかづち』はアタマの中が真っ白になった

「『ちょうかい』ちゃん!!」

白い灰と化しそうになった『いかづち』と
姉の幸せという喜びを見つけた『ちょうかい』の前に粉川が声をかけた
少しネクタイをほどき，相手を不安にさせない事を心がけているのか？優しい声は今の『ちょうかい』に心地よく聞こえた

「『しまかぜ』さんが見つけてくれてたよ。。。今こっちに向かってる」
「私らが突然出てひっぱたら逃げそうだから，ココで待っててろって「電信」で連絡してくれたぜ!!」

粉川の後ろを走り戻った『むらさめ』は汗を拭いながら言うと
笑顔を見せる『ちょうかい』とは間逆の青い顔になった妹に寄った
「どうした？」
「いやぁ。。。。」
姉の肩にアタマをぶつけて走るよりも心が全力疾走で疲れ果てた『いかづち』は
「まぁ。。。結果が良ければ。。ええやな。。。」

良くわからない言葉のままその場にヘタレた

「粉川さん!!!お姉ちゃんの事。。。。」
元気いっぱいに戻った『ちょうかい』は自分の喜びと姉の変化を確信して暴走し始めていた

「お姉ちゃんのこと。。。どう思ってますか？」

涙の目が可愛く見えるほどに笑顔を浮かべた『ちょうかい』の唐突な質問に，粉川は顔にクエスチョンマークを浮かべて

「何。。。どういう事かな?」

悲しみにくれた彼女の力になろうと
獅子奮迅の働きを見せていた粉川には突然の質問の意味がわからなかった

「『いかづち』さんに聞いたんですけど，粉川さんに出会ってお姉ちゃん。。。変わったって。。。だからこれからももっと仲良くしてくれたら。。いいなぁと思うの」
一応，姉の心に秘めた人と認識し。。。姉を好きなのか?を聞くのは控えた物言いだったが。。。
いよいよ
わからない問答に困った顔になった粉川
その向こう自分の肩にヘタレた妹の襟首を締め上げた『むらさめ』は

「どうなってんだ!!!」
「いや。。。その。。」
すでに涙目は『いかづち』に移転している
最早これ以上の混線を避けたかった『いかづち』は素直にココに至った事の次第を『むらさめ』に話した

「バカヤロウ。。。。」

押し殺した声で妹を締め上げる
言うに事欠いた言い訳の結果に『むらさめ』は牙を剥いたが
展開の早さに混乱しているのは何も粉川だけでなく『いかづち』も一緒だった

「だってさ。。いきなりそっち飛ぶか?おかしいやろ?」
「アホ。。『こんごう』見りゃわかるだろ!!あの姉にして,この妹なんだぞ。。。これからご対面なのにどーすんだテメー!!」
あまりの急展開の事態3人も。。。リミットギリギリの今。。。打つ手なしの状態になっていた

「せやけど。。元々『こんごう』に,いらんこと言って嗾けたの『むらさめ』やん。。。」

唇を噛み,拳を固める『むらさめ』に妹を責める術がない
嗾けた事実を認めて『こんごう』を捜しに走ったのに。。。今度は別の問題が発生している
睨む目のまま

「制裁は。。。覚悟しろよ」

既にどん詰まり『あめ』姉妹
そんな非情の事態をよそに輝く目で姉の登場を待つ『ちょうかい』

「あの。。。『こんごう』ちゃんとは。。出来るだけ仲良くしていくように。。。」
「もっと仲良くなってください!!」

回航から向こう。。『こんごう』との間にあった殴打の数で。。仲良くしてくれと言われても素直に「はい」とは言えない粉川の前

テンションがバラ色に上がった『ちょうかいは』急に抱きついた
それは嬉しさのなせる業であり,他になんの意味合いもなかったの

だが。。。。
自分に抱きついた少女に
良くはわからない状況ではきあるが元気を取り戻したと判断した粉川の手が肩を支えた事が。。。

コレが粉川の災難に続く事になるとは思いもしていなかった

「ほら。。。元気よく!!」

頑なにパーティーへの参加を拒んでいた『こんごう』を説き伏せた『しまかぜ』は速度遅く歩く背中をポンと叩いた
『こんごう』も粉川はともかく。。。『ちょうかい』との間に溝を作りたくはなかったようで渋々パーティーへの出席を承諾。。。歩いていた
ちなみに
パーティーに『ちょうかい』が参加する事をバラしたのは『しまかぜ』だった

知らされないハズの事態ではいざ，ご対面になった時
気まずさいっぱいになって自室に逃げると予想していたからだ
ただ
その気遣いを上回る時間にご対面が近づいて。。。
それがかなりヤバイ状態の中にある事はさしもの『しまかぜ』にも予測出来ていなかったうえに

終始俯いたままの『こんごう』の中に渦巻くものにも気が付けない状態のまま歩いていた

港の景色はすっかり暗くなり
風の冷たさは勢いを増していた
水面を入る風神は尖った波の顔を何度も現し
どこか沈んだままの『こんごう』に同調しているようにも見えた
突堤よりバースに入るところまで『こんごう』はずつと沈黙を守っていた
まだ迷いを振り切れない視線は海に向かったり。。。咲にある煉瓦倉庫に向かったりとしていたが。。。。迷いを現したままの状態だったが

風が揺らした木の元を見たまま止まった

「『ちょうかい』。。。。」

目にとまった情景
それは粉川に抱きかかえられた『ちょうかい』の後ろ姿と苦笑いの粉川の顔
瞬間
『こんごう』の何かが切れた

速力３０ｋｔの力は足に伝わりマッハのスピードで走った
「汚染生物ぅぅぅぅ！！！」

妹を抱く手が許せない
自分の中に渦巻く感情を許せない
それらが無駄に混ざってしまった心を止める事は不可能だった
全速力の『こんごう』は雄叫びと共に拳に宿ったブレッドを粉川の腹にたたき込んだ

「オマエに妹はやらん！！！」

刃風に飛ばされるままぶっ飛ぶ粉川の手から離れた『ちょうかい』
を抱きしめる
目の前を横っ飛びで飛んで行く粉川を見ながら
呆然とした『むらさめ』は

「父親か。。。オマエは。。。」

そういう言動だ

まるで愛娘に結婚を申し込んだ男を叩き伏せる親父のような行動に
艦内のテレビに映っていたドラマを思い出してつぶやいた
一方『いかづち』は並木にぶつかって半生半死になった粉川を見な
がら呆れたように言った

「愛のバカヤロウだ」

突風のごとく
風を切って現れた姉の手の中『ちょうかい』は。。。。
吹っ飛んだ粉川の心配もあったが。。。抱きしめられた感覚に
あの日の事を思い出していた

生まれた日
必死の形相で自分を抱きしめにきた姉
あの時は。。。。怖くて震えてしまった

でも今ならわかる事のほうがたくさんあった
姉は。。。いつも必死の人だ
自分が傷ついたあの日から。。。。。その後，産まれてくる自分達

のために
産まれて来たことを祝うために真っ直ぐに飛んできた姿。。。
力いっぱいに，抱きしめてくれた姿

今なら。。。もっとわかる

「お姉ちゃん。。。。。。」

自分を強く抱きしめる手
痛いほどの力が
妹達を思って。。。。不器用な姉が見せた最高の愛情だった事が

「お姉ちゃん。。。大好きだよ」
真っ赤な顔のまま肩で息する姉に自分の手を絡めた
「これからも。。。今以上に。。。。」

自分より遙かに女らしい体を持つ姉の胸に顔を埋めた

「『ちょうかい』。。。。。」
「お姉ちゃん」

『こんごう』は咄嗟に飛び出してしまった自分が。。。
粉川との付き合いを認めて欲しくてココに来た『ちょうかい』の。。
。邪魔をしてしまったのではと顔を背けたが

「お姉ちゃん!!プレゼント!!」
腕の中で涙を浮かべた微笑みはピンクのラッピングをした包みを姉
の顔の前に出した
「。。。私に?」
「うん!!今までお姉ちゃんには。。たくさん色んな事をして貰っ

て。。私なんにもかえせてなかったから」
『こんごう』は首をふった
そんな風に言われるような事をした憶えがない
でも。。。そういう風にしたという憶えがないのは。。。当たり前に妹達を大事に思っていた事の裏返し

「ありがとう!!お姉ちゃん!!私，お姉ちゃんの妹ある事が誇りだよ!!」

誇り
それほどに思われたことに『こんごう』は心の中がいっぱいになってしまった
恥ずかしさと。。。感激で顔を合わせられない
それが姉の通常である事を。。。今は良く知っている『ちょうかい』は微笑んだ

「ありがと。。。『ちょうかい』。。。大事にする」

決して顔を合わせない姉が。。。空を見上げながら涙を堪えている姿を下から見つめた

「良かったわね」
突然消えた『こんごう』の行方を追ってきた『しまかぜ』はプレゼントの手渡しを見届けたところで姿をあらわした

隣に固まったままの『あめ』姉妹

「尊い犠牲だった」
遠い目をしながらまるでいい話だったようにつぶやいた『むらさめ』

に
「それでええのか?」
電撃的結末に。。。。唖然としたまま『いかづち』が突っ込む
。
一方
悶絶のまま涙目で『こんごう』姉妹の仲直りを見つめた粉川は。。。
。
「。。。助けて。。。」

蚊の鳴く声で救助を求め，未だ身動きのとれない状態だったが。。。
大人として泣き言も苦言も控えた。。。。
目の前で抱き合う姉妹の姿になんとか自分を納得させた

優しい月明かりの下
すれ違ってしまっていた姉妹は少しだけお互いの気持ちを近づけた

尊い犠牲の下に

第二十七話　愛のバカ（後書き）

カセイウラバナダイアル～～ｖｏ２７～～閑話編

プェ～～～
連続掲載の日
大人は出来るときに上げる。。。。コレ鉄則！！！
時間はゴールド！！！使いたいときにテキパキテキパキ！！！

フ～～～
本編書くのもそこそこ大変なんですが
後書きが。。。大作になってしまった事も自分では驚きのヒボシです

どうもですねぇ
台詞だけの会話もそこそこ好きなんですが
何故か。。。。ストーリーをがっちりつくらないと納得出来ない体
質みたいなんですよ
人様のところから招待したキャラクターをどうやって
美しく
かっこよく
そしてお互い（この場合お互いの艦魂の交流が目的ですから，互いの艦魂が納得できる事）が納得した最終回を迎えられるか
台詞の数を数えたり
パターンを数えたり
折半より多めに招待した艦魂様が出られるように考え

何パターンかの下書きを作るのですが
なかなか～～～
しかしですね

コレやってみると色んな勉強になっていいなぁ～～って最近は想うようになりましたよ

なかなか自分でない指を動かして作品を作るのは難しいのですが
経験として役立つ事が判明してせっせっと糸紡ぎをしております

今回はお茶会～～そして感動へ（藁）編は完全に出来てないのでお流れですが
次回は完結編を掲載しますぉ～～～

それと。。。。
実は年号間違いみたいなのが発生している事に気がつきました
ヒボシの予定では
艦魂物語はおおよそＨ１５ぐらいを目処に最終回を向かえる予定だったのですが。。。
それだと『なみ』姉妹が一人も生まれてない事になってしまうのです。。。
なので少しずれ込む事になりました。。。
最終話がＨ１７年ぐらいの設定でいこうとおもってます
各護衛艦の出生は随時しらべているのですが。。。。
連載当初は資料も少なく計画年度と進水。。。就航の見分けができていませんでした
これは完全にヒボシの手落ちなのでごめんなさいですが。。。

一応現代パラレルとしている事で許して頂きたいと想います！！
この文だと，はーちゃん『はまな』も『ましゅう』という妹が持てそうです！！
寂しがり屋の『はまな』の妹はどんな子にしようか？と考え中です！！

しらね　「勿論わたくしの大活躍はあるんでしょうね」
ヒボシ　「。。。。。大まで活躍しなくても『しらね』さんは有名人じゃないですか。。。（色々な事故で（爆死））」
しらね　「なんでわたくし抜きでお茶会だったりしたの？」
ヒボシ　「すいません。。。。。」
しらね　「まったくいつまで佐世保編なのよ」
ヒボシ　「すいません。。。。。」
しらね　「小耳に挟んだのですけど？次に出るのは『ひえい』姉さんとかって？」
ヒボシ　「。。。。はい。。。ちょっとだけ出て頂きます」
しらね　「『きりしま』も出るわよね」
ヒボシ　「はい。。。」
しらね　「わたくしは？」
ヒボシ　「だっだっ大丈夫ですよ！！一群の司令である『しらね』さんあっての護衛艦隊ですから。。。」
しらね　「心に刻んでおいてね」
ヒボシ　「ラジャー」

凶器が背中に見え隠れする『しらね』さんとヒボシの関係。。。。タシケテーですよ

そんなこんなでウラバナダイアル。。。次回はお茶会編最終話～そして感動へ～でお送りします（藁）

第二十八話　恋の順番（前書き）

アイアン草薙先生の落胆に絶えられず
本編よりも頑張って（爆）作った

お茶会編，最終章～～そして感動へ～～
堂々歓声！！
ココに再ｕｐさせて頂きました！！
どうぞ
本編より楽しんでやってください！！！
そこの！！お茶会がだけが楽しみの貴方！！！頑張りましたよ！！
（藁）
優しい目で読んでやってください～～～い

ちなみに今回で「姉妹編」は終了～～～

第二十八話　恋の順番

まだ朝日が水面に走るより速い時間
総員起こしの声が掛かる前の時間は紫色の世界が広がるのみ
基地とはいえ静けさの中にある
風もグラウンドの砂を遠慮しながら吹き時間は
全てが透き通っている。。。。。。秋の空は高くてとても美しい
山，紫でいとおかし。。。。

そんな神々しい情景の中に
『こんごう』と『ちょうかい』それに同室の艦魂達に粉川を含む面
子は揃っていた

後少しすれば眠らぬ防衛の楔たる基地の全てが完全に目を覚まし稼
働し始める
今日の一発目の大きな仕事
『ちょうかい』を長崎に送り出すという課業のために

木立の並ぶグラウンド近くに集まった面子の中で
お互いを（どちらかと言えば一人思い違いをした『こんごう』）向
かい合う間に入った『ちょうかい』の前
『こんごう』と粉川もまた，面と向かい合っていたが。。
どちらも。。。当たり前に少しばかり気まずい感じ

顔を合わせられない。。もどかしい空間の中に『ちょうかい』がい
るという図だ

昨日は大変な一日だった
フル回転の時間で起こった事件は今にしてみれば笑い話のようにものだったし
微笑ましい事の全てだった
『こんごう』の速射的パンチを受けて並木の方面までぶっ飛んだ彼を引きずりって『いかづち』と『むらさめ』は部屋に向かったが

「お祝い」だと称したイベントに駆け込んでみれば。。。
部屋で留守をしていた『はるさめ』と『はまな』が二人して。。。。
作った料理を食い尽くしているという惨状。。。

朝の早い時間
粉川は『ちょうかい』の出向に会わせて出てきていて
昨日から引き続いた騒がしい集団の中，しばしの別れを惜しむ佐世保の仲間達と
『ちょうかい』はとくに『はまな』と手をつないで話しをしていた

その後ろ
プレゼント作戦の経緯を聞いた『こんごう』は。。
粉川の前で固まっていた
素直に。。。「ありがとう」をいえない『こんごう』の前沈黙の粉川

『こんごう』の様子は珍しく落ち着きがない
この2日間。。。妹の事で自分は色々と考えていたハズだった
それだけでアタマの中は一杯になっていて。。。。余分な事など入る余地などなかったハズなのに。。。

『しまかぜ』の「余分」な一言で。。。。「変な感情」が自分にある事に気がついてしまった

「粉川さんに会いたくない？」

。。。。。。

小さく首を振る
自分の前には春の花のように明るい笑みを浮かべ
姉と，自分を助けた「人」の和解を待つ妹

「別に。。。オマエの事がどうこうってわけじゃないからな」

妹に聞こえないようにアタマを近づけ
自分を警戒しているだろう粉川に言うと
『こんごう』は促されて粉川が手を，先に出す前に自分から伸ばした
握手

女の子のとの誤解を解決した証にする行為としては，いささか無骨なものだが
軍隊という組織ではごく当たり前な「親愛」の合図

「仲良く。。。しましょ」

その手を待っていたように
実際『こんごう』を立てる形で粉川は手を伸ばし
自分の無骨な手を繋げたが。。。。握手する女の子の手，繊細な作りに少し脅威を感ぜずには居られなかった

昨日の夜
さんざんな目にあった彼は結局パーティーに用意された食事にあり

つく事なく悶絶のまま眠りに入った
『こんごう』のパンチは見事なまでの，ソーラー・プレキサス・ブロー（みぞおち打ち）だった。。。
通常，対人間でうけても悶絶をようするこのパンチを受け，翌日立って居られる事が奇蹟に近い。。
そんな壮絶な思いが自分の前。。。白い細い指先の手に宿った力を信じがたく見つめる

握手しながら。。。つい，じっくりと『こんごう』の手を見つめる
「なんだ！！」
その視線に気がついた『こんごう』は自分の手を離そうとしない粉川に突っかかった

「いや。。。。可愛い手なのになぁ～～って」
「なんだそれわ！！」

どこかぎこちない『こんごう』の顔を見ながら粉川は素直に答えた

「可愛い手なのに。。。強烈なパンチでした」
けして褒めてはいない言葉に『こんごう』は真っ赤になってつないだ手を離した

「わるかったな！！」
「いやいや驚いただけ！」
手を引いたまま隠してしまった『こんごう』に近づいて謝る
「どうせ。。暴力的な女だとか。。思っているんだろう！！」
「そんな事」

『こんごう』より少しばかり背の高い粉川は
手を隠して恥ずかしそうに背を向ける彼女に困った顔

確かに少しは冷静になって「あの時」話しを聞いてくれたら粉川自身もあんな痛い思いをしなくてすんだものだし
でも
背中を向けた彼女は自分の早とちりを十分に恥ずかしい事だったと反省しているから。。自分と顔を向け会えない事も理解していた

「やっぱり妹の事。。。心配だもんね。。『こんごう』ちゃん。。」
小さな背中。。。
細い肩
それでも「国の楯」たるイージス艦の魂
粉川は大人として理解を進めた

「ごめんね。。僕が不用意だった」
首もとを掻きながら照れた仕草

「別にオマエは。。悪くない。。。私が」
静かに
自分の後ろに立つ粉川に向き直る『こんごう』
「私が間違ってしまった事だ。。。オマエは妹の事を思って。。してくれたんだから。。悪くなんかない。。」

今の
精一杯の感謝。。。粉川の前アタマを下げてモジモジしている『こんごう』
「相談すれば良かったね。。『こんごう』ちゃんに」
粉川はぶつけた背中に痛みがあったが。。そこは見せず，笑って見せた

「別に。。いい」

制服のポケットに。。大事にしまったハンカチ
大切な妹からのプレゼント
これを。。。妹の願いを聞き入れて買いに行ってくれた「人」。。。。
喉に登った言葉を

「あ。。。りがと。。」

「お姉ちゃん!!」

固まってしまっていた二人の間に佐世保のみんなとの挨拶を終えた
『ちょうかい』が帰ってきた
相変わらず少しの別れでも寂しいのか『はまな』がぺったりくっついて

「仲良くしてね。。。。粉川さんは私達の事をよくわかってくれる
唯一の「人」なんだから」

「わかってる」
とことん妹が大事な『こんごう』は『ちょうかい』の言うことには
素直に?とりあえずでも答える

「心配しないで，これからお姉ちゃんとも親睦を深めとくから!ねっ!!」

努めて明るく粉川は朝日に光る黒髪の『ちょうかい』のアタマを撫でた
惜しみない笑顔の妹に『こんごう』は少し寂しそうな顔

そんな姉の些細な反応「には」即座に気がつく

「お姉ちゃん」

「。。。。」

言葉の少ない姉

でも心より妹達を大切に思ってくれていて

自分達第一に生きてきた姉の元に

「お姉ちゃんは。。今まで私達の事ばっか考えて。。もっと自分の事も考えてもいいんだと思うよ！もっと自然でいいと思うよ！！自分の気持ちに正直でいいと思う！！だから。。。粉川さんと仲良くしてね」

妹の小さな手が

自分の出向の近づく時間惜しむように強く姉の手を握る

「私は。。。普通だぞ」

自分の中にある「感情」がまだ何に向いているのかを信じられない

『こんごう』は関心をはぐらかすように顔を背けるが

「もっと。。。もっと「笑って」」

笑わない姉に背伸びした妹の手が頬に触る

「もっと。。。自分のために笑ってもいいよ」

よほど『ちょうかい』の方が「何か」を理解していた

「敬礼！！！」

『しまかぜ』の声に佐世保の艦魂達は礼を返す

隊群の真ん中，黒の制服の『くらま』司令
その横に『しまかぜ』そして『こんごう』
艦魂達の隊列のずっと後ろ。。。「目障り」にならないところでと
いう『くらま』の指示を守り粉川がそれでもちゃんと敬礼していた

船が出港で少しでも動き出せば戻らなければならない少しの時間
並ぶみんなの前で『こんごう』は『ちょうかい』に少しだけ。。。
声をかけた

「ドックに入ると。。色々と検査があって。。。船体もバラすから。
。風邪を引かないように」
敬礼のまま『ちょうかい』は姉の心遣いに答えた
「はい！！」
「体暖めて。。」

不慣れな姉の不器用な気遣い
でもそれが喜ばしい変化だと信じて『ちょうかい』は長崎に向かっ
ていった

「一時はどうなるかと思ったよな」

昼前
激走の後（こんな日でも変わることなく修練があるのが佐世保らし
い）風呂から上がった『むらさめ』は目の前，黙りの『いかづち』と
同年の友達である『ちょうかい』が居なくなった事で，より『はる
さめ』にべったりの『はまな』と
２階の小さなラウンジにいた

風呂のある側とは反対にあるこの部屋は比較的「護衛艦隊」の艦魂が占有する事が多い
殺風景だが
窓の外にはアメリカ第七艦隊の姿が見えたりもする

『むらさめ』は目の前
昨日の失言以来だんまりを続けている『いかづち』に，とりあえず事が解決したと安心しながら聞いた
『いかづち』の失言
「『こんごう』は粉川が気になっていて。。。。」あの発言のおかげで「噂むや「嗾け」の断罪を受ける事は免れた『あめ』姉妹だが今後はその発言の出所を探されたりしないように箝口令を敷くつもりでいた

「オマエも。。。あんま不用意な事言うなよ!!『こんごう』が粉川の事，気になってるなんて」

「アレは。。。。わての気持ちや」
昨日，料理までもを食べ尽くされるという非常事態で疲れきりそれで饒舌な口をとざしていたと思われた『いかづち』の口からこぼれた言葉にラウンジにいた艦魂達は固まった

「オマエ。。。何言ってんだ?」

妹の思いもよらぬ発言にイスから落ちそうになった『むらさめ』は探りを入れるように聞いた
自分に顔を近づけ「冗談と言え」という目線の姉の前
『いかづち』は答えた

「わては。。粉川はんの事，好きやねん」

それは
。。。あの日，本当は「粉川の事を『こんごう』と自分が気になって」と言いたかった
あの続き
ホントはそれを言いたかったのに
姉の事でアタマ一杯だった『ちょうかい』はそこを聴く前に飛んでしまった

「何いってんだオマエは!!オマエが墓穴，堀抜いてどーすんだよ!!」
「ホントや。。。ねん」

思わず立ち上がり妹の襟首を掴んだ『むらさめ』は絶句した
『いかづち』の顔は湯当たりで赤くなっているだけではなかった
普段見慣れた顔なのに。。。メガネ越し，少し潤んだ伏し目が嘘を言っている要には思えなかった

「わ〜〜〜応援する〜〜〜」
アタマを抑え「冗談だと言ってくれ」ポーズの『むらさめ』の向こうソファーに寝ころんだ『はるさめ』が拍手する

「黙ってろ!!オマエな!!『ちょうかい』には『こんごう』がって言っちまってんだそ!!今更どーすんだよ!!」
「恋愛に〜〜順番待ちはないよぉ〜〜〜」
ラウンジの中での騒ぎに声のトーンを落とそうにも
騒ぎ立ててしまったら目敏い『ゆき』姉妹に見つかってしまう事だってある

「。。。だって。。言えへんかったんよ。。。。」

風呂のセットを『はるさめ』から自分の分だけ奪うと席を立った『むらさめ』は指差して
「とにかく。。私は何も聞かなかった。。。しらん!!」

真っ赤な顔のまま残された『いかづち』は小声で
「自分でも。。。初めてわかったんやもん。。。どうしょもあらへん」
「とっちゃえ!!」
俯き唇を噛んだ『いかづち』の耳元に陽気な声を掛けたのは『はるさめ』だった
満面の笑みには曇りも悪気もないまま

「DDGに遠慮する事なんか〜〜〜ないよ〜〜〜恋の順番までゆずらなくても〜〜〜」

イタズラっぽい
『あめ』姉妹特有の垂れ目が「何か」に触れる
「ネエはん!!そう言うこと言うなや!!」
自分の前
フラフラと揺れ，笑いながらも『はるさめ』は棘を吐いた

「だってぇ〜〜私『こんごう』ちゃんの事〜〜キライだしぃ〜〜」

ソファでは『はまな』が悲しそうに俯いている
「ネエはん!!」
揺れる姉は『いかづち』のメガネを指で押さえると続けた

「だってぇ～～「有事」が起こったら私達～～～真っ先に「死ぬんだよ」～～ＤＤＧバッカに良い思いさせなくたっていいとおもうなぁ～～」

「そないな事。。。昔の話しやで！！」

「昔じゃないよ～～～」

『いかづち』は姉をソファーに押して座らせるとラウンジの出入り口を確認した

通りにも誰もいない事を確かめてから戻った

険しい表情の妹に『はるさめ』は口元だけ笑わせて言う

「『いかづち』～～～今だってそうだよぉ～～「撃たなかった」でしょ～～」

いつもならとろけている目は笑っていない

「ネエはん。。。。」

『はるさめ』が触れようとする事に警戒の目線の『いかづち』

「『いぃかづち』！！！」

緊迫し始めていた場をぶち壊す大声

「『うずまき』。。。。。」

「まぜんな！！」

緊張の狭間にいた『いかづち』はぶっ飛びそうになった自分のメガネを抑えた

自分が確認した時には誰もいなかったハズの通路なのだから驚きで胸を抑えたまま振り返った

ラウンジの入り口に立っていたのは『うずしお』と『まきなみ』

「ワレ。。。わしとの約束忘れてないだろな？」

目に掛かるほどの前髪の中でぎらりと光る大きな目の『うずしお』

は顔をズイと近づけると
「昨日の魚獲ってやったんだから。。今日はわしにご馳走作ってくれるんよな！！」
「私も手伝ったぞー！！」
大きく手を上に上げて『まきなみ』は横須賀にいる『すずなみ』に似てはいるが少し天然

「だぁ！！わかってるわ！！魚は？」

昨日。。。。結局『はるさめ』と『はまな』に食い尽くされた料理だったが
鮮度の良い魚は仕入れるために，潜水艦の艦魂である『うずしお』に頼んだものがあったのだ

「ムニエ～～ル」

ぷっくりとした唇の『うずしお』は目が見えない分，口が表情を良く語る
黒目の多いキラキラ目の『まきなみ』は普段からの釣り仲間でもあるそしてこの二人は『いかづち』の料理ファンでもあったクーラーバックから白身魚を見せながら既に料理の項目も決まっているようだ

「今から仕込むわ！！」

そういうとバックを持って
居心地を悪くし始めていたラウンジを後にしたドアを出るとき
睨む妹『いかづち』に『はるさめ』は口を尖らせたまま，何も言わなかった

二人の間にいた『はまな』もこの時の事は誰にも言う事はなかった

夕暮れ時。。。。
姉たちとの交流を終えて久しぶりに戻ってきた『さわぎり』は自分たちの共同部屋に溢れている艦魂達に驚いて聞いた
「どうしたの？」

居間にあたる共用部のソファーを独占している『うずしお』と『まきなみ』反対のイスに座った『しまかぜ』と粉川，窓際に座る『むらさめ』，となりに寝っ転がる『はるさめ』その脚もとに座る『はまな』
キッチンブースでは『いかづち』がご飯の仕上げに掛かっている
女だらけの部屋にちょっと困った顔で座る粉川

「お帰り『さわぎり』今日は粉川さんの送別会なのよ」
手元の本を下ろした『しまかぜ』の言葉に驚いた顔

「粉川さん。。。帰っちゃうの？」

曇った表情を粉川に向けた『さわぎり』に『しまかぜ』は首を振って
「本庁に呼ばれて「こないだの事（不審船事件）」話しをしに行くだけよ」
「すぐ帰ってきます！！」と敬礼

昼間図書室のテラスにいた『しまかぜ』は官舎から急ぎ足で帰ってくる粉川と話しをしたのだ

その時に
例の事件の事で防衛庁に出頭が掛かり，一時的に東京に変え得る事になった事を聞いた
そして今日は昨日の食材のお礼で『いかづち』が料理を作る事も知っていたから
「送別会」と称して呼んだのだ

「もっと！はよう言ってくれたら！！準備できたのに！！」

ブースの中，料理のために孤軍奮戦する『いかづち』がその話しを聞いたのは１５：００を回った時で食材を集めるには遅すぎる時間だったが
幸いにして『うずまき（うずしお，まきなみ）』が持ってきた魚に余裕があった事が救いだった
「ほら！！できたで！！運んで！！！」

顔の汗を拭った『いかづち』はハッチに料理を並べた
香ばしい湯気に『はまな』と『はるさめ』が手伝いに来た
「ネエはんつまみ食いするなや！！」
昨日は４時間も煮詰めたスープを食い尽くされた『いかづち』に指さし確認される中

「ココで食べたら～～ころされる～～」

真抜けた笑いで運ぶ
後の面子はソファーとイスをかたして場所を広げる

「『こんごう』ちゃんは？」

部屋に着いた時から姿の見えなかった『こんごう』の事を気にした

粉川は周りを見回しながら聞いた
「さっき声かけといたから部屋にいてるハズやけど。。。」
盛りつけように皿を拭きながら『いかづち』が答えた
「けっこう寂しいのかもね。。妹が入れ違いになっちゃったから」
横に座る『しまかぜ』の笑みに，立ち上がった粉川が

「僕が呼んできましょう!!」
「ええで!!座ってなぁわてが呼ぶから」
通路に進む『いかづち』に粉川は優しく笑うと言った
「『いかづち』ちゃんは料理長でしょ!準備に専念して!僕は『こんごう』ちゃんと仲直りの意味も込めてだから!!」

仲直り

『いかづち』は返事せずそのままブースに戻った
少し暗い顔で

「粉川さん。。3番目の部屋よ!ノックしてね!」
了解と言う返事
それをホントに了解したのか?ぐらいの早さで粉川は『こんごう』の部屋のドアを開けた

「『こんごう』ちゃん!!ご飯でき。。。。」

注．女の子の部屋に入るときは必ずノックしましょう

『しまかぜ』の，ありがたい注意をすっとばしてしてドアを開いた
粉川の前にあったのは
後ろ手でブラのホックをしている下着姿の『こんごう』。。。その
引きつった顔

「あははは。。。ごめん。。。でもまぁ。。可愛い下着だね」

白のフリル
アンフィのショートキャミを横にソングタイプのショーツ，見られて恥ずかしくはない揃いの下着だが。。。。
見られて良いわけもない
怒りと恥ずかしさで涙目になったままの雄叫び

「汚染。。。。生物ぅぅ！！！！」

リビングで今や遅しと，お箸を並べている艦魂達に聞こえる打撃音と地響き
「死ね！！死ね！！死んでしまえ！！！一度ならづも二度までも！！！」
続く速射砲のような打撃音
濁音の悲鳴が続く
「まっ！！待って！！ごめんなさい！！だ！だずげ！！」

「粉川はん！！！」
慌てて通路を覗き込む『いかづち』それに続いて『むらさめ』『さわぎり』
「。。。。。ハァ。。だから言ったのに。。。ノックは必要でしょ。。女の子の部屋なんだから」
遅れて覗く『しまかぜ』達の前
馬乗りにされて暴打を回避しようと奮戦しながら１０発中ほぼ被弾という粉川
ランランと輝く目の玉のフェイズド・アレイ・レーダーから逃れる術など無い

「ちょっと!!助けな!!」
「大丈夫よ。。私達艦魂が「人」を殺せるわけないでしょ」
困った顔のまま始まってしまった戦闘は自然沈下しかないという態度で食卓に戻ろうとする『しまかぜ』に『いかづち』は聞いた
「それは。。。お互いが触れられへんかった時の事やろ?」
食卓を囲む艦魂たちの背筋凍る
今までは。。。触れられなかったからこそ腹が立っても「人」を殴る事などなかった
今,目の前にはその垣根を割って入った男が瀕死の状態になっているさすがの『しまかぜ』にも冷や汗
「『むらさめ』。。。止めて」
壁に張り付いて事の成り行きを見ていた『むらさめ』は指名の言葉に驚く
「バカこけ!!MAXアベレージの『こんごう』に私がかなうか!!」
単純に艦艇馬力でいっても『こんごう』は『むらさめ』より4000ps上回るという事だが
何よりはずさないパンチがココでは脅威であり,そんなもの止めに入ったら『むらさめ』が被弾する事も目に見えている
とは言えども腕力自慢の『むらさめ』しか頼る相手のいない『いかづち』達は姉の背中を押す
「はよ!助けてよ!!粉川はんが死んでしまう!!」
押し出された『むらさめ』は息も絶え絶えの粉川の上で振りかぶっている『こんごう』に両手で制止とポーズをとり呼んだ

「待て！！もうそのへんにしとけよ。。。マジ，死ぬから」

光る涙目

歯を食いしばった『こんごう』に『むらさめ』は自虐的な言い訳

「まぁほれ私を見ろよ。。。毎日スポブラにボクサーパンツだぜ。。。そんな色っぽいのだったら見られても恥ずかしく」

ブチ

注．恥ずかしくなくても見られたくないものなんです。。。。男性諸氏は気を遣ってあげましょうね

軽い断絶音

真っ青な顔になった『むらさめ』は諦めた声で

「そこも。。。問題だったんだ。。。だよね」

そして続く乱戦の音

震えながら見ている『さわぎり』の手を引いて『しまかぜ』は食卓に戻った

「食べましょ。。。大騒ぎになったから。。。『くらま』司令が来る前に食べないとね」

既に我感ぜずで飯にありつく『うずしお』『まきなみ』『はるさめ』『はまな』に続いた

『いかづち』は乱戦の3人の姿をただ呆然と見ていた

数分もしない内に『くらま』司令の雷が落ちたのは言うまでもなくそれによってやっと粉川は暴力から解放されたが。。。。顔は無惨な事になっていた

翌日

激走とは別に「修練走」に入った『さわぎり』は泣いていた
「あたいこの編成になってから走ってバッカだよぉ～～」
まったくだ
あの日に限って姉達とご飯をせずに帰った結果がこれだ。。。泣けもする
兵曹する『しまかぜ』に肩を支えられながら嘆いた

先頭を走る『こんごう』の顔もかなり気まずそう
「ノックしないから。。。。」
「やりすぎだよ」
唇を腫らした『むらさめ』に
「あんなんになるまでせんでも。。。。」
直ぐ後ろを走る『いかづち』は顔をしかめて零した

その後ろを巻き込まれた形ではあったが，ご飯は堪能した『まきなみ』『はるさめ』『はまな』『うずしお』

「ツケだぞ！！」

巻き込まれた分を「食事会」の付けだと叫ぶ『うずしお』

皮肉なほどに青い空の下。。。。罰とはほど遠いさわやかさの中で
佐世保の護衛艦艦魂達は走り続けた

その頃
朝一番の新幹線に乗った粉川は顔を冷やすための冷えピタを顔面に
所狭しと付け
二夜連続で食いっぱぐれた腹を押さえて疲労の淵に沈んだ
粉川が東京に向かって旅立った頃

防衛庁は驚くべき事態に眠らぬ作業を続けていた

第二十八話　恋の順番（後書き）

カセイウラバナダイアル～～お茶会編，最終章～～そして感動へ（藁）～～

昨日は歓声をみなかったのですが。。。。

草薙先生の落胆に絶えられなく

頑張って推敲作成しました。。。。

大人は期待に応える事を義務付けられた生き物です（爆笑）！！

というわけで！！！

呼んでやって下さい！！！

スキマのある『こんごう』の部屋に慌てる事のないゆるやかな優雅な動作

戦艦大和艦魂『撫子』は『しらね』の案内でココまでやってくると

焦燥し張りつめた護衛艦隊艦魂と，妹，桔梗様を見て続けた

撫子様「難しく考えすぎなのですよ」

澄んだ声には優しい抑揚がある

冷えた空気の間に香る優雅な花は同様の顔などどこにもない

だが妹の『桔梗』様はそういうわけには行かない様子だ

「どうしたらええんや！撫子姉さん！！」

掴みかかっていた『くらま』の襟を離すと姉に走り寄った
沈痛な面持ちだった『くらま』も「策」があるならば聞きたいと素直に頭を垂れた

「出来うる全てを尽くします。。。どうぞ作戦をご教授願えませんか」

司令官である『くらま』には自分たちを犠牲にしてでも「客」を助けるという使命を全うするしか方法は浮かばなかった
だが他に。。。作戦があるのなら。。。『こんごう』を犠牲とする事なく全てを救える方法があるのならば。。。藁にでも縋りたいと思うほどに妹達を思う心はある

苦痛に眉をしかめた『くらま』の顔を見る『撫子』様の目には深い慈愛があった
「方法はあります『くらま』様。。。でもその前に。。。桔梗」
『撫子』様は自分に駆け寄っていた『桔梗』様の頬を張った
突然の出来事に目を見開いたままの『桔梗』様と。。。護衛艦隊達
「何？」

真剣な眼差し
厳しく妹を戒める目のまま『撫子』様は言った
「あやまりなさい。。。彼女達は立派な帝国海軍の末裔です」
「姉さん」

撃たれた頬をおさえた『桔梗』様は。。。。。
姉が本当に怒っているのではなく。。。。
本当の謝罪を求めている事がわかった
瞳のふちを彩る光の涙が妹の失言に心を痛めた証だった

「私達は「紀伊」と日向司令達が現れてくれた事によって。。。新しい帝国海軍という歴史を歩み出しました，でも本当ならば私達が皆死に絶えた後を，苦難の日本を支えるために産まれた彼女達に私達の出来なかった「護る」という願いを託す側だった」

『撫子』様は自分たちが救われなかった歴史を。。。良く知っていた武蔵はシブヤンにて。。。世界中見回しても今後ある事もないだろうと言われる多数の魚雷と爆弾を我が身に浴びて沈没
大和は「最後の希望」と称した特攻の元。。。。届かぬ沖縄に手を伸ばしながら圧倒的な航空勢力の前に敗れ爆沈した
それだけではなかった
多くの帝国海軍の姉妹達が本来ある歴史の流れの中で死を迎える事を知っていた
もちろん。。。。『桔梗』様も

「『桔梗』。。。貴方は生まれ変わった。。。紀伊と共に日本を護る力になった。。でも本来自分たちが進み死を迎える歴史も知っていたハズでしょ。。。映画も本も読んで」

『桔梗』様はただ項垂れ顔を隠したたくさんの資料をヒマを見てあさった
理不尽なほどの戦力差に命を奪われ死に絶えた。。。本来の自分たちの歴史の後を継いだ妹達。。。。それが。。。自分たちの末裔でないなどと。。。

「みなさい。。私達の妹達を」

下がった妹の髪を撫でた，優しい姉の手に導かれ顔を上げる
自分たち大和姉妹の前に並ぶ「護衛艦隊」の艦魂達

焼け野原の日本を平成の世まで守りの力として継がれた心の。。。。
妹達

「。。。。すまなかった」

強き帝国海軍戦艦武蔵の魂はアタマを下げた
その姿に返礼をする護衛艦隊艦魂
共にこの国を愛する艦魂たちの絆が確かめられた瞬間だった

「アンカー固定完了しました!!」
静まってしまった部屋に『こんごう』の準備完了合図が響いた
すくさま各々の配置に戻る護衛艦隊の中
『撫子』様は謝罪にアタマを下げた『桔梗』様野方を抱いてスキマに走った
「さあ手をつなぎましょう!!」明るく

だが
作戦を公表されていない
「どうやって助けるんでっか?」
『撫子』様の後ろについて来た『いかづち』は心配そうに聞いた
笑顔の旗艦はやんわりと
「先ほど説明があったとおりですよ」
「では」
『いかづち』と共に前に進んで来ていた『くらま』は困った顔をした
策はあるようで。。。実はないのか?気休めなのか?と不安に駆られる顔に細い指が額の皺に触れる
「でも『こんごう』様も助けますよ」

まるで全てを見通しているかのように『撫子』様は微笑む
「どうやってやるんダゼ？」
パソコンを片手に空間の測定をしながら『きりさめ』も不安を現した顔で聞くが
『撫子』様は落ち着いた態度で

「考えてもみなさい。。この道は大和（伊）長官が通ってこれた道ですよ。。。好きな者，好きな事のために飛ぶ。。。それが原動力に変換されると言うことです」

『くらま』に『むらさめ』『いかづち』は前のお茶会を思い出したそもそも満排水量でいうなら大和（伊）長官の方が現実の大和のままの重量を持つ巨大艦になる。。。それも従来の大和という鉄の塊の重量でディーゼルを原動力とするなのに大和（伊）長官は何事もなかったかのようにスキマから現れ『神龍』様を連れて帰った。。。。
ジェットもタービンも現代の技術は元より，未来の技術さえ手にしていない大和（伊）長官なのに。。。何故この無位置空間を渡航できたのか？

「あの方は自分の好きな事を原動力に推進力を得られる事を良くご存知だったのね」

「そんなバカなぁ～～～」
「キュー」

絶えぬ微笑みの『撫子』様の後ろ，科学で身を固めたヲタク２人がダウンした
非科学的な自分たちの存在を思えば答えは簡単な事だったのだ

相手を思う気持ちが。。。。相手の元に向かう推進力

「壊れた。。。機械で割り切れ無い事に対応できへんかったな（藁）」

煙を上げた姉二人を見ながら『いかづち』はココについて初めて笑った

「『こんごう』はどうなりますか？」

自信満々の答えの『撫子』様の元に不安な顔のまま現れたのは『ちょうかい』だった

推進力が相手を思う気持ちだとしても不安定な無位置空間から抜け出る為には「安定」した足場は必要となる

「助けますよ。。。。貴女達の力も必要です」

「聞こえますか？『ちょうかい』です」

不位置空間に中，自分に巻き付けたアンカーを大和姉妹の末の２人の手を握らせ発止やのシークエンスに入った『こんごう』の元に妹の声ずノイズまじりで届いた

「聞こえている」

内壁の色はより浅黒く変化し始めている

焦りはあるが失敗も許されない

「今から『零』様，『小雪』様に，こちらに向かって飛んで頂きます」

指示を出す『ちょうかい』に
「了解」と任務に正しく返答する『こんごう』の耳に戻った返事は。
。。。涙の混じった声だった

「お姉ちゃん!!私達!!お姉ちゃんが無事に帰れると信じてるから!!」
自分から見て一番下の妹『ちょうかい』の声に『こんごう』は怒鳴った
「任務中に余分な事を言うな」
「お姉ちゃん。。。。」
「指示だけしろ!」

引き上げのタイミングも飛び出しのタイミングも向こうが中心の今。
。。そんな事に構えないという『こんごう』の苛立ちに声を掛けたのは『小雪』様だった

「ダメだよ。。。妹にもう一度会いたいという気持ちを伝えなきゃ」

二人で握ったアンカーのケーブル
方を寄せ合うもう独りの大和姉妹末子は幼い故の涙が途切れる事はないなかで
「。。。。。お姉ちゃんに。。。会いたい。。。」
「私達は会いたいと信じてるから。。。」
『小雪』様たちにはすでに『撫子』様から事の成り行きと救出の方法の概要が知らされていた。。。それでもこの場所にいるという不安
「大丈夫です。。。すぐ会えます!」
なんとか発射まで二人の心を持たせたい『こんごう』は平常心の顔を見せ続けるが
心には妹達との，今生の別れをしっかりと意識していた

それを『小雪』様は直感で見抜いていた

「『こんごう』さんも会いたいって言わないと!!!!妹にあえなくなっちゃうよ!!」

「そんな事は言わなくてもわかっておりますから」

職務に忠実な答えに

『零』様の悲しみの声が爆発した

「言ってくれなきゃわからないよ。。。お姉ちゃん達が私に。。。あそこまでこれるって。。会えるって言ってくれるから頑張れるの。。。言ってくれなきゃ。。怖いよ」

声を揃えたように『小雪』様も『こんごう』に言った

「言ってもらえるから。。。帰る場所があるって思えるの。。。だから『こんごう』さんも妹たちと，話して。。。」

「達する。。。こちら『こんごう』宛て，妹たちに私は必ず戻る。。。信じて待っていてくれ」

発射の時間。。。最後の交信が届く

アタマを抑え各々の電信を返す妹たち

『ちょうかい』「待ってるよ!!絶対に帰ってくるって!!信じてる!!」

『きりしま』「姉さん。。。必ず帰って下さい!!」

『みょうこう』「姉様。。。帰られると信じてます」

遙かな高みの向こう揺れて歪むスキマの向こうに。。。。自分の帰りを信じる妹達を確認した『こんごう』そして妹様二人は頷いた

「必ず帰る」と

時空航路に詰めていた二人にも事態と作戦は伝わっていた
「仕上げだ!!二人いて良かっただろ?」
日本刀を鞘から抜き払った貴人は美しい髪をなびかせている
『鈴』様の後ろに立つ『しまかぜ』は思いという「力」に共感できるものが多いのか笑っている
「頼りにしています」

「頼ってくれ!!」

深淵の輝き
刀を身構えた『鈴様』の姿は美しき侍，自分の肩にかかった運命の重ささえも心地よいと笑った

「『鈴様』『零』と『小雪』がジェットで空間を離脱すれば「力場」が動きます。必ず空間航路のｃｌｏｔｈｃｈａｒｇｅ．ｓｐｏｔの歪みが出来ますから。。。そこに『こんごう』様を呼んで下さい。。。『しまかぜ』様。。。きっと出来ます。。。妹を呼び寄せて下さい」

総司令官『撫子』の指示の元ついに作戦は開始されたスキマのアンカーケーブルを引く側に『桔梗』様の隣の『むらさめ』が叫ぶ
「準備オッケー!!」

煙を出していた二人の『あめ』姉妹がカウントを開始する
「作戦実行!!１０．９．８．７．６．」『くらま』の声に『桔梗』

様
の声が重なる「5．4．3．2．」

天を睨み身構えた『こんごう』が
「スタート！！」

会いたいという願いの強さが強く『零』様『小雪』様をジェットの
力おも借りて飛び上がらせた
重量共鳴の振動が鳴り響く中，ついに妹様達はスキマに向かって飛
んだ
「お姉ちゃん！！！」

手を伸ばす二人に。。。上から手を伸ばす姉達
確実に近づく絆はスキマを貫き外に飛び出した

「『小雪』。。。。『零』。。。アホ。。。心配したで」

飛び出したまま
引き上げた手を強く握ったまま二人を抱き止めた『桔梗』様は
妹達のアタマを強く抱きしめて。。。泣いた
二人の妹もただ姉の胸で泣きじゃくった

その後ろ
引き揚げに全ての「力」を使ってしまい目を回した『むらさめ』を
『あめ』姉妹達が介護していた
「ネエはん。。。ようやったで。。。」
伸びた姉を膝枕した『はるさめ』は俯いたまま
「かっこよかった～。。。。よ」

「よかったわ。。さあ最後は『こんごう』様の救出。。。『鈴』様。。。頼みましたよ」
総司令の『撫子』様はそういうと祈りのために手を重ねた
想いを伝えるために。。。

その頃アンカーの固定から吹き飛ばされた『こんごう』は無位置空間で方向感覚をやられ朦朧としていた
目の前の風景はもとより
スキマも見えない状態の中。。。。。

「『きりしま』『みょうこう』。。。。『ちょうかい』」

妹達の事がアタマの中にいっぱいになった
「帰ってきて。。。。」
そう願ってくれた妹達
姉として。。。妹達に。。。どれだけの事ができたか。。。。
「わるい。。。。」
何も出来ていない事ばかりにアタマが下がった

「帰れそうにない。。。」

彷徨う体が力を失い始めていた

「『こんごう』！！！」
空間の四方に響く自分の名前に眠り始めていた目が覚める
「お姉ちゃん！！！」
聞き覚えのある声とともに連呼される名前

体を起こし周りを見渡す
一面灰色の中。。。。。少しの輝きの場所から声が続く

「お姉ちゃん!!」
痛む自分の体の各所を叩き奮わせる
「帰るんだ!!彼処に!!」
体を動かす。。。少しずつ前に。。。前に。。。言うことを聞かない体に自分の意地を伝える
「帰る!!絶対に!!絶対に!!」

だが
心意気と裏腹に体が力をなくし。。。光から離れようとしていた
その時

「良くやった」

その手は。。優しく『こんごう』の背中を光りに向かって押した

「お姉ちゃん!!!」
目を開けた『こんごう』の前にあったのは自分の胸に抱きついて泣く妹達の姿だった

「ここは。。。。」

「お茶会会場ですよ」

妹たちと手をつないだ『撫子』様の優しい微笑み
「心配したよ!!目覚まさないから!!」
起きあがった自分の前
自分の同型の妹達。。。どの妹も涙の目で自分に縋る

「良かったわ。。『こんごう』『鈴』様が航路を刀で斬って貴女が出られるように道を造って下さったのよ」
涙を拭いながら肩を持つ姉『しまかぜ』
『いかづち』は近くで伸びた姉『むらさめ』の世話をしながら笑って見せた
『くらま』と『撫子』様は作戦成功の握手を交わし
隣の『しらね』も挨拶をかわした

「あれは。。。。。。。。。」
航路に穴をあけてくれたのは『鈴』様。。。。『こんごう』はおぼろな記憶を辿っていた
じゃあ
光の先に自分を押した「手」は?。。。。。
呆然とした顔の『こんごう』に『撫子』様は顔を近づけて言った

「あれは。。。。。『　』様でしょうね。。。きっと」
「私を。。。助けた?」
信じられない。。。そんな顔をする『こんごう』に『桔梗』様が答えた
「今の日本を護る大事な妹を。。。助けにきたんやな。。。」

落涙

ありがたいという想いと。。。自分を思ってくれた妹達への想いで

『こんごう』は

「ありがとう。。。ございました」

大騒ぎだったお茶会は終わった
紀伊ではクリスマス会も近い事もあり事件終局とともにお開きになり
『ゆうだち』と『きりさめ』が再構築した時空航路にて帰る事になった

「色々と世話になったな！！」
妹二人を抱えてご満悦な『桔梗』様は引き揚げを手伝った『むらさめ』と握手した
司令の任である二人『くらま』と『しらね』も
「今度は二人でお茶会しましょう。。。『撫子』様！！」
「それもまた。。。楽しいでしょうね。。。『しらね様』」
出番の少なかった『しらね』は妹の『くらま』にツンとした表情でその『くらま』の目は『こんごう』達の場所にいる。。。彼女をチラリと見ていた
『しまかぜ』はその目線に微笑んで見せた
その姿を『鈴』様は何事もなかったかのように
「それもまた。。。良し」と
可愛い妹君二人もはしゃぎ回って

「ではまた。。。お会いしましょう」
『撫子』様の挨拶に
「敬礼！！！」
『くらま』の号令の元，全護衛艦隊の敬礼
「じゃあな！！立派な妹達！！またあおうや！！」
閉じて行く時空航路の先，楽しい笑い声とともに『桔梗』様の声が

響いた

オハリ。。。。。

長くなりました。。。。
ついに終わりました。。。
燃え尽きました。。。。
草薙先生。。。。。。。。。頑張ったので優しい目で見てやって下さい！！！
それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第二十九話　知の闘将（前書き）

新章！！！
新章ではアタマの戦いだったり「人」の話しだったりで『こんごう』達はあまり出てきませんが。。。
新しい艦魂が出たり
問題だった「艦魂とは？」という重大なポイントに（ヒボシ的に重大なだけだから。。。他の方にはどうかわからないけど）かかります
前回，掲載したように原初正しい艦魂とはいきません。。。ですからそれはダメという方は気を付けて下さい！！

まぁ
突然出ませんから
今回はないですから（藁）
出るときはちゃんと＜重要注意事項＞と提示しますから！！（藁）

それでは新章！！はじまり～～～！！

第二十九話　知の闘将

防衛庁に，その情報を伝えたのは護衛艦『きりしま』だった

「アンダマン海域に置いて「地震」発生と思われる震動を観測，スマトラ島，インドネシア諸島に被害が出たのでは，情報求む」

情報局に詰めていた「佐々木運用局長次官」は
迷うことなく情報収集を開始
艦に響く程の地震に対しペルシャ湾からの引き揚げを開始していた
護衛艦隊に「警戒」を発令し周辺海域，および関係諸国と諸島の情報収集を開始
同時に
継続的に入る『きりしま』からの報告は尋常な災害発生ではない事を時間を追う事に伝え続けた

時を同じくしてＮＯＡＡ（米国海洋大気圏局）運営，ＰＴＷＣ（太平洋津波警報センター）は地震の情報を確認にしたにも関わらず太平洋側にしか設置されなかった津波警報ネットワークの情報不足も手伝い，ディエゴガルシア島駐留米軍に宛て「警戒せよ」との告知しか出来ていなかった

経験のない不足の事態に最高レベルの観測基準を持つ組織は十分な機能を果たす事は出来ていなかった

この事が津波の経験を今までした事のなかったインドネシア諸国の被害を甚大にする事につながってしまう

全世界を驚かせた地震の近海に『きりしま』はいた

日本政府は地震発生2日後より臨時閣議を招集
時の総理の意向により「5億ドル（約５４０億（変動制ドル換算のため正確ではない））を無償供与を決定

供与の選定のに2日を要したのは，被災地の正確な情報が無ければ
「金額的支援規模」が決められないためではあったが異例なほどに早い決定だった
それは防衛庁に宛てられる『きりしま』以下護衛艦隊の情報の伝達の早さによるものだった

朝日を浴び
真新しい庁舎の壁を輝かせた防衛庁は木枯らし一番により
澄み切った空の下で寒々しい中に有りながらも何時に増して騒がしい人の動きを見せていた

「護衛艦隊の派遣を求められているそうです」

運営企画局局長室，大きな執務用の机の前「何か」物捜しにくれる局長「羽村」に，この3日間不眠不休で情報収集を続けた佐々木は乱れた髪を手櫛で整えながら，政府の作った要項をもって訪れていた

「出せばいい」

羽村の返事は。。。たいがいこういう素っ気のないものだとは，わかっていたが
今日の大事はそれだけでは済まない事で
佐々木は踏みとどまった

「派遣を決めるのは政府の指示だ。。。決まった事ならばそれは「政策課（国際政策課）」と「協力課（国際協力課）」の仕事だろう」

今年５１歳になった羽村は真っ白になった髪のアタマを掻きながら
佐々木に背を向けたまま捜し物に没頭している

「防衛庁長官がいらっしやってます」

佐々木は単刀直入な言葉を返した

本来なら充当な出世街道にいた佐々木が「情報局」の局長に就任できず
羽村の下についているのは
他の局員からすれば「嫌がらせ」のように見えていた
幕僚級の人間だった羽村の局長就任はそう見られていたからだ
そして
佐々木も当時はそう思っていたが今は違った

「問題が発生しているのです」
政府の作った要項を机の上に置き
次は書棚の間を物捜しをする羽村の「聞く耳持たず」の背中に話し続けた

「新しい護衛艦の予算が通らなくなる可能性があります」
「馬鹿な事を」

即答
そもそも軍備の予算は防衛庁の提出から作られる「大綱」を基本に決められている
時代に即した防衛のための要項を元に，必要な予算を常に計上していて「決まっている」ものだ
それに即し「中期防」で調整を行う事になるが
予算の取り消しが行われる事など「ありえない事」だからだ

「バカげた事ですが。。。防衛長官がそれを望んでいるようで」
「なんでだ?」

書棚を見回しながら
見つからない捜し物にうんざりした顔を初めて佐々木に向けた

「例の事件の事で「自衛隊は有用か」と。。。「海自新造艦に予算は必要か?」という質疑を」

例の事件
「イージス艦機密漏洩事件」と「不審船事件」。。。。どちらも自衛隊。。事，海自にとって不名誉な出来事

「佐々木君。。。なんで今?その事なんだ?」

やっと話しに関心を持った羽村に手元にある様々な資料を机に置きながら

「金実（かなみ）「議員」（現，防衛庁長官）は「防衛費節約」を公約に挙げ

ています「無駄」なく「無理」なくの「国防」を。。自分の代で防衛費削減に貢献したという勲章が欲しいのでは」
「とても「理想論的」な方だな」

着座した羽村は置かれた資料に目を通しながら茶化すように答えた
早足でめくるページ

「それにしても予算の話しは「経理（経理装備局）の仕事だ，頑張って予算は通して貰わねばならんぞ」

当然の回答なのだが
鼻に掛かったメガネを正しながら佐々木は溜息まじりに
肩をすくめる態度で

「朝から揉めてます。。。経理局は地震のために派遣する護衛艦の代わりに新しい護衛艦が「必要」であると予算の請求を迫ったようですが，話しが通りません」

席に着いたものの落ち着かない態度
小刻みに揺れる膝を抱えた羽村はめんどくさそうにしていてる

「今はどうやって来年度予算を通すかを模索中です」
「今年はどうする？」
「諦めるのでは？」

忙しなく指の間，パイポを回す羽村に佐々木は「わかっていた」が聞いた

「何をお探しでしたか？」
「タバコだ」

羽村は防衛庁でも有名なヘビースモーカーだった
タバコが切れてしまうとまともな会話は望めないのではという程に
佐々木は手元に持っていた封筒をヤニ切れで落ち着きを無くしている羽村に差し出した

「会計課からです。。。。タバコの領収書を提出したんですか？」
出された封筒に顔を歪めながらイスを回し背を向け
「バカな事を。。。自分の趣向物を税金で買うようになったらお終いだよ」
ちょっとした冗談に
冗談を返した羽村は封を切ると中にあった紙に目を通して深い溜息をついた

「佐々木君。。。C資料はあるかな？」

言葉と共に立ち上がるとドアに向かって歩き出した
「あります」
真っ直ぐ通路に出た羽村は自嘲気に言った

「経理局はピンチと言う訳だな」

足早な姿
羽村が行動を起こす兆しに佐々木は情報局職員の小林を呼んだ
「C資料を用意」
「写真の入っているものがいいな」
そういうと羽村は足を止め，急ぎ資料室に向かう小林を呼び止めた

「タバコ買ってきてくれんか？靖国通りの柳家タバコ店のお嬢さん

に頼んである。１カートン」
手元の万ケン（１万円札）を手渡す
緊急で動き始めた小林は元気よく答えた
「「峰」でよろしいですね！！」

タバコの銘柄の確認をした羽村は腕時計を確認すると
「２０分後によろしく」
隣を歩いていた佐々木はＣ資料に付随する資料も運ぶよう指示を出していた

「他に必要な物は？」

指示を終え前を進む羽村は挑戦的な顔を現しながら
白髪のアタマを手櫛で整える

「車の用意を。。。。金実長官が「美しく」お帰りになれるようエスコートと」

本領に入った羽村の目の輝き
佐々木は自分がこの人の下に着いた理由をココに見ていた
秀才，羽村の駆け引き，それを知ることが佐々木の仕事でもあった

「何度話しても同じです！！」

どこもかしこもを大きく作った防衛庁長官室の中
「金実千香（かなみちか）長官は自分の前に詰めた男たちに怒鳴った
国際協力の元，多数の護衛艦を出す事には積極的な支持を現した彼

女だったが
新造する護衛艦の予算に難色を示していた

経理局は派遣による艦艇の穴埋めが必要という事で予算を押しきろうと考えていたが
「女」の議員にはそれがスキマを狙った「イヤらしいもの」に見えていた
実際
経理は穴埋めによって前々から難航していた予算を通そうと計画していのだから。。。
自分たちのあざとさを逆手に取られた形になっていた

「護衛艦の数は，世界的に見ても十分に足りています!!今年度通す必要はないと考えています!!」
「しかし。。。」

「失礼致します!!」

そろい踏みの若い局員は熟年の彼女への当て馬だったが
そんな事では梃子でも動かない姿勢で平行線になってしまった場に，羽村と佐々木はドアをノックの後，入室した

金実議員の顔は羽村の入室にさらに嫌悪に満ちた目を向けていた
たくさんの防衛資料を重ねた机の前
静かな怒りは返答した

「誰が来ても同じよ」

議員当選以来，男社会の国会を蹴飛ばす強さで邁進してきた

初の女性防衛長官たる金実
鉄の女のきつく睨む視線の前，羽村は「敬礼」をした

「私にも「敬礼」しろと言う事かしら?」
「できれば，貴女は防衛庁の「顔」でございますから」

荒い鼻息
揃った男たちの社会に対する嫌味な態度に羽村は飄々と話しを始めた

「災害派遣の艦艇が決まりましたので，目を通して頂こうと思いまして。。。せっかく登庁して頂いた長官に確認をと」

予算とは違う方向の話しに，金実議員は拍子抜けしたような顔になった
が
慌てた反応を示したのは経理局の若い局員達だった
情報局に艦艇の選定が出来て言い訳がないからだ
反論に前にでようとする経理局「粟田」の体を佐々木が止めた
「黙っていてくれ」

駆け引きは始まっている
同じ内局で右だ左だなど今は必要のない事だった

関心を示した金実に羽村は写真付きの資料を開いて見せ

「旗艦に『ひえい』補給艦に『はまな』呉から輸送艦『おおすみ』を出します。。既に大隅は横須賀にて補給物資と，陸自の部隊を乗艦させる準備が整っております。。。後は防衛庁長官の「出港」の命令を待つばかりです」

開かれるページに写る大型輸送艦『おおすみ』の姿は金実を納得させるのに十分な巨漢
机の上めくられる資料に感心したように頷く

「素晴らしいわ」

羽村の提案は経理にとって「空論」

しかし現状をよく把握した判断ともいえる
佐世保の『くらま』は不審船事件からまだ日が浅い，旗艦を警備区から話すのは良い方法とは言えない
逆に『ひえい』は大湊と呉の間を常に就航していて使いでのよい旗艦だ
輸送艦の派遣はどの艦が出ても一緒だが「横須賀港フェスティバル」におりよく寄港していた『おおすみ』を出すのは宣伝にもなるし補給の関係を揃え足並みを揃えて被災地に向かうのなら佐世保にいる『はまな』に事を通達した方が早い
空論とわかっていても黙らざる得ない

「でも足りないわ。。。もう一隻。。。イージス艦を派遣しなさい」

すでに掃海業務と共に事故現場付近を航行していた『きりしま』というイージス艦があるにもかかわらずの意見
部屋に会した局員は皆驚いた「国防の楯」であるイージス艦４隻のうち2隻を派遣するなど。。。とんでもない暴挙にしか見えない

だが金実には彼女なりのビジョンがあった
高額な艦艇であるイージス艦は不祥事の多発によってただの「金食

い虫」に見られている
それが2隻揃って災害派遣で成果を上げれば。。。。それを決定した長官である自分に「利」となる事とイージス艦の汚名を晴らすことが出来ると睨んだのだ

だが

それは「見栄」
現行で十分に足りた艦艇を前に金実は馬脚を現してしまったがその事に気が付けたのは，羽村と佐々木のみ

「構いませんよ，イージス艦も出しましょう」
白眉の下の目は輝きを増して
目の前の議員に続けた

「予算を通してくだされば」

その言葉を待っていたかのように金実は笑った
「結局，予算のために回りくどい事をしにきたわけね」
そのまま資料を取ると白髪の羽村のアタマを抑えるようにヒステリックな声で

「駆け引きしにきたのね。。。予算ほしさに，でもダメよ。。。新造のイージス艦の予算は来年に持ち越しね」
「わかりました」

挑発的に斜に構える金実に羽村は，またもフラリとした対応を示した
金実議員はついに「男の城」を，ねじ伏せたという喜びよ顔に出したがそれが長続きする事はなかった

「では，日本海の防衛のために「アメリカ第七艦隊」に出動要請をお願いします」
「はぁ？」

突然出た「アメリカ第七艦隊」の名前に金実は声が裏返ってしまったイスから立ち上がると笑みを浮かべて自分の前に立つ男の深慮を初めて感じた
「あっアメリカの艦隊は常に横須賀，佐世保と詰めているのにそんな要請は必要ないのでは？」
「日本海を護るために是非，アメリカ第七艦隊からイージス艦の出動要請して頂きたいのです」
金実の顔は曇った
ココに就任したときから「男達の防衛庁」に対して十分に勉強はしてきたが目の前にいる男の言う事について行けない
急にだ
めまぐるしく事の内訳を探すが，それでは手遅れと羽村の目は雄弁に語っている事しかわからない

「アメリカには十分な「防衛費」を支払っておりますから。。。。そのぐらいは可能と思いますが？」
「イージス艦が必要なの？」
「必要です。。。。。ＢＭＤの資料９６ページにありますように「日本海」にイージス艦が居なくては初期迎撃が出来ません。。。。当たってからでは遅すぎますし」
金実は自分の前に置かれていた資料に目を走らせた
ココに来たときに羽村が持ってきた物だ

「横須賀から」
「手遅れです。。。。太平洋側にしか第七艦隊はイージス艦を配備しておりません」

手元の資料をめくった
保有艦艇数と配備されている艦艇名。。。。。。。。。日本海側に
はどこにもいないアメリカのイージス艦達
羽村の言うとおり。。。。日本海側にイージス艦はいないのだ
なのに防衛構想では海の上を飛ぶミサイルの迎撃が描かれている。。
。。。
いもしないイージス艦で。。。。どうやって
もし
そんな非情な事態が起こってしまったら対処する？
そして非常事態がなかった時。。。その費用は何処で回収できるの
か？

「災害派遣中，日本海側に回して頂ければよいのです」

本当の事はいわない。。。。

羽村はいたって冷静な態度だ
金実議員のアタマの中も冷静になっていた

もし。。。。
災害派遣の穴埋めに日本海に第七艦隊の配備を要請すれば。。。。。
アメリカは公然の軍費の要求をする
ただでさえ
第七艦隊という地球上でもっとも巨大な艦艇軍を維持するのは難しい
その軍隊の維持のために今までも日本が支払っている金は「在日米
軍」の維持費の比ではない
それは新造イージス艦の予算を遙かに上回ると予想が出来た

「災害派遣のイージス艦の手配はお任せ下さい。。。そのかわり」
「待って。。。。。」

金実は片目をつむっていた
その要求は呑めない。。。。。
国家予算に割を食う判断をココで下せる訳がないし。
そんな前例を作る事自体が重要な責任の問題になってしまう
目眩のする判断を必要とする本物の「国防」というものを目の当たりにした瞬間だった
よろめく心と体
だが崩れる事なくイスにはついた

「羽村局長の提案を聞き入れましょう。もう1隻のイージス艦の派遣は見送ります。。。。それと予算も通すよう善処しましょう」

金実は自分のミスを認めた上で
国防が机上論では語れない重要な判断の連続である事を思い知った
その上で。。。。
今回の失言がココだけに留まった事に胸を撫で下ろした

「長官の正しい判断に感謝いたします」

初老の軍師の姿が，知の闘将に見えた
知識という戦いは静かで冷たいものと考えがちなものだったが。。。
国を護るという職務につくものは「違う」と感じさせた
知識の戦いに荒ぶる将。。。。羽村の姿に素直に感心した

「話しはこれで終わりね」

いつの間にか額に浮かんだ汗を金実は拭い立ち上がった

羽村は佐々木にドアを開けさせると敬礼をした
金実もまたそれに応じた
背筋を正し，どの女性自衛官にも負けることのないキレイな敬礼を

「素晴らしい敬礼をありがとうございます。防衛庁の顔である貴女には輝いた笑顔がお似合いです」
横を通る彼女の口には「悔しい」という思いと「負け」を認めた，はにかみがあった

「車は用意してあります」
「ありがとう」

歩く防衛長官を情報局の局員が導いた
彼女の歩みはどこか清々しくもあった

「羽村局長！！」

長官が姿を消したのを確認したように声をあげたのは「経理局職員」の男，栗田だった

「独善過ぎます！！これはいずれ問題になると思います！！」

金実の部屋に先に詰めていた経理局の者達には別の妥協案も用意してあったのを，面子を丸ごとを潰される結果になっていた
丸顔の若さがまだ全身に残る長身の彼は栗田を押しのけると，羽村

の真ん前に立ち

「派遣する艦艇の選定まで。。。」

「言ったとおりだ。。。。そのように防衛局に私が連絡しよう」

見下ろす形になっている羽村に
それでも上官である事を意識して敬語を使うが，自分たちのを蔑ろにされたという気持ちは留められていなかった

「強攻策を使って艦艇を増やせば，いずれ叩かれます!!一度は引いて来年の予算に計上するという妥協案だって使えたハズです」

「たわけたことを言うな」

飛び出した自分よりは遙かに若い局員に静かな対応なれど「喝」に近い声

「平井君だったな」

丸顔の平井は驚いた。。。なんで自分の名前をと
通常吹くのスーツには名札が隠されているため顔を見てわかるなんて事はあり得ないのに。。。切れ者羽村の目は驚きに黙った若造平井に

「ならば聞こう，現在国防のために我が国領海に守りの任に着いている護衛艦は何隻いる?」

平井以下並ぶ局員は正確な数が出せなかった

「４５。。。隻ですか?」

「４０隻だ」（注．このぐらいの年での計算で）

「少ないのですか。。。」

若造平井は既に自分たちの知識と意見の浅さを痛感していた
普通に話す羽村の言葉には何年も自衛隊の一線を生きた凄みがこもっていた

「『専守防衛』をこの国が掲げる限り！！艦(ふね)は1隻でも多く必要なんだ。。。。途中で建造を控えるなど。。。もってのほかだ」

恫喝に近い声
怒りをわめくよりも深い戦いの意味
交渉も駆け引きも戦いだ
国を護るというアタマの戦いは深く熱い
平井達はもはや何も言い返す事は出来なかった

「手間をかけさせたね」

防衛庁の日陰の一室に「喫煙室」がある
ガラス張りの小窓から見ても視界を悪くした煙の中，羽村ともう1人の男が座って話しをしていた
二人とも白髪の似合う渋い男ぶり煙まみれの中，優しい垂れ目は労をねぎらった

「たいした事でなくて良かったです」
口から白煙を吐いて
あっさりとした返答
「そういってくれると思ったよ。。。手紙はなかなか洒落ていただろう?」

「シャレにしておきましょう」
そういうと腕時計を見た

「そろそろ執務に戻ります」
立ち上がり煙にまみれた部屋のドアを開けようとした

「羽村。。。。今度飲みにいかないか？いい店があるんだ」
「お断りします」
「連れないな」
彼が誘う店は女の子のいる店で落ち着けない事を羽村は良く知っていた
左のポケットに忍ばせたパイポを耳に挟んむと人差し指を立てて答えた

「新橋にいいの飲み屋があります。。そこでならご一緒しましょう」
立ち食い立ち飲み。。。市井にあるザッパな場所がお気に入りだと告げた
白髪の彼は微笑んで答えた

「いいね。。。そうしよう」

夕日の差し込む窓
真新しい防衛庁のガラスを輝かせる通路を羽村は情報局に向けて帰っていった

第二十九話　知の闘将（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～防衛庁に行ってみよう編～～

ちは～～～
新章に入りました
今回は。。。艦魂物語の真ん中アタリの章になりますが
そのせいか『こんごう』達の出番は少ないです
その代わり防衛庁の方々が少しと
新たな艦魂達が少しでます
難しい話しが多くなって。。。さらにつまらなくなりそうで。。。
わぃ！！

そして
問題だった「艦魂とは？」という部分に入ります
なので
とても受け入れられないという人も出てくると思いますから注意して読んでください

そんなヒボシは防衛庁を訪問してみたいと思い。。。電話してみました（突然）
ですが。。。。
防衛庁て突然訪問しても絶対にはいれないらしいです
当然ですよね国防の中心なんですから
団体で予約すると割と早く入れるらしいのですが5人～～ぐらいからじゃないとダメみたいです
一人でも良いらしいのですが。。。
ガイドの内局職員の人と。。。何話していいかわからなくなってしまいそうで

でもいつか入ってみたいと思ってます

そうすればきっと小説にもフィードバックされて良い結果になると信じています！！！

さて（藁）防衛庁関係　人物評

羽村雅彦（はむらまさひこ）運営企画局長　５１歳

新章，一発目に出てきたこの方は
例の不審船事件の時に出てらっしゃった方です
粉川くんの所属する局の大ボスです（藁）
ヘビースモーカーでタバコを一日６箱吸うかなり健康じゃない人です（爆）
実はものすごい秀才のため色々と防衛庁の影働きなどをしていますのらりくらりとした態度とはうらはらに
本心では主権国家としての強い日本を目指しながらも「タカ派」では国が動かないことをよく理解している人であり
流れの中からも改善策を模索するなど柔軟な姿勢で政府に臨むタイプで防衛庁にはなくてはならない人

家族に奥様と娘が二人いて下の娘が「陸上自衛隊」の一佐と付き合っており結納間近なのだが
「陸さん」という世代のため会おうてしない，だからか？頻繁に自宅からの電話が入り執務室で口論になっているところを何人かが確認している
それでも
奥様には頭が上がらないのか電話口でも大人しい

粉川の父である粉川将補とも面識があり
粉川の動向にもそれなりに目をかけている

佐々木淳運（ささきあつし）営企画局次官　４２歳

羽村さんの下で働いている人で。。。。いつも羽村さんに振り回されながらも
秀才の上司に着いていこうと努力している人です
粉川くんを直接叱ったりする人はこの人です（藁）
上司に羽村という秀才ながらも問題の多い人物を持ち日々苦労している優秀な次官
「不審船事件」の一件からも解るように防衛政策においては「タカ派」よりな面を持っている
「攻撃しなかったことで我が国が無力な。。。」の下りでもわかるように目に見える防衛というものに主眼をおく「今時」の次官であるが
冷静さがたりないわけでもなく秀才羽村の背中を見ながら色々と学ぶ事になる

今泉剛防（いまいずみつよし）衛政策局調査課職員　４４歳

「不審船事件」で佐世保に調査に来た調査課職員
バリバリのキャリアで背広組である彼は現場が起こす問題を毛嫌いしている
彼は内閣府官僚からの出向のため特に事件があれば「犯人捜し」「首切り」などを優先的におこなったりもする人だが
国防の意識はしっかりと持ってもいるため

防衛庁にとっても必要な人材でもある。。。そのせいか事務方に手入れが入る前に現場の末端を切り捨てるというやり方が多いようだ現場という前線で働いている者達を末端扱いするのはどうかと作者も思うが。。。（藁）

佐世保では粉川に言論無視をされたため防衛庁に戻って問題視しようとしていたが。。。予算審議委員会の一件で羽村が防衛庁の面目を立たせたことによりもみ消される事になる（それでも問題自体が消えたわけではなく調査は継続という形になっただけ）

そんなこんなで年末行軍の中
より内容が多くなり一章も長くなっていきそうな「艦魂物語」ですがよろしくおねがいします～～！！

ではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～

第三十話　祭りの町（前書き）

年末行軍まっただ中。。。。
みなさん～～如何お過ごしでしょうか～～～
ヒボシはそろそろ限界です。。。
酒飲み達を家から追っ払わないと死にますょ～～～

第三十話　祭りの町

夕日のさしかかる時間になっても「防衛庁」が静まる事はなかった
職員すべてが緊急事態の「災害派遣」に足を速め行き交う音が聞こえる
非常事態に迅速に動くにはまず「頭」である事務方の方で仕事の差配を決める必要があるからだ
そんな騒がしさは羽村の執務室にも届いていた

「悪いと思っている」

わめき立てる受話器を下ろし，口をへの字にまげながらも反省のない羽村
電話の相手は「警備局長」
つい先ほどまで「防衛庁長官，金実」と問答をして戻ったばかりの部屋では電話の引き継ぎをしている職員が困った顔をしていた

「勝手に派遣艦艇を決めるな！！」
受け取った受話器を耳から離し大きな声で「羽村だ」と答えた先の返事はそれだけだった

「早く決めた方が良いだろうに」

テーブルに備え付けの受話器を戻し
モールス信号のような断絶音だけになった回線を切るとパイポをくわえた
引き継ぎの職員が下がった後
長官室に比べればシンプルな作りの局長室に残った佐々木が聞いた

「あっけなく引き下がりましたね。。。。金実議員（防衛庁長官）」
朝から揉めていた状態から考えるにも，あまりにもあっけない幕切れは気味の悪いものにみえていた

「大方。。。官僚に唆されたのだろう」
「でしょうね」

今回の悶着が出来レースである事を羽村と佐々木は最初から見抜いていた
何故，今日になって護衛艦艇の予算を来年に引き延ばすなどと言ってきたのか？
それは「災害派遣」の費用とは別に出た「金」の問題だった
官僚が考える「数」の空論では，今回支出された5億ドルの回収を何処でするかという問題があったという事だ
だが
こういう費用の計算が突発的にできるものでない事など何処の国でもわかっている事

そこで
金実に付いている官僚が「この事件」を利用してに防衛費削減を実行しようとしたという次第だったのだろう

「今頃。。。怒鳴られている事だろうな」

パイポを揺らしながら羽村は皮肉な笑みを浮かべたが
相手もなかなかの人物だと認めていた
普通なら自分が大手を振って切り出した論議に固執して支離滅裂な理論を振りかざす政治屋が多い中
予算延期を最後まで叫ばなかった金実は優れた判断で幕を引いたか

らだ

女とはいえ勉強熱心な金実はこの話しを決してごり押しはしなかった
途中で。。。。。コレが誰の差し金なのかに気がついた

だから防衛予算の押し通しを認め
新造の艦艇を認め

今頃，車の中で自分付けの官僚に「作戦」を与えた内閣府官僚に怒りを爆発させている事だろう

「実に鮮やかな退場だった」

皮肉ではなく相手を褒めてそうこぼした
男性議員でもなかなか実行できない事を見事にして除けた金実に羽村はそれ成りに敬意を払った
そう言うと
「来年も揉めたらこの方法で予算を押し通そう」と陽気に

「何言ってるんですか？」

秀才は自分の策に溺れたりはしないが。。。必ずしも良い事を考えているとは限らないところが怖い
イスを揺らしヤニ切れを既にあらわし始めている羽村はそれでも冷静に
人差し指を揺らしながら言った

「来年。。。。防衛庁長官が「同じ人」とはかぎらんだろ？」

佐々木もわかっていた

内閣府が決める防衛庁長官など「適任」で来る議員などいない
基本的に「大臣」になるためのステップアップの足場ぐらいにしか
思っていないのだから
逆に金実のように「女」である事をバカにされる事をキライ勉強熱
心でココにくる者など珍しいぐらいで
その金実を利用して防衛費削減の提案を推し進めようとした内閣は。
。。かなり狡賢いとも言えた

「ああいう人は早く国のトップに行けばいい」
「来年も金実議員だったらどうするんですか？」

イスの上，秀才が暗い思案で「知恵」を楽しむ顔に佐々木は切り返
した
防衛庁長官は議員にとって名誉ある職務という意識を持ちにくい
ともすれば「反戦美化国家」である国民から叩かれ役となる事が多
いのだから「首のすげ替え」など頻繁にあるポストだからだ
来年同じ長官がいる可能性など。。。。佐々木の切り返しに羽村は

「その時には我々の「味方」になって下さる事だろう」
「そうですか？」
「勉強熱心な方だ。「国防」を知ればそうなる。。。。ならないの
ならただの政治屋だ」

決して相手を「女」と侮らなかった羽村の態度が金実に「策」のカ
ラクリを気がつかせたように
政治の目に見える部分と。。。
見えない闇と

見せない影。。。。
国民の顔色をうかがいながら居座るポストに良い居心地を求める政

治屋
選挙区の基盤を親から受け継いだ二世議員にタレント議員。。。。
本物の政治家などもういない

羽村はそういうものも十分に理解していた
しかし理解したから「国防」に対する態度を怠るという事は絶対に
しない男だった
きつく尖った目のまま

「彼らが（政治屋）が守りたいのは「地位（ポスト）」と自分の「名誉」だが，
我々はそんな小さなモノが守っているわけじゃない」
「勿論です」

佐々木の目も尖る
国防の任に付く者が守る物は「国」それが心の真ん中にいつもある
自分の名誉や地位を守るために躍起になっている政治屋と比べるま
でもない「守るべきもの」

お互いの会話で緊迫してしまった場を和ますためか羽村は，目の前
厳しい表情になった佐々木に頼むように

「だからこそ，こういう茶番は君らで解決できるようになってくれ
んとな」

冷やかされた佐々木は
「手紙は局長にでしたから」
駆け引きを促した相手を知った皮肉を返した
相手を知ってはいても口にはださない。。。そのあたりは，そつな

く優秀な部下である佐々木に
イスを回し背を向ける
「困ったものだな」と羽村は苦笑いをした

「失礼します，佐々木次官，粉川一尉が登庁されました」

軽いノックと共の顔を覗かせた女性職員に
「はいれ」と命じたのは羽村だった
佐々木の顔に
「いいだろう事件（不審船事件）の話しを聞くのに別々に聞くのは手間だ」
そうでなくても
不慮の災害派遣の件で粉川の登庁は先延ばしにされていた
昨日には東京に帰ってきていた彼の報告書に目を通す時間を取ることなど出来ないと判断した佐々木は，粉川に報告調書のあらために一日置くと連絡していた
「不審船事件」も十分に防衛庁にとって改める必要のある事件だ
このまま先延ばしにするわけにもいかないしココは羽村の歳を感じさせぬ判断力に返事した

「粉川一尉，はいれ」
「はっ！」

歯切れ良い返礼とともに入室した粉川だったが。。。その顔に
佐々木は。。。額を抑え
羽村は口元を抑えた

顔面に残る明らかに「殴打」の跡の顔がそれでも真面目な顔で敬礼
している姿に
「粉川。。。。なんだその顔は？」
佐々木は引きつった顔で聞く
乱闘の後という顔をさらしたまま真面目に敬礼が出来る粉川の神経
を疑う

「艦とぶつかりまして」

痛めた口元をかばいながらも滑舌の良い返答
粉川の答えはたしかに正直な答え
事実『こんごう』とぶつかった（殴られた）のだから正直な返答だが
目の前にいる「人」に返すには不的確な答え

「艦とぶつかった？。。。。だと」
「はい」
不的確な事態に
この素直な返事が腹が立つ
嘘を言わないこの態度が。。。。
佐々木次官にとっての頭痛のタネ，粉川

粉川は情報局きっての問題児と言っても過言ではない存在だったが，
それは彼が狡賢いからとか仕事に対して熱心じゃないからという所
から来ていないのが問題だった
真面目に勤務しているのに。。。。何故か問題児という取り扱いに
苦労する存在
憎みきれないキャラという所にもあった

「艦（ふね）と。。。。ケンカしたのか？」

すっかりあきれ果てた佐々木の後ろイスに座ったままの羽村は粉川の顔を眺めながら聞いた
「。。。。ちょっと機嫌が悪かったみたいで。。。」
「機嫌が悪かった。。。『こんごう』は機嫌が悪かったのか?」
粉川が相互監視官として乗船している艦が『こんごう』である事は十分に知っている
「はい」
お構いなしの正直者に佐々木はキレた

「バカもの!!!「人」かなんかと勘違いしているのか!!貴様は!!誰に殴られたと聞いているんだ!!」

大激怒
粉川が本庁に登庁し始めた頃から，佐々木の激怒は慣例となっていた
隣にある情報局の「表」事務室には激怒が伝わり。。。。笑い声が。。。

「艦にぶつかったんです。。。。ホントに」
居心地悪そうに目を泳がす粉川の襟首を締め上げて
「艦は。。。。こんな明確に「拳」とわかるようなぶつかり方をするのか?」
あきらかに左顔面にパンチを食らっている跡
「オマエとぶつかった艦は，右利きか?」
「あっ。。。そうですね」
拍子抜けな程のアホぅな返答

「そうか。。。『こんごう』は右利きか」

詰め寄った佐々木の会話から羽村はパイポを加えたまま聞いた

「局長！！！」
艦艇を「人」か何かと勘違いした会話を平然と助長する羽村に，佐々木は怒りで真っ赤になった顔のまま怒鳴った

「まあまあ」
両手を出し制止のポーズ
一人青筋を大いに立てた佐々木と，後ろで自分の置かれている状況を無視したまま困った顔の粉川の前
笑うに笑えない羽村は

「とにかくぶつかった。。。という事だな」とあらためて聞いた

目の前で固まった佐々木と粉川。。。。
お互いがどうにもならない状態を理解して続けて言った

「報告書出してくれ」

「艦長の判断は迅速にして的確。。。。」
プリントアウトされた報告書を本当に読んでいるのか?と思うほどの早さでめくり
渋い表情のまま顔を上げた羽村は，目の前に立ったままのこ側に聞いた
「防衛庁の指示を待ち，それに従った。。。。なるほど」
この報告書にある事をそのまま「今泉」にぶつけたのでは「調査部」が納得しないことは容易にわかった
正論だけでは事件を解決できない。。。。特にこういう組織では通じないという事だ

両手を組んだまま
微動だにしない羽村の視線は真っ直ぐ自分を見ている粉川に尋ねた

「艦内で揉め事はなかった?」
「ありませんでした」

自分の見たままの正しさを立証できるという強気な返答
「艦長は冷静だった。。。と?」
「はい,冷静な判断でした」

粉川はミサイル攻撃の準備を間宮艦長がしていた事については言及しなかったが,準備した段階については的確に書いていた
まず,準備をして防衛庁に指示を仰いだと
もちろん粉川が「防衛庁に指示を」と発言した事は伏せられてはいたが,聞かれれば答える必要も知った上での判断だった

沈黙

横に共に立つ佐々木次官も報告書を読んでいる
羽村は手元に置いた文書をペラペラともう一度めくりながら深く思案している
沈黙が苦痛に変わるのは個人の焦りに準ずるものだ
粉川は勢い羽村の机に近づくと

「艦長の判断は個人のものではありませんでした!!正しく防衛庁の指示に従ったものです!!それでも責任をと言うのなら」
「更迭も解任もしない」

焦る若造の額を押し返し羽村は答えた
だがそれで不安が解消されるわけでもない

「では。。。。何を調べているのですか?」

「こういうものは常日頃しておく事なんだよ」
説明を渋る羽村の代わりに佐々木が答えた

この事件は色々な要素を孕んでいたが今回「災害派遣」という大事
が起こったことで「世間的には」収束していた
むしろすぐに物事を忘れる国民から遠くなった
唯一コレを問題としているのは現段階では同じ庁舎に住まう「調査
部」だけとも言えたが
それが良い事とはほど遠い事に羽村は気がついていた
身内で事件を抉りあっても得られる物は少ない
むしろ塩の揉み合いで痛み分けになるのが関の山

それでも
事件が無くなってしまうというのは「防衛庁」として望ましくない

領海を侵犯する事件による対応策を提示するための「窓口外交」を
増やすためにも風化してはならない事件である
忘れないうちに政府との取り決めを作り
「国防」を前進させる必要がある
それも国民が「災害派遣」という大事に目を向けている間に。。。
騙すべき相手が自国民というのはやり切れない事だが
この国の「国防」の意識が低いうちは自衛隊がどう動いても「違憲」
とする味方が強いのだから，手段わ選んでいるヒマなどあってはイ
ケナイ

しかし
そのために優秀な艦長を更迭するのは「利害」としては「損失」に

も入る
そこをカバーしつつも「事件」として生きながらえさせる方法を考えていた

絶ち切れた討論にまだ「深部」の事情を理解できない粉川を，羽村の机から引きはがした佐々木は耳打ちしたし

「粉川を。。。。泳がせましょう」
「そうするか」

羽村は佐々木が同じ事を考えていたことに感心した
事件の当事者（居合わせたための）である艦長「間宮」は来年の目玉であるＢＭＤ構想を実証するために先進の試験を重ねた経験豊富で重要な指揮者
これを更迭して。。。。他に実験を成功させる確率を挙げる艦長は今はいない

ＢＭＤ構想は海自にとってもっとも大事とされる試験で
これの成功が次期イージス艦の建造に大きく関わっている事は言うまでもない

艦長に責任を問わない代わりが必要となるならば小さな波紋で事を濁すしかない

粉川を泳がす
当時その場に居合わせた粉川を。。。。この顔（殴打痕まみれ）から登庁させない理由は色々と作る事が出来る
小事ではあるが
事の次第を記録した彼が不在となれば「情報局」の隠蔽が疑われる

事によってしばらく事件を風化させないだけの事はできる
報告書だけでは満足しないのが「調査部」だという事を佐々木もは
村もよく理解していた

顔を上げると軽く咳払いをした羽村は

「ところで粉川くん。。。お父上は元気かね?」
イスから立ち上がった白髪の策士は決まった作戦を実行するために,
粉川の注意をそらす話題に触れた
突然の質問に粉川は目をパチクリとさせたが,おずおずと答えた
「元気です。。。相模湾が見渡せる所がいいなんて言って藤沢にマ
ンション買ってのんびりしてます」

羽村は粉川の父と面識があった
粉川の父が将補だった時,羽村は一佐として艦長をしていて,その
ままスライドで基地司令になっていた
羽村局長と父の間柄は息子の粉川もよく知っていたが
こんな場所で急に話されるともおもっていなかったせいか困った顔
のままだ

「たまには会わないのか?」
背中を向けたままの問い
「全然です」
「よろしくないな」

簡潔な会話の後,羽村は向き直ると
少しばかり優しい顔で

「祭りの町を見に行くついでにお父上を誘ってみたらどうだ?」
「祭り?ですか?」

話しの急転換に混乱している粉川の肩を佐々木が叩き

「横須賀から佐世保。。。それ以前から休みもなかっただろうし。。。これからも休める予定はないからせめてもの事だ。明後日から開催の「横須賀港フェスティバル」の視察をしてこいって事だ」

「いや！！そんな気にされても」

粉川の肩を掴んだ佐々木の手に力が入る

見上げる上司の顔は。。。口は笑って目は凶器

「その顔で登庁されると迷惑なんだ。。。。理解しろ」

さすがに暴打にまみれた顔を晒したまま登庁するなは正論

釈然としないという顔ではあったが苛つきに光る上司の目に了解した

「とういうわけで閉め出された」

庁舎を出たところで佐世保からの配達を頼んでいた大荷物を受け取った粉川は，同期の桜たちに囲まれていた

「その顔じゃ佐々木次官も怒るって」

腫れ上がったまま左頬をつつく友達の佐野は呆れたように言った

小太りの佐野は「陸自」からの出向で，内局に来てから落ちた運動量に合わせず飲み食いをするために最近，飲食に規制を駆けられている輩

自分の損傷に自覚のない粉川は

「そんなに酷いか？」

「酷いよ。。。誰とケンカしたの」

同じく同期の小柳はこの仲間内では一番の長身で１９０の男だが，
ひょろりと高い姿は例の「ナイトメア」の骨にも似ていてあだ名は「骨柳」
ご多分に漏れずメガネ愛用者

「ケンカに見えるか。。。。」

まさか本当に艦魂である『こんごう』に滅多打ちにされたなどとは言えないが
艦にぶつかったでは言い訳として成立しない顔になっていた事をやっとで確信した粉川は
自分が登庁にふさわしくないといった佐々木の顔を思い出して溜息を付いた

「ところでオマエらどうしたの？」
「飯食いに行ったの」

食堂は庁舎の中にもあるがあえて外に食べに行く理由は気分転換を兼ねているから
「災害派遣」の件で全防衛庁職員が動き回っているのだから食堂だっていっぱいだ
そんなところで
お互いの苦労まで顔をつきあわせて飯を食うのは。。。気持ちの良いものじゃない
「なるほどね。。。」

「飯ぐらい外でしたのよ」
粉川の相互監視という重責も理解している同期の桜は肩を叩いて呼

んだ
「そうだな。。。。中しんどいしね」
粉川も疲れた顔で笑って見せた
歩く中にあるのは愚痴だ
言葉に出して愚痴らなければ自分たちが，いかれる程「国防」の仕事は重い

「それにしてもなんでオレ達って何でモテないのかね?」
正門から離れた所で始まった少しの談笑にいつも通り最初に愚痴った佐野
骨柳はいつもの事なのか顔をしかめるだけ

「国を守るって大事な仕事してるのに。。。なぁ〜〜」

粉川は太ったからじゃないの?と言いそうになったが
隣を歩く同期の吉井が皮肉って答えた

「デブだからだろ?」
「うるせえ!!陸自に戻ればすくに痩せらぁ!!」
それは佐野の口癖
それにしても晩婚型一直線な仕事場
上司の紹介でもなければ結婚なんて夢の世界だが。。。。結婚した後で女房との時間がしっかり維持できるのかも夢の世界
結局そう言うことがネックになっている自衛官

「警察官だって敬遠される世の中だよ。。。佐野は結婚したいの?」

粉川は目の前本気でつまらなそうにしている佐野に聞いた
「したいよ!!一回ぐらい!!３０も越えた男がずっと独り身なんて気持ち悪いよ!!。。。粉川は結婚してるから。。」

「自分で言い切るなよ」

骨柳は呆れたというより達観した顔で佐野の絶叫を断ち切ると
「色んな意味で世の中は，自衛隊に冷たいね」
本音を吐いた
「災害派遣」は自衛隊を国民に「必要な組織」として認識してもらうための慈善事業にも近かった
「国防」の砦として存在する事には否定的な日本国民のための政治的ゼスチャー
その為に海外に派遣される兵士達
海外の大事に協力する事は大切な事とわかっていても。。。やり切れない気持ち
自衛隊員というだけで「反戦」を掲げる人達から疎まれるのは日常的すぎて。。。悲しい

「なんで自分の国守ろうってオレ達が嫌われ者なんだろ」
「護衛艦の予算で揉めるぐらいだから。。。嫌われてるんだろうね」
骨柳はすでに金実議員が予算の事で揉めたことを知っていて
それを「民意」と奮われた事に気分を害していた
佐野は諦めたように大きな溜息をつくばかり

粉川は小柳の言葉に，同じ想いで海の守りに徒事する「艦魂」達を思い出し
すっかり陽の落ちた空に顔を上げた

「国防の矢面に立つ彼女達」。。。。。

荒海の中，不審船を追うという任務をこなした彼女達にどんな罪があるのか?

あるわけが無い「罪」なんて。。。
国を守りたいという思いが大きいからこそ。。。。逃げて行く凶悪な船の姿に涙した『こんごう』の姿を思い出すと
判断ままならない事に右往左往する本庁の実情に申し訳なく思った

「なんでかね。。。。むしろ愛されたいよね」

護衛艦の魂
年若い女の子である彼女達までが嫌われている事に粉川の落胆は隠せなかった
何かしてあげられないか。。。。

粉川はそこまで考えて顔を上げた
「小柳！！車貸して！！」
会話が一段落ついた事で自分たちの部署に戻ろうとしていた小柳を粉川は呼び止めた
いつもの事と慣れた仕草で小柳はキーを出すと投げた

「ガスは満タンで返せよ」
「わかってる！！洗車もしとこうか？」
小柳は粉川の申し出に首を否定と横に振った

「洗車だけが趣味だから」
仕事まみれの自衛官らしい回答に苦笑いを浮かべた粉川は担いでいた大荷物と一緒に走っていった

第三十話　祭りの町（後書き）

カセイウラバナダイアル～～年末決死編～～

。。。。。。大人の世界はストレスでいっぱいです
そして昨今の経済状態で心のバランスを失う大人が多いです

大人＝責任のとれる人ってのはもう過去の産物です
てか
そういう気持ちがわかってしまうヒボシもどうか？と思いますが
そのぐらいストレス社会に生きている人達が羽目を外す時期です
ほぼ毎日にわたる飲み会でヒボシもかなりヤバイです
そして飲んだまま感想などを書き込みしてご迷惑をかけてごめんなさい。。。

もともと飲む（お酒）のは強い方なのですが
強いと飲み会では生き残り組みになり。。。。当然先に泥酔した人の看護とかしないといけません。。。
また
こういう時に限ってめっちゃ飲む人とかいるんです
よりによって弱いのに。。。。
こういう人が続出する事が許されるのが忘年会です。。。。
泣きそうです

そんなに何に苦しんでいるんですか？大人！！
どうして不満があるならちゃんと会社に言わないよ！！大人！！
でも。。。
言えないんです。。。。大人になると守るものが増えて

会社に多少の不満があっても言えないんです。。。。
「オレはフリーダムだから」なんて言っていたバイトくん。。。。
それが通用するような世の中はもうなくなってきているんですよ
もしそれを実戦したいなら田舎に帰れ！！！
もう。。。。ヒボシを困らせるな！！！
なんで自分より年上の男に説教しなきゃならないのか。。。。疲れ
ますよぉ～～
明日も続く決死行。。。。
生きて帰れると信じて戦ってきます！！

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～

第三十一話　瞼の妹（前書き）

お晩です。。。。
皆さん元気ですか！！！
除夜の鐘はつきましょうね！！
ヒボシはやっとお休みに入ったのでこっそり小説挙げてみます（藁）

第三十一話　瞼の妹

自分の背中よりはるかに大きな木ケースに入った一升瓶４本と箱詰めの焼酎を引きずって車に向かって行く粉川の姿に

「ホント変なヤツだよなぁ。。。本庁（防衛庁）宛てで酒を山ほど送ってくるヤツってアイツぐらいじゃねーの？」

「まぁ，確かに変わり者だ」

眺める小デブの佐野にもたれかかった吉野は事務方の中でも事，防衛庁宛に届けられる「物」の整備，警備，目通しなどを担当している粉川が出向でどこかに出て行けば，行った先から必ず「地酒」や「日本酒」を大量に送ってくる事を良く知っていた

「横須賀に母親代わりだった人がいるんだって。。。その人が酒好きで買ってくるんだってさ」

「粉川の母親って早くに亡くなって，でも父上は「海の男」でしょ。。。」

同期の桜たちは粉川の父親が「海上自衛隊将補」であった事もご存じで

海で防衛のために働く男の家庭に起こった悲劇も知っていた

粉川の父がリムパックでハワイに演習に出ていた時に悲劇は起こった

粉川の母は元気一番の人で家を留守にする事の多かった夫をよく支え，一人息子をこよなく愛し大切にしていた人だったが。。。。

不慮の事故の前にあっけなく世を去ってしまった

「恩人か。。。。その場にいなかった父親より大切に思えるわけだ」

駐車場に向かって姿を消した粉川の過去に，吉井は大量に送られる
酒が亡き母親への想い。。。幼かった自分を助けた身代わりの母へ
の感謝を忘れぬ姿に，いつも快く受け取りをしていた

「良く貸したな新車のＢＭ」

給料の使い道など
自分の趣味に宛てる程度の事しかないほど多忙な自衛官の宝だった
車を，抵抗無くキーを投げた小柳に吉井は聞いた

「粉川にだったら貸していいと思うんだよ」

吉井の隣，ひょろりと長身の小柳は防衛大学以前から粉川を良く知
っていた
母亡き後
一度はどん底まで落ちたであろう幼い彼を支えた人がいるのなら
それに恩義を感じていい歳した男になっても土産を買って帰ってく
るそれを「母親代わりの人」の所まで持って帰りたい気持ちは良く
わかる
新車だろうが車を貸すことに抵抗などなかった

「持つべき友だな。。。。いこうぜ」

夜を濃くした闇の下
都会の照明の方が，星より瞬く東京で「国防」の重責を担う男達は
それぞれの職場に戻っていった

横須賀港フェスティバル

例年なんらかの理由で開港祭やイベントを開くこの町
開港の歴史はそれほど古くはないが大抵の事件や歴史に関係した出来事はココで起こっていたりもするという「いわく」のある港でもある
戦国時代初期に明国（みん）との貿易はあったらしいが，すぐに下火となりその後は江戸幕府の鎖国にならえで国内貿易の港として以後２５０年を過ごす

この緩慢とした港に一大事件が起きたのは

幕末，アメリカからの通商使節として訪れたペリーが久里浜に上陸するという事件で
それが近代日本への移行への門を開き大きな港となった
明治，大正という間に大日本帝国横須賀鎮守府と軍港の町に変貌し戦後はその使い勝手のよさから長く「アメリカ第七艦隊」の元に置かれ現在も大部分をアメリカの「領土」として機能している

アメリカ第七艦隊が保有する大型航空母艦を整備できる唯一のドックを持つ
（これは戦中，空母信濃を造船した弟６ドックの使用が唯一だから，ただしスーパーキャリアであるキティーホークは艦艇の船体はドックに入ったが，アングルデッキの航甲板は横に溢れるという形になり，現在大型ドックの新設の必要性に迫られている）
（ただ。。。。。日本が空母を保有しない以上は新ドックの建造はアメリカの出仕で行うべきであるという意見もある（当然と言えば当然ですけどね））
それ以外で空母の修復を出来るドックは「呉」にある戦艦大和を建

造したドックという事になるが
瀬戸内を米空母が航行する事は非常に困難であるという事を考えるに唯一である

日本のアメリカとの防衛の窓口である横須賀に占める割合は未だに巨大であり
アメリカ自身がその事を重要としている事も多々伺える

市民感情においても，その事は意識的な配慮の多くが成されているため「沖縄基地」に比べると抜群に米兵による犯罪率が低い
厚木基地や横田などにも徹底した規制がしかれている

横須賀は軍港である
今も

軍の持つ「戦争」のイメージを払拭するためなのか毎年，何回かのイベントが日米共盛んに行われる
（今年最後の目玉はＣＶＮジョージ．ワシントンの一般公開でした）
（今年上半期の目玉は，さよならキティー．ホークの一般公開でした）
（艦魂物語の中では，アメリカ第七艦隊空母打撃群の大将としてキティー．ホークが君臨中）

「結構いるね」

粉川が横須賀に入ったのは顔の腫れを抑えるための休養をとった翌日

小柳から車を借りて，ありったけの酒と自分用のビールを乗せ，朝一番で横須賀港に向かった

フェスティバルと言う祭りであっても艦艇が公開される日数はたった2日だけだ
滅多な事では乗船出来ない護衛艦に対する関心は一般の人にも高いらしく列をなして並ぶ姿が曇り空の早朝にもかかわらず見受けられる

今回目玉であった『おおすみ』が災害派遣で出払ってしまった割りにはの人出は悪くない
車を基地内の駐車場に置いた粉川は背を伸ばし大きく欠伸をした
ココにくるのは2週間ぶり
およそ一ヶ月の間で自衛隊という組織を揺るがす事件が3つも起き，世間の関心が集まる中でフェスティバルを敢行した海自
人の関心が集まっている時に是が非でも海自を少しでも知って貰おうという気持ちの表れでもあるが。。。。
そうまでしなくてはならない事がこの「国」の「防衛」の仕事を「戦争への切っ先」であると見てしまう国民のもつ間違った不満を解消するための過剰なサービスとも言える行為にもなっていた

たくさんの親子連れのあるく桟橋を眺めながら粉川は考えていた
昔は海自の勤務地としてココにいたし。。。
父親もココに勤務していたから，知った我が町だ

腕時計に目をやりながら
昨晩久しぶりに父親に電話した事を思い出しながら歩いた

「私はココでのんびりしているよ。。。彼女の所に行くならよろしく言っておいてくれ」

昔から
自衛官。。。荒々しき海を戦う男とは思えない程におっとりとした
口調の父は，息子からの電話にも変わらぬゆったりとした態度で。。
。
だが簡潔な言葉を返した
少なくとも3ヶ月に一度は父親に電話はしているが
どこかに出ようと誰が誘っても足を運ぶ人でない事もわかっていた
そのかわり
自分では急にどこかに旅にでるという。。。。変わり者の父と子

母代わりの彼女にはよろしくと，一言そえた言葉で短い電話は切れた

「わかってたけど。。。。」

ゲート前「身分証」を提示してバースに向かう
昨日とは変わりくすんだ空模様が親子の間を如実に語っているよう
に見え
どこですれ違ったのか。。。。親一人，子一人になのに
歳と共に遠ざかる縁をもの悲しく思った

「あれは。。。」

曇ってはいるが雨はなく，一般の人が多く見える横須賀基地は普段
見ることのない世界で新鮮な景色
特に艦魂が見えるようになってから粉川の視界には色々な「女」達
が見えていた
その目がこの基地で最初に見つけたのは

『たちかぜ』の姿だった

おそらくＤＤＧたちかぜの艦魂と思われる彼女は前甲板に装備されたアスロック発射装置の上に足を放り出したように座っていた
肩にかかる黒髪ショートのストレートヘア，少し糸目な感じの顔の彼女は手元に寄る鳥たちと戯れている
制服が海自のものでなかったのなら
白のキャミドレスでも着ていれば。。。鳥を呼ぶ天使のようにも見える

「艦魂にも。。。親とかいるのかな？」

『ちょうかい』から『こんごう』誕生の時に起こった事件は聞いていたが
それでどうやって「艦魂」が誕生するのかがわかった訳ではなかった
呆然と目線を走らせ
思い出してはみるが彼女達は常に先に生まれた者を「姉」とよび後から産まれる者を「妹」と呼ぶ。。。。。「母」と呼ばれる者もなく。。。「娘」呼ばれる者もいない

「姉妹」しかいない。。。。親はいないのか？

両手に寄る鳥たちと会話をするように
自分の隣に並ぶ鳥たちを，子のように慈しむ目の『たちかぜ』の姿に。。。
それでも年若く，せいぜい２０代前半の女性を見ながら
艦魂もある一定の歳を経たら「母」と呼ばれるようになるのか？などと考えた

鳥が逃げてしまったら。。。そう思うと声を掛けられずいた粉川の背中に声をかけた者がいた

「粉川さん?」
「。。。。。『しらね』さん?」

声の主
それは横須賀最後の夜に自分をモルモットにした艦魂『しらね』
あの後アトミックな『こんごう』の一撃を食らったことを未だ体が
忘れない。。。
そのせいか，つい後ずさりした粉川にそんな事はとっくに忘れたのか
久しぶりの相手を確認するように眺める『しらね』

先ほどまで見ていた『たちかぜ』に比べると身の丈も小さな彼女だ
が，横須賀基地に詰める
第一護衛隊の旗艦でもある彼女は
かっちりとした海自のダブルジャケットにタイトスカートという姿
で目を大きく開いた困惑の顔で粉川を見て

「どうしたんですか。。。。顔?」

湿布で隠していてもわかる程の腫れ
ゲート前で身分証を見せても怪訝な表情をしたｗａｖｅの姿。。。
やっぱり殴打とわかるかと諦めた顔は

「ケンカしちゃいました。。。『こんごう』ちゃんと」

嘘を付く必要のない相手に苦笑いで答えた

粉川が『しらね』に導かれ連れてこられた所は『こんごう』達がグ

ループルームに使っていた部屋に似ていた
もちろん護衛艦しらねの内部にあるのだが。。。
それは艦魂が見えない人には入ることもできない部屋
作りは各々の趣向を反映しているのか清潔感というよりも可愛らしさを優先した白い壁で囲まれており
これまたどういう原理かは謎だが外が見えるようにテラスが併設されている

「もう!!聞いて下さいよ!!!サイアクー!!」

その着いたばかりの部屋の中，『しらね』の帰りを待ちかねたように『あけぼの』が叫んだ

『あけぼの』とは『むらさめ』『いかづち』達『あめ』９人姉妹の八女
長女の『むらさめ』から始まる，この姉妹は変わり者が多いらしいが『あけぼの』もまた例外ではなさそうだ
大きな身振り手振りで話す彼女は。。。。今時ガングロ（と言ってもちょっと日焼けした程度）の髪もモカブラウンにエナメルカラーが入った天使の輪キラキラの激しいカラーでロングヘアには惜しみなく巻き毛がかけられている

「も～～クソガキが私の甲板にジュースこぼしたんですよ!!」

粉川の事などそっちのけの『あけぼの』はリップグロスで生々しく輝く口を尖らせて

「静かにしなさい」

アメリカ人のようなオーバーアクションの『あけぼの』に指を立て

て注意しながら
粉川のイスを準備させる『しらね』のとなり
オーバルのガラステーブルの前，お茶の用意をしていた女の子は初めて見る子，その顔は粉川を見上げて固まっている

「『なるしお』。。。。。「人」よ。。。。前にも見たでしょ」
「人」の姿に驚いた彼女はティーポットを持ったまま部屋の隅っこに逃げてしまった

「気になさらないでください，触れられる人を間近で見たことの無い子なんで」
「大丈夫ですよ」

気遣いを示した『しらね』に粉川はまたも苦笑い
「人」に合うのは確か５０年ぶりと『しまかぜ』が言っていた。。。。
その久しぶりの人の顔が。。。。これじゃあねと

「粉川さんからも!!甲板にジュースの持ち込みはダメ!!って言ってくださいよ!!」

酒焼けしたような低い声の『あけぼの』は粉川に詰め寄って座ると愚痴りだした
見るからに女子高生な彼女は粉川的には苦手な分類の人種

「ああ。。注意します。。。出来るだけ」
「徹底して!!!も～～～ああいうのが，お肌にくすみとか作るんですから!!」
「でも。。ほら人がたくさん来ると楽しいでしょ，課業するより」
「佐世保じゃあるまいし，ココじゃ朝の修練走なんかないですよ!

！」

「そうなの？」

イスから乗り出した『あけぼの』の肩を叩いて自分のカップを手にした『しらね』が間のイスに座ると

「修練走なんて実施しているのは佐世保ぐらいなものですよ。。。。妹に会いました？」

粉川の手元にもアールグレイの香り高いカップが置かれる

「『くらま』さんですよね，会いました」

思い出すのも。。。自分より大きな女は初めてだったのだから忘れようもない

「『しらね』さんに似て小柄な方かと思っていたので。。。びっくりしました」

「そおねぇ，昔は三つ編みの似合う可愛い子だったのに。。。すっかり大きくなってしまって」

懐かしそうな目線でティーカップのへりを指で触る『しらね』の言葉に固まる粉川と。。。部屋にいる艦魂達

「三つ編みとか。。。してたんですか。。。」

粉川にはあの。。。上から人を見下したような視線をくれたおそらく短髪，（『くらま』はオールバックにしているから髪はベリーショートより少し長いのだが制帽をかぶっていたから粉川にはわからなかった）の彼女が三つ編みをしていた事があったというのが信じられなかった

「も～珠のように可愛い子だったんですけど。。。。あっという間に，わたくしの背を越してしまって」
「『くらま』司令って。。。『しらね』姉様より小さかったんですか？」

粉川の隣に座っていた『あけぼの』が，ジョーク？とほぼ突っ込みのように聞いた
それもそうだ
ココに揃った艦魂達にとって『くらま』司令と言えば，あの長身でいつも怖い顔をしている姿しか浮かばない
佐世保の鬼司令『くらま』の産まれた頃の姿を知っている者などほとんどいない

「あの頃は『しらね』司令より，ずっとおチビちゃんでしたね」
「私の後を，お姉ちゃん！お姉ちゃん！とついて回って。。。可愛かったわ」

まるで空にその思い出が浮かび上がっているのか？
テラスから向こう曇っているとはいえ静かに揺れる波に遠い目

空気の固まった中，一人思い出に頬を赤らめている『しらね』の合いの手をうったのは『ゆき』姉妹の長女『はつゆき』だった
「そうよね。。。今はあの頃の事なんて『はつゆき』ぐらいしか覚えてないわよね」
「可愛かったですね～」

佐世保を騒がせる色恋話しのナイス・スピーカ『ゆき』3姉妹の長女である『はるゆき』は『くらま』誕生から1年後に就航していて，幼かった頃の『くらま』を唯一知っている存在
佐世保で会った他の『ゆき』姉妹達に比べると幾分落ち着いた物腰

長髪の後ろを小さく巾着に包んだアップスタイルの嬉し目の合いの手に

「も〜〜腕の中に入ってしまうほどの可愛い子だったんですけど。。。すっかり司令として大人になってしまって。。。寂しいですわ」

「はあ。。。。」

胸を押さえて思い出話しをする『しらね』の周りには今まで知らなかった『くらま』の姿に耳を立てた妹達

「あの子が生まれたときには，わたくし既に司令として激務に入っておりましたでしょ。。。なかなか，かまってあげられなくて。。。寂しい思いをさせたのかもしれませんわ」

うっすら浮かぶ涙目

しかし

それがすでに笑い話なのか?妄想なのか?という感覚の粉川達

「よく泣いてましたね」

なのにそうそうと『はつゆき』の回想まで加わり

「ダメな姉でしたわ。。。そうこうしているうちにあの子も司令の任に着いて。。。あんなに大きくなってしまって。。。。もう抱っこ出来ませんわ」

「抱っこ。。。。。」

悲しみに胸を押さえ目をつむった『しらね』の前

想像出来ない「図」。。。。

どちらかと言えば『しらね』を『くらま』がお姫様抱っこという図しか

驚愕の話しに対応仕切れない粉川と『あけぼの』並ぶ艦魂達
そんな周りを見る事なく
『しらね』は胸のポケットから手帳を出して

「なつかしいわ」
開いたページを慈しむような目
手帳の中にあるものは「写真」？粉川はもとより部屋に詰めた全ての艦魂の興味はそこに集約されていた

いままで
鬼司令としての姿しか見たことのない『くらま』の。。。。三つ編み少女の姿は。。。
誰もが見たい

「かっ。。。可愛かったんでしょうね。。。僕も見てみたかったなぁ。。。」

姿勢を反らせ『しらね』の手帳を覗こうとする『あけぼの』の前
粉川も興味津々になっていた
見たい！！
とにかく見たい！！
誰もがそう思う中，粉川の質問はナイスだった
『しらね』の手帳の中にある。。。。かつての『くらま』の姿を

「見ますか？」
「はい！」

意外と妹思いなんだなぁ。。。
そんな粉川の前に開かれた手帳にあった瞼の妹の姿は

「すいませんでした。。。。」

護衛艦しらねのグループルームを出た飛行甲板の下で粉川は笑いを堪えた顔で『しらね』に平謝りをしていた

『しらね』が手帳に忍ばせていた「思い出の妹」。。。。その姿は

『しらね』の手書きによる。。。。絵だったのだ

それがまた。。。

写実的に書かれていたものならばこんな笑いを堪える必要はなかったのだが。。。

まるで子供が書いた落書きのような。。。その絵に別の意味で固まってしまった部屋

「。。。。ひどいですわ」

「すいません。。。。」

落書きのようにも認められた『しらね』の思い

三つ編みのキラキラお目々の絵は。。。粉川を含めその場にいた艦魂達の腹筋を破壊するだけの凄まじい破壊力があった

普段，司令職としてこの一群を率いる姉の可愛い落書きについ笑ってしまった事に粉川は謝り続けていた

顔を真っ赤にした『しらね』は無言のまま部屋を後にし

それを周りの艦魂達に背中を押されて追ってきた形

さすがに一群司令のささやかな思い出を笑い飛ばしてしまったので

は，これからまだ一群に勤務が続く艦魂達も居心地が悪い。。。

「『しらね』姉様。。。。ごめんなさい」

粉川の後ろ『あけぼの』もキマリが悪そうに謝る

「写真が。。。。撮れないんだから仕方ないでしょ！！」

恥ずかしくて涙目の『しらね』は震える肩で

「残して。。。おきたかったの，わたくし達は記憶を辿ればいつだったて鮮明に相手を思い出す事ができますけど。。。写真とかを残せるわけじゃありませんわ。。。だから。。。あの時のあの子を私の手で残しておきたかったの」

落書きは，姉の大切な思い出

司令職に産まれた『しらね』が。。。どれだけの時間を自分の同列艦である妹の『くらま』と過ごすことが出来たか。。。

そして今も。。。なかなか揃って会うことの出来ない妹を大切に想っている事の証

「姉様。。。ごめんなさい。。。。」

飛行甲板の下，プロムデッキの端で肩を小さくしていた『しらね』の直ぐ後ろに走り寄った『あけぼの』は自分たちのした事を恥ずかしく思い走った

「ホントにごめんなさい」

顔を落としてしまったままの『しらね』の前

『あけぼの』の目にも涙が。。。

「姉様」

「写真。。。撮りませんか？」

肩をすくめたままの司令の前に粉川はデジカメを出して笑った
「写真撮りましょう！みんなで！！」
手帳を胸に抱えたままの『しらね』は自分の前に膝を折り，顔をつきあわせている「人」に驚いて聞いた

「わたくし達は。。。写真には写らないんですのよ？」
「写りますよ」

そう言うと粉川は自分の手帳に挟んであった『こんごう』達と撮った集合写真を見せた
「僕が撮れば。。。。写ります！！」

手渡された写真に写る「艦魂」達
思い出を自分の頭の中だけでなく。。。見える物として欲しいのは，なにも人ばかりじゃない

「『しらね』さん。。。僕は「艦魂」と「人」はもっと親しくできると思うんです。。。だから僕が撮れば写る。。。僕も皆さんとの思い出は見える物でも残したいから。。。『しらね』さんが自分の手で残そうとした気持ち。。。わかります」

胸の手帳
自分を追っていた幼い妹の姿。。。。残したかったもの
産まれついての司令職の姉妹。。。今ではそんな風には呼んでくれないだろう妹の

「お姉ちゃん」と呼ぶ姿

「そうですね。。。素敵ですわ」
そう言うと涙を振り切ってプロムの壁に事の成り行きを心配気に見ていた妹達を呼んだ

「一群!!!集まりなさい!!!写真撮るわよ!!!」

覇気を取り戻した『しらね』の前に揃った第一護衛隊群の艦魂達
全員の分をプリントアウトするのは今日中の仕事としては骨だが，
思い出が形として残っていくならそれもまた嬉しい事
プロムデッキから向こうを見渡す海の前，他から見たら念入りな風景写真の撮影にも見えるだろうところ

揃った彼女達の真ん中
司令の『しらね』は手帳を抱いたまま笑顔で写真に収まった

第三十一話　瞼の妹（後書き）

カセイウラバナダイアル～～みてみん?編～～

ちゃ～～元気ですか。。。。
ヒボシはとりあえず大人の荒波を越えました「忘年会」が終わり
自分の時間がもてるお休みの期間に入りました!!
やったぁ!!

しかし
新春は親族が集まったりで大変そうです
とはいえ。。。
ヒボシは生家からは断絶されてる身ですので実家にかえれません
帰れるのは祖父の墓参りだけですから
信念はわりとのんびりです

ところで
小説家になろうの挿絵プロジェクトが前進した見たいです
そもそも
この年末年始には『こんごう』達の立ち絵などをどうにかアップしてみようか?
などと考えていたのですよ
ただ
年寄りなので絵が。。。。古くさいのです（涙）
なので友達のイラストレーターにどうしたら良いかと聞いたら
「ネギま」とか集団で女の子のでるマンガの模写をして練習したら

と言われ。。。
古本で買ってきました
赤松先生は昔から知っているのですが。。。。一度も読んだ事もなく感情移入せずにすむので（全巻揃えたら大変な事になるのでわざとバラバラに買いました。。。きっと楽しいマンガだと思うのですが。。。ハマったら買うのは大変だから（爆））
何冊か模写しました（藁）。。。。。何やってるんでしょうねいい歳して
おかげで古くさい感じだったヒボシの絵も少しはましになったので。。。ちょっとこの時間を作って書いて挿絵を入れられるように頑張って見たいと思います！！！

後
この休みを使って今まで読めなかった他先生の艦魂小説を読みあさろうと！！
時間ある時にせっせ，せっせ頑張ります！！

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第三十二話　感情の波（前書き）

あけましておめでとうございます！！！
去年お知り合いになったたくさんの先生達に，今年もよろしくお願いします！！！
「みてみん」に『こんごう』をｕｐしてみました（藁）
新年一発目がコレです（藁）
それでわ！！！

第三十二話　感情の波

デジカメという文明の力は女の子達という衆群を撮るのにホントに重宝していた
もしフィルムカメラだったりしたらフィルムをどれだけ準備しても足らない
仕事柄メモリーカードは１０枚単位で持っていた事が大いに役立っていた

もちろん本来撮るべき写真はフェスティバルの様子だったのだが。。。
それは今，それほど重要じゃなかった
目の前で初めて自分達の姿を客観的に見る彼女達の反応が面白い
今まで写ることのなかった自分達の姿にディスプレイ越しに騒ぐ姿は「女子高生」となんら変わりがない
「写りが悪い」だの「太って見える」だの「右側が写りが良い」だの

「集合写真だけは明日にでも持ってきますね」

苦笑いの粉川
写真ぐらいでこんなに喜ばれるのは照れる
さっきまでは粉川と距離を持っていた潜水艦の艦魂の子達もすっかりうち解けた様子

「ありがとうございます。。。こんな楽しい事は久しぶりで，みんなはしゃいでしまって」

粉川の隣に座った『しらね』は，まるで保護者のよう
佐世保と比べると，だいぶん穏やかな一群の様子に粉川は思い出した
ココに来る時に見た艦魂

「『しらね』さん。。。さっき見た人『たちかぜ』さんも呼びませんか？」

そう言えば見渡してもココにはいない彼女に粉川は良かれと思って
『しらね』の顔を覗き込んだのだが。。。彼女の顔に浮かんだのは
困惑だった
それは今までおっとりとしていた『しらね』の眉を下げ顔を俯かせたが
覗く粉川の様子に思い立ったかのように立ち上がった

「忙しいんですか？『たちかぜ』さんは？」
「いいえ，そんな事はありませんは。。。とても良い機会だと思います。とりあえず，わたくしと二人で行きましょう」

そういうと手早くお茶のセットをトレイにのせた

「『あけぼの』。。。わたくしはこれから粉川さんと二人で『たちかぜ』総司令の所に行って参りますから」
騒ぎの中心にいた『あけぼの』は言葉無く2人を見た

違和感

粉川はココにくる時に見た彼女は儚く消えてしまいそうにも見えていた
天使は空に帰る日を待つように鳥たちと戯れていて
そして『たちかぜ』の名前で潜水艦や護衛艦の一部はそうでもない

のだが
明らかに困惑を浮かべる『あけぼの』や『すずなみ』の顔に何かを感じた

「『しらね』姉様。。。何もこんな日に会わなくてもいいじゃないんですか？」

『あけぼの』の言葉は粉川の違和感を確信に至らせるだけのものがあった
ココに揃っている艦魂達は何故か？『たちかぜ』を避けている
それを確かめるために各艦魂の顔を見回す粉川の動作にいち早く『しらね』が注意を入れた

「『あけぼの』『すずなみ』言動に気を付けなさい」

少し声を尖らせて厳しく二人を叱ると粉川の手を引き
促すように，この場から出た

「よろしいですか？『たちかぜ』司令」

導かれて来た『しらね』のグループルームから戻る桟橋から『たちかぜ』の姿は先ほど見た時と変わることなく鳥たちと戯れていた
アスロックの下に並ぶ二人に柔らかな視線は向けられたが関心なさげな応え

「どうしたの？こんなところに？」

誰よりも柔らかい声，なのに成熟した女のもつ優しさは微塵もない
どこか棘のある対応にめげることなく

「めずらしく「人」がいらっしゃったので一緒にお茶をいたしませんか？」

トレイに載ったティーセットを見せるが『たちかぜ』は悲しそうな顔をして

「『しらね』。。。私の事は気にしなくていいのよ」
「司令。。。そんな，事おっしゃらないで」
「そうですよ！！お話ししましょう！！僕，粉川って言います」

先ほどぐらいのテンションを維持していたのなら，けして引くことのない『しらね』がどこか押され負けてしまっている事を感じた粉川は彼女の肩を支えながら
わざと大きな声で挨拶した
他から見たらアスロックに向かって話しをしている「変わり者」に見えてしまうのに『たちかぜ』の注意を引きたくて
満面の笑みで彼女のいる発射台の上を見つめる

「アスロックの上に乗っちゃうと。。。。僕，立場上怒られちゃうんで。。出来れば下でお茶しませんか？」

陽気に振るまう粉川の前『たちかぜ』の態度は変わらなかったが
「話しをするだけならココでも十分でしょ」
「ダメです！！姉さん。。粉川さんは本気ココでしゃべってしまう方なんですの。。。ですから」

鳥は舞い降りた

司令職の妹の慌てように観念の溜息と共に『たちかぜ』はアスロックからフワリと降りてきた
目の前に降りた『たちかぜ』は粉川より少し背が低く，かなり痩せた感じで。。。
どこか不健康な白い肌，鳥を手の上で遊ばせていた時に見せた優しい瞳ではなく。。。静かに睨むような目
潮風に揺れるショートの髪
その薄い唇が

「船尾に行きましょう」と抑揚のない声で導いた
けして
自分の持つ部屋に相手を入れようとはしない冷たさはそのまま，艦尾から遠くを見つめるだけで決して話しをしようという言葉に同意したわけではない彼女は
風で顔に掛かった髪を払いながら

「『しらね』。。。本当に私の事など気にする事はないのよ」

海を見つめる細い肩はつまらなそうに，お茶の準備をする『しらね』に先にも行った言葉を繰り返した
知っている妹の存在に知らぬ他人に断りを入れるような会話なんとしてでも場を明るくしたい粉川は支度を急ぐ『しらね』の元を離れると，艦尾の柵にもたれかかった『たちかぜ』に並んだ

「冷たい事，言わないで。。。楽しくいきましょ！！」

艦魂達に好評だったデジカメを出して見せると
『たちかぜ』にカメラを向けた

「笑って」
そのカメラのレンズの前に人差し指を向けて『たちかぜ』は皮肉な笑いを浮かべて

「遺影写真にでも使ってくださるの？」
「そんな」
笑って切り返した粉川の前，笑わない『たちかぜ』

「長くても後３年。。。。そのぐらいもすれば私は死ぬのだから，キレイな時に撮ってもらった方がいいもの」

笑わない目は本当の事だけを告げた
応えられない粉川の前，楽しげに会話を続ける
「最後ぐらいはＤＤたちの役に立って死にたいわ」
「姉さん。。。そんな悲しい事は言わないで」

トレイにお茶の支度をした『しらね』は泣いていた
振り向いた粉川は固まってしまった
二人の艦魂の会話には溝が有りすぎる，まったく出る幕がない

「わたくしたちは誰も姉さんの事を悪く思ってなどいません。。。信じて下さい」

「知ってるわ。。。ごめんなさい『しらね』。。。貴女は良くしてくれてるわ」
責めるように会話を続けていた彼女は涙の妹に良心が痛んだのか謝った
「ごめんなさい。。。歳をとると僻みっぽくなるってホントね」

そういうと用意されたカップを手に取った
「でもね。。。ホントに私の事は，ほっておいてほしいの」
『たちかぜ』は注がれたお茶の半分を口にすると，顔を下げてしまった『しらね』に
「来てくれてありがとう。。。。嬉しかったわ」
そう言うとトレイにカップを返して静かに光りの泡となって姿を消した

「すいません。。。見苦しいところを」

トレイと一緒に持ったティーポット。。。自艦から少し離れたところで『しらね』は立ち止まって粉川に謝った
強い日差しは雲の向こうにある事がよくわかる
雲を後ろから照らし出すせいか?こぼれ落ちる光で波間は輝きを増している
陽気な日
なのに悲しそうに眉をしかめた『しらね』
気を遣った返事を返す

「いいえ，気にしてませんから」
「そう言って下さると助かります」

「だけど。。。教えて下さい，どおして『たちかぜ』さんを避けてるんですか?」
粉川は直球で聞いた

ココで戸惑って後巻きに聞いたらきっと一群の司令である『しらね』は理由を話してはくれない気がしたし
『しらね』は困った顔のまま桟橋の一番端の方に身を寄せた

「いづれわかる事ですが。。。自然に任せると，ろくでもない噂話になってしまいますから。。。。お話ししますわ」

粉川の直球の問いかけに『しらね』も隠し事を持つ事は，良く無い事と理解した返事をした
手を引いて桟橋の端に
「ココなら独り言を話していても不審な人に見られませんから」
ツライ中にも小さな配慮
突堤にぶつかる大きな波の音の中
何度も押し寄せる小波を見ながら『しらね』は重い口を開いた

「もともとは誰が言いだしたかワカラナイのですけど。。。事を大きくしてしまったのはわたくしの姉『ひえい』司令で。。。」

それは，仮初めの平和を教授した日本の防衛という裏側で戦い続けてきた艦魂達のジレンマから起こった事件だった
ＤＤＧ（ミサイル護衛艦）とＤＤＨ（ヘリコプター護衛艦）の確執

「ＤＤＧは攻撃を特化した艦ですが，それ故に最初に「死ぬことは無い」と言われていました」
「どういう意味ですか？」
「攻撃をされてから，攻撃をする。。。。「専守防衛」ってそういう事でしょ。。巨大な火力を持つ彼女達は常に温存され「楯」として最初の攻撃を受ける船が必要。。。違いますか？」

大戦後，日本が作った自国防衛の原則的指標「専守防衛」
他国から攻撃されたら，これに対し攻撃をするという非常に消極的
に防衛政策
とても四方を海に囲まれた島国がとる防衛策とは思えない
だが
前の戦争を全世界の独断的に「侵略戦争」だと決めつけられ烙印を
押されたこの国のできる防衛の指標の限界点がそれだった

この矛盾だらけの指標に苦しんでいたのは。。。。有能な国防を論
ずる「人」だけではなかった

「最初に撃たれる艦」

まだミサイル防衛構想というものが一本化されていなかった過渡期
の時代において
海からくる敵というものが，この国の防衛で最初にぶつかる戦いと
決まっていた頃
ＤＤ（汎用護衛艦）として産まれた艦魂達にあったの「不安」だけ
だった
もし。。。。
明日，戦争が起こるとわかっていても自分達から戦闘はしないこの国

海上の道をめぐって誰かが撃たれる
それが開戦の合図
誰かが撃たれなければこの国は戦えない。。。
横につながる姉妹が多いのはそのせいだとも言われていた

常に基地にて待機しているＤＤＧとは違い，常に海の。。。敵の面
前にいる事になるＤＤ
絶大な攻撃力を持つＤＤＧを先に撃たれる訳にはいかない

撃たれたら
それに匹敵する巨大な火力を持つ「ミサイル護衛艦」による報復を
しそれにより早期停戦に持ち込む
「人」の選んだ苦肉の策は理想論だった
実際にはこの国を守る職務につくＤＤの艦魂達を面前の恐怖と付き
合わせる事になっていた

「この事についてＤＤＧに面と向かって激突してしまったのが『ひ
えい』姉さんなんです」

日本近海に侵入してくる敵は何も艦艇ばかりではなかった
冷戦直下の海の底には鉄のカーテン「ソビエト」の狂気が潜んでいた
潜水艦の脅威が大きくなってきた頃

ＤＤＨ（ヘリコプター護衛艦）というＤＤの艦魂にとって「希望」
とも言える艦が現れた

ヘリにて，哨戒及び警告をする
それだって
そんなに積極的な防衛とは言えなかったが「まず撃たれる」という
恐怖からの少しの解放につながった事はたしかだった
だが
それがアンチＤＤＧに拍車をかけることになる。ＤＤＨの姉妹達が
産まれついての「司令職」だった事も亀裂を大きくする事になって
しまう

「人」の備えという思想から明らかに矛盾してしまう艦魂達の溝は
国防という備えを愚かにも反戦と捉える感情の波の中からも，これ
こそ「大事」と捉えた有識者達の戦いにも見えた
国民の感情と折り合いの付かなくなってしまった「国防」

「『ひえい』姉さんと『あまつかぜ』姉さんの激突で。。。。護衛艦隊は心から断絶してしまうギリギリのところまで行ってしまった」
「どうして。。。ぶつかってしまったんですか?」

『しらね』は肩を落としたまま水面を見つめていた

「ちょっとした。。。行き違いだったんです『ひえい』姉さんはDDGと仲良くなりたかった。。。なのに『あまつかぜ』姉さんは自分の事に全てを向けてしまって。。。『ひえい』姉さんの言葉に耳を貸さなかった」

できるだけ顔を下に向けず海に語りかけるように粉川は聞いた

「何故耳を貸さなかったんですか?」
「その時はダメ。。。そういう事ってあるんですよ。。。。」

粉川の質問に困った顔を向けた『しらね』の目は本当に辛そうに見えた
涙を落とさぬように出来るだけ遠くを見ようとする姿
「でも司令職である姉の激突は。。。。けして良いことではありませんでした。。たとえ自分の感情を殺しても。。。護衛艦隊のために尽くすのが司令の任を負う者の宿命ですから」
姿勢を正し粉川に向き直った『しらね』の態度は自分に言い聞かすような
緊張した面持ちにも見えた

「それで今でもDDの子達はDDGである『たちかぜ』さんの事がキライなんですか?」
「いいえ。。今は昔ほどそんな事はありません。。。一応解決はし

ているんです。。ただ昔話みたいに残ってしまった部分があって。。
そういう逸話を鵜呑みにしてしまう子ってのがいるんですよ。わた
くし達にしてみてもそんな思い出を聞かせたくもないという気持ち
もあって解決を明確に話さなかったという点では。。。よろしくな
いんですけどね」

それは「人」が初めて知る艦魂達の心を揺るがせた戦いだった
粉川が自衛官になる前から「防衛」の仕事は大変な職務という事は
わかっていたが
「人」が苦しみながらも自国を守ろうとする「策」の中で艦魂達も
同じぐらい「不安」と「苦しみ」の中にいたことを初めて知った，
その思いが自然に頭を下げた

「すいません。。。なかなか力になれなくて」

自分の前で頭を下げる粉川に『しらね』は驚いて肩を叩いた
「別に。。。粉川さんのせいじゃないでしょ!!」
粉川は顔を上げると真剣な眼差しで未だ涙に潤んだ瞳の一群司令の
手を取ると

「でも。信じて下さい。。。僕たちも一緒に戦っているって事を。。
。もしDDが撃たれるためにいるなら，その艦に乗った隊員はどう
なりますか?それを見捨てて「防衛」なんて。。。そんな事は決し
てないんです」

艦には艦魂だけじゃなく当たり前に操鑑のための「人」も乗る
それに「死ぬのが仕事」なんてそんな事があっていいわけない
撃たれる事が前提である訳がない

「わかってますよ!!そんな事。でも私達には。。。色々と悩みが

あって。。。それが悪い形で噴出してしまっただけなんです」

「何でも言って下さい！！僕，皆さんの力になりたいと思ってるんですから！！」

自分の手に強く

嘘でない意志を伝える粉川に『しらね』は少しの苦笑いを見せた

「粉川さん。。。。わたくし一時，護衛艦の艦魂に産まれた自分が大嫌いでした」

掴まれた自分の手を見つめながら

「この国はわたくし達を愛してくれません。。。。どこに行っても「戦争反対」って。。。わたくし達。。戦争がしたい訳じゃないんです。。この国を「護りたいだけ」なんですのに」

「すいません」

「謝らないでください。。。ちょっとだけ，わたくしの愚痴を聞いて欲しいんです」

自分の前で神妙な顔で頭を下げる粉川の額に手を

「たまには良いですよね」

「はい。。。聞かせて頂きます」

『しらね』はまだ騒がしい祭りの町の向こう側

遠くに見える船を指差した

「わたくし。。。漁船の船魂とかに産まれたかったの」

彼女の話は愚痴と言うよりも，ささやかな「夢」だった

自分の航行途中，近くを通る漁船達

小さな船艇の先にちょこんと座っている「船魂」の彼女達は自分の
主である漁師をいつも見つめている
煽りの波を一緒に受けて，魚を追う日々。。。ただそれだけなのに
海に愛されたように，愛する自分の主と一緒の時間を過ごす
決して見えるわけではないのに
漁師は神棚やお守りに感謝しながら。。。お互いを必要な者とみ
とめあった「人」と「船魂」の姿に

「こんな大仰な船じゃなくてよかったのに。。。小さな船の小さ
な魂で良かったのに」

自分の制服に輝く，き章と階級章
国内を働く船の中にあって頂点の地位にある艦，「軍属」である事
をしめす証に指を滑らす

「なんで艦魂って。。。「女」なんでしょうね，軍艦なんだか
ら魂も「男」で良いじゃないですか。そう思いません?」

小さな『しらね』の肩は震えていた
噴出した問題に立ち向かったのはきっと『しらね』だったと，粉川
は気がついた
それ以外にも色々な問題があったに違いない
「人」の世界であっても「国防」は単純でありながら「感情」が多
くを占める小難しい問題となっている
ならば
艦魂として産まれてしまった彼女達は自動的にそれを受けるしかない
逃げ場のない問題に紛糾する事こそストレスになるものはない。。。
。。
それでもだまっていられない時だってある

それらの問題に立ち向かった司令官『しらね』のささやかな夢と
ちょっとの愚痴

粉川は『しらね』の肩を後ろからそっと支えた
自分の肩に置かれた手に触れる『しらね』の手は桟橋を渡って行く
人たちに目を移しながら

「触れ合えもしないのに「女」だなんて。。。。。切なすぎる」

家族連れ，恋人達。。。。
どうして女ばかりの艦魂
力無い手が粉川の手を握り替えして小さく言った

「主と二人だけ。。。。そんな漁船で良かったのに。。。てね」

海の男と，海を行く船に住まう魂の女
それが『しらね』の夢だった

「だけど国を護る仕事はどの船よりも大事な仕事です。。。わたく
しだから与えられた仕事だと，今は思っておりますのよ」
「。。。。。」
粉川はただその細い肩を支える事しかできず
謝ってしまいたい。。。と思っていた
彼女達にこんな思いをさせて。。。「国防」の楯として前を歩かせ
る自分を情けなく思った
そんな粉川の心を今度は『しらね』が支えた
振り返ると笑顔を見せて

「ココだけの話しですよ。。。聞いて下さってありがとうございました」

返す言葉の見あたらない粉川はただ共に，そこに立つことが精一杯だった

夕暮れ時，粉川は適当に撮ったフェスティバルの写真をパソコンで内局の自分のデスクに送ると忙しく艦魂達ととった写真のプリントアウトを横須賀基地から出たコンビニでやっていた

基地でプリントアウトしてもよかったのだが
何せ「税金」でまかなわれている事を叩かれる世界だから，変な言いがかりを付けられるのを嫌って自腹を切った
集合写真だけで５０枚は作った
とりあえず護衛艦隊の艦魂には行き渡るようにして準じ，その他の艦艇の子達の分も作るようにと

レジを通るときに冷えたビールを5本と乾き物を袋一杯に買って車に乗ると
いつも持ち歩いている「黒い手帳」を確認した

「艦魂も。。。色々問題抱えてるんだな。。。」

そういうと手帳を助手席に投げた
「よし!!行くぞ!!わかんない事は相談するしかない!!」
そう言うと深緑のカラーを纏ったＢＭを駆った

第三十二話　感情の波（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～風邪引きさんいらっしゃ～～い編～～～

マジで風引きました
最後の飲み会の時
「オレ風邪引いてたんだけど～～～」と抜かした馬鹿野郎
風邪のなおりぱなは他人に移す期間だ！！！
自重しろ！！

酒呑みたさにでてくるんじゃねー！！！

ヤツの生でこの2日ほど生死を彷徨いました
ひさしぶりの寝正月を1日に過ごしましたも～～まいったよ
自分だけじゃなくて他人にも迷惑だって自覚しろ！！

そんなヒボシは色々な先生に続き
「絵」をｕｐしてみました
。。。。もう久しぶりに書いたので
恥ずかしい。。。しかも新しいパソコンの方にタブレットが反応しない。。。。
全部マウスで処理するハメに。。。。

とりあえず『こんごう』をみてみんにｕｐしてみました
よかったら感想ください
制服の色がいまいちで海自ってより空自って感じになってしまった

のはご愛敬でお願いします
これからちょこちょこｕｐして見ようとおもってますのでよろしくです！！！

それでは
皆様今年もよろしくお願いします！！！
風邪にはめっちゃ気を付けて下さい！！！

ウラバナダイヤルでまたお会いしましょ～～～

第三十三話　船の幽霊（前書き）

結局。。。。正月休みを病気療養のために自宅で過ごしたヒボシです。。。

寝たり起きたりの中

とりあえず目標だったイラストはｕｐできたし。。。

新年から止まることなく小説もｕｐできたので良かったとしましょう。。。シクシクシクシクシク（涙）

ハゲマシテ～～～

ところで（急転）

しばらく日本を離れた話しが始まります！！！

『こんごう』の妹『きりしま』登場！！です

第三十三話　船の幽霊

粉川がフェスティバル会場に向かった日
日本を離れた護衛艦達がいた

「災害派遣」の名のもとに編成された護衛艦隊
旗艦『ひえい』を中心に大型輸送艦『おおすみ』佐世保から出港した補給艦『はまな』と東シナ海域にて合流し，人類史上に残る大災害となったスマトラ島に向かい航行していた
後，少しすれば朝日が丸い地球のヘリを一斉に輝かせる時間

まだ薄暗い海の上を走る『ひえい』艦魂『ひえい』は前方に豆粒のような姿を現した『きりしま』を確認すると気怠そうに唾を吐いた

「ＤＤＧ（ミサイル護衛艦）など。。。人命救助の役にもたたん」

切れ長の目を彩る長い睫毛
櫛（髪）の一つにも乱れようもないほどにキレイに纏められアップにされた姿は遠目に見れば帆船の船首を飾った「ｆｉｇｕｒｅ　ｈｅａｄ」のようにも見えるが
眉間にある「苛立ち」と目を隠すようにかけられた細身のメガネのせいで，勝ち組に所属するキャリアウーマンのようなどこかヒステリックな印象が強い

波を裂き，風を割って真っ直ぐに進む護衛艦『ひえい』の後ろには，楽しみにしていた横須賀の休暇（フェスティバル等々は艦魂にとって完全な休暇になる）を取り消しにされた輸送艦『おおすみ』が陸自の車両と支援物資を満載に積んだ状態で続く
その横を佐世保から合流した補給艦『はまな』

『おおすみ』は取り消された休暇のせいで機嫌を悪くしてはいたがさすがに司令職の姉である『ひえい』の前でぼやく訳にはいかず風に長い髪を揺らしながらも口をへの字にしたまま合流ポイントを見つめているが

『はまな』は。。。。。かなり怯えていた
補給艦はその艦の特性からこういった事件には必ず「急遽」狩り出される
長期化する海上行動のために必要な艦なのだが
『はまな』の艦魂『はまな』は，とにかく独りで佐世保から合流海域に行くのだって寂しくて死んでしまうんじゃないかと怯えていたのに。。。。

よりによって
この艦隊の司令が『ひえい』だと聞いて今にも泣きそうになっていた

『ひえい』司令は。。。。何かといわく付きの艦魂だったからだ

任務に際しては誰よりも忠実に艦の心として徒事し冷静沈着にして才色兼備
各隊群の司令の中でもっとも「大人の女」色香と容姿を持つ美しい艦魂ではあったが。。。

例のＤＤＧとの激突，『はまな』の同型艦の姉，長女の『とわだ』から「昔話」を聞いた程度の話しではあったが護衛艦隊を2分割してしまうほどの激しいものだったと
そのぐらい感情の起伏が激しく相手を徹底的に打ちのめそうとする艦魂である事は『はまな』にとって恐怖の伝説として頭の中で増幅されていた

そしてもう一つ。。。。

『ひえい』は護衛艦隊でも有名な「恋女」である事

ＤＤＧとの大事件が収束を見た頃から激戦冷め切らぬ内に『ひえい』
が起こしたもう１つの事件とも言えた
気に入った艦魂を自分近くに侍らせ，夜を共にすることを厭わない
ほどに
恋人を作る事自体は。。。それほど禁忌ではないのだが
（だけど大きく見て全体が姉妹の関係なので良い事とまでは思われ
ていない）
誰彼問わずベッドに誘う姉に対して，何度か一群司令であり妹でも
ある『しらね』が諫めたりもしているらしいのだが
答えはいつも同じ

「私が好きになったんじゃない，私を好きなヤツら多いだけだ」と

モテモテな言い分ではあるが
言い換えれば
自分を愛さない艦魂を許さないとも言える
断りなどしたら。。。。護衛艦隊を２部に割ってしまうほどのケン
カをした人だ。。。自分など生きてはいられないとまで『はまな』
は思っていた
誘われたら。。。。応じるしかない。。。。

「こわいよ。。。。」

護衛艦達に対しての挨拶もあるから，そろい踏みで船首の前に立っ
ていなくてはならない時間が近づく中

『はまな』は朝一番に行われる『きりしま』への給油作業のために集中します!!と称して自室で膝を抱えて泣いていた
艦の心を乱せばミリ単位で行われる作業に支障がでるかもしれない
『はまな』の電信に『ひえい』司令は「了解」という返事だけよこしていたが
そっけない電信は『はまな』の小さな心をより不安に，そして明晰な頭の中で被害妄想を最大限大きくしていた

南シナ海域，赤道直下に近づくこのアタリの日の出はだいたい０６：５０
緊急出動にもあたる護衛艦内の隊員達は朝一番の業務であるＲＡＳ（洋上補給）のために忙しなく走り回っている

「頭痛大丈夫?」

あらぬ事を考え過ぎて頭を抱えたまま船首で敬礼を終えた『はまな』のとなりに来たの『おおすみ』だった
巡航海域ではあるが少し外れたところで護衛艦隊は速度を落とし始めていた
風の強い中，自分を心配して飛んできた『おおすみ』は，でこっぱちな額を見せながら涙目の『はまな』に

「何?重傷?どっかヤバイとこあんの?船の中?」

艦魂が重傷
艦魂はｂａｔｔｌｅｓｈｉｐがあった頃なら迎撃によって撃たれれば必ず同じダメージを体に食らう

同じように病気となれば
船体のどこかに大小は別として損傷，または内燃機関に何かが起こっている事になる

「「虫の知らせ」使う？」

涙目のので歯をガチガチ震えさせている『はまな』の顔に，いつもは軽口ばかりをきく『おおすみ』はびっくりして聞いた
「虫の知らせ」というのは艦魂が自分で艦内に何か不足な事態が起こったとき。。
またそれに「人」が気がつかない時に非常の手段として使う，いわゆる
ラップ音，事「騒霊」の事。。。利き目はまちまちだが，自衛隊員には結構効く
任務の前に始業点検なども課業にあるからそういう事には神経質だからだ

「大丈夫だよ。。。。」
さすがに船体引き付けで「もやい」を発射した今になって「虫の知らせ」を使う訳にはいかない
「緊張してただけ」と近づいた『おおすみ』の手を握った

「なんで緊張してるの？ひょっとして『ひえい』司令が怖いの？」

察しのいい『おおすみ』は上目遣いのまま前を護って海を走る『ひえい』をチラリと見た『はまな』の緊張の理由を言い当てた

「こっ。。怖いって言うか。。怖い」
「怖いんじゃん！」

怖いとはっきり言ってしまったら。。。その事が，司令の耳に入ってしまったらという心配が酔ってもいないのに呂律を滞らせている言いたい言葉がうまく口から出てこない『はまな』の小さな唇がプルプル震えているのに『おおすみ』は笑ってしまいそうになった

「だって。。。だって。。。」

自分の前，目を開いて笑いを堪えている『おおすみ』

知らないわけでない「噂」の事を『はまな』は出来るだけ小さな声で耳打ちした

「あ～それね。。。大丈夫だよ。はーちゃん（『はまな』）は司令の好きなタイプに入ってないって」

自分より8も年上なのに小動物のように震える『はまな』の可愛さは反則なぐらいだったが，もとよりその気のない『おおすみ』は返事を耳打ちした

「司令はＤＤＧ以外の「モデル系」の艦魂がお好みだから。。。ほら『なみ』姉妹なんて結構食われてるらしいよ」

『なみ』姉妹

それは佐世保で言うなら『たかなみ』と『まきなみ』だ

性格ホンワカでどこか天然な『まきなみ』という存在もいるが全員がモデルのように手足の長いスラリとした容姿で黒目の多い美人系でもある

『おおすみ』の返事に二人を思い出した『はまな』は顔を真っ赤にした。。。

「く。。食われてるって。。。」

産まれたときから大食らい，名は体を表すを地でいくほどの元気娘である『おおすみ』は他の艦魂の下世話な事情にも動じないほど神経の太い色黒，体育会系の彼女は前髪が目にかかるのはウザイからとばっさり髪を切ったでこっぱちなのにロングヘア
間逆を行くほど自分を純粋培養してしまった『はまな』の動揺などお構いなしで

「やられちゃったんだよ！夜のお共で」
と言うとひっくり返りながらも一応『ひえい』の目を気にして口を押さえて大笑いした
「だから。。。大丈夫だって！！はーちゃん見たいな御子ちゃまには手出さないよ！」

「不潔。。。。もう『まきなみ』も『たかなみ』もキライ」
転げ回る『おおすみ』に涙目ながらも吊り上がった眉で，これまた子供じみた返事をして『はまな』に

「不潔？いいじゃん自由恋愛だよ。。佐世保の『くらま』司令だって『しまかぜ』さんと付き合ってるって噂聞くじゃん！」
「『しまかぜ』さんは！！お酒のお供をしてるだけ！！朝にはちゃんと部屋にいるもん！！」
「だけどさ～」

「おはよう！！」
馬鹿な話しで言い合いになりそうだった二人の間に入って来たのは『きりしま』だった
敬礼と共にやってきた彼女は護衛艦の姉妹には珍しいパンツルック，男性用の制服姿で
日本な近づく寒い季節に入り風も冷たくなる一方だがココは赤道近

く，温かな南海の風の中から2人の場所に彼女は舞い降りた

イージス艦の姉妹特有の青い瞳『こんごう』に比べると少し小柄で
短い髪の『きりしま』は
2人を交互に見ながら優しい声で「命令」した

「調子悪いのかと思って心配したよ『はまな』そろそろプローブレシーバーを稼働させるんでしょ。。。大丈夫？」

しっかりと制帽までかぶった『きりしま』は方や涙目，方や大口を開けて声を殺して笑っていた変な2人組に動揺する事なく話しを続けた

「会話は任務が終わってからにしようね！！」

にこやかな微笑みには有無を言わせぬ説得力がある
すくに『きりしま』に向かって敬礼する2人に「よろしく」と付け加えると自分の艦に戻ってしまった
あまりにあっさりした対応に危うく我を忘れて泣きそうになっていた事に『はまな』は恥ずかしそうにしながらも，目の前に迫っている作業に心を切り替えた

「『おおすみ』も艦に戻って。。。任務に入るから！！」

オペレーションに集中するため艦橋の上に立つと，ずれたメガネを鼻にきちんと戻し
一度，目を閉じ
静かに開いた
目の中に光る数式とも幾何学模様ともいえる光

慎重な作業を必要とするＲＡＳへ，艦の心は隊員たちの作業に会わせるように錬度を高め没頭の域に入る
止まることのない海の上での作業に，この心は補給という精密なオペに必要な3時間の世界へ集中していった

「敬礼！！」

補給作業が終了し任務の交代と各艦長がペルシア湾からの引き揚げ組を労う時間を縫って艦魂達も任務交代の敬礼をかわした
場所は『おおすみ』の後甲板
前甲板から中程までは陸自の車両が満載に積んであるため
ウェルデッキ付近，本来なら大型ヘリが着艦する場所にての挨拶だった

自衛艦旗の揺れる広間

時間は１２：００を廻っており
全隊員も一仕事が終わったことで少し落ち着いた様子
大仕事をこなした『はまな』は足取りもフラフラした状態だったが
久しぶりに会う姉の『とわだ』に笑顔で抱えられ自分の任務に満足した顔で整列していた

「『きりしま』一佐にはペルシア湾から引き続きこの任務についていただきます」

冷たい視線
目下ろすほど身の丈も違う『ひえい』司令は命令書を読み上げると敬礼した

「はっ！」
青い瞳，生真面目な顔は，真っ正面に司令を捉えてキレイな敬礼を返した

「現地は相当酷い様子だそうだけど」
「はい。。。かなり酷い状態です」

『きりしま』は災害発生当時の事を思い出して顔をしかめた
まだ幼さを残す彼女の目は過酷な。。。「人類」の行う嗜虐破壊行為である戦場から。。
今や地球を破壊しようとする「人類」を戒めるために降されると言われる「神の鉄槌」の果てを短期間の内に見る事になっていた

「非常に恐ろしい事でした」

震える拳は怒りではなく。。。
ありのままの起こった真実にいかに自分たちが無力であったかを語っていた

地震が起きたときペルシア湾からの引き揚げでスリランカ島付近まで来ていた護衛艦隊は振動する海に驚いて全ての隊員が課業の手を止めた
早朝の晴れている海が階段のように大きな波を作って押し寄せる光景に絶句し
その後「防衛庁」との連絡を取り合う間に見た物は。。。。

「死」とその残骸の濁流だった

夥しい流木はけっして自然の木ではなく
住宅用に裁断された形を保ってはいたが。。。へし折られた各所に

色とりどりの布。。。
それが人に衣服であり
死の破片として巻き付いたまま海を無数に漂っていた

人の形など。。。。どこにもない
ないのに。。。。艦魂の持つ霊験がそうさせるのか自分の周りを漂う残骸に残った「無念」と，あり得ない最後に「涙」した思念だけが伝わる数日は。。。。
眠ることの出来ない地獄の日々だった

共に乗艦していた隊員も同じ
生存者を。。。とにかく動く物を見つけ出す事に終始し海とにらみ合いを続ける数日がどれほどに苦痛だったか。。。

タイ王国からの要請でタイ国領海を捜索にあたるが
それは地震の脅威と恐怖を増し，人の生存の可能性を徹底的に否定する景色を眼前に見る
悲しみの捜索だった
家は倒壊し斜めに潰されたまま海を彷徨い
黒ずんだ流砂が海の下を這う姿
陸地に近い海に。。。。。波に打ち返される人の死に体

人なのか?

人である部分をえぐり取られた無惨な体は男女の区別も付けようのないものだった

「生存者を見つける事は出来ませんでしたが。。。これ以降も救助ならびに支援活動に努めたいと思います！！」
思い出す光景に，引き起こされた災害が未だ多くの人を苦しめている事に決意も新たにした『きりしま』は敬礼のまま強く司令である『ひえい』に告げた

「頑張ることね。。。それがあんた達姉妹が起こした不祥事を帳消しにできるチャンスなんだから」

並んだ艦魂達の耳を疑う返事
聞くも悲惨な被災地の状態を耳にして出た最初の言葉は労いではなく。。。罵倒？
冷たい目は細身のメガネの裏側でピクリとも動くことなく

「あんたのその便利で「万能」を唄う目で遭難者は探せないの？うん？」

あんまりな言葉だった
誰もがそう思った
イージス艦の姉妹達は自分たちで不祥事を起こしているわけじゃない。。。
人の手が謝った方向に動いて露見した「イージス艦機密漏洩事件」
撃つことを前提としない防衛に涙を飲んだ「不審船事件」
どちらも艦魂という立場で解決をする事はできない事件だ

「司令！！言葉が過ぎます！！」

『ひえい』の非道とも言える言葉は誰もの心に怒りを募らせるだけのものがあったが。。

それでも司令職の艦魂に手を挙げる事など出来ない
沈黙の間を流れた風を破ったのは『はまな』の姉『とわだ』だった
背丈こそチビな『はまな』と変わらない彼女は決して自分の上に立つ司令官だからと暴言を許さなかった

「その言葉は暴言です」
「違うわ」

一歩前に進んだ『とわだ』の吊り上がった視線にも動じる事なく『ひえい』は続けた

「私は現地の状況を報告しろと聞いたのに，この子は自分見た悲劇に同情しろと言った。。。被災地の悲惨さは私だって行けばわかる事よ。大切なのはこの重要な任務を引き継ぐ私達にどのような注意が必要かを述べること，違う？これは国際的な任務なのよ？大事な。。違うの？」

正論を暴言と共にさらりと言い切る
老獪にして。。。醜悪な行為
まるで機械と話しをしているような返答
しかしそれで黙ってしまえるほど『とわだ』も新参者ではない

「ものには言い方というものがあります！！貴女はまがりなりにも司令の」
「申し訳ありませんでした！！」

『きりしま』は自分の前にまで進んでしまおうとしていた『とわだ』を制止すると

「未熟でした。任務に必要な注意をよそに自分の感傷を語るなど，

護衛艦の魂たる者として配慮が足りませんでした」
『きりしま』の目は本気の目だった
その返答に嫌味もごますりもなかった。司令の言う事に正しい部分がある事を読み取っていた

「訓戒を胸に今以上の努力をする所存です。。心である私が意識を集中し任務に邁進すれば「遭難者」も見えると思います！！」

真っ直ぐな視線は『ひえい』のおよそ罵倒と言う言葉に挫けぬ気を吐いた
若々しい態度に『ひえい』は顔を背けるとつまらなそうに言った

「やっぱりＤＤＧだわ。。。『あまつかぜ』に似て気持ちが悪い」
そう言うと光の中に消えようとした
「待って下さい！！司令！！」
振り向くことない背中は
「必要な指揮は貴女が執ればいい。。いずれ司令職を継ぐのなら良い経験になるでしょ」

そう言い残すと泡沫の光の中に消えていった

任務交代の護衛艦達を見送り
夕方までの課業を終わらせた『きりしま』は『はまな』を連れて『おおすみ』の甲板の上
陸自の「疾風」の前で小さな食事会を開いていた

「こわいよ。。やっぱり『ひえい』司令。。。なんであんな酷いこ

と言うのかな？」

昼間の出来事にすっかりすくみ上がってしまった『はまな』は自分を置いて帰路につく姉の背中を泣きながら見送ったせいで目を赤く腫らしている

「色々な責任を持つようになると。。。考える事も色々と多くなるって余分な事は後回しにしなくちゃいけないんだよ」

『ひえい』の罵倒にあまり動じていない様子の『きりしま』は自分より怯えている『はまな』を励ました

「でもさ。。ひっどい言い方だよ。普通は労をねぎらうってもんだろ」

割り座で小さく座る『はまな』のとなりスカートなのに堂々とあぐらをかいている『おおすみ』はジュース片手に口を尖らせた

「配慮が足りなかったのは事実だから」

素直なのか，その事はもう忘れたいのか一貫して『きりしま』の口から『ひえい』への不満は出てこない

制帽をとった『きりしま』の黒の髪は短いながらも凪いだ海風に揺れる

「ココを。。この海が普通だとやっと思えるようになった」

夕日の煌めく色に目を細め

久しぶりにあった本土の仲間の顔にやっと安心した表情を見せた

「ところで。。『おおすみ』。。。下着，見えてるよ」

小皿を片手にカレーを食べる『おおすみ』の真ん前に座ってしまっ

た『きりしま』はそれが気になって仕方なかった

「はぁ～～誰が見てんのよぉ～～『ひえい』司令じゃあるまいし～～」

困った顔になっている『きりしま』の前スカート捲り上げて手で羽ねのようにはためかせて見せた

「常に見られてるって感覚を持ってないと！！海外の艦魂もそうだったけどココから先の任務をこなすのにスカートはふさわしくないよ！！ボクのようにパンツスタイルにしたらいいよ！！」

「やだよ～ズボンなんて暑苦しいじゃん！！赤道近いんだよ！！女ばっかの艦魂なのに，だれが下着見て嬉しいのよ！！ましてや「人」に見えないんだからいいじゃん！！」

「見えたんだよ」

その声はまったく逆の方向から聞こえた男の声だった

急に近くに聞こえた声に3人はかたまり

『おおすみ』は大きく広げていたスカートを焦って下ろした

勢いカレーのルーが飛び散ったがそんな事にかまってられない程に

「何。。。がだよ」

男達の声は「疾風」の間を割ってドンドン3人のいる所に近づき通り過ぎた

短髪の3人組はだらしなく迷彩の軍服の前を開いた状態で風をいっぱいに浴びながら

ウロウロと歩く

そのうちの独りが止まって

自衛艦旗に指を向けた

「あのあたりにいたんだよ!!」

真ん中の男。。。いかにもチンピラって感じの彼は目を細めて旗の周りを見回して

前を歩いていた男に聞いた

「梅酢(うめず)？何がいたんだよ？」

やさぐれた彼の肩を後ろから着いてきた男が叩いた

「鈴村。。。海自の船はやっぱ，出るらしいぜ!!」

鈴村と呼ばれた彼はげんなりした顔になった

「船の幽霊ってか？」

先を歩いていた梅酢は走って戻ると大きな声で

「昼間!!このあたりに変な靄がたくさんいたんだよ!!あれは絶対船に住み着いてる幽霊が海の亡霊達と話ししてたんだよ!!」

「ガキかおまえわ。。。真っ昼間から幽霊は集まって何やってんだよ」

くだらない話しに付き合ったと鈴村は熱くてたまらなかった迷彩の上着を脱いで3人が座る側に振り向き。。。。そのまま固まった

「鈴村!!オマエ最近の幽霊ってのは別に夜じゃなくたって出るんだぞ!!「呪怨」とか観てねーのかよ」

「見てねーよ」

タバコをくわえた顔はたしかに固まっているのだが。。。自分の足元に鎮座している艦魂の少女たちには気がついていない。。。いや，やっぱりみえていないようだ

それは第三者がもし。。艦魂も人も見える者が見たのならあまりに滑稽な図だった

「いねえもんはいねーんだよ。。。」

だが鈴村の態度はどこかおかしな感じだった

否定しながらも。。。何かを感じているような泳ぐ視線。。。

「帰るぞ!!」

「待ってよ!!探そうよ!!」

「しらねーよ!!」

騒ぎ立てる友達を別にタバコをくわえたまま動かない鈴村の視線が自分達を一瞬見た事に『きりしま』は気がついた

「この「人」ボク達が見えてる」

それは『きりしま』達艦魂と陸自の鈴村の冒険の始まりだった

第三十三話　船の幽霊（後書き）

カセイウラバナチャンネル～～しらねさんの話し～～

この話しの前に『しらね』さんの話しを2話ほどやりました
色々な反応が返ってきて嬉しかったです
『しらね』さんには結構大事な台詞とかも言ってもらいましたから

なかでも
「この国はわたくしたちを愛してくれません」
と言う台詞には評価感想ならびメッセなどでも
「本当にツライ事だ」等々艦魂の彼女の心情にのっとったものから
「国防に携わる者や物を国民が愛さないなんて。。やりきれない」
というホントに大事な言葉を返して下さった方もいらっしゃいました

『しらね』さんの言葉にはヒボシの気持ちもいっぱい，こめたつもりだったので多くの方がその気持ちを汲んで下さったことに感謝します

国の事を考え憂う彼女の心ともう一つ
女としての彼女の気持ちも書きました

「触れ合えもしないのに「女」だなんて。。。切なすぎる」

今のところ「何故」か女だけしかいない艦魂達
お互いを見える人がいなくっても
存在を知る事はできる彼女達にとって。。。。人のつくる「家庭」

というものはどう写っているのか？

『しらね』さんは艦魂物語の中でも年長に入ります
自分より年上の護衛艦は『はるな』さんと『ひえい』さんだけです
そんな彼女の観てきた
海の男達の家族。。。。。その風景は彼女の心にどんなものを残してきたのか

国に愛されないのに「女」
ふれあう事も出来ないのに「女」

これは現実の女であるなら大変に悲しい事です
好きな人が自分の中を空気のように通り過ぎて行く。。。
きっと彼女にもそういう経験があったのではないでしょうか？

それでも司令官『しらね』！！は強い人！！

一群の司令として
護衛艦隊のまとめ役として頑張ります！！
そんな『しらね』さんがヒボシは大好きです！！

だから。。。。
海自の皆さんあんまり不祥事起こさないでください！！（涙）
彼女を辱めないで下さい！！（泣）

この小説を読んで自衛隊の護衛艦にくわしくなったと言ってくださ

る方もいます！！
でも
大抵『しらね』さんの事故の事で「火災」がありましたね～～とか
「またぶつけましたね」とか。。。。知って下さるきっかけは何で
あっても嬉しいのですが。。
これぱっかは
ヒボシ号泣です。。。
ヒボシの大事な『しらね』さんをもっと大切に扱ってあげて下さい
！！
もっと
良い事で有名にしてあげて下さい！！心からお願い。。。。

そして今までも『しらね』さんを応援してくれた皆様には超感謝し
ます！！
小説内の彼女も喜んでおります！！（藁）
これからもまだまだ活躍どころありますから期待しててください！！

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～

第三十四話　月の下（前書き）

ｓｐｅｃｉａｌｔｈａｎｋｓ！！Ｈｏｎ先生！！
ありがたくネタを使わせて頂きました！！！
伊東先生，大和長官ごめんなさい
これにて「ハアハア」は標準語になりました（爆）

第三十四話　月の下

食堂に向かって歩き出した鈴村達。。。
その後ろをチョコチョコと付いて歩く艦魂達。。。。

海の風は緩く
このおかしな集団を微笑むように吹いている
夕暮れの太陽も優しいオレンジの光を海に写す中
艦魂と「人」の遭遇という空前の珍事は静かな夜に向かっていた

後，長く見積もっても２８時間後には被災という艦の中はどこもかしこもが慌ただしい
眠ることも順番で動く世界
海自の隊員達も準じ緊張を身に纏った様子で忙しく動いている
向かう先は日本に災害派遣の要請をしてきた「タイ国」沿岸
どの兵科の隊員も近づく任務のために。。。食べていた

補給艦『おおすみ』の食堂の熱気はいつもの４倍以上のものになっていた
もちろんクーラーがそれなりに入ってはいるのだが。。。
それでも熱い。。。有象無象の男達の食堂

普段はブリーフィングルームに使われたりもする通常護衛艦のものより大きな部屋にもかかわらず満員御礼
乗せている陸自の普通科の隊員達は次々とご飯を食べて行く
今日は金曜日という事もあり「カレー」さらに熱を上げる，熱い食料だ

それは鈴村達が向かう先の部屋の状態をよく示すほど香っていた

「カレーか。。。」

くわえタバコを隠した鈴村は鼻についた「煮込み系」香りに夕飯を当てた

「海自のカレーって，シーフードだと思ってたんだけど違うらしいぜ」

となりを歩いていた梅酢(うめず)はがっかりしたような顔

陸自でもカレーは少なくない料理だが

海自の艦に乗っての仕事に行くに当たって「シーフード料理」が出るのではという変な楽しみを持っていたからだ

「バーカ。。。そんな鮮度のたけー飯が出るわけねーだろ」

呆れたような言いぐさの鈴村

「海の上なんだぜ?こっからどんだけ缶食まみれな生活送ってくと思うんだよ?釜の飯サイコー!!」

3人組の1人

身の丈で言うのなら，一番小柄な佐藤は短い頭をガシガシ掻きながらも浮き足で前を歩く

そんな鈴村達の後ろを『きりしま』『おおすみ』の背中にぴったりくっついた『はまな』が「人」の後を付いて歩いていた

「ねえ。。。あの真ん中のデカイ「人」が。。。私達が見えるの?」

通路は食堂行きの隊員と，返りの隊員で狭く

普通なら空気の存在である艦魂達は「人」の体に当たる事もないので避けもしないのだが

さすがに細々と避けながらの追跡

前を歩く『きりしま』に『おおすみ』は3人の中一番大男の鈴村を指差して聞いた

「うん！目が合ったんだ」

「目が合っただけで見えてるってわかるの？」

怪訝な表情の『おおすみ』をよそに，いつになく活き活きとしている『きりしま』は

「だって，ヤバイって顔してたよ。あの人きっと霊感が強い人なんだよ」

確信した顔

先ほど後甲板の上「幽霊捜し」をしていた彼らの中，つまらなそうにしていた鈴村は自分の後ろにいた何かに気がついて振り返った後すぐにそこを立ち去る事が出来なかった

今まで本当に無駄な時間をすごしているといった顔をしていた鈴村の表情が硬直した事を『きりしま』は見逃さなかった

「霊感つよいと私達って見えるの？」

『おおすみ』の腕に自分を絡ませるほど引っ付いている『はまな』が小さな声で聞いた

「そういう風に聞いてるよ」

これも艦魂達の間に，いつの頃からか流れている「逸話」だった

根拠などどこにあるかわからないものなのだが，長く艦とともに生き続ける艦魂の暇つぶし的な話しなのかもしれない，と

いつもなら笑って却下しそうな『きりしま』が今日はその事に興味津々だった

戸惑いで進む足を引っ張っている『はまな』などお構いなしに鈴村達の足を追って食堂に入っていった

「くさい。。。」
むせ返る男達の匂いに鼻を手で覆った『はまな』

「そんな事言うなよ～私の中ってこんなばっかだよ～」

自分の手にしっかと捕まったまま，眉を下ろしオドオドしている御小ちゃまに苦笑い
基本，男所帯の護衛艦の中身に，陸自のワイルドな男が加わった世界は『はまな』にとって恐ろしいものでしかなかった
右も左も。。。。男ばかり
普段でも絶対に行かない食堂にどうして『きりしま』が平気で，こ荒野の食堂の中を歩いて行ってしまえるのかが不思議だった

「はーちゃん（『はまな』）来年，妹出来るのに大丈夫なの？」
「それとこれは関係ないよぉ。。。」
泣きそうな彼女をひっぱり後れを取った『おおすみ』は困った顔をしながら『きりしま』の向かった先に歩いた

早飯ぐらいはどこにいっても変わらない
むしろ早くご飯を食べる事が自衛隊にとって任務と同じぐらい常用な事にもなっているのだから
あんなに大盛りだったカレーを事もなく平らげた梅酢は爪楊枝を口にくわえて

「やっぱ隠し味の差かな?。。。。。いまいち煮込みが足らん感じが?」
「コーヒー牛乳だな」

対面に座った佐藤もいまいちな顔で皿に残ったルーを舐めて
「鈴村はどうよ?」
梅酢の横に座った鈴村は遠い壁の方を向いて
「別に。。。釜の飯なら缶詰よりましなんだろ。。」
いたって冷静な回答だったが

鈴村は。。。。。焦っていた
四人がけのテーブルに着座した時には何もみえなかったのだが
。。。。
対面に座った佐藤のとなりのイスにいつの間にか。。。。。何かがいる
開いているハズの空白のイスに。。。。何かが座っているのが見えたのだ
それは明確な色や形をしてはいないが「白い物体」で。。。。シルエットはまさに子供の形をしている
それも。。。1人じゃない。。。
イスに座ったメインの子供の後ろに。。。少なく見ても後，2人の白い影

「。。。甲板で見たヤツ。。。だよな。。。」

鈴村は田の二人の話を右から左に聞き流しながら考えていた
「いかなきゃ良かった。。。。」

そもそも鈴村が彼処に行ったのは彼が陸自一。。。。幽霊を見る男

だったからだ
梅酢も霊感の鋭い部分を持ってはいるが，鈴村ほどではない

昼間，自分の部隊の「疾風」を見に甲板に上がった時
それを集団で見た。。。。
梅酢の「靄(もや)」がなんてレベルじゃなく。。。人の形に近い集団が並んでいるところまで見えていた
最初は驚いたが「疾風」に乗って器機の整備をしているふりをしながら様子をうかがったがどうも「海の幽霊」というたぐいのものではなく
「船の幽霊」で，それもこの護衛艦に憑いている者たちなのでは？
というところまでは推測ができていたが
それをまた確かめに見に行ってしまった事が失敗だった事に頭を抱えた

「取り憑かれた？」

霊感の強い者に幽霊は着いてくる
これは霊感の強い者の世界においては鉄則だ
彼，彼女達は世に未練があってそれを誰かに告げる，または自分に成り代わって実行してもらう事が希望であり
自分の存在に気がついてくれた者がそれを実行してくれるまで。。。
離れない

鈴村はタバコに火を着けながらチラリと目の前に鎮座する「白い霊」を見た
眼のない空洞の黒が自分を見つめている
「水子じゃ。。。ねーよな」
深く吸ったタバコ

小さく首を振った
「ない。。それはない，いくらオレがヤリっぱなしの馬鹿野郎でも，
そこまで作った憶えはない。。。」
それでも白い霊は明らかに鈴村を見ている。。。
自分に何かを頼もうと見つめている
男は1人，そこはかとなく自分の体質を呪っていた

輸送艦『おおすみ』の内部
陸自の隊員達が寝るベッドは天井からのつり下げられた3段のもの
チェーンで括られた形で固定式の物とは違うタイプだがマットはそ
れなりにいいものが使われている感じだ

「おい。。。鈴村」

消灯の時間にはまだ早い
明日には任務のために準備と上陸のためのレクチャーが海自からさ
れる
もう十分に眠りにつける日はしばらくはない事をよく知る隊員達は，
ところどころで眠りに入っている中
小声で頭を下げてきたのは佐藤だった

「なんだよ?」
「幽霊さがさねーの?」

この数分前，梅酢が自分のカバンにあったお守りを手に甲板に向か
ったばかりだった

「探してどーすんだよ？」
鈴村はチラリと自分のとなりのベットを見た。。。
まだ空室のベッドには横に並んだ白い霊が３人。。。。自分の背中をずっと見ている
幽霊ならココにいると言う状態だ

「梅酢は確保するって言っていたよ」
「確保？」

鈴村は思い出して呆れた

「幽霊確保」。。。。

それは鈴村達が演習で富士に言ったときの話しだったがといっても一般の演習とは違いかなり本気の行軍というもので，ほぼ「実戦形式」で行われるこの演習は富士の樹海近くで行われたりもするためなのか？
「幽霊」を見た，または見るという者が後を絶たない

その日もうっそうとした森林地帯に歩哨としてビバークしていた鈴村の前に幽霊は表れた
姿は鮮明にして。。。。美しい女だった
距離にしてみると５０メートルぐらい
木立の揺れる葉の下に浮かび上がった彼女は悲しそうな顔のまま鈴村を見つめていた
あまりの鮮明な姿に最初は演習地に紛れ込んだ民間人かと思い
何度か確認をしてみたが。。。。５０メートルの距離では実際の相手が「何？」なのかを確認する方法はなかった

持ち出した小型の双眼鏡で何度か姿を追ったが
夕暮れ時を過ぎた今では白いもやのかかった美女としか確認は出来なかった

「ずっとあそこに立ってんです？どうしますか？」

判断を仰ぐため班長を呼んだ鈴村の前
双眼鏡を覗き込んだ厳つい班長は
「あれか？」と鈴村に聞いた

鈴村はアレが何かわからないし自分にしか見えていないのならば，
拳が飛ぶかと覚悟していた
「見えますか？」
「ああ。。。よく見える。。光ってるな」

班長の隣には梅酢が双眼鏡で見ている
「見えるか？」班長が見えたのならばこの隊では自分についで霊感の高い梅酢にも見えるはず
「見える。。。。女だな。。。人間じゃなさそうですね」

迷彩を縫ったくったドウランの班長は双眼鏡を話すと鬼のような顔をしかめたまま動かない

「どう，しますか？」
厳つい，への字口は鈴村と梅酢に向き直って

「確保！」
「はい？」
真顔の鬼班長の言葉が何を言っているのか理解できない鈴村は首を傾げてしまったが

班長は月に輝く光の目は本気だった
「確保だ!!!」
「了解!!」
命令に即座に行動に入ったのは梅酢だったが
訳がわからない鈴村はもう一度班長に聞き直した

「幽霊ですよ!!確保してどうするんですか!!」
この時の班長の言葉が今でも忘れられない

「むさくるしい男バッカの演習地にわざわざ来てくださったんだ。
掴まえないでどうする?」
「どうするん。。。。ですか?」

なんぼ
むさくるしい男所帯が続いているからって「幽霊」に何させるんですか?
本当はそう聞きたかった困惑の鈴村を前に

「きっと彼女も寂しいんだ。。。。みんなで慰めよう」
何を?
何を慰めるんですか?困惑の目で班長を見る鈴村の前
野生の男は手をワキワキと動かしながら
「みんなでたくさん慰めよう」
あきらかに犯罪の匂いが漂う月の下

「バカだな。。。。」

鈴村は思い出した演習に笑った

結局，さしも幽霊も自分に迫る狼の魔の手を感じたのか，梅酢の接触数十メートルというところが姿を消して幕となった事に

演習に入ると野生化する男たちの姿は「女なら」幽霊でもウエルカムという非常識を現実の命令としてくだしてしまう

「あの班長は絶対に呪い殺されるな」と

思い出話を佐藤と笑っていて気がついた。。。。。鈴村は自分の後ろにいた幽霊達がいなくなった事に

「幽霊。女の人でしたか。。。陸自の男は怖いから。。逃げるが正解だよ」

気配を失った幽霊に少しホッとした

「怖いよ～～～」

通路で梅酢とすれ違っただけで悲鳴を上げていた『はまな』は涙でグダグタになりながら『きりしま』と『おおすみ』に手を引かれて甲板に戻ってきた

「やっぱり「人」って怖いわ。。。幽霊でも掴まえて何するのかな？」

甲板にぺちゃんと泣き崩れた『はまな』の背中をさすりながら『おおすみ』は，風を触れる『きりしま』に聞いた

「何するんだろうね?慰めるって?ボク達別に寂しくないのにね?」

真顔の『きりしま』の返事に『おおすみ』はある意味，純粋培養な『きりしま』という存在にやっと気がついた

任務第一で，そうでなくてもイージス艦という特殊にして特別な艦の魂として見られている彼女は少しばかり世間からずれていた

「だいたいどうして「人」に気がついてもらおうなんて思ったのよ！！」

窒息するほど男まみれの通路に目眩を起こしながら帰ってきた『はまな』は『きりしま』に怒鳴った
最初に甲板で鈴村に気がつかれてから
『きりしま』は彼のまわりを一生懸命うろちょろしていた
手を振ったり，話しかけたりそのおかげで他の艦魂も彼が気がついている事はわかった
顔が緊張して
たまにチラリと見るという仕草で

「だって，「人」と仲良くなれたら任務もスムーズに進む気がしたんだよ」
「どうやって？」

怒鳴って咳き込んだ『はまな』の背中をさすって今度は『おおすみ』が聞いた

「ボク達は結局の所，艦の魂ってだけで何が出来るわけでもないでしょ，出来るのは気を緩めず任務のために集中して行く力を束ねるという行為だけ。だけど人と話が出来るようになればボクの目で見えた被災者をいち早く助けられるかもしれない」

『きりしま』の思いは決まっていた
この災害で昼なく夜なく捜索活動を続けた
だけどイージス艦の機能を目に有する自分と隊員とでは見える物が

違う
遠くに見える。。。。きっと人の体，自分がそれを見つけても隊員には見えない距離。。。
もどかしい救出活動
自分の声を伝える事ができたら。。。。自分はもっと役に立てたのではと
『ひえい』司令に言われた事は心に残っていた

「あんたのその便利で「万能」を唄う目で遭難者を捜せないの？」

探しても。。。自分の見つけた遭難者を，見つけてくれる人がいない事に涙していた
「助けたかったんだ。。。たくさんの人達を。。。。」
「だから陸自のあの人に気がついて欲しかったんだ」
俯いてしまった『きりしま』の思いがただの冗談でなかった事に『おおすみ』は反省した

「でも！！でも！！！あんな「人」選ぶ事ないよぉ！！」
話を聞いていた『はまな』は顔を上げて意見した
「だけどボク達が見える人って少ないんだよ，見える時がチャンスでしょ」
「ヤダ！！あんな人はヤダ！！！」
甲板を叩いて駄々をこねる『はまな』は叫んだ

「「人」は！！私達みたいな女の子掴まえてハアハアするんだよ！！」

「ハアハア。。。。？」

突然切り替わった話題に，それは何？って顔の『きりしま』

「『はまな』？ハアハアって何？」

「ハアハアって。。。」

『はまな』は純粋培養を自分でしたタイプだが，耳に入る情報を無視できるほどとまではいかない
そもそも独りぼっちが寂しくて誰かについて回ってないといけないような子
自分ではそういうゲスな事から遠ざかっていると信じているが，佐世保は基本が集団生活だ
艦魂同士の下世話なはなしもあれば，隊員の雑誌を失敬してきたもので見てしまう事もある

曰く。。。隊員の実用書にある「裸の女」とｅｔ　ｃｅｔｅｒａは『はるさめ』達などが良く見ているので「そういうこと」は知っていた
そもそもこのメンバーの中では女としても一番年上なのだから。。。知ってる

顔を真っ赤にした『はまな』に『きりしま』は不思議そうに首を傾げる

「ねぇ，ハアハアって何？教えてよ」
自分の知らない事にたいする探求心が悪気なく顔を近づける
「ハアハアは。。。あんな事ハアハアとか。。。こんな事ハアハアとか。。」

まさか自分がそんな事で問いつめられるとおもっていない『はまな』の頭の中には色々なものが廻っていた

任務もしてないのに涙の目を泳ぐ数式の光がフィードバックさせるのは。。。
あられもない女達の姿ばかりで言葉が出てこない

「あんな事ハアハアじゃわからないよ，もっと具体的に」

そんなパニック寸前の『はまな』に『きりしま』は不思議そうな顔のまま
2人のあまりに滑稽なやりとりに『おおすみ』はひっくり返っていた笑い転げて
具体的にそんな事が『はまな』の口から出てきたらきっと『きりしま』は失神するんじゃないのかと思うほどに

「佐世保にも「人」が来たの!!その人が『ちょうかい』二佐とハアハアしてたって!!」
「ええ?」

パニックを起こした『はまな』は訳のわからない事を口走ってしまったが
おかげで『きりしま』の興味が一時的にそれた

「佐世保にボク達を見られる「人」がいるの?」
「いるらしいよ」
笑いすぎで涙目になった顔を拭いながら，やっと自分も入れる話題に『おおすみ』が答えた
「いるの?初耳」
自分の前で頭から蒸気を挙げている『はまな』の肩を揺すった

「いるよ。。。。『こんごう』一佐に殴られてたけど」

今度は話題が纏められない『はまな』
「どうなってるの？『ちょうかい』が何かされたり，姉さんに殴られたりって」
「その話し聞きたいな！！私も横須賀に居たときに少しだけ聞いたんだけど，どんな人なの？」

割り座のままフラフラになった『はまな』はコクコクと頷いた
「話したゲルよぉ。。。その変わり」
『おおすみ』の袖を掴まえた『はまな』は「ハアハアは『おおすみ』から聞いて」と自分では口に出来ない破廉恥を譲った

「へぇ～見ることも出来て，話すこともできるんだ。会いたいな」

陸自の「疾風」に寄りかかったまま
佐世保に着いた「粉川」の話しを2人は聞いていた

「で？なんでその人，姉さんに殴られたの？」
「。。。着替えを覗いたから」
「命知らずだね～～～」
いつの間にかジュースを横にしていた『おおすみ』は何度かの任務で『こんごう』を見たことがあった
その印象は怖い人で
横須賀に残る昔話なども統合するに「キレイだがキレる人」と認識していた

「それは粉川さんって人が悪いよ，着替えを覗くなんて最低だ！！」
「ボコボコにされてた」
「遠慮ないなぁ，一佐。。。５０年ぶりの「人」なのに。。。」

妹の目は姉の怒りっぷりが見えるようだった
妹にだって自室に入る事を厳しく制限している姉が無防備に着替えていた所を「人」に踏み込まれたなんて事
『きりしま』は姉がイージス艦に持つ部屋ではほぼ裸で過ごしている事を良く知っていたから余計に怒った事を見抜いていた

「せっかく会えた「人」がそれだとがっかりだね」
「でも。。。いい人っぽいよ。。。さっきの陸の「人」より」

『はまな』はかいつまんだ話しで粉川のおとぼけキャラ的な部分は話したが『ちょうかい』にしてくれたプレゼントの話しとかはまだしていなかった
姉にあげたいプレゼントは高価な物だった
艦魂にとって外のブランド商品がいくらするのかなんて考えた事のない物だった

「高い物だったらしいけど。。。買ってくれた」

夜遅くまで，寄宿舎の自室で粉川が町まで行って買ってきていくれたプレゼントにラッピングを施していた『ちょうかい』の嬉しそうな顔を覚えていた
「寝ないの？」と聞いた『はまな』に『ちょうかい』は嬉しそうにそう答えた

「で，その人と『ちょうかい』がハアハアしたってのは？どういう事？」

横に座った真顔は急に話題を戻した
「『おおすみ』！！」

触れたくない話題に一応その件は譲った事と『はまな』はそのまま
自分の横に座る『おおすみ』の肩を叩く

「抱っこすること！！」

本気で答えるつもりのない『おおすみ』は人差し指をたてて
「抱っこして頭，撫で撫でする事だよ」
「それをハアハアするって言うの？」
全く持って純粋な『きりしま』はそれにしてはと考えながら立ち上
がると首を傾げた

「ちがうでしょ。。。」
考え込んで海を見渡している『きりしま』の後ろ
嘘を嬉々と吐いた『おおすみ』の顔を睨んで『はまな』は焦ってい
たが

「そのぐらいにしとけば良いって！！そんなそのうち誰かが教えて
くれるって！」

「『おおすみ』！！！」

陽気に振る舞った『おおすみ』の背中に『きりしま』の怒鳴り声
「ごめんなさい。。。。嘘つきました」
両手を挙げたごめんなさいの手を掴む

「何か見える！！！海に。。。。人がいる！！」

それは夕暮れを周り南海の青い帳が海に届いた時間だった

第三十四話　月の下（後書き）

カセイウラバナチャンネル～陸自を調べた編～～

元気ですか～～学生のみなさんは有意義にお休みを遊んでくださいね～～

さて

今回災害派遣を閑話にいれたことで。。。めちゃくちゃ色々と調べるものがふえてしまって悪戦苦闘中のヒボシです

幸いネタの提供などをうける事などもできて（藁）

ｓｐｅｃｉａｌｔｈａｎｋｓ　Ｈｏｎ先生

楽しく描くこともできました

そういえば

ヒボシの知勇学の頃の同級生も何人か自衛隊員になってましたが

ヒボシはちょっとずれた子だったので話しもした事がなかったですね（爆）

リックランドにもそろそろ足を運ばねばならんですね

ところでこんなメッセがきたのですが

ヒボシ先生の作品にはアダルトな描写が結構あります

Ｒ１５の表記をしては如何でしょうか？

アダルトォォォ！！！
そんなところあったっけ？
実は友達にそうなのか？と聞いてきたところです

友達ラ　「百合のシーンを具体的に描いた事じゃないの？」
ヒボシ　「アダルトでしたか？アレ？」
友達ラ　「全然だが。。。。読んでる年齢層でアウトな人がいるのでわ？」
ヒボシ　「今日日女子中学生でもＳＥＸぐらい知ってますよ？」
友達ラ　「知ってるねｆｌｏｗｅｒｃｏｍｉｃなんて普通にレイプの描写もあるしね」
ヒボシ　「少年チャンピオンぐらいですね。。。」
友達ラ　「気にしすぎでは？」
ヒボシ　「ええっそうなのではと思うのですが？」

実際。。。。ヒボシは『しまかぜ』さん『くらま』さんのシーンをただのエロスで描いているわけではないのでただのエロスと感じたのならばそこどまりの見識という事になると思います
本当はネタバレになるのであまりこういう事はかきたくなかったのですが
故にここから先は小説の先を楽しみにしていらっしゃる方は読まないでくださいね～～

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

Ｒの表記について

ヒボシの見解では
艦魂である彼女達に「ｓｅｘｕａｌｉｔｙ」は不必要と考えていました
つまり
魂の存在である彼女たちが「女」である必要性さえないと思ってました
だからといって女の姿を否定しているわけではありません
否定しているのは「女のとしての機能」です
つまり男性に恋したり，愛情をもったりという必要は無いと考えていました
なせならば
艦魂という以上「人」と関わったとしても「子孫繁栄」の意志は必要なく
また年もそれほどにとらない彼女たちに恋愛が必要ではないと考えていたからです
そのほうが艦魂という原初的設定にはしっくりくるからです

艦魂を見られる人は少ない
つまり彼女たちは見られる必要を持っていないともいえます

たまたま見られる人がいたから色々と物語として作られるという事
にもなります

でも。。。。
それはあまりに切ないです
なので
ヒボシを設定を間逆にとらえた訳です
「女である理由」
「女であるために行われる事」
そしてココでは多くの艦魂作家の先生からも助けられ百合もあると
理解を示して頂きました
女所帯の５０年で
ふれあうことも出来ない男を前に「女」である彼女達は何を考えて
生きてきたか？
何故
女同士の関係を結ぶ者がいるのか？

これらの事に作品が進めば随時答えが出てくると思います

艦魂の世界は
ヒボシ達が考える「人」の世界とは違います
まずそこから考えた結果があの形であり
たまに現れるエロスです

そういう意味ではＲ１８なのかもしれません
恋愛が恋人同士の特権としか考えられない年齢の人には向いていま
せん
ですが

チャタレー夫人の恋人の初版に年齢制限なんかありませんでしたよ
（藁）
純文学と名の付く小説にも多々ＳＥＸの描写はありますが年齢制限
なんかないです
太宰治も
芥川も
小説の必要な要素としてＳＥＸを扱っています
それが人間本来の血肉だからです

ヒボシもまた血肉として扱っています

それに。。。。
この程度の描写でＲ１５とかＲ１８入れていたら
本気でＲ１８を描いている人たちに叩かれますよ（藁）
まあ
それでも個人的見解ですが。。。

これからもそういう描写はあると思いますが
それでもＲ表記をする事はないと思います
それが私の意志だからです

火星明楽

第三十五話　涙の雨（前書き）

猫さんは霊感の強い生き物だそうです。。。。可愛いのに～～～

第三十五話　涙の雨

夕日が面影も残していない時間になった海
南の島々の海は暖かさも手伝ってなのか水面の色合いが淡い水色に
輝いている

でも
闇の帳に飲み込まれつつある時間である事に変わりはなかった
風邪の生ぬるい感触を蹴飛ばす勢いで『きりしま』は陸自の「疾風」
の間を走っていった
甲板の先へ

「あそこに!!船がいるんだ!!」

『おおすみ』は『きりしま』は後を追って艦首から沈んだばかりの
太陽の見えた方角を指差した
見渡す海原に何の光も見えない
「どんな船なの?」
差された先に目を凝らすが『おおすみ』には何も見えなかった

「いるんだ!!あそこに船が!!」

見えないという『おおすみ』の前『きりしま』の目は輝きを変えて
いた「フェイズド・アレイ・レーダー」の八角の輝き
赤いラインを走らせた目の玉は必死に訴えた

艦首から受ける波風に視界を確保するため手で髪をのける
「どうしよう」
「とりあえず。。。。レーダーに感はないの?」

護衛艦隊が陣形を組んで航行しているのだから，全方位にレーダーをまわしている
艦魂である『きりしま』が感じる事のできる物体ならば写っているハズ

「誰も。。。気がついてない」

レーダーに敏感に映る規模の物では無いのかも知れない
『おおすみ』の艦橋に向かって目を向けるも何かに気がついている様子はどこにもみられない

「どうしよう。。。。どうしよう。。。」
焦る気持ちが空回りを始めているのか，「疾風」の周りをグルグル頭を抑えながら回る『きりしま』

「待ってよ!!その。。見えるっていってもアレがホントに難破船なのか?遭難者なのかなんてわからないでしょ。。。ただのボートピープルかもしれないし」
両手をきつく結び祈るように震えている『きりしま』に『おおすみ』は肩を揺すって聞いた
事実この海域はボートピープルも多い，それ故に海賊もいたりもする場所だ
だが『きりしま』は違うと確信していた

「違う!!あれはボートピープルなんかじゃない!!感じるんだ!!救いを求めてる!!ボクは被災地を見たんだ!!」

天変地異の真下『きりしま』はどんな小さな声も見逃さぬ覚悟いで被災地の捜索をした
目に見える地獄の前で

最後の助けを求めた声に生者はなかったが思念が残り「木霊」になって聞こえていた。。。。
あの悲痛な叫びと同じものを感じる
それも「生きた声」で

「どうして。。どうして「人」は気がついてくれないの。。。」

一心に願う手に手を置いた『おおすみ』はうろたえた
イージス艦ほどりレーダーを有しない彼女には，見えないもので，
聞こえもしない
でも。。目の前懸命にその事を訴える『きりしま』が嘘を付いているなんて考えられない
小さな手を一生懸命に重ねる姿を見て
思い出した

「あの。。。陸の「人」に。。なんとか伝えられないかな?」

『きりしま』は顔上げた
「あの人に。。。。」
鈴村の事，自分達の存在に気がついた彼に，この非常事態をなんとか伝えれば?

「ボク行ってくる!!」

思いついたら最後あっという間に『きりしま』は光の中に消えた
『おおすみ』もびっくりしてしまうほどの早さで
自分の手が触れていた彼女の肩が消えた後，もう一度海難と示された海を見つめた『おおすみ』も急いで後に続いた

やっとで追いついた『はまな』の前で。。。。

「置いてかないで。。。」
少し走っただけ，肩で息した作業青服の『はまな』はまた陸自の男達のところに行くのは怖かったが，このままココに置き去りにされるのも怖くて2人の後を追って消えた

眠れなかった鈴村はベッドに仰向けになって小説を読んでいた
目暗がりな部屋であまり「写真」以外の本を見るのは感心されないが文字を見ていればそれなりに眠くもなるというものだ
近づく被災地の状況に動悸が速まっているのを感じて胸に手をおく

遠足の前日に高鳴った気持ちに似てもいるが。。。
向かう先はお楽しみの場所じゃない
これから数ヶ月は続く「人死にの世界」に自分を慣らす必要がある
死体と対面しながらの被災地での活動がどれほどの心の負担になるかはわからない
だから
些細な幽霊探索までしたくなるってものだろうと仲間達のベッドに目を向けた

あんだけ「幽霊」と騒いでいた仲間の2人は鼻の頭に「いびきストッパー」を貼り付けて眠りに入っていた
「いい気なものだ」と

本を下ろした鈴村は「真昼の幽霊」の事を少し考えていた
「また来るんだろうな」と思いながらも
いささかおかしな出来事にペラペラのシーツを被りながらほくそ笑

んだ
昼には活発に動いてたのに，幽霊という存在にとって舞台本番の夜には動かないなんて。。。。意外と人の心を理解した良心的な幽霊だったのかもしれないと
大きく息を吐いた

明日からは被災地支援の本番に入る自分のためにと

その時
鈴村の体に重量物が落ちた。シーツ越しに人間と形のわかる物体は落ちただけでは飽きたらずか何度も跳ねる
部屋に響くだろうかなり大きな音と共に遠慮なく
陸自の中にはイタズラ好きなヤツは多い，やっと眠りに入ろうとした自分にこんな事をするヤツは？
シーツから顔を出そうとした瞬間，物体が増えた。。。。
今まで1つだったものが2つになって交互に自分の上を跳ねる

鈴村の顔は青くなった。。。。
「まさか。。。」
そんな事はあって欲しくない。。。そう思いながらシーツを少し開き顔を覗かせる

隣のベッド。。。。
いびきストッパーを付けているのに，もれる音をさせながらぐっすり寝ている梅酢の顔
音は鈴村にしか聞こえていない証拠

「きやがった。。。。やっぱり本番にきやがった！！」

霊感の高い鈴村は自分の上を跳ねるものが。。。おそらく「幽霊」

だと言うことに気がついた
それにしても凄まじい攻撃だ。問答無用ではね回る物体
深くシーツを被る。。。これはもう行きすぎるのを待つしかない
下手に目なんか合わせたら取り殺される勢いに，手足を丸め背中だけに幽霊を乗せる形にした

「朝まで。。。我慢かよ」

それもかなりしんどい。。。明日からはオペレーションが始まるってのに
鈴村はもう一度シーツのスキマから梅酢を呼ぼうと思った
「騒霊」は聞こえない他の者が横から突れば消える可能性があるからだし，梅酢も霊感はそれなりに高いかにら。。。。あわよくば梅酢の方にこの幽霊を押し付けようと思ったのだ
小さくシーツを開く

「梅酢。。。」

そこにあったのは白い幽霊の。。。。黒いアイホール。。。。
目が合ってしまった

鈴村は跳ね起きた
起きると同時に策敵の目で周りを見回すと。。。やはり自分の前にいた2人の白い幽霊に両手を挙げて聞いた

「何が望みだ。。。出来るだけはするけど。出来る事は少ないぜ」

相手の注文を聴く前に，無理難題には対処できない事を告げた鈴村は自分のバッグに入っていた手帳を素早く出した
「日本語オンリー，後は英語少々だけ。声による呪怨は勘弁だから。

。。。要望はココ書いて」

差し出された手帳にボールペン
光と共に鈴村の上に落下した『きりしま』には，どうやってこの「人」に進行している事態を知らせて良いか方法が浮かばなかったが，まさか相手からその方法を知らされるとも思っていなかった

解決のために
『きりしま』は手帳を受け取ると，まず簡単に一言書いた

「助けて欲しい」

規律正しい海自の任務に徒事する『きりしま』の字は鈴村がその姿を明確に見えていたなら驚くほどの可憐少女が書いた物とは思えないほどキレイでしっかりとした字だった
その流麗な字を眺めた鈴村は
自分の前に浮かぶボールペンとそれを持つ白い幽霊に聞いた

「助けろって。。。事か。。。。どうすればいい？言っとくがマジで出来る事は少ないぞ」

事実，助けるにしたって陸自の誰かを殺して欲しいなんて願いは叶えられない
白い霊に見える『きりしま』達に囲まれた鈴村は逃げ腰のまま続けた

「殺しは無しだ。。。それがあんたの願いでも出来ないからな」

幽霊に対する恐れがどういうものかが理解出来ない『おおすみ』は

困った顔で『きりしま』に
「物騒な事言う人だな」とつぶやいた，それを横目に
『きりしま』は手帳の方に返事を書いた

「難破船を見つけた，みんなに知らせて欲しい」
「難破船。。。？難破船の幽霊なのか？」
『きりしま』は続けて書いた。のんびりとココで筆談を続けている
時間はないから

「早くしないと見失っちゃう」

鈴村はベッド脇にかけてあった迷彩の上着を掴むと階段に向かった
その後を手帳を持ったまま『きりしま』と『おおすみ』が追いかける
手帳に質問を書きながら

「どうするの？」
甲板へ上がる階段を走る鈴村は答えた
背中に着いてくる白い霊と自分の手帳に，相変わらず顔色は悪いが
答えた

「突然艦橋に行ったって陸自のオレの言うことなんか信じて貰えない
いぜ！この目で見てそれを言わなきゃよ！！」

鈴村の言うことはもっともだった
海に詳しくない陸自の隊員が「難破船」発見を主張したって何処に
いるかもわからないではただのバカ騒ぎの扱いで笑われるのがオチだ
とにかく自分たちの言い分を聞いて走ってくれている鈴村の後を『
きりしま』達は追いかけていった

鈴村と『きりしま』『おおすみ』が甲板に向かって激走していた頃。

。。。
『はまな』は居なくなった鈴村のベットの上にちょこんと落っこちていた
「ふぇ。。。置いてないでよぉ～～」
もぬけの殻になったベッドの上で寂しくて泣きだしながらまたも置いていかれた後を必死に追い始めた

その頃，補給艦『おおすみ』の甲板に上がった鈴村は手帳に向かって聞いていた
夕暮れの時にくらべると風が強くなっていて艦艇にぶつかる波も高くなっていた

「どっちだ?」

暗闇の空と海が手をつないだ時間
陸自の鈴村の目には見渡す四方の海に灯りなど，どこにも見えなかったいや
正確には近くを巡航する護衛艦の光だけが見えるそれ以外はまるで見えない闇の海

「こんな中で，難破船なんて見えるのかよ?」

昼でも大海原しか見えない世界だったのにとアチコチと見回すそこにコンパスの表示と座標を入れた図を書き留めた手帳が前に出

された
宙に浮く手帳の白い霊の手も同じ方角を示す

「だめだ。。。オレには全然見えねぇよ。。。」

それは鈴村で無くても一緒だった
海自の人間だったとしても『きりしま』が示した方角を見ただけでは船を見つける事は不可能な位置
鈴村はそれでも何度も手帳を照らし合わせながら目を凝らして海を見つめたが
自分の足もとにつく2つの霊に振り返った

「無理だ。。。見えねえよ。。。見えねえものをどうやって知らせるんだよ。。。何にもねーとこ指差したって誰も信じちゃくれねーってもんだ」

鈴村は顔に上がった汗を袖で拭うと手帳を霊に返した
「悪い。。。。力になれない」
肩を落とした

「『きりしま』。。。「人」には見えない距離なんだよ」
見えないを連呼しながらも。。。それでも必死に海の上を探してくれた鈴村の前『おおすみ』が諦めたように言った

「そんな。。。あそこ助けを求めてる人がいるんだ。。。」

少しの奇跡は起こった
「人」までを繋ぎに起こす事が出来たのに，あっけない幕切れ。。。
助ける事が出来ないなんて。。。『きりしま』は自分がいかに無力かを「もう一度」知る羽目になった

そして自分が見えすぎる目を持つ事が悲しくなって手帳に涙を零した
地震が起こりたくさんの「死」が流れたあの海で
少しでも人を助けたいと願った彼女にとって。。。今，目の前で苦
難に遭っている声を誰にも届けられない事実に泣いた

「泣いてんのか？」

浮かぶ手帳にこぼれた雫を見た鈴村は「雨」なのか？空を見上げた
が煌めく星空しか見あたらなかった事で，目の前に並ぶ2つの霊に
聞いた
ただ手帳を濡らす「雨」の正体は涙

「なんとかして欲しい」

涙の事は言わず『きりしま』はただ救いが欲しい事を書いた
ココにくるまでの間にたくさんの死を見た瞳は止めどなく涙を零し
続けた
黒髪をがっくりと落とし俯いた彼女の止まることのない涙は，雫と
なって手帳に雨を降らせてゆく

「助けて欲しい」

ボールペンの文字を滲ませる涙の雨
満天の星空の下
艦の魂はただ祈っていった

「おーい!!陸自の人!!そろそ艦内に戻ってくれ!!」

次の手が浮かばない鈴村の後ろで大きな声が呼んだ
時間外で甲板に上がっていれば問題になる
なんたって旅行でココまで来ているわけじゃないのだ

「言えば良い」

手帳の涙に。。。難破船の存在を信じた鈴村は振り返ると大きな声で返事した

「難破船を見つけたんだ!!助けてくれ!!」
「何?」

海風が走る甲板の上を鈴村は，年配の伍長と思われる海自の隊員に向かって怒鳴った
「ココから!!この方角に見えたんだ!!」
階級章を見ながらも敬礼もしない鈴村の姿に怪訝な顔をした伍長だったが，示された方角に目を凝らした
「どのアタリだ?」
暗い波間を見ても変わらぬ響きが返るだけ

「この辺を通る船舶だろう。。。。けっこういるんだ」

一緒に見回りに来ていた若い隊員も手をかざして方角を見つめるが
「光」を見つけられない
「地震の影響でいろんな物が流れてるんだと思うよ。人とはかぎらんだろう」

いくら南海の澄んだ海といっても暗闇の中に有れば天地もわからない世界
生ぬるい風の中，伍長は海の顔をさらう波を何度も見てみたが。。。。当然そんな距離に見える物でないためか諦めた顔で
「みえんな」と肩をすくめて見せた
その隣で若い隊員が鈴村の肩を叩いて

「陸じゃわからないだろうと思うけど，波のうねりってのがあってね。。それがたまに大きく上がったりすると月の光で大きく反射して。。」
「馬鹿野郎!!!人の命がこの海に彷徨ってんだよ!!!くだらねーウンチク語ってんじゃねー!!」

自分の前で自慢げに海の話しをし始めた彼の襟首を掴むと，鈴村は怒鳴った

「じょーだんで!!こんな事言うかよ!!」
「テメエ!!」

荒々しい男たちの取っ組み合い
掴まれた襟首を引き寄せた若い隊員は，自分の持論を突き飛ばした
鈴村を無礼とばかりに殴った
だが襟首を掴んだ大男鈴村は殴られながらも続けた

「オレ達は人助けに来たんじゃねーのかよ!!小さな命は取りこぼしてもかまわねーのか!!」
「やめろ!!!」

伍長が間を割ると両人の顔を押さえた
「暴力は止めろ!!まだ任務の前なんだぞ!!」

上陸前の不祥事は御法度
下士官の間を取り持つ大任の伍長は自分の目の前で起こった暴力を蹴飛ばした

「一度確認すれば済む事にいちいち手を挙げるな!!!」

そう言うと2人に「起立!!」と指さし確認をした
「そこで立ってろ!!今，艦橋と連絡を取ってくるから。。。反省してろ!!」
「待ってください!!ココに方位が」
鈴村は自分の後ろに浮いていた手帳を伍長に差し出した
(正確には『きりしま』が手に持ったまま立っていて「第三者」から見ると浮いて見える)

「。。。。。こんな正確に方位まで?」
それは海自では当たり前の書き込みなのだが，陸自の鈴村が書き込んだとは思えないほどの正確なものだった
それに流麗な字は，粗暴を絵に描いたような鈴村の物とは思いがたかったのか
顔をしかめた

「オマエが。。。書いたのか?」
「正確にわかってます」

殴られた口を拭う事さえしない鈴村の眼差しに伍長はこれがただ事でない事を確信したのか頷くと「着いてこい」と呼んだ

「あ，艦橋，聞こえますか?先任伍長の初芝です。今から言う方

角を確認してほしいのですが？」
甲板から艦橋をつなぐ受話器を取ると鈴村に手帳を返す
「こちら艦橋，何も見えないが？どうした？」
艦橋に詰める士官らしい声は状況の確認のための返事をよこした
「その方角に難破船らしき影。。。または救難信号は出てませんか？」
返事は早かった
「確認されていない」

「そんな。。。。」
鈴村の足もと
ついて回っていた『きりしま』は首を振った
未だ見えている「救難者」の姿を何故人が気がついてくれないのかもう手だてはないのかと顔を下ろしてしまいそうになった時だった

「艦が進んでるんだズレたんじゃねーのか？」

それは正解だった護衛艦隊のスピードは落ちているとはいえ漂流している物体にくらべれば確実に前を進んでする
最初に提示された海域より動力を持たず漂う難破船の位置がズレているのは正解だった
直感だったが鈴村は手に持った手帳を自分後ろをついて回る白い幽霊に差し出した

「教えてくれ。。。。助けたいんだろ！！」

自分たちを「幽霊」と恐れていたハズの鈴村は真剣に，この事態に取り組んでいた

涙を振り払った『きりしま』は
ごつい大きな手が差し出したボールペンに急いで手を伸ばした
2人の手がその媒体に触れたとき鈴村の視界が急に開けた

自分の半分に満たない背丈の少女。。。。
海自の制服に身を包んだ彼女の涙の目と輝きの向こう
暗闇の海を頼りなく漂う，筏とも船とも言えない遭難者の姿がはっきりと見えた

「助けて。。。。命を。。。。」

『きりしま』の何度も泣いた涙の顔に。。。鈴村は強く頷いた
目に映った情報を素早く書き取ると，艦橋との対応をしている伍長の肩を揺さぶって手帳を渡した
受話器をにぎり「誤報」という対応に窮していた伍長は驚いた顔をしたが鈴村の言葉に即時に対応した

「ココに!!命が漂っている!!助けてくれ!!」
「艦橋!!もう一度確認してくれ!!方角は!!」

「確認。。。。確かに何かいるな。。。」
艦橋はレーダーに映る物体を確認した事を下に告げた
鈴村は伍長から受話器を奪うと叫んだ

「命を助けてくれ!!オレ達はそれをしにココに来たんだから!!」
その返答は心強いものだった

「了解！後は任せろ！！」

目標が決まれば海自の動きは速かった
即時に護衛艦『ひえい』から目標のポイントにヘリを飛ばした
『きりしま』の紡いだ命の糸はやっと「人」に紡がれた瞬間だった

鈴村は甲板に座り込んでいた
幽霊のお願いのために，こんなに汗をかくとは思わなかった事もありぐったりした様子で隣を見た

手帳はしまったが。。。自分の隣に浮くボールペンがまだ何かを言いたそうに待っているのが見える

「願い叶えるのは1つだけだぜ」

そう言いながらもボールペンの端を掴んだ
入れ替わる景色
短い黒髪を揺らし横にちょこんと座る少女に鈴村は聞いた

「船の幽霊ちゃん？」
「ううん。。。ボクは護衛艦きりしまの魂『きりしま』。。。。信じてくれてありがとう」

『きりしま』はやっと自分の姿を見られ，話も出来るようになった
鈴村にお礼を言った
ボールペンを通してでしかお互いを認識できない2人だったが鈴村は明確に見える幽霊に苦笑いを見せた

護衛艦の魂と言われてもピンとこなかったが，護衛艦の幽霊が「人」を助けたいと懸命になっていた事は理解が出来た
そしてその魂。。。。
あまりに幼くも可愛らしい少女が「人」を救おうと必死になっていた事に頭が下がる思いだった
だから礼を言われるのがくすぐったい

「助けたかったんだろ。。。。それでいいじゃねーか」

一仕事をこなした男は，けして鼻にかける事なく言った

「オレたちゃ「人」助けに来たんだ。当然の事をしたまでだろ」
「はい」

鈴村の照れた顔に『きりしま』は手を伸ばした

「本当にありがとう」

その顔は少女と女の中間。。。。
優しい眼差しは細い指で切れた口から溢れていた血の後を拭いた
危うい感情を抱いてしまうほど近い距離に，鈴村はボールペンを離すと立ち上がった

「今度，頼みがある時は。。。ゆっくり起こしてくれ。。。急に上に乗られるとビビルからよ」

そう言うと素早く背中を向け救難の活動で騒がしくなった海自の隊員の間を縫って戻っていった
鈴村の背中を『きりしま』は感謝の瞳でずっと見つめていた

海風から遠ざかった中
甲板を降りる階段で鈴村は，ぼやいた

「。。。。幽霊確保か。。。。アブねえアブねえ。。。」

思い出しても可愛かった『きりしま』の姿に自分の理性を守れたことにＯＫと手を挙げてついでに大きく欠伸をした

それは長い夜の始まりにあった，一大救出劇だった

その頃
１人『きりしま』達から置いてけぼりを食らった『はまな』はやっと『おおすみ』と合流して。。。。案の定泣き崩れていた

「１人にしないでよぉ～～～」と
かなりお味噌な存在になっていた

第三十五話　涙の雨（後書き）

カセイウラバナダイアル～～霊感の生き物～～

ヒボシの友達で猫さんを飼っている人がいるのですが。。。
猫さんは人間以上に霊感の強い生き物なんだそうで
たまに虚空をジーっと見ていたりします
ヒボシはたまに尋ねてみるのですが

ヒボシ　「ニャアさん。。。そこに何かいますかね？」
ニャア　「。。。。。。（上の方を見ている）」

決して何がいるかは答えてくれないのですが（当然）
何かがいる事を人間以上に知っているうえに。。。それが人の考えるような脅威ではない事を理解しているようです
むしろ猫さんにとって「猫空間」における共存者のような感覚である一定の時間コミュニケーションをとると後は知らんぷり
たまにその空気のような霊は降りてくるみたいで猫座りのニャアさんと睨めっこしていたりもしますが
お互い「ココにいる」という関係以上に突っ込んだりはしませんね。。。。

真剣になにを論じているかヒボシ（藁）

そんなヒボシは人間という区分けで言うのなら霊感の強い「女」にはいる（男より女の方が霊感は強いと言われる）のですが。。。。
全然霊感ありません（爆）

女として終わっているという事なのでしょうか（悲）

古来より
女は霊を受信するアンテナとして「巫女」という存在になったりしています
これは「受ける体」というところから来ているそうで
それにより魂という人の形を
体内に宿すという力を古代の人達は豊穣に結びつけるほどに崇めたからとも言われます

という事は元々神社と称される社の森には「神主」という存在はいなかったという事になります
神の社の守りの元締めが男であるわけがないからです

事実
古代日本において有名な王は基本「女」です
天照大神はじめ（神功天皇（女帝）がモデルではないかと言われていますが）
国産みをした女神，伊弉諾尊
これまた天照大神のモデルと言われた卑弥呼は女王として君臨し国を治めるために「火の巫女」という集団の上にたった霊元者でした
（この火の巫女という集団を称して卑弥呼と呼ぶのではとも言われる

自然と人が近かった頃
霊を身近に感じる女のもつ「感性」は侮れないものだったのです

しかし
戦の世が続くようになり
「女達」だけでは治世を司る事が難しくなります
武力という血の力の前に女は屈し

男達の統治が始まり
神の社も「神主」という元締めが産まれます

現在コレが正しい神の国としての状態なのかは怪しいものですが
歴史の解明は日々進んでいるので
新しい発見を心待ちにしているヒボシでした！！

色々脱線しましたがまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第三十六話　誉れの名（前書き）

頑張れヒボシ。。。。頑張れ！！！
明日は長野に出張だ！！！（涙）

第三十六話　誉れの名

「私は。。。。貴女の事が好きなの」

一生懸命の言葉を口にしたのは
ハワイ沖。。。。リムパックで共に遠い海にきた時だった
青く繁る南海の木々の狭間で『ひえい』は自分の想いを。。。。
見える形として相手に告げるための勇気を振り絞り，胸を手で押さえた姿で言った
前を歩く彼女は。。。
自分より背丈も小さく，細い女(ひと)。。。でも元気を体全体で現したように歩いていた

愛する人は。。。。太陽だった

何にも負けない強さが，憧れの人として弱い自分の目に。。。希望として映っていた
何も出来ない艦魂という存在。。。なのに責務は国民のどれよりも重い
何も出来ないのに。。。。何故こんな責務を背負って生きなくてはイケナイのか？
迷い続ける心を一筋の光が照らしてくれた

「もっと楽になりなよ」

彼女の優しい声
小さな手は力強く自分を引いた
それだけが自分達の全てではなく

艦魂として産まれた意味もあるのだと。。。。。微笑んだ

その時に。。。心を奪われた
この人と一緒にいたい
この人が私の宿り木だと

太陽を手に入れたい

弱い自分を。。。。照らして欲しい
彼女は自分の願いに忠実に動き，言葉を連ねた
緊張で震える桜色の唇。。。。。この国に生まれた艦魂史上最高級
のヴィーナスと称されたほどの美しさを持つ彼女もまだ少女の面影
を存分に残していた
潤んだ瞳に，長い睫毛
宝玉の彼女は希望を探り当てた喜びと。。。。。手に入れる喜びを
顔に表し長い髪を揺らしていた

柔らかな風の中
これからの季節を一緒に過ごす「伴侶」として。。。。誰よりも自
分が彼女を必要としているという事実を知って欲しかった
誰にも許されない禁忌であっても
お互いが相対する者であったとしても

心を支える者が欲しかった

揺れる瞳
愛おしさで心は，はち切れんばかり

南国の日差しの熱さは，自分の内にこもった熱をさらに上げ相乗してさらに溶ける程に
熱くなった自分の体を。。。。受け止めて欲しい
それ程までに心は追いつめられていた
繊細過ぎる彼女に世界は冷たすぎたから

目に見える世界は焼け野原だったと聞いていた頃から幾分も違っていた
充実した基地施設
雑誌に映る「日本」の景色
世の中にはルービックキューブという四面体の頭脳ゲームが氾濫し
頭の使い方を誤った大人達が楽しげな宣伝を繰り返していた
一方では，持て余す体力と行き場のないエネルギーの発散に
原宿という土地で「未来」を見失った若者達が踊り狂っていた

仮初めの平和の下
日本国民は一生懸命「戦争」を忘れようと突っ走った結果は。。。。
あまりにも無惨で
大切な記憶となるハズだった「戦争」を蔑ろにした結果の下に彼女達はいた

苦痛の中での誕生

大戦の向こう
敗戦国の護衛艦として

産まれた自分たちは不名誉な「艦隊」だった
侵略国家の艦艇。。。。
またも「軍備」を整える。。。。それも。。。。アメリカの庇護の下で
海を隔てた赤の国は自分で何かを勝ち取った事もないのに
アメリカの財源として機能し始めたこの国の「軍備」に悪意を示し続けた
そして
あろう事かその国の得意とするドラグマの術方「洗脳」に責任者なき日本は踊らされ
真実の見えない犯罪の為に賠償金を支払い続ける事になる

この国は戦争に負けて，奴隷の国となってしまっていた

志高き帝国海軍は死に絶えた後
お情けのように産まれ生きる艦艇達に浴びせられる言葉に容赦はなかった
人は自分たちに必要である護るべき国までも捨ててしまっていた

「軍が暴走したから。。。。戦争になった」

暴走？
何故そうなった？
そこには触れず考えず
考えのない批評に次々と右にならえと染められて行く日本国民

何故

自分たちがあのアメリカという大国と戦わなくてはならなかったか？
本当の意味は闇に葬られてしまった

平和憲法などとデモンストレーションのような
まるで世界情勢を無視してディズニー映画のような温和な森の住人
に自分たちがなったかのような憲法を押し付けられ
自分たちが主体性を失ってしまったことに喜びを表した国民にとって

さらに，そんな中にありながら聡く世界の情勢を見据えた政治家達
の表の政治とは別にある活動を見下し
現実の危機というものは自分たちの不徳と見なしていた

軍備を備えとして持つことは「夢」であってはいけない

隣の国が親日ではない事を熟知した賢者達は非難の荒海を戦い
「海上自衛隊」を作る事に尽力したが
そういう現実を目の前にしてもなお
かつて自分たちが「侵略」をしたからそうなったなど自虐的史観を
愛するなど

愚かだ

彼女はそう思っていた
美しく産まれた彼女は，容姿だけに限らず聡明さをもって産まれて
いた
それでも
艦魂という限られた世界で過ごすしかない存在である
意見する事など。。。けして出来ず

誰かに自分たちの必要性をアピールする事も出来ない

それを知ってか？知らずか？懸命である心を踏みにじるように，日本国民は
守りの楯である彼女達を嫌悪し，憎んでいた

「愛されないのに。。。国を守れなんて。。。無理」

愛すべき国の為に産まれたのに。。。。
戦争の道具だと蔑まれる日々は産まれて以来長く続き
それが可憐で繊細であった彼女の心を深く蝕み

何を信じて良いかわからなくなった

自分を生み出した国を信じるのか？
自分が何故この国に生まれてしまったのか。。。それに理由があると信じるのか？

考えは暗闇の底を這うばかり
自分が何故「艦魂」という物に産まれてしまったのかは。。。わからない
そして，その名のせいで疎まれている理由もわからない

だから
生きている日々は苦痛だった
人は誰も私を愛してくれない
自分たちが。。。。この四方を海で囲まれた島国を守るための楯で

あるにもかかわらず
この国の人は眉をしかめて自分達を嫌った
唯一
自分とともに海を守るという職務についた「人」達だけが。。。
共にいてくれる事が続く日々だった

居場所のない魂は
与えられた自分の責務と向きあう事が出来なかった
何度も体調をくずし。。。そのたびに「金食い虫」と罵られ
何年もたった後に「延命」のための手術さえ受けたのに。。。。

生きていることが苦痛だったのに。。。
生きさせられた
人は誰も愛してくれないのに。。。ただ生きろと。。。

どうして。。。
なんで。。。

それほどまでに嫌悪する私達を作ったの？
国を守るというのは崇高な使命ではなかったの？
それに徒事する私達は。。。。。

彼女は諦めながらも，いつもその事を考えていた

誰も私達と手を取り合ってはくれない
孤独な魂
だったら。。。。私達は私達の世界でお互いを慰め合うしかない

だって。。。。独りでなんて悲しすぎるから

温かい南海の風の下
街路樹という無言の第三者たちの祝福を。。。。ただ待っていた
太陽の彼女に
自分の。。。
大事な意志をはっきりと伝えた

「私は。。。貴女と一緒にいられれば。。。。後は何もいらない」

振り返った彼女に手を伸ばした
さあ。。。。
私の手を取って。。。。。

それだけが救いになるハズだった

裸の背中は無駄のない柔らかさを少ない光の下に美しく晒た
美貌の果実を隠すように覆う髪
光の花を模した間接照明の下
部屋の半分を占めるベッドの上『ひえい』は目を覚ました
時間はまだ２０：００を回ったばかり
均整の捕れた長い手足

海上自衛隊と称した海洋防衛の組織創立以来，産まれ出でし艦魂達
が初めて誕生の時誰も向かえに行けなかったほどの美しさ
向かえに行けなかったのは。。。。触れたら壊れてしまうのでは？
そう思うほどに繊細で可憐な花の姿に躊躇してしまったのだ

その花は今，艦内にある自室のベッドの上，産まれたままの姿で寝
返りをうった

耳に届く騒がしさ
艦内を走る隊員の足音に，蒸気したうっとりとした瞳は何度かの瞬
きをして，華に照らし出された木目の天助を見上げた
同時にキレイに整えられた爪と，自分の指先を眺めて

「何。。。何がおこったの？」

他人事のような声には甘い蜜が満ちている
彼女の声は淫靡なのに
どこか寂しい
もし裸の背中を見る事の出来る男がいるのなら，のぼせ上がってし
まう事だろう

「騒がしい。。。。」

シーツを払い立ち上がる
長い髪が秘所を隠し，眠れるボッティチェッリを呼び起こす程の眩
い四肢を歩ませ制服に着替えると
自艦の甲板に姿を現した

紫色の闇の下
強くなった風に纏め上げる事なく上にあがった『ひえい』の黒髪はなびいた
自分に搭載されていたヘリ「シーホーク」が『おおすみ』の後甲板に乗り付けているのを細身のメガネをかけた目で確認すると欠伸をしてつぶやいた

「めんどう事を抱えたわね」と

その頃
輸送艦『おおすみ』には遭難者が運び込まれていた
つり上げの作業を必要とする老人を含む3人，残りの2人は兄と妹という幼い兄妹だった
どの顔も日焼けと
地震の時に被った泥にまみれ疲労の色をより濃くしていたため
『おおすみ』艦内にある病院施設への移送が行われたばかりだった

「よかったね!!『きりしま』!!」

艦に収容される救助者を『きりしま』は，うっすらと涙を浮かべた顔を見ていた
背中を『おおすみ』がポンと叩いた

「役に立てて嬉しいね」

今日まで
地震が起こってから眠らず人捜しをした。。。絶望ばかりを覚えた

被災地から初めて「生きた人」を救出できた事は喜びで
素直な『きりしま』は涙を少しだけこぼし。。。そっと拭った
苦労はほんの少し報われた事になった

「やっぱり「人」と話が出来ると良いね。。。。」

陸自の隊員「鈴村」
霊感の強さが幽霊を，ただの恐怖と捉えず，要望を求めてくれた事がこの救出劇の大きな力となった事を振り返った『きりしま』は自分の周り囲む『おおすみ』と『はまな』に微笑んだ

「「人」と。。。もっと仲良くなりたいね」
「ああいうヤツなら良いな」

共に走り回った『おおすみ』も笑顔で答えた
自分たちの流した汗に2人は満足できる結果だと頷きあったが
独り冷や汗をかいていたのは『はまな』

「おっ。。お疲れ様です『ひえい』司令。。。。」

走り疲れて肩で息をしていた『はまな』はガタガタになった口元から周りに司令の到着を告げると頑張って姿勢を正した

目線の先，紫に光る泡沫の光の中から
まだ光の粉を纏ったままの『ひえい』は反射した光で見えない目の顔のまま，収容されていった救助者を見つめていた
『きりしま』は慌てることなく彼女の前に進むと姿勢を正して敬礼した

「報告します!!只今，漂流中の被災者を発見しこれをヘリにて緊急収容したところです!!」
人命救助という第一目標に喜びの顔を見せる『きりしま』に『ひえい』はつまらなそうな顔のまま聞いた
「誰が発見者?どの艦が見つけたの?」
頭にまだ光の粒を纏った『ひえい』は，先ほどとは違う纏め上げた髪のまま首を傾げた顔で
自分の前に集まった，自分より小粒な背丈の艦魂達に聞いた
『きりしま』は嬉々として敬礼のまま
初めて自分の目が「人」との交流を得て役に立った事を報告した
「やっとお役にたてました!!」
輝く瞳が自分に課されていた責任を果たせた喜びに満ちている事を
横目に『ひえい』は溜息をつくと
およそ褒めるとはかけ離れた言葉を発した
「あんたって。。。。ホントにおバカさんなのね」
「はい?」
『きりしま』より一線後ろに並んでいた2人持とう全言葉もない驚きだったが
口にだして不本意な返事をしてしまうほど言われた本人の方が呆然としている
「自己満足のために明日から被災地支援活動に入る隊員達の睡眠時間を削ったの?うん?」
目の前何度か首を左右に傾げながら『ひえい』は海を指差しながら

続けた

「こんな狭い海域で遭難？明日になればこの海域を行くボートピープルが見つけてくれたハズよ。。。ココじゃそういう生活をしている人は五万といるんだから。。。それをわざわざ大騒ぎして「人」に頼んで。。。隊員を疲れさせたかったって事なの？うん？」

「ち。。違います！！！漂流者は生死の間を彷徨ってました！！それを見過ごす事はできません！！その心を「人」も汲んでくれたのであって」

「それでこの大騒ぎなの？」

光るメガネ越し何度目かの溜息を落とす『ひえい』の態度に『きりしま』は困惑していた

自分の見える世界を有効に使った

それを信じた「人」の力を得てやっとできた「初」の救出者に司令が喜ぶどころか，呆れている事にどう対処していいかわからなかったが

「命を助けるためにココに来たんです！！間違った事はしていません！！」

「助けるべき命は明日から。。。何千，何万と待っているわ。。。その為の最後の休養だったのに。。。可哀想ね」

まるで意に介さない顔は横を向いたままで反論した

『おおすみ』の甲板を未だ走り回る海自の隊員達をチラリと見た目は，司令に告げる言葉を探している『きりしま』を言葉で殴打した

「無駄な事はしなくて良いのよ。。。救助しても誰も喜ばないから」

「どういう意味ですか？」

『ひえい』は片口を意地悪く上げて笑った
「あんた。。。ペルシア行く時に何見たの？行って何，勉強してきたの？」

『きりしま』の表情は固まった
一瞬目線をはずし自分の頭によぎったものに顔を伏せてしまいそうになりながらも，息を強く吸い答えた
「国際協力のための。。。」
声を遮る手を振り，少しだけメガネをズラした『ひえい』は覇気を無くした顔を指差すと

「私達が人助けをする事，感謝されてると思ってる？違うよね，うん？」

並んで聞く他の艦魂達にとっても
『きりしま』の肩は震えているのは誰の目にも見えている
あんまりな言葉
返せない変人の名か『きりしま』の目の前に立つ美しい司令は悪びれる事なく続けた
言葉を失った小さな肩に手を置くと

「あんた，さっき助けたお爺ちゃんの言葉聞いてた？」
「聞いてます。。。。」

「言ってたよね。。。「日本軍」「日本軍」って」

「日本軍」。。。。

流されていた筏の救出に向かった隊員に老いた爺様が最初に言った言葉は
「日本軍来た」だった
カタコトの日本語だったが，ココにいる日本人なら誰が聞いてもわかる単語，それをココに運ばれた時も連呼していた

「日本軍」
意味するものは
辛い話しに目をつむってしまった『きりしま』の前，顎を突き出し見下す目線の司令は良く聞こえるように耳元で言った

「部隊を連れて救助に来たって日章旗の元，私達は日本軍なのよ。。。この地域の住人にとって私達はね「侵略者」であり「簒奪者」なの。。。今も，昔も変わらずに。。。。来てくれて感謝するなんて嘘なのよ」

考えたくない事だった
この地域は前の戦争の時日本軍が占領した事が。。。一時的にだがあるところだった
助けたお爺さんの歳は正確にはわからないにしろ
高齢者である事はわかっていた。。。。占領下の国を体験した事のある人だったのかもしれない
助けた隊員の顔を見て。。。。
「日本軍来た」と言ったのかもしれない

「だから余分な事はしなくて良いのよ，言われた事だけやればいいの，どうせ艦の魂には何もできないのだから」
「でも。。。命を見逃すなんて事は」

「自己満足なのよ。。。そんなの」

あざ笑うかのような笑み
それでも姿勢を正したままの『きりしま』は拳を強く握りしめたまま
しなだれた自分をたたき起こして

「それでも，目の前にある命を助けないなんて事！！ボクにはできません！！」
「命令よ。。。。迷惑だからもうしないで」
「聞けません！！」

初めて『きりしま』は司令職の艦魂に逆らった
それは後ろにいる『おおすみ』には信じられない光景だった
誕生以来特別な扱いを受け続けていたイージス艦の姉妹
それ故に卑屈なほど司令に忠実で，意見などした事もなかった

その彼女が逆らう言葉を吠える姿は異常な事態だった

もちろん『おおすみ』にも苛立ちはあった
何故，司令ともあろう艦魂が人助けをこれほどに拒むのかが理解出来なかったし
それを迷惑な行為だなんて。。。。そう思えば『きりしま』に堪えられる言葉ではないと理解できた

反抗を唱える妹の前
メガネの輝きは冷たい，それでも意見をやめない『きりしま』

「どうしてそんな言い方をなさるんですか！！誉れの名である「比叡」を頂いた司令の言葉とは思えません！！」

唇をきつく噛んだ反論
だがそういう激高さえも遊ぶかのように『ひえい』は『きりしま』

の真ん前まで歩くと自分を睨んでいる彼女の頬を張った

「生意気よ。。。死んでしまった戦艦の名前なんか誉れのわけないじゃない。。日本人にさえ疎まれるのよ，違う？」

そういうと返す手で頬を張った

「あんたの姉もノイローゼになるほど苦しんだでしょ？うん？救助してみれば「日本軍」って罵らて，この上，帝国海軍の艦名なんか付けられて迷惑だわ。。。」

そう言うと，もう一度遠慮なく頬を張った

それでも睨む『きりしま』の目は決して司令から離れる事はなく瞬きもせずに反論を冷静に返した

「ボクは「霧島」の名を頂いた事を名誉に思っています！！「魂とか」そういう事はわかりません。。。でも，かつて日本を護って戦った姉の名を頂けたことに心から感謝してます。。。だからその名に恥じぬように人助けもしたいと思っております！！」

真っ直ぐな瞳はこれ以上の殴打にも負けることのない輝きを宿していた

挫けぬ意志の顔に『ひえい』は呆れたように顔を背けたが，自分を納得させるように小声で何か言いながら何度か小さく頷くと

優しい眼差しに変わった目と，甘い声は

「そう。。。じゃ「今夜」私が大事な事。。。もっと色々教えてあげるわ」

少しの舌先を見せて微笑んだ

「わかりました！！」

『きりしま』は相手の意図など構うことになく司令の命令に返事をしたが
後ろにいた2人は慌てた
それは「夜の誘い」と2人は気がついたからだ

「００：００に私の部屋にいらっしゃい。。。キレイにしてらっしゃいよ。。。汗くさいのはキライだから」
「はい！！」

そういうと『ひえい』は紫の光の中に消えていった
完全に光りの粉がなくなった場所をずっと敬礼のまま無睨んでいた
『きりしま』に泡を食って話しかけたのは『おおすみ』だった

「ヤバイよ！！『きりしま』！！」
「大丈夫！！寝ないで話し合えば司令だってわかってくれるハズだから！！」
『はまな』は頭を抱えた
夜に来いという「お誘い」をやっぱり『きりしま』は勘違いしていた
普通に考えても深夜に呼ばれるなんて異常な事だと思うのに，朝まで討論会と思いこんでいる『きりしま』の天然さ加減に笑うに笑えない口が

「『きりしま』。。。。。『ひえい』司令に。。ハアハアされちゃうよ。。。」
「えっ。。。司令怒ってたんじゃないんだ」

今度は『おおすみ』が頭を抱えた
「う～ん，そうかココで大声で言い合う意見ではなかったって事か。。。それで頭撫で撫でで。。。仲直りって事かな？」

張られた両頬を真っ赤にしながらも，動ずることなく腕組みした天然純粋培養『きりしま』に今更それが。。。。「アレ」なんて言えない
何故，先ほど話題になってた時に正直に教えなかったのかとさらに頭を抱えた

「『おおすみ』！！」
涙目『はまな』は袖を引いて背中を押す
「無理だよ！！言えないよ！！」

2人は自分たちの目の前司令に上申する意見を纏めようと頭を悩ます『きりしま』の後ろで，ハアハアの説明をどうするかで揉み合いになった
特に『はまな』は必死だった
任務のうちはそんな事があったとしても。。。。いや無理だった

この任務の中で『きりしま』が『ひえい』司令の命令に従って関係を持ってしまったりしたら
もう『きりしま』とは友達には戻れない気がするし
その結果如何では。。。。佐世保に待つ「鬼」の姉である『こんごう』がぶち切れてしまう事は容易に想像がついた。。。。。

そんなことになったら
「第二次艦魂断絶戦争」になってしまう。。。それを手引きした犯罪者として。。。
汗なのか涙なのか
自分の想像力で『はまな』の顔はグシャグシャに濡れている

一方の『おおすみ』は最後の手段は一緒に『ひえい』司令のところに行って「ごめんなさい」をするかと考え込んでいたと，同時に2人の異常なやり取りについて考えていた

悪い噂の絶えない『ひえい』たしかに職務にも熱心な人でない事も聞いてはいたが
『きりしま』の始めた救助劇を罵倒する理由がない

艦魂は。。。たしかに存在だけで何もする事のできない者ではあるが役に立てたのなら喜ぶべき事なのに。。。。

「なんで。。。あんなに怒ったのかな?」

首を傾げてみた
睨み合った2人共に「違和感」を感じていた
そんな思案にくれていた『おおすみ』の袖を1人パニックになった『はまな』が引いた

「私もう二度と『こんごう』一佐に顔合わせられないよ～～」
「そんなこと言ったって。。。」

2人の良くわからない混乱をよそに『きりしま』の目は本気の輝きを取り戻していた

「命を助ける事が無駄な事なんかじゃない事をわかってもらうんだ!」

意志強く拳をにぎり固める
「『きりしま』。。。?」
まるで自分を奮い立たせるような姿に『おおすみ』は考え，『はま

な』は泡を食っていた

「オイ！幽霊！！いるか？」
どうにもならない事件に三者三様の立ち絵をさらしていた艦魂立ちに声がかかった
それは陸自の鈴村だった
疾風の近くに寄った彼に『きりしま』は鈴村が置いていったボールペンを差し出した

「どうしました」
「ヤバイ事になった。。。ちょっと手伝ってくれ」

鈴村は真面目な顔で『きりしま』を見つめると問題発生を説明した

第三十六話　誉れの名（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～災害派遣編～～～

閑話入れた災害派遣も以外と大事な章になってきた今日この頃ですが
実際の災害派遣で最初に被災地に向かったのは
もちろん『きりしま』この章の主人公なのでナイスタイミングと言えますが
後の艦魂は違います

小説では旗艦『ひえい』輸送艦『おおすみ』補給艦『はまな』になってますが
実際に派遣されたのは旗艦『くらま』輸送艦『くにさき』補給艦『ときわ』と成ってます
編成については実際に出動した護衛艦を見て
後はヒボシが小説用にフィクションとしてつくりなおしました

理由は
一番簡単なのは
たくさんの艦魂を出したかったと言うこと
『くらま』さんはすでに読者的知名度の高い司令になりましたし
『しらね』さんも皆様に十分に知って頂けたと思います
残る二群の司令達は
『しらね』さん達の縦の姉に当たる同種艦の『はるな』さんと『ひえい』さんでした
『はるな』さんは舞鶴にいて日本海の要の艦魂になりますので『ひえい』さんに登場して頂きました

輸送艦についてはどなたでも良かったのですが
特にヒボシが知っていた名前で『おおすみ』になりました
で最後の補給艦『はまな』は佐世保でもチラホラ出てましたが編成
で全員が新規の艦魂になっちゃうとヒボシが混乱するのでココは「
お味噌っ子」として『はーちゃん』に来て貰いました

それにしても。。。。各隊群の司令が。。。ものすごく個性的にな
ってしまい
主役の『こんごう』が霞みそうです

今回，災害派遣の旗艦として『ひえい』さんが出てきました
登場の紹介で「恋女」とかいたせいもあり。。。。「またも百合で
すか？」と突っ込まれたりもしましたが
この人はただの百合じゃありません（藁）

もう今回を読んでわかった読者もいらっしゃると思いますが。。。。
百合もそうですが，かなり。。。。病んだ方です

ですが「艦魂物語史上一番の美女」と位置づけられてもいます
キレイなのに病んでる人
『ひえい』さんの経歴は「あの方」とリンクしている部分がありま
すが
それは追々書かれる事になります
作中にあるように彼女は極端にＤＤＧを憎んでいます
それを廻る事件。。。。相対する者である艦魂

災害派遣編ではそこまで突っ込んだところは出てきませんがこれか
ら『こんごう』ともご対面があったりなので目の離せない方である
事は確かです

寒くなってきましたので皆様も暖を取って寝入ってくださいね～～～
それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第三十七話　夜の子供（前書き）

みてみんに絵をｕｐしてみたりな日々～～

第三十七話　夜の子供

一度会えれば『きりしま』達にすぐに気がつく。。。。
という都合の良いことはないようで，鈴村はさっきまで幽霊（艦魂）達と話し込んでいた「疾風」の周りを右左と顔を動かし捜しながら，控えめなトーンで呼んだ

「オイ！幽霊！！いるか？」

車の下を覗き込む

「そんなところにいませんよ。。。どうしました？」

まるで猫でも探しているかのような鈴村の背中に，借りたままになっていたボールペンを軽く刺すように繋げる
自分たちを未だ幽霊と呼ぶ鈴村の大きな背中に向かって呆れた声で聞く

「こっちです」
背中に刺さったペン先で後ろに存在を確認した鈴村は後ろ手にペンを掴まえたまま振り返った

「これがないと話しができねー。。。ってか」
「みたいですね」

どうやらこのボールペンがないと鈴村には『きりしま』達の姿は見えないらしい
いや
正確に言えば「少女」の姿で話が出来る形として見えるようにする

に，ボールペンが何らかの繋ぎになったようで
何もないとただの白い子供の影のように見えるだけで話しはできない

「めんどくさいな」

鈴村は端と端を持ったままのペンを見ながら
坊主とまではいかない短めの頭を掻いた
とりあえずこの「繋ぎ」がある事で目の前にいる3人とは会話が出来る
というか
ココにきて初めて『きりしま』以外の艦魂を見て少しばかり驚いてた

「そういや。。。。いたよな，他の白いの」

食堂で見た時にいた影は3人だったのだから。。。居るわけだと
『おおすみ』とその背中に隠れている『はまな』を見た
霊感が強いといっても
日に何人も明確に見える幽霊に，鈴村は自分がとこか別の世界にトリップした気分になったのか言おうとしていた言葉が止まってしまった

そんな鈴村の様子に動じることなく並んだ『きりしま』は笑顔で2人を紹介し始めた

「こっちの背の高い方が『おおすみ』この艦の魂だよ。で後ろにいるのが補給艦の魂『はまな』。。。。。ボク達は「艦魂」っていう艦の魂なんですよ」

目の前で自分たちを紹介し始めた『きりしま』に『おおすみ』は先ほどから感じていた違和感の正体を探していた

『おおすみ』は輸送艦の魂という生い立ちから
自分の中に乗っている物に常に興味を持っていた，その事が艦魂の
持つ「予知」に近いものである事には気がついてはいなかったが
微妙な変化がある物があれば「それが」自分にとって良いことなの
か?悪いことなのか?を知るために「虫の知らせ」をよく使い「警
報」としてきたくちである

だからいちいち「何か」に踏ん切りを付けるように自分を奮わせる
『きりしま』の様子に違和感を感じ取っていた
つい先ほどまで司令の『ひえい』に頑張ったハズの人命救助を「無
駄なこと」と罵倒された時。。。

あきらかに『きりしま』の顔は曇って。。。負けそうになっていた
本来なら，そこで会話は終わったハズだったのに

言い逆らうことなく黙ってしまうようなところで落ちた自分の顔を
起こして意見した。。。。

今までなかった姿に
それを振り切るように鈴村と会話する姿に「不可思議」と眉をしか
めていた

「人」の前で

５０年ぶりの「人」という存在
佐世保でも横須賀でも。。。どの基地に勤務する艦魂たちもが，初
めての出来事に困惑し色々と問題を起こしたり（問題を起こしてい
るは大抵『こんごう』である）あらぬ情報ばかりがとびかったりし
ている中で

空気の存在だった「人」と初めて出会う
「噂」されていた「人」とは違う。。。。つまり2人目の存在を前に『きりしま』には，まったく動揺が無いのも何かに無理をしているようにも映った

もちろん
自分の背中にぴったりくっついた
『はまな』程に驚かれるのはさすがに「めんどくさい」が『きりしま』は自分が驚いたら「変」だと思いこんでいるかのような様子にも見えたのだ

パンツスーツ姿という海自艦魂の中では珍しい姿で現れたときにも驚いた
それまでずっとスカートだった彼女
「人」に見られるわけでもないのに「任務にふさわしいから」と男物の制服に変わったのもそれを強調していたが

とにかく『おおすみ』は『きりしま』の細かい変化をしっかりと確認していた

「ほら2人とも」

その『きりしま』が手を差し伸べて鈴村に挨拶する事を促す
『おおすみ』は右手に絡みつく『はまな』をぶら下げたまま前に出ると鈴村に挨拶した

「初めまして，『おおすみ』です」

鈴村は目の前に出てきた海自の制服姿の。。。。女子高生ぐらいの

女の子に笑えない顔のまま
「どうも」と言うと言うだけで顔に嫌気が登っていた
実際女子高生という人種が彼は非常に苦手だった事もあるが。。。

『きりしま』ぐらいハキハキしているタイプは実はそれほど苦手でもないが
『おおすみ』はともかく『はまな』のような「いかにも女の子」という存在はココにいるのが不自然を通り越し不快に成りかねないと感じていた
任務直下の自分たちの前に「女」は不必要な存在すぎて。。。。

もちろん

この災害派遣において隊員にまったく女がいないわけでもない
事実
輸送艦おおすみには少ないながらｗａｖｅ（海自女性自衛隊員）が乗っているし
陸自からも救護，看護のために部隊の一員としてｗａｃ（陸自女性自衛隊員）も乗ってはいるが。。。。
海外勤務という事も手伝ってか割と年上が多いし
化粧っ気もない女（自衛隊では女性は化粧はしないそうです，規則で）は童顔の新隊員みたいなんだが
変な色気がなくてその方が鈴村達的にも落ち着く

なのに。。。目の前にそれなりに形の整った美少女達がいる
幽霊ではあるが。。。。。これはどう扱っていいのか微妙な存在
落ち着かない目線の鈴村に『きりしま』は自分たちの存在を説明し

ていった
「艦魂」と言う者らしいが，鈴村にしてみたら相変わらず「幽霊」で
共にいるには苦痛を覚える年齢層である事に困ったと天を仰いだが，
そこには深く突っ込まず
思い出したように切り返した

「そんな事やってる場合じゃねーんだった。。。幽霊，ちょっと力
貸してくれ」
「自己紹介したのに幽霊なんて言わないでください」

素早い話題の転換に，これまた素早い突っ込みの『きりしま』

「ボクの名前は『きりしま』です」
「わーった。。。えっと『きりしま』ちゃん。。」
「『きりしま』と呼び捨てて頂いて結構ですよ」

規則に忠実な言葉
職務に習い自分を「ちゃん」という扱いを嫌っているという意志を
強く表明する声は正しい判断をしていたが
気を遣ったつもりの鈴村は困った顔で

「いや女の子呼び捨てにはできないって」
「ボクは女として扱ってくれなくていいから」
「いや。。。。でもよ」

キツイ否定，尖った目は
あきらかに「ちゃん」を付けて呼ばれる事に怒っている事に鈴村は
戸惑った
同士的には扱えないほどに『きりしま』は美形だから

「ところで何しに来たんですか？」

二の句に困ったままの鈴村は自分が持ってきた問題に気がついた腰をかがめた

「そうだった。。。あのよ，さっき収容した遭難者おぼえてるか？」

後甲板では『ひえい』から来ていたヘリが戻りのために準備に入り旋回する羽根の風と，海風
ヘリ誘導のためのオペレーションも始まり大きな音となっていて鈴村達は顔を寄せ合って会話を続けた

「あんなかに子供がいただろ？」

「いましたね，２人」

『きりしま』はヘリが筏からの救助者をココに連れてきた時に真っ先に遭難者を見に行っていた
自分に助けを求めた人を確認したかったからだ
要救助者は3人で1人は。。。。『ひえい』にも言われた「日本軍来た」とカタコトでしゃべった老人で，残りの2人は子供だった

「あの子供達が艦内でにげちまったんだよ」

「なにやってるんですか？」

切り返しの声には呆れたというニュアンスが十分に含まれていて
鈴村も参ったと言う顔で

「爺さんの方はすぐに集中治療室に入ったんだけど。。。。子供の方は元気そうだったんで，注射だけしとこうって事になって部屋に

連れてったら。。。。」

救助者に注射をするのは「点滴」と一緒の要素であり
後は検疫をするために血を抜く作業もあったが
その間を縫って子供達が逃げてしまったという事らしい
医務室ではｗａｖｅが厳しく検疫の準備をしていたのに，子供を怖がらせたくないという子持ちの一隊員の緩い配慮が徒になり逃げられたという事らしい

「明日には上陸だし，手分けして探してもらってんだけど。。。手伝ってくんねーか？」

明日にはタイ国領海に入る派遣隊は色々な部署が準備に追われている
『きりしま』は心に刺さったものを確認した
『ひえい』に言われた事

「明日から仕事がある隊員の睡眠時間を削った」。。。。
無駄な仕事をさせたという自責

「もちろん！！手伝うよ！！」
少しでも早く子供を見つける為にはあらゆる場所に出入りが出来る幽霊の方が早いと鈴村に賛成した
『おおすみ』は何度も自分を叩き前に向かおうてしている『きりしま』の姿を見ながらも手伝いには賛成した
こうして４人は眠れぬ夜の子供捜索を開始した

２つに別れた捜索隊

1つは鈴村と『きりしま』残りは『おおすみ』と『はまな』
『きりしま』は鈴村の後ろを歩いていたが一本のペンで自分たちを繋げるという方法とは別の案を編み出していた
鈴村のペンを『きりしま』が持ち
『きりしま』の万年筆を鈴村が持つという形でお互いが認識できたのだ

子供は発見次第，鈴村のところに知らせるという取り決めをして別れた2班は艦内の捜索を開始していた
通路を通横に配される水密扉の中を陸自の鈴村が見て回るわけにいかない
そういう所に『きりしま』が首を突っ込んで探索するという方法で，鈴村は内部コンタクト用のレシーバをぶら下げての道中

「どこまで探しに入れますか？陸自の人？」

艦艇の中を陸自の鈴村では行ける範囲が決まっているのでどこかで待ち合わせの形式になる事を『きりしま』は聞いた
相変わらず硬い口調の少女に振り返ると，通路を歩く他の隊員に変な目で見られる事がわかった鈴村は背中越しに

「陸自の人って。。。。オレの名前は鈴村良平（すずむらりょうへい）っての」
「良平さん？」
「よせよ。。。。鈴村って呼べ」

作戦に入れば名前を呼ばれる事なんて滅多にないし
こんなところで親しく名前を呼ばれると変な気分になりそうで鈴村は手をふって「ヤメヤメ」と合図しながらチラリと『きりしま』を見た
幽霊の3人の中，1人だけパンツスーツに「青い目」短く襟足まで

整えた髪はギリギリ女の子の髪になっている程度だが
顔は硬い言葉を並べるのを不自然と思うほどに美しい

「なんで「ちゃん」付けはイヤなんだよ？」

自分の後ろを歩く少女が，こだわった言葉に鈴村は質問した

「別に。。。ボクは子供じゃないから」

変な答えだった
鈴村は人気の少なくなった通路に立ち止まると振り返った

「子供だぜ。。。そういう事にこだわるってのはよ」
「そんな事は。。。」
「なんか無理してるよーに見えるぜ。。。。『きりしま』ちゃんよ」

「無理。。。。なんか」

真正面で場分の顔を見据えた鈴村から顔を背けると『きりしま』は
止まらず彼の前を歩いていった
「言ってみろよ。。。聞くぐらいなら今でも出来る」
鈴村の言葉は軽口だったがそれ故に『きりしま』は憶えのある男達
の口調を思い出して，初めて自分の心を語った

「ボクは。。。。。男みたいになりたいと思ってる」

自分の前を歩いて背中を向けたまま止まった『きりしま』の言葉は
意外というか。。。しかし鈴村にとって予想内のものだった
他の艦魂少女達が自然体であるのに『きりしま』の姿は不自然なほ
どに任務の中にいたからだ

美少女でそれを自慢していいくらいの彼女の不似合いな海自の男物の制服姿，最初に見たときから感じていた違和感の正体

「どうして？」
華奢な肩は止まったまま，自分の心根を了解，話せといった相手に続けた

「男は強いから。。。。ボクは強くなりたいから」

ペルシアの記憶

灼熱の大地に起こった戦争に続く「テロ対策特別措置法」に基づき『きりしま』はアメリカ軍と，その他の国の艦艇を護るためにレーダー支援をし，シーレーン防衛の仕事を1年半にもわたり続けた

支援という仕事は後ろにいるだけと思われがちだがそういう訳でもない
この借地法にはもっと大きな意味があった
だが国民のほとんどが無知なマスコミに踊らされ自衛隊は「戦争の後方支援」をすると騒ぎ立てるという事件になる
武力を持つ艦艇を海外に派遣する事に対する理由に紛糾する国民

だがその実，答えは簡単だった

自分たちで自分たちの国に運ぶエネルギーの道を守れというものを十分に包括していた事
世界が示した当たり前の責任に難色を示す日本は異様な国にすぎなかった

９９．９％もの石油を戦争があった近隣国から買い上げている日本が

自国にエネルギーを運ぶ船の防備まで「金」で他国に頼るなど恥だ
という事に気が付けない程の平和ボケを堂々と路程したマスコミは
お門違いな非難を自衛隊にぶつけていた

仮初めの平和を謳歌し過ぎて勘違いな自由を振りかざした国民の罵
声に『きりしま』は一度心をへし折られていた
港に溢れる「派遣反対」の横断幕に野次と罵倒の嵐

何故。。。。自分の国のエネルギーを護るために他国と共同戦線を
はる事が「罪」と断じられるのか理解が出来なかった
それまでも自分たちへの風当たりが優しかったわけでもなかったのに
憎しみの目で「平和」が全てと砂の城を声高く叫ぶ人の目がただ怖
かった
出港の日。。。。『きりしま』は艦の前に立つことが出来ず
悲しくて膝を抱えたまま部屋から出なかった

「どうして。。。こんな思いして，1年半も外国に行かなければな
らないの?どうして。。自分の国のために必要な事をするのに。。
みんなして「戦争反対」って。。」

立ち止まった『きりしま』は自分の胸を手で強く押さえていた
あの日の。。。港にあった「罵倒」を思い出すだけで息がつまる。。
鈴村は小さな少女が味会わされた悲しみに気がついた

「オレ達が出る日もそうだったぜ」

ゆっくり鈴村に向いた『きりしま』の前
口をへの字にした彼は，うんざりと両手を挙げて

「戦争反対!!憲法違反!!。。。。オレのせーで身内に肩身のせ

めー思いをさせたよ」
「そうなの？」

トラウマを背負って小さくなってしまった少女の前，軽口の大男は笑って

「毎日，基地の前じゃ演説してるヤツもいたし，署名運動してるヤツもいた。しまいにゃ家まで押しかけてきて「憲法違反」についてどう思うってテレビ局のインタビューまでしてったってヤツもいたぜ」

驚く事だった
海自の一般人が立ち入る事の出来ないバースに居たときに目に映った「罵倒」に心を挫かれた『きりしま』にとって，自宅まで押しかけてそれを叱責する人がいたなんて恐ろしい事だった

「辛く。。。なかった？」
「ツライ。。。。辛いってよりもな。。。。呆れたよ」

そういうと人目を忍んでタバコに火を着けた
『きりしま』は禁煙を指摘する余力はなかった。鈴村達，陸自の人達もそんな思いを背負ってココに来ていた事に。。。
自分の出港の日に味わった痛みを思い出してしまったから

俯いてしまった小さな少女の頭に大きな手が
髪に触れる

「だけど。。。オレは自分の仕事を誇りに思ってるから，他人がどう思っていようが「日本」が好きだから，右から左に聞き流してやった」

自分を撫でる大きな温かい手には，強さと優しさを笑って示す
「故郷を護る仕事は，どんな仕事よりも「愛」がいるからな！！」
「愛？」

水密扉の脇にそっと腰掛けた鈴村は照れくさそうに

「誰よりも故郷を愛せる仕事なんて他にないだろ？」

優しい目
鈴村の心にある故郷は『きりしま』にはわからなかったが
彼の言葉がその「愛」を十分に示していた
良いことも悪いこともココに産まれて始まった自分の祖国を護るという仕事には「愛」が必要だと

「大事な事です」

座ってやっと顔をつきあわせる事のできる鈴村に『きりしま』は微笑んだ

「海自の隊員もそういう気持ちで働いてました。。。。」

へし折れた心のままペルシアに向かった『きりしま』の思いを変えた者達
それを態度で示してくれた者達がいた
自分に乗艦している隊員達だった

出港の日
反対運動の人並みの間に見えた家族に手を振った男達
１年半も家族と別れて，その間もあらぬ非難を浴びながらも日本が

自分達のエネルギーの道を守れる強い国である事をその態度で示し続けた
日本に残った無責任なマスコミと，自国の置かれている現状を理解を働かせない者達の罵倒に
彼らは志は揺れなかった

灼熱の海の上，黙して任務つく隊員の姿が『きりしま』の折れた心に光を与えた

「お国の経済を護るデケエ仕事だからなぁ」

重労働を背負った男達
軽口が日焼けした黒い顔から白い歯を見せて笑った時
『きりしま』蟠りは涙とともに無くなった
自分の居場所を教えてくれた「男」達に感激して流した涙に誓いを立てた

ちゃんと役にたてる，と同時に彼らのようになりたいと

「みんな1年半も頑張りました」
「胸張れる仕事だな。。。。外野がなんと言おうと誰よりも国を愛してなきゃできねー事を頑張った。かっこいいじゃねーか」

煙の向こう自分を見つめる男は羨ましそうに本音をはいた

「国を愛するってのは普通じゃできねー仕事だ。。。こんなに愛してるのに住んでる住人にゃ罵倒されたりもするわけだからよ」
鈴村はそう言うと指でタバコの火を消して立ち上がった
ゆっくりと話しはしたくとも

逃げた子供の捜索も大事な仕事だ，歩を進めながら一番大事な質問を思い出した

「それで？なんで男になりたいの？」

議題の最初にあった『きりしま』の思い
自分の直ぐ後ろを歩く事になった鈴村の質問に『きりしま』は笑顔で答えた

「だから！そういう重要な任務をこなせる心を持つには「女」のような弱い存在ではイケナイと思ったからです。。。どんな時も強くいられる「男達」のようにありたいと思ったから」
「それが男になりたい理由？」

鈴村にしてみれば幽霊の心残りが自分が男に生まれてこなかった事という何か変な会話のようにも感じられるものだったが『きりしま』は大まじめに

「そうです。。。というか。。。僕たち艦魂は男で有るべきなんだと思う」
艦魂
幽霊は自分の事を船の魂と言っていた事を鈴村は思い出して聞いた

「て事は現行の船に憑いている幽霊は「女」しかいないって事か？」
「幽霊じゃありません！！艦魂です！！」

即答の切り返し
自信を取り戻して『きりしま』は止まった鈴村の背中に向かって声も大きく注意した
背かを向けたまま

邪な考えをめぐらした鈴村は畏まった態度で聞き返す

「ああ～～その艦魂ってのは「女」しかいないの？」

「そうです。。。。護衛艦の魂は男でいいと思うんですけどね」

溜息まじりの回答

強くなりたいと願う『きりしま』の方向性を良く現してはいるが，

鈴村は別の楽しみに素早く心が動いていた

「全員「女」なら。。。。過酷な任務の間を縫ってお近づきになりたい人もいるかも」と

あの日「呪われるぞせ」と罵った班長顔負けな思いを芽生えさせていた

「『はーちゃん（はまな）』休もうか？」

『おおすみ』は班分けの結果は当然のものだっと思いながらも，暗がりはイヤだ，「人」が多いのはイヤだと，一行に前に進まない『はまな』との組み合わせに疲れてきていた

なにせ気の弱い『はまな』だ

自分たちが姿が見えない存在とわかっていても「人」の中に入っていく事を拒み続けた彼女は，能力を活かした捜索活動の足を大いに引っ張っていた

そのせいで『おおすみ』も疲れココにて小休止をとる事にした

場所は甲板から下の輸送車両を揃えたデッキ

もう少し進むとＬＣＡＬが見える所だ

間接照明的光の中
大きく溜息をつくき
顎に手をおき考え事に入って，眉間に皺を寄せた『おおすみ』に『はまな』は自分の我が儘のせいかと心落ち着かずウロウロとしていたが
『おおすみ』は別の事を考えていた

「。。。。。『きりしま』ってさ。。。。前は自分の事「私」って言ってたよね？」

『おおすみ』は進まない捜索に中，ずっと心に残っていた違和感を探していた
それを先に知る事のほうが大切なように思えていたからだ
顎をさすりながら。。。。過去にさかのぼって

「絶対そうだ！！変な感じがしてたんだけど，前は自分の事「私」って言ってたハズなんだよ」
「それがどうしたの？」

真顔で覗き込む『はまな』に聞かれた『おおすみ』は苦笑いしながら聞いた

「わかんないけど。。。なんか堅苦しくなったって感じだったでしょ？」
「イージス艦の姉妹は『みょうこう』を除いてみんな堅苦しいよ」

『はまな』のもっともな返答

イージス艦の姉妹は確かに揃いもそろって堅苦しい艦魂が多い
出生の時に騒ぎを起こした『こんごう』と言い佐世保では仲良しの
『ちょうかい』と言いどこか角のあるキャラが多い
唯一舞鶴に勤務する『みょうこう』だけが緩い
それは司令職の艦魂『はるな』の指導がそういうものだからとも言
える

「でも。。。なんで急に「ボク」なんだ？」

『はまな』の言い様から『きりしま』が1年半体験したペルシアの
出来事が大きく彼女に関係している事はわかったがそれ以上の事は
わからない
「私」が「ボク」に変わるプロセスはなんだったのか？
薄暗く光る艦内灯を見ながら首を傾げていた

「変といえば。。。。『ひえい』司令もおかしかった」

自分1人で考え続けると壁にすぐにぶち当たる
こういう謎解きは人と話し合うと見えなかったものも以外な角度で
見えるもの。。。
自分の周りをフラフラと見回す『はまな』は悲しそうな顔で

「酷い事言うよね。。。。人を助けたのに無駄だなんて」
「確かにＤＤＧの事がキライで有名な人だったけど。。あんな事を
口に出す感じの人じゃなかったのになぁ。。。。」
「。。。。。まだ。。。そういうのって残ってるんだね」

『はまな』は一瞬。。。『はるさめ』の言葉を思い出した
「『こんごう』ちゃんキライだし。。。」
それはかつてあった護衛艦達の溝のなごり。。。。

「それだけじゃないような。。。感じなんだよ」

しなだれる『はまな』に無理して微笑む『おおすみ』
知っている人の変化
『おおすみ』は『きりしま』と相対するように睨み合った『ひえい』
の事も『はまな』より知っていた
普段は無口で誰とも話しをしない人
でも職務に怠惰という事はなく，演習でも優秀な成績を残している
旗艦。。。。なのに
「何かに」引っかかって。。。。『きりしま』に激怒?静かな苛立
ちをぶつけていたようにも見えた

「司令も。。無理してる感じだったな」

2人が互いの顔をスレスレにして対峙していた時『おおすみ』はメ
ガネに隠れていた『ひえい』の目が。。。怒っているというように
は見えなかった
何かを。。。黙らせようとして
何かに。。。困っているようにも見えた

「でもさ。。。『きりしま』にハアハアしようとしてるんだよ。。。
」

問題。。。。泣きそうな顔の『はまな』の顔を見た『おおすみ』は
両手を挙げて

「それ。。。。。嘘かもしれないよ。。。本気で言ってないと思うん
だよね」

「でも。。。。」

問題が目前に迫っているという圧迫感からか俯いたまま話し続けていた『はまな』は何かの気を感じて離れていた『おおすみ』元に走った

「『おおすみ』！」

「何？」

「なんかいるよ。。。。」

素早く『おおすみ』の後ろに隠れた『はまな』の指す先はトラックの荷台。。。

「子供？かな？」

考え事でいっぱいになっていた頭を自分で小突きながらどうせ見えない存在と堂々と荷台を覗き込む『おおすみ』の前小綺麗に纏められた陸自の荷物の間を走る影が見えた

小さな影2つはお互いを隠し合うようにしているが『おおすみ』の目には十分に見えるものだった

逃亡した夜の子供達の姿が暗闇の中にあった

後ろに自分より年下の妹を隠すように立つ彼の姿を確認した『おおすみ』は，重荷がおろせた気持ちで背中にへばりつく『はまな』に振り向き「安全」と手を振ると

鈴村を呼ぼうと電信しようとした

その時

「チカヨンナ！！」

影であった「人」の子は叫んだ
他国の言語であったが艦魂である『おおすみ』に言わんとせん事は伝わり
自分の後ろに視界を戻していた体が固まった。。。彼の発言が自分たちを認識している事に素早く気がついたからだ
なぜならココには『はまな』と自分しかいないからだ

「波長かな。。。『はまな』。。この子，私達が見えるらしいよ」

子供達を背中に，目の前で怯える『はまな』に『おおすみ』は引きつった笑いのまま聞いた
そのまま混乱する事なくこの状況を考えた
５０年目の奇跡？

あるのかもしれない
神経の太い『おおすみ』は鈴村に続き自分たちを認識できた子供に向かって挨拶した

「初めまして。。。。探してたよ」と

第三十七話　夜の子供（後書き）

カセイウラバナダイアル～～Ｐｉｘｉｖに入ってみた編～～

招待制になったと聞いて諦めていましたがＰｉｘｉｖに入ってみました
イラストテクニック講座についていたＣＤを入れた事で入会できたのか？
それとも招待制はガセだったのか？知りませんがすんなり入れました

しかし
ｐｉｘｉｖの絵師さん達はみんなうまい。。。。
参ったって感じです
ヒボシはその昔趣味で絵を描いていましたが
それこそホントに趣味だったので途中で止める事も出来たのです。。。

ところが挿絵解禁が近づくにつれて自分の手で生み出したキャラ達に肉体をあげたくなった

で
鈍っていた指を叩き
久しぶりに絵を描き
調子に乗ってｐｉｘｉｖにまで登録してしまった。。。。
今のところシャープペンシルで描いた絵にｐｈｏｔｏｓｈｏｐで色を付ける程度しかできない上に。。。。
タブレットのペンツールが新しいパソコンに対応してくれなくてマウスで色塗りわしているという次第ですが

いずれ

ペンを使って書き直しをしたいと思ってます！！
ちょっと世界が広がってお得な漢字の絵描きも楽しいです！！

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～

第三十八話　英雄の花（前書き）

オランダ領などについての話しが知りたい方はいっぱい本を読んでくださ～～い
艦魂小説や
戦記を各先生方はたぶん知っている人が多いと思われますが
なにぶん資料不足のため良い物に仕上がってないとも思いますが優しい目でみてやってください

で。。。
前の３６章，３７章を大きく改訂しました
どうも疲れが溜まっていて文章に穴がありすぎました。。。見苦しい事でしたが頑張りますのでこれからもよろしくお願いします～～～

ヒボシ

第三十八話　英雄の花

『おおすみ』と『はまな』が子供を発見した頃

司令の『ひえい』は苛立ちのまっただ中にいた
何度もメガネの鼻をさわり
自分に向けられていた視線を思い出す

躊躇無く自分に対して意見を口にした『きりつま』の目は真っ直ぐ
自分を見た。。あの顔が。。。目が。。忘れられない
何度か額に手を当てて下ろす，脳裏に残った姿

紫に輝く光の輪と共に
自艦に戻ったが。。。。熱くなってしまった感情を冷やすために，
部屋には入らず
後甲板の端，自衛隊旗の前に立って荒ぶる風に身をさらしていた

周りには喧噪が溢れている
波の打つ音とともに「人」の動く音
現地に入る前にはじまってしまった救難活動で騒がしくなった甲板
の上
仕事を終えたヘリが着艦のオペレーションに入っていた
メガネ越し見つめる世界
騒がしく，ヘリ収容の作業に入る隊員達。。「遭難者確保」は喜ば
しい戦果なのか?笑顔と握手がちらほらと見える。。。冷たい視線
で全てを見回す

旋回し風を切るヘリの羽音

空を飛ぶこの機械は，美しく空を舞う鳥の優雅な姿を模した乗り物と言われるらしいが。。。

『ひえい』の目には，そんな風には写らなかった
白いボディーは護衛艦のねずみ色に比べれば幾分か「ｐｅａｃｅｃａｌｌａ」ではあったが，腹に着く対潜用の兵器の影に虚ろな気持ちを増幅させたままつぶやいた

「アレに魂があるなら。。。私と一緒でおぞましい者に違いない」

金切り音と空気を束で裂く音を響かせる，空の化身の姿，汚らしい物を嫌悪するように睨んで言った
美しい星空を汚す飛ぶ兵器。。。。。
同じく海の美しさにほど遠い灰色の兵器の魂は，黒く澱んだ渦巻く気持ちを燻らせたまま
自分の胸に手を当てた

心の部品に亀裂が入っている事が触れなくても解るかる。。。熱い痛みが蘇り
ざらついた胸の奥。。。その奥にある姿を掘り起こそうとする臆病な自分に蓋をすると
ゆっくりと首を振った

「気持ち悪い。。。。」

メガネの奥に思い出すのは
『きりしま』の真っ直ぐな目は。。。。
アレは。。。。

許してはイケナイ存在の証

その手を開いたり閉じたりして。。。。張った手のひらが赤くなっている事に悪寒を感じる
自分の存在を必要としなかった忌むべき者，ＤＤＧを握りつぶすという覚悟を手のひらで何度も確認した

「やっぱりＤＤＧは気持ちが悪いわ」

前を護って海を走る護衛艦きりしまを見ながら
深く心は虚ろに傾く事に加速をつけていた
自分の迷いを統一するための儀式を繰り返すように，何ども小言を繰り返す

「やっぱり無理だわ。。。気持ち悪い。。。」

纏め上げた髪に指を通す
乱れこぼれ出す櫛（髪）にメガネをかけていた顔は隠れてゆく中

「壊してあげる。。。可愛がって。。。あげる」

尖る目つきと
荒れた声色
自分を律する事の出来ない思いに揺れる肩のまま
憂鬱の光を目に宿した『ひえい』は
ベアトラップに乗り収容されて行くヘリを眺めて

「『しらね』が。。。ＤＤＧを甘えさせるから。。。こんな事にな

ったんだわ」

立ち止まった足は艦を蹴飛ばす
何度も繰り返し叩きつけると独り言を続けた

「『しらね』の顔を立てて我慢してただけよ。。。そうよ。。うん？我慢してしてたの。。。体に良くないわ。。。うん？」

頭を何度も抑えて，自分に言い聞かす

「そうよ。。壊してもいいのよ『しらね』だって『こんごう』の事キライなんだし。。めちゃくちゃして。。可愛がって，そうしたら。。。『こんごう』はどんな顔するかしらね。。。うん？」

改めて自分の胸に棘を残す存在を罵倒すると横に揺れる自衛隊旗を殴った
帝国海軍より受け継がれた日章旗。。。。海を行く「日本軍の軍旗」を引き裂かんばかりの視線で睨むと

「帝国海軍。。。。何様よ」

風に揺れる旗に唾を吐いて，何度も甲板を蹴飛ばした
灰色の兵器。。。。足の裏が熱くなるほどに叩きつけるように何度も蹴飛ばした

「汚らしい名前だわ。。。早く沈めばいいのよ。。。こんな艦」

暗闇の海，前方を航行する『おおすみ』を睨みながら
このままでは眠れない事に気がついた『ひえい』は光の中に姿を消

した

子供発見の報告と共に，鈴村は一つの恐怖を体験する事になっていた
それはおよそ「人」であるなら普通に味わう事のないものだった

『おおすみ』達のいるデッキとは間逆の方向を捜索に当たっていた
鈴村は電信が入った
艦首に向かって狭まった通路の所々に首を突っ込んでいた『きりしま』は急いで戻ってくると
鈴村に言った

「行きましょう！！」

それが恐怖の始まりだった
行こうと言われても艦内の端から端。。。。走るのは怠いかと首を鳴らして考えていた鈴村は慌てた顔の『きりしま』に手を出して

「艦首を捜索している奴らがいるから連絡をとってみよう，そのほうが早い」

人間らしいもっともな意見を告げたのだが
『きりしま』にはそういう感覚はなかったようだ

「大丈夫です，すぐに行けます！！」

礼儀正しい声で大きく言うと，手のひらに光りを発生させた

「何？それ？」

鈴村は背筋に寒いものを感じていた

霊感の強い彼には，これが「危機」の始まりである事を本能が知らせる

そうじゃなくてもそんな超常現象が目前にあったら腰も退けるってものだ

「ちょっとまて！！」

「人」の感じる危機など『きりしま』には届いていなかった

手をあげ制止を求める鈴村を構う事なく

光の泡に繋げた

リーン，という耳鳴りとともにに光が全身を走り，体に触れたと思った途端に輪として飲み込む

突然入れ替わる景色は。。。息を呑む間の出来事だったのだが，そのまま幾重もの水密扉をすり抜けるトリップ現象のようなものの中を体はすり抜け。。。。

これって？ワープ？などファンタジーに飛び込んだ「人」としてなんとか理性を働かせた回答の前

灰色の世界が冷たく待ちかまえていた

「陸の「人」は？」

トラックと疾風の間に場所を移した『おおすみ』と『はまな』は逃

亡していた兄妹と横並びに座って，1人光の中から飛び出した『きりしま』に聞いた
着地に失敗はなく静かに舞い降りた『きりしま』は自分の手を見つめながら，途切れた光の間に呆然としていたが『おおすみ』の問いに驚いて周りを見回した

「鈴村。。。さん？」

光の輪に一緒に入ったハズの大男伸す型は何処にもなかった

「ひょっとして。。。。陸の「人」も一緒に飛ばしたの？」

兄妹の横，兄の側に一緒に逃亡してた子供と同じように座っていた『はまな』が恐る恐る聞いた

「そうだけど。。。。」
「無茶するなぁ」
呆れた顔で下から『おおすみ』は『きりしま』に言った

「いや。。一緒に飛んだから巧く行けると思ったんだ」

立ち上がった『おおすみ』は周りを見回し鈴村を捜して見たが，それらしい者を見つけられないと諦め困り果てた顔をに向き直った

「巧いこと飛ばせられるって。。。。保証あんの？アレって」

艦魂の持つ力によって「人」を自分たちと同じように瞬間転送するこれを試した艦魂は少ない
というか。。。。。艦魂自体を見られる「人」が５０年ぶりぐらいなのだから，そういう事が出来る？出来た？という事実はかつての

帝国海軍の艦魂達がやったであろうという逸話ぐらいでしか残っていないような現状である
海保でもそういう事は極まれにあるという話しに聞いていた程度の事を，試してしまった『きりしま』の勇気に，待っていた二人の艦魂は驚いていた

「どうしよう。。。。」
頭を抱えて考える姿に
「何処飛ばしたよ？」

結局，何処に飛んで行ってしまうかはわからないという事実に手のひらに残る鱗粉のような細かな光を見つめながら『きりしま』は首をふった
「わかんない」
「海に飛んでったかな？」
「やめてよ！！」

『おおすみ』の悪ふざけもこの状況では冗談にもならない
本当に海に飛んでしまったのなら「要救助者」は鈴村に変更である
艦がこの海域を離れる前に捜し出せなかったら死んでしまう

「何か感じないの？」

残った光の粒に思念を会わせる『きりしま』は真面目な顔とは裏腹にテンパッていた
このアタリにイージス艦の姉妹の持つ独特の似た感じが現れている，高性能で行きすぎてしまう感情を，座り込んでいた『はまな』は不謹慎としりつつも少し笑いながら

「海に飛んでくって事はないでしょ」

焦ったままの『きりしま』に言語数学少女の『はまな』は，そこは割り切れている部分だと話しを続けた

「基本，艦内から艦内，隣の艦とか，地に足の着くところにしか私達だって行けないんだから。。。」

艦魂は極めて狭い世界でしか生きていない

基本は自分の住んでいる艦
そして仲間である艦魂の住む艦
広くとっても日章旗のはためく基地の中
歩ける場所などそれほど多くはないのだ

特に通信網さえ独自の衛星を持たない自衛隊の艦艇はリンクで話しを飛ばし会うことは出来ても自身をその場にまで飛ばすことは出来ない
（実は海外，事アメリカの艦艇は電送映像として自身の形を送るという方法を持ってはいる。。。でもそれは自分本体がその場に飛ぶという事とは違う，意識体の自分を飛ばしているという事にあたる。。。これは後に出てきます）

元々，艦から降りることだって出来ないと思っていた時代もあったのだから
自分たちがイケナイ場所
自分たちで回避できない危機的な所に飛んだりはしない

「「人」だけ別の所に飛んでくって事はあっても，行ける範囲は私達と一緒って事だな。。。。つまりこの艦のどっかに転がってるって事か」

「じゃあ!!早く探さないと!!それと，子供を逃がさないように確保して!!」
「それはもう大丈夫だから」

慌ててやってしまった事とはいえ「人」を飛ばしてしまった先など，皆目検討もつかない『きりしま』は正しい説明を明晰な頭脳で聞いてはいるが。。。空回っていた
1人り泡を食い背中を向けて元いた場所を探そうとした肩を『おおすみ』が止めた

「もう子供は逃げたりしないから。。。。落ちつけって」

「ニホングン。。。。ソラカラ，タスケニキタ」

その声と共に座り込んでいた子供
兄の方が目を輝かせて『きりしま』に近づいた
薄汚れた衣服，泥とも土ともワカラナイ黒ずんだシャツに大人物のズボンを幾重にもおった姿
顔も煤けたままの灰色の頬の彼は
腰にくくりつけた麻袋を抱えたまま『きりしま』の前にたった

「どういう事?」
「キミハソラカラオリテキタ。。。」

輝く視線は宙から光りと共に降りた『きりしま』を興味津々で見つめる
逆に『きりしま』は
「日本軍」という言葉に体を強張らせたまま『おおすみ』に視線を

向けて聞いた
「空から?って何?」

「昔。。。。日本軍が空から落下傘部隊で助けに来た。。。。その事らしいよ」

『おおすみ』は『きりしま』達を呼ぶ前に子供達が逃げないために2人と話をし
兄の方は相手が自分より少しばかり年上の若い女である事で気を許したのか差し伸べた手を掴み会話をする事に成功していた

言語の違いを脳内で話すという方法を使いカバーし彼らの身の上について知ることが出来たのだ
『おおすみ』はドタバタだった会話の時とは変わり
理知的に自分がこの子達と話した事を，須万は落ち着きを取り戻せない状態の『きりしま』にしていった

「インドネシアの子達なんだ」

彼ら人となり，事の経緯を話し始めた『おおすみ』の目は，伏せられたように静かに会話を始めた
やはりボートピープルにも近い人達であった事もあるが
それでも生活の基盤である国はインドネシアで魚を捕って家に戻るところに地震がおこり
不慮の波のせいで沖合まで流されてしまっていたそうだ

「で。。。逃げた理由は。。。ココから話すね」

まだ先の日本軍という言葉の理由を待っている『きりしま』に落ち着いた顔で『おおすみ』は続けた

それは昔
インドネシアがオランダ領東インドと呼ばれていた頃にまで遡った話し
彼らの祖父がちょうど彼らのような子供だった頃の話し
オランダの強いた圧制下の中にあった時代，どの国よりも早く日本に宣戦布告をしたオランダ，その領土であったインドネシアに軍神達は舞い降りた

１９４２年２月
「大東亜共栄圏」を掲げた日本軍の侵攻に既に本国を失っていたオランダは１０日程度の戦いの後，降伏
日本はインドネシアを搾取領国としてきた宗主国から解放した
それまで白人社会の底辺を担がされ続けたインドネシアを「共に生きる国」として心を叩いた

解放から戦争の世界へ
全てが良いことずくめではなかったが，それでも光は届けられた
自分たちを「隷属」の者と鞭打ってきた白人は消え，共に戦う者として「郷土防衛義勇軍」（ペタ）の創設
青年道場で祖父は日本兵と親睦を深めたそうだ

戦時下の中
なかなか国としての独立を押し進める事のできなかった日本に多くの不満を持った者達もいたそうだが，それでも日本の残していったものは悪いものばかりではなかった

今まで教育を与えられなかったインドネシアの青年達に日本軍士官からなる青年道場の師範達は厳しくそれを躾ていった

今まで虐げられる事の「忍従」しか覚える事のできなかった人達に
自分の国を愛し共に戦う事が独立への一歩である事を
常に熱心で多くの者達に色々な事を教えてくれた

その中にあった幼少の祖父の思い出
勉強をたくさんと。。。。小さな折り鶴を無骨な手で教えてくれた
日本兵。。。

知り合った青年将校の事を彼らの祖父は今でも覚えていて。。。。
いや正確に言うのならば，その事しか覚えていないそうだ
歳をとって少しボケてしまった彼らの祖父は大事な事だといつも言
い聞かせる話しが「日本軍助けに来た」という話しだったそうだ

「爺ちゃん。。。日本好き。。大好き，インドネシアの為に一緒に
戦ってくれた」

『おおすみ』の口から伝えられる彼の話に『きりしま』は涙ぐんで
いた
「ニホングン」という彼らの祖父の言葉から。。。。自分たちが，
あがなえない咎の元に未だ縛られた存在であると『ひえい』司令に
叩かれた心に救いの光が。。。ココにあった事に

2人の前に進んだ彼は腰にくくりつけていた麻袋の口を開いた
中にあったものは。。。。ただの黒い土。。。。

「これは?」
煤けた顔に満天の笑顔を浮かべた彼は一掬いの土を目の前に見せて

「軍神の土」と笑って言った

顔の前に見せられた土に『きりしま』は聞き返した
「軍神？」
答えたのは『おおすみ』だった

「その時に。。。インドネシア独立戦争を一緒に戦った日本兵のお墓の土なんだって」

かの大戦で日本は敗北した
武装解除を命令された日本軍は「皇国の帝」の言葉に従い全ての軍事行動を停止したが。。。
終わった戦争に意気揚々と戦勝国の仲間入りをしたオランダがいた
自力で勝つことはできなかったが，勝てば官軍の気持ちと戦争でうしなった損失の補填をするために植民地が必要であるという自国の利益のために「奴隷」を求めて戻ってきたのだ

その戦いは不公平なものだった
粗末な武器しか持たないインドネシアの人達を次々と白人社会の権化としてオランダは制圧を開始した。。。

その悪辣さに，志し高き日本兵は。。。インドネシア人と手をとり戦った
終戦後の軍事行動。。。ともすれば戦犯としてどこにも行けぬ身になってしまう事を知りつつも
奴隷を求めてきた者達を決して許さなかった

彼らの祖父が知る日本兵もその１人
青年道場での師範をしていた彼は教え子であるインドネシア人と共に戦い，オランダの毒牙からついに独立を勝ち取り。。。戦って死

んだ

「爺ちゃん。。。庭に彼を埋めたけど，彼は英雄だからカリバタに移る事になって。。その土を分けて貰った。。。これは「宝」なんだ」

英雄。。。。

共に戦った日本兵を本気の瞳でそう言ってくれる，彼の目は輝いていた

自分の人生で知り得た事ではなかったハズの戦い。。。。祖父が一番大切にしていた思いを受け継いだ彼に『きりしま』は感謝した

彼と。。。。

英雄と呼ばれるほどに日本を護って。。。インドネシアに骨を埋めた男に

「ありがとう。。。。ホントにありがとうございます」

『きりしま』お辞儀に袋に土を戻した彼もきちんとお辞儀を返した

「この土を持って返って花を咲かせる。。。。英雄の花になる」

彼は土を袋に戻すと微笑んだ

この土に種を撒いて彼のために花を咲かせる事が夢だと語って

「だから逃げたんだって」

涙に頭を下げてしまったままの『きりしま』に『おおすみ』は

彼が艦内を逃げた理由を話した

検疫のために，この土を取り上げられそうになった事が理由だったと

全てを理解した『きりしま』は涙を拭うと彼に約束した

「大丈夫ですよ，土は僕たちが大事に預かります。。。。艦を降りるときにお返しします」

少年は安心したように頷いた
微笑ましい交流
その後ろで『はまな』は考えていた

「陸の「人」。。。。。どこいっちゃったのかな?」と

鈴村は。。。。。困惑していた

一瞬の光に包まれ
考えるよりも先に入ってくる光の情報に驚愕した後，薄暗い部屋に飛び込んだ
立ったままの姿勢ではあったが引きつった顔に冷や汗を垂らしたまま，ゆっくりと着地した場所を確認した

少し広い部屋
木目調の床。。。。。薄暗い中に仄かに輝く「蝶」の間接照明
見ず知らずの部屋の中で大男は固まっていた

「何処だよ。。。ココ?」

隊員達の持つ部屋とは明らかに違う装飾

キレイに整えられた部屋の真ん中にはかなり大きなベッドとローボードの上に飾られた花

「天国か？これから女でもくるのか？」

安っぽくは見えないが部屋の真ん中を支配するベッドは1人で寝るには大きすぎるし。。。。

仄かに匂う香水の香りからもこの部屋の持ち主が女である事は男，鈴村にはすぐにわかった

「Ｙｖｅｓ　Ｓａｉｎｔ　Ｌａｕｒｅｎｔ。。。。参ったな」

刺激の少ない優しく芳醇な香りの下，鈴村は出口を探したがドアはどこにも無い

薄暗い部屋を手探りで壁を探る

その足が掛け棚を蹴飛ばしてしまった

小さな箱が落ちて足もとに何かをばらまいた

「しまった。。。」

女の部屋とわかっていて物色するのは，最低な男だと鈴村は思いつつも下に落ちた小物を集めた

その中に煌めく物が2つ

き章と，階級章。。。

「おいおい。。。ココに住んでるヤツは海将かよ？」

ベタ金の階級章に2本のライン。。。陸も海もそのへんはあまり変わりはない

鈴村はドアの無い部屋に参り
この部屋の持ち主の階級にへこみそのまま座り込んだ

「どうなってんだぁ。。。」と

第三十九話　海の墓標

鈴村を見失ったままではあったが「宝」である土を預かった『きりしま』達は，子供達を「人」のいる通路にまで導いていた
内部デッキの薄暗い照明をくぐり艦内通路の赤い照明の下を歩く
兄とは違い終始落ち着かないのか？小さな妹はしっかりと兄の手に自分を絡ませて歩く
扉を何枚もこえた向こうに「人」の気配を感じられる所まで来たところで一行は一度止まった

「土は必ず艦を降りるときにお渡ししますから」

麻袋を自分のベルトからはずして彼は『おおすみ』に手渡しと
日に焼けた丸い顔に笑みを浮かべて，ココまでともに来てくれた艦魂達に「指切り」をしようと手を出した

「日本の約束して」

小指を立てた手に『きりしま』が指をつないだ
「指切り拳万。。。お約束します」

愛情の普遍を誓った言葉を通し，日本とインドネシアの小さな絆を結び合わせた

「名前を教えて」
手をつなぎ指を会わせた彼は今更のような質問をした
「ボクは『きりしま』」
今更の質問だったがお互いを理解しあえた相手の名前も知らないなんておかしな事

後ろで麻袋を抱えた『おおすみ』も自己紹介をし，横に並んでいた
『はまな』も相手が子供という事で前にでてしっかりと名前を名乗った

「オレはスロト，妹はユリ」

隣にいまだ落ち着かない顔で兄を見上げている妹の髪を撫でるとスロトは深くお辞儀した

「ありがとう，日本軍助けてくれて，ありがとう『きりしま』『おおすみ』『はまな』。。。ありがとう」
会わせたように艦魂達も頭を下げた
スロトに深くお辞儀されるのがこそばゆい

「あたりまえの事をしただけだから。。。。そんなに頭下げないで」
照れる『きりしま』の言葉に顔を上げたスロトは笑って返した

「だから当たり前にありがとう！でしょ！」
緊張を和らげる満天の笑顔が「友達」となったみんなを和ませる
そんな優しい時間が終わる

長い通路の扉の向こう，無線機を下げた乗員達がスロト達の姿を見つけて「確保」の連絡を取り合う姿が見えた

「艦を降りるときにまた会いましょう」

指切りの手を離した
『きりしま』は乗員達は誰も危害を加えたりする人でない事を告げると速やかに姿を消していった

「よかったね」

スロト達と別れた『きりしま』達は上部デッキに戻っていた
潮風の流れる海の上を一段落ついた騒ぎに腰を下ろし『おおすみ』
は，またもいつの間にか持ってきたジュースを紙コップに分けながら
よかったと語った『きりしま』に手渡すと，でこっぱちな額を撫で
ながら優しい目で

「よかったな。。。日本軍は「悪」じゃなくって」

「ニホングンタスケニキタ」
スロトの言葉は艦魂達の心を大いに励ますものだった
自国にさえ滅多に喜ばれる事の少ない護衛艦。。。。その魂である
彼女達にとって今日は嬉しい日になった

「日本好き」。。。。。

スロトの真っ直ぐな目が，．自分たちを見て微笑んでいた事に『き
りしま』の曇っていた気持ちは十分に晴れあがった
大きく背伸びをして嵐の1日の最後を飾る星の空を眺めた
赤道に近いこのアタリで見る星の輝きは日本で見るささやかな輝き
とは違い，今に降り出しそうなほどの輝きと惜しげのない煌めきに
落ち着いた息を吐いた

自分たちの救出活動が間違ってなかった事に納得して
カラカラになっていた喉にジュースを注ぎ乾きを潤した

「嬉しいね。。。日本軍の。。かつての兵士を英雄とまで思ってくれてるなんて」
「幸せな人だね。。。日本には戻れなかったけど，愛されてて羨ましい」

横に座った『おおすみ』も，事の成り行き解決までは平然としていたが心の中では「日本軍」と言われた事にこだわりをもっていた
でも良い解決に至れたことと。。。。英雄になった日本兵に，かたや今の日本を護る自分たちが冷たく当たられているという現状に本音をポロリともらした

走り回った事に疲れたのか，うたた寝の『はまな』は座ったまま空を眺めている
その前で
２人は凪いだ海を見つめた

ココでかつて大きな戦争があった
この海を渡り戦った「人」達がいた
「大東亜共和圏」という，今で言っても理想を掲げた「大日本帝国」は人の身分を分断した不平等な支配の元に構築した世界を維持する事にやっきになっていた白人社会と戦った

色々な思案が入り交じった戦いの末
「白」こそ世界と決めていた時代を終わらせた民族がいる。。。。
国は戦争に負け，多くの山河と町を失い。。。民族の３００万もの人が死に至った
多大な犠牲を払った敗北に得るものはなかったが
でも

世界は二度と「白」だけを頂点とした独善の社会に戻る事はなかった
それが日本人がした戦争の大きな結果
間違っていた世界を正気に戻した代償を日本が支払った

今は静かな海
『きりしま』達の見つめる海に。。。かつて誇り高き戦いに出た姉達がいた
大日本帝国の御旗を持ち「人」と共に戦った姉達の海の墓標がココにもある

『きりしま』は立ち上がると手の中に花を作り出そうとした
その手を『おおすみ』が止めた

「騒がしくなった間に失敬した」

食堂に飾ってあったコスモス
淡いピンクの花を手元に持って『おおすみ』は苦笑いをしながら

「花は本物を捧げたいからね」

たくさんではない3輪の花を座っていた『はまな』の手にも渡し
3人は並ぶと敬礼を捧げた
この海に眠る姉たちに，静かに花を投げ入れた。姉たちがきっと愛してやまなかった日本の地から運ばれた優しき花

コスモスの花言葉と共に「真心」を捧げた

「終わったのかしら？うん？」

整然と並んだ3人の後ろ
一陣の風と共に紫の光は凛とした姿のまま睨んでいた
腕を組んだ姿勢の右に首を傾げる細身のメガネの『ひえい』は光の粒を纏ったまま

「終わったの？聞いてるんだけど」

星の光に鋭く光るメガネの顔に献花を捧げたばかりの3人は驚いてそれでも並んだままみな敬礼をすると『きりしま』が答えた

「終わりました！！」
元気のよい返事に相変わらずの気怠い声
「そう。。。。」
「報告します！！」
敬礼の手を下ろし今しがたまであった艦内での出来事を乗艦である姉に告げようとした前を，キレイに爪を整えた手がヒラヒラと停止を舞う

「報告なんかいらないわ。。。。終わった事に興味はないの」

アップに巻き上げた髪の間をこぼれる櫛（髪）が少なく顔に掛かる姿が月影の下で揺れると『きりしま』を指差して

「自己満足ちゃん。。。今度は私の命令に従ってもらう時間よ」

『おおすみ』と『はまな』は固まった
司令の『ひえい』が指定した時間にはまだ1時間ほど早いが『おおすみ』は騒ぎに託けて『きりしま』を『ひえい』の所に行かさないようにしようかと考えていたところだったからだ
いくらなんでも友達が強制的に夜の相手をさせられるのを止められなかったなんて
『おおすみ』は拳をきつく握りしめた
そんな気持ちの悪い結末がせっかく自分たちの心を励ます出来事のあったこの夜にあって言いわけがないという思いで。。。だが
そんな浅知恵を見透かしたように意地悪い唇が笑う
「騒がしくなっちゃったから。。。疲れましたなんて満足して眠っちゃったら。。。私の命令は知らないなんて言われそうだからねぇ。。うん？」
「そんな事はありません！！」
自分の前を疑う目つきの輝きを見せたまま静かに近づく司令に『きりしま』は背筋をただして立ったまま
「司令の命令を忘れるような事はありません！！」
胸を張って答えた
自分より一回りも小さな妹たちの前，クリアとベージュを重ねたネイルの指が『きりしま』の胸を突く
「良い心がけだわ。。。ＤＤＧって恩知らずが多いと思っていたけど」
棘をまき散らすには不似合いなほどに美しい唇
艶やかな動きの中に色が溢れ出している

「じゃあ。。。今から私の指示に従いなさい」
優雅な動きが誘うものは，後ろに並ぶ『おおすみ』にとって消して
キレイなものには見えないが
面と向かって口出しする勇気はまだなかった

『ひえい』の指先が紫色の輝きの粒を現す
狂った瞳を隠したままの笑みが『きりしま』もろとも光りに包むと，
あっという間に消えた

アンティークを基調とした『ひえい』の部屋には3つの間接照明が
仄かな灯を照らし出していた
天井を照らす「蝶」「花」「星」の柔らかな輝き。。。それ以外は
薄暗い世界の真ん中に大きく鎮座したベッド
周りには古い棚があるのだろうが，かなり暗い，ロウソクの灯のよ
うな照明のせいでよくは見えない

しかし。。。
『きりしま』にしてみると，とても護衛艦の職務に就いている司令
の部屋とは思えないほどに非現実的な空間と目に映った

基本
護衛艦の任務につく艦魂は殺風景な部屋に住む
『きりしま』も自室には本棚がある事をのぞけばそれ異常のものは
皆無で後は小さなベッドと蛍光灯の明かりを備えた普通の部屋だし
姉の『こんごう』に至っては照明など裸電球1つしかなく，後は大
きめなベッドしかない部屋だ

それを考えるに
この『ひえい』の部屋は異世界とも言える空間だった
まるど，誰かを迎え入れるために作られているような華やかな中に。
。。どこか寂しげな部屋

「ここは。。。司令のお部屋ですか？」

あまりに不自然な部屋の形式に戸惑った『きりしま』は，あまり周
りを見回さないように注意しながらも聞いたが
隣にたっているハズの『ひえい』は鏡台の前で髪をほどき下ろして
いる
初めて見る司令の長い髪にと美しさに見とれたままの『きりしま』
に『ひえい』は質問には答えず

「楽にしたらいいわ」と甘い声だけを伝えた

今までこういう部屋に招待されたことはなかった『きりしま』は落
ち着かない中にも漂う香りに聞いた
「いい。。香りがします。。。なんでしょうか？」
「Ｙｖｅｓ　Ｓａｉｎｔ　Ｌａｕｒｅｎｔ」
単語の答え
海外の香水の香りに初めての感動を覚えた『きりしま』は立ったま
ま身動きもまともに撮れないほどの微妙な緊張の中で

「初めてです。。。こんな香り」

素直な感想をもらした
『きりしま』海外に任務として赴いたことはあるが
海外の物を手に入れた事はなかった，もちろんペルシアでの任務で

そういったものを手に入れる事など絶対にできないのだが
考えるにこの香りの元である「Ｙｖｅｓ　Ｓａｉｎｔ　Ｌａｕｒｅｎｔ」というものは『ひえい』がリムパックなどで手に入れたものである事はわかった

「素敵な香りです」
「あら。。。あなたにそんな事がわかるの？うん？」

お気に入りの香りを易々と手にしたこともない者に褒められるいわれはない
突き放した言葉の後
完全に解いた髪をかき上げ
夏服のネクタイをはずした『ひえい』はブラウスのボタンをはずすと白い肌を見せたまま自分の背中を見ていた『きりしま』に振り返って

「脱ぎなさい。。。」

何事も無いような指示
「脱ぐ？何をですか？」

土足厳禁という指示はなかったと周りを見回す『きりしま』が，わざととぼけているように見えたのか苛立った声が続く

「服よ。。。裸になれって言ってるの」
尖らせたトーンは耳を疑うような事を平然と告げた
メガネを外し
本気になった顔はゆらりとゆれながら『きりしま』の体を舐めるように見ると同じ事を言った

「裸になれって命令してるのよ，聞けないの？うん？」

何を言われているのかわからない
呆然とした『きりしま』の前まできた『ひえい』は美しい指先で目の前に固まった『きりしま』の服のボタンに手をかけると，真っ赤になった相手の顔をゆっくりと眺めながら

「たっぷり可愛がってあげるわ」と，舌をチラリと見せた

連れて行かれた『きりしま』の消える光を呆然と見つめた『はまな』はその場に座り込んで頭を抱えていた
というか崩れるように座り込み泣いていた

一瞬の出来事だった
疲れてしまった自分達の前に現れた『ひえい』は，なんの躊躇もなく大切な友達を連れ去ってしまった
涙で一杯になった顔は只顔を覆って泣き続けていた

「どうしよう。。。どうしよう。。。」

悪い噂が本当であるのなら今頃『きりしま』の身には考えられないような事が起こっている事になる
体を張って止めるなんて司令職の艦魂の前でなど，気弱な『はまな』には出来なかった
噂ばかりで頭がいっぱいになってしまっていた『はまな』にとって

そんな事を「命令」だから従えと，事も無げに言い切ってしまう『ひえい』は鬼よりも怖い存在でしかなかった

「『こんごう』一佐がいればこんな事絶対に。。。」

同じイージス艦でもココにいるのが『こんごう』であるならこんな事はおこらなかっという悔恨に涙は止めどなく流れる

『こんごう』は命令には素直でも
相手の欲求に素直である事はない。。。。事実『しらね』のいた一群に籍を置いていた頃は命令には従っても，後の要望に応えたことはなかった

もちろん『しらね』は夜の相手を必要とする事なく司令として正しい指導者ではあったから，あまりに言うことを聞かない存在として疎まれていた艦魂として名高いが
この場合には必要な勇気にもなる

あきらかに違反した命令を振りかざす『ひえい』が相手であるならばあられもない欲望のために自分を差し出せと言われようと，殴り合いのケンカも辞さないほどの手の早さを持ち合わせ絶対に問題になったとも言い切れたが

『きりしま』のように徹頭徹尾，くそ真面目な存在は命令という言葉に弱い
あれほど流れていた噂を信じず
素直に従ってしまった事に『はまな』は愕然としていた

「どうしよう。。。『おおすみ』。。。」

色々な事情がわかっていても
自分ではどうにも出来ない哀願を，目の前で腕組みをして微動だにしない『おおすみ』に縋って手を握った
その手は。。。。怒りで震えていた

「こんな事。。。許されていいわけない。。。。」

自分の手に助けを求めた『はまな』に振り返ると『おおすみ』は怒った顔のまま宣言した

「『はーちゃん』はココで待ってな!!私が今からカチ込む。。。。いくら司令だからってそんな事が許されるわけがない!!」

そういうと大きく手を振り光の輪を作り出すと飛び込んだ

うす暗い部屋の中
ベッドとは遠い壁に『きりしま』は押し付けられていた。。。と言っても力の限りの行動ではなく
撫でるように自分の体を触れる手に戸惑いながら後退してしまっていた

「まって。。。ください」
丁寧な言葉が途切れる
首筋にかかる熱い息に『きりしま』は体をすくませ『ひえい』から距離をとろうとしてみたが柔らかな体は包むように手足の動きを止め，身動きのとれない状態になっていた

「これは命令なんですか？」
「命令よ」

そっけないが熱い息を伴った答えに『きりしま』は首を振って逃げていた
自分の唇を探す指に恐れをなして，うわずった声

「何でこんな事するんですか？こんな事なんの役にたつんですか！！」
出来るだけ力で逆らったようにはならないようにと体を逃がそうとするが本気の力が自分を抑えるものに叶うはずもない
そんな苦悶の顔を見せる『きりしま』の様子を楽しむように『ひえい』は舌を耳に這わせながら答えた

「生意気だからよ」
「命令には従ってます！！」
得体の知れない体験に進みつつある『きりしま』は驚きの中にも理性ある返答をくり返した

「そういうところが気に入らないのよ。。。命令に従ってるって自己満足でしょ。。。」
「わかりません。。。そんな事。。間違った事があるのなら指導をくだされば。。」
顔を懸命にそらす姿に相手の敗北を喜ぶ『ひえい』は声も高く答えた

「間違ってるわ。。。だからこうして指導してあげてるのよ？理解した？うん？」

繊細で冷たい手は滑るように『きりしま』の服の中に入ろうとした

その瞬間，一瞬にして光りは溢れ黄色の輝きの中から『おおすみ』が現れた

「止めてください！！司令！！」

自分たちの真横に現れた『おおすみ』に『ひえい』の態度は一変したお楽しみを邪魔されたからとかそういうたぐいの怒りではないように体の中に包み込んで押さえつけていた『きりしま』を『おおすみ』の足もとに投げ飛ばした

「礼儀がなってないわね。。。。無断で私の部屋にくるなんて」

「無礼は承知で来ました。。。。」

怒りで目を輝かせた『ひえい』に衝撃の出来事にぐったりしてしまった『きりしま』の肩を支えた『おおすみ』は睨み返した

「いくら命令でも夜の相手なんか出来ません！！好きでもないのにそんな事出来ません！！」

涙目になった『きりしま』を抱き寄せながらも『おおすみ』は毅然とした態度を通したデコッパチのよく見える瞳は意志も強く睨む事をやめない

「『きりしま』。。。。あんた。。。私の事がキライなの？うん？」

立ち上がれないまま肩で息をしている背中に『ひえい』は浮かれた声のまま聞いた

好き嫌いまでをも命令の一つとして組み込むような卑劣な質問に『おおすみ』は怒鳴った

「司令！！そんな質問はおかしいです！！こんな事をしにココまで

きたわけじゃありません!!」
「こんな事?命令は絶対でしょ?違うの?うん?」
「そんなおかしな。。。」
切り返した『おおすみ』の前，鏡台のイスが蹴り飛ばされた

「命令は絶対なのよ。。。。違うの?帝国海軍の末裔なんでしょ，
黙って従えばいいのよ」
床に手をつき落ち潰れていた『きりしま』は弱々しい声で反抗した

「帝国海軍の末裔です!!だからこそ誉れある仕事のためにココまで
きました!!司令は違うんですか?ボクにそういう事をすれば誉
れは守れるというのならお役に立ちますが。。。違いますよね。。。
」

「誉れある仕事?どこにそんなものがあるの?」
美しいハズの『ひえい』の瞳は虚ろで何も見えていないかのように
暗い
自分の唇を触る繊細な指が離れると顔を上げて大笑いをした

「誰が誉れある仕事だなんて言ったの?港を出るときに誰が私達に
手をふった?」

心に刺さる言葉
「戦争反対」の横断幕と拳に怒号。。。『きりしま』は自分の折れ
た心の傷の痛みに，胸に手を当てた

「思いこみでしょ?自分が「可哀想」だから。。。。誉れある仕事
だと思いたいんでしょ?」

肩が震える

支える『おおすみ』の手からこぼれた体。。。『きりしま』は泣いた
「信じて。。。ボクは。。。」
手の甲に落ちる雫の中に浮かぶ思い出は。。。。

「あんたってホントにおバカさんなのね」

「司令。。。あんまりです!!そんな言い方!!」
崩れた『きりしま』の体に手を置いた『おおすみ』の震える声も。。
。もはや力などもってなかった
自分たちの存在を無能と罵る根源に嘘がみえなければ。。。。逆らいようもない

変わって
空気を伝わるような怒りが暗い部屋を支配し始めた

今までメガネに隠されていた鋭い光と，解かれた髪の動きにも怒りが充填され始めているのがわかる程に
掛け棚にある小物を勢いよく投げつけると
今までの優しい口調は消えて，金切り声を上げた

「たかだか輸送艦の分際でＤＤＨの私にさからうなんて。。。頭おかしいんじゃないの!!ＤＤＧのくせに輸送艦に護って貰わないと自分のするべき命令にも立ち向かえないの?あんた。。。ホントにバカなのね!役立たず!!あんたは日本で一番の金食い虫で，日本で一番役に立たない艦なのよ!!それを自覚して私の言う事ぐらい素直に聞きなさいよ!!違う?うん?」

所構わず物を投げつける怒りは収まる事を知らず

わめき散らした

「私達はね。。。みんな日本に，国民に疎まれてるのよ！！兵器死ねって！！その中でも最たる物！ミサイル兵器の固まりの魂であるあんたは真っ先に死ぬべき存在だわ！！」

「ボクは。。。。。」

悲しい思い

足もとに這い蹲っても自分の存在を無しには出来ない魂『きりしま』にはもう反抗の声をあげる力もなかった

十分に相手の心をえぐり取った『ひえい』は頭を落とし涙にくれる

『きりしま』に向かって唾を吐くと

「私の相手が出来ないんだったら。。。。。死になさいよ。。。役立たず」

喜びに歪んだ口からトドメの一言を吐き出した

第三十九話　海の墓標（後書き）

ウラバナは明日かくぞ～～～（藁）編

ぬ～～～
無理でした
今週はずっと夜勤が入っていて２時間充電２２時間稼働のような生活を送っています
変わったことといえば
小説の方も新型のパソコンの方にいこうして書けるようになったというところでしょうか

生来のＭａｃ党のヒボシです！！
今回も新しいＭａｃにかえましたがＥｘｃｅｌを買う余裕がなかったので旧型も併用で稼働中ですょ

今回は『ひえい』さんという新しい艦魂が登場したのですが。。。。
評判は作者予想を裏切らない
「悪い人」となってます（爆）
いちおうフォローのために彼女の過去歴なども少しだけかいたのですが。。。それでも悪い人です（藁）

近いうちにまた「みてみん」にいらすとを上げたいとも思ってます
実像があると楽しみ増えるというものですから！！

最近ほしい物。。。。海自の制服（藁）

そんな近況報告でしたぁ～～～～

それではまたウラバナでお会いしましょ～～～

第四十話　彼女の体（前書き）

みてみんに『ひえい』司令掲載。。。。
悪女『ひえい』。。。。その実像はどんな人なんでしょうか？

第四十話　彼女の体

優しいほのかな灯の下にある部屋の中は凍り付くように冷たい空気が流れていた
キレイに整えられたベッド周りをのぞき
撒き散らかされた小物と，鏡台のイス
その破壊の真ん中に『きりしま』は項垂れ『おおすみ』は固まったままで立ちつくしていた

「文句があるの？うん？」

顎をあげ
見下す目線の怒りは収まることを知らない

「まさかとは思うけど？あんた。。。。。国に愛されてるとでも思ってたの？」

本来なら
国を護る仕事に徒事する艦である者達
こんな質問，鼻で笑ってのけるのが普通なのだが。。。。2人にはそれができなかった

愛されていない護衛艦

この現実から目を背ける事は出来ない
国を護るために存在するのに，愛する国は。。。国民は嫌悪の目で自分たちを見ている
どこにいっても「兵器」「戦争のための武器」という白い目線と歓迎されざる者としての扱いを受け続けているという現実を目の前に

どうして『ひえい』の言葉に逆らう事ができるだろうか。。

『おおすみ』は涙を堪えた顔を伏せた
彼女自身は「輸送艦」という存在で，ほぼ武器を持たない艦だ
それでも彼女の建造の時に起こった出来事を知らないわけじゃない
その姿から。。。。

「いずれ空母になるのでは？」
「強襲揚陸艦になるのでは？」

そんなくだらない疑惑をかけられていた事を知ったときに落胆した
ものだった
どちらの存在に自分が転用されたとしても
国を護るという職務に必要な存在として強化されるのであれば有用
な事であって疎まれる理由などないと思っていたからなおさらだった

国の守りとして国内を動く艦艇，船舶の頂点に産まれてきたのに「
戦争への疑い」ばかりをかけられていたことは，どの艦魂の心もを
蝕む悪癖だった

何故

国土を護るための備えとして存在することを忌み嫌われなくてはな
らないのか？
武器を持たず，救難の備えを国際規模でもつ自分でさえ「疑い」を
かけられるような国にあって

『きりしま』達，イージス艦の姉妹達がどんな思いで過ごしたいた
かを思えば悲しみに打ちひしがれ，立つことも出来なくなってしま
った『きりしま』の姿は痛いほどにわかる

産まれたことは
苦しみでしかなかったと

何も返事を返すことの出来ない2人の心にある真実を認めた事に満足したのか
『ひえい』は静まった場に何度目かの棘を吐いた

「この国じゃ，誰も私達を愛してくれないのよ」

認めたら
自分たちの生きている価値を。。。。産まれる意味を。。。見失ってしまう
その言葉を口にした『ひえい』は腕組みしたまま軽やかに続けた

「よくわかった。。。。おバカさん達。。。」

「わかりません!!!」

悲しみに重く湿った部屋の沈黙を破ったのは，床に手をついたまま項垂れ続けていた『きりしま』だった
反抗の声とともに起きあがる顔に
光る瞳
青い瞳の中を彩るフェイズド・アレイ・レーダーの赤い輝きに強い意志が宿っている

「ボクは。。。。ボクと共に国を護る仕事をした仲間を愛してます

！！」

強く握った拳のまま『おおすみ』の前に立ち上がった『きりしま』は
自分の前に立つ司令に対して自分の心にあった事を
海外に派遣される日
目の前にあった光景は自分の心をへし折った
直接関わることのない人間の言葉に自分は負けてしまった
なのに自分に乗船した「人」達はどうだっか？
置かれている「矛盾」を笑い飛ばした「人」達。。。。。

「オレは自分の仕事を誇りに思っている」

鈴村の言葉が蘇る
苦笑いと。。。大きな手が自分の髪を撫でたときの事

「誰よりも故郷を愛せる仕事」

出港の日に折られた心を支えたのは鈴村の言葉であり，その思いを
心の中に宿らせた者達
自分に乗船し
共に炎天下の海を護った「人」達

涙で揺れる瞳に宿った強い意志は顔を背ける事なく，面前に構える
『ひえい』に告げた

「たとえ国民がボクを愛してくれなくても。。。。ボクが国を愛し
ている心は変わりません！！ボクが日本を愛しているんです！！」

それが『きりしま』が海外派遣から今日までの間に学んだ大切な事だった
愛されないから愛さないなんて，背き合った世界の縮図から自分を脱皮させた姿は大きく見えた
その姿に少なからず『ひえい』に動揺が走った

「バ。。。バカじゃないの？あんたがそんなふうに力んでも誰も」
「ボクには共に護る戦いをする乗員のみなさんがいます！！」

涙を拭った顔は凛々しく輝いた
後ろにいた『おおすみ』も『きりしま』の手を握った
「私もそう思うよ。。。。そうだ。。。私達は1人じゃない」
艦魂は1人で何かができるわけじゃない
艦に産まれそこで生きる
生まれを呪いながらなんて悲しい生き方はイヤだと2人は気がついた

自分たちには「国防」という第一級の仕事に徒事する頼もしい「仲間」がいることに
この仕事が「宝」であり，1人でいた事などない事に

2人の前『ひえい』は今まで見たことのない反抗に冷静さを失い始めていた
今まで
自分に逆らった者などいなかった
ココまで言えばどんな艦魂でも心を挫かれ大人しくなった
なぜならそれが「真実」であり自分たちの置かれている状況の全てだから
それを目の当たりにさせられて，逆らう者などいなかったハズ

「国民は誰も愛してくれないのよ。。。。。」

荒れた呼吸の中，自分を真っ直ぐに見据える2人を指さしながら
「そんな事はありません。。。。共に働く乗員だって「日本人」です」
『おおすみ』は一歩前にでて『きりしま』に肩を並べて
「私に乗っている陸自の人達だって知らぬ土地を「日本」を代表して助けにいきます。。。これは「誉れの仕事」であり「愛されるべき任務」です」
そう，それはいずれ日本人が誇ることのできる出来事となる
今はまだ長く
かつての戦争の傷を引きずったまま「国防」＝「戦争」という図式から抜けられない国民にだっていずれわかってもらえる
この世界の情勢に則した当たり前の「防衛」という仕組みを
必要な仕事である事を
手をつないだ2人の前『ひえい』は怒鳴った
「バカ!!!!そんな，きれい事で自分を慰めるなんて!!哀れだわ!!惨めな事なのよ!!」
手に持った小箱を投げた
怒りは沸々と。。。。マグマのように熱くゆっくりと停滞していただけで止まっているわけではない
光る『きりしま』の目に負けない女はズイと前に進み出た
「私の言ってる事は間違ってる?そう言いたいの?うん?」
整えられた爪を持つ指は静かに『きりしま』の顔をなぞった

これ以上にないほどの圧力のまま

「私が間違ってるって事なの？私の言ったことは。。。。「真実」よ。。。」

繰り返す怒り

「乗員が愛しててくれてるなんて夢みたいな事言って。。。。「人」は艦から降りてしまえば私達の事など忘れるわ。。。。うんう。。。私達がこうやって苦労してることさえ知りもしないで高いびきよ。。。。私達は常に孤独な魂なのよ」

「そうかもしれ。。」

目の前に立った『ひえい』に意見をしようとした『きりしま』の頬は音高く張られた

「だまって聞きなさいよ」

返された痛みは元より

声はココに来て初めて聞くほどにヒステリックにボルテージを上げ尖っている

「目の前にあるのは真実だけで。。。あんた達が想像するような優しい世界なんか絶対にない」

完全な否定と薄暗い輝きを失った目

歪みに合わせて笑った口元

『きりしま』には，まだ理解できない闇の深さがそこにはあった

司令の持つ持論よりも，心を覆う深き黒に会話の向こうにある答えを見つけられない

それでも

ココで罰をうけようとも自分の至った答えを曲げるつもりはなかった

「世界が優しくなくても。。。。ボクは信じます。。。。共に，この職務につく「人」の事を，そしてボクが「人」を愛します。愛されなくても」

張られた頬を赤く染めたまま
逃げる事のない目は『ひえい』の暗い目を見つめて答えた

美しい口から吐息を吐きながら彼女は零した
諦めた自分の意志をそのままに

「可哀想な子ね」

躊躇うことなく暴力へ。。。手を高く挙げた
「逆らった罰を。。。私にあやまれ」

だが振り上げられた手は降りてはこなかった
『ひえい』の手は彼女の後ろにある影に捉えられたまま止まった

「そのへんにしとけ」

彼女の細い手首をつかんだ大きな手の持ち主は欠伸とともに『きりしま』の前，『ひえい』の真ん前に姿を現した
影の正体は鈴村だった
間を割って入った背中にすっかり忘れていた彼の行く先を思い出し

た『きりしま』達は
「陸の「人」。。。。。」
「鈴村さん。。。。ココに飛んでたの？」

『きりしま』は子供を捜す仕事をしていた時に空間転移を使って彼をぶっ飛ばしてしまった，後がフル回転の出来事だったために彼の安否を気遣う事など出来ていなかった
そのため思い出した存在に，呆然とした顔はホッとした表情で近寄ると

「良かった。。。。海には飛んでなかったんですね。。。」

現状をまたもすっかり忘れて喜んだ

その姿に
襟首までアンダーシャツに掛かったタオルで寝ぼけた顔をした鈴村は溜息を落とすと

「大声あげっから目が覚めた」と愚痴ると
頭を掻きながら『ひえい』を無視して『きりしま』の頭を掴んだ

「びっくりしたじゃねーか！！ついたらわけわかんねーとこだし。。。ベッドはあっても人のはつかえーねーし」

ゴシゴシと『きりしま』の頭をねじりながら
「ココがどこかわかねーけど」
腕時計を見ながら方眉をしかめて
「後６時間しかねーんだぞ！！オレの睡眠時間は？ガキは見つけたのかよ！！」

「見つかったよ!!もう隊員に確保してもらったし!!」

海に落ちることはないと考えてはいたがどこに消えてしまったかが
不明だった鈴村の安全がわかった事に『おおすみ』も事件が解決し
た事を笑って教えた

「よかった。。。じゃ後は寝るだけだな」

出口の無い部屋に飛ばされた鈴村は，抵抗して出口を作る事は無意
味な鉄板という壁の部屋で体力の維持のために眠りに入っていたのだ

「「人」。。。。。。。」

部屋の主を無視した会話が続く中，1人自体の飲み込めなかった『
ひえい』は鈴村を指差したまま固まっていた
その姿にやっと背中にいた女に鈴村は向き直った

「司令!!彼はボク達が見える「人」なんです!!」

振り返った男
自分よりはるかに背の高い男に『ひえい』は一歩下がってしまった

「なんで?なんで私の部屋にいるの?」
混乱している顔に鈴村はじっくりと相手を見回すと

「それはオレがききてーよ」
「わ。。。。私も見えてるの?」
『ひえい』の質問に鈴村は胸ポケットに指してあった『きりしま』
の万年筆にふれながら

「ああっ。。。見えてるぜ」

『ひえい』の姿を十分に視界に入れたまま
安定した霊感を感じているのか続けて悪態を付いた
「幽霊でもケンカするんだな」
両手をあげて「お手上げ」のポーズをとる

「ボク達は幽霊じゃありません!!艦魂ですって!!」
「わーったよ」
即座の意見を煙たそうに手をふる鈴村の姿に怒鳴ったのは『ひえい』だった

「出て行け!!!気持ち悪い!!「人」なんかに私の部屋に。。。」
明らかに焦った表情
『ひえい』にしてみたら当然の事なのだが，彼女は初めて「人」が自分を認識しているという空間にいるわけだし
それも，よりによって自分の部屋で，そんな焦りの怒りに油を注ぐように軽い返事

「好きではいったんじゃーねーよ」

悪びれる事のない鈴村の態度に火は勢いを増した怒鳴り返した

「いったい!!どなってるの!!『きりしま』。。。。。これは私に対する嫌がらせね?うん?」
まくし立てる勢いでそのまま『きりしま』の襟首を掴まえると張り倒した

「自分たちで解決できない事を「人」に頼って。。。私のところまで連れてくるなんて」

そう言うともう一度は彼女の胸ぐらを掴み上げて

「ふん。。。こういうので「人」と仲良くなったから愛されてるって勘違いしちゃったのね？気持ち悪いわ」

そう言うと鋭い瞳はもう一度殴打を加えようと手を挙げたがまたもその手を鈴村が止めた

「止めろって，『きりしま』ちゃんが，あんたに何したよ？」

鈴村の言葉が終わる前に『ひえい』は掴まれた自分の手を振りほどいた

「邪魔よ「人」には関係ないでしょ。。。」

汚らわしいという言葉

鈴村に背を向け『きりしま』は必死に謝った

「司令。。すいません！！ボクが間違ってココに飛ばしてしまって」

「うるさいわ。。。。あんたは本当にバカな子だわ」

尖った目線とは別に上がったままの手が『きりしま』の頭を叩き下ろした

無言で制裁を受ける『きりしま』の姿に

『ひえい』対して鈴村が言い返した

「やめろ。。。そんな事したくねーくせに何してんだよ」

「バカには制裁が必要なのよ。。。あんたは何なの？」

「何って。。。。陸自の鈴村っていうだが」

「黙ってなさいよ。。わかった顔して。。。陸の人間に私達事の何がわかるっていうのよ」

侮蔑をくれる瞳の前で鈴村は止まって真っ直ぐに『ひえい』を見据

えると
首の後ろをめんどくさそうに掻きながら答えた
「わかってるよ，オマエがちょっぴり寂しがり屋の怨霊だって事ぐらい」
相手をたきつける挑発，それでも目には冷静さを残して
「死にたいらしいわね」
焚きつけられた怒りに忠実な反応を示す『ひえい』は光を手に集めていた
「人」に攻撃を加えようと思うところまで立ち上った怒りに気がついた『きりしま』は
2人の間を抑えようとしたが。。。鈴村の大きな手が『おおすみ』の側に『きりしま』の体を軽々と押しのけた
「どけ！」
大男はそのまま真っ直ぐ『ひえい』の前に立つと，大きな溜息と小さな舌打ち
「さっきからな。。。話しは聞いてたんだけどよ」
「だからなに？」
キツイ目線のまま鈴村の存在に驚いたりしたら負けてしまうとでも思っているのか『ひえい』は強い態度を崩さない
「幽霊。。。良く聞けよ，オレは鈴村良平って言うんだ。。。。忘れんなよ」

名前を名乗った鈴村の前
腕組みの中に破滅の光を握った『ひえい』は「だから?」と攻撃にでようとしたが。。。

鈴村は違ったそのまま大きく手を開くと目の前の彼女を優しく包み込むように抱きしめた

突然自分を覆う大きな体に『ひえい』は言葉をなくし目を開いたまま微動だもできない状況の中
鈴村は抱きしめた頭に手を置いて

「オレで我慢しろ。。。。オマエの事，死ぬまで愛してやるから」

鈴村はココに『きりしま』が連れてこられた時から目が覚めていたよほど危うい事になったら止めようと思っていたところに『おおすみ』が乱入したため
出所を失っていたが，そのせいで「艦魂」というものが持っている根深い問題を耳にする事になっていた

そして

『ひえい』の繊細な茶髪を優しく撫でる手
大きな体は細い彼女の体を温かく包む
何が起こってしまったのかわからない。。。。そういう顔のままの彼女に，鈴村は自分の顔を近づけた

「わかったか。。。だからもう世の中に当たり散らすなんてやめろ。。いい女が台無しだ」

男の無骨な顎が彼女の額をかすめる

触れることのない「人」の。。。。自分たちとはまるで違う体の。。。。

次の瞬間鈴村の顔は横に吹っ飛ばされた
『ひえい』が，やったわけではなかった
「不埒者!!!!」
鉄拳を発射させたのはランと光る瞳を持った『きりしま』だった
その後に従うように『おおすみ』の鉄拳が襲う
「司令になんて事するんだぁ!!」

遠慮のない掃射の中，鈴村は

「馬鹿野郎!!!!今，一番大事なところなのになにやって!!!」

パンチの衝撃でぶっ飛び転がった体を起こすと
2人を払って『ひえい』の元に戻ろうとするが，どこからそんな馬鹿力が出ているのか両腕を引っ張られたまま，またも転げるとそのまま引きずられる

「コラ!!!ガキども!!!離せって!!!!」

その間も呆然と立ちつくしている『ひえい』に手を伸ばし
「わすれるなよ!!!オレの名前は鈴村ってっ。。。。他のヤツの事なんか忘れろ!!!オレだけを見てろ!!!」

必死の言葉も虚しく
艦魂パワーＭＡＸで引きずられる

「司令!!失礼しました!!このお叱りはまた後で十分にお受け致します!!!!」
「すいませんでした!!」
焦りまくった表情のまま『きりしま』と『おおすみ』は謝りの言葉を入れると
大男を引きずったまま光の中に入っていく

「まて!!オマエら!!この光あぶねー。。。」

鈴村最後の絶句が聞こえる中
光の輪は3人を包み込むと細かな粉をまき散らしたまま『ひえい』の部屋から消えていった
その間『ひえい』は動くことができなかったが輝きの燐光が無くなり部屋の中がいつものような静けさに戻った途端に，糸が切れた人形のようにペタリと座り込んだ

肩を小さく揺らし
自分の額に触れた。。。。。感覚に目を回し

「何。。。。何なの。。。。。」

このままではその場に倒れてしまいそうな体をベッドに預けるように飛び込んだ
頭をふり
自分の前で起こった出来事に整理のつかないまま深く寝返った目の前に
き章と階級章が。。。枕元に置かれていたそれに気がつくと素早く手を伸ばし胸に抱いた

「違う。。。あんなの。。。違う。。。。」

繰り返しつぶやきながら『ひえい』は嵐の一日を締めくくり深い眠りの中へ
無理矢理に自分を落としていった

「いってぇ。。。。。」

叩きつけられるように輸送艦おおすみの甲板に落っこちた鈴村は顔面の調子を確認していた
「なんて事するんですか!!」
慌てて返ったせいで目標こそちゃんと会ってはいたが甲板の上空2メートルぐらいのとこから落っこちた3人の中，いち早く起きあがった『きりしま』は首を鳴らしていた鈴村の前に突っかかった

「何がだよ?」
「司令に抱きつくなんて!!非常識です!!」

鈴村は胸ポケットの万年質を確認すると呆れた顔で
「どこが非常識だよ?」
「抱きついた事!!」
横に一緒に落っこちていた『おおすみ』が，めくれ上がってしまったスカートをなおしながら指をさして注意した

「抱きつくって。。。。オマエらオレの言ったこと聞いてなかったのか?」

鈴村の告白は2人には聞こえてはいなかった
目の前で司令に抱きつくという非常事態に泡を食いそんな言葉を拾っている余裕などなかったのだ

「とにかく失礼を謝ってこないと。。。」
自分の前で頭を抱えた『きりしま』を横目に鈴村は，立ち上がり痛めた腰を叩きながら

「いちい本気で突っかかるから。。。。アイツも腹を立てるんだよ」
「アイツって。。。。司令の事言ってるの？」
となりで脱力のまま足を伸ばしていた『おおすみ』は恐る恐る聞いた

「司令の事をそんな風に言わないでください！！」

立ち上がってストレッチをする鈴村の背中に『きりしま』は，ついて回って文句を言ったしつこく注意を続ける子供に根負けした鈴村は

「わーったよ！！アイツ海将だもんな。。。。幽霊のエラ様だから言葉にゃ気をつけるよ」
「幽霊じゃありません！！！ボク達は艦魂です！！何度言ったら」
「わかったって！！」
「それに司令は海将じゃないです！！海将補です！！」

飛び上がって大まじめな意見をする『きりしま』を見ながら，鈴村は返し忘れてポケットに忍ばせた「海将」の階級章をみながら首をかしげ
後ろをついて回る彼女を無視して考えた「じゃあ誰の階級章だ？」

そんな鈴村の態度に

諦めた『きりしま』は

「とにかくボクは謝ってくるから」
今度は急いで飛ぼうとした手を鈴村に掴まれた

「やめとけって。。。。。ほっといてやれ」
「だって!!失礼な事したままじゃ」
鈴村は手を掴んだままその場にもう一度座った
見渡す限りの満天の星空の下で折れたタバコをくわえながら

「独りにしてやれって。。そういう気分になってるハズだから」
「だけど。。。。」
「アイツは怒ったりしてるわけじゃねーよ」
折れたタバコの真ん中を千切り
指手つまむようにして少しの煙を楽しむと，鈴村は自分の言ってる事の理解ができていない2人を見て

「だから「ちゃん」付けなんだよ『きりしま』ちゃんに，デコちゃんよ（『おおすみ』）。。。。ボクなんて言ってるうちは『ひえい』の気持ちは，わかんないぞ」

「何がですか。。。。」
鈴村は隣に気落ちした様子で座った『きりしま』の額を撫でながら

「『ひえい』はちょっとばかり，めんどくせー女なんだよ」

小さくなったタバコをエンカンに投げながら
「もうちょっと大きくなんねーとわかんねーかな?」
苦笑い
まだ子供な2人の前，鈴村は星をみながら

「ただの寂しがり屋なんだよ。。。。『ひえい』は」と手に残った髪の感触を思い出してあんなにキレイな幽霊なら呪われても良いかと独りニヤリとしてみた

第四十話　彼女の体（後書き）

カセイウラバナダイアル～～フルチャージスピリットな一週間編～～

オハコンバンチワ
今週は炎の7日間で。。。。心身共にくたばりました。。。
肌に悪い夜勤が続いたり
労働時間を大きくオーバーしていたりで春度を上げようかと（爆）
思ってしまうような日々でした
そんな中
ヒボシはちょっとしたお買い物をしました

なんと！！！
プラモデルの『むらさめ』を買ってきました（藁）
イヤ～～～
サクラヤの地下で船のプラモデル探して歩く女って。。。
みんなイヤそうな顔してましたね
まわりにあるプラモデルが「ガ〇ダム」ばっかという状況にドン引きでしたが
その量の多さにびっくりの世界の中
意外とない海自のプラモデル。。。。帝国海軍の艦は結構いるんですが。。。
でっかい『こんごう』とかもいたのですが。。。。そんなの買ったら相方さんに殺されてしまう気がしたので（藁）
遠慮がちに７００分の１というモデルにしました。。。
部品が細かくて泣きそうです
色とかどうしようといまさら悩んでます。。。。。

艦艇のプラモデルブースには中高年の方が多く
みなさん細かなピンセットのようなものまで買っていたのでやはり
手のかかるものなのだと実感中。。。でもがんばって作って次は『
しらね』さんを。。。。

しらね　「。。。。。。。」
ヒボシ　「。。。。。コンバンワ」
しらね　「ねえ。。。。みてみんの絵にわたくしがいない気がする
のは気のせいかしら？」
ヒボシ　「。。。。。どうなんでしょう？」
しらね　「死にたいの？なんで『こんごう』と『ひえい』姉様に。。
。あの誰かわかんない帝国海軍の人なの？」
ヒボシ　「いゃぁぁもっと描くことに慣れたら『しらね』さんも
キレイに描こうと。。。まだリハビリ中なんですよぉぉぉ」（すで
に泣き落とし）（何しろ絵を描くのは１０年ぶり）
しらね　「絶対にキレイにかくのよ！！わたくしを！！」
ヒボシ　「ラジャーす！！！」

そんなこんなでがんばっております～～～
ハゲマシテやってください（藁）

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第四十一話　太陽の人（前書き）

災害派遣編終了
どこか中途半端な章になってしまいましたが
この章では艦魂の抱えている問題
『ひえい』という鬼司令のもつ問題や
少しの伏線を書くことが出来ました。。。。フィ～～～

第四十一話　太陽の人

南海の空は晴れ晴れしい
熱を持った空気はこれからくる，さらなる熱き日々を予感させ
そして
空に比例するように深い青をたたえた海に「死」を流した大地が近
づき始めていた
日本の近海では見ることの少なくなったエメラルドとシアンを混ぜ
合わせた海の色に。。。
たくさんの命が飲み込まれた被災地に向かって護衛艦隊は走ってい
た
輸送艦『おおすみ』の中では各隊が上陸に際してのレクチャープロ
グラムに入り
整備の隊員達などが裾がしく走り回り
艦魂『おおすみ』も課業に合わせ出入りの多い自艦艦内にくまなく
神経を尖らせ不備なく事を進ませるために集中の時間に入っていた

「『ひえい』は，こないんか?」

上部甲板に並べられていた愛車の「疾風」の中で車内チェックをし
ていた鈴村の隣，当たり前のように助手席に座った『きりしま』，
後ろの座席に座った『はまな』
2人とも作業用青服（幹部タイプ）を着た姿に向かって
チェックボードを手にした彼は，第三者的には少し気味の悪い笑み
を浮かべて聞いた

「こないよ。。。。」

昨日一日，目の回る出来事で振り回され続けた『はまな』は相当泣いたのか目の下を赤く腫らした状態で口を尖らせて答えた

なにしろ大変な日だった。護衛艦隊が洋上でそろい踏みをするのも一つの課業として大変な事なのに。。。。
朝一番に集中力一本勝負の課業，補給業務に入り3時間
本来ならそれで『はまな』の課業はおわり
後は久しぶりの友達『きりしま』を囲んでの食事会になるハズだったのに。。。。

鈴村という陸自の「人」に興味を持った『きりしま』の奇行で
男まみれの艦内を徘徊する事3時間。。。。
『きりしま』の思う言い分は十分にわかったとしても。。。。そもそも内気で臆病な彼女にはリアル肝試しみたいな拷問の時間が続き。。。

やっとでご飯会になったと思えば
ココでの初の海難者救出作業が夜の早い時間に発生
なんとかならないものかと思案の末に「人」の助けに縋る事になったところから
出遅れてしまった
孤独との戦いの末，泣きながら『きりしま』達の後を追って走り。。。

事件解決と共に合流，疲れ果てたところに，次の大波が襲う
『ひえい』司令の傍若無人な命令の前『きりしま』が連れ去られるという非常事態，無力に友達をただ見送ってしまった自分の弱さに泣き
『きりしま』が無事に帰って来られることを祈って泣き
戻ってこられた3人の姿に泣き

『きりしま』に抱きついて。。。非力で心が弱くて友達を救いに行けなかった自分を許してと泣いた

泣き続けの初日だった

その日は，独りで寝るのが怖くて『きりしま』の部屋に泊まった
ベッドの中で何度も謝る『はまな』に『ひえい』司令に，さんざん張り倒され赤くなった頬のまま『きりしま』は笑って言った

「『はまな』もう大丈夫だから！」

そんな友達の優しさに，また泣いた

枯れることなく泣き続けた結果は，ものの見事に目を腫らしメガネ越しでもわるほどに赤い
その目がバックミラーに写る鈴村を睨んで

「絶対にこないから」と

怖い司令が自分たちの前には出来るだけ現れて欲しくはないという願掛けのこもった返事を返した

「忙しいわけじゃないだろ？」

ダッシュボードを開き，備品の点数をチェックしながら
どこか陽気な声の鈴村はとなり座った『きりしま』の顔を見ながら
「2人ともヒマしてるぐらいなんだし」
手に持ったチェックボードを『きりしま』の膝に渡して嫌味を返した

「ヒマじゃないけど!!。。。「人」とは仕事の仕方が違うだけ。。。」

珍しく『はまな』は突っかかる
よほど前日のように事を乱されたくないという気持ちが前に向かって突っ走っている様子
ミラー越しに目が合わない程度に睨み続けるぐらいの元気はあるが
『きりしま』の方は元気がなかった
あれほど「人」との会話というものに終着して張り切っていた顔が
今日はまだ見せてなかった

「鈴村さん。。。。聞いていいかな?」

手渡されたチェックボードの項目に目を通しながら，続かない喧噪の間
少しの沈黙の後で初めて『きりしま』は口を開いた

「どおしてボクには『ひえい』司令の気持ちはわからないんですか?」

やけにしょぼくれていた『きりしま』の態度を少しばかり気にしていた鈴村はボードを取り返すと，前方で他の車のチェックをしている梅酢達の姿を見ながら

「そんな事気にしてたのか?」

顔を合わせることなくボードに書き込みをした
『きりしま』は昨日の最後に言われた言葉の答えをずっと探していた
『はまな』に泣き謝られる時間で寝るという気分はなくなり
眠ることなくその事を考えていた

「ボクは。。。司令の気持ちもわかりたいと思う。。。きっと」
あの時には見えなかった『ひえい』の心の影を知ることで力になりたいという気持ち
努力したいという思いを伝えたかった

「『きりしま』ちゃんよ。。。。あれは個人の問題だからほっときゃいいんだよ。無駄に首を突っ込んだって解決なんかしねーよ」
鈴村はアッケラカンとした態度でタンブラーに入ったスポーツドリンクを飲むと

「アイツが生きてきた時間と『きりしま』ちゃんが生きてきた時間が違うように，アイツにはそれだけの思いがあってだな。。。。それがちょっとばかりめんどくせー事になってるだけだからよ」
「でも!!わからなきゃイケナイような言い方だった」
「わかる歳になりゃわかる」
手をヒラヒラとさせ余裕の表情を見せられることに『きりしま』は苛立ったように反抗した

「ボクは今それを知りたい!!知って。。。もっと力に」
「『きりしま』ちゃん。。。知っても力になんかなれねーよ」
「知らなきゃ。。。僕たちは独りじゃなくて。。ちゃんとこの仕事を共をする「人」もいる事を知って。。。がんばらなきゃ」
思い詰めたような顔に鈴村は苦笑いを浮かべた
司令官の中にある暗雲は自分たちに対する国民の態度が元になって

いて
それが自分たちが，この職務に向かう事の意味を破壊していて
。。。。。
悲しすぎる結論だったけど
それでも共に働く「人」もいるという事実までも握り潰してしまえ
るほどの「心の闇」を持っているのならば。。。。
共に自分も立ち向かって。。。少しでもお役に立ちたい

職務に向かって忠実である事を大切と想う『きりしま』の態度に鈴
村は大きくシートをリクライニングさせると
周りから自分の姿を隠して

「任務の事はよくわからんが。。。強いて言うならな，『ひえい』
は『きりしま』ちゃん達みたいに強くないんだよ」
「強いよ。。。。」
寝転がった事で顔の見える一に座っていた『はまな』は小さく首を
振って否定した
なんと言ってもコワイ『ひえい』司令というイメージしかないから
そんな御子ちゃま『はまな』を見ながら

「『きりしま』ちゃんには自分を守ってくれた人ってのがいただろ。
。。きっと。。そいつの背中を覚えてるか？」
ふいの質問
『きりしま』の頭に浮かんだ背中

「姉さん。。。。」

頭に浮かんだのは姉『こんごう』の背中

新たなミサイル護衛艦として産まれた自分たちを一番に抱きしめてくれた姉
姉自身は誕生の時に大きな傷を付けられて。。。。なのに自分たちを大事に思って色々と根回し，頭を下げてくれていた『こんごう』の姿を『きりしま』は思い出した
基地勤務に入ってから，その事を聞くようになった時。。。『きりしま』は泣くほど感謝した
姉が自分たちのために作ってくれた道に

その顔を確認したようにもう1人に顔を向け

「御子ちゃま（『はまな』）にもいただろ？」

漠然とした質問だったからこそ単純に自分を大切にしてくれた人が思い浮かんだ
寂しがり屋の『はまな』にとって最初の背中は姉の『とわだ』であり，心細くて仕方なかった配属先の舞鶴で護衛艦という中でも補給艦という格下と見られがちな自分に快く相部屋までしてくれた『はるな』司令だった

イスに座った2人の顔を交互に見ながら鈴村は寝不足だった頭を叩きながら

「そういうヤツがいると「強く」なれる。。。。『ひえい』には，そういうのがいなかったんだろうな」

「だったらボクがそれに成ります」

あくまで生真面目な返答
でも大切な事だったとわかったからこそ，そうなりたいという希望

を語った『きりしま』の頭を鈴村はグリグリと撫でるというか抑えると口に大きな笑みを浮かべて

「そりゃ無理だ」

自信満々の顔は続けて胸を叩いて
一生懸命の決意を告げた『きりしま』の顔に

「『ひえい』に必要なのはオレだからだ」

またしてもの驚愕の回答に呆然とした子供2人の顔を見回しながら鈴村は念を押すように

「子供じゃ無理なんだよ，オレのような大人の男じゃないとな」

満面の笑みを浮かべた顔に窓越しから

「バカかオマエ」

言葉を無くした2人の前で自慢げな面を晒していた鈴村に横から罵倒を投げたのは仕事を終えた『おおすみ』だった
作業用の青服に着替えた『おおすみ』はデコッパチな額に汗をかき腕まくりをした姿で力説していた鈴村の顔を睨むと

「どっちにしたって，もう二度と司令に会うことなんて出来ないんだから。バカな事言ってると恥ずかしいよ」

昨日の出来事
『ひえい』の激怒と，鈴村の仰天の行動を一部始終見ていた彼女は冷静に考えてものを言った
どう見ても

自分に抱きついてきた男の前に，怒りの『ひえい』司令がもう一度
会う事など考えられない

「あんな行動とっといて何言っても説得力ないよ」
「なんかあったの？」

戻ってきた『おおすみ』にやっと呆然の世界から意識を戻した『はまな』が聞いた
メガネの下の泣きはらした腫れは十分に見える
純粋培養の『はまな』にあんな事件を話していいものかと腕組みの『おおすみ』の隣，鈴村は持論を押し通すように

「バカ！！抱きしめられて嬉しくない女はいねーだろ！」
一瞬で真っ赤に染まった『はまな』はフルフル震えながら鈴村を指差すと

「司令に抱きついたの？」
涙目になりながら聞いた
そんな事実があったとするならば，とばっちりを受けるのは目に見えている

「しんじらんないよ～～非常識人間！！」
鈴村の手にもっていたチェックボードを跳ね上げ
イヤイヤと首を振りながら昨日で枯れたはずの涙まで浮かべた『はまな』の行動に

「オイ！御子ちゃま！オレはスケベ心だけで抱きついたんじゃねーつーの」
「どっちも一緒だよ！！私達の身になってよぉ！！」

言い分はもっともだった
鈴村は上陸してしまえば艦内で起こる出来事にはノータッチの状態
だから被害が及ぶことはないし，そんな無礼な「人」に『ひえい』
自身が顔を合わせにくる確率もないのだから
やったもの勝ちで逃げられるというものだが

艦魂として海に残る『はまな』にしてみたら
この先何ヶ月かを司令と共に過ごさなくてはならないのに。。。。
最初の日からフル回転だったうえに。。。ココから続く日々がずっ
と灰色に染まってしまっていると知ったのだから
泣きたくもなる

騒ぎ出した『はまな』に『おおすみ』は手で肩を押さえて
「落ち着きなって。。そんな事ないからさぁ，はーちゃん」
「そんな事言って司令が来たら」
その言葉が乾かない中ではっきりとした声が

「『ひえい』司令。。。。」

立ち上がり敬礼をした『きりしま』の姿に『はまな』は失神寸前に
なって固まり，『おおすみ』はゆっくりと自分の後ろに振り返った
嘘とか悪質な冗談と思いたかったが
メンバー1，くそ真面目な『きりしま』の目線の先，夏服のスーツ
スタイルの『ひえい』は凛と立っていた

「邪魔よ」
冷たい声は有無を言わさぬ圧力で『きりしま』達を退場させようと
していた

「司令」

「あんた達。。。。子供の所にようがあるんでしょ。。。さっさと行きなさいよ」

スロト達，漂流していた兄妹とお爺ちゃんは今日の午前，タイ国に入る前にインドネシア海軍に引き渡しが決まっていた
入国審査もままならないタイ国に負担をかけないための配慮であり，インドネシア海軍もその事をよく理解して行動は早かった

これから彼らの見送りに行こうとしていた事も事実だったが『きりしま』は
昨日，鈴村に攻撃を加えようとしていた司令を知っていたからこそ動くことは出来なかった
だが鈴村は手を振って

「ほら，会いに来ただろ」

笑うと行けと手を振った
「鈴村さん。。。。」
立ち上がり『ひえい』の前に進む鈴村の背中に心配の声をかける『きりしま』に
「心配するなって」
大男はそう言う言葉に3人はその場から退場した

司令と鈴村を残したままという不安を抱えながらも
迫る別れの時間に会わせた3人は

インドネシア海軍の艦に乗り移ったスロトの前に走ってきていた
『きりしま』は相手の艦魂に挨拶を交わし彼の事情も説明を手早く
し終えたところだった

インドネシアの艦艇『ディポネゴロ』艦魂『ディワ』はインドネシ
アに籍を置く艦魂だが栗毛も美しい白い肌のオランダ人だった

「わかりました英雄の土は私が預かります，艦を降りるときにお渡
ししますね」

気だての優しい彼女は兄妹の事もよく理解し
『きりしま』の頼みにも十分に応じてくれた

「ミス・キリシマ。。。。我が国も大変な被害にあっております。。
日本が早くに助けに来てくれたこと国民に変わり感謝致します」

かつて
かの戦争で植民地を求めた白人社会の象徴としてオランダは君臨し
たが
今は違うこと。。。。そして自分の護るべき国の事をよく理解して
いる『ディワ』は深くお辞儀をして示してくれた

「良かったねスロト。。後は『ディワ』が見てくれるよ」
艦魂達に囲まれたスロトは先に運ばれた祖父と離れ最後の挨拶に『
きりしま』の前に立っていた

「ありがとう『きりしま』」

最後まで笑顔を絶やさなかったスロトは自分の手に付けていた手紡
ぎ糸のリングを手渡した

「あげる！！お守り！！」
それは紡ぎ糸を幾重にもつないだ土着のままの自然な色で作られた
小さなリング
細い手にすんなりと収まった宝に『きりしま』もお辞儀をしてお礼
を言った

「ありがとう！スロト，ユリ」

お礼を交わした
その時，今までスロトの腕に引っ付いて落ち着きの無かった妹のユ
リが口を開いた

「お兄ちゃん。。。。今は誰としゃべってるの？」
自分の周りをクルリとつぶらな瞳は不安げに見回す
そのまま兄の背中に隠れようとする姿に

「ユリちゃんはボク達の事が見えてなかったんだ」

『きりしま』は2人共が自分たちの姿が見えていたものと思ってい
たのでかなり驚いた顔をした
その顔にスロトは困った顔をした

「見えてないけど居ることはオレが話してあるから」
「うん。。大丈夫」
変な不安を感じさせてしまったと改まった『きりしま』に『ディワ』
が

「妖精（艦魂）は女の人には見えないものらしいですよ」
顔をまじかに寄せても気がつかないユリを見つめながら教えてくれた
「「女の人」には見えない。。。。」

それは『きりしま』にとって初めてしる事実だった

「でもオレ達は感謝してるよ!!」
あまりにあっけにとられた顔をした『きりしま』を気にしたスロットは妹をかばうように声をかけた
『きりしま』は小さなスロットが自分に気を遣ってくれている姿に，今ココでそれは考える事でないと割り切り

「わかってるよ!!」と微笑んで見せると，手を前に差し出した
「握手しよう!!スロット!!君とユリちゃんに会えてボクはとても良かったとおもってる!!」

小さな絆を結ぶ握手
一歩後ろに並んだ『おおすみ』と『はまな』にもスロットとユリそして『ディワ』が握手をして別れの時を迎えたそれは艦魂にとっても「人」にとっても小さな優しい絆が結ばれまた各々の世界に戻って行くという儀式だった
離れて行く『ディワ』とスロット達に『きりしま』達は今を精一杯に手を振った

「来てくれると思ってたぜ」

『きりしま』達を追っ払った鈴村は
車のチェックを終えウェルデッキの最後部

自衛艦旗の揺れる前で『ひえい』と対面していたが，すぐに顔を歪めイタズラっぽく続けた

「どうしたんだよ。。そんなかっちり頭纏めちゃって?メガネも似合ってないぞ」

目の前
昨日とは別人のように
例を挙げて言うのなら「教育に熱心な女教師」のような姿になっている『ひえい』を見て鈴村は似合わない姿だと笑って見せた
そんなふざけた対応を気にもとめず
冷たい声は自分の要求に針を仕込んで投げた

「盗人，私の部屋から持っていった物を返しなさい」

めげない男，鈴村は両手を挙げると片手に持った階級章を見せて
「昨日はガキどもに引っ張られての退場だったんだぜ。。。わざと持ってきたわけじゃねーよ」

金色に輝く海将の階級章
肩につける二組のものの1つ

「丘の人間は手癖も悪いのね」

乱れる事のない髪と，細身の冷たい感じを増幅させるメガネの『ひえい』は口だけを緩く動かし手を挙げ
陸自という存在を邪険にするような言葉を放ったが
鈴村は右から左という涼しい顔

「返しなさい」

「まあ，まてよ。。。せっかくココで会ったんだ話しぐらいしようぜ」
「話すことなどないわ」

のらりくらりとした鈴村の態度にも昨日のように乱れた姿を見せない鉄の女に鈴村は真っ直ぐ向かっていった
「オレにはあるんだよ。。。話すこと」
そういうと階級章を人差し指と中指で挟んだままヒラヒラと風に煽って見せた

「もうガキどもをいじめんのは止めろよな」
「陸さんの分際でわたしに命令するつもり？」

メガネの裏では風にサラされる階級章を落ちつきなく見つめながらも態度はいつにもなく高圧的
「命令じゃねーよ，オレのお願いだ。。。。いい女がそんなみっともねー事するなって事だよ」

そういうと鈴村はさらに前に出て自分より一回り小さい『ひえい』に触れられる距離に立った
この距離に立てば幽霊（艦魂）が持っている，あやかしの力でなんらかの攻撃を受ける可能性がある事は十分承知していた
知った上での行動

「どうしても恨みたいってんだったらオレの枕元に立てよ」
少しばかりの無精髭
がっちりとした体の作り，自分とは違いすぎる「人」の突拍子もない発言に『ひえい』はわざと卑屈な笑い声をあげた

「あんた。。。バカなのね，頭がおかしい「人」なのね」

そんな彼女の笑いに鈴村の反応は意外だった
笑って見せた，肩をすぼめ降参と示すと
はにかむように柔らかに

「まったくバカげた事だよな。。。。幽霊を好きになっちまうなんて我ながらどうかしてる。。。だけどオマエほどいい女なら悔いも残らねーよ『ひえい』」

そう言うと躊躇うことなく目の前の細い腰に手を回した

「だからオレで我慢しろ。。。オマエの未練が尽きるまで愛してやる」

鈴村の認識は相変わらず官魂は幽霊であり
『ひえい』の心うちは理解しつつもそれを表す的確な言葉が見あたらなかった結果「未練」と行ったわけだが
それはあながち間違いでもなかった

本気の手に引き寄せられた『ひえい』は昨日とは違ってそれを突き放した
心には十分な動揺があったが今日ここで飲み込まれる訳にはいかないという硬い態度が怒鳴った

「気安く触らないで!!汚らわしい!!」

息の上がる高揚感の中
相手に怒りを焚きつける怒声を発し
強烈な拒絶を示したのに男の方は変わることなく冷静に見つめていた

揺れる視界，見覚えのある景色
前にも『ひえい』はそうやって相手を拒絶する「マネ」をした事を
思い出した

何にも動じない自分の意志を継げた目。。。。かつてのあの人に似
すぎていた

熱い潮風
真夏の傍観者達
目眩の中『ひえい』は首を振った
フィードバックされる思い出

「本気だぞオレは」
「止めて！！」
鈴村の言葉に溢れ出した過去が重なろうとする
熱かったあの時の。。。。。大切な告白

木々の音

あの日

伸ばした手
目の前に移り変わる思いに紫の光を現し，この場から逃げようとす
る『ひえい』に鈴村は
手を伸ばすことはしなかった
あまりに弱々しく揺れる彼女の姿が可哀想に見えたから
かわりに大きな声で

「オレを忘れるなよ！！！」

覚悟の言葉を連ねた
その声は『ひえい』の耳に別の声色を乗せていた

「忘れないでね」

大男の前に現れた思い出の影は
太陽の人

「どうして。。。。。」
最後の雨が降り注ぐ中
苦い灰色の景色の中で別れの罵倒を飛ばした相手は手を大きく上げて微笑んだ
溢れる光に囲まれ消えて行く姿に鈴村は告げた

「『ひえい』！！また会おうな」

「また，会おうね」

鈴村の前
『ひえい』は頭を抑えたまま光の輪の中に姿を消していった
膝を抱え込むように強く自分の耳を塞いでメガネの奥に涙を湛えて

「現地の困窮を力の限り助けよう！！！行くぞ！！！」

エルキャックに乗り移った陸自の隊員達は班長の怒号に拳を振り上げた

開かれた輸送艦『おおすみ』のウェルデッキの上
鈴村を乗せたエルキャックを見送る『きりしま』『おおすみ』『はまな』
その隣に並び敬礼を送る海上自衛官達
お互いが協力してこの任務を達成する
青天の下大きな風切り音を響かせたエルキャックが海に浮かぶ
見渡す限りの破壊に打ちのめされた海岸線の砂浜に向かって
「ご無事で！！よろしくお願いします！！」
『きりしま』はエルキャックの後部に乗った鈴村に手を振った
「騒がしい「人」だったね」
『はまな』は離れてゆく船を見ながら高く上がった太陽の日差しから顔を守るように手をかざした
「『はまな』。。。。鈴村さんがね，ボク達はやっぱり「女」であるべきだって言ってたんだけど」
「ただのスケベやろうだ」
『おおすみ』は日焼けもなんのその前髪のないデコに汗を浮かべて軽口を叩いた
「帰ってこようって思えるんだって」
『きりしま』は自分の。。姉に比べたら小さなふくらみの胸に手を当てた
まだ
彼の言う事

『ひえい』司令の事，わからない事がある中で
自分の髪に大きな手を置いた鈴村

「ゆりかごだって船なんだろ。。。だったらやっぱり船の幽霊は女
であるべきだな」

男は笑うとエルキャックの登場に向かいつつ

「女でいろよ。。。。『きりしま』ちゃん」と手を挙げて見せた姿
に心の奥が熱くなった

海を護る護衛艦艦魂達の敬礼は続く

救難という戦いに男たちは大荷物を担ぎ進んで行った
太陽高き熱波の国に

その姿を艦魂達は長く見つめ続けていた

第四十一話　太陽の人（後書き）

カセイウラバナダイアル～～増殖編～～

ちゃ～～

朝こんな時間にアップ。。。。大人はいったい，いつ寝ているのでしょうか

そんなヒボシは前に『むらさめ』を買いましたと報告しましたが。。。。ふぅ

『こんごう』と『おおすみ』も買ってみました!!!!

７００分の１はシリーズが多いので一通りの護衛艦は集められそうだし

『ひゅうが』の発売も待ち遠しいです

これに

かつての帝国海軍の艦艇を厳選して縮尺比のために並べてみようと考え中です

『おおすみ』はかなり大きなプラモで

『むらさめ』と比べると巨大な艦という事がわかりますが。。。。

この『おおすみ』でさえかつて日本を護った帝国海軍の艦にしてみたら小さいという事実にかなり驚きました

大きい＝強いという事ではないのですが

かつての日本人はそういう物をつくり上げたんだという誉れを感じました

ちなみに

『おおすみ』全長１７８メートル

戦艦大和は２６３メートルあったわけですから

いかに巨大な艦だった事か。。。。。

最近になって呉市の企画で
戦艦大和を海底から引き上げようという話しがあるそうですが。。。
ヒボシ的にはあまりそういう事はしない方がいいと思ってます
そんな事をしたら元乗組員の内田さんなどの気持ちはどうなってしまうのかと。。。
あれは
悲しいけど海の墓標であるべきだと思ってます
彼処に護国の鬼として眠った英霊達と私達は言うけれど
のこされた家族の気持ちを考えれば引き上げたいというのもわからなくもない。。。
複雑な気持ちでいます

ところでみてみんに「長門様」の絵を掲載しました新章ででるか？
まだわかりませんが（藁）
よかったらみたってください（爆）

それではまた～～
ウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第四十二話　名誉の刀（前書き）

＜要注意事項＞
この小説における「艦魂」という存在は筆者である火星明楽が諸説とは別に創作したものです
ですので
原初正しい艦魂設定を愛する方には不快な部分が多々ありますのでご注意下さい
誤って読んでしまったとしても一切の責任はとれません
今章「艦魂編」で艦魂そのもの「正体」探る部分が出てきますが以降書かれる「艦魂」の設定は
私，火星明楽の個人史家としての研究の元に書かれております
故に，この設定は私個人の物であるため，他所で使うことを厳重に禁止します
（私の著作，権利とします）
理由としましては
個人レベルで調べられた「民俗学」を基本とした仮説で話しを構築しているため，本来あるべき民俗学や考古学の発展の妨げとなってはいけない事，不必要な誤訳，誤解を世に広めてはいけないと，考えているからであります
また，これから艦魂小説を書こうとされる方に無用な混乱をさせないための処置と理解してたくださいけして占有を目的としての禁止事項でない事をご理解ください

これはあくまでこの「艦魂物語」内での設定としての存在でありますから，事実とは一切の関わりはなく，実在の民俗学にも考古学にも一切関わりはありません
あくまでこの小説内における仮説に基づいた設定である事をご理解ください

また
設定の作成に関わった「民俗学」等々の資料に関するご質問にはお答えできません
それらを元に誤解，誤訳を増やすことを望んではいないからです
色々と堅苦しい注意書きとなりましたが
純然に物語として楽しんで頂ける事を心から願います

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～
筆者
火星明楽

新章は災害派遣編と平行時間ですから～～～～
粉川くんふたたび～～～～忘れられてる？

第四十二話　名誉の刀

長浦の港をぐるりと回って横須賀の町に灯り始めた街灯の星を眺めながら，粉川は小柳から借りた深緑のＢＭを走らせていた
道に少しの渋滞と車の揺れるテールランプ

海を向けば
その多くは米軍のために眠らず機能する輝きが見える

かつては帝国海軍の代表的な港だったこの地は，未だ大半の基地を「占領」という屈辱を受けている
だがしかし
この「占領」から日本が本当に解放を願うのならば，かつての帝国海軍のように港をフルに使うだけの艦艇を揃える必要がある
空母を含め自国でシーレーンの全てを護るだけのものを作らなくてはならない
先人達が腹を切る覚悟で作り上げたものを，一から作り上げなくてはならない

それだけ今の日本を防衛する「海自」の艦艇の数は脆弱なのだ

アメリカの力を失ってしまえばすぐにも隣の国は攻め込んでくる可能性がある

この事実を日本国民は正しく理解しいない

「征服」されるのがお望みであるなら
無知な基地反対もありだろう

今はまだアメリカにとって極東の最大の基地としての利用価値と最大の「金産み国家」として機能しているが故に守られているだけなのだから

アメリカの眠らぬ光が基地の中を動く
日本政府と国民以上に周辺諸国に目を尖らせている艦隊は黒山の影を見せている
ココにはアメリカ第七艦隊空母打撃軍「キティホーク」を始めとする艦艇が連なるように寄港している
本来ならば日本が，自分たちでやらねばならぬ「防衛」をアメリカしている事を意味いるものは。。。

あの日から。。。。。今現在まで。。。。

鋼の要塞を思わす艦艇群の姿を
見ながら粉川はウインドーを少し下ろし風を車内に取り込みした
国道１６号から向こう「横須賀本港」をぐるりと囲む米軍基地が見える
横須賀地方総監部の正面は米軍の基地しか見渡せない
祭りはココで開催されていたが粉川は一度１６号で東京方面に戻り，隊司令部に挨拶をして戻ってきたところだった
例の祭りの写真をデータで本庁に送ってきたのだ

開けたウインドー越し夜の色に染まった空に白い月の影
昼間から曇っていた空はそのまま夕暮れも隠し続けた
夜もまた深い青色にはならず，薄墨の中に浮かぶ月を見せるだけ。。。潮風は緩く流れていた

新港のパーキングに車を入れた粉川は背中には四本入りの一升瓶ケース
両手にはビールにおつまみという，宴会の買い出し部隊のような姿で海に向かって歩いていた

「もう全部飲んじゃったかな？」

２週間前
特務でイージス艦に乗り込む事になった時に彼女の所に行った
大酒飲みの彼女のために，今もっているのと同じぐらいの量の酒を運んだが運んだその日のうちに半分は飲んでいた事を考えるに。。。

「なくなってるだろうな」

荷物を一度下ろし
ネクタイをはずした
中途半端に弛めた姿で会いに行ったら鉄拳制裁を受ける事になるだったら最初から無い方がましだからだ

街灯の光の下
小寒くなった公園の真ん中に「東郷平八郎」の銅像
２１時を回ったこの時間ココを通る人はほとんどいない
ココは海に近すぎて。。。そして「人」から遠い
潮風を直接浴びることのできる場所にその艦は静かに止まっている

艦隊の周りをがっちりと固めて締まったため直接海に触れられるところにはいないが。。。遠景で見るのなら横須賀の海に浮かぶようにも見える

「現存唯一の日本の戦艦」

猛き砲塔を持つ軍艦
今の時代に戦艦はいない
かつて日本の海に現れた巨大なる敵であるバルティック艦隊と戦った名誉の刀

粉川は艦を背に公園の周りを一通り見回しした
公園は小学校の近くにある。。。でもこの時間はさすがに子供もいないし
近づく寒さから丘に向かって服波風の手伝いもあってか人影もない

周りを確認した顔が目の前の艦に戻ると

「三笠!!いるかい!!」

粉川は艦首の方に向かいながら大声ではなく普通に，尋ねるように聞いた
居るのは当たり前なのだが，突然踏み入るのは「レディーに対して失礼」と踵落としを食らったことがあるからキチンと一声

おそらく気がついている。。。粉川は顔をほころばせる
彼女は耳が良い
というか「何か」が自分に近づく事に非常に敏感で。。。。「常に臨戦態勢の女」だ
返らない返事はそのままに，艦首に向かって移動したところに

妖精は立っていた

「人」の目に映ることのない輝きは甲板の上，髪を白く輝かせている
彼女はゆっくりとした動作で伏せていた目を開け自分を下から仰ぎ
見ている粉川の顔を見ると

「特務は首になったのか？」と落ち着きのある声で嫌味を飛ばした
「特務は続いてるよ！臨時で一度返ってきただけだよ！！」

変わらぬ顔の彼女に粉川は苦笑いをすると手に持った酒をあげて見
せた
「お土産もあるよ！！」
「それはけっこうだ」

満足気な笑みは，手を上げ泡沫の光を現したが，粉川は首を振って
断った
「光は止めて。。。酷い目にあうから。。。自分でそこまで行くよ」
そう言うと記念艦三笠へ上がる階段に向かって走った

柔らかいソフトフォーカスの月の影の下
甲板に土産を広げた粉川に，三笠と呼ばれた彼女は品定めするよう
に並んだ酒を見ていた
粉川に比べると身の丈はずっと小さい
むしろ『こんごう』よりも小さい１６０センチ台の身長，肩も細く
体の全てのつくりが繊細に見えるが。。。話す言葉に態度は『こん

ごう』以上に強そうだ

それでも総合した容姿はとても美しい
細いながらも女らしいふくよかさを持つ体に長い手足
深い紫を奥に秘めた髪
同じ色を持つ長い睫毛。。。。そして透き通った湖水のような水色
の瞳

「おおっ，梅ヶ枝（うめがえ）ではないか」

ケースから取り出した日本酒に喜びの声
乾き物のつまみを紙皿に出しながら粉川も嬉しそうに応えた

「佐世保の酒が欲しいだろうと思ってさ」
「気が利く歳になったな」
手の光の中にどぶろくの器を取り出した三笠は遠慮無く酒を注ぐと，
まだビールも手にしていない粉川の前でグイと飲み干した

「たまらぬ！！」

染みいる酒に親父のような台詞
慣れた日常に粉川は苦笑いしながら
「僕だってもう３１だよ，三笠が長くいた港ぐらいは知ってるよ」

自分を良いおじさんになったと言う粉川の前，三笠は片目で笑った

「海に落っこちて泣いてた小僧がよく言う」
「あれは。。。」

咄嗟の

痛い思い出に粉川は複雑な表情を浮かべた

それは
初めて三笠と会ったときの事。。。固められて動かない戦艦三笠の
向こう側で溺れていた日のことを思い出した

あの日
母親は横断歩道を渡っていた途中であっけなく世を去ってしまった
学校から帰った目の前
肌を土気色に変えた母の姿に最初は冗談の好きな母の悪ふざけかと
思っていたが。。。。
冷たい頬に絶望が心を支配した

父親不在の母親の死。。。
たくさんの自衛官が官舎を出入りする景色の中，母の死を受け入れ
られなかった小学４年生の粉川は

父のいる海に行こうと走った
外洋演習に出払っていた父に母の死を告げる術はなかった
どの自衛官の袖を引いても苦い表情で，父との連絡は取れないとい
う返事を貰い続けた彼は不安の沸き立つ心のままに。。。。走った
走って
走って。。。。。三笠の前で海に転落した

海の向こうに。。。。何度も手を伸ばせど。。。。。父に届く事はない
わかっていても
押し寄せる波を切って前に進もうとした

切ない限りの挑戦。。。。

悲しみに打たれた心が
波に奪われる力が。。。子供の手で何が出来る分けでもないという
無情に粉川は泣いた

「お母さん!!お母さん!!」

沈んで行く夕日に「嘘」だと言ってと。。何度も高く手を伸ばし母を呼んだ
だが
子供の願いは虚しく波の間に彼の命も奪われようとしていた時

三笠は粉川を見つけた

夕闇時，自分の真下で幼い声が聞こえて甲板に顔を出した三笠の下
今にも沈もうとする粉川は何度も潮を飲みながらも叫んでいた
「お母さん」と

三笠は波に押され自分の近くにまで戻される子供の姿を確認すると
周りを見回してみた
公園の中にチラホラと大人の姿は見える
誰かが早く気がついて手を差し伸べてやらなければ自分の下で人死にという縁起でもない事が進行している事に苛立った
夜も近づく時間に子供を防止柵の向こう側で遊ばせるなど非常識も極まりないともう一度周りを見回した

「親はどこだ?」

その時
悲痛なる声は真っ直ぐに三笠の耳に届けられた
それは
伸ばされた手が自分に向いているという事の証だった

「お母さん。。。。お母さん。。。」

目を見る
三笠は何度も周りを見回した
粉川の手は，目は明らかに自分を見ている

「妾(わらわ)が見えるのか?」

自問自答
ココに自分がくくりつけられて以来少なくとも３０年近くは「人」と会ったことはない
なのに
目の前の小さな手は一生懸命に「三笠」の救いの手を待っている
海に沈もうとする小僧の目に今一度

「見えるのか?」と聞く
その答えは

「お母さん!!置いていかないで!!!」

心は素直に海の潮に晒された彼を救った
救われた腕の中
粉川は泣き続けていていた「お母さん」と連呼し力無く眠るまでの
間を三笠は強く抱きしめ続けた
以来，母の変わりを無理矢理粉川に押し付けられた形で続け
今では飲みの友とまでなっていた

「はな垂れ小僧が良くも大きくなったものだ」

ケースの中の日本酒に満足な笑みを見せながら，気まずく頭を掻く
粉川をからかうと
なみなみに注いだ酒に口を付けた

「名水の味だ」
１７歳ぐらいという若輩な容姿とは異なる精神が酒を語る

「吟醸でもよかったんだけど。。予想外の買い物があってね，でも
数があった方が良いでしょ」

躊躇なく次の一杯を注ぎながら三笠は笑った
「酒はいくつあってもかまわん，上等で少ない酒などケチな男のし
みったれた嗜みだ」
顔に似合わない豪放な台詞と共に次の一杯を流し込んだ
そんな彼女の顔を見ながら缶ビールを封切った粉川は乾杯の手を近
づけながら

「佐世保の酒はうまい？」

「もちろんだ」
二人はお互いの存在を確認するように乾杯をした
「懐かしい味わいだ。。。。まあ，あの頃はこんな上等な酒は飲めなかったがな」
「そうなの?でもこれは江戸時代からある酒でしょ」
がっちり三笠の側に確保された「梅ヶ枝」のラベルを見ながらスルメに手を伸ばした粉川はビールを口につけながら聞いた
「いつの時代であっても殿様の相伴にあずかるようなものは，庶民には飲めないものだ」
酒好きの三笠
社会人になって大盤振る舞いでビールを山ほど持って彼女を訪ねたいつも酒より多めの酒は2時間ともたず
結局朝までの間に財布をからにするほど飲んだ事を思い出す
防大の時も，出世したときもアルだけのお金をはたいて三笠と酒を飲んできた
最近は一緒に飲み明かす事が1年に1度ぐらいになっていたから
久しぶりの三笠の飲酒姿に
「でもホドホドにしなよ酒。。。今は沈むことはないだろうけど」
早いピッチで杯を重ねる三笠にニヤケた顔の粉川は釘を指した
「たわけ!!アレは妾のせいではないわ!!」
粉川と三笠は，この事については何度も話しをしているが。。。。

「三笠爆沈」
日本海海戦後，三笠は佐世保で沈没した事がありその時の話しを聞くに

「いきなり下っ腹に「ドチン」と衝撃が走って，気がついたら一年も潮に浸かっていた」

この「気がついたら」というのが，くせ者で
三笠の経歴には絶対に「酔っぱらってただろ」ってものが多くついて回る
ウラジオストークで座礁してみたり
関東大震災の時に岸壁に激突してみたり
これらの事件と大なり小なりの事件で必ず「妾のせいではない」と言い切るが，必ず会話の中に「気がついたら」というのが入るのも事実

おそらく帝国海軍一の酔っぱらいだった三笠は，今もそのあたりだけば現役続行中だ

粉川のにやけた顔にさらにピッチを上げた三笠は
「フン！酒も飲めぬヤツは出世もせんわ！！」と杯を煽った

その勢いを止めるために粉川は今日ここに来た本題に入った

「会えたよ。。。。艦魂達に」と

電気の供給が止まってしまったかのように，注ぐ手の止まった三笠は目を見開いて聞き返した

「会えたか。。。。。本当にか？」
一口のビールを頂きながら粉川は強く頷くと
「三笠の言ったとおりだったね。。。いずれ僕には多くの「艦魂」が見られるようになるって。。。。見られたよ，そして会えたよ」
三笠は注いだ酒を下におろすと立ち上がった
夜に光を届けていた薄墨の月に目を向けると
「そうか。。。。そうか。。。。」
確かめるようにつぶやいた
「写真もたくさん撮ってきたよ！見て！！」
粉川は手持ちのカバンから今日までに獲った艦魂達の写真を整理したファイルのものから，未整理の束までを出して見せた
が
振り返った三笠の顔は曇っていた
喜んで貰えると思った粉川の顔も一瞬にして硬くなった
「見えん。。。。。」
広げられた写真
粉川の目には映っている『こんごう』達との集合写真をつまみ上げた彼女はじっくりと隅々までを探すように目を動かしたが同じ言葉を返した
「見えんな。。。。」
「写真も。。。見えないんだ」
甲板に広げた写真の束には，たくさんの艦魂達が写っている「人」

にはただの乱雑な風景写真にしか見えないだろう，そこに写る彼女達の姿を。。。。
同じ艦魂である三笠も見ることが出来ない

「。。。これが「断絶」。。。。。。って事かなのかな？」
「そうだな」
落胆の溜息と共に三笠は甲板に置いた杯をとると注いだ酒を煽った
横目で
何度も広げられた数多の写真を見るが
彼女の目には誰の姿も映らなかった
言葉を無くした粉川
自分以上に気落ちしている姿に

「まぁ最初から巧く事が運ぶとも思ってはおらなんだから，気にするな。。。それよりどんな艦魂に会った？」

横座りのまま早い飲酒を続ける三笠は，ほんのりと赤くなった頬で努めて明るい声で聞いた
広げた写真をかたしながら粉川は自分の顔に残ったダメージをさすりながら
相手の作ってくれた明るい雰囲気に乗りながら

「『こんごう』『しまかぜ』『むらさめ』。。」

２週間の間で出会った艦魂達の名前を黒の手帳でチェックした順に挙げていった
たかだか１４日程度でかなりの艦魂達に出会っていたことに自身も少し驚いた様子で

「いっぺんに見られるようになったから僕がびっくりだよ！」
三笠は思い出すように指折りしていたが，気になった名前に目を輝かせた

「『こんごう』てのは。。どんなヤツだ？」

一本目の酒瓶をカラにすると新しい梅ヶ枝を開封し目の前に座る粉川を指差した

「ちょっと凶暴な子かな。。。」

自分に当てられた鉄拳の痛みを思い出しながら粉川は顎を掻いた
思い出すと，やはりすくむ
イージス艦は伊達じゃないという威力を十分に味わった末の結論は，見立ては可愛い『こんごう』を思えばちょっとばかり酷い感想にも聞こえた

だが三笠は顔に笑みを浮かべるという珍しい反応を示した

「凶暴か。。。だろうな」

左頬に残る打撃跡を指した指は満足そうに揺れる

「だろうって。。。。なんで？」

写真も見られない三笠にそんな風に言われる筋合いはないハズの粉川は突っかかったが
彼女の脳裏は思い浮かぶ姿がしっかりとあるった

「その『こんごう』ってヤツは金髪，碧眼じゃないのか？」

と聞き返した

「目は青いけど。。。髪は栗色の赤毛っぽいかな?。。。見えたの?」

片手で締まった写真
三笠は横に首を振った

「見えないがわかる気がする，前の金剛もかなり凶暴な女だったからな」

「前の。。。。金剛。。。。」

不意に黙り込む粉川の前で彼女は赤くなった顔のまま続けた

「凶暴というか規則にうるさく「帝国海軍軍人」である事を徹頭徹尾守るために自分を律し他に厳しい女だった」

思い出を愉快に語る三笠と反し黙ってしまった粉川は手帳を開くと聞いた

「「魂の引き継ぎ」って。。。。知ってる?」

手帳の中程に赤丸と共に書かれた重要な事項
『こんごう』の誕生に際して大きな傷を作った出来事の中核をなす
「逸話」

「戦艦金剛の魂を引き継ぐ者『こんごう』」

願いなのか
思いなのか
そして現代を生きる艦魂達の中に今も残るこの言葉の意味を粉川は，
目の前
帝国海軍の栄枯盛衰の全てを見てきた艦魂三笠に尋ねた

「なんだそれは？」

簡単に酔っぱらうことのない彼女だが
赤く染まった頬のまま聞き慣れない言葉を聞いたという反応

「いや！だから，同じ名前，同じ業務につく船の魂は引き継がれるっていう話しを聞いたんだ」
「聞かない話だな」
三笠の反応はあっけないもので
早くも開けた2本目の酒瓶を転がすと挑戦的に輝く目で質問しかえした

「他にどんな問題があった？」

黒の手帳を指差して
粉川は困った顔でもう一度聞いた
「いや。。。これが一番大事な質問だと思うし。。」

三笠は静かに首を振った
落ち着いた表情はゆっくりと返事をする

「突然降って湧いたような主語のない質問などに答えられるか？色々な疑問，問題を総じてそこに至るものを見極める。。。。敵は目

の前だけにいるわけじゃないぞ，そう教えなかったか？」

物事のありかた
粉川の幼少を教育した三笠は，戦いの中で学んだ「物事のあり方」を教えていた
それは一歩間違えれば多くの命を無くすという危険な世界にあって一方通行で物事を見てはイケナイという大切な教えだった
酔っぱらっていない水色の瞳が「小僧」の精神的成長を期待するように光る

「ある限りの問題を提示せよ。。。。って事だよね」

粉川も思い出したように閉じた手帳を開きなおした

「じゃ提示するよ。。。あまり多くはないけど」
「2週間で小僧，オマエの気がついたことも上げろよ」

甲板を照らす小さな照明の下，粉川は今までの中で見つかった「艦魂」の持つ問題と
自分の気がついた事を上げていく事にした
だが明確に問題とされているのは1つしかない

「魂の引き継ぎ」これは現代の護衛艦達にとって広く浅く広まっている問題

「では小僧が疑問に思ったことと。。。。艦魂が持っている疑問は？」
まだ三笠以外の艦魂に出会って日が浅い中から上げられるもの

「艦魂はどうやって産まれるのか?艦魂はなんで「女」ばかりなの

か?。。後，艦魂はなんで「姉妹」ばっかなのか?」
光る眼差しの前手帳を閉じた粉川は繰り返した
「この中でもやっぱり「魂の引き継ぎ」ってのが本論だと」
「それはいい，とりあえず後の３つの質問から行こう」
何かを避けるように手で話しを割る

「質問だが，艦魂は姉妹しかいない事を不思議と思っていたのはだれだ?小僧か?」
「うん。。。僕の見た限りでそう思ったよ。みんなそうでしょ」

「目の付け所はいいな」
一升瓶を持ったまま立ち上がった三笠は微かに見える月に髪を白く輝かせながら
「何故だと思う?小僧の見解は?」と振り返り聞いた

粉川は『たちかぜ』と出会ったことで艦齢というものを如実に感じていた
長くても３０年しか生きない彼女達はそのせいか年齢差があまりない
産まれたときにはすでに最低でも１０代前半の姿であるし，成長の速度も人の５分の１ぐらいしかないのなら
年齢差という「人」の仕組みは適応されない

「艦魂が姉妹ばかり。。という事は全体を見るに個体差はあるけど双子とか三つ子みたいな関係なのかなと」
「そうだな。。。なかなかいいぞ」

上甲板，主砲の前でヒラリと身を返した三笠は「次」と指示した

「艦魂が実際に女ばっかなのかは僕にはわからないよ」

「艦魂は女しかいない」
2つめの審問に三笠は素早く答えたが粉川には不足な返答だった
「なんで女しかいないの？」
「「人」に愛されるためだ」

分厚かった雲をわって現れた月に照らし出される三笠の髪はみるみる白銀の色に変わる
神秘の姿を纏った彼女の言葉に粉川は真面目な顔で聞き返した

「三笠。。。。大切な事なんでしょう，三笠と今を生きる艦魂達の「絆」が何故途絶えて。。「断絶」してしまったのかを探し出したいんでしょ。。。。茶化さないで」

頼まれたこと「今を生きる「艦魂」を見てきて欲しい」いずれ見られるようになると言いつつ母親の変わりをし続けた三笠の願いを忘れてはいなかった

何故か同じ日本を生きる艦魂でありながら「今」の日本を守る艦魂達を見ることの出来ない三笠
大日本帝国滅亡と共に取り残された日本最古の「戦船（いくさぶね）の魂」長い孤独を救うことが恩返しだと信じていた
きつく結んだ拳と本気の顔は，目の前で瞳を曇らせている三笠に念を押したし

「僕はそのために全力で協力するよ」

「。。。。わかっている。。。。。」

真剣なまなざしの粉川に。。。三笠は眼を伏せた

長く，この子供を手元に置いた
雨の日も晴れの日も学校が終われば自分の元に通った「人」に，三笠は躊躇いながら口を開いた

「長い話しになるぞ」
部屋に向かう足取りに粉川は広げた酒とつまみを包み従った

「大丈夫そのつもりで来てるから」
高く輝く星は雲の谷間に光りを届ける
月の下

「では艦魂が「何者か？」からいこう」

三笠は何かに踏ん切りを付けたように自室に粉川を導いた

第四十二話　名誉の刀（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～何色だ編～～～

とりあえず新章「艦魂編」スタート！！！
三笠様の絵はみてみんに掲載中ですからよろしかったらみてやってください！！！

さて
プラモに没頭しているヒボシです
あれは。。。一度買ってしまうと燃えますね！！！
特に書いてるキャラのプラモを中心に集めているのですが（つまり海自オンリー）
ヤスリがないのでネイルケアの磨き棒をつかったりして楽しんでます（藁）

ところで
比較尺の艦艇も欲しいと思って大和以外（藁）の艦をさがしていたのですが
（何故大和以外かというと。。。あの対空気銃を全部組み立てられる自信がないからです（爆死））

特に狙っているのは空母なのですが
（ペタンとしてて簡単そうだから）
ちょっと気になる事がありまして。。。。。
ウォータラインのシリーズで空母は結構数はでているのですが。。。
赤城とか加賀の船体カラーが緑色。。。。

灰色じゃない？

なんかどっかの量産型のような色になっているのですが。。。
帝国海軍初期の艦艇は緑色のペイントだったのでしょうか？
激しく疑問です
個人的にはどちらの色でもいいのですが。。。
気になったので写真を探してみたりしたのですが。。。基本モノクロの写真しかないのでｐｈｏｔｏｓｈｏｐなどを使って退色処理などをしてみたりしたのですが。。。（暇人（？））
どうも
薄い灰色か薄い「何色」にしかなりません
光合成の復元をしないとわからない感じです

逆に戦艦の方は間違いなくｎａｖｙでそれも初期の頃。。
新章で出た三笠様などは「黒い灰色」なのですが姉上の「敷島」様は白いんです。。。どういう事なのか？
あまり色にタイする規則はなかったのでしょうか？
ちなみに「朝日」様Ｂｒｉｔｉｓｈｎａｖｙで三笠様より明るいカラーです
「初瀬」様は。。。これまた不思議なのですが艦体自体は「三笠」様に準ずるカラーなのですが，艦橋構造物だけが白なんです?!!
何故!!!

知人いわく
何度も色を塗り替えているから写真だけでは判断出来ないという事らしいのですが。。。摩訶不思議です（藁）

そんなヒボシ初の帝国海軍艦艇として三景艦の厳島様を買いました

（爆）

友達はコアすぎてわからんと笑ってました

大砲１つに命とプライドかけちやった間違った戦艦「厳島様」。。。。

。かわいいと思うのになぁ

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょう

第四十三話　神話の国（前書き）

＜要注意事項＞
この小説における「艦魂」という存在は筆者である火星明楽が諸説とは別に創作したものです
ですので
原初正しい艦魂設定を愛する方には不快な部分が多々ありますのでご注意下さい
誤って読んでしまったとしても一切の責任はとれません
今章「艦魂編」で艦魂そのもの「正体」探る部分が出てきますが以降書かれる「艦魂」の設定は
私，火星明楽の個人史家としての研究の元に書かれております
故に，この設定は私個人の物であるため，他所で使うことを厳重に禁止します
（私の著作，権利とします）
理由としましては
個人レベルで調べられた「民俗学」を基本とした仮説で話しを構築しているため，本来あるべき民俗学や考古学の発展の妨げとなってはいけない事，不必要な誤訳，誤解を世に広めてはいけないと，考えているからであります
また，これから艦魂小説を書こうとされる方に無用な混乱をさせないための処置と理解してたくださいけして占有を目的としての禁止事項でない事をご理解ください

これはあくまでこの「艦魂物語」内での設定としての存在でありますから，事実とは一切の関わりはなく，実在の民俗学にも考古学にも一切関わりはありません
あくまでこの小説内における仮説に基づいた設定である事をご理解ください

また
設定の作成に関わった「民俗学」等々の資料に関するご質問にはお答えできません
それらを元に誤解，誤訳を増やすことを望んではいないからです
色々と堅苦しい注意書きとなりましたが
純然に物語として楽しんで頂ける事を心から願います

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～
筆者
火星明楽

第四十三話　神話の国

三笠の部屋
粉川がココに入るのは1年ぶり

三笠はプライベートを仕切って部屋には入れない，なんて事は絶対
にしなかった
粉川がまだ半ズボンのガキだった頃から
学校が終われば自分の所に通って来るようになり
部屋に入れるのは通例化した

記念艦三笠は一応三笠を保存する会事，財団が管理している
小学生のうちは「入場料」というものがかからないにしろ毎日ココ
にくる小学生を大人達がどんな目でみているのか？と考えれば必然
的に三笠は外ではなく部屋へ粉川を導かなくてはならなかったからだ

自分の下まで息を切らして走ってくる小僧の足音
船首に近づいた彼を艦魂の力によって部屋に移動させるそんな日々
が続いたものだったが。。。

なにせ
その力を使うのがひさしぶりだった三笠は，何度か粉川をそのまま
海に落としたりした事があったため
中学に上がった頃には夜の遅い時間に，粉川は自分でよじ登るとい
う方法に変えた

「光は止めて。。。コワイから」

自分を頼らず艦内に上がってくるようになった小僧からその事実を
聞かされた時に「老い」を感じたものだったが
決して
口が裂けてもその事はいわなかった
代わりに監視カメラの記録だけを改ざんした
今日もそうだ

「三笠はさ。。。長く生きてるじゃない？そういう風に長く生きる
と，後で産まれる艦魂に「お母さん」とかって呼ばれなかったの？」

前をあるく三笠は今は年に何回かしか帝国海軍の軍服を着ない
今日は至って軽装でフレアスカートに秋物のベージュのジャケット
まるで妹の後を追うような姿

両腕にいっぱいのビールを抱えた粉川は部屋に向かう艦内通路で些
少な疑問を投げかけた
三笠が前の大戦の時には既に艦齢としては長寿の域に入っていた事
を思い出したからだ
艦としての生涯が３０年と言うのなら１９００年の進水式で産まれ
た三笠は大東亜の太平洋を廻る争いの時には４０歳近くになってい
た事になるのだから
太平洋戦の時に産まれた「大和」や「武蔵」からしたらお母さん的
存在であってもおかしくないと思った

「小僧。。。。。」

梅ヶ枝を抱え前を歩いていた三笠の足が止まった

展示室の間を縫った場所に酒瓶を下ろした三笠は間接照明の下で怒りの顔を見せていた

「何度も言っている事が，わかっていないようだな？ああん？」

不機嫌を露わにした声
振り返った顔に浮かぶ怒りの口元
思い出したように体がすくんだ粉川だったが両腕に抱えたビールを落とす訳にもいかない
「待って！！」
「待たぬ！！」

ヒステリックというより凄みのある三笠の声
そのまま出された光沢で整えたネイルの指先が粉川の顔面をがっちりと掴まえた

「小僧。。。それじゃ何か？妾はそこらを歩く太ったおばさんにでも見えるのか？ああん？」
「ちょっ待って！！そうじゃなくって！！」

少年時代。。。粉川は虚弱な男の子だった
今でこそ身長１８０に近い大男になったが，三笠と初めて会ったときなどガリガリの牛蒡（ごぼう）のような体だった

それを鍛えたのが三笠であるのは言うまでもない
毎日毎晩自分の所に来る前に走らせた
当時公園のゴミ箱にあったスポーツ新聞の紙面を飾った「プロレス」を良い教材と粉川に教え込んだのも彼女だ
「妾に合いたかったら強くなれ！！」
自分に甘えるように近づく子供を叩いて鍛えた彼女は。。。。。も

ちろん格闘技マニアだ

「待って。。。マジで」

骨の髄までしみこんだ「スパルタ教育」を忘れたことはない
「許さん!!出でよフォン・フリッツ!!!」（注・１９７０年代有名なプロレスラー，得意技はアイアンクロー）
「待って!!エリック，ダメ!!!」

聞く耳持たぬ凶刃な手がめりめりと顔面を締め上げる
体こそ粉川の二回り以上小さな三笠だが，宿る力に衰えなどまったくない
むしろ年々上がっている気がするぐらいに強い
苦悶を浮かべ，汗を浮き出した粉川の顔に向かって三笠は怒鳴った

「言え!!妾はなんだって!!!」

軋む顔面
頭蓋に直接痛みが響く中，粉川は缶ビールを落として悶え苦しんでいる今，
声を出すのも難しいという顔でタップを試みるが聞き入れられる事などない

「言わんか!!!」

小さな女の子に顔面を引っ張られそのまま引きずられるように膝をついた粉川は叫んだ

「三笠様は１７歳!!!永遠の１７歳!」
「大きな声で!!!」

膝どころか上半身まで通路の下に着きそうになりながら
「スイマセンでした!!僕が間違ってました!!!三笠様は永遠の
17歳!!万歳!!!」

掴まれた指の圧力の跡から煙りが出るほどの痛み
必死の言葉にやっと手は顔面から離れた
言葉にならない苦痛に転げ回る粉川は

「艦魂。。。。暴力的だよぉ。。。」

見えた艦魂が三笠だけだった時はこんなもんか?と思っていたが,
今思えば『こんごう』もたいがいの暴力的だ。。。
合った初日にアトミックパンチをくらい佐世保に着いてからも。。。
。コミュニケーションは拳なのか?

涙目の粉川は思った
艦魂は凶暴な生き物だと

「なんか言ったか?次くだらない事ぬかしたら,アンディ・フグ降
ろすからな!!」

這い蹲った顔が拒否と揺れる
こんな硬い鉄板の船の上で踵落としなんかくらった日には骨が折れる
「スカートで踵落としは止めた方がと。。。」
「武道家は裸である時が一番強くなくてはならん!!!」

仁王立ちの三笠は酒瓶を持つと悶える粉川を残しスタスタと部屋に
向かった
しばしの冷却の後

このまま閉め出される訳にもいかない粉川も，ふらつく足取りで後を追った

艦長公室の奥，長官公務の部屋がそのまま三笠の部屋になっているとはいえ
普段見られる部屋とは違う

これもまた艦魂の力なのだろう『こんごう』達がグループルームを持っているのもその力だとすればわかりやすい
個人で持つ部屋の大きさとしてはかなり大きい。。。と言っても粉川は『こんごう』の自室しか見たことがないので比べる程の事はないのだが，彼女の部屋を基準に考えるのならばゆうに3倍以上の大きさであり
現代の艦艇には絶対に無いだろう木製のダイニングが部屋の真ん中を占めている

その隣
スターンウォークに出るドア
学生時代はココをよじ登って三笠の部屋に入った事を，まだ目眩のする頭をさすりながら粉川は思い出していた

すでにテーブルに座った三笠はぐい飲みで遠慮なく酒のピッチを上げている
「三笠。。。酔っぱらわないでね。。。話し続けるんだから」
遅れて着座した粉川は自分のビールをテーブルに並べると

「さあ。。。教えて「艦魂」って。。。どういう存在なの？」
時間は２２時

朝までの時間はまだあれど大事な事を聴く前に酔ってしまったら意味がない
手帳を前に粉川は改めて質問した

梅ヶ枝の瓶を横に立てたまま三笠は

「その前にオマエの初見を聞きたい。。。。オマエに「艦魂」は何か?というのを調べたさせた事があったハズだ?答えは出たか?」

艦魂は何者なのか?

実は粉川がこの質問をするのは今回が初めてできなかった
現代の艦魂を見ることの出来ない三笠
その事を聞かされた時以来，大戦以降を孤独に生きる彼女の姿が寂しく見えた
いつか。。。。今のこの国を守る艦魂達と合わせてあげたいと思った粉川は学生時代にこの質問をしていた

何者であるかがわからなければ「絆」を取り戻す方法もわからないと思ったからだ
だが
その時は三笠は「わからない」と答えていた

それから図書館の本を借りる日々が続く
一方で進路に向けて学業にも力を入れなくては成らなかった粉川は，三笠からの貸し出し願いを持って艦を行き来する日々だけが過ぎ
現代に至るまで答えは出ていなかった

「三笠。。。僕は色々と調べはしたけど，わからなかったよ」
粉川の返事はどこか引っかかりのあるもの
「何かに気がついた？そう言うことも無い？という事か？」
酒を注ぐ手の速度を弛め
真正面に座る粉川の目の奥を睨む，隠し事など出来ない相手
「正直に言うよ」
握っていたビールを離すと粉川は膝に手を置いて
「僕にとって三笠は母親代わりの人だよ。。。僕がそれを暴くようなことは出来ない」
答えを探すたびの途中粉川は，いわゆる神秘の存在である艦魂三笠が「何者」であるかがわかったら消えてしまうのでは？という恐れを持っていた
まだ少年だった頃失ってしまった母の事が重なって
学業に打ち込むと言う口実の元，答えを曖昧にしていのは粉川のほうでもあった
「フン。。。。くだらぬところで男はロマンチストだな」
そういう事実をも見抜いた目は笑って言った
「それがわかったら妾が消えてしまうとでも思ったのか？小僧？」
泳ぐ目
いつでも三笠は心を見透かす
薄暗いランプの下それ以上相手を責める事はしなかった彼女は飲みかけの一杯をグイとやると

「という事は妾の持論だけが全てと言うことになるな」
そういうと手帳に書かれた疑問を読み上げた

何故，艦魂は女なのか？
何故，艦魂は産まれるのか？
何故，艦魂は姉妹ばかりなのか？

「艦魂が何者であるかが，わかったとして根本的な「断絶」というものを解決する答えになるかはわからない。。。。それでも知る必要があるか？」

三笠は艦魂は何という質問に昔「知らない」と答えてはいたが，粉川は知っていると考えていた

「原因を見つけるためにはどんな些末な事でも提示する。。。。艦魂自体の存在に何らかの問題があるとするなら起源を知る事は大切だと思うよ」

まじめな目線
性根を曲げることなくまっすぐに育った「人」を好ましいと三笠は片口で笑うと

「前序の質問の答えは，全部「存在の起源」に起因するものだ」
そこまで言うともう一度聞いた
「小僧「艦魂」を調べなかった。。。だが，調べなかったとはいえ「何か」という考えはあるだろう。。。言ってみろ」

話し合い
疑問に対する質疑により，より正確な答えを導き出す方法
粉川も一口のビールを喉に注ぎ込むと思いをただして答えた

「物に追随する霊体を総じて「九十九神（つくもがみ）」というところから。。。。
その一種では？」
「Fだな。。それではテストには受からんぞ」

頬こそ赤く蒸気しているが三笠の水色の瞳に酔いはない
「九十九の神であるというのならば，小僧オマエは「車」の魂を見たことがあるか？「飛行機」の魂は？「鉄道」の魂も見たことがあるのか？」
「いや。。。いずれ見えるようになるのかも。。。」

三笠は酒で乾いた唇を舌で舐めて

「そもそも九十九の神は１００年の月光を浴びなければ「悪霊」としてしか物に着くことが出来ない存在だし，妾達，艦魂は。。。。小僧の言うように長くても３０年しか生きないのだぞ」

艦魂事，戦う戦船で現在で１００年を生きている者は「三笠」をはじめアメリカの「コンスティチューション」イギリスの「ｖｉｃｔｏｒｙ」しかいない
１００年を得ないと艦魂にならないというのなら『こんごう』達の存在は何かわからない

作り手の情念が宿る
次はそれを説明したが，三笠は笑いながら。。。それならば艦魂は作った人間の別人格という事になると返した
それに

もし作り手の人格が遺伝した形として艦魂になるのなら「女」である意味がわからない

また
生前に無念を残した人の死がそこに宿るというものも的を得ていない
一律「女」しかいないとされる艦魂
念が宿る事が原因ならば，むしろ「男」でも良いはずだが
三笠の弁では艦魂は女しかいないのだから
どう考えていいのかわからない

自分の持ってきた持論を看破された粉川は頭を抱えながら乾いた喉に酒を流し込んだ

「つまり九十九神ではないという事？」
「そんなものではない」

困る小僧の顔を見たまま三笠はスターンウォークの窓を見つめた
通常なら磨りガラスの入ったドアには，透明なガラスが入っており
海の上に浮かぶ月を見ることが出来た
繊細な指ときれいに整えられたネイルの輝きがガラスをなぞる

「艦魂の正体を探った者は，前の大戦の時にも何人かいた」
粉川は姿勢をただした

「じゃ大戦中に艦魂が見えた「人」は，いたって事？」
「見えたかどうかは知らぬが。。。。存在に気がついていたヤツはいたな」

三笠は指折り数えながら名前を挙げていった
南方熊楠，柳田圀男，秋山真之，折口信夫。。。。。東郷平八郎

学業は優秀でそれなりに調べ物にも堪能ではあったがあげられた名前の半分しか知った人がいなかった
むしろ軍属として東郷平八郎と秋山真之はわかった

「海軍の士官から水兵まで。。。。見えるヤツ感じるヤツ。。。色々いた」

振り返り挙げた人物がわかるか?と眼で聞く
「半分は。。。」
情けない返答

「勉強不足だな，この中で艦魂が何か?という研究に没頭した者は4人，だが途中で脱線した者も多い。。南方が最初に脱線な，これの後を継いだのが柳田圀男と折口信夫だったが，柳田は「山」の事を書いたために脱線。。。折口は詰まるところ母性偏愛のはけ口としての研究の一環としてしかみていなかったから脱線」
「秋山参謀は調べた?」

人差し指をたてた三笠は粉川がよく知る海軍参謀の経歴に笑った

「秋山は。。。。。軍人には不向きな人種だった。頭が良すぎて破滅したタイプだが，彼奴は妾を見れたハズだ」
「じゃ。。。何かも知っていた?」

三笠は首をふった
少しばかり悲しい眼差し

「彼奴は。。。。妾が見えてしまった事で壊れた。。。それだけだ」
「壊れた。。。」

杯に口をつけたまま三笠は

「前に話しただろ。。日本海海戦の話を。。。あの時に壊れた」
粉川は思い出した学生の時，三笠に聞いた日露戦争と日本海海戦の話。。。
頷きながら

「結局誰もわからなかった，そういうこと」
話の終局が不明で終わりそうな雲行きに顔を曇らせた粉川の前，三笠はうれしそうに

「スケベ平八郎だけが，艦魂は何かを直感で理解していた」

粉川は顔をゆがめた
三笠の話の中では，いつもそうなのだが東郷平八郎はスケベと決まっている
やたら女にだらしなかったという話しは耳が痛くなるほどに聞いていたが
少年時代は「元帥」として崇敬の念もあった人を貶められた気分にもよくなったものだった
そんな小僧の顔を気ににもせず三笠は続けた

「それが妾が己の起源を確信した出来事であり。。。ココは神話の国だという事を知らしめた事につながった」

そう言うと手の中に泡沫の光を走らせた
紫の輝きは月明かりを受け細かな光の泡は宝石の滝のようにテーブ

ルに落ちては消える中
手の中に現れたのは焦げ茶色の分厚い本

三笠は手の中に現した本を粉川に向かって投げた
投げたといってもスローな艦魂の力でゆっくりと流れるように前に
届けられる本を粉川は受け取ると背表紙にある本の題名を読んだ

「日本書紀　巻第七」

「これに答えがあるの？」

男の粉川の手の中にあっても重い書物
日本国成立3桁代の頃それ以前の日本史を編纂した古文書

「少なくとも日本の艦魂についてはこれで答えを出すことができるが，世界を見ても同じような「神話」によって成り立っていると思われる」
「世界規模では当てはまらないなら三笠はイギリス出身だから答えには成り得ないんじゃないの？」

渡された本を丁寧にテーブルに置いて些末な疑問を打ち消すための質問を繰り返した
「とりあえず読め。。。。「船」の歴史はどれも大して変わらないから，そこはさして問題ではない」

そう言うと本に挟まれている羽根のしおりを指差した
粉川は分厚い本の中程を開いた

「日本武尊（やまとたけるのみこと）。。。」
「そうだ。。そこから先を声に出して読んでみてくれ」

古語の混ざる文献

粉川は月明かりの中で指された文章を読み上げた

乃海中に至りて，暴風忽に起こりて，王船漂蕩ひて，え渡らず。
時に王に従ひまつる妾有り。
王に啓して曰さく，
「今風起き（いまかぜふき）浪沁して，王船沈まぬとす。是　必に
海神の心なり願わくは卑しき妾が身を，王の命に贖えて海に入らむ」
とまうす。
言訖りて，乃ち瀾を披けて入りぬ。
暴風，即ち止みぬ。

「これが答え?」

たどたどしいながらも古の言い回しである歴史書を読み上げた粉川には実際内容の全てを理解する事が出来なかった

「よくわからないのだけど」

三笠はカラになった器に酒を注ぎながら小さな溜息をついた

「その中にある「王に従ひまつる妾」。。。。。。それが艦魂だ」

粉川は自分の読んだ箇所をもう一度確認すると

「王に仕える女?」

「この日本武尊とは「国」を表している。。。なにせ彼は倭武天皇とされる者であり，我らは国に仕える后であったという事だ」

最初のビールを飲み干した粉川は古書とにらめっこをしながら

「その皇后は海に身投げして。。。」
「良いところに気がついたな」

立ち上がった三笠は月明かりの下に向かうと

「国家に迫る「海神（わだつみ）の暴威とは「外世界からの圧力」とし。。その危機に際して皇后は身を挺して「国」を救う。。。それ故，我らも誕生とともにし「入水」する」

「進水式で生まれる。。。。。そういう事?」
「そうだ。。。。国のために身を挺し入水し，女神となって祭られる者。。。。それが艦魂だ」

粉川は首を振った納得できる，できない?は別としても今ひとつ要領を得ない答えに顔を曇らせる

「死からの再生により女神になる」
「長い年月の中でそれは忘れられていったが。。。。ある時に思い出される事になる」

ガラス窓から差し込むつきの光の下
ブルネットに紫の深みを持った髪が白く銀色の輝きを増しながら外を眺める

少しは頭の回転を柔らか思考に向けたい。。。新しいビールのプルを開けた粉川は泡立つ酒に口をつけて話に耳を傾けた

大きく酒をあおった粉川は質問した
「ということは元は皇族でそれが霊体となり女神となったものが艦

魂という事?それにしても。。。。こは「神話」であって実話はないのでしょ?」

「神話は。。。。きれい事の世界のように書かれていて，創作だなどとぬかす者も多いがこれだけの文章を創作するのは難しい，皇室の出生を語る部分が出る以上，都合をあわせた改ざんはあっても全てが夢物語ではない。」

つま先から静かに進む足
月に輝く髪は白く色を変える
相変わらず硬い頭で物事を捉えようとしている小僧の頭を三笠は叩いた

「我らは進水式の時，神のくびきから引き離されて産まれる。これが例の入水にあたるのだが。。。この儀式は神話に基づいて行われている。覚えがないか?」
粉川はやっと自分の知っている事が出てきて思い出したように顔を上げた

「銀の斧。。。」

「そうだ三貴子(みはしらうずのみこ)文様を入れし魔除けの銀の斧，（右面に天照大神(あまてらすおおみかみ)，月読(つくよみ)，素戔嗚尊(すさのおのみこと)，左面に四天王を現す文様あり）により海神(わだつみ)の暴威を納めるため，国のために入水し皇御孫命の為に蘇る。。。。海を行く者達を守るために」

進水式の時に精霊として誕生する
それは「一度の死」という世界から神の国の者に変わるための儀式という事になる

壮大過ぎる話に粉川は拍子抜けした顔になったがその頬を三笠は勢いよく張り倒した

「つまり我らは神世の時代より国に寄り添う女神という事だ」
なぐられた頬を抑えながら反論した

「でもそれじゃ世界の方はどういう事なの？」
「だから言ったであろう。。。ココは神話の国だと」
三笠は杯にもう一度酒を注ぐと

「世界にも「水」によって魂は分かたれ天神の仲間入りをする話しは五万とある。。。ただ正確な国の歴史として記録が残っているのは「日の本」だけなのだ」

人と神の入り乱れる世界を克明に「国家の歴史書」として編纂できた国は日本しかない
万世一系のなせる最大の事業であったともいえる

他の国にも「船」による存命や死からの復活を描くものはあるが抽象的だし
国としてそれを奉じたものは一つも残っていないのだ

逆に外殻化して残った物は多く存在していた
変形した形の顕著なものがローマカトリックなどが実戦する「バプテスマ」などがそうであると三笠は説明した

バプテスマとは訳して「洗礼」である
それまで現世の中に生きた「原罪」を水の中に身を沈める事によって洗い流すという意味がある
同じ固有の物体が水という世界の境界をまたぐことによって昇華さ

れるプロセスは実によく似ているが
洗礼者はＪｏｈａｎｎｅｓという「人」であり「神との御霊」はそこにはないのだ。。。常に「人」と「人」の間で行われる儀式化したものでしかない

三笠は器に満たした酒に映る月をみながら

「国，（皇子）を守るために海に入り，そして海を行く物の守り神となった女。。。それが艦魂だ。それ故に我らは「女」しかおらず，国に寄り添う海の守りとして生まれる」

「それが艦魂の正体。。。。つまり女神の「末裔」という事？」

写しの月に伏せた眼差しを向けたままの三笠は少しの沈黙を守った

「。。。。そういう事かな」

「東郷元帥はその事を知っていた？」
「知るわけがない。。。だが彼奴はきっとそうだと思っていた。事実，彼奴は我らを祭る社の再建を手伝っている」

三笠は窓から向こうを指差した
観音崎を目指す指の先
すっかり暗くなった海の向こう，東京湾の入り口にある祠，走水の社

「その女神の名前は」

背中を向けたままの三笠の顔が今何を思っているかは粉川には見え

なかった

「名か。。。。。」

躊躇いか，少しの沈黙

「我らの名は「弟橘媛（おとたちばなひめ）」である」

第四十三話　神話の国（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～否定でなく編～～～

今回
艦魂とは何者かという「一部」を公開しました
大部分の引用を「民俗学」と「考古学」「古文」などから後はヒボシの頭脳にある妄想をミックスしてつくったものであるため
実際のものとは遠く「学術的価値」は一切ありません
また
本編上にある日本書紀の抜粋は
物語の展開のためさらに一行だけ抜き取りをしています
その箇所は「弟橘媛」の名前が出てくるところなので抜かせて頂きました
それ以外は「訳版の日本書紀」をそのまま（）の中をヒボシが訳して載せてあります

でもって
今回
三笠様が「車や飛行機，電車に魂は無い」というニュアンスの言葉を発しておられますが。。。。
ヒボシはこの艦魂のジャンルで登場する「飛魂」も「土魂」も「車魂」も個人的には一切否定しておりません
むしろ！！
柔らかな発想に感服するばかりなのですが。。。。

ココでは

この艦魂物語においては「否定」させて頂きます
じゃないと
本編の理由にまとまりがつかなくなってしまうので

ちなみに
今回「一部」と書いたのは。。。。
実は設定に関わる事もあるので多くは言えませんが
三笠様の問題でもあるという事をご理解ください

大仰なお題目をあげたのに
たいした事じゃなかったと思われた方
ヒボシはその程度に思ってくだされればホッとしてます。。。根掘り葉掘り聞かれても答えられない事が多いのでｗｗｗ

後，へんに現実的な部分を今回にかぎりだいぶんと省きました
これによって民俗学を曲解される事を恐れたからです
でも
今回ココに上がった事を元に
物語はさらに進んでいきますから！！

心広くしてこれからもよろしくお願いいたします！！！

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～～

第四十四話　妻の夢（前書き）

夜勤～～夜勤～～～
しぬるぅぅぅ

第四十四話　妻の夢

曇り空の夜
靄に隠された月の光の下
「神話」という壮大な話しに粉川は頭を抱えていた

「艦魂」とは？

始めた三笠を見たとき実態の無い「霊」だ，とおもったわけではなかった
海からの救出に手を伸ばした先にあった三笠の実態である「体」
そう言う要素を鑑みれば当然，ただの幽霊であるという事はないとは思っていた

まだ子供だった頃の出会いによって三笠は当たり前に「艦」に住んでいる人という風に思っていた
だから
あえて何か？という事を考える事の方が難しかった
だが。。。。

年を経て
彼女の口からもたらされる話しを少しずつ聞くに。。。
船の魂である彼女が可哀想だと思えるようになった
粉川は。。。。自分が成長して子供から大人に成って行く課程の中でも，変わらない。。。変われない三笠の姿が小さく見えた

「あの戦争で全てを失ってしまった」

かつて三笠はそう言った
それでも
自分に対して泣き言のように言わない彼女の姿に少しでも力になりたいと思いつつ
遠巻きにしてきた「艦魂」は何者という真理に目をつむってきたもし三笠がいなくなってしまったらという思いが年をとればとる程に大きくなっていたからだ

自分の前で片手で頭を抑えた粉川に三笠は背中を向けたまま笑うように聞いた

「大きすぎる話しに心がひっくりかえったか？」

「びっくりはした。。。」
月明かりの仄かな光の下に見える背中に
素直な驚きを伝えた
「神話の時代から生き続ける魂」に，だが疑問がないわけでもないココで話しが終わってしまっていいわけでもない
正体というものがわかった今に一区切りをつけるようにビールを飲み干す

「それにしたって護衛艦だけに「魂」は，いるわけではないよね。。。海神（わだつみ）の暴威というものが「外敵」だとするならば，漁船などにいる魂の意味は？」

問答は答えを見つけるまで
自分に反する答えを納得のいく形に持って行くためにも続ける必要が絶対にある

新しいビールのプルをあけながら子供の時にように，黙ってしまう事のない質問を続けた

「小僧。。。オマエはまだ艦魂という者がわかっていないな」
「だからこうして聞いているんだけど」

観音崎を見つめたままだった三笠は振り返り，梅ヶ枝のおかわりを注ぎ足す

「艦魂などという生き物は「船の魂」という者の歴史においていは，たかだか１５０年程度のものだ。。。そもそも我らは「船魂（ふなだまりさま）」という者だ」
「船魂。。。。」
艦魂
「艦」と呼ばれる鉄の船が真っ向戦い合ったという時代を考えればたしかに「船」という歴史を見ても若輩者であるのは明白

三笠は対面の席に座ると月の灯りから遠ざかり銀色に輝いていた髪を深い紫を帯びた色に戻して，頭に手を当て

「海神の暴威というものの存在に含まれる意味は広い。。。もっとも多い民草にとっての暴威となるものは「天災」であろう」

根元としての魂の理論

海を守る女神となった者達の役割というものは基本「生活の基盤」を守るというもの
テーブルに指を滑らせながら三笠は。。。
粉川に対して珍しいほどに饒舌に語った

「海が荒れれは最初の飯の種を失うのは民草だ，だが海を渡る事によって広く生活の基盤を得る事は出来る。。。。太古の世にとって，島国日本にとって「船」は自分たちの生きるための術でもある。。。そういう生きるべき「人」に寄り添った魂として「国」という皇御孫命（すめらみこと）の元，共に生きた者なのだから。。。最初の出会いは別としても広義には漁船の魂である事のほうが正しい「船魂」のありかたとも言える」

「じゃあ。。。護衛艦に産まれたりするのは。。。「不幸」なの？」

粉川は『しらね』の話しを思い出した
祭りの町で彼女は少しの本音を漏らしていた
「愛されない護衛艦」である自分を。。。。嫌い，護衛艦に産まれたことを辛いことと捉えていた『しらね』

「こんな大仰な船じゃなくってよかったのに。。。小さな船の魂で良かったのに」
同時に「軍艦であるのなら。。。魂は男であっても良かった」と彼女は言っていた事を聞いた

「それが不幸であるかは妄にはわからない」
素っ気ない返答
むしろ。。。そんな事を言う艦魂が居るという事に苛立ちを覚えているという顔にも見える
厳しくなった目元に十分に現れる嫌悪
細くしなやかな手は説明を続けた

「だが。。。神話の時代を具現化できる「船」は「戦艦」しかいない」

この場合「護衛艦」達であると三笠は言うと

「かつての海神の暴威というものは国に，またそこに住む者達に対する脅威という存在だった。漁船が守る者は，主である漁師であり互いを生活の基盤として必要とする者同士だが。。。「艦魂」は違う，主は国であり「共に国民を守る側」の者であるからだ」

言葉なく自分を見つめる粉川の前，三笠はもう一度立ち上がり月の光の下に立った

「国家という日本武尊と共に戦う者，弟橘媛という海を行く女神として」

三笠の目の中にある想いとそれは合致していたが，今の粉川にはそれが何かを見切る事はできていなかった

「じゃあ護衛艦の魂が「女」である事は当たり前と言うことだね」
寄り添う者として相手が日本武尊という「男」であるのなら「女」である事も納得せざる得ないという言葉に
立ち上がったままの三笠は自分の腹を指差した

「そもそも女は「船」である，魂のヒトガタを宿す器を持つ船だ」

胎は命の海に浮かぶ魂を育む船である

粉川はココまでの事を手帳に要約して書き取った
初めて知る出来事を忘れてしまわないように。。。もちろんそんな事をしなくても忘れようのない「正体」ではあったが

「なんで現代の艦魂達は自分たちの起源がワカラナイのかな。。。これも断絶のためなの？」

書き物をしながら粉川は沈黙の中で酒を煽る三笠に聞いた
「普通はそんな事が悩みなったりはしない。。。異常な事態が起こっている時に必要となるだけだ」
「異常な事態？」

要約を書き留めた粉川は顔をあげた
目の前の三笠の目は「戦争」を語る時の悲しそうな色を写していた

「戦争という異常な事態がおこれば「生死」は常に背中合わせだ，生きている理由や死ぬ理由を知りたくなれば，何故こんな時代に「戦う船の魂」として産まれてしまったのか？という事を考えたくもなるというものだ」

それは理解できた
粉川も頷きながら思った
戦争は殺伐とした世界だ
もし漁船に産まれているのならば。。。戦いという全面にでる事はない。。。特殊な艦である彼女達はこの異常事態ために全面に立って戦う事になる。。。。
そういう時に自分たちの生きた，産まれた理由を求めたくなるのは。。。正しいと

「じゃあ今の護衛艦達は」
「それはオマエ達の問題じゃないのか？」
三笠の目は今までの悲しい目つきから一転して輝いていた
イタズラっぽい笑みとともに目の前に座る小僧の鼻に指を置くと

「断絶の責任はオマエ達にあるのじゃないのか？」
「僕たち。。。。？」

挑戦的でいつものペースに戻った三笠はテーブルの周りを回るように歩きながら

「「人」の作る組織という物のあり方に妾達が関与する事はないが。。。オマエ達は本当にこの国を守りたいのか？」

心に刺さる言葉

「小僧。。。オマエは妾には言わなかったが「例の」工作船事件の事。。妾は知っているぞ。。。何故自国の海を侵す者に処罰を与えない？何に怯えている？」

粉川は三笠がかつて日本の上空を不法に侵犯したＭｉＧの事で激怒したという話しを覚えていた

外の情報は出来るだけ正直に彼女　には話していたが，「イージス艦機密漏洩事件」の件で既に立ち上るほどの怒りを露わにしていた姿に立て続けに起こった不祥事である「不審船事件」の事は言えなかったのだ

「あれは。。。。」

言い訳が通用する相手ではない

曰く，海神の脅威であるロシアという大帝国だった時に真っ向戦った彼女にそれが通じるわけがない

いくら容姿が１７歳の少女だったとしても，持つ英知には１００年の蓄積がある三笠に嘘は通じない

拳骨でも飛ぶのかと顔をしかめながらも覚悟を決めた粉川の前

「そういう弱腰な態度が「断絶」を助長しているんじゃないのか？」

深みのある紫を忍ばせた黒髪をかき上げながら

細めた目は現代の国のあり方にうんざりしていると告げた

三笠と現代を生きる艦魂との溝
自国を侵す者に対して断固とした態度を示せた「大日本帝国」
自国を侵す者に対して。。。。。生ぬるい手順しか持たない「日本国」との差は歴然だった
それが原因ではないのか?と聞かれれば，そうであるのかもしれないとしか言えない情けのない現状

「生きている意味が違い過ぎる。妾と今の艦魂達では」

「それが溝で。。。三笠には見えない事の原因なのかな。。。」
もし
それが原因なら三笠が現代の艦魂に合うことは。。。。まだしばらく出来そうにない事になる
「専守防衛」という言葉のくくりと
押し付けられた平和の象徴である憲法第九条という理想論の中では，現代を生きる艦魂達と三笠を結ぶラインを見つけるのは難しい事だと粉川は本気で思った
必死に頭を回す彼の前

「小僧。。。なんで今更そんな事を始めた?」

額に手をあて自分の考えを纏めようとしている粉川に三笠は聞いた
何で?自分と現代の艦魂の絆を取り戻そうとしているのか?と

「アイツが。。。死んだときに気がついた。。。。」

不意の質問に一瞬表情を強張らせた粉川はビールの缶を自分から遠ざけた
夜の部屋の中月明かりと霞む星の照明の下，問われた質問に重い口を開いた
手元の手帳の中。。。。最後のページのクリア・ファイルのページにある写真
家族の写る姿

笑顔の粉川と子供と。。。妻
手元にこぼれる涙はあの日の出来事に粉川を連れて行った

かつて，海の防人として働いた父の不在に母は死んでしまった
父とは結局1ヶ月も遅れてその死を知り。。。。家族の会話は無くなってしまった
その頃，粉川には三笠という母がいたが。。だから父を許すという事のできない複雑な心を抱えたままで少年時代を過ごした
そのままならおそらくねじ曲がってしまったであろう自分の性根を下手な優しさで慰める事をせず，毎日自分を叩いて鍛えた三笠にはどれだけ感謝してもたりないと今でも本気で思っている

そんな彼は。。。父との溝を作ったまま「自衛官」になるために防大への道を進む

父の生き方との摺り合わせは。。言葉を無くしてしまった家族として。。。なかなか進展を見ることはなかったが
国を守るという職務に忠実に働く背中は十分に色々な事を教えてくれていた

真っ直ぐに「海自」の仕事に入っていったが。。。。

愛する女(ひと)が出来たときに，父とは違う生き方を選んだ
彼女がそれを強く望み粉川もそれに応えた
結婚を気に陸に上がった事
妻の夢に自分の道を添わせた

父と同じ仕事を選んだことに後悔はなかったが
父のように自分不在の日が家庭にある事を恐れていた粉川にとって，
妻の我が儘は聞いても良いものだった

彼女は本当に満面の笑みで喜んでくれた。。。。
海の男だった粉川が「海」よりも自分を選んで近くにいる事を誓ってくれた事に
その笑顔で
自分の選択は正しかったと信じられた
すぐに子供にも恵まれ
なにもかもが順調に進んでいた

国を守る職務をしながらでも十分に家庭を守って行けると信じられた

その日，粉川は情報局の仕事で大湊まで出港していた
海自の艦に乗っていた時に比べれば格段に日数の少ない出張だった。。。。。
艦艇の情報を打ち込み表を見ながら
休憩室でくつろいでいた所に電話が入った

「奥さんが倒れたそうです」

真っ白になった
自分の目の前で帰りの支度をしましょうと促す隊員の前

まだ現地に着いたばかりで手つかずになっている仕事を交互に見た
「まだ。。。仕事が残って。。。。。」
投げ出して帰る事は出来なかった

喉を絞める苦痛の中，手配された帰りの便の時間まで懸命に仕事を続けた
どうして。。。すぐに動けなかったのか。。。。
そこには父の背中があった

母の死の日。。。それが出来たのなら。。。。。あの日の父も戻ってきたハズ

自分の選んだ道を信じた。。。ココは陸続きの国。。。
海をまたぐわけじゃない。。。。

「残念ながら」

白い壁に囲まれた清潔な個室に，物言わぬ姿となった最愛の人はいた
色の白い人だった
その頬はさらに白く細くなってしまったように見えた
髪と顔に触れる
いつの間にこんなにも張りのない。。。痩せた髪になってしまっていたのか。。。
手の中をこぼれる櫛（髪）に涙を止める事は出来なかった

温かな日差しのように
柔らかな眼差しで。。。自分の仕事の背中を押してくれていた人。。。
どこで間違ってしまった
何故。。彼女が苦しんでいた事に気が付けなかった

妻は心臓を病んでいた事を隠していた
それは
一生の我が儘で，海の男を丘に上げた自分への戒めとしていたようにもみえた
月の内
ほんの少しの出張の日に愛する人は子供を残して命を失ってしまった

そして
それは同時に家族を失う日となった
彼女の両親は娘が体の弱い人だという事を良く知っていた
死んだ彼女の前で粉川は義理の父からの殴打を受けた

「オマエなんかに娘をやるべきじゃなかった」

元々結婚は反対されていた
自衛官という職務は国民の理解とほど遠い仕事
妻の体の事をもっと理解していたのなら。。。。イヤ。。。。それでも常に付き添い続ける事などできる仕事ではなかった

目の前，連れて行かれる子供
母の亡骸に縋りついていた子供を，父親は引き剥がすように抱き上げて

「子供は君にはやらん。。。あの娘の残してくれた宝は私達が育てる」

病院から戻った惨めな自分の姿に，防衛庁の仲間である小柳が声を

かけた
「お父さんにあって。。。体やすめて。。。」
精一杯の励ましだったがそれを受け入れる事はできなかった

自分の父に
どの面さげて妻を失ってしまった事を言えただろうか。。。
肩に乗った小柳の手を払った

「ほっといてくれ」

電話もできない
母を失ったとき。。。自分は父を責めた。。。。どんな言葉で父に
それを告げたらいい
考えがまとまる事などなかった
本庁のデスクに自分のカバンを投げだしたまま一人宛もなく歩いた

全てを失ってしまった粉川が頼れる所は三笠の所しかなかった

雨の続く横須賀，三笠公園に歩いてきた粉川を彼女は無言で迎え入れた
ボロボロになった姿に三笠はフルスイングで拳をぶつけると

「泣け。。。。心に溜まったものを声を出して吐き出せ」とそれだけを言った

何も告げなくても三笠にはお見通し
母を失った日のように粉川は声をあげて泣いた

「子供には未だに会わせて貰えないのか？」

手帳に目を落とした粉川に三笠は聞いた

「全然会わせて貰えないよ。。。しっかりした国家公務員なんだから権利はあるんだけどね」

法の示すところの親と子の関係で言えば「親権」は粉川にあってしかりだっが
彼女の両親は知らぬ存ぜぬ子供を引き渡す事はしなかった
そして
粉川も自分が今の職務のままで我が子を育て上げるという自信は。。。まだ持てなかった

「手紙は書いてるんだけど。。。。捨てられちゃってるんだろうね」

月に何枚かの手紙を送る
妻がこの世を去った時，我が子はまだ3歳だった。。。あれから４年は経っている
自分の子供の頃に似て牛蒡(ごぼう)みたいな子だったが
負けん気は強かったと覚えていた
きっと背丈も伸び。。。。でも自分の事を忘れてしまったのかもしれない。

「三笠に会わせたかった。。。。。」

「どうせ小僧そっくりのクソガキだ！艦を汚されてはたまらんわ！」

いつの間にか対面に座った彼女は最後の梅ヶ枝を開けながら悪口を飛ばした
「酷いな！！僕は三笠の艦内は掃除して回ったくちだよ。。自分で色々と汚してたくせに！」
手帳を閉じて
顔にいつもの笑みを浮かべて軽口を叩いた

「でもね。。。だから三笠の持つ辛さがほんの少しだけわかったんだ」

妻を失い，子供までもを自分の前から奪われた時どん底だった自分を殴って泣かせた三笠だが
その昔，彼女も大戦で多くの姉妹を失っていた事を思い出した
昔話をしても涙は決して見せない彼女だったが，一度だけ泣いていた所を見てしまった事があった

1年の内，何日か三笠は粉川が自分の所に来る事を禁じていた

8月15日の夜
昼間は帝国海軍の制服を着て部屋にて黙祷を捧げているそうだが
夜の空の下に現れた三笠は泣いていた
軍服に「元帥」のローブを纏った雄々しき姿の三笠だったが，あの日に見た彼女の姿は悲しいほど小さかった
水色の瞳にいっぱいに溜まった涙が意味するもの。。。。自分より年若かった艦魂の妹達を死地に追いやったと泣く姿

「妾を恨め。。。。」

自分だけが生き残ってしまったと
何度も星に向かって「恨め」と泣く三笠の姿を見たとき

決して「許してくれ」と言わない。。。言えない彼女が悲しかった

そして

現在。。。。この国を守る護衛艦を見ることのできない彼女の事を思い出したとき。。。

胸が締め付けられた

もちろんその事は言えない

言ったらとんでもない体罰を受けそうだから心の中に秘めたる想いにしてある

「自分勝手な言い分だとは思うんだ。。。でもね生きていて会おうと思えば会える息子でしょ。。長く一人でいる三笠を思ったら。。。何とかしたいって思うんだよ。。。僕の人生の大事な所をいつも助けてくれた三笠に。。。何かしてあげたいって」

真面目に心情を語った粉川の顔面に日本書紀がぶつかった

「生意気な事をぬかすな!!」

分厚い背表紙は勢いよく顔面の真ん中にアタリ，粉川はそのままイスから転げ落ちた

「痛いよぉぉ。。。」

鼻血こそ出てはいないが背表紙の角の跡が赤く残る顔のをさする

粉川はそんなふうに言いながらもいつもの2人に戻った事に笑った

「そんなに照れないでよ!!僕も今まで以上に頑張るからさ!!」

三笠の照れ隠しが暴力的である事は永井付き合いで十分にわかっている

「照れてなどおらん！！」
酒瓶をドンと置きながら
真っ赤な顔は怒鳴るが粉川は笑みを浮かべたまま
へこたれることなくイスに座る
「体にはちょっとばかし厳しいコミニケーションだけど三笠が優しい人だって事は十分わかってるから。。僕はさ」
「小僧ぉぉ！！」
さらに赤くなった顔に粉川は笑ったが

「そういえば小僧。。。オマエ，話しの最初にとんでもない事を言ってたな。。。」

酒瓶を自分の後ろに置いた三笠は赤くなった顔のまのま指差して

「母親代わり。。。とかぬかしたよな？」
一瞬で顔を固まる粉川
三笠との付き合いは長く，子供の頃から近くにはいたが
彼女は自分の事を「お母さん」と呼ぶことを絶対に許さなかった
理由は

「妾はそんな歳ではない」に尽きるのだが

「何か？妾はそこらを歩いてる子持ちシシャモにでも見える言うのか？ああん」
「イヤ。。。アレは話しを進める上で必要だった言葉であって。。深い意味は。。。」

後ずさる体
この展開は。。。。。

「待って。。。。」
「待たぬ。。。。」

光る目が攻撃の合図となって飛びかかる
「出でよ!!!カール・ゴッチ!!!」（プロレスの神様，アントニオ猪木の師匠）
「ゴッチダメ!!!」

背中を見せて逃げようとする腰に三笠の手が回り
粉川の巨体はそのまま円弧を描くように軽く引き上げられると
「ジャーマン・スープレクッス・ホールド」がキレイに決まった

脳天から鉄板の床に落ちた粉川が立ち上がれない状態のまま
「出でよノゲイラ!!!」
「死ぬ!!!死んじゃう!!!」

しかし攻撃から逃れる事は出来なかった
リオの沈まぬ太陽の絞め技は，がっちり間接を押さえ込んだトライアングル・チョークのまま

「言え!!!妾はなんだ!!!」
「無理。。。体が割れるぁぅぅぁぅ」
「言え!!!」

粉川はタップしながら叫んだ

「スイマセンでした!!!僕が間違ってました!!!三笠様は１７歳!!!純粋無垢な１７歳!!!」

夜の更けた記念艦三笠の中は熱い格闘技の血潮と，涙にむせびなが

ら永遠の１７歳を連呼する声が木霊していた

朝方，長官公室のテーブル近くに悶絶共に寝ていた粉川はカバンとジャケット持って港に向かって戻っていた
「またお酒買ってくるから!!」と

大きくなった小僧の姿に少しばかり柔らかい表情を見せた三笠だったが
甲板に出て姿が見えなくなるところまで見送ったところで
自分の後ろの気配に声をかけた

「ホーク大将，こんな時間にどうした?」

そこには身長１７０センチぐらい
プラチナブロンドの髪に淡い緑の色を忍ばせた優しい顔の女が立っていた

「騒がしい気配しましたので，ご子息でしたか」

キレイな英語と美しい顔に反する厳めしい軍服「アメリカ第七艦隊タスクホースＣＴＦ７０」の章を持つ姿

「騒がせたか，すまんな，ホーク大将」

ｇｅｎｅｒａｌと呼ばれる彼女は粉川の車が海自の基地に向かって行くのを見つめながら

髪と合わせたように白雪の睫毛とスカイブルーの瞳を三笠に向けて

「キティとお呼びください，元帥」

いつもの会話と言うように朝日の中で微笑んだ

第四十四話　妻の夢（後書き）

カセイウラバナダイアル～～りっくんランドに行ってみた編～～

やっと『しらね』さんをみてみんにアップしましたよかったら御覧下さい

（最初に宣伝しておかないと『しらね』さんにぶたれますから）ｗｗ

近場から自衛隊というものと親しくなろうと（藁）

行って参りました朝霞駐屯地。。。。

広報のために立てられている建物の中にヘリとせんしゃがいました。。。

改めてびっくりしたのは。。。

戦車のデカイ事

テレビや映画で見ると結構軽快に動いてるじゃないですか。。。アレって

こんなにデカイものが？とマジで驚きました

弾とかも見れたし触ることもできたのですが。。。

やはり

考えるに戦争はコワイと思いました

願わくばこういう兵器が使われない世界でありますようにと思いつつも

周辺国との国力維持のためにこうした兵器の存在が欠かせないものである事も思い知りました

戦車もデカイのですが

移動砲台のような車両と
機雷を落とす水陸両用の車両なんてのは。。。。ホントにでかくって
また硬い鉄の塊でビックリでした

ビルの外に展示してあったのですが
その向こうは朝霞の基地で
隊員の皆さんが走り回って声を挙げて訓練してらっしゃいました。。
。。

こういう人達の無存在に守られてる
隊員の人たちの弛まぬ姿に周辺国は「日本」においそれと攻撃はで
きないぞという気持ちを持たせているとおもえば
大変なお仕事なんだと思いました。。。。

次は三笠様に会いに行こうと計画中です!!!
見えたら。。。プロレス業とかかけられそうでコワイですけど（爆）

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～

第四十五話　原初の心（前書き）

ひさしぶりに本伝です。。。
いゃあ
何本も小説かかえてやっていける人の精神構造を覗きたい。。。
ヒボシは結構限界だよぉぉぉん

第四十五話　原初の心

まだ朝日が低く水面に反射する光は目の痛い
「おはようございます。三笠元帥」
秋が中程に入ったヒンヤリとした空気の中，長身の艦魂は三笠に優しい顔を向けた
プラチナブロンドの中に深みのあるグリーンを輝かせた髪
日本の秋空にも似たスカイブルーの瞳は優強い眼差しを向ける
「ホーク大将，妾を「元帥」と呼ぶのはやめよ」
口元を卑屈に歪ませた顔を三笠は朝日の側に立つ彼女に見せたが
「では，私の事をキティと呼んで下さいませ」
緩やかな声は，やんわりと否定
長い付き合いの相手のように三笠も肩をすくめ
「そう呼んでも「元帥」をはずさないではないか」
達者な口運びで言い返した三笠に微笑みの女は自分の胸に光るき章を見ながらも
「外すなどと，無理な注文ですわ，提督に怒られてしまいます「アメリカ人は礼儀も知らない人種になったのか」と」
嬉しそうに否定
そのまま手に持ったタンブラーを差し出した

「コーヒーは如何ですか，いい豆が入ったので」
アルミ製のタンブラーには「アメリカ軍」の国有財産通しナンバーが入っている。銀のラベルは目にいたい朝日をニブイ光に変えている

「頂こう。。。調度いい」

三笠は酒で鈍った舌を洗うようにコーヒーを口に注いだ
その間，彼女は粉川の去った後を静かに見つめていた

「キティ。。。今日はどうしした?」

目線を意識しながら三笠は聞いた

「何故，本当の事をおっしゃらないのですか?」
慎重さを湛えた水色の瞳は自分に向かない三笠を見つめて
「ご子息はきっと元帥の願いを叶える力となりましょう」

「妾は嘘はつかない」

感情を抑えた声

青眼の姿は緊張を纏っていた
海からの生暖かい風と。。。秋の冷たく透き通った空気の中
声には威厳が戻っている

キティホークは隣にいる三笠に目線を戻し，真面目な顔で隠すことなく聞いた

「ならば何故，我らは女神。。」
「あれは。。。小僧がそう解釈したのだから。。。妾は何も言って

いない」

素早く口の前に手を出し沈黙を迫った三笠は厳しくした目で

「妾は決して嘘はつかぬ。。。」

硬い態度をとる三笠にキティホークは眉をしかめた

「では真実を正直に教えるべきです。ご子息は立派な「人」です必ずや「断絶」を繋げるパイプ役となってくれましょう」

「それは出来ん」

キティを睨む瞳
だが瞳の中にあるのは怒りではなく，深い悲しみ
三笠は自分の砲塔に腰掛けると肩をすぼめた

「小僧には。。。小僧の人生がある，コレは我ら日の本の艦魂が背負った「戦い」なのだ」
小さな背中が揺れて見える
風に攫われそうな小さな魂の姿にキティは

「元帥，私達は元帥の薫陶を頂いたおかげで生きる意味，死ぬ意味を知りました。。。今の日本の艦魂達に早くそれを伝えたいのです。。差し出がましいと思っています，それでも貴女様の力になりたいのです」

背中を向けたまま三笠は首を振った
揺れる姿には色々な思いがつまっていた
自分の砲身，夜の間につけた朝露のかざりの中に指を滑らす

「薫陶」。。。。つぶやく声は一度確かめるように言うと

「オマエ達にそれを伝えたのは「長門」だ。。。妾の高妹（こうまい）。。。」

キティホークから隠した顔は悲しみに言葉を震えさていた
今は昔。。。自分を慕った妹「長門」。。。。彼女が自分を生きながらえさせ，そしてアメリカの悲しき艦魂達を連れてきた

「長門様がサラ様と，ワイツ氏に伝えてくださったおかげで，アメリカの艦魂は死ぬ意味を知り，恐れを克服しました」

キティホークがこの話しをするのは初めての事ではなかった
何度も「この事」で三笠を説得しようと思って通っていた

日本に実戦配備が決まった時に真っ先に旗艦提督（ｆｌａｇ　Ａｄｍｉｒａｌ），事「コンスティチューション」に報告した
「魂に安らぎがあるよう元帥によろしく」
提督の言葉を胸に抱きこの海を渡ってきた

自分の艦齢を考えれば最後の実戦配備
最後の寄港地となる横須賀にキティホークは喜びと共にやってきた
自分の前に横須賀に身を寄せたバグジーや，親友のエリーが話していた元帥三笠に会う事は夢だった

そして

深い難問の前にいる事を知ったときどうしても力になりたかった
僚艦の空母達は三笠の意見を尊重し誰も日本の艦艇に「内訳」の事を話しはしなかった

特に「エリー大将（Ｆｌｅｅｔ　Ａｄｍｉｒａｌ）」は，その事を
全アメリカ空母打撃群艦艇に命令として通達していた
命令が成されている以上，この事を他所でしゃべる者はいない

それ故に
「艦魂」の真実を知る艦魂は主に「空母打撃群」の空母および「司
令職」の者しかおらず
他の艦艇は「噂」程度にしか知らない
現在のアメリカ艦隊における大将格の者にのみ限られているという
事だ

何故そうなっているのかは軍事的な意味合いもあった

それ程に世界は複雑に分裂し緊張をまとったままの図式になってい
るのだから

それでもアメリカの艦魂達は「言わない」という礼儀をきつく守っ
ていた
日本が。。。日本の艦魂が自分たちの「原初の心」を取り戻し三笠
元帥の姿を見る事が出来るように成らない限り，自分たちがそれを
広める事もしない

戦後，初めて三笠とあったアメリカ艦魂達が決めたルール
提督もそれを良しとし「礼儀を守ろう」と誓約を立てていた

「私ゃね。。。元帥の事が好きだから意見を尊重したいんだよ。。。
日本の妖精（艦魂）達の事はそれ以外で面倒みれるとこをみてやれ
ばいい」

葉巻を銜えｖａｎｉｌｌａ巻く中で笑ったエリーの顔を思い出しな

がらキティホークは言葉を待った

そこまで色々な指令が成さされていても
いち早く力になりたいという思いで日本に来た自分に。。。元帥三笠の一言が欲しかった

登りだした陽の下で立ち上がった三笠は悲しみに歪んだ眉のまま顔を向けた

「キティホーク大将，心遣いはありがたく思うが，これぞ妾の戦いなのだ。。。。もう何も言うな」

いつもの言葉が緩やかに最後の釘を刺すと同時に笑って聞いた

「エリーはどうしている?元気か?」

大戦の後，三笠の元には空母打撃群の艦魂達が多く訪れた
日本の艦魂を見ることの出来なくなった三笠の前に
色々な者達が来た
中でも三笠は忘れる事の出来ない存在がいた，エリー大将

「相変わらずですが，元気そうですよ」
キレイに話題を切り替えられたが曇る事なくキティは返事した

「日本の食事が忘れられないらしくて，向こうの物は食べないそうです」

困った顔に三笠も困った笑いで答えた
「では酒と葉巻の日々が続いているという訳だな」

呆れたように

「元々食べ物には淡泊な人でしたからね。。。。こないだも通信で元帥と飲みたいと言ってました」
「よく飲んだ。。。アイツは。。。本当に良い魂となって受け継がれた」
「もう一度，日本来る事は叶わないと思いますが。。。」

何度か帰港のたびに日本に物議を醸していた原子力空母の彼女は半永久的なエネルギーを持ってしまった事の引き替えか食事に対してはかなり淡泊だったが
三笠と飲み，食べる「なめろう」を，こよなく愛していた
残念な事に日本を寄港地とする事が出来なかった彼女だったが事あるたびに三笠の事を気遣いキティやブルーリッジとは特に密に連絡を取っていた

「残念だな。。。もう一度飲みたかった」
「伝えておきます。。きっと喜びます」

そこまで言うとキティホークは絵はがきのような封筒を出した
「クリスマスの誘いです」
三笠は毎年の事と困った顔をしながらも笑った

「ブルーリッジ司令も昨日の朝持ってきたが。。。１２月はな。。。」
「まあ，サイファったら。。。負けましたわ」

アメリカの艦魂達は毎年クリスマスカードを届けにくる
西洋社会における親愛なる「家族」ともいえる者に必ずおくる特別なカード

もちろん三笠は元がイギリス生まれなので「親愛」を示される事を悪くは思っていないのだが

数多の大戦を日本の魂として戦った彼女にとって「西洋」の親愛に大きな意味は無くなっていた
日本における１２月は，めでたい事など１つもない

特に大日本帝国の時代。。。。１２月８日は大東亜戦争の最大の山となった「太平洋戦」が始まった日
アメリカとの激突が目に見える形になった日であり
負けた後には「Ａ級戦犯」と現実的な効力無き裁判の犠牲となった者達の処刑日もあり。。。
もの悲しい冬にふさわしいかのように冷たく悲惨な時が綴られていた

三笠は１２月と８月は「喪に服す月」と決めていた

キティホークはもちろんブルーリッジもその事は知っていたがクリスマスカードは「親愛なる者」に送るもの。。。いらないと言われて止めてしまうような無礼は働かなかった

「元帥。。。いつか来てくださると願っております」

キティホークは願いを込めた笑みを三笠に向けた
三笠は何も言わずただカードを受け取った

粉川は写真を手渡すために祭りの２日目に出かけていた

昨日の曇り空とはうって変わった青天の海
満足げに歩を進め，護衛艦達の元に向かった粉川は
またも腫らした顔を『しらね』に指摘され目を泳がせていた

「いやぁ。。プロレス好きの友達がいてね」
「そんな友達ばっかなんですの？」

初日にココに来た時は「『こんごう』とケンカした」と笑った腫れた顔の主は
さらに付け加わった新たな被弾顔のひどさは知っていたが頭を掻きながら笑いを零してばを繕った

鼻筋の真ん中を赤くした傷は三笠が投げた日本書紀の跡だったが，
口が裂けても三笠の事は言えない

約束なのだ

三笠自身が見る事の出来ない日本の艦魂達
それは今を生きる日本の艦魂にも共通していた
護衛艦となった日本の魂達は三笠を見る事が出来なかったのだ

粉川は一度自分の口から言おうかと意見した事があったが三笠の答えはＮＯだった

「見えないのに「居る」という事はわかっているヤツはいる，だからこそ混乱を招きたくない，沈黙を守れ」と

見えないのに居る事がわかる
それは戦艦三笠に飛んできた艦魂がいたという事を示していた
艦魂は艦魂のいる場所，生きている船には足を降ろす事が出来るら

しい

よほどの拒否ならび軍隊においては僚艦の認識が出来ない者には降りられないが
三笠は誰の訪問も拒否していないので来ることが出来る。。。。
だが見えないのは事実らしい

思い出の中，聞いた話で三笠は何人かの「日本の艦魂」が自分のところに来たことを挙げていたが

曰く，相手の声は聞こえるらしいのだが
相手には三笠の姿はもとより声さえ聞こえないという状態なのだそうで

この状態のまま混乱を引き起こしたくないという三笠の願いを聞き入れ粉川は秘密としていた
そのあたりは約束をしっかり守る粉川
何があっても言わないで「プロレス好きの友達」の正体は笑いでごまかしてみた

「はぁ。。。困りましたわね。。今日は特別なお客様が来て，粉川さんにも是非お会いしたいという事でしたのに」

『しらね』は指を顎にあてて眉をしかめた
客に紹介するにはあんまりな顔になっているのを粉川も鏡で確認しながら

「いやあ，写真届けたかっただけですから。。。気になさらず，も

う帰りますし」

『しらね』の後ろでは自分たちの集合写真を各々楽しげに眺める護衛艦の魂達，当初の予定は達成できたと粉川は苦笑いして見せると手早くカバンを持ち上げた
元々長くココにいる予定はなかった
夜には本庁に戻ってフェスティバルの写真を整理して広報に持って行くという仕事ものこっていた

「『しらね』さんに迷惑かけられませんから今日はこれで」
手早く彼女達のグループルームを出ようとした粉川の背中に

「こんにちわ」

柔らかい声が流暢な英語で足を止めた
今まで女子高生のように騒いでいた護衛艦達は固まり姿勢を正し，敬礼した

「ホーク大将」

『しらね』の気まずい顔
今までだらけきってしまった自分たちのところに突然アメリカ第七艦隊の顔役ともいえる大将が訪れてしまったのだからそうもなるみんな写真を背中に隠す形で立っていたが

「今日はお休み。。。楽にして」
祭りである事
休暇である事に理解を示した優しさが
見回して護衛艦達に微笑むが。。。。相手は大将である誰も姿勢を

崩せない

振り返った粉川も遅まきながら敬礼をした

「粉川一等海尉であります」

威厳ある黒の制服

襟章と，き章

腕をまわる大将を示す黄色のライン，日米で多少の差があったとしても自分より上位階級であり

それもアメリカ空母打撃群のメイン艦魂であるキティホークであるならば失礼なマネは出来ない

「不躾な顔でありますが。。。申し訳ありません」

顔の怪我など相手にあやまる必要はなかったのだが

『しらね』の弁からすると「会いたい」と言ってくれてた人に対するには失礼と考えた粉川の物言いにキティホークは笑った

「プロレスが好きなら。。。仕方ない事ですね」

フランクな態度に大人の微笑みはテーブルに置かれた艦魂達の集合写真に目をとめながら

「さあ，お茶にしませんか？『しらね』司令」と銀色に輝く髪を揺らした

護衛艦しらねにあるグループルームのテラス

通常「人」の目には見ることの出来ないプロムにガラスに彫刻の入った羽目板の小さなテーブル
イギリス式の鳥籠型ドルチェセット

秋の日差しは少しばかり肌に痛いのか，ラウンジパラソルがかけられた場所に
粉川と『しらね』，キティホークというかなり異例な顔合わせの面子が小さなイスに各々腰掛けていた

第七艦隊，空母打撃群の長である彼女の姿は成人女性的で『しまかぜ』にも似た雰囲気がある

そんな彼女の横顔に
『しらね』は少し困った顔になりながら
「言って下さればお迎えに行きましたのに」と頭を下げた

キティホークから自分達を見られる「人」と会いたいと申し出が会ったのは早朝の6時ごろだった
第七艦隊の総司令であるブルーリッジが衛星での定期通信事項でワシントンとの回線を開き，一仕事を終えた時間に
ミサイル巡洋艦カウペンスの艦魂ダニエル大佐が，同じように執務に就いていた『しらね』を尋ねてその旨を伝えに来ていたが
あまりに急な用向きだったので驚き。。。。勘ぐってもいた

どこで自分たちを見られる「人」がいるという情報が漏れたのか。。。。

『しらね』は冷や水をかけられた気分だった

アメリカ軍が持つ情報網に最早，日本が追いつく事は不可能ではと

悲しい気持ちなった矢先
問題の「人」である粉川の顔面負傷の拡大を見つけ，これを理由に
粉川と会わせる事を断ろうと考えていたのだ
「気になさらないで『しらね』司令。。。。」

そんな相手の心を見透かしながらも
決して顔には出さない不敵な大将ホーク

「もっと早くに言えばプロレスも避けられたかも知れませんわね」

引きつる笑みの『しらね』の顔に面目を潰したか？という失念で粉
川は居心地が悪かったが
目の前，初めて見た海外の艦魂にも興味はあった

「本当に普通に私達を「見る」のね」

自分の顔を覗き込んでいた粉川に気がついたキティホークはショー
トボブの前髪を払って「人」を指差した
「驚いたりはしないのね」
挑戦的な光を宿す目の奥にある意味
粉川はキティホークのおかしな質問に少し引っかかったが

「慣れちゃったって感じでしょうかね」
笑って返した

「そんな粉川一尉にお聞きしたのですけど。。。。「妖精（アメリ
カの艦魂は自分達の事をＴｉｎｋｕと言うが日本では艦魂，船魂と
固有名詞があるというだけの事）」はいったい何者だと思います？」

キティホークは薄いブルーを張ったネイルの指でティーカップのへ

りを触りながら聞いた
視線を合わせる事こそなかったが
昨日の今日で「同じ質問」をされるとは思っていなかった粉川は。。。
自分が最初に引っかかったものが，自分を「試している」という危機と察した
あくまで正面を向いた顔のまま

「わかりません。。。「妖精」は，なんでしょうか？」

曖昧な返事と同時に逆に
相手が「艦魂」について何か知っているのならば引き出したいという気持ちになった

「合衆国海軍では認識されているのですか？妖精は」
「認識とは？」

あくまで優しい物腰の声
「軍人が存在を確認しているか？という事ですが。。。聞いてよろしかったですか？」

琥珀色のティーに少しのミルクを流した螺旋の中
ともすれば軍事機密を聞き出すに近い質問を粉川は笑顔でした

「いませんよ。。。。船乗り達の伝説ですから，ｍｅｒｍａｉｄか？ｔｉｎｋｅｒｂｅｌｌか？」

自分に返された挑戦的な質問に戸惑いを見せる事のない返答
スカイブルーの瞳の奥に深い輝きは，軽く息を落とすと

「私達は。。。。探しています」
意味深な笑みとともに少し大人の女の目は粉川の目の中の純然な挑戦に語りかけた

「日本では妖精の「起源を知る者」がいると聞いていたのですが？貴方ですか？貴方は知っていますか？」
「そうなんですか？」

口調の変わったキティの質問に返事をしたのは『しらね』だった

相手の目をしっかりと理解した上で揺れを見せてしまった粉川の前起源という深い川を探る会話に思わず口を挟んでしまった

粉川は驚いた
司令という立場にありながらも
いままでにないような目の色を見せる彼女に

同時に思い出した

自分達という存在を知りたいと思っているのは艦魂自身であるという三笠の言葉を
昨日の話からすれば「艦魂」が原初のあり方を求めるのは「異常」な事態が発生している時にありがちな事だ言っていた

「粉川さん。。。。ご存じなんですか？」

『しらね』の目は真剣にそれを求めている
気がついた
今，その「異常な事態」が海上自衛隊の艦魂達に少なくともあるという事実に

キティホークの質問で気がつかされたが。。。
それを話して良いという事ではない

目の前に迫った『しらね』の顔に粉川は肩をすくめて見せた

「いやぁ，僕は何も知りません」

声の中に少しのブレ
自分も残念であるという顔とは別に，この質問をオブラートに包むことなく
それでいて重大な事項ではないかのようにやんわりとしたキティホークが実は危険な存在ではないかとも気がついた

心の中を騒がせ
頭の回転を速めて
アメリカの艦魂も「原初」というものをさがしているのではと考えながらも口には出さず
飛び出してしまった『しらね』の肩を軽く押した

「どおしたんですか?落ち着いてくださいよ『しらね』さん」

粉川に肩を押された『しらね』はキティホークの側に向くと恥ずかしそうに顔を赤くして
「すいません。。。つい。。」と深くお辞儀した
と同時にホーク大将が自分を見る視線に苛立ちを持っていた事に気がついた

それでも決して面にそれを出さない
感情は空気に漂う匂い程度の震え。。。。鍛えられた琴線は素人には見えず，軍人ならばこそ感覚的に香る

キティは気にもしなかったように会話を続けた

「粉川一尉。。。貴方は妖精を見ることが出来るのに，その正体を知らないままでいるなんて。。。おかしくないですか?」

明らかに挑戦的に「何か」を探している質問だったが

粉川は別の思いを返した

「何者かなんて「今」知りたいと思ってません，今は仲良くしていられる事の方が大事だと思ってますから」

鋭利に尖り始めていたキティホークの質問に柔らかい本音を

「特別だなんて，考えずにやっていきたいんです。僕は」

あまり

軍人としては感心出来ない返答

不確定要素を潰して行く事も軍人には必要な能力のハズなのに

粉川は無理に知りたくないという「自分」の本音をそのまま返した

三笠と話しをして色々名事を知ってはいたが

それが今まで知り合った艦魂達との間で「重いもの」になってしまう事はなかったのだ

かの女達が「女神の末裔」であったとしても

普通に話しが出来て，悩み事も持っている可愛い存在である事にも変わりがなかったから

目の前，返された返事に少しばかり驚いた表情をしたキティホークに告げた

「共に国を護る職務につく，大事な友人達だと思ってます。。。ちょっと期待はずれな答えかも知れませんが」

「いいえ，素敵な答えでしたわ」

それまで『しらね』が「質問」する事を躊躇わせるほど尖った感覚を浮かび上がらせていたキティホークは一転したように声を少しだけだして笑った

「日本には素敵な「人」がいて，うらやましい！」

『しらね』の方を向くと
「悩み事も色々と相談できるでしょ」と手を軽く叩いて聞いた
キティの柔らかな中にあった闇の気配が消えて『しらね』も気持ちを解いた様子で

「でも毎回来るたびに，顔に怪我してるんですのよ」
「それは仕方がないでしょうけど」
意味深な笑みも嫌味ではない顔

艦魂の2人に顔を覗き込まれた粉川は頭に手を当てながら
「すいません。。。。もうちょっと顔には気を遣ってみます」と笑った

「私が日本にいる間はお付き合いをさせて頂きたいわ」
ティーカップを自分の前から除けたキティは少し乗り出して，粉川に顔を近づけた
「僕のほうこそ。。。どうぞよろしくお願いします。。。」

仄かな色香

つい『しまかぜ』の時みたいに鼻の下をくすぐる香りに顔が緩む
十分に成熟した実りを持つ胸のライン
ネイルも整えられた指先が顔に触れる

「貴方は良い男。。。。」

粉川の頬にキティホークは軽くキスをした
『しらね』は固まった
というか
突然尋ねてきた第七艦隊顔役の艦魂の動向をテラスの影から見守っていた海自の艦魂達も。。。
壁の後ろで固まってしまった

「日本で（軍人として）大成しなかったら是非，我が合衆国海軍にいらっしゃってくださいませ！」

満面の笑みの優しい唇は再び顔を近づけると小さな声で
「心からお待ちしておりますわ」と告げた

第四十五話　原初の心（後書き）

カセイウラバナダイアル～～過去，現在編～～

おひさしぶりですぅぅヒボシです
といっても外伝やっていたり
あっちいったりこっちいったり絵書いたりで色々や理過ぎでパンクしそうな状態ですが（藁）

三笠様のキャラが外伝と違う。。。というメッセありまして

なんていうか
当然違いますよ
本伝の三笠様は人にしたら実年齢１００歳ちょいの方ですから（しかし永遠の１７歳である事をわよすれてはいけません（藁））
積み重ねた経験値が外伝の産まれたバッカの１５歳（実際は１歳）
本伝みたいに大人じゃないんですよ
外伝の三笠様は「責任」の重さというものをまだ知らない
だから松島がおかしいとか責める事もできるし
人の聞かれたくない過去も聞く
プリンセスの持つ「義務」というのも理解できてない

まったくの三笠様の初めて物語であり
最終的に「失敗」する話しなんです

そして

ヒボシが決して書くことのない太平洋の戦いを経て，現在の知識と
教養と経験によって人の心を理解し
自分の行きすぎた薫陶を後悔しながらも先に死んだ「妹」達を思っ
て生きているという姿になります

人には歴史があります
同じように三笠様もたくさんの失敗をして今日を生きる姿になりま
だから
外伝の三笠様は若くて
マジに迷いがら生きる姿しかないのでキャラは違ってきます

そういう
成長の過程の一つとして見て頂きたいと思ってます～～～

それではまたウラバナダイヤルでお会いしましょ～～

第四十六話　最後の人（前書き）

色々とご迷惑をかけながらも頑張っております！！
今回で「艦魂編」終了！！
次回から！！！ひっさしぶりの『こんごう』達がもどってきます！！

第四十六話　最後の人

「最初に屍を踏み倒すことに勇気を奮った者は偉大であるが，その生き方は悲しい。。しかし必要な時もあり」

透明度を増し高く突き抜けるような青の空気を感じるようにキティホークは空を眺めたまま立ちつくしていた
瞳と同じ青い空に，この国へ来るときに提督がくれた言葉を思い浮かべていた

一瞬だけ目で今までいた三笠の側を向く
黒の制服姿も「人」の士官達と変わらぬほど板に付いた姿
威厳も備えた静かな目が
ココから反対を向いても見る事の出来ない戦艦三笠に目を走らせた

ＫＯＳＡＮＯｐａｒｋ
米軍基地の端から彼女は見える位置にありいつでも飛べるが
自分の位置からでは飛べても姿は見えなかった

それが自分と三笠の想い間にある溝のようにも見えるとキティは考えていた
近くにいるのに届かない人
隠された心に触れることを許さない姿を。。。。
それでも。。。。
それを手伝いたい。。。でもそれが「あやまり」なのかも知れないという迷いの中にいた

キティホークは敬虔とまではいかないが，信心を持つ艦魂だった
妖精（艦魂）という人とは種を異なる存在であるにもかかわらず「宗教」というものに興味を持ち
それを自分の中で「節度」として活用した艦魂
日々を自分と仲間の為に祈り
愛する者達のために尽くすことを喜びとしてきていた

彼女は聡明だったがそれ以上に繊細で
祈ることの意味や
生の儚さなどを思い詰め，自分に課せられた「大将」という任に潰されてしまう事のないためにも信心を必要とし，常に海軍の事を人より多く学ぶことで自分の心を助けていた
世界の海を走り，世界を見守るアメリカの権威として恥ずかしくないように

その心が，先の時代を生きた艦艇に対して他の誰よりも崇敬の念を持たせていた

自分の艦齢も末期に近くなったのに「日本」への赴任を得られたときには飛び上がって喜んだ
この時代において
かつての荒々しき海の時代を生きた先人に。。。もう1人に会えるのは奇蹟に近かったからだ

現代社会
現在の世界において１００年を生きる3戦艦。。。１人はアメリカの海軍にとっても艦魂達にとって魂の支柱ともいえる旗艦提督（ｆ

ｌａｇ　ａｄｍｉｒａｌ）コンスティチューション
もう1人はネルソン提督と共に集中砲火を受ける激戦のトラファルガーを勝利したイギリスのヴィクトリー提督

そして最後の人が，このまま生きればおそらく１００を越す三笠元帥だった
（キティが日本に配属された時点で三笠はまだ１００歳を越えていなかった）

現代を生きるキティは空母打撃群の長という宿命からも，どう転んでもイギリスのビクトリーに会うことはできない
彼女はイギリスの軍港に籍を置いていてコンスティチューションと同じ身であるから

だが。。。
三笠には何かのチャンスがあれば会えるという状態ではあった
事実，アメリカから横須賀に寄港した空母達は三笠との謁見を必ずしていた
キティも何度か日本に寄港し横須賀にも立ち寄った事もあったが。。。

時が三笠に会う事を許してくれなかった
常に過酷な任務につきまとわれ会えなかった

その間に仲間達の何人かが三笠と謁見してゆく
出会った艦魂達が一回りも大きな存在になって帰ってくる姿をいつも羨ましく思っていた

自分も三笠と会うことで「艦魂」として大任の戦いをこなした元帥から，戦いへの心得を聞きたいと願っていた

是非に会いたい
そして
願いは叶えられ
最後の任地として横須賀へ

提督コンスティチューションを心から敬愛しボストンの海軍工廠，
（現在も使われているが現代艦の建造も修理もしていないためキティでは入れない）前進，チャールズタウン海軍基地（現在はこの名前）にブルーリッジ以前，太平洋艦隊司令だったコロナドに頼み込みこんだ。目をつぶってくれと

フィラデルフィアにて重ねた改修工事の最後の段階になって日本に行くことを聞かされた彼女は
このチャンスを最後と軍規違反のスレスレを通して提督に会いに行った

提督コンスティチューション

普段は誰と会うこともなく
ボストンとイギリス，アメリカの歴史研究に没頭する日々を送っていた彼女は自室で日記を書いていたところに
突然の来客を受けていた

ベルベットゴールド，滑らかできめ細かな髪
白い肌に愛嬌の良いクルリと丸い緑の瞳を持った２０歳ぐらいに見える彼女は
片目にかけたモノクル越しに自分の前に立ったキティを叱った
制服を見ればわかる「大将」の肩書きを持った者にかかわらずのア

ポ無し訪問に

「アメリカを代表する空母とも有ろう者が」と

だがそれ以上は責め立てたりしなかった

叱ろうにも，溢れんばかりの笑みを浮かべたキティホークの顔を見るに

嬉しい報告に溜まらず飛び出してしまった事がよくわかったから

「そうか。。。元帥三笠に会えるか。。。。」

一通りの無礼を謝ったキティをガンルームのテーブルに招き座らせたコンスティチューションは春を近づける日差しに目を細めながら自分より年上の姿を持つはるかに若い妹を羨ましそうに見た

声にはまだ幼ささえ感じられる温和な提督の態度に

キティはうれしさ余って自分が三笠と「大日本帝国」の事を細かに調べていた事を語った

姿年齢にして２０は越えている彼女の無邪気に自分調べた「日本」を語る姿を

姿とは別に十分な熟年の心を持ったコンスティチューションは，うんうんと聞き続けた

「私もこの海を渡ってゆけるのならば元帥に会いたい」

木漏れ陽の美しい部屋からコンスティチューションは海を見つめた

「提督もお会いしたいのですか？」
「会いたいよ，私は自分の足で海を走れるのだから」

今は式典や訪問航海でしか軍服を着ることのなくなった彼女は黒のロングスカートと白のブラウス姿で汲んでいた自分の足を軽く叩いた

長くココに居続けである提督だが，この数年前，１１６年ぶりに自力で海を走った
船首に立ち
海の風をいっぱいに受けたときの事を昨日の事のように覚えていると笑い
その時に触れた風の感触を確かめるように手を見せた

「波風には十分に堪えられるが。。。さすがに日本は遠いから」
１００年以上を経ても２０そこそこの美しい顔，それでも歳をとったと苦笑い
「元帥に会って。。。そうね，海を行く話しがしたいものよ」

キティは少し驚いた艦齢からしたら三笠より年上のコンスティチューションが会いたいと願う相手として三笠を挙げることに
むしろ自分経験を聞かせたいとか，お互いが戦った大きな海戦についての話し合いたいと言うと思っていた

「私は日本海海戦を勝った時の感想などを聞きたいのです！！きっと素晴らしい戦いだったと思うのです！！」

この日まで数多の戦場に飛行機を飛ばし続けたキティにとって大きな戦いをこなした司令艦の経験を聞くことは大切な事だと思っていただが

この発言を聞いたコンスティチューションは急に眉を下げ首を振った

「オマエは。。。元帥にそんな事を聞きたいのか？」

以外な反応
声色にも悲しさが滲む様子にキティは自分が，はしゃぎすぎて羽目を外してしまったものと思い姿勢を正した

「すいません。。。心構えとして，その戦いを知りたいと。。。」

テーブルの上に用意されたティー
湯気とともに静かに揺れる心
コンスティチューションは外側は十分に大きくなった彼女の中身がまだ「子供」である事を見抜いた
同時に。。。危惧していた思いに気がつき
顔に厳しさを戻すと

「戦う覚悟はあるか？」
少しの空白の後，キティの目を見たコンスティチューションはまるで宣誓をさせるかのように聞いた

「あります！！」

急な質問だったが，これはいつも提督が戦地に赴くアメリカ艦魂するおきまりの問答
立ち上がり敬礼をとる

「では死ぬ覚悟はあるか？」
「あります！！我らは死してもまた」

大きな声と共にかつて大戦を戦ったアメリカの艦魂達が三笠から教えられた「艦魂」というものの口伝を
教えられたとおりに詠唱した

起立正しい軍人として姿勢も美しく答えたキティにコンスティチューションは，やはり顔に悲しみを浮かべて首をふった

「口伝を棒読み程度にしか思っていないのなら。。。。元帥に会うのは失礼でしかない」

キティは返す言葉を無くしてしまった
むしろ大きな声で叱責された方がどれほどにマシかと思うほどに，目の前のコンスティチューションの悲しみの目に打ちのめされた

この時にはまだわからなかったのだ
むしろ
限られた艦魂にしか口伝されない「艦魂」という存在の意味を本当の意味では理解していなかった

「私は。。。。。。。。元帥の」
「何故，生きる意味，死ぬ意味を教えてくれた三笠元帥に戦いの歴史などを聞く？」

キティの心は凍った
そして「戦いを学ぶ事が」艦魂にとって大切な事でない事を知った

その日，自分の失言に打ちひしがれて帰ってきたキティに久しぶりの友達からの通信が入った

西太平洋に配備が変わった彼女はカラカラと乾いた笑いで涙に目を
真っ赤にしいると思われるキティを笑った
ほぼ同期の彼女は豪放な性格とユーモア溢れる人としてアメリカ海
軍艦魂では知らぬ者のいない有名人

同じ年に一度，日本に寄港した時。。。。
彼女は軍務そっちのけで三笠に会いに行った
実はそのせいでキティが三笠に会う時間を失ってしまっていた
真面目なキティに仕事を押し付けて謁見したというとんでもない人
物は

キティがオーバーホールを受け始めた頃はまだ日本に寄港したりし
ていた

「泣くなよそんな事で」
「だって。。私は。。大任をこなすために必要な事だと思って。。。
」
自艦に取り付けられた衛星回線を使い，鼻のつまった声でコンステ
ィチューションとのやり取りを話したキティに

「お堅い話なんか聞こうと思うから，そういうふうに言われたんだ
よ提督は別に怒ったわけじゃないんだろぅ」

どこか酒に酔ったトロンとした話し方の彼女は語尾の後に軽い笑い
のオマケをつけて
「普通に話ししたいって言っておけば良かったんだよぉ」
「エリーは。。。元帥にあっとき何を話した?」

キティは大抵の空母が司令職に就くことから大して自分と変わらな
い質問をしていたと考えていた

涙の目を拭いながら鼻をかんだ音に

「酒と。。。肴の話しをしたかな？」

目が点になる返事

三笠元帥とも言われる偉大な艦に会いに行って，そんな話しを？エリー特有のジョークか生真面目な自分をバカにしているのかと涙に萎れていた目尻をつり上げ

「ジョークはよして！！」と突っぱねたが

「いや，真面目な話しだよぉ。。元帥は気さくな人だったよ」

エリーはそこまで言うと

「キティ。。。。元帥と戦争の話しなんかする必要ないと私も思うよ，いざとなった時私達自身の意志とは別に船は進む，だから提督に「覚悟はあるか？」て聞かれただろ，どう答えた？」

グラスの水で喉を冷やしていたキティは，あの時のコンスティチューションの問答の理由が少しわかった

「覚悟は。。。ありますと答えたわ」

「それでいいんだよ」

自分たちが戦う事は出来ない

それでも戦いの海に出て行く空母達であり巡洋艦達でもある

だからこそ

その運命と立ち向かう「覚悟」は必要だ

それを提督は聞いたという事に気がついた

戦いの中，戦いの海に自身では身動き叶わぬ艦魂という船の心が折

れてしまう事がないこと。。それが「覚悟」だった
戦略を学ぶことなどはそれほど意味はないと言うことだった

「ありがとう。。。エリー」

キティは自分の過ちに気がついた
と
同時に一つの使命に心を燃やした

翌日，キティはまたも軍規ギリギリの時間を縫ってコンスティチューションの所に飛んだ
彼女は船首に立っていた
昨日のように尋ねた事に怒るでもなく
昨日の失言を叱るでもなく
風に長い髪をなびかせた背中にキティは

「提督。。。。私は「生きた覚悟」を深く知りたいと思います」
「それが答えか？」

振り向かぬ横顔は静かな口調で問うと

「キティホーク，空母と司令の任につく艦魂だけが。。。「艦魂」という存在の中身を知る。。。それはあの大戦で数多の姉妹を我らアメリカに屠られたにもかかわらずご教授下さった三笠元帥への礼儀である」
「はい」
「私もまた数多の戦いを経て今を生きるが。。。。」

そこまで語ったコンスティチューションは言葉を止めてキティに向き直った

「強くはなれなかった」

振り返った提督の目には悲しみが。。。。緑の目に浮かぶ深い色に現れて
アメリカ海軍の精神的支えとも言われる彼女は自分が「真」に強い存在ではないと言うと

「船はいつか死ぬ。。。自然に朽ちたり，老朽により解体を受けたり。。。私はそれらの姉妹達も知っているが戦いで死ぬ者達の苦しみは今はわかっていても。。それはとても辛い。。。共に海を行った姉妹達の死は耐えがたいものだった」

思い出の中
先に逝った姉妹達の中でも戦闘で死んだ者の苦しみは今でも胸を抉るものに違いない
コンスティチューションは自分の胸を手で押さえた

「太平洋のめぐる戦争で日本は負け，帝国海軍は滅びた１００を越す姉妹を失った中で生き長らえた三笠元帥は真に強いお人だが。。。戦いの話しを聞くか?私には。。。出来ぬ事」

コンスティチューションは涙を零したその手をキティが取った

「だからこそ「生きた覚悟」を深く知りたいのです」

心に宿った熱を伝える熱い手にコンスティチューションはキティの

思いにも「義」がある事を認めた
あの日，三笠が大戦に次ぐ大戦に駆り出されて行く悲しきアメリカ艦魂に導きを与えた
その引き替えになってしまったのか。。。日本の艦魂との繋がりを失った

だから黙した
司令職と空母達だけがこの事を知り後の艦魂達はこぼれ話程度にしか真実を知らない
だが。。。。

そのまま黙り続ける事は出来ない
今も世界の全ての海で「戦争」の危機と向き合い続けるアメリカの艦魂達にも救いが必要だからだ

「出来ることでお手伝いしたいのです」
決意を告げた

「それが今の日本の艦魂を導く力となり，全ての魂に平安を与える事となるのならば。。。。私も祈ろう」
コンスティチューションは自分の胸に掛かっていたｃｒｏｓｓを渡し

思い出に残ったあの言葉を与えた
「最初に屍を踏み倒すことに勇気を奮った者は偉大であるが，その生き方は悲しい。。しかし必要な時もあり」
そして

「それ故に誰よりも救いを必要ともしている」と

「感心しないわね」

プラチナの輝きに山河の緑を忍ばせたショートボブを揺らして
秋晴れの昼下がり
この国に来るために作った思い出に目を閉じていたキティの背中に
幼い声が苛立ちの言葉で呼びかける

返事なく祭りのおこなわれている海自の基地を目を向けたキティの
隣に並んだ

「勝手に動かないで頂戴」

ブラウンの髪
横に流して結い流した彼女はメガネの奥の青い目を尖らせながらキ
ティに注意した

「ちゃんと報告したでしょ」
「事後報告など言い訳に過ぎないわ」

反省のない声色に規則を正しく遂行する事を「教える側」であるき
章をつけた彼女は回り込むようにして彼女の前に立った
身長差は一目瞭然１７０センチ代の背丈を持つキティの前に立つ彼
女は１５０センチとアメリカ人にしても小柄な肩をいからせて。。。
それでも静かに注意を続けた

「私にまず許可を取って貰わねば部下に示しがつかない」

人差し指をキティの顔に向け

「大将だからといって命令を無視したり，申請の手順を省いて良いと言うことはない」

ルールブックを読むように注意を連ねた

「ｓｏｒｒｙ」

つま先立ちして自分を怒る可愛い司令艦に苦笑いを浮かべてあやまった

「ブルーリッジ司令，クリスマスカードを届けに行ったついでだったの」

前日にブルーリッジが届けた事は三笠に聞いていた

「その事を言っているんじゃない。。。。自衛隊と会う事を言っている」

アメリカ第七艦隊と海上自衛隊は名目上同等の立場にあるが

各々の感情が邪魔をして交流は少なかった

ところがキティホークがこの港に帰港するやいなや，活発に接触をするようになった事でブルーリッジは頭を悩ませていた

「何度も言っているように我らアメリカと日本は特別に仲良くなりたいわけじゃないのよ！できるだけクールに！そしてスマートに！！」

「私は仲良くしたいの」

飛び上がるように注意しているのに，さらりとかわされるブルーリッジ

「やめて。。。。。ホントに」

「いいじゃないバグジーもエリーも協調のための交流は大切だと言

ってたでしょ」

もともと戦勝国という大看板を持っている第七艦隊は発足当時から
自衛隊事，海自をバカにしている者が多かった
かつては栄華を誇った帝国海軍だが，新たに創設された日本の海軍
は貧弱そのものだった
何よりも自国の艦艇がおらず大半をアメリカからの貸し出し艦艇で
まかなっていた事もあり

貸し出しに出されたアメリカの艦魂達は自分たちを卑下して「ｃａ
ｎｄｙｇｉｒｌ」などと言い
そこからしてねじれた関係を作っていた
後に海自は自国で艦艇をまかなうようになったのだが。。。。。

これらの者達（艦魂）達は帝国海軍との繋がりを断ち切られた後に
産まれた者達で
それを証明するかのように。。。

とにかくそんな事だったので
中がよいとは言い難く，むしろ格下の「部下」のように蔑んでいた
者が多かった

なのに。。。。何故か原子力を積んだ空母であるエリーは日本の艦
魂に寛大だった

自分が入港する時には海保に守って貰わないと入れない程の大騒ぎ
を何度も起こし
そのたびに「原爆反対」とか「核は出て行け」などと罵られている
にもかかわらず
佐世保では笑顔で艦首に立って海自艦艇に敬礼をするという大胆な

事までした

貸し付け艦隊からしばらくして幅広く自軍艦艇を揃えるようになった頃
リムパックが実施された

この時も戦争アレルギーというどうにもアメリカの艦魂には理解が出来ない問題でボロボロに揉めた後に自衛隊艦艇は派遣されたうえで事件が起きた

メインの空母として参加していたエリーとアメリカ艦魂が食事会をしている前に1人の日本艦魂が現れるという

アポなしで

合同の演習に際しても下らぬ揉め事で出遅れていた海自艦魂をアメリカ艦魂達は自艦に乗らせる事は絶対にしなかったのに司令艦であるエリーが拒否をしていなかったという事が明るみに出た一件だった

さらにエリーはそのまま一緒にご飯してしまうという大胆さを示しこの一件いらい
アメリカの艦魂達はそれなりに普通の交流関係をもつようになった

「提督の命令を忘れたわけじゃないでしょ」

破天荒なエリーの交友録を思い出しながら祭りの基地を見つめて笑ったキティにブルーリッジは自分の話では聞き流されると「提督」

の命令を厳守させる方向で叱った

コンスティチューションが与えていた命令は
「必要以上に日本の艦魂との交友を持たない事」

だが

キティはその命令の中身を理解していた
それは三笠元帥の意志を尊重した結果に出さされた命令である事を

「交流など必要以上にせず，必要な事を啓発しているのよ」

自分の前，小さな手を突き出し指差し確認をするように，懸命に命令を厳守するという規範を司令である者が常に示すべきであると叱るブルーリッジを柳のように何度もかわす

「貴女達が言うことを聞いてくれないから。。。。私がどれだけ苦労していると思ってるのよ。。。」

貴女達に括られる空母打撃軍の艦魂達は一律日本の艦魂との交友を否定していなかった

ブルーリッジは，エリーやキティに比べれば若輩で容姿も１７歳前後の姿の彼女だが任務は誰よりも重責で
常に頭がワシントンとつながっている状態の中で問題を起こし続ける
今も自分の前でまったく反省を示さないキティの態度に。。。。。

涙ぐんでいた

「なっ。。泣かないでよサイファ！」

何故か問題児が多い空母達と，抱え込んだ苦労の多さでブルーリッジは泣き出してしまった
「どおして私の言うこと聞いてくれないの！！」
慌てて手を伸ばしたキティを無視して背中を向ける
「泣いてないわよ！！」
「ごめん」

「私はね。。。こんな事が続くぐらいだったら三笠元帥を戦争に勝った時にアメリカに連れて帰れば良かったんじゃないかって。。。本気で思ってしまうわ」

実際それは少なくない意見だった
自分たちの行く末を示してくれるのならばアメリカに運んでしまってコンスティチューション提督と並ぶ2つの柱としていてくれればと何人もの艦魂達が零した意見でもあったが
その事こそコンスティチューションの怒りを買った意見でもあり

今は口に出す者も少なくなったものだったが

キティは，この1ヶ月の間に立て続けに起こった自衛隊の不祥事と，思わぬ災害派遣などでブルーリッジがワシントンとの回線をつなぎっぱなしにされ眠ることもなく働いていたストレスの限界を突破してしまった事に気がつき申し訳なく思った

多忙な中にあってクリスマスカードを礼に則り届けた総司令官の苦労を思って

「サイファそんな事言わないで。。。反省するから」

キティは手を振り払い背中を向けて泣くブルーリッジの肩を抱きしめた
「ホント。。。注意するわ」

部下の前では表情も変えない鉄の女ブルーリッジの苦労を支えられるのは空母である自分たち
多少の命令無視に目をつぶってくれる彼女には恩ばかりがある

「ホントに。。わかってよ。。ちょっとは気を遣ってよ。。。」

キティは何度も謝りながら目を腫らしたブルーリッジの髪を撫でてもう一度まつりの行われている基地に目を向けた

「時間は。。。少ないのよ『しらね』，貴女達はもっとがんばってあの「人」を愛さないと。。。魂を引き継ぐ事はできないわよ」

静かに揺れる星条旗の前，キティホークは祈るようにつぶやいた

第四十六話　最後の人（後書き）

カセイウラバナチャンネル～～コンスティテーション～～

日本に三笠様
アメリカにコンスティテーション様
こんな感じで海軍の歴史を語るのに欠かすことの出来ない存在がいる国である事を
日本人はもっと誇りに思って欲しいと思う章でした

事，三笠様は並の人間では味わえぬほどの波乱にとんだ艦生を歩んでいらっしゃいます

黎明期の帝国海軍を国を護る魂として成長させた人であり（そのあたりのくだりを現在外伝で執筆中）
最終期には１００以上の姉妹を失い
中には外国に賠償として首をつながれていった妹達もいたという
泣くではすまない結末をみつめ

現在を生きている方です

イギリス，アメリカにも海軍の精神的護りの存在としてお二方が存在しますが
敗北を味わい一度に妹を四散させた方はおよそ三笠様しかいらっしゃられません（イギリスは似たような事はありましたが。。。それでも敗戦国ではないという意味では違います）

だからこそ
三笠様は「艦魂」とは何かを考え，救いとなる答えを見つけた方と

いう位置づけなのです

ところでコンスティテーション様
ヒボシもたくさんしらべていたのでもっと色々とかきたかったのですが。。。
先に流水郎先生が一つの作品としてすばらしい形で書き綴っておられましたので
さらっとさわる程度の感じで書きました

提督コンスティテーション様を知りたかったら先生の小説をお読みになってくださいませ！！！

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第四十七話　波乱の種（前書き）

お絵かき頑張ったり
ＨＰ作ったりで大変な一週間でした？
ああっ一週間ぶりですねぇ！！！
やっと帰って参りました！！『こんごう』達
忘れられてるかなｗｗｗそれでわどうぞ！！！
「対潜訓練編」

第四十七話　波乱の種

東京よりはるかに南にある佐世保にも冬を匂わす風が吹き始めていた
顔に当たる痛みに鼻を鳴らした粉川は佐世保駅を降りたホームで大きな音入りのくしゃみを発して

東口方面は真新しいロータリーなどを持つ駅だが
みなと口の方は簡素な作りで実質駅裏ともいえる方向に歩を進めるココは日本最西端の駅

「噂の男になったかな？」

少しとぼけた独り言を零すと背中に陸自迷彩の入った背嚢を背負って改札を通る

帰りの日時，予定されるの日を『しらね』に頼んで送ってもらっていたから
佐世保の艦魂が噂をしてくれているのかとニヤケながら
腕時計を確認

基地司令に会うための時間にはまだ十分に余裕はあるが気持ちが逸っているのがわかる
自分にまだそういう若い部分がある事に苦笑いしながら
スーツ姿は足を速める，背負い袋に上着と冬用のコートを引っかけて事務仕事からやっとで解放された体の各所に残る鈍りを確認するように競歩から足踏みも強く走る

「よっしゃ！！」

拳を握り治し国道１１号を，佐世保地方総監部に向かってほどよいペースで走っていった

「いわゆる「事件」に対するデモンストレーションでもある。。。。」

総監部内，会議室集まっているのは４人の男達は表向きの告知情報を載せた計画書を一通り目を通していた
大きな会議室の真ん中に座る，灰色の頭のいぶし銀，宗像（むなかた）はタバコに火を着けながら自分の眉に残る傷に手をやると煙と一緒に苦々しく

「赤の国の危険は今も昔もかわらない。。それは確信できた？という事か？」

並べられたテーブル右側に『こんごう』艦長間宮と船務士の和田
左側には大荷物を足もとに置いた粉川
どちらも神妙な面持ちで司令の言葉を待っていた

「今更ながら訓練をともにする米軍からは。。。。」

別紙を片手に持った宗像は話し途中で声を切り。。。灰皿をタバコで突き，大きな溜息を落とした
言葉が滞るのは自分の持つ責務に反する意味合いが大きいという事
間宮は司令の意志を汲むように計画書を除けると

「不審船に対する訓練もある。。。という事ですか？」

国防の盾が今更，小型船舶に対する臨検訓練を外洋に出てまでしなくてはならない
屈辱的な訓練項目

「明確にそうであるという通達はないが。。。なんらかのアクションを必要とされているとい事だけが確かだ」

まだ半分も吸わないタバコを押しつぶすように灰皿に捨てる宗像
苛立ちは指先に掛かった火種をねじり潰す事を躊躇しない

同じく顔を厳しくした和田は

「まるで教練指導をして下さると言わんばかりですね」

常に自衛隊は「外敵」と自国民の悪意の板挟みの状態だ
自分の国を護るための手段を否定し続ける国民とそれを「正義」と煽るマスメディア，だがそれこそが井の中の蛙大海を知らずという故事という箱にしっかりと収まってしまっている日本の現状だった

事があれば「防衛」を今まで軽んじてきた国民に「何していたか」と叩かれ
無ければ「必要のない軍隊」と罵られる日々

事実は，常に自国の周りに波の高い海が広がっているという事だけ
それをアメリカは常に平和ボケの日本国民以上に警戒している
駆け引きの道具という手札としながらも怠らぬ警戒は続いている

これらの事からもアメリカの海自に対する要望は当たり前のように高い

なのに，こないだの「不審船」を見逃してしまうという。。。なんとも締まらない結末

司令と間宮達が渋い顔を並べている所に粉川が入った
走って監部に到着後，一汗流したさっぱりした顔に士官用の青服を着た姿で

「ご存じと思いますが。。。。あの日の海には「別の船」がいました」
「そうだろうとは思っていた」

手持ちのカバンから資料を纏めたファイルを開いた粉川の前，間宮は少し口を緩ませ皮肉のお返しのような返事をした
間宮は事件以降の防衛庁の動きをしっかりと見ていた
当日の海にも別の輝きが見えたであろう事は暗黙の了解にあった

粉川もまた，薄々そうではないかと思っていた内情に眉をしかめながらも口元に皮肉の笑みで返すと

「あの日，中国政府の船舶確認が防衛庁に入ったのは０３：００時でしたが，これは意図的に遅らされたものという事がわかっています」

粉川は説明しながらファイルを海図と共に宗像の手に
渡された資料に宗像は目を大きく開き。。。そして細めると何も言わずに，そのまま間宮に手渡した

「やっぱりいたか。。。。キロ級潜水艦」

細かく書き留められた資料
あの日，「不審船」を発見した時間からそれほど遠くない時間に海自の潜水艦は現場にいたのだ
資料にも名前を記載しない海自艦艇がタイムテーブルと共に克明に示した物，海上ではな「海中」に潜んだ不審船の動きを寸分も逃がさぬように書き綴ってあった

「スレスレのところで「何してた?」ってところかな」

ファイルの海図に指を走らせた間宮は領海線近くで事の成り行きを見ていたのか?
それとも「事」によっては参加するつもりでいたのか?
何かをしていたからこそ。。。。不審船の船籍をすぐに開かすことは出来なかったのか?

不審船よりも不審な行動をしていた潜水艦の軌道に指を走らせる

それを追うように距離をとって走っていた海自の潜水艦の精悍な動き

間宮は顔を，ちらつく蛍光灯に向けてあの日の事を思い出してみた
終始統合情報部と通信を取り合っていたが。。。情報部がまた別の戦いをしていた事が目に浮かぶ
海を走る艦隊には海保の後ろに付いて「待て」を出し続けた防衛庁だったが，海の下では先行するように事件の大きな影に向かって走っていた者達がいたという事実

直感的に感じていた

「外交のカードに使うために黙っていた。。。という事か」

宗像は新しいタバコの最初の一口を深く吸い吐き出すと
恨めしそうな目で資料の海図を睨んだ
粉川は責めるような視線の前に，お手上げと肩をすぼめ

「僕が知ったのは2日前ですよ。。羽村局長は隠さず当日に「それ以外の事」として扱ったそうですが，政治屋さんには見向きもされなかったそうです。。ただ一応司令には事実を確認してほしかったんで」

あえて，自分の意志でこれを公表した事を告げた
粉川は良い意味で繋ぎ役を買って出たという事になる
頭の考える事に非難の答えしか出ないのは組織を硬直化させるだけでうまくいない

隠して良いことと悪い事の判断は出来ているようだと一同は了解をした
並ぶ顔に確認を見た粉川はこの事件に付いての羽村の言葉をそのまま告げた

「政治屋さんには。。。事，チャイナスクールを黙らせながら，こちらの要求にそって働いてもらわないといけませんから。。。だそうです」

宗像は，またも半分も吸わないままタバコを押しつぶすと軽く手を打って
「大洋州局長会議は明後日か。。。。。」

頭と体のバランス

防衛庁に詰める頭たる男たちもまた解決を別の形として求めている
ただ見逃したという事が問題ではない
見逃してやったという上からの態度で相手からの条件を引き出す
この国の防衛の多くはそうやって成り立っているともいえた

そして微力ながらも前進する国防を遵守しようと勤め，事件を大事
と認識している政治家もいる
事を無用に泡立てず，窓口を開いていく努力はまるで潜水艦の任務
のように人知れず動いて行く深海の世界であり政治の世界との駆け
引きでもある

「じゃあ不審船に対する訓練ってのは。。。。そのまま対潜訓練と
いうふうに受け取って良い。。。という事かな」

資料とファイルに一通り目を通した間宮は粉川に聞いた
「表向きはそうだとは言い切れませんが，会議に会わせてこの演習
をやる意味はあると思います」

明朗な答え方に
間宮も吹っ切れたように笑顔を見せた
「演習にもスリルがあったほうが張り合いがあるというものだね」
「不謹慎な」

山になった灰皿を替え
新しいタバコの封を切った宗像は戒めの言葉とは裏腹に美味しそう
に息を吹いて見せた

「君は実に風通しのいい男だな」

会議室の窓を少しひらき，粉川の人となりから情報は十分に信頼出来るものである事に感心した宗像は内心ではこの不思議人物に笑った

本来ならば不祥事の起こった艦艇を上からの目で厳重にチェックする側の人間のハズが，どちらかと言えば自分たちの味方をしてくれている事に
しかもそれが気味悪いものではなく。。。実にさわやかである事に
海の守りを長く勤めた男には心地よいものにも思えていた

換気ついでに開けた窓越し
「基地にこそ情報は必要だ。。。。」と素直な感想を漏らすと

「では明日の演習のＦＴＧはどうなっているのかな？」
自分の胸ポケットから演習についてのチェックを書き写した紙を見て聞いた

「僕が乗ります」
「君が？」

粉川は横に置いていた背嚢の上から腕章を取り出した
「相互監視もＦＴＧもアメリカとの演習じゃそんなに意味のあるものじゃありませんから。。。。僕は元海自ですし」

簡単に言う粉川の顔に間宮は声には出さなかったがやはり笑ってしまっていた
確かに海自同艦での演習であればパターンがあるため訓練指導は綿密に行われる必要があるが第七艦隊を主体とするアメリカとの合同演習に意見を挟める分けでもない
意見交換はあっても演習の作戦はもう決まっているというものだ

そうでなくとも急に起こってしまった災害派遣などで色々の分野の士官が忙しく働いているこの時期にわざわざ人を配置するのは面倒でしかないともいえる

「それはいいね。。。だけど粉川くんってホント何でも屋さんみたいだね」

言い当てられたというように頭を掻く

「まったくです，広報に丈夫な人間が少ないからってあちこち飛ばされてますよ」

そういうと足もとに置いていた背嚢を見せた

「これ貰った時もそうでしたし」

「その背嚢って陸自のカラーだな」

和田は気になっていたのか顔を近づけて聞いた

海自と陸自はよほどの事がなければ，今回の派遣で出された輸送艦ぐらいでしか一緒になる事がない

「陸自の新型なんですよ，なかなかの優れものですよ」

粉川はそういうと中から士官用の替えの制服を見せた

４０リットルは入るとされる背負いは，細かく手の入れられた使いでの良さそうな新型

迷彩服３型背嚢，まだ全ての陸自には行き渡っていないハズの一品

「君は陸自にも出向するのか？」

空気の入れ換えをした窓を閉めて宗像も海とは違う装備品を珍しそうに眺めた

「ええっ去年はレンジャーの見学，参加して。。。大変でした」

レンジャー。。。。

揃った宗像，間宮，和田は顔を見合わせた
陸自でも過酷な訓練を貸すことで精鋭を作り上げるというプログラムの中にある部隊

「参加したの。。。。」

さすがの間宮も驚いて聞いた
いや
普通なら驚く，個体としての人として極限の状態での訓練は聞くのも恐ろしいものばかりで有名だから
まず体力テストのハードルの高さに驚く
このテストに落ちると二度とレンジャーの試験は受けられない

「ええっ広報の人が自分では役に立てないから頼むって事で」
「テスト受けたんだ」

間宮以上に驚きの顔をさらした和田に粉川は首を振った
「テストまで受けたら長期間になっちゃうんで実戦だけ参加させてもらったんですけどね」

一同は粉川の笑顔の返事に答さらに驚いた
テストなしで実戦に組み込むなんて背広組に対するただの嫌がらせにしか思えなかったし
それなりに体格の良い粉川に泣きを見せてやろうという魂胆が見え見えだ

「それで全行程に参加したの？」

「はい」

満足げな笑顔の返事に言葉もない宗像達

レンジャー

2ヶ月間を実戦さながらの世界に自分を置くという

「食事は許されない」「歩くことは許されない」「寝ることは許されない」「休むことは許されない」この上，極めつけの「教官，助官は神様」という5ヶ条の下で成される修練など言葉で言うのが安いと感じる世界だし

海自の面子には絶対に縁のない地獄で自分から関わりたいとも思わない

呆然の一同の前

粉川は思い出を懐かしむように背嚢を触りながら

「一緒に参加した「鈴村」ってのが良いヤツでした！終わったときにコレをくれたんですよ「オマエはオレ達の仲間だ」って。。。。嬉しいですよね。陸も海も国を護ろうって心が一緒なんだな，そう実感しました。これはその時の思い出の品なんです」

照れるように思い出話をする姿

過酷の代名詞をあっさり駆け抜けてきた粉川の笑顔に，間宮は苦笑いと共に

「参ったね。。。粉川くんはスゴイわけだ」と本心から感心し

それが隊員達に良い影響を与えている事を実感し

誰よりも自衛隊な男であった粉川を快く思った

監部での挨拶と明日の打ち合わせを終えた粉川は立神のバースに向かって歩いていた
明日から演習にでる艦艇『くらま』『こんごう』『いかづち』『はるさめ』にはすでに隊員達が乗船したまま待機の状態になっている
凪いだ港の海の上に巨漢を休ませている艦達の姿は，鋼鉄の固まりだけど粉川にとっては安心感の固まりにも見えた
この船達が日本の盾となってココにいる事に心が安らぐのは何も自分が自衛官と言う状況ばかりでないと思っていた

自衛艦旗を降ろす時間まで後少し
艦のマスト越しに低くなってきた冬の太陽の日差しを手で避けて久しぶりの隊員達に手を振った

粉川の帰還（出向）に外で夕方に向けての課業をしていた隊員達は，手を振る
事務方とはいえココまで評判がいい出向員というのもめずらしい
艦の上から喜びの顔で敬礼と共に

「粉川一尉も演習にでられるのでありましょうか？」という質問を大きな声でした２０歳そこそこ赤ら顔がまだ若さの証の隊員に
「ご一緒させてもらうよ！！」と手を振った

足早に向かう先は艦魂達の寄宿舎

「挨拶は大事だね」

粉川は自分の胸に言い聞かせながら，久しぶりに会う護衛艦の艦魂達に挨拶へと向かった

「粉川の帰還を祝って乾杯！！！」

高く音頭をとったのは『むらさめ』は
キッチンブースとソファの間に立って急遽帰ってきた粉川の為に仕
入れたビールを高く挙げて乾杯し
それに声を合わすように消灯までの少しの時間で「お帰りなさい会」
が始まった

久しぶりに訪れた艦魂達の共同部屋には前回ほどではないが多くの
艦魂が集まり
相変わらずの女だらけの間に粉川は少しばかり恐縮した形でイスに
座り周りを見回した

「前にいた子がいないね」
目の前のソファーに座る茶髪のウェービーショートヘア『はるさめ』
の気怠く崩れた姿勢からチラリと見える豊満な胸，視線を反らしな
がら
送別会の時には彼女にへばりつくようにしていたメガネの女の子が
いない事に気がついた

「はーちゃんわぁ～～災害派遣でドナドナと連れて行かれたよ～～」

間の抜けた返事に笑いが響く
聞くにかなりの笑い話

突然決まった災害派遣で出港を余儀なくされた『はまな』は，整列
敬礼で佐世保の全艦魂が見守る中，自艦の甲板で涙涙の姿だったら

しい
というか泣き崩れつっぷしていたらしく，ある意味凄まじい姿は笑い話しにしかならなかったらしい

「はーちゃんわ～～寂しがり屋だからねぇ～～かわいそ?」
いつも連れている『はまな』を本当に心配しているのか?『はるさめ』は緩い声で話しながらビールを煽った

ソファに転がる妹『はるさめ』にもたれかかった『むらさめ』はめんどくさい事だったと声を荒げて

「たくよぉ今生の別れみたいにピーピー泣きやがってみっとねーつーの」

相変わらずの雑言
スポブラにウォームアップパンツを腰穿きした『むらさめ』は，うっすら割れた腹筋を見せながらｍｙジョッキを煽った。。だが中に入っているのは酒じゃなくて烏龍茶

「そういや前髪長い子もいないね」
笑い話に便乗しながら前回は「河内弁」に近いしゃべりで自らを「ワシ」と称していた子もいない事，送別会でチラリと見た顔だが粉川は覚えていた

「僕以外とみんなの事をおぼえてるなぁ」
物覚えの良さは意外と自慢

「『うずしお』は。。。。アレよ」

苦い返事で目を泳がせた『むらさめ』に

キッチンからコック姿の『いかづち』が姉の肩を叩いて料理を突き出した
「運んでぇな!!」
急な食事会だったのにいつになく陽気な事で

「連絡してくれたらもっとエエもん作れたのに」
メガネを曇らせながらも次々と料理を突き出す姿が
連絡とれという言葉に粉川は苦笑いして

「一応『しらね』さんに頼んだんだけどねって，どうやって連絡とるの？電話のしようがないでしょココじゃ」
「できるで電話!!きり姉が繋げてったんから」

キッチンに入ったまま手早く料理を拵えながらも『いかづち』はブースの端に引っかけてあった接続用端末を見せながら手を挙げた。
携帯電話にも似ているが備え付けの受話器だけのような物にケーブルが垂れ下がった形のもの，何故か形は黒電話

「番号あるの？」

艦魂達が電話を持っているなんて以外な返事に粉川は真面目に電話番号を聞いたが

「そんな話より粉川さんの歓迎でしょ」と一番の姉である『しまかぜ』が開いていた粉川のグラスに酌をするために目の前まで来ていた
細い指先，キレイに整えられたネイル
相変わらずな美人さ加減についビールを煽って酌を任せてしまう

「いゃぁ。。相変わらずお美しくて」
つい鼻の下も伸びる

ココの艦魂達の中では一番のお姉さんになる『しまかぜ』の酌に酒が進む
十分に恋愛対象になる姿はいつ見てもいいものだと目尻を下げてしまいながらも酔ってしまう前に確認を

「『こんごう』ちゃんは？」と女だらけの部屋をもう一度見回した最初に見たときにも居なかった事だけは覚えていた

「また部屋ですか？僕呼びに行きましょうか？」
「やめろ。。。。また死にてぇのかテメエ」

送別会は。。。凄かった
『こんごう』が着替えているところをオープンドアしてしまった粉川は飯にありつくことなくサンドバックと化したケンカの制止に入った『むらさめ』は煽りを食らって酷い目に遭っていた

「粉川はんが行くことないで。。。。わてが呼んで来て」
それでも性懲りもなくイスから腰を上げた粉川の姿に慌てたように『いかづち』がブースから飛び出して手を掴んだが

「仲直りしたいんだ」
粉川は笑顔で答えると掴まれた手の相手に
「大丈夫今日はちゃんとノックするから」

「ノックするな」

心地よく酔いの回った粉川の声に硬い声がぶつかる
歩を進めたドアの前『こんごう』はいつもの怒った顔で立ったいた
長い栗色の髪は洗ったばかりなのかストレートに近く

青い大きな瞳は相変わらずの澄んだ湖のような輝き。。。でも口はへの字

「まったく。。。何しに戻ってきたか。。。。」

不遜も前と変わらぬ態度でしかし
そんな相手の事などお構いなしの粉川は

「やぁ『こんごう』ちゃん!!戻ってまいりました!!明日からの演習もよろしくね!!」
ソファーの横に立ったままビールジョッキを高く挙げるとテーブルにあったビールを『こんごう』に渡して

「僕の帰還を祝って乾杯しよう!!ねっ!!」と手に持ったジョッキを乾杯と差しだそうとした瞬間
まさに一瞬で『こんごう』は中ジョッキを飲み干してしまったどこにもつまることなくすんなりと喉を通りカラになる絵を粉川は目を開いて見ていた

「じゃあな」

あっけなく飲み干したジョッキをキッチンブースに置くと部屋に帰ろうとしたが
目の前の光景をただ呆然と見ていた粉川の何かに火がついていた
元が体育会系の粉川は目の前で起こった素晴らしい一気飲みに心が躍っていた

「すごいね!!!いいね!!もう一杯!!」

肩を掴んで無理矢理『こんごう』にジョッキを持たそうとするが，
手を振り払らわれ
部屋に戻ろうとする
いつもならココで引き下がってしまう粉川だったが。。。つい背中に

「もしかしてそれで限界?」

ほどよい酔いが挑発の言葉を吐き出してしまった
顎挙げた怒りの目が振り返る，忌々しそうに『こんごう』は目を光らせると
「オマエのような軟弱者に負けるか!!」

そこからは競技だ

2．3杯見る見る杯重ねる2人
どちらも喉越しなんて無い。。。蛇が卵の丸飲みをするがごとくに
一気飲み

「やるねぇ。。。。。」相手の女の子を讃えながらも負けん気全開の粉川
「諦めろ。。。。」たかが「人」に負ける気などサラサラの『こんごう』

どうしてそうなってしまったのかワカラナイ異常な酒飲み空間を他の艦魂達は呆然と見ていた

5杯目のジョッキを満たしたとき粉川は懐かしい感覚を思い出していた
高校の頃にはすっかり飲んべえだった粉川だが
最初に酒飲みの競争をした相手は。。。。。

「『こんごう』ちゃんって。。。17歳？」

不意の質問。。。急ピッチの飲酒にもまだ余裕のある粉川は背筋を伸ばして『こんごう』の顔を真正面に見つめて聞いた

「なんで？」

負けじと杯を満たしていた『こんごう』は急に回り始めた酔いを相手に読まれぬようにつり上げた目のまま聞いた

「いや。。。なんとなく似てるんだ，今まで，なんか『こんごう』ちゃんって誰かに似てるなぁって漠然と思ってたんだけど。。。知り合いに」

今ではない昔
母親代わりになってくれた彼女は出会った頃いつもツンケンしていた
「人」付き合いが苦手なのか，ぶっきらぼうなしゃべり方で良くケンカもした
色々な事を聞いてもなかなか答えてくれずに。。。

今回，横須賀に帰ってきて姿を見た
そう言えば尖った感じの目などはよく似ていた
粉川の愛嬌の良い目が真ん前，懸命に目力を維持している『こんごう』を見つめて

「お酒も強いんだよ」

懐かしむように
どんなに競っても彼女には勝てなかった
いや

本当は酔っぱらっていたかもしれないけど，朝にはいつも平気な顔をしていた人
意地っ張りで負けを認めない人

「似てるなぁ。。。うん。。。意地っ張りなところとか」
「私は意地なんか！！」
酒でだいぶ赤くなっていた頬だっが耳までを真っ赤にした『こんごう』に粉川は満たしたしたジョッキを手に持ったまま

「そういうところが可愛いんだけどね」

少し遠い目の粉川の前，真っ赤な顔のままの『こんごう』は俯いてしまった
が。。。
二人が視線を外した瞬間粉川の膝がガクンと揺れた

「あれ！！！」

自分でない第三者の力が膝に後ろをチョイと押され前に向かって体が折れる
不意のショックに酔って鈍った粉川は回避できず
けたたましい音ともに倒れたが本人が覚悟した程のダメージの無さに

「びっくりした。。。意外と床が柔らかくて」
ジョッキはダメかと手放したが破損の音も響かず自分もこのまま床に一直線かとおもったが。。。。柔らかい

「手。。。。。手。。。。。」震えるような声が聞こえる

上げた頭
顔の前には二つの山を掴む自分の手
「柔らかい」
つい。。。。。揉む

そして軽い断絶音

「貴様ぁぁぁぁ！！！！」

絶叫にやっと事態が理解できた
自分を床とのガチンコから守ってくれたクッションは。。。『こんごう』の体で。。
その手に掴んだものが。。。彼女の胸で
それをつい。。。揉んだ自分

「柔らかかったです。。。。ハハハ。。。ハッ！！いや！！まって！！！わざとじゃ！！」

ガードの手を前に出したまま硬直する粉川の前，涙目なのにフェイズド．アレイ．レーダーを輝かせ渾身の拳を振りかぶった『こんごう』

面前の嵐

このインパクトから逃げられるほど粉川の脳は動いていなかった
顔面鼻っ柱直撃のハープンはドラム缶の底を叩くようなニブイ音を大きく響かせた

急展開の場所に部屋に集まった全ての艦魂が硬直し目を見張っていた
両手を挙げたまま目をつむった粉川の前
フルスイングの拳がが当てたのは間を割って入った『いかづち』の
フライパン

『こんごう』は目の中をグルグルに回しながらその場にまた倒れた。
。。。顔は真っ青，拳は真っ赤。。悶絶のまま

「アカンって!!なんでいつも暴力なの!!」
状況が飲み込めない粉川をかばって怒鳴る

「『こんごう』!!わざとじゃないって粉川はん言ってるのに!!」
最早そんな激怒など耳に届かない悶絶中の『こんごう』

「やったわね。。。。『はるさめ』」

緊急発生の事件に釘つげになっている者たちをよそにソファーに寝
ころんだまま
イタズラな目を喜ばせている人物
実は粉川の膝を押した犯人に『しまかぜ』は厳しい目線を向けた

「酔っぱらっちゃったぁ～～～」

反省のない声とは裏腹に挑戦的な視線

目の前収拾がつかなくなった3人を見ながら『しまかぜ』は溜息をついた

「明日から。。。。演習。。。」

困ったことに今回は参加しない『しまかぜ』は粉川を廻って妹の背中を押す『はるさめ』を含む当事者の2人が出港を控えていることに嫌な予感だけがよぎった

「問題起こさないで頂戴よ」

釘を刺す言葉に『はるさめ』はお返しを。。。これまたわざとらしい程にトロンと，しかし棘を存分に含めて返した

「『しまねー』みたいにちゃんと隠すから～～大丈夫よぉ～～～」

波乱の種は静かに笑う

演習までの時間は後，少し

第四十七話　波乱の種（後書き）

カセイウラバナダイアル～～～ＨＰを作ったよ編～～～

年取ってから。。。
色々名事に挑戦出来るのは良いことかもしれませんｗｗｗ
無料のものですが
何個かＨＰを作りました
ヒボシがＰＣオンリーの人なので自己中心的に付くって失敗したものが。。。実は２つあります。。。
無料だからいっかｗｗｗ
ほっとけば消えますよねあんなの

そんなこんなで
色々まだ足りないＨＰですが
艦魂を愛する作家のみなさまご来店をお待ちしてますぅぅぅ

アドレス

ｈｔｔｐ：／／ｃｈｏｃｏ２．ｊｐ／ｉ．ｐｈｐ？ｉｄ＝ｍａｒｕｇｏｔ０７０７

携帯でもＰＣでも入れます
正規版を黒鉄元帥が作成してますからそれまでのつなぎですが
できるだけ使ってやってください

みんなで楽しみましょう！！！

そうしてくださると作ったかいもありヒボシがちょっぴりうれしいからｗｗｗ

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第四十八話　神の使徒（前書き）

さばの缶詰にあたった感じです・・・
もうダメだぁぁぁ

第四十八話　神の使徒

「結局いつもどおりで．．．ごめんなさい」

薄暗い裸電球が連なる細い廊下を出た先，簡素な円形シャンデリアが並ぶホールへ降りる階段の途中で『しまかぜ』は含み笑いをしながら粉川に謝った

「いいえ，それより『こんごう』ちゃん大丈夫ですかね？」

不用意な粉川の手がまさぐって締まった豊かな胸に対する迎撃の拳の行く末は

まさかのリフレクト，自分が放った渾身の一撃が『いかづち』のフライパンにより自分に戻るという大ダメージ

『こんごう』の右手はニブイ大音響の下真っ赤になり，本人は言いようのない痛みの中で真っ青になっていた

さすがに気の強さが悲鳴を上げることを拒んだか．．．

しかしそれ故に余計に滑稽にみえる悶絶の図

思い出すに粉川も顔が緩んでしまった

「『こんごう』ちゃん．．．自分の一撃の強烈さをやっと知ってくれたかな？」

声なくその場に崩れ，涙目のまま唇を噛んで真っ直ぐに結んだ『こんごう』は数分の悶絶の後，結局食事を食べることなくそのまま部屋に退場していた

そんなに我慢しなくても?と声をかけたくなるほどに・・・・

哀愁に満ちる空間の中
誰もが声のかけようがなかったが
今までは躊躇無く他人に食らわせてきたであろう一撃の痛みを知る
のはいい勉強だったかも知れないと

そんなニュアンスを含めた粉川の笑みに

「きっと良い勉強になりましたわ」

意図を汲むように柔らかい言葉と笑みを返す『しまかぜ』
ショートボブの髪を揺らしながら階段の足もとを月明かりがてらす

「しかし・・・彼処まで意地を張らなくてもいいと思いますけどね」

粉川は顔を笑いに緩ませながら正直な感想を告げた
そのぐらい『こんごう』の涙目にだんまりの姿は子供が意地を張り
すぎて泣くにも泣けず,戻る場所を無くしてしまったようにも見えた

十分に夜の闇がおりた,冬を近づける透明度の高い闇の下
艦魂達の寄宿舎,見本となる江田島に習った作りの壁に細い指先を
走らせながら
小さくく笑い頷きながら『しまかぜ』は

「意地っ張り・・・そうだったかもしれませんね,『こんごう』は」

降りる階段の途中足を止めて
何度もこの道を行き来した思い出と目の下に,図書室のドアを見な
がら

「でも，意地を張らせてしまったのは私達なんですけどね」

物憂げな瞳を顔に浮かべ，自分の中に強烈な思い出として残ったあの日を思い出していた

自分ではない「自分」「金剛」を欲していたのでしょ！と泣き崩れた『こんごう』はそれでもこの国の護りの船として生きる道を歩むしかなかった

逃げ場の無い場所に生を得た事に従い

自分の感情を押さえ込むことで他者との関わりにラインを引いて歩く姿は，姉の『しまかぜ』の目から見ても無用の意地を張り通しているようにしか見えなかった

そうする事で自分が「金剛」であるという思い込みを完遂するかのように

「僕，『ちょうかい』ちゃんから聞いたんですが」

そんな『しまかぜ』の心にある思い出を察したのか粉川は『こんごう』誕生の時起こった事件の話しをした

「聞いたんですか．．．その話し」

深い溜息

根の深い問題に粉川という「人」が踏み込んで締まった事を理解しながらも，知られたくはなかったのか瞳はくもる

それにも注意を働かせる粉川はいつもの言葉を投げた

「僕は皆さんの力になりたいと思ってます．．．だから『ちょうかい』ちゃんも僕には教えてくれたんだと思うんです」

先を歩るこうとしていた足がまた止まり
窓際からの
月の青い光と，ホールを照らす乳白色の柔らかい光を半分に受けた
『しまかぜ』俯き手すりに寄りかかった
仄かに酔って赤くなった頬に手を置き

「あの子達は本当はみんな傷ついてるのかもしれませんね」
「あの子達．．．『こんごう』ちゃんも．．．『ちょうかい』ちゃんも，ですか？」
一歩先に行った彼女と同じ位置に進んだ粉川は反対側の壁に添うように立った

「名前を引き継ぐ者．．．栄光の帝国海軍の魂を受け継ぐ者．．．」

『しまかぜ』の口から漏れる記譜のような言葉
本当はそれを三笠に問いただしたかったが答えを聴く前に語られた艦魂の驚愕の正体に聞きそびれていた

「魂の引き継ぎ？」

２人の間を静かな沈黙が流れる
聞くことが憚られる，彼女達現代を生きる艦魂達にとって心に刃物を指すような質問だったのかも知れない．．．
そう思いながらも粉川は前を見て進む事を選んでいた

断絶を追っているのが現在の艦魂の側にもいるのならば「絆」を導き出す答えを求める方法も増えるというもの
粉川は艦魂達の間にある古い伝承の言葉を静かに投げ，面前で沈黙している『しまかぜ』の持つ，答えをさぐり出すように聞いた

「魂の・・・・・」
「わかりません・・・ただ私達は栄光を担う次の世代として，その名を頂く・・・だけど」

仄かな酔いの中にいても『しまかぜ』の気持ちに滑りはなく聞かせて良い答えを吟味して話す
だが，表情には曇ったものが腫れる事がない・・・嘘の余裕などない程に根の深い問題である事をわからせてしまう程に

栄光の名前・・・それが起こした悲しい事件の記憶

イージス艦の姉妹達に付けられた名前はわかりやすい「帝国海軍」の名前が多い
もちろん
『しらね』の姉妹である姉達なども『はるな』『ひえい』と帝国海軍が誇った戦艦の名前を持っているし
『しまかぜ』だって帝国のもった艦の名を頂いてはいたが・・・

「金剛」ほどの期待を寄せられた艦はなかった

その期待が対岸の大国に「軍国主義」の復活と大きく取り上げられるほどに

それ程の非難を受けることが艦魂達にとっての期待の大きさにも比例していた

往年の「戦艦」に匹敵する現代の護りの要として産まれる艦『こんごう』に特別な期待を全ての艦魂が持っていた

途切れてしまった糸を懸命に辿るように

何度もその想いが達せられなかった事を知りながらも
募る思いを蓄積してしまっていた
結果
叶えられたいという願いの重さが・・・・真っ白な心で産まれた『こんごう』を傷つけた

廻る脳裏の思い出に区切りを付けた返事
顔を見せないように背中を向けた姿は言う

「私達は・・・探しているんです，かつてこの国を護った姉達の意志が私達につながっているという証拠を」

辛い思い出だった事に，答えを探しているという『しまかぜ』

「私達ってホントに帝国海軍の末裔なのかな?なんて思うときもあるんですよ・・・だから・・かな・・・」

探している者
三笠との間に作られた「断絶」を現代の艦魂達も探しているという事を再度確認した粉川はとりあえずその事にはふれず

自分たちも同じく，仮初めの平和の中で弓を引き続ける立場を．．．
国民の理解の得られない国防で彼女達に辛い想いをさせているという事を告げた

「僕たちも同じですよ．．．かつてこの国を護った者達にならい，この国を護ろうと思っています．．．なのに国防が護るべき国民に理解してもらえないのは辛いし，それで皆さんの力になれないのが現状ですけど」

悲しそうに目を伏せてしまった『しまかぜ』態度が『こんごう』が自分を押さえつけた生き方，乏しい感情表現しか出来なくなった原因の一つである自分達の絆を見つけられない事に不安を感じている事が良くわかった

同時に，そんな心を抱えままでも国防に徒事する彼女たちに労いの言葉も与えられない自分たちにも責任がある事を思い出していた

「情けない事ですけどね，私達って．．．この国の生きて，お役に立てているのかなって？．．．．」

止まっていた足を粉川より一歩前に進めた『しまかぜ』は見せない顔のままで
それ故に細い背中が語る寂しさが伝わる

粉川は顔の見えない背中に答えた
「当然です，皆さんがいる事で「力」の均衡を保っているのですから」

言い訳のような返事をしながら粉川の頭には，三笠の言葉が頭をよぎっていた

「断絶の原因はオマエ達「人」にあるのでは？」
確固たる態度で「国防」を示せない現状に日本に
小さな島国でありながらも独立した国家としての権威を護る事に誇
りを持って生きてきた三笠

「妾達と今の艦魂では生きている意味が違いすぎる」

ただのＤＤであっても何故か国を護る事に対して反対を受ける
不可思議国家日本

そんな国にあってＤＤＧというミサイル誘導を可能とした迎撃の盾
を持つ艦艇
イージス艦の姉妹達
国を護る最先端のシステムを搭載するのにかかった費用は６００億
といわれ
ソビエト崩壊以降無用で過剰な装備である高級艦艇は色々な方面か
ら叩かれていた
「人」を，
この国を護るという国家にとって一番の仕事をこなす備えを持って
産まれたのに．．．祝福も労いも頂けない魂の気持ちはどんなものか

感情を殺し
自分を押さえつけてる事で自分であろうとする『こんごう』姿はそ
のまま自衛隊の姿でもあった
そのうえで

期待された名前

期待された絆を得られず・・・艦魂達の希望に添うことの出来なかった彼女

「なんか・・色々スイマセン」

振り返り階段の手すり側という不安定な場所に立つ『しまかぜ』の姿
壁にもたれかかった粉川は自分が陸(おか)にへばりついたつまらない「人」であり
現状，心までもを不安定な場所に追いやられている海自艦魂達の事を思って頭を下げてしまった

「粉川さん!!いつもあやまってばかりですよ!!」

粉川の隊員のお手本のように起立から静かに下げられた頭に『しまかぜ』は慌てて手を取った

「粉川さんは・・・良くしてくれてますよ!!私達粉川さんに会えて良かったと思うもの」

『しまかぜ』は畏まってしまった粉川に明るい笑顔を取り戻すと
５０年・・・「人」と出会うことのなかった日本の艦魂達にとっても奇蹟の出会いを本心から喜んでいる事を告げた

「５０年ぶりか・・・・」

「私・・・粉川さんが私達と会ってくれる事で私達が少しずつ変わってきた事に，私気がついてるんですよ。『こんごう』も少しずつだけど変わってきているて感じられるんですよ」

優しき艦魂達

どれほどに自分たちが立場を悪くしている国民がいたとしても・・・
国に尽くし今まで「人」に会えなかった時間をどれほど葛藤してきたのか？
『しらね』のように問題に立ち向かってくれた司令がいて
みんなの良き姉である『しまかぜ』がいてくれる事に粉川は

「いいえ僕の方こそ，ホントに感謝してます」と顰めた眉の下で笑って見せた

そう言うと近づく玄関の前でカバンの中から写真を出した

「一群の皆さんと撮ったんです！！『くらま』司令に渡してあげてください」

しんみりたお別れは粉川の苦手とする所だった
そういう意味では良い手土産である写真
封筒を開いて
並び笑顔で写る一群艦魂達の姿を見せた

「たくさん撮ったんですよ！！集合写真！！今度二群でも撮りましょう！！」

急だが場を和ます術はよく知っている粉川のノリと，手渡された写真に『しまかぜ』は吹き出した

「こんなの見せたら『くらま』が怒っちゃいますよ！！」
あれこれとポーズをとって写真に写る公称「クリエイティブ集団」の一群の写真はファッションショーの裏側を覗いたような騒

がしさを十分に伝えていた

「あら・・・『しらね』まで・・・」

今まで曇っていた顔に一気に明るさを取り戻す

「びっくりしてませんでした?写真に写ることに」

『しまかぜ』はかなりの数ある写真の束を手早く覗きながら聞いた

「びっくりしてましたよ・・・それにスゴイ話しきいちゃいました」

自分たちは写真に写らない

そういって妹『くらま』を思い出に残そうとした『しらね』の話し

を粉川はした

その話しに『しまかぜ』は目を丸くして

「『くらま』が・・・三つ編みのおさげをしてた・・・初耳です」

粉川以上に長い付き合いのある相手が産まれたばかりの頃・・・そ

んな「女らしい」姿をしていた事は『しまかぜ』も初めて知った用

で思わず大笑いしてしまいそうな口を必死に抑えて

「今度聞いてみます」

静かすぎる講堂に響いてしまいそうな笑い声を堪えながら

「そう言えば粉川さん・・・三笠には行かなかったんですか?」

急な話題の転換に粉川は思わず顔が固まってしまった

「なっ・・・なんでですか?」

笑いを堪えた口のまま『しまかぜ』は不思議そうに首を傾げた

「いえね，私達が見える「人」にとって横須賀に行ったのならば戦艦三笠に興味はなかったのかな？と思って」

「と．．．言いますと？」

重厚な扉の前に立った2人、やっとで笑うお腹を止める事が出来た

『しまかぜ』は真面目な顔をして

「私、あそこに行ったことがあるんです」

わざとらしかったのかも知れないがそれでも三笠との約束で存在を告げる事が出来ない粉川は背伸びしながらも驚きの目を泳がせていた

三笠からは

何人かの現代艦魂が来たことはある程度の話しは聞いていたが目の前の『しまかぜ』がその1人であるという事実は初めて知った

「いるんですか？三笠．．．さん？」

取り繕うようにだが平静を装う笑顔の前

『しまかぜ』は真面目な目で

「私もそうですけど『しらね』も行ったことがあるんですよ．．．私達が日章旗がある基地以外で足をおろせる場所は同じ魂を持つ船の上だけです．．．そういう意味ではあそこに艦魂は生きているのだと考えられます」

「つまり．．．入る事が出来たという事ですか？」

無闇に話しを断ち切れば怪しまれると考えた粉川は『しまかぜ』がどこまで三笠との接触を持っているのかを聞き出そうと考えた

「感じました・・・彼処に三笠様がいらっしゃることを」

輝いていた目を伏せてきつく胸の前に手を当てる姿
「会えたんですか？」

「いらっしゃるんです・・・そこに、なんて言うか直ぐ近くに・・・なのに姿も声も・・・どうしてでしょうか？」
弾むように会話していた声が深く沈む

「どうして・・・会ってくださらないんだろうって・・・」
自分たちに会おうとしない三笠・・・それが意味するものは

「私達が・・・海自の艦魂は不甲斐ない魂だから・・・誇り高き帝国海軍軍艦の魂である三笠様は・・・姿を見せて下さらない？そういう事なのかなって・・・」

「今度，僕行ってみますよ！！」

『しまかぜ』の胸を押さえる姿
意味するもの
断絶によって帝国海軍の血統と認められていないのではという不安がわかる

でも
ホントは違う
三笠だって会いたいと思っているという事を，今は伝えられないけど．．．確かにそこにいて日々海自の艦艇の行く末を心配しているという事を

少しでも気持ちを和らげてあげたいという思いは
無理にでも明るく『しまかぜ』の肩を叩いて

「楽しみが増えました！！今度横須賀に行ったら，見てきます！！」

心苦しいのはお互い
粉川は言い訳だったが明るくある事に努めた

ドアの外まで送った『しまかぜ』が姿を消した時
江田島をまねた寄宿舎は姿を消しいつもの煉瓦倉庫に変わった
月は高く
闇の高い部分までに冷たい空気が入っている事を示す澄んだ黒を遠くの宇宙まで繋げている

「三笠．．．みんな会いたがってるよ．．．」

ドアの向こうに消えていった『しまかぜ』の背中は酔っていたせいもあるのか本当に寂しそうだった
粉川は何度か拳を握り替えして
自分がやろうとしていることの意味，間違うことなく大事な事であると確信して

「絶対に君たちをつなぐ絆を見つけてやる」と自分の胸に向かって誓った

「クリスマスカード・・・ありがとうございますぅ」

払暁，朝日が海の上を1つの矢のように走る時間は空気までをクリアに変えた静止画像のような世界だが
明日より始まる演習海域に向けての今日より出港する佐世保艦艇達は忙しく・・・・あるハズの時間・・・

旗艦『くらま』のヘリデッキには演習参加組として揃った『こんごう』『いかづち』『はるさめ』
基地待機と見送りに並んだ『しまかぜ』を前に後ろに『むらさめ』と『なみ』姉妹達に『ゆき』姉妹

そして・・・アメリカ第七艦隊，軍服の女

絵に描いたような外国人描写ができる青い瞳とパッキンさん，アメリカンだが身丈は『しまかぜ』と同じぐらいで，なのにバディはスゴイ！出るところバッチリのミニーグラマラスな彼女は『くらま』の前で胸を寄せ揚げのポーズでクネクネと腰を揺らしてカードのお礼を言うという
出港間際に何かおかしな光景が広がっていた

「良いクリスマスを過ごすために今年最後の演習に励みたいと思い

ます。エセックス司令」
「まあ．リーバと呼んで下さってかまいませんのに」
「そうはいきません．．．司令し職の方を愛称で呼ぶなど」

落ち着いた返事の『くらま』とは対照的なエセックス，どこかのぼせ上がった雰囲気でココに他の艦魂がいる事などお構いなしなのか

「じゃあ二人きりの時には呼んで下さい．．．リーバと！」

エセックス艦魂リーバは上目遣いに『くらま』を見ながら遠慮のないアタックをかましつつ，背中には威圧感を醸し出していた
時より海を見るように振り返る目は明らかに『しまかぜ』を睨んでいて．．．
『しまかぜ』の後ろに並んだ海自艦魂達は，何とも言えない気持ちになっていた

そんなやり取りを『くらま』の後ろに立った演習出港側の艦魂である『はるさめ』が嬉しそうに揺れて

「すごぉぉ～～い」

『いかづち』の隣に並んだ『はるさめ』はトロントした口調に付随する寝ぼけた目で熱い司令職達のやり取りに

「『いかづち』も，あのぐらいやらないとぉ～～～」
両手をハワイアーンとフリしながら顎をさする

「だまってぇな！！！」

出港のための敬礼の待ち，起立の姿勢のまま見物人にさせられている自分たちの前
遠慮のないエセックスのセックスアピールに恥ずかしいという思いを募らせていた『いかづち』は少し声を尖らせて近づく姉の顔を押し返した

本気の恋愛も時と場所ってものがあるハズだが・・・見ていて恥ずかしくなるほどの恋愛ビームを発するエセックスのクネクネに習うように『はるさめ』はフラフラと妹を嗾ける『いかづち』の耳元にもう一度顔を寄せると

「粉川さんにアタックぅぅ～～はるちゃん手伝うよぉ～～」

自分の事を「はるちゃん」という姉に呆れつつも隣の『こんごう』に聞かれなかったかと警戒する

『いかづち』は粉川の事が好きになってしまった事を前にラウンジで・・・つい口に出してしまった事を今更ながら後悔しつつもメガネを触って目だけを動かす
既に『こんごう』に乗艦し艦橋に姿が見える粉川をチラリと見た

「ダメよぉぉ～～『こんごう』ちゃんになんて遠慮しちゃぁぁ～～」

妹の目線の先をぼんやりした顔が追いながら
笑っている目が笑えない目の光りのままイタズラに光る

「何が？」

さすがに耳が良い
というか整列の端と端はそんなに遠くもない

自分の名前が間近でささやかれた事に『こんごう』は2人の方に向いた

「なんでもあらへんで！！」

ずり落ちそうになったメガネを抑えつつ
慌てて両手を問題無しと振る一人慌てる『いかづち』の後ろから『はるさめ』は顔を出して

「『こんごう』ちゃんに演習でも「実戦」でも負けないぐらいがんばろ～～って，何事も遠慮しないでねぇ～～～」
どこまで本気かワカラナイ『はるさめ』は緩く笑った

そんな3人にエセックスに捕まってなかなか離れられない『くらま』の代わり『しまかぜ』が前に出て注意をした

「3人とも，慣れた訓練だとは思うけど冷静に勤めるのよ」

そう言うと『こんごう』の手を取った
「痛い？そんなイタイ思い粉川さんにさせちゃダメよ」
昨日のリフレクトで赤くなった手の甲の腫れは引いている
艦魂の・・・・魂事態が持つ自然治癒は艦体である自分に物理的な怪我が無ければ素晴らしい再生力で治る・・・・でも
痛かった記憶が消えるわけじゃない

『しまかぜ』は『こんごう』の手をさすりながら
「『ちょうかい』にも言われたでしょ・・・・仲良くするのよ」
まるで子供を教える母のように
そんな注意に『こんごう』は恥ずかしそうに顔を背け自艦の艦橋に目を走らせた

粉川は艦魂達が並んでいる姿を見ていたのか大きく手を振っている

「別に・・・普段通りやる・・・べつに『ちょうかい』との約束だからなんて・・・関係ない」

送別会の時・・・『しまかぜ』に言われた言葉が『こんごう』の心の中に引っかかっていた

「粉川さんに会いたくないの？」

『ちょうかい』の事件の時に溜まっていたモヤモヤが未だ『こんごう』には理解出来ていなかったが，あれ以来どうしてもまともに粉川を見られない自分には気がついていた

手を振る粉川を無視して

「普通にやるよ・・・大丈夫」

その会話を『いかづち』は聞かないふりをしていたが

メガネの奥の目は・・・眉間に少しの険があるのは見えていた

そんな妹の肩を軽く叩く『はるさめ』は

「強敵～～～でも大丈夫ぅ～～『いかづち』にはあたしがついてるからぁ～～」

イタズラに笑わない目は口だけを笑わせて舌をペロリと舐めて見せた

いよいよ出港となった甲板の上

基地待機組との敬礼も終わった中で相変わらずエセックスは頑張っていたが

一応第七艦隊に置ける佐世保の司令職という建前上少し距離をとったところに立って

「無事のお帰りをお待ちしてますわ！」
と敬礼をしてアメリカ基地に戻ろうとしたが，つま先をピンと揚げたところで思い出したように『くらま』の袖を引いて足を止めた

「あの今回の」

袖を引いたエセックスの口に人差し指で沈黙と合図『くらま』は仄かな笑みで
「演習の中身については何も言わない・・・約束ですよ」

演習は艦の心である者達にとって修練の場・・・
不測の事態に備えるための大事な時間と捉えている『くらま』は「人」が実戦する演習行程は確認していても艦魂からの情報は決して耳に入れないようにしていた

「ちがいますぅ・・・ただ、気を付けて下さい神の使徒の名を持つ者が貴女を試すかも知れませんから」

それだけ言うとトドメの人睨みで『しまかぜ』を見て『くらま』の指にキスをすると光の輪の中に消えていった

『くらま』は風に飛ばされぬように帽子を押さえると・・・・
冬をよりいっそう近づけた風が海の上を走る中
全ての艦魂達は目標水域までの時間を静かに過ごしていた

明日からは対潜訓練が始まる

第四十八話　神の使徒（後書き）

カセイウラバナダイアル～～スケールキット～～

ヒボシが資料として集めている艦艇のスケールは一律７００／１なんですが・・・

今欲しいのは定遠，鎮遠ですｗｗｗ
厳島たんと並ばせてみたいのですよぉぉぉ
調べたら・・・日本のメーカーでは販売してなくて
怪しい中国のメーカーが一つあったのですが・・・・

これがホントに怪しい
全然写真の定遠にてないんですよｗｗｗ
何次の資料つかったらこんな船にぃぃぃって感じ
しかも戦艦なのに赤いんですｗ
これいかにですよ！！
遣唐使とか遣隋使とか・・・元寇の時の朱塗り船じゃあるまいし・・・何故って感じです

で
もう一つ見つけたのがポーランドかなんかのメーカーで
なんでポーランドかって言うと
フルカンの造船所ってドイツがポーランドを占領していたとこにあったからだそうなんですが
なんかプラモじゃないんです
スケールはなんとなくなあってるらしいのですが・・・
真っ白な固まりでつくってある「レンジ」というモデルらしく・・・
さすがにそれはヒボシに作るのは無理という感じなのですが

某サイトではこれをきれいに作っている人とかいて．．．．
売ってくれって感じですｗｗｗ

そんな色々な希望があるヒボシですが一番欲しいのは
２５０／１ぐらいになった厳島たんです！！！
プリンセスぅぅぅラビュぅぅぅって感じ
大木なのにして飾りたいの．．．．誰かつくってください

てか
市販では絶対に出なそうで．．．ふぅです

それではまたウラバナダイアルでお会いしまょ～～～

うぅぅさば缶詰．．．ロシアの罠かぁぁぁ

第四十九話　坩堝の中（前書き）

鯖缶詰・・・・恐るべし一行にお腹が回復しません・・・
ロシアの陰謀かこれわ！

第四十九話　坩堝の中

佐世保を出てしばらくした海は薄墨の空で，時折細かな雨を伴う雲
という白黒のまだらな世界が果てしなく続いていた
艦尾にある自衛隊旗も雨に湿った緩い揺らめきの中にあった

今日の演習海域は東シナ海域

1月前．．．そこでは海保の船魂が撃たれるという日本を揺るがす
事件が起こったばかりだった
血の赤色は簡単に消し流す事はできなかったのか？
大荒れだったあの日に続き空に笑顔はなく．．．暗く湿った冬を近
づける秋雨の雲も
冬の冷たい風に引きちぎられながらバラバラと足早く流れる中，少
ない雨を降らす

今回は東シナよりさらに沖縄に迫った海域でのアメリカ軍との共同
訓練
１０日ほど前に起こった
未曾有の災害に海自は3隻の護衛艦を出港させ，アメリカも空母エ
イブラハム．リンカーン，イージス駆逐艦ミリアス，病院船マーシ
ー等を派遣している状態でもありながら
たぶんに含まれた政治的思案を元に日取りをずらすことなく会され
る事になった

ある種の緊張を纏った海演

海自からは

作戦司令官乗艦の旗艦として『くらま』対潜戦略の要的艦と
防空の先手である『こんごう』それらの艦艇と情報を密にとり作戦
行動に参加する『いかづち』『はるさめ』

小雨に叩かれる深緑の水面の下にも
一群から参加の潜水艦１つと佐世保から１つ

かなり規模の大きな艦隊編成である

会するアメリカからは第七艦隊所属のカウペンス，乾ドックからの
修復をへて大規模な演習には久しぶりの艦であるが
湾岸戦争ではイラク領内に３０発以上のトマホークを撃った強者。
同じく横須賀からカーティス・ウィルバー，２隻とも型は違えども
イージス艦

そして作戦司令乗艦としてドワイト・Ｄ・アイゼンハワー・・・原
子力空母
こちらもオーバーホールを終えて久しぶりの大演習
世界的規模で起こった災害という場に協力する一方で，天災とは別
の側で対峙する「人災」の構えである演習はココに始まろうとして
いた

「何か企んでるかな？」

キャプテンシートから離れた艦橋からデッキに続くドアに寄りかか
ったまま，窓を打つ小雨の海を眺めた間宮は自分の後ろにとりあえ
ず形だけのチェックボードを持ちＦＴＧの腕章をつけた粉川に小さ
い声で聞いた

「実験的な戦略訓練をしたいという要請はありました」

手元に持ったボードで顔をあおぐ
いくら秋も深まったこの時期とはいえ男ばかりが詰める艦橋は蒸す
そうでなくても近づくオペレーションに色々と仕事が残っているのか
イージス艦『こんごう』でもっとも熱い男，船務士の和田はＣＩＣとの連携に余念が無く
手に持ったリストと睨めっこしたり各部に檄を飛ばしたりとしている中で

会話を普通に出来る場所にはなっていなかった

熱い現場の雰囲気から脱するように
間宮は粉川を目で「外に」と誘うと双眼鏡をぶら下げたまま小雨の降る艦橋横の見張りデッキに出た
吹き降りの小雨の下は肌を刺すほどの冷たさはなく
どちらかと言えば気味の悪い生暖かい風を伴っている
顔に落ちる雨の匂いを確かめる仕草，後に従って外に出た粉川に

「『くらま』に乗った石上（いしがみ）一佐の事．．．知ってる？」

間宮のイタズラっぽいしゃべり方で聞いた

いつもそうなのだが細身の顔に歳を感じさせない鍛えた体
腹回りが崩れないあたりに艦長就任までに「別の事」を頑張ってしまった将官クラスとは違う実戦向きな強さが感じられる護る事を仕事に置いた男らしい姿とはうらはらな声

言動までもが軍人様というところはなく，のらりくらりと本音をす

ぐには言わないアタリに奥深い考え方を感じさせる優男

一群の艦魂達にとって理想の男である間宮は
男盛りのいい顔を決して見合わせる事はせず双眼鏡を当てて遠い海を見回しながら『こんごう』の後ろを走る『くらま』に目を向けて

「僕はあまり知らないんでね，教えて貰えると少し助かる」
「防衛庁戦略研究部の方である事もですか？」

間宮にならうよ肉眼で曇った海を見回す粉川は抑揚を抑えた声で聞いた

「技研（防衛庁技術研究部）の人間だと思っていた」

わざとらしい笑みを返す間宮の前，嘘を付かない粉川は知っていながらも語らない相手を責める事はせずに朝の交信時に自分で書き留めた紙を開き考えた

表向き防衛庁は戦略研究に重きを置いていないふりをしているというか「戦略」という言葉が「侵略」とすげ替えられてしまう国民感情のために
大手を振ってそういう部署がある事は言ってはいない

だが，四方を海に囲まれ，エネルギーを遠い外国に頼る日本がこの先も生き残るためにはあらゆる「有事」に対する戦略が立てられているのは事実

注意を書き込んだ紙のにある石上の経歴に目を落とし

「とりあえず技研部付けではありますよ」

少ない雨であっても遮蔽物のない海の上を走る艦には斜めに注ぐ
粉川はファイルの中にチェックシートと紙をしまい，ボードだけで
顔に掛かる雨を払うように，艦橋部の隊員達から顔を隠すと間宮に

「技術屋上がりの戦略家・・・と言ったところでしょうかね」

間宮は『くらま』と後ろ単縦陣のまま進む他艦を追いながら
ウッドデッキに手をかけたまま砂を噛むような苦々しい物言いで
「先月までアメリカにいたのにな」
自分の中に残る，忌々しい記憶をたぐっていた

本庁から急遽出向してきた男

スーツ姿のまま黒い革張りの大型トランクを痩せた彼が大切そうに
抱えて艦内に入るの確認してはいたが
以降の連絡事項に彼の紹介は一言もなく予定演習の何に関わるのか
も知らされる事がない現状に間宮はひっかかっていた

「石上一佐とは同期じゃないんですか？」

彼を本来なら自分より知っているハズの間宮の遠撒きな質問に粉川は
今度は背中向けたままで間宮に聞いた

「同期・・・だね」

背中を向けたままの粉川の姿に
間宮の目は尖っていた
鋭い視線は双眼鏡を降ろし肉眼で今一度『くらま』の艦橋を睨む

「頭は良い人らしいじゃないですか，アメリカ軍の技術研究部でもたいそう活躍したというふれこみですよ」
「だろうね，ＭＩＴ卒の資格を持っている自衛官はそうそういないからね」
「リンカーン（リンカーン研究所）でも有名だったそうですが，懇談会には顔を出さないなど徹底したところもあり防衛庁ではそれほど評判も悪くありませんが？」

チェックボードで雨を遮ったまま粉川は振り返った
粉川は元々情報局の人間，パソコンを使って情報を得ることは安いもので
乗艦前に佐々木情報局次官との定時連絡ついでに石上一佐についても情報を得ていた

間宮と石上が同期である事は最初から知っていたが，それを隠すというよりも否定するようにしている間宮の真意を探そうとしていた

自分を見る粉川には顔の強張りの一部もみせず
気抜けした声で

「レーダー研究と戦略．．．日本国防．．．ＭＤ戦略における第一人者．．．か」
デッキに手をかけたまま方眉を上げると

「いやな目をしてただろ，アイツ」

そういうと艦橋に戻る方へ足を進めた
口元には不愉快が隠せない状態になっている

「天才は危険・・・・と考えていらっしゃいますか？」

自分の前を通り過ぎようとする間宮に粉川も横に歩いき肩を揃えた
位置でしっかりと顔を見据えて聞いた

「誰の言葉？」

「羽村局長が」
「羽村局長か・・・・局長も天才じゃなかったっけ？」

くるりと顔色を変え
明らかに話題をそらした返答だったが
「いいえ局長はただのヘビースモーカーです」
粉川も議題を外した返事を返した
相手の返答に手を振って艦橋に戻る間宮の背中

「時間までまだありますから，艦内回ってきてもいいですか？」と
態度を和らげてみたが
間宮はただ手を振るだけだった
それは洒脱な返答の仕草に見えてはいたが，顔には怒りにも近い険
が現れていた額をさするように自分の顔に出てしまった過去に間宮
はつぶやいた

「戦略に人の心は必要なし・・・・技術を使えるだけの人材を作れ
ば良し・・・・戦争に「義」無し・・・よって心を必要とする士官
必要無し・・・・だと？」

デッキから艦橋につながる壁に軽く手を打ち付ける

「石上・・・何考えてるかわからんが・・・思うようにはいかないぞ，実戦は」

自分の胸を叩くように言葉を飲み込んだ顔は
普段の飄々とした姿に戻るのに時間を要するほど強張った頬を叩いた後，目深に帽子を被りなおすと艦橋に戻っていった

艦隊勤務であれば『しまかぜ』を筆頭に仲間が集まるであろう部屋に1人『こんごう』は窓から見える水平線を見つめていた
通り過ぎる雨の海に少し前・・・・・取り逃がした狂気が潜んでいた
何とか自分の肩を流れる紙に手を触れて・・・気持ちを紛らわせる

テーブルに置かれたマグカップはとっくにカラになっていた
あの日を思い出すことで喉が渇く

『こんごう』は立ち上がって照らすの側から見える海に手をかざしてみた
冬服のダブル，下はフレアスカート細い指先が結露で曇った露に指を滑らす
思い出したくない日の事こそ鮮明に覚えているものである
ましてやイージス艦の魂である彼女には相手の輪郭から顔色まで焼き付くように残っているのかもしれない
激しく揺れ動く波の海を水色の瞳はただ見つめ続けていた

「『こんごう』ちゃん!!」

物憂げに外の景色に立ちつくしていた背中に粉川の声が掛かった
部屋に入り，周りをみまわし
「今日は一人なんだね？」
明るい声

「演習まで後数時間しかない・・・誰もこない」

相変わらずの冷たい返事に
スーツ姿以外の士官青服を着た粉川は
「そう？でもすぐには始まらないよ，新しい戦略実験もしたいという申請も入ってるてね」
手提げに入れていた自分のタンブラーのキャップを開くと
「まだ口つけてないからね」と言い
『こんごう』のカップに半分を注いだ

「緊張している？」
「誰が？」

突き放した返答は海をむいたままではあったが
ガラスに映る粉川の姿をしっかりと見ていた

「僕は久しぶりの演習だから，ちょっと緊張しているよ」
「だらしないな」

キツイ返答に苦笑いしながら
用意されたイスにカバンを置く
事実，久しぶりの海の演習に半分は心を躍らせている自分を抑えた

ように答えた男に

「私達は・・・・何時だって海の上にいるんだ・・・緊張などしないし何も変わらない」

まるで自分に言い聞かすような返事
産まれてきた世界は手狭で陸地をあまり知る事のない『こんごう』の答えは
どこか寂しさがあった
粉川の苦手とするしんみりした場を和ますように素早く話題を切り替える

「誰もいないと寂しいね!!呼ばないの!『いかづち』ちゃんに,『はるさめ』ちゃん?」

茶化すように手振りする粉川は立ち上がると海を見つめる『こんごう』の隣に立った
もちろん彼女のマグカップを持って
「紹介して欲しいなぁ」
「『はるさめ』をか?」

あきれたような声は粉川の手からマグカップを奪い取ると

「オマエって・・・・ただのスケベヤロウなんだな」

二の句を断ち切る棘の言葉
実際粉川に着替えを覗かれた事のある『こんごう』は顔に険を浮かべながら冷たい視線を流しながら言うが
通常のならかなりの勢いで男心を抉る台詞,だが・・・・そこは粉川むしろ無言やそっけない態度をいつもとる『こんごう』に相手さ

れた事を喜ぶように続けた

「いやいや艦魂の皆さんと親密になる事でね・・・色々知り合いたいでしょ」

「それで覗くのか？」

次の合いの手に凍る

「まだ・・・怒ってるの？」

「常習犯」

簡潔な罵倒，言われても仕方ない

ましてや最初は全裸，次は下着姿という覗きの順番さえ逆算したような出来事に思わず姿勢がピンと正される

「・・・わざとじゃなかったんだよ・・・・ホントに・・・でも怒ってるよね？」

顔を覗き込んで謝ろうとした粉川を避けるように

「しらん！！」

自分で言いだしたのに『こんごう』は思い出して顔を赤くしていた

「どちらにしても演習前には誰も来ないし！！紹介して欲しい艦魂がいるのなら姉さんに頼めばいいだろう！！」

「姉さん？」

気抜けした声は『こんごう』の顔を反対側に回って聞き直した

「・・・・『しまかぜ』に・・・・・」

「『しまかぜ』さん！ああっやっぱりお姉さんって呼ぶんだ」

誰の目から見ても年長の姉である彼女の事を『こんごう』もきちんと姉と認めていた事実を知って粉川は納得しながら手を打った

「『しまかぜ』さんはホントいいお姉さんだよね!!『こんごう』ちゃんもそうだけど」
慣れない会話が続く空間に困った顔のまま粉川に背を向ける姿

「オマエ・・・・私にちゃん付けするな・・・・」
「え?」
「子供扱いするなって言ってるんだ!!!私はこれでも国を護る仕事に籍を置く魂だ!!!・・・・子供扱いはされたくない!!」

振り返った抗議
それでも目だけ合わさないようにしている，どこかぎこちない『こんごう』に
「でもさ」
無理をしているように見える姿を押しとどめようとするが

「『こんごう』って言えばいいんだ!!」

自分の顔に向かって「ちゃん」と呼ばれる事を本気で恥ずかしいと思っているらしい彼女は少し頬をふくらませている
そういう仕草にまだ少女らしさがしっかり残っているのに，両手で抗議を押さえた粉川は
それでも『こんごう』の意見を尊重する大人な切り返しをした

「だったら僕の事も「オマエ」じゃなくって「粉川」って呼んで・・・軍務において「オマエ」じゃ指示はとおらないでしょ，これでお互い様って事で」

頭一つ自分より大きな男の余裕のある態度に少し悔しそうに項垂れた顔は期せずして上目遣いなまま

「じゃあ．．．．粉川，これでいい？」
自分で自分を呼び捨てろといったくせに滑稽すぎる

「はい，『こんごう』．．．これでいい？」

一歩近づいた
粉川は満面の笑みでタンブラーを前に出した
「演習頑張ろうね，乾杯しょ！！」
「変だろ？」
マグカップとタンブラーを会わせようとする粉川に，すっかり主導権を奪われている『こんごう』はおずおずと手を伸ばして最初にあった棘はなく，柔らかい否定をするが

「基地にもどっら，今度こそお酒！がっつり飲み明かそうね！！」
陽気な声で背中をポンと押して
「早く基地に戻りたいね」と朗らかに告げたが
『こんごう』は急に顔色を曇らせた

「オマエ．．．．．」

「やっほぉぉぉぉぉ」
粉川の背中に柔らかい衝撃
そのまま重量物の接触で押し倒される

「えっ！！」
タンブラーを落とさないように両腕を上に上げたまま店になった目はそのまま『こんごう』を巻き込んで倒れた

肉感的なニブイ音の雪崩の上で緩い声が

「あれ～～～失敗しちゃったぁ～～～」

「姉はん!!めっちゃ無理なハイラインやで!!」

倒れた粉川の上，背中に豊かすぎる胸を押し付けたままトロンとした目で笑う『はるさめ』の横，手を引かれて飛んできた様子の『いかづち』が顔をしかめて

「大丈夫，粉川はん!!」と両手でタンブラーを護った形のまま倒れている顔を覗いた

必死の顎揚げ

どちらかというと背筋運動のエビ剃りの姿勢になった粉川の下

2人分の重量に潰された『こんごう』が涙目になりながら怒鳴った

「何やってんだよ!!!」

圧力に寸前のところでブレーキをかけた粉川の体の下

ギリギリでふれあってしまう事を恐れ両膝，両肘で無理からぬ形で防御した『こんごう』は

自分の膝が見事に粉川の鳩尾に決まっている事に気を使える余裕はなかった

間近にある脂汗の顔の男の顎に

「どけよ!!粉川!!」

ひっくり返った声を上げた

そのあられもない

まるで女を押し倒したような姿になった粉川の手を『いかづち』が急いで引いた

「ちょっと!!粉川はん!!」
「どおして・・・普通に来ないの?」

つい
いつも思っていた言葉が飛び出してしまう
三笠も光による移動で自分を何度も海に落とした事を思い出し
艦魂が持つ力での移動は結構当てずっぽうなところがあるのではと
本気で思うほどのダメージから起きあがった粉川は

「だいじょうぶ?『こんごう』?」と声をかけた

寝っ転がったままの目が吊り上がった顔で『あめ』姉妹を睨み

「普通にこればいいだろう!!」と怒鳴るが

同じぐらいメガネの下で『いかづち』の目は尖っていた
粉川の背中に手を乗っけたままの『はるさめ』は反省のない声で

「ちょっとまちがっちゃっただけよぉ〜〜〜許してぇ〜〜〜」

体を起こして『いかづち』の耳に小さな声で

「ほら〜〜ちょっと目離すと『こんごう』って〜〜〜呼び捨ての仲だよぉ〜〜」
イタズラな垂れ目は挑戦的な光で，拳を振るわす妹を嗾ける

「ほら!!粉川はん!!どっかいたないか?」

まるで『こんごう』を無視の状態のまま

飛びつくように粉川の横に座った『いかづち』は手を握って
「ごめんな！！時間が余ったから．．．．会いにきたんやけど．．．
焦ってしまって」

鳩尾直撃で一度止まった呼吸を取り戻すように咳き込む粉川の背中をさすった
「びっくりさせないでよ『いかづち』ちゃん」

無事に護ったタンブラーからコーヒーを口に含み
困難になって乾いてしまった気道を潤しながら手を振って無事とゼスチャーした

そんな粉川の前に青服のボタンを胸の谷間ギリギリを見せつけるように外した『はるさめ』は
体を起こしながらも自分に対しての謝罪もない『あめ』姉妹を不愉快そうに見ていた『こんごう』と咳き込んでいる粉川を交互に見て

「あれ～～～ひょっとして2人で良い雰囲気だったところ邪魔しちゃったぁ～～～」

首を揺らし
嬉しそうな目でもう一度交互に見ると
「はずかちぃ～～～ごめんねぇ～～『こんごう』ちゃ～～ん」と舌を出して見せた
「何もしてない！！」
体育座りに自分を立てた『こんごう』は赤くした顔のまま立ち上がると

「時間はあって無い見たいなものだ！！演習に備える！！」
そこまで怒鳴ると大股で走るように部屋から出ようとした

「『こんごう』？どうしたのまだ時間あるよ！！」

粉川の呼びかけに止まることなく足音も荒く出て行く
嵐のように訪れた『あめ』姉妹と入れ替わるように消え姿に，息を
吹き返した粉川は眉を顰めたまま自分の隣にチョコンと座った『い
かづち』に首を傾げてみせた

「また怒らせちゃったかな？せっかく仲直り出来たと思ったのにな
ぁ・・・・」

やるせない思いが困った表情で頭を掻いて参ったと手を挙げたが

「なんで・・・呼び捨てなの？」

通路に顔を向けたままの粉川の袖を引いた『いかづち』は俯いたま
まいつもとは違う小さな声で聞いた

「えっ？」

震える声色の『いかづち』に粉川は
「どうしたの？ひょっとしてどっかぶつけたの？『いかづち』ちゃ
ん？」と顔を覗き込んだが鼻先スレスレで顔を上げて

「なんで！！『こんごう』って呼び捨てにしてるの！！わても呼び
捨ててもらってええで！！・・・って事」

頬を赤く染めた顔は話し続けていないと爆発してしまいそうな胸を
押さえたまま

「わても『いかづち』って呼んでぇな」

状況が良く飲み込めてないのか粉川は自分の前で赤くなっている『

いかづち』の頭に手を置くと

「『いかづち』ちゃんはそのままの方が可愛いよ」
粉川的には相手を思った発言だったが
『いかずち』は思わず乗り出しそうになったが，けたたましいアラームが鳴った

「これより演習海域に入る!!総員!!」
艦内を響き渡る激しい金物を作り会わせた人口音の響きの中，口を形だけ動かし懸命に話しを続けようとする『いかづち』だが，声は届きようがない
大きなベルの発令に粉川は腕時計を見直すと
「意外と早かったな．．．」と立ち上がった

「演習終わったら飲もうね!!」
動く口を読心する事はできたが声は聞こえない中で粉川はカバンを抱えて走って行ってしまった

「ざんねぇん～～～だから早く来ないとぉって言ったのに～～」

わざと息の届く程の位置に口を寄せ耳に語りかける『はるさめ』は，出遅れたという思いと撫でられた頭の感触に言えない感情を大きくさせた『いかづち』に

「『こんごう』ちゃん一歩リ～～ド，がんばろぉ～～はるちゃんがついてるからぁ～～」
どこまで本気かワカラナイ怪しい光の瞳は
優しさを全面に出して微笑みながらもどこまでも妹を本気へと駆り立てていた

エンタシスを感じさせる黒の銅管が溢れる湿った部屋の中で
彼女は祈っていた
黒い髪，波間にうねる海藻のような動きのあるロングヘアは狭く細い通路の端にある部屋で目をつぶったまま海の音を聞いている

大きな水の固まりは何度も艦体を揺らし
そのたびにニブイ圧力が低音のハーモニーを奏でる
その音に不似合いな広東語が断続的に．．．音感に添わない音を並べている

「エィメンなる者よ」

真っ白な肌
薄墨の唇からはおよそ思いつかない嗄れた声
瞳の中に赤と青の輝き，それだけが無彩色で落ち沈んだこの部屋に彩りを与えていえ
うっすらと誰にみせるでもない微笑みの中で手を重ねて跪く

「古より力やどし魂達の元に祝福あらんことを，今日この日の試練のために働く水面の魂に平安がありますように」

小さく纏められた祭壇の中，何も飾られない空白にむかい薄く開いた目は続ける
「我ら魂の下，暗き足もとを照らしたまえ．．．迷いの子らに導きを与えたまえ，恩優しき貴方の御もとに導かれる事を願う」
重ねていた手を解き

光る指先で中空に四文字語（テトラグラマトン）を書く

「おお・・・貴方の御子，主の名において祈りの全てが行われますように，エィメン（そうなりますように）」

小さな声の祈りは深くニブイ水の坩堝の中に沈むように消されていった

第四十九話　坩堝の中（後書き）

カセイウラバナダイアル～～ひゅうがを見よう編～～

とはいえ
現在日本をとりまく状況はかなりヤバイです・・・・
ヒボシの家き朝霞駐屯地に近いので実はパック３の搬送を深夜に見に行きました

列を成して警戒警備の中で運び込まれた迎撃ミサイル
大きなものである事にびっくりしながらも
これが私達を護ってくれるのか？どうなのか？
今はただ祈るしかありません

今日も駐屯地の近くを通ったのですが
演習場の中程にすでにｕｐの状態で配備された姿
その周りを２４時間体勢で警備している自衛隊のみなさん
桜の季節になり
あのアタリは多くの桜で花見もできる場所なのですが・・・
今はそんな事にうつつを向かしている場合ではないようです
ご苦労様ですが，どうかお願いしますとしか言いようがありません

そんな中にあった横須賀基地が来る１１日にひゅうがの一般公開をするそうです
実際はこんな状況の日本ですから
それこそ取り消しになってしまうかも知れませんが
予定通りであるのならヒボシは新しいヘリ空母を見てこようとおも

います
いっぱい写真もとってこれたらとも

何事もなく．．．できるだけ平和的な解決がなされることをいのりつつ
国防が今，岐路に立たされている事を実感して参ります

それでは．．．また
またココで会えることを信じて．．．．

第五十話　嘘の報告（前書き）

今言うべき事はなし・・・
強い日本という国を作り直すために必要な事を模索する日々です

対潜訓練のアドバイザーとして二等海士長先生ありがとうございます！！

第五十話　嘘の報告

小雨と少し波の高い事をのぞいて海域の視界はおおむね良好な状態
「当海域には『Ｊ１０』６機，『ソブレメンヌイ』級駆逐艦２隻が確認され，『漢』級潜水艦２隻が展開していると思われる」
開示された目標情報を目にした間宮は，自分の前で気を引き締めている和田に
「他に何も言ってこなかったか？」
相変わらず壁に寄りかかった姿勢で聞いた
「他にとは？」
「ずいぶんとスタンダードなメニューだ．．．「例の事件」の事で揉めた経緯で他に何かをのぞんでたんじゃなかったのかな？あっさりし過ぎてないか？」
壁に軽くつくリズムを頭で打っている間宮の前
和田はあっさりとは間逆の男臭さ満点のこってりして面構え，太い眉をしかめて合流により併走の状態に入った米空母を見る
アイランド側を走っているとはいえ中身がわかるという事はない巨大な空母の姿は荒れた波をものともせずに進んでいる
「訓練ですよ？何か企むって訳にはいかないのでわ？」
自分の声の大きさを良く知っている和田は間宮に近づくとむさ苦しい顔を寄せるが，それを避けるように，前に進んだ間宮は
「気になるんだよ．．さっき『くらま』からヘリが飛んだのも含めて．．．」

演習の該当海域に入ってすぐＤＤＨ『くらま』から搭載ヘリが飛び
そのまま米空母ドワイト・Ｄ・アイゼンハワーに降りた
演習指揮の挨拶をしているという分けでもなさそうだが，以降ただ
併走を続ける艦艇に何の音沙汰もない
その間に配されたのは味も素っ気もない演習の項目・・・伝えられ
た項目の前待たされている状態だった

灰色の緞帳で南海に近い水面は曇った面を晒していたが
間宮の心境もそれと同調していた
考えるに『くらま』から米空母演習指揮旗艦に飛んだのは「石上一
佐」であるとしか思えなかったし
それが良い方向の予感には働いていなかった

アイゼンハワーを見たままキャプテンシートに向かう足で間宮はつ
ぶやいた

「何やるつもりだ?石上・・・・」

「今回の演習旗艦『くらま』であります」

小幅に遅れているミッション前，アイゼンハワーの飛行甲板の上に
は日米両艦魂が揃っていた
「人」には見えない彼女達ではあるが
演習前の挨拶を交わしたりするという儀礼は「人」がするそれとな
んら代わりのないものだった

集まったアメリカの艦魂達よりはるかに背の高い『くらま』は，相手の感情に十分に心配りをしているのか，いつも着用している帝国海軍の黒の詰め襟ではなく海自のダブルスーツを着ている
着慣れないハズの制服，もちろん男物でネクタイ姿も美しく決まっている

「はぁ，初めまして！第八空母打撃軍所属，今回の演習司令艦ドワイト．D．アイゼンハワーです！！演習旗艦をつとめさせていただきますぅ！」

目の前
整然と並んだアメリカ艦魂にしては小柄な艦魂，身の丈は『くらま』の２周りは小さな彼女は顔を真っ赤にしたまま握手に伸ばされた手に飛びつくように手を伸ばした

「アイクと呼んで下さってかまいませんよ！！フレンドリーに行きましょう！」

栗色の髪
薄いブラウンの猫の目は「噂」の麗人に会えたことに小躍りしてみせる
「作戦中はご勘弁を」
紳士な手が握手の手をがっしりと握った相手を諭すように美麗で狐目ではあるが切れ長の美しい眉を備える顔で微笑む

「ああっそうですね！私ときたら．．．すいません」

司令艦という役職にあるにしては若々しい姿のアイゼンハワー
見た感じは『くらま』より年下１６歳ぐらいに見えるが実は『くら

ま』より４つは年上

艦魂はの姿は生きた年齢とは比例しない

艦魂は発祥の年齢から歳とってゆく事になるが，その流れは「人」とは大きく異なるらしく実例的にいうのならば米軍艦魂にとって魂の支柱である旗艦提督（ｆｌａｇ　ａｄｍｉｒａｌ）コンスティチューションなどは産まれて１００歳以上という高齢になるが姿は未だ２０代で
現在アメリカ第七艦隊の旗艦であるキティホークの方が年上に見える２０代後半の容姿であるが誕生から見るとずいぶん年下であるから

どこかチグハグではあるが
その時産まれた姿とは関係なく付けられる階級に文句を付ける者はほとんどいない
それぞれが役目を持って産まれたと落ち着くからだそうだし
これまでもこれからもずっとそういう産まれだと全体を通して船の魂達はそう認識していた

しかし・・・・

自分より年上のハズで
戦歴も華々しいアイゼンハワーが目の前で小娘のように（実際１６歳といったら小娘ですが）『くらま』との握手に喜ぶ様子は痛い姿のようで
後ろに控えるイージス艦の２人は目を反らすようにしている
そんな二人の部下などお構いなしの舞い上がりぶりは・・・どこか佐世保のエセックスにも似ている

「あっ！でもこの演習が終わったら佐世保に寄らせて頂くので．．．
その時はアイクって呼んでください！」

一部例外もあるが東シナ海域での演習が終われば空母などは大抵佐世保に寄港する
横須賀と同じぐらい海外の艦魂が帰港する有名な港
いうなれば横須賀が紳士な挨拶の場であるとすれば佐世保は演習によって手を握り合う「友」としての社交場とも言えた

「演習が終わりましたら，食事会を会しましょう」

アイゼンハワーの可愛らしく揺れるおしり

またもそんな光景の後ろに立たされる『こんごう』達の一歩後ろに
今回参加の潜水艦『うずしお』一群から参加の『なるしお』
この面子の中で一番幼い容姿の『なるしお』は，今まで一群では見ることのなかった海外艦魂の揺れる姿に口を半開きにしたまま事の成り行きを見ている

どちらかと言えば一群にくる艦魂は表敬訪問みたいなもので，あまり砕けた態度を見せる者はいない
同じく一群から硫黄島（いおうとう）演習にでる時に挨拶したキティホークなどはかなり硬いイメージで近寄りがたものさえ感じていたのに．．．

「モテモテやあ．．．さすが司令やあ」

呆然と司令を見つめる妹の隣で酒焼けのような声で目まで被った前髪の主『うずしお』は整列起立のままで
「やっぱ．．．艦魂として産まれた限りにゃ数多の女を惚れさせてナンボよぉ！」

変な感心をしている姉に
「姉さん・・・モテる事って艦魂にとって大事なの？」
プルプルと手を奮わせて聞く背丈も一番小さな妹，姉と同じように前髪で目を隠している姿は何故か潜水艦艦魂姉妹達の伝統
このままいけば１１人姉妹になる『しお』姉妹，今は９人姉妹の６女に当たる『なるしお』は腕組みして感心している姉，３女の『うずしお』の顔を横目で見ながら聞いた
「モテモテはいいよぉ～～～」
「ワシもなりたいわぁ～～」
感心に顎を上げてニヤリとする姉の前
まだ幼く，恋愛も良くわからない『なるしお』に答えたのは前列に立っていつも通り揺れていた『はるさめ』
笑顔の混乱誘発者である『はるさめ』に親指を立てた河内弁モドキの男前艦魂，（注．女です）『うずしお』は声も大きく，（もちろん脳内通信会話の中で）
「おうよ！！モッテモテになってあらゆる女いわしたんねん！！」
「バカかオマエは！」
思わず突っ込んだのは『こんごう』一応整列起立の姿勢を保ったまま背中の方で変な話題に盛り上がりだした仲間に注意した
「なんやて！ワシはな将来潜水艦艦魂における「麗人」としてデータブックに載るんが夢ぞ！！」
「アホやな」
同じ関西弁モドキの突っ込みを入れたのは『いかづち』

「麗人って・・・・何？」

とりあえず整列の体勢は崩さず脳内会話の声で『なるしお』は首をかしげて聞いた
妹の問いに『うずしお』は自慢げに「麗人倶楽部」という素っ気ない文字の表紙を持つ雑誌のようなものを取り出した

「・・・これ・・・・マジでこんなん出回っとたんや・・・・」
「うそだと思ってた」
横目で取り出された雑誌を見る『いかづち』と『こんごう』は目を丸くした

「海の麗人倶楽部～軍艦編～」

世界中の軍事に関わる艦魂達の姿を掲載しているデータブックといっても誰が始めたのかとかはまったくわかってなく，むしろアングラな情報誌のように流れているものだが
何故か年に1回は発行されているらしい・・・・多分アメリカの艦魂達が暇つぶしで始めた物ではないかと現在は考えられたりこれの姉妹紙であると考えられる

「海の麗人倶楽部～客船編～」がある事から
世界中を就航する豪華客船の船魂達が始めたとか色々と言われているが

どこで入手するのかがまったく不明なデータブック
どこからともなく流れ着く・・・
まるで恐怖新聞のような雑誌
しかも

データブックと題しているのに艦艇スペックとかは，まったく載っていない
載っているのは艦魂の写真．．．．
それも見目美しい者達という．．．．まったく軍にとって役に立たないもので

特に日本の代表として『くらま』は何度も雑誌に載っていた
ちなみに編集後記の署名は両雑誌とも『Ｅ』となっているが誰かはわからない
でも
船の魂が制作しているという事だけはわかっている
そうじゃないお互いを映し出す写真を掲載できないから

『うずしお』はアジアでもＪａｐａｎと指したページで大きく扱われている『くらま』の写真を見せながら

「ジャンル別が出来たらワシも載れんねん！！」

そこには，おそらくリムパックなどで撮られた『くらま』の写真が大きく掲載されている
「かっこいい．．．．」
思わず本音の『なるしお』は頬を染める

南国の日差しの下，制帽の鍔に手をかけた少しの笑顔を浮かべた顔写真を中心にカラー２ページに渡る「日本海軍代表麗人」の姿
中には普段，佐世保で来ている帝国海軍の制服姿の写真もあったりでびっくりだが
キャプションには
「帝国海軍の制服姿は一段と素敵」と書かれていたりで，実は海自の制服より受けが良いことが見るからにわかる

「ロッキンならぁ～～１００万円コースねぇ～～～」

噂の倶楽部本を見ながら『はるさめ』はフワフワと浮いた感じで
ロッキン事，ロッキンジャパンでカラー宣伝を２ページに渡って掲
載したら俗に１００万と言われている事を例に挙げた
以外と音楽好きな一面と共に「すごいぃぃ～～」と笑う

「どうやって撮ってるんだ?」

自分たちの目の前相変わらずアイゼンハワーに張り付かれてどう手
を離そうかと困っている『くらま』を見ながらも『こんごう』もび
っくりしたように雑誌を何度も見て驚きを示す

「ワシもこれに載るんや!!」

息巻く『うずしお』の隣，雑誌をめくっていた『なるしお』が飛び
上がる

「『こんごう』一佐載ってます!!」

一同の顔が固まる

「うそぉぉ!!」

『くらま』のページの直ぐ後ろに敬礼した顔を真正面からとった図

「誰が?」

まさしく自分なのだが，なんでこんな写真を?何時撮られた?とい
う顔の『こんごう』
いつもの厳しい目線の自分の顔を真正面を撮った写真
書き込まれたキャプション

「日本のイージス」
「目で殺す系，将来に期待！」

自分が軍事以外の所で訳のわからない評価をされている上に
スリーサイズが載っているという驚愕の事態に顔が真っ赤になる
しかも隣のページには『きりしま』と『ひえい』司令が写っている

「こんなの！！どうして！！」
慌てる『こんごう』だったが

「くぅぅぅ！！！悔しいでぇ！！ワシは！！海の上のやつはええのぉ！！」

そんな事知らぬの態度で
雑誌を丸め思わず拳を握りしめる『うずしお』
「早う潜水艦のコーナーも作って欲しいねん！！」
そういうと『こんごう』を指差した

「まったくイージス艦はどの国でも人気者やぁ！！「人」もイージス艦に乗りたがるしなぁ！！潜水艦なんてしょっちゅう定員割れやで！！」
「いいなぁ～～～イージスぅ～～」

雑誌を覗き込んでいた『はるさめ』は揺れながら笑い目で『こんごう』を見る
「「人」にも好かれるなんてうらまやしぃ～～」
「バカ言うな！！」

指差す二人に怒鳴った『こんごう』

その頭に『いかづち』の声が入る，メガネにかかった小雨は真意を読み取らせない表情で

「実際そうやで，イージス艦は何時だって乗りたがる「人」がおるけど，わてらはいつも定員割れでるんかもしれんてぐらい人気ないでなぁ」

どこか棘のある言葉に目を尖らせ反論しようとした『こんごう』より先に

寂しい声が

「私達・・・・人気ないの？」

小さな肩をさらに小さくすぼめて顔まで落としてしまった『なるしお』

「人気ないねぇ～～～真っ黒だしぃ～～～ピカピカのレーダー持ってる『こんごう』ちゃんとはくらべられないよぉ～～～」

「じゃかしぃ！！！」

妹の気落ちた顔に近づき

耳元に嬉しそうにささやく『はるさめ』の顔を『うずしお』が手で押しのけると妹を抱き寄せた

「妹いじめんな！！ワシらは真っ黒なドレス着とんねん！！海の中じゃピカピカやわ！！」

姉の胸に抱かれた『なるしお』は震える声で

「人気ないんだ・・・だからお祭りでも誰も見てくれないんだ・・・」

一群勤務

クリエイティブを公称とする集団にあってフェスティバルの時でも
水の上に黒い背中しか見せない潜水艦は眺める程度の人しかいない
自分の船体に興味を示してくれる人などホントに一握りである事を
実感していた所にこの発言

元来気の弱い『なるしお』は人気のない艦だと小さな胸を抉られる
気持ちで悲しくなって，姉の胸で小声で震えて泣き出した
妹をあやすように『うずしお』は男前に言う

「ちゃうで!!ワシらは国家機密をぎょーさん持ってんねん!!そ
やから「人」が近寄れへんのよ!!人気かんけーないで!!」
「でも・・・乗ってくれる人もイヤなんでしょ・・・」
「ちゃう!!そないな事アラン!!「人」がたりひんのは海自はど
こいっても一緒や!!」

しょぼくれてすすり泣きの妹に両手を挙げて
「オマエは可愛いからな!!潜水艦のコーナー出来たら，日本の可
愛い潜水艦って載るで!!絶対!!」
必死に妹をたしなめる『うずしお』の頭に重い拳が落ちたのはこの
瞬間だった

「静かにしろ」

手に持った雑誌は一瞬で消えて『うずしお』はその場に糸が切れた
ように崩れる
いつの間に列に戻っていた『くらま』

「何をしている?」

怒りに痙攣を起こしている目のまわりのまま

「演習で下らぬ話しなどをしたらただではおかんぞ！！！」
そう言うと振り返って正面に並んでいるアメリカ艦魂と司令のアイゼンハワーにお辞儀した

「申し訳ありません！部下の統率に至らぬ点，見苦しい姿を」
「いいえぇぇ，大丈夫ですよぉ！！」

深く頭を下げる『くらま』の姿にアイゼンハワーは笑って
「変に緊張しているよりもずっとよろしいですわ！！リラックス！！」と軽い手振りをして見せながら
「怒った顔も素敵．．．．」
クルリと背中を向けて独り言に身もだえる

彼女の後ろに並んだカウペンスとカーティスには自分たちの司令の気持ち悪く緩んだ顔だけが見える
そして
またもそんな事はそっちのけで拳を強く握って胸に当て

「佐世保に着いたら．．．．素敵な夜が待っているわ」

カウペンスの艦魂ダニエル大佐は，にやけたまま自分たちに聞こえる独り言を言う司令艦であるアイゼンハワーを注意するために前に出ると

「顔に出てますよ司令．．．」

そう言って背中合わせで入れ替わるように前に出ると
並んだ海自艦魂をゆっくりとした視線で見て敬礼をした

「今回の演習に参加するアメリカ合衆国海軍ミサイル巡洋艦カウペ

ンスです，イージス駆逐艦『こんごう』の艦魂はどちらか？」

正面にたった茶色の髪
短く切りそろえた襟足に同じ水色の瞳を持つ顔
緊張した顔といつものキツイ目に改まった『こんごう』は一歩前に出た

「海上自衛隊，イージス艦『こんごう』であります」

風に揺れる長い髪の『こんごう』の前にカウペンスは進むと目を付き合わすように敬礼し

「気を引き締めて．．．．頑張ってほしい」

それは不思議な物言いだった
合同の演習においても名目上でもお互いが同盟者であるにもかかわらず
一見すると上から物を言うような態度だった
が．．．カウペンスの目は何かを語ろうとしていながらも言葉を押さえているように唇を振るわしている様子で『こんごう』は意見はせず

「はい！」

真面目な顔で返事した
その姿に念を押すようにカウペンスは

「困難な時こそ．．．自分の持つ力を信じて」と敬礼をし直した

「言い過ぎじゃないですか？ダニエル大佐」

アイゼンハワーの飛行甲板から演習配備のために帰っていった海自
の艦魂を見送ったカウペンスの背中にカーティスの声が掛かった
少なく断続的だった雨は止まない勢いに変わり空は灰色の度合いを
強め
彼女の気持ちと同じようにどんよりとした
暗い気持ちをもたげている

「言いたくもなる．．．．」

振り向くことなく
視線を落とし
どこか苛立った様子の彼女にカーティスもまた背中を向けた形で

「私達合衆国のための「実験」でもあるのよ．．．日本が実験台をかって出てくれるって言うんだから」
「だまってて．．．クーン」

手のひらに雨粒を浴びながらカウペンスは溜息を落とし
「私は．．．あの子達に比べればずっと戦ってきたわ，合衆国のためにだから痛い思いもたくさんあるけど．．．．実戦以外でそんな思いをするのも，させるのもイヤなのよ」

カウペンスはイラク戦争においてトマホークを３０発以上発射した事で名を馳せていたが．．

自分の撃ったミサイルがゲームの画面にあるようなピンポイント爆撃だけですむと信じていた

だが終わった戦争の中身は嘘の報告であふれていた

何発かのミサイルは誤射，誤爆を起こして民間人を多数巻き込んだ画を見たとき
体の奥にある心を割る痛みが走り気を失った

頭を自分の甲板に打ち付け泣いた
こんな事のために生きてきた?・・・・・・・・・・
自分が合衆国に尽くす軍属である事はわかっていたが

わかっていても理解が出来なかった

それ以来，模擬的でも痛みを伴う事を嫌い
軍が有効である大手を振る作戦も実験も嫌悪していた

カーティスは震える両肩の姉であるカウペンスを見ながら，両手で空からの涙を受け取りながら
「過保護よそんな思い・・・彼女達も戦いの痛みを知るべきだわ」
平然とした態度で姉の沈んでゆく気持ちに歯止めをしようとしたが

「クーン!!」
その態度が，心の傷にさわったのか大きな声で会話を断ち切ろうとした
だがそれが今度はカーティスの心にさわり

「戦いたくないのはお互い様よ!!私だって戦うのはイヤ!戦わな

くて良い方法探すために・・・そのための方法をさぐるために日本の艦魂も努力に加わるべきだと私は思う!!だから」

「クーン・・・・・」

反論ではない涙の声にカーティスは自分も苛立つ心で吐き出してしまっていた意見を止めた

「どうして・・・私達こんな思いして生きてるんだろう」

振り向かずただ泣く姉の背中にカーティスは額をつけて

「わかんないよ・・・でも司令艦達は言うじゃない，生きている意味も死ぬ意味もあるって」

「うん」

「演習だし，「あの実験だから」少しは怪我はするかもしれないけど，その時は助けてあげよう・・・ねっダニエル姉さん」

「そうね・・・私達，魂はそんな事ぐらいしかしてあげられない」

「違うわ，そういう事がしてあげられるのが大事なんだよ・・・きっと」

アメリカのイージス艦姉妹は自分たちと共に併走を続ける海自の艦艇を見た

「平和を維持するためには，未だ痛みを伴うほどの武器が必要なのよ・・・・許してね」

その頃アイゼンハワーのアイランドでは演習司令であるボビー・マ

レス少将がタバコの煙の中で苦い表情を浮かべていた
一通りの説明と，目の前に置かれた合衆国軍事研究部付けの手紙に目を通すと

「それで責任は海自でとれると言えるのかね？」

アイランドの頂点ではなく島の根っこあたりに位置するＣＡＴＣＣ
青い光で包まれた部屋の中で少将の前に立つ痩せた男は流暢な英語で

「そのことも含め何も問題ありません」

凹凸の少ないハズの東洋人なのに
研究に没頭し過ぎた結果なのか落ちくぼんだ目元には暗い闇
なのに持論が素晴らしいものであるという主張を口よりも雄弁に表す目の輝き

「すでに我々は同盟国の艦長に嘘を付いてしまっている事になる．．．これは私の不名誉である，その上でこの実験をする意味はあるのかね？」

美しい揃った白髪をオールバックに纏めたマレス少将は半分しか味わう事のなかったタバコを灰皿に押し付けながら，睨む目で押すように問いただした

「少将に不名誉などありえません，この実験で少将は良い結果だけを合衆国に持って帰る事ができます．．．．また実戦形式の現場で得られる実験ほど効果的なデモンストレーションはありません．．．．赤い国もさぞおどろく事でありましょう」

納得のいかないという顔

青く光るモニターを見つめる厳めしい顔
海を生きる男の額には苦悩が描かれている
笑うようにスーツ姿の男は続けた

「あの国もイージス艦に匹敵する艦の建造を進めています・・・今はまだ追いつきませんが，追いつかれてから新しい艦を作るのでは意味がありません・・・・新たな艦艇には今までの艦艇を無力にするだけの実力が必要です。ズムウェオルトの為にも必ず良い結果を出せると信じています」

「わかった」

ドスのきいた返事は席を立つと痩せた男の胸に指をつけた

「だがな海自からの責任追及が合ったとき貴様に従ってやったなどという情けない回答はしない，これは私の判断でやった事であり結果は貴様の首であり人生だ・・・・わかったか?」

「了解です」

怒れる巨体のマレスとは対照的に骨のような男は満面の笑みを浮かべている
立ち上がったマレス少将は自分の前に並ぶオペレーターに怒鳴り声にも近い声で聞いた
「潜水艦はどうなっている!!」

「確認，商型原子力潜水艦・・・・・1隻，我が艦方から後方に」
モニターを確認したマレスはいまいしそうに

「ミスター石上，後は貴様でやれ，通常演習の指揮は私のものだから邪魔はするなよ」そういうと激しい音と共にドアを蹴破る勢いで出て行ってしまった
大きな足音が残す響きが通路から消えた頃石上は自分のパソコンを立ち上げながらほくそ笑んだ

「最高の結果をだしてあげますよ．．．．あんた達ヤンキーには理解出来ないでしょうけどね」

薄い唇はパソコンの画面を色取りの算式に舐める舌の色まで変えながらめまぐるしく動く
「よろしい！！オペレーションを開始しましょう．．．．」
そういうとｒｅｔｕｒｎキーを叩いて笑った

「『こんごう』を破壊します」と

第五十話　嘘の報告（後書き）

カセイウラバナダイアル～～これから編～～

とにかく
危機管理の意識の低い国民
そして
それを良いように助長している政府に対して意見書をまとめたいと
おもっています
出来る事を
出来る戦いで・・・・

ところで予定どおり１１日にひゅうがの一般公開に行ってきます
写真もいっぱいとろうとおもってますし
そのためにカメラを新調しようかと計画してます
もしかして欲しい方がいたらご連絡ください！！
イヤでなければ住所など送ってくだされば
プリントアウトして三笠様の写真共々送ってあげます！！

でわ
またウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第五十一話　暗転の空（前書き）

ｓｐｅｃｉａｌｔｈａｎｋｓ二等海士長先生
対潜訓練について教えてくださってありがとうございました
ちょっとしかつかいこなせなくってもうしわけない事になってしまいましたが創作の励みになりました！！！

第五十一話　暗転の空

雨は降り続いていた
合同演習に入って2日目，心にまで曇り空を引き連れてきたと思われる石上一佐のアクションは見られなかったが
天気は敏感にその事を察していたのかもしれない

上空を早く流れる厚みのない雲は白く
吹き溜まるように重さを感じさせる濃い灰色の雲は海の上にのしかかり続けていた
本格的な冬を近づけるために何度も艦体に波打つ雨も準ずるように遅い足取りで気温を落とし始めていた

艦にぶつかる水の固まりはニブイ音をこの2日やむことなく響かせている
時として破砕的な刺激を打ち付け目を覚まさせる
海の顔を振るわす波は大揺れとまでいかないまでも，艦内を歩く足にストップをかける動きも時より見せる中で「対潜訓練」は滞りなく続けられていた

波に負けない怒声は密閉された艦内に何重もの凡音となって通路を走っていた

「ソナー探知！！」
続く大きな一息である声
「きょーぉれんたいせんとぉー！！（教練対潜戦）」

図太い声は波の残響をぶん殴る程の勢いで発せられる，近くで聞いていたのなら耳が痛くなるように轟音の中さらなる音が混じる

魚雷回避運動を開始する『こんごう』の艦体に波をねじ切る力が加わり巨人がドアをノックするような「濁音」の連打が乱れ太鼓のように始まる
繰り返す衝撃と艦が体を回す圧力が艦橋に立つ粉川にも伝わる

初めて海に出るような背広組であったのなら艦が割れてしまうのでは嫌な汗と，動転しながらも同じ自衛官という意地で頭の中に算式を浮かべて危機を脱しようとするだろうが
粉川にとっては久しぶりの海
ぶつかる波の衝撃と吠える海を切り裂く音を立てる『こんごう』の乗り心地は心を躍らせるものにしかならず
顔にも挑戦的な笑みを浮かべ続けて

「やっぱり海はいい・・・」

自分の心や体が久しぶりの荒れる海を堪能している事を喜んでいた
艦橋の内張であるむき出しの鉄枠を手で掴む
じっとりくる冷たさ・・・結露に近い冷たい露と心地よく上昇した自分の体から出る汗の感覚

急旋回に伴い緩やかな雨も艦橋の窓ガラスに音を立てて叩きつけられる
小さく手を打つ拍手のような音が続く中
前方から真横の窓に目を移せば
今まで走ってきた海の道が引き波になって現れている

「早いですね」

粉川は自分のとなりキャプテンシートに座った間宮に嬉しそうに聞いた
自分が前に乗っていたＤＤとはまるで早さが違う
いや本当はそれ程変わりはないのかもしれないが久しぶりの高揚感と間宮率いる『こんごう』の隊員達の乱れのない操船術に感心したままに聞いた

「評価はＡにしておいてくれると嬉しいね」

目深に被った帽子の下，口だけは軽快に返事する
目は深く曇った海を見つめると同じように思慮の闇の中にある
本心を見せない目を粉川は察している

「アスロック攻撃用意」

それでも声のトーンは緩い
轟音に揺れる艦橋の中を飛び交う伝達系の中にあってもっもともストレスのない音で指示を出す姿
粉川はチラリと横に座った優男の顔を見ると思った相変わらずな「曲者」ぶりと
窓を叩く散弾の向こうを睨み続け微動だにしない間宮

「アスロック攻撃用意!!目標漢級潜水艦２，発射弾数２発!!」
「目標位置，３５．６８ｎｏｒｔｈ，１３９．７６ｅａｓｔ」

各所からそれぞれのオペレーター達が「答え」をだしてゆく
天候など見えない暗闇の世界から荒れる海の全てを白日に晒すＣＩＣ，落ち着いた応答が攻撃目標の位置が読み上げらた

「アスロック発射用意よし!!」

少しの滞りもなく指示は流れてゆく中
用意の調った返事に間宮の顔色も態度も消して変わらない
動くことさえ不躾と思っているかのように構えた中にいる

「あたりまえのように」「あたりまえの有事」に備えた動きに指示
を付け足すのは野暮とも言えるし横から口を挟むのも空気の読めな
い扱いを受けるというもの
粉川はだまったまま耳を最大限指揮系統の声だけに集中し目は海の
上を走らせる
聞くに限ると自分に納得の笑み
手慣れた動きは無駄なくそつなく乱れもない，それに続く声の羅列
は鍛えられた証拠で安心さえ感じられる

「アスロック攻撃開始，一番発射よし」

それぞれの部署が各々の声で全てを整えお手本のように発射を告げた

「てぇ！！」

午前から続く演習
２機の対潜ヘリを飛ばし四方哨戒のまま慌ただしく活動をするアイ
ゼンハワー飛行甲板のフライトオペレター色とりどり派手過ぎる程
の制服は無彩色の海には良く映える

手際の良く動く空母勤務の兵士達の姿を見ながらキャプテンシート
から立ち上がり窓の外を同じように見つめている間宮は少し緩くな

った雨に相変わらず考えを押し込めた目をしている

「アラート出ませんでしたね」

自分たちの演習を終えた間宮に気を利かせて粉川はコーヒーを運んだ
最近は波の荒れ具合もあるのでタンブラーで運ばれる事が多い
間宮の名入りを目の前に差し出すと
目深に被っていた帽子の鍔をあげながら

「実戦にならなくて良かった・・・ってとこかな」
「そうならない事のために存在するのが世界中の軍隊の勤めですよ」

当初は予定を小幅ながらに押していた演習だったが
ココまでは問題なく消化していた

「明日の対空戦闘プログラムが終わったら・・・・・」

すっかり自分が監視官である事がおざなりの粉川はそれでも手放さ
ずに持ち歩いていたファイルを開くと目に見えて頬の色まで高潮す
るような笑みを浮かべた

「どおしたの？」

深く思案にくれ心を解かなかった間宮もさすがに聞いた
目の前でこんなに嬉しそうな顔をしているのだから聞かざるなかっ
たといったところかも知れないが

「やっとです！！！やっと僕『こんごう』でカレー食べられるんで
すよ！！」

ファイルの方が気になっていた『こんごう』船務士の和田は近づきながら１８０の巨漢におそろいの大きな声で

「なんだ!!粉川一尉?ココまでの間で何回も食べられただろうに?そんなに気に入ったのか?」

和田は同じくチェックボードを持ち
人一倍汗をかいていた顔を仰ぐと

「少なくとも3週間はあっただろう?」と太い眉をしかめた
その顔につられたように粉川も眉をしかめて

「カレーの日に何か起こるんですよ.・・・初めて乗った日には「売り切れ」にされてたんですよ僕.・・」

「そうだったけ?」

カレーのを食いっぱぐれている事が諸々の事件と重なっているという粉川の弁に間宮は軽く吹いた
確かに思い返してみたら粉川はカレーに運のない男だ
最初は乗艦した日は監視官という同業者の憎まれ役であったせいか食堂から追い出しを食らっていたし
次は例の「不審船事件」に巻き込まれお流れ，次は東京への呼び出しをくらい何故か次の日顔面を腫らした状態で上京.・・・

「そういえば.・・・色々重なってたね」
「僕カレー大好きなんで，ものすごく楽しみにしてんのに!!」

まるで子供のような言い方
思い切り溜を作って吐き出すように元気な返事

とても３０歳を越えた男の言い分とは思えないが，叩いて終いたいとも思えない満面の笑みは，人差し指をあげると

「そういやもう，ココにいなくてもいいんですよね」

間宮に断るまでもない粉川は監視員なのだから変な部屋に入りたいとかＣＩＣを視察したいなどと言わない限り，作戦行動中でもなければ拘束する言われもない

「僕！！食堂に予約いれときます！！今度は絶対に食べてやる！！」

そう言うとタンブラーとファイルを抱えラッタルに走り器用に降りていった

「予約．．．．．．．」

あまりに子供じみた姿に和田は少し怒った顔になっていたが
間宮は張りつめていた自分の気持ちをすっかり引き延ばされたのか笑って

「予約．．．．入れなくても食べられるだろうにね」

今まで堅さを護った自分の顔が緩んだことを隠すためか窓の方を向いて肩を振るわせた
あまりに滑稽で，すんなりと人を和ませる正直な男を少し羨ましく思いながら

「カレーの日か．．．．」

緩んだ口を押さえながら
「明日も何もなければ，おかわりもできるよ」と１５時を回った空を眺めた

日の短くなった海は暗い影を雨の元，急速に広げ次々に白の余白を塗りつぶしていた

「明日．．．．何もない事を願うよ」
間宮は笑った自分の顔を写す艦橋のグラスエリアに自分の願いを託すようにつぶやいたが
あまりに自虐的な自分の姿に別の笑みを浮かべると

「石上．．．．明日，動くつもりだろうけどな」

と本音をもらした
予感はそこに集約されていた
それを助長するように天気は腫れる事のない風景を奥行きの見えない闇と共に遠くまでつなげていた
雨は明日も止まないだろう，夜は速やかに黒の幕を下ろした

「やっとで．．．．．楽しみにしてたんだ！！！」

護衛艦『こんごう』内部にある艦魂達のグループルーム
小さな包みにアメを入れた粉川は演習前と変わらず1人で雨の水面を眺めていた『こんごう』に用意良く運んできたポットとコーヒーのセットを支度してい

「食べてなかったっけ？」

顔を向けることはなかったがガラスに映った『こんごう』は首を傾げて聞いた
続いた演習に速く眠ってしまおうかとも思っていたが・・・・

ベッドに足は向かわずこの部屋でぼんやりと過ごしていたところに，今や当然のように粉川がやってくるのはわかっていたが・・・・『しまかぜ』がいない演習はいつも静かすぎて心が落ち着かなかったせいも手伝って粉川を待っている形になっていた

そんな粉川はついて早々の素っ気ない『こんごう』の対応に大きな声で
「食べてないよ！週末最後の楽しみなのに3週間はお預けになってるよ！！」

大好物を食いっぱぐれた
粉川の言い分はどうにも子供ぽいが本気のようで
身振り手振りも大きい，わざとなのかと勘ぐるように『こんごう』は細めた目で続きを見ている

「ホントはね乗艦した日に食べられる予定だったのに「売り切れ」とか出されててさ・・・なんていうか，そりゃないよねぇって気持ちになったよ」

手際よく準備したコーヒー
インスタントオンリーだがポットがあれば缶コーヒーなんかと比べ物にならないぐらい美味しい

「これ！！このポットは僕からのプレゼント！！ココでみんなで使って」
そう言うと

入れたてのコーヒーを『こんごう』が足を組んで座るテーブルの前に運んで

「間宮艦長曰く！カレーは我が『こんごう』が一番だって！！監修したの？」

直ぐ隣のイスに座った粉川はこの艦に乗ったとき自慢げに間宮に言われた台詞をそのまま聞いた

「監修？・・・・・ていうかあれは『いかづち』が雑誌に載るからて騒ぎ出して」

「『いかづち』ちゃんが監修したの？」

覗き込む視線にめんどくさそうに目を反らし

「どうやって監修するんだ？私達が？」

言われてみれば当たり前な答え，艦魂である彼女達が厨房に立つことなど出来ないのにと粉川も手元のコーヒーをすするりながら

「どうやって味付けに協力したの？」

「だから．．．．紙に書いて厨房に「要望」扱いで張っておいたり．．．した」

自分の顔を覗こうと右左と首を傾げる粉川を避けるように背中を向けた『こんごう』だったが，ガラスに顔が写っている事にも気がついてしまって俯いたまま小さな声で答えた

「なるほど！！じゃ味見はしてたんだ！！」

「たまにな」

小さな返事

粉川は自分の息を手で抑え吐いて見せて

「ひょっとして僕，息臭い？」
口を押さえたまま困った顔を少し離して見せた
「はぁ？」
「いやだってなんか顔を避けられてるからさ．．．．口臭？結構まめに歯磨きはしてるんだけど」
「違うわ！！バカ！！」

目の前口を押さえ何度も自分の息を確認する粉川の姿に『こんごう』は顔を上げて

「オマエ．．．．．ホントにバカ．．．．」

上げた顔は粉川の困った顔を正面から見て笑ってしまっていた
「違う．．．．息は臭くない．．．．．」
思わず笑ってしまった『こんごう』の顔に粉川は安心したように
「良かった！！そろそろ加齢臭とか言われる年になったかなぁて気にしてたから」
そういうとイスを近づけた

「やっと笑ってくれた」
愛嬌良い瞳が自分見つめて何かに納得している姿に『こんごう』は顔が真っ赤になった
「オマエが変な事言うから！！」
近づいていた粉川から距離をとるように立ち上がる

「なんで可愛いよ！笑った顔，いつもへの字口だから新鮮っていうか」
「バカ！！オマエ！！ホントにバカだろ！！」
立ち上がって逃げようとする『こんごう』の姿は本気でうろたえている

あやうくイスを蹴倒しそうな勢いだったが，粉川は落ち着いてイスの背を押さえると

「待って!!オマエは言わない約束でしょ!!『こんごう』座って」

余裕のある態度で促したが
まだそのアタリの余裕のない『こんごう』は逆ギレの状態で

「うるさい!!粉川の分際で!!」
「ちょっと!!粉川なのはしかたないでしょ!名前なんだから!!」
「それは名字だろ!!バカ!!」
細い指を真っ直ぐ顔に向けていつものへの字口を見せた

「それ言う?だったら『こんごう』の名字はなんていうの?」

珍しく切り返しの早い粉川の質問に慌てていた『こんごう』の言葉が止まったが
おかげで
少し落ち着きを取り戻したようでイスに座ると顎を挙げたスタイルで

「日本国『こんごう』だ」

飛んだ答えが返ってきた
「日本国・・・・『こんごう』・・・・・・」
吹き出しそうになった答えに粉川は息を止めた，笑ってしまったら今度こそ本当に『こんごう』はココから出て行ってしまいそうで
しかし
それに答えるいい返事も見あたらないまま緩む口元を抑えたまま復唱した

「当たり前だろ!!私達はこの国の「物」として産まれるんだ，ただ私達が「物」じゃなくて「者」なだけだ!!」

言われてみればそうかもな答えに
ニヤケかかっていた粉川は目を丸くして考えた
日本国の国家予算の中から「国」のための護りとして作られる護衛艦艇
その魂として産まれるのだから「日本国」という名字を持っているのは当然とも言えるし

逆にそれぐらいしかしっくりくるものもない

「佐藤とかじゃないんだ」

理屈を理解した上で粉川はふざけた答えを返した
「バカ!!バカ!!ふざけるなよ!!そんな平凡な名字のわけないだろ!!」
「いやいやそれも結構驚くし!!イヤ!!ダメだよ佐藤さんに怒られちゃうよ!!平凡だなんて!!」

向かい合って座った2人は顔をつきあわせて怒鳴り合っていた
ココが艦魂が見える者しか入れない部屋であった事がこのバカげた会話をすべてシャッタアウトしてくれていたのは粉川にとっては良い条件かだった

なかなか自分の感情を表に出さなかった『こんごう』がムキになって反論する姿はさっきの笑顔よりどこか可愛く見えるもの

「これだからオマエは」
「だから，オマエじゃなくて粉川でしょ!僕は一度言われた事はち

ゃんと守ってるよ」
すでに何段も上手の会話をしている粉川にしっかりペースを奪われてしまっている『こんごう』は頬をふくらませていつものようにキツイ目を向けながら

「それは名字だろ！名前ないのか？」
腕組みしたまま睨む
「名前で呼んでくれるの！！照れるなぁ」
「名無しか！！わかった！！！」

テレテレと頭を掻く粉川の姿に立腹したのか真っ赤になった顔のままツンと顔を背けてしまった
「冗談，僕の名前はね，お爺ちゃんから一字もらった由緒正しい代々続くものなんだよ！！」
「しらん！！粉川名無しだ！！それで十分！！」
「怒らないでよ！！教えるから！！」
「いらん！！」

まるで痴話げんかな空間に光の輪が一瞬で広がった
素早くテーブルから離れる『こんごう』と粉川の間に輝きの粒を落として入ってきたのは『いかづち』と『はるさめ』だった

例によってテーブルの横に並んでいたイスをなぎ倒す勢いの登場だったが
粉川も『こんごう』も感が働いたのか各々のカップとタンブラー，アメの包みを手にもって部屋の端に飛んで逃げていた

大きく広がっていた水色の光の輪は一瞬で弾けると割れた中からいつものようにコックの姿に見を包んだ『いかづち』と『はるさめ』

・・・・・『はるさめ』は湯上がりなのか湯気もあいまって普段以上にフラフラしながら

「雨の日のハイライン辛いぃ～～～」と何事も無かったかのようにイスにへたり込んだ

「だいぶん僕も鍛えられたね」

咄嗟の自分の判断に感心しながら粉川は手に持っていたタンブラーとアメの包みを降ろすと

「そう思わない？」と自分を囲んだ艦魂達に聞いた

「もっと普通にこれないのか？」

自分が横っ飛びしたせいで壁際まで飛んでしまったイスをもどしながら尖った目を向ける『こんごう』に相変わらずな返事の『はるさめ』はトロンとした目を輝かせながら

「ごめ～～んぼけちゃってぇ～～～」

まるで反省のない声

反省してない事の意思表示のように粉川がテーブルに置いたアメに手を伸ばす

「『はるさめ』！！『いかづち』！！少しはしっかりさせろ！！」

怒鳴る『こんごう』は自分と『はるさめ』を間に挟んで注意を無視する『いかづち』に近寄ろうとしたが目の前に『はるさめ』がイス事倒れた

「いったぁぁぁい～～～酷いよ『こんごう』ちゃ～～ん」

いきなり言われ無き容疑に困惑顔の『こんごう』を掴まえると

「態度で示す前に言葉でいってぇ～～～わかるからぁ～～～」
割り座にになった『はるさめ』は自分の真ん前でキレそうにになっている『こんごう』の足をしっかり掴まえたまま
悪戯な目で妹を見た

姉の合図に顔を『いかづち』は顔を赤くしたまま粉川の前に駆け寄った
「ごめんな!!またやってしまって!!」
謝る手は震えているが
粉川は避けられた自分に満足したように大丈夫と笑ってみせると

「『いかずち』ちゃんも座りなよ，コーヒーでいい?今はインスタントもコレしかないんだけど」

自分が避けて引っ張ってしまったイスを元の位置にもどしながら『いかづち』の手を引こうとしたが強張ったように距離をとった彼女は少し裏返りそうな声で

「粉川はん!!明日な，わてカレー作って持ってくるから.....食べてぇな」
「カ..カレー?」

いつになくテンパッた『いかづち』の声は震えていたが
自分を奮い立たせるように拳を握ると粉川の顔に少しでも近づくようにかつま先立ちして

「味はな自信あんねん!!わては料理大好きやから!自分で全部作ってんねん!!やで...」

「でも明日は『こんごう』でもカレーだよ？」

粉川の不思議そうな顔と素っ気ない答えに
いつもはおちゃらけている『いかづち』の真っ直ぐな目が癖毛まで
撓垂れるように一緒に力を失って，つま先だちからペタンと足を着く

「ほな．．．．ええわ」

力無く落ちる顔を落とした姿に粉川は両の手で『いかづち』の肩を
掴むと
「ココに持ってきてくれるんでしょ！！楽しみにしてるよ！！大丈
夫カレーは何杯だってたべられるから！！ねっ」
「ほんまに！！」

「『いかづち』ちゃんが料理の旨いのは良く知ってるよ！！カレー
も色々なのがあるから明日は贅沢な食卓になるなぁ」
粉川は笑顔を取り戻した『いかづち』の前で自分の腹を叩いてみせた
「カレーで太るなら幸せって事でしょ」と
その言葉に『いかづち』の落ち込んだ顔は一気に華やぎ頬をピンク
に染めて

「期待してて！！わてめっちゃうまいのもってくんね！！」
「よろしく！！」

両の肩を粉川に止められたままの『いかづち』
その姿を『こんごう』はつまらなそうに見る
それを嬉しそうに『はるさめ』

鈍い粉川の気がつかない感情がグループルーム交錯した瞬間だった

モニターの前，石上は何度も『くらま』やヘリなど多くの目によって撮影された『こんごう』の姿をｒｅｐｅａｔしていた
冷たい氷結の青色を発する機械室だが
解析に熱を上げる温度を抑えるためにさらに吹きかけるような冷気がめぐらされている

注文通りのオーダーを華麗にこなした『こんごう』の姿は美しく見えるのか
何度目かの映像を細い指が止めると，青白いモニターの状況を変える数字の前で見えない姿とは別の物，デスクトップのアイコンに向かって小さく拍手を送った

「素晴らしい・・・・・実に良い」

周りを囲む青い目達はモニターの反射で目の玉を無くしたような顔のまま
口笛を吹いたり，ならうように手を打ったりして『こんごう』のマニュアル通りの美しい演習を讃え始めたが

衆群の動きに反するように
彼は目の前のパソコンのキーを叩く
常に前を走るように作業を繰り返して行く

「これにて全行程を終了となります」

隣に座った小太りの軍服，アメリカ軍戦技術研究室のファイルを目の前に終了という言葉に反するようにパソコンに向かって打ち込みを続けていた
手元に置いたタンブラーを揺らすほどに大きなストローク，太い指が器用にキーを滑るがそれは情報を機械に叩き込んでいるようにしか見えない

「ダニー，どうだい良い「獲物」だろう」

細かな手を止めた石上は自分とは対照的，とりあえず健康的肥満度の中にいる短く刈り込んだ頭の刈れに囁いた

「キレイ過ぎないか？パターン化した攻撃などすぐに破綻するよ」
「でもそれが現代の戦術だよ」
石上の英語は訛りのない清流のような音でダニーの耳に入る

「良くない兆候だね．．．．．ハリウッドではあんだけ派手な反逆劇を描くのに，現実は地味なものだ」
片口を笑わした彼はそこまで言いつつ打ち込みを終了し背伸びがてら横に座った石上の顔に

「でも今まで一番いい動きの艦だった．．．．．Ｍｉｓｓ．ｄｉａｍｏｎｄ．．．．明日はどこまで頑張ってくれるかな？」

石上は血の気の薄そうな顔に青の光を浴びながら自分のパソコンのモニターを倒した
「頭が壊れてしまったら．．．．どうするんだ」
ダニーは自分のこめかみに拳銃を向けるポーズをとると眠たそうに欠伸をしながら興味の無い質問をした

「イージスシステムは無敵なんだろう?国防省技術技官殿」

メインのモニターを残して火を落とした部屋
オペレータ達が静かに耳そばだてている中でも2人は動じる事なく
話しを続けていた
閉じていたタンブラーの蓋を開け鈍った湯気の中に香るコーヒーを
喉に流し込みながらダニーは
「そんなものは世の中には存在しないよ」
そう言うと嬉しそうに笑って

「完璧だと言われる物が壊れる.....これは美しい」
太った顔の中にあるメガネの奥の細い目が青白い光に不気味に見える
彼の言葉に合わせるように石上も笑って見せた

「明日は実戦ですよ.....間宮一佐」と目を細めて

「特別演習プログラムの実施を会す」
翌日総員起こしよりも前に出された指示は暗転の空の元に開始され
る事になる

第五十一話　暗転の空（後書き）

カセイウラバナダイアル～～トンデモかも～～

対潜訓練編もいよいよ佳境にはいってきたのですが
今回の章で使った訓練ようのかけ声などに関しては二等海士長先生にご教授して頂きました！！
ありがとうございます！！

と
ここまではよかったのですが
次話ではちょっぴり飛んでもなところもでてきちゃいそうで先に断っておきますね
実際にそういう実験をしたり
そう言う演習になったりという事は無いはずですし本題であるイージスシステムの中身をヒボシが正しく理解しているかも未知数なところですが
できるかぎり勉強を積んでも国家機密ですから簡単な答えには至れないという事で・・・・

多少，トンデモな感がただよったとしてもゆるしてやってくださいませ

ヒボシ的には出来る限りを現実にｆｉｔｔｉｎｇしたものとしてやりたいと心がけてますが
艦魂の存在もまあ謎な部分も多い物ですから
ちょっと優しい目でみてやってください！！

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第五十二話　神の右腕（前書き）

今回からちょっととんだ話になってしまうかもしれませんが優しい目でみてやってください！！
色々勉強はしているのですが
色々と足りていないことを反省しつつも前に向かってダッシュ！！
ダッシュゥゥ！！！

第五十二話　神の右腕

合同演習最終日の空模様は間宮達『こんごう』乗組員と粉川の気持ちを代弁するようにどす黒く雨脚の強い日になっていた
晴れ間を期待させる雲の流れはどこにも見えずただひたすらに打ち付ける雨

「予定されていた「ハイライン」の訓練が3日続けて中止となったかわりとして」

指示要項に書かれた最終日の訓練項目はまるで見たことのないものだった事が，間宮達の考えを黒く塗っている原因である事にはかわりなかった
すでに波を切り今まで連れ立っていた艦隊から別れ訓練海域に向かっているのは『こんごう』と『いかづち』のみ

間宮は何度も手元の指示要項を睨んだ

「護衛艦隊総合運営計画に基づくオペレーションを行う」

味けのない印刷された文字の向こうに石上の存在は見え隠れしているどんな演習だってこんなギリギリになってオーダーが回ってくるという事はない

朝一番の交信で『くらま』に乗艦していた柴田海将補に石上一佐との交信を打診したが無理であるという報告を受けていた
風こそ強くはないが雨脚は早い海の上を先頬度まで並んで走っていた『くらま』はすでにずいぶんと後方にいる中

今一度の交信わ間宮はとっていた

「今回のミッションはアメリカ艦隊の協力の下，海自の現在抱えている問題に則した作戦行動をプランニングするためのものである」

柴田海将補の返事はお手本のようなものだったが
どこか歯切れの悪い口調・・・・声色に間宮は何件かのディベートをしかけてみた

「米空母に飛んだ石上一佐は内容について何か話してませんでしたか？」

「彼は最初の日以来『くらま』に交信はしてきていない」

今度は簡潔な答えは切り返しを十分に知っている司令官としては合格点なものだった

「ではこの「軍事衛星」による誘導ならび連携については」

「紙面に書いてあるとおりだ」

紙面にあるもの

「軍事衛星を使ったよりコンパクトな艦隊活動」

従来でもそういう活動内容はあったというか
現在の護衛艦隊の動きの中に衛星による連携は十分に組み込まれている
けして革新的に演習ではない
ハイラインのように人をつなぐための有線による作業のかわりに無線の衛星によるコンタクトをするにしても

アメリカ軍との連携が入らないのならば・・・・
何も目新しい事ではないハズの演習に「レーダー研究と戦略」の専門家がどう関わっているのかが見えないという不安

「何故『こんごう』なんですか？」

間宮は不満である一点を簡潔に聞いた
ファーストミッションなら艦隊のもっとも中核をなすものたちで行う方が良い
つまり
本来なら『いかづち』『はるさめ』でやった方が良いだろうと暗に聞いたのだ

「基本はアメリカ艦隊の形で始めたいからだそうだ」

柴田の声に少しの怒りが混ざり始めていた
それはしつこく自分を試す間宮に対してでない

演習と称した実験的訓練に海自を使う事に
さらにそれを「自分たちの規格」に合わせているという事に立腹である事は間宮には手に取るようにわかった

現在アメリカの中核をなすイージス艦達
これに空母打撃群が加わって艦隊活動をするが，先行する艦艇の中心となるのは絶対の防空能力を持つイージス艦というのが米国でのセオリー
それを基準にこの演習をしたいという事は現在４隻しかイージス艦を持たない日本の規格からは程遠いものだ

「わかりました」

間宮は程度の事しか知れなかったこの会話をこれ以上引っ張る事が
自分たちにとって「得策でない」という考えにいたり交信を切ろう
としたが

「間宮艦長．．．．．他に質問はないか？」
以外な返答を返したのは柴田の方だった

「天気が悪い事が気になりますが」
「私も気になっている」

通信は傍受されているかも知れない
米艦隊は共に演習をする程に仲間ともいえるが，かつては敵であり
今は政治の上での敵でもある
安穏と軍務に着いていてはいけない
背中にあるものが「安保」であってはいけない自衛官

「目が霞みますね．．．．「メガネ」が必要になる．．．歳かもし
れません」
「君の歳でそれはないだろう」

緊張を和らげた柴田司令は
「耳はどうだね？そっちの方が年寄り扱いされるだろう」
柴田は少しの笑い声と一緒に手早い返事を返した

「ですね．．．「耳は大事」ですよ聞こえなくなったら「補聴器」
でもお願いするしかないですかね？」
「そういう便利な物が出来て良い時代になったものだ。第一京浜道
沿いに良いストアが合る，ココは２４時間営業らしいからいつでも
開いてる使うと良いよ」

間宮は相手に気を遣って受話器を離して笑うと
「きっといつかお世話になりますよ。耳が聞こえなくなったら直ぐにでも」
「そうすると良い」
柴田は低い笑い声，趣味をコーラスという子気味のいい笑い声の中
間宮は受話器をおろした

「楽しそうでしたね，柴田司令とそれほど面識があるとは思いませんでしたよ」
全ての指示が終わった和田は間宮のシート後ろに立っていたがいつものような勢い一点の聞き方ではなかった
むしろ気味悪いほどの小声で

「目処はたったんですか？」
チェックボードで顔を隠した和田は聞いた

「そうだな目暗になってからじゃ事は遅すぎるし．．．あるいは目暗のふりをする必要もあるかもしれんしが，保険はかけたれたというところだ」
「合図は」

「心配ない，後は粉川くんだな」

尖った目のまま振り向くことなく和田に指示をした間宮は荒れる波模様と暗い影を惜しむことなく落とし続ける空に向かってつぶやいた

「いつから不正活動なんて洒落たことができるようになったんだ．．．俺たちは（海自は）」

苦言のようなその言葉とは別に間宮の顔には挑戦的な笑みがあった

「行っちゃったぁ」

アイゼンハワー事アイクは自分のグループルームから水平線の向こうに形を小さくしてゆく『こんごう』の姿に一息ついてみた

デッキ上には未だ忙しく働くデッキオペレーター達，「ＥＡ－６Ｂ」なども離陸の準備を始めているという状況で休憩に入ってよいかは微妙とも思えるが
マイペースなアイゼンハワーはすっかり御気楽ムードに浸り随伴艦であるカーティスとカウペンスにも休憩を言い渡していた

ガラス窓の前から消えた艦隊とは別に自分の横を併走する『くらま』・・・ヘリ甲板に立ったままでいる麗人を見ながら
「お堅いお方・・・・」と溜息

白を基調とした部屋は真横に長方形の大ガラス窓を持ち，テラスこそないが空間を大きく見せ採光を取り入れている
真ん中に置かれた木目調のテーブルを囲むようなコの字型のソファーセット
ソファーはベージュとブルーのツートンカラーで一見するとどこかファミリーレストランのようなつくりに
ソファーの一番端には大きな「くまのプーさん」が座っていたりとかでそのカラーをより強めている

壁に備え付けられたトイモデルタイプのキッチンいわゆるプラスチックを多用したおもちゃのようなカラー配色のキッチンに向かい木目のラックに掛けてあった名前入りのマグカップを取り出したアイゼンハワーは頬をふくらますと

「私の失点につながらない事を願うのみだわ」

そういうとフリフリと体を揺らして

「それにしたって佐世保に寄港!!エセックスになんか絶対に負けないんだから!!素敵な夜にするわ!!」

幼い舌足らずな声で自分の上着を預かるために後ろを歩きながら神妙な顔になっているカーティスに聞いた

「ダニエルは?・・・・・引きこもってるの?」

広すぎる部屋の中に2人だけの艦魂，アイゼンハワーは黒の上着を脱ぐとカッターシャツの姿でネクタイを弛めながらつまらなそうに座り直す

カーティスもまた自分の上着を脱ぎ入り口近くにあるハンガーにかけながら答えた

「彼女のところに，交信をしてました。軍務に関わることは一切話さない事は誓っております」

「彼女・・・・マリアのところに?ダニエルってマリアの信奉者だったっけ?」

テーブルの中程に置かれたガムシロップを2つを可愛らしい茶色のマグに注ぎながらアイゼンハワーは小さな手で隣に座るよう促した

カーティスに「いる？」と聞いたが

「いいえ私はブラックで」

相手の素っ気ない返事に掴んでしまったシロップをそのまま自分のマグにさらに投入したアイゼンハワーは

「ミルクが切れちゃいそうだから帰港までに補充しておいてくれない？」と開いた蓋を小さな舌で舐めながらイタズラっぽく頼んだ

「了解です」

「ねぇクーンは日本は詳しいんでしょ！色々と教えてね！」

テーブルにべったりと手を伸ばして頭まで擦りつけた状態でとなりに座ったカーティスに愛嬌良く笑うアイゼンハワーはこれまで多くの海で活動してきたが日本には寄港した事がなかった

テーブル下から取り出した「海の麗人倶楽部」を取り出すと

「ああっ！！やっぱり写真以上に美しい方だったわぁ！！」

手をばたつかせて『くらま』の写真にキスをしてみせた

「ねぇ『くらま』司令はこんなにキレイな方なのに恋人とかいないのかしら？」

雑誌には驚くほどの個人情報が載っているが割と憶測で書かれたものも多いし

恋人の有無などは書かれていない

アイゼンハワーは運良くであった相手のデータを長く日本に駐留するカーティスから仕入れたかったのか，慌てた口調で聞いた

「さあ良くはわかりませんが，同じ佐世保にいる護衛艦『しまかぜ』という者と恋仲ではという噂は聞いたことがあります」
「誰それ!!聞いたことない!!」

あっけなく口に上った恋人候補の名前に雑誌を片手に怒った顔

「私達でいうならばダニエル姉さんより前の世代型の駆逐艦に住まう妖精ですね」
「プロビデンスみたいなの?年寄りじゃない」
「そんな事ないですよ日本の妖精はどちらかといえばみんな若いです，彼女には何度が会ってますがキレイな人ですよ」

うまい嘘は言わないカーティスの言葉に頬をいっぱいにふくらませたアイゼンハワーは

「いいの!どうせずっと一緒にいられる訳じゃないから，たった一夜の思い出にでもなれば!!」

幼い容姿とは関係なく大人びた思考が大胆な言葉を返しながらもズルズルと音をたてて甘くなりすぎているハズのコーヒーを啜る

どう見ても幼女なアイゼンハワーに比べるとカーティスは女らしい出るとこの出た体格，１７０近い長身イージス艦特有の透き通る水色の瞳は物憂げな思いのまま，はしゃぐ司令艦をみつめていたが押しとどめていた思いに堰を切って乗り出した

「アイゼンハワー司令，質問してよろししいですか?」
「そんなに堅くしゃべらないで!任務以外ではアイクと呼んでくれて結構よ!」

アイゼンハワーはいつもそうだった
相手が必死の思いで話しに踏み切ろうとしているのは顔を見なくても声に宿るトーンでわかっているハズなのに軽くかわしてしまう

小さな司令艦・・・・
どちらかといえば大きな姉である「エリー大将」と似た緩すぎる態度は
彼女の幼い容姿がよりいっそうそういうルーズさを際だたせていて
軍務に真面目ではないのか?という不安を感じる
何しろ初めて随伴する司令でもある

「最後の実験演習の事を日本軍（海自）におしえなかったかった理由が聞きたいの?」

そんなカーティスの不安を察したように
相手の言いたかった事をアイゼンハワーはミルクもいっぱいに入れたマグを両手でもちながらさらりと返した

「いいえ，でもそれもありますが」

見抜かれた悩み，少しの驚きに目を見開きながらも
カーティスは自分達が常々疑問に思っている事を一度に話し続けた
途中で止まってしまったら司令艦は答えを濁らせ話題から逃げてしまうという思いがあったからだ

それは
今回の演習という名の実験が「痛みを伴うもの」である事に端を発していた
同じ妖精（艦魂）が傷つくのは心の痛むものであり

そういう思いを持ちながらも
常に軍務に携わる事に忠実であるのに・・・なのに現実的には「何も出来ない存在」という自分たちの悲しい思いを
近すぎる相手の顔，懸命の訴えを宿す目線に

「心配なのね」

カーティスにくっつく程近くに座ったアイゼンハワーの目もどこか悲しそうに伏せられる

「私達は軍務に忠実であり常に規律を守り合衆国のために尽くしております・・ですが」

「そうね，私達は国に尽くしている。でもただ船の魂であって作戦を知っていたからといって何ができる訳でもないのという事が辛いのね」

そういうと生粋のコーヒーとはほど遠くなった甘み香る乳白色の飲み物を一口のどを通して
今までふざけていた口調を改めた，舌足らずのままに

「知っていても自分を「護る」事などできない・・・・なのに存在している事に迷っている？」
「何も出来ないのに何故私達は軍務に」
「国を護るという勤めを持つ軍艦に産まれた者の道よ」
「ですが」
小さな指が流行るカーティスの口に黙してと触れる

「変わる物と変わらない物があるとするならば，変わったのは私達

における軍務という体制であって変わらないのは私達が「ただの魂」である事よ」
アイゼンハワーの目は優しく揺れる

「私達は何時だって「人」に恋する船の魂，海という世界をつなぐ冒険と新たな道を開こうとする「人」を愛する魂・・・・・だけど世界は1つじゃないから私達のように軍務に着かなくてはいけない魂もいる」

小さな彼女はそれでも司令艦
妖精（艦魂）が何であるかという事は提督コンスティチューションに聞き及んでいる

心優しき艦魂達は戦いを望まない妖精である
しかし戦いがあれば海を隔てて争いの場に参ずる船も産まれ
戦いに徒事するために一線を越えなくてはならない・・・・だがそれは並大抵の思いではなく心を切るほどの思いの末に越えるラインだ。だから自分たちが軍人であるという思い込みが必要になっていた「人」のマネをして規律をつくり軍属たらんという規則の中に己を押し込め
国をゆく数多の船達の先頭に立って戦うという気持ちで心を満たす
戦争という無情の海を走る魂の支えとするために

しかし残念な事に世界は未だ「平安」を手にしていない
弓を引き続ける使命を持つ魂は未だに必要とされている
それでも・・・・夢を見る

「クーン，ダニエルも私達も本当はいつの時も心優しき魂だわ，争

いを望まず生きていたい。きっと相手もそうなのでしょうに，いいえ全ての船の魂がそれを望んでいる．．．．ヴェネチィアを行くゴンドラのように春の日を滑る自分でありたいと」

カーティスは泣いていた
灰色の船に産まれた自分，その長たるアイゼンハワーの言葉に自分の願いはあったから

「ダニエル姉さんは苦しんでます．．．．．私にはどうしていいか」
「今はどうする事もできない，ただの船の魂である私達が自分を動かすことが出来ないのと同じように「人」もまた争いを望まないという心をもちながらも，それに添うことが出来ない分裂し唖み合う世界の潮流の中にいるのだから」

涙に暮れるカーティスは俯いたまま

「そのために私達「魂」が傷ついて，「人」が力の均衡を手に入れる手伝いをしなくてはいけないのですか」
アイゼンハワーはカーティスの肩を抱いた
小さな腕は回りきらなかったが温かく彼女を包み

「優しいのねクーン，日本海軍のあの子達の事を心配しているのね」

泣き崩れ声も出ないカーティスの頬をアイゼンハワーの手が拭う
魂達にはそもそも敵も味方もなかった
「人」の世界には分裂している言語が溢れているが妖精達にはそれはない
帰属する国によって言語を改めたりするが実際にはそんなものがなくても話しは通じる
だからこそ争いたくない「人」とも

そして

同じ魂が傷つく事が恐ろしい
それがために泣いたカウペンス事ダニエルに怒鳴ってしまったカーティス事クーン
だけれどもどちらも同じぐらい軍務というものと自分たちのありかたに疲れ，姉を怒鳴ったあの場所で本当はクーンも心に涙を降らせていた

「私達はどの船よりも国と密接な恋愛をしているのよ，だからこそ「人」の苦しみに添い遂げましょう。そして何事もなく無事に帰ってこられる事を願おう！これが終われば佐世保でパーティーよ！クーン！元気だして」

自分の膝で泣くカーティスを抱きしめたままアイゼンハワーは姿が見えなくなった『こんごう』達が向かった灰色の海を見つめていた

「３００秒にて演習海域到達します」

冷気を満たし青白い光を輝かした部屋の中で石上はパソコンとのデータリンクを終了させていた
隣に座ったダニーは一足は行く終わった作業にパソコンの蓋を落としいつものように拳銃をテーブルに置いていた

「Ｃｏｒｏｎａ2起動，正常に運行中」

機械の耳障りな雑誌をめくるような音は周りを囲む他の音と重なって一つの砂を噛むような音となっている
その中を並んだ技術者階級を付けた物達が淡々と仕事を続けている
効き過ぎぐらいの冷房のせいなのかみな薄手の手袋をして長袖の姿

「ＭＩＲＡＣＬＥと兼任じゃみんな疲れるだろうに」

石上はスタッフジャンパーのに袖に手をとおしながら卓上の拳銃に指を滑らせているダニーに聞いた

「そんなことはない，実戦ができるのならばどこえでも行くよ。寝る時間などいらないさ，君もそうだろう」
目をあげず手入れするように拳銃を触る太い指の彼は
リアクションだけは体を振るわらて見せる

わかっていた言葉だったが石上もまた息をつきながら
「寝るのは死んでからでいい」と皮肉った

「僕もそのくちさ，それより君の方こそこの日にこぎ着けるのが大変だったんじゃないかい？例の事件で演習自体がお流れになりかねなかったんだろ？」

スーツの上にジャンパーを羽織ってイスに座った石上にダニーは実際に片目をつぶって行った
彼が演習に向かうアイゼンハワーに乗船する日程の頃に海自では例の「不審船事件」があり世論の逆波の中では演習は不可能か？という疑問さえあったのだ

「交渉したよ，実験項目も開示して」
「ほお，この実験項目を開示した上で演習を許すとは，なかなかに日本も鋭くなってきたものだね」
「僕たちだって伊達で「軍人」をやっているわけじゃない，羽村局長には１つ「貸し」だと釘を刺されてしまったけどね」

迫る時間に合わせファイルを開き項目の再チェックに目を通しながらダニーは口から仄かに白い息を吐いて笑った

「局長か，秀才の上司がいて助かったな．．．．それにしたってＦＴＧが乗っていると聞いたがそれはどうなってるんだい？」
「問題ないと言い切られたよ，局長の目が届く人物を配置してあるらしいからと」
「ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ」ダニーは手を打つと
「国防は何時だって無駄飯食いで素人には理解の及ばぬ世界だが，理解のある上司がいればそれだけで国の命綱は太くもなるというものだ！！」

石上と並んだ二人はカウンターの入ったパネル型の大型モニターは全面に４枚並びに目を走らせた
衛星軌道をアイコン化した図面に
東シナ海域の図と天気図，頭脳の全てがココに集まっている

「Ｃｏｒｏｎａ２開閉作業に入ります」
衛星のアイコンからボリュームの図式が発生する
全面真正面に位置した技術技官の声にダニーは注意を入れた

「アイザック少佐．．．．我らの呼び名で行こう！記録に残るなら

なおさらにだ」
「了解！！今より衛星Ｃｏｒｏｎａ2の呼称を「ハ・シェム」と改める以後このコードネームにて発令す！！」
一つの指示で冷えた部屋の士気は温度を上げる
並んだ技官達の目の輝きがそれを表す
様子を満足げに見つめるダニーに石上は
「一本良いかな」とタバコを挙げて見せた
精密機械の並ぶ部屋だ通常なら許可が下りるとは思えなかったが
「それが君の願掛けなら構わないよ」とダニーは手にしていた拳銃をあげて
「僕の魂はココにあるからね」
石上はタバコに火を着け目を細くして見つめ煙を流した
「Ｊｅｒｉｃｈｏ９４１か」
「祖国の弾丸である僕の器だ」
拳銃を撫でる手，青の光の照り返しの輝きの下，メガネの奥にある目がどれほど尖っているかを表す一言
石上とダニー事，デビッド．タボル大佐はリンカーン以前からの旧友だった
お互いが国を護るという仕事に徒事しながらも
実情としての国の護りに疑念と憤りを持っていた事が2人を近づけるものとなっていた
どうしてもアメリカの庇護の元にしか自国を護る備えを持てない．．

・・・というか持とうとうとしない国民に石上は腹を立てていたと同時にそういう者の顔色をうかがっている「防衛庁」の姿が勘弁ならなかった

しかし現実はやはりアメリカ軍ありきの日本であり
常に後追いのような軍事開発は企業でいうのならば3流としか言いようがない状態に甘んじていた事で何度も上官と電話を会して揉め事を起こしていた中で2人は出会った

「軍を動かすのにアメリカを使わない手はないよ」

苛立ちで心をすり減らしていた石上に声を掛けたのはダニーだった
既にアメリカ軍の中枢にて新兵器の開発を担当していた彼は石上のように頭が良くそれでいて「国を思う者」を快く欲していた

「君の一声に目を覚まさせられた・・・今は良い思い出だ」

深くタバコを吸い込み細く吐く煙に浮かぶ顔は嬉しそうに
「局長は沈黙を守ってくれると約束してくれたし・・・・」
八割を吸ったタバコを指先でヒネリ消す

「君の国は秀才が多いのに，国民は大多数が国が嫌いという変わった者も多いからね，一苦労といったところだろうね」
わかりやすい嫌味だったが石上の顔は笑っていた

「だから交渉術も巧くなっただろ」

隣に来ていた自分の部下に吸い殻を手渡すと
「敵も見方も欺き，心行くまで自分の求めたものに没頭するのは・・

・・・そんなに悪くない」
「清々しいだろう」
「まったくだ」

席を並べた2人の前，青のモニターの中にあったカウントは３００秒のリミットを切った

「ハ・シェムは交信を開始しました」

忙しく動き出す部屋，交信の確認をした者が次の声を挙げる
「マーシアハ受信開始」
「ルーアハ受信開始」

メインのモニターに映し出される図式キレイに整った三隊の図にダニーは満足そうに笑う

「少しは形になったな，よろしい！！「テトラグラマトン」計画実行開始！！」

座ったままの姿勢それでも興奮が冷めやらないのか銃に手を掛けたまま
「弾は入ってないんだろうね」
銃口が自分に向いている事に石上はちょっとばかりふざけて見せた

「弾は僕だよ，祖国を守るための弾・・・・・これには入ってないよ」

そういうにふさわしいのか
拳銃はただ磨き上げられた美しくもニブイ光を返していた
一度も発砲された事がないかのような拳銃

「7度の行軍の果てに壁は崩れるか?エリコのごとく?はたまたそこまでＭｉｓｓ．ｄｉａｍｏｎｄが持つか?」
ダニーは喜びを言葉にして続けた
「これが人の作り出す「神の右腕」足らんことを願うよ」と
科学を共通の主とする2人は自分たちの手がけた実験に心を躍らせていた

「精霊を感知しました」

ドラムロールが延々と鳴り響く柱の間に3人の妖精が立っていた
灯りのない柱達が乱立する間は狭く息苦しい圧迫感を紛らわすような赤い照明
息を吐けば白くくもるほどに冷たい中
皆黒い髪を目深に目の光りだけでお互いを確認するように頷く

「それでは各々が任務を達成する事を願う．．．．エィメン（そうなりますように）」

真ん中に立った少し小柄な少女に傅いたまま挨拶を交わした2人は光の輪を作りその中に静かに消えていった
残された泡沫の粒は床に少しばかり転がりあとはそのまま消えていくと
残っていた彼女は手に十字架を持ったままどこにも見えぬ祭壇にむかって両膝をついた

その間にもより音を大きくした濁音が渦巻くようにこの空間を押しつぶし狭くしてゆく圧力を上げる
それに乗じてわざとらしいほどの音響が広東語を流れだし
耳の痛くなる合唱の中にあって少女は薄く開いた目のままで祈りを捧げていた

「天にまします我らが神「ＹＨＷＨ」貴方が我らの近くにいらっしゃる事を感じさせてくださいませ迷える魂を導いてくださいませ，そのための苦難の道を甘んじてうける我らを導き給え，貴方の御子である主Ｊｅｓｕｓ．Ｃｈｒｉｓｔの名において心より深くお頼み致しますエィメン」

深い信心の下，目の色に赤と青を宿した彼女は闇に埋まってゆくように静かに姿を消した

海域に到達した『こんごう』はいつものように艦首部分に立っていた
波は高く結局小雨になったとはいえ雨はやまない黒の緞帳の世界はきもちを曇らせていたが
先の見えない空の下，雨に濡れることわ厭わない青服の姿で
髪をひっつめてはいるが風に揺らしながら
凛々しく立ち姿は艦橋から彼女を見ている粉川には実に頼もしいものに見えていた

「いつ始まるんですか」

間宮のとなりに立った粉川は艦橋部に叩きつける雨の音を聞きなが

ら腕時計を確認した
演習の定刻にすでに入っている状態なのに指示はない

「全方位に注意」
静かな指示の元
間宮の顔は厳しく
「実戦形式・・・すでに始まっているのかもな」と粉川に告げた

粉川は自分がしばらくそういうものから遠ざかっていた事に恥ずかしくなって再び『こんごう』の立っている艦首に顔を向けたが

そこには驚く光景が広がっていた
先ほどまでは雨に負けぬ勢いで立っていた『こんごう』が倒れているのだ
それも
波の激しさに尻餅をついたという感じではなく頭を抑えたまま甲板を転がる姿はいつもの彼女からすると尋常ならざる事態としかいえない
思わず粉川は声を出してしまった

「『こんごう』！？」
「艦橋！！こちらＣＩＣ！！海域全体にジャミングが発生してます！！現在の段階での正確な測定は不能，通常の規模をはるかに上回るものでる事だけがわかっています！！」

粉川の叫びはＣＩＣからの交信でかき消され同時に艦橋に詰めた者達の顔色が変わった

「落ち着け！！現状の把握を！！」
なんの予告もなく始まった「実戦形式の演習」にあわてふためく艦

橋に渇を入れる間宮は続けて冷静に

「いいか！ここはもう戦場だ！実戦形式という仮の名前を持っているだけのな」

和田の肩を叩き各部の調整を急がせながらまだ見ぬ敵の形に目を尖らせた

「やったな石上！！」

一方艦橋の騒ぎとは別のところで艦魂『こんごう』は甲板を転がり頭を抑えながら歯を食いしばっていた

「頭が・・・・・割れる・・・・」

ローレライの歌のように脳を直撃する鐘の音の前に目を回して

それは初めて経験する戦いで

どの護衛艦も経験した事のない実戦という世界の幕開けだった

第五十二話　神の右腕（後書き）

カセイウラバナダイアル～～トンデモかも2～～

今回は少し軍事的なアプローチをしてみました
とはいえ素人の書く者ですからなんともいえない部分はたくさんあるとおもいますがそこは暖かい目でみてやって頂きたいと願っております

いやあ
さすがに軍事機密の塊イージス艦
理論や理屈がわかってもそれを立証するロジックが見あたらないというか
欠損部分を自分の想像力で埋めつつ
色々な方面からの助言をミックスしてゆくという作業はなかなかにつかれました
なので
努めて皆さん優しい目でみてやってくださいまし

ところで最近メッセで
作品がおもしろくないから速く終わってくださいというのがきましたできるだけ頑張って速く最終回を迎えたいと思います
希望にそえるように頑張るとしか言えませんが
巻いて行きますので

それと

先生の艦魂は可愛くないというのもありましたが
すいません
もう可愛く書けてないことはわかってます
努力はしているのですが足りてない事も認めます
ですが希望に添える可能性はこれからも低いと思います
そういう方にも申し訳ないと思うのですが

他に可愛い艦魂を書いてらっしゃる先生はたくさんいらっしゃるので私のは諦めてください

他の先生を見習って勉強というのもさせて頂いてますがいざ自分が書くとなるとなかなかうまくいかないものというものですから

とにかくしばらくは頑張ってかくつもりなので
どうしても私の作品は好きになれないという方は読まない方向でお願いします

そんなこんなな事があった人生山ありゃ谷ばっかの渓谷行進軍なヒボシですがｗｗｗ

でわまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第五十三話　覚悟の証（前書き）

イージスシステムの概要については頑張って勉強した部分と「とんでも」が混在している事をご理解ください
軍事に詳しい方は不愉快に思う点も多々あると思いますから読まないという方法もあります

そのあたりを理解の上で読んでくださいまし

第五十三話　覚悟の証

「イージスシステムの根本は，いかにも人間の脳を模倣しましたという感じのものだ」

冷房の効き過ぎた底冷えのする部屋の中
モニターから帰る青色の光をメガネに映したダニーはフェイズ1の状態に入った『こんごう』を囲む海域図のアイコンをを見つめながら隣に座って石上の真剣な眼差しに嫌味の混ざった声で続けた

「アメリカ人はこういう物を「真面目」に作るのが得意だ」

テキストと予定表をデスクの上に両方開き
その前にさらに並べるように小型のパソコンを開いたダニー
最初の項目にチェックを入れる動きと同期するかのように大型の四面モニターの前をツーマンセルで陣取る技術部隊隊員達の指先がキーボードを叩く音が途切れず響く

「事「現行の」イージスシステムは脳との接続である体の関係に置いてシナプスの部分を割り振りを「人」の力に依存しているとぼくは思ってるんだけど」
「それはよくない事なの？」

静まった部屋の中
進行状況を読み上げるオペレーターの声と
機械の音，間を縫うように聞き返す石上の声

「悪くはない，このあり方は新しいタイプにも受け継がれる事が決まっているからね」

無言の返答に話しは続く
「ただね，先に言ったように結局「人」の模倣系として船自体をそれに準じて作ったからシステムにかかる負荷は並大抵のものじゃなくなった」
「それは込みの設計じゃないのかい？」

銀のタンブラーを自分のパソコンから遠ざけた石上は少しの笑みを浮かべて続きをと促す
「もちろん！タイフォンの頃から蓄積された実験結果から作られているのだからそうなんだけど．．．．．結局そこが隙があるハズなんだね．．．．ぼくの理論ではね」

そういうと簡単な図式を見せた
描かれた図式
人をかたどったものの頭にイージスと書かれた紙にボールペンを向けて

「アメリカ人は「人」が高性能な生き物である事を理解した結果としてイージスシステムの根を作り上げた。例えば右手を動かすとすれば．．．．右手を動かすために何が必要になる？」
「脳は右手に動かすシグナルを出す．．．．．そのために体の各所を動かすための計算をし指示を含めて運動する」

指を鳴らしダニーは続ける

「その通りだ！話しが早くて良い。右手を動かすという動作にかかる各所の連動率から運動のエネルギーの計算．．．．これらはこの動作一点について少なくとも３０の指示が成されるという状態になる」

「同じようにイージスシステムも計算する」
「ＹＥＳ」

ペンを紙に叩いて喜びの返事を返す

軍人であり技術者である彼は科学にも医学にも精通していた
自分の持っている考えを遠慮無く話せる事は学者や知識者にとって楽しい一時でもある
ましてや目の前自分の考えの中身を知って理解が出来る人がいるのならうれしさも跳ね上がると言うものか
すっかり石上に体を向けたダニーは弾む声で続けた

「問題はそこだ，イージスシステムは「人」を模倣した結果全体を動かし，攻撃を見渡し自分を守るという神経は抜群に良くはなったが，見た目の「人」の原理をそのまま取り入れた結果各々で起こっている情報の重さを認識するのにタイムラグができた」

「右手を動かすための指示に付随する筋肉の加重や減退の情報が必要であるという考えには至らなかったという事か？」

「違う，そこは理解できたのだけど，それほどまでに多岐にわたる指示を人と同じ「１つの脳」で解決しようとした事に問題があった」

「つまり脳に一極集中する情報量の処理とは別に起こっている状況への対応が甘くなったという事か？」
「・・・おしいな・・・まあ似たようなものだ。これによって隙に漬け込む事ができるか・・・あるいは脳は「騙される」事もあるという現象があるかといったところだ」

自信に満ちた目はメガネの奥で子供のように輝きながら進行中のプ

ログラムに目を走らせた

「さすがはイージスシステム．プログラムチーム参加者だな。中身を良くわかっている」

石上は自分の手持つにあるパソコンに写る数値を確認しながら相手の顔を見ずに返事を返したが
ダニーもそれで自分の顔色が変わったのを見られずにすんだこと良しとしたように答えた

「ぼくは最終段階の一歩手前で外されたよ」急に弾みを失った素っ気ない声で，そのまま
両肩をわざとアメリカ人がするオーバーアクション風にして見せると
「知ってただろ」と，石上に向きメガネを少し下にズラした茶色の目がイタズラな顔で

「Ｕｎｉｔｅｄ　ｓｔａｔｅｓを護る秘密兵器の開発がジューの知識によって作られるのはお断りだそうでね。上院議員からの圧力もあってチーム追い出された」
「ＫＫＫ顔負けな判断だね，未だにそんな事があるんだ」

ダニーは自分の膝に置いた拳銃に目を細めながら

「アメリカは今も昔も変わらずそういう差別国家だよ，上に行けば行くほどにね。結局現行のイージスシステムの開発は「ｔｅａｍＡｍｅｒｉｃａ（純血米人同盟を皮肉った言葉）」で作られたものになった」

膝の上の拳銃に手を下ろし
モニター上にて展開される図式を睨む

「じゃあ今日そのイージスシステムに自分の「新兵器」を当てられるのは，さぞうれしかろうね」

石上は口が寂しいのか持たぬタバコの指先で唇をさする

「新兵器か・・・・」

ダニーは首を揺らして愉快であると示すと

「ミサイルや銃器を強大化，強力化していくことだけで戦いを計るなんてナンセンスだよ。ユングのアレじゃないが大きい＝強いだなんて，米人＝正義と言っている見たいなものだ」

石上よりは幾分年寄りなダニーは
短く刈り込んだ頭に塩の柱のように点在する白髪頭を何度も左右に揺らしながら

「核という絶対の力を別に，現実的な戦闘に必要とされる兵器を作ることにおいて目に見える大きさがや威容が大事だという思い込みは捨てるべきだ」

持論に絶対の自信がある事を
青い光を反射するメガネが伝える

「だが目に見えない兵器に理解を得るのは難しいだろう?」

「たしかに，難しいねキミはどう?そう言う物は認められないくち?今更そんな事はないとおもうけど」

あくまで口調は陽気なダニーに石上も口から白い息を吐いて

「君ほど苦労が多くないからなんとも言えないが少なくとも「電気」の偉大さを認めているのつもりだよ」
石上の返事にダニーは鼻から息を飛ばした

「苦労か・・・・」

横に座った男の言う苦労

「信心に似ていて，アメリカ人には理解が難しい事だっだろう?」

石上はダニーが軍用レーザーの研究でも一度煮え湯を飲まされている事をよく知っていた
スターウォーズ計画の中核を成した
軍事衛星に対するレーザー攻撃の実験は１９８９年に一度，予算の関係で打ち切られた

理論上わかっていても
やはり雲を掴むような兵器の開発に政府が難色を示したのだ
ホワイトサンズに実験場まで作った末の撤廃だった

目前に迫っていた完成からチームの解散に追い込まれるという苦渋の後に，イージスシステムのチームに入り
その手腕と頭脳を奮ったが

結局，イージスシステムの根本が軌道に乗った頃にまたも席を追われた

だけどダニーの理論はいつも天才的な成功にたどり着く
先進のシステム工学からはじき出されたからと言ってくさる事もなく
黙して研究に打ち込み，かつての研究を蘇らせる

長く放置されていたハズのレーザー兵器だったが
イスラエル政府の強い意向も彼の背中を押し再開された時には成功を確約していた

再開をしてほどない１９９７年レーザー対人工衛星兵器としての実験に「上向き」な結果を出すことにみごと成功する
以後ローコストな迎撃システムの一つとして現在も実験を続けている

「ｔｅａｍＤａｎｎｙ」
「戦術高エネルギーレーザー」開発の第一人者であるデビッド・タボル大佐

いつでもアメリカ軍にとって有用な兵器開発に携わっていながらも・・・・
ユダヤ人・・・イスラエル人であるという「人種差別」から何度もの苦労を重ねた男だが
決して心を折ることなく邁進し続ける。チームも一丸となり作り上げてきた功績は軍内部に置いても認めざる得ないほどの実績を持つ

彼は石上の言葉に目を細めシステムで満たされた部屋の天井を仰ぐと溜息にも近い白い息をゆっくりと糸のように吐きだして

「そうだな・・・人は常にそうなのだが「目に見えないもの」に信心するのが苦手だ」
「信心？」

「似ているだろ，見える兵器には頼れるが見えない兵器は不安だという態度」

天井に挙げていた顔を降ろすと

「神は見えざる存在である「ＹＨＶＨ」であるがＣａｔｈｏｌｉｃのように十字架を祭壇に飾らねば祈りは届かないとする者も多いだろ．．．．そんな事はないのさ，いつだって神の目は我らを見ている。それを見えないと加護を得られないという不安から偶像を作って逃げているだけさ」

そう言うと前方に正面のモニターの前に座ったアイザック少佐に声をかけた

「どうだい，Ｍｉｓｓ．ｄｉａｍｏｎｄの様子は？」

「混乱しているようです，このまま対空戦闘用意に入るか，海域を強行離脱すれば実験の半分は成功した事になりますね」

チームの要として働く少佐は安定した展開に軍人特有の尖った声ではない慣れた返事

始まった実験の前ダニーは嬉しそうに頷くと

「実験の成功は地味な活動を続けデータを集積していく事でえられる，例えるならば努力の結果の大賞のようなものさ」

「そういう努力をかかさぬ事が金星につながるというものだね」

石上もまた向かって右側の大型モニターに映るアイコンの『こんごう』を見つめた

広範囲に広がったジャミングに混乱している様子と言われながらもいまだ速度を落とさない姿に目を尖らせて

「どうなってる？」

キャプテンシートに座ったまま
海域情報の集積に当たっていたＣＩＣに声を掛けた間宮はただ海を
睨んでいた

波は中程，打ちかける海の上を走る『こんごう』の艦橋は一時の混
乱が沈下し隊員は各所での情報収集に徒事していた
ジャミング自体は戦闘行動の中では比較的ありうる攻撃ではあった
が急に起こった事態に対応する事に時間が掛かっていた

「海域全体に高周波と思われるジャミングが掛かっています，です
が距離は．．．．．それでも１５０岐路１００マイル弱程度ですが．
．．．」
「ですがなんだ！」

迅速に自体を理解する必要がある
間宮は言葉が滞る事に苛立ちを感じていた

「どう表して良いかわかりませんが」
「何をだ？」

ＣＩＣのオペレーターである近藤の声は明確に物体を表現する方法
を失っていたが間宮の問いに出来うる限りの説明をした
モニターに映っているものは強弱を別とした無数の物体
オレンジ色に光る海域図の中に八角の囲いのように出来上がってい
るジャミングされた海域の中に浮かぶ「物体」の点が「何か」がわ
からないのだ

「八角の囲い・・・・・・」

手元にあるチェックボードの裏に同じ図を書きなぐる

「その囲いの中に「艦隊」が見えるのか？」

「そんな大きさじゃありません，大きくても『はやぶさ』程度で小さい物はＦ２程度の大きさとしか確認出来ないのですが・・・・」

「無数にいるんだな」

「飛行体とも艦艇ともいえないんです・・・・ですが・・・居るんですこの囲いの中に」

「三次元モニターにＦ２が写っているという事か？」

早い質問

「いいえ，それならばすでに接敵範囲に入っているハズです・・・・」

「囲いの向こうに艦隊が見えるのか？」

「見えません」

「なんだこれは？」

聞き出しの通信を終えた間宮は味わったことのない「攻撃」に頭の回転を速めていた

隣に立つ和田船務士もまた「目視」による索敵を開始し

粉川は艦首にいる『こんごう』を追い続けていた

最初の衝撃が走った時，甲板に転がり頭を抑えていた『こんごう』だったが

今もまだ立つことはできず波打ちを避けたスプロケットに手を掛けたまま苦悶の表情を浮かべていた

波を被った顔を空に上げ何かを探すように

「星・・・・・なんで？」

艦橋には聞こえない声だが
粉川は目で懸命に姿を追っていた，拳を握り倒れた『こんごう』に
尋常ではない自体が起こっていると判断していた
願うように心で繰り返す

「部屋に戻ってくれ・・・・『こんごう』・・・・・」

同時に艦の魂である『こんごう』が苦しむ程の何らかの攻撃が，見
えない攻撃が加えられている事に直感的に気がついた
現状では艦橋，ＣＩＣとも何事もなく稼働している
どこかに被害状況が出ている訳でもない，なのに魂は苦痛の中にあ
るという事態は

何かが確実に護衛艦『こんごう』を蝕んでいるという事しか考えら
れない

だがそれに至る答えを冷静に出せる状態にもいなかった
どうにか『こんごう』を部屋に戻す方法で頭がいっぱいになっていた
艦橋部の窓から必死に『こんごう』を見守る粉川の後ろでは和田が
間宮に向かっての進言をしていた

「撹乱から小型艦艇による攻撃では？」

双眼鏡を構えたまま今まで目による索敵を続けていた彼は眉間に双
眼鏡の跡をつけたまま
「もしくは小型の無人艦艇という新型兵器では？」

既に空における無人兵器は実践投与されている事からそれも考えられなくはないものだったが間宮はそれには納得はしなかった

「新型機雷では？」

2人の意見を聞いていたＣＩＣ近藤が自分の考えを申告したが

「それはないだろう」

間宮はＣＩＣと艦橋に海域図をアップするよう指示すると首を振ったこんな狭い海域で機雷をつかう？それが不可能である事を海の男はよく知っていた

ココを流れる潮流は足が速い
そうでなくても秋雨を伴う暗雲の雨が海に力を与えている状態の中で機雷を敷布したとしたらば『こんごう』がココに到着する前にぶち当たっているハズだし，演習後に回収しようにも九州南岸に向かって流れてしまう，それも屋久島河岸を通り種子島にわざわざ迂回するというルートを通って太平洋に向かって

そんな恐ろしい事が出来る訳がない
新型機雷や無人攻撃艦艇が最初からフローまたはスタビライズをしているのを隠すためにジャミングを入れていたとしても．．．．．

「回収できない，こんな量」

ＣＩＣから計上されている捕捉できた物体の数は半端なものではなかった
だが危機要素の小さい動かない物体をどういう物と判断すればいいかという解決がない

海域図を睨んだ思い沈黙
雨と波の音だけが響く焦りの空間に元気だけは人一倍だった男の声が響いた

「間宮艦長！！」

考えあぐねている指揮官達の前を粉川は自分のタフノートを手に挙げて見せながら

「緊急事態と判断します！！以後は打ち合わせ通りに・・・・・ココは戦場です！」

そう言うと足早く艦橋を出ようとした
「おい！作戦行動中だぞ！！」
「かまわん！！和田船務士！！」
粉川の背中に向かって怒鳴る和田の肩を間宮が掴んで

「彼には彼のやるべき事がある」

そういうと全艦放送に切り替えたままインカムを通して宣言した

「艦長より達する！現時点を持って「演習」を終了，これより実戦に入る！」

間宮の啖呵に合わせたようにＣＩＣからも艦内全てに通達が回る
「水上戦闘用意！！これは演習ではない！くりかぇす！！これは演習ではない！！」
響き渡る実戦という緊張の火線
よりいっそうに忙しく動き始める艦内の中
けたたましい足音を後に粉川はグループルームに走った

「粉川はん・・・・・」

走る勢いのまま
部屋に入った粉川の前『いかづち』と後ろに倒れた『こんごう』の姿があった
艦橋から事の成り行きを見ていたのだが
『いかづち』が自艦から転移しそのまま光の輪に消えたことでグループルームに入ったと予想していたとおりだったが
思った以上のショックは目の前の『こんごう』の姿にあった

いつもなら強気一点の彼女が息も不規則に昏倒する様は想像の出来ない図，肩に背負った荷物を観葉植物の並ぶコーナーに投げ走りよる

「粉川はん!!どうなってんの!!」

同じように泡を食っている『いかづち』は近寄った粉川の前で叫んだ

「それは，ぼくたちもまだわからないんだ・・・・とりあえず『こんごう』は無事なの?」

イスのない部屋
テーブルを除けた広がったスペースに雨と波で余すことなく体を濡らしたまま痙攣を起こしたように体を動かす『こんごう』を抱き上げた

「『こんごう』！『こんごう』！しっかりして！」

真っ白な顔に唇に添ってこぼれ落ちる黄白色の泡
歯を食いしばり過ぎたのか少なからずの血も混ざった状態で目を見開いた『こんごう』は口もきけない状態で自分を起こした粉川に目を動かす

「『こんごう』・・・・・」

いつもより大きな声相手の意識が遠のいているという直感
荒げた表情で自分を覗き込む粉川に開かれた目のまま

「星・・・・・星が落ちてくる」

途切れる言葉と荒い息を平井た口から吹き出す泡と血
両手で耳を塞ごうとしながらも

「頭が割れる・・・・・」
「耳・・・・粉川はん！！」

悶絶で頭を揺らす『こんごう』の耳から血が出ている
人で考えるならば痛みでココから血が出るのヤバイ傷に入る
驚いた声を挙げながらも急いで腰に用意していたタオルで耳を押さえる『いかづち』

「頭か！！頭痛が？」

頭痛程度で耳からの出血とは考えられないダメージ

「どないなってんの！！これ！！怖い・・・・・」

頑張ってはいるがすでに『いかづち』は半泣きの状態だった
いつもなら冗談の一つでも言って相手の様子に突っ込みの一つでもいれよう元気娘の彼女は
歯まで震える姿のまま粉川の手をつかみ『こんごう』を囲むように座り込んで叫んだ

「『こんごう』！！『こんごう』！！返事してーな！！」

目は開いているのに光りの見えない曇った焦点，まるで昏睡状態になってしまったかのように揺れる姿に打つ手のない粉川と言った事で恐怖ばかりが心を暗くしていた

目の前で最新鋭と言われる仲間が物理的攻撃以外で倒れてしまった
事は物理的衝撃を受ける異常の恐怖でしかない
懸命に『こんごう』の肩を揺らす

「なんで！！なんでこんな事になってんの？わても目がチカチカする．．．．．怖い．．．怖いで．．．ミサイルもなんも飛んでへんのに．．．．．何が起こってんの！！」

震えすくんだ手は粉川の袖を強く引こうとするが掴む手にさえ既に力が入らないという震え

「なんでだ．．．．．．．」

粉川はこの艦が何に攻撃されているかを考えていた
艦魂が倒れる理由は艦体に何らかの攻撃が衝えられているからだ
なのに艦橋をはじめＣＩＣも現状では支障なく動いている．．．．．

それでも
魂である彼女は立つこともままならない姿なのは
どこかが既にダメージを食らっている証拠

「頭・・・・・・・・」

『こんごう』の頭を支え目をみる・・・・・・

「フェイズド・アレイ・レーダー・・・・・・・」
作戦行動に入れば例外なく輝く『こんごう』の目の中，八角の輝き
が見えない事に粉川は答えを求め始めていた

「『いかづち』ちゃん!!キミは頭は痛くないの?」

粉川は自分の縋ったままになっていた『いかづち』の顔を真面目に
見つめた
目の光り顔色
些少な事が全て自身の分身でもある艦の全てにつながっている彼女
達だが
『いかづち』の目は今のところ曇っているという事はない

「わては目がチカチカするだけ・・・・・痛ないで・・・・」
見つめられる真剣な眼差しにたどたどして返事

「艦魂にとって頭は艦のどの部分に該当する?・・・・・」

粉川は『こんごう』の頭をさすりながらに聞いた
身振り手振りで自分の顔をさわりながら『いかづち』は説明する

「それは目や鼻や耳はきっとレーダーやったりセンサーやったりと

ちゃうのかな?・・・・わてらは自分が自分の艦のどこに直結しているかまではわからへんねん・・・・せやけど」

不足の事態に冷静さを保とうとしながらも経験もなく予想もできない恐怖に震える『いかづち』は巧く言葉が走らない
だが対する粉川は冷静に考えをまとめる続けていた

「レーダー・・・・じゃあ『いかづち』ちゃんのレーダーにも多数の的(まと)が見えるって事?」

『こんごう』のCICでは八角を囲む海域に強力なジャミングが,かかっておりその中に多数の「的」が見えているという状況だった

「わてのでは電波が揺れてる線しか見えへんけど・・・・通信で『こんごう』からは「何か」見えるって言うてたやろ?」

以外な答えだった

つまり『いかづち』のレーダーは「ただ」ジャミングを受けているだけという状態
なのに『こんごう』は重傷でそれが及ぼしている標的は・・・・粉川の頭の中に気がついたラインがつながる

昏睡の『こんごう』目の中に輝かない八角・・・・・答えは

「狙いはイージス艦それも・・・・フェイズド・アレイ・レーダーって事か・・・・・・でもどうやって?そんな機能を限定して攻撃はできるのか?」

粉川は『こんごう』を抱き上げたまま考えをまとめた

現在，
イージス艦を狙ってこのジャミングが行われ
高性能な八角の目「フェイズド・アレイ・レーダー」を会してシステムに何らかの干渉と「混線」を起こさせているという状態
それが例の標的の多数の出現であり
モニターに映る機械ではわかっていても頭での処理の出来ない物質
でありさらにアクティブである事により処理が追いつかない・・・・
だがそれが答えとは言いがかったのか粉川は首を振った
イージスシステムは無敵の楯である
それは色々な実験で実証済みだし指揮決定システムと武器決定システムもそれぞれに別れていながらも特にフェイズド・アレイ・レーダーが頼る部分と攻撃を受ける理由が一致しない
あの八角のレーダーが主に使われる部署は武器管制システムであり
実際に誘導を行うのは２つ
ＶＬＳとＭＳ－２・・・・色々な考えがめぐるが，この他にこのレーダーが大きな仕事をしている事は見落とさなかった
「レーダー・・・・大きく見るまでもなく周辺海域全部を四方の目で見ているわけで・・・・・だけど」
追いつかない考え
「粉川はん・・・・『こんごう』のレーダーが攻撃されてるから頭ん中が痛いんか？せやったらどうして敵は攻撃してこんの？」
「まって！どうしてだ？レーダーに敵は攻撃をしている・・・なのにシステムは動いてる、でも『こんごう』は倒れていて・・・・レ

ーダーは・・・・・無事？」

錯綜の線・・・・・無敵の楯の魂はすでに重傷であるのにイージスシステムは稼働している？
この状態で攻撃を受ければ・・・・・混乱している『こんごう』はちゃんと的を見つける事ができるのか？
眉間に寄せる皺、フル回転で解決の糸口を探す粉川

「『いかづち』ちゃん・・・・・『こんごう』は倒れてる・・・・・そんな状態でレーダーは正しく稼働するの？」

至らない答えに首をかしげたまま粉川は『いかづち』の顔を見つめたが
『いかづち』は恐怖で鳴き声混じりで叫んだ

「頭ん中がおかしなってたらシステムが動いてたって何も信用できへんやん！！」

「やっぱり！それだ！！！」

涙の返答に粉川は自分の頬を打った

迷いはあった
だが迷ったまま何も言わず手をこまねいたまま時間が過ぎるなど合っては行けない事，粉川は『いかづち』に『こんごう』の体を預けると走った
グループルームでは艦橋への交信が出来ないからだ

「粉川はん！！待って！！」
「待ってて！！『こんごう』を頼むよ！！」

そういうと揺れる通路を一目産に走っていった

「『こんごう』・・・・・・・・『こんごう』・・・・・・・・怖い・・・わて怖い・・・・・・」

残された『いかづち』は自分の震えを止める事が出来なかった
正直に言えば護衛艦とはいえ戦争など皆無の国に生まれた者で事実「戦争」を知らない魂である彼女は戦わない他の船魂となんの変わりもなかった
気構えや心得なんてものはやはりそれそうとうの緊張とストレスによって培われるものであり
普段訓練でしている程度のものでは届かないものという事を確信せざる得なかった

だから泣いている自分が情けないとも思えず
震える手が1人になってしまった自分を支えられず

「なんでこんな・・・・演習やろ・・・・なんで体痛いの?いつ実戦になったんよ?どうしてよ?」

突然，聞いたことも見たこともない演習・・・・・そして実戦という発令に心を凍らせ抱き起こしている身動き叶わぬ昏倒と戦っているもっとも非常事態の『こんごう』に縋りつくしかなかった

「怖い・・・・・どうしたらええねん・・・・・」

「『いかづち』・・・・・・・」

『いかづち』は，いきなり抱きしめられていた
「『こんごう』？」

跳ね起きた体
目の玉に光のない姿，心身を走る痙攣の動き，なのに強い力で抱きしめる腕の『こんごう』は息も絶え絶えの中にあっても叫んだ

「心配するな!!!絶対に護る!!!私が護る!!!」

自分に言い聞かすような怒声，でもそれが仲間を護ろうという覚悟の証

「『こんごう』・・・・・・」

痺れたように震える唇からそれでも強い意思を叫び続ける

「私は金剛・・・・・絶対に護ってみせる」

二人はお互いを支えるように抱き合った
『いかづち』は震える自分の体を擦りつけるように目の焦点の合わない『こんごう』にただしがみついて

今はそれだけしか自分を守れるものがなかいという思いで
「がんばるよ・・・・がんばる」と泣いていた

第五十三話　覚悟の証（後書き）

カセイウラバナダイアル～～ａｅｇｉｓｓｙｓｔｅｍ～～

はっきり言うと・・・・
全然わかりませんでしたｗｗｗ
いゃあ
たくさん本を読んだし図形に書いて見たりもしたんですけどね（自分の手でシステム概要を書くと色々な事に気がつきますから）
複雑すぎて考えが追いつきませんでした

ただ
中身についてはけっこうおもしろいものが多かったので勉強になりました
今話の冒頭でダニー事デビッド・タボル大佐がいっていように「いかにも人間の脳」というのは図式に書いて見てわかった事なのですがあながち間違ってもいないと思います

果たして無敵の盾はどうなってしまうか

色々な方法を考えた凡人にとって
ＲＥＤＣＬＩＦＦの張飛のキラキラ大作戦はなかなかにいい発想をくれました

ところで
最近メッセで
「アメリカの艦魂もそうですが名前が色々あって混乱しています。一話使って艦魂の紹介をしてくださいませんか」

という要望があったのですが
書いた方が良いでしょうか?
出来るだけ後書きでかこうかとも思っているのですが
なかなかそろえる事ができないし
後書きだといつか確かめる時に見たいとおもってどこかわからない
という意見もあるので・・・・

どうしようかと迷ってます

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第五十四部　流星の空（前書き）

次回はハチャトゥリアンｗｗｗ
くどいようですがイージスシステムや機械の概要は全然想像の産物
ですからご注意は無しの方向で
もし理論的にまちがっているぅ！！という事を教えてくださる方は
メッセください！！
勉強は好きですからそちらでご教授くださいませ

第五十四部　流星の空

天気は変わらない

薄いグレイのカーテンを引っ張ったままの雨のデコレーション模様
波に亀裂を走らせる風の中にあって艦はそれほど揺れてもいない
なのに『こんごう』に勤める全ての隊員に嵐が去来していた
予告のなかった訓練
正体のわからない「影」

全てが初めての経験と状態の中で「実戦」の発令だったが
艦内に混乱はなかったスピーカーを通して発された揺るがず静かな
声に納得していた
『こんごう』艦長間宮の実戦的で冷静な姿は隊員の心を引き付ける
ものがあったし・・・この海にはそれ以上の想いもあった事で誰も
が顔に真剣さを表していた

粉川が走り去ってから
部外者が艦橋に居座る事で漂っていた「別の緊張」から解かれた艦
橋要員達もまた
間宮の指示の元で濁りのない流水のように速やかに動いていた

「粉川一尉は本当に現状については何も知らないのでしょうか？」

厳しい目つき
太い眉毛の下に仁王のへの字口で間宮の隣に立った「副長」兼任船
務士の和田は、慎重な中でも手早く各々の仕事をこなしていく艦橋
の中

水の勢いを止めてしまわぬように小さな声で尋ねた

「彼は緊急事態と判断し「戦場」だと口にしている・・・・」

粉川には疑いがかかっていた

本人がいつの間にか他に類を見ないほど「背広組」の人であるにかかわらず現場との親密になり挨拶さえ気安い程になっていた事で各科の長を除いて「仲間」と認識されてはいたが

実際に現場を仕切る者達はそれほど親密に心までをオープンにしていた訳ではなかった

だから和田のように「本当のところ」で粉川が自分たちに訓練の中身を教えていなかったのではという疑いはあったのだ

「粉川くんはそんなに器用な人間じゃないさ・・・・むしろ」

吊り上がった警戒を解かぬ鷹の目線

和田の視線に軽く手を振ると

「むしろ?なんですか?」

大きな図体どの角度から見ても体育会系で「根性論」をもっとも信奉していそうに見える和田の中身は見た名状に冷徹で計算の速い男

自艦艦長の言葉の先に何がある?それを聞き逃さず

「訓練に・・・実験をするヤツがいるという事が・・・・気に入らなくてね」

顔こそ合わさないが和田には間宮の声に笑みが含まれている事を感じていた
自分達の身の上に起こった不測の事態を楽しみに変換し始めている不敵なトーン

「試されてますか・・・・我々は」
「さあな」

自分の心の奥底にある愉悦を隠すように言葉を切り上げるシートに座ったままの間宮は深く長い息を艦橋部から婿上にみる海原に向けて

「まずはこっちの中身がどうなっているかを徹底的に確認する必要があるな、ＣＩＣ！そっちの結果は出たか？」

切り返し素早く指示を出す

「ＣＩＣ、現状を報告します」

指示から2分弱
艦の頭であるＣＩＣに詰める安藤二佐は艦長の応答を待っていたように返事すると項目別に調べられた現在の頭脳の調子を読み上げた

「Ａシステムの側で制限を受けているものが多数あります。また干渉の開始は全てジャミングに合わせたように行われています」

Ａシステム（指揮決定側）の
項目1から9までを上げた安藤は自分のデスク前に置いた割り図をボールペンでなぞりながら間宮の「何番が？」という質問に続けて

答えていった
通常でも小寒いＣＩＣの中、白い息を吐きながら目の前のオレンジのモニターを睨むと

「1、空との交信は大きく制限を受けています・・・これに伴い４．５．６．９．１０．１１に規模の差が有りますが電波の干渉による障害が発生しています。こちら側で干渉が無いのは7だけです」

安藤の手元にあるイージスシステムの要項は間宮の手にも渡っていた。そしてお互いが冷徹な視線の奥にある頭脳をフル回転させて会話の中に符丁を使って話しをしていた

電子戦略におけるもっとも初歩なものに盗聴があるからだ
訓練とはいえ中身のわからない得体の知れない事態に対する警戒・・・
艦長の持つ注意深さは十分に幹部達にも伝わっている。言われなくても注意をし、符丁をつかうあたりはお互いの信頼と訓練が出来上がっている証拠

「という事は１４の信頼性にかかってくるな、干渉の規模はどれに寄っている?」

閉じられた要項の前曇る空に敵を探す
見えるものにも見えないものにも神経の糸をピンと張った間宮
「対水空監視」の命令を和田に出した後、額をなぞりながら会話を続けた

「1に伴い重度の干渉を受けているのは5．６、次に3．４になります」

沈黙の相手
間宮は繋ぎをそのまま自分に聞こえるだけの声で
「文字通り軍事衛星が動いてるって事か・・・・」

軍事衛星を使った訓練・・・・通常ならば自分たちに有利に動くという訓練としてあるべきものは
間逆のものとして使われている
衛星を使った電波攻撃という実験をともなった訓練である事に変わった事実を「干渉」によってなされているという事実で確信しながら

「3．4．5．6の信頼度は?」と瞬時で整えた頭で聞き返した
「4．5は50%、3．6．は20%」

間宮は回線をつないだままたも短時間で頭に整理を付けるために黙した
雨を叩きつける艦橋ガラス窓の前
目視では海にはまだ何も見えない

3．4・・・・・
電子戦における4．見方識別装置、この場合に重きがあるのは3の方で僚艦については1隻『いかづち』だけしかいないのだから4は無視しても問題にはならないそう言う意味では5．航法装置も現段階で操船精度を除いては問題は少ない

問題・・・・・

それは著しく信頼度を落としているもの
3．水上レーダーと、6．電波探知装置
レーダー系と電探の信頼度が低いのは電子の城であるイージス艦にとって大きなダメージである

顎に手を置き考える間宮に安藤の交信が続く
艦長が各箇所の事程度で行動を滞らせるような事があってはいけないし
問題はまだある事を伝えなくてはいけない事を安藤は良く知っていた

「これら以外のもので９．１０は現在復旧してます．．．．．」

黙っていた間宮は目を大きくして聞き返した

「復旧してる？復旧にかかった時間は？」
「４分２２秒で回復してます。しかしジャミングが広範囲に及ぶもののためかノイズが断続的に入る状態ではあります」

９．１０、リンク４と１６
「海域に入って一度は途絶したという事か？」確認はＹＥＳ
片手で顔を押さえたまま今まで走ってきた海を見返すと
手早く

「回線はそのままでいい、追加で「１５Ｊ」を開く事を信号灯で『いかづち』に指示、『こんごう』えの返信もそのようにおこなえ」
和田に指差し確認

「了解」

最初の指示を飛ばし次に入る
「Ｂシステムは問題なしか？」
「ありません。ただ補助Ｖの信頼度は想定で５０％以下の状態「何が」干渉しているのかを現在も追うことができません」
「だろうな」

想定される信頼度
機械の見ているものが何かわからないがレーダーには写っているという意味
近くで会話をしっかりと聞いていた和田にも理解のできる判断

「総じてレーダー・・・・フェイズド・アレイ・レーダーも信頼度が下がっているという事ならば、武器管制側（Bシステム）が必ずしも無事であるとは言い難い・・・・」

厳しい見解を示す船務士
楽観的な意見が必要とされない真っ正面の現場にとって「危機感知」の方が大切な事
自艦の四方をはるか遠くまで見渡せていたレーダーは現在封じ込められた海域の中にある上に
限られた海域に見える的（まと）が何かを判別する事が出来ないという事実は重い

「マニュアルの方は大丈夫なんだろ?」

外の荒れた風とは別のに嵐の下に沈黙を守り
顔を厳めしく歪めたまま付き合わせる士官達に間宮の声は緩く聞いたが
つめた者達はどこか冷めた表情で
その思いを代弁するように和田が

「まともな訓練とはおもえません。こちらが何を要して攻撃をしていいかさえもわかりません。」

大きく両肩を挙げて突然起こった火急の事態でコリを覚えた肩をほ

ぐすしながら
相変わらず不機嫌に曲げた口から

「向こうが何がしたいのかもわかりませんし」

和田の返事に背中で笑う間宮
灰色の緞帳小刻みな揺れ、荒れ模様の海の上で電子の目は「何か」に釘を刺されているが、態度には落ち着きを戻し口元を笑わしたまま思っていた

「レーダー戦略・・・・か」

「間宮艦長!!」

艦橋につめたすべての人間がこの訓練にどう対処してよいのかを考えあぐねていた所に駆け足の粉川は戻ってきた

艦魂『こんごう』達のグループルームは艦尾に近いところにあるせいか全速力で艦橋まで走り登った粉川だったが息があがって終うことはなかった
ただそれがかなりの運動である事を示す汗を拭いながら間宮に駆け寄ると

「訓練を中止しましょう」

行き詰まっていた場にいきなりの進言をすると
「得体の知れない実験に付き合わされる事はありません。この事については正式に抗議の準備もあります・・・『こんごう』の機械機

能に対する準備が・・・」

「それでいいのか？」

早口な粉川の言葉に最初に応じたのは声は尖っていた
今まで艦長として指示とは別に誰もに「動揺」をさせない緩い声を発していた間宮の態度は急変し怒りを匂うほどの目に変わったまま

「粉川一尉は、僕たちにはこの訓練はクリア出来ないと判断したという事かい？」

詰問のような口調に粉川は
相手がそういう勘違いをしている事を宥めるように泡立っていた自分を抑えて

「そういう事ではありません」と相手の顔を真剣に見据え否定した

だが
粉川の本音は「人」には理解の出来ないところにあった
実際には「何を」目的にした訓練かわからない事に対する怒りや、反する挑戦的な気持ちもあったが
目の当たりにした『こんごう』の姿にそんな悠長な気持ちではいられなくなっていた・・・自分の脳や目に相当する部分に電子の攻撃を受けて立つことも出来ない『こんごう』を直ぐにでも苦しみから解放したいという思いが走っていた

「意味不明な試験に付き合う事は海自にとって有益な事はなにもないという事を言っているのです」

あくまでも自分たちのせいでなく、向こうの意図不明を強調するが

「有益？」

粉川の言葉を間宮は鼻で笑った

「粉川一尉・・・・訓練する事の意味には変化する戦場に振り回されず即時の対応力を身につけるため、ちがうかい？」

「もちろんです」

自分に対して改まり尉官を並べてしゃべる相手

いつもと変わらないハズなのに間宮は変わらない口調の中に存分の怒りを投げこむ

「だったら、この不測の事態という訓練から僕たちが逃げる事は出来ないという事だ」

「訓練の仕方さえわからないのに」

粉川は食い下がった

言い分はわかるが現実的には対処にマニュアルさえないのに

こうしている間にも『こんごう』は息を荒げ苦しんでいると思うと黙ってはいられなかった

そんな焦りや若さに気がついているのか間宮はゆっくりとした態度で

「現実の戦争はシナリオ通りになんて絶対にいかない。こんにな素晴らしい訓練はないと僕は思うが・・・・・訓練なのに逃げるのか？」

逃げる・・・・・
間宮の言葉に周りの空気が堅くなる
隊員達には顔を見せないが「逃げる」という意味を背中が雄弁に語る

闇雨の海のの記憶
重い口調

「この海から・・・・・また逃げる？「前は」実戦だったのに僕たちは見るだけに甘んじた。今度は不測を伴ったというだけで訓練にまで白旗を揚げろというのか？」

「前」
この言葉に艦橋にいた全ての隊員の背筋に稲妻がごとき記憶、痛い想いが蘇る
この海で・・・・
たった一月と少し前に「不審船」を逃がした・・・・・

最新鋭の目は消えて行く不審船の前に涙を流した

色を変える艦橋の雰囲気に粉川は言葉を失っていたが思い出してもいた

厳密に言えばココからそんなに距離のない海域に
同じように降り続いた雨の下で、国の領海を侵した不審者を取り逃がした日「涙を飲んだ」・・・・

「僕たちはさ、この国の防衛を担うプロのケンカ屋なんだよ。訓練にまで白旗あげちゃったら恥ずかしくて丘には帰れないよ」

荒れた波に怒りの鼓動が同期するのがわかる
何かをへし折るような亀裂が聞こえるほどに隊員達の顔は厳しく・・
・同時に冷静さの中に炎を宿した目で粉川を見ている
シートの前全艦放送を入れたまま自分の本音を語った間宮は背中を
向けたまま手ほ振って見せた

「まだやることやってないんだよ。違うか？」
自分の背中に燃える視線をくれる隊員達を煽る声に粉川は制止を口
走ったが

「ヤル前から白旗なんて御免だろ！」

「はい！！！」

狭い艦橋に響き渡る男達の声は艦長の心に応じる返事を声を合わせ
たように返した
「やりましょう！！艦長！！」
焚きつけられた火と心に残った痛みは艦に乗る全ての隊員達に届い
ていた
もはや反論や中止を叫べる状態ではなくなった粉川に間宮は初めて
振り返ると、いつものイタズラっぽい目で

「さあ！やろう！！」
困惑に表情を曲げたままの粉川はそれでも

「やるならぼくも参加しますからね！！」

止められないなら少しでも早く終わらせる方に走るしかない
そういう風に頭の中を切り替える。同時に粉川は自分が昔からこう

いう熱血な炎に心を躍らせてしまう自分に参ったと思っていた
だけどそうする事だけが『こんごう』を痛みから解放する唯一の道
きつく睨んだ粉川の顔に間宮はリラックスの笑みで

「もちろん！君の意見も聞いて、この馬鹿な実験をした奴らに一泡吹かせてやろう」

全てを見透かしたように間宮は立ち上がると
熱くなった男たちの顔に頷いた

「海自なめんなよ．．．．．石上」

正体のしれぬ実験それを楽しむように、しかし冷徹に熱い男達は声を挙げて戦う道に走っていった

「レーザーの高結晶化質量による残像という事か？」

メインの青いモニター2つが鮮やかな発行で示す海域の図を見ていた石上は半面の側で忙しく発生、消滅を繰り返す「的（まと）」に目を痛めたのか鼻頭を指でつまみながら
隣で楽しげに自分のパソコンに映し出される情報を見ているダニーに聞いた

「そうだよ。簡単なカラクリでがっかりしたかい？前にも見せたしね、何も新しい事をやってるわけじゃないんだよ」

前にも
そもそもデビッド．タボル大佐事ダニーはアメリカ軍が弾道ミサイルの攻撃を到達前にいかに破壊するかという過大に前向きな回避方法の１つとして選ばれた「レーザー兵器」の開発をした第一人者で、今はＭＩＲＡＣＬＥというチームリーダーでもある

彼が自分の従来もっている分野から、自分をはじき出して作ったイージスシステムに対抗するものを持ってきているのは当然とも言えたのでね」

「誘導放出の原理をね．．．ちょっといじってみたら面白くなった

ライブで行われる実験のデータは流れるように画面を駆ける中
メガネに帰る反射に口だけが笑う

冷蔵庫のように冷えた暗闇の部屋の前を陣取る４枚のパネルモニターその真ん中２つに写る『こんごう』のアイコンは若干の艦速を落としているようにも見える

開始から１０分膨大なデータがこの実験の大がかりさを示すように言葉を洪水のように記したものを吐き出し続けている中で
石上は手元のタンブラーに入れた湯気香るブラックを口にしながら

「それほどの質量を持たせる事ができるとは思わなかったよ」

感心したと何度か頷きながら
ダニーと同じようにモニターを睨んだまま話し合いを続けた

「照射を重ねるために3箇所にポイントを置いたのはそのためか」

口から熱い湯気を白く吹く石上に、ダニーは自分の考えを理解するものに答える
「あと衛星でね海域範囲を区切るカーテンを作ったというところかな」
実験に夢中になりながらも時間を惜しむように会話も楽しむ2人

「ＡＢＬプロジェクトでの実験では弾道ミサイルを落とすのに最長１２秒だそうだね、それほどのエネルギーならレーダーに残る残像も大きいのだろうね」
「そんな事はない、せいぜい鳥程度だよ」

顔をあげ手元に置いたコーヒーを捜しながら自分の研究を誇るダニー
「だけどその影にレーダーは騙されれる」
鳥の大きさつまりレーダーの目に見えるのは戦闘機ぐらいという比喩、十分に計算された質量

パソコンに釘付けだった顔を起こし首を鳴らすと
「特にフェイズド・アレイ・レーダーを持っている艦に見える景色は、ほれあれだ君が僕の娘にプレゼントしてくれた「万華鏡」だったけか？あれを覗くと見えるステキな流星の空が広がっているようだと睨んでるんだけどね」

「なるほど、固定したレーダーではそれだけ残像が「見えてしまう」という事か」
顔を上げたダニーの子供のように輝く目
メガネの下に笑みを浮かべた顔に石上も顔をつきあわせた

「試作だからね全部のレーダーに完全に作用しないところが泣きど

ころだけど」
「補助はポイントにあるんじゃないのか？ＡＬＴを持ってきてるだろ」

「それは企業秘密だよ」
「残念だな」

お互いが口だけの笑みを交す
タンブラーをデスクに戻したダニーは自分の手元に置いてある拳銃を眺めて

「だからさ．．．．．騙されるんだよ「人」は見える兵器を脅威と認識するけどね、今や見えないものの「力」なしにはそれが動く事も難しいという真実を無視し過ぎているよ」

「神の見えざる手？」
「そう、見えざる力だ」

信心
愛する祖国の弾丸たるダニーの信じる神は決して人には見えない神（ＹＨＷＨ）であり
それ故にＢａｂｙｌｏｎの虚像のような見える力を全てとしないという態度
今や人の生活には見えない力は数多に使われているが、それがいかに強力なものであるかを理解するものは少ないだけ

電気に始まる見えざる力の巨大さにダニーが魅せられるのも神への信心と自分の生き方を重ねているようにも見えた

「そういうものをね、彼らがＭｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄの感じている事を理解するようにしてくれたら、実験はさらにエキサイトする事だろうけど、無理だろうね。機械が食らっているダメージを人間は機械の（イージスシステム）のはじき出す数字でしか追えないんだから。彼女の見ている景色がわかれば打開策もあるかもしれない・・・なんてね」

順調に起動し続ける衛星の図を見る顔は、自分の話しをおそらく注意深く聞いているであろう石上に話題を変え顔を近づけた

「なんでＭｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄに乗艦しなかった?僕的にはそうしてくれた方がアッチのライブデータもとれて助かったのに」

「乗っていたら今頃タコ殴りにされているよ」

隠した笑みは軽快に言い返す

「それはジョークだが、表向きでもＦＴＧが既に乗っている艦だからね。いけば胡散臭いヤツと最初から実験を勘ぐってきたてだろうから「注意」したんだよ」

「そんなに勘の良い艦長なのかい?」

細く静かに白い息を吐く石上の目は、この時初めて心底笑っていた

「あいつは・・・・・・」

「大佐!!」

顔をつきあわせていた男2人にアイザック少佐の声が間を割ったインカムを付けたままの細面の少佐は声こそ甲高くなってはいたがモニターに顔を向けたまま振り向くことはせずに

「2番のモニターを、Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄの動きに変化あり！」

級に慌ただしく動き始めた部屋の中
ダニーはモニターを見ながら自分のパソコンのデータも見合わせる
石上は海域を突破せず囲いの中で「回避運動」を開始した『こんごう』のアイコンを見ていた

「回避運動・・・対潜・・・・・まさか・・・・」

唸る顔なのに口に持つにはあふれ出るような笑いの形
ダニーは画面から顔を話すと石上の方に向き直った

「勘の良い艦長というのは立証されたな・・・正直おどろいたよ」
「海域を強行突破したら君の勝ちだったのにな」

耳にほどよい嫌味「やってくれたな」という表情の返事。ダニーの丸い目をサラに大きく開かせて口までに戯けをオマケした

モニターに映っている『こんごう』と『いかづち』のアイコンは規則正しい回避運動を開始している
キレイに整った円弧のラインは何もモニター画面の映像として作られているだけではない
まるで真円を描くかのような軌跡

ダイアルを回る二隻の呼吸は、ぴったりと合っている事に部屋に詰

めた技術兵員達は驚き口に呆けを登らせている者さえ見える中
ダニーにも驚きはあったがその驚きに値するものを心が欲して情報を探すようにアイザックに聞いた

「レーダーの方はどうなってる？回避運動にしたって僚艦がいるんだ、なんらかの交信を取っているハズだろう？」

真ん前の図と手元のデータを見合わせながら少佐は答えた
「現在リンク１６の回線は我が艦とオープン（アイゼンハワー）の状態ですが交信を取った形跡はありません」
「こっちの障害で飛んでるって事は？」
「あり得ません。ハ・シェムはレーザーの照射制御のために正常に働いてます」

慌ただしくデータの整理をしながらも冷静さを欠くこともないアイザック少佐に続き
右側のモニターを監視していた鷲鼻の兵も状況を挙げる

「マーシアハ、ルーアハ共々正常に運行しています。リンク事態は一度途絶しましがこちらで復旧はしているので・・・・」

「つまりレーダーへの干渉は完璧だしリンクも無線も完全に手の中にあるということだな？」
「はい、同様に「全て」をモニターしてます。形跡があれば追うことはできるのですが・・・・・そういう跡はココまでの間ではありません」

「いや完璧はない・・・・追えなかった「もの」があると見た方がいいな」

素早い否定
ダニーは自分にわかる事を纏めていた
おそらくレーダー兵器の制御はこちらの手の中に５０％はあるが無線などを完璧に抑えられるほど兵器の完成度は高くなかったと
だからどこかに穴があったのではと考えながらも
それでも何らかの干渉を受けているのか?この実験に参加していなくても米艦隊との回線はつながっている『こんごう』だが『いかづち』とデータリンクした形跡も無ければ更新した後もない・・・なのに艦隊運動を開始した事・・・・
秀才は楽しみながらつぶやいた
「交信も取らずに二隻同時に回避運動・・・・・どうやってるんだ？」
顎に手をあてて考え込んだまま隣の石上にダニーは覗き込むように聞いた
「僚艦が見えてるなら出来ることだろう?そのぐらい」
明らかに、すかした返答にダニーは顔を両手で覆うと
大声で笑った
「諸君!喜べ!Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄは僕たちの実験に真っ向勝負をしてくれる気らしい!」
目をランと輝かせ青白い光で満たされている部屋の中にいるのに彼

の顔が上気している事がわかる
饒舌な演説は笑いと共に

「フェイズ２へ、実験を移行！」

高笑いの大佐に従う部下達もまさかこれ以上を望めるとは思っていなかったのか、最初は困惑の顔を示していたが直ぐに喜びの笑みに表情が切り替わり
各部署は新たな段階に進むための声を挙げた

「了解！！」

号令に従い激しく彩りを動かすモニターの前
ダニーは石上に確認を取った

「いいんだろ・・・・徹底的にやらせてもらって」
「いいさ、僕は君の実験に付き合わせて貰っているだけだから」
「ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ」

太い指は楽しげにデスクの銃を触る
「不測の事態など折り込み済み・・・・それにしても・・・・」
新しい事に入り込める喜びに目を輝かせるダニー
隣の石上は顔色を変えることなくモニターを睨む、ただ静かに

第五十四部　流星の空（後書き）

カセイウラバナダイアル～～木工な日々～～

だいぶん間があきましたが元気です
鯖の缶詰にやられそうになったりな日もありましたが元気ですｗｗｗ

そんなヒボシは現在外伝の三笠様と共に主人公でもある「厳島」たんの住処である二等巡洋艦厳島を．．．．．

木工制作してますｗｗｗ

前にウオーターラインのシリーズで７００／１を買ったんですが．．．．これが
ホントに小さいんですよ
同じスケールの『おおすみ』に二隻のるという話は前にもしたとおもいますが、これってイコール部品もちっさいって事ですよね

これがもう．．．．無理なんです
どうしてもうまく作れないという予感しかしないんですよ
小さな部品ってすぐこわれるじゃないですか．．．．
とにかく１２インチ砲とかつけられなくなるし．．．

そういう困難な思いをしてひらめきました
だったら
大きいのつくったらええやんｗｗｗ

マジでそうおもってお試しサイズの３５０／１の作成をしたんですよ

バルサ材っていうめっちゃ柔らかい木材使って７００／１から倍プッシュｗで
で・・・意外と簡単に艦体とかつくれたのですが・・・ココで木工の弱点現る～～～

木工ってめっちゃ細かい部品を作る事が困難なんですよ
なのにいい加減につくるとアラが目立つ
３５０／１はサイズアップしたし見栄えもそこそこよかったのですが
最初の段階で一体成形の方法を使ったため木の目からそれたところがたがたになって補修がきかない（正確には木パテで直せるのだけどそうするとバランスが崩れたり後の取り付けがむずかしくなる）

そこでいつものヒボシだったら諦めてしまうのですが・・・

何故か今回は燃えていたｗ
きっと厳島タンに背中刺されるぐらいの心境になっていたのかもｗ

「キレイな妾を作れ！！！」

で
細かいところまで正確につくったらええやん
という事になりさらに倍プッシュｗｗされ

現在１７５／１を制作してます！！
なんと
最初のプラモデルから４倍の大きさ
艦体の長さ５０センチを超えるものになりましたｗ
でもおかげで色々な部分がわかりやすくなって作りやすくなりました
写真を見たい方は艦魂同盟の掲示板に展示してますからどうぞ～～～

これに成功したら次は戦艦金剛を作って見たいなどとも思っている
ヒボシですが
そういう作業にかまけで外伝も本伝も止まってますから程々にして
おきますぅ～～～

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょう

次回は艦魂の紹介を後書きにかいてみます～～～

第五十五話　夢の世界（前書き）

くどいようですが
イージスシステムや機械の概要については妄想部分が大半をしめてますよ～～～
そのへんは深くご理解くださいまし
しかし・・・・アメリカ産の明太・・・・まずかった

第五十五話　夢の世界

「中空から上空までの間でレーダーに感知する「物体」はデコイと思われます」

得体の知れない訓練だからと逃げるような事は出来ない
一月少し前・・・実戦のこの海で何も出来なかったという思い出は
『こんごう』の全ての隊員にまだ生暖かく吹き上がる傷口であり
心に重くのしかかった錘でもある

「訓練ごときに白旗は挙げられない」

間宮の言葉に全ての隊員の心は決まっ中
粉川は変に作戦がまとまってしまう前に自分の意見を言った

「じゃなんだ?あれは?」

具体的な行動を早くに決めたい和田船務士は粉川より大きめの顔を近づけた
「だからダミーですよ!」
「何をもってダミーかと聞いているんだ!」

予想や憶測「なんとなく」などというものが大嫌い
それを如実に表す表情の権化である太い眉毛がきつく眉間に狭まるり大きな顔を粉川の視界からはみ出る程に近づける様は、まるでガンつけの様子だが

艦の運航の大きな部分を預かる和田の曖昧な答えというもを絶対に納得しないという態度は間宮にとっても好ましく隊員の全てにも信

頼されている
しかしこの鬼の凄みに粉川は負けなかった
負けていられる時間が惜しかった

「考えなくてもわかります！レーダーに映りシステムが感知した数は通常ではあり得ないし現実的な物理兵器の数じゃない、これはレーダーとシステムを直接狙った攻撃なんですよ！」

粉川の直感
艦の魂である『こんごう』は物理的攻撃を受けているのならば体のどこかに怪我をしている事になる
なのに怪我ではなく頭に何らかの攻撃を受け立つことままならぬ昏倒をしている
レーダーに反応する物体が実際の物質だとするのならば『こんごう』が倒れる理由はない
見えている数に驚く程度ですむ事なのに、そうではない結果が起こったのは

頭脳に直接の作用する攻撃が行われているという事。簡単な言葉を選ぶのならば大きな「頭痛」を起こさせているという事になる

「なんでそうだと言い切れる？」

どちらもが真剣だ。和田の声は荒れてはいるが怒鳴りつけているというものではなくなっていた
周りの様子にしっかりと気を配したレベルの音声の問い
今まで自分たちが艦橋で考えていた以上の「兵器実験」が成されているという事
これは認めざる得ないかも知れないと理解したからだ

「それにしてもお粗末だな全部の機能を停止には出来なかったとは」

睨み合う二人は用意に想像できたのか話しの間を割って
艦橋部間宮の座るキャプテンシート、開かれたままになっていたＣＩＣから安藤が意見した
Ａシステムの現状をよく理解している上での意見は確かに的確だったレーダー管制側のシステムは大なり小なりの干渉という被害が出ているが全く使えない訳ではない

「だから実験しているって事ですよ」
突っ込みに素早い切り返し
眼前で顔を摺り合わせる相手和田に

「じゃあこれの決着はどうつけるんですか？」

声だけの安藤は早い解決策をのぞんでいる
ヤルと言った以上に決着は大事だ
向こうが、どれをとって実験を失敗とするかが護衛艦『こんごう』の勝ちとなるかがこれから起こす行動に必要になってくる

「まずわかっているのは、この海域を強行離脱したら我々の負けという事ですね」
ＣＩＣ安藤二佐は海域図に目を走らせながら近づく囲いの境界線を知らせた
「そうだ実験海域で「何もせず」離脱したら僕達の負けだ」

「しかし攻撃を要する的が決まってなければ艦の方向はもとより手の打ちようもないですよ」
囲われた海域を離脱せず「何かを」目標に迎撃ないし回避の運動を選択しなければならないのは

間違った行動を起こしただけで「負け」にもつながるという事だ
和田は一腕組みしたまま難しい表情を浮かべ
少しばかり雨脚が弱まった海を睨んだ

その様子に粉川は自分の考えていた敵を挙げようと急いだ
作戦的にもココで考えあぐねられる事も負けとも言えるし
こうしている間にも『こんごう』は倒れたままで苦しみに歯ぎしりしている事にはかわりないのだから

「敵は」
「敵は潜水艦」

粉川の言葉に間宮が声を重ねた
「向こうのルールに則っての線引き（海域）の中にいるんだ。消去法で考えればそれしかいないだろ？」

シートをクルリと回した間宮はそのまま
「粉川くん君の「パソコン」にそのアタリの情報は来てないのかな？少しは調べられるとおもうのだけど？」

人差し指で情報提供を願う

「レーダーに干渉がある上にココ東シナ海域でネットはつながりませんよ」
当然の事と少し呆れた顔をする粉川に間宮も当然だろという顔で

「出る前に（出航前）に佐々木情報局次官と回線をつないだ、石上一佐の事もご存じだったのだろう？」

そう言うと荒海にむかう窓に顔を戻す前に応急端子である通信機を

投げた
「ココはこれから戦場だ。その間に君は君の出来ることで僕たちを助けて欲しいんだよ・・・艦にとってもそれが良いと思うんでね」
顔は艦橋のガラスに向かって片目を閉じた合図のような仕草をしながらも向かい風の世界に突っ走る覚悟を伝えた

「頼むよ」

無法なる海の元
不明の実験に対し反旗を掲げて間宮達は進む道を選んだ
粉川はそれを合図にしたのか急ぎ足で艦橋を跡にした
その姿に和田は少し困った顔で聞いた

「いいんですか？」
「良いだろその方が僕たちだって変な評価をもらわなくてすむ」

「艦長・・・・」

この期に及んでＦＴＧの採点を気にしているような玉では絶対にない間宮のジョークに和田をはじめ艦橋に詰めた隊員達は苦笑いを浮かべた
それは間宮らしいリラックスを促す方法だが、それ故に全ての隊員に気持ちはスムーズに伝わっていった

睨むは闇雨の空
見えないといわれる敵に対して海自の最新鋭護衛艦は戦いを挑んだ

「さあ、やろう！」

「『いかづち』ちゃんは自分の艦に戻って」

間宮の含みのある発言に少しの懐疑をいだきながらも、回避できずこの実験に真っ向勝負を挑む事決断した間宮の意見を尊重した粉川は艦隊の運動に際して『いかづち』が自分の艦から離れている事は危険と判断していた

「いやや！！怖い！わて一人だけ艦にもどるなんて・・・・・粉川はん」

帰った部屋の中はいつものようにテーブルもなければイスもない騒がしい仲間も一人もいないグループルームの真ん中、恐怖に涙する『いかづち』の肩にあるのは『こんごう』の手それだけが艦魂『いかづち』の心を助けていた

粉川は自分が艦橋に走った後・・・・孤独と得も知れぬ恐怖に泣く『いかづち』を『こんごう』が支えていた事に気がついた
今は転がった姿
目の焦点も合わない程に昏倒した姿で、口から黄色い汚泥の泡を吐き耳からは少なからずの血を流したまま

それ程に無様な様でも仲間を励まそうとした彼女の姿に余計に責任を感じていた

「『いかづち』ちゃん・・・・『こんごう』の事はぼくに任せて、君は速く戻って艦の心として働いて」

「せやけど・・・」

いつもの饒舌さを欠いたたどたどしい語り
彼女が恐怖を心に戸惑っているのは粉川にも容易にわかった
さっきまで人だって今まで味わった事のない状況に混乱をしているのだから
だけどココから先は艦隊の運動にもかかわる事、『いかづち』をココにのこしたまま行動に入ったら余計に危険だ

「『いかづち』ちゃん・・・ぼく達は負けられないんだ。訓練に不明な点があるからお手上げですなんて・・・絶対に言えないんだ。だから自分の勤めを果たして」
「粉川はん・・・・・」

『いかづち』は自分と『こんごう』の間に入って話しをする粉川の手にしがみついた
震える体小刻みな振動が腕に伝わる
演習はいままで2桁以上してきているそれでも怖いという思いで、メガネの後ろに溜まった涙がこぼれる

「『いかづち』ちゃん・・・・」

粉川には相手である『いかづち』が本気でこの状況を恐怖する事はわかっていても理解はしてあげられない

「『いかづち』ちゃん!!キミはこの国を護る盾たる護衛艦なんだ!!訓練ごときで泣かないでくれ!!」

粉川は自分の手に縋る『いかづち』の顔に真剣な眼差しで引きはがした

「早く戻って自分の職務を果たしてくれ」

すでに護衛艦『いかづち』には『こんごう』からの信号灯で指示がわたり行動に入るために怒号が飛び交っているハズのんびり話しをしている時間などない

「ほな、わての所に一緒にきてーな・・・・わて、怖くて・・・・」

それでも『いかづち』は自分の身の上に掛かった初めての恐怖を拭うことができなかった
不審船の時のように見えている目標があるのならば・・・それに向かって自分を集中させ
「戦う」「護る」という気持ちを保つ事もできたが
今ココで起こっている事態は理解が出来なかった

ましてや自分たち護衛艦の中ではずば抜けた戦闘能力を持っているハズの『こんごう』が目の前で倒れてしまっている事は今までになかった事で
そんな中で自分の艦に戻れなんて受け入れられなかった

なにより
1人でいられなかった

左手に移動のための光の輪を表しながらも右手で粉川の心を掴もうとする『いかづち』はそのまま移動しようとしたが粉川はその手を振り払った

「そんな事はできるわけないだろ！『こんごう』をこのままにしておけるのかい？」

粉川の腕の中
目を開き混迷したまま口から泡を吐き続ける『こんごう』
意識が有るのかないのか
なのに手が『いかづち』の手を強く握る

「『こんごう』・・・・・」

声は出ない
もう喉を詰めてしまっている自分の泡に声もでないのに、目も動かないのに仲間の声に不安を癒すように反応して手を握る
痙攣が走る指先と痺れた手のひらで

「行って！『いかづち』ちゃん、『こんごう』には、ぼくがついてるから」

「・・・・・粉川はん・・・・・わて・・・・・わて・・・・・」

手を伸ばす手に粉川は頷くだけ
「がんばろう」
励ましの言葉は耳を通り過ぎる中で『いかづち』は光の輪、泡沫のかけらの中に姿を消していった

フェイズ2

アイゼンハワー内部冷蔵庫の部屋は青白い炎の方が熱い温度を示すように活気という熱を上げていた
青い光の部屋はフル回転で動いている

まさか自分たちが仕掛けた不測の事態に相手が「応戦」してくるとは思わなかったからだ

大抵の艦艇なら
「これは訓練」という事を前にココで実験を終了させる
無駄な事に艦を動かせないという言い訳を前に自分たちの身に起こった不測の事態から逃げるハズなのに『こんごう』が違って答えを出したことに興奮していた

「向かってくるとはなぁ・・・・・」
石上の隣のダニーも自分のパソコンのデータを洗いながら新たな進行に目を輝かせていた

「潜水艦に気がついたかな」
周辺海図の中、囲いのモニターに映る「壁役」の潜水艦はポイントの場所に点滅している

「気がついたかもしれないな」
自分のパソコンは決して開かず進行する状態を睨む石上
「大佐！Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄは間違いなく明確な判断として回避運動をしてます。ただ現在は攻撃の態勢はとっていませんから「何が」感よしているかを理解しているとは断定できません」

ダニーは膝の銃に目をくれながら
「ＯＫ、Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄは我々に見えない手段を使って艦隊運動を開始した事を認めよう」
そう言うと石上の顔を確認するように

「僕たちは攻撃にうつるよ。ココまでやったんだから結果が欲しいからね」
石上はすぐには答えなかった
ただメインのモニターから隣に映る『こんごう』『いかづち』の姿を追いながら

「攻撃のために姿を現せば迎撃を受けるのでは？」
挑戦する技官であるダニーに挑戦的に聞いた

「そのためにフェイズ2に入る。向こうはまだ回避を始めただけで対策もないだろうし、こちらの作業は時間にしたら１０分もかからない、正念場だ手を抜かずに頑張らせてもらうよ」

「入ってから何分経った？」

回避運動に入った『こんごう』艦長間宮はＣＩＣにリンクの断絶からの時間を聞いていた
「１５分と４３秒です」
「敵も訓練とあぐらをかいているな」

ジャミングが入って１０分以上もの時間があくのは不自然と間宮はとっていた
つまり自分たちがレーダーの障害に苦しんでいるうちにトドメを刺さなかった事を皮肉っていた
本来なら獲物を狙うチャンスだったのに見過ごした事が相手も自分

の持ってきたレーダーを邪魔する新兵器の「訓練・実験」という考えを未だに持っている証拠
やられた側がこの不意の出来事に腹を立てて本気になったと、それによって実戦の場に変わったという事にまだ気が付けていないルーズさは
やる気の『こんごう』乗艦者達にとってチャンスだった

「本艦が艦隊から離れてどのくらいだった？」
「約３０分です」

曇り空
雨を緩くさせたとはいえ視界が良好というわけではない
その空を間宮は目を細めて睨むと

「空の目は、信じるしかないが多く見積もっても余裕は5分しかないな」
つぶやきながら次ぎの指示を飛ばす

「ソナーはどうだ」
「反応ありません」
あごに手を置き考えるが目には笑いが浮かんでいた

「敵も慎重ではあるようだ。後手後手には成りのそうだが・・・ものは考えようともいう」

間宮の手元にはコレまでの戦闘記録を書いた分厚い本
何ページかめくった後、いつものイタズラな笑みを浮かべるとＣＩＣの安藤は飛び上がるような指示を出した

艦橋要員も
それはどんな艦長も指示した事のないものだった
だが間宮はいたって冷静に続けた

「敵がわからなきゃどうにもできないだろう？」
「しかし．．．．そんな事は今までどのイージス艦もした事がないハズです」
「相手はレーザー索敵をしてるみたいなもんだ。そこから姿を消したら．．．．姿を表すしかないだろ」
「しかし．．．．」

前代見物の指示に和田は抵抗したが、いち早く応答したのはＣＩＣの安藤の方だった
どちらにしろこのままではらちが明かない
安藤は訓練で命は取られないと良い意味で腹をくくっていた

「では太陽の目が見えたときに通常運行に戻す．．．．そういう事ですね」

そういう気持ちで決めた覚悟の声はどこか楽しげだった

「やったことのない事をやるから実験って言うんでしょうしね」

安藤の返答に和田の顔を見ながら間宮も笑うが
しっかり本音も告げた

「やる限りは勝たなきゃな」

「ええい．．．．わかりましたよ」

大きな体に心配を詰め込んだままの和田も諦めたように従った

「聞こえるか、艦長の間宮だ」
胸のポケットに入った応急端末が交信とけたたましい音を立てる
粉川は『こんごう』に自分のコートを被せた状態で返事した

「はい！」
焦りを噛んだ強い口調にも動じ無い艦長の口調
「よく聞いてくれ」

「これよりフェイズド・アレイ・レーダーをAシステムから解除する」
「はい？」

聞き慣れた言葉の聞き慣れない指示に粉川はうわずった素っ頓狂な声をあげて
「解除？切るって事ですか？」
「そうだ。だから「そちらに不都合な」状況があっても対処できない。パソコンはしまっておいてくれ」
「いや！まってくださいよ！そんな事したらどうなっちゃうか」

「囲いの海域を見るのにフェイズド・アレイ・レーダー程の範囲はいらない、『いかづち』と本艦の通常レーダーで対応する。理由は直接干渉を受けている部分が相手の索敵にも使われているもの考えられるからだ。だが切るのは長くても5分」

粉川は焦っていた
通常活動でいきなり戦闘状態になっていた目の光りを落とされたり
したら魂の『こんごう』がどうなってしまうかわからない
あるいは痛みから解放されるかもしれなくてもすぐには「了解」と
はいえない状態であるにもかかわらずさらに5分後に再起動する事
も危険な香りしかしない

そんな相手の事情を待っていられない間宮は念を押した

「悪いが後は頼んだよ」
「待って・・・・」

切れた端末に行き場のない焦り
粉川は自分の目の前懸命に艦の心としての仕事を倒れながらも徒事
する『こんごう』に近寄った

「『こんごう』・・・・・今から君の目が少しの間見えなくなるか
も知れない、でも大丈夫ぼくがココにいる・・・・ココに付いてる」

麻痺の痙攣に揺れる指と手のひらに自分の手を合わせて握る
弱い息と目はそれに少しの力を返した瞬間
意識は途切れた

「レーザー感知、ロスト」

フェイズ2に入る体制を整えた冷蔵庫（ｃｏｎｔｒｏｌｒｏｏｍ）
に入った一報にダニーは顔色を変えていた

と言っても青色のパネルの反射の下にある彼の表情はどちらかと言えば目の玉に集約される。灰色の目の中、黒い瞳孔は猫のように尖っていく．．．．そんな不可思議を醸すほどの沈黙の後

「フェイズド．アレイ．レーダーが壊れたか？」

誰に問う言葉でもない、自分の中にある経験と記憶を探りながらモニターを睨み続ける

「ビームスポットの反射が無くなりました。ですがＭｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄ自体は捉えています」

撹乱のために使っていた大規模なレーザー光線は同じレーザー波にぶつかる事によって残像をつくる。それに固定の全周囲警戒型レーダーであるフェイズド．アレイ．レーダーが感知するという条件がある事で相手を絡め取り行動不能にした後、とどめをさそうとした矢先に
肝心のレーダーが止まった。

これが意味する事．．．．
壊れたのか、止めたのか、
ダニーは首を振った。安直に自分達の加えた打撃でレーダーが壊れたと考えたら「負け」だと

「止めたな．．．．多分」

そう考えなくてはならないと頭の中の数式を合わせていく
イージス艦と通常駆逐艦が回避運動を開始したの自分達の手のひらで踊らされているわけではないと理解した

攻撃のための必然とした行動
Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄが牙をむいて自分達を探していると

「アイザック少佐！Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄをこちらが捉えていたとしてマーシアハ，「石龍」に知らせるためにはハ・シェム（衛星）との交信を切る必要があるか？」

メインで実験の全権を仕切っているダニーとは違い運行の全てを担っているアイザックは各所からの報告を手早く読み取ると立ち上がった
自分より後方の席に座ったダニーに難しく顔を歪め

「交信自体には問題はありませんが、石龍がレーザー受信ならび攻撃実験機を停止しなければ正確な迎撃は不可能です」
「2．3．もか？」
素早い上官の問いにアイザックもまた素早く返す

「私見ですがシールドスペースは3つの連動で行われています。1．2．準じ解除時間差で迎撃に入れば」
「その間に位置を知られるな」
「フェイズド．アレイ．レーダー程の精度がなければ直ぐには」
「そこが肝だ」
指を揺らす。解除の時間でレーダーが回復する可能性はある事の懸念。

壊れたのか？止めたのか？

よもや自分達が実験機の稼働以外で不測の事態に落ちている

「レーダーが死んでいようがいまいが、囲みの中の限られた海域だ。既存のリーダーを介してのアスロックを受けたら逃げきれるとは言い切れない」

ダニーの頭はめまぐるしく回る
このまま潜水艦を発見され
実弾がつかわれる事はないにしてもテスト弾頭が石龍を撃ち落とすという状態になればこれは艦隊司令のマレスにも言い訳が立たない
ダニーは『こんごう』のアイコンを見た。文字通りレーダー反射のアイコンを出さなくなった図を睨んだ

「実験を停止すればよろしいかと、ココまででも十分な成果は得られてますし」

アイザック少佐と同じモニターの監視についていた技官はデータの頭出しをしながら敬礼と共に振り返ると
「ここで停止するのがベストです。我々にとって」
「わかってるさ、そんな事」

立ち上がった技官達の前、ダニーは肩をすくめたままモニターに向かって歩き出した
ゆっくりとした歩調だが
手を挙げて『こんごう』のアイコンを指すと

「ｌａｄｙが僕たちのお誘いに興味を持ってくれたのに、ココで知らんぷりするかい？ｇｅｎｔｌｅｍａｎｓ？」

沈黙の部屋に白い息
機械を動かす音

「ｌａｓｔｄａｎｃｅは誰にも邪魔されたくない。彼女とぼくは踊りたいんだ」

手を開いてｗａｌｔｚの拍子を叩く

「いやいや、彼女はもっと激しい踊りがお好みみたいだが・・・・踊ってみせるさ、ｌａｄｙに合わせてね」と

それぞれのモニターとブースに座った部下達の前に笑顔を見せた

「わかりました」

軽めの溜息

慣れた仲

ｔｅａｍという体制になって以来長い付き合いのあるアイザックはダニーが一度こう言いだしたら引かない男だという事をよく知っていた

不足の事態に自分達が逃げて結果を残す事を嫌うという心

せっかく持ってきた最新兵器案がテストのちょっとした不出来で棄却されてしまう事だってある米軍の中にあって

「失敗をおそれない」彼の姿に着いてきたのだと自分の頭を小突いて納得させると

並ぶ同胞の技官達に命じた

「フェイズ2を解除、移行アクティブ1を持ってハ・シェムの稼働をレベル1に下げる、同時にシールドを解除、１（マーシアハ）・２（ルーアハ）・と準じレーザーサイトも解除する」

「それで何分かかる」

「8分です」

ダニーは苦く唇を噛むと声を大きくして指示した
「遅いぞ！5分で解除！！」
「了解」

移行したプランよりも素早い展開を要する時間に全ての技官達の手は休む事なく短音を叩き続ける中、ダニーは自分のデスクに戻って石上の鼻に人差し指を当て

「やられたよ、君の思惑にもっと早く気がつくべきだった」
怒りではなくどこか緩く鈍く光る目
当てられた指を手でかわし、石上もまたゆっくりとした口調で腹の底の見えぬ言い方

「・・・・・・まだ終わってない、最後までわからないだろ」

「そうさ、最後までこういう事態が無ければ出来ない事だってあるからね」
膣までも挑戦者である目は輝いたまま新たな作業に入った仲間達を見回すと着座した
「負けないよ・・・・まだまだ」
手にはＪｅｒｉｃｈｏを持ち緊張の時間を楽しむかのようにつぶやいた

「ようこそ夢の世界へ」

エメラルドに輝く波の光
水槽を下から覗き込んだように目の前に揺れる水面下からの絶景の中で『こんごう』は目を覚ました

天井も床もない一面に広がる水面下の海の中に立つ自分に驚きながら

「貴女とお話がしたかったから調度よかった」

背中から響く声
どこか眠りを誘うような声に『こんごう』は振り返ると
自分から離れた場所に立つ影

「ココはどこだ?」

今まで自分が見ていた自分の艦内とは明らかに違う世界
水の中で息をして浮いているという浮遊感・・・・なのにどこか体を濡らしているわけでもないという不可解な場所を最初に問い詰めようとした口調に、豊かな黒髪を水の中に揺らすような相手は小さく笑うと

「まず名前からでしょう挨拶として、ですが私は貴女の名前は知っています。日本国『こんごう』さん・・・・私達の仲間内では「Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄ」と呼んでいますが、どちらでお呼びしたらよろしいですか?」

「『こんごう』で・・・・・貴女は?」

相手のしゃべり方は緩くまるで自分を試しているようにも感じられるが

自分の方から事を荒立てるのは見苦しい
近寄る影に向かって『こんごう』も落ち着きを取り戻し
足場のない空間に浮かぶように起立した

「私の名前は「M・Ｍａｒｉａ」地上に福音をもたらした者の妻なる者、そして海を生きる魂達への福音者」

まるで逆巻くように揺れる髪
自分と同じように透き通った泉の瞳・・・・いや透き通りすぎているのか白目との区別は黒目のある境界でしかわからない輪郭の円の中に光る目
女である事は確かだが服装もまた変わっていた

「マリア・・・・それは教会の」
「気になさらないで、わかりやすいように儀礼上この服を来ているだけですよ」

マリアの衣装は軍服とは違うものだった
襟首までをカラーで締めた服、前ボタンは足下に届くところまでキチンと付けられていて色は赤色

「私は神の僕でありますから・・・これはスータンという司教としての衣装です」
「司教・・・・僕？貴女は艦魂じゃないの？」

相手の不可思議な自己紹介に困惑の顔のまま聞き返す
「いいえ、私も貴女と変わらぬ妖精（艦魂）ですよ。ただ私は不安を持つ魂に導きを与えるという奉仕もしているだけです」
「不安？」

「そう貴女が抱えているものへの解決に私は力を貸してあげる事が出来るわ」

何もかもが謎としか聞こえない『こんごう』は自分がなぜココにいるのかも?
何故、見知らぬ艦魂と話しをする事になっているのかも?
全てがワカラナイまま海の中に立つ自分とマリアを見た

「貴女の知りたい事を.....貴女に必要な導きを私が与えましょう」

全てを見透かすシルバーの目は『こんごう』の前で静かに
静かにただ笑ってみせた

第五十五話　夢の世界（後書き）

カセイウラバナダイアル～～久しぶりの艦魂紹介～～

一話使って紹介してくださいというめっせもいただきましたが
さすがにそれは．．．上は小説を書くスペースですからそういう事
にはつかいたくないというのが私の意志と受け取って頂きたいです。
すいません
できるだけわかり易いように心がけてますが
その内きちんとしたＨＰを作成したらそちらにでもと考えてますから

さて艦魂紹介、今回はアメリカから！！

ドワイト．Ｄ．アイゼンハワー
アメリカ合衆国第八空母打撃群の司令艦　艦魂アイゼンハワー、愛称アイク
オーバーホール開けの一発目の演習にやってまいりました彼女

身長１５５センチ
年齢（艦魂流見かけ年齢）１６歳
栗色の髪に茶色の目
一見すると『くらま』さんより年下に見えるが実は年上であまたの戦いに参加している有名な空母
愛称は「アイク」これはアイゼンハワー大統領の愛称と一緒です
ゆらゆらと舌足らずなしゃべり方で任務にもそれ程熱心ではないご様子ですが、中身はしっかりしたところもあるようで苦悩の中にい

るカウペンスやカーティスにも十分な話相手になってくるあたりは立派な人
愛読書の一つに「海の麗人倶楽部」があり今回の日本演習を心から楽しみにしていた
演習後、佐世保に寄港する予定だが・・・・一騒ぎ起こしそうな人ですね

イージス巡洋艦カウペンス　艦魂カウペンス、愛称ダニエル

イージス艦としては古いタイプの形「タイコンデロガ級」ベースライン３を搭載した船
湾岸戦争では初めてイージスシステムによるコントロールでトマホークを海上からイラク領内に３４発射した古強者。現在は横須賀を提携港とし日本の護りの一端をになっているが
艦魂ダニエルは湾岸戦争で自艦発砲のトマホーク（劣化ウラン弾）の半分が誤爆していた事がトラウマになっている
実験的発砲による誤爆を隠し続けた合衆国にまじめに自分をつきあわせる事ができなくなってしまったのだ
そもそも船の魂は心を斬る想いで人の戦いに添うのだから・・・出来れば争いや血を見たくない
それを国に仕えるという気持ちで踏み切った彼女だったが想いを踏みにじられたというところ
現在は今話登場の「マリア」に信心し、心の救済を求めている
身長１７２センチ
年齢１９歳
金髪だけどどこかアッシュ系の髪で肩に掛かる程度の長さ
目は青

イージス駆逐艦カーティスウィルバー　艦魂カーティス、愛称クーン
姉であるダニエルと共に現在も横須賀に隻を置くアメリカ第七艦隊所属のイージス艦
新しいタイプというか現在これが世界に広がるイージス艦の形となっている「アーレイバーク級」ベースライン４を搭載の艦
縦の姉であるダニエルは攻撃を実際にしてしまった側だが彼女はオペレーションサザンウォッチにおいて指揮艦として参加している
以降あまたの作戦にて指揮艦として参加しているため戦場における感情やモチベーションはダニエルよりは冷静に捉えているが
心根優しい妖精である事は変わりなくトラウマの苦しみにいる姉を励ましたいと想いその事で涙したりもする
随伴で初めての司令艦アイゼンハワーと共に演習に参加したが、やはり司令職の艦魂は真実に近いためクーンより余裕のある判断ができたらしく涙のクーンはアイクに支えられる事になる
身長１７０センチ
年齢１９歳
髪はシルバーダークのショートかなり短い感じ
目は青

アメリカ艦魂の愛称、艦魂物語では
艦魂は基本もらった名前が自分の名前と認識していますが
アメリカの艦魂の多くはそれ以外に自分に愛称というものを持っています
これには理由があります

今回紹介のカウペンスは愛称ダニエルですが
これはカウペンスという名前が「戦場の名前」だから心優しい彼女

はとてもそのまま自分として呼ばれる事は耐えられなかったという事でアメリカ独立戦争「カウペンスの戦い」の功労者である「ダニエル・モーガン」から愛称としてダニエルを拝借したという形です
彼女の持つ心の背景から選ばれた愛称なんですね
さてもう1人
カーティスウィルバー事クーン
彼女が愛称を持つ理由がアメリカ艦魂が自分に愛称をつける大きな理由の一つです
そもそも
カーティスウィルバーはアメリカの海軍長官の名前です
アーレイバーク級イージス艦は基本合衆国に（特に軍事に）貢献した人の名前がつけられます
つまり他人の名前が自分の名前として与えられるという事です
でもそれはイヤというのが最大の理由なんですね
アメリカ人は生来こういう部分をもっていて
たとえば「君はトム・クルーズに似ているね」なんてハンサムボーイに言おうものなら大抵こういう返事が返ってきます
「ｈａｙ．彼が僕に似ているのさ！」と
つまり自分がオリジナルである事を主張する
他人のそら似なんかまっぴらゴメンというヤツです
そう言う意味でカーティスは自分の故郷（造船場所）から自分の愛称を作った
故郷メイン州の可愛い名産猫ちゃん。メインクーンからクーンと言う事です

ですが艦魂は代々つけられる名前もあるのでそんな贅沢もいえませんだから正規の名前とは別に愛称として別名を持つ者が艦魂物語では多く存在するという事です
ただ
何が何でもという事もないので

キティホークやアイゼンハワーのアイクなどそのまま名前を使っている艦魂もいるという事です
前にでたバグジーはインディペンデンスの愛称です

草薙先生のところの「真名」というものですか?という質問がメッセでありましたりで併せてここにかいておきますね
「真名」という方がヒボシにはわからないシステムで小説を読んで本名という事がわかりました

艦魂物語ではあくまで愛称で本名ではなく、別に呼ぶのにも許可はありません～～～ｗｗｗ

それではまたウラバナダイアルでおあいしましょ～～～

第五十六話　神秘の滴（前書き）

自分では書く事はけっしてないと想っていた世界は重すぎてなかなか手が進まないものです

第五十六話　神秘の滴

『こんごう』が意識の深い闇の中に落ちていった頃、現実の世界では両陣営が頭の戦いで激しい火花を散らしていた

「ソナー感！！」

回避運動を開始していた『こんごう』艦橋に『いかづち』から待望の一報が入ったのはフェイズド・アレイ・レーダーを切って1分も待たない時間だった

「見つけたぞ」

「感」の報告に拳を握った和田をはじめとする艦橋要員と乗艦隊員達
今まで曇った空に流れ続ける雨
不安の下でいやな汗を制服に張り付かせていた緊張が別の感情に体をシフトしてゆく
重かった空気は、空気の中にさえ発火材料を絡ませたかのように否応なく熱を上げる艦内
その中で間宮は相手を見つけた喜びを静かに、冷静につぶやくと

確認を急がせながら

「ＣＩＣ、空はどうだ？」
「来てます。さすが柴田司令、あれだけの会話でこちらの危機を察してくださっていたとは」
暗く冷えた機械に囲まれた部屋にいる安藤の声は反するように弾んだ回答

隊員に伝わる熱気に冷静に対応してゆく間宮
こういう事に対する艦長の対応は隊員の熱気とは反比例するものだ。
間宮も例外なくクレバーさを表し始めている
自分の胸元に軽く手を置いたまま闇の雨の果てに心で笑う

時間と行動全てが冷徹に連結される事が大切である事をよく知っている者ができる事

帽子の鍔を手で触れながら指示をする

「フェイズド・アレイ・レーダー起動準備を開始」

熱を上げても艦長の冷静さに追随する事も怠らない修練
ＣＩＣの安藤も声は弾めど指示には冷静な返答
「了解」
寸間もあけずにＣＩＣに入る報告
「『いかづち』了解」

間宮は自分の持つ時計を見つめる

「後４分」

相手がどう出るかはまだわからない
でも相手が自分たちの行動に警戒心を持っていないなどとは塵程度にも思っていない
実験と称し「神の目線」で自分達を眺め続けてきた連中にはそれなりの「責任」というプライドがあるし

星条旗は「敗北」を許さない

必ず攻撃してくる
そして確信があった

空に映っていた「何」は粉川の言うとおりのダミーだった事によつて
実像なき敵の姿は浮かび上がっていた
嵐の海域に潜む水面下の脅威をごまかすための光はが示す敵である
潜水艦
そして文字通り浮かび上がるまでが勝負である事

「どうした？」

自分に問うように
人には見えぬようにしている喜びで間宮は微笑む
これだけ大がかりな設備を介した潜水艦は簡単に攻撃にはうつれない
必ず設備の解除と攻撃に入る時間というものが必要になる。そして
敵は１つではないという予想

「敵は複数」

そこから考えるに『こんごう』が相変わらず不利な条件下の中にあ
って、一矢報いる時間は少ない
最初の一隻が設備を解除し攻撃に転ずる時間と
その敵を確実に仕留めるために掛かる時間・・・・・・後３分

打ちつける雨の窓
立ち上がらないままの間宮はまとまった自分の考えにけりをつけた
ようにＣＩＣに戦いに向かう指示を飛ばした

「空の目にもつなぐ後何秒かかる？」
「１４秒で到達！！」

「到達したらすぐに撃つぞ！ソナーと連携を密に」
「了解」

時間と戦う厳しい目
切り貼りをちりばめたねずみ色の海を睨むと艦橋に詰めた者達に向けて声を挙げた

「国を護るという使命を持つ「ケンカ屋」に手前勝手な冗談は通用しないって事を教えてやろう」

最後の一踏ん張りをたたき上げるのも艦長の使命
右の拳に自分達の使命と思いを掲げた間宮の姿に隊員達は熱く、さらに燃えるように使命完遂へと心をシフトさせていった

「マーシアハに向かって対潜ヘリが飛んでいます」

システムの変換のために作業のために指がたたき出す打音の世界の中でアイザック少佐はメインモニターを指差した
ざわめきと困惑
一同の口から白い息が漏れる部屋で
急転する事態に、青い部屋の中を照らす白い光のアイコンはめまぐるしく活動し
光に飛び込む羽虫のように画面に姿を現したヘリを指す

「なんで・・・・・ヘリが飛んでる？」

ダニーは右に首を傾げた顔のまま石上に尋ねた

「君の指示なのか？」

「冗談を言うなよ。僕は海自の通常リンクの監視する事さえ君に渡してしまっているんだぞ」

パソコンから手を離した石上は自分が疑われている事に心外とゼスチャー的に肩をすくめてみせた

この実験のため、石上が相手側である『こんごう』からの行動をモニター出来ない変わりにリンク１６の回線は常に開いたままになっていた

通常のリンクは元より「会話」までを細かに観察していたのだから石上を責めるのはお門違いとわかっていてもあまりに不測の出来事にダニーの目は冷蔵庫の影になっているリンクをチェックしている技官に聞いた

「Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄと随伴艦艇との会話に不自然なものはなかったのか？」

秀才の頭は秒間を惜しむようにフル回転で事態のわかる形を探していた

ヘリが囲いの海域に飛んでいるのは偶然ではなく「必然」であると考えて

「おかしな所はありません・・・・・会話の記録にヘリの事はどこにもありません。有ればこちらでチェックしています」

「こっちにくれ！キミはこれ以降にある回線のチェックを続けろ」

紙面にかき出された会話の記録を手元に運ばせ石上の顔に突きつけた

「見てくれ。協力はしてくれるのだろう？」
「もちろん」

差し出された通信記録、暗闇の中では文字を探すのも困難な手元にペンライトを付けた石紙は千切られた薄ぺらなデータ用紙に目を走らせていった
眉間に皺を寄せて読み続ける顔は数行を読んだところで「やられたな」という表情でダニーに記録紙の中程を指差してみせた

「ちゃんとヘリの出動要請をしているし、司令官も受諾していてる」

回線のチェックをしていた若い技官は指示通りに自分のデスクに戻ろうとしていたが
あまりに早く石上が答えを出したのでそのまま踵を戻して

「そんな事はどこにも」
「どこに！」

じっくりと見張った自分の任務に失点があった事におどろく彼を押しのけダニーは聞く
失敗は取り戻せない
時間と一緒だ。見落としたの見落とさなかっただのを今討論しても仕方ない事

「ココだ」

石上は英文で書かれた記録の中
間宮と柴田の会話を指した

「耳は大事ですよ聞こえなくなったら「補聴器」をお願いします」

「第一京浜沿いに良いストアがある、ココは２４時間営業らしい」
「これがそうなのか？」
良くわからないという顔をするダニーと技官に石上はあまりにオープンな暗号と素っ気ない笑みを浮かべて説明した
「耳」は文字通りレーダーの事
「それはわかる、だが回線は全てこちらが握っていたのにどうして？」
「握られている事は向こうもわかってたんだろう・・・・だからこういう記譜を読めなかった」
石上は「第一京浜」というローマー字表記のように書かれたくだりを指して
「第一京浜はｓｔｒｅｅｔの別名みたいなものだ。本来なら国の幹線道路としての番号がある「国道１５号」という名前がね」
「１５・・・・・」
ダニーは何かを理解したように顔を上げた
「通常のｌｉｎｋはこちらが握っている事はわかっていた。実験海域に入ってレーザーの照射が始まれば回線は一度途絶・・・またはノイズの入った状態になる・・・開きっぱなしの回線に異常を感知したらヘリは飛ぶことになっていた・・・・」
「しかしそれだけでは状況を理解してヘリを飛ばしているとは言い切れませんしＭｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄとの連携は？」
まだ年若い技官の説明をする顔をダニーは笑って見返すと
「ココに書いてある第一京浜沿いのストアは２４時間開いていると」

そういうと説明してくれと石上に目を向けた

「第一京浜事国道１５は現在海上自衛隊が開発している国内護衛艦ならび対潜ヘリの全てをつなぐｌｉｎｋの番号「Ｈ　ｌｉｎｋ１５Ｊ」の事だ。海域に入って最初の異変はリンク１６の途絶ないし交信の低下でわかる。海域にヘリが入ればＨ　ｌｉｎｋ１５Ｊが稼働し」

「マーシアハを狙う目の変わりをするという事か」

お互いを見合わせる二人

年若い技官は呆然とした顔で自分の落ち度に肩を落としたが

「ダニー、こういうのを見る役は相手の言葉や文化に堪能であるべき者がすべきだと僕は思うよ。古文にもあるだろ」

ダニーは若い技官の肩を叩きながらモニターに目を向けて背中で答えた

「敵を知り己を知る・・・・・か」

時間を睨みながら一言の苦言を零す

「Ｈ　ｌｉｎｋ１５Ｊの事は知っていたが、実用できる事は知らなかったよ」

石上は背中に向かって

「軍事機密の中身を全ては公表できない。君のいう企業秘密みたいなものだ」

「そりゃそうだ」

両手を挙げる仕草

「実験を停止しましょう！！」

実験に不利な結果が出てしまえば今までしてきた事は全て無駄になってしまう
そんな事は誰にだってわかる
焦った若い技官はダニーの前に立つと敬礼をし

「自分のミスについては罰を受ける用意がありますが、実験の全てを無駄にする事はできません！」

敬礼する手は震えている
まだ大学を出たばかりの技官は自分たちの国を護るためにどんな屈辱も飲み込み前に進むダニーに憧れてこの部署に入ったばかりだった
若さ故に技術職としてココに入ったのに回線の監視という仕事しか貰えなかった事に対する不満はは少なからずあった。その事が今重大な見落としと失点につながってしまい

ダニーの研究に汚点を残そうとしている事は耐え難いものに違いなく
唇を噛み、喉を締める苦しみで見つめる目にダニーは笑った

「ベンジー、ココの全てを指示しているのは僕だ。名誉も不名誉も全て僕のものだ。君のものじゃない」

父親と変わらない年上の上官ダニーの前で悔しさに顔を落とす彼の肩を優しく叩く

「まだ終わってないぞ！最後までやりきらなきゃ、投げ出す事なく結果を見なきゃ善し悪しなんかわからんさ！」
励ましの言葉で大きく背中を押すと
「アイザック少佐！マーシアハの解除に後何分か！」
「８２秒！」

「急げ！！敵は僕たちを見つけたら直ちに撃ち込んでくるぞ！」

『こんごう』の間宮達とｔｅａｍＤａｎｎｙは今、対峙する互いの持ち時間3分を切ったところにあった

「外はだいぶん騒がしい「時」をすごしていますがココはそんな流れの中にありませんから、ご心配なく」

細かな煌めきが漂う水面下の世界の中
自分が置かれていた状況を思い出した『こんごう』は忙しく四方を見回し出口を探していた。
その姿にマリアは目を細めて微笑みながら

「ココは外の世界とは時間の流れが違う場所ですから、貴女がココについて過ごした時間は外では数秒の出来事にしかなりません」
目元優しい顔立ちに青の瞳に・・・どこか赤みを帯びた目の玉、色白というよりは白すぎて透き通って見える肌に赤のスータンの姿はまるで死者を目の前にしているようにも見える

「なんでそんな事がわかるの？」

相手が同じ艦魂である事を名乗っていても、自分の今まで味わった事のない世界観の中にいる事までをも見通しているのは気味の悪い事だ
『こんごう』は足場さえ見えないこの空間に戸惑いながらマリアに

「私となんの話しがしたいの?」と最初に彼女がした申し出を思いだし、ついでに曖昧過ぎる状況の確認をした
「まずはココがどこでどういう場所かをはっきりさせてくれ!」
得も知れぬ割り切れない世界は落ち着かない

立ってはいるが足場があるわけでもない空間
おそらく下、床に相当する足下の景色はマリアナ海峡のように深く見える
青い海をさらに濃く塗りつぶしたようなカラーで心を不安定にさせるものでしかない

自分の立ち位置に不安を募らせている『こんごう』にゆっくりと歩くではなく飛ぶように浮遊して近づくマリアは赤のスータンの裾とブルネットというよりは緑の光を忍ばせた長い黒髪を揺らしながら

「私はたくさんの妖精の心を救うためにこの空間に入る事を学んだ。貴女が今いるココは活動する脳の意識下の世界です」
「意識下・・・・」

と何理に並んだマリアは『こんごう』より少し背の低い姿、絶やさぬ笑みの中で
「貴女の国に近い言葉選ぶのならば「未那識」とか「無我」とでも言うのかしら?こころの奥底という事かな」
「そんな古い言葉は知らない・・・・つまりは精神感応の世界って事か?」

艦魂達にはそういう世界がある事は割と知られていた事だったただ『こんごう』はそういうものの中に入った事は初めてで聞くだけの話の世界に相変わらずあちこちと目だけを走らせていた

一面に続く波の下煌めきが星のように揺れる果てしなく続く世界

「割り切りは早いのね」

意外と取り乱さない落ち着いた様子の相手にマリアは柔らかい笑みの顔のままで

「『はるな』さんはこの世界の事をよくご存じのようだけど、貴女も彼女にならったのかしら」

「違うが、話しは聞いた事があるだけだ」

マリアに心を覗かれるような恐怖か『こんごう』は距離を取るように先を歩きながら

「ところで私と何の話しがしたいの？私はすぐにでも任務に戻りたいのだけど」

『こんごう』は自分が置いてきてしまった職務の事が心配だった

『いかづち』が一人であの海域にいると思うと自然と拳はに力が入ってしまうというもの

あの尋常ではない事態から自分だけが逃げ出して、このまま精神の世界に飛び込んでしまったことに苛立ちさえもっていた

「早く仲間の所に」

急かす言葉にマリアはあくまでゆっくりとした動作

手を挙げて

「時間は十分にあります．．．貴女が向こうに戻ったとしても演習が終わっているなんて事はありません」

そう言うと手のひらの中に水の固まりを集めた
マリアの細い繊細な指と白い手のひらの中で渦巻くエメラルドの水

「水は重い、人が思うような形以上に水には多くの記憶が宿っている」
神秘の滴とも言える手の中の水
話しの中身になかなか近づけない『こんごう』の前で

「同じように水に流れる時間は「人」が過ごす時間とは違う。悠久の時を閉じこめ遙か彼方の時代(とき)からこの地を見つめ、空を下り川を流れ海に至り天に帰る」
閉じた目は自分の手のひらの上を行き来する水に向けられたまま

「私達はその水の元に命を宿した魂であり妖精です。より水に近づく事によって時の流れは私達の原則によって動く・・・「人」の持つ１日８６４００の寸間は私達にとっては３１５３６０００以上の価値となりましょう」

「つまりはさっき言ってた時間の流れが違うから慌てる必要はないという事？」

立ち止まった足
どこまでも変わらない深海景色を十分に確認した『こんごう』は相手の目を見ることなく突き放すように声を荒げて

「それで何が聞きたいの？早く戻りたいの、用件は短めにして」

そうだと言われても落ち着く場所ではない事に急かす『こんごう』
相手の気持ちに頷いて魅せるマリアはそれでも慌てる事も無ければ自分の言いたい事を後回しにする気さえもないように

「私は日本海軍（海上自衛隊）の妖精（艦魂）とココで話しをするのは2人目だけど、『はるな』さんはどうしてか決して昔の日本海軍の姿を私には見せてくれなかった。私達妖精にとっての行く末それを導き出した結果として日本海軍は生き死んだと言われいるの・・・私はそれを知りたいと思っている」

手元で水を鞠のように遊ばせながら
「それが私達の救いにつながるものだと信じているからです」

マリアの知りたい事
それは『こんごう』達だって知りたい事だった
かつて帝国海軍の魂達は「死さえも恐れず戦いの中」に自分たちを繰り「人」と共に海に出て行った
それには「絆」というものが大きく関係していたらしい
その「絆」と称されたもの一つ

「魂の引き継ぎ」

死してもまた新たな自分がこの海に戻る
愛した皇国の海に必ず生まれ変わる艦として・・・・

『こんごう』は眉をしかめた、苛立ちや嫌悪、触られたくない傷の事に苦痛を覚えた訳ではなかった
何も継ぐことのできなかった自分・・・・・かつての金剛とは自分たちが栄光の帝国海軍の末裔なのか、しっかりとした絆を持っている魂なのか？

曇った声は苦しそうに返事した

「それは・・・・私だって知りたい、だけど私は何も覚えてないし知らない・・・・マリアの方がよく知っているよきっと、『はるな』司令がそういう事を知っている人である事を私は今知ったぐらいだ」

そういうとやっとマリアの顔をじっくりみながら悲しそうに首をふって

「教えられる事なんて何もない」とはっきりと答えた

対するように立つマリアはやはり絶やさぬ笑みのまま

「ええ、そうでしょうねでも正確には貴女と話しがしたいわけじゃないのだけど」

あっさりとした否定、深刻な話しの腰を折られ呆れたように一歩下がる『こんごう』は

「はあ？じゃなんで私を」

悪態こそつかなかったがマリアの会話が・・・・

会話としてはあまりにも自分本位である事に顔に怒りを表したが

そんな事も気にならないのか

「貴女がココに来れたのは予想外の事に現実の艦の頭脳が機能停止に近い判断をし止まってしまったから・・・でもそれは私にとって神のお導き、日本の妖精はなかなか心の中身と過去へつながる「糸」をみせてはくれなっかったけど・・・・・」

肩透かしのようにヒラリと会話を断ち切るマリアは細い指を伸ばし空間の中に集め手の中で遊ばせていた水の固まりをみせた

「貴女の心にある残念と「この海」が答えを導き出してくれる」

「私がお話ししたいのは貴女の心の中にあるもの・・・・きっとそれが貴女が抱える問題の解決の糸口になり、私に新たな知識を与える事になる」

「だから・・・・私は何も知らないんだ」

「知ることに成ります。貴女という日の本の魂を媒体に「この海」に眠る魂の記憶を紡ぎ出せるハズだから」

そういうと手にもった水を顔の前に浮かび上がらせた

水はまるで無重力の空間に浮くアメーバのようにユラユラと揺れる

「この海・・・・東シナの記憶が貴女と私に妖精の進むべく道を示してくれます」

弾け出す動き活性化した水の端をマリアは指で押した

「この海の記憶・・・・・」

エメラルドの水はそのまま『こんごう』の顔に目がけ飛び出した

雫は煌めきとともに額にぶつかり

世界が変わった

次の瞬間『こんごう』は海の上に立っていた

それも今日この日の演習と同じ曇った空の下に

いっしゅんで水面下の空間は消え荒々しい波の立つ世界に立たされていた

「ここは・・・・」

艦魂であっても海野上を立つことが出来るのは自分の艦の周りだけであり、めったな事でそんな事をしたりもしない
水面を打つ雨の情景は果てしなく続いていて
最初は自分が元の自分の艦に戻ったのかと考えていたが

そんな安直な気持ちを切り裂くように音が走った
周りを眺め呆然としていた『こんごう』の頭の上に耳の奥を切るような音が響いた

しかしそれはジェット機の持つ甲高い音ではなく
羽根を動かす濁音の群れ・・・まるで蜂が群れをなして飛ぶような音は頭上をかすめ
水面を蹴散らすように響く音の中に声がつながる

「ｊａｂ！！」

侮蔑の雄叫びは『こんごう』の頭上をかすめ恐ろしい程の数で群れをなして真っ直ぐに向かう
夢なのか幻なのか
戸惑いの『こんごう』に現実の風が髪を乱す
目の前を覆った前髪をかき上げた『こんごう』はジェットではないレシプロの戦闘機の姿群青の色にネイビーを混ぜた寸胴の戦闘機の目指す先は

手で分けた髪の向こう見えるものに『こんごう』は

「大和・・・・姉さん・・・・・」

目を見張る光景
そこにあるものは視界を雨で遮られる中に浮かぶ黒鉄の城
灰色の空にそびえる灰鉄の城郭は誰もがすぐにわかるシルエット
見まごうことなかった

帝国海軍の象徴として皇国の旗艦として産まれた姉
戦艦大和は、今まさに海の上を走る性悪女である戦闘機に啄まれようとしているところだった

「どうして・・・・ココは」

『こんごう』の体は自然と前に向かって走っていた
今この現状に置かれた自分がどうなっているかという疑問よりも何よりも足が動く
力を感じながら海の上を懸命に走った

「姉さん!!」

空には弾幕の黒い花火が無数の華を咲かせている
轟音に伴う不気味な火花の中

戦艦大和は数隻の仲間を伴って走っていた
連合艦隊最後の使命
日の本の人の住む大地である沖縄を護るために

「ココは・・・・・・坊ノ岬」

額に触れた水の記憶
『こんごう』は争いの海のどの真ん中にいた

第五十六話　神秘の滴（後書き）

カセイウラバナダイアル～～プラモの友～～

本編は重苦しいところにさしかかってますが
ヒボシは相変わらず木彫り厳島タンを作ってます
（そういえば外伝が進んでません・・・本伝のこの称が終わったら
書こうと思ってますので・・・スイマセン」

さて厳島なのですが
後は１２．１５のアームストロング速射砲をつけ
艦橋部のフライングデッキを作ったら８割方完成といったところでしょうか
同型艦の橋立は・・・・つくらないとおもうけど
三景艦としては全部作って見たい気もしてます
しかし三景艦は資料が極端に少ない事が問題でヒボシは必死に集めているのですが造形するという段階になれば足りない事ばかりです

それですばらしい模型を作っている人にご尽力を頂く事にしました

ＨＩＧＨ－ＧＥＡＲｅｄ'ｓ　ＨＯＢＢＹ　ＷＯＲＫＳ！！
このサイトの管理人ＨＩＧＨ－ＧＥＡＲｅｄさんにメッセしたんです
彼は７００／１の三景艦をとてもキレイに作っていて
それ意外にも陸奥や金剛なども凄いですよ！！

素人の木工工作なので返事をいただけるとは思ってませんでしたが
大変親切に
松島と鎮遠の２面図を添付してくださいました

厳島タンが完成したら松島さんを作って見ようと思ってるヒボシにとってこんなに嬉しい事はありません

三景艦と鎮遠
日露の戦いには全てが同じ部隊に所属した艦
それを並べるのがヒボシの希望ですよ～～～

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第五十七話　滅私の愛

そこは今まで『こんごう』が見た海ではなかった

耳に響き続ける
束になった電車の音のような羽音は、けたたましいを通り越し
狂気の音を衆群にてして群れる白ワシの化身達であふれかえった波
青い弾頭として動く翼ある悪意達の意中に浮かぶのは
大日本帝国海軍の象徴たる黒鉄の城
悪魔の羽達が標的に向かう火花と腹を裂く黒い凶器に溢れた空

目の前を斬るように、水面に星を瞬かせて走る無数の飛行機に『こんごう』は目を回していた
自分が演習に出てきた海と似ているところは曇った小雨交じりという状況だけで
何もかもが違う海の真ん中に、ただ立っていた

「訓練？なの？」

揺れる水面をみながら、驚きに開ききった眼（まなこ）のままつぶやく
突然自分の前に表れた出来事から、体が無理にでも逃げようとするかのように
いつものように強気で、何が会っても知らぬ顔など出来ないほどに
自分以外のものの大きな存在である艦艇におののきながら

もう一度周りを見るが、ココが紛れもなく現代という時間の中に無いことは飛び交う兵器が見える
モノクロームだった写真から飛び出してきた清水の青を纏った星達
熱気と、狂気

肌に伝わる振動は
演習でもない
夢でもない

手を伸ばせば生暖かい南海から押し上げてくる潮の風を感じる
頬に当たる雨がわかる
温く湿った空気の中で熱を与えている兵器の音と…人とは違う悲鳴が聞こえる

「訓練じゃない」

震える手のひらを確かめながら
自分の心に復唱していかなければならない程に『こんごう』は自分が荒海を御してもいないのに息を挙げていた。目の前にある物の姿を嘘と思いという気持ちが心臓を圧迫し喉を締め上げる動悸に拍車をかける中で一つの結論をやっとだす

「あんなもの、私は知らない」

見た事のない兵器を
群青のワシ達が頭上をかすめる
浜辺に押し寄せる波のように空という海を引き裂いて獲物に黒光りする弾頭を落とす姿
そんな戦闘機は見たことがないし
演習に訓練、自艦からの発砲にミサイルの発射などは何度かの経験があったが…
そういうもはない、整然とした訓練なんか何処にもない

ココにあるのは、憎しみの牙を剥きだしにした戦闘機が槍を指す為

の乱打の攻撃を縦横無尽に行う海で
それを迎え撃つ為に艦艇は際限なく空に黒い花火を咲かせる弾幕の
嵐を纏う海

雨あられと降り注ぐものは
本当の雨だけではなく
耳に痛みを残す迫撃の嵐で一瞬の瞬きのような火花と共に艦上にて
働く者達をなぎ倒して行く
鼻をつく人が焼ける異臭は生暖かい海風によって惜しむことなくま
き散らされている

今（現在）の世の中にはあり得ない骨董写真の戦闘は、群青の空を
高く拳におさめて悠々として激しく目の前に広がっていた

あり得ない今（現状）に頭が揺れる
足が震える、声が出ない
それでも軍属の『こんごう』は何か一つでも自分を確認できるもの
を探し腕時計に目を走らせたが

確かめられる現状
見つめた腕時計、デジタルとアナログタイプの針を持つクロノグラ
フの示すものは
デジタルログの小窓は１５３２を示していて、自分が訓練演習に入
り倒れた時間が刻まれているがアナログの針は狂ったように逆回し
を続けている

「巻き戻してる、時間を戻してる?」

マリアは水の流れと記憶について語っていた
神秘の雫に納められた、記憶の時間
時計を見るためにめくった袖のまま『こんごう』は自分に起こっている事態を胸を押さえ、呼吸を改めながら考えた

水の持つ記憶を遡る、この東シナが持つ記憶に
その過程として腕時計の針は逆巻を続けている？

「まさか…」

それが艦魂達の行く末のために？
大日本帝国海軍が持っていた覚悟を知る旅の先に？
懐疑と不安に曇る頭を振った『こんごう』の前、逆巻きを続けていた時計の針が止まる

「十二時三十分…」

身のすくむ電撃が背筋を走る、『こんごう』の頭の中
覚えていること学んだことがフル回転で動く
ココがあの日の坊ノ岬でありこの時間であるのならば

全て起こった記録を思い出せる…だから
「そんなこと」と時計から顔を上げられなかった
自分の頭上を日本に対する侮蔑と共に飛んでいったもの達の意味

たくさんの事を学んでいた
自分達が引き継がなかった帝国海軍の事を、自分の名前の姉である金剛の事もあれば…
当然戦艦大和の事も学んでいた

一瞬で行き着いた答えに目を閉じた
「ダメだ」と自分の前、小山のような鐘楼を波に揺らして走っている巨大なる帝国最後の砦、大和から顔を伏せた
今それを見たらと眉間に皺を寄せて拒否と首を振った

その瞬間、顔に熱を浴びせるような衝撃とともに今まで耳鳴りを響かせていた羽音以上の衝撃が頭を揺らし
響き渡る轟音と振動が海戦の始まりを告げた

「浜風！！」

耳に届く声
艦魂の声
自分たちと変わらないであろう若い女の声は喉が掠れんばかりの悲鳴を上げていた
仲間を呼ぶ声が響き渡る

さっきまで聞こえていた凶刃の羽音がやまぬ海の上に…
戦場に不似合いな少女達の声が聞こえる、轟音の中で仲間を呼ぶ

防御陣形を組んでいた艦隊の一角で大きな爆発はおこり、あっという間にその艦は沈み始めていた
雨の水面に浮かび上がった戦いの残す爆煙と普段は見られる事のない艦の赤い腹
懸命に仲間を呼ぶ声が飛び交う重奏の悲鳴として響く

「ダメだ！！引き返すんだ！！」

始まった歴史の序幕に『こんごう』の体は強張り叫んだ

あれが本当に大和ならば結末は決まっている
目の前で消えた一隻の艦の姿に動きを止めていた『こんごう』の体は走り出した
こんな土壇場で何かが出来るとは考えられなかったが…
それでも体が動いた

もしその悲劇を止められるのならと

自分が水の記憶に迷い込んでいる事などどうでもよくなっていた
ただ
目の前を逝く事になる姉達に向かって海の上を走ったが、体は急な光に包まれ転移した

「矢矧ィ!!」

大和へ一直線に向かおうとした『こんごう』の体には強制的な転移が掛かかっていた
自分の意志では動けない艦の魂を象徴するような力は、粘り着くオーロラのように体を絡めると、海の上からはじき飛ばすように
破滅を絵に描いたような崩壊を開始した甲板の上に彼女を投げ運んでいた

「ココは」

強制的に歪められた道筋から足下につく硬さ、ぐらつく体のまま飛ばされた先
目眩の光と、何度かの瞬き

熱を上げ、熱を体に宿した艦の上に『こんごう』はいた

リノリュームと板張りと鋼板を朱雀に打った甲板には既に、いくつもの銃創が湯気を立てたままに残っている
磨かれていたハズの艦体に残る蒸し返しの傷みと

それと…初めて見る人がただの部品と化した世界

そこには銃弾によって手足を失った人が転がり言葉に成らない痛みを濁音の中で訴えていた
力のない声は最早誰を頼っているのかもワカラナイ中、懸命の救助に走る衛生兵の姿は助ける相手から付けられる痛みのマーカー、血でカーキの軍服に真紅を混ぜどす黒い色に染まっている

煤煙の中
見えない自分の前で繰り広げられる地獄絵に
『こんごう』は足の感覚の糸が切れそうになったまま目を回した
光が自分を導いた場所は、灼熱を帯びた地獄の釜だと瞬時に信じてしまう程に

自分が産まれて以来こんな景色を見たことがなかった
頭の半分を、花瓶を割ったように無くしている人の姿
引き千切った粘土のように離れた距離に転がる人の部品
すり下ろされた皮膚と肉、目を開いたまま焦げた人
喉に押し上げる酸性の苦みを懸命に、自分の首を絞めるように押さえる
目に涙が浮かべど声は出ない

『こんごう』は何度も自分の腹を叩い、感情もそれに付いていかない体も制御しようと暴れる

「こういう事のために、こういう、こういう」
目の前の絶望に、腹を叩いて言い聞かし首を振る

「私の勤め、私も、私も」と

戦争という非常の事態、その為の自分
自分は「戦争」を戦う艦だ、日本の盾となる艦だと、体を叩いて心に言い聞かす
常に生死と向きあうポジションにいて、例え目の前で殺戮の嵐が吹いても冷徹でいなくてはならない艦だと心がけてきた

だけど本物の「戦争」を知らない艦であり魂であるという事実は消せなかった

どれほどに自分を、体を痛めつける拳を振るっても何も感じられないただ心に釘を刺すような痛みが四方から襲う
艦を揺らす水柱の振動が体を震えさせているわけじゃない、耐えられない恐怖に体は正直に震えている
目の前にある死というものを、初めて心の底で意識した事に体に走る神経と力がついていかない

どんなに強気に振る舞っても
現実の前では無意味と骨身にしみる恐怖に隠しているハズの心が悲鳴をあげ続けていた

降り注ぐ爆弾に人は粉々に潰され破片しか残さないなんて演習では見たことがない

頭の中にある自分り経験を掘り出しても
練習弾の命中率なんて…

十字砲火に飛び交う戦闘機の古めかしい弾丸が見える事が怖い
曖昧な照準と人の手による攻撃の全てが精密機械での戦いよりも怖い

自分の肩に手を回し懸命に抱く
考える間にも何度もの掃射が行われ甲板で戦う兵達をなぎ倒し、千切り、砕く

機銃の大きさだって知っている
自分についているファランクスの弾の大きさは２０ミリ
ブローニングの弾は…１２．７で…
『こんごう』は知識でなんとか自分を保たせようと、ある限りの策を講じていた

波打つ攻撃に怯えながら理性的になろうと考え余分な知識をいっぱいに働かしていたが、だけど無理だった
弾の大小など、撃たれれば人は死ぬ
ボロぞうきんのように、紙切れのように生きていた体を砕かれて死ぬ
今まで体内に収まっていた腸も心も、クラッカーの弾き出す紙吹雪のように全てをまき散らして
ただの細切れた肉片になる

「ああ…」
意識を保つ事が精一杯の中

「ごめんなさい…」

怯えた『こんごう』に魂の声が聞こえた
囁くような悔恨の声は
頭に直接入る声

血の臭いと硝煙の残す熱で揺れる甲板の上、自分がいつもそうしてる位置
艦首のアタリに転がっている少女から発せられていた

兵士達が体から出した臓物と血でぬかるみになった足もとをふらつかせながら『こんごう』はそれが艦魂である事に気がついて走った

「しっかりしろ！！」

華を咲かせたように彼女の周りに飛び散った赤い水
真ん中には既に白目をむいたまま仰向けに倒れた長い黒髪の少女、顔に生気はなく青く変わっていた

「しっかりしろ…」

気の利いた言葉が出ない
しっかりしてどおしたらいい？
彼女の肩を抱き起こした『こんごう』に伝わる熱い血と、失われる体温
帝国海軍の濃紺の軍服を纏い片手に軍艦旗を持ったままの彼女には足がなかった

最初の攻撃で吹き飛ばされたのかスカートの下にあるハズの足は互い違いの長さで千切れ飛んでいた
片方は膝下で、直ぐ近くに蝋人形の破片のように色あせた形で転がっていたが。もう片方は腿から下で既に部品はどこにも無くなり細かに引き下ろされたピンクの肉片が出来損なった塗料缶の中身のように、ダマ（かたまり）を作って残っているだけだった

「ごめんなさい…」

唇のスキマ、真っ赤に走った吐血の後と、吹きこぼれた胃液の間で
彼女はずっと何かに謝り続けていた
気の利いた言葉が浮かばない…抱き寄せる自分の手が震えて
きちんと彼女を支えられない『こんごう』は同じ励ましを繰り返した

「しっかり…しっかりして…」

自分で体の制御も出来なくなった少女は片目を、血を絡ませた目を
少し覗かせると
自分の肩を支える者を見つめて、赤い泡の中から言葉を紡ぎ出した

「日本を守れなくてごめんなさい」

謝罪の声の後、彼女は引きつってしまった片方の顔とは別の顔に柔
らかい笑み、悲しい笑みを浮かべた
肩を抱く者が誰かもわからないハズ、だからこそ最後に会いたかっ
た人を見るように潤んだ瞳は

「少佐…ごめんなさい、私もうダメみたい」

懸命の手が見えないままで軍艦旗をたぐり寄せると、赤く染め変え
られていた目から涙がこぼれ落ちた

「もっと…もっとお役に立ちたかったのに…こんなところでお別れ
です」

何度も血を吐きこぼす
彼女は自分の肩を抱く相手を愛する「誰か」と間違えている

それは末期の願いがそうさせているもの
やまない小雨の下で『こんごう』に抱えられた彼女は既に開けられ
なくなった片目を痙攣させ片方の目で自分を抱く相手の顔に微笑んだ

「矢矧は、ココでお別れです。どうか…少佐は生きてくださいね」

足を失うという事が示すもの
それは操舵が聞かない程の被害を船体が受けているという事
その上で
抱き上げた『こんごう』の手には生暖かいものがかぶさっていた
軍服の腹部を切り裂いた穴から黒く焼けたものが這うように溢れて
いる

有るべき自分内臓器を既に納められないの状態の腹は垂れ流しのよ
うに腸をこぼし始めていた

機関部を失ったという姿は
助からない怪我の中で矢矧は血とススに汚れた顔で微笑んだ

「生きてください、生きて」

自分の向こう側に…きっと自分を想ってくれた「人」に向かって微
笑む顔
最後の笑みに『こんごう』はどうして良いかわからなかった
何度も首を振った
自分が彼女の愛する人でない事が悲しくて
ただ同じように涙をこぼした

軽巡洋艦矢矧、史実通り１２４６に機関部を全損する命中弾をくら
い命は、魂は瀕死のまま死への海を彷徨い始めていた

「姉さん、矢矧姉さん」

色白だったであろう顔からさらに血の気を失った青い頬
「どうしたらいいの」

艦首での二人のやり取りの向こう矢矧の艦長は総員退去の命令を出
しそれに従って行動が開始されていた
機関と舵を失った艦にある運命は死だけだ
傷ついた仲間を引きずるように甲板に集まる兵士達

『こんごう』には何もかもが悲しみだった
文献を読んだ
帝国海軍の艦はうごけなくなれば処分として味方に撃たれ沈められ
た者が多くいた
頭ではそれが潔い「トドメ」だと理解していても
現実には…この場所にいて考えられるのは戦場で見捨てられ
捨てられるという思うばかりだった

「姉さん…こんなに働いたのにどおして」

死を厭わぬ戦いに人に伴って出た矢矧は最後の戦いで人に見捨てら
れてゆくという現状を理解が出来ない『こんごう』は何度も甲板に
向かって助けを呼んだが
見えない自分達に救いの手はなかった

こんなに傷ついているのに、助けてくれないのかと拳を甲板に叩き
つけ顔を上げた

目線の先、自分たちを置いて戦いの嵐の中をゆく戦艦大和
嵐は未だ過ぎさってなどいない中で矢矧は戦線離脱、廃棄という形になっていた
そんな苦しみの中にいる『こんごう』に矢矧は続けた

「早く戻って下さい…」

自分が破棄される事から相手を気遣って
涙にくれる『こんごう』に繰り返し矢矧は頬に触れていた手を離すと、瀕死の体に最後の力を通わせ『こんごう』の肩を押した

「早く…大和司令の所に戻ってください」

救助に近づく磯風に今まで共に戦った兵達が自分から離れる為に海に飛び込みを開始したり、要救助者のためにロープや渡り梯子用意するという景色の前
目の前で失われてゆく魂は自分から去ってくれと『こんごう』に言う

「残った人を助けてくださいね」

矢矧から突き放されたが、離れる事など出来るハズもなかった

「できません…こんなところに姉さんを置いてなど、私には」

あきらかに『こんごう』は混乱していた
現実も夢も水の記憶という話しも頭から飛んでしまっていた
だけど
「人」が見捨てて行く姉を置いては行けなかった
死の海にて帝国海軍の旗を振り続けた姉、瀕死の艦魂を置いて離れ

る事など出来ないという気持ちだけになっていた

「ダメです…私はもう助かりませんから、行って下さい」

力を失い、体温を失ってゆく唇が寒さ凍えた震えのように最後を繰り返すも
助からない事はわかっていても

それでも離れられない
こんな恐怖が渦巻く海にたとえ助からないにしても全ての人が見捨ててゆく姉を置いていく事など出来ない

話している間にも命の雫はこぼれ落ち
魂は最後の時に向かって走っている

「ここに残ります…姉さんと共にいます。人が貴女を捨てて行くのならば、なおさらです」

そういうと離された距離を覆うように、消えていく意識の矢矧を正面からしっかりと抱きしめて泣いた

「愛してます」

顔を見合うほどの近くに寄せた『こんごう』の耳に、矢矧は血と涙と汚泥のススにまみれた顔のまま
なのに輝くほどに優しい笑顔を見せ

「ああ、私ずっとずっと少佐の事好きでした。初めてお会いした時から…ずっとずっと好きでした」

霞む視線が見つめ、告げたものは愛した人えの最後の告白
軍艦旗を握った手のまま両手が『こんごう』の顔に触れる
ボロの体が温かく相手を包み込むように優しく笑って

「こんな事なら口紅を買っておくべきだった…こんなに汚れた顔で告白なんて」

相手を思う心が瀕死の自分を隠す冗談に花を咲かせる
皮肉な事に彼女の唇をあふれかえった血が
紅を差したように艶やかに光って見える

「少佐の…ちょっとおっとりした所、大好きでした」

手のひらを染めた血
指はゆっくりと確かめるように『こんごう』の顔に触れる
けいれんする指先がゆっくりと頬から耳へ
顔の輪郭に沿って

「年の割に童顔なところも、私達魂の誰にでも優しい優柔不断なところも…」

とても戦う船の魂とは思えない可憐な命は、自分たちの思い出を彩ってくれた男に感謝の言葉を連ねていた

「メガネの顔も…もう見えないけど、少佐…貴方の全てが私達魂に愛する事を教えてくれた。私の大事な思い出…」

声を返せない『こんごう』の頬にたくさんの涙が流されている事に矢矧は気がついた

「優しい人、だから私達も人を愛して共に戦う事に意地を張れた」

細い指が涙を掬う

「泣かないで…悲しくなるから、いつもみたいに笑って…笑ってサヨナラしてください」

「出来ません!!姉さんが一人で死ぬなんて…最後まで一緒に、ココにいます!」

しがみつくように自分の肩を抱く相手に、笑ってと言った矢矧は見えなくなった目を大きく一度開いた

最後の時はゆっくりとした時間が流れていた

潮の香りと自分の打ち返す波の音

静かに目を閉じるともう一度開き落ち着いた顔は自分の告白に満足したように手を『こんごう』の胸にかざした

「さあ、行って下さい」

燐光の輝き、艦魂の持つ転移の光は大きく輝き『こんごう』の体を包むと中空に体を、矢矧から引きはがすように上げた

つかんでいた体から、電撃を飛ばすようなショックで全ての拘束は外され、手足をばたつかせて姉の元に戻ろうとする『こんごう』は叫んだ

「ダメです!!!」

光が自分の体を覆い、この場所から消し去ろうとする力を否定する
『こんごう』に矢矧は短刀を投げた
帝国海軍士官がもつ装飾あざやかな短刀

「私の「心」を預けましたからね・・・お願い生きて「三笠」さまに届けてください」

「ダメです!!!」

必死にもがく『こんごう』だったが自分の持つ艦魂の力はまるで通用しない
飛ばされたと思った瞬間には既に離れた海の上に立たされていた
消える光の輪の小さな穴がお互いの視界を繋げたまま
海にこぼれて落ちる光の粒を見ながら横たわった矢矧は苦しみの痛みを麻痺させた優しさの中にいた

救助に桟橋を繋げた磯風が自分に近づく
その背中に狙いを定めたように飛来する白ワシの化身の音が響く

「止めて!!!」

懸命に手を伸ばす
遙かな姉の命は史実に準じて目の前で失われようとしている
狂ったように『こんごう』は叫んだが、入れ替わるように届く声

末期の言葉

「貴方が生きてくれる事が、私の全て」

空気を奮わす振動が水面に亀裂を走らせる
叩きつける豪打のように順を追って波を高くする破裂の振動と
頭の芯を揺るがす爆発の中、先行の光と赤と黒に飛散する鉄の艦
それが光の輪をつないだ小さな道が魅せた最後の景色だった

「矢矧姉さん！！！」

消える燐光の破片の向こう離れた海の上で『こんごう』は救助に会
った磯風の横で沈む矢矧を見た

「あああ…」

抱きしめていた血のぬくもり
自分に触れた手が海の底に引きずられてゆく
悲しい出会いに自分の手に残った感触を懸命に探す『こんごう』だ
ったが、耳には別の破壊の音が届いていた

「大和姉さん…」

すでに自分を防護した艦艇の半分を失ってなお、前に進もうともが
く大和の姿に威厳はなくなっていた

必死の思いがそれを動かしているとしか言えない程に、鉄の楼閣は
煙をあげ大きく傾いたままで微力な前進を続けている
全ての終わりが
めまぐるしく手早く近づく
緩やかな時を刻んでいた矢矧との時間が嘘のように

「ダメだ！！行かないで！！行かないで！！大和姉さん！！」

遠い距離の向こう艦首に映る少女の姿に『こんごう』は泣き叫んだ
身の程にあまる大日本帝国の旗を大きくかざし
顔を真っ赤に染めた彼女の後ろには肩を支える男の姿が見えた
時間は１４１８

その時が近づいている

『こんごう』は走った
海の上を
悲劇は止まらない…だけど

「行かないで！！行かないで！！」

何度も手を伸ばす
どおして「人」の死に準じて逝かなくてはいけないのと

そんな思いををあざ笑うように大和は艦体を大きく海に向かって傾けて行く
歴史はどこも変わる事なく終わりを再現し続ける
モノクロではなく鮮明な色として

「姉さん…」

既に甲板を波で洗う程に傾いた艦の上で大和の艦魂、大和は自分の背中を支えた男の前で大きな声を挙げた
自分の上を禿鷹のように、我が我がとついばむ者達をにらみながら

「私達は死なない！！私達は必ずこの海に戻ってくる！！」

軍服の各所が敗れ
体の部位の全てに血を纏ったまま、それでも負けない意志をやどした目で

「愛する国に戻ってくる！！！」

『こんごう』から見ても自分より幼い姿と声の主はそこまで言うと、最早立つこととままならぬ状態になりながらも
自分の背中を支えた男の胸の中に顔を埋めると手早く自分の手に持っていた短刀を押し付けて
勢いよく突き放した

「大和！！！」

傾いた船体から滑り落ちる彼、メガネを掛けた少佐にほほえみと共に

「生きて」

甲板を落下の一途にいる彼に向かって光の力をかざした
「やめろ！！！僕は！僕は君と一緒に！！」
落とされた彼の指は必死に甲板に己が手を引っかけようと伸ばすが、激しく傾きさらに垂直になろうとする艦の上ではなすすべがなかった
だから大きな声で手を開いて、自分を離さないという決意を高く叫ぶ

「最後まで君と一緒に！！君と…」

途切れる言葉

名残を自分の手で握りつぶすように一瞬で彼を別の艦に大和は飛ばすと倒れた
気丈に達続けていた足は幾筋も切り裂かれ
腰部から下はすでに力を伝達する事は困難な状態になっていた
それでも愛した人の為に達続けていた体はやっと解放された、同時に崩れ
同時に泣いた

「生きて…お願い、私の心を届けてね」

今まで張りつめさせていた顔から、緩く最後を優しく終えるために力を放つと涙と嗚咽をこぼした

「ごめんなさい…守れなくて、ごめんなさい…ごめんなさい」

倒れた目から落ちて行く涙の果てにあるのは最後の地獄だった
何人もの兵員が海に向かって転げ落ちていく
彼女には最早それらを助ける術はない、ただ朽ちてゆく鉄の城は各所から肉の焼ける匂いと機械、油と火薬の満ちた酸欠の空間になり
美しかった自分の上で多くの人の血を浴びて禍々しい影を落とし
多大な血を持つ「人」を救えなかった事に泣いて詫びた

「ごめんなさい…沖縄どころか、皆さんまでも守れなかった、護りたかったのに…ごめんなさい」

最初から無謀だった作戦
それでも魂は守るという事に全てを賭け、心を使わせていた
艦を保たせ、意地の戦いに士気を鼓舞するために旗を振り続けた

それでも
だからこそ最後の願いは愛する人にだけ……途切れそうな声は続ける
「一緒に死ぬなんて言わないで…貴方が好きで、貴方の愛する国が
好きで、私は産まれたんだから」

滅私の愛を捧げる

防空指揮所上１５メートルの測距儀が力無く頭をもたげるように海
に向かって顔を降ろして行く
終焉の近づく最後の時

「私は…またこの国の海に戻ってくるよ．．．絶対に、だから私の
心を捜してね．．．．し．．さん。貴方の思いで私はまたもどって
くるから」

軋むキールの音と煙突内部にこもった熱気が閉塞された彼女の内部
空間を破壊する連鎖が始まる
血しぶきと破裂の中で少女の体は四散してゆく
指が千切れもっていた軍艦旗が光の泡になって消え、腹が割ける
ヒトガタをもはや保てないほどの損傷の体は

なのに
なおも天を目指し顔を上げる、緞帳の空の下、雲を滲ませるように
輝きを閉ざした太陽を
視線だけが追う

「私の魂、私の心…日本を護って、再びこの海に……」

雷鳴は響き怒髪は海と空を突き抜けた
立ち上がる振動の嵐の中
最強の名を持った姉、大和は爆炎と共にその身を骨も残す事なく砕いて消えた

『こんごう』は

第五十八話　心の欠片

水面に幾重にも広がる波紋は震えていた
大海原に立ち上がった黒煙の柱は太く、天をつく雷鳴と共に暗雨の
空を突き抜け上昇した先で彼女の破片をまき散らした

巨大艦艇として産まれ、帝国海軍最大の戦艦として形あった彼女は
もういない
全てが破壊され手も足も顔も…全てが粉とチリに変わり砕け散った

「ああ…」

１９４５年４月７日１４時２３分

帝国海軍と強き日本の象徴として産まれた姉は死んだ
よもやその出来事を水の記憶を遡るという事によって眼前で経験す
る事になるなど…
繰り返したくも見たくもなかった歴史の真ん前に『こんごう』は呆
然とただ涙を流して立っていた

どんなに手を伸ばしても
行かないでと叫んでも自分がただの歴史の傍観者で
変わり様の無かった過去が鮮やかすぎる現実を見せつけただけ

海に浮き
帝国海軍の終焉を見続けた『こんごう』は力なく顔を落とし
激震の余波に揺れ踊り続ける海を見た

だけどわかった事もあった

文章や写真でみるよりも、心を抉るように激しく辛く、想像を絶する程の悲しみの中でそれでも「護りたい」という心を前に立て「人」と共に死への道を走った姉は

最後まで
最後まで
逃げず、退かず、沖縄に住まう日の本の民を護らんと手を伸ばし続けた
自分が死ぬことなどわかっている。度外視の戦いの中でただそれを願っていた事だけが理解できた

同じように矢矧も魂の火を燃やし戦い
愛する人が生きることを願って死んだ

「矢矧姉さん…大和姉さん…」

矢矧とは体を寄せて言葉を交わすことができた
だけどそれが愛した人の影なって見えていた事である事を姉は理解していたのかはわからない
でも

最後の時まで「生きて」と言い続けた姿

軍服の形こそ違ってはいたが黒髪の白い肌は
今を生きる『こんごう』達と同じ船に住まう魂の女

両足を失い腹を裂いた痛みの中で…「ごめんなさい」と謝り続けた姉

そして全ての大任を担って争いの海を走った姉大和

荒れ狂う鷲たちが支配する空の合間
ほんの一瞬見えた姿
肩まで伸ばしていたであろう髪を引っ詰め七生報国の鉢巻き
血という彩を纏った顔は、自分と変わらないであろう少女は誰よりも真剣な眼差しで自分の進む道を睨み
そして

愛する人に心を託して死んだ

海の上、『こんごう』は崩れるように体を丸め泣いた
少なからず頭の中にある混乱
愛するから…死ぬことも厭わなかった？だけどこんな最後なんて
何度も頭を掻きむしる思いは口からこぼれていた

「どおして…そんな思いに…」

手や足にまで走った振動の余波と自分の心の奥の願いを砕いた痺れが全身に小刻みな震えを伝え続けている中

生暖かく戦火によって温度を上げた海の上
まだらに灰色をちりばめた空の下に
爆破の赤い炎を揺らす水面と黒煙の空は無惨な情景を惜しむことなくさらし
嫌味のような色合いを濃く世界に広げ
高く天を突くように立ち上がった破裂の柱から、彼女の体だった部位を海に投げ落としていた

「大和司令……」

『こんごう』が水面の上で泣き伏せたように
司令艦を失った事に顔を真っ青にしたまま立ちつくしている艦魂達がいた
激震地の水面から押し寄せる波動の波の中、まだ走り続けていた姉達は黒煙の空に涙も出ない顔を晒していた

最後の連合艦隊
最後の作戦に意地を奮った姉達に行くも帰るも希望はなかったが

自分たちを待つ日本の民達に救いの手を届ける事も出来ずに
荒鷲に啄まれ骨も残さぬ撃沈の果てにあるものは
虚脱感などという形式張った言葉でかたづけられないもの

一時の自失の後、傷だらけの自艦甲板に手をつき
声も挙げられない程の押し殺した涙の姉
大和が死んだ水面のまわりを何かを探すように走る駆逐艦達
同じように尻餅を着くように甲板に崩れ、目の前の光景に首を振る姉

「嘘だ、嘘だ……」

手を胸の前で重ね、目に焼き付き心に募る真実を否定するように泣く姿
駆逐艦雪風、艦魂雪風は回避運動で大和の周りを防御陣形とは言い切れなくなった状態でも懸命の護衛を務めていたが…
同じく姉妹達である初霜と冬月共々喪失に満ちた悲しみの中にいた

爆風と熱の風

敵を食い散らかした勝利に、羽の悪魔達が何度も撃沈の海を眺める
影も形も無くなった。最強を謳った戦艦は死んだ
今まで共に戦ってきた巨大艦はもう海の上にはいない

羽音の響く空の下、戦いが続いている事などもうどうでもよかった
のかもしれない
駆逐艦の姉妹達は力なく周回を重ねていた
目に見えていても否定したくても
残された物は炎と爆破に食いちぎられた体の部品ばかりで、それに
縋るように体を寄せる総員の姿と
死んだもの達の屍

青い海に垂れ流しにされた大和の体液である黒く澱んだ重油の波
ココにはもう「生きる」という意味を見いだせる者はいなかった

風が変わり
景色が早回しされる
時間は通常よりも滑らかに場面を流す

嗚咽に導かれるようにまたも『こんごう』は時間の中を飛び
立ったまま泣く雪風の対面にいた

先ほどまでは高く上がっていた破滅の柱の絵は既に何処にもなくなり
夕暮れを通り越した暗闇が日本海軍の全ての幕引きを演出する中で、
雪風の前には輝く短刀が並んでいた
機銃掃射の後が残る甲板に肩を寄せ合うように寒さに震える大和の
乗員達の姿

全ての景色を目に焼き付けるかのように大きな瞳が見回す
日本は逃れられない決定的敗北に向かい
最後の力は全てが失われ
国民を守れる者はいなくなっていた

この先に明るい未来など見えない
暗闇の中並べた短刀に引っ詰めていた黒髪を解いた雪風は先に逝った者達を思い出して

「大和司令、矢矧…浜風、霰、磯風」

各々の名入りの短刀のニブイ輝き・・・・戦地にありながらも磨かれキレイに扱われてきた帝国海軍の一員である大切な証の前で、今はもういない司令と姉妹達の名前を震える唇は呼び跪くと

「各位の心、気高き魂のために必ずや三笠様の元にお届けします」
自分の胸に同じく抱いた短刀に誓った

「心…」

悲しみの中にも聞きたい事
『こんごう』は雪風に向かって声をあげたが
声はまるで見えない壁に仕切られているかのように届かなかった
ただ雪風の正面に立つことだけが今はできる

雪風は短刀を胸に抱きしめたまま作戦中止となり佐世保に向かう岐路から
争いの海に散った花たちの墓標に敬礼した

「大日本帝国海軍最後の一人になっても私は戦います、戦って戦って！！必ずや仇を」

そして時間は駆け足で廻る

南海から吹き上げる風、夏本番の到来を告げる7月の海の上
あの日進んだ死出の道の近くを雪風は「中華民国」の旗を掲げて走っていた
向かっていたハズの日本の景色が遠く離れて行く
賠償として愛した国から払い下げられた姿ではあったがまるで新しく建造された艦のように磨き上げられた艦体
美しい艦影を青い海に写しながら

風に揺れる旗は日輪いろどる日章旗ではない
もう
その国には居られなくなった

「……」
無言のまま離れる日本を見つめ続ける雪風
その横に影のように立つ『こんごう』

引き渡しのために乗船したかつての兵員達は雪風最後の航海に複雑な表情と無言の作業を続けている
大戦が終わった後、雪風の兵員達は復員の仕事に徒事し南方を駆け回った
延べ人数にして１３０００の日本兵を祖国に運び
戦中以上に滅私奉公の働きをした

その仲間達とも、もうすぐ二度と会えなくなる最後の旅路の中で
戻れなくなった故郷に敬礼を捧げていた

「三笠様、私の魂への道筋、心は……心はお預けしました。必ず受け取ってください」

小さく消えて行く国土の姿を最後まで姿勢を正し見つめ続けた雪風だったが
全てが水平線に飲まれきえたところで崩れた

「ごめんさい…もう、こんな形でしか日本を守れなくなってしまった私を許して下さい」

流れる時間の中
『こんごう』の心は固まった
雪風の言葉に

「それでも日本を愛してます。この身を賠償として他国に使わす事で祖国の傷を癒する事ができるのならば本望です」

大戦に負け海軍を解体させられ
残った姉達が辿った運命を知っていた
国民に親しまれ羨望の軍艦だった長門は米軍に接収され不名誉の証である「星条旗」を立てられ南の海で藻屑となった
日本に帰ることができず外国の港で終戦を向かえた姉達は海没処分という標的となり愛する国を想いながら撃ち殺された、壊され、死んでいった

雪風もそうだが

「人」が生き長らえるために、賠償として首輪をかけられて、そうしてでも護って戦った日本国を後にした姉達がいた

苦難の年月を共に戦ったのに「人」は生き
魂達は死んだ
簡単な死ではなく人の起こした戦争に準じ苦しんで死んだ

その後、奇蹟の復興を果たして日本の姿を思えば
大戦で死に、復興のために死だけを与えられた姉達にとって、どこまでも不公平で理不尽な結果だったと『こんごう』は思っていた

なのに雪風の心にあった言葉は違った
理不尽を怒り、罵るなどという事は決してなかった
慈しみの瞳は涙をいっぱいに浮かべながらも「人」が生きてくれること
日本が生き続けてくれる事に最後まで心を遣わしていた

涙の『こんごう』は聞こえはしないが雪風に聞いた
「恨んでいると思ってました」

答えは明快で見えないハズの『こんごう』の目と、その後ろに消えていった祖国に向かって
「日本復興の礎として喜んで参ります」

たくさんの本を読んだ『こんごう』の出していた結論はココに覆されていた
そんな惨めな最後を与えられたのなら自分には堪えられないであろう事態の中で・・・・それでも
「人」を愛し

どの姉も
心の底から「日本」を愛していた

今を生きる自分たちには信じられないほどの強い絆を持って「人」
と共に国の存亡をかけて戦い
負けて…

千切られる思いで日本を離れる事で「賠償」という戦利品となり、
敗戦の苦しみにいる人を助けた

「心だけは日本に置いていきます。必ず私もこの国の海に戻ってきます」

深く頭を下げてお辞儀した雪風の前に立つ『こんごう』に姉は念を
押すように
でも
柔らかい笑みと暖かさで
姿は霞のように消えて行く

「次を生きる「魂」に私達の想い、託します」

願い
願いを『こんごう』は聞いてしまった

「あああああああああ」

頭を抑え顔を隠して声を挙げた

涙を制御している機能が壊れてしまったかのように止められない
場面はかわり雪風の姿は消えて、回りは海の底のように暗い中
もがくように倒れ
顔を濡らし続け叫んだ

「あああっごめんなさい、ごめんなさい」

姉達の想い
どおしてこんなにも大切な心を残していってくれたのに、何一つ自
分は継げなかったのか
怒りと悲しみ
それ以上の情けなさ

暗転した舞台の中、只一人で泣き崩れる『こんごう』
今まで「護衛艦」として世に出て以来「人」とは溝があった
戦争アレルギーがそうさせたのか自国を護るという重大な責務につ
く艦として産まれたのに「人」は自分たちを愛してはくれないとい
う中にいた事を恨み
そういうものだと思って生きてきた

艦魂としても溝をつくり何もかもに線引きをして生きてきた自分が
ちっぽけで
一生懸命生きた姉達に託された思いを無意識に踏みにじっていた事に
されども
そう思えど

「私は、何も継げなくて、ごめんなさい」

顔を覆う手からも溢れ出す程の涙の中で、これ程に自分の不出来を
呪った事はなかった

姉達の残した思いに心からの謝罪と後悔で

「ああ…ごめんなさい」

「貴女は答えに近づけましたか？」

波の音に揺れる冷然とした問い、銀色に輝く髪を逆巻くように揺らす影は問うた

暗闇の場所は消え

最初にマリアと会った水面下に続く無限の箱庭の中に変わっていた

涙に歪んだ瞳を上げた『こんごう』の前にはマリアは腕を小さく前で組んで、首を傾げてみせ

「私には……」

「答えへの道はありました？」

意識が動転する程の時間を旅してきた『こんごう』に対して「何か」を探すように矢継ぎ早い問いつめをするマリア

「私には何もわからなかった！！何も継げなかったのに、こんな事……」

座り込んだまま子供のように癇癪を起こしている『こんごう』の手をマリアはすくい上げた

「いいえ、道は示されましたよ」

「道…？」

うずくまっていた顔を起こした『こんごう』の前、マリアの目もまた潤んでいた
水の記憶を共に辿っていたのだから共に魂の死に心を痛めていた

「辛い記憶を遡った果てにあったものは「悲しみ」ばかりでは無かったはず」
優しく手を引いて『こんごう』の体を起こすと

「貴女達「日本海軍（海上自衛隊）」は誰も「魂を引き継いだり、受け継いだり」は出来なかったと言うけど、引き継ぐべき魂と、その道への心は何処に預けられたの？」

マリアは強烈な時間移動によって得た知識によって『こんごう』が、ただ混乱して見てきた物事に泣くだけなんて事を許す気はなかった確実に答えに近づく必要を救いの探求者として誰よりも使命感として持っている彼女は、一つの思いに、答えへの道に至る記憶を『こんごう』自身が忘れぬようにと問いつめる

「どこかにある？何処に預けた？」

冷静で落ち着いた目と乾いた口調
湖水のような薄い色合いを通り越し白銀に輝く目は『こんごう』に冷静さを取り戻させるには十分の効果があった

「三笠様……」
「元帥三笠？」

それでも止まらない涙を手の甲で払いながら

『こんごう』は矢矧や雪風の言葉を思い出していた

「私の心預けましたからね、お願い生きて三笠様に届けて下さい」
「お心、魂、必ずや三笠様の元にお届けします」
短刀とともに語られた言葉
帝国海軍の魂はそこにある・・・・

「心は……三笠様のところ」

死出の最後に魂は思いを日本に置いていった
「心」を

「絆への道に必要なお方、元帥三笠が答えの道を知っている」
「無理だ」

自分の顔を覗き込むようにする輝く瞳に『こんごう』は首を振ると
同時に退かれていた手を振り払った
距離を取った位置から

「三笠様は…いる、だけど誰にも会ってはくれない…らしい」
「それでいいんですか？」

実際に『こんごう』は三笠の元を尋ねた事はなかった
それは戦艦金剛の魂を継げなかったという負い目がそうさせていた
心を貫く視線の相手にそんな弱さまでもを握られてしまったかのよ
うに後ずさりをしながら
自分では行かなかった場所の話しを思い出してみるが、護衛艦の魂
は誰も三笠に会えた者がいない事は『しまかぜ』から聞いて十分に
知っていた

だが相手の銀の矢である視線はもっと上のほうに思いを見つけているのか
迫るように近づくと

「『はるな』さんはお会いした事があるそうですよ」

この空間を知るという舞鶴の司令艦の名前
だが『こんごう』は聞いたことはなかった
『しまかぜ』も『しらね』も一度は訪ねているそうだが、気配はある?または「何かがいる」という事だけがわかるだけで誰も会ったことがないという話
なのに、『はるな』が会っていたなど、おそらく今まで誰も知らなかった真実とも言えた

立ち上がりマリアの対面に顔を合わせて、遠回り過ぎるやり方と息を巻いた

「だったらなんで『はるな』司令に」
「彼女ではダメだからです。だから会えることも誰にも言わなかったのでは?」

誰にも告げられなかった事
なにかがダメで『はるな』にも出来なかった事?『こんごう』は訝しげに顔をしかめる
マリアは、相手の睨む視線の前でもひるむことのない意志で近寄ると

「これは貴女にとって大切な事ではないのですか?他の誰かなど問題ではありません」

揺れるスータンの裾と銅牌の瞳

問われる責務に『こんごう』は顔を伏せた

「私に、できる事なのか？」

「貴女なら、届くかもしれないと私は思いますよ」

思いを見透かす瞳の前で誰にも出来なかった事に向かえと言われる

『こんごう』

だが、他の魂達より不出来で何もかもが足りず「魂の引き継ぎ」さえも出来なかった自分にそれが出来る自信はまるでなかった

「私には…無理だ」

「いいえ貴女がやるべきです。貴女は強い魂なのですから」

息の弱い返事にマリアの射貫く視線は即答だった

「貴女こそが、その道を進む魂であると私は確信しています」

「どうして？」私はなにも継げなかったのに」

「いいえ、貴女に想いは託されたのです」

細い指が最初に水を投げた時のように『こんごう』の額を示す

「それを捨てて、逃げたのならば帝国海軍の想いは誰が継ぐの？」

ゆっくりと額を示した湯時が顔の前を降りてゆく

毅然としたマリアの前、まだ心の定まらない『こんごう』を響く声が押す

「この海に残った心、貴女は心の記憶を手に入れた。絆への鍵」

マリアの指が顔を過ぎ下へ降り『こんごう』の胸ポケットを指す

光り輝く温かなものはそこにあった
七色に輝く油玉のようにも見えるがプラチナを混ぜたように硬質な
輝きもある

「これは…」

矢矧が自分に向かって投げた短刀は思い出の中では雪風が持っていた
だが

「思いの欠片はそこに託された」

取り出した手の中に光る球体

「でも、どおして私に？これは何？」

水の記憶を遡っただけで自分は何にも手を加える事の出来なかった
世界
矢矧は自分ではなく愛する人との会話がシンクロしたところで出会
い、愛する人を生かすために突き放し、短刀に心として与えた

事実しっかりと雪風の手に渡っていた短刀の…これが何かがわから
ない『こんごう』はマリアを見た

相手を追い立てるように
張りつめていた流れの中で、キツイ輝きを増していたマリアの目が
和らぐと
吊り上がっていた眉をおろし
本当に羨ましそうに

「お姉さんはきっと見えていた。遠い未来の日本を護る貴女の姿が、

だから「心の欠片」を貴女に託した」

「生きて」

手の中に輝く奇蹟
矢矧の託した想いが温かく輝く

「今度こそ、その想いに知らぬ顔はしないで」

少しの問答に引いていた涙はまたもこぼれて
手の中に包み込む欠片にしみこんでゆく

「矢矧姉さん、わたしに…」

矢矧はあの時、自分を確認するように一度目を見開いて
『こんごう』は首をふった
そんな動作で自分が見えたかどうかを計るのは愚行だ
答えはココに「欠片」として託されている

同じように雪風も自分に託したのだとわかった

「次を生きる「魂」に私達の想いを託す」

あの言葉きっと自分の影から向こう、今の日本守る護衛艦の魂達に
与えられた言葉

「貴女達は偉大な姉達に日本を託された魂」

マリアはそう言うと上に顔を向けて「時間」が来た事に顔をしかめた
今まで暗かった水面は薄い水色に変わり始めていた

「いかなくちゃ」

明るく水底を照らし始めた光、手の中の欠片をしまった『こんごう』
はマリアを見た
「私に、何が出来るかわからないけど。私はただの艦の魂だけど」

「Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄ忘れないで、私達は船に住まう魂だけ
れど、何も出来ないわけじゃないのよ。出来ることがあるからこそ
私達は船の魂として生きているのよ」

マリアは全ての魂が持っている迷いの根元を払うと
指を高く上に
輝く水面の天井に向けて
「私達の出来ることは目に見える事だけでは無いはずです」
そう言うと光の真下、水の天井に道を開いた

「またいつかココで、お会いしましょう」

輝きの幕の下立ち上がった『こんごう』は頷いた

「ありがとう。マリア」

光の渦に包まれた『こんごう』は今度は気を失う事はなかった
見開いた目のまま
今を戦う海に向かって飛んでいった

第五十九話　電子の冠（前書き）

色々あって疲れ気味ですが
なんとか頑張っております
後書きに外伝の外伝を書きました
サイドストーリーはそれなりに本編に絡んだりもしますがネタバレもそれほどないので暇つぶし程度に楽しんでいただければ嬉しいです。
今回は短編で長くても後2話もないと思います

でわ～～～

色々あって疲れていたのはホントみたいです．．．
どちらにしろ対潜訓練編はもう一度色々な見直しが必要なようです
ぅぅぅ

ちなみにH．ｌｉｎｋ１５Ｊは実際の自衛隊にはありません
またＨｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ．ｓｙｓｔｅｍもありません
ヒボシが創作したものです

第五十九話　電子の冠

機関部が圧力釜の音を高める響き
水の壁を破る勢いの旋回が続く海
昏倒のまま光のない制止した目をうかべた『こんごう』の肩を抱いた粉川にも振動は容赦なく伝わる
雨足も不安定に水面を動かすのか護衛艦『こんごう』が激しく揺さぶられる感覚の中、通信が入った
粉川は胸ポケットに入れていた通信機のけたたましい音に手早く「入り」を押すと

「そろそろ終わりですか？」

察しのいい答えを間宮に聞いた

「そうだね。そろそろ終わりにしようと思ってね、今からフェイズド・アレイ・レーダーを回復する。少し騒がしくなるからねそのつもりでいてくれ」

間宮の声には緊張感が無くなっていたというか
緊張はより、尖り戦う為に精錬化された自分たちの熱気を喜ぶように弾んでいる

「待ってください！急にオープンにしたら」
「Ｈ．ｌｉｎｋ　１５.jとの連携が必要なんでね。勝つよ、この戦い」
「Ｈ．ｌｉｎｋ　１５．．．それってまだ実用では」
「実装しているんだから出来るさ」

自信に溢れた声は粉川の反抗をまるで聞くことなく通信を一方的に
切ってしまった
言いたいこと一切を伝えられないままの状態で通信機を握った粉川は

「待って・・・そんな事・・・」

反抗が空気が抜けた風船のように力無く口からこぼれる中で、自分
の腕の中にいる少女に視線を落とした
弱い息が微かに開いた唇から抜けた音を不規則に続け
顔は白いというよりも青に浸されたように色をくすませる中で小刻
みに、痺れるような震えを繰り返している

「『こんごう』・・・」

耳元に呼びかける
柔らかな栗毛の髪、頭を抑えて
痙攣の中で微かに揺れる光のない目に

「どうしたらいいか・・・わからない、どうなるかも「目」が開い
て君が無事である事だけを・・・」

船の魂がここにいる
それを声を大にして間宮に言ったところでどうなるわけでもない
不可思議な事と通信を切られるだけだし
粉川自信にもある種の覚悟が事もあった

こんな事で国防を止める事は出来ない

これが実戦ではない

だから諦めていいという事は絶対になく
実戦を模した戦いだからこそなおさらに負けられない
至る有事のために用意された艦がその実力を示す事がこの海を隔てた赤い国に対する
強い日本という意思表示

自分自身も国防の盾である事を心に刻み込んでいるように
この『こんごう』に乗船する全ての者達が盾となって今置かれている挑発に対して心に鬼を宿して
勝とうとしている気持ちは粉川も変わらなかった

だから逆らうような返信は出来なかった
かわりに手の中、力無い体を強く抱きしめ、はっきりとした口調で励ました

「どんな事があっても大丈夫、僕がついてる。頑張って」

グループルームの窓に叩きつける雨粒
風に乗った破裂の音の中、戦いは最後に向かって加速していた

「勝ったな」

自らも太い指をも使いパソコンに叩きつけるようプログラム解除の手伝いをしていたダニーは顔を上げた
薄暗い部屋全体に打音は続く

詰めたメンバーの全てが現実的画像のにない映像の世界と戦っている

1分32秒

メインの潜水艦であるマーシアハ，石龍以外の戦闘機能再起動にこぎつけたダニーは成功の裏側を良く知る片口の笑いを浮かべながら

「こっちは後30秒で起動だ。Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄは?」

「回避運動をしつつ．．．．ルーアハに目標を定めてます」

メインモニターを見張るアイザック少佐は自分のモニターと目の前のブルーバックを交互に忙しく睨みながら背中で答えた

「1つは、やもえんか．．．．それでも正確にアクティブをかけられる事はないだろう」

正面に鎮座するモニター内、後数秒でアクティブを受けてしまうであろう1つの艦影を睨むと

囲いの位置からは一番後方で今のところマークされていない艦にも攻撃の合図をする

「レーダーの反射は」

「ありません」

「ではヘリはこちらに向かっているな．．．．」

モニターに映る影はない

フェイズド．アレイ．レーダーが生きているのならば反射による残像を確認する事は可能だが、相手が「無」であればそれで確認する事は出来ないが

他の方法は何通りかある

余裕のあるダニーは一息つくように
メインモニター右側に浮かぶ青い画面の中を飛翔体を表すアイコンが走り『こんごう』とマーシアハの間に入ってきたのを確認した

「目と・・・目をつなぐか」

ダニーの隣、両腕を組み瞬きもしない鷹の目石上はつぶやいた

「フェイズド・アレイ・レーダーの代わりにヘリの目とｌｉｎｋを重ねるのは良い方法だったが正確無比とは言い難い・・・後、初めてなんだろ?最初のキスは優しくタッチが基本だ」

少しの余裕が出来たダニーは石上を冷やかしながら背もたれに体をドッカリとあずけるとほどよく解れた緊張感の中でジョークまでとばしていた

「ａｅｇｉｓｓｙｓｔｅｍを無敵にする為には百の目であるフェイズド・アレイ・レーダーが必要、作動にはそれを見渡せる目を動かすにたるものがあってこそ無敵の楯だ・・・やり方は凄かった実戦的じゃない」

この後の結果に響くであろう出来事を持論の中で自慢げしゃべると鼻に掛かったメガネを指で軽くなおす

「実戦的か・・・・」

理詰めで自分を諭そうとするダニーの目に石上の尖った視線は

「実戦はいつだって突然やってくる。出来ない事と出来ることの差

ぐらいはわかっているよ」
冷静すぎる答え
それがまるで石上の体の中にある「負けん気」の発露のようにもみえるのか
少し疑うようにダニーは聞いた

「君は勝てると思ってるのかい？一度切ってしまったシステムを立ち上げるりのはそれなりに勇気がいる。それに立ち上げられたとしても新たなｌｉｎｋに同期させる余裕はないと思うが・・・」

あまりに冷静な相方である石上の顔に、少しの怒りと困惑を眉に走らせた顔は睨むが
「そういう事態が起こる・・・それを実戦っていうんじゃないのか？」
石上の目はいつになく厳しい
見逃さないように見つめ続ける先にあるのは『こんごう』のアイコンのみだった

「やってみるだけだ」

ＣＩＣの安藤から「どうなるかわかりません、電気系の負荷までは」と忠告を受けた間宮だったが、自信に溢れた態度が揺らぐ事はなかった

「今までの艦体行動では使う機会がなかっただけだろ、Ｈ　ｌｉｎ

ｋ　１５　Ｊ．．．．こういう時のために装備を使わないでどおするよ」
そういうと手元の要項をなぞって
「大丈夫、数の上では成功してるんだ。後は艦を信じるのみ」
そういうとキャプテンシートを軽く叩き時間がないと催促した

「しかし．．．．最初の圧力でフェイズド．アレイ．レーダーに何の被害もでていないとはいいきれませんよ」

最初の攻撃でシステムにかかった負荷を考えれば「見えない」なんらかの攻撃がレーダーを蝕んでいた可能性は高い、心配する安藤
伊達で何年もこの機械とつきあってきたわけではない
再起動で壊れる可能性も考えなくてはいけない状態だが．．．
さすがにここまできて「白旗」は自分も許せないし『こんごう』の乗員的にも停止はありえない

蒼の光とオレンジの瞬きの中、ＣＩＣのメインデスクで間宮の言葉に目をつぶっていた安藤は踏ん切りをつけるために鼻から一息抜くとやっとで返事した

「わかりました．．．やってましょう」

そう言うと自分の周りに座した隊員達を人にらみして
「やるぞ」と目で合図する
インカムを右手で調整
最後の大仕事に入った

「フェイズド．アレイ．レーダー再起動、同時に１５ｌｉｎｋに接続」

「フェイズド・アレイ・レーダー再起動はじめ！！」
艦内に響く声
最後の戦いに発動された声はダニーがシステムの再起動にこぎつけた時間とほぼ同時だった

赤と青
曇り空の下に幾重にも色を重ねる情景は一つとして同じではない波のように押して引き
姿も香りも変えて激しく動き
マリアの空間からまっすぐに海を割って飛ぶ『こんごう』の意識は天井に輝く光りに向かって飛びだした

「『こんごう』！！！」

目覚めは激痛と口の中にヘドロのように溜まった血を吐き出すという強烈なものだった
飛んでいた意識は本体の頭の中に合致した瞬間、走った火花は『こんごう』の全身に
神経に荊を走らせ微妙に揺れていた力無い体は跳ねるように起きあがらせた

口から吹き出した血と、耳鼻をつたう血
およそ端正な顔を持つ少女に似つかわしくない生々しい飾り

反動で跳ねた体を支えていた粉川は突然電源の入った『こんごう』の姿にブリッジがフェイズド・アレイ・レーダーを再起動させた事

を確信した
そのままゆっくりと引きつった顔のまま立ち上がった上半身の彼女に呼びかけた

「『こんごう』！『こんごう』？」

唇を彩る血の雫の中、唇は感電の下で小刻みに震えながら
粉川の問いとは別の答えを返した

「想い必ずや果たさん」

尋常ではなかった華奢な体はゴムをねじ切ったように跳ね返りの後
今まで目の玉を無くしていた暗黒の瞳が
粉川に支えられる腕の中で目の中に赤いラインを発生させ輝かせている
八角の輝き、フェイズド・アレイ・レーダー復活の証
その目が粉川の、自分を覗き込む目を初めて確認する

「粉川・・・」

自分の問いに初めて名を呼んだ彼女に粉川は顔をよせて労った
「もう終わる、もうすぐに、後少しだけ」
「私は戦う」

少女の見るからに危険な状態に気を遣った彼の言葉を遮る意志

「私はこの海で逃げたりはしない」
言葉は強いがそれを鵜呑みには出来ない傷

「でも」

『こんごう』の姿はあんまりなものだった
粉川の前にいる魂はボロボロで色の白い肌は薄暗く明らかに具合の悪い顔になっている
赤い血と吐き出した嘔吐の汚れは栗色の髪を汚していてただ目だけが強靱な意志を表している状態

「護ります・・・必ず」

フラフラした足が起き上がる。何かに覚悟を決めた姿が粉川の手から離れようとする

「『こんごう』もういいんだ!!もうすぐに演習は終わる。ココに座ってゆっくりして」
「力を貸してくれ!!」
輝く目とは反比例するように不安定に揺れ続ける体は今にも仰向けに倒れてしまいそうだった
それを支えるために『こんごう』は粉川の肩を両手で掴んだ

自分の前、膝を着いたままでいる彼の肩に

「ここで逃げない、絶対に・・・・」

強い意志を継げる『こんごう』だったが粉川には我慢がならなかった
中身の破壊に足もおぼつかない彼女をこれ以上戦わせるなんて事は出来なかった

「君はよくやってる、だけど艦の魂は何ができる訳でもないだから」

ふらつく体は懸命に肩に手を通わせなんとか自分を立たせている中、

粉川はついに言ってしまった
だけど
そうしてでも『こんごう』を止めたかった
見ているのが辛く成る程に血反吐と嘔吐にまみれた彼女の体は揺れ続け
危険域である耳からも未だに止まらず流れ続けている血に
何も出来ない存在なのに怪我をする

不可思議な事だっがこういう事があるという話しは三笠からも聞き及んでいた事で
悲しすぎる現実に打たれてしまっていた
何も出来ないのに国民の過剰な期待を背負っている彼女は、無敵と言われるシステムを搭載したが故に失敗の許されない・・・だから今も自分を奮わせていると思えば可哀想でしかなかった

見つめる目
真面目な粉川の目が八角の輝きの瞳に告げる
「もういいんだ・・・何も出来ないのに傷つく事はない、後はココで休もう」と、しかし彼女の答えは違った
肩に置いた両の手は相手の「人」に理解を示しながらも

「それは違う」

『こんごう』は睨む目がはっきりと否定した

艦魂は
「船の魂は船に住まうだけで何か出来るわけではない」

長年言われ続けてきた事
魂を知る「人」にも、魂自身もそう思って生きてきたハズの事に
不安の顔で自分を見てそれを口に出してしまった男にはっきり毅然
とした声は違うと告げた

「艦は私達がいるからこそ生きられるもの、目に見えぬ力は全て私
達の「側」のものなのだ」

そう言うと頭の上に小さな光の輪を表した
「この宙を舞って訪れた痛み、これこそが私達の世界の痛みであり
私達が生きている証なのだから」

自分の中身に痛みを走らせた物、それは「人」には見えない力だっ
たがだからこそ『こんごう』にはわかった
見えない力は自分たちと同じ、「存在として近いもの」である事に

片手が自分の口から吹いた血に触れる
手に乗った赤い、生きる者達の証である鮮明な命のカラー、深紅の
滴にうなずく

「私達もまた生きて戦って、護る者なんだ」

確信の口調に粉川は三笠の言葉を思い出した

「神話の時代を具現化できる「船」は「戦艦」しかいない」

三笠は現代なればそれは「護衛」という名を持つ魂達だと言っていた
そして今神話は粉川の目の前にその姿によって具現化されていた

海神の暴威を「人」と共に盾となって戦う「神々しき女神」はココに姿を現していた

たとえ自分で立ち上がる事が不可能で、粉川の肩に手を置くことで奮い立たせた姿であったとしても、すでに死んでいた目はなくなり輝く目と頭に輪を持つ姿は強く叫んだ

「『いかづち』!!私の目となりつながれ!!」

声は荒れ海を割って彼女の頭に響く
驚愕の事態のまま膝をついている粉川の前、頭の上に光る輪を拡大しながら『こんごう』は自分の後ろを走っている『いかづち』に電信した

その頃
『こんごう』重篤の状態から一人艦に戻っていた『いかづち』は、とても艦首に立つ事が出来ず部屋で蹲って震えていた所だった

「『こんごう』・・・・大丈夫やの?」

突然耳に届いた声に抱えた膝の間に沈んでいた顔が挙がるついさっきまではまさに虫の息を零していた『こんごう』の声はみなぎる力のまま続けて

「接敵する!!続け!!」
「せやけど・・・もうわからへんで、もうどうしていいか」
今までなかった事態に膝を抱えたままの『いかづち』は混乱した様子で弱い声を返すばかり

何故、倒れていた『こんごう』が復活しているのか?それさえも頭の混乱を助長していた

「もう・・・ええやん痛い思いはしたんないよ」

苦しんでいた彼女を気遣うように。自分の弱さにくるまろうとする『いかづち』だったが

「『いかづち』!!!この海で私達は負けられない!!」

相手の弱気の鼓動までを鷲掴みにするかのように『こんごう』は叫ぶお互いをつなぐ電子の光が小さなプラズマのように空気に光を踊らせる

「せやけど演習やで・・もう終わるて」

相手のの姿が見えなくても
声の調子から紛れもなく回復している事だけはわかった『いかづち』だったが
今まで味わった恐怖に、この時間が早く終わってくれる事だけを願っていて
とても戦おうというテンションに自分を持っていけないと首を振った

「ほっといても終わるねん、もうええやん『こんごう』だって怪我して」

「このまま終わっていいのか!!この海で!!ココで死んでいった姉さん達が、見てるんだぞ!!」

泣いた自分の言葉に怒鳴る声の返事『いかづち』は背筋に力が入った

思い出さなくてもわかる
ココは東シナ・・・かつて帝国の領土を護らんと戦った姉達がいた
自分の死など顧みることなく手を伸ばし戦った姉達がいた

この場所からそれほど遠くない場所を終の棲家に沈んだ魂達

震える手をきつく握る
立つことはまだ出来ない中で『いかづち』は答えた
「わかった、がんばる・・・がんばるで、わてのできる事で・・・
がんばる」

姉達は死んだ。でもきっと見ているそれだけは理解ができたから

粉川の肩に手を置き体を支えられた形で立っていた『こんごう』は
叫んだ

「ｌｉｎｋ１５　Ｊ接続!!フェイズド・アレイ・レーダー再接続、
Ｈｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ全接続!!ａｅｇｉｓｓｙｓｔｅｍ
ａｌｌ　ｃｌｅａｒ」

艦を操るに必要とされる言葉とは違うのだけど
それが何をしているかは十分にわかった
粉川の目の前、女神は体を感電の痺れのように振るわすと一瞬で頭
にかかっていた輪が大きく広がり金冠となった
細かな情報が光の輪の中に浮かび上がり
ｌｉｎｋ１５・Ｈｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ・ａｅｇｉｓの全てに
光の文字が浮かび接続し
輝く目の中の八角もまた同期してゆく

金冠は流れる髪に光りの粒を纏わせる
それはローブを纏う女王のように
電子の冠（ｔｉａｒａ）を身に戴冠した女神は言う

「全ては大御心の示すままに」

「つながった・・・」

ＣＩＣの安藤は数秒と間をおかずにつながった全システムの状態に
目を大きく開いていた

「できるもんだな」

オレンジに輝く円形モニターを配したビジョンから
それ以外の全体モニターを確認、冷える冷蔵庫の部屋の中
各隊員も目を丸くして各々の前に置かれたシステム状況に驚いていた
たが、チェックを怠るほどに惚けはしなかった
すぐに目の前のデスクと項目に目を光らせながら

「チェック！！！」

ＣＩＣの隊員達に檄を飛ばした

何もかもが変則の戦いの中に今もいる
不都合ばかりが先行した戦いの中システムは正常に動くのか？

厳しい表情が画面を流れる情報に目を光らす

「どうだ？」

機動から寸間も置かぬ間宮の声に

「イージスシステムに問題はありません。ただフェイズド．アレイ．レーダーの復旧率は６２％で現在も先ほどの規模ほどはありませんが干渉を受けています」

半分と少しの可能性の目
だが安藤の顔は苦悶の色に染まることはなかった

「ですが問題ありません！ｌｉｎｋ１５ならびにＨｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ全接続に成功！！

ＣＩＣに熱気が走る
行動中にフェイズド．アレイ．レーダーを解除して再起動には新型ｌｉｎｋも合わせるという荒技に『こんごう』の頭脳は応えた事に確かに実験の数の上では出来ていた事だが、いざ現場でそれも不足の事態が起こった状態の中で成功するかは賭けに近かったからだ

だが艦は応えた
急場の戦いに『こんごう』は気持ちで負けていない事を示すかのように

立ち上がった頭脳、自身の持つ目を片手落ちの状態と不通を生じさせたままだが、それを補うシステムＨｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓの接続が大きな力に変わっていた
集まる情報に安藤はうなりながら

「すごいなＨｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ．．．これほどとは．．．しかし．．．」

それでもシステム全体に出ているストレスは「人」の考える以上のもので、安藤もその事はよく理解していた
新たに目を補うために使われたシステムの重さは半端ではない事

「システム各所の負担は完全に解消は出来ないか．．．．フルで使って１０分ぐらい．．．．保つか？」
あごに手を置き考えるが
あらゆる角度で十分にそれを検証する時間はない

決める．．．限界の時間を
「１０分．．．．」
自分の考えるリミットをつぶやくと
即座にブリッジに叫んだ
時間に猶予がない事だけが事実で、今はまだ戦場にいる事を思い出して

「こちらＣＩＣ全システム「とりあえず」接続完了！！」
「ブリッジ了解」

待ちかねた応えにブリッジに詰めていた隊員達の覇気は一気に熱を上げた

「やりましね」

間宮の横に立って状況に肝を冷やしていた和田は大きな溜息と共に
緊張を吐き出していた
大男のほぐれた緊張
少しばかり笑ってしまう姿を横目に

「さすが『こんごう』よくやった」

間宮の手は軽く船体を叩くと拳を固めて

「さあ!!仕上げだ奴らの度肝を抜いてやろう!!」
目指す結果のために士気をあげた

「アクティブ!!かけられました!!」

石上を不敵に見ていたダニーの耳にアイザック少佐の声が響いた

「意外に我慢強くはなかったな、ミサイル回適時間測定、ルーアハ
2にて迎撃、1にて攻撃」
簡潔に指示30秒のセットアップを調度クリアしたところで迎撃は
ギリギリの状態だっが、それに動揺をみせることは決してしない態度
隣でずっと両手を重ねたままモニターと睨めっこをしている石上を
見ると

「手こずった．．．だが良い経験になった」

軽めの口、最後は自分達が勝者であるという笑みだったが
石上の視線は彼の顔を見ることはなかった

睨んだままのモニターに向かって「終わってないぞ」薄い唇から白い息と一緒に意見を吐いた

「大佐!!ルーアハ1とマーシアハ完全にロックされてる恐れがあります」
それは各艦が百目によってロックされた音が届くことで現実となった

余裕の目が固まる
アイザック少佐が示すモニターに目を向ける

「目が開いた．．．フェイズド．アレイ．レーダー．．．．．まさか？ハ・シェムの干渉値は？」
「レベル1の状態を維持しています」

ダニーは首をかしげた
「干渉を受けてるのに攻撃に転じた？」
「再起動に成功したんだろう」

石上の不適な顔に頭の回転を速めた
冷凍の部屋の中、スタッフジャンパーを脱ぎ捨て熱くなる思考の中身はめまぐるしく答えを探していた
最初のレーザーによる電子の攻撃で『こんごう』のイージスシステムにはそれなれりの「負荷」を与えていた
相手はそれを嫌ってシステムに大きな負荷を与える部品となった「フェイズド．アレイ．レーダー」解除、代わってヘリの目による攻

撃に方法を移した

「最初の攻撃のダメージがわかっていたら．．．もう一度立ち上げて曖昧のうちに攻撃するなど事ありえない」

自分ならば．．．これほどに負荷の掛かる状態からさらに再起動プラスｌｉｎｋを足すという方法で目を増やしてフェイズド．アレイ．レーダーを使ったりはしない。ともすればシステムの一部を壊れてしまうかもしれないのに

「馬鹿な．．．．」

「無敵の楯．．．百の目．．．．」

固まる姿勢、背中に向かってかけられた石上の言葉にダニー唇を噛みしめた

「まさか．．．アレを?」

否定の顔の前

石上の目は『こんごう』のアイコンを逃さぬように見つめる

今まで凍りのようにただ傍観者として椅子に座っていた石上の顔に

「挑戦」が浮かび上がっている事にダニーは気がつくが

それさえも視界に入れる事なく

「それでいい」とつぶやく

「いや．．．しかしだとしてもこんな使い方はしないハズだ」

ダニーは石上にむかって冗談だろという顔で聞いた

フェイズド．アレイ．レーダーを含むイージスシステムは大変高価

な兵器だ。
演習程度で失えるものじゃない

「使い方？実戦でそんな事は言ってられないだろう。望み通りの最小限の艦艇での戦いは目の前で起こっている。現実の実戦はまってくれない、違うか？」

「だとしても！！」

実戦は待たない、そんなことはイヤと言うほどに知っている事実。
故郷イスラエルは隣接するパレスチナからいつだって待ったのない攻撃を味合わされてきた
実戦が待ってくれない
いや不意と思う時にしかこないものである事はダニーの方が了解済みの事
反射する青い光、メガネの奥で温和だったダニーの目が尖り眉間に皺をよせる

「だとしても、中身（システムの負荷）が保つか保たないかまで考えれば新しいシステムを加算するなんて・・・」

「もちろんだ。自艦に損害がないとは言い切れないが、ココを戦場だと決めた奴らにそんな選択はないだろ。待てば敵は待ってくれるのか？」

「まったくだ」

終始背中に向かって冷静な意見を通した石上に、向き直ったダニーの顔には怒りがあったが顔に登った怒りとは別に静かで冷静さをし

っかりと取り戻していた

「アイザック少佐、ルーアハ１へのアクティブはそのままでいい、Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄによりルーアハ１のミサイルが迎撃されたら即時ルーアハ２から魚雷２発発射」

イスに座ったダニーは手早く指示

「マーシアハはどうしますか？」アイザックはすでに勝敗がかなり自分たちに不利な事を感じていた

このまま撃ち合いになっても．．．そして事は許さない者がいる

「Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄ！！アスロック発射！！マーカー出てます！！」

モニターに新たに映った飛翔体を示すマーカー、実弾ではないにしろ模擬線の攻撃は相手によって先に刺された

「どっちに！！」

「ルーアハ１へ向かって．．．発射弾数２発間１０秒」

「大佐！！」

このままルーアハ１を見捨ててミサイルの発射するか？迷いはなかった

アイザックの目が尖る

「ルーアハ２、魚雷発射！！」

モニタに叩きつけるように叫ぶダニーに、向かい全面の指揮していたアイザックの悲痛な声返る

「Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄアスロック発射、発射弾数２発間１０秒！目標マーシアハ！！」

本隊である潜水艦に先手の一発が発射
「ルーアハ2、魚雷発射!!何してる!!」
「間に合いません!!」
「Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄに一人勝ちさせるつもりか!!撃って防げ!!」

ただで撃たれたのでは話しにならない
ダニーは時間の差をしっかりと見て次次に発射の合図をくだした

同じ頃、間宮も仕上げの拳を振り上げていた

「負けん!!!」

激突の海にお互いを標的と構えた者達、間に響く大きなブザーが鳴る

第五十九話　電子の冠（後書き）

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～外伝の外伝　港の働娘

その日、氷川丸は秋の日差しやわらかな心地に誘われてプロムデッキの端に用意した小さなテーブルと椅子に紅茶を用意して港を眺めていた

内燃機関は日本国以外のもので作られたからか
襟足を肩で切りそろえた黒髪、なのに緑の色の瞳を持つ彼女はすがすがしい空の下で思い出にひたっていた

横浜港、ココに係留されて４０年近くたつ
あの大きな戦争を過ごし、もう二度と客船には戻れないのではという辛い思いをしたのが嘘のように
あの後，復員の仕事に徒事し、さらに再び客船に戻れた時・・・泣いたものだった

アールグレイを口に今はゆっくりとした時間をただ優しく見つめる日々
横浜を訪れる世界の客船達は必ず彼女に会いに来る
「人」と楽しい旅を添う魂達はいつも優雅でおしゃべりだ
１０年と少し前には「クイーンエリザベス２世号」が大桟橋に寄港し長く滞在した
クイーンを冠する彼女は上質なキングス・イングリッシュで紅茶の嗜みから最近の話しまで・・・
たくさんの話しをした

氷川丸はカップから唇をはなし秋の空を流れる雲に目を細めた

「またたくさんのお客様が来るシーズンになったわね」

真夏の終わった季節
熱くない水面に恋人達が写真をとったり、船に遊びに来たりしてくれる姿をみる事だけでも楽しい
そういう姿を見るために海を走ったのだから当然とも言える。
お客様を今も待つ氷川丸は今日も日本郵船の制服をキレイに着こなし空を眺めていた

「氷川丸さ～～～ん」

そんな優しい思い出に浸っていた彼女にデッキの下から大きな声がかけられた

「あら『ずんずん』こんにちわ」

氷川丸が停泊する桟橋の向こうに並ぶ船
港に出入りする大型客船から作業船などを桟橋近くに付けたり、出したりの仕事を頑張るタグボート達が丸みを帯びた可愛いおしりを並べて止まっている

その端っこ、自分の船尾で氷川丸を呼んだ魂は手を振っていた
癖毛いっぱいの赤毛に黒く日焼けした丸い顔立ち
今年から統一したのか作業員が来ている赤のジャケットにハーフパンツと原寸の足を大きく上回る作業靴と、もっとも特徴的である大きな手
大きいといっても手自体が本当に大きいのではなく

例のアレ・・・浦安に住んでいるネズミ王国の国王のような大きな手袋をしている

身の丈小さな彼女はこの港一働き者の「タグガール」港の働娘達の一人

名前はけっこういい加減なのか彼女は自分の事を『ずんずん』と称していた

「元気そうね、今日はもう仕事終わり？」

デッキの上から話しかける氷川丸に『ずんずん』は大きな声で

「もりもり運びましたぁぁ！！」と彼女達タグガールの口癖を返した

彼女達は働く事が大好きな女の子達だ

困っている仲間や船がいるととにかく励ます

そうしないと自分達が悲しくなってしまうのか、一生懸命に励ますし

仕事の時はより元気いっぱいだ

「もりもり運ぶよ～～～」

「もりもり引くよ～～～」

「もりもり押すよ～～～」がきまったかけ声、黄色い声を上げて楽しく働く

特に報酬を欲しいなどとは言わず働く彼女達だが、甘い物が大好きなので豪華客船の魂などはチョコやアメをプレゼントするようにしている

彼女達の押し引きで桟橋に着くことが出来るのだからお礼みたいな

ものだ

そんな裏表のない元気者の彼女達なのだがわかることもある
今日は最初の挨拶以降『ずんずん』は元気がな事
元気がないとすぐに悲しい顔があらわれてしまう。隠し事の出来ない子

「『ずんずん』どうしたの?元気ないみたいだけど」

長くここに係留され、港の娘達をよく知るようになった。そういう気持ちをよく察せるようになった氷川丸は目の前で俯いていた彼女に優しく声をかけた

「あのね、『ぽんぽん』が元気ないのです」

『ぽんぽん』とは彼女たちのリーダーにあたるタグボートの魂だいつも『ずんずん』と二人で「もりもり」を競っている彼女は黒髪短髪ドングリ眼の可愛い子

「どうしたの?体の具合がわるいのかな?」

氷川丸も『ぽんぽん』の元気ぶりはよく知っていたので心配になった

「『ぽんぽん』昔、悪い事したって、しょげてる」
「昔・・・そんな事ないでしょ『ぽんぽん』はずっと働き者じゃない」

少なくとも彼女より前からこの港にいる氷川丸
昔といってもまだ5，6年程度の船生の彼女の行動は最初から見て

いて、悪い事をしていたところなど覚えがなかった

「もっと昔の事みたいなのです」

氷川丸の問いに『ぽんぽん』は自分でもよくわからないという顔をしながら

「昔、戦艦長門をアメリカのために運んだって、泣くんです」

それは彼女達年若い船魂にはとうていなじみのない名前
だけど氷川丸にとって忘れる事の出来ない魂の名前

氷川丸は顔を空に向けて上げて息をついた
あの日
あの大戦が終わった港の空は・・・・ちゃんと色のある空で、今日のように穏やかだった。

「覚えていたのね」

悲しみに少しゆがんだ眉
そういうと『ぽんぽん』の元に『ずんずん』と共に秋色で透明度を上げた空を舞い転移した

第六十話　護りの盾（前書き）

予定通り六十話にて対潜訓練編終了
色々と仕事がつまってま～～～す
今回は外伝の外伝はお休みです～～～すいませんｗｗｗ
代わりに対潜訓練編登場人物評を載せときます

第六十話　護りの盾

「・・・これが『こんごう』の目・・・」

ｌｉｎｋ１５の接続によって開けた電子の光景に『いかづち』はただ呆然と、息をのみ声を落とした
座っていた体が急に中空に投げ出されたような錯覚を味わっていた
そう考えるのが自然といえる程に目の前の情景は変わっていた

電子の視界というものはいつも頭の中に映る

近代海軍、軍艦の魂である『いかづち』も例外なく「近代兵器」の象徴である「電子の目」が頭の中に見せる光景を知っている
それは実際の目でみる色合い豊かな自然な世界とは違い、複数の液晶パネルに映し出されるような固定で、無機質な情景ただ戦域の情報をアイコン化した世界で
自分の頭に映る図によって、自分も機械の一部程という卑下した感情を思い起こさせる程ものだったが

今は違った

Ｈ．ｓｙｓｔｅｍ　ｌｉｎｋ１５が魅せるものは球体の真ん中に立たされたように広がる３６０度全天候のパノラマの世界、いつも映る灰色のディスプレーとはあまりに違いすぎる景色に溜息がこぼれ

同時に怖くなった

「こんなに見えるの・・・・どういうことなん？」

見えすぎる視界
これまでのｌｉｎｋでこんな世界が広がった事はなかったし
見えすぎる目をもつイージス艦の姉妹達が見る電子の情景を見てみたいと考え羨ましく思っていた時もあったが
これは『いかづち』が考えていた世界とはあまりにも違い過ぎた

というかｌｉｎｋによって情報交換や艦隊行動の統一、迎撃、攻撃、防御などの連携のためのデジタル映像が浮かぶ事があっても、デジタルの情報として具現化される世界がこれほど鮮明な景色で見えるなど思っても見なかった事

作戦行動の先端として見える景色が示すものは

確実に見える脅威と対面すると言う事
今、恐れを成す程に正確に見える世界と「敵」の姿
前方、自分のレーダーではアイコン程度にしか写らなかった相手「敵」が明確に姿を確認する事が出来る。それどころか潜水艦の背中が見えてそこに立つ艦魂の姿までもが見える

「『こんごう』の目だけじゃなくて、頭とつながってんの・・・わて・・・・」

ｌｉｎｋが自分たち魂に及ぼすものがこれほどに大きな衝撃になったのは初めての事だった
懸命に胸を押さえ、拳を胸に抱く自分の鼓動を冷静にしようと小さく叩く

視界だけがつながっても、今までなら「図面」事、自分の頭に映るパネルが増えてが見えただけなのに、今日は何もかもが違う
遠方までを鮮明に移すハイビジョンは『いかづち』を海の上に浮かせ

世界の真ん中に浮かんだ自分に
震える体を支える『いかづち』は自分の頭に金冠が浮かんでいる事
に気がついた
二重の輪が天使のリングのように頭の、こめかみ付近を高さに円を
成している図

「なに・・・・これ？」

これも今まではなかった現象、初めて具現化するもの、『いかづち』
は恐る恐る自分の目の前に震える指先を進めたが、光の輪に触れる
瞬間
青白い光の瞬き、輪が大きく開くと同時により深く『こんごう』の
目と頭にｌｉｎｋした
『こんごう』の見る全ての世界へ
魂の頭脳はつながれ「想い」が激流のように流れ込む、『いかづち』
の目と頭の中に入る世界はさらに広がり
願いの言葉が大きく響いた

「私の魂、私の心、日本を護って」

荘厳なるかな、なのに幼き声は『いかづち』の頭の中に鳴り響く

「ああ、こないな事・・・・」

中空に浮く体がくの字に折れる
「この海で負けられない」という意志

『いかづち』は頬をつたう涙の中で、ただ祈りの手を合わせた

ダニー達が詰めていた冷凍の司令室は激しい喧噪で白い息が発火するかのような暑苦しい空間と化していた
そこら中に火をかけられたような怒声と指示が飛び交う
情報を収集するために映し出されるサブディスプレイには文字が洗い流されるように走り
要項の上が飛び交う中、メインの真ん前に座って一番の状況を確認したアイザックがダニーに背中を向けたまま

「ダメです！ルーアハ１、回避出来ません」
「迎撃は！！」

突然逆転した攻守の位置
ダニーは明晰な頭脳で自分たちの立ち位置が相手と同じぐらいに危険な場所にあった事に歯がみして回避不能と判断されたルーアハ１を見た

青白く光っていたモニターの中、アイコンとして現れていたルーアハ１のマークが黄色に点滅する
正常である表記を逸脱した点滅にアイザックの声が続く

「ルーアハ１、１番回避２番．．．．着弾！」

アイコンの点滅がピタリと止まり黄色に固定される図に詰めていた
オペレーター達の顔色は、ただ部屋を覆っていた冷静と冷徹を表す
青色の光以上に、具合の悪さに青ざめた
実弾が当たるわけではないから人的被害は出ないが、マーカーされ
た弾は潜水艦後尾に赤くダメージの光が浮かび上がりそれが致命的
な部分に当たってしまった事に、愕然とする他無かった

「確認します。こんな事は」

一瞬の沈黙
口ひげを蓄えた初老の男が大きく頭を振りインカムを投げ捨てモニ
ターを確認、自分のデスクトップに目を走らせるがダニーが遮る

「ジョゼフ！それはいい！！ルーアハ２の魚雷は！」

当たったという記録は消せない
その原因を追及する事に意味がない
メインモニターを睨みながら、もう一つの標的として浮かび上がる
アイコンルーアハ２と
別のブルーモニターに拡大される図を指差す

『こんごう』の姿
「追撃」という激怒を高熱の炎として表す青白いアイコンに向かっ
て軌跡を描く二つの赤いライン

「ルーアハ２より発射魚雷１，２番Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄに後
２０秒で・・・・」
「Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄ回避！！当たりません」

当たらないという返答

敵艦回避と言えない焦りが部屋の空気を重く支配する
「どうして弾が見える？」
ダニーの焦りは石上を問いただすように聞くがその間にも
「Ｍｉｓｓ　ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ（いかづち）からアスロック２発発射！！」
「マーシアハか！！」
「挟撃されます！！」

図に映る展開はいよいよ旗色が悪い中ダニーは自分の横、食い入るように画面を見つめいつの間にか手元のノートパソコンを開き激動する情報を集めている石上の姿に
「Ｈｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ（ヘカトンケイレス）．．．．完成してた？」
答えろと、声を荒逃げる事はなかったが、冷や汗を張り付かせた顔が答えをと、目が睨む

「Ｈ　ｌｉｎｋ　１５　Ｊ．．．．Ｈはｈｙｐｅｒじゃない、そんなａｎｉｍａｔｉｏｎのような記号を使うか？」
ダニーを見ようとしない目、食いしばるように結んだ唇が「自分の作ったシステム」の出そうとする結果を一秒も逃さぬ視線のまま答えた

「Ｈ．．．Ｈｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ．ｓｙｓｔｅｍをｌｉｎｋさせるもの．．．．」
「百の目を持つ怪物として」

浮かぶ姿
ヘリにある目と同じく『いかづち』の目をも自分のものとして統括し広がった範囲をさらにイージスシステムの範囲とする「疑似ａｅｇｉｓｓｙｓｔｅｍ領域」を１つにするための新プログラムとシス

テムの開発者「石上徳治」は自分の作り出したシステムに確信を持っていた

「オレ達は負けない」

自分を踏み台に実験をした石上にやっと気がつくという事にダニーの歯を食いしばりながら

「ルーアハ2、現状を維持しながら1，3，5，7，番ハープーン発射!!同時にルーアハ1はハープーンを4発発射!マーシアハは迎撃のみにし、ハ・シェムはレベル1の出力最大に移行!!」

「ルーアハ2・・・コロンバスが魚雷を!」

指示を飛ばしたダニーに返った返事はまさかの「独自の判断」だった先に撃たれてしまった潜水艦コロンバスはハープーンを撃つには「不適切」という信号が入っていたのだ

情報は実験をおもとしたココと、実戦の中にいる艦隊とで激しい温度差を表し「出来ることと、出来ないこと」の差は明確に出てしまっていた

被弾という不名誉を頂いたコロンバスがただでは沈まないという意地を表したのも理解出来なくもない事ではあったが、指揮系統からの離脱は痛い結果でしかない

「コロンバス1，2，番魚雷発射!!」

「Ｍｉｓｓ　ｌｉｇｈｔｎｉｎｇアスロック2発発射同時に水中チャフ?デコイ?を散布した模様・・・モニター出来ません!!」

モニター出来ないは正確な意見ではなかった
ココでは見えている・・・ココ司令室が使う衛星からは相手の行動はアイコン化されているとはいえ見えていたが、作戦行動に従う潜水艦達には見えていないという事

「デコイか・・・・」

吸い寄せられるようにそれに向かって走ってしまう魚雷を見ながらダミーにやられる図に苦みが口に走るダニーにアイザックの声が飛ぶ

「マーシアハ・・・・このままでは着弾確実・・・避けられません」

モニターの中、メインの潜水艦であるマーシアハに向かう弾の数は４発内２つは迎撃出来ても後を追って飛んだ2発を落とすのは至難の業の域
ルーアハ2、事コロンバスが発射した魚雷が『こんごう』に当たるかは賭けの領域

拳を握りしめ正面のディスプレイを睨むダニー
これ以上の乱打は見苦しい以外ない事はわかっていても、苦悩が喉から唸りの息を漏らし

「マーシアハ、魚雷・・・」

「魚雷２つ左舷回避!!」

艦橋の熱気を上げる和田船務士の声に『こんごう』にて戦う全ての隊員達の士気は否応なく熱を帯びていた

「ＣＩＣから続いてさらに2つ『いかづち』は回避、こっちに来ます！」

「艦橋了解」

自分たちの正体を見破られた事に怒り狂ったようにミサイル攻撃を開始した相手と、対峙する側に立つ間宮達は荒れ狂う者とは正反対の冷静で熱い「青い炎」と化していた

すでに継続している回避運動の中で見えていなかったハズの敵は自らの位置を晒していた

「煽れば撃ってくると思っていた」

心理作戦

機械がどれほどに戦争を便利まものにしても「血」は必ず流れる

同じように最終的に戦いの善し悪しを決めるのは「人」の叡智であり心理

間宮は自分の額をさすりながら最初に自分たちに魚雷を発した潜水艦の着弾はあったと確信していた

「『いかづち』のアスロック、1番3番とも敵艦βに着弾！」

「よし！！」

後一踏ん張り、この海に後何隻の潜水艦がいるかまでは把握出来なくても、より多くこの海で葬る事ができるのならば

「さあ！！後一息！！」

間宮が息を上げ、ダニーが最後の攻撃に唸りを上げた時
海域全体に響く大きなブザーが鳴った

「こちらドワイト．Ｄ．アイゼンハワー、ボビー．マレス少将である！！領域内での演習を行う各艦艇に通達する！！只今の時間をもって演習は終了する！！」

音無き戦いの海に
大きな音を響かせたのはアメリカの演習司令官だった
ｌｉｎｋ１６に緊急の信号を織り交ぜた交信、最大限の音域での宣言に、向かい合っていた２つの勢力の緊張の糸は断ち切られた

各艦艇からの返事を待とうなどという思いはないように野太い声は怒のこもった英語を早口で、まくし立てるように続けた

「現在この海域に中国海軍商級潜水艦が向かっている事が偵察機からの報告で確認された。全艦艇は直ちに演習を中止し現在本艦隊が航行する位置に合流せよ！」

一方的なアナウンスはそれだけ告げるとｌｉｎｋ１６を介して緊急の情報を演習に参加していた艦艇に流しだしたが、間宮は逆らうように英語で怒鳴った

「目の前にいる敵がその商級かもしれません！！姿の無き相手を信じる事などできません！！」

怒鳴りながらも間宮にはこのマレスの介入の意味がわかっていた
もし
ココでアメリカの潜水艦が少なくとも、事実でなくても3隻も撃沈されるような事になれば「不名誉」は彼マレスのものになってしまうそれだけはどうしても避けたいという名誉欲がこの「後一発」の戦いを止めようとしている事を

「Ｍａｊｏｒ　ｇｅｎｅｒａｌ（少将）（あえて海兵隊読み）この素晴らしい演習の結果をしらぬままに、今まで通りとはいかないでしょう。これが「もし」演習であるのならば・・・なおさらに」

アイゼンハワーＣＯＴＣＣは静まりかえっていた
有利な展開を見ているのは楽しくても、不利なものには苦い顔を惜しみなくさらしてしまう民族性の中、相手の言わんとしている事は十分に理解できた

実験をしたから演習とは言えない・・・それは答えられない事
司令官席に座ったマレスは苛立ちを抑えているが、それがわかる声のトーンのまま

「演習艦艇は浮上・・・これは演習である。お互いの健闘を讃えるべきである」

溜息を落とすほどの声は潜水艦達に浮上を命令し

「ｃａｐｔａｉｎ間宮、我々は良き演習をし良き経験を得られたと心から感謝する。途中に邪魔が入ったのは残念であるがこれにて演習は終了である」

マレスの言葉に呼応するかのように見えざる海底の射手達は浮上を

開始し始めた
通常のレーダーにも姿を写した相手を確認するＣＩＣの応答を受けた間宮は制帽を脱ぐと額の汗を拭いながら

「感謝します。艦艇郡を護りこれより艦隊戦列に帰還いたします」

とお互いの真意を隠したまま儀礼に則った挨拶を交わした

「艦長・・・」

熱気に満ちていた艦橋の中、キャプテンシートから立ち上がった間宮は詰めた隊員達に制帽で自分の顔を仰ぎながら

「勝ったな、良くやってくれた」

間宮の言葉に艦橋には大きな歓声があがり、それがＣＩＣそして全ての兵科に伝播して艦を揺らすほどの歓声と変わった

同じように『いかづち』の艦橋にも歓声が鳴り響いていた

マレスは負けは認める事はできなかったが、結局潜水艦を浮上させた。
お互いのためであるという言葉は便利で相手の名誉を汚さぬ方法ではあったが、結果的に停船し姿を現したのだから海自は『こんごう』達は勝ったともいえたし、間宮がそう言うことで隊員達の労をねぎらえた事をよしとした

騒がしくお互いの方をたたき合う隊員の間、間宮は艦橋のガラスに手をついた
「よく頑張ってくれた。『こんごう』・・・感謝する」

一人感慨深くつぶやいた

「こちらＣＩＣ！！システムダウン！！Ｈ．ｓｙｓｔｅｍの負荷にイージスシステムがもちません。解除を進言します！」

歓声に包まれた中でも仕事はきっちりこなす安藤の進言に間宮は即答でＯＫを返すと

一度だけ艦橋を出る扉の方を見たが

「さあ、システムを切って、海に浮かんだ相手に手でも振ってやろう」

茶化すように笑ったが、自分には言い聞かすように「頼むよ」と胸に手を当てた

「やられたな．．．．．．．．」

中断のブザーと浮上の命令に「敗北」を確信したダニーは気負っていた体を投げ出すようにイスに落ちた

同じようにモニターとディスプレイの前に立ちつくし突然の幕切れに呆然とするメンバー達

「こんな．．．こんなこと．．．．」

メインのモニターの前、自分のデスクに戻る間もない展開を見続けたベニーは、自分たちが負けた事を受け入れられなかった

年若い彼は若さの象徴でもあるあばた顔を悔しさにしかめて

たった一つの見落としで警戒を怠り実験を失敗に導いてしまった自分が許せない
だがそれ以上に石上を許す事が出来なかった

ダニーの友達としてこの艦に乗り、実験を観察した者が裏切り者だった事に
ベニーは振り返ると足音高く石上のデスクに駆け寄った

「裏切り者!!!よくもやってくれたな!!」

若い彼の拳は大きく振り上げられたが、それを止めたのはダニーだった
勢いのある拳に少しよろけながらも、腕を押さえそのままベニーを抱えるように宥めた

「落ち着くんだ。ベニー」

肩を支えながら石上を見て悔しそうに小首をふりながら

「相手を踏み台に使えと教えたのは僕だったな」
冷静な顔はベニーを自分の横に座らせると石上にやっと作戦以外の事として詰めるように聞いた

「これを試したかったんだな・・・石上」と相手のパソコン内に示されるH・ｓｙｓｔｅｍの文字を指差した

裏切り者と呼ばれた石上の回り
やはり自分たちを踏み台にされたという思いを渦巻かせたダニーの仲間達の視線の中

石上は消して怯まぬ態度で話した

「アメリカのように５０隻以上ものイージス艦を日本は揃えられない、それでも敵は直ぐ近くにいる。目と鼻の先に対する敵を抑止する力、無敵の楯に百の目を持たせる事が今の日本に出来る最大の防御。それを現実のものとするためにはこのシステムの実働データが必要だった」

退かぬ目がダニーの目を見つめて答える
日本に必要な技術を実戦する使命をおびた男は消して回りに渦巻く怨嗟に惑わされる事はなく
自分が思う「護りの盾」としての使命を告げた

視線をそらすことなく自分の国を護るための実験を・・・なりふり構わず行った男、石上と祖国の弾丸である男、ダニーは静かに頷いた
機械の音だけが支配する静寂の部屋の中、二人の男は同じ目的を持って戦っていた

「そうか・・・・・・」
「そうだ。・・・・・・ダニー・・・・すま」

それでも石上に罪悪感がなかったわけではない
すまぬという言葉をはき出しそうになった口を押さえるように

「わかってた事だったのにな」
ダニーは顔に手を当て自分の目を覆うと

「君が僕と同じぐらい祖国を思って戦ったている者だという事は・・・わかっていたのにな、見事にしてやられた」

笑い声とも自虐ともとれる言葉
石上は気まずそうに顔を下げてしまいそうになったがダニーはそれを許さなかった
石上の肩を叩き彼を起立させると
自分より前の席で実験を実行し続けた仲間達に向かって

「諸君、神の王国を望みつつ、科学の使徒として日々を戦う同志達よ。傲慢たる僕たちの実験は鉄槌によって砕かれた」
実験に携わった全ての者
ｔｅａｍＤａｎｎｙの兵士達は皆立ち上がり自分たちの主たる男の言葉に沈黙している

「「人」の手によって」

実験は失敗ではなかった
だが結果的に潜水艦を失うという数の記録を出してしまったという事実と向きあう事が大切
何度もの試練をくぐってきた男はそれを告げた

「よろこべ！！僕らに栄えある失敗をくれた石上に感謝しよう。これで僕たちはまた眠る事を惜しむ程に祖国を守るために戦う先兵である事を胸に刻む事が出来た」

石上の肩をもう一度叩く

「拍手を送ろう！！」

そういうと自ら石上に向かって手を叩き拍手をうながすと
手を伸ばした。変わらぬ友情を示す握手の手を

「君が国を思い戦う、そういう男で良かった。僕は明日をまた戦う事ができる」
「ダニー・・・・・ありがとう」

握手を交わす二人に惜しみ無く拍手の雨が注いだのは寸間をおかぬ時だった
メインのディスプレイと格闘を続けた男、アイザック少佐も
一番の古参兵であるジョゼフも
全てが石上とダニーの握手に賞賛とお互いの健闘をたたえる拍手を送っていた

その隣、涙にくれる新兵のベニー
「すいません・・・僕は」
その肩をダニーは抱きしめて

「ベニー・・・・ベニヤミン（末の子）よ。今日は負けた、だがこの日を忘れない・・・そして明日は勝つそういうものだ」
優しい父親代わりともいえるダニーの言葉に背筋を正し

「次は絶対に勝ちます！！」と敬礼した
「そうだ、その心意気だ」

愛情深く励ます言葉はいつものダニーに戻ってベニーの手に自分の手元にあった銃を預けた

「さて、それはともかく「言い訳」の手伝いはしてくれるんだろうね」

悪戯な目がマレス少将への言い訳を共にと懇願する
石上は自分のパソコンをたたむと

「ああっ勿論同行しよう」と立ち上がった

迅速な結果の発表
ダラダラと失敗を隠蔽するよりも早く効果的な謝罪が大切
何度もの荒波を乗り切ってきたダニーの処世術の一つだが石上もそれの大切さはわかっていた
ダニーはアイザックにデータの保存と今後のために必要な資料作りを任せると
石上を伴ってマレスが待つＣＯＴＣＣに向かって歩きだした

「そういえば聞き損なった事が１つあった」
「何？」

部屋を後にした通路で各々資料を抱えた姿で顔を見合わせると

「君はＭｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄの艦長の事「あいつは．．．」アレの続きはなんだったんだい」

立ち止まった石上は自分とは対照的で肉付きの良い体格のダニーの質問に
少しの間をおいてフンと軽く鼻で息を流すと

「あいつは世界一キライな男なんだ」と、やせた顔の眉間に皺を寄せてしかめっ面をみせた

少しの間固まった表情を見せたダニーは小さく何回か頷くと、確認するように石上の顔を見て声を出して笑った

「なるほどなるほど．．．道理でムキになって突っかかってきた訳

だ」
そういいながら
「まったくもって完敗だ。相手の感情まで利用しきるとは・・・参った」
普段は戦場に感情など不必要を唄う石上の心底にある策に完敗と笑うダニーに
「デビッド・・・ダビデがゴリアテにぶつけた礫は「ただの石」だっというが、オレはイスラエル国民の「意志」だったと思っている。君もいつかそれを手にするんだろう」
「意志か」
お互いの祖国のために盾持つ者としての意志
ダニーは深くそうだなと頷くとまた笑って
「デビッド（ダビデ）か、よしてくれまだダニー（犬）でいいよ、軍属でいるうちは」
そういうと二人はまた深くお互いの友情を確かめるように握手した
「『こんごう』！！！」
彼女の口から吹き出した血は粉川の顔に降り注いでいた

口だけではなく
耳も目の端にも血を表す赤い雫は溢れそのまま粉川の体の上に崩れた
同時に粉川耳に入ったのは

「演習終了の合図」

「『こんごう』！！『こんごう』！！しっかりしろ！！」

自分にかぶさるように膝を落とした『こんごう』の目は開いてはいるが虚ろで光っていた八角の輝きは失われていた
粉川はこれによってシステムがダウン、または解除された事に気がついた

「返事してくれ、もう戦わなくてよくなったのか？」

粉川は自分に体を預けたまま崩れて行く『こんごう』を支えながらポケットに入れていた通信機を探した
演習が終わったことでイージスシステムが本当に解除されたのかを確かめたかった
そうしないとこんな今まで映画でしか見たことがないほどの血にまみれた彼女が、自分の腕の中で死んでゆくようにしか感じられなかった

粉川は必死の思いで通信機を握ったがその瞬間に『こんごう』の手が粉川の顔を自分に向かせるように掴んだ

「『こんごう』・・・・大丈夫なのか？」

脱力し体をつぶれるように崩していた姿から考えられない力で樋川

の顔を両の手がつかむ
驚きながらも顔を見合わせる粉川は三笠の言葉を思い出していた
艦魂は艦に与えられたダメージをその身に受ける
前の戦争の時はそれはひどい死に様だった者が多くいたという話し
だけど今日は違う

演習で実弾を使わない戦いの中で与えられたダメージは「電子の戦い」によるもので外傷を通り越した内部破壊の結果は見えなくとも
彼女の顔に「壊された」という傷はぞんぶんに表れていた
乱れた髪に華奢な肩は感電したように揺れ震える

普通なら、普通の人であるならば死んでいても可笑しくない破壊を
受けた中で彼女の細い指先は辿るように粉川の顔をさわると
光のない目が誰かに乗りの移られたように開く

「一緒に死ぬなんて言わないで・・・貴方が好きで、貴方の愛する
国が好きで、私は・・・・私達は産まれてきたのだから」
「『こんごう』？」

滴る血を唇に飾った姿はズイと顔を近づけると粉川を押し倒した
急な出来事と不可解な言葉に呆然としていた粉川は突き倒されるま
まに床に体を転ばせてただ驚きの目で『こんごう』を見つめ返した

熱い息
あがっている鼓動を感じた
紅潮した頬

まるで真綿に触れるように震える指先は粉川の唇に探り出したと確認するように指を置くと

「私達の魂を見つけて」

無くなった目の光りの中
黒く光る涙の目が重なる同時に顔は重力に素直に従ったまま落ち

「『こん』・・・・・」

落ちた顔は、唇は自分を気遣っていた粉川の唇を塞ぎ
熱い息と鉄分の多い生ぬるい舌を絡ませると、きつく抱きついたまま気を失った

粉川の大きな体に預けられた彼女の体
目を閉じ、柔らかな唇と自分の口の中に入った舌に目を点にしていたがそのまま『こんごう』がそのまま気を失ったのではと顔に手で触れて確かめた
何もかもが柔らかな作りの体は力を無くし、触れられる手の中に動く事はなかった

唇をつないでいた顔をゆっくりと起こす
静かで少し不規則な呼吸がただ聞こえる中、閉じられた目の端に浮かぶ涙

腰をおこした粉川の体の中に倒れたままの彼女
口に残る血の味と・・・・女の柔らかい体

「粉川はん!!」

茫然自失の状態でいた粉川の背中に『いかづち』の声がかかった
どのくらい自分が
自分の手の中に倒れた彼女を見つめていたのか?急なかけ声に背筋
に電撃が走ったように

「『いかづち』ちゃん!!あのね!!『こんごう』を部屋に!!」

口に付いた血を作業青服の袖で即座に拭いながら慌てた粉川だった
が『いかづち』は冷静に見ていた
『こんごう』程ではないが、どこか虚ろで寂しげな目線は倒れた相
方を見ながら

「部屋、つれてくわ」

ただそれだけを言うと光の輪をつくり『こんごう』の手を握って消
えていった
消えて行く光のこぼれる破片を見ながら粉川は口の回りを自分の指
でさすってみた
柔らかかった『こんごう』の唇・・・それとは別の鉄の味

「どうなってんのか・・・・」

崩れると、同時に自分に口づけた『こんごう』の予測不能だった行
動と
「みられて・・・ないよね」
背中越しに飛び込んできた『いかづち』の態度に

「慌ててなかったから大丈夫って事かな・・・・見られてない」

『こんごう』は心配だったが艦がこうして動いている以上は回復は見込めるものだろうし
艦魂の怪我は艦魂同士でなんとかしている部分もあるという事は『しまかぜ』からも『りゅうきゅう』の一見で聞き及んでいた
緊迫の時間から放たれた自分をほぐすように粉川は大の字に転がった
「つかれた」と
『いかづち』は『こんごう』の汚れた顔を丁寧にぬらしたタオルで拭うと汚れた服を脱がせて
部屋の真ん中にあるベッドに横たえた
無機質で艦体色と一緒のねずみ色の鉄板張りの部屋はどの護衛艦の部屋より色気も趣味もない部屋
まるで『こんごう』の心模様を表すような場所から足早く立ち去ろうとした『いかづち』は何もない部屋の片隅に張られた写真に気がついた
佐世保に向かう時に「人」、粉川によって初めて写真を撮った。みんなで集まって撮った写真。
「粉川はん・・・・・・・」
そこから今日まできた
『いかづち』は自分の唇に指をそっと触れさせた

「わても感じたんよ・・・・」

そう言うと今一度ベッドに横たわる『こんごう』の姿を見つめた

「わてにも、見えたで・・・・せやけどな・・・・・」

唇を噛むように目をつむった『いかづち』はそれだけ言うと光の輪の中に消えていった

実戦はなかった

だけどまるで実戦という世界を存分に表した演習はココに幕を下ろした

第六十話　護りの盾（後書き）

カセイウラバナダイアル～～対潜訓練編～～

登場人物

石上徳治一等海佐　４０歳

技研の生え抜き的存在で普段はほとんど日本にいない
アメリカ合衆国海軍に半分足を突っ込んだような技術屋さんでＨｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ．ｓｙｓｔｅｍを作った張本人
現在日本はかつての帝国海軍のように新鋭の艦艇を自国の力のみで造りそろえる事に１００％というのは無理な話
それをカバーし絶大な抑止力を持つ事を前提にしてつくった自分のシステムを全護衛艦に搭載。新たなイージス艦の取得に使命感を持っている
間宮とは同期の桜なのだが本人曰く
「世界一キライな男」らしい
おそらく間宮もそう思っているハズｗｗｗ
今回はダニーを足台に自分のシステムの実用性を試した
今後も色々と実験するんでしょうねｗｗｗ

デビッド．タボル大佐（ダニー）　５２歳
階級からすると石上と一緒というのは。彼がユダヤ人であり研究と実験という家業に手を染めているからという部分と、純血アメリカ同盟のねたみからくるものかもしれない

見えない力＝神の領域の分野が彼の兵器開発の分野であり得意とするものであると同時に信条である
現在もＭＩＲＡＣＬＥ（実在するレーザー兵器開発部門）の主席開発者であり技術部の帝王的存在である
後に彼はイスラエルの国防大臣になるｗｗｗ
本当の名前はタボル山のダビデ、イスラエル１２部族の王の名前を冠しキリストが神により変化を表した山を名を名字とする彼はそれに見合う仕事、国防の盾とならんと今日も戦う

ボビー・マレス少将　５６歳

合衆国海軍空母打撃群の演習指揮官
実はこの演習のみに参加というちょっと不自然な人なんですよ
アイゼンハワー事態はココの演習にくる前に「炎の七日間」という猛演習をしている（事実）この時の司令官とは違いある種観光ついでにきたような人で、口であれほど威張ってはいるものの実力は未知数
最後に間宮との会話で結局妥協してしまうあたりにそれがあらわれていると思う
この先出てくるかは不明

ベニヤミン・ミギー　２５歳

大学卒業前からダニーを師事しリンカーン（大学）での交友からそのままｔｅａｍＤａｎｎｙに入った彼
今回は日本語の隠れ符牒を読むことが出来ず実験を失敗に加速させてしまう
とはいえ実験事態が失敗したわけではないので彼が責任を病む事は

ないハズ
でも若さ故のものは色々とあったであろう
名前の由来
ベニヤミンはヤコブの１２人の息子の末の子
後にこの１２人の兄弟によってイスラエル王国１２部族というものが作られる事になる
神聖語訳において「私の右手」と呼ばれた事から名字がミギーｗｗｗ
後に彼はダニーのＭＩＲＡＣＬＥを継ぎＳＷ２計画の主幹となる
その時には世界各国かぞえられるだけで１２以上の語学に堪能となり、日本とも多くの技術提携をする事になる

これ以外にもダニーの部下の名前は聖書からとったものが多い
アイザック少佐はユダヤ読みでイサク
神の使いをもてなし部族の繁栄を約束された男エイブラハムの息子で最近のアニメではイザークなどとも訳されている
アイザック・ニュートンもイサクって事さｗ
ジョゼフはヨセフでイスラエル１２部族のベニヤミンの一つ上の兄にあたる名前
聖書のヨセフは上の兄達にねたまれ一度はエジプトに売られてしまうが後に父達を救う事になるという流れから「私は救い」という意味がある
ＢＡＮＡＮＡ　ＦＩＳＨ（バナナ・フィッシュ）吉田秋生著の登場人物ユーシス（月龍（ユエルン））もこれにあたる

そんなこんなでやっと決着、対潜訓練編楽しんでいただけたのならば幸いです～～
それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第六十一話　私達の魂（前書き）

新章突入～～～
佐世保争乱編ｗｗｗ
少しずつ巻いて頑張っていきま～～～す
後書きは外伝の外伝ではなくアメリカ艦魂の紹介と用語集です！！

第六十一話　私達の魂

１８００を回った東シナの海は先ほどまでの慌ただしい出来事が全て嘘であるかのように凪いでいた
南に近いこの海でも太陽は波間に残り香の光を広げ
跳ね返る煌めきで海に訪れるご馳走の絶景を魅せていた

朝から１７００まで続いていた雨がまるでない、それでいて雨上がりの柔らかな潮の香りの中に日米合同訓練、終日を迎えた艦隊の影が映っている

艦隊の列
『くらま』の後ろに戻った『こんごう』に最初の挨拶をしたのは柴田海将補だった
『くらま』のヘリ飛行甲板上、柴田司令は自ら手に持った旗で手旗信号を送っていた

「キカンノケントウヲシュクス」

艦橋から双眼鏡で手旗を確認した和田は大きく息をつき、やっと艦隊の本に戻れた安堵感と自分たちの活躍を認められた事に涙もろい部分をみせ目頭を押さえ
司令自らの手旗信号による「祝いの言葉」を素直に受けて

「柴田司令．．．我らの活躍を喜んでくださっているようです」

大男の和田の背中がデッキから艦橋に詰めた士官達に笑顔を咲かせたその顔に艦橋に詰め緊迫の演習をやり遂げた隊員達も心を解いた様子で、演習終了でわいた歓声とは別の達成感に満ちた落ち着きのあ

る笑いが勤務に支障のない程度の笑みとなって艦橋を温かく包んだ
全体が祝辞にわくムードの中

艦長間宮は口元では笑いながらも冷徹な目のまま別のを考えていた
「あの狸親父・・・知っててやったな・・・」
爪を噛むように顎をさする中、今回の演習での出来事を頭の中で整理した

おそらく柴田司令は石上徳治一佐の行おうとしている実験を知っていた
だから自分に
「間宮艦長、他に質問はないか？」と尋ねた
間宮にはどういう原理の攻撃が自分たちに行われていたのかを正確に把握する事はできなかったが、その攻撃に対するものとして絶対に必要となったＨ・ｌｉｎｋ　１５・Ｊと、実験を成功させるためには「ヘリ」が必要だった事

現実的にヘリを動かすために柴田海将補という高位階級の男が命令をする必要があった事

「僕の性格を知っていて・・・ふっかけたわけだ」

手に持ったタンブラーの中、少し冷めたブラックは苦みを通り越した鉄さびのような安っぽい味わいを間宮の喉にしみこませる
自分が計りに賭けられていたという滑稽さを心によりしみこませるように

間宮が石上の事を良く思っていない事
それ故に相手の出方をいつも以上に警戒していた事を理解し「ヘリ」

の要請を隠れ符丁によってするであろうという事までも計算していた「者達」

間宮という人間を良く知った者が、この演習における結果までを演出し
動けぬ国防の中から、動く国防を模索している者達が計った実験を実行した

目に見える
艦隊同士の戦いとは違うもの
「国を護る」という野太い意志が水面下の潜水艦達よりも深く熱くマグマのように一本の強い志を通した結果を欲していた

おそらくこの実験は防衛庁の上層部がしっかり一枚噛んでいたという答えに行き着いていた

「羽村局長かな・・・・」

見え隠れする国防族の名前
だが現行それがこの国を護る盾達の今出来る努力
口に残る苦みをかみ殺すように歯がみする間宮に和田からの声がかかった

「艦長、返信しましょうか？」

声に間宮はシートから腰を上げ艦橋のガラス窓の前に立つと敬礼した

「とりあえず・・・・ありがとうございましたってとこだな」

回りの雰囲気とは別の方向へ走る思考
尖った思いのまま間宮は『くらま』のヘリデッキにて手旗を続ける
柴田司令を睨んで敬礼すると自分の胸に刻むように
心にこの日を忘れぬようにと

「ええ、がんばらせて頂きますよ・・・ぼくは負けるのは大嫌いなんで」と笑わぬ目のまま笑ってみせた

「ふ～～お堅い方だったわ」

アイゼンハワーは長い溜息をつきながら演習を終えた全てのアメリカ艦艇の魂達を連れて自艦にあるグループルームに戻ってきていた
少し前、夕闇の降りる時間にアイゼンハワーの飛行甲板の一角で、
海自の艦魂達と演習終了の挨拶を交わしてきたのだが

やっと終わったのだから自分のグループルームで少しの談話などいたしませんか?と『くらま』を誘ったのだが・・・

「佐世保に帰港するまでが任務でありますから」と、あっさり断られていた

しつこく言い寄ると印象の問題もあるし
明日には佐世保に寄港するという手前素直に引き下がったアイゼンハワーだっがやはり未練が口に登る

「エセックスの方が居続けだしアドバンテージ高いんだから・・・良いとこ魅せておきたかったのにぃ～～」と両手を揉みながら揺れる別れてからずっとこの調子だ

「演習終わったのだから・・・ちょっとぐらいいねぇ・・・」

口を尖らせた司令艦であるアイゼンハワーの席となりにはカーティスとカウペンス、わざとらしい木目調テーブルを挟んで向かい側に潜水艦の魂達2人
部屋の照明は空母内にある食堂のブースと変わらないぐらい明るく、横広がりの大きなガラスの向こうにはシルエットになった『くらま』の艦影が見える

「久しぶり各隊群の歴々、ニコラ（コロンバス）中佐は哨戒にでたままなのま？ミラー（シカゴ）？」と不真面目な笑みの元で真面目な台詞を並べた

ミラーと呼ばれた魂はどこか申し訳なさそうに赤毛のショートボブの頭に手を当てながら

「顔は出しづらい状態でしたので・・・よかったのではと・・・」

原子力潜水艦コロンバス（艦魂愛称ニコラ）は実験演習で最初の被弾を受けてしまった潜水艦
本人にも乗務員にも実験からきた結果による責任はないのだけど・・・
実験演習の指揮所の命令より先に魚雷を発射してしまった事がまずかった

「彼女の気短なところが艦の人達にも伝染したのかしら？」

意外と顔の広いアイゼンハワーの言葉には刺すではなく茶目っ気がいっぱいでコロンバスが忍耐力の必要な実験には不向きな艦魂だった事を「気の毒ね」と付け加えた

結局自分が放った一発は命令違反という原点になり
実験とは関係ないところで罰直に当たっていた。実験は成功も失敗もなかったのだから
そんな事はしなくても良いようにも思えるが、誰も責任をとらないという解決は軍的にはありえない事で、結局落としどころ的な存在になってしまい
現在哨戒任務という罰直のようなものを受けていた

もちろん海自側でも一隻の潜水艦を出しているのだから当たり前の対応なのだけど、実験から向こうの時間を考えるとさすがに気の毒な延長任務に入り
この夕暮れ時になっても実験海域を目指し進んできていた件の「商級潜水艦」に対する警戒任務を続けていた

「演習なんだから、仕方ないのにねぇ」

カーティス事クーンがみんなに入れたコーヒーにアイゼンハワーは遠慮無くガムシロップとミルクを投げ込みながら苦笑いしてみせると終わったことに興味はないようにと全体に明るい雰囲気を作って見せたたが、隣に座ったカウペンス事ダニエルは浮かない表情のままで

「海自の・・・『こんごう』は無事だったのでしょうか？」

手元のマグカップの中、揺れて溶けるミルクの螺旋を見る目がその

時の状況を聞くのを恐れているのがわかる
演習終了後の挨拶に『こんごう』は顔を見せなかった。司令艦『くらま』曰く

「情けなくも疲労にて倒れました」といかにもな返答だったが実験の中身を知っていたダニエルにはそんな簡単な事だったとは思えなかった

事実『こんごう』と共に実験演習に出ていたＭｉｓｓ　ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ事『いかづち』は押し黙ったように下むいたままで敬礼以外では自分たちと目を合わせようとはしなかった
張りつめた表情、メガネの彼女の目が・・・一度は涙で濡れた事は見ればわかる事だった

そんな思いをさせた・・・なのに・・・

ダニエル（カウペンス）は唇を噛む
クーン（カーティス）はそんな姉を気にしながらも沈黙を守った

細い指先がカップの耳に手触れる前で震えるまま
目の前に座る艦魂に乞うようにもう一度聞いた

「教えてください、マリア？彼女は無事なんですか・・・」
「無事ですよ、彼女は強い魂ですから」

赤のスータン、軍属でありながらも軍服とは違う衣装
長い黒髪と銀色の瞳の彼女
膝に置いた黒塗りの分厚い本、落ち着きのある声
実験演習の旗艦「マーシアハ」を努めたマリアはダニエルの目を見て答えたが

「怪我はしなかったのですか？」

小さく息を落としたダニエルはそれでも無傷ではなかったと考えていた

「多少は怪我したのでは」

口を挟んだのはシカゴ艦魂のミラーだった

彼女は実験艦艇として「ルーアハ2」というコードネームの元、イージス艦『こんごう』と実験から模擬戦闘までを戦った

赤毛の髪に準ずる同じ色の眉をしかめ、悲しい目のカウペンスを伺うように

「電子の攻撃は・・・体を表向き痛めるという事は少ないのですが、中身は・・・かなり痛めます。特に今回はその攻撃による「破壊の程度」も調べる必要があったので実戦と変わらない程の出力を持って・・・戦いましたから」

ミラーも言いにくかったに違いない

カウペンス事ダニエルがそういう事を死ぬほどに嫌っている事はよく理解していたが「人」が行う実験を止める方法など「虫の知らせ」を使うぐらいしかないし、それを使ってまでの妨害を良しとは合衆国海軍の艦魂は誰も思わない

だから隠し事はしなかった

隠して自分のした事を非難される事から逃げようとはせず

現場で起こった事、相手に起こりえた状況を途切れながらも淡々と語っていく

手を前に重ね少しばかり体を丸めた懺悔の姿勢のまま

その出来事に耳を傾けながらも
ダニエルは目頭を押さえ、ただ項垂れ沈痛な想いに沈んでいった
電子の攻撃はミサイル飛び交う戦いとは違う、似ていても違うもので未知の戦い
ワカラナイ恐怖に向かい戦い傷ついた『こんごう』を思って顔を背けて涙した

「でも!!」

ダニエルの震える肩、支えるカーティス事クーン、その姿にミラーも心を痛めたが

「彼女は強かったです!本当に強かった。私だったらあんな状態で自分の機能をフルに使う戦いに・・・「人」の意志を尊重して戦うなんて出来なかったと思います。信じられない程の強さでした・・・私達は負けましたから」

傷ついても血反吐に苦しんでも、ついに負けなかった『こんごう』
ミラーは浮上した時に戦いの勝者であり護りの盾という誇りに全てを尽くした『こんごう』に挨拶をしたかっと言い、一目でも見ようと思ったが見られなかった事を残念だったと言った

「強い魂にお会いしたかったです」と最後の言葉をくわえた

それでもダニエルの心が晴れる事はなかった
結局同じ魂を苦しめるという実験を傍観したという自責の念に返す言葉は浮かばず、場は静まってしまった

「彼女とは会話をしました」

重い沈黙が空気に伝わるほどの場の中、ダニエルとの対面に腰掛けていたマリアが口を開いた

「海の御座にて魂の道を遡り、共に多くを知り学びました」

「彼女と話をしたのですか？」

マリアの教えに追随する者でもあるダニエルは涙の顔を上げたその苦しみを拭うように頷き柔らかく優しい眼差しを向けるマリア

「少しの時間でしたが、十分な力を感じました。日本の艦魂達が探す絆に誰よりも早くに手を伸ばす事の出来る人だと」

緩やかな口調
けして慌てない姿勢は静かに伏せた目を透明の輝きに浮かべたまま

「今回の演習は彼女にとって「苦難の道」への入り口であったと思います。それは大戦以降帝国海軍との繋がりを探す彼女にとっても必要であった出来事になったハズです」

ダニエルは涙に曇った瞳を手で拭いながら
「必要な「痛み」であったという事ですか？」
敬愛するマリアに質問した

「そうです必要な痛みを得るための儀式でした」

自分に心の支えを求める彼女にマリアは会釈した
どれほどに強力な船として産まれても心は市井にある船達と変わら

ぬ優しい心を持つ魂達
それでも「戦」を仕事としなければならなかった彼女には痛みの伴う演習が苦痛だけではないという事を知る機会だった

マリアはゆっくりとした口調で続けた

「私達は船の魂の中においては不自然な程の絶大な力を持ち、その頂点に立つことで起源の姿を見失いました。あまりにも自然の海に存在するにはかけ離れた私達の形、なのに魂の使命は変わらず、船の大小にかかわらず「人」に寄り添い生きる事です。特に私達は「人」だけでは背負えぬ深き業の闇を共に行かねばなりません・・・どの船よりも苦しみ悲しみの道（ビアドロローザ）を通ると言う責務。今回はその深い部分をかいま見る事ができました」

細く繊細な指が天を差し海をすべる
神秘を語る声には不思議な力が宿っているのかも知れない
集まった魂達は瞬きする間を惜しむほど静かに彼女の目をみつめ次の言葉を待つ

「答えに一番近い者、大日本帝国海軍の意志を継ぐ魂のとの会話はとても有益な時間でした」
ダニエルは詰め寄る
「答えを求めるために・・・苦難を行く者となる？」

「私達は「人」の業と共に苦難を行くもの、そのためには痛みを伴う道を歩く。今回の演習もそのための一つの試練だっと思います」

「そう」

誰もが沈黙し、マリアの言葉に耳を傾け出されたコーヒーを冷まし

て締まっている中で唯一アイゼンハワーはコーヒーを飲み干しクーンにお代わりを請求すると

「それで苦難の道に立った彼女は無事だったの？」
幼い瞳を持つ司令艦は質問した

「艦が生きている内は死にません、むしろ苦難と痛み知ることで己の行く道を見つけられたとするのならば今回の演習は「宝」になったと考えます」

同じく無機質な銀の瞳は平然とした顔で答える

「コーパスクリスティー大佐、それでＪａｃｏｂｓ　ｌａｄｄｅｒ（ヤコブの梯子）は見つかった？」

目の前のマリアにアイゼンハワーはあえて軍属である艦艇名で呼び尋ねた

司令艦という存在の前で「真理」につながる話しを聞いてしまった者達は背筋に冷たい汗を感じ
少し緩んでいたミラーは身を正した
ダニエルは驚きと同時に自分たちが司令艦達のみがしる真理の話しに突っ込み過ぎてしまっていた事に気がつきアイゼンハワーを恐る恐ると見た

原子力潜水艦ザ・シティー・オブ・コーパスクリスティー事Ｍ・マリアは艦魂の真実を探すために「人」が縋り敬愛する宗教を知り「人」と魂のあり方を探す求道者であり

異端者だった

真実を簡単に広める事を許されていない現在
それ故に司令艦達は口を塞ぎ、それ以外の艦魂達の苦しみを諭す別
の方法を使ってきたアメリカ海軍
その中で独自の道を切り開こうとするマリアを煙たがる上官も少な
くはない中で、アイゼンハワーは軽い態度で今回それにて「真実」
に近づけたのかと聞いたのだ

司令艦の問いにゆっくりとした動作、小首をすこし傾げて太陽の残
した平らな光と流れて行く海の景色を見つめながら

「私に佐官名は必要ありません。名前のみでお呼び下さい」

聖者の花嫁を自負するマリアはアイゼンハワーの視線に自分の顔を
向けて

「ほんの少し・・・輝きの御足を見ました。やはり日本の艦魂が見
せる世界が一番答えに近かったと実感しました」
「そう、よかったわね」
クーンが入れ直したコーヒーをまたも乳飲料のように白くして啜る
アイゼンハワー
態度は緩やかそのもので緊張をまとう事はない
正面に座ったマリアは微笑みながら

「お叱りはしないのですか?司令艦アイゼンハワー様」
「アイクでいいわよ。演習も終わったんだし」

相変わらずの緊張の間の中であっさりとした態度
人差し指を立てた軽い合図をすると
ずいぶんと踏み込んでしまった会話に緊張している部下達の顔にき

ょとんとした目で答えた

「叱ってどうなるのよ。いずれ誰かがそれに気がつき答えを知るもの、かつて三笠元帥が独りで答えに至ったよう」

そう言うと
ピンクの唇に指を当てて、悪戯な目で

「誰かが答えを見つけてしまったのならばそれは「自然の成り行き」であり探し求めた者の勝利というものでしょ。叱る理由なんてないわ」

幼い容姿とは別の高い思慮を持つ司令艦アイゼンハワーは
態度では決して不安も怒りも見せない、それが司令職の任につく者の度量
そこまで語っても答えを口することのない笑みの中にある毅然とした態度に、マリアは深く会釈すると相手の配慮に感謝を表した

「そんな事よりぃ・・・どうやって『くらま』様とステキな夜を過ごすことができるかを一緒に考えてちょうだい！！」

2人の会話によって静まってしまった時間が苦痛なのかアイゼンハワーは変わらぬ態度のまま頬をふくらませ終わった演習の事よりもこれからくるしばしの佐世保停泊の事が大事とテーブルに手を軽く叩きつけた
パタパタと

「ニコラとダニエルはこのまま帰っちゃうのよね、残念だけど」

テーブル下から例の雑誌「海の麗人倶楽部」をおろむろに出すとしおりを挟んだページを開いた

「クーンとマリアにミラーは私に協力するのよ!!絶対にエセックスに負けないんだから!!」

意気も高く挙げた姿で『くらま』のページに激しく頬を擦りつける
「うわさの麗人とステキな時を過ごせるなんて・・・もう一生に一度のチャンスなんだから!!」

一生に一度
アイクが次に日本に来られる予定はまったくなかった
これを逃したらリムパックに代表される大演習のメイン空母になってしか日本の艦魂に合う事は出来ないだろうし
その時の日本艦魂の司令艦が『くらま』である保証はどこにもない
事などを考えれば・・・今回が最後のチャンスとも言えた

「だいたい日本の艦魂は短命なんだからぁ・・・これを逃したら二度とお会い出来ないかもしれないのよ!!」

帝国海軍の軍服姿を写した『くらま』の写真に全力で顔面を擦りつけるように頬ずりを繰り返す司令艦
緊迫の間から放たれ過ぎたフリーな姿に、逆に言葉を失ってしまう一同の前
アイゼンハワーは本気の瞳を輝かせて演説する

「この日のために「炎の七日間」をくぐり抜け!!今日の演習を頑張ったんだから!!」

拳に魂と言わんばかりにズイと前に乗り出し
感慨深く目をつぶる

「あの試練をくぐり抜けてきた私への最大のご褒美のために！！みんな強力しなさい！！」

アイゼンハワーはこの演習に参加する前に復帰第一弾として七日間に渡る猛演習を行っていた
何故そうなったかというと
前年まで全身を整形する程のオーバーホールを受けてドックにいたからだ

原子力という無補給のエネルギーを得た船達は、通常動力の艦艇とは違い多くの仕事と長期の任務をより率先して行う任にある中で重宝する艦艇だからこその処置
新しい時代に合わせた兵装をそなえ、理論的には無限のエネルギーによって海の上の城として戦いの場に進むため

アイゼンハワーもそのための改修をした
国防費から２５億ドルと４年にわたる大改修によって延命され、すくなくとも２０２５年までは第一線に立って戦えるように

そういう意味で彼女達は長生きな艦魂でもあった

原子力の長女でもあるエンタープライズなどはすでに４０年を生きる大ベテラン
同じく原子力系の姉妹にあたるアイゼンハワーも前序のごとくで、容姿こそ幼い１０代の姿を持っているが艦歴としては３０の大台に入るベテランであるし

さらに言えば長寿である事はなにも原子力に限った事ではなかった
通常動力艦としても長生きな空母で「ｆａｓｔ　ｎａｖｙ　Ｊａｃｋ」を掲げるキティホークも４０年を越す大年増がいるアメリカ艦魂

日本の艦魂達が短命であると思ってしまうアメリカ、事空母の艦魂が多いのもうなずける事

事実、日本の艦魂で３０年を生きた者は現代では少ない
理由は色々ある第二の人生としての「売却」が無いため自国で除籍になったらそこで終わってしまう日本艦魂の流星のような生き方

かつてならば長寿艦として「金剛」に代表される艦や、明治からの老朽艦などむやみに消える事なく国に尽くし長く働いたのに
現代の護衛艦は実に短命

だからこその願い

アイゼンハワーが延命した事で『くらま』と出会うチャンスが広がったか？
そんな事はけしてない
延命したアイゼンハワー・・・生まれだって『くらま』より早いのにさらに生きる
後で生まれたハズの『くらま』の艦生は悲しいかなもう末期に入っているのだ

「次のチャンスなんて・・・あてにできないもの」

そんな思いがさらに拳を強く振り上げさせる

「弛まぬ努力を続け、ステイツ（アメリカ）に尽くす空母の魂である私が、ほんの少しの休息として「愛」に溺れてもだれも文句はないハズよね!!」

あっけにとられる空間
愛に溺れるとまで公言してしまう司令艦はそのままテーブルに足をかけんばかりの勢いだが
炎の大演習事七日間を共にしたミラーが気まずそうな横目で

「炎の七日間って・・・・司令、飛行甲板にビーチパラソルさして水着になってませんでしたか？」
「そうよ新しいシーズンに合わせた新作のビキニだったわ」

言われている事を素直に認めさらにそれを押し通す発言
ビキニを着るほど豊かでない体つきのアイゼンハワーだが、何故そこで自信満々なのかがワカラナイ一同はマリア以外全てが呆然とした目でアイクを見ていた

「試練の演習という話しではなかったのですか？」

炎や試練の名を冠した演習の中で新作水着の話しが出るのはどう理解していいのか悩むもの、生真面目なダニエルはつい突っ込みを入れてしまった

「そうよ!!とても辛い演習だったわ!!」
「じゃあなんで水着だったんですか？」

チグハグな会話からやはり共に炎の七日間を過ごしたミラーはさらに突っ込んでしまった

参加した時からおかしな光景だと心に思っていても、退院したばかりの司令艦だから少しだけ茶目っ気を見せたのかと考えていたのだが・・・・

「司令・・・七日間ずっと水着でしたよね・・・パラソルも水着も毎日新しいのに変わってましたし・・・どこが辛かったんですか？」

演習中まるでリゾート地に来た成金女のようにゴールドあしらったアクセサリーを煌めかせながらビーチパラソルの下、デッキチェアーに寝そべり
挨拶に伺った者に
「サンオイル塗ってちょうだいって言われましたよ・・・自分」となんともな思い出にわなわなするミラー
驚愕の演習の実態にダニエルもクーンも目が点になっている
唯一マリアだけがゆったりとした笑みを浮かべる中、アイゼンハワーは質疑に声高く拳を振るって

「バカ！！何バカな事言ってるのよ！！艦の魂である私が健康で健やかな精神状態である事が艦を問題なく運営するために必要な事なのよ！！私がリラックスしてなかったら沈んじゃうんだから！！」

言い得て妙・・・・・・・

アイゼンハワーの言うことには一理あるようにも聞こえるが・・・だとして七日間もビキニでリラックスっていうのはどうなの？
言いようのない意見、気まずい空気と沈黙

「だいたいね、あんた達は軍属だからってやたら張りつめすぎなのよ！！日常には緩急って必要でしょ！私やエリーを見習って欲しいものだわ！！」

もっとも見習ってはいけないといわれる合衆国海軍最大の変人エリーの名前に一同肩をおとす

・・・・・あの姉にしてこの妹・・・・・

全員がため息と共に
空母打撃郡においてまともな司令艦は少なかった事を再び思い出した

「そうですね健全な魂を維持するには休息は必要ですからね」

あまりの力説に二の句も無くなった空間で、美味しくブラックを頂きながらマリアが答えた
「羽目を外すのもたまには必要としておきましょう」と聖職者を自負する者らしい釘も刺しながら
しかしそんな事はどこ吹く風のアイクはイスの上に立ち上がって

「だから!!今回も私の休息のためにみんな頑張るのよ!!ステキな夜へレッツゴーだわ!!」

アメリカ艦魂達は久しぶりの停泊地にて波乱が待っている事にげんなりしつつ
明日の入港する佐世保での事を考えながら夜の海を走っていた

静まった海の音が
押しては引くというリズムで流れる

鉄板むき出しの部屋の真ん中、大きく構えたベッドの中で揺れる裸
電球を『こんごう』は虚ろな目で見つめていた
数時間前の演習から誰がどうやって自分をココに運んでくれたのか
はわからなかったが
おそらく『いかづち』だったのだろうと考えた

キレイにたたまれた制服
先ほどまで着ていた青服はココにはなかった
ゆっくりとした視線で自分の回りを見回したがココには自分しかい
ないとわかると

意識が有るのか？無いのか？と勘ぐりたくなるほどに力の無い姿の
まま

「私達の魂・・・」

血反吐によって潤いを失った喉から、掠れた声が覚えている言葉を
漠然と・・・自分に復唱してみた

「姉さん・・・姉さん達の魂」

今、ココを走る自分
この海に沈んだ姉達・・・・その想いは・・・たしかにあった
今まで感じられなかった存在である姉達の姿は、今は目に焼き付い
ていた

この海を戦った姉達の姿

ゆるみ鉛のように重くなった体は寝返りをうつことを拒み、ただ天
井を眺める中で『こんごう』は少しの涙を零した

手のひらの中に光る姉の託した想い

「心は・・・三笠様のところに・・・・」

疲労に沈む『こんごう』は自分の走る海の下に眠る姉たちが願った想いを探す事を小さく誓い再び眠りに落ちた

第六十一話　私達の魂（後書き）

カセイウラバナダイアル～～米海軍艦魂紹介と用語～～～

長かったのか短かったのか・・・・
とりあえず対潜訓練編が終わって新章に入りました
今回は佐世保にアイゼンハワー達が来て・・・ちょっとドタバタしてくれるといいなぁ的な話しを描こうと思ってます
コメディ面がめっきり弱いヒボシもここいらで頑張ろうという次第ですがそれ以外にも
政治的な話しとかも少しあります
実験やったらやりっ放しってわけにいきませんからね
それがいったいどういう事につながっているかという部分も少し書きます～～～

さて
艦魂の紹介!!

アメリカ合衆国海軍第八空母打撃群　空母　ドワイト・D・アイゼンハワー
艦魂　アイゼンハワー、愛称アイク
艦魂流見た目年齢は１６歳ぐらい・・・でも実年齢はけっこういってて３０代ｗｗｗ生まれたときから姿が変わらないとして計算するなら・・・４５歳代ｗｗｗ
あんまりやると殺されそうなので年齢の話しはこのあてりで
髪は栗色　目は薄いブルーで身長１５５センチ
グラマーじゃなくて平均的なボディなのにビキニをこよなく愛するｗ

オーバーホールからはるばる日本に演習参加でやってきました！！
発言からするにかなりライトな性格な人
司令艦なのに大演習でビーパラやってサンオイル・・・どうなんだろう
逆説的な真実の形として描いた人で
何も出来ないのに戦う艦の魂、どう生きるかをわざわざ地でやってもらったらああなった
健やかな心でいる事が艦を保たせる大事な事とするならば彼女のやり方もあながち間違ってはいないハズ
尊敬する姉、エリーの小型版とも言われている
前章ではあまり活躍はしなかったが、ここぞという時にはちゃんとした発言をしていたりで中身はしっかりしたところのある人。だけどちょっとネジが緩いｗ
今章ではどんな騒ぎを起こしてくれるのか作者的にも楽しみ！！

原子力潜水艦ロサンゼルス級フライト２　シカゴ、愛称ミラー
髪は赤毛の短髪　目は黒い　身長１６６センチ
実験演習のためにわざわざパールハーバーからやって来た潜水艦
演習時のコードネームは「ルーアハ２」
これ以前のアイゼンハワー復帰第一弾炎の七日間という演習にも参加している
愛称の由来は、シカゴブルズのセンター、ブラッド・ミラーからアメリカ艦魂は比較的スポーツ観戦が好き、というか基本ローズボウルやバスケは外せない程好きだしシカゴという名前を持って生まれた彼女が自分の愛称にそのチームの独りを選ぶのも必然ともいえるミラー選手の寡黙なところが気に入って自分の愛称にした
佐世保にも寄港する彼女・・・どんな問題が待ち受けて居ることやら

原子力潜水艦改ロサンゼルス級フライト３　コロンバス、愛称ニコラ

今回の演習で不名誉賞を獲得した損な役回りな人
詳しい情報はあまりないｗｗｗ
ってか今回名前だけの出演になりそうなので
とりあえず金髪碧眼というおきまりのコースなんだけど
名前の由来はけっこうまじめ
コロンバスはオハイオ州の町の名前なんだけど。オハイオ州の有名人といえば
ジャック・ニクラス！！タイガー・ウッズ以前ゴルフ界の帝王として君臨した男から略称名みたいな形で自分の愛称にした
現在わかっている性格は短気だという事ぐらいだけど、帝王もたいがい短気だったからよく似ているともいえます

原子力潜水艦ロサンゼルス級フライト２　ザ・シティ・オブ・コーパスクリスティ、愛称マグダレナ・マリア
髪は黒長い髪（パープルブルネット）を海の中で揺らす姿がよく見られるらしい　目はシルバー　身長１６５センチ
今回の実験演習の旗艦（マーシアハ）を勤めた彼女は『こんごう』にとって重大な出会いとなった人物
現在真実に箝口令を敷いている合衆国海軍の中、別の方法で真理にアプローチをしている人で
その考えの中に宗教があり、船の魂達の心を支える者として活動している
彼女の教えには多くの信奉者がいてカウペンスのダニエルなどもそうだし実はキティホークも師事している
名前からわかるように彼女の探求の元になっているのはキリスト教だけど人間が考えるような教義とはちょっと違う
それはそのうちわかるかもｗｗｗ
名前の由来
彼女の艦艇名コーパスクリスティとはキリストの遺骸という意味がある。元はアラム語だったか？ヘレニスト（ギリシャ語を話すユダ

ヤの民）だったがが言った言葉に由来するらしいけど今は語源はわからない（ひまみて探しますw）

とにかくそういう名前からして何かシンパシーみたいなものがあったのかも知れない

故に彼女は聖者の花嫁たる女の名前マグダレナ・マリアを名乗る

一般的にはマグダラのマリアといわれる人の名前で近年ではダビンチコードなどでキリストの妻などと拡大解釈されたりもした人だけど本伝の聖書にある彼女の活躍は極端に貶められていてそういう解釈が生まれたのもうなずける。

外典や神聖語訳の中でもそれ程目立った活躍はしてないけれどキリストが杭にかけられたとき恐れずその最後を見守ったのは、彼女とキリストの母マリアだけだった事からも強い信仰心の女だった事がわかる。後の有名な１２使徒は何をやってたかというと・・・・恐れて逃げていたんですよ。

なぜならローマによる公開処刑はユダヤ人たちのねたみによって発生したもので実際キリストを死に追いやったのは同族のユダヤ人でそれを執行したローマ人からなる刑場に駆けつけるのは並大抵の胆力でできる事ではない、彼女はそれを実行した勇気ある女だ

後に使徒と威張るようになったもの達から「不貞の女」にまでさげすまれたが、勇気のない男達のねたみがそうしたのではと考えられるとにかく彼女はキリスト＝「人」という関係から教義を解釈し真理に近づこうとしている世にも珍しい艦魂である

対潜訓練編の用語

たいていのものはキリスト教の関係と聖書から来ている

５２話、ダニーが持つ拳銃の名前はＪｅｒｉｃｈｏでこれは聖書の中、ヨシュア記から引用

Ｊｅｒｉｃｈｏ（エリコ）は出エジプト記から放ろうを続けたイスラエル人が

神から約束された地に行くに従い、行く手を立ちはだかった城壁の名前
現在はパレスチナにあるが史跡はない
神の命に従い城壁の周りを7度行軍しラッパを吹いたとたんに城壁は崩壊したと聖書に記録されている
ダニーのいう見えない力はラッパという言い方にもなっていたという事
ちなみに拳銃のＪｅｒｉｃｈｏ９４１はイスラエル製で９ミリのパラベラム弾と４１ＡＥ弾を撃てるというところから９４１という人によってはベビーイーグルなどと呼ぶ人もいるけど・・・それは明らかにアメリカ読みってやつですねｗ
攻殻機動隊でバート君が使っていたりするけっこう威力のある銃なのでダニーが射撃訓練をしていないと推測するならばまともには撃てないと考えられる。

同じく５２話から「ハ・シェム」「マーシアハ」「ルーアハ」四文字語（テトラグラマトン）エィメン
とりあえず「ハ・シェム」「マーシアハ」「ルーアハ」からこれらは三位一体における「父」と「子」と「聖霊」を意味する
「父」とは文字通り天にまします父なる神の事、これが今回は衛星兵器のコードネームとなった
「子」とはキリストの事である。よくキリスト教の神はイエス・キリストだと思っている人がいるがそれは間違い、キリストは父なる神への道を示した人であり、曰く神の長子にあたる者であるから彼を祀っている宗教ではない今回「マーシアハ」としてコーパスクリスティのマリアが演じた
「聖霊」とはかなり誤解された解釈が世に流れているが正解は「神の活動の力」を意味するだから決して天使とかじゃない。ちなみに新訳の聖書の中では天使の名はせいぜい２つぐらいしか出てこないし、階級も３つしかないだからすげーたくさんの名前があって階級

も数があるって書いた根拠のない本を見たときにびっくりした「誰これ」ってｗｗｗ
古イスラエルでは「油注がれた者」が王になった、この油が神の聖霊を比喩していたともいわれる
とにかく活動の原動力という意味合い
今回の演習ではコロンバスのニコラとシカゴのミラーがそれぞれ「ルーアハ1．2」を演じた
四文字語（テトラグラマトン）とは神の名前
直接の名前ではなく、名前を表す文字の事
モーゼの十戒における１０の戒律を作るとき神の稲妻が石版を掘って字をなしたとされているが
この時光の中に浮かんだ神の名をマリアが引用している
エィメン（アーメン）とは祈りの言葉の語尾につくもので本来は祈り、祈った事の成就を願う記譜で、意味は小説内にあったように「そうなりますように」と言う事
なんの事かわからない人は日本人ならびアメリカ人にも多いｗｗｗ

同じく５２話からＹＨＷＨ
これは神の名前でなんて読むかは実は不明
古代ヘブライ語は母音を文字として表さないためこれは子音のみの表記となっているから
読みようもないｗ
アラム語などに受け継がれた語訳もあるが正確に名前の発声はわからないのが実状
最近の意訳では「ヤハウェ」または有名な「エホバ」などと訳されている

５８話から　ビアドロローザ
キリストが杭にかけられたときまず最初に見せしめとして日本で言う「市中引き回しの刑」になり自分が杭打たれる木を引きずって歩

いた道のことを言う
「悲しみの道」といわれ現在キリストのコスプレをしてこの道をあるくという荒行があったりもする
ちなみにキリストが十字架にかけられたというのはローマカトリック最大の嘘で、本当はただの一本の杭に打たれた
どこで十字架になったかといえば・・・正確に思い出せないのだけどどこぞの神話から拝借したものらしい
どうしてそんな事をしたかというと正式にローマの国教に昇格したキリスト教にシンボルや逸話が必要となったからイコンとして十字架というわかりやすい形を掲げた
そのほか「不滅の太陽祭」などがクリスマスになったりしているのだからそういう原理だったと思えばわかりやすい
さらにキリストの生まれた日はクリスマスではないｗｗｗ
イエスの誕生の時のくだりを読めばそんな事はすぐにわかる
イエスは誕生の時馬小屋で生まれているのだけど、この時牧童たちは外で羊の世話をしていたとされている
イスラエルの冬は外で羊の世話ができるほど優しくない
むしろものすごく寒くて凍死にストレートなコースにあたるｗ
聖書の記述からイエスの誕生はおそらく４月か５月ぐらいと推測される

５９話から　Ｈｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ（ヘカトンケイレス）
Ｈ．ｓｙｓｔｅｍの正式名称
機械的な中身については・・まあ小説にあったとおりの事として意味は
「百目、百手の巨人」でギリシャ語
この名称はけっこうアニメにもでているらしいから説明は不要だと思うｗｗｗ
実は三人兄弟の巨人で「コットス」「ブリアリウース」「ギィォゲス」という一応神の子なんだけど、どいうもこいつもそろいもそろ

って不細工だったせいで父神（たしかウラノスだったか？）に嫌われ幽閉されたりもしたけど神々の戦争の時に徴用され大きな戦功をあげて神の名に列席する事になる
神様はけっこう自分勝手ｗｗｗ

６１話からＪａｃｏｂｓ　ｌａｄｄｅｒ（ヤコブの梯子）
旧約聖書創世記（聖書の一番最初の章）に登場する人物で全ユダヤ人の始祖と言われる男の名
現在もユダヤ人は自分達の大いなる祖先としてヤコブの名を挙げ自分達は彼の子孫であると称する
生まれがけっこう不自然な人で双子の兄を出し抜くためにかかとをつかんで兄を追い落とし「長子の祝福」を頂き、当然兄から恨まれ放浪の旅にでる羽目に・・・
なんか聖書の中は争いごとが多いのです
逃亡中の夢の中に「天国に至る階段」というものを見て
神から「祝福を得る」「国を与えられる」という約束をされる
ちなみにこの聖書のくだりの部分が未だにイスラエルとパレスチナの争いの根源になっている・・・神の地上における王国は争いまみれで遠すぎるよ～～
後に兄と和解しイスラエル１２部族の子達を作り始祖となりイスラエル王国の建国の礎となり
バビロンに滅ぼされるまでの間、全盛を極めた王国を作る始まりの人となった
このことから天に至る階段
ヤコブの梯子は大いなる祝福に至る道とされる
アイゼンハワーが見つかったか？と聞いてのは真理への道をそれになぞらえたからというのと
マリアの教義について知識を持っているという事を示したため

書いてたら朝になってた・・・わぁぁぁぁん

肌に悪いよぉ

そんなこんなでこれからもほにゃららな言葉が出てくるかもしれないのでチョコチョコ楽しんでで頂くために用語補則を書いたりしてみます～～～

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第六十二話　闇の叡智（前書き）

ひさしぶりに本伝です～～～
台場のガンダムを見に行こうか悩んでますw

第六十二話　闇の叡智

紅葉の彩りが風に舞い
魂をまつる参道へ続く街道を彩る
空の青さに深さがなくなり澄み高く伸びる季節、日々得た空気の下で
煙にまみれた男は曇った顔のまま防衛庁のグラスエリアから世界を
見つめていた

「平和の国か・・・」

深まる冬へ町はイベントに加速している
恋人達を近づけ、子供を喜ばせ、家族でいる一時を楽しむクリスマ
スまで後一ヶ月足らず。
煌びやかに買い物奨励の宣伝が町の至る所に張り出され、デコレー
ションはビルにも及ぶという老人が見るには興ざめな景色を羽村局
長は指定席の窓際、シガーダスト．タワーの前でお香を大量に炊い
たかのようにタバコの煙と捨てたガラにまみれたまま修験者のよう
に厳めしい表情できつく目を細めてつぶやいていた

「出来ること・・・」
初老と熟年英知を示す白髪の頭
自衛官としての所作正しき制服姿のままでのオーバースモーカー

「局長、部屋の方に」

響きの薄い声は仮のの背中側
ガラスに写った部下の顔は疲れた目線それでも、のりのきいたスー
ツ姿で煙を手で払いながら
「石上一佐、到着しました」待ち人来たりを告げた

隔離された禁煙ブースから白色も眩しい庁舎の通路に足を進める
振り返った羽村は
佐々木の手元と右手にぶら下げた黒い大きなかばんに目を落としながら、歪めた口から最後のひと味である煙りを吐くと
吸いすぎでカラリとすっぱくなった口を、への字に歪めて

「それが今回のかね？」

冗談だろうという態度に佐々木はメガネ越しにうっすらと笑みを浮かべ
「たいした事ありませんの電話帳程度です」
黒井カバンがふくれあがる程の束・・・・・
「枕の電話帳か」
「なつかしいですね」

返す言葉に宿る棘
直線の張り出しも美しく決まった背広、なのに疲れた表情に自分たちの仕事の重さが表れている佐々木は嫌味の一つを飛ばしながら局長室に向かって歩く羽村につぶやいた

「日本国民を護るための術が電話帳程度の書類と思えば・・・やりがいにもつながりましょう」

東シナでの演習を記録したレポート件所見等諸々・・・・
実験演習の件で全ての結果を自分に提出する事を石上に義務付けたのは羽村だった・・・が
さすがに束となって返ってきたレポートには目が丸くなるを通り越し、夕日の向こう遠くに見えるであろう富士の山を見つけようとする顔をしかめ細い目になってしまっていた

「明日じゃいかんかね」

夕刻といえば緊急事態でも起こらない限り職員も帰る時間
腕時計に目を走らせこった首を鳴らした羽村の後ろ、声に笑いはないのに笑った顔の佐々木は資料が束でつまったかばんを羽村の背中にあてて押した

「本人も来てますから」

逃亡の予知がない返事を返すと同時に羽村の手元に抜粋した資料の要項を手渡した

「目を通しておいてください」

元を正せば羽村が要求した事に、石上が律儀に仕事をし持ち帰った資料
提出された全てに目を通し「勉強」をした佐々木は最後まで付き合う形になっていた。
羽村が石上の要求を聞き入れたときからこの結果はわかっていたのだから覚悟の居残りをしている形だ
ならば
ココで大元を帰すわけにも行かないのは当然
突かれるように後ろを歩く佐々木の圧力の前、言葉は無力と悟った
羽村は溜息とともに

「年寄りに優しくない職場だな」

白髪の頭に手を当てながら静かに部屋に戻った

簡素に纏められた部屋
中央に大きめのデスクとパソコン、後ろの書棚には軍事関係防衛庁関係の本ばかりではなく趣味の将棋の本と、囲碁とチェスその他世界地図各種
どこかまとまりのない羽村の部屋、右手にパイポを持ったまま腰掛けた羽村の前

石上は小脇に抱えたカバンのまま敬礼をした

「座ってくれ」

共に入室した佐々木にもと、手でイスに座ることを促す
局長の部屋には小さく簡素なパイプイスが用意されていた
西日が入る窓ガラス
佐々木は石上の顔を見るなり溜息をつき
羽村は少しばかり目をみひらいたまま聞いた

「結果には満足できたか？」

「Ｈ．ｓｙｓｔｅｍ　１５　Ｊ」

防衛庁戦略技術部官石上徳治がアメリカにて考えついたイージスシステムの補助機能とそれをサポートするリンクシステムの実験。現在軍事衛星さえ独自の物として持ち合わせていない日本国海上自衛隊。
それをカバーするための数もまたない
アメリカのように多数のイージス艦の配備も望めない中で石上は自

分が作り上げた理論を実験したかったのだ
四方を海に囲まれ、アメリカ以上に隣接する「仮想敵対国家」を持つ日本
これを最低限の艦隊でどう防衛するか・・・強いて言えばカバーしきれない脅威の部分をどこまで減らすことができるか

それらの弱点を補い強化するためにつくられたのが「Ｈｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ．ｓｙｓｔｅｍ」

イージスシステムの持つ防空領域はかなり大きいが
一度の攻撃に対して「イージス艦のみ」で即時にさらに正確な迎撃ができる数は限られている
その問題を解決するために、他の護衛艦の目までをイージス艦にて統括し本艦そのものをシステムの核とする状態になる事で最低数での艦隊行動しかとれないであろう海自艦艇をバラバラに迎撃行動や考えさせるのではなく一括統括し迎撃専属艦に切り替え、多数の迎撃を同時に行う事が出来るようにするシステム

それ故
核となったイージス艦のシステムにかかる負荷はどのくらいのものかを知る必要があった
アメリカの実験室でくみ上げたシステムではあったが米軍では当然のごとく補助的なもの程度にしか扱われず
実戦のデータをとる事ができずにいた

羽村の問いに石上は痩せた頬を微かに舌打ちするかのように動かして

「満足できるものではありませんでした」

不満を眉に走らせ顔を歪めた

続けて尖った目は睨みながら

「システムを実装している艦艇は多いハズなのに日本で一度も実験演習をしなかったという事がよくわかったのは残念な事でした」

実はこういった機械が突然配備されるわけではない

海自がイージス艦の取得を本格化した頃には石上の頭の中にシステムの概要はあり、『こんごう』が就航されて1年と待たずに実装をはじめ、それに準ずるように「ｌｉｎｋ１５Ｊ」という形で各護衛艦にも配備され続けていた

「各護衛艦群において配備が遅れているのはＤＤ『はつゆき』型の一部と、地方隊の一部、これらにも「ｌｉｎｋ１５Ｊ」の実装の準備はあるハズ・・・そう聞いていましたが、何故実戦演習はしなかったのですか？」

自分のシステムの利便性を信じる石上は最大の不満を一番にぶつけた

「機会に恵まれなかっただけだ」

デスクの前で手を組んだ羽村は悪びれる事なく答えた

「そんな悠長な事を言っていられるのですか？」

「悠長かどうかはわからんが、駆け足をしても時間を巻き戻すことも追い抜く事もできん、その時その場に似合った実験を施工し結果を出すことが大切なだけだ」

不満足であるという石上の回答に、羽村もまた容赦のない返事を返した

実戦に登用してみて満足ゆく結果が得られなかったのならば実装の意味を失う。

すでにシステムの大半を「実装備品」として予算に計上している上でイージス艦一隻、取得価格は１６００億、ともすれば莫大な費用を掛けた頭脳であるイージスシステムに甚大な被害を出し、修繕費用を出すことに成りかねない実験を許可した羽村が求めているのは・・・

制作者である石上の個人的感想程度のものではないからだ

それに見合う結果を述べろと初老の知将は目を尖らせて沈黙する

石上も羽村がただ者でない事は昔から良く知っていたし、それ故に実験演習の許可を願った時のも不満も漏らさず許可をくれた意味もわかる。
目の前に座る闇の英知は、無駄な問答をして自分に有利な意見だけを素通りさせてくれるような凡将ではない

「今回の実験では良い結果5、悪い結果5と自分は考えておのます」

駆け引きを止めた石上は背筋を改めると資料のファイルを差し出して
「初めての実戦にて全てが成功といえない事は理解して頂きたい」
とわかりきった釘を刺した

「柴田准将補にご協力の要請をしていただけたこと、感謝しております」

演習にて相手も味方も欺き実験する事など、一人でできるものではない
佐世保から出港ギリギリの時間に『くらま』に乗った理由、すべての根回しの結果が乗艦最後の人員となった石上、下準備に当てられた時間を良く物語っていた

「柴田君はそれなりに喜んでいた」

自分に対して初めて、当たり前の事ではあるが実験を行うための手段を示してくれた上官に礼を述べた石上に羽村の厳しい視線は解除された

准将補に実験演習の旨を伝えたのは羽村だったのだから結果的に「勝利した」『こんごう』の帰還は喜ばしい事だったと告げ

「それで何が不足し、何が問題になった?」

目の前の資料、佐々木に手渡された抜粋のものと照らし合わせながら忙しくページをめくりながら要点を真っ直ぐに聞いた

成功した部分、良かった部分などはココで討論する事ではなかった改善を必要とする部分にメスをいれる事、何が処方箋なのかを知ることが重要な任務であると聞く

「システム自体の問題点は私の側で改善できる項目87を処理する術は整っていますが、イージス艦以外に負荷を分担するためには物理的な物が必要となります」

流れるように目を動かす羽村はイージスシステムに掛かった負荷と、それがどの頻度で起きているかの部分を探し出していた

「DDのレーダーの強化か・・・」

「今回の実験ではご存じの通り、無敵の楯を実行するための目であるフェイズド・アレイ・レーダーに直接レーザーによる攻撃をくわえました。これがWCSに及ぼすもの、信頼度など色々な角度での検証ができましたが、秀でたが脳に他艦の目が一極集中してしまうために最終的には過剰な負荷によるシステムダウンという状況になりました」

現在「ミニイージス」と呼称されるシステムの搭載とその目であるレーダーの実験は続けられている「ＦＣＳ－３」との連携が計られているが、戦術情報装置との兼ね合いと、毎年削減される防衛費のために進展は牛の歩みの状態

「では開発を加速させるための良い結果ともいえるな」

１つの要項、項目を読み切った羽村は結果として悪くても、方向性を示すという意味では成功と納得した
重大事項である事がアピールできるのならば悪い結果も使いようという事だ

「現状のままでの改善策としてこの．．．Ｈｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ．ｓｙｓｔｅｍのみでどのぐらいのカバーができる？」
「ソフト面のカバーでは、現状の稼働限界時間１５分を３０分ぐらいに伸ばすことが精一杯です。根本的な解決は護衛艦群自体が次の形にシフトとする事とヘリの強化ですが」

実験演習でのシステムの使用はイレギュラーだったという事
あの演習でもし最初からＨｅｋａｔｏｎｃｈｉｒｅｓ．ｓｙｓｔｅｍを使っていたら『こんごう』は保たなかったという事になる
間宮が賭に出た行動が良い方向に転じたのは「あの時間」だけに限定してシステムを使ったという事以外何者でもなかったのだ

遠くない将来、『ゆき』型の除籍
５０００トン級への布石と現行の『あめ』型『なみ』型へのシステム過重の分担
攻撃ヘリに課せられる多目的な目としてのシステム換装

１０の内、５ある問題は、かなり大きな改革が必要な部分である事に羽村は大きな溜息を落とした

「ところでこのシステム名だが・・・「千手（せんじゅ）」ではなかったのか？」
羽村は最初に石上がこのシステムの概要を持ってきた時の事をよく覚えていた
その時のシステム名称は「千手」と明記してあった
ファイルに書き直された名前は横文字に変わっていた事を聞いた

「アメリカでの研究がメインですし、イージスシステムに追随するものですから向こうの規格に合わせました」
相手の寛恕にも配慮しながら水面下で研究をつづける石上の姿がよくわかる言い分

「イージスに合わせギリシャ神話に準じたというところか・・・・」
一段落ついた会話の間でパイポを口に運び顔をしかめる羽村に
石上は間髪を置くことはなかった

「もっとも問題なのは、現状のイージス艦には不足している部分が浮き彫りになったというところです」

少しばかり緩んだ場を物ともせず石上は態度を硬め、声も正した言葉に羽村は頷いた
「ヘリの搭載か・・・・」
「そうです最初からオスカー・オースチンと同じタイプでの建造を要求していれば今更このような事になることはありませんでした」
顔に苛立ちを登らせた石上に羽村は手でストップと

「それは言っても仕方のない事だ、当時はフライト２タイプが最高

のイージス艦だった」

アーレイバーク型のイージス艦を海自が求めた時、それは最新鋭の形だった
アメリカ以外でこれほどの能力を有するシステム艦を買い付ける事のできる国は日本しかなく、海自はそれを心から望み大枚を払うために、国防に疎い議員やエセ平和主義者と戦い、手に入れた国防の宝だった

だがアメリカはすでに先行くイージス艦の形を準備をしていた
当然石上もアメリカが演習などで残した膨大なデータからそれが何かという事を見抜いていた

ヘリの活用

アメリカでは沿岸作戦に有用であるという位置づけからヘリの搭載を前提に新たなイージス艦の造船が開始される
これによりフライト２Ａという型番からはじまったイージス艦達は２機のヘリを搭載しているが

石上の考えは別のところにあった
現状固定翼の戦闘機を海上輸送する事のできる艦、空母を持ち合わせない海自にとって飛来する敵と海底を這う潜水艦に対処する最初の射手である海の盾に必要な「目」としての活用

目とは文字通り敵を最初に見つける役目もあるが
情報の伝達回線を増やすこと、正確に目標を捕捉する補助として機能する事という重大な役目が必要とされていた

イージス艦の取得

初期の頃、まだ石上の意見を聞き入れる上官はいなかった
それを悔やんだ。凝り固まり数の戦いばかりに走ってしまっている
自衛官官僚的な存在達に理解を促すにはあまりにも無位無冠すぎた
からだ。そういう失望を持ちながらにも研究に没頭、失われなかっ
た志に手を差し伸べたのがダニーであり
羽村だった

「ヘリの搭載が可能なイージス艦の取得を進言します。日本には必
要です」

羽村は机の上に手をほ重ねたまま刺すような眼差しで自分を見る石
上に

「・・・予算の審議、新型護衛艦の受注にイージス艦を組み込むの
は難しいが、それが必要である事を報告するのは約束しよう」
「合わせて！海上にて多くのヘリの運営と修理を可能とする母艦が
必要です！現状の『はるな』型、『しらね』型では海上にての行動
がつづけば、じり貧になる事はわかっているハズです！」

キレの悪い返事に石上は立ち上がって抗議した
いつもは物静かで不気味な程に自分の研究と結果を追求する男が、
心の中に燃やし続けている国防への思い

「座れ・・・」

いきり立ってしまった石上にまたも羽村は手を挙げて落ち着くこと
を促すと
「出来る限り最優先事項として項目に明記する事も約束しよう」
言葉を連ねはするがそれが難しい事であるのはわかっていた
そうでなくても例の事件以来、新型の護衛艦の建造には難色を示す

者が多い、その中で小型なら護衛艦二隻分に匹敵する費用が必要であろう新型イージス艦の取得は難しいという結論は容易考えられたからだ

「ものには順序があるからな」

「国防は国の最優先事項なのでは？」

羽村が同じぐらい国防のために、あの手この手と尽力している事はわかっていても．．．自分に対する数少ない理解者だとわかっていても石上は黙っている事はできなかった

「船が必要なんです、護りの要となる現代の戦艦が、そしてそれをカバーする母艦が」

「わかっている。だが予算には限りがあり、世論と議員には「話し合い」も必要である」

国を護るという事に戸惑いを持っているおかしな国家と国民されど必要な盾であり、目に見える防衛の形を見せなくてはならない

「努力をする事しか約束は出来ない」

予算の審議までに首を突っ込む事は、さすがの羽村にも難しい事多少の根回し程度の約束しかできないが、以前からあったとおりの問題の浮上でだいぶんと国防が遅れを取っている事は、苦い思いに歪んだ眉に現れ
それを石上同様に苦々しく思っている事は理解できた

「では、羽村局長にお任せいたします」

個室での密議では何も決められないし、いきり立っても意味がない

事は元来物静かでじっくりと考えて行動をとる石上にはよくわかっていた
騒ぐことなく礼を尽くし立ち上がると敬礼した

「後の事はレポートにあるとおりです」
「ご苦労だった」
今回の実験で得たこと、問題点と自分の主張言い切った石上は部屋を後にするために、机に広げたファイルを纏めた
明日にはアメリカに戻る予定という過密なスケジュール

「どうしても通せなかった時は、来年も頑張るよ」

その背中に羽村はリラックスを促す声をかけた
本心では言いたくなくてもこういう風に和みを作るのも大人のジョークと言ったところだったが、石上はそういうふうには受け取らなかった

「今年でお願いします」

束の資料とファイルを抱えた眼差しは強く念を押す
「無理強いは出来ないときもあります」
退室の支度を手伝っていた佐々木は羽村でさえ予算では苦境の状態である事を思いフォローを入れたが、石上の強い思いは・・・少しのやるせなさに不器用な男の苦笑いで

「予算が通らなかったら、羽村局長。その時は直談判を書き二重橋で共に腹を切りましょう。それで船が手にはいるのなら安いものでしょう」

それは軍事に携わる者でなくても良く知る物語の台詞

いや覚悟を示した実話の言葉だったのかもしれない

「石上くん、防衛庁はそういう猟奇的な取引はしない」

羽村の返した言葉は注意というものだったが
お互いの顔はどこかわかりあった目に変わっていた

「では正攻法で、よろしくお願いします」
今度は敬礼ではなく深く頭を下げた
羽村は敬礼のまま「最善を尽くそう」と石上を見送った

石上をドア外まで送った後を追うように部屋を出ようとした羽村を
掴まえたのは佐々木だった

「待ってください」
「もう今日の用件は終わったのだろう?」
すでに内ポケットからタバコを半分出した手で顔をしかめ、まるで
子供が母親の手から逃げようとしているかのような姿だが佐々木には
は慣れた事
そのまま局長室に押し返すと、落ち着きのない顔をしている相手に

「今泉からの報告がありました」
「なんで先に言わないんだ!もう十分に遅くなってしまっているだろうに?」

タバコ吸いたさに迷惑千万と半分いかり、半分困惑とデッサンの狂

った目線で佐々木を見上げた羽村に佐々木は机の横に残った資料の山を指差した
「昨日の夜からあれの整理をしてまして・・・報告が入ったのは石上一佐がココに来たときと同じ時間でしたので・・・」
怒りたいのはむしろ自分とメガネの後ろで吊り上がった目が言う
「一本吸ってからではダメかね・・・」
「ダメです、すぐに終わりますから」
羽村のヘビースモーカーぶりは防衛庁でも有名なもの「煙男」の異名は伊達で無い、一本などと目を離してしまえばあっという間に喫煙室を白く曇らせて島に違いない。そういう経験はこの局の次官に就任して以来イヤと言うほど味わっている佐々木は、間を保たせるようなことをしてはいけないと学んでいた
肩を押しそのまま今まで石上の座っていたイスに座らせると、周りを気にするように一度見回し羽村の耳に
「海上保安庁の動きに不穏な点ありとの事です」と小声で告げた
「海保・・・」
座ったままヤニ切れに膝を揺らしていた羽村の動きが止まる、まるで時間を止めてしまったかのように固まると
「例の事件の事だな?」同じぐらい小声で佐々木に確認した
「そうです、あれ以降は割とスローな展開だったのですが、ココにきて何か纏めたものを作っているようで」
「刑事責任・・・検証や立ち会いなど今更無意味だろうに」
例に事件
一ヶ月と少し前、東シナ海にて不審な船が日本国領海内を侵してい

るとこが発見され、おりしも近海で合同演習をしていた海上保安庁ならび海上自衛隊がこれを追跡するという事件が起きていた
これだけでもそれなりに驚きのニュースとなる出来事だったが
事件の結末はさらにショッキングなものとして日本国内に知られた

「不審船、海上保安庁の巡視船に機銃掃射」

死者こそ出なかったが、撃たれた巡視船の機銃跡は目を見張るものだった
船橋を中心に斜め下から撃ち込まれた弾は船の天井をぶち抜き防弾ガラスを一枚も残さず破砕していたからだ
茶の間のテレビの前に映し出された無残な姿は「戦争」から一番遠い場所に鎮座しつづけて６０年を過ごした日本国民に恐怖を覚えさせた
そしてココに海上自衛隊の護衛艦艇が居合わせていたことで報道はエスカレートする

「何故、自衛隊、護衛艦は前に出て巡視船を助けなかったのか？」

無責任な報道の中
責任問題の追及と早期解決のため海自でも調査部の今泉が『こんごう』艦長間宮に圧力をかけていたが、結局の所「責無きなすり合い」に決着はついていなかった

というか、この事件直後に起こった芸能人のスキャンダルのニュースや、世界を震撼させた大規模災害によって不審船事件は関わった人間以外の記憶からは手早く消えさった事に機転を利かせた海自は、実地見聞や質問のたぐいを『しまかぜ』の艦長にやらせる形で間宮を保護していた

故に今回のアメリカとの合同演習に『しまかぜ』は参加できなかったのだ

なぜそんな事をしたか

間宮は来年のミサイル防衛計画、スタンダードミサイルによる迎撃演習を勤める艦『こんごう』の艦長であり、その実績から今更代わりを探す事ができなかったからである
それほど演習の費用まで削減されている海自
だからこそ優秀な艦長を失えないという危機感が間宮を護る形になり、海上保安庁の彼に対する直接の質疑から逃げ続けるという形をとっていた

「間宮に対して何らかの令状でも用意するつもりなのかな？」

羽村は態度を落ち着けながらも、右手の中でパイポを遊ばせ考える
「そういうレベルならば今泉が報告などしてはくれないと思いますが」

そもそも調査部で犯人捜しをしている今泉が「外からの圧力」に危険を感じているからこその報告
書類に残すことが出来ないからこその口づての警戒事項

「調査部では海保の動きに裏付け調査を開始してはいるようですが」

「やれやれ・・・右も左も波高しだな」
耳にパイポを挟んで白髪の頭に手を当てる
「四方を海に囲まれた国ですから、宿命といえば宿命というものですね」
前に立ったままの佐々木の顔にも心の疲れが黒く見え始めている

「相互監視官の実施を徹底せざる得ないな」

新年度までは「仲間を見張る」という役職は、世間的にも政府向けにも必要があったのだが実際機能しているのは、活動しているイージス艦に限られている

現状では佐世保の『こんごう』と、舞鶴の『みょうこう』だけで『きりしま』は機密漏洩の事件前からペルシャ湾の仕事に徒事し、今もまた災害派遣で帰ってきていない事から監視員はいない。『ちょうかい』は佐世保にいた時には監視員が張り付いていたが今は改装のための準備で長崎のドックに入っているので必要がない

要は最低でも2人しかいらない状況なのだが

『こんごう』は今回の実験演習にてイージスシステムにダメージが出ている可能性があるため検査のために長崎のドックに入る事になり粉川も東京にも通常業務に戻る時間が出来ていた

だが

政府からの指導、義務づけをおろそかにしていると見られれば痛くもない腹を探られることも起きかねないし

「何らかの形でマスコミや海保からの接触をされても困ります」

それ程に何かを探している相手に対して気を抜けない

「粉川が今回の事で報告書を送りたいと連絡がありましたが、送るだけにて、本人の登庁については必要なしと返事しておきました」

つまり稼働していないイージス艦『こんごう』に検査期間中でも手を抜かないというゼスチャーを込めて留め置きとしたわけだ

「佐世保との情報交換などにも便利ですから」
羽村にならったのか、佐々木も少しは賢しいところが出来てメガネの奥を見せぬ思考が板に付いてきた

「懸命な判断だな」

羽村にしてみれば石上の報告書で時間を取られたばかりこの上、不意の実験演習に対して粉川が性格的に抗議の報告を纏めていることなど分かり切っていたしそんなものにまたも付き合わされるのは疲れるというもの

「船の上なら土足で上がる者おらんというものだな」
「外の者に対して治外法権ですから」

山積みの問題が残っている今、無駄に心配を増やしたくない羽村達は粉川の報告書は斜め読みすると決めた瞬間だった
相変わらず内も外も波の高い日本にて叡智をふるう防人の苦難はまだ続くのだからと

第六十二話　闇の叡智（後書き）

カセイウラバナダイアル～～いせ誕生～～

つい先日新たな護衛艦『いせ』の進水式がありました
『ひゅうが』の同型である大きなふねです
これから日本の護りとして働いていただく船の誕生を祝します～～
～～

ところで選挙ですが
当然ヒボシは選挙権を持っているので投票に参加します
ですが
民主に票を投じる事はまずありません
耳に聞きよい事を全面に出した政策（流行ってる言葉で言うのならマニフィスト）が気に入らないのです
しかも根本の部分のブレの修正のできていない
三人党首の体制もまたイヤなのですし、小沢さんが平気な顔で居座っている事も許せないのです
政治家が裏金だの私服を肥やすなどはもってのほかですが
例の「戦艦を買うために裏金を使いましょう」と覚悟を示した西郷従道のように自分のためでなく、国のために
なかなか国民に理解は得られなくても、国民の財産を守るために必要としたものに躊躇なく流用の道を選べるぐらいの人ならば、「嘘」も「金」も武器になるし覚悟が違うから許せるのですが・・・
この人達は国民を護る気概もなく
将来的な財産を護る政策もない・・・・
なのに

昨今の国民のみなさんは「自民はダメだったから一度ぐらい民主にやらせたらいい」的判断で選挙に進もうとするダメですそういうのはかつて一度、社会党の村山内閣が発足したとき短期間の在位でしたがとんでもない過ちをいくつもおかし未だに日本を辱めている事がいくつもあります

１つは阪神淡路大地震の時の自衛隊派遣を送らせたこと、あの日村山さんは自身があったのをテレビでみなから「良く燃えてる」と他人事のようにいい、憲法がなにやらと揉めて自衛隊の出動は遅れ災害での被害者をふやした。

どの県だったか忘れたけど国よりも早く自衛隊の出動を要請した県議員がいたぐらいなのに・・・何も手を施さなかった無責任内閣ができあがっただけ

２つ　パラオ建国何年かの記念に日本からの祝辞がくる事を期待していたのに無視した

パラオは歴史の中でいくつもの国に不当に支配され植民地とされた国だが、日本の統治時代がパラオにとって一番良い当地の時代だったと思ってくださる方が多く、今も親日国家だ

１９９０年代までアメリカの実効支配からの脱却、最初の大統領クニオ．ナカムラ氏の名前からもわかるように日系何世もの方が多い・・・

天皇陛下が島に訪れてくれることを心待ちし、それを邪魔しようとした韓国の人達に「陛下の行幸を邪魔するなら韓国製品を全部ボイコットする」とまで宣言してくれた国なのに、村山内閣は無視した

３つ　これでもかと言うほどに中国に媚びをうり、戦争犯罪はすべて日本の責任と土下座した

このころ中国は江沢民の支配体制だったが前期の頃はそれほど反日教育に力を入れていなかった。むしろ、とう（とうの字が機種依存にひっかかりました）小平目指した国交回復論に近かったのに、村山の卑屈な態度で味を占めさせた・・・

これが今に続く反日教育の基礎を作ったと言っても過言じゃない
社会党が一等になった事で共産党はもっととんでもない事をした
南京の戦争記念館のような施設をドンドンつくってくれと資金を送った・・・
民主のＨＰを見ればどれだけ中国よりなのかは明確で
どれだけ耳に良い甘い汁を全面にだし、後に来る財源確保のために
増税が隠されているかがわかる
防衛費を削減・・・
隣の国は核開発で危険な状態を維持しているのに？
本当に国を護る気概のある政治家はいないのか？
今は国民もルーズで平和だと感じているからそうなのかもしれないけど
必ず今、１０代の者達に年取った私達はしっぺ返しをされる事になる
「なんでちゃんと政治に関心をもたなかった」と
その時言いわけが浮かばないのが関の山だ
だからもっと真剣にこの国の将来を考えないとダメです
日本は歴史と伝統を美しくも今にのこす国です
それを護ってゆけるように

護衛艦の誕生を祝すのはこんな時代の私達を護る一つの証明だから
護衛艦も自衛隊の皆さんも戦争がしたいのではないのです
この国を護りたいだけなのですから
隣の国がまだ手放しで話し合えるような時でない今、防衛予算を削減し平和だ安全だなどと勘違いしてはいけませんし、それを推進する政党を支持するのは危険です。

それでも選挙
自分信条にのっとり自分の支持する政党に責任をもって票を投じてください

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～
って

外伝の外伝・・・書けなくてごめんなさいいいいい

第六十三話　人の幸せ（前書き）

暑い日々がオワター
秋の味覚を楽しむぞぉ！！財布と相談しながらｗｗｗ

第六十三話　人の幸せ

「こんごうは右利きだったか？」

秋風がより強くなった季節
車の押す風の中を徒歩で登庁した羽村は、スーツから出た自分の首根っこを両手で押さえたまま、調査部の今泉から出国前の最後の詰問を受けていた石上に、佐々木も気にしていた彼の左頬に残る拳痣を見ながら聞いた

昨日に引き続き青天となった市ヶ谷
もうしばらくすれば冬の空にかわるであろう薄く突き抜けた冷たい空の下で
国防に暑苦しい男達はそれぞれの仕事のために朝から熱を上げている真っ最中に、前を通りかかった羽村は突っ込んだ

「茶化さないでください、羽村局長」

不祥事続きだった海自と
不慮の災害派遣、演習帰りの技術技官の腫れた顔
その他色々と渦巻く事件の調査の多くを任されている男は一糸の乱れのないオールバックの髪を振り乱さんがごとくの勢いで羽村に詰めた

「聞いてみただけだ」

壮年でそれなりに丸みを持つ羽村の顔に、刃物のように尖った顎を近づけた今泉だが羽村は、彼の堅さの象徴である糊のきいたスーツを払うように、まるで意に介さないまま石上に続けた

「海の上じゃ良く艦（ふね）とぶつかるそうだ。だから聞いた」

今泉の詰問に答える気がなく、出国の時間を気にしていた石上は首を右に傾げながら自分に向かってきた鉄拳の事を思い出していた

「これは、オレからの土産だ」

実験演習終了後、ＤＤＧ『こんごう』はイージスシステムにかかった負荷など外傷とは別のシステム点検のために長崎の三菱重工造船所に向かう事になった
演習とはいえ実戦にかなり近い、実弾を使わなかった以外本気で電子戦を演じたわけだから当然すぐさまのチェックが必要となっていたＣＩＣに詰めていた安藤二佐は海上でもデータの編纂をしていたのだが
そこに本職の石上が乗り込んできたことで事件が起こった
誰よりも早く『こんごう』が味わったであろう実戦のデータを欲し、石上がヘリで『こんごう』に到着。ＣＩＣに入ろうとした時に浴びせられた間宮からの洗礼
ＣＩＣに響く大きな音は狭い通路の壁に当たり石上をノックアウトしていた
誰もが顔を真っ青にしてしまう暴力事件の前、倒れた石上を鋭く睨んだ間宮は何事もなかったかのように背中を見せると

「オレを試すな」

それだけ言って姿を消した
となりにいたのはダニーの代わりとしてやってきたベニーだったが、
突然の雷撃に呆然とし
さらにそれさえどうでもいいという態度で口から流れる血を拭いも
せずＣＩＣに入る石上
開かれたドアから流れ出す寒気の中で言った

「日本人は過激な挨拶をするんだね」と目を白黒させて
「熱烈歓迎なのさ」

若いベニーの面白くもないジョークに石上はＣＩＣのコントロール
ボードを開きながら答えた。過酷な演習だった事を物語るシステム
室の冷機のおかげで白い息を吐きながら

「暴力が横行する海軍は良くない」

自分より年上の男達が、年甲斐のない殴り合い（とはいえ石上は一
方的に殴られたのだが）スマートである事を心がけているハズのシ
ーマンシップの中にあって見たこともない暴挙に呆れながら、ベニ
ーはマシンボックスを開いて言い返した

石上は流れ出る血を飲み込みながらベニーのうっすらと痘痕の残る
顔を見ると
「ダニーと殴り合いが出来るようになればわかるかもな」と肩をす
くめた
「そんな事絶対にありえない」
尊敬する上司と殴り合い、わけのわからない物言いだと、青とオレ
ンジの光の部屋でどんなジョークと顔をさらすが、年季の入った石
上の目は輝くと

「まだまだだな」
痩せた横顔が子供の質問をはぐらかすようにほくそ笑む
ベニーは自分に足りないものがあると思われている事に突っかかろうとしたが、石上は手をあげ機械に集中しろと指さし

「痛い思いをしなきゃ、自分の背負ってるものに気が付けなかっただろ？」

ムキになった顔に冷静な指摘
オレンジのパネル照明の下、持論の勝利に輝いた顔は失点を被った彼の心に届く答えを与えた
「ヤー・・・」
思い出しても痛い経験にベニーは俯いた
「ベニー、現場で起こった痛みを自分に刻み込む覚悟がなきゃいつまでたってもダニーには追いつけないぞ」
項垂れた若者の肩を叩く、頑張れと
「OK．わかったよ．・・・」
本当にそれがわかるように成るのはまだ先の話しだが、今は石上の言葉に逆らわず聞く事にした
言い逆らわず諫言を聞く耳を持つことができたという事だけでもベニーは一歩前に進んだことにもなる。そして理解しつつもアメリカ人らしいジュークも忘れない

「だけどその怪我はどう説明するの？実験演習に腹を立てた艦（ふね）に殴られたとでも言うのかい？」

小生意気な顔に鼻で笑った石上
それを思い出していた

「ええっ『こんごう』は右利きでした」

我に返った石上は羽村を真正面に見てきっぱりと答え、いつの間にか羽村の後ろに立っていた佐々木は頭を抑えた

「バカな事を！」

石上の答えに今泉は睨み叫ぶが

「そうか」

まるで聞かない顔は納得したと頷く羽村に石上もまた会わせるように答えた

「かなり機嫌が悪かったようで」

「機嫌が悪かった・・・『こんごう』は機嫌が悪かったのか？」

「はい」

まるで意に介さない二人の会話に今泉は声を荒げ自分と同じく細面の石上の胸ぐらに掴みかからん勢いで怒鳴った

「馬鹿な事を！！「人」か何かと勘違いでもしてるのか？貴官は誰に殴られたかと聞いているんだぞ！！」

本庁のロビーに響く激怒の声

アメリカ帰りの技術技官が実験演習のためにあの手この手と尽くし国防の第一線に立つ艦艇を使った実験だって、危うい方向に転がれば何億以上の損失があったかもしれない。

しかしそれについては「上」の意向というものもあるから黙って見過ごすしかなかったが、いざ報告のために本庁に戻った彼の顔には拳の跡がくっきりと残った腫れた顔・・・

明確に発生している暴力事件である

生真面目で通ってこの仕事をしている今泉にはジョークでもこんな会話が素通りする事などない、書類を片手に石上の頬を指差すと

「艦は・・・こんな明確に拳とわかる跡をのこすんですか？」
いまだ腫れ上がった頬に残る拳痣を自分の頬に手を当てて聞く
「石上一佐、貴官とぶつかったの艦は殴打もできる器用な姿を？」
「そういう波があったと言う事になりますね」

あっさりとした返答に力の抜ける音がする
今泉はがっくりと肩をおとし書類を手から零し、声をつまらせたまま止まってしまった
そんな彼を尻目に羽村は片方の眉を愉快気にあげて

「そうか・・・『こんごう』は右利きか」
今泉に背を向けて笑った
それに合わせるように玄関に向かって歩く石上もまた

「見事な右ストレートでした」

最早追求する気力を失った今泉の肩を佐々木が叩く
身に覚えのある会話に苦笑いの表情を浮かべたまま手から落ちた書類を拾い上げると

「海自じゃよくある事らしい、気にするな」
ささやかな励ましにも答えられない今泉に佐々木は玄関を出て行く
二人の姿を見つめながら、仕方のないことと軽く息をついた

「よく黙してくれたな」
ロビーを出た出入り口の所まで石上を導くように歩いた羽村は背中越しに聞いた

「優秀な艦長を育成するのは大変な時間がかかりますが、理解や解決を深めるための蟠りをうめるのは拳一つ一瞬ですみますから」

振り返った羽村の前に自分の拳を見せた
「そうか」
そっけない回答、その顔に石上は敬礼する
「日本を頼みます」そう言って

靖国通りに消えてゆく石上を、外に出た事を良いことにタバコに火を着けた羽村は煙の中で見送った

演習の期間中開くことなく続いた秋雨が嘘のように晴れ、水面が鏡のように優しい顔をみせる中を護衛艦『こんごう』は朝を待って長崎港に入港を開始していた
女神大橋の下をゆっくりと航行して行く、夜にこの下を通れば光の羽を広げた金冠美しく輝く女神への道を見ることも出来たであろうが今回はそれはお預けで、太陽の笑みの元に港へ進む
雲一つ無い天気の下冷たい冬の風が山からも海からも吹く事を除けば心地の良い快晴の日

今回の入港は隊員達にしてみれば不意の出来事でありながらも嬉しい勝利の後でもあり、さらに有給を消費する休みの期間まで出来た満足のゆく結果をだせた後の上陸となれば、気持ちの良い休暇も楽しめるというもの
だからか艦内はどこか明るい雰囲気でもあったが、艦橋から近づくタグボート達を見る粉川の目には快晴とはほど遠い正反対のよどみ、不愉快が宿っていた

長崎から奈良尾、福江に走る汽船ラインを避け八軒屋岸壁の前についた『こんごう』に押し船達が取り付くと手早い動きで立神の岸壁に近づける
隊員達も引き付けの作業に声をあげる中で、粉川とは別の冷めた視線を間宮が動かしていた
本来ならば三菱重工長崎造船所に７０００トン以上もの船が予定外の入港で簡単に入れるハズもない
なのに
何事もないように立神岸壁は開けられている事に

「準備の良いことだ」

双眼鏡を覗く事で苛立ちの視線を隠した間宮は、岸壁に並ぶ業者と技官達に今回の実験演習が前もって組み込まれていたプログラムだった事を確信していた。操艦を和田に任せたまま舌打ちする

誰にも聞かさない怒りと微妙な理解で

艦橋につめる二人の種類の違う苛立ち、粉川も視線をきつくしたままだったが間宮のように上に対する理解というのはなかった
『こんごう』が朝を待つ間、長崎港の沖合で停泊待ちをしていた頃、やっと本土との通常通信のとれる一にきた事で本庁と連絡をとって

いたのだが、返事は
「報告書のみをおくり、ドックにて修復の期間を過ごすこと」という簡潔な回答だったからだ
どんな事でもよかった今このドックに留め置かれるのが粉川にとって苦痛に変わり始めていたからこそ
本庁のこの回答は納得できなかった

ゆっくりと接岸してゆく『こんごう』の中、「痛み」の記憶はただ大きくなり続けていた

久しぶりの上陸
岸壁に身を預けた『こんごう』に入れ替わりで上官したのは技術技官達
作業青服に着替え、片手に大きなトランクやブラケースに入れられたマシンキットを次々と乗せ、この演習の結果をシステムの状態を精密に計り修復に当たるために乗り込んでいった

防諜のため艦を降ろされた隊員達は有給の消化のため三日ほどの時間が取られていたが、皆帰ってきたら『こんごう』の外回りの改修や厨房の害虫駆除をやるのが決まっている事もてつだって、大いに羽を伸ばすために駆け下りるように艦を後にしていた

同じく粉川もまた技官以外という事で三菱重工の仮宿舎に閉じこめられていたが、納得いかない本庁の判断に大人しくしている事など心から無理で、食事もそこそこにして外に飛び出し夕暮れの艦影をうつす『こんごう』の近くをぶらついていたが
近づこうとはしなかった

粉川はあの演習後『こんごう』とは会っていなかった

血反吐と鼻血、耳からの出血、人間だったら重傷に違いない怪我の中、艦を統べる魂として新たなシステムを自らに鞭のごとく叩きつけた結果は「人」の目にはとても素晴らしい結果をのこしたが、粉川には・・・日を追う事に罪悪感が募るばかりになっていた
自分で立つこともままならない彼女を『いかづち』が部屋に戻して以来・・・どうなってしまったのか・・・

「私はこの海から逃げたりはしない」

吹き上げた血反吐の中、演習が終わるのを待とう呼びかけた粉川に『こんごう』は強い意志をつげて戦い
「人」の持つ使命感に上乗せされた魂の意志が実験とはいえ「敵」とされた相手を打ち落とすという大金星を上げた
勝ったのだ、その時はは粉川もそれを喜んだ。だが後になってわき出してきたものは疑問と苦しみの嵐だった
実験終了とともに倒れた『こんごう』が発した言葉
「私達の魂を見つけて」
そして今までただそこにいる艦の写身（うつしみ）であるだけの彼女の唇が起こした波乱
「人」が交わすそれと変わらない激しい口づけに、『こんごう』の中身が本当に壊れてしまったのではという心配が増す

「でも・・・僕に何ができるんだ」

同時に、戦いに際して彼女達を思いやるなど出来ないという現実
望まぬとも有事が起これば彼女達は戦いの矢面に立つ国の楯

「人」と変わらぬぬくもりと、柔らかな体を重ねる事のできる存在が、艦の魂であり戦いの命であるという前で自分ができる事など・・・何があるのかと

気がついてはいけなかった事に、気がついてしまったという気持ちの中に渦巻くのは三笠の言葉だった

自分にいつか護衛艦の艦魂が見えるようになるかも知れないと教えた人は、見えるようになったら自分と彼女たちの間をとりもってくれとは一度も頼まなかった
不思議な事だった
かつて帝国海軍を代表する戦艦の魂は現代の魂と出会う事をのぞんでいない、当時はそれが彼女の強がりだと思っていた

「見えるようになったら僕が絆を探してあげるよ、かならずみんなに会えるように」

三笠と今を生きる護衛艦達との絆を探すと初めて宣言した時
彼女の反応は冷ややかだった
そんなものを探す必要などないと投げ捨てるように言った顔は寂しげだったのを覚えていた
高校生、修学旅行から帰った粉川に話した「日露戦争」の話し、それが進路を決めるきっかけになり、同時に三笠と魂達の絆を探す事を決定した重大な事だったハズなのに・・・頑張るを連呼する自分に三笠が告げたのは

「いつかお前は後悔するかもしれない」

ただの一度だけの嫌味、酒に酔った戯れ言だと思っていた言葉は、こういう形であらわれてしまうとも思わなかった

「人」とは違う者達、なのに優しき魂の女達
船の魂である者達に粉川の心は言い得ぬ不安に揺さぶられていた

「どうしたらいいんだ」
海に太陽が飲み込まれる時間、解決のない思いに粉川は八軒屋岸壁の前を何度も行き来し頭を抱えていた

「こ・・・が・・・」

長崎造船所『こんごう』から距離を取った八軒屋岸壁を何度目かの往復を続けていた粉川の耳に聞き覚えのある声が、少し遠い位置から叫ぶ声が聞こえる

「粉川さん!!粉川さん!!」

軍事艦艇が入るドックにふさわしくない女の子の声に粉川は思い出したように顔を上げた
ココには『ちょうかい』が入港していたのだ

一ヶ月と少し前、不審船事件の後すぐに護衛艦『ちょうかい』はMD計画に基づいた改修のために長崎三菱重工造船所に入港していた八軒屋の突堤をまっすぐに向かった第三ドックに浮かぶイージス艦、同型の艦影
緑の屋根を持つ大型作業倉庫の向こうのドックに身を任せている護衛艦『ちょうかい』の航海艦橋の上で青服をきた艦魂『ちょうかい』が千切れんばかりに手を振っている

「『ちょうかい』ちゃん・・・」
久しぶりに会う『こんごう』の妹、ホントなら元気よく手を振り返すハズの粉川はただ目の前まで走っていった

「申し訳ないことをしたと思ってるよ」

導かれたのは護衛艦『ちょうかい』のグループルームだった
白木を基調とした作りで『こんごう』の持っているグループルームに比べると視線の低い作りになっている
平テーブルと座卓のようイス、靴を脱いで上がるようにネオ和室のような部屋の中、テーブルを挟んで向かい合った粉川は実験演習という戦いで彼女の姉を傷つけた事に謝っていた

いつもなら明るく話す粉川のしなだれた態度の前に『ちょうかい』は昆布茶をだしながら

「あやまる事じゃないですよ、私達はそういう事が本番になった時、役立つためにいるんですから」
そういいながらお盆にのせた煎餅をだして
「演習で良い結果を出せたのなら、お姉ちゃんだって良かったって思ってますよ」

粉川には意外にも思えた
どちらかと言えば「お姉ちゃん子」の『ちょうかい』の返事は異常に冷めて見えたからだ
むしろ
今回の演習で大切な姉を傷つけられた事に対する怒りを自分に向かってぶつけてくるのでは、それを自分は受けるべきだと考えていた粉川には拍子抜けな反応だった
そんな事より久しぶりに自分のところに「人」が来てくれたことを楽しもうとしている姿が不自然で、何か辛い出来事に面と向かわな

いようににしているようにも見えた

「今会いに行ってもぐっすりだろうし、技術の人達が降りたら会いに行こうと思ってます」

冷めて見える『ちょうかい』に姉に会いには行かないのと試すように聞いたが、やはりどこか落ち着いた返事
罵倒が先にきてくれた方が落ち着けたと思う粉川は、差し出された煎餅に手は伸ばして見るものの口には運べない状態で、部屋の中を見回し褒めるなどという上等な台詞も出てこなかった
だから
心に渦巻いていた思いを口に出した

「君達はさ・・・君たち船の魂は、船が生きるための魂として産まれた事を理不尽だと思った事はないのかな？船の上でしか生きられないうえに、護衛艦なんて戦いのための船の魂になっちゃった事・・・イヤだと思うんだよね、僕は」

ココまでくる間でため込んでいた事
同じ船の魂なのに海保とは亀裂をつくり国民からも愛されない護衛艦
『しらね』の苦痛に満ちた独白
『しまかぜ』の思いを曇らせ続ける自分たちの存在の価値
なのに戦い続けた『こんごう』の痛みの姿

相手がまだ十代子供のような『ちょうかい』である事を忘れる程に、つまっていた痛みが吹き出していた
純真な瞳が見つめる前で、大の男は肩を震わしてテーブルに思いを叩きつけんがばかりの勢いで、吐き出してしまった

「君たちは自由じゃない、なんでこんな隔絶された世界に君たちは

生まれてくるんだ!可哀想じゃないかって・・・思うんだ」

吐露する思いの先には、そこには三笠の姿があった
生きて１００年、変わらぬ少女の姿なのにその身に受けた傷は数知れず
戦いのために建造され日本に尽くし、敗北により数多の姉妹を失い
自らも蹂躙され、それでも生き続ける姿
それが血にまみれながらも戦い続けた『こんごう』の姿と重なってしまった

三笠は
「国を守るために妾は戦った」と言い
『こんごう』は国防の盾として試される実験の戦いに、自らの中身を破壊する戦いの前に日本防衛の威信を賭けて倒れなかった

あの時自分の前で
「想い必ず果たさん」と立ち上がったのは誰のためか?
船に住まう魂は何もできない存在なのに、「人」に気がつかれる事もない存在である事が大半なのに、人の楯として戦い傷つき生き続ける

「どうして君達は自由じゃないんだ・・・・・」

不覚にも粉川の目には涙があった
戦い続けた『こんごう』の姿が三笠の背負ってきた過去を知らしめた
三笠への思いと『こんごう』への想い
自分たちで生を選べず、一生を船に縫いつけられて生きる、時世の流れに身を任せながら
強く握った拳を自分の胸に叩きつける、何度も胸を締め付ける想いに頭を下げて

「粉川さん、「人」はそんなに自由ですか？」

粉川が声を殺してしまったのを見計らったように『ちょうかい』は聞いた
純真な瞳は自分の前で項垂れてしまった人に元気を与えるように

「私達は「人」が考えているより自由ですよ、だっていつも空と海の元にいられるし、「人」が縛られている制約だって私達にはほとんど無い」

そういうと煎餅を全部粉川の前に差し出した

「本当ならご飯も、お水もいらない。だから働らいてご飯代稼がなきゃ飢え死ぬなんて事は絶対にないし、お風呂もダイエットも美容もいらないし、お化粧だっていらない何時までもキレイで若いままでいられる」
そう言いながら自分まだ薄い胸を触って微笑みながら
「もっと大きくなるからね、少しは成長するから」
「でも」
顔上げた粉川の疑問を『ちょうかい』は言い当てた

「変わらずに産まれ、変わらずに死ぬ、一生を船の魂として生きることは不幸と思いますか？」

答えられない疑問
「人」である粉川には一生を同じ場所で生き死ぬのは不幸にも思える

「もっと自分の足で遠くに行きたいとか、地上を歩いて見たいとか・・・思わないかな？」

「粉川さん、それは人の幸せという考え方でしょ」

そう言うと部屋の窓から見える夕暮れの赤い空から紫に切り替わる時に輝く明星を指差した

「人だって自由に歩けるといってもそれについて回る労苦を回収する事はなかなかできないでしょ、空を飛ぶ機械があっても、飛んで遊びに行ってもお金がかかる、歳を取って体を痛めても治せなくなる時もくる」

『ちょうかい』は笑いながら対成る（ついなる）自由と不自由の差を話した

「変わるために産まれ、変わり続けて死ぬ、一生を地上に生きる人は不幸ですか？」

「そんな事は・・・」

「人」は自分が想っている程、自由ではない生き物だと

そして

「人」が感じているほど自分たちが不自由な生き物でない事を

「私達はとりあえずでも平和な時が続けば世界の海を行く事だってできる、世界中を見て回れる、たくさんの仲間達が今もこの海の上を生きていて、たくさんの話しもできる」

「でもずっと船にいなくちゃならないし自分では何もできないだろう。辛いと思わないかい？」

吐き出しきれていない事を心苦しそうに聞く粉川の前、『ちょうかい』は反対側の窓に視線を移した

立神岸壁に係留され明日から本格的な内部改修をされる姉『こんごう』の姿を見ながら

「私気がついたことがあるの。きっとお姉ちゃんも気がついたと思う」

そう言うと粉川の方に振り返って自分の青い目を指で開いて大きく見せた

「私達この目をもった事でいままで護衛艦の仲間達が忘れていた事、自分は何も出来ないと思っていた壁を破ったの」

目の中に輝く人とは違う輝きの形

八角のラインの入った水晶に、『こんごう』の見せた戦いの顔をが重なる

「見えない力は私達の側のもの・・・」

演習時電子戦の最中に言った言葉を無意識にのぼる

勘の良さそうな『ちょうかい』は今回の演習で粉川が何かに気がついたのをよく察していた

深く悩み何度も独り言を口にしては舌打ちする粉川の姿を実は早くから自分の艦橋から見ていたのだ

「そう、私達は「人」の目に見えない力の側の存在、だから私たちはその力に自分の意志を乗せる事ができる。なんでこんな簡単な事に気がつかなかったんだろうって思ってたんだけど・・・・・・」

少しずつ話しを理解しようとする粉川の前で、理解は二の次のように話し続ける『ちょうかい』は幼い容姿の中にある英知の膨大さを十分に見せつけていた

「人」が自分たちの英知で生み出して来た力は

必ずしも自分たちの理解しうる力とは限らない、原理がわかっていてもそれが何者かという形で理解するのが難しいものは山のように溢れている
元々は自然界にある「力」だったのかも知れない
自然を疑似する形として、自分達の手の中に自然界のなせる業を手にいれた「人」、それが作り出した見えぬ力は古代の原理にもどり、魂達の側に通ずる力となったと

そして
海を行くという未踏の世界に踏み出す時に古代の「人」達は祈ったように、自分たちを未来有る事をそれに少しの力を貸す者、そう言う者を味方に付けることのできる器が「船」でわないかと

それを拡大させた形としての者
国を護るという強い意志と祈りを納める器として産まれた魂達の生きる場所は不自由ではないと

粉川はなんとなく自分の中で納得した
無限でなく、有限の世界に自分たちと同じ視線を持ちながらも別の領域で生きている者達がいる事
それらの者達の幸せを自分たち人間の視点で計ることは愚かなことだったと

同時に人は確かに自由じゃない事にも気がついた
自分を見ればわかること、八方ふさがりな国防という仕事に徒事と、息苦しい中で生活する。どこにでも歩いて行くことは出来るけど、どこにも行けない日常と仕事の中にいる自分のどこが彼女達以上に自由なのかと、沈んでいた気持ちがバカバカしくなった

「そうだね、僕たちの考えばかりで君達を見るのは間違ってる．．．

確かに」

艦に生きる彼女達への理解を少しだけ深めながら、それでも気にしていた事を

「でも・・・同じ船に産まれるのならば、もっと小さな普通の船に産まれたかったとか思わない？護衛艦なんて・・・辛いだろ」

「粉川さんは粉川という家に生まれたくなかったって事ですか？」

「なんで？」

煎餅を口にしたまま素早い切り返しの『ちょうかい』に粉川は顔を上げて

「どうして・・・」不意の質問に困惑した

「だってそういう事じゃないですか、誕生先を自分で選ぶ子供なんていないでしょ」

アッケラカンとしたまん丸な目

粉川が自分自身が逆らいようのない時の流れにまで抗おうとしていた事に情けなくなり、そして・・・つまりすぎていた思いの浅はかさに笑ってしまった

「まったくだ、そうだね！！」

同時に思い出した言葉があった

初めて『こんごう』に乗艦し佐世保に向かう中で「名前」の話しがあり、その時に『しまかぜ』が言った事

「最初に貰った名前が一番、赤ちゃんが自分で名前をつけるなんて事はない」

一緒の事

出生を選べる赤子など、とりあえず艦魂にも「人」にもいないのだと

「それに、『しらね』司令の言葉じゃないですけど、国を護る仕事は私だから与えられたんだって思ってますよ」

薄ぺらい胸をドンと叩く可愛い笑顔

「だから粉川さんも一緒に頑張りましょうね」

小さな護衛艦魂の笑いに粉川も曇った顔から解放された笑みを浮かべた

「おばんでやんす」

「おばんでやんす」

やっと晴れた思いに、出されていた煎餅に大口を開けた粉川の後ろ、グループルームの扉を開けて入ってきた珍入者は甲高い大きな声で挨拶をした

「いっらっしゃい」

煎餅を口にいれたまま振り返る粉川の前、自分の手三倍は大きな手袋をした二人組、三菱重工のユニホームを来てはいるが下はハーフパンツ。というどこかひたすらに子供っぽい二人、ココに入ってこられるという事はおそらく艦魂である事はわかるが

突然の出来事に目を丸くしている粉川の前、彼女達船魂は柳のように揺れながら

「夜でごいすぅ～～」と嬉しそうに

仕事を開けて遊びに来たという事らしく、二人に同席するよう『ちょうかい』は部屋に呼び

「ココについて以来の友達なんです。今日もお姉ちゃんを押してくれたんだよね」

「もりもり押しました！！」
浦安のネズミ国王がつける手袋のような手を頭の上にあげてパタパタと遊ばせる
「つまりタグボートの子達なんだね」
こたつのような四角四面のテーブルにそれぞれが座った席で、さすがに魂達との対面には慣れている粉川は察しよく聞いた
長崎造船所には海自のタグボートもいるハズだが、今回は急遽の入港だったため三菱重工の曳舟達が働いてくれていて、彼女達は今日『こんごう』を岸壁に着ける仕事をこなし、さらに一日の仕事をして帰ってきた所だった

「おばんですぅ」

二人とも「人」に物怖じしない態度で軽い自己紹介をしながら手に手に夜のご馳走を持ってきていた
「菊ちゃんと洋(よう)ちゃん、いつも来てくれるの」

そういえばご飯時、粉川はお腹の音を軽く響かせた。悩み事に朝から何も口に入れられなかった事を思い出して、回りを囲むように座った彼女達に申し訳なさそうに
「ずっと食べてなかったから．．．ハハハ」
「ココで食べましょ、彼女達はいつも新鮮な魚を持ってきてくれるんですよ」
食べなくても平気な彼女達は、食べることまでを楽しむ事もできる、粉川はそういう楽しみも彼女達のもつ自由なんだと納得した
曳舟の二人はすでに刺身に下ろしたヒラメを大皿にのせて大喜び
「天然物でごいすぅ～～～」
さらに酒漬けにして片栗粉をまぶし油で揚げた飛魚(あご)を小鉢に分ける
お酒のつまみにはもってこいの上等な料理

びっくりする旬の魚料理に粉川は
「どっからもってくるの？これ？」とつい聞いてしまった
「漁船の子達にわけてもらう～～～」ひたすら陽気な二人
隣に座った『ちょうかい』はお酒を一升瓶でテーブルに出す「じゃがたらお春」
長崎特産と大きく金印された乙女心の焼酎は、九州地方に多い癖のあるお酒の中ではあっさりした飲み口が特徴で女性にも人気の高い焼酎、アルコール度も低くい
窓からのぞく一番星を餌に楽しむには絶好の時間

「いいですよね、秋の夜長ですから」

何事もなく楽しい宴会の準備が進む中、粉川だけが我に返った
「いや、護衛艦の中で酒盛りはヤバイでしょ」
最新鋭のイージス艦の中で焼酎片手に、秋の味覚を楽しむなど普通ではありえない事で、あってもいけない事。さすがそこは大人の粉川、両手を挙げてストップと表示するが
『ちょうかい』は笑うだけたし、曳舟の二人は仕事明けの親父がごとくかなりテンションが上がっているのか、乾杯を今か今かと大揺れになって待っている

「大丈夫ですよ、部屋には私が転送してあげますよ」
「いやでもね、それに『ちょうかい』ちゃんもそうだけど、みんな未成年でしょ」

自分の歓迎会で『こんごう』と酒飲み合戦をしたのはあの場の雰囲気と、相手の『こんごう』が幼くは見えなかった事もあったが・・・さすがに妹『ちょうかい』はまだ幼すぎて酒を酌み交わしていいものかと大人の理性がダメ出ししたが、笑う『ちょうかい』はお猪口に焼酎を注ぎながら

「それは「人」の規則でしょ、私達にはそんなのないから」

産まれた時からすでに若くても十代半ばの容姿を持つ彼女達
同じ地球に住むのに違う世界観にいる彼女達
問題なしと粉川にお猪口を渡した『ちょうかい』は久しぶりに自分のところに来た人を歓迎して音頭をとり乾杯と宴の開催を告げた

粉川は明日自分が海にでる事はない、それで気持ちに区切りをつけてお猪口を取った
せっかくの歓迎にこれ以上水を差すのは良くないと

「粉川さん、私達は可哀想でも不自由でもないからね。そんな事お姉ちゃんに言ったらぶっ飛ばされちゃいますよ」
ほんのりピンクに頬を染めた『ちょうかい』は姉の想い人が失言をしないように釘を刺した
「言わないよ。ぶっ飛ばされちゃうから」
ピッチをあげ酒を楽しむ粉川は彼女達、魂の真実に少し近づき気持ちを新たにした
「三笠、僕は後悔はしないよ．．．絶対に」
そう自分に誓うと明日の為に宴を楽しんだ

第六十三話　人の幸せ（後書き）

外伝の外伝はお休みでごんすぅ～～～
その割りにはタグガールが本伝、外伝とも登場ｗｗｗ

カセイウラバナダイアル～～浅はかな者～～

この頃はすっかり夜が涼しくなって過ごしやすくなって
英気を養っているヒボシです
日本の未来を決める選挙もおわり
色々名事に杞憂しながら日々をあるいておりますが、結局のところ
私は無力で身の程をわきまえぬ部分があったという事を思い知らされた夏でした

出来る事を
出来る業で

おもしろいことで昔から渡しは年上の女友達から
「業の深い女」と言われていてｗｗｗ
まぁ
それがこの歳になるまで何かよくわからなかったという事でしょう

しかし！！！
そんなに欲張りでもないし、努めて倹約している今日この頃それを
言われる筋合いはないのですがｗ
（当方きわめて清貧ｗｗｗ）
ただ
心や気持ちだけはいつも・・・なんというか・・・
人の事もよく、出来るだけ理解をとしてきたのですが

それ故に相手をつぶしてしまう重荷になったり、相手の傲慢を助長したり、反省のよい機会を私がつぶしてしまったり、また私が十分に理解してなかった事に気がつかされたりと、人生失敗談みたいなものは山ほどですわ
だから
身の程をわきまえろという事だったのだろうと
自分の身の丈以上の夢を見て、自分が寛容でよくできた人間だなんて思い違いをしないようにと

そんな夏を過ごしました
大きく政治の世界も動き不安を変え得る者も多い事を学び
草の根運動的な事もやってます
各党、自民、民主、公明に今年にはいりメールを何回かおくってます
自民一党だった頃の政府にも
これから政府として働く民主にも今日送りました
どこかに愚痴を書く日記はやめ、こうした活動をするのもそろそろ
三年ほどになりますが
少しでもこれから先の日本の役に立てたらよいなぁと思っています

困難な時代が近づいているというならばこそ、少しの年寄りでるヒボシに出来る事をと

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～～

第六十四話　嵐の一日（前書き）

自艦発砲率０％戦記は続くｗｗｗ
いつになったら戦争になるんですかというご質問に答えてｗｗｗ
今回も会話ばっかです～～～

第六十四話　嵐の一日

三菱重工長崎造船所から見る女神大橋の夜景は、暗く寝静まった海の上を走る光のライン
水平線に名残の写し身を、波の上に走らせる太陽の輝きとも
月の写す仄かな輝きとも違う。鋭利に輝く光の線は暗闇の空に穴を開け別の次元に導く入り口のようにも見える

ほろ酔い加減で貸し付けられた部屋の窓を開け放し、暑くなった自分を冷やすように風を浴びていた粉川はつぶやいた
「人とは違う領域で、同じ世界を生きる魂達」
光の入り口に見える端を目を細めて見つめる
同じ空間にいても、違う世界層があるのは本当だと思える
人間だけがこの世界にいると考えて終えば艦魂など信じることも出来ない

時間は０時前
大酒飲みの粉川に会わせて酒を煽った『ちょうかい』とタグガールズは２１時には酔いの波間に沈没していた

「お酒は成人（２０歳）になってから．．．そんな規約は彼女たち船の魂にはない」

見た目１６歳の『ちょうかい』をはじめ同じぐらいの歳で曳舟として大仕事に徒事するタグボートの彼女達、彼女達が背負っている仕事の重さを考えれば理解できた事だった
現在の日本国で人として生きる十代の少女が船舶の中心である責任ある仕事に就くことはない
成人してすぐにだってあり得ない

だけど魂達の住む領域では違う。産まれてすぐ船の中心、無くて船が浮かばないという重荷を背負うそこに十代であるとか、女であるという事は関係なく常時の日本国では大人が背負うような責任を持つ。それが誕生の意味でもある

大人と同じ責任職にあるのだから、「人」的感覚で言うのなら人の大人と同じ権利を持つお酒を飲むことだって彼女達にとって数少ない快楽

そこまで思って粉川は首をふった

「数少ないなんて言ったら怒られそうだ・・・」

当たり前の日常と理解すべきと。

社会人になれば仕事の後に一杯の酒を楽しむ

彼女達の行為はそれに似ている産まれたときにすでに十代半ばという姿を持ち、船の魂として生き、学校に行くこともなく知識を持ち、普通の少女達が若き日々を楽しむという行為を得ない代わりに、幼くとも人の大人と変わらぬ楽しみを謳歌する

「自分本位にものを考えるのは「生きた人間」の悪い部分だな」

粉川は頭を小突いて父の言葉を思い出していた

母が死んだときの事で父とケンカした事があった

青年になり、物事のあり方を理解し始めたとき、自分の進路を決めた息子に父親から

「普通の仕事を選んだ方がよくないか?」と尋ねられた

粉川は父の発言が自分の人生を失敗したと考えているのではと思い、母を思っていたら何故に海に出た?聞き逆らった

「父さんが近くにいない事でお母さんは寂しい思いをしてた」とだが父は言った

「思い出を語るように、死んだ人の口を語るのは良くない。自分の思うとおりだったと考えるのは生きた側の人間の悪い癖だよ」

いつでも理性的だった父
生きている父が、その考えに至った理由がまるで艦魂と関わりを持った事があるようにも思えた
そのぐらいに自分が一方的な考えにどっぷりと浸かっていた事を思い知らされた『ちょうかい』との会話だった

窓辺にて秋から冬に変わって行く冷えた海風を浴びていた粉川は背伸びをした
まだしばらくココに居続けする事になるのだから、今日を精一杯はしゃいでしまった事をもったいないと思いながら。造船所の中、橙色の照明がみせる赤い風景を見回していた
『こんごう』は夜の景色の中で物言わぬ牙城として浮かんでいる
灰色の艦体、ステルス構造の角張った威容からは彼女の可憐な容姿は想像出来ないが、あの艦、日本を守る楯たる艦『こんごう』が生きるために必要である少女『こんごう』はあそこにいる
いつも機嫌の悪そうなへの字、だけど笑えば可愛らしい顔
酒は『ちょうかい』と比べれば遙かに強いし、その席での負けん気いっぱいの話し方は三笠によく似ている

「休みになったから修理の間に一度は酒盛りが出来そうだな」

彼女達が飲酒についての規約を持っていないことがわかった今は楽しみ事が1つ増えたとも言えた
ご馳走になるばかりは良くないし、『こんごう』が用意良くお酒を持っているタイプにも思えないと考昼の時間を使って買い出しに行ってこようと笑った
同時に

彼女達の世界観に強く興味を引かれた
普段どういう時間をプライベートとしているのか、通常勤務の中ではつねに乗員３００と大所帯、しかも１００％男という中でどうやって心安らがせているのかを考えた

『こんごう』の部屋は思い出すに、艦体の基礎部分のような剥き出しの鉄板に囲まれた素っ気のない部屋だった
女の子らしい装飾など一つもなく、真ん中に鎮座する大きめのベッドだけが彼女のプライベート領域なのかと

女しかいないとされる艦の魂達は男に見られるという事がないから部屋についても無頓着なのかもしれない
ほどよく酔った頭で粉川は造船所内に目を走らせながら
「でもみんな結構な美少女美人系ってのは・・・もったいない気がするねぇ」と粉川的一番人気の『しまかぜ』を思い浮かべてみた

「あれ？」

酒に酔った『しまかぜ』は、などと少し邪な思いを馳せていた粉川の目に灰色とは違う船の姿が目に入った
『こんごう』を係留する岸壁の向こう、ドックの中、先の方に詰めるように入れられている影、工事用の立て込みとともにある船は海上保安庁のカラーを纏っているのが確認できる
白い船体、艦首付近に甲板を波風から保護するナックルライン・・・
「巡視船だよね」
目を凝らす、酔いで霞んだりしがちな視線をきつく合わせて青い字で記される船艇名を見つけると緩んだ声を漏らした

「『りゅうきゅう』さん・・・・」

一ヶ月前、日本を揺るがせた不審船事件で頭に負傷をおった海上保安庁巡視船『りゅうきゅう』
その魂『りゅうきゅう』長い柔らかなウェーブヘア、少し垂れ目の優しい笑みを持った彼女は船の頭脳である船橋を機銃掃射によってぶち壊されていた
係留先の物陰で良く見えないが、船橋付近には足場と囲いが付けられているようで影が少し大きく見える

「頭を撃たれた」

『しまかぜ』はそう言っていた
事故の中、『りゅうきゅう』は魂として出来ることをした。乗員を生きて返すという大仕事と引き替えに自分が破壊された。それは見るのも辛い姿だったと

その彼女はココの産まれで、あの事件で負った傷を治すために里帰りしていたのだ
蘇る苦い記憶に粉川の酔いは瞬時に覚め、窓に寄りかかった
『こんごう』の苦渋の姿の前にあったもの
演習であそこまで戦ってしまった彼女の思いの先には・・・きっと『りゅうきゅう』への思いもあったに違いない
護りの楯として産まれた自分への重すぎる責務の中、それを実証する事と、そうする事で海を行く仲間達を安心させたいという願いが、少しの奇跡を起こし『こんごう』は演習に打ち勝った

粉川は頭を抱えてその場に座り込んだ
魂達は責任を取っている。佐世保での修練走と言う形で、でも海自と海保の間では「人」の責任という話し合いはまだついていない
そして魂の彼女に頭を下げる「人」もいなかったハズだ

「明日、挨拶に行こう」
粉川は、急に出来た休みの中にも運命を感じた
窓を閉めると、朝早くから活動するために素早く眠りに入った

長崎造船所は他の造船工場に比べると風光明媚な所だ
関東圏にあるＩＨＩｍａｒｉｎｅ　Ｕｎｉｔｅｄなど工場地帯から海を見る事は出来ても、美しい景観を持っている訳もなく不揃いなレゴブロックのような林立するビルや工場の煙突という和まない場所でしかない

だがココは日本の造船所の中では珍しく眺めの良い土地だった
直ぐ近場には森林公園があるし、工場も景観に留意している部分が多く、外回りを囲む赤煉瓦の壁なども見受けられる
裏手に続く山、稲佐岳には展望台を望むスカイウェイなども整備されており、独身者の隊員などが暇つぶしに出かけるにも調度よい場所でもある
自然との協調
そういう珍しい場所でもあった

昨日と変わらぬ秋晴れの空の下、粉川は自衛隊員として恥ずかしくない早起きをし許可証を胸に下げ、工場で借りた車で対岸にある五島町まで買い出しに行き

そこそこの酒の肴と、秋の花の代表であるコスモスとマリーゴールドを仕入れ昼前には戻って来ていた

護衛艦の隊員達と違い有給消費とはいかない粉川にも、退屈な待機任務に変わる事が出来きぼんやりと日を送らねば成らなかったのは苦手だった性格には調度良かったとも言えた

お見舞い

『りゅうきゅう』に花束を贈ろうと工場内を歩くために必要であるヘルメットを着用すると、立神岸壁『こんごう』が係留されている向こうにある第2ドックを目指してゆっくりと歩いていた

『ちょうかい』の話しでは『こんごう』は休息を必要とする長い眠りに入っていると言う事で外に姿を現す事はない様子だったし、今日も防諜のために締め切られた艦内に上がる事は出来ない。かけられている乗艦用の階段の前には警備が立つという物々しい雰囲気少しの日陰を縫って歩く粉川の顔にも刺さる視線をくれる程に厳重な警備の中で姫様は熟睡している

物々しい男達の囲いの中で、そういうものに邪魔されず休んで欲しいと思いながら

海自に続いた不祥事から当たり前といえば当たり前の荊の処置を横目に第2ドックの前の方に詰めるように寄せて入れられている『りゅうきゅう』に近づくが1つ問題があった事に首を右に傾げたまま固まっていた

『りゅうきゅう』の容姿は知っているし、なにより彼女を見ることが出来るのだが。呼び出す方法までわかっているわけじゃない

声をあげて「『りゅうきゅう』さーん!!」と呼ぶという手もある

が・・・それは痛い
事件からの復旧作業で船橋部分とその下、船腹の傷を治すために立てられた櫓と電気配線が鈴なりに並びそこに職人達が上がっているしドックの中は海水が排出されたドライの状態にされ船の下部の損傷なども集中した右舷の処理のため幾重もの足場がたてられ、同じく多くの工員達で占拠されている場で・・・呼べるハズもなく

だがココには多くの船がいるし『りゅうきゅう』の本体である船体の傷も大方の部品が外された事で痛みからは解放されたと考えれば本人が船の上に立っている事も考えられると見回すが魂らしい影はどこにもない

「人」と違う彼女達は見えないことを良いことに不用心に人の前を歩いている事も多いのだが、見た限りそういう人物はいない

見舞いと挨拶をしたい
思い立ったら吉日で行動してみたものの彼女に会うずべは、夜を待って『ちょうかい』に運んで貰うしかないのか？
困った唸りで左に首を傾げるが、それは良作とは思えなかった
それが希望だったら最初から『ちょうかい』に頼みにいけばよかったのだが、海自と海保の仲の悪さを考えるに彼女に負担になる事はしたくないし、自分の意志で『りゅうきゅう』に会いたいとも考えていたから・・・しかし実際は会うにはどうやら魂達に頼るしか方法がない

頭をひねりながら借りた作業用のつなぎに手をつっこんだ粉川はひらめいた
大きな船だけでなく小さな船も多くいるココならではの仲介人がいる事に

ドックの端から向こう、締め切られた所から海風を浴びて走る。女神大橋が見える側に進んで行くと小さな係留場所がある
作業小屋などはいっさいない少し開けた場所がには、旧1・2ドックがありその前にこじんまりと作られた空間に小型の船舶がつながれている

「いた！！」

丸いお尻を並べたタグボート達
造船所が保有するタグボート達は今日の勤務がないようで綱で結ばれたままキレイに並んで、ピアノの鍵盤が順番に上下するように波に揺られていた
昨日一緒に呑んだ子達がいれば『りゅうきゅう』の自室に運んで貰えるのでは粉川は考えたのだ
彼女達はとても人当たりもいいし、「人」に自分たちが見られたからといって驚いている様子もなかったのだから頼みやすい
早足で近づき見回すと案の定。一つの船に集まって揺れている女の子達が目に入った。
造船所職員がきる上着にハーフパンツという得意な出で立ちの彼女たちは、一番波打ちに係留されている一隻のタグボートの後ろ、狭い部分に集まって何かに熱中している。
見えない人達には何も聞こえないだろうが、かなり大きな叫声を上げゲームに興じているようだった
その騒ぐ声にむかって回りに人がいないのを確認した粉川は声をかけた

「おーい！！菊ちゃん！洋ちゃん！！」

粉川の呼びかけにまるでプリーリードックの群れが一斉に顔を向けるかのようにタグガール達は顔を向けた

「人・・・」
「生きてる・・・」
「動いてる・・・」
みな似たような顔、まん丸な眼を向けて、手を振る粉川を珍しそうに見たまま固まっている
粉川も、昨日はすんなり自分と飲み会をした存在が今日は固まっているというのに振る手の動きが鈍ってしまいそうになったが

「粉川だぁぁぁぁ！！！」

固まった集団の中からスプリングのように跳ねて菊が手を振った
同時に洋も立ち上がってワイワイと返事を返すと今度はそれにならうように集まっていたタグガール達がみんなで一斉に手を振る
「人！！人！！」と
やはり陽気な彼女達、手に花札を持っているのはご愛敬の姿
賭け事だって「人」の規則であって普段を真面目に働く彼女達には関係のない事だから

「どうした飲み助～～～」
陸地に近い一番端に係留してあるタグボートに次々と転移ししてくる彼女達の中、昨日一緒に呑んだ菊が粉川につけたあだ名を呼んで話しかけた

「実はね頼みがあって『りゅうきゅう』さんのところに僕を送ってもらえないかと思って」
粉川が手に持っている黒いカバンを見る菊は
「食べ物？」
目が輝く集団『ちょうかい』に聞いた話では彼女達は力仕事が常である事からも食べ物に目がなく
それに重労働に比例した甘い物が大好き

酒飲みの甘い物好きで、漁船の魂達から頂く旬の魚までをも食すというまさに美食家であるから、頼み事は食べ物ですると喜ばれるらしい

「アメでどうかな。カバンの中はお見舞いの品だから」
ポケットに隠してきたアメ玉を取り出すとタグボートの後ろに満載に乗った彼女達は目をさらに丸く輝かせて

「いいの・・・もらって」

粉川の手に乗ったアメに心からの喜びの顔を浮かべる
大型の船を押し引きする重労働を行う彼女達にとって甘いものはお宝級のご馳走
だからみんな首振りぺこちゃんのように揺れて粉川の返事を待っている
「連れて行ってもらえれば、少ないけどお礼にと」
どうやら交渉はうまくいったようだ。みんなコクコクと頷く
「みんなで連れてってやるぅ～～～」

大人数で押しかけるというオマケまでついてしまったが、ココの事は彼女達が良く知っているのだろうからと成り行きに任せた

「なんでそんな大勢でくんだよ」

タグガール達と一緒に転移で『りゅうきゅう』の自室に現れた粉川達に棘のある声をかけたのは『はやと』だった
短く刈り込んだ頭に、シルバーの三連ピアス

渋谷アタリにいるパンクのねーちゃんのような彼女の睨みはかなり怖いが、タグガールズにはあまり通用しない様子
手に手にアメ玉を持ち、女子高生顔負けの黄色い声の集団に呆れたように溜息を落とす
あの事件で負傷した船艇のもう一人である『はやと』もまくたココで修理を受けていたのだ

「いいじゃない、嬉しいはみんな来てくれて」

白い壁に木目調をあしらった部屋
窓のない部屋の中には置き棚がキレイにアレンジしてかけられている。デザインマンションのハッチスペースのようなつくりで区切られた格子の壁の向こう側に、まだ包帯のはずれない『りゅうきゅう』がベットに座っていた

「こんにちわ、粉川と申します。お久しぶりです」

小さなタグガール達の中、ひときは大きな男は自分を見てイスから転げ落ちそうになる『はやと』のとなり、目まで包帯で覆いおおよそ顔から見えるのは口まわりだけという状態の『りゅうきゅう』に見えなくとも礼儀正しく挨拶した

「「人」ぉ！！」

驚きを隠しながらも一人イス事うしろに下がってしまった『はやと』だったが『りゅうきゅう』は静かでおっとりした返事を返した

「ああ、合同演習の時に会議室にいらっしゃった人ですね」

口元だけが優しく微笑む、粉川には辛い笑みにも見える

傷を負った右半身、さらに美しかった顔にまで被弾という怪我をした彼女を目の前にして声が止まってしまいそうになる

「見舞いに来ました」

つい、よそよそしくなってしまった声の下で粉川は抱えていた黒いバックを開けると、水袋をくくり体裁を整えた小さな花束を差し出した

ホントは目までを包帯で覆っている彼女を見た瞬間、秋の色鮮やかな花などを差し出しても嫌味になってしまうのではと考えたが、このまま手ぶらで挨拶だけなど出来ないと思い直し
戸惑いながらの見舞いを前に出した
そんな相手の微妙な変化を感じ取るように

「受け取って、コスモスとマリーゴールドですね」

問い面に菊に用意されたイスに座った粉川を、少し尖った視線で見ていた『はやと』を急かして『りゅうきゅう』は花を素直に受け取とった

「前に『しまかぜ』が持ってきてくれた花を用意してくださったのも粉川さんですね。ありがとうございます」
『はやと』から手渡された花に顔をつけ香りを味わう姿に、やっと一段落ついたと感じた粉川は聞いた

「目は・・・大丈夫なんですか?」

見えなくても彼女達は日本に咲く季節の花を良く知っている。かぐわしさに一息を楽しんだ『りゅうきゅう』は顔を上げると

「目はもう大丈夫なんですけどね、まだモノクロにみえるしチカチカするので保護のために」
そう言うと包帯を上げて少しだけ目を見せた

人間の傷の負い方とも彼女達は違う。目の玉が薄い灰色になったままでさらに上の方、額にかかる部分にはまだ黒ずんだ焼けたままの怪我が見える

一見すると人形の目に入っている光のない飾り玉のような目に粉川は少し引いた
生気のある人間ならばその状態の目は確実に失明を意味する焦点の無い色に

「ごめんなさい、おどろいちゃいますよね」
粉川の顔を光のない目と動かぬ目線はしっかりと捉え、すぐに包帯を下ろして隠した
「いいえ、そんな事・・・」
改まった粉川は両手を膝の上に置くと深く頭を下げた

「あの時は・・・お役に立てなくて、貴女に大けがを負わせてしまって、本当に申し訳」
「謝らないで」

前に出なかった護衛艦、最後は不審船を見逃してしまった海自、責任を感じて修練走をした『こんごう』達
自分の目から消えない不審船に涙した『こんごう』魂達が背負ってきた思いも込めての謝罪に『りゅうきゅう』は手を挙げて制止を求めた

「謝らないでください。私達も同じなんですから」

真面目な声がそういうと、今度は反転したように軽い声を挙げて笑い出した

目の前口元しか見えない彼女の顔だが、謝罪を断りしんみりしそうな場を急転させる笑い声に粉川ととなりに座っていた『はやと』も唖然としてしまった

「きっとそういう事を言いに来たんだと思ってました」

回りが自分の態度に驚いているのを理解した彼女は笑いを止めると

「私がココに入ってすぐに、彼女の妹『ちょうかい』さんも、そうやって謝りに来て」

ベッド脇『りゅうきゅう』のとなりに座った『はやと』が気恥ずかしそうに

「謝るなって、怒鳴ってやった」

「怒鳴るのは駄目よ」

素早く注意の切り返し指を『はやと』の鼻に当てて、そのまま粉川の向けると

「とにかく謝らないで欲しいんですよ。謝る事で間違えて欲しくないのです。私達は船の魂でも護られる側に産まれたわけじゃないんです。私達もまたこの国を護る船として産まれたのだから同じ使命を持ち同じ覚悟を持っているんですよ」

そういうと

「確かに人の目から見たら、海上自衛隊という日本を護るための大看板を背負っている彼女達が前に出なかった事に思うところもあるだろうけど、私達海上保安庁だって国を護る看板を背負ってるのを忘れて欲しくない。同じ使命を持って努めてるのだから、私が傷つ

く事もあれば、彼女達が傷つく事だってある、今回は私が楯になっただけ」

粉川はただ聞くだけに徹した
自分が口を挟めない世界観の差はこういう部分も出ていた事を実感しながら話しを聞き続けた
不審船を見逃したことで心に痛い思いを持ったまま自分の看病に当たってくれた『しまかぜ』や、涙の中で追う事の出なかった不審船をずっと睨み続けた『こんごう』を悪いと彼女は言わなかった
「私達は時として相手を撃ちのめす覚悟を、どの船よりもしなくてはいけないのですから・・・痛い思いも覚悟してますよ」
「そう言って頂けたのならば幸いです」

粉川はつくづく人間は身勝手な生き物だと、自分にむかって卑屈な笑いを浮かべた
自分たちが常に世界の中心にいるという考え方から脱却できない自己中心的な生き物である人間は、つねに自分達と言葉を共有しない人になんらかの思う心を持ち、他の生き物に意志や尊重する思いがあるなど理解もしない。

魂という身でも「人」と変わらぬ姿を持つ彼女達はしっかりと自分たちの世界を持っている
「護る事に戦う覚悟ある『りゅうきゅう』さんにお会い出来たことは僕らとっても励みとなります」
粉川は同じ責任を持つものして素直に感謝を表した

「でも、聞かせてください。だとすれば相手を撃つ事を心苦しいと思った事はないのですか？」
職務についての話しであれば、一つの疑問もあった
船の魂達は、海を行く船をみな仲間と断言している中で、相手を撃

たなくては行けない時がある事に辛くは無いのかという、聞いて良いのか迷う話しだったが、粉川は自分本意の考えを改めるためにも聞いてみた

不意の質問に『りゅうきゅう』の隠された目が伏せられたように頭が下がったが

「たしかに私達は海を行く、どんな形の仲間とも戦いたくない・・・その気持ちを持っているのは事実です。たとえそれが不審船と呼ばれる者であったとしても。でも私達を必要としてくれる国を侵す者を許す事は出来ない、共にいる人の業に寄り添う事を選びます。私達は私達を愛してくれる国のために相手を屠る事もある、その覚悟もやはり持っているという事ですね」

同じ船の魂を撃つことを不憫と言わせない

『りゅうきゅう』の話しに粉川は深く会釈し

「自分も、同じ血を持つ人を時として日本を守るために殺めなくてはならないという覚悟を持っています。お話良くわかりました」

同じ責務を別々の世界で担う者達

粉川は女性に対して、こういう形の親睦の証を求めて良いのか迷ったが、気持ちに素直に従い右手を差し出した

『りゅうきゅう』もお互いの気持ちが通じ合っている事を確認できた事を素直に喜び手を伸ばし握手を交わした

「これから先も私達もまた頑張っていきますからね」と言う

昨日の『ちょうかい』が言った言葉と同じ「一緒に頑張ろうね」と言ったように

「それにしても羨ましいわ、海自には職務を同じくする「人」が多

くの魂達と話しの場をもっているなんて・・・とても羨ましい」

優しい唇がツンと立ち、心に残る思いに馳せていた

別々の世界
でも同じ場所に立つ者として『りゅうきゅう』は浜田船長という理解者を得ていたが、残念な事に浜田船長は自分しか見られない人だった
それがどうしてなのかを考えた時、たくさんの魂が見える人がいたら、人が本来持っている優しい心がバランスを崩す事につながるのではと考え、他の魂達には告げなかった

浜田が、今回の事件で傷ついた自分を抱きしめて泣いた姿を見せた事でより思ったのだ
人は本質的に優しい
だけどこういう殺伐とした任務がまだ必要とされる世界で、船の魂と深く親睦を持つのは難しいのではと、そういう意味では『りゅうきゅう』の深遠な思いは『しらね』のそれと似ていた
小さな船で、主と二人海を行く魂であっても良かったと
見せぬ目の奥であの時の事を思いながら、ああいう場合で魂達を助ける人がいる事が奇跡だと微笑んだ

「粉川さんがいる事で海自の子達も頑張っていこうって、元気を頂いてると思いますよ」

謝罪を忘れさせるほどに自分を励ます『りゅうきゅう』の返事に粉川は照れながら頭をさすると

「でも海保にも理解者がいるじゃないですか」と褒め競れすぎて照れた苦笑いの目で『はやと』を見ると立ち上がって握手を求めた

「驚きました、ココに来るまで海保で艦魂を見られる人がいるなんて思ってなかったんで。挨拶が遅れました粉川と申します」

出された手に驚く『はやと』

『りゅうきゅう』の口元は懸命に笑いを堪え

粉川の後ろに立ち沈黙の『はやと』がどう対応するかを見ている菊たちタグガールズ

粉川は目の前、『りゅうきゅう』の隣に座っていた『はやと』を海保の男性職員と勘違いしていたのだ

「あのな」

まるで男の友情を確かめるかのように手を伸ばす粉川の前『はやと』は自分が男と勘違いされているという自体に小刻みに震えた

確かに女の象徴ともいえる艶のある長髪は持っていないし、眉毛だって棒みたい・・・

だけど顔は女だろうという思いに口が歪む

「私は『はやと』って言うんだよ!!女に見えなくて悪かったな!!」

顔の真ん前に飛び上がるように立ち上がる『はやと』

粉川は自分の顎に届く長身の彼と思っていた人物が実は魂の女である事に今になってやっと気がついた

「あっ・・・えっと・・・いやぁ、そうなんですか職員の方かと思ってました。なんていうかその凛々しい方だったので・・・」

彷徨う言葉の中でちゃっかり『はやと』の胸を確認

どちらかというと『ちょうかい』よりも薄ぺらい感じの胸元と、吊り上がった眉毛に

「まちがえちゃいました・・・」

時既に遅しの弁解

動いた目線の行き先から、自分が女らしい体をもっていない事にコンプレックスをもっていた『はやと』の怒りは絶頂に達していた

短く刈り込まれているが故によく見えるおでこに、逆撫でされた怒りの道が動いている

「粉川さん、『はやと』の事、海保の職員だって思ってたんですか？」

爆笑を堪える『りゅうきゅう』は口元を抑え

タグガールズ立ちも真似するように口を押さえて、前に立つ粉川の背中側で全員が両手を挙げてケッチャダンスをしながらニヤリと笑っている

「呑み助～～～爆沈～～～」小さな合唱が『はやと』のテンションを上げる

「いや・・・ちがうんです、ココ暗かったかな？」

どうにもならない言い訳、目の前に光る怒りの眼はどこか『こんごう』のそれに似ていて

身に覚えのある、恐怖の光となっていた

「ごめんなさい」

やっとで出た謝罪の言葉は、下から突き上げる見事なアッパーに語尾を告げる事なく吹き飛んだ

それを皮切りに笑いながら菊や洋が粉川に群がり体事ぶつかりもみくちゃにされた
何かわからなくても騒ぎが楽しい彼女達に囲まれる事で『はやと』からの凶悪な次弾をうける事はなかったが、結局大きく腫れ上がった顔をさらす事になった

「すいませんでした・・・・」

口からあふれる血反吐の中
それでも頑張る粉川は『こんごう』停泊中に一度は飲み会しましょうと約束だけは取り付けた
色々な事に反省した嵐の一日はまたも過ぎていった

第六十四話　嵐の一日（後書き）

カセイウラバナダイアル～～夜長～～

この不況なのに途切れる事なく仕事のある会社にて着かれているヒボシですぅぅぅ
仕事がある事は良いことなのですが、日がな一日事務所に座ったままでいると・・・
正座しているわけでもないのに足が痺れますｗｗｗ
マジで

そんなヒボシのとなりで零戦のプラモデルを作っている事務職の野郎がいます
ヒボシが木工で船を造っていたのを見て自分もやってみようと考え始めたそうですが・・・
ディアゴスティーニから出ているシリーズをちまちまやってますたしかに精巧につくられたパーツ
アルミの削りだしなどホホゥと見るものはあるのですが・・・
部品点数を考えて行くに恐ろしい事に
一部で買うと創刊号７９０円で、約月一部で部品が出続けるわけですが・・・
次号からは一部１５９０円ですで・・・・何部で零戦になるのか
恐ろしい事に全１００部だそうで・・・・・・
合計、１５万８２００円・・・・恐ろしい！！！
途中で挫折なんて出来ない価格だぁぁぁ怖いよぉぉぉぉ
ちなみにこの会社とは違うメーカーで２００／１ビスマルクをつくるというのもありますが・・・

やっぱり完成する頃には同じぐらいの価格になります
恐ろヒィィィ

２００／１といえばヒボシはペーパークラフトの４００／１の図面から倍率ドンで２００／１の瑞鳳と伊勢を作ってますが、価格するとおそらく2万行きません
まずかかる費用の大きな物は設計図であるペーパークラフトです
伊勢は３５００円でした
瑞鳳は新たに書き起こされたものでしたが３３００円でした
これら４００／１を２００／１にするためにコピーをする最近では自宅のプリンターでやっているのでランニングコストで考えても全部で１０００円もいきません
そして船体をつくる木材の値段
バルサ板は1ミリの物ならば８０ミリ×６００で１５０円ぐらいですｗ
2ミリでも２００円ぐらいだっと思います
瑞鳳は初めて作ったので全部のパーツが1ミリで出来ていて（結果やたら軽い、1メートルもあるのに）
艦体部分だけでキールから組んだとして5～6枚使ったことになり・・・
しかし値段で考えれば１０００円行きませんｗｗｗ
これに飛行甲板が1ミリ2枚つかって、合算してもおおよそ1万行ってません
接着剤は木工用ボンド、形の形成のために木パテ
これらも2本ずつしか使ってないから・・・・
やっぱり1万行きませんｗｗｗ
さらに瑞鳳用の迷彩のカラーを買ってきても1万行きませんｗｗｗ
こだわってエッチングパーツとか使い出したら1万なんて簡単に越えそうですがそれでも完成したらビスマルクの１０／１以下の値段で作れるという事になります

ヒボシはディアゴスティーニは買わないぞ！！！

さてそんな高価な零戦を作っている彼の好きな戦闘機は
３５ドラケンというなんか変わった戦闘機だそうです
いつか木工で骨からつくってやると息巻いている彼が、途中で投げる事なく高級な零戦を完成させてくれる事を楽しみにしてますｗｗｗ

秋の夜長を楽しむには良いかもしれないプラモデル
そんな日々でした

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょう～～～

第六十五話　憧れの姿（前書き）

ひさしぶりに戻ってきました
私生活に色々あったり、思春期でもないのに悩みまくったりで大変でした

メッセなどで続きを期待して頂いた「氷川丸とタグガールズ」また
も書きき
る事できずでもうしわけにゃーですぅぅぅ
許してやってくださいませ

今話はｓｐｅｃｉａｌｔｈａｎｋｓ二等海士長先生でお送りします

第六十五話　憧れの姿

「私達の魂を見つけて」

薄く膜を下ろしたように雲の間を彷徨うよに『こんごう』は微睡みの中を泳いでいた
上も下も天も地もない空間にな浮かびながら、四方から自分に向かい懇願を続ける声にむかって叫んだ

死にむかう狂気の海で戦った姉達が、残して行く愛する日本に託した願いがそこにあると魂達の声は木霊し続ける
雲の間を泳ぐように彷徨う『こんごう』に何度もの声が願いを問い続ける

「姉さん達…私はどうすればいいの？」

眉間をつねるような激痛
声はただそれだけを繰り返して頼み続ける
一人、二人の声ではなく多くの魂の女達はどれも悲しみの色を込めた声で答える

「心は日本に置いて行きます。三笠様の元に」
「三笠様…」
無位置の空間、夢と現実の中に浮く『こんごう』に願いを託した

「姉さん…」

自分が木霊する声に返していた言葉が、現実の声として耳に届いた瞬間に『こんごう』は目を覚ました
重く埋まるように沈んでいた頭を枕に預けたままゆっくりした動きで回りを見渡す
見慣れた灰色の天井が霞んでいた目の中で明確な形になった時、自分の顔を心配そうに覗き込む別の顔に気がついた

「『ちょうかい』…『ちょうかい』？」

慣れた景色を思い出した『こんごう』は顔を起こし、自分を見つめていた相手を確認するように普段でも尖り目の大きな瞳をさらに大きく開いた

「そうだよ、『ちょうかい』だよ、お姉ちゃん」

『こんごう』はまだ自由のきかない体を起せず、首だけを動かして妹を見つめる、目の前やっと目に生気を取り戻した姉の顔に『ちょうかい』は堪えていた涙を零した

「良かった無事で」

粉川には演習にて傷ついた姉の事について責める事はせず、そんな何事でもない、自分たちにとっての日常、有事のための訓練で良い成績を残せたことを誇ってみせた『ちょうかい』だったが、本当は頭脳に対する攻撃の痛みが尋常でない事は良く知っていたし、しかも今回姉に使われたそれが並はずれたものであった事を思えば本心は泡立ち、すぐにでも飛んでいきたい気持ちで一杯だった
眠り続ける姉の艦影のとなりで満たし続けた不安が、今瞳の中で涙となってこぼれていた

痛みの戦いを制した姉を誇りと告げながらも
心や体を痛めた姉をを案じ続けていたていた『ちょうかい』は、目からこぼれた涙に姉が不安を与えないように素早く拭うと、微笑みながら聞いた

「大丈夫、もう頭痛くない？」

『こんごう』三日ぶりの目覚め、沈痛の中に沈み続け、活動を止めていた体はすぐには動かなかい様子だったが頭を動かし、少しずつ体の各所に力を走らせていく
腕を動かし目の前に手をかざして指を動かしながら自分を気遣う妹に返事した

「心配ない」

水色の瞳を潤ませた妹の顔に、同じ水色の目が諭すようにこたえると妹の不安を飛ばすように勢い良く体を起こし
「よく眠った、もう大丈夫だ」と妹を安心させるために笑った

服を身につけない裸身の女神は自分にかけられていた布団を払うように落とすと大きく背伸びをした
真っ白な肌、茶色の長い髪が柔らかな丸みを帯び揺れる果実に添うように流れる前、自分より遙かに女らしい体を見せつけられ顔を真っ赤にした『ちょうかい』は目を反らしてしまう
目の前、布団をなぎ払ってしまった姉は上から下まで何も身につけない姿
さすがに姉妹、女同士でも直視はできない恥じらいが顔を下げているのに当の本人である『こんごう』は気にもしない様子で聞いた

「何日寝てた?私は?」
「三日、今日の午後から明日にかけて艦内の大掃除、明後日は最終調整をして、翌日には佐世保に戻る事になるよ」

『ちょうかい』の存在が自分の前にいる事で『こんごう』は自分が演習から向こう昏倒の状態で佐世保に戻らず、長崎にて修復になった事を即座に理解していた
流れ散らばった髪に手櫛を通しかき上げながら、もう一度大きく背を伸ばし、体の動きを鈍らせていた鉛を落としてゆくようにストレッチする

全裸で

理路整然と姉の今後の日程を話しながらイスの上で体を小さくして目を合わさないようにしていた『ちょうかい』は、姉の状態が自分が考えていた以上に元気である事を確認して安心すると同時に今目の前にいる裸の姿に思っていた事を聞いた

「なんで裸なの…お姉ちゃん、寝るとき服着ないの?」

それは長年『ちょうかい』が不思議に思っていた事だった
『こんごう』は自室にいる時はほとんど裸で過ごしているという事実特に佐世保は基地内部、海近くにある煉瓦倉庫を寄宿舎とする生活だ。グループ分けされた部屋の中でさらに個人部屋に分けられているとはいえ、その中でも『こんごう』は裸で過ごしている事が多かった

部屋に入るときは必ずノックはするのだが相手が妹であるとわかると服を着ることなくそのままドアを開けて通す
最初はそれを普通なのかと思っていたが、他の魂達と過ごすことが

多くなってきた現在それが姉だけの持つ特異な行動だという事に気がついた『ちょうかい』は一つ上の姉である『みょうこう』に聞いてみたのだが

「さあ姉様はナチュラリストなのでわ？」

とぼけた表情で的を得ない答えをかえされ
佐世保勤務で同室になった『はまな』にも聞いたが、『はまな』は極端に『こんごう』を恐れているせいか「しらない、何も聞かなかった事にしといて」と震える始末

どちらにしても護衛艦の魂の中で『ちょうかい』が知る限りでは、自室で裸で過ごしているのは姉の『こんごう』だけという事で、しかも自分たち妹の前ではそれが普通であるという事が気になっていた他の魂がいるところではかっちりと制服を着こなす姉が…自室に来る自分たちの前で真っ裸なのはどうして？と

「着ないが…それがどうした？」
「寝てる時は別にいいけど…起きたらすぐに着た方が良くないかなって」

何を不思議な事を聞く？
そう言わんばかりの目が欠伸ででた涙を指に掬い眺めながら、裸のお尻をみせたままこたえる
立ち上がって首をならすという状態の中で、気押しされながらも多くの時間を姉と過ごす事もできず、今まで聞くこともできなかった事に、こんな機会はなかなか得られないのだからと心に思う『ちょうかい』は続けた

「私達の前でも裸だよね、どうして？はずかしくない…の…」

「なんで恥ずかしい？」

背中を向けていた『こんごう』は言葉の端を柔らかくするために崩しながらも質問し返した『ちょうかい』に向き直った
自分の裸身を見ることが出来ない妹が恥ずかしそうに体を小さくして上目遣いで懸命に顔だけを見ようとしているが不思議に見える

「恥ずかしいのか？」

念を押すように聞き返した姉の前、『ちょうかい』は首を大げさに左右に振って
「私は、その、裸ってあんまり他の人に見せるものじゃないと思うのね…」
「他人には見せてないし、外ではきちんと服着てるぞ」
「うん、でも部屋でも起きたら服着ていた方が良くないかな？と思ったんだけど、お姉ちゃんにはお姉ちゃんなりの考えがあって部屋では裸なのかな？と思って…聞いてるの」

自分の体をがんばって見ないようにしている妹の前で『こんごう』首をひねった
裸て寝ている理由は実は些少な事でそうなっていたのだが妹が不思議と考え込むような事になるなど、正直気がつかなかったからだ
細かな事情を話すのは恥ずかしい、『こんごう』は変な質問がやっかいな論議になった思い投げるように妹に聞いた

「裸で何が悪い？」

めんどくさそうに頭を掻く姉の問いに『ちょうかい』は困った顔で

「いや、その悪くないけど…そういうのがあったから粉川さんが、

その、殴られたりしたわけで」
「あれは粉川がノックもしないでドアをあけるから！」

佐世保の艦魂達が住む寄宿舎であった粉川殴打事件
粉川が不審船事件の件で東京に戻る事になった時に催した送別会で起こった事件、前日に長崎に出てしまった『ちょうかい』ではあったが、その後同じ佐世保に席を置いている『はるゆき』が長崎に寄港した時に聞かされていた
日本護衛艦の艦魂達の間では最早有名な事件だ

「でも、通常勤務で寄宿舎にいる時まで、自分の部屋だからって裸でいなくても…とにかくどうして裸なのかなと思って?そりゃお姉ちゃんみたいにキレイな体してたら見せても恥ずかしくないだろうけど、反対してるわけじゃないんだよ、ホントにどうして裸なのかな…って思って」

尖り目が特徴の二姉妹、『こんごう』は妹が肩をすくめながらも懸命に話す姿を見つめる
『ちょうかい』は目の前にある女神の模倣ともいえる姉の体に羨みの目線を上げる

『ちょうかい』の目標の一つにあるもの、姉のようなキレイな容姿をなる事
現在イージス艦の姉妹の中で最新のベースラインを持つ彼女だが魂の彼女は一番下の末っ子であり容姿の幼い歳である事も事実。彼女は『こんごう』のようにメリハリのあるスタイルの良い体に成長する事が魂の自分の目標だった

他にいる姉の『きりしま』は『なみ』姉妹系のスレンダーだけど背丈が小さく自分に近いし少し子供っぽい、目標としてはすぐに達成

できるところにいるという判断をしていたし
もう一人の姉『みょうこう』は何故かいつも厚着をしている寒がり、
あまり体のラインを見せる服を着ない人だが背丈は『こんごう』と
同じぐらい

目標は高く

見える形としての目標、目の前にいる姉のように女として豊かな実
りある体に成長したい
艦魂も少しは成長する、産まれて十年を目前とする歳になった彼女
のその思いは強かった

憧れの姿

だからこそ、何故か惜しみなくその身を晒す姉の行動が不思議でな
らなかった
キレイな体なんだからキチンと隠していても美しさは伝わる、なの
に裸でブラブラと歩く『こんごう』の行動が不可解に思えてしまっ
ていたのだ

「裸でいるのを悪いとは言わないけど、そのもしもの時とか…困る
でしょ」
「もしもとは？」

目線を四方に泳がせる『ちょうかい』
「だから突然の有事が起こったりする事だってあり得るのだから」
「そんな時まで悠長に構えていたりはしない」
当然の事なのだが、『こんごう』は職務に限りなく忠実な心をいつ
でも妹達にしめしてきている
「わかってるよ」

機嫌を損ねたようにトーンを落とした姉の返事に、少しでも姉との会話を楽しみたい『ちょうかい』は謝ってしまうかのように慌てて返事した
眉を下げてしまった妹の顔に、叱りつける気はなくても萎縮させてしまった事を感じ取った『こんごう』は修まりの悪くなった会話をなんとか良い感じで終わりたいと思いながら、自分が自室や自艦内の部屋で裸でいる理由というのを、自分の都合以外
理由で生まれて初めて考えて見た
可愛い妹を思えば、自分がしているそれが何なのかに答えを与えるのも姉の義務と思えた

「その、昔、誰だったか忘れたけど「武道家は裸である時が一番強くあるべき」みたいな事を教えられたような…」

頭をひねって思い出したのは、わずかにどこかに残していた過去の記憶で、それがどういう時に合った会話なのかは思い出せなかったが目の前でしょげている妹に告げた

「武道家？」

姉のひねり出したおかしな答えに少しの明るさを取り戻した『ちょうかい』は顔を上げた
「そうだ、私達は国を護るという艦の魂だろ、武装していなくても素の状態でも戦いに望むときは強い心でいなくちゃならない…そんな感じの教えだったような」
自分でも良く思い出せない『こんごう』は口に手を当てたまま弱くなった口調の中で自分を見つめる妹に懸命に話し続けた

「だから、その裸なのかな…」

結局自分に言い聞かすような説明になってしまった中、何時までも裸でいるわけにいかない『こんごう』は下着をベッドの下にある箱から取り出しながら
「誰に教えられたのかは覚えてないんだけど…とりあえずそれが理由かな」と困った目のままなんとか口を笑った形にして見せた

「そうなんだ」

『ちょうかい』もこれ以上姉に問いつめるのも悪いと思い、頷き納得の意志を示すと
「私も、今度から裸で寝ようかな」
「バカ！マネなんかしなくたっていい！」
説明してみると妹には同じ事はさせたくないと考えるもので、手早く下着を着けながら
「風引くからやらなくていいよ」手を振って止めておけという姉の前シルクの生地も美しい下着に妹は目を輝かす、自分が将来なりたい姿の姉、その身を飾る綺麗なランジェリー
「私もそういう下着に替えてみようかとも…考えてるの」

憧れの対象
少しの休息で会うことが出来た姉に勤務の事以外で話しが弾むのは嬉しい事だ
『ちょうかい』は満面の笑みで普段は話さない、日常の会話、自分の事、姉のようにキレイに成りたいという希望を話していった
『こんごう』はいつもなら照れ隠しをして逃げてしまうところだが、勤務もない今、逃げる場所もないし不思議な事に逃げたいとも思わなかった

思い出す水の記憶の中

戦いの時代を懸命に生きた姉達の姿
大切に思う姉妹達の名を涙で叫び続けながらも地獄の海を、日本を護る戦いに散っていった姉達が見せた愛情を思い出しそれを実感していた
近いハズなのにどこか突き放し遠くに置いていた妹との距離を、やっと取り戻すように話しに耳を傾け続けた

笑顔がみれる距離で、今はとりあえずでもこういう緩やかで平和な時間を持てる幸せながある事に感謝をした

「夜に絶対に来てね！！用意して待ってるから！！」

昼過ぎに部屋に訪れていた『ちょうかい』は１５００を過ぎたところで姉との楽しみのために夜の飲み会をする事を何度も約束と連呼しながら光の輪の中に消えていった

「粉川さんと一緒に来てね！！」

粉川と共に夜の宴に来てと告げ大きく手を振りはしゃぐ妹に、拒否の言葉はかけられない『こんごう』はこぼれ落ちる光の雫の向こうに消えた妹の姿から目をつむると一息吹いた
こんなに長い時間を妹と過ごした事がなかった。初めてづくしの疲れが溜息になってもう一度漏れたが、それは悪い意味のものではなかった

『ちょうかい』、後には佐世保の司令艦になるであろう妹は、自分の将来に置けるポジションと重責の事を良く知ってか常に堅い態度

と規範となる姿勢を見せ続けていた
もちろんそれは彼女自身が護衛艦という魂に産まれた事から発生している責任ではあったが、彼女自身が思うところにはもう一つのものがあった

それは姉『こんごう』が自分たちにしてきてくれた事に対する恩返し、自分を愛し誕生前から自分に続くイージス艦という国防の盾の職務にスムーズに入っていけるようにという布石、その心遣いに対するお返しの形
口に出して姉に言うことはないが感謝の気持ちを責務の一つに加えていること

「それにしても…」
そんな妹の気持ちを少しでも理解しようと努めた『こんごう』だったが妹の頼んだ宴会への条件付けには少し複雑な思いを持っていたが、拒否はしなかった理由は別の思いがあったからだ

「粉川と話さなくちゃならない…」

現在護衛艦の魂達が知る日本で船の魂を見ることができる唯一の「人」である粉川に、『こんごう』は水の記憶を得たことで自分たちに託された思いを探すという使命を強く心に誓っていた
そのためには人の助けがいる事も、十分に理解していた

「遅くなってごめん」

１７００を回った頃、イージス艦『こんごう』内部グループルームに粉川は足を踏み入れた
士官用の青服に首からタオルをかけ、充実した一日に満足な笑みをうかべながらも少しばかり遅れてしまった集合時間について謝った

演習から戻って3日目『こんごう』のシステムに起こったダメージや状況を解析、また修復のために乗り込んでいた技術技官の職員達は、システムの最終チェックを終えて下艦した

技官職員達は皆疲れた顔をメガネで隠しながらも東京都の電話帳三冊ではすまないほどのデータを黒いカバンの中にあるパソコンに納めて防衛庁に戻る帰路に就いていった
それを待って入れ替わるように乗艦したのは代休を消費した隊員達で、技官達が予定より早く帰った時間を使って艦内の大掃除に入る事になった

護衛艦『こんごう』は国の護りの要にもなる艦(ふね)だ
それ故に常に緊張した任務の中おり、易々と休み続ける事など許されない。だから次の稼働を気持ちよく入るための助走をつけるように掃除という手早い作業が行われた

人が休みに入る年末年始だろうが祭日だろうがフル稼働を強いられる国防の盾は、年末の大掃除などと決まった時に全てを行う事が出来ない
だからこそ年末にはまだ少しばかり早いが修復期間として取られていた時間を有効活用とした大掃除は昼過ぎから開始しされた

特に今日は最初に戻った隊員達によって食堂区画を閉鎖しての殺菌と害虫駆除が行われていた
人出が少ない内にできる大仕事の一つに上がる害虫駆除は待ちの仕

事ともいえ、大型のバルサンを直噴するタイプのものを設置して二区画を閉じて行うが、殺虫のガスが蔓延し効果を発している間はやることがない
なので外回りのペンキ塗りなどを行う、まめに見つけた仕事を手順良くこなして行く

いきなりフル回転の仕事に粉川は士官という立場にいながらも自ら飄々と参加していた
根っからの体育会系、体を動かしていないと気が済まない性分は、戻ってきた隊員達、特に若い隊員達を連れ回って掃除に走り回った
休みを堪能し動きの鈍った隊員達の間を率先して働く士官、まがりなりにも一等海尉の後を若者達はイヤもにべもなく付き合わされるように走り回って仕事した

「ご苦労」

掃除が終わり真新しい青服に着替えてはいたが、顔には少しの汚れを残した顔で部屋に入った粉川にイスを二つだけ用意して座っていた『こんごう』は労いをかけた
帽子を目深に被った下の顔は、深まった冬がくれる乾いた太陽の光で日焼けしていた
乾燥した青空の下でかさついた唇を軽く舐めながら少しの遅刻を謝る粉川を『こんごう』は怒らなかった

写身の本体である自分の大掃除をしてくれたわけだ、むしろ礼を言うのも一つの作法
だが相変わらず厳めしい表情のまま、手を伸ばして

「座ってくれ」と粉川を自分の目の前に座るように導いた
粉川の方は久しぶりに顔色の良い『こんごう』を見られた事で上機

嫌だった
作業で十分に暖気の聞いた体を少しばかり気にしながらも先に『こんごう』の体を気遣って聞いた

「どう、体の調子は良くなったかな?掃除もはじまったし少しは良くなっいてくれると思うのだけど」

目の前、嵐の前に自分の名前という話しで「日本国こんごう」と言いはなった時ぐらいに顔色は戻っている『こんごう』は言葉なく頷いて見せた

「良かった、本当に心配したよ」

口べたな『こんごう』
それが常である事を十分に理解できるほどになった粉川はタオルを首からとりながら
手を差し伸べたイスに座ることはなく、さらにテンションを上げるように元気よく

「さあ!じゃあ行こう!!だいぶんと『ちょうかい』ちゃんを待たせてるでしょ!」

逆に手を伸ばした
『ちょうかい』主催の宴は粉川もま一枚かんで決めたもの
姉の意識が戻ったら、一緒に呑みたいと考えていた『ちょうかい』の願いに粉川も同席させてもらうというイベントだった
イベントを楽しむためにも昼間惜しみなく働いてきた粉川の顔と、待っていると笑っていた妹の顔を思い浮かべた『こんごう』は粉川を座らせ会話をしたいと思い待っていたが、実際に集合の時間を遅れてしまっている事を思い出すと、押し黙った顔のまま焦って話す

ことでもないと心を落ち着けて一言だけ頼んだ

「宴が終わって帰ってきたら話しをしたい…そのつもりで泥酔はしないように気を付けてくれ」

真剣な『こんごう』の申し出に粉川は別の事を思い起こしながらも了解と返事した

『こんごう』とのキス

演習の最後、目の焦点を失ってしまった『こんごう』が自分にむかって下ろした唇は、官能を十分に表現できるようなデンジャラスなキスだった
血の臭いと、鉄の味わい、柔らかな舌が絡みつく夜を楽しむ合図のようなキスについての説明?
粉川は女っ気の薄い生活の中からそっちの方を考えて顔を緩ませていたが

「なんだ?そんなに酒が飲みたかったのか?」と『こんごう』は鼻の下の伸びた男の顔に怪訝な目線をくれた
真剣に話しをしていた側から見れば、そこまで浮かれる程酒が飲みたかったのかと思わざる得ない顔に嫌味も出る

「そんな顔でちゃんと掃除は出来たのか?」

苛立ちで険の立った声に、粉川は顔をぴしゃりと態度を改め大きく手を振って

「もうピカピカだよ!食堂なんて年末前に殺虫爆弾お見舞いしてカラッカラにしてやったんだから!」

「食堂…殺虫したのか…」

半日の中で一番の大仕事だった食堂の殺菌，殺虫の掃除を大仰に語る粉川の前、眉をしかめた『こんごう』、口元は何とも言えない苦みを噛みしめている様子で相手を睨むが
粉川の方は大変だった事を伝えたいが為に手を広げて続ける

「ゴキブリいっぱい出てきたんだから２００匹ぐらいかな、大変だ」
「わかった！」いらついた顔が声を遮るが
断ち切る怒声にもめげず
大量に出たゴキブリを箒で吐き出す仕草をまねて見せる粉川
その手を今度は力で叩いて止めると『こんごう』は「わかったから止めろ！」と怒鳴った

だが粉川は話したかった
護衛艦の中でも、海の上でも何でもござれの台所の寄生虫、平気で生息するゴキブリ、それを殺虫し清掃する苦労は隊員によってはトラウマにもなる作業だ
半日でこれをこなした自分はむしろ『こんごう』に褒められても良いのではと思うほどの殊勲と話しを続けた

「ホントに大変な掃除だったんだから、どっからあんな湧くのかとね。あっでもね！もっとすごいの数を見たヤツもいるんだよ！僕の友達にね石川ってヤツがいてね『たちかぜ』さんに乗艦してるんだけど」

耳を塞ぐように立ち上がり会話から逃げようとする『こんごう』の前に笑顔でせまる
「『たちかぜ』さんは結構艦歴長いからだと思うんだけど、殺虫爆弾の後で掃除に入ったら１０００匹ぐらいころがってたって」

「やめろ！！！」

笑顔で思い出話しのゴキブリまで語る粉川の前『こんごう』は顔を真っ赤にして怒っていた

「これから飯なのに、貴様というヤツは…」

「あっ…」

これから飲み会、確かにご飯前にはふさわしくない会話に相手が怒るのも無理無しと申し訳なさそうに頭を掻く粉川は謝った

「ごめん、大仕事だったからつい」

「わかった」

どこか焦った仕草の『こんごう』は急いで光りを現し粉川の手を引こうとした

瞬間

「あっ、ここにもいた」

『こんごう』の足もとを粉川が何の気なく指差した、やり損ねたという顔と始末しなきゃなという感じぐらいに気怠くなった声で

「食堂から逃げてきたな〜こいつ」と困ったと肩をすくめたポーズをして見せたが

歩を進めた『こんごう』は自分の足もとに鎮座してい黒い物体に一瞬で固まった。まるでドライアイスに当てられ白く凍ったバラのように赤く怒りに染まっていた顔から色が失せた。

その間にも殺虫のガスによって息も絶え絶えなのかいつもの俊敏な足裁きを見せる事のない滑りを帯びた黒い虫は銅像のように固まった『こんごう』の足もとにむかって動いた

「いやぁあああああああああああ」

耳を劈く大音響の悲鳴
一瞬で振り返った『こんごう』は粉川の靴、足の上に自分の足を重ねるように置いて叫んだ
「ちゃんと殺したんじゃなかったのか！！」
抱きつき足を床から離すために粉川の足を踏み台にして肩を強く掴んだ『こんごう』の目には涙があった

「あっ…ゴキブリ…駄目なんだ」
今更のように気がついたという顔の前、絶叫の女神は涙を振り飛ばして怒鳴る
「当たり前だ！！なんで陸地の生き物なのに海の上まで付いてくるの！！この気持ち悪い！！黒いの！！」

唖然とした顔をさらす粉川の前『こんごう』は自分の部屋が殺風景でスッカラカンになった時の事をを思い出していた、それは裸で寝る生活に入ったきっかけであり『ちょうかい』には言えなかった「裸」の本当の理由だった

元々『こんごう』は誕生の時に心を傷つけられた経緯から、演習や寄宿舎の生活がなければ常に自艦内自室に引きこもってしまう艦魂だった
現在ではそれ程多くの時間を自分の殻に閉じこもる事はなくなったが、当時は今以上の行動で引きこもりを敢行していた
しかし
誰と会うのも苦痛と考えながらも、ミーティングをしない事で演習で遅れを取ることを嫌い大量のデータを読んだり、本を持ち込んで

は書き物をしてみたりなどはしていた

引きこもっていた頃の彼女は、ぶっきらぼうの不作法
投げ散らかされた本や書類に持ち込んだ色々な機材、さらには厨房
からかすめてきた食品、缶詰などで今では考えられないほどに部屋
を汚していた

当然制服も着たきり雀の状態
いくら休息を取って起きれば体をリフレッシュする事ができる魂と
はいえ、あんまりな生活だった。が

「あいつ!!寝てた私の上に飛んできたんだ!!気持ち悪い!!服
の中に入って来たんだ!!」

乱れた部屋の中で発生した悪夢の虫。浅い微睡みの中、自分の肌を
這い顔の前までやってきたG
それ以来部屋の中に何も置かなくなった、目が届くようなところに
あった全ての物を捨てやつらが隠れる遮蔽物となるものを一切合切
太平洋に投げ捨てた
半狂乱のまま制服まで投げ捨ててしまった事件は今でも『しまかぜ』
ぐらいしか知らない『こんごう』誕生一年目に起きたトラウマだった

だから裸だったのだ
服の中に潜られたあの感触が、堪えられぬ思い出として蘇り全身が
カリカリに油揚げされたの鳥皮のようになっている
裸でいられるぐらい何もない部屋であれば奴らは発生しない『こん
ごう』は乱れた部屋と不衛生な生活からの脱却を期に奴ら黒光りの
悪魔の発生原因をそれと決め、部屋に何も置かない生活に入ったのだ

廻る思い出に目を回し粉川にしがみついているうちにもGは最後の

反抗かのように少しずつ足もとにせまっていた
「早く追っ払って!!!」
「落ち着いて!!『こんごう』？」
そうは言われども自分の足の上に乗ってしまっている『こんごう』
しかも半端じゃない力でしがみついている相手をどこかに卸でもし
ない限り身動きできない粉川は苦しそうに返事するのが精一杯
「早くアイツをなんとかして!!早く!!」
「どいてくれないと、何にもできないよ」

「私にどこに行けって言うの!!」
ヒステリックのボルテージが粉川の鼓膜を乱れ打つ
「『こんごう』落ち着いて」
自分の顎下から睨む視線は涙でぐしゃぐしゃ、演習でも泣かない女
がココであっさり泣き叫んでいる

「早くなんとかして!!」

「おばんでやんす」
「おばんでやんす」

半狂乱で熱を上げている部屋に
飛び込んできたのはお馴染みのご挨拶で両手を揺らすタグガールの
菊と洋、それに『ちょうかい』だった

「お姉ちゃん…どうしたの?」
目の前粉川ときつく抱き合っているという姿もかなりショッキング
な光景だったが何より驚きだったのは
姉『こんごう』の涙目姿だった

宴開催の定刻を過ぎても現れない二人を心配した『ちょうかい』はまたも二人がケンカでもしているのではと駆けつけたのだが、自分の予想の斜め上を行く展開に、姉にむかってかける言葉がなくなり、ただ呆然と二人の様子に目を走らせていた

そんな状況の中でも柳のように揺れ、騒ぎに乗じたケチャダンスを踊るタグガール

「呑み助～～～なにしてるのぉ～～～」

固まり姉と粉川のベーゼを見つめる『ちょうかい』をよそに粉川の前にせまった菊は、愉快犯よろしく口を横にひらいた笑みのまま聞いた

「菊ちゃん、そこのゴキブリ、なんとかして」

抱きつかれた状態で手だけを動かし床を指差す

我に返った『ちょうかい』はその先に見えるゴキブリを見ると、確認するように『こんごう』の顔を見た

妹の顔さえ見ることも出来ない姉、必死に頭を振り、そこが粉川の足の上だとわかっているのに地団駄踏んで叫んだ

「誰でもいいから!!そいつをなんとかして!!」

涙混じりの怒声に『ちょうかい』は

「お姉ちゃん…ゴキブリ駄目なんだ」

初めて知った姉の弱点、知ってもどうして良いのかワカラナイ妹の前

このまま宴の時間が押してしまうのも惜しくなったのか、刺された指の先にいるゴキブリに鉄槌を降したのは菊だった

大きな手袋のような手をそののままゴキブリに打ち付けると、何事

も無かったかのように重ね付けしていた作業用手袋を一枚脱いでテラスから海に投げ捨ててしまった

「これでいい？」

ニカリコと満面の笑みで
一瞬で姿を消したゴキブリ
大騒ぎのピークをばっちり見られてしまった『こんごう』は顔を真っ赤にしたまま粉川の胸の中で俯いてしまい
『ちょうかい』は笑いを堪えて背中を向けた

「誰かに言ったらぶっ殺す」

同じく笑いを堪えている粉川に、いつもより強気なトーンがない涙混じりの声で、それでも必死の釘を刺す『こんごう』

「言わないよ、得手不得手って誰にだってあるからね」
苦笑いを天井に向ける粉川

『ちょうかい』は普段無口でキツイ目で護衛艦隊の魂達を恐れさせている姉『こんごう』の意外な一面に凄く驚きながらも、憧れの人が完璧ばかりじゃなくて可愛らしい一面を持っていた事に微笑ましくなった

「私もそういう可愛い部分もちゃっんともっておこう」と笑いを堪えて自分の胸に誓った

続く飲み会の中『こんごう』は粉川に他言無用を釘差し続け、タグ

ガール達はそんな事は忘れたように呑み騒いだ
粉川もまた『こんごう』が可愛い部分を持った女の子である事を再確認した出来事だった

第六十五話　憧れの姿（後書き）

カセイウラバナダイアル～～ヘーロース～～

ロースは高いｗｗｗ
近場に出来たステーキ屋さんに出かけてきたヒボシです、なんだかグランドオープンだったらしく帰りにパイナップルもらいましたｗ

昔から疲れを知らぬもの（ヘーロース）だと言われてきたヒボシですが
最近は心身共に疲れる日が多く…ババアになったなぁとｗｗｗ自虐的史観ですよ

でもまあ
今まで取り立てて健康に気を遣ってきたわけでもないので、今更どうにかしようという気もありませんが

ところでＧ
内の家系では『こんごう』なみにテンパルのは母だけですね
ヒボシは菊ちゃんと一緒でどーって事ないです
花盛りだった頃からそうですｗ
「きゃーゴキブリ～～こわい～～」なんて、そんな事した事もありません
ゴキブリは怖いではなくキモイだ！！

今回護衛艦の掃除で害虫駆除の事を教えてくださった二等航海士先生に特別出演までして頂きました
粉川の友達で『たちかぜ』さんに乗艦している石川さんが、そうですちなみ出演の許可はとってませんが、すいません

なんか変わった形で小説に知恵を貸して下さった方を出したかったのです、だから許してやってください

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第六十六話　花の嵐（前書き）

…相変わらず戦闘シーンは皆無の艦魂物語ですが、今話からさらにないですｗ
そしてこの先しばらくあるのは「愛」です
愛がないと視えませんｗｗｗ
でも戦記です！愛は戦いだからです

さらにおまたせしました～～～
氷川丸とタグガールズ、後書きに～～～
ただこれも少し長い話しになりそうです…外伝として話し分けした方がよかったか？などともおもいますが、サイドストーリーは物語のｔｒａｆｆｉｃですから、いろんなところともつながってゆくという楽しみ方をしていただけたら幸いです

第六十六話　花の嵐

『こんごう』が修復のために三菱重工長崎造船所に入港した日、同じ日に佐世保には鋼鉄の巨鯨が海を割り錨地に向けて入港を開始していた

佐世保湾内に入る最後の門、基地への入り口に見える小山の半島二つ

北寄りの一方高後崎、江戸時代ココは外からの取り締まりの為に番所の作られた山だった

まだ佐世保港自体は南蛮貿易などの利潤を挙げる程の価値はなく、閑散とした漁村だった時代だが、一大貿易港長崎港に向かう阿蘭陀や葡萄牙船の増加に伴い不法な密輸入が横行するようになった事から見守りの番所が立てられた

異国の船の乗員による漁村に対する略奪行為なども少なからず見られる形となったり、途中下船など怪しい動きをする船を監視するために見張り番所として作り上げられ、つねに数名の侍が詰めた

その後、江戸時代が終り世界への道を歩き出した日本国の一時平戸県となり後に現在の県名である長崎となった

新たな元号である明治三十年には帝国海軍の砲台が置かれ佐世保鎮守府を護る入江の基地と変貌したが、先の大戦後は朽ちた煉瓦の砲弾倉庫が所々に残り赤い色をすり減らし褪せたままの姿で草木の茂った山に埋もれるように存在しているのみの

何もない小山となっている

その小山の半島を向かって反対側の湾の口に存在する寄船鼻は佐世保港に寄港する艦艇を写真に納めようと並ぶ艦艇マニア達が集まる撮影ポイントになっている

大型の望遠レンズをしっかりと足で立たせたカメラを並べる彼らの目標である巨漢は、朝靄の中から静かに海の上を走り湾に向かっていた

秋空に凛と輝く太陽の日差しを受ける鋼の要塞、アメリカ合衆国海軍第八空母打撃群空母ドワイト・D・アイゼンハワー。合衆国海軍が保有する原子力空母の一つ

朝日を浴びる鋼の動城、その威容を護衛する海上保安庁船艇達

「こんなに大きいんだ、これに私達と同じ魂が一つだけだなんて信じられないよ」

入港に伴い先導をする海上保安庁船艇の中、最後尾に付くため中程で待機してい放射能調査艇『さいかい』の魂『さいかい』は、自分の前をゆっくりと進むアイゼンハワーの全景を見るため顔を上に、空を仰ぎ見るように背を反らしてみた

彼女は産まれて十年目に入る船齢、佐世保という日米両方が基地を構える港を勤務地としているため、湾を出入りする大型のアメリカ艦艇はそれなりに見ているし、日本の大型護衛艦『おおすみ』なども目にし、写身の全長が十八メートル程度しかない自分から見たら百メートルを越す大きな船の魂達も数多く存在するものだ理解はしていたが

今、ここにやってきたそれはこれまで知っていた船の大きさを軽く凌駕する事に目を回していた

見上げたまま戻らぬ姿勢で、だらしなく「は」と口を開けて

しかし小型船舶に毛の生えた程度の彼女からしたら無理もない事かもしれない

これまで見てきた大型艦艇の倍以上の大きさ、群を抜くアイゼンハワーの姿はまるで小山が動いているようにしか思えなかいのだし

昨日、米海軍原子力空母の入港の確認が入り事前に周辺の放射能の測定をした海域は開けた景色を見せていたのに、朝方まだ暗い内からこの空母の横に随伴する形で待機していた時には気持ちがひっくり返り、落ち着きを無くしてしまった

見えていた景色を遮る大きな灰色の壁が近づくや、急にココに現れた環礁なのかと目を疑ったが、朝日と共に姿を克明に現した時には、やはり信じられないものを見たという目になっていた

「本当に同じ船なの？」

自分が丸太に縋る蟻のようにしか思えない

写身の船である自分を何隻並べたらこんな長さになるのかと、端から端までを見るのに右へ左へと首を動かさねば見えない全長三百三十三メートルの巨大艦艇に愕然としながら、揺れるように後ろに付こうとしていた

「トッキュー！『さいかい』！ボケっとするな！！」

見たことのない巨漢に目を白黒させ、心定まらずの『さいかい』の姿は回りを囲む海保船艇の姉妹達に十分に見えていた

呆けた顔に甲高い声が平手を打つ

「このデカブツを錨地まで無事にご案内するんだぞ、しゃきっとし

ろ！」

佐世保に詰める海保の姉『ことざくら』が檄を飛ばした
今回の護衛船艇姉妹達の中では最年長、佐世保勤務歴二十年のベテランは姉妹の中一番身の丈も小さが声は大きい、短く切りそろえた黒髪の前髪を風に踊らせながら、先を行く姉妹達のさらに前を睨んでいる

「そうだよ！ココを通れる時間だって限られてるんだから！」

アイゼンハワー艦尾を左サイドの『ことざくら』の声に反対サイドを走る姉『つばき』は引っ詰めた長髪をなびかせながら、青の作業服の前で組んでいた腕を解くと前方を指差す

荒海の七管、不審漁業船団、徒党を組んで日本の海を荒らす者達と戦う七強き姉達
言葉は荒いが仕事に対する誇りは誰よりも高い魂達に叱咤をうけた『さいかい』は自分の頬をはっ倒して返事した
これ程の大型艦艇が入港するために、港には色々な制限がかけられている
時間を無駄にする事なく目標の三十五番錨地に向かわなくてはいけない

「はい！」

そして目前に迫る気配に目をくれる
『つばき』が指した先に見える者達に緊張が高まる
「しっかりしろよ！湾に入る前に平家がくるぞ！」
勇ましく自分の頬を這った妹と、前を行く姉妹達に『ことざくら』が顎あげのポーズで号令する

湾に入るための道を遮ろうとする数隻のボート達
『さいかい』も何度か味わった抗議の船駆る「人」達の姿
後方からも波を分けて近寄るボート達が姿を現す

原子力の船の入港に対し、原子力で軍人市民無差別の死を与えられた長崎県は決していい顔はしない。そこに住む人達をはじめ平和団体が小型のボートに乗り抗議に帆走を始める
制限水域に入る少しの間だが、朝の静かな水面を震わす拡声器の悲鳴が鳴り響きだした

「ＮＯ　ＣＶＮ－６９　Ｅｉｓｅｎｈｏｗｅｒ　ＧｏＨｏｍｅ！！」

声をからし拡声器越しに怒鳴る、横断幕を振り大きく拳を突き上げて手に手にプラカードと船に赤い旗

「でたな平家ガニ」

『ことざくら』は米海軍の空母や艦艇が入港するたびに起こるこの現象をそう呼んでいた
赤い旗は、侵入禁止、赤信号と色々な意味合いをもって掲げられていたが、彼女は趣味の読書で学んだものの名前を付けていた
平安時代の最後の徒花、源平の戦いの中で海の藻屑と消えていった平氏、その御旗は赤い旗
皆底の亡者が生ける権力に恨み節をぶつけに来る行為だと

「耳栓が欲しいですね、姉様」
耳に自分の手を当てて片目をつむる『つばき』の仕草
「まったくだ、半分は私達に対する罵倒だからなぁ」
『ことざくら』はすでに前方にてアイゼンハワーに近づかないよう

にと勧告を始めた姉妹達の背中を見ながらうんざりと肩をすくめた

今時の抗議行動では空母にぶつかってくるような過激な行動にでる者はいない、海保の護衛からも離れた遠巻きに反対の声をあげ怒鳴る、それが精一杯だ

そうなると届かなかった怒りの差分はどこにくるかと言えば、海保の船艇にむかって「米帝の原子力空母なんぞを護る非国民」と叫ぶ声に変貌し野次や罵倒が連らねられるという行動になる

力届かぬ空母への罵倒より、回りを走る海保への非難へと…

どちらが多いかと言えば海保に向けられる罵倒の方が多いのでは？

というぐらいうんざりな話しだった

「おい！そこの船、ぶつかってくるなよ！」

『ことざくら』は調査船の『さいかい』をフォローしながらも、自分の前を走る抗議に参加した小型船舶の魂に注意をする

「しないよぉ、こんな大きな船にぶつかったらペチッとなってしまうよぉ」

船の舳先に座り、日差しのまぶしさを手を避けながら浮かぶ鉄壁を眺めるボートの魂は残った片手で自分の写身の船体を叩いた

「軽く、藻くずだね」と

低速で行くアイゼンハワーの横を護って走る『ことざくら』の注意に、スカイブルーと白のペイントも真新しいプレジャーボートの魂である彼女は答えた

彼女の後ろに並んでいたボートの船魂も肩をすくめて

「旦那様達がおかしくなっちゃわない限りは私達からぶつかるなんてないから」

秋風に揺れる白のストールをなびかせる栗毛も美しい彼女は、いつもの事に海保の船魂達の苦労も思って苦笑いしてみせた

同じように空母に併走して走るボート達は、自分たちに乗り抗議の拳を振る人とは全く対照的な態度だった
最初に『さいかい』がしていたようにポカンとした顔で皆アイゼンハワーの巨体を見て同じような事を言うだけだ

海に生きる船の魂達と「人」の世界

同じ世界にするのに人は闘争と抗議のために自分たちを駆り出すだけどボートや船の魂達は争い事とは無縁な図

「大きいねぇ」
「どんな人（魂）なんだろ？」と世間話の領域だ

少し前の粉川がココにいて見ていたのならば、いかにもおかしな図だと首をひねった事だろう
だがそれこそが人が自分勝手に自分たちの存在だけを真ん中に置いている図でしかない

本来ならば
同じ世界に居ながら争いの心を捨てられない人と、争いを好め無い船の魂が生きている
各々の考えがありながらもお互い不自由の中で共生し、各々の領域に生きているだけ
だから人達はやかましく騒然とした海だと思っても、船達は大きな写身を持つ仲間程度にしか見ていないという図というだけだ

だから多くの船に囲まれたアイゼンハワーは魂達からはなんの罵倒も受ける事なく悠々と進む

「ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ！日本の友達ィ！！」

人達の罵倒が飛び交う海の上、ゆっくりとした歩で湾へ進むアイゼンハワーのハリケーンバウのさらに上、飛行甲板の真ん前で手を振る影が青空の下元気の良い大きな声で挨拶をした

「しばらくお世話になるわ！！よろしく！！」

甲高い声の主は、アメリカ合衆国海軍大将の制服を着こなした姿
緩いカールのかかった肩より下まで伸ばした金髪を風に揺らし、秋空の青を写したような碧眼を輝かせて手を振る

身の丈は小さく、年の頃も十代後半の『さいかい』は自分とあまり変わらない雰囲気の魂に目を開いて、手を振り返して良いのかと固まってしまったが
相手はまちがいなくこの巨大原子力空母の魂であり、アメリカ海軍艦艇団の頂点、その一角を担う大将である魂
しかし威厳を醸す重いものよりも朝日を伴った軽いテンションが、満面の笑みで投げキッスをしながら自分の回りを囲む船達に手をふる

「アイゼンハワーよ！！アイクでいいからね！！」と

元気のいい声に「原子力空母寄港反対」の横断幕を下げて走るボート達の魂は手を振り返す
「こんにちわ」とか「いらっしゃい」とか
ただの来客お迎えの風景に早変わりしているのに気の利いた反応が

出来ない『さいかい』は変な顔をさらす
今まで自分は緊張してこの巨大な船の入港に備えてきたのがバカみたいに思えたのだ
何度か目を開け閉めして

「なんだあれ…」

誰彼構わず朗らかな声で愛想良く挨拶をするアイゼンハワーの姿を見て不思議そうに声を漏らした

「『ことざくら』さん、あれがこの船の方ですか？」
「じゃない」

何度もの入港を警備した『ことざくら』は覚めた目線をしながら、大声で反対を叫ぶ人達と、それらを乗せながらもアイゼンハワーの挨拶に手を振るボートの魂達を見ながら答えた

アメリカの艦魂達はどこか尖った印象しかもてなかった『さいかい』には新鮮過ぎて風変わりな光景だった

事実、同盟国としての日本の護りの一端を担う第七艦隊の艦魂達は港に入るたびに抗議行動などを見せつけられるという景色に大半が反感をもっており、警備につく海保の船魂に愛想良く話しをした事などなく、事務的な挨拶程度しかしない
軍務に関係のない船達などには絶対に声もかけない

なのに目の前の金髪娘は元気いっぱいで、ご挨拶演説の真っ最中だ

警戒を怠らぬよう視線を動かしながら、またも呆けてしまっている『さいかい』に注意を飛ばすと『ことざくら』は伸びをしながら教

えた

「アメリカのさ、空母の連中は割と愛想がいいんだ」
「そうなんですか」
「そうなんだよ、まあ前に入港したキティホーク大将ってのはちょっと堅い感じの方だったけど、さらに前に来たＡｂｒａｈａｍ．Ｌｉｎｃｏｌｎ大将ってのもやたら大きな声でご挨拶はしてた」

日本に来るアメリカの艦艇は皆寡黙だが、空母だけば何故か騒がしいと『ことざくら』は状況を飲み込むのも鈍くさそうな妹に教えた
「人」の世界でも空母は武力外交の一端を担っており、寄港が決まれば騒がしくなる存在ではあるが…
魂達の世界では空母の方がやたら明るく寄港を喜ぶのが普通だと『さいかい』は初めて知らされた

「まあ、張りつめちゃってるよりはいいんじゃないの」

そういうとせまる湾の入り口に最新の注意を働かせよと妹達を叱咤したが、見上げる先にいる騒がしさを超越した行動を続けるアイゼンハワーの姿に内心は不安あった

「こんな騒がしいヤツ…知ってる限りじゃあのビックＥってヤツ以来だ、大丈夫なのかな」

日本における原子力空母の第二の寄港地とも言える場所は、日本に初めて原子力空母が入港した土地でもあった
その時の騒ぎは、海保の記録にも燦然と残されている
読書が趣味の『ことざくら』は自分たちの仕事の中、姉たちがこなした歴史に大きく残った事件を良く聞き知っていた

佐世保港原子力空母寄港反対の大暴動
民社、公明、左翼にさらには学生団体と市民団体、合わせて四万七
千人もの日本人が原子力憎し！アメリカの行うベトナム戦争への前
線基地化許すまじとぶつかった
新年明けたばかりの佐世保市は今では考えない非常事態の中にあった
Ｃ１１機関車に満載に乗った寄港阻止の戦士達はヘルメットに顔隠
すマスク、ゲバ棒に角材で武装した姿で隊を組みアメリカ軍基地に
迫った
一月十七日平瀬橋での大激突で放水車及び催涙弾を発射するという
大騒ぎになり、市民にも数多の被害を出す
その後に開かれた各党の抗議演説の広間には、今日のように赤い旗
が無数立ち上げられた

日本を震撼させた暴動騒ぎの中、進取の精神を冠した空母は堂々と
入港した
今日来たアイゼンハワーとなんら変わらぬ笑顔で

「ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ！日本の友よ」と

それに対してどう反応して良いか心の準備もできなかった当時の海
自艦艇と海保船艇
人と同じく戦後の日本に産まれた護衛艦達もまた、アメリカの艦艇
に対して良い思いを抱いてはいなかった時代に

人にも艦魂達にも大きな波風を伴い入港したビックＥの記録

「人の騒ぎは少なくなっくても…私達には嵐を起こしそうなヤツだ
な」

前を行く、巨漢の魂

騒がしく挨拶を交わす姿に『ことざくら』は不安の溜息を漏らした

青天に恵まれた佐世保にも日差しの強さとは別に冷たい北風が届くようになっていた
水面を走る冷えた風、湾内の深い水深、濃い水色の上をアメリカの艦艇は次々に入港し
アイゼンハワーが三十五番錨地に止まると、続いて潜水艦の二隻、イージス艦一隻が基地に入り、各々の錨地と停泊のバースに付いた

後を追う形で『くらま』『いかづち』『ゆうだち』さらに潜水艦の姉妹二人それぞれのバースに付けられ、一通りの大仕事が終わったのは昼を回った頃だった

アイゼンハワーが停泊した場所は海自のバースからでは少し遠い、佐世保基地から真っ直ぐ南に下った口木崎の沖合にある錨地ポイントだ。原子力系の艦艇つまり潜水艦などもこの近くの錨地に停泊する事になる
原子力艦艇である事で佐世保港、町に近いバースに付ける事が出来ない事もあるが、三百メートルを超える巨漢を横付けできるバースがないのが本当の理由でもある

何処にも手足を付けられない海に浮かんだ形で佐世保湾に停泊するのは、せっかくの寄港なのにかなり寂しい形ではある
そんな相手を気遣うべく『くらま』は原子力艦艇の寄港があればいつもしているように相手の甲板に佐世保の艦魂達を揃えて歓迎の挨拶に伺い、敬礼と挨拶を交わしていた

「佐世保基地にようこそ。司令艦ドワイト・D　アイゼンハワー殿、貴女方を歓迎します」

黒のダブルスーツに着替えた『くらま』は目の前、バラ色に舞い上がった満面の笑みで自分を見つめるアイゼンハワーに親愛の挨拶と敬礼をした

「ありがとうございます!!歓迎感謝ですぅ!」

アイゼンハワーは極めてご機嫌だった
演習が終わりしばらくココに居続けが出来るという事で身も心も有頂天の様子、待ちに待った愛の時間への暖気は十分行き渡った心と体、敬礼もそこそこに飛びつくように『くらま』の手を握ると

「ああっやっとアイクって呼んでくださるんですね!」
「そんな事を、部下達もいます」
「そうですわ!だから!早く二人きりになってぇ」

甘い声が唇からこぼれ出す指令艦の姿に顔を背けてしまう、駆逐艦カーティス・ウィルバー艦魂クーンと潜水艦シカゴ艦魂ミラー我関ぜずの顔で微笑むだけの潜水艦コーパスクリスティ艦魂マリア到着早々、司令艦の暴走を止める術がないアメリカ艦魂達の前、移動のための輝きは一瞬にして開かれ制止の声が光りの粒を振り払う勢いで飛んだ

「何を言っているのですか!!アイゼンハワー司令艦!」

へばりつくように『くらま』に迫り、危うい言葉を吐き出しそうだった所に割って入ったのはエセックスだった

「司令艦殿しっかりしてくださいませ！」

さらに隣には共に佐世保に居続けでアイゼンハワーやエセックスと同じく『くらま』を狙っているジュノーとハーパーズ・フェリー階級的には中佐クラスの二人も控えた物言いと最敬礼をしつつも顔に鬼が宿ったかのように赤くなって

「日本海軍（海上自衛隊）の皆様が困っていらっしゃいますわよ」と渾身の釘をさした

「あら、出迎えはいらないって言ったのに」

迫る部下達の手前『くらま』から体は離したものの手は握ったまま、表れた佐世保駐留古参組の者達に不満げに口を曲げてアイゼンハワーは嫌味の挨拶を返した

「仕事が大変でしょうから挨拶にはこなくてよろしい」と先に電信していた事で警戒されたかと顔を歪ませて、自分にライバル心剥き出しの視線をくれるエセックスをにらみんで

だがエセックスもココでは負けてはいられない

相手が合衆国海軍の空母十司令艦、（艦魂物語ではまだＧｅｏｒｇｅ・Ｈ・Ｗ・ｂｕｓｈが誕生してません。原子力空母司令艦はＲｏｎａｌｄ．Ｒｅａｇａｎまでです）とはいえ決して負けられない

日本に配備で、長くこの地に居続けた間に募らせた『くらま』への想いは半端じゃない

煮えたぎったジェラシーを封じ込め冷静な嫌味を切り返す

「いいえぇ、司令艦がおいでになるのに、ご挨拶もしないなんて共にステイツに尽くす艦魂として失礼じゃありませんか」

手を離さないアイゼンハワーを鋭角に突き上げになった心、見せな

い怒りを笑わない目でエセックスが告げる

しかしアイゼンハワーだって負けられない
念願の麗人、東洋の麗人ナンバーワン『くらま』との逢瀬を手放せるわけがない
ただでせさえ合衆国を代表する司令旗艦の魂として一所に留まる事のなく世界を動き回る仕事、それも国家の護りとして厳しい規則の中での廻ってきた奇跡の大チャンス
これを逃して次があるなんて甘い考えは頭の片隅にも残ってない、むしろこれを最後と気を挙げて乗り込んだのだから

相手の冷笑の前、アイゼンハワーも冷徹にしながら愛嬌のよい丸い目の中に怒りの炎を宿したまま口だけで笑うと

「私はぁ、司令艦同士としてね、今回の演習を通して愛称で呼び合えるほど親しくなったの、だ・か・らぁ、部下の前でも遠慮なさる事ありませんのよ」

いつそんな事がと驚く海自艦魂達の前、微動だにせず切り返す『くらま』

「ええっ司令艦『くらま』と、何度も指導のために呼んで頂き演習中も緩むことなく気を引き締めさせて頂きました」と
すでに暴風圏の中、うかつな言葉は発せられないと警戒している『くらま』は目で回りにもう一度敬礼と指示をし注意をそらそうと試みるが
相手の艦魂達はヒットーアップ、花の嵐の戦いはココに並ぶ海自艦艇艦魂や、合衆国海軍艦艇がいる事など世界の果ての、端っこの存在で最早見えていない

ココにいるのは自分と『くらま』それを邪魔する恋敵
世界は『くらま』とアイゼンハワー、それにエセックスで回っている
という状態

「そうでしたわね！！私ときたらエキサイティングしてしまい貴女の名前を何度も呼んでしまいましたわ！！それ程に演習は有意義で濃い時間でしたわ！ですから私の事を遠慮なくアイクと呼んでくださいませ！」

堅い態度を保ち平静を続ける『くらま』の姿もなんのそのまったく話しが通じていない
むしろそれによって濃い関係を深めたかのようなニュアンスに話しがすり替えられている

「さあ！あの演習の夜の時のようにお呼び下さい！」

意味不明な言論で自分より身の丈のあるエセックスに向かって胸を張って勝ち誇るアイゼンハワー
しかし相手も引きはしなかった

「そうですか、ですけどね、ええ。な・ら・ば、私はずっと佐世保にて日米の架け橋となって親好を育んで幾多の夜がありますわ！さあ演習から戻られた今は普段通り愛称で呼んで頂いてもかまいませんわ！司令艦『くらま』」

小さいくせに反れ返るほど顎挙げのポーズを取るアイゼンハワーに、言葉尻を掴まえたエセックスは自分の夢色に塗り上げた言動で切り返し小さな司令艦を除けるように体を近づけ

「さあ、リーバと呼んでくださいませ！」

エセックスの後ろには、自分たちの代表である彼女をプッシュしなからも本命は自分と目を潤ませるジュノーとパーパーズ・フェリー火花散る愛の戦いは、ココに挨拶に集まった他の艦魂を置いてきぼりの状態でぶっちぎりの発進をしていた

「激しいわぁ～～～」

薔薇達のゴールデントライアングル
蚊帳の外の護衛艦達の中、演習参加で前列に並んだ笑顔の混乱誘発者『はるさめ』は頭をフワフワと動かし上弦の月を横に並べた目で『うずしお』の顔を見た

「ええわ、司令…モテモテやで」

目の前、数多の艦魂に言い寄られる自分たちの基地司令『くらま』の姿を見る『うずしお』は感動に拳を震わせていた
モテモテ東洋一（潜水艦部門成立によって）を目指している潜水艦艦魂の『うずしお』は深く掛かった前髪の下で気を吐くと、目標に対する敬意を口にした

「ワシもなるで…絶対になったる…」
「お姉ちゃん…」

『うずしお』の隣には燃料補給も兼ねて横須賀に帰る前、佐世保に寄港した妹『なるしお』が、同じように長く顔に掛かった前髪の下で姉の言動、行動を見つめている

「『なるしお』…よう目に焼き付けとけ！いつか司令みたいにモッテモテになるんや！お前もワシとモテ道を走るんや！」

「はい…」

内気でしられる『なるしお』は演習帰還で前列に並ばされ、お熱い戦いを目と鼻の先で見ている事に心が追いつかないところに来て、姉の気ハイテンション発言で望んでないのにモテ街道を走しる事になりかねない自分の将来に足が震えている

萎縮した姿で首を小さく左右させながら助けを待つという可哀想な姿の妹だが姉である

『うずしお』は遠慮なく連呼する共にモテ道を共に走れと、あまりに滑稽すぎる並びだが、目の前で合衆国を代表する空母の艦魂がこんなままでは、挨拶行こうの会話が成立するにはまだ時間が掛かりそうな状態だった

「こまったわね」

そんな騒ぎを

一線後ろで見ていた『しまかぜ』は『くらま』を助ける船も出しようのない状態に軽めの息を一つ着くと、まだしばらくは続きそうな騒ぎを尻目に帰港してから一言も口を聞かない『いかづち』に声をかけた

「お疲れ様、大変な演習だったようだけど、よく頑張ったわね」

ショートボブの髪を揺らし、優しい笑みで『いかづち』の肩を叩いた『しまかぜ』はいつもなら騒ぎに飛びつく側の『いかづち』が落ち込み顔を下に向けて無言を守っている事を気にかけていた

「どうしたの?…『こんごう』の事心配してるの?」

覗き込む『しまかぜ』の顔を避けるように、小さく首をふって

「わて…わて…」

唇を何度も噛んで口ごもる『いかづち』

肩に手を乗せたままの『しまかぜ』は今回の演習が、実験兵器を使ったものでそれが『こんごう』に熾烈な戦いを強いるものであった事を報告ですでに知っていた

その場に立ち会った『いかづち』が演習の結果こそ「良」を出すことができたが、最善を尽くしながらも昏倒し倒れた『こんごう』の事を思って何も語れない状態になっているのだと考えていた

「大丈夫よ、『こんごう』も直ぐに戻ってくるから」

「ちゃうねん!」

励ましの言葉をかけた『しまかぜ』肩に乗せられていた手を『いかづち』は、はね除けた

「ちゃうねん、わては」

軽く跳ねられた手、相手の過剰な拒否反応に見開いてしまった『しまかぜ』の顔を見て『いかづち』は、声に出して自分の思いを叫んでしまいそうになった

粉川を好きになってしまった事を、だけどこんなところでそんな事をぶちまけられない

涙目の自分を封じ込むように、舌をかみ切らん勢いで口を閉じきつく唇を噛んだ

あのとき

見てしまった

『こんごう』と粉川の口づけを
そして感じてしまった
わずかにつながていた状態の中で『こんごう』の唇を介して自分の
唇を濡らしたあの感覚を
それ以上の感情が流れ込む意識の濁流の中で
人を愛した艦魂達がいた事を知ってしまった
先の大戦を戦った姉達の記憶、焦がれんばかりの熱い想いと、裂か
れんばかりの悲しみの別れとを
『いかづち』の想いは大きくなっていた、艦齢、人と船、色々なも
のを越えてでも愛し合える事を見た事で
これから三十年の間にもし、前の大戦のような事が起これば自分た
ちを想ってくれる人はいるのか？共に愛を持って戦ってくれる人は
いるのか？
愛されない護衛艦なのに
でも近くにいてくれる人、自分たちをわかってくれる人に巡り会え
たことに
粉川への思いは募っていた
私を見て欲しいと
私を愛して欲しいと
宙を彷徨う『しまかぜ』の手の前『いかづち』は目を合わせられな
い姿で

「ごめん『しまかぜ』はん、わてちょっと具合悪いんよ」

苦しすぎる言い訳をしたが、勘の良い『しまかぜ』を騙す事など出来ようもない失態の前で『いかづち』は小さく自分の身を丸めてしまうほど項垂れた

「『いかづち』」

『しまかぜ』は声をかけながらも『こんごう』と彼女の間に何があったか、そこに粉川が関係している事を咄嗟に感じ取っていたが、今ココで話す言葉はなかった

沈黙の重い二人、それを背中越しにしっかりと聞き耳を立てる『はるさめ』

「愛は誰にでも平等ですよ」

下がった『いかづち』の顔を、銀色の瞳はいつの間にか二人の間に立っていた

足音もなく、静かに流れる風のように立っている

神秘の存在のように赤のスータン、軍属とは思えない出で立ち黒髪の中に紫の影を写す長髪の彼女は、微笑みのまま背を丸めた『いかづち』の手を取ると

「貴女には隠しきれない愛が見える」

聡明さを十分に理解させる、透明感ある流暢な英語で語った

心の底を読む瞳に、顔を上げた『いかづち』の涙に濡れた目が合う、その涙を掬うように彼女は話しを続けた

「私にそれを教えてください」と首を傾げて
優しい笑みの前、相手の胸に小さく輝く階級章に気がついた『しまかぜ』は姿勢を正し敬礼した

「申し訳ありません！騒がしいことになりコーパスクリスティ大佐殿」
白銀の目は笑う
「貴女の愛も見えますよ」と
隠された心の想いを抉り出す言葉を『しまかぜ』にも告げた

「貴女の愛も、貴女の心の奥にある想いも是非に教えてくださいませ」
艶やかな唇に宿るもの
佐世保に集まる艦魂達に花の嵐は巻き起こる

第六十六話　花の嵐（後書き）

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～外伝の外伝　港の働娘その２

氷川丸の思いは風の中に乗っていた
曳舟、タグボートの魂『ぽんぽん』の言葉に思い出したものは
あの時の日本

光の輪を表し彼女達のところに飛ぶ間に、時間の海をさかのぼってゆく

一九四五年八月十五日
日本は負けた、負けて何もかもを失ってしまった
その日を氷川丸は舞鶴で迎えていた
着慣れない海軍の服は最後の日まで自分の体にしっくりする事はなく、すすと汚れにまみれ色あせた自分の姿だけが絶望の戦いの終わりを聞いていた

「なんのために戦ったの…」とそれまでの道のりを、苦しみの中日本に戻った日の事を思い出していた

あの年の二月に氷川丸は戦争中三度目の死線をさまよっていた、十二番船倉に進水した海水、それを引き起こした船尾への触雷で背中を抉られ止まらぬ血と、肉に海水という塩を塗り込まれる激痛の中でただ日本を目指していた

体を重くする塩水は怪我に苦しむ氷川丸を何度も嘔吐させた、そのたびに意志は薄れ
入れ替わるように鮮明な
妹達の声だけが頭の中で響き続けていた

「私達は客船だよね」

シンガポールから日本へ
旅を楽しむお客様を乗せるという仕事ではなく、傷ついた兵士と未だ戦争の負けを認めない日本軍のために補給を腹に抱えていた
戦うための燃料も事欠く軍のために大量の重油缶を積み、食料を積み
純白の白鳥と呼ばれた自分をどす黒く汚し続ける血の香りの中で、
何度も妹の声が響く

「姉さん、私達は客船だよね…」

一年前、トラック島の空襲で沈んだ妹平安丸、その死は簡単なものではなかった
アメリカ軍の空襲を受け、燃え続けて転覆した
あれほどに震え、行くことを恐れてたトラック島で
もう一人の妹、日枝丸もトラック島への物資を運んだが故に死んだ

特設潜水母艦となった二人の妹は、人ではなく武器を運んだ末に死んだ
それはもっとも望まない死であり、考えた事もない死だった

「そうよ…私達は客船よ…私達は、こんな事する船じゃない…」

客船だった
戦いを仕事とする船ではなかった、旅と人の喜び笑顔を運ぶのが生

きる道だった

それが三姉妹の誇りだった
思い出に瞳が潤む中、移動の光が消え始めた

氷川丸が降りたタグボートの上はすでに大荒れの状態になっていた
何に荒れているかというと
タグガール達、彼女達特有の集団心理によって行われている「励まし合戦」で

彼女達は常からして元気がである事が生き甲斐の魂達だ
海の男に娘がいて、海が大好きで大好きで大好きだったらこういう子になるんじゃないかと思うほどに
だから誰かが落ち込んでいたりすると、あの手この手と使って励ますそう、あの手この手と使って
そしてそれが脱線して大抵大変な事になり、泣く事になる…集団で

そうなると一時間は手がつけられない
集まったタグガール達の中に舞い降りた氷川丸は、急いで声を掛けた

「みんな、こんにちわ、ちよっと落ち着こうか」
幼稚園の保母さんよろしく、長身の自分より遙かに百四十センチ代小さな身の丈の彼女達の間を歩く
しかし、やはり氷川丸の到着は少しばかり遅かったようだった

並んだタグガール達は順番に『ぽんぽん』を励まそうと頑張り過ぎて…おかしくなっていた

「ひどいよ『ぽんぽん』悪いのは顔だけだと思ってたのに…頭もだなんて」

囲みの真ん中、小さく体育体育座りをして頭までを丸め込んでいる『ぽんぽん』に励ましのジョークを飛ばしたのは『みんみん』頭のてっぺんに引っ詰めを作った髪を大きな尻尾にして揺らしながら踊る

「ちょっと『みんみん』それ励ましてないでしょ！」

励ましの逆回転が始まってるのに気がついた氷川丸が注意するが

「ひどいよ『ぽんぽん』短いのは足だけだと思ってたのに…手もだなんて」

「それ励ましじゃないでしょ！！」

『みんみん』の後ろでケチャダンスを踊ってまっていた『きんきん』の言動は大幅に脱線していた

悪気はないのだ、彼女達は

なんとか励まそうとして冗談を考え過ぎて空回りを始めているのだ

「すごいよ『ぽんぽん』長いのは胴だけだなんて…足みじかいのに」

エスカレートしてゆく「励まし」相手の欠点なのか美点なのかも混同されていってしまう

氷川丸は懸命に一人一人に話しをしたが無理だった

もっと早い段階でここにきていればこんな事にはならなかったのだが、逆回転を始めた励まし合戦をとめられると彼女達は泣いてしまう、津波のように

「ひどいよ『ぽんぽん』なんで笑わないの…悲しいよぉ～～」

原点に返った
『ずんずん』の一言で津波は起きみんな一斉に泣き出した

こうして氷川丸は丸一時間の休憩に強制的に入る事になってしまった

次回をかくまえに一度氷川丸さんに合いに行ってこようと計画してます
この話しも楽しみにしてくださる方が多くて嬉しいですから
期待に応えられるように、彼女とお話してまいります

第六十七話　一つの光（前書き）

一ヶ月オーバーのブランクにて本伝再起動～～
今年もがんばりますぅぅぅ
今年中に完結をめざしますよぉぉ～～

第六十七話　一つの光

護衛艦『くらま』の後部ヘリ甲板から見る佐世保市内はすっかり寄るの彩りに変わっていた
クリスマスの前哨戦となるこの季節は寄るの景色に赤や緑の花を輝かせる
佐世保駅の前町になる万津町は新年を迎えれば朝市ぜんざい会を催す活気のある場所だ
近年では少しコジャレタカフェなども建ち、口コミ情報などを発信していたりもする
当然そういう場所が増えれば彩りの花も増えるというもので、寒さの中をクリスマスという楽しみに加速する風景は誰の目にも楽しく写っていた

係留された場所から見える景色は米軍の赤崎貯油所、真横にアメリカ海軍古参の艦艇であるゼウスが付けている
その向こうには佐世保重工の巨大クレーン達が光らせる白い輝きが星と重なって見える
さらに目を町に向けていけば護衛艦達の並ぶ立神桟橋、その向こうの岸壁はアメリカ軍が占有する佐世保基地が見え
並ぶ艦艇

「お疲れ様でした」

海保基地、自分の止められた場所から護衛艦達の長い影を見つめていた『ことざくら』に陶器で出来たピンクのマグカップを差し出したのは『ちくご』だった

マルハ物流など真っ白なコンテナ型倉庫の多い海上保安部の間の絵に並ぶ、白の船体
ココ佐世保に詰める巡視船の中では大型の部類に入る『ちくご』は３５０トン級の巡視船だが、昼間『ことざくら』が目にしたアイゼンハワーに比べたら小さな船としか良いようもない
差し出されたカップを受け取りながら
「いつもの事だけど…疲れました」
素っ気ない声で返事を返す『ことざくら』にストレートの長い髪、前髪を眉頭に切りそろえた『ちくご』は聞いた

「似ていた?アイゼンハワーさん、ビッグEに?」
薄いピンクの唇が嬉しそうに
短く神を切りそろえたボーイッシュな『ことざくら』は姉にどうぞと、自分の隣を開けて

「ビッグEは見たことがないですよ、写真で見るのは艦体だけですし」
「顔は見たでしょ、今日来た彼女は」

隣に座った『ちくご』はビッグE入港を経験した事のある巡視船で、この佐世保保安部は元より海自でここに詰める船の中では最古参の船艇
ちなみに次点はなんと佐世保基地の色恋ヒットメーカーである『いそゆき』で、その次が『くらま』という順番だったりもする

『ちくご』は星空に目を細めながらビッグEが来た日の事を思い出していた

あの年のあの日、彼女には佐世保湾内に出動待機がかかり三十五番錨地付近まで出ていたた

３５０トン級、いえば満排水量６００トンの写身（うつしみ）である船体は当時の日本沿岸を警備する船としてはそれなりに立派な体躯だったにもかかわらず
自分が子供のように見えるほど巨大だった原子力艦艇の申し子エンタープライズの姿に今日の『さいかい』以上に目を丸くして呆然としたものだった
姉の昔を懐かしむ横顔に、察しの良い『ことざくら』は思っている事を言い当てた

「子供みたいなヤツでしたよ」と

沖合、海保の保安部が詰める港からは遙かに遠い三十五番錨地に目を向ける『ちくご』に肩と首を鳴らせて、先輩の苦労を実感しましたと見せながら

「『さいかい』とかわらないぐらい子供でしたけど、大声でご挨拶演説をかましてましたよ」
「『さいかい』と同じぐらい？でもけっこういい歳なんでしょ」

思わず顔を見合わせて笑う二人
船の魂達は容姿と年齢が一致しない
良くあることだが、結局姿だけで中身を判断する事が出来ないのだから余計に混乱する
「あぁだいぶん向こうの方が年寄りですよね。二十は軽く上の歳だって書いてあったような」

アイゼンハワー入港前に資料のチェックをしていた『ことざくら』は人差し指を揚げて思い出したように答えた
『ちくご』は笑いながら

「佐世保護衛艦隊司令艦の『くらま』さんよりも十一歳も年上なのよ」
「そうなんだ」

意外だっという顔は目を見開いて立神に並ぶ『くらま』に目線を移した
海保と海自は同じ港に身を浮かべているのにそれ程仲が良いわけでもなかった
ただ、一時の昔に比べればお互い日本国に籍を置く者同士として挨拶などはきちんとかわしていた

今回も演習に向かう前の日に『くらま』は海保の保安部船艇の代表である『ちくご』の元に訪れていた

「入港、出港に際し色々とお願いする事あると思いますがよろしくお願いします」

礼儀正しく頭を下げて挨拶に来た姿を『ことざくら』も見ていた

年に何度か挨拶にくる護衛艦『くらま』、その魂である『くらま』の姿には海保にもそれなりにファンがいた
なにせ長身、１８０を越える身の丈ではあるが荒々しく筋肉質という事はなく、スマートな紳士的な態度と言動
キレイに纏めたオールバックの髪に美しい顔

国防という最上級の仕事につき日本国の船達にとって頂点の者である『くらま』だが、一度として海保の重鎮、特にこの保安部の長老である『ちくご』を自分の元である寄宿舎の執務室に呼びつけるという事はしたこともない姿勢に目どころか心を奪われる者が多いのも仕方のない事

そんな紳士的で大人な『くらま』より年上のアイゼンハワーの幼い姿は対照的すぎた
身振り手振りから、区別無く自分の周りを走る船立ちに挨拶をしていた姿などを『ことざくら』は愉快な出来事だったと語る

「結構の年寄りなのにね、落ち着きのない感じに見えましたよ」
「アメリカの空母で、まともな性格の人は今のところ横須賀のホーク大将だけね」

緊迫した現場の中に怒った喧噪に『ちくご』も笑みを浮かべたそうはいえども全ての大将に出会ったわけではないけどと付け加えながら
前に入港したＡｂｒａｈａｍ　Ｌｉｎｃｏｌｎの事などを思い出し、大仕事だった割りにふざけた相手の姿をマグカップの盃に笑い話を続けた

「ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ　日本の友達ときたもんです、ご挨拶なもんですよ。まったくいい気なもんです、原子力空母がくればこちとら夜も眠れぬ大仕事だってのに」と、まだ熱いコーヒーに息を吹きかけながらうんざりと手を挙げてみせた

「ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇか…」
思い当たる言葉に顎に手をおく『ちくご』
「姉さんの時はもっと大変だったんですよね」
物思いに沈みそうだった姉に、自分以上の苦労を味わったであろうと年を越した気遣いを示す『ことざくら』

「そうね、あれは本当に大変な出来事だったわ。でもね私達以上に大変な思いをしたのは海自の艦艇達だったわ…」

『ちくご』の言わんとせんことに『ことざくら』は目を閉じた

１９６８年、前の戦争から２３年目に日本にやってきた原子力航空母艦エンタープライズ
原子力により市民、軍人共々に死を与えられた日本、長崎にとってこれを迎えるのは耐え難い出来事だった
そして、その出来事に直面した再生日本国の海の防人達と、船達

１９４５年大日本帝国は世界に敗北し、日本国民の誇りは根底からへし折られた
帝国海軍が滅亡し国家を護る全ての機能が剥奪された年から、この海洋に漂う島国の護りが再び創設されたのは復員作業をしながら海を開く掃海業務を経て１９４８年、海上保安庁として発足する

細く小さく、何もかもを失ってしまったこの国の
四方の海を護るには至らなくなってしまった船達

日本には国土を護る船はもうどこにもいなかった時代を過ぎ

１９５２年、大戦から7年の時を経て海上自衛隊の前身である海上警備隊が創設された
多くの帝国軍人がそのままスライドする形でこの組織の中核をなし米海軍のお古である艦艇を駆り、日本を、日本国の海洋を護る組織は立ち上げられた
その年に海保と袂を分け、１９５４年正式に防衛庁として創設された

当時の海自の艦艇はアメリカ海軍からの出向組で魂達はみなアメリカ人だった
それも日本を愛してココに来たというわけでもなく、ただ払い下げ

られた貸し付けの旧式艦艇達はなかなか言うことを聞かなかった
なれない船に四苦八苦しながらも国の護りを勤めた「人」達と、アメリカという母国を持ちながらも余剰として払い下げられ敗戦国の艦となった「魂」達の溝は大きかった

それが国産船艇を揃えた海保の魂達と、海自の間に出来た最初の溝にもなっていた

「大変な時代だった事、よく教えて貰ったわ」

『ちくご』は思い出の姉達の姿に俯いた
姉達の名前は統一性のないバラバラのものが多かった
随時「人」はそれらを分別していき、業務別の区分けはすぐになされたが
誰も彼もが元をたどれば所属も業務も産まれも歳もバラバラで船体さえ統一されない寄せ集めの者達ばかりだった

全てに統一感がなくバラバラだった理由は
当時海保の船艇として働いた者達が、帝国海軍の鎮守府などに残された小型艦艇の多くで成り立っていたからだ
本当に小型のものばかりで、上はせいぜい３００トン級で下は港に入る軍艦の曳舟だった者達や陸軍の持っていた交通船などがメインだった

大戦を生き残った魂達が懸命に日本の海と港の仕事に徒事していたのだ

なのに新たに創設された海軍（海自）からは弾き出される形となっていた
しかも占領軍から来た艦艇達は戦後すぐに日本の港を占拠し、数こ

そ少なかったが生き残っていた帝国海軍戦艦や巡洋艦の魂をいたぶり倒すという暴挙を侵した者達の仲間
そういう思いから決して相容れる事は出来るはずもなく

人の思う防衛と、魂達が求めている絆は本当に途切れたのだと誰もが実感した出来事だった

「そういう思いがまだいっぱい、どこの港にも残っていた時代に彼女はやってきた」

帝国海軍を滅亡へ走らせたアメリカ合衆国海軍航空母艦七代目エンタープライズ
鬼人のごとく働きアメリカ海軍太平洋艦隊旗艦としてミッドウェー、南太平洋戦線、フィリピン海戦、硫黄島、沖縄、ついに日本本土を敗北に追い込む切っ先として働き続けたビッグＥ

その彼女が１９６０年に解体され魂は消え
翌年原子力空母八代目エンタープライズとして産まれ１９６８年に佐世保にやってきた

戦後２３年、防衛庁創設から１４年足らず。外来艦艇の間を縫うように作られた国産艦艇である『ゆきかぜ』そして日本の護りの要として作られたミサイル護衛艦『あまつかぜ』と出会った時
彼女は臆する事なく姿勢正しい敬礼して言った

「ｇｏｏｄ　ｍｏｒｎｉｎｇ日本の友よ」と

「心配ですか」

思い出に顔を俯かせたままの『ちくご』に『ことざくら』はマグカップを下ろして聞いた

帝国海軍の正統後継者である事を自負する海上自衛隊
それが故にのしかかる重責と過去に対する想い

栄光の帝国海軍艦艇戦艦や巡洋艦の魂達
戦勝のアメリカ海軍艦艇達との激突
占領軍の艦艇達からの執拗ないたぶりに合わされうえに、あれほどに護ろうとした人には役立たずの海軍の遺産と罵られ鉄くずに変えられていった者達こそが

自分たちの姉であると信じる海自の魂達

この思いが、もし現在の護衛艦達に受け継がれているのならば
今でもアメリカ海軍を許すことは難しく
本当の意味で国民を護る艦として存続する自信を持てているのかは闇の中だった

こぼれた自分の髪をかき上げて『ちくご』は悲しそうな目をした
「心配しても仕方のない事よね。私達はこうやって生きていくしかないのだから」
袂を分かっても同じ職務にある仲間、その意識は『ことざくら』にもあった

「ええ、私達の仕事が変わる訳ではありませんから」

二人は立神の桟橋Ｔ２に付けられている『くらま』に目を向けた
騒がしかったアイゼンハワーの入港、今日は彼女達の歓迎会が行われる

今は昔の事を海自の艦艇達がどう思っているのかを知る術はないし、聞くのは勇気のいる事だ
現在も国防の矢面に立つ彼女達が、現在の同盟国であるアメリカの艦艇達と過ごす時間をどうしているかなど、考えても仕方のない事だった

「改めまして佐世保基地への寄港、心より歓迎致します」

整えられたテーブル席
佐世保基地内にある艦魂達の寄宿舎の一階はアイゼンハワー寄港のパーティーのため彩りを変えた素晴らしい会場と化していた
飲食の必要性は本来ない魂達だが、食べることも呑むことも余暇の楽しみのように出来るのは良いところであるし
海外の艦魂達は早い時代からこういう事を取り入れ、お互いの親睦会のように使っている事もあり国際的にも軍事的にも多くの艦艇が行き来する佐世保では必ず行われていた

同じように横須賀では国際港横浜と遜色のない程に『しらね』が歓迎会を催す
同盟国や多くの艦艇の出入りがある横須賀では、それに似合った歓迎会と共にもてなしの心を大きく震った場所は海外艦魂にすこぶる評判が良く日本につけば、横須賀か佐世保は必ず行きたい港だという海外にも名のとおる場所になっていた

ただ、佐世保に寄港したいと願う艦魂達の理由には別の思案なども多分に含まれていたが

「乾杯いたしましょ～～」

それほど呑んでもいないのにすでに自分の中から発生する甘み潤滑剤で呂律が緩みまくっているアイゼンハワーは、目の前に立つ『くらま』に後少しで抱きついてしまうような距離

彼女の隣にはエセックスが笑わない目のまま司令艦の背中を、服を引っ張るように座っている
さらに隣にはパーパスフェリーは目だけでそれを追っている

面前の貴賓席で起こっている異常事態に『むらさめ』は乾杯から向こうなごやかムードとは別のテンションに喜劇でも見るような気分になっていた
アイゼンハワーの何度目かの乾杯要請の前、『くらま』は姿勢も態度も崩すことなく乾杯し続ける

「ああやって酒に強くなってくんだろうなぁ」

歓迎会なので一応制服をきちんと来ているが、すでにネクタイの根っこを弛めている『むらさめ』は日頃から酒に強くなりたいと考えているが
歓迎会の酔いつぶし作戦を実行するアイゼンハワーを見ながら
我らが司令艦がどうして酒に強いかのか?その一端を見ていた

面前の席がそんな感じなので後の者達は割と自由に飲み食いをするスペースの中
『いかづち』は一人俯いたまま壁を背に立ちつくしていた
大食いはあまりいない艦魂
そのため少しの料理を貴賓用に仕上げ後は適当に用意するという仕

事を『ゆき』姉妹達と仕上げた彼女は終始元気のない態度だった

演習から戻ったばかりだったので料理の担当は外して貰えるハズだったが買って出た
少しでも時間があいてしまえば『しまかぜ』に、心の奥にしまい込んだ思いを見つけられてしまうのではという恐怖があったからだ

事実、演習から帰って以降元気のない『いかづち』の何かに気がついた『しまかぜ』は早期の問題解決のために動こうとしていた
それを『はるさめ』がのらりくらりと逃がしてくれ
実直なミサイル護衛艦らしい彼女の行動から逃げるためにも料理を一手にまかなった

今はその『しまかぜ』が貴賓席『くらま』の後ろに付きっきりだ
姉である『むらさめ』は例の「粉川が好き」という告白を聞いて以来できるだけそういう話題には加わらないようにしているのか、『いかづち』の顔色から何かを察したように近づいては来なかった

『いかづち』は見てしまった

そのうえ「人」のいう機械的リンクの中で『こんごう』の見た世界の片鱗を見、さらにつながった頭のままで粉川との口づけを、自分の唇に感じてしまっていた
下ろしたグラスの縁にのこる自分の唇の跡
何度も指で触ってみる

あのとき、粉川の唇を感じてしまった
自分たちとは違う、「人」その中にある男というものの体を初めて自分の体で受け止めた感覚的に脳が停止してしまうのではないかという衝撃を受けた

平常心を装って『こんごう』を彼女の部屋まで連れて行けたのは奇跡的な自尊心のおかげだったが、思い出すほどに心に募る思いと想い故の闇は広がり続けていた

「わて…どうしたら良いのかな」
「貴女の愛は深くて淡い」

背中を壁に一人グラスを持ったまま俯いていた『いかづち』の顔を覗き込む銀色の瞳
「はっわっ！コッコーパスクリスティー大佐！！」
近すぎる顔に頭を壁にぶつける程の勢いで姿勢を正し『いかずち』は敬礼した
思いに没頭しすぎ気配の微塵にも感じなかったとはいえ、これ程に近くにいる者に気がつかなかった驚きでぶつけた後頭部の音は鈍く響く中での返礼

「マリアで結構ですよ。Ｍｉｓｓ　ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ」

泡を食っている『いかづち』の姿に動じることのない相手
銀色の髪のした、同色の目というよりも灰鉄の輝きの目は黒目の部分が浮いているようにも見える
睫毛は雪を乗せたよツリーの枝のよう
驚く『いかづち』の前、司教座の衣装のままのコーパスクリスティーは口だけが微笑みを讃えているようにも見える

「あの、わてもその『いかづち』でお願いします。そういう横文字の名前ってどうも馴染めなくて自分やあらへんように思うんですよ」

落ち込んだ自分を隠すように、ぶつけた頭をさすりながら
アメリカから来た艦魂にしては身の丈がそれ程高くもなく、むしろ
自分と変わらないぐらいのコーパスクリスティーに返事した

「そうでしたね、もう演習は終わりましたし気兼ねなくいきましょう」
「はあ、」

大勢の艦魂達が集うこの場にて何故に自分に話しかけてきたのか
『いかづち』は戸惑っていた
むしろ姿を隠すよう壁の一番端にて「待機」しているようにしていた自分に話しかけるコーパスクリスティーを訝しく思っていた

「そんなに私は疑わしい者にみえますか？」
自分より上位階級の者に対して（『いかづち』は二尉）ぎこちなく、距離を取った位置に立つ『いかづち』に不可思議を具現化したような灰鉄の目が言う

「私は貴女の悩みの助けになれます」
手を広げ、まるで自分の中に招き入れるように

「貴女の愛を私に知らしてください。私はきっと貴女を導く事ができる」
迷いに対する導き
確信を全身で現す者の前に『いかづち』の選べる道はなかった
まるで吸い寄せられるように、前を歩くコーパスクリスティーにただ従い会場から姿を消していった

波の上に揺れる夜景
輝きはいくつもの形を表しては海に漂う
静かな時の中で『いかづち』は自分の艦体に初めてアメリカから来た魂を迎えていた

「私達魂を感じる事のできる「人」を愛してしまったという事ですね」

逆らうことの出来ない瞳の前で『いかづち』は粉川を想ってしまった事を吐露していた
「どうして良いかわからへんの、です」

姉である『むらさめ』にも、自分の背中を押すと笑っていた姉『はるさめ』にも言えなかった本心、その全てを初めての客人であるコーパスクリスティーに話した後、とまどうような口調に戻っていた

「愛は誰にでも平等ですよ。貴女の感じた想いを彼に告げれば良いではないですか」
終始俯き、波に目を向けたままの『いかづち』にコーパスクリスティーはよどみない意見を告げた

「貴女が彼を大切と思うのですから問題ありません。むしろ告白によって貴女に与えられている時間を幸せに変えることも出来るというものです」
「でも」

押しの一手であるコーパスクリスティーの意見に『いかづち』の中には別の悩みが浮かんでいた
聖人的な彼女がまさかこれほどに自分に「恋せよ」と言ってくるとは考えていなかった

もちろん、強い力で自分を後押ししてくれる者を望んでいたし、自分の思慕を認めてくれる事が自分の中にある想いを駆け足にする大切な事である事はわかっていたが…
直情過ぎる意見故に隠されていた疑問の闇を自分で見つけてしまっていた

『いかづち』は頭のつながった状態で『こんごう』の起こした波乱を体験していた
それが本当に『こんごう』の意志で行われていたのかを、それとも何か別の意志、あの破滅の海で見た帝国海軍の魂達の意志によって行われた事なのか計りかねていた

不確実だった事実の中で
自分もまた不確実な人との関係に進もうとしていた事に気がついたのだ

「でもさ、船の魂は人と恋とか…たとえば関わりを持ったとしても、何かが変わるわけやあらへんと思うんであって」
「不安を感じていらっしゃる？」
頷く『いかづち』
更なる不安を自分で巻き起こした『いかづち』の前、コーパスクリスティーは変わらぬ表情のまま近づき手を握った

「貴女はご存じないと思いますが、私達アメリカの魂達も人との関係を持っています。それはとても深くとても長い時間の中で私達を今も導いてくれています」
初めて聞くアメリカの「人」の話しに飲み込まれる瞳
『いかづち』は言葉の続きを待ち

「その方は私の師でもあります。人との関わりを持つ事は悪い事で

はありませんよ」

かなり高い基準からの答えだった
恋する『いかづち』の人との関わりを考えれば適切ではない発言だっが
盲目の中をさらに模索の闇を行く者には一つの光となっていた

「間違ってない…ってこと?ほな、わては」
「間違っていません。人と関わることで貴女はきっと幸せになれる」

「間違ってはいない、でも正解でもないという事ですね」

二人が意見を確かめあい、携えた手に力を入れようとした時だった
『いかづち』の後ろに立った『しまかぜ』は睨む視線をコーパスクリスティーに向けながら近づいた
不意の出現にたじろぐ『いかづち』
現れた侵入者に動じないコーパスクリスティー

「コーパスクリスティー大佐、大変有用なお話しなのに盗み聞きをする形になってしまった事をお詫びします。でもこれだけは言わせて頂きます」

自分の恋を聞かれた事で逃げたい気持ち一杯の『いかづち』を尻目に『しまかぜ』は自分より背の低い神父を見据えて

「大事な事を省いた情報はただの危険な怪情報にすぎません。貴女は『いかづち』の恋心をまるで戦略に必要な行動のように語っています。同時に私的件論として言わせて頂きますが、人との関わりは流れの中にある一時のものとして受け止めるのが私達魂のあり方、深く関わるのも「恋愛」でない事が望ましてと私は考えております」

『しまかぜ』は二人が会場から姿を消した時に「嫌な予感」を感じていた
歓迎会の貴賓達の目的が『くらま』に集中している事を良いことと二人の後を追いかけていたのだ

そうでなくても『いかづち』は演習で『こんごう』との間に何かあった事を隠しているし
彼女の姉である『むらさめ』もまた触れたくない事のよう意見をつぐんでいた、さらに不敵な『ゆうだち』の態度も気になっていた

「恋いをする事と、人との関係を持つことを同一視した意見はおかしいです。間違っています」

自分を押しのけた『しまかぜ』の激昂
恋愛を否定する発言に驚きに身を引いていた『いかづち』は前に戻ってきた

「ほな、わてらは誰かを愛したりしたらアカンの？」
「粉川さんにそれを言って、困らせたいの？」

いつになく手厳しい切り返しに怯むことなく吠えた

「せやけど、『こんごう』には仲良うせえって『しまかぜ』はんがそう言って二人を押して」
「それは、課業を滞りなく遂行するために、争う事を避けましょうという意味であって」
「うそや！！」

真正面からの否定は悪い方向に舵を切っていた

自分が恋する気持ちを否定する『しまかぜ』だが、『こんごう』には再三にわたって人である粉川と仲良くする事を進めてきていたとえそれが艦隊運動に支障を来すことから『こんごう』の癇癪を反らすための言動だったとわかっていても今は受け入れられなかったそれが実った形として、『こんごう』は人である粉川と口づけを交わしたと結論づけてしまう程に
身体全体がえも言えぬ感情に震え、涙はメガネの向こう側で溢れていた

「『こんごう』には良くて、わてにはなんでダメなんや！！」

まさかの反抗、しかも何かを取り違え冷静さを失ってしまった『いかづち』に『しまかぜ』は驚いた
目の前で両手をあげ拳を握りしめたメガネが光る

「『いかづち』…落ち着きなさい」
「いやや！！『こんごう』ばかり！！ＤＤＧやからって大事されて！！わてらだって、わてだって大事にされたい！！愛されたい！！人に近くに居て欲しい！！」
「『いかづち』！」

明らかに混乱している『いかづち』の手を取ろうとする『しまかぜ』だが、反抗が突き放すように逃げる

「わてらだって国を護ってんねん、やのになんで『こんごう』ばっかが可哀想なの？そんな事あらへんで！わてらの方が可哀想や、有事が起こったらわてらは最初に死ななアカンのに」
常日頃から『しまかぜ』は『こんごう』寄りの態度を示していた
誕生の時に傷を付けられた彼女を優しく見守る姿は、どこか子供を

甘やかす母親の姿にも見えていた事
ちまたの人々は自分たち護衛艦を愛してはくれない事
ミサイル兵器の固まりである『こんごう』には色々な意味で心を助ける者が必要とされていたが…

自国の国民に愛されないという意味では『こんごう』だろうが『いかづち』だろうが変わらなかった

愛されない護衛艦
その中で出会った奇跡の人に傾く心

「撃たなかったでしょ」

『はるさめ』の言葉が電撃を受けたように頭の中を走る

この国の専守防衛という国防標語に基づけば、誰かが撃たれて初めて戦いを開始するという事になる
誰かが撃たれる
その時最初に撃たれるための数合わせとしているのがＤＤだ
反撃は最大の力を持つＤＤＧが請け負う、だから最初に自分たちは死ぬための船なんだよ、と

一度は姉の発言を自分で否定した『いかづち』だったが自分の恋心を真っ向否定された事によって
自分たちが一番に何かを思ってはいけないのではという
いつまでたっても『こんごう』の後ろに隠れた二番手の存在で、なのに最初に死ぬための船として準備された存在で

「なんでわて、護衛艦なんかに産まれたの…」

『いかづち』は涙を止められない姿を晒していた

「彼女の勇敢な心を否定してはいけません」

『いかづち』を落ち着かせようとする『しまかぜ』の背中にコーパスクリスティーの冷徹で凍った声が掛かった

「彼女により、貴女達日本海軍（海上自衛隊）は帝国海軍の時に持っていた人との絆を取り戻す事ができるかも知れないのですから」

高みを見るために
コーパスクリスティーの発言は『いかづち』の恋を推し進めるためのものではなかった
それを『しまかぜ』は理解していた

別の何かを見つけようとしている会話に危機を覚えたからこそ、恋心を否定するように間に割って入ったのだ
涙に顔を伏せ蹲る『いかづち』に背を向け視線を向ける『しまかぜ』は怒りも露わはコーパスクリスティーに迫ると

「絆？人との絆によって何がわかるというのですか？私達海自の艦艇が探しているのはの、かつての帝国海軍との絆です。人など関係ありません。魂は私達の絆をさがして」

「探しているのですか？貴女が？」

入れ替わる厳しい感情の糸、言い逆らう『しまかぜ』の言葉を絶ち、不敵な笑みと灰色の目は下から睨みを効かすように

「貴女は探しているふりをしているだけでしょう。貴女はそれがみつからなくても自分艦生に後悔するような事のないよう、身を任せ

る相手を持っている。違いますか？」

『いかづち』には聞こえないような小さな声で耳うつ刃に『しまかぜ』の心は刺し通されていた

「何を…」

震える口から問いただしてはいけないと、苦しげな反抗がこぼれる

「貴女は本気で絆を探していた「あの人」とはまるで違う。貴女の敬愛する姉の意志を貴女は踏みにじっている」

冷や汗の顔

視線をそらせない二人

「『あまつかぜ』姉さんを…」

「存じております」

静かな返事

「だからこそ、この機会に私が絆に向かう飛躍を促す役を請け負ってさし上げたのです」

自分の行動に自信をみなぎらせる瞳

「貴女ではとてもそこには届かないでしょうし、貴女は間違った優しさで日本の艦魂達の進歩にストップをかけている古い考え方そのものなのでしょうから」

固まってしまった『しまかぜ』の背中の側、涙に崩れ泣いている『いかづち』を見つめる

「私は貴方に命じたではないか、強く、また雄々しくあれ。貴方がどこに行くにも、貴方の神、主が共におられる故、恐れてはならない、おののいてはならない＊1」

横顔からでは点を浮かべたような黒目の下でコーパスクリスティーはつぶやくように言うと

「少し直接的な言葉ですが、貴女のように逃げている者にはわかりやすいと思います。貴女の姉はそういうものから逃げず、全てを共にあるものとして受け入れた素晴らしい人でしたから」

苦渋で顔を歪めた『しまかぜ』は声を絞るように

「止めてください、そんな事で私達を乱したりしないで下さい。私は姉のことは、だれよりも」

「わかっていなかった。そうですよね」

苦しみに優しさを示すことのない冷ややかな声の主は、両手を挙げて星を誘い込むように笑った

「奇跡は待つものではありません。私達はそれを起こす力を持つものである事を忘れてはいけません。そしてこの海にはその想いを残された魂を感じるのです」

そういうと佐世保の港を見回した

「私は全てを前進えと促す神の使徒マリア。友よ『あまつかぜ』よ、私は来ました」

宣言は誰の耳に届けるでもなく星の闇に消え

『しまかぜ』と『いかづち』の中に嵐だけを残した

それは『こんごう』と粉川が戻ってくることで更なる嵐として巻き起こる事になる

第六十七話　一つの光（後書き）

カセイウラバナダイアル～～英語～～～

お久しぶりでございます！！
佐世保争乱編やっと本伝に戻ってまいりました
色々迷ったりしながら書いてますからねぇ
大変ですよね

外伝もチキチキ書いてますからよかったら呼んでやってくださいませ

さて今話ではコーパスクリスティーが大暴れ
彼女は自分でも言っていたように嵐を起こすためにやってきた神の使徒です
そして新事実なんと『あまつかぜ』姉さんとお友達だった人のようです
このあたりのくだりがどこまで書けるのかは謎ですがｗｗｗがんばっていこうと考えております～～～

＊1の聖句
これは旧約聖書ヨシュア1章9節の言葉で
出エジプトからユダヤ人を約束に導いたモーゼの後を継いだユダヤ人指導者ヨシュアの「聖戦による聖断」を描いた章の言葉です
この章は聖書の中でもかなり暴力的な章で、普通の神父さん牧師さんは説法に使いたがらない章です
理由は神の名による征服を記した章だからです
エジプトの奴隷労働から解放され、神の約束された地に向かうユダヤ人達ですが、当然示された肥沃な地には先住民が住んでいるわけです

それを「討伐せよ、われヤハウェの名において」と神の名による虐殺を行い征服してゆく課程が描かれている
マジで壮絶です
前話に書いた、ダニーのエリコ（ジェリコ）の城壁の話しもそうですが、町ごと撃滅、女も子供も容赦なく殺してゆく
それが延々続く章
聖書は意外と包み隠すことなく神の名の戦争を堂々と書き綴っている本です
その中で前任の指導者だったモーゼの後を継いだヌンの子ヨシュアですが、当然大きな任命に心が揺らぎ当初は迷いまくります
そこで神は前序のように言われる
「貴方が何処に行くにも、神は共にあると」
コーパスクリスティーが『しまかぜ』さんにこれを言ったのは
『しまかぜ』さんの心内をしっかり見抜いていたからでしょうね
『しまかぜ』さんは希望を探している、その根底にあるのが『あまつかぜ』姉さんの存在です
勇気を持って物事に立ち向かう時の支えとして死んでしまってもそばにいる存在としてあるべく『あまつかぜ』さん
しかし、『しまかぜ』さんは時間の流れの名がで半信半疑になっているところがあると同時に現状に甘んじ波風を立てることを恐れているところがある
だからみんなの仲裁者でもあったわけです
ですが、壊れてしまわなければ先に進むことが出来ない時が来ている
「人」との関わりこれが艦魂達の探す絆にどうかかわってるのか
深いのか、浅いのか？
どんな形にしろ友達だった『あまつかぜ』の意志を遂行しようとしているコーパスクリスティーはある意味アイゼンハワーよりやばい人ですね
これからどうなるのか、楽しみですがヒボシはハードルがあがる一方の自分の小説設定にくじけそうですｗｗｗがんばるぅぅぅ

さて
メッセの方でビッグEの愛称「エリー」についてちよっとした抗議がありました
どう言っていいのかまよう話しなのですが、曰く
「なんで先生のエンタープライズは愛称がエンターじゃないのですか？艦魂の作品も愛称を統一してくれると読みやすいです。他の先生はみんなエンターなのでそうしていただけませんか？」というものでした
ヒボシはこういってはなんですが、日本語の間違いは抜群にあります
小説書いてるのに間違え放題だし、正しく日本語をつかってない時も多いとも思います
まったく改善のいる部分と反省しておりますが
英語もよく間違えますｗｗｗ
ですが、意味を取り違えないようには努力をしています
英語の意味を取り間違えると大変な事になるのでｗｗｗ
さてエンタープライズの愛称がエンターでないのはヒボシに言わすのならば当然のことなのです
エンタープライズとはそれだけで完成された名前です
前話で書いたようにその意味は「進取の精神」です
ウィキでしらべるならば、冒険心、計画、事業、企業に付随する名前です
しかも伝統的な名前です
ですから「エンター」と途中で斬ってしまうという事事態がまずおかしいのです
エンターとエンタープライズでは意味が違ってしまいます
愛称ですからそれでもいいか、ともおもっていた時期が俺にもありました（バギ風に）
エンターは基本エンタティナーであり機械でいうのならば「入り」です

ＩＴ用語のｅｎｔｅｒｋｅｙじゃあるまいし、へたすりゃスラングになっちゃいますよその愛称
しかもその場合は大抵悪い方向へのスラング化にされますから
一昔前、日本でリサイクルショップが流行った頃
「ｌｅｔ'ｓ　ｒｅｃｙｃｌｅ」という看板を見て、黒人の友達大爆笑
意味は「中古の女が新しい旦那を捜すために自分を安売りする事」
こういう方向性ですからエンターなんて名前のついた女の子がいたら「安売り少女」とかって方向にされる事はまず間違いないです
とはいえスラングは回転率の高い流行語のようなものですから、いつまでも同じように残っているものはなく１年もしないうちに消える言葉でさして問題にはなりませんが…
どちらにしろ由緒正しいｅｎｔｅｒｐｒｉｓｅという名前を寸切りするような愛称はあまりないという事です
ヒボシが艦魂小説を書き始めた頃には他の先生の作品ですでにエンタープライズの愛称エンターは定着化していました
だからそれをいまさら説明するのは失礼にあたいすると思い書いて説明する事はなかったのですが、何通も同じメッセ、しかもどこから来たのかわからなくなる形で書き込まれるのは大変にこまり返事のしようもないのでココに書き込ませて頂きました
最後に
では何故家の小説でのエンタープライズの愛称がエリーなのか
それは単純にエンタープライズの艦魂がそういう人だからです
人からもらう彼女の愛称は例のビッグＥです
それでは女である艦魂にはちょっと可哀想、というか彼女が嫌だったんでしょうね
だからこういうわけですよ
「エリーと呼びなさい、可愛くね」
ようは女の子に多い名前を勝手付けたって事ですね

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ〜〜〜

今年もよろしくですぅぅぅ

第六十八話　私の宝（前書き）

眠いっす
この先の話で少しだけ年数のずれが見られる箇所かせありますがご了承くださいませぇ

第六十八話　私の宝

「『しらね』とケンカしたんだって！！やるな！！」

まだ日が昇って間もない時間、風は緩く花びらを落とす小春日和の日
静かに物憂げに、自分の考えの中に埋没していこうとしていた時を
劈く大きな声

身の丈小さく良く焼けた黒い肌の彼女
髪は黒くボブというよりもおかっぱのような短く切りそろえた頭

彼女はいつものように勝手に乗り込んできて、自分より背の高い者
達を見下ろすために甲板より高い部分であるターター砲の下段に仁
王立ちで立つと満面の笑みを見せていた

『しまかぜ』が彼女に持った第一印象は、チビのくせに声も態度も
デカイだった

「どうしたんだ！！話してみろ！！」

眩しい朝日の下で正反対な程陰鬱な眼差しをして、波きり付近にな
腰掛けていた『しまかぜ』を呼んだ

長い黒髪、潜水艦の艦魂でもないのに目を覆い隠すほどの前髪の下
で『しまかぜ』はいやいや顔を上げた。起きあがった目は不機嫌そ
うに相手を見つめると、軽めの舌打ちをし

「なんのようですか？『あまつかぜ』姉さん。何度も言っているよ
うに勝手に人のところに来ないでください」

あからさまな拒否を一度に口にしそのまま背中を向け、態度にまで断固拒否を現して見せた

第三世代のＤＤＧとして去年就役したばかりの『はたかぜ』型護衛艦『しまかぜ』

『しまかぜ』は産まれてからの今日まで下り坂を転げ続ける陰鬱な心を抱いたまま日々を過ごしていた
青天の日の下にあってまるで幽霊のように伸ばしっぱなしの髪が語るように、仲間と言われる者達の顔さえまともに見るのは苦痛とも思う程になっていたこの頃は、朝の点呼にも無断で休みそれに対する注意をした『しらね』とケンカになり

集合の場から駆け出すように離れ、自艦に舞い戻っていた

『しまかぜ』の心を曇らせ続けていたもの、護衛艦隊のすべてがギクシャクとした当たらず触らずの他人行儀な集団と化していた根元は国防という第一級の仕事に徒事する護衛艦の魂らしからぬもの「イジメ」による溝にあった

産まれ出でた日は、とても肌寒い一月の海だったが、青い海と同じ天まで高く透明度の高い輝きの空の下で国家防衛の職務という船の魂としては頂点の仕事を得た魂として、多くの人からの祝福と姉たちに迎え入れられた

だが、それがこれから目の前にある暗闇を隠すための最初の嘘だったと気がついたのは、桜の花が散るのを待つ事もない程の短い時間だった

「とにかくほっといて下さい」

自分の前に立つ『あまつかぜ』から顔を背けて、あの日の思いに沈み続けた

「あんたが『はたかぜ』の妹なの？うん？」

水面も美しい戸島を望む舞鶴の海、港にそこから望む山々にも桜が淡い白雪のような花を咲かせ始めていた
帝国海軍時代からの古い煉瓦倉庫が建ち並ぶ舞鶴基地は、他の基地とは違う雅を感じさせる風景が良く見られた

産まれて初めて、国の大切な機関港における護りの要として緊張しながらも
山の下、街道を覆う桜の道をうっとりとした気持ちで見ていた真新しい制服に身を包んだ『しまかぜ』に最初の洗礼を浴びせた影は高圧的に構えたメガネの奥、虚ろでニブイ輝きの目のまま、敬礼もせずに睨んでいた

第四護衛隊群大湊から舞鶴にやってきた『ひえい』は冷たい声と態度で『しまかぜ』を品定めするように彼女の周りを一週すると

「目は青くないのね？でもやっぱりダメね『はたかぜ』に似て気持ち悪い子だわ。『あまつかぜ』みたいにチビじゃなかった事だけが貴女の取り柄だわ、うん」

新たな力として国防の職務を得た同業の護衛艦に対する言葉とは思えない挨拶だった
尖った視線の悪意は、あんまりな初見に呆然としたままの『しまかぜ』の緩んでもいないネクタイを繊細な指先でわざと締め上げるように詰めてみせると

「だらしないわね、役立たずはみんな似るものなのね」と皮肉を唇に走らせた片口の意地悪な笑みを見せつけた

同時に彼女の後ろに従っていたＤＤ達の冷笑が遠慮無く『しまかぜ』に浴びせられた

「私達を見殺しにしないようにがんばってちょうだい、わかった、うん？」

「攻撃性を重視した艦」が護衛艦隊の多くから疎まれているという事を初めて知った日だった

同じ国を護るという職務を持つ仲間であるハズのＤＤＨにして司令艦である『ひえい』から、心を抉り込まれるような挨拶で一つ、不可思議な現実に気がつかされた『しまかぜ』は混線した考えを持ち日々を虚ろにし始めた

その日からの演習で、ＤＤＧである自分を交えて行われる初の艦隊運動の中にありながらも『ひえい』の動きを追うように見つめ、よそよそしくしているＤＤ達の態度に心はさらに傷つけられていった
新鋭の護衛艦と作戦行動を合わそうとはしないという仲間達の態度に

「どういう事なの？」答えない仲間の背中を見ながら、ただ黙して働いた

何故自分は同じ護衛艦の中にいるのに、疎まれ存在の価値が仲間に認められないのか？
沈痛と沈黙の演習の最後に、その理由を教えたのはまたも『ひえい』だった

舞鶴沖での演習を終えた『しまかぜ』は不明瞭な圧力の前で、それでも桜の美しい港を見て心を落ち着かせていた
「私達の帰還を待っていてくれる桜…」
「そうよ、木ぐらいは私達に文句も言わずに待っていてくれるわ」

演習中一度も口を聞かなかった『ひえい』は、そつなく訓練をこなした『しまかぜ』の姿に苛立ちを感じていた
だからトドメを自分で刺しに来たのだった

『しまかぜ』もまた、この『ひえい』という魂が自分の事を良く思っていない事は十分に理解していた
気に入らない相手と認識されているという考え方で、だから自分に背中側に立ち手を組んで嫌な感じに口を笑わしている彼女に言い逆らった

「私達は国を護る勤めを持つ船です。私達の勤めに対して安らぎがあって何がいけないんですか？」
「護ってくれなんて誰もお願いしてないわよ。木がそうやって頼んでたの貴女に？」

バカにする目と笑う口元
夕日に照らされて反射するメガネの奥で、無機質なニブイ輝きが大きく目を開く
明確過ぎる悪意の扉のように、艶やかに光る唇から出される罵倒に

『しまかぜ』の苛立ちは絶頂に達していた

「何が言いたいんですか！どうして自分の仕事に誇りを持つ事を否定するんですか！」

「誇り？」

吐き出した苛立ちの音に、低く構えた声は濁った目とともに切り返した

「貴女、護衛艦が国民に頼りにされてるとでも思ってるの？うん？それともまさか貴女が国民を愛してるとかいうの？」

嘲りのテンション
春風には似合わぬ熱気の下で二人は向きあっていた

『ひえい』は自分を睨む『しまかぜ』に美しい歯並びから漏らすように卑下した笑い声で

「おバカさん、私達護衛艦は誰にも愛されないのよ。その中でも攻撃兵器の固まりの貴女を誰かが愛してくれると思ってたの？うん？そんな夢を見てたの？うん？もっと現実を知るべきだわ」

冷えた眼差しをメガネの奥にもつ『ひえい』は、いつのまにか出揃った取り巻きのＤＤ達と『しまかぜ』に憎しみをぶちまけていた

「この国の防衛原則に則って戦うのだからね、私達を見殺しにした後に。貴女はやっと戦争が出来る程度の役立たずな船なのよ」
衝撃的な言葉は『しまかぜ』の心に亀裂を入れるに十分な破壊力だった

そこから知った

ＤＤＧが、いかに他の艦艇から疎まれていた事かを

非常事態である戦争に際してバカげた事だが「専守防衛」という規則を守るのためには最初の犠牲者が必ず必要となりそのうえで仕掛けられた戦争を短期間で解決するために必須とされた専攻撃艦艇として産まれた『しまかぜ』は

武器よさらばと、平和を唄う国民からも疎まれる艦だという事を思い知った

「いえよー！！聞いてやるから！！聞きたいから！！」

すっかり自分の世界に没頭し頭をさげたまま虚ろに波を見つめていた『しまかぜ』の耳を力任せに引っ張った『あまつかぜ』は至近距離で轟音のごとく声を挙げていた

「何をするんですか！！」

蹲った位置から声の風圧に腰砕けのように崩れる『しまかぜ』の隣で『あまつかぜ』は手を人形のようにグルグルと回して続けた

「話してすっきりしろ！！私がなんでも聞いてやるから！！」

遠慮のない大音響の声

静かに打ち寄せていた港の波を別方向から揺らすほどの大声と、悩

みのない笑顔の前で『しまかぜ』は自分が膝を抱えているのがバカバカしくなってしまった
同時に少しずつ腹が泡だってきていた

この姉は何度も顔を合わせているがいつもこのテンションだ
今その言動が心の傷を掻きむしる程に苛立つ

海上自衛隊の艦艇であれば断絶という亀裂を産んだ問題に誰もが直面している現在
特に自分たちが疎まれ、隊からのけ者にされている問題を、この日本国最初のＤＤＧである『あまつかぜ』が知らないわけもないのにむしろ、この姉がリムパックに出かけて行った先で『ひえい』司令とケンカしてしまった事が問題の起源である事を思い出すと

「話すも何も!!姉さんが『ひえい』司令とケンカしてこんな溝ができちゃったんじゃないですか!!」

声では負けていたがヒステリックさで相手に訴えかける高い音が怒鳴り返した
立ち上がり両の手を腰に据えると

「姉さんのせいでＤＤＧとＤＤＨは敵対関係になってるんですよ!原因はなんなんですか!!」

自分より小さな姉の顔に額を摺りつけんばかりににじり寄った
ここまできたら原因を知って、それで自分の心だけでもスッキリとしたいというのが『しまかぜ』の本音だった

広義には今更原因がわかったからとて、こんなに大きく広がった溝を修復する術があるようには思えなかったからだ

だったら自分だけでもしっかりと原因を知っておいて
心を薄暗くしつづける問題に決着を付けたかった
そのうえで、できる事ならば国防の一線に立つ者として、現職の司令艦として仲間割れを助長している『ひえい』を恥ずかしく思ってくれと怒鳴ってやりたいと考えていた

「どうしてケンカしたんですか？」

飛び起きた勢いも手伝い相手の顔にぶつかる程で近づくが

「なんで？私、『ひえい』とケンカした覚えないよ？」
面前の罵声に失われない笑顔が、「何言ってるの？」と言わんばかりに首を右に傾げて、異議ありと手をばたつかせると

「ケンカなんかしてないぞ！」

「じゃあどうして！私達ＤＤＧとＤＤＨにＤＤ、ＤＥは仲良く出来てないんですか？」
「しらないよ」

真剣な顔で相手を問いつめようとする『しまかぜ』の前『あまつかぜ』はあっけらかんと答えた、その上で

「仲良くしてないと思うなら、今から仲良くしたらいいじゃないか？」と笑い、さらに
「そっか！『しまかぜ』みんなともっと仲良くなりたくて拗ねてたんだな！！」とガッツポーズをした

「なんだ！！早く言えよ！！さっそく親密になっちゃうぞ！！仲良くなるぞ！！」

すっかり自分の言ったことをすっとばして、それどころかどうしてその結論に至ったのかがわからず呆然としている『しまかぜ』の手を引いた

「まずは『しらね』から仲良くなろう!!」

あやうくそのまま引きずられて行きそうな勢いだったが慌てて『しまかぜ』は手を振りほどいた

「ちっ違う!!だからどうしてケンカしたかを聞いてるんです!!」

舌を噛みそうな程に頑張って自分の意見を言い直した『しまかぜ』

だったが相手の顔は無限ループのように先ほどと同じく首を傾げるとケンカなんかしてないよ」と

変わらない笑顔の答えに『しまかぜ』の腰が退けてきていた

満面の笑みを持つこの人が、どうやってケンカしたのか?と疑問さえ浮かんでいたが

「だけど、それが元でみんな仲良くできなくなってるんじゃ」

「わかんないけどぉ、そう思うなら今から仲良くしたらいいんじゃない?」

意に介さない『あまつかぜ』は即答した

「原因は…」

堅物ではなく、迷いで心を押し込めた生活を送っていた『しまかぜ』は、開けっぴろげな『あまつかぜ』の前向き過ぎる態度について行けなくなっていた

亀裂を作った張本人は、それを事件として捉えていないという事実にめまいを起こし足下をふらつかせるが

元気のに固まり『あまつかぜ』は勢いに乗って力強く手を引いて前に進む

「何処行くんですか？」

すでに引きずられるままの『しまかぜ』

「ほら！！だから『しらね』ところに行くぞ！！」

「でも」

「ケンカしたのはお前だろ！！早く仲直りした方がいい！！」

それは…貴女が『ひえい』司令としたのでは？そう言いたいが当人がケンカはしてないの一点張りの中どうして良いのかワカラナイまま引きずられる『しまかぜ』を小さな姉は

「ちゃんと仲間の姿をみてるか？思い出してみ、『しらね』はいい女だし、『はるな』は優しいぞ！『くらま』も頼もしいヤツだし、『ひえい』は何を怒ってるのかわからないけどすごく真面目で良いヤツだ。すぐに仲良くなれるよ！！」

元気いっぱいのマーチはそのまま進んで行く

迷いのない行進をする姉の力に、『しまかぜ』は自分が小さな世界でうずくまり続けていた事に気がついた

言われてみれば『ひえい』を除けばＤＤＨの司令達はＤＤＧを目の敵にするような行動は取っていなかったような気もするが…

そうは言っても多くの者達が、この亀裂を気にしているという事実に

「でも『しらね』司令だってＤＤＨで私の事を本当は嫌ってると思

うし…」
「そんな事ない！」

気を弱くした『しまかぜ』の声に小さな背中は即答だった
「お前は『しらね』の良いところをちゃんと見てないぞ！！『しらね』は『しまかぜ』の事を嫌って叱った事は一度もないぞ！思い出してみ」

言われなければ気が付けなかった事
最初に刺された『ひえい』の釘で偏った見方を持って自らの心を闇に落とした『しまかぜ』は下り続けた道から急に自分の手を引き、坂道を登っていこうてしている姉の言葉に今一度思い直してみた

護衛艦群ＤＤＨの四司令艦の中でも横須賀に籍を置く『しらね』は日本国の護衛艦達の顔役ともいえる存在だった
それ故に口うるさく、どの護衛艦にも相対する盟友アメリカ第七艦隊を意識させ、海外から訪れる魂達の前、高い基準の姿勢を遵守していた
決して見苦しい真似はさせないという教育方針は全ての艦艇に毎日のように通達されていた事だった

今朝も『しまかぜ』は『しらね』とぶつかって逃げてきていたと自分で決め思いこんでいたが
ぶつかってというのは『しまかぜ』の視点からの見方で
『しらね』は無造作に髪を伸ばしきりである『しまかぜ』に

「日本の顔である艦艇として髪もキレイに纏めるか整えるかをしなさい」と叱っただけだった

「『しらね』はお前がＤＤＧだからって叱ったか？そんな事言わな

かっただろ？」

違った
その日同じように癖毛を乱したまま朝礼に出席したＤＤ『はつゆき』も区別なくお叱りを受けていた
誰彼と変わる事なく、高い基準に同じようにみんなが行っていける事が大切と、頂点の司令艦『しらね』は同じように注意をし、叱っていた

「そんな事は言わなかったと思います」

言われて初めて気がついた事に『しまかぜ』は顔を俯かせた
自分ばかりが被害者だと、殻に閉じこもっていた事に恥ずかしさを覚えた

その日『しまかぜ』は『しらね』に今までの非礼を詫びた
そこから再スタートをする事が出来るか出来ないか？大事な事だと自分で思ったし
『あまつかぜ』に言われて確かにと感じた事もあった

『ひえい』とは距離をもってしまっているが
その他のＤＤＨがＤＤＧと距離を持とうとしている事はなかったという事実
『しまかぜ』の謝罪に『しらね』は快く許しを与え

「明日からはしっかりね」と励ましまでくれた

「だろ！！『しらね』は良いヤツなんだぞ！！『しまかぜ』も仲良くなれて良かったな！！」

詫びをそのまま終えて帰るのは寂しい事になってしまう、そういうところを気遣ってくれたのか『あまつかぜ』は二人の握手を見届けるとそのまま宴会に突入という荒技をやってのけた

「色々なヤツが色んな色を持ってるんだぞ！！一色の世界なんてないんだ！！『しまかぜ』」

それが『しまかぜ』にとって『あまつかぜ』という姉との大切な出会いになり
産まれてから二年を過ぎてやっと護衛艦である自分を認められるようになった出来事でもあった
同時に、延ばしっぱなしにしていた髪を短くキレイに切りそろえ現在のヘアスタイルに纏めた日でもあった

とにかく明るく
全面にそれを出して向かうところ敵なしの『あまつかぜ』だったが
第三世代のＤＤＧである『しまかぜ』が出会った頃にはすでに別れは遠くない艦齢に入っていた
だからこそ、時間を惜しむように『あまつかぜ』について回った
いつも前を向いている姉が、後ろ向きの行為に没頭する『ひえい』にケンカを売るなんて逸話だったと、『ひえい』が自分勝手に何かを取り違えているのだと思えたのもこの頃だった

小さな背中の彼女は何処に行っても大騒ぎで
お祭り女の艦魂で、数多の武勇伝も持っていた
戦後初めて外洋にて合同演習として参加したリムパックでは『ひえい』とケンカしたうんぬんは別の話として、演習実戦でＰＭＲＦにて模擬ミサイルとして発射されたテリアを打ち落とした事件の話し

は痛快だった

身振り手振りを大げさにした滑稽な寸劇を交えながらの会話は弾みまくって

「だって、コンステレーション（空母）が言うだもん「腰抜けになった日本海軍（海上自衛隊）にできるかしら?」とかって、艦長達もアメリカの司令達にそんなふうに言われてたし、そうなりゃやるしかないっしょ!!」

そう言うと立ち上がっていつもの踊りを見せた

女という形を持つ魂としてそれはどうか?と目を背けたくなる腰振り踊りで愉快に

「腰に輝くターター様!!」と「私の業物でズドンさ!!」と

『あまつかぜ』の無闇な明るさは時として無神経なところもあったが、『しまかぜ』が本来もっていた責任感強く目端の利くフォローで周りとの協調に一役買いそれが彼女自身をも成長させていった

愉快ながらも世話の焼ける姉の後ろ、いつしか『しまかぜ』は『しらね』と肩を並べ『くらま』が勤める佐世保の艦魂達にも受け入れられるようになり、尊敬される姉となっていった

『ひえい』との溝は解決しなくても、自分だけでもしっかりと前を向いている事が大切である事を学んだ

時は流れ

第二世代ＤＤＧである『たちかぜ』総司令の元に、護衛艦群は久しぶりの改変が行われる事になった中

数年を『あまつかぜ』という姉と共に過ごした『しまかぜ』の前、姉の姿は少しずつだが変化していた
自分の甲板から足を放りだした形で座る姿に変化はなかったが

「姉さん、背が伸びました？」

ひたすら明るく、幼稚な姿を持っていた彼女はこの頃に「日記」を書くようになり
さらに容姿には明確な変化が現れ始めていた
散切りのおかっぱ頭だった髪に艶が出て、首の根に柔らかく被るウェットな大人なスタイルに見えるようになった

「お～～背が伸びた！！」

久しぶりに会う妹に、変わらないのは語り口調のまま立ち上がり『しまかぜ』と背を比べる
前は頭一つ身の丈の小さかった姉は『しまかぜ』の背丈から５センチ低い程度の背に成っていた
顔つきもドングリ眼で笑顔いっぱいの無邪気さを現したものから女らしい含み笑いをこなすぐらいに変わっていた

それらの変化が合ったのは
『あまつかぜ』が長く勤めた横須賀を後にする事が決まった前後の頃だった
この頃の緩い風の吹く季節、他の護衛艦艇が演習に行き来する回数をみれば格段に出港回数の減った『あまつかぜ』は基地にいる長い時間で「何か」を始めていた

前は何がなくても走り回っていた彼女だったが、部屋に三日も閉じこもったり
調べ物を始めたのか基地にある図書室に「人」に紛れてこっそりと通ったりと余した時間の消費方法は相変わらずな自分本位だったが、彼女が本に没頭しているのは不可思議な事と目に映っていた

「姉さん、何か調べ物をしているんですか？手伝いましょうか？」

手元に持ったままの赤い表紙で小さな鍵の着いた日記帳とファイルを交互に睨めっこをしていた姉に
演習から戻ったばかりの『しまかぜ』は空々しく聞いた
彼女が懸命に何かを書き留めているという事が、終わりの時を意識して何かを書き残そうとしているようにも思えて『しまかぜ』は神経質な気持ちの中でそれでも心配していたのだ

わざとらしい質問と、隠せない不安の下がり眉に妹の心を見透かしているのか、いつもの明るさなのか
彼女は

「う～ん、まだ内緒なのさ、私のライフワークだからよぉ」と笑うだけで何も教えようとはしなかった

終わりへの日々が続く
最後の勤務地として舞鶴への出航日が発表されたのは、翌日の事だった

夕闇が残りがを消した港で

明日、横須賀を後にする姉に『しまかぜ』は宴会をしませんか？と
勧めたが彼女は「いらない」と答えた
静かな風が夜の横須賀に凪がれる中
いつになく神妙な面持ちを見せる姉が別れ話を話し出す事を恐れる
『しまかぜ』の顔に
彼女は緊張をほぐすように笑って
「話ししようよ」と
手を引いた

足を投げ出し、湯上がりの会話を楽しむように
いつも通りの話し方で
煤けたファイルを開きながら「魂の引き継ぎ」という逸話の話しを
し始めた

「むかし、メイコムってヤツに会ったんだけど。そう、『はたかぜ』
の先代に当たる人になるのかな」

『あまつかぜ』が誕生した頃
まだ日本の海の大半を護っていたのは、戦後アメリカから貸し付け
られたアメリカの艦艇達だった
当然魂達はアメリカ人でその数は主な任務につくもので二十隻
細かな物も数えれば倍以上が戦勝国の艦という身でありながら敗戦
国日本の海を護る仕事に徒事していた

大半の艦魂は、大量生産された汎用駆逐艦でさらに戦争終了で骨董
化した自分たちが解体という死以外の任務として日本への仕事を得
た者だったが
感情は死を頂いた方がましだったと思っている者が多かった
負けた国に貸し出されるなど。不名誉な事だと考えていたのだ
しかも、ついた日本では自分たちは日本国に準ずる名前に否応なく

代えられ、貧弱な艦隊を組み四方の海を走り回るという重労働に「機関ストライキ」を起こす者も少なくなかった

入り乱れる卑屈な感情の中にあった彼女達だったが、長い者は昭和二十八年から二十年近くを日本のために働いた

その中の一人にメイコムという艦がいた
かの大戦末期に就航した彼女はリヴァモア級駆逐艦後期型で貸し付けされた二隻の内の一隻だった

『あまつかぜ』が産まれた頃にはすでに艦齢十二歳で熟年の域に入った彼女は、当時でも態度の硬さを残していた他のアメリカからの出向組艦魂とは違いとても気さくな魂で
日本防衛の虎の子として産まれた『あまつかぜ』に色々と教えてくれた人でもあった

暗く誰もが寝静まった港で思い出から得た「何か」を語る姉の前『しまかぜ』は自分の姉にも因縁であるメイコムの話しに聞き入った

『しまかぜ』の姉、『はたかぜ』は目の色が青かった
真っ青というほどではなかったが、茶色や黒ではなく、薄く黒目の境が見える程の淡い青に少しばかり日本人離れした顔立ちでこっぴどく『ひえい』に虐められていた

どんな理由でそんなイジメがあったのか『しまかぜ』はどうせ『ひえい』のＤＤＧ虐めの一環ぐらいに思っていたし
姉はその原因については決して語ろうとしなかった
所属基地も違う事があって二人姉妹艦にもかかわらずお互い話し合う機会にも恵まれず現在に至っていた

「メイコムはね、日本に来て『はたかぜ』という名前を貰ったときに「繋がりを感じた」ってそう言ってたんだ」

繋がり?首を傾げる『しまかぜ』に『あまつかぜ』は、当時いまだ戦勝国の艦艇としてのプライドで、新たな護衛艦として産まれた日本の純血艦艇との中を硬化させていた時勢の話しをした

黙って話しを聞く妹に『あまつかぜ』は長く海上自衛隊の中に逸話として流れていた言葉を発した

「魂の引き継ぎを知ってる?」

「それは…変なうわさ話ですよね」

「違うよ!私達の魂は必ずどこかで引き継がれるようになってるんだよ。それをメイコムは感じたって教えてくれたんだ」

つながり

日本にて新たな名前を得た事でメイコムは、帝国海軍の記憶に触れた事を『あまつかぜ』に語っていた

「メイコムは名前を変えられた事で先代の魂との繋がりを感じて、それで私とか、日本で生まれた護衛艦と仲良く出来たんだよ!!これが魂の引き継ぎの少しの証拠だと思うんだ」

飛んでしまった話題に答えられない『しまかぜ』首を振って

「でもだとして、私の姉は目が日本人的でない事と関係あるのですか?」

「あるよ!!だから!私達はどこかで必ず魂がつながっている存在なんだ。それを個体の形、個別の魂としているのが名前なんだよ」

「名前？」

手元に置いたファイルをなでながら姉は熱く語った

「国から名前を得る事で私達は只の船の魂ではなくなるの、私達の責務は他の船に比べて格段に大きいでしょ！責任ある魂として引き継がれる事になるからメイコムは先代の旗風を感じた。そして新たに『はたかぜ』の名をもらった『しまかぜ』の姉さんの目が青いのは、メイコムの魂を全部じゃないけど一部継いでいるからなんだよ」

メイコム自身は大戦に参加する事はなかったがそれ故に戦いの記憶を持ち帰った姉達の話しを客観的かつ膨大に覚えていた。そしてそれを『あまつかぜ』に伝えていた

そこから『あまつかぜ』は答えを探そうとしていたのだ

死に近づく自分の為にと、もう一つ迷い続ける海自の魂達の為に

「魂の引き継ぎというものの真実を」

にわかに信じがたい事だが、『あまつかぜ』の顔は本気だった

目を輝かせて

「メイコムは教えてくれたよ。戦時中から戦後もそうだけど帝国海軍の魂は教えて貰った限り自殺をした者はいなかったそうだよ。なんでだと思う？」

大人びた彼女の指先の前、『しまかぜ』はワカラナイと首を振った

同時に敗戦という苦境の中、おそらく負けた事による限りのない辱めをうけたであろう姉達が「侍の国」と言われた日本で潔さを優先して死ななかった事が引っかかった

妹の引っかかったという感情を『あまつかぜ』は読み取った
真剣な眼差しが妹の手をとって

「『しまかぜ』覚えておいてね。私達は自殺すると魂を引き継げない、だから姉さん達は自殺はしなかった。負けても、もう一度のこの国に生まれ変わることを希望として最後まで戦ったんだ」
「でも、あの戦いからもう何年も経ってます。帝国海軍の名を引き継いだ者は多くいます。なのに誰も魂を引き継いでなんかいません」

事実だった
そもそも「魂の引き継ぎ」に関しては戦前はもとより戦後にも逸話のようにあった
だが、誰も引き継げなかったのだ

「そうなんだ、そこがわからないんだ」

妹の反論に『あまつかぜ』は申し訳なさそうに頭を下げた
「メイコムは感じられたと言っていたのに、どうして私達は感じられないのかな?」
思い出すための指さし確認のように手を振る

「何かが足らないんだ。私達なのか、他の何かなのか…『わかば』姉さんは何も語ってくれなかったし、私には時間もないし」

ファイルと赤い日記帳、胸に抱きしめたまま『あまつかぜ』は考え続けていた

終わりの日
靄のかかった舞鶴港、海上自衛隊舞鶴基地
『しまかぜ』は焦燥の顔で姉と対峙していた
北向きの気候をかぶるような寒さの中で、すでに制服に階級章もき
章もなく、写身の艦体は白いラインのストライプという死に化粧を
纏った『あまつかぜ』は浮いていた

「私には…出来ません」

護衛艦『あまつかぜ』は生涯最後の仕事として、次世代ミサイル護
衛艦の標的となる任務を授かっていた

そして、姉の命を絶ちきる最後を与えるミサイルを撃つ者は、運命
のイタズラか『しまかぜ』の役だった

自分がそんな恐ろしい役を受けるなど思ってもいなかったが
どの護衛艦が受けてもこれは地獄の思いだった
港に並び肌を冷やす風の中、今日の標的である『あまつかぜ』を撃
つ面子は誰もが震えていた

標的艦は一発で沈められるわけじゃない
あらゆる兵器の試し撃ちをするように、浮いている間は何度となく
糾弾を受け続けるというもの
浮いている限り死なない艦魂にとってこんな恐ろしい事が自分の最
後にありえ
また
相手をあの世に送る手段であるというのは気を狂わせる程の仕打ち
だった

考えたくない、思考を止めてしまいたい

DD達の中には顔を上げられず泣いている者もいた
『しまかぜ』も同じように震え、これが夢であって欲しいとただ俯き続けていた

「おはよお!!みんな元気か!!」

舞鶴の司令に就任していた『はるな』と別れの会話を終えた『あまつかぜ』は、整列した仲間達にいつものように元気いっぱいの声をかけた
濁ることのないトーン、軽やかな足取りは自分本位を貫いた者である彼女の生き方そのものにも見えた
静まっている事が当然の場に標的艦になった当事者は昔と変わらぬ笑顔

反対に『しまかぜ』の視界は雨の中のいるように滲み霞む一方だった
どうして自分が最愛の姉を撃たなくてはいけないのか、護衛艦という任を得たことで自分の生き方を満足出来た日な指で数える程度しかない
むしろ
護るべき人に「兵器」である事を強く罵られている事を知り、自分を無気力に落としてしまった日の事を思い出せば、辛い事ばかりの護衛艦艦魂である事に悔しささえこみ上げていた

日本国民を護るために生き続けた姉を殺す事まで背負わねば成らぬ業の深さに、胸が潰れてしまいそうだった
きつくつむった目と押さえた胸の顔を

「『しまかぜ』頼んでいい?」

涙で顔をベタベタに濡らした『しまかぜ』の前

いつもの足が止まっていた
俯いた姿勢のまま顔を上げられない妹に『あまつかぜ』の両手が頭を掴んで引き上げる

「泣くなよ、また帰ってくるからさ。ちょっとのお別れさ」
「帰ってくるなんて…」

今は嘘でそんな事を言われても、喜ぶすべさえない『しまかぜ』は歪めた眉の下で唇を噛んだ

「だから、私の宝を預かって欲しいんだ」

ただ泣き続ける『しまかぜ』の手に『あまつかぜ』は首からかけたネックレスの先に輝くリングを手渡した
シルバーを真ん中に挟んだゴールドをあしらった指輪はｅｎｇａｇｅｍｅｎｔｒｉｎｇだった

「『しまかぜ』私は絶対に帰ってくるよ。新たな魂となって、だからその時まで預かっておいて！！必ず返してもらうからね！！」

霞む世界、消えて行く姉は繰り返した

「『しまかぜ』頼むよ！！」

「姉さん…」

『しまかぜ』は一人煉瓦倉庫の寄宿舎一階にある図書室にいた
『あまつかぜ』が残していったデスクに寝そべるように顔を寄せ
あの日、自分に預けられた形見のリングを見つめていた

冷えたデスクの感触を味わいながら、月の光に鈍く輝くｅｎｇａｇｅｍｅｎｔｒｉｎｇ（エンゲージメントリング）
姉はこの世とｅｎｇａｇｅしたのか？だから愛するこの世と結ばれるために帰ってこられると信じたのか？今は知る術もない預かり物

ここに来る少し前に『くらま』の部屋に呼び出されていた
演習に疲れ、歓迎会に疲れた『くらま』は安らぎとして恋人との時間を欲していた
だが、『しまかぜ』はその気になれなかった
頭の中に残るコーパスクリスティーの言葉に心は大きく掻き乱されていた

逢瀬を拒否するのは何も初めての事ではなかった
相手が疲れていれば自分だって疲れている事もある、だがどこか頑な態度をとる『しまかぜ』に『くらま』は訝しそうに尋ねた

「何かあったのか？」と
答えはない
壁に身体を押さえつける彼女の腕の中で自嘲気味な笑みを浮かべた
『しまかぜ』は別の質問を返した

「ねえ、『あまつかぜ』姉さんの事、覚えてる？」
「変わり者の事か？それがどうした？」

素っ気ない、いつものかわらない返事

それを聞いた『しまかぜ』は『くらま』の腕の中から離れた
「お休みなさい」

「そうよ、みんな姉さんの事は変わり者程度にしか覚えてないのよ…」

誰に言うでもない声は、自分の確信、自分の信じてきた事を確認するようにつぶやき続けたが心に吹く嵐を抑えられるものは何もなかった
髪を掻きむしるように、何度もデスクに頭を軽くぶつける

コーパスクリスティーは言った

まるで荘厳な教会の石畳に響く声のように、灰鉄色の目は祝福あるかなと笑い
銀の髪をなびかせながらいつまでも『しまかぜ』の心を射抜いていた

「私はあの人の想いを託されてココに来ました」と

「『あまつかぜ』の日記」

コーパスクリスティーに託された物が何かワカラナイが思い浮かぶ物はそれしかない
それに何かが書かれていた。海自の、帝国海軍へと続く魂の絆に対する何かが書かれていたと噂された日記
デスクに頭をこすりつけ、否定と首を振る。それ程に大切とされた日記が自分に託されなかったとは信じられなかった

『しまかぜ』は姉に託されたリングを見つめると続けた

「私が一番姉さんの事を知っているのよ…私が…私こそが希望託された者なのよ絶対に…」

転がしていたリングをシルバーのネックレスに通し首にかける

「姉さん…どうして…」

澄み切った紫の闇の下

月明かりのテラスで『しまかぜ』は頭を抱えながらも、心を叩き自分を奮わせ続けた

第六十八話　私の宝（後書き）

カセイウラバナダイアル～～あしがら～～～

足柄といえば飢えた狼というニックネームの巡洋艦
もし
艦魂がいたならインタビューしたいですねぇ

ヒボシ　「飢えてるんですか？」
足柄　　「飢えてねーよ」

ニックネームのせいでグレてそうですね
なんとなくそんな事を考えた今日でした
いつかどこかの作品で足柄が出てくるのが楽しみですｗｗｗ

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょう～～

第六十九話　事の突端（前書き）

仮面ライダーWの仮面ライダーアクセルってのをヨウツベで見ました
加速だぁぁぁ
おへそで鳴らす暴走グリップ

ただただ爆笑でした

第六十九話　事の突端

曳舟達が声を挙げる
菊に洋それにハーフパンツ姿の小さな彼女達の陽気なかけ声が、三菱重工長崎造船所に響き渡る

空は薄い青色、天高く澄んだ空気の下
太陽が昼を回る少しまえである１０００、護衛艦『こんごう』は修復を終え佐世保に向けて出港となった
休みの間、隊員達の手により磨き上げられた艦体が本格的な冬に向かう乾いた空気の中、煌めきの太陽の光に造船所桟橋から見送る工場作業員達の目を細めさせる

久しぶりに機関に火を入れた『こんごう』の身体は桟橋から放されるとゆっくりと方向を変える
数少ないイージス護衛艦の出港を見ようと、遠く向かい側に並ぶ町から撮影をする人達の姿も少なからず見える
絶好の撮影日和ともいえる海の上で『こんごう』は『ちょうかい』としばしの別れをかわしていた

「お姉ちゃん、粉川さん、気を付けてね」

制服ではなく、青服の姿の『ちょうかい』は満面の笑顔で、硬くない柔らかな敬礼をしていた
基地勤務であればあり得ない姿だったが、目の前で自然体の笑みを見せる妹の姿に『こんごう』は注意をする事はなかった

今まで自分に似なくても良いところを習ったかのように硬い態度をとり続けていた妹、たまにしか見せなかった歳に見合った姿を今、

自分の前で見せてくれている事が微笑ましく思えたからだ
名残を惜しむ笑顔の妹に手を伸ばす

「『ちょうかい』クリスマスには帰ってこられないようだが、気を落とさず」

髪を撫でる
今回、突然の『こんごう』修復作業が入った港
そのせいもあって『ちょうかい』の改修準備作業は遅れをとっていた
改修の準備が終われば本改修への計画行程がわかる
それが終われば一時的に佐世保に帰港できる予定だったが完璧にずれ込み、クリスマス返上での本改修に入ることが決定された事を『こんごう』は申し訳なく思っていた

「ううん、大丈夫。ちょっと早かったけどサンタさんはプレゼントをくれたもの」

姉の優しい手の下、『ちょうかい』は明るい声で

「お姉ちゃんと、ご飯も出来たし、お話もいっぱいできた。突然だったけど嬉しかった」
急な修復が無ければ、姉と出会えるのはもう一ヶ月は遅れていただが、『こんごう』の修復が入らなければ引き続きの本改修に入ることはなく、これから先半年以上仲間に会えなくなってしまう事もなかったハズ
明るく健気な切り返しをする妹の前、それを思うに『こんごう』はやはり申し訳なさそうな目で見つめる

「嬉しいの」

言葉の少ない姉の見える目の想いに『ちょうかい』は自分の髪を撫でる手を取った

「お姉ちゃんと、こんなにたくさんの時間を任務以外で過ごせた事…」

続きが巧く出ない、唇をつぐむ『ちょうかい』の想い
言ってしまったら姉はまた硬い昔の姿に戻ってしまうのではという迷い

姉は変わった気がしたのだ
今までは自分たちの為に前を切るように歩き続けた姿
背中ばかりを見せ続けてきた姉は、この修復で出会った時どこか変わっていた

つまらない質問にもぶっきらぼうながら懸命に答え
実はゴキブリが大嫌いで泣くほどだったところを見せ
なによりの変化は
洋や菊たち、タグガールをまじえた宴会に文句も言わずに参加してくれた事に

いつもなら勝手知ったる仲間との宴会でさえ参加を渋る姉が、二つ返事で一緒してくれた事は大きな変化だった

それでも目の前出港への最後の時間、自分を見つめる目が優しく変わった今、後ろ向きにになってしまうような態度はと思いつづも「お姉ちゃん、変わったね」とは口に出してはいえない事でモジモジしている『ちょうかい』の前
心を汲むように『こんごう』はこたえた

「『ちょうかい』、佐世保に戻ってきたらすぐに修練走がある。だから…、それが終わったら一緒にお風呂に入ろう。なっ」

妹の手を握りかえした
なれない言葉に目を泳がせる『こんごう』だったが『ちょうかい』の願いが一つ約束された瞬間でもあった
今まで佐世保に、同じ基地に籍を置きながらも距離は誰よりも遠かった姉妹
修練走の後、何度も姉をお風呂に誘った
姉妹で背中を流す仲間達を遠目にいつも見て、羨ましいと感じていた

「ホント？」

耳を疑い聞き返してしまった妹
「ああっ、背中流してやる」

姉の手はもう一度妹の髪を撫で、『ちょうかい』は喜びにうなづき少し涙ぐんだ

「喜んでたね、『ちょうかい』ちゃん」

快晴の下、女神大橋を過ぎ佐世保への航路に乗った『こんごう』
相変わらず航海時にはやることのない粉川はグループルームにてコーヒーの支度をしながら、窓辺から向こう遠くなって行く長崎港を見つめる『こんごう』にタンブラーを見せる

「買ってきたんだ。海の上だとこういう物の方が便利でしょ」

簡易テーブルに自分の物と真新しい赤のタンブラー
波の世界に生きる彼女に、波にも負けない蓋付きのタンブラーは確かにふさわしい

「『しまかぜ』さんや『いかづち』ちゃん達のも欲しかったんだけど、一度にたくさん持ち込むのは難しいから、とりあえず『こんごう』の分からね」

慣れた手際でインスタントの補充もすませると、煎れたばかりのコーヒーを窓辺から離れない『こんごう』の元に運んでいった

内部捜査官である粉川だが出港の日、『こんごう』乗組員の一員として港で見送りをしてくれる工事関係者に手をふる事ができた
もちろん基地での「帽振れ」に参加する事は今でも許されないが、造船所の職員にならば許されるし
休みの間、隊員を引き回し艦体の掃除をし、クルー達からも一定の信任を得た粉川に対して間宮が特別に許可した出来事だった

おかげで出港してゆく『こんごう』に向かい『ちょうかい』を始め港の働き娘であるタグガール達が出揃っての見送りを最後まで見届ける事ができた

『こんごう』本人も自艦艦首にて最初に正しく敬礼を
その後は、妹が千切れんばかりに振る手に答えるように手を振り
大きな手袋のタグガール達にも挨拶し、しばらくは世話になる妹の事をよろしくと頼み、笑顔で自分を見送りを続ける全てに答え続けた
その姿を粉川は終始微笑ましく見守る事ができた

「『こんごう』、心配してる？大丈夫だよ。菊ちゃんや洋ちゃんんもいるし」

足を組み方肘で、すぎた海を見つめていたまま沈黙していた『こんごう』は粉川の言葉にテーブルの側に姿勢をかえすと

「心配はしていない、ただ…」

「ただ？」

離れた港、共に表情を曇らせた『こんごう』に粉川は勤めて陽気に話しかけた

今度の出来事で彼女に少しの変化が起こったのを実感したのは何も妹の『ちょうかい』だけではなかった

元々すました態度で、人の話などすぐに返事を返すことも少なかった『こんごう』だったが、あの演習から目覚めて以来それまで以上に本当に妹を大切にしているという態度を見える形で良く示していた

宴会などいつもなら『しまかぜ』に背中でも押されなければ参加しないような事にも文句も言わず付き合い

長崎に居続けになる妹の事を曳舟達に頼むと言葉をかわすなど、今までの姿勢からは見られない部分を多く出していたが

それでも元来の彼女の持っている雰囲気から堅さは消えておらず

『ちょうかい』との時間が終わった事でふさぎ込んでいる姿は心配にもなる

せっかく良い変化を見せた『こんごう』を引き続き良い姉で居させるのは勤めと粉川はいつもの調子を保ちつつ会話を続けようとした

「何かあるの？心配事が？」

軽い表情で、いつでも相談に乗るよと笑う
出来るだけいつものように

「いや『ちょうかい』の事は心配してない、あそこには良い仲間がいるから安心だ」

対面に座り笑顔を見せる粉川にタンブラーを受け取った『こんごう』は口を付けようかと一度迷った仕草をみせたが、静かにおろし
覚めた眼差しでおもむろに口を開いた

「粉川、お前聞きたい事がある」

ブラックを飲めない粉川は瓶詰めのクリームを取り出したところで、尖る視線に少し戯けた返事をした

「何かな?例の事は言わないよ。誓って」
「例の事じゃない!!」

例の事
護衛艦の大掃除にてゴキブリ駆除をした時に起こった事件
まさか、護衛艦隊切っての強面である『こんごう』がゴキブリ程度を恐れ涙するとは考えもよらぬ珍事だった
本人も自分の事を良く知っているのか、それはとても恥ずかしい姿だったようで
今後誰にも言わないようにと厳重な約束を粉川にさせていたが

粉川にしてみたらずいぶんと可愛らしい出来事だったため、つい顔も緩むが緩ませ続けて余計な一言を発したら頬が無くなるダメージを負いかねない事も良く承知しているため

いきり立つ『こんごう』に冗談と手を広げて見せた

「とにかく、その事じゃない」

粉川の余裕の前、『こんごう』もどこか落ち着いた反応を見せた
前なら怒り任せに話しの腰をへし折る鉄拳制裁を加えたあげく、むくれ顔をさらしたまま聞く耳持たぬの一辺倒になっていたであろう彼女だが今日は違った
立ち上がった自分を律するようにイスに戻し、気恥ずかしそうに咳払いをすると

「粉川、おまえはいつから艦魂が見えるようになったんだ」

改め落ち着いたトーンは、粉川にとってもっとも聞かれたくない質問をした

「いつから…」

不意の質問に驚くが、直前の問答からの切り返しで体制が整っていなかったのは『こんごう』の側でもある
恥ずかしそうにコーヒーに口をつけると、質問に少し動いた相手の眉を見ながら矢継ぎ早に聞いた

「まあ、見える事はわかってるからいい、それより粉川は戦艦三笠の魂を見たことがあるか？」

艦魂が見えるのは何故という質問もかなりしんどい事で『いかづち』に聞かれたような「妖怪説」などで巧く切り抜けようと思っていた矢先、確信を突く新たな質問に思わず顔に何かが出てしまいそうになったのを隠すために粉川は舌をだした

コーヒー熱いとのゼスチャーをしながら、今まで以上の言い訳を作るため瞬時に色々と考えた
沈黙を守る約束の相手である「三笠」を隠すため返せる答えは多くないが、慌てず大人らしく不可思議という顔をつくりながら別の切り口で聞き返した

「『こんごう』こそ、見たことないの？同じ艦魂なのに？」と

相手の微妙な動きから離れない尖り目は当然聞き返されるであろう言葉に対し、よどみなく自分がこれからしなくてはいけない事の突端をひらいた

「私達は、海自の護衛艦の魂は、誰一人として三笠様に会ったことがない」

自分の聞いた限りではと釘を刺しつつ続けた話は
『しまかぜ』が粉川の送別会で語った事そのものだった

現在を生きる国防の盾である彼女達は、かつてこの国の難事に立ち向かった戦艦である三笠に会ったことがない
日章旗を掲げ、海からほんの少し切り離されたところに記念艦として生きる彼女だが
生きているからこそ、魂の彼女達である海自の艦魂達はそこに足を置くことが出来るという事実の前で、なお姿を見せることのない者

元帥三笠

一通りの話しをした『こんごう』は黙って聞き続けた粉川に自分の決意を告げた

「私は会ってみようと思っている」

今まで魂の仲間の誰も会えなかった存在に、きつく結んだ唇は強い意志を見せる
発言に驚く粉川は

「でも、今まで誰も会ったことがないんでしょ」
「だから、お前に協力して欲しいんだ」

さらなる唐突な申し出に戸惑い隠せないと粉川は首を振り少し考えてから、今『こんごう』が話した事を以前に『しまかぜ』から聞いたという事実を告げた
真剣な目である『こんごう』の前『しまかぜ』から聞いた話までを知らぬとは言えないと感じたからだ

「ずっと願っている『しまかぜ』さんでも会えなかったのに、ぼくが居る程度で会えるとは思えないけど?どうやって?」

相手をさぐる発言
艦魂達が各々で三笠との接点を求めているのならばそれを知っておくのも、三笠の願いを叶える一つの乗法と粉川は考えた
そんな粉川の前『こんごう』は思い出したように首を傾げた

「確かに今まで誰も会ったことはないと聞いている…いや、一人だけ会ったことのある人がいる」

返されたこたえは粉川にとって思わぬ発言だった
突然の申し出の中にも少しの余裕を見せていた顔に、本気の焦りか背筋にまで衝撃を受けたように固まる

粉川は三笠との会話で「会いに来た者はいる」「だが見えなかった」とだけ聞かされ、実質面前と向かって会話をした事がある者の存在など初めて知る事だった

「会ったことって？」

唇に少しの震え、隠すように押さえながら

「聞くに、会話をした事もある人らしいのだが…」

三笠と会い話をした事のある艦魂がいる？

いよいよ本格的な焦りが顔に表れてしまった粉川は、表情を隠すために眉間を押さえるふりをした

その下で自分に今まで知らされてきたことをフル回転で遡る

誰にも見えない途切れた絆の下、孤独を歩み続けてきたハズの三笠が現役の護衛艦と会ったことがあるという事。廻る記憶の中にもなかった出来事に対する言葉がなかったのは当然の反応で、声は濁ったまま

「だれが、会ったの？」

取り繕いながら質問をし遡るように自分の記憶を漁るが何度もの三笠との会話を思い出すのは、「誰とも会えなかった」という言葉だけ、呆然とした目を両手で隠しながら額を叩く

本気でどういう事かと首を傾げながらさらに聞き返した

面前の粉川の焦燥に気を遣ったのか『こんごう』の声も問い詰めるという感じではない

「舞鶴の『はるな』司令だそうだ。マリアがそう言っていた」

「マリア？って誰？」

飛躍する話しにさらなる困惑、顔を見せないのが精一杯の配慮になってきた粉川は、自分が三笠の前にいた時にはなかった出来事が、あったのかもしれないという結論をようやく引き出していた

人より長く生き続けてきた彼女は、自分より多くの何かに出会っていたかもしれないと
それでも、自分にそれを言わないなどあるのか？という疑心

思案のために頭を抱えている粉川の前
ある意味混乱はもっともな事としていた『こんごう』は、自分にかけられた想いを胸に抱くように手をあてて海に視線を向ける
長崎から離れ、島々の間を縫うように青いラインを繋げる海、その向こうに先週演習してきた東シナ海があり

そこで死んだ姉達がいる
その姉達の願いは

「私達の魂を探して」決意を宿したキツイ目線は、しばし見つめた海より顔を戻すと前に座る粉川に、募り続け考え抜いた話を始めた

「粉川、私はこないだの演習の時、あの海で死んだ姉達に会った」

追いつけないほど飛躍して行く話、しかも今はいない帝国海軍の艦艇に出会ったなどどういう事か取り付きようもない事態だが『こんごう』が冗談や茶化した物事を語るタイプに決して見えないし、指の間から追う彼女の顔の真剣さから下手な二の句も言えない粉川は、

苦しそうに聞いた

「姉さん達って…」

零した粉川の声に真顔の魂は続けた

「あの日、演習中に私は気を失った先で「水の記憶」というものを辿った」

あの日…

実験演習による電子戦の中『こんごう』は倒れた

文字道理憤死の様相で倒れた時に意識が飛び、そこに引き込まれた事をゆっくりと思いだすように記憶を辿った順に語っていった

波の音だけが響く部屋の中、粉川は何も言わず初めて知る世界の話を懸命に聞き続けた

演習の海で『こんごう』が味わった水の記憶による世界は、普通の人ならば夢見事程度にあしらわれそうな事だったが、粉川は艦魂達の持つ世界観をそれなりに知ることのできた長崎での思いに照らし合わせながら、知識を働かせて堪えて冷静に聞き続けていたが

坊ノ岬を戦った最後の連合艦隊、戦艦大和を始めとする帝国海軍の魂達が願った言葉を聞くに至っていつもの余裕は無くなっていた、鮮やかな空に反比例するように暗く沈んだ声で

「心は三笠のところ？」

鍵となるであろう言葉を聞き返した

「そうだ、心は三笠様のところに預けたと姉さん達は言っていた。

私はそれがどういう意味なのか、真実を知り姉達の魂を見つけ出したいと考えている」

よもやこんな形で聞くことになるとは思わなかった母親代わりの人の名に
粉川の心に動揺の波は高く渦巻いた

いつもとは逆転している二人
多くを語らない、仏頂面をさらしていた今までの『こんごう』はココにはいない
真剣に、あの海で得た知識に乗っ取り、今までどの護衛艦も達する事のできなかった真実に近づこうとする姿が、誰の目にもわかるような明らかな変化につながっていた

逆に、事の重大さと信じる者への不信の種を得た粉川の表情は暗かった
三笠の言う事を信じてきた少年だった。なのに今心の中に、三笠が語らなかった真実があるのではという事に気がつかされて

「粉川!!力を貸してくれ!お前は艦魂の見える唯一の人かも知れない。だからこそ三笠様に一緒に会いに行って欲しいんだ」

絡まる考えで茫然自失の顔を下げたままの粉川の肩を『こんごう』が強く掴む
「待ってくれ、もう少し話しを順序立てて詰めないか?突然すぎてついて行けない」

らしくない切り返しをした
三笠が自分に何かを隠しているなど考えられないという疑惑に『こんごう』の話す言葉への理解力が低下している事を自覚したからだ

手を振り、自分の頭脳に掛かった靄を払うように

相手の混乱を顔色で察した『こんごう』は肩から手を放すと質問はもっともな事と頷きイスに座った

「何から知りたい？」

「その、マリアってのは何者？」

間のない会話、なんとか取り繕うような粉川は最初に出た『はるな』の名に関わる不明の名についての説明を求めた

「マリアは今回の演習に参加していたアメリか合衆国海軍の原子力潜水艦コーパスクリスティーの艦魂の事で、マリアという名は愛称だ」

初めて聞く海外の艦魂の名

「なんで海外の艦魂が『はるな』さんや三笠の事を知ってるのかな？」

「彼女は私よりずっと前から生きているし、『はるな』司令ともどこかで会った事があるのだろうと思う」

粉川の質問に一方の『こんごう』も思い出し思い出しのたどたどしい返事だった

思い立ったら吉日で話しを始めてしまい、まだ纏め切れていなかったのだ

「『こんごう』は『はるな』さんに会ったことは？」

「ある、ＤＤＨの司令艦には演習があればどこかで必ず会うからな」

「その時に戦艦三笠の話はしたの？」

当然の質問だったが『こんごう』の眉がさがり曇った
『はるな』が三笠と会っていたというのはマリアから初めて聞かされた事だった
だけど、司令艦である『はるな』には所属基地は違えども今までにでも数十回は顔を合わせている
なのに三笠と話をした事など一度も言わなかった
考えたくない無言の理由にＤＤＧとＤＤＨの隔絶があるとするなら、この道は険しいと気がついたからだ

「いや、してない。というか聞かされなかった」

重い舌が、自分の中にもまだ理解の及ばぬ物がある事を探し当てる
見つめる粉川に、不確定な申し出を訝しがられていると勘違いしてしまうほどに
だからこそ声を大にした、前に進もうという想いは止められないところまで来ていた

「細かいことは追々話す、とにかく力になってくれ。人の力が必要だと私は思うんだ」

強い意志の背中を押している者は、亡き姉達への想いであり
今まで自分が無位にしてきた物
さらにそれに届かなかった今までの護衛艦達

『こんごう』は本気の瞳で頼んでいた

一方で、三笠を疑った事のない粉川には踏み込む事を恐れる領域への懇願だった
『こんごう』の話しだけでは何が真実かもワカラナイし彼女の見聞きした水の記憶が正しいとも言い切れない

迷いが簡単に返事をさせない
粉川の浮かない顔に『こんごう』は、自分たちの中にもこの事にアプローチを続けてきた者がいる事を告げた
先に粉川が話した『しまかぜ』のも長年探している一人であり
曖昧ながらも、見えぬ絆に対してそれぞれが自分の出来る方法で探求しているという事を
そして今まで見つけられなかったのは「人」との関わりが欠けていたからではないか?という事を
深く護衛艦艦魂達の前に残っている絆への想いというものを熱く語った

「姉さんは（『しまかぜ』）はずっと「魂の引き継ぎ」というものを探していた。だけど具体的に何かが見つかったという事はなかった。私のしようとしている事がそれとどう関わってくるのかも今は解らない。だけど私は私の得た知識でこの国を護った姉達の魂を探し出しその意志を完遂したいと考えている」

もう一度掴まれた肩に並々ならぬ力を感じた粉川は大人らしく冷静に振る舞った

「わかったよ、来年横須賀に立ち寄ったときに一緒に行こう」

前に向かおうとする『こんごう』の姿に同意を示した
だが一つの釘を刺す事も忘れなかった
聞かされた事は粉川にとって、少年期の思いまでを揺るがす大変な事件だった

自分の友、それ以上に母として慕ってきた三笠が、自分には言わな

かった事があるという話
だからこそ、秘密裏に真実を知りたいという心は、形を変えて向かい合う『こんごう』に約束して欲しいと頼んだ

「まだ全てが確定された事じゃないから、だからこの事の真実が確実に見えたときにみんな知らすという方向で行きたい」

粉川の提案と約束に『こんごう』は「わかった」と簡潔ながらもしっかりとした返事をした
『こんごう』にしてみれば遅まきの絆への探求は大手を振ってみんなに言えることとしてはまだ情報不十分である事でもあったし

『しまかぜ』の想い『あまつかぜ』への気持ちは近くで自分を励ましてくれた姿を考えれば半端なものでない事を知るのは容易な事だった
「今の自分を作ってくれたのは『あまつかぜ』姉さんなの」とそう言って憚らない『しまかぜ』を思えば

水の記憶を辿った程度で得た知識で
今更自分も『あまつかぜ』の日記に関わりたいなど安直な気持ちでは言えない
粉川の提案に『こんごう』は自分の方法でのアプローチへと歩を進める覚悟を決めて頷いた

「わかった。真実がわかるまで二人で探していこう」

前進に力強く覚悟を決めた『こんごう』だが、粉川は戸惑いと混乱の中で歩を進めるという形になった
緩い波の間、斜陽の光をテラスに受けた部屋の中。佐世保に向かう『こんごう』にてベクトルの違う嵐が二人の心に舞い降りた時だった

「『い・か・づ・ちぃぃぃ』」

午後の日差しの下、夕刻には港に入る『こんごう』の迎えのためチラホラと立神の桟橋に集まり始めた艦魂達
桟橋の遠目に見る側、煉瓦倉庫の木陰で一人蹲っていた『いかづち』の背中に巨大な脂肪の塊を二つをぶつけてきたのは、姉の『はるさめ』だった

制服も黒の冬服に替わった二人
『はるさめ』は押されて潰れて行く妹にくすぐりをいれるという念の入ったイタズラぶりで声を挙げるが『いかづち』の反応はまるでない
暖簾に身体事押しの状態だ

いつもならココで「『はる』ねーはん重いって」と邪険な態度をする『いかづち』だが今日は自分の想いに潰されると同じように反抗もしない

ぺったりと膝に顔を埋めてしまった妹の姿に
背中に頬ずりをしながら

「『いかづち』～～～こたえてよ～～無視されるとぉ、『はる』ちゃん泣いちゃうよぉ～～」

相手のテンションなどお構いなしの『はるさめ』は睫毛とメガネの下で『いかづち』が目を腫らしている事を良く知っていた

だから耳元に顔を近づけると

「『はる』ちゃん、『いかづち』を泣かす人許さなぁい～～」

「ちゃうで…」

姉の言葉に、やはり力無い反抗の返事

四日前、合衆国海軍空母アイゼンハワーを佐世保に迎えた歓迎会の夜の事件を『はるさめ』はしっかりと目に納めていた

会場から姿を消した妹と会話をしていたコーパスクリスティーその後を追った『しまかぜ』との間で起こった少しの喧噪

妹の嘆きの声

「わてだって大事にされたい！愛されたい！人に近くに居て欲しい！」

「大事にして欲しいよねぇ～～わかるよぉ～～」

緩い声は妹に意見しながらも、周りを憚るように笑い目を鋭く輝かせて続けた

「恋しましょ～～～ねぇ～～～」

「姉はん…わては…」

聞かれていた声、だがそれに焦る事も出来ない程に『いかづち』は自分の発言に後悔していた

酷いことを勢いに任せて『しまかぜ』に投げたと、蹲ったまま顔を隠して

あの夜

コーパスクリスティーは恋愛云々より、おそらくもっと高い基準で

の人との関わりが貴女達海自に必要という話しをしていたハズだっただけどそこをすっ飛ばしてしまうほど、自分恋心への否定は衝撃的な出来事となっていた

真っ正面に立った『しまかぜ』に涙ながらに言った

「有事が起こったら、わてらは最初に死ぬ」

あれほど自分でそんな事は昔の逸話と否定してきたのに
恋愛でなくても優先される『こんごう』の立場に強く嫉妬し吐き出してしまった
粉川に自分の側に向いて欲しいという気持ちを、自分から粉川を引き離そうとするように見えた『しまかぜ』に

それ程に日常的であった『しまかぜ』の粉川に対する『こんごう』への配慮の結果が許せないと心の奥底では思っていた事に気がついてしまった

あの演習の時だって、結局『こんごう』有りきの実験だったからこそ、常日頃『こんごう』をよろしくと頼みますとの『しまかぜ』の言葉を尊重した粉川がいたと
結果、自分を省みて貰えなかったのだと
粉川が懸命に『こんごう』の身体を支えるのも『しまかぜ』からの頼みに乗っ取ったから
実戦まがいの演習で恐怖に震えている自分を気遣った欲しかったのになのに自分の元に戻れと激された

『こんごう』には再三にわたる励ましがかけられたのに、自分には「大丈夫?」の一言さえ貰えなかった

あげくに感じた唇の熱さ

それもこれも、今まで『しまかぜ』が『こんごう』の事を大事と粉川に頼んできたからだと考えてしまう
惨めだった、なんで自分が中途半端な護衛艦に産まれてしまったのかと涙がこぼれる
自分がイージス艦だっのなら、粉川はもっと自分事を思ってくれたかもしれない
あんな不器用な感情をさらけ出すばかりの『こんごう』より自分の方が幾ばくも向こうに可愛らしい姿を見せてあげられたと思ってしまうし

『しまかぜ』だって自分を押してくれただろうと、反省とは別に入れ替わる悪意に『いかづち』は疲れ始めていた

現実から離れる思慮に、何度も膝の間で首を振る「違う」と

全てを黒く塗り替える程に落ち込む『いかづち』
冷静であろうとすればするほどに
募る自分の気持ちを蹴飛ばされたと怒りが擡げ顔を見せられない

「『いかづち』は悪くないよぉ～～～悪いのは『しまかぜ』さんだぁ～～」

妹が自分の気持ちを蹴飛ばした相手として、それでも思いやりからの発言だっと迷う中を縫うように『はるさめ』は確信を言い当てた
「でも…」
そう思ってしまったら、今まで通りでいられるか？横目で心配を見せる顔に『はるさめ』は人差し指を立てて

「絶対に『しまかぜ』さんが悪い～～、『いかづち』は立派に護衛艦してるのに、半端者の『こんごう』ちゃんの肩持って幅効かせるなんてずるぅいよぉ～～ねぇ」
「ねーはん…」

『こんごう』に、いや言えばＤＤＧに対してあからさまな不快感を嘘っぽい緩い声が発したのに思わず顔を上げた『いかづち』
その目に『はるさめ』は顎で桟橋の方をツイと指した

帰還する実験演習の殊勲艦である『こんごう』を迎えるために桟橋に並ぶ魂達
本来はこんな事はしない、たかだか演習から帰って来るだけの事にしかも実験後に昏倒して修復に長崎に行かねばならなかったような『こんごう』の為にと

イベントの中身はアイゼンハワー達が連夜のパーティーを楽しみたいがための悪ふざけの延長の形だった

「殊勲の方『こんごう』一佐をきちんとお迎えしたいです」という申し入れがあったからやむなく会されるこの行事でさえ腹が立つ

その迎え衆の中、黒の制服のチェックをして歩く『しまかぜ』
いつでも前に立つものとして、みんなの姉として公平にあるべき本来の姿の者が率先してそういう事をするのは？

現実的に『しまかぜ』は『こんごう』に甘い、『はるさめ』は暗にそう言って見せている

「『いかづち』やっぱりぃ恋愛もぉ五分の戦いをしたいよぉねぇ～

～『しまかぜ』さんは私が押さえといたげるよぉ～～そうすれば『こんごう』ちゃんもバックなしで正々堂々戦う事になるから負けても文句言わないよぉ～～」

姉の提案には納得できるものがあった
冷たい風が向こう側の桟橋に向かって走って行く、行き着く先に見える『しまかぜ』の姿
日頃から全ての護衛艦達にとって良き姉であらんとする姿を『くらま』司令は見習えと豪語している

見習うべき存在が同種艦である妹だけに良い思いをさせようとしているのは、ルール違反だ
『いかづち』の心に薄暗く燃え続けていた嫉妬の炎が「正攻法」らしきを勧める姉の言葉で大きく燃え上がった
光を取り戻しメガネの下で尖る視線を確認したように『はるさめ』は

「『いかづち』は良い所いっぱい持ってるからぁ～～不躾者の『こんごう』ちゃんになんか負けないよぉ～～『はる』ちゃん保証しちゃうから～～」

妹の火に煽りの風を入れた

意を決したように一人桟橋に飛んでいった『いかづち』を見送った
『はるさめ』は満足の笑みだった
風が揺らす栗色の柔らかいカールがかった髪の下で

「そうよぉ、恋愛するのよぉ『いかづち』後は『はる』ちゃんに任せといてぇ～～」

イタズラっぽく下をチロリと出し唇をなめる

「『こんごう』ちゃんなんか、『しまかぜ』さんがいなきゃただの盆暗よぉ～～」

ふくよかな自分の胸に手を重ね、目を細める

指を絡ませながら

「後悔なんか忘れるぐらいに恋愛するのよぉ～～」

栗色の肩口に巻く髪を、季節を肌に知らせる冷たさを運んだ風に湯らしい

妹の敵、その敵の背中を押す者、桟橋でみんなの姉として働く『しまかぜ』の姿に大きくベロを出した

「大っ嫌いよぉ～～『しまかぜ』さん～～～」と

第六十九話　事の突端（後書き）

カセイウラバナダイアル～～加速～～

いよいよ艦魂物語もターニングポイントを超えて後半戦に向け加速します！！

今話もっとも違和感を感じたのは『こんごう』の姿でしょう

今まで『こんごう』はどちらかと言えば言葉少なく、主人公として物足りないところがあったと思います

ぶっきらぼうすぎで仲間との関わりも上手ではない彼女が今話からまっしぐらに走っていくキャラに変わったという感じですが、違います

元々『こんごう』は思い立ったら突っ走るというキャラでしたですが、誕生の時の傷から今まで、一歩下がったポジションで生きてきただけなんです

当たらず障らず、だけど自分の妹は大事にする姿勢からも一本筋の通ったところももっていた彼女は

水の記憶からかつて国家存亡を戦った姉達の願いを知った

今まで自分はなんとなく護衛艦として生きてきた

『しまかぜ』が色々探している事だって知っていたけど協力してきたわけでもない

それを反省した海だった

そして火を付けられた

「私達の魂を探して」と願う姉達に答えるため『こんごう』は突っ走る

それこそ今まで以上に色々なものにぶつかりながら

去年の１０月から連載を始めたので、今年の１０月までにはキレイに追われるよう頑張って行きたいと思います！！

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～

第七十話　知の高み（前書き）

ああ…心に愛がなければ…

第七十話　知の高み

「騒がしい客人達だな…」

一人である事を確認した『くらま』は煉瓦倉庫寄宿舎の最上階に構えた執務室内、自室のイスに座ると首を左右に動かしコリの音を響かせ少し前の時間にあった出来事を思い出していた

快晴に恵まれた静かな波の上
昼を少し回った時間、定刻通り１４００に護衛艦『こんごう』は佐世保に帰還した
あのに演習からしばらくメインのバースである立神Ｔ－１に姿がなかった国防の盾は、復旧の間に磨き上げられた艦体を輝かせ久しぶりのホームに戻った

顔役的艦艇の帰還に合わせ基地の方も昨日から慌ただしく動き
隊員達は昨日の昼過ぎから、艦艇の移動や配置直しなどに走り回った

現在佐世保基地のメインバースは『はまな』が出払って空きになっているＴ－２の側に『ゆうだち』『いかづち』間の桟橋を挟んで『はるゆき』とメインＤＤの二隻が移動し
Ｔ－１の半分、丘に向かって左側に『くらま』『まきなみ』と並ぶ

快晴の青空に生えるように立つ赤白の鉄塔の前、開かれた帰還の場所には多くの隊員と共に基地司令の宗像も姿を見せているが、演習での大金星を祝うという雰囲気ではなく額に濃い影が残る程の皺と顔には厳めしさが立っている

同じように艦魂達は司令旗艦『くらま』の向かい側に空けられた伯地の前に並んでいる

「ヤーイ、ヤーイ」

青空に負けない元気のかたまりタグボート達は声を合わせて艦体を押していく

他の護衛艦よりひときは大きな艦橋を持つ『こんごう』艦はゆっくり水面を押して桟橋に擦りつけられて行く中

人，艦共にそれらが停止の体制に入ったところを見計らったように、『くらま』を先頭に並ぶ艦魂達の列の前に光りの輪は開かれ

流星を髪に纏った『こんごう』は正しく手をあげ敬礼の姿を現した

一同に並んだ艦魂達の中、大仰な返礼を見せるアメリカの客人達、

演習の殊勲艦である『こんごう』を迎える笑みは『くらま』に言わすのならば悪趣味な祭りのための嘘笑いでしかない

目的のために手段選ばずの彼女達の姿に基地司令艦という職務にある『くらま』の肩にかかる負担の象徴がコリの音につながっていた

アメリカからの珍客が限られた日本滞在と帰港時間の全てを曰く「有効に使って」使って『くらま』との一夜を狙うおふざけの延長に組み込まれてしまった『こんごう』の帰還

企みがわかっていても、同じ演習をした者「同志」であるから是非にと頼まれれば拒否は難しいもの

お国柄も手伝うのか、彼女達の懇願ぶりは身振り手振りも相まって激しいうえに普段なら佐世保基地をアメリカ軍側の重鎮として座るエセックスまでもが、アイゼンハワーに張り合う為大騒ぎという始末には参ったと短く切り撫で躾た髪の前、頭痛を引き起こしそうに

なった額を軽く叩く

結局同盟国家のお客達の願いを聞き入れた『くらま』だったが
それが無用な出来事にならずに済んだことには感謝していた

『こんごう』と最初に交わした帰還の挨拶で違和感を感じとる事が
出来た、そこからは持ち前の話術と責務で難を避ける事に終始した
夜に会されるパーティーまでの間までを彼女達にひっ張り回される
のもやむなしかとうんざりしていた心に、確かめねばならぬ事が
でき電気針を刺されるような直感が動いたからだ

「『こんごう』とは個人的に今回の演習についての話し合い、反省
会を持ちたいと考えておりました故、夜までご容赦を」

自分の手を引こうと陽もある港でしがみつく助走をしていたアイゼ
ンハワーに毅然とした態度で
申し立てると執務室に帰りココに座っていた

近代的で角の立った調度はここには一切ない
昭和という時代よりもさらにモノクロの写真が浮かび上がらせてい
たであろう家具が並ぶ
執務に使われる大型のテーブルも茶色にしてニスの程よくニブイ輝
きを持つ古い時代の優しい遺物
出入り口の大きな扉の上に飾られる金板を打ち出して作られた「佐
世保鎮守府」のき章の元、帝国海軍華やかなりしの時代をそのまま
移築したような部屋
目の前のペン立てに高さを揃えて並べられた筆記物を静かに、流す
ように眺めていた切れ長の目の主は背筋をあげ天井に、そして窓の

ある側に身体を返すと

ついさっきまで呼びつけていた『こんごう』が煉瓦倉庫の寄宿舎を出て自艦に向かってを歩いて行く姿を見つけ、その背を追うように見つめていた

「緊張？違うな…」

窓の外いつもと同じ背中は、いつも以上にしっかりとした足取りで堂々して見える

港に入ってすぐの挨拶で瞬間的に感じた違和感
今までの『こんごう』ならば、演習で倒れた事を恥たうえで気むずかしい顔で声の通りの悪い返事を俯きながらした事だろう
それを窘めながら、反省を促すという役を担うのが『くらま』の立ち位置であり
そうやって基地に勤める魂達の様子をくまなく見てきた司令であるからこそ、微妙な変化にも即座に気がつくことができた
光の輪をくぐり並ぶ艦魂達の前に出た彼女は

「修復を終え、帰還致しました」

張りのある声を青天の午後に程よく響かせると
出迎えの桟橋に並んだ仲間達の顔を確かめるように動いた微かに目線が走る
鋭いばかりで刺々しい印象が第一だった目が、仲間を確認するという小さな動作の中に温かなものを秘めていた事

一歩前に立つ司令艦の前で止まった目
直立の姿勢、一文字に結んだ唇
水色の瞳は瞬きの一つもせずに『くらま』の「ご苦労だった」という言葉に返礼すると

「長く休みを頂ました。休んだ分を返せるように演習で得た事を糧とし、より励みたいと思います」

不器用の代名詞だった『こんごう』いつもならココで不器用な反省を零すか、自虐するような戒めを吐露するであろう若い盾は間逆のバイタリティーを示したというか
言葉ならば今までだってそういうふうに返していただろう
だが今回は態度に出るものが違った。真っ直ぐに顔を上げしっかりと根を据えた返事に

『くらま』の後ろに並ぶ、佐世保に詰める魂達はもとより
同列に並び、演習の主役と褒めてパーティーへの助走にしようなどと考えていたアイゼンハワーさえも安易でふざけた笑みを消して『こんごう』を見つめざる得ないほどに芯の通った声で違和感は確信に変わっていた

『こんごう』の持つ空気が明らかに違っていた

変化を、その根元を突き止めるために執務室に呼んだ『こんごう』との話しに『くらま』は目を細めた
いつもなら自分の問いを、問いつめと勘違いする程に警戒心を前に立てていた『こんごう』はどこにも居なかった事に驚きつつ

窓の下、秋風の吹く基地港を歩く燃える魂が放った一言を思い出し

ていた

「演習で得た経験でお前はどこか変わった気がするが、何を感じた？」

深く腰掛け、重鎮として構えた『くらま』の前
入室前から毅然とし、引き締まった顔が答えた

「変わる事はないと思います。今までも国の楯であるという使命を持って来ましたが、それを自分の艦生として認めていきたいと思っただけです」

「変わらぬ思いを改めるという事か？」

たどたどしく、慣れない質疑に答えを探すように答える『こんごう』だが、姿勢は崩れる事なく真っ直ぐにして美しき起立を保っている
自分の心を、反省と戒めで縛るような無理強いをしている感じは何処にもなかった

ただ変わらぬ思いを、国の楯として争いの海が開かれれば面前に立つという覚悟を
今までは言葉だけで捉えていたそれが「深化」したと言わんばかりに『こんごう』は目を輝かせていた

「私は、私に与えられた仕事を十分に発揮するために、励んで行きたいと、それを思い直す事のできた演習でした」

演習の中身や心象の多くを語ろうとはしない『こんごう』だったが
『くらま』にはそれでもよかった
答えはそれで十分だったと感じられた
絶対はない、ミサイル防衛の要となる艦であっても現実の不安はある

だが、不可能だの無理だのと後ろを向いた発言を決してせぬ変わりに、自分を戒める為に心の奥に閉じこもったままで無理に前を向き続けていた『こんごう』が呪縛から解かれ

絶対に近づく為の努力を、口に出して目を輝かせて見せられる程に方向性を変えられたのは喜ばしい事だった

「演習は無駄では無かったな」
デスクの飢え重ねた手の向こう、隠した唇に少しの笑みを浮かべた『くらま』は
それだけを告げると、下がる事を許した

去って行く『こんごう』遠くない未来に新たな司令職、または指導の任を担う事にもなるであろう妹の背中
立ち上がっていた自分の背を深くイスに下ろし長い息を吐いた

「国の守りとして変わらない思いのために自分を変える、思いへの道を見つけたのか…な…」

そう言うと普段昼時には決してふかすことのなかったタバコを唇に運んだ
「今はまだ言葉だけで見えないが、結果をだしてくれ…強くなっていってくれればそれで良い」

浮かぶ一息の煙
先を焦がしたタバコを口から離した『くらま』は、苦い笑みを浮かべながら指で火を握りつぶした

「強くか…」と、そのまま目を閉じ深くイスに身を沈めた

冬の午後
テラスに差し込む光は水平線近くから太陽の輝きを差し込んでいた
秋を彩った燃える色の葉達は地面の色に同化し、自然摂理に従って返って行く
図書室、『あまつかぜ』の残したデスクに『しまかぜ』は顔を押し付けるように伏せていた

出迎えの後、司令艦からの呼び出しに合った『こんごう』の事は十分気になってはいた
普通ではなかった演習で、すぐに佐世保に戻れないほどのダメージを追った事も確認していたのだから妹が正常でいられるか？また艦隊勤務で破綻をきたしたりしないか？
色々な心配も募っていた
集会が終われば率先して『こんごう』に挨拶を交わしいつもどおりの世話を焼き、彼女の心持ちを心配する『しまかぜ』だったが今日はそんなに気持ちになれなかった

胸の中にざわつく想いが渦巻き続けていた
整列に並んだコーパスクリスティーの顔を恨めしく自分が睨んでいた事に気がつけば、頭に昇る闇を振り払いたいという気持ちでいっぱいになるというもの

「『あまつかぜ』姉さん…どうして…」

擦りつけた額、落書きのような走り書きの残る『あまつかぜ』のデスク、ココで多くの話しをした憧れの姉
目を閉じれば今でも姿を思い出す事ができる

小さかった背中、短い黒髪、いつも笑っていた口元
だれよりも一緒にいた

その姉の艦生の幕引きまでした、自分の手の中にリングを残していった人なのに
何故に自分に希望が託されなかったのかと、古びた机に願うように額を何度も擦りつけた
「何かの間違い」
コーパスクリスティー、アメリカから来た原子力潜水艦の魂は黒髪を揺らしながら笑っていた
『あまつかぜ』の想い、希望を授けられたのは自分であると。それを進化させるために、彼女の願いを叶えるために自分が使わされたと公言した事が心に刺さり動きを鈍くしていた

悲しく下がった瞳の下で思い出を何度も反芻する事でなんとか自分を保たせようとしていた

「いたぁ～～～いた！」

静かな部屋に緩い声が響く
在泊勤務の基地ならば午前の課業が勤めでそれが終われば後の時間は自由
だれが使う事も許されている図書室に入ってきた者は、スキップを踏むよりも危うく見える歩で『しまかぜ』の前に進んできた
『こんごう』のお迎えを米軍艦艇としたため黒の制服姿の『はるさめ』は講堂から続く扉を開けて対面のイスに座った

「『しま』ね～～お話よろしいぃ～～」

毛羽だった心を抱く『しまかぜ』には逆撫でにも聞こえる声の主は
茶色の髪を揺らして隣の席に座った
日本国を護る護衛艦の中では中堅どころである『むらさめ』型護衛
艦、長女である『むらさめ』の次に位置する次女『はるさめ』は首
に内巻きに入る軽めのカールを持った髪と性格が一致しているかの
ようにフワフワとしている
背丈は『しまかぜ』と変わらないぐらい１７０センチほど
だが体つきは基地勤務のどの魂達より豊かだ、実った大きめの果実
を二つ揺らしながら歩く
出るとこたっぷり、引っ込むところもしっかりのナイスバディーの
『はるさめ』は性格穏やを通り越しどこか抜けたところも多いと言
われる艦魂

そんな彼女の事だからまた何かなくした程度の話しか?軽めの溜息
を落とし
「どうしたの?」
自分の事に没頭しながらも、基地内では年長の姉にあたる『しまか
ぜ』は顔を起こし相手をした

「あのねぇ～～来週からクリスマス月間になるでしょ～～それで～
～お願いがい?かな～～お頼みかな?を言いにきたの～～」
「パーティーナイトの提案の事ね」

手元にあったファイルをかたし、別のノートを『しまかぜ』は取り
出した
毎年のイベント月間、パーティーの趣向には色々な意見を漏らさず
聞く、飽き足り退屈させたりしないように配慮するのも年長の姉で
ある者の仕事の一つであり、多くの意見が必要とされるイベント月
間ではお馴染みの光景

胸に挿した黒の万年筆を取り出し「どんな催事？」と『はるさめ』に聞く

そもクリスマス月間とは
まだ十一月に入ったばかりだが、ココ佐世保では月中から十二月の本命日からそれ、時としては新年までを毎週大なり小なりのパーティーが開かれる
何故かといえば彼女達の勤務が本命日に掛かってしまう可能性もあるという事と、日本の要軍港である横須賀と佐世保は海外からの艦艇の出入りの多くなるシーズンにもなるからだ

クリスマスは今や多くの国にまたがる習慣になったイベント日
アメリカやイギリスの艦魂達は当然親愛を示す大切な日として捉えているし
同盟国の艦魂達は自分が籍を置く国の日付に習ってクリスマスを楽しむ、当然その期間は日本が基準として取り入れている十二月二十四日、二十五日だけではない
アメリカは二十五日が公休で軍もお休みの完全なるクリスマス本番
ドイツは十二月の六日になればクリスマスに入なるし
カトリックの影響力が色濃く残るスペインなどは十一月には町を挙げてお祝いの助走に入り、祝いが終わるのは年をまたいだ一月六日という長きにわたるものもあるのだ

この時期、横須賀も佐世保も夏季の夏休み入れ替えによるイベントと同じぐらい忙しく海外の艦艇が出入りする
軍属にも密接に関係するイベントとして『しらね』と『くらま』は同盟各国の船達を迎えるために一週間に一度はパーティーナイトを開く

これは遊びではなく一つの礼儀、多くの同盟国を持つ国の義務

だからこそマンネリ化したイベントを開催しないよう、同盟国に開かれた港である横須賀や佐世保では毎年派手ではないがそれなりに趣向を凝らしたイベントを催す
お祭り上手で外交も巧い横須賀基地司令の『しらね』はそれ程苦もなくこなしているが、伝統墨守の硬さそのままである佐世保基地司令『くらま』社交はそれなりにこなしすが引き続きのイベントや騒がしいのは得意ではないようで、下の者達からの多く意見を募る。
その取りまとめ窓口を『しまかぜ』が行っていたりもした

「どんな提案？書き留めるから言って」
「提案？提案とも言うよねぇ～～」
ペンを取った相手の姿を『はるさめ』の愛嬌の良い嬉し目が、どこか見下すように見つめながら両肘をデスクにのせて、ほおづえのまま顔を寄せると

「私～～『いかづち』と粉川さんの恋愛を押すから～～邪魔しないでね～～」

付き合わせた顔
笑みの目の中に悪意を宿し、突然の宣戦布告をした
手に持ったペンが書き物の上で時間を止める

「何言ってるの？『はるさめ』？」
自然体の明るく笑い続ける顔も『しまかぜ』の驚きで見開かれた目に遭わせるように突然止まる。時間をとめた笑顔の中、目の玉だけが鋭い意志を現し

「ハッキリ宣言しただけよぉ～～」
デスクの上、合わせていた顔は嘲る唇を光らせて顎を揚げると視線

を反らす

「何言ってるの？そんな事で「人」と関わるなんて良くないわ！私達全体の問題に対する解決のためにもそんな事は」

五十年、おそらく出会う事のなかった人との奇跡の遭遇

『あまつかぜ』の日記の事、その生き方を介し『しまかぜ』が自分達の前を歩いた大戦の姉達を追っている事は周知の事実だった

日本の盾として産まれた魂達の誰もが諦めた絆への探求者である『しまかぜ』の言う、人との出会いをどういうふうに見てイイかはこの二ヶ月という時間の中では誰もが計りかねていた

だが、横槍を入れようとする者もいなかった

自分たちでは出来なかった事を、もしかしたらと言う一縷の望みを思い黙認していた中で

絆への探求以外の目的で人とつながろうとする、深慮を踏み倒し恋愛をすると言いはなった『はるさめ』の態度は驚きでしかなかった

「なんて事言ってるの？『はるさめ』、『いかづち』に頼まれたの？」

「何言ってるってぇ～～？そんな大仰な事話してないよ～～私～～」

もちろん『はるさめ』も直接ではなくとも姉になる『しまかぜ』が絆を求めて日々研究や調べものをしている事は知っていた

だが

返された声は、それらを蚊帳の外どころか投げ捨てた態度を示しながら、驚きの顔から距離をとると上体を反らし立ち上がって相手の鼻筋に向かって指をさした

「恋愛しましょ～～～って『いかづち』に言ったのよ～～だから恋愛を頑張る事にしただけよ～～」
「何が恋愛なの？どうしてそういう事になってるの？」

『しまかぜ』は立ち上がった相手を追うと、揺れる肩を掴んだ
「粉川さんに迷惑をかけるような事はやめなさい！私達にとって人との出会いは奇跡の出来事なのよ。だからココから」

「奇跡の出会いから何か変わった？」

声が尖る
揺れる標的だった『はるさめ』、口だけは笑っているが後の全てが硬く強張ると自分の肩を掴んだ手を振り切る

「何も始まってないし、何も変わってないよ。自分だけが特別に努力しているから邪魔しないで～～みたいな事いわないでよお」
「それは、まだ出会って二ヶ月だし」

どんなにあしらわれる言葉を投げられても、意識をしっかりと持っている事が大切、理路整然と事を語ろうとする『しまかぜ』だが、それをかわす『はるさめ』は
クルリと一回転して見せると、刺したままの指で

「そうやってのんびりしているとぉ～～今度は『たちかぜ』総司令が死ぬよねぇ～～～」

揺れながら刺す瞳は続けた
待ち続けた奇跡に爆発的な解決を望んでいる魂がいる事を、人の存在を知っているからこそ今も横須賀で、絆への解決を待ち堪えてい

る『たちかぜ』
人との繋がりを失った後の時代を支える司令艦『しらね』も不安を抱き続けている、この出会いによるなんらかの結果を欲している事護衛艦の魂達は「奇跡の出会い」から自分達のルーツと、救いを求めているという事実

「自分の中だけで解決できればいいから、ゆっくりしてるんでしょ～～『しまかぜ』さん～～」
「違うわ！！」

「ｙｏｕ　ａｒｅ　ａ　ｌｉａｒ」

ぶれることなく発された流暢な罵倒の前『はるさめ』は、いつものように笑っていた
『しまかぜ』は自分の視界が揺れ答えに戸惑っている事に気がついたが、追い撃つように彼女は続けた

「本当は「絆」を見つける、真実への道なんてどうだっていいのでしょう。そうやって『あまつかぜ』姉さんの追ったものを追うことで自分が絆への第一人者として苦労しているようなふりを見せているのだけでしょ」

「貴女は本気で絆を探していたあの人とは違う」
『しまかぜ』の脳が痺れ揺れる
いつも揺れている『はるさめ』の方が闇の中にしっかりと根を据えて立ち、姿は銀色の目を輝かすマリアの肖像と重なって見える

「違う、私は」

目を反らし俯き歩を止めた『しまかぜ』に、身を翻し近づいた『は

るさめ』は息をかけるように耳元で

「だって貴女は寂しさを紛らわせるための胸を持ってる。狡い魂(ひと)だもの」

「貴女は敬愛する姉の意志を踏みにじっている」

『はるさめ』の言葉に連なるように重なって木霊するコーパスクリスティーの諫言

されど

長すぎた途絶の期間、それを探すという作業は難航を極めていたDDGとDDHの確執は『あまつかぜ』の死の時まであった。そこから『しまかぜ』が受け継いで十年近くが過ぎていたが、十年でその溝が完全に埋まったわけでもない

さまざまな思いを抱いている護衛艦達の中で、深く入った亀裂の間を縫うように遅々とした歩みで作業を続けてはいたが、疲れていたのも事実だった

最愛の姉を撃った自分に課せられた十字架の中で、姉の意志を追うのは苦痛でもあった

だから、自分を休ませる心と体を癒せる場所を必要とした

『くらま』との関係を

愛でなくとも自分を慰める手を欲した

「汚らしいよね『くらま』司令もそうだけど、情熱のない恋愛をする貴女が大嫌いよ。『しまかぜ』さん、貴女が大嫌いなの」

知られていた関係を、卑下する声に『しまかぜ』の抵抗はなくなっ

ていた
反らした目を覗き込む『はるさめ』の笑い目と相対する茫然自失の目
夕日を浴び白く輝く書棚の部屋で黒く渦巻く二人の影
固まり動けなくなった相手の肩を、言論の勝者である『はるさめ』
が軽く押すと静かに離れていった

「ちゃぁ～～んと宣言したからね～～～」

背中越しの台詞は振り返って

「『いかづち』の恋愛を邪魔したら『はる』ちゃん絶対に貴女を許さないから」

返せる言葉無く、立ちつくしている『しまかぜ』の姿に、勝利の笑顔を見せ続ける相手は扉を閉めながら

「心配しないで～～～『こんごう』ちゃんにもぉ～～ちゃんと話しつけておくから～～」

閉じたドア、講堂に少しの足音が耳に残る
パーティーに続く夜までの時間を行き交う魂達の笑い声
上がってしまった息を整えながら『しまかぜ』は姉のデスクに手をついた

「『こんごう』…」

「再びお会い出来て光栄です」

演習組全員が揃っての帰還パーティーへの時間が迫る海に、姿を没した太陽が最後の煌めきで水面を広く細く輝かせているのを突堤から見ていた『こんごう』の背中に挨拶をしたのは
変わらぬ司教服、赤のスータンに身を包んだコーパスクリスティーだった

佐世保港から向こう山間を越えた向こう
大戦を戦った姉たちの終の棲家を思っていた『こんごう』は振り返ると、正しく敬礼した

「こちらこそ、再びお会い出来たことを嬉しく思います。コーパスクリスティー大佐」

海の御座と呼ばれた場所では、青白過ぎて不健康というよりも幽界の住人のように見えた肌は変わらず白すぎる陶器のようで生気を感じにくいものだったが、夕日の残り香を顔に写している事で生きた魂であり
自分と変わらぬ船の妖精であるのはわかっていたが、灰鉄の目に黒目が浮かぶ様子など
変わらぬ神秘の存在に見えるコーパスクリスティーは、『こんごう』の硬い挨拶に軽い会釈をして

「マリアで結構です。貴女とは名を呼べる友になりたいのですから」

白銀の眉と灰鉄の目、まるで瞳の輪郭だけが顔の上部に見える彼女は、どこか不器用そうな感じで薄い唇に笑みを見せた
相手に合わせた返事を貰った『こんごう』だったが、いくら名前で

と言われても踏み切れない様子で
敬礼の手を下ろすと

フレンドリーという態度に慣れないのか、尖り目を反らして
「でわ…マリア大佐」と取って付けたかのようにこたえた

どうにも縦社会の住人過ぎる『こんごう』階級は一佐である自分と
同じ佐官なのに、どこか下がった態度で、子供のように握りしめた
拳は仮面の女コーパスクリスティーにも笑いを誘うものに見えた

「マリアのみで結構ですよ」

目を泳がせ、口を尖らせながら返事を待つ姿
思わず小さな笑い声が出たコーパスクリスティーは口元を押さえな
がら

「ｒｅｌａｘ」と、少し肩の力を抜くというゼスチャーをして見せた

夕日の消えた海は紫の中間色を浮かべ、二人の影を長く伸ばしている
南から服風もめっきり肌に冷たいものとなった

「Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄ…私は」
「まって、私も『こんごう』で」

思わず改まってしまったが水の記憶の中ではけんか腰にまでなった
相手
思い返せば気恥ずかしいもの、『こんごう』は手を挙げて名前で呼
び合う提案を態度で承認しながら

「お互い名で呼ぶと言う事で」

話しの続きをと促し二人は桟橋を歩き、『こんごう』艦の甲板に場所を移していた
凪いだ風の中で黒髪を流す麗人と、茶色の髪を揺らす『こんごう』
一等星の瞬きが透明度の高い闇の中にあって際だって見える冬の空その下でパーティーまでの少しの会話をする事にした

「本当に、貴女ともう一度出会う機会に恵まれた事を感謝しています。貴女とならばきっと真理を隠した闇に近づけると確信していたから」
「私も近づきたいと思っていた」

迷いのない声が返した言葉にコーパスクリスティーの目は輝いた
静かに右へ首を傾げ
手を広げ港を指すと

「やはり貴女ならば共に高みを望む事が出来る。貴女は強い魂」

指される先を見る『こんごう』は制止した視線のまま
自分が強いか弱いかについてはわからないと告げた
強いならば、戦った姉たちの姿に涙を流さなかったのかもしれない。
自分もそれが故の船であるのだから
戦場という海において、有るべき当然結果だっと心を落ち着けていたのかもしれないという思いもあるが、それ以上に
現実には戦場に立つこともままならなかった自分、心の弱さ省みる事で、強く自分を立たせ先を歩いた姉達が綴った真実へと近づきたいという思いを隠すことなく言うと

「私は、死への戦の果てに姉さん達が願った思いを知りたいと考えている」

「わかりますよ、その思い。私ならば、いいえ私と貴女ならばそこにたどり着けるかもしれません」

手を緩やかに『こんごう』の前に伸ばす

「どうぞ私に力を貸してください、貴女の、日本海軍（日本国海上自衛隊）の魂である貴女の力を得る事によって、かつて日本を護った者達の残した記憶に手が届きます。共にまいりましょう」

神秘の雫を操る神の使徒マリアの力は『こんごう』にとって必要なものとなっていた

自分には出来なかった業を繰る者の協力に静かに、力を宿した目で頷いた

「よかった貴女との合意が得られた事で、私は更なる知の高みに至る道が開かれました」

「私は、姉さん達の魂のために出来ることが知りたい」

「大変に重い使命ですね」

輝く目は無機質な表情の中に喜びを浮かべ、伸ばしていた手の人差し指を立てると

「ただどうか聞いてください、重い使命にはそれと同等の思い責任が伴います。約束してください、この旅の結末まで、答えが出るまで、この事は私達二人だけの秘密としていきたいのです」

コーパスクリスティーの言いたいことを『こんごう』は良く理解していた

現在アメリカ合衆国海軍でこの問題がどう扱われているかは暗黙の

ものでもある
だがコーパスクリスティーのように「求めている者」がいる事から
も、知られざる部分の多いデリケートな問題である事は想像できたと
合衆国海軍の原子力潜水艦大佐という彼女の立場も考えれば提案は
飲まざるえないし

自分たちの側にも事がデリケートであるのもわかっていた
日本の盾たる船達にとって触ることを恐れる問題として長く残って
いる傷

大戦の姉達への道、帝国海軍との魂の絆

かつては『しまかぜ』の敬愛する姉である『あまつかぜ』が、それ
を追う事に没頭したがためにＤＤＨとの間に溝を作り護衛艦隊を二
つに分断するところまでいったとも言われていた

現在でもそれは尾を引いているのか『あまつかぜ』の後を継ぎ探求
者となった『しまかぜ』が大手を振って探しているところなど見た
こともない

それを今更自分が絆への道を探す事に参入したいなどと口に出すの
は、不安定の中にある護衛艦隊の中では不用心極まりない事である

意を決した口が強く結んだ唇を開く
「わかっている。誰にも言わない、マリアにも迷惑をかけたくない
からな」
もう一つ
粉川との約束を考えれば、やはり隠密に事を進め確証を見いだして
から『しまかぜ』の協力を仰ぐのがベストとと考えついた

「覚悟は決まっている、まず一人で戦う。マリアの力を借りて」

伸ばされていた手を取ろうとした

記憶を追い、真実へ向かうのは戦い、『こんごう』らしい言葉にコーパスクリスティーも手を取ろうとした

「『こんごう』！！」

各々の答えを求める者同士として決意の握手を交わそうとした間を割ったのは『しまかぜ』だった

その目は嫌悪を現してコーパスクリスティーを見ると『こんごう』の伸ばしていた手を引き離すように勢いよく自分の側に引いた

「何を話していたんですか？変な事を吹き込まないで！！」

最初の出会いの日から、敵対者であるという認識を惜しむことなく見せているコーパスクリスティーを『しまかぜ』は危険な存在と認識していた

『いかづち』の恋心をそそのかした者

『はるさめ』に強硬手段を取らせるほどにした者

この上『こんごう』までをも巻き込めば…

余裕のない態度が、いつもの出来る姉の姿を霞ませたまま強く『こんごう』を引き寄せると、自分の背中で不敵な相手を隠して

「『こんごう』？何話してたの？」

額をぶつける程の近くで吐き出すように問いつめた

睨むように尖った目、姉の形相の前で『こんごう』は沈黙の中で口

をつぐむ

「最初の決意が滞る事のない事を願います」

『こんごう』を隠す『しまかぜ』の背中にゆるく祈るような荘厳な声が響く
必死の形相の『しまかぜ』とは対照的過ぎる、静かで冷徹で無を見せる銀色の目
頭に響く声は『こんごう』は必死すぎる姉の態度に呆けていた目を怒らせ顔を引き締めた

「何も、何も話してません」
「『こんごう』？！」
毅然とした目は姉の質問にこれ以上扉を開かないというのを現していた
いつものきつく結んだ口が微かに震えている
呆然とした目が、首を微かに拒否とふるのを見届けたように
いつも以上に尖った目が告げた

「挨拶をしていただけです」

そう言うと引かれていた手を振り切り真っ直ぐに歩いていった
『しまかぜ』は振り払われた手の痛みを胸で押さえるとコーパスクリスティーを見つめた

「彼女は振り向かない」

声を無くした相手に、聖者の妻を自負する魂は笑うように言う
「貴女では届かない。貴女はココで待ってる方が似合う」

無機質を彩る銀の瞳は月の光の下、ブルネットを銀色に変えた髪を
逆巻きながら

「彼女が希望になる。貴女はただ待っているだけで、それでいい」

月が照らし出す二人の淡い影
優しい夜の中で限りない孤独の闇に『しまかぜ』は立っていた

第七十話　知の高み（後書き）

カセイウラバナダイアル～～ヤマト～～

宇宙戦艦ヤマトに新作が出来ていた事を最近知ったヒボシですｗｗｗ
そういえば草薙先生が後書きで復活編を見て来たと書いていたのを見てぐらいな感覚なのですが

なんとヤマトが実写になるという驚愕の情報
たぶん皆さんは知ってましたよね

ヒボシは宇宙戦艦ヤマトって見た事ないんです
ただ偉大な作品なのでイメージとされるキャラなどはそれなりに知ってます

スターシャにテレサ
アナライザーに酒を飲ます佐渡先生とかミー君とか
「こんなこともあろうかと」の真田さん（ちなみに実写では柳葉敏郎さんがやります。東北弁でなまったままこの台詞言ってください
「こんな→こともぉあろっかぁ→とぉ」って）
何故かキャラクターの方はそれなりに知っています
特に子供の頃はテレサの裸体に萌えました
祈りを捧げる形で宙に浮かぶ彼女の憂いをおびた切れ長の目、長いまつげは憧れでした

ところで実写の古代進はキムタクだそうですが…
なんかがっかりです、そういうちょっとおしゃれな人にやってほしくないキャラです
むしろ時代逆行するかのように眉の太い無駄にきまじめな姿を見せ

られる人にやってほしかったです

沖田十三が山崎努というだけで私の周りは見に行こうとしている人が多いですが

ヒボシはデスラー総統が伊武雅刀だったら確実に行きます
真っ青になって出てください伊武さんｗｗｗ

そんな希望いっぱいの？宇宙戦艦ヤマトですが
ゲームになったりパチンコになったりでＣＧを多用した画像がたくさんあって色々みました

中でも、心奪われたのは
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝２ＢｈｖＬｖＱ０８ＲＭ＆ａｍｐ；ｆｅａｔｕｒｅ＝ｒｅｌａｔｅｄ
これ
なんか凄い、宇宙に向かうために飛ぶという描写がかなり本格的
真っ直ぐ飛んでゆく巨体
パチンコのＣＧらしいのですが、最近のものは良く出来ているなあと感心しつつ

あの海から出てくるヤマトの大きさはおかしいと突っ込み
周りを飛んでいる戦闘機の比率から計算するとあのヤマトは６００メートルはある
いやそれ以上あるかもしれない
１１秒から１３秒の間に見えるヤマトすぐ横を飛ぶ戦闘機の大きさから考えるにそういう事になる
この戦闘機の大きさが、名称はブラックタイガーというらしい…エビ？

とにかく全長１７メートルで二人乗り
これの大きさから画面を測っていったら６００メートルぐらいになった
ものすごい単純比率の出し方だったが…
言えば過剰演出？
宇宙戦艦ヤマトってウィキによると２６５．８メートルとなっている
戦艦大和の殻の下から脱皮するように出てきたヤマト
戦艦大和はココでの先生方もご存じのように全長２６３．０メートル
あきらかに宇宙戦艦ヤマトの方が長い
ただこれは艦尾に付いている波動エンジンの長さにもよるものではと推測している

現在では本物の大和がどんな姿で海の底にいるかはわかっているのでそこにはふれないけど
宇宙戦艦ヤマトは戦艦大和に比べるとかなりシェイプされた艦体とタンブルしているボディを持っている
宇宙という海を行くには現代科学的に割と優れたデザイン
ただ
あの真っ直ぐ飛んでゆゆくのはテレビ版より嘘だと思う
真っ赤ぐ飛んでいるように見えたのかもしれないが、衛星軌道と引力の関係から真っ直ぐ重力を振り切るにはあの巨体では飛ばない
俗にロケットは宇宙に落ちるという風にもゆうのでもっと低い姿勢から徐々に弾道ミサイルのように飛んでいる姿が正しいと思う
ただそうするとシートベルトもしない艦橋ではてんやわんやになる

すいません夢のない話しでｗｗｗ

ああっ実写のヤマト

撮影や組みはリターナで才能を披露した山崎貴監督率いる白組
総制作費２０億という金を出す側の無用な意見に負けず、良い作品に仕上げてくれる事を期待する
しかし佐渡先生が高島礼子だなんて…アナライザーが可哀想だよ

そんな悲喜こもごもなヒボシでした

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～

第七十一話　風の中（前書き）

愛の目指すところは大きくみれば一つなのかもしれないけど、人と艦魂の持つ感覚や生態でとらえられる愛は違う部分がある思います。というかヒボシの小説ではそれがこれから色々な形で出てくると思う人によっては受け入れられない方もいるのではとも思う今日この頃

だけど世界は一つの画面では見られないのだから仕方ないか

第七十一話　風の中

『いかづち』は官舎のガラスに写る自分の髪を懸命に撫で躾ていた癖毛で有らぬ方向に飛んで形作られているヘアスタイルを少しでも大人っぽく見せたいという思いが、水筒に運んだ水で両の手を濡らして何度も頭を押さえ込むようにかき回す

「姉はん（『はるさめ』）が『しまかぜ』はんの事は気にするなゆぅたけどぉ…」

昼の太陽さえ、手早く休みにつこうと海に傾く冬の空
影を長く伸ばす駐車場の真ん中で、袖口やスカートの折り目を何度も直す程に落ち着かない仕草で

殊勲の艦である『こんごう』の出迎えが終わり解散の声が響いた中、『いかづち』は喉から心臓が飛び出でそうな程に緊張していた
手のひらに湿気った汗で自分の目頭を何度も押さえる、メガネ越しでも動転した気のままで目を読まれる可能性があると思うほど身体が微震する、語る本音を読み取られないようにと身なりにいつも以上に気を遣う

お迎え集合の少し前、引っかかりのあるきっかけのため煮え切らない気持ちで桟橋を見ていた妹の肩を『はるさめ』は軽いタッチで何度も押すと、いつもの笑い顔で『いかづち』の周りフワフワとして

「大事な言葉は…最初は自分で言わないとぉ～～～、粉川さんだってぇ～～超能力者じゃないからね～～」

顔に恋の焦り半分、冷静になろうとする思い半分を浮かべるばかり

の妹に、言葉にして恋心を真っ直ぐに伝えようと鼻先に指を置いた

「がんばってぇ～～～応援してるから～～～」

背中を押す言葉に
今まで自分の中だけで空回っていた『いかづち』に恋をしようと陽気に押す姉の言葉は強い追い風だった
『しまかぜ』の保護下にある情緒不安定で不器用な『こんごう』が粉川との仲をプッシュされるまま、それを見続けるのは辛い事
恋愛という戦いなのだから保護者無しで、対等に戦えるようにしてあげるという味方の押しは『いかづち』の心に弾みを付けていた
鼓動を服の？まで伝える胸に手を当てて

「そうよな…言葉にして言わなきゃ、最初の告白は自分でいわなきゃあかん。相手やって超能力者じゃないんやから…」

おそらく告白はしていない『こんごう』を突き放すための最初の一歩は自分の心を継げる言葉

最初の愛をつげなきゃ相手に気持ちをつたえなきゃ始まらないレース
潤ませた目で見つめるだけで相手が、自分の気持ちに気がついてそれに答えて、ドラマじゃあるまいし物事は都合よく進まないのだから

都合を合わせるのは自分の想いに対するバイタリティだ
切っ先は言葉だ、相手に気がついてもらうのに一番の槍

恨めしく桟橋を見ていた顔を、挑戦者の顔に塗り替えたとき
妹の決意を確認した『はるさめ』は変わらぬ浮遊感のままで

「そうよ～～がんばろ～～」両手を固めるとガッツと勢いを見せながらも、いつも見せる柔らか過ぎな笑みを絶やさず送り出してくれた

後は自分戦いだ、『いかづち』は胸の前で拳を強く固めて立っていた

港からは遠い奥まった佐世保地方隊基地官舎へは艦魂が近づく事はない

『いかづち』もそうだ

立神のバースから陸地の側、現在突貫で作られる工事現場を避けて波のよく見える駐車場の前までは進んできていたが、それ以上立神町の突堤道路を渡る事はなく粉川を待ち制服姿の『いかづち』は続けていた

「待ったらいいよ～～待ってる『いかづち』は～～きっと可愛い～～」

解散の号令がかかった後、『こんごう』は都合良く『くらま』司令に引っ張られ

『しまかぜ』はどこか元気ない顔のままいつものように立神を後にすると倉敷側にある寄宿舎に戻っていった

絶好の告白チャンスがやってきたのだが、同じように粉川もまた基地司令である宗像の迎えに間宮艦長達と揃って総監部に向かってしまったため、どうしたものかと俯いた顔に『はるさめ』の提案に従ってココで待つ事にしたのだ

「見えたら…すぐにとんでってぇ…」

思いこんんだらの機会が延長されている事で、鼓動が耳を熱くする

程の『いかづち』だが、いつ監部から出てくるのかワカラナイ粉川のために顔は常に上げた状態
目を忙しく動かし探すように景色を見回す

コック姿がデフォルトだった自分が、プリーツスカートとダブルスーツという出で立ち
少しは見違えて見て欲しいという気持ちではち切れそうな思いを落ち着かせるために、深呼吸をしてゆっくりと佐世保の慣れた景色を見渡す

立神のバースから真っ直ぐに向かうと灰色屋根の倉庫が六つ並ぶ、ＳＳＫバイパスが本線と別れたラインに見えるニミッツパークと並ぶように見えるのが、海上自衛隊佐世保地方総監部
コンクリート造りの白い門に黒の台座に金字で書かれた表札を持つ日本防衛の基地は、波乱の歴史を持つ基地でもある
現在は向かい合うように米軍の基地があるココだが、かつては帝国の一大軍港だった
大戦後、一度は全ての機能をアメリカに剥奪され日本でなくなった後に主権を回復した日本に部分で返され（正確には返されていない）現在は日本国自衛隊とアメリカ合衆国第七艦隊が詰める軍港基地となっている

陸地を少し上がったところからが基地の本体になる
大きく開かれたアメリカ軍基地の門に比べると、海自の側は普通自動車なら横に二台程度しか通れない程狭き門になっている
官舎に向かう通りは小綺麗に纏めた煉瓦の壁もあったりするのだが、どこか閉鎖的で国防の理解が得られない事に苦心する自衛隊の心苦しい口元を現しているようにも見える

人通りの少ない基地の入り口を
冬の太陽は眠りの海へと顔を傾ける中『いかづち』は海風を受け手
見つめ続けていた

陸地にいるのだから冬の海風を避けて建物の中にでも入れば良いと
思われがちだが、彼女達は好んで陸地の建物に入ったりは決してし
ない
本来陸地を生息の場所としていない彼女達にとって陸は少しぐらい
散歩出来たら良い程度のものだ

人が浜辺付近の海で遊びはするが海に居を構えないのと同じように、
陸地は波の見える所を歩く程度のもので長く居続けたい場所ではない
艦魂は海の近くである少しの陸地を楽しむ程度に歩く事はできるが、
本格的な上陸までは絶対にしない、出来ないという事ではなく、海
に属する魂である彼女達にはそれを必要な事とは考えられないからだ

魂達にとって海から離れた陸地は、わかっていても未知の世界であ
り、無理して関わる必要のないところだし、そこには船の魂に必要
なものは本心から何もない

海上自衛隊に属する魂達は日章旗の揚がる基地の中は歩くが、別に
気持ちの良い行為という訳でもないし、好きでもない
ただ国を護る者達、国防の盾たる人がいるからこそ、同じ志の者達
との居場所を共有できる唯一の陸地としているだけであり
そこだけが、繋がりを失った人との共有の場所というだけでもある
そういう思いの延長にあるのが寄宿舎だが、それだって波打ち際に
ある煉瓦倉庫に限られている
波の音のないところでは暮らせないのが船の魂でもある

だから『いかづち』は人の集まる建物で風を凌ごうという気持ちが

ないのではなく、考えにも昇らない
ただ、想う人待って波を感じる事のできる突堤近くの駐車場に立っていた
ひたすらに、癖毛の髪を撫でながら

「海上保安庁…」

『いかづち』が待ち人来たる?に身体を焦がしている頃
佐世保総監部、基地司令宗像の執務室に通された粉川は思いだしたようにつぶやいていた
簡素に纏められた白い壁の部屋、さして大きくない執務用のデスクにノートパソコン、金属のデッキで作られた書棚の前で宗像は大柄な身体を埋めるようにイスに座ると、粉川を指差して

「おいおい、なんの考えもなく長崎に留め置きされたと考えてたんじゃあないだろうな」
戯けたように額に手を当て傷をかくした宗像は、今回『こんごう』が修復に入った長崎造船所から粉川の本庁への帰参命令がなかった理由を話した

話しの内訳は、世間の話題からはすっかり霞んだ例の事件
「不審船海上保安庁船艇銃撃事件」
正確には海域名称などの入ったこの事件は海自と海保の間ではまだ何も解決されていない事件だった
解決しないのは犯人不在というものがもっとも大きなポイントなのだが、それを追求するよりも双方の「不始末」を身内ですった揉んだするという本末転倒な会議だけが紛糾し続け闇鍋のような状態に

なっていた

「海保が、例の事件の事水面下で活動をしている。それにより不用意な発言や不確かな情報が流れる事を抑止した形となったわけだ」

顎に手を置き、目を泳がす粉川
短く刈り込んだ頭を掻きながら情報を整理していく
長崎造船所に入った時は自分が蚊帳の外に置かれたものと憤慨したものだが、上司達が蠢く水面の下にある思案と戦っていた事は容易に想像が出来た
同時に本来の自分の職務を忘れる程艦魂達との交友をしていた事で呆けた自分を恥ずかしく思い顔をしかめながら

「海保がですか？」

自嘲気味に頭を掻く粉川のとなり、制帽を自分の前に置いた間宮がイタズラっぽく聞き返した
「表向きな」

宗像は指でお猪口を持つ仕草を見せ
「酒でも入らねばまともでは居られない」と口を曲げた

「予算、長引いている見たいでしたがそれにも関係があるのですか？」

大綱の概算要求の中、年次の予算を九月に提出した海自だったが間は最高に悪かった
当時「イージス艦機密漏洩」の事件で煮え湯にがっぷり四つの状態だった海自
身内からでた不祥事をなんとか身の中で打ち消すために抗生物質の

がぶ飲みをした状態にあって起こった事件が一ヶ月後の東シナ海、不審船発砲という難事件だった
この前代見物の事件続きでで防衛庁は元より内閣府、政府上層部まで上から下までの大騒ぎ
そこに来てのまったく予期できぬ事態だった災害派遣

目の回る時間の中
海自の要求する予算成立への見通しは限りなく暗い海に、クラゲのように漂う羽目になっていた
さらに一ヶ月の時を経てはいたが、事件の容疑者は海の向こうに消えたきり、大洋州局長会議に合わせた演習はそれなりに効果を上げているようで、新たな兵器の実験は脅威であるという認識を中国政府は態度で示していた
結果中国側での船舶管理ないし、登録外船舶に対する規定などを盛り込む事には成功していたが

逆に「日本政府の中国船籍の犯行であるという発表ならび断定は早々過ぎる事、遺憾である」と釘を刺されるおまけもあった。ただ非公式な事務レベルの会話としてだが

後は国内で残り火の消し合いの為の水掛け論が相変わらず続けられていた

「予算の事は後で話そう。問題は海保を盾に海自を叩きたい連中が背中を怒突いている事だな」

宗像は良く焼けた顔から嫌味の笑みと、前にだした自分の拳でノックをする真似をして見せた

「マスコミですか？」

間宮の隣に並ぶように座らされていた粉川は、カバンから手早くパソコンを出し
情報のとりまとめをしようとしていた

「マスコミもあるが、どちらかというと「平和団体」かな」
「平和団体」

思わず一同声が揃う
同時に溜息も揃う

「自称、他称、自薦、推薦、色々ありますけど、とにかく夢色の海に砂浜をかけっこする人達ですよね」

開けたパソコンの蓋をうんざりと下ろした粉川は自嘲気味に笑うと
今度は笑いが出揃った

夢色の海
実は佐世保界隈に住む人よりも本土の内地に住む人の方が圧倒的に夢を見ている日本海
さらにいえば沖縄本島にもこういう気質はあったりもする

美しい海に争いはいらない
それは誰だって言葉に出して言える事だが、平和を維持する努力が無ければあっという間に「征服者の海」になる事を誰もが見落としている
海自の上層部もいつも思っている事なのだが、どちらかと言えば日本に駐留するアメリカ軍の方が危機意識は強い

「日本はいつ安全圏にある国になった?」

真顔でアメリカの司令官に聞かれたことのある宗像佐世保基地司令
にしてみれば、もっとも過ぎて恥ずかしい思い出にもなっていた
となりの赤い国は安全か？手を取り合い心をさらけ出せる仲間か？
その眷属国は安全か？大手を振ってそう言い切れるか？

「日本が攻撃力を放棄すれば、争いはなくなる」
「武器を放棄しても国家として成り立っている国もある」
そういう意見は世間知らずいいところだ
むしろ、国際認識から大きく後退したエセ国際人だ
自分の机の前にあるパーソナル小箱の情報だけで世界を見て回った
気になっている、電化製品てんこ盛りで、主婦としての仕事の間を
でたらめな情報番組を見て食いつなぎしてしまった人達のブログな
ど見るに堪えられない博愛主義

勉強しない人間の多さと
仕事にまみれて社会の事など考えられなくなった旦那もしかりだ

争いを望んで軍備を持っているわけではない
毎年右肩二桁上がりの軍事費を計上して行く赤の国、経済的にも邁
進し続ける中国に、危険な要素で世界と駆け引きを続ける北朝鮮
これらに対して
面と向かう争いを抑止するために、残念ながら日本には今だに武器
が必要なのだ

米軍任せでは国際社会の一員、主権国家とはみなされない
敗戦の時主権を失い、アメリカの属州になった
その時アメリカは日本を護るという義務も課せられたが、主権を取
り戻し国家として経済的に成長した今、それを平で願うのはお門違

いというものだ

自分の国を守れない国家がどうしてれっきとした一国家と見てもらえようか?

必要な盾なのだ

「それで、そういう団体からの突き上げで動いているんですか?海保は?」

一同の頭の中に苦く思い出される国家の守りに与えられている現状

「海保は財界との繋がりも少なからず持っているからな、そういう輩が小うるさく何かをしていると言ったところだ」

「うるさい?実際どんな事を狙ってきているんですか?まさかミサイル迎撃実験と停止を求めているとか?」

ミサイル防衛構想

計画に伴って実戦されるものは年を開けた二月に予定されている

護衛艦『こんごう』による迎撃実験

間宮はその艦長である、飛び出した話題にいつものイタズラっぽい眉がピクリと上がる

「たかだかミサイルの迎撃実験をするのに四十八億…と素人様達を煽っての大憤慨の様子が有るのは事実だが」

手元に纏めた書類に目を通しながら宗像は、いちいち大きな溜息混じりで会話を続けた

「停止は国としてあり得ない。強い同盟国である事を求めているアメリカにとって寝耳に水ですまなくなるからな」

ドタキャンが許されるレベルの国家防衛交渉はない

もしそれが許されるとするならその国は一流の国家ではないという見方が世界基準である今、一応に日本でも規則としてそれらは守られている

予定されている実験は、それ以外艦隊訓練を密に取るための合同演習の中に含まれている
海自は昨今近海を騒がす輩へのデモンストレーションとして大洋州局長会議に見せたような派手な演習を必要としていた
それには随伴する艦艇の数も多くいる

が
急な災害派遣などが入り実際はかなり苦しい台所事情
現行五十艦と少しの体制の中から絞り出される艦艇群の数はかなりの痛手
国防の盾たる艦艇が特定数海外に出払ってしまうのは危険な事ではある。それでも当初予定していた艦艇数を減らすことは誰の口からもでなかった
つまりはそういう事なのだ
国家の約束事に不足の事態が有れども穴を開ける事は出来ない

それに目標を破壊するだけが実験ではない
リンク１６及びＵＳＣの活用による各艦艇の追尾ならびに情報伝達網の確立、早期警戒への情報精度を高めるための実験でもある
打ち上げ花火を打ち落とすのに億単位の無駄金と言われるが、情報戦が大切な現代に置いて自分たちの所有する兵器の精度をいかに多くの僚艦が把握できるかを知り、共有するかは大切な事である

これらは派手さではミサイル迎撃の実験ほどの華はないが、日本各地の基地との連携、長く伸びた国土と広がる海を守るもっとも重要な足場の部分だ

わかりやすい題目である迎撃実験だが、隠れている部分であるこちらの方が本当に必要とされるものだった

「中止は無かったとして、予算の取り合いは収まっていないという事ですか？」

飛び交う思案の中で、緊張を顔に出さない間宮は結論だけを求めているように聞くと

「そうじゃない部分を突いてる輩がいるというとですよね、問題は」

「そうだ、それを前振りに使って別のものを要求する者達がいるという事だ」

「海保の新しい船の要求ですか？」

「それに準ずる要求ですね」

矢継ぎ早になった会話、粉川の質問に話しの大筋を察していた間宮が答えた

「表向き争ったら、国防有無論なんてマスコミに火つけられちゃって収拾つかなっちゃいますからね。そうなっちゃうと国防産業や今まで蓄積してきた技術が失われますし」

現実にはこの事件で争いたくないという本音
事件はすでに政治の駆け引きの道具となっているという事実の前
責任を取るのはどちらでも良かったのだ
無駄に争って本当に国防を停止してしまおうなどという考えを持っている政治家はほとんどいない
だけど何らかの落とし前は必要になる
そこで事件の中、脆弱さを見せた海保船艇が予算を計上、日本国の海洋警察としての装備を一新させたいという思いがあった

基本不審船などの面前に立つのは我らであるという言葉を全面に出して

船自体の要求ではなく細かく備品を一新する方向に話しを進めているという事
それによって大幅な利潤を得る産業があるという後押しに乗って

「僕はどちらでも良いんですけどね。海保の船が護衛艦のようになってくれるのならそれもアル意味国防の為の備えとして前進ともいえますから」

間宮は財界と少なからずの繋がりを誕生の最初から持っている海保の姿を勘ぐっていた
半分は憶測だったが、宗像は同意するようにただ頷いて

「そうなってくれればこちらとの苦労も分けられるというものだが、国の予算は限りがあるからな、そこをどうやって埋め合わせるかで上は頭を悩ませている」
「司法取引まがいな事が起きているんでしょうね」

現場の荒海とは違う海を行くスーツ達の姿
暗闇過ぎる世界は考える以上に入り組んだ海なのだろう
間宮は目を細めた

粉川は開いたパソコンの中にある情報を横目で見ながら疲れた顔をさらしていた

「もっと前向きな解決ってないんですかね？」

顎をさすった口から思わず本音がもれる

責任のなすり合いで、防衛邁進の鍵を探すなんて後ろめたい部分をもちながら、さらに後ろ向きな徒競走みたいで情けなくなるというもの

短髪より少し眺めの髪
頭を自分でこづきながら唇を尖らせた田粉川の前、宗像は「この男は」という顔
真面目にして前向き、真正面から意見を自分たちにぶちまけた粉川が性格的にこういう裏取引みたいなものを嫌っているのは良くわかる事

一通りの話しの区切りに用意した茶を自ら振る舞い、大きめの湯？みを並べる

「だが悪い知らせばかりじゃない、話しがこじれた原因にもなっているが喜ばしい知らせもある」

そう言うと荒海を生きた司令官は曇っていた眉間の皺を解除して白い歯を見せた

「新たな護衛艦の予算が通ることが決まった」
満面の笑みは自分で注いだ茶を一気飲みすると
「それも新しいイージス艦がだ！」とデスクに湯飲みを叩きつけんばかりの勢いで手を突いて立ち上がった

「新型のＤＤＧ…予算が通ったんですか？」
信じられない、粉川は目を大きく開き聞き返した
予想以上に良いリアクションを返した相手の顔に宗像司令は満足げに続ける

「ほぼ決まった今年を押し通すのは無理だったが来年度確定の第一隻だ」

大きく手を広げる宗像の前、粉川は目どころか口まで大きくいて顔を合わせ
間宮もまた笑みを浮かべた、いつもの片口で笑う顔ではなく眉も柔らかな喜びに丸くなって

「これも『こんごう』が、いや間宮艦長が頑張って結果を出してくれたおかげもあるだろう」

実際必要とされていた新しいＤＤＧ、新しいイージス艦
艦隊のローテーションを考えれば対するミサイルに備えるイージス艦の数は必ずしも足りているとは言い難かった
年間で確実に起動しているのは三隻
四年に一度は全改修も必要となるほどフルで働く護衛艦
場合によっては常年の中にあっても半年の修復を必要ともする高級にして最新鋭のシステム艦

それでもその存在は大きな意味を持っている
居ることで日本を囲む赤の国の脅威を少なからず遠ざける事のできる存在
声はなくとも喜びでゆるんだ顔の粉川の前、デスクの書類を宗像は叩きながら

「上もそうとう頑張ってくれたようだ。今回の演習結果はアメリカからもそれなりの情報提供を受けていたし、持ち帰ったデータからも色々な検証もできたようだ」

大切な記録

そこに至る過程に伴う結果が出揃わなければ、なかなか予算には計上するのは難しい事だったであろうイージス艦

「やったぁぁぁ！！」

沈黙の間に、ついに男は声を挙げた。座ったままだが粉川は両手を挙げてガッツポーズをした
思いだしても辛かった演習、未知の攻撃の中を決死の戦いをし続けた『こんごう』の姿
誰にも見られる事のない魂の彼女が、傷つき血反吐を吐いても諦めなかった戦いの末にあげた大金星は思わぬご褒美までを持ってきた事に
涙が目に滲んでいた
背を丸め拳を振るわす粉川の姿に、宗像は少し引き気味に

「まあ、アメリカが少しばかりプッシュしてくれたのかもしれんがぁ」
「そんな事はありません！！『こんごう』の勝利が引き寄せてくれたものですよ！」

上がっていた手が下がり拳のまま膝の上で震える

「アメリカは本気でしたよ、『こんごう』が頑張ってくれたのは事実です」

自分の隣、男泣きの領域に入りつつある粉川の肩を間宮が叩く
鼻を啜る程に背中を丸めた粉川は小さな声で、自分の胸を叩いていた

「『こんごう』、『こんごう』ありがとう、ホントにありがとう」

への字に怒った口を持つ少し強面の『こんごう』の顔が脳裏に浮かぶ
不機嫌を晒し、不器用を見せる彼女だったが国家にとって大切な仕事完遂した殊勲の女である
つきあいが悪くても、口べたでも、やるべき事をしっかりやった

そこに至る課程が本庁の解析に役立てられ、予算委員会に必要性を訴える事が出来た
結果が全てとなってしまう世界の中で、苦難の波を乗り越えて出された答えは本当に大きな宝となった

「そんなに喜んでもらえたなら、羽村局長達も頑張った甲斐があったというものだろう」
「はい！」
大きな返事に何故かもらい泣きしそうになった宗像は
「間宮艦長は本庁の大きな期待に応えてくれたわけだが、まだ大きなプレッシャーが残っているわけだ。これからも頑張ってもらわんにゃな」
話題をはぐらかすように目を泳がせたが、間宮の顔は毅然としていた

「ええ、これからも勝たせて頂きますよ。それが僕の使命ですから」

制帽に軽く触れる
大きな結果、大きなプレッシャー与えられた。宝を持ち腐れではなく、国を護る絶大な盾として遺憾なくその姿を見せる事が彼の仕事であり、間宮本人が心に硬く誓っている事でもある

来るプレッシャーの名はミサイル迎撃実験

こみ上げる熱い想い、だが決して粉川のように感情的に現したりし

しないし
暑苦しく熱弁を振るったりもしない、努めてクールな笑顔は

「次も勝ちますよ。絶対に」

見せない決意を自分の中に叩き込み
この金星を更なる高みに導く事を誓った

粉川は吉報を聞いた足で走っていた
いつものように夕暮れが近づき肌に寒い風が吹き付けているだろうに、スーツの上着を肩に引っかけ陸自の背嚢を揺らしてすぐにでも『こんごう』に、彼女のあげた結果が導き出した新たな護衛艦、イージス艦発注へとつながった事を伝えたかった
大きなストライドで勢いよく走る粉川に風の中から声が掛かったのは加速のひと踏みをいれた時だった

「粉川はん！！」

頑張って撫で躾ていた髪は風に揺られてすっかり元通りになり
冷たい風に晒されて肌が白くなりすぎてしまっている『いかづち』の姿に粉川はつんのめった形で止まった

「どうしたの？こんなところに？」

基地から立神港までを全速力で走ってきた粉川は既に湯気がでる身体
逆に寒さにスカートから伸ばした足を奮わせている『いかづち』の姿が可笑しく見える

本当ならこのままバイパスを突っ走って行くところだったが、分岐の前で声をかけられたためゆっくりと息を落ち着かせながら、先ほどまでは白くなっていた頬をわずかに赤く蒸気させた『いかづち』に近づいた

「あんな…待ってたんよ…ココで、粉川はん来るの」
「待ってくれてたの？えっなんで？」

質問に質問しながらも粉川にはピンとくるものがあった

彼女達は割と騒がしいのが好きだ
寄宿舎で、また演習から帰った『こんごう』を囲んで飲み会でもしようと考えているのではと
「ひょっとして飲み会？じゃあなおさらだね、町でお酒を買っていくよ！」

吉報にテンションの上がっている粉川は素早く町に向かおうと歩を踏み出したが、手を『いかづち』はしがみつくように掴まえた

「飲み会なんてあらへんで…今日は…」
ひっぱられまたもつんのめりそうになった粉川
「えっ、じゃ何があるの？」
振り返った粉川は『いかづち』の頬に見える細かなうぶ毛が寒さに震えているのを見るや、背嚢にひっかけてあったマフラーを首にかけた

「こんな所で待っていてくれたわけでしょ？寒い中」
あっけなく人は魂の恋心の中に入ってきた

「そっ、そうなんやけど」

一瞬で巻かれたマフラー
細い肩から滑り落ちそうな端を掴む
恋した人の匂いが自分の身を包むように首を暖めている事に『いかづち』の思考は臨界点を突破しそうになっていた
回転の上がった心の熱気は言いたい言葉を喉に向かって押し上げるが、頭が着いていかない状態

「『こんごう』に知らせたい事があったんだけどなぁ」

のぼせ上がった熱が沸点手前でピタリと止まった
恋のライバルとしている者の名前に、耳まで真っ赤にしていた『いかづち』の目が座る

「『こんごう』に会いたかったん?粉川はん?」

震えていた声が一変して低く下がったトーンで聞き返すと、相手の意見をまたずに早口で続けた
「今日は『こんごう』とはあわれへんで、今日はアメリカの司令艦達が殊勲艦の帰還を祝ってパーティーやるんや、『こんごう』は主役やから、外にもでられへんから…」

尖った口調、自分より先に呼び捨てあえる仲となった名前が出てくる事に嫉妬の波が高くなる
かけられたマフラーが無かったら、卑屈に歪んだ口元を隠しきれない程の感情を無理矢理隠そうと深く俯く姿に粉川は頭を掻くと

「そうか、そういうイベントがあるんだ。知らなかったよ残念。でも、そうだ!『いかづち』ちゃんにも感謝しないとね!!」

顔を下げ恨めしい目線をメガネの奥に隠していた『いかづち』の肩に粉川は両手を乗せて
「新しいイージス艦が作られる事になったんだよ！！こないだの演習、『こんごう』もそうだけど『いかづち』ちゃんも頑張ってくれたでしょ！！結果が出せたんだよ！！」

うれしさでいっぱいでつい大きな声を出して死まった粉川は、一瞬固まると周りを見渡す
艦魂とは慣れた会話をしているつもりでも端から見たら大仰な独り言に見えてしまう
姿勢を正して肩から手を離すと顔を近づけ

「嬉しいニュースをね、早く知らせたかったんだ」と笑った

「新しい護衛艦…ＤＤＧが産まれる…」
近づけられた顔に鼓動を早めた『いかづち』はニュースとして告げられた事に目を丸くし停止した
何か信じられないものを聞かされたかのようにメガネの奥にあった目が開かれている様子に粉川は首を傾げた

「何？何か変だったかな？」
「ううん？なんでもあらへんで」

自分を覗き込んだ顔に飛んでしまった意識を取り戻すが、開かれた目が戻る事はなかった
背けるよう顔を反らして、取って付けたように
「そうなんや、びっくりしたわ」と背を向けた

「そう、ビッグニュースでしょ、だから早く教えたかったんだ。『こんごう』や『いかづち』ちゃんが頑張ってくれたおかげだからね」

少しずつ歩く粉川の背中を追うように進む『いかづち』には喜びの
顔はなかった
ただ俯いてカラ返事をしながら拳を振るって話しをする粉川の後に
ついて行く

新しい護衛艦が産まれる
それも最新のＤＤＧが、それが示す物事の方に心が怯えていた

「『たちかぜ』総司令が死ぬのが決まったんや」

粉川には聞こえない声の中で、短命すぎる護衛艦の生を実感していた
新しい命のために死ぬ魂
護衛艦はかつての帝国海軍の艦達とは違う、かつては老朽艦と言わ
れた日露からの戦艦達も長く軍籍を持ち国に尽くすことができた
だけど今は違う、決められた年数を生きて、決められた年で死ぬ
予備役的に残されたり、練習艦となって余生を過ごす間など無い

おおよそ三十年の命はすぐに消える

新しい同種艦が産まれれば、最古参の同種艦は死ななければならない
漁船や商船とは違う、人に寄り添って最後の時まで満足いくまで勤
められる仕事でもない、そういう規則の中に生きている護衛艦艦魂達

『いかづち』は自分の身体の芯が冷えている事に気がついた
その日は自分にも来る、自分達で生きるという未来を探せない魂
国を護るという職務にありながら、商船や客船達のように人に手を
振って貰うことなど皆無の孤独な任務

解体はあるべき船の死の形だから怖くはない

最後の勤めとして標的艦になる事も覚悟はできる
だけど、覚悟を決められるほどこの職務を愛せない
愛されない護衛艦
心を満たすほど、艦生に納得できるものがない
国を護るために、国家の頂点の船として産まれたのに国民に野次られ誹られ

「人」は…誰が私達を愛してくれるの？

目の前を歩く背中に、瞳が霞み涙が滲む
手を繋げられる人がいるのなら
凍えた思いに冷えた鼓動が風に舞うと、距離を開けていた粉川の背中に『いかづち』は抱きついた

突然組み付かれた感覚に粉川は驚いて両手を挙げてしまった
「どうしたの？『いかづち』ちゃん？」

「粉川はん、今日はわてとおって、ココにおって、一緒にいて」
涙の混ざった声が懸命に背中に縋る
「何？どうしたの？」
状況の掴めない粉川は無位に相手を振り払う訳にもいかず立ちつくす

「わて、寂しいんよ」

言いたかった告白ではない哀願
ただ額を擦りつけて泣く『いかづち』の姿に粉川は何が起こったのか理解出来ない状況にいた
泣き続ける『いかづち』のために冷めたい海風吹かれる突堤に立ち続けるしかなか

第七十一話　風の中（後書き）

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～外伝の外伝　港の働娘３

前話は六十六話からどうぞ

「前にもこんな事あったよね」

アールデコ、今時には珍しい装飾豊かなリビングルームに氷川丸とポンポンそれともう一人の魂が立っていた
シャンデリアの光は黄白色の柔らかく懐かしい時をかきたてる光を振らせる。部屋は天井も高く、金縁にして四角の中にデザインされた円形のカットグラス
赤い絨毯と、別珍のクロスはきめの細かい輝きを惜しみなく見せている
座面の深い艶美感漂う柔らかな椅子が四つ
ここは氷川丸本人が持つ自室の前室にあたる、人社会での場としては一等社交室とよばれた場所

「前に…」

座ると足が浮いてしまっているポンポンの前にバスケットに入れたお菓子を預け、対面の椅子に座った氷川丸は声を曇らせていた

目の前に立つ彼女は黒髪を掻き揚げながら、神妙な顔で話題から目をそらそうとする氷川丸を指差すと

「前にもあったさ、さらに言えばここ数年でこういう現象が増えてるよね」
「増えてる？」

二人の会話に挟まれたポンポンは狸顔のまん丸目で自分を囲む二人の顔を交互に見ながら
「増えてるんですか？金唐（きんから）さん」包みから開きかけのアメを手に聞いた

ずいぶんと年下の魂であるポンポン
円熟した大人の魂としてはどこか軽い風体
水夫の服を着崩し、サイズ違いの袖口をまくった姿の魂（ひと）
金唐と呼ばれた黒髪の船魂は口を横に大きく笑顔をみせて

「そうだよ、増えてるから別にポンポンだけ病気ってわけじゃないんだよ」

集団暴泣き状態に入ってから一時間を経て、なんとか当人だけを引っ張り出しここに戻った時、騒ぎを聞きつけた彼女はやってきた
横浜の地に永住を得たもう一人の魂はポンポンの隣に腰掛けると優しく頭を撫でた

「私はね、この事にそろそろケリをつけた方がいいんじゃないかって？思ったよ、今日ね」
どこか浮いた口調の金唐の態度に、おもしろ半分は止めてと氷川丸は顔に険を立てて声をあげた
「急にそんな事を言われても困るわ」
押し黙っていた氷川丸は制服の上から胸を押さえたまま、襟前でそろえた黒髪を揺らした
曇り、美麗な眉は下がり目が金唐を見ないようにする

「氷川丸、君がこの事から逃げたい気持ちはわかるよ。私達はねぇ戦争を経験した船だからね、あの時の事を思い出すような事はしたくないし、見えない希望にも縋りたくないというのもわかるんだけど…」

「ポンポン、それはね夢なのよ」

説得の声を入れた金唐を無視して氷川丸はポンポンをあやすように

「定番の説得」の側に脱兎した

その行為に苛立ちとも卑屈な笑みともとれぬ唇はポンポンの顔を無理に自分の側に向かせて声を遮った

「夢じゃないよ、ポンポン、君は昔戦艦長門を守った事があるんだよ。だから覚えていた」

「違うでしょ!!確たる証拠もないのに、この子を迷わせないで」

逃げた相手を追い詰めるように語る金唐を氷川丸は悲鳴に近い声で制止した

「戦艦長門…さん…」

「そう、どんな魂(ひと)だったか覚えてる?どんな夢だった?」

催眠のように相手を誘う口調の中でポンポンは目を閉じる

遮二無二止めようとする氷川丸の声は願いにも似ていた

「止めて」

「止めないよ、逃げるなよ氷川丸」

彼女の切れ長の目と漆黒の瞳が氷川丸を睨むと

「君はポンポンを騙すつもりなの？」
「違う…けど」
言葉が途切れる中、ポンポンは目をつぶって夢を思いだそうとしていた

「彼女達が過去を思い出すのは何かの偶然よ。何かにつながっているわけじゃない」
「そういう言い訳はやめようよ、氷川丸。君にも身に覚えがある事だろう？」

金唐は手を挙げて過去から逃げようとする氷川丸に、逸話の言葉を告げた

「これを魂の引き継ぎというのかもしれないよ」

それは大戦期にあった船達の希望の話
氷川丸も、金唐もその言葉を胸に抱いて前線に向かう戦船達を見て来た

「私達は、この名を持って心を縛り国のために蘇る魂となる」

信じて戦った彼女達
最後の戦艦、長門が残した物と
戦船達を叱咤した彼女が言い続けた逸話

氷川丸は目を閉じた、思い出したくないという気持ちの前で金唐はハイカットグラスの下こぼれる日差しに手をかざしながら

「不自然な事が起きてると思うのさ、あの戦いから五十年は経ってるよね。彼女の言葉が正しいのなら「復活した魂」が現れても良いはずなのに、現れない。なのに、姿だけは良く似ている事も不可思議だよ。どこかで繋ぎを失った私達、私達自身もこの事と向き合わなくちゃいけないんじゃないのかなってね」

金唐は目をつむり夢を追うポンポンの髪に手を置いて
「欠片ばかりが世をさまよっているよ、その欠片に心を痛ませる子達がいるんだよ。氷川丸、大戦を知る私達こそが率先して解決のために動かなければ、この国の船達の未来に影が差す気がするんだよ」

ふざけた口調とは裏腹に、真面目に将来にわたる不安を解消してあげたいと言う金唐
俯いたままの氷川丸は説明が終わる前に顔を上げていた
対面に座っていたポンポンの静かな涙に心を刺されて

ポンポン
港を働くタグボートの彼女は今年五歳（誕生からの歳、見立ては十五歳）
まん丸眼に丸顔、元気いっぱいの彼女が震えながら唇を噛んで泣く

「長門さん、長門さん…」
氷川丸は立ち上がると彼女の側にゆっくりと近づき肩を覆うように抱きしめた

「ポンポン…貴女は悪くないの、貴女は長門を助けたのよきっと」

この子達がこの先も見えぬ過去に悩まされる姿を放置できない
氷川丸は金唐と顔を合わせた、過去の痛みを忘れ、謳歌の日々をずいふんと長く過ごした老齢の自分達がこの問題から逃げて良い理由

はなかった

「わかったわ、日本丸さん。今がその時というならポンポン達のためにも、私のできる事をするわ」

黒髪の金唐、日本丸は優しく頷いた
二人とも七十を超す御大だが、あの大戦では小娘だった
容姿こそ変わらないが、共に苦難の波を越えてきた。その波を次の世代にまで任せる事は出来ない

二人の「魂の引き継ぎ」に向かう探求が始まった

外伝の外伝
別口に書いた方がいいか？とおもう内容になってきましたが、これから先この話しは本伝に大きく絡んでゆく予定ですからできるだけ継続的に書き込んでいこうと思います～～

ただ
あんまりバラバラでは読みにくいという意見があれば、独立させてもいいかな？とも思ってます

なのでご意見お待ちしまぅす～～～～でわ～～～

第七十二話　死の宣告（前書き）

艦魂の持つ倫理観は人とはやはり違う
これを受け入れられるかが争点でもある

第七十二話　死の宣告

海からの風の音が、煉瓦の溝をなぞるように駆ける
煉瓦の貼り合わせが違う部分を吹く風は、輪唱のように吹く末の音
色を重ねるが切れるような高い響きが教えるのは冬の寒さそれだけ
粉川は風の音がつくる季節の声を部屋の中で感じていた

自分の冷えた心を抱えたまま

少し前、煉瓦倉庫に向かうため立神バイパスの分岐を歩いていた自
分の背中に抱きついた『いかづち』
彼女は「寂しい」と泣くと、そのままココに一緒にいてくれとせが
み続けた
強い力で引くでない懸命に、微力な力で自分の服を引く姿に無理矢
理振りほどくなど出来なくなり、身動きがとれなくなった粉川
理由を聞こうにもただ泣きながら首を振るだけの様子に困り果てた
てた所を救ったのは
顔に怒りの色を昇らせた『いかづち』の姉『むらさめ』だった

「なんか飲むか？」

煉瓦倉庫の寄宿舎一階の広間は現在『こんごう』の演習帰還を祝っ
たと題するパーティーが開かれ、壁一つを間にした図書室内のテー
ブルに『むらさめ』と粉川は対面するように座っていた
手持ち無沙汰を越せ任すように栓抜きを指で回しながら、沈黙を守
る男に話しかける

「今日なら酒でも何でも手に入るぜ」

考えあぐねて乾いた唇に何度目かの舌なめずりをした粉川に、いかにも気を遣ったような物言いをする『むらさめ』だったが目には険が立ち喉舌にまで力の入った口の曲がり具合
粉川は手で「いや」とこたえた
相手の仕草に声もなく応じる『むらさめ』

「悪いな、今日はパーティーだ。主賓達に顔を合わさないにしろココを離れるわけにはいかないんだ。いつ呼ばれるかわかんねーからよ」

立ち上がった彼女はドアのスキマから会場の様子をうかがいうと、戻り乱暴に引いたイスに戻る
前列に並んだアメリカ艦魂達の相変わらずな騒ぎを冷ややかに見るに「ご宴会だな」と肩をすくめた

今日の『むらさめ』は海自の艦魂達にはめずらしくスカートではなくスラックス
ダブルの黒い軍装は大戦後復活した自衛海軍（海上自衛隊）の正装として採用されたもの、海外の艦魂にはあまり評判が良くないそうだが、今の日本がアメリカに追随した形で軍備を持っている事の象徴にも見える

『むらさめ』は長い黒髪を持っているのだが、いつものように引っ詰め、頭にくくりつけるようにまとめている。うなじに少しの送り毛を零した形のスタイル
いつもそうなのだが、今日は客の前というのもあるのか纏め方も美しい形だが

態度にはうんざりしているというものが良く現れていた、かっちりと締めていたネクタイに手をかけると

「めんどくさいもんだ」と引きはがすように弛めて
「あのヤロウ（『いかづち』）は今日の食事担当だ。主賓に変なものだしたらこっちが大目玉をくらうっつうの」

忙しい年末行軍
佐世保は月曜入港、水曜出港も合わせ多くの艦艇船舶が出入りを繰り返していた
当然基地に詰める護衛艦も入れ替わりで小規模演習を行ったり、長崎に出向いてこれまた小規模な改修や一年の垢を落とす作業に出たりで
忙しい時期である事に変わりはない

前週、アイゼンハワー寄港の時はそれなりの数の護衛艦艦魂がいたため料理は『ゆき』姉妹達が作り合わせる事もできたが今日はいない

『こんごう』と入れ替わるように『はるゆき』が出てしまったため、料理番は『いかづち』の仕事になっていた
なのに前菜も仕上がっていない厨房でパニックを起こしていた『ゆき』姉妹の姿を見つけることになり『むらさめ』は急いで妹を捜していた矢先で、粉川の背にしがみついて泣く妹を見つけてしまっていた

「あのさ」

華やかで黄色い声の響く広間から隔絶された部屋、とわいえ図書室

はテラスを持つある種の社交場のような雰囲気を持っている中で開けた空間に狭さを感じさせるものはないが、監禁された気持ちを味わっていた粉川は相手の話を聞き続けた果てに口を開いた
『むらさめ』に手を引かれ自分の背中から引きはがされた『いかづち』
何故突然あんなふうに泣き出したのか、今まではそこはかとなく明るい顔を見せていた彼女の見たことのない涙に、深い闇をかいま見ていた

粉川の渋い眼差しに手をヒラヒラと泳がせる彼女の姉は
「わかってる、聞くなと言っても聞きたいだろうな」
手元に置いたジュース、ストローを通したグラスを遠ざける『むらさめ』は遠い目をしていた
先ほどまで軽口を飛ばした垂れ目ではなく、何かを観念したような冷めた目と口ぶり

「教えてもらえるなら、聞きたいんだ。どうして『いかづち』ちゃんはあんな風に…」
ストローをくわえた口が尖る、吹いて飛ばすようにした顔はいつになく真剣に、真正面に向かって粉川を捉えると片目を顰め、眉頭を押さえるようにした姿で

「簡単言えばな新しい護衛艦が産まれるって事は、誰かが死ぬって事が決まったってことだからさ」
「誰かが死ぬ？」

不可思議と目を開く粉川の顔に
付き合わせた『むらさめ』は、何を今更みたいに顎を上げると改めて相手の顔を指差し

「おいっ、当然の事だろう。国が保有できる護衛艦の数は決まってる、老朽艦が出れば代替えの艦が作られる。それがＤＤＧならば次に死ぬのは現在一番古参のＤＤＧである『たちかぜ』総司令だ」

まったく今更のように粉川はそういう事実に気がついた
新しい防衛力がイージス艦で作られるという事に飛び上がり、去って行く者がいる事を忘れていた事に
同時に横須賀で会った『たちかぜ』の言葉を思いだした

「長くて後数年」彼女は美しい目を伏せてそう言っていた
だから「遺影写真」と笑った、悲しく

粉川は自分の顔を手で覆った
新しい魂が産まれれば、死ななければならない者がいるという事。
それが彼女達の艦生のサイクルにあり
自分たちでは選べない死の形であるという事に

「ごめん、そんな無神経な事…僕は」
「気にするな」

啜るようにジュースを飲む『むらさめ』の返事はいつもの口調で何事もなかったかのような態度に変わっていた
眉に掛かる前髪を跳ねながら、粉川のために冷水を注ぐと

「慣れてねーんだよ、アイツは」

少し荒めの鼻息を溜息代わりについた

「でも、そういうのは僕は」
「そんな程度の事なんだよ。だから気にするな」

生死に関わるデリケートな部分に「人」の認識のまま突っ込んでしまった粉川は『むらさめ』の素っ気なさに反発した

「でもさ、でも」
「答えられないのに反抗すんなっての、「人」と私達じゃ生きてる領域が違う。新しい護衛艦が産まれ国を護るための装備が充実するならば、その事を素直に喜べばいい」

違う領域の存在者
ハッキリと断言した答えに粉川は二の句が無かった
実際「人」である者、海上自衛隊の人である粉川の前、新たな護衛艦の誕生を知らされるのは最高に喜ばしい事だった
決して安全で平和の海にあるわけではない国土
年を追えば追うほどに近代化を進める隣の国の脅威の前、常に最新の備えをするという態度が国を護る一つの予防線でもあるいつまでも昔の装備のままではいられない、だから新たな護りの盾が必要となる

そして国家予算という限られた枠の中にある護衛艦は無尽蔵に保有ができるものでもない
新しい盾が産まれれば、老朽化した盾は役目を終えて死ぬ事になる
余剰を置いておくことのできない世界なのだ

当たり前のサイクル
だけど魂の女達を知る粉川にとっては、理不尽なサイクルにも思えてしまった
テーブルに置かれるグラスが揺れる程、粉川は狼狽していた

「私達が生きてるから、廃艦にしないでくれ?そんな意見は通らな

いだろ」

出せない答えに押し黙った粉川の前
当然口に登っても言えないであろう言葉を『むらさめ』は言い当てた

「そんな事は言えないよ、確かに言えない」

髪を掻きむしる思い
粉川は両手で顔を隠し、髪を何度も掻いた
当たり前に言えない事だ
そんな事を言い出したら「異常者」と指差されても不思議ではない
確かにそれ以外では長く国に尽くした艦に対して名残や愛着はある
が、「彼女達」が生きているから何とかしてくれなどとは口が裂けても言えない事だ

「だから、気にするなって言うんだよ」

テーブルに頭をぶつけてしまいそうな程に大きく首を振る粉川に、
落ち着けと水を入れたグラスを差し出す
思いをいっぱいにした相手は顔を上げると、静かに揺れる水の波紋を見つけ
両手で儚い思いを止めるように掴む

「怖い、怖かったのかな?」

死に対する想いが人と魂でどのぐらい違うのかは粉川にはまだわからなかったが
涙の顔のまま自分にしがみつき声をなくした『いかづち』の姿を思うとそこに恐怖があったのだと思わざる得なかった
つまりかかった喉を潤すように水を一気に飲み干し、叩きつけるよ

うに下ろす

目の前墓穴を掘ったとに泡を食う粉川の姿を横目で見ている『むらさめ』は転がるグラスを止めると

「怖かったのかもな、そういう事に慣れてねーんだ。まだ産まれて十年たってねーからよ」

「慣れる？そういうものなの？」

どこまでも力の入った感情を感じさせない口調で相手する『むらさめ』に、粉川に少しの不快感を与えられていた

人が考えているような自分達の処遇に関係する事なのに、あまりにも興味がないという態度は不可解というよりもハッキリと不快だった

「どうしてそんなふうに言えるの？死が確定されるなんて事だよ？思うところがあるでしょう。君だって」

「そうだ、私達は誰彼変わる事なく同じように死の宣告は来る。それを恐れながらなんて生きられないだけだ」

『むらさめ』の返答には躊躇がなかった

彼女の性格がそうさせているとしか思えないが、粉川から目を反らすことなくただ自分が思っている事を正直に返した

「粉川よ、そんな事にいちいち捕らわれてたら私ら護衛艦はやってけねーんだよ」

「でも、『いかづち』ちゃんは泣くほどに」

「だから、慣れろってこった。そんなもん」

繰り返される返事に粉川はいきり立った

姉妹という関係の中にある妹が恐れで涙を流すほどの状況にあった

事に一行に興味を示さない彼女の態度は勘に障っていた
テーブルを叩くと立ち上がり身を乗り出した

「もっと真剣に考えなよ!!『いかづち』ちゃんは泣くほどの思いをしてるんだよ…『むらさめ』ちゃんは姉さんなんだろ!!慣れろなんて投げ飛ばしな意見は良くない!!」

声を荒げた粉川の顔を白い平手が激しい打撃の勢いを伴って掴まえた
大声を立てるなと、身を乗り出した粉川の口を力任せに塞いだ『むらさめ』は人差し指を揺らしながら

「黙ってろ!別に今回が初めてってわけじゃねー」と睨んだ

ふさがれた口の下、粉川は目で抵抗し
掴まれた口の手を掴み返した
引きはがす力の中で唸るように

「だけど」
「だけどなんだ?これまでだってそうやって私達は生きてきたんだ。お前は知ってるハズだろ?いままで何隻の護衛艦がこの国にいたか、そして何隻が今生きてるか?あっ!」

凄む目線が火花を散らす空間
低く怒鳴り合った二人の間に詰めたい空気が流れていた
「何隻…」
「ああ、何隻も私達の前に居たはずだろ…」

相手の激発を上回る忍従の唇は抑揚を抑えた声で告げる
息を整えた粉川は、吐き出し合った怒声のおかげで今一度目を覚まし冷静さを取り戻していた

言われるまでもなく、これまでだって戦後から向こう多くの護衛艦が日本に産まれた
現有する護衛艦の倍は居たはずで、それだけの魂達が死んでいるという事

口ごもり静かに両手を挙げると、声を荒げないとゼスチャーする粉川の前で『むらさめ』は冷静に説明した

自分が産まれた時にいた前級のＤＤ達の事を
『むらさめ』の前級は『きり』姉妹である『あさぎり』がおり、その前には『ゆき』姉妹がいる
さらに前、代艦とてし建艦される『むらさめ』の誕生の代わりとして死を賜ったの姉妹達がいた。『つき』の連呼称を持つ護衛艦達が『あきづき』『てるづき』
昭和三十五年から平成五年まで長きにわたって国の楯を勤めた姉妹の死によって誕生した自分

テーブルに手を付き、目を細めながら小首を振る
「良い姉さん達だったそうだよ、敗戦からまだ立ち上がったばかりだった日本の海を護って長く働いた魂達だったってよぉ、そう聞いたよ」

『むらさめ』の表情に変化はない
むしろ表に悲しみを表してしまう事を隠すように瞬きもしない顔は氷の仮面だ
だが声はわずかに震えていた、唇を噛むように淡々と語る

「貸し付けの米軍艦艇達に混ざって、新たに日本を護るために必要

な勉強を率先してやってさ…今の私達の基礎を作った魂達(ひとたち)…みんなそう言ってた」

思い出の姉
『むらさめ』は見たことがなかった
自分の建艦が決まった時に死の宣告を受けた姉は、自分が進水した時には死の杭刑についていた
口をきつく結んだまま、目を尖らせ涙を零さないように頬を引きつらせる姿は見ている側にも辛いものだった

「悲しい事だったろう」

相手の苦い声に同調するように苦しみ紛れの返事を粉川は返したが、次の瞬間には後悔していた
護衛艦が存在した数だけ、それは繰り返された生と死だ
悲しいなどという言葉はチープすぎる
前任者の死を、『むらさめ』に聞かせた魂(ひと)がどんな思いだったか
それを聞いた彼女がどう思ったかを考えれば、言ってはいけない言葉だったと目をつぶった

「ごめん、でも『いかづち』ちゃん事を思うと」
付き合わせた顔がお互い項垂れる

「どう思えってんだよ。私達はな、誰かが死の宣告を受けることで産まれる。そういう風にできてんだ。それを恨んだり憎んだり、泣いたり悲しんだりなんかする事に意味があるのかよ?」

悔いる事の意味
産まれる事が誰かの生を踏み倒すという流れの中にある護衛艦艦魂
粉川の身体は力無く揺れた

肩に入っていた力みは抜け、イスにもたれかけた

「ごめん、考え及ばなかった」

「そうさ、お前が考えてる事で『いかづち』は泣いてたわけじゃねー」

普通の家屋と違い高く背を伸ばした天井に、黒いボーンを組み合わせた小さなシャンデリアを脱力とピントの呆けた顔で見上げていた

粉川に『むらさめ』は「何故」を突き返すように続けた

「よう粉川、そこまで聞いたんだ。今度は私の言うことに答えろよ！」

押さえていた気持ちが爆発するようにテーブルを叩いくと

「私達はな、死ぬのが決まる事を恐れて泣いたりはしない！！産まれたときに相手を踏み台にしたなんて事を悔やんだりもしない！！ただ…ただ…」

突然の嵐に呆けた顔を戻した粉川の前、『むらさめ』の目には決壊寸前の涙があった

「ただ…生きてる意味がわからねーから泣きたくなるんだよ…」

見せないように隠した顔、落ちる雫に震える拳

「生きている意味？」

「ああ、意味だ。私達が産まれて生きる意味だ」

拳を振るわすという形は違うが、同じような事に悩み吐露した者がいた事を粉川は瞬時に思いだしていた

『しらね』の顔が『むらさめ』に重なる

叫びは魂を同一とするなら表現が違うだけ、同じ悲しみの悲鳴だった

「私達は何のために、この国に生きているのかって事だよ!!」
「私達、戦争をしたいんじゃないんです。私達この国を護りたいだけなの」

言葉は違うが言わんとする事は一緒
生きている理由、護衛艦であるのならば国を護るというのが仕事であると考えれば、この先の話しは言わなくてもわかる、荊の道

護衛艦として当然、国を護るという生き方がある
だが、それが護るべき国に認められているかどうかで、生きている意味は闇にきえてしまう可能性だってある

「私達は戦いたくない」「どこに行っても戦争反対と」
「私達は守りたい」「武器よさらばと」

粉川を黙らせた気迫に別の怒りが引火していた
『むらさめ』は立ち上がると、大きく手を振った

「これはなぁ!!鉄板だ!!どこの国行ったって決まってるんだ!国を護る事を任務とする船は、その国の船達の頂点に立つ責務者だ。仲間を護り、仲間の主達を護り戦う、場合によっちゃそいつらの命を踏み倒す覚悟を請け負う、だからこそ誇りや生きる意味が見えなきゃ、やりきれないんだよ!!」

テーブルに勢いをとめて静かに下ろされた拳
ゆっくりと掻くように引くように指がなぞる

「そりゃな、港に入るたびに日の丸を振ってくれとか、万歳してくれなんて言わないけどさ、どうなんだよ…どうしてこんなに愛してる国に、そこに住む人のためにいるのに…盾を持つのに、聞こえるのは野次ばっかなんだよ!!こんな中に産まれた理由ってなんだよ？何か意味があるのか？それが見えねー、生きてる意味がわからない！それがわかんねぇまま死ぬのがイヤなんだ。この国に本当に必要とされたのか…誇れる艦生だったのかを知って逝きたいんだ。わからないまま逝くのが怖いから泣くんだ…」

『むらさめ』はそのままテーブルに顔をべったりと擦りつけるように落とすと

「教えてくれよ、私達の生きてる意味は…この国にとって私達はなんだ？」

見えない存在の意味
なじられ誹られの中、国を護るという使命の前、盾持つ魂達
頂点の仕事は漁船のそれとはまるで違う重大な責務だ
生半可な気持ちで出来ないからこそ魂達は人が作った形をまねて、
自分たちも軍人たらんという厳しい世界に身を置いている
言ってはあれだが、主と共に居る事だけを幸せとする漁船の魂達とはまるで違う世界観に生きているのだから
一緒のわけがない、責務の重さが一緒でないから『しらね』は、辛すぎる護衛艦艦魂という自分を恨み漁船の魂に産まれたかったと零した程に

それ程の重荷を背負うのだから、自分たちの生きている意味が欲しいというのは至極当たり前の思いだった

「君たちは国を護る盾、僕たちが必要としている事はまぎれもない事実」

沈黙で外の風の音が部屋に気味悪く響く中、二人の時間は止まていたが、『むらさめ』の懸命な問いに男粉川は、寸間をおく事も迷うことなく応えた

逆に言えばそれしか胸を張って言える事はなかった

彼女達の境遇は現在の日本では恵まれているとは言い難いが、彼女達が堅固な形で建艦される事によって、その魂として毅然として前に立ってくれる事で海自の隊員達は充実した形を持って日本を護る職務を果たすのだから

息のつまるプレッシャーの中

返された返事に沈黙を守る『むらさめ』の顔に

粉川は確認の復唱をするように声高く、まるで防衛大学校に入ったばかりの一年生が上級生に返事をするかのようにハキハキとした声で

「僕たちに君たちが必要なように、日本は君達を必要としてる。信じてくれ！！」

首筋に力みのラインと真っ赤顔

湯気が出る程に必死な粉川の顔に『むらさめ』は涙を浮かべて目のまま吹き出していた

「粉川…お前…」

十一月末の夕暮れに息は微かに白くなる部屋の中で粉川は汗を流していた

そんなものはきれい事の言い訳と取られても仕方のない言葉に、粉川は命を張っていた

そうでもしなければ『むらさめ』に応えられるものがなかったから

「僕を信じて…」

歯を食いしばり、拳を強く結んだ真っ赤な顔の男の姿に、ついに『むらさめ』は声をあげて笑ってしまった

「お前、それはどうなんだよ？えっ？」

「どうって…心からそう思ってるって事をだよ…」

不器用というか、一生懸命というか、粉川はとにかく嘘ではないという思いを伝えるために力を体中に熱波のごとく走らせていた

心も体も本気でそう思っているのを伝えようとした滑稽な姿に『むらさめ』は笑い転げてしまっていた

「わかった、わかったよ粉川。もう勘弁してくれ！」

テーブルに乗せたままだった頭、顔だけ上げて粉川を見ていた目は、浮かんでいた涙をはじき飛ばす程大笑いをして両手を振った

緩急の激しい会話の流れの中

外を走る冷温の風の音と、部屋の温度を幾つか上げるけたたましい笑い声はしばらく続いた

「飲めよ」

緊迫のとけた粉川と『むらさめ』の前にはワインが用意されていた

魚がメインだった今日の晩餐に合わせた白だが『むらさめ』は無造作にワイングラスではなくコップのような容器に入れる

一本ごとかすめ取ったボトルを横に置くと「やれよ」と手で進めた

「『むらさめ』ちゃん…その、とにかく信じて欲しいんだ」

シリアスだった話しの結末は、言い出しっぺの『むらさめ』が腰を折る形で終わっていた
笑い転げ「もういいよ」と手を振り続けた彼女の様子からは問題を解決ができたというのを感じられず粉川は何か釈然とせず、どこか逃げられてしまったような気持ちのままで
眉山を下げた顔で『むらさめ』の表情を追っていた

「わかったって言ってるだろ、そんな顔するなよ」

乾杯しろとグラスを傾けた彼女は、確かめるに鬱の気が抜けたいつもの明るい顔に戻っている
剣のとれた額を早くも赤くしながら、本当は少ししか飲めない『むらさめ』は嬉しそうに語った

「お前がいつから私達が見えるようになったかは知らないけど、最初に会えた人がお前で良かったよ」

グラスを持ちはしたが飲むには至れない粉川の前で『むらさめ』は一人杯を煽った
迂闊に何かを言えないという堅さのままゆっくりとした口調で話し始めた彼女の会話に耳を傾けた

「粉川、私達はさ、さっき見苦しい言い方した「生きてる意味」ってのがいまいちわからないてのな、まあそれでは私にはどうだって良いことでもあった」

悩むのが嫌いな『むらさめ』は見えない希望に縋ることが出来ないと笑い飛ばすと

「ただ、産まれて死んで、産まれる時には前の姉の命を終わらせてまで世に出る訳なんだから…それなりの理由が欲しかったってところだよ」

「それは辛いよね」

護衛艦の歴史からすれば何十回と繰り返された生と死の連記だが、やはり聞くだけでもつらい事だ

言葉にしたら悪いような気がしながらも粉川は素直な感想を漏らしたそう言わざる得ない人である粉川の顔に『むらさめ』は同調するように切り返した

「まぁ辛いわな、私なんて直接関わった事のねぇ人の話でさ、ピンと来なかったんだけど、やっぱり後になればなるほど」

自分の鍛えられた腹に拳を当てて

「このへんにグリグリきやがる。そう思うと絆を探すことに躍起になってる『しまかぜ』は、どんな気持ちなんだろうって考えちまう」

やっとワインに口をつけた粉川はには目に浮かぶ話しだった

最初に艦魂達の持つ不安を打ち明けてくれたのは『しらね』でありココでは『しまかぜ』だった

「私達お役立ててるのかな?」

国民の無理解に自分たちの貢献度を疑う事も、存在の理由を探している事に似ている

あのとき、この同じ煉瓦倉庫の寄宿舎にある二階階段の手すりの側に立っていた『しまかぜ』

照明の落ちたロビーは底なしの闇を演出していた

浮かび上がることのない冷たい碧が色を濃くして渦巻く闇に

細い手すりから今にも落ちてしまいそうだった『しまかぜ』の立ち位置が彼女達、魂の置かれている現状に思えて成らなかった

思えば『こんごう』も不審船の時に尖った態度で自分を突き放そうとしたのは、そういう不安が根の部分あったからなのかもしれないと思い返せた

そう言う思いに縛られている彼女達だからこそ、大戦を生きた姉達との絆を見つけたいと願っているのが、粉川にも今は鮮明にわかった

『しまかぜ』は三笠と会う事で何かがあるのではと考え付き、『こんごう』もまた三笠に会おうと考えるのは当然の行き先だったのかもしれない

生きる意味を賭けて戦った大日本帝国海軍の魂に絆を求めるという自然の成り行き

前日の『こんごう』の会話から、それ以前の『しまかぜ』『しらね』の話しなども頭の中でフル回転で思い出す粉川は肩身が狭くなっていた

今は信じてくれが精一杯の応えである粉川はワインを飲むことに専念するぐらにいしか、自分を保つ間を持てなくなっていた

そんな様子を横目に『むらさめ』は自分は直接味わう事のなかった痛みを語った

「『しまかぜ』はさ、最愛の姉だった『あまつかぜ』さんを撃ったんだ」

「『あまつかぜ』…ジェットコースター『あまつかぜ』」

飲めない酒を煽りすぎて支離滅裂になる事を恐れた『むらさめ』はグラスを手放していた

「さすがは良く知ってんな、ジェットコースターって。初代ＤＤＧ日本初の誘導ミサイル搭載型護衛艦だった魂（ひと）のあだ名だな」
「『しまかぜ』さんが『あまつかぜ』を撃ったんだ」
粉川の態度はどこか感慨深いという仕草で額を抑えながらこたえた
「辛いとかってもんじゃなかったろーなぁ、『しまかぜ』は未だに自分の尊敬する人として名を挙げるほどらしいし…それだけならまだしも…」
そこまで言うと『むらさめ』は大きく、酔いを払うように首を降ると背伸びし話題をそらそうとした
「私もさ、『いかづち』もそうだけど妹をたくさん持つ身としては見習いたいよ。あそこまで優しくなれる『しまかぜ』はすげぇ、強いよ」
「強いって言うのか？…そう思わないと出来ない事か…自分の姉を撃つなんて…」
生と死のサイクル。そうする事で新たな護衛艦の魂を得る彼女達には常の世界が粉川には遠く感じてしまえた
今まではそんな風に考えた事のなかった彼女達の生き方
『ちょうかい』に聞いた人と魂の差はどこか人生全般における区別の論理だったが
今回の『むらさめ』との話しでは明らかに彼女達が違う領域の生き物であり、違う倫理観を持っている事を確信せざる得なかった
同時に儚さを覚えていた
こんなにも大きな船になり国家の防人を乗せる器として、国の楯として生きる彼女達が未だにこの国との寄り添いに確信を持てていな

いという事に

「しょぼくれんなよ粉川、頂点の仕事に立つ私達はやっぱり強くないといけねーな。そういう意味でも私は『しまかぜ』には一目置いてるし、『こんごう』には頑張ってもらわないといけねーと思う」

重い話しの内容に背中を丸めてしまった粉川を、少しの酒で力のセーブが聞かなくなったのか『むらさめ』が音高く叩く

「『こんごう』は強くならなきゃいけねー、『しまかぜ』が『あまつかぜ』さんの艦生を終わらせた。そうやって産まれてきたのが『こんごう』なんだからよ」と手を振った

『こんごう』の誕生は『あまつかぜ』の死にあった
最愛の姉を撃ち、今懸命に『こんごう』の世話を焼く『しまかぜ』
それは本当に強い気持ちがなければ出来ない事であると同時に、耐え難い作業の中にいる事を物語っていた

なんとか最後を笑い話にしようとしながらもカラぶる『むらさめ』の笑い声の下、粉川は素直に思った

「普通でなんかいられないよ、そんな事」と

「がんばるのよ～～～」

大広間のパーティー会場の中から『しまかぜ』が姿を消したのを見計らったようにフワフワ妹に駆け寄った『はるさめ』は、お軽い口

調の中で両の拳をブンブンと上下させながら『いかづち』を叱咤していた
身の丈は自分より大きくバービーちゃんよろしくのナイスプロポーションの姉は、動作が単純な機構で作られているクルミ割り人形のようにも見える仕草で
「どおして帰ってきちゃったのぉ～～」と
粉川待ち伏せ告白大作戦の失敗を責めていた

「そないな事いうても…」

目を泳がせ周りを警戒する『いかづち』
「大丈夫ぅ～～『むら』ね～～は今いないよぉ～～」

初めて告白に命をかけていた『いかづち』は、粉川の突然の発言に身が固まってしまった

「新しい護衛艦が作られる」
即座に頭に廻った死の宣告で、身体がすくみ想いを告げようと準備していた言葉は消えてしまった
あげく粉川に後ろからしがみついて泣くという、動揺丸出しの恥ずかしい黒星スタート
そんな情けない現場を姉の『むらさめ』に発見され、文字通り耳を引っ張られてココに戻った

「料理の当番やったし…」

フワフワと身体を揺らしタコのように自分の周りをうろつく『はるさめ』をスクリーンに前列の側をチラリと見る
末席の方の艦魂達は壁際に並ぶように食事と酒を楽しみ
壇上の前列は相変わらず『くらま』をめぐるアメリカ艦魂達の呑ま

せ合戦が繰り広げられているが
いつもと変わらぬ平時の顔で酒を飲み続ける司令艦は、既に新しい護衛艦の建艦が決まった事は知っているのか？と

「どうしたのぉ～～『しま』ね～～は、『はる』ちゃん責任もって押さえたげるよぉ～～だから後は『いかづち』が頑張ってアタックしないとぉ～～」

ピンク思考の笑い目は妹の不安などなんのそのだ
絶え間ない笑顔の中で『はるさめ』は唇を尖らせて『いかづち』の肩を何度も押した
コックの帽子をづり落としそうになりながら言い訳する妹

「『はる』ねーはん、あんな、新しい護衛艦出来るかもしれへんのよ」

あまりの容赦のなさに『いかづち』は姉を引っ張ると小声で耳打った。粉川発の衝撃の出来事を
周りを警戒して、テーブルに隠れるように告げる『いかづち』の前、ただ上半身だけをかがめて話しを聞いた『はるさめ』の対応は深刻な顔の妹とは対照的で、一度だけ目を大きく開いて首を傾げると

「ふ～～んそう、だったらぁ～～なおさらがんばんないとぉ～～ねぇ～～」

意に介さない声に、慌てて『いかづち』は逆らったが
手を払うように笑顔の混乱誘発者は言い切った

「短いんだよ～～私達の艦生～～だから～～出し惜しみしちゃダメってわかったでしょ～～」

そういうと白色の調理衣に身を包んだ『いかづち』の胸の真ん中を、
細い整えられた爪の指で軽く押した

「頑張らないと負けちゃうよぉ～～」と前列壇上の『こんごう』に
目線を走らせた
凍る心
風の中で感じた危機感が急に煽られる

時が進めば新しい護衛艦が作られる
自分にもやってくる死への道、そこまでのリミットは後二十年程
でも間近な人である粉川が自分たちの前に居てくれる時間はもっと
短い
このままなら、何にも満足出来ない、生きる意味を見いだせないま
ま死に至る可能性だった高い
押された胸が、針を刺されたように痛む

「負けへんて、絶対に負けへん」

『しまかぜ』退席にともない一人でワインを嗜む『こんごう』の姿
に一瞥の睨みを効かして応える『いかづち』は胸を押さえたまま厨
房に走っていった

第七十二話　死の宣告（後書き）

カセイウラバナダイアル～～Ｒ１５～～

そろそろ
話しがややこしくなってきて、より一層戦記とはほど遠い艦魂物語ですｗｗｗ
今話で出た『あまつかぜ』と『こんごう』の生と死の区分けは実は少しずれてます…、後書きで申し訳ありませんがご了承くだされ～～

ところで最近小説の中の残酷描写にＲ１５を付けなさいという督促が出回っているようですが…

あれってなんですか？
常々思っているのですが、ヒボシは遊び戦争を書いたりはしませんミサイルキター、ドカーンキター、人死んだなんて描写は絶対にしてないと自負してます

人の死は重いし辛いのに、無感情の産物として世界中に築かれるものだすら
人間が肉切れになるというのが戦場であり
それにともなう残酷がついて回るのが真実です
ボタン戦争じゃあるまいし、巨大兵器万歳でいつも簡単に大量虐殺を書くのをヒボシは正しいとも思わないし、真に残酷だとも思わないそんなものはただのゲームですから

逆にヒボシが描写する程度の戦場が残酷とも思わない

本当の戦場を見るのはいつも写真の中だけですから、描ききれるとも思っていませんが
それでも戦争の描写を残酷だからＲ１５にするつもりはさらさらありません

なんかおかしくないですか？
戦争はゲームじゃありません、サイコスリラーでも書いているのならそういう年齢制限の表記は必要かもしれませんが
すくなくともまじめに戦争と向き合おうとしているヒボシには理解ができない

何故、日本人は戦争で行われる出来事を「ただの残酷」でくくってしまえるのか？理解出来ない

血肉が砕かれ
片腕しか残らなかった死体写真を何枚も見た
恐ろしかった
夢にもでた
明日こんな世界が来るのではという恐怖と共に、戦争を恐れた
広島の被爆写真をそらすことなく目に焼き付け、恥も外聞もなくその場で泣いた
心に残った戦争と戦場
人と物と死と傷

これがＲ１５？戦争は年齢を選んだりしませんよ

昨今、文章表現や絵や映像の表現は色々な迫害を受けている
中には目を疑うような児童ポルノのたぐいもあり、考えなければな

らない事もあるともおもいますが

戦争を残酷だからＲ１５の表記をしなさいというのは、少し違うと思います

素人作家の集合体である「小説家になろう」では戦争をゲームと勘違いして書く人もいるから
本体プロジェクトの側からのクレームが入ったりする事もあるのかもしれませんが

ヒボシは恥ずべき形で戦争を書いているとは考えておりません
私の作品が残酷で恐ろしいと思われたのならば、感じて頂き他かった部分ですから成功ともとれます

戦争は残酷です
時も場所も年齢も選ぶことなく残酷なものなのです
Ｒ１５今ひとつ考えてみてはいかがでしょうか

ｐｓ
ですがヒボシは望んで戦争を書き綴る事はありません
怖いから
だからこの作品も戦記だけどほとんど戦争の描写はなかったりですたまにあるでしょうが、それは物語の大切な要素ですから色々とかんじて下さると幸いと思います

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第七十三話　吐息の夜（前書き）

恋愛に高い純度を持っておられる方には不愉快な部分がありますというか
これから先そういう部分がたくさんあります

ヒボシの書く艦魂は
ただやさしく
ただ可愛く
という存在ではありません、時に狡猾に見えたり、時に愛を必要以上に欲したりします

現実の世界でも全てを一つと言い切れるものはないので、依存する領域による倫理観の差によるものもあり
それが「人」には汚らしい行為に見えても
「魂」には普通の形だったりという部分があります

恋愛の箇所に掛かる場合もあります、それを不快と感じられる方は読まれないようご注意下さい

火星明楽

第七十三話　吐息の夜

『むらさめ』が『いかづち』を会場に届け、隣の図書室で粉川と話しをしていた頃
会場では『しまかぜ』が自分の席を立とうとしていた

「『こんごう』、頃合いを見計らってアイゼンハワー司令に、ご挨拶をしてね」

上座の同列で会食をしていた『しまかぜ』は『こんごう』の肩に手を置いて指示をすると妹の顔を確かめた
夕刻の頃、コーパスクリスティーと会話していた時に自分の手から離れるように歩いた『こんごう』だったが、主賓の席についた時には姉での指示をきちんと聞いていた

暖かさがある部屋の中で頬に力の入った顔のまま
尖り目の妹の眼差しに鈍った輝きはなく、先ほどは本当に彼女と顔を合わせていたのは挨拶をしただけの事だったのでわ？
『しまかぜ』は勘ぐりながらも、ともすれば青い瞳の中の八角が輝いてしまうのではと思う程真面目に自分に指示を仰ぐ妹を信じる事にした

講堂の広間に作られたパーティー会場
数はそれ程多くはないが形として女ばかりの魂達が集まり黄色い喧噪が響き渡る
もともと一階から二階への吹き抜けは天井をかなり高くとった優雅なスペースであり、大きく取られた空間によって声もよく響く

照明は裸電球より明るいが、蛍光灯が持つ味気ない白ではなく仄かな乳白色を発する簡素なシャンデリアで、夜の楽しみに一役買っている

徹底した簡素が売りでもある佐世保基地ではあるが、国際的にも同盟国も開かれた港であるが故に、パーティーはさかんである
だからこそ煉瓦倉庫の寄宿舎中央にあるロビーは開かれたスペースで、どの国の艦艇を迎えても海軍として恥ずかしくない規模を持っている

給仕として忙しく、しかし粗相無いようにきっちりとした働きをこなす下階級の魂達の中、年末行軍の会場は少しの休みに羽を伸ばしたい魂達の声で外より幾分温かい場となっていた

会場の中、全員にパーティーの流れに乗る暖気が十分に行われたのを確認した『しまかぜ』は、ほろ酔いになった頬を押さえ、与えられているもう一つの仕事に入ろうとしていた
海自の艦艇で姿の見えない者がいないかを確認したり、基地を共有する他のアメリカ艦魂との親睦を司令艦レベル以外でも深めるために会話をする事
また今週入港をしていたオーストラリア海軍のバラット、サクセスの訪問に対してのご挨拶以外の交友も必要とされていた

佐世保では『くらま』そして現在出払っているが海上自衛隊総司令艦三頭の一角である『あさかぜ』などが普段は「見回り兼懇談」をするのだが
『くらま』はアメリカのメイン艦魂達の標的とされ手一杯の状態だし、『あさかぜ』は就航記録を伸ばすのが楽しいかのように他基地にお出かけ中で先月からココにいない

そうなると必然的にこの仕事をするのは次席である『しまかぜ』に回ってくる
もちろん上二人がいても、それなりに気を遣い懇談して回っているのだが、今日は一手に引き受けなくてはならない
メインゲストにかまけ、ココにつめる同盟国からの訪問者を疎かにする事は出来ないから

「こまったわね、あんなにお酒が好きだったなんて」

細い腰に手を当てた『しまかぜ』は心から呆れていた
細めた目で騒ぎの根元達を見つめながら、首を鳴らして

一週間前パーティーはアイゼンハワー寄港に際して催したばかりで、オーストラリア海軍からの客であるバララットが来たのがつい三日前その時も年末行軍（クリスマス月間）のパーティーも兼ねてやりましょうともちかけられ、本地の日本海軍（海自）がやらないとは言えずで大騒ぎのお迎えをしてさらに今日『こんごう』帰還に合わせたパーティー、すっかりｈａｒｄＤａｙｓの様相だ

日本でも重要軍港である佐世保基地の事を考えればパーティー三昧なわけにいかない事は容易に理解できそうなもの、なぜなら決して休暇が続いているわけではないも言えば
休暇になっているのはアイゼンハワーと取り巻きの艦艇である潜水艦コーパスクリスティーとシカゴ、そしてイージス艦カーティス・ウィルバーの３人だけだ

対してこの一週間で海自の側では長崎に年次検査に出た者がいるし大型演習が終わったからといって、まだ十一月末で小型の演習に時間を費やす艦艇もいる

毎日入れ替わりで海に出て行く護衛艦達
さらに近場の港で一般公開など催し物に出る艦艇もいる
目の回る忙しさがホスト側にある事をまるで無視したご乱行である

『しまかぜ』は頬に掛かった黒髪を耳にかき上げ軽めの溜息とゆっくりとした動作で、向こう上面『くらま』争奪杯を続けるアメリカ艦魂に会釈すると席を離れ『こんごう』の反対側に立った、指さし確認をするように不備なく事を行いなさいと二度目の釘を刺す耳うちしながらも、安心感を再確認もしていた

注意に対して真面目に自分を見る目もそうだったが、今回はホストを任せても大丈夫ではという思いを感じさる程に

普段なら無口の権化である『こんごう』を一人にしないよう注意を払ってきていたが
今回演習から帰った『こんごう』の評価はそれなりに良かった
大演習での未知の実験、修復を必要とし長崎に寄り道しなくてはならなかったという事実があったにもかかわらず
あの『くらま』をして「『こんごう』の状態は心身共に特に問題なかった」と言わしめた事に『しまかぜ』は大きな関心を持っていただけど、話し下手である事まで解消できたとは思えなかったため注意は多めにしていた

「『こんごう』貴女のできる方法でおもてなしをしてあげて、失礼の無いようにね」

話し下手な妹に相手との対話の術として、年上であるアイゼンハワーに今までの演習経験談をお聞きしたい。などと尋ねてみるといいと細い指が肩を押す
無理して自分から話さなくても、話しを聞くという態度は感心を得

られる一つの対応だからと、後はお酒の好きな人達だからゆっくりと飲み楽しんで、と

変わらぬ親身さ加減、立ち上がりる姉の姿に確認と深く頷く『こんごう』も一つの覚悟を決めていた

大げさかも知れないが、今までは妹である『ちょうかい』が（『ちょうかい』の方が「人」的にはベースラインの関係上佐世保に置いては次期司令艦の最有力候補であるからというのもある（ちなもにこの物語の設定上の話しです））パーティーや親睦会の前面に立っていた

自分に比べて社交的で国際的儀礼にも不足のない出来すぎな妹、だけど出来すぎでいたのは甘えられないの裏返しでもあった
今回、演習後で寄った長崎で初めて自分の声に笑顔をくれた妹を見たとき、今まで自分の無位な交友関係の断絶で無理をさせていた事を良く理解したし
いつまでも妹に全てを押し付けておくわけにもいかないと気がついた

ＤＤＧ、他のＤＤ達の前に立ちＤＤＨの司令艦を助ける者にならねばならない自分、そしていずれは日本国の五大基地どこかの司令職に就くこともあろう立場なのだから
今日のように上位各が抜けてしまった時の来訪者があれば自分も前に立つ
決意がてー振るの下で拳を固める

そういう練習を今からでも短い時間の中で確実にするためにして逝かなくてはいけない
自分の目が届くうちに経験を積ませる、それらへの手配りをするのも『しまかぜ』、良き姉の手本に見習おうと

期待に応えるように目配せする『こんごう』は
「心配ありません。お任せを」と意志の乗った輝きを見せた

鋭く冷たい印象ばかりが先行していた『こんごう』の瞳に心強い光を見つけた『しまかぜ』は笑顔でこたえると足早く、ロビーの中程で会話を楽しむ第七艦隊付け佐世保基地に詰めるアメリカ艦艇の輪の中に入っていった

「改めまして、日本国海上自衛隊イージス艦『こんごう』であります」

『しまかぜ』が上座からの退出をし、交友会の波間に消えたのを確認した『こんごう』は意を決したように立ち上がると
『くらま』争奪杯に息を巻いていたアイゼンハワーの前、背筋も正しい敬礼と挨拶をした
目の前、部下達以上に夢中の遊泳を続けていた上座の客達に
騒ぎの空気をまるで意に介さない真顔の青い目線

直立の敬礼で目の前に立った『こんごう』の姿に
『くらま』の腕に絡みつくように、雪崩を打った形で迫っていた幼獣アイゼンハワーと、普段なら部下の手前見せないであろうおかしな盃合戦をしていたエセックスだったが、さすがに真顔でびっしりと決められた敬礼の前で見苦しい姿をさらしたまま返礼するわけにもいかず
お互いの服を引く形で『こんごう』と顔を合わせていた

「『こんごう』大佐（一佐）演習の結果は私達合衆国の妖精に（艦

魂）にも勇気を与えるものでしたわ。強い同盟国がいる事を再確認できた事に感激しております」

見るからに小さな合衆国有数の司令旗艦であるアイゼンハワーは、相手に会わせるようにテーブルを挟んむ側で踵を合わせて花のように輝く笑顔でキレイな挨拶をすると、踵を合わせて正しく敬礼を返した

「初めまして、アメリカ合衆国海軍第八空母打撃群司令艦ドワイト・D・アイゼンハワーです」

分度器で丸い線を引いたような愛嬌の良い眉と瞼を持つ目、青い瞳を輝かせる小さな司令艦
ウェーブの入った金色の髪を揺らし、愛らしく小首を傾げるて返礼を解除すると親愛を示す握手をと小さな手を伸ばす
争奪戦に目をぎらつかせていたアイゼンハワーだったが、締める場所での態度変換は早かったクルリと振り返ると同時に、軽快にしてさわやかに艶やかな唇に笑みの返事を披露した

素早いシフトに少しの驚きを感じながらも顔には出さないが『こんごう』はすぐに応え手を交わす

「アイゼンハワー司令、良い演習が出来たことに心から感謝しております」

若い声の返事に頷く司令艦
アイゼンハワーは見立ては『こんごう』よりずっと若く、海自に所属する艦艇ならば『なみ』姉妹の年齢を下回るような姿

どちらかといえば『きり』姉妹の『さわぎり』にも近い身の丈は原

種アメリカ的には見えないぐらいだが、特徴は絵に描いたような金髪碧眼
緩いウェーブヘアはセミロングで改修したて（オーバーホール開け）の肌はくすみと無縁、見た感じの質感から柔らかいというよりセルロイドの人形だ

今までも色々な国の魂に合ってきたが、今回この司令の姿に普段とは違う興味を見た『こんごう』は目を動かし、さりげなく探るようにアイゼンハワーを見る

艦魂の年齢は産まれた容姿から年を重ねる
アイゼンハワーのように１９７０年代生まれで三十年以上を勤める者はそれ相応の姿を持っているもの。艦魂は人とは時間の流れが違うかのように緩やかに年を重ねる
誕生の時、二十歳前後の容姿であるなら三十年を働けば順当な容姿として、横須賀に詰めるキティホーク大将と同じぐらいで二十八歳前後、魂としても成熟の域に入った形、『こんごう』的に言うならば『しまかぜ』のようであるハズなのに

目の前の幼獣はそういう感じはなく、ひまわりのように天真爛漫な少女にしか見えない
さらに言えば失礼な事なのだが、とても世界の海軍の名かでも一線級の艦艇を従えるアメリカ司令艦という任にあって艦隊を指揮している者の容姿とは思えない

『こんごう』はいつもは漠然と見過ごしてしまう事を、今日はより深く考えていた
同盟国として近いアメリカ海軍これまでも何人かの空母司令艦を見てきたが、横須賀のキティホーク大将ぐらいしか年に見合った容姿の人はいなかった事を思い出す

何故、合衆国海軍の原子力空母の面子は年を取らないのか？と
魂らしくもない事を考えた

自分の上司である『くらま』が二十年を越した成熟の域に入った姿
を持っているのに、アイゼンハワーの幼すぎる姿に、初めて少しの
違和感を持った

しかしながらそれを話題にするまでには至らなかった、そういう差
違は自分たちの世界には少なからずついて回る事だし、今それを話
題にしたら相手に失礼な事

「子供みたいですねアイゼンハワー司令」なんて言えるわけ無い

さて挨拶に来たは良いが話題のない『こんごう』は、自分たち魂の
存在、あり方のほうに興味が働き
アイゼンハワーの前で銅像になっていた
その姿に幼い悪魔は悪戯心を宿したスカイブルーの目を輝かせ、人
魚のささやきのように口火を切った

「前にＡｂｒａｈａｍ　Ｌｉｎｃｏｌｎ（エイブラハム・リンカーン）が来たときには、貴女は会
えなかったそうですね」

頭の中で余分な事を考え、まるで硬直化の始まった人形みたいに自
分を見つめていた相手に、軽く首を揺らして吹きそうな笑みで話し
を振る
手を開いた気軽な合いの手に、通電を得たように『こんごう』は急
いでこたえた

「ああっ、そうです、あの時は任務にありまして、ココにはいませ

んでした」

容姿とは関係なく、話しの運びなどの巧者であるアイゼンハワーは、愛嬌の良い目を笑わせながら、ゆっくりとした視線で相手の顔を見る
栗色の髪、青い目、日本にいるには少しおかしな手足の長い背伸びしたような姿
頭脳と瞳にアメリカの技術の粋を埋め込み産まれた彼女『こんごう』は自分の護衛を走るカーティス・ウィルバーの従姉妹のようなもので馴染みがあり会話もしやすい顔だった

優しい目の小さな司令艦に振られた話題を追随するよう『こんごう』は自分不在に寄港した相手の話を思い出すが…
今ひとつ、良い話題ではなかったのではと首を傾げてしまった

一昨年、現在アイゼンハワーが付けている三十五番錨地に付いたＡｂｒａｈａｍ　Ｌｉｎｃｏｌｎは回る艦体の上で踊っていた、寄港において前代見物な挨拶をかましたのだ
佐世保でお出迎えをした護衛艦達は『くらま』に、他の基地では話すなと釘を刺されていたがあまりの珍事に口が緩んでしまわざる得ない出来事で海自中の艦艇に話題となった魂だった

超がつく大型艦艇である米空母、泊地としてはゼウスやフリント、アラン・シェパードなどが着けている岸壁に横付けする事もあるのだが、現在その場所に付けることはない
ここ数年、その大きさから佐世保湾内の投錨地はｅｎｔｅｒｐｒｉｓｅ以来定番の場所に身を置くことになっていた

そこで起こった珍事
『こんごう』は同盟国の一級空母である司令艦がそんな事をすると

は思っていなかったが、後で聞いた話は尾鰭に背鰭、何か別の生き物に進化した魚のようにも聞こえて、どこまでが本当なのかと訝しく思った程

そもそもの場所、三十五番錨地は佐世保基地からは一等遠く離れた佐世保港南側の泊地
そのまま南下すれば内湾の奥まった先に瀬川という少し寂しい漁港にあたる。制限水域のないこちらの港は釣り人にとっては絶好のポイントのようで、鯛も釣れれば、冬には煮付けにもってこいのヒラアジなどもとれる穴場で、基地水域とはいえ牧歌的な場所

とどのつまり三十五番錨地というのは佐世保基地の僻地なのだ
大型艦艇である空母がポツンと浮かぶ場所
合衆国から来た者に唯一馴染みのある近場と言えば、錨地を囲む西側にある丸崎鼻の米軍石油貯蔵地区
殺風景で寂しい所に本来なら注目の的である空母は泊まるのだ

「寂しいのはキライなのです！！」

あの日、Ａｂｒａｈａｍ　Ｌｉｎｃｏｌｎが随伴艦であるＤＤＧレイク・シャンプレーンに従い入港し錨地で行った挨拶は、お立ち台の上で踊る女のようだった…と言われていた
下ろした錨を中心に潮の満ち引きでクルクルと回る空母、その飛行甲板で金のストレートサラサラヘアを振り乱し手を上げて踊った魂

「錨地で大変熱烈な挨拶をされたと聞き及んでおります」

聞くばかりで見ていない話しだが
話題を振られたのに応えない訳にもいかない、少しは考えた答えをと苦しみ紛れで背を伸ばし、目を天井に向けた『こんごう』は

「とにかくすごかった」という話しに当たり障りのない返事をした
緊張した顔で、ひっかかりない受け答えをした若い魂の前、アイゼンハワーは口を横に大きく開く笑い顔を見せると

「踊ってたでしょ、あの子」
意地悪そうな青い目が重ねて聞く
「そうなんですか?あいにく居合わせることができませんでして…後でお話に聞く程度で…」
「踊ってましたよね!!」
アイゼンハワーは自分の後ろにつけるエセックスに聞いたが、エセックスは機嫌の悪い顰めた眉を前髪で隠すように顔を俯かせると

「どうもすいません生憎、私もおりませんでして…いたらあんな事やらせなかったのに…」

不手際を責められたと受け取っていた
得点争いの間にその話題はないでしょ?と同席のジュノーはうっすら酒に色づいた頬をふくらませて見せる

『こんごう』はチラリと『くらま』の顔を見た
不用意な発言は厳禁、言わなくても顔に目に危険信号として浮かぶほど張りつめた表情に息を呑む、短髪のオールバック、こめかみに過敏な神経線がひた走る『くらま』
この話しには続きがあったからだ

寂しいのはイヤと女子高生のような容姿の金髪ヤンキー、踊り狂うＬｉｎｃｏｌｎの元に海自佐世保基地ＤＤＧ司令職であった『あさかぜ』が飛ぶと、『くらま』の制止も何のその二人揃って踊ったという…信じられないエピソードが

当然後で聞いた『こんごう』は口を閉ざしていた
上官、それも現在海上自衛隊艦艇では総司令として頂点の魂である
『たちかぜ』司令の直妹である『あさかぜ』海将がそんな事をするなんて考えられなかったから
普段はボーイッシュという年齢ではなくなったがハイミスに似合う短く纏めた黒髪の魂
背も１７０センチ中ぐらいでスレンダー系、見立ても悪くない二重の目を持ち、誰の目からも出来る魂、司令艦なのに？と

ただ実際の『あさかぜ』は容姿の良さとは別に、日頃から規律に対して緩い艦魂であり、司令とはいえどこか間の抜けたところのある魂で知られてはいた

禁句と目で会話する海自の二人を尻目に、アイゼンハワーは上機嫌にオーバーな身振りで緩いカールの髪を振ると

「日本海軍（海自）の方も踊ってたんですよね！！」
聞かれる事を恐れていた事を聞いた
口の中に否定の勢いを押しとどめた『くらま』は少しずつ呼吸を整えるように

「はは…その節は大変見苦しい事を…」

さしもの『くらま』も同席の海将を頭ごなしに怒鳴る事は出来なかったという珍事件
顔には微塵も焦りはでていないが、首筋には焦りのマグマが湧いている
この姿を見れば、いくら堅物の『こんごう』でも事件が本当の事だったとわかる

緊迫の間合いにいる海自の二人とは別に、無理矢理にでもテンションを上げたアイゼンハワーは満面の笑みで本論に入った

「見苦しいなんて、とんでもないですわ!!私達はステイツ（本国・アメリカ）から長旅をしてココに寄らせて頂きますでしょ!なのにお泊まりの場所はあんな寂しい場所ですもの～～～、一緒に踊ってくださった『あさかぜ』司令の事を聞いた時には感激もひとしおでしたわ!!」

自分ペースをがっちり掴んだアイゼンハワーは擦り寄るように『くらま』の手を引くとしおらしく、酒の力を最大限に使った頬を赤く染めてピンクの唇を尖らせた

「だからもっと派手に触れ合えると、長旅をしてきた甲斐もあると言うものです」

「派手？」

蛇がごとく腰をくねらせ巧く話題を合わせて羽目を外ずそうと誘う発言に、『こんごう』は一瞬目を見開いき頭の中で考え込み『くらま』はやられたと目が泳ぐ

要はどうしたって羽目を外したいのだ

アイゼンハワーは、Ｌｉｎｃｏｌｎが自艦甲板で踊り狂ったと聞いたとき、自己ピーアールで勝利したのだと確信し羨ましいと思い戦術の一つとして取り入れるべきと感じていた

しかし、状況は芳しくなかった

あの時、Ｌｉｎｃｏｌｎの起こした騒ぎに同乗してくれた『あさかぜ』が今回ココにはおらず、逆に恋路の敵対者であるエセックスが

居続けという圧倒的に不利な状態の中にあって一日も無駄にすることなく『くらま』を狙わなくてはいけない

だから『あさかぜ』の話題をだして自分たちにも派手なイベントが欲しいとどうやって押そうかと考えていた
そこに不器用『こんごう』が挨拶としてやってきた、これを巧く利用する手はないと作戦実行に踏み切った

押しても引いても微動だにせず自分をかわし続ける『くらま』の毅然とした姿には、若すぎる歯止めのきかない魂をぶつけるのが一番と考えたのだ

何せあの未知の演習を突っ走りきった魂だ
自分が遠路はるばるやってきて演習という苦楽を共にし、なのに寂しい錨地にいる
もっと親睦を深める派手なふれあいを望んでいると聞けば、がむしゃらなテンションで道を開いてくれると、策を弄した

「遠い海を渡って出会えた奇跡の出会いなんですよ。私、なのに寂しいんですよ、あの錨地で限られた日々を過ごすのは、だ・か・ら心に残るイベントが欲しいんです」

片方で『こんごう』の心をプッシュする悲しげな目を見せつつ、ここぞとばかりに『くらま』の胸に絡みつく司令艦の指は真ん前のテーブルにのの字を書いている

『くらま』は目眩の嵐、逃げ場が断崖と化した前、アイゼンハワー期待の桃色吐息の夜に直行便かと泡を食った時、『こんごう』は目覚めた

アメリカからやってきた司令艦が、心に残る日本での日々が欲しいという願いを叶えられると、渦中になった『くらま』とアイゼンハワー、上官の不正規作戦行動に制止と飛び出しそうなエセックスの前に雄々しく進むと

「お任せ下さい！！一つでも派手な思い出作り、お手伝いさせて頂きます！！」

渦巻く各人の欲望の渦に鉄砲玉は飛び込んだ
声も高く目を見開き、テーブルにめり込むほどの勢いで琥珀の力水をたたえるｂｏｕｒｂｏｎ（バーボン）を置いて

「呑みましょう！！」

アイゼンハワーの振ったサイコロは思わぬ方向に転る、しかし必然の作戦失敗でもあった
それは『こんごう』の不器用さ加減を見誤っていた事と、本来ならマナーの厳しい食事会を自分たちで盃合戦として破綻させていた事で『こんごう』の提案条件は見事にマッチしてしまった

「いや、あの…」

アイゼンハワーの服を掴んでいたエセックスはジョークとアメリカ特有の振りでかわそうと、酒瓶を持つ若き奇人に目を向けるが
口を鉄の棒で括ったかのように真っ直ぐに結び、前しか見えない競走馬の視線は深く頭を下げ
正しくお辞儀すると

「不肖私『こんごう』が出来ることはただ一つしかありませんが、皆様が大好きな乾杯合戦、心ゆくまで存分にお手伝い致します！！

どうぞ！！」

かがみ込んだ背から、両腕いっぱいの酒瓶を積み重ねると
自分の振った賽の目に、目を点にしたアイゼンハワーの前、幅広の
カットグラスを用意
アメリカ海軍上座の司令艦達分を並べて
断ることなくストレートを注ぎ込んだ

「どうしてこうなったの？」

呆然の進展の中、するりと『くらま』から放されアイゼンハワーは
自分の服を掴んだまま固まった笑顔のエセックスに金の髪を頭と連
動左右に振りながら聞いた

「貴女が振ったんじゃないですか」
背中を反らせ、力の入った顎でエセックスは切り返したが、アイゼ
ンハワーは「えっ？」と額に手を当てて
「私そんな事言った？」

「そう解釈したのでは？」
エセックスより後ろで事の成り行きを見ていたジュノーは茶色の長
い髪を指でクルクルとこね回しながら、自分は関係ないと言わんば
かりに『こんごう』から顔を背けて
「呑むの？」と自分より前の司令艦達に聞いた

「呑みましょう！！」

返事は上座の誰からも返らず、青い目の中に本気の八角を輝かせる
『こんごう』がジュノーにグラスを渡した

「私もなの…」
この並びの中では唯一赤毛のジュノー、かすかにのこるそばかすの顔が横並びのアイゼンハワーとエセックスを見る
何とも言えない沈黙の間、『こんごう』はグラスの海に静かな波でも走れば溢れてしまう程に注いだＷｉｌｄ　Ｔｕｒｋｅｙを高く掲げ

「乾杯！！！」

底なしの滝に放り込むように一気に飲み干す、鼻から煙りが出ても不思議じゃない急なアルコール度の中、さらに注ぐと
目の前で引きつった笑いを見せるアメリカ艦魂三人衆に目でどうぞと押した

『こんごう』は『くらま』籠絡のために続けていた盃合戦を見るに彼女達が望む派手な思い出を本気で、お酒を呑み続ける事だと勘違いしていた
ならばせ徹底的に呑む事に付き合うのが礼儀だと自信満々の顔に輝く八角の瞳

「勝負ね」

固まった三人の中、怒濤のテンションに乗ったのはやはりアイゼンハワーだった
転んだサイコロが出した目さえ自分の運気の側に引き寄せようとするように拳を高く挙げ
立ち上がると愛嬌の良い丸い目に闘志を燃やした顔でエセックスとジュノーに向いた

「この戦いに勝ったら日本滞在最後の日までの優先的に『くらま』様を頂くわ！！」

『こんごう』には聞こえないように脳内に走る声だが、チャンスに向かって一直線の瞳には声以上の意志が電撃のごとく突っ走る

「何言ってるんですか！！私は明後日から沖縄行くんですよ！！私にチャンスがあったっていいじゃないですか！！」

顎の方からアイゼンハワーを刺し睨むエセックスは歯を食いしばった返事をするが

「あらあら、米軍佐世保基地に居続けの長なのに、今まで戦果の無かった人が自分の都合を振りかざさないでくださいよ！！」

腹をくくったジュノーは勝負とは無関係に涼しい眼差しで言う

待てば明後日には脱落のエセックスという条件下で、さらなる拡大のチャンスが自分にもありと見るや平常心に似せた目を、ゆっくりと輝かせて

「呑み勝てば、階級に関係なく優先権を頂けるんですよね」とアイゼンハワーに向けて翠の目で返事した

アイゼンハワーがココを去った後、エセックスが戻ってくる間に『くらま』との間に誰よりも一歩リードの愛の架け橋を作れるのならばと息を巻く

こうなればやった者勝ち

譲れない戦いと化した盃合戦、アメリカ司令艦達がお互いの欲得をぶつけ合う間にも『こんごう』は二杯目をカラにして、気合いの号令をした

「楽しみましょう！！」

「ええっ！！是非とも！！」

欲望という名の列車は新幹線
『こんごう』の意気込みとは別に、ハードルの高く上がった『くらま』争奪杯は多くの艦魂達が見守る中デッドヒートの夜へと加速する

景品という立場ではあるが難を逃れ、騒ぎの上座を涼やかな目で見た『くらま』は戸口に控えていた小さな給仕の肩を叩いた
「酒が必要だったら惜しむことなくお出ししろ」と
一時の騒ぎで乱れた髪を手で撫で躾ると、がんばる『こんごう』の背中を見つめる

「これも強さか？」

アイゼンハワー達に押され皺になった制服を襟と共に正すと、軽めの敬礼を向こう上面にした

「私はしばらく他を回って挨拶をしよう、くれぐれも酒を切らすなよ」

言いつけに走り、封切りしていないバーボンを持ち返った給仕に「箱で持ってこい」と尖った目で念を押すし、自分は颯爽としながらも凝った肩をならしてロビーの側に歩いていった

「アホだ」

『いかづち』が『はるさめ』と会話して会場から走りさっていったのを確認してからしばらく、部屋で顔をつきあわせていた二人だったが

『むらさめ』は、いつ粉川を外に返そうかと外に考えあぐね乾いた喉のためにジュースを所望し、扉の向こうに控えさせていた給仕を呼ぼうとした矢先の珍事
いつの間にか少しだけ開いていた扉に、壁にイス事もたれかかった状態で会場を見ていた『むらさめ』は腹を抱え転びそうになりながら、扇風機の羽根のように忙しく手を動かすと粉川を呼んだ

「見ろよ！」

粉川は『むらさめ』が見ているドアの下側、かがむようにして顔を出しロビー中央で行われている呑ませ合戦を見た途端に頬をふくらませた

「何あれ？」
「笑うなよ！他のヤツに気がつかれるとめんどいから」

自分の下から見るよう指示した『むらさめ』は人がココにいる事でさらなる事件を起こすのはイヤだったが、あまりの珍事に自分が先に大笑いしてしまいそうなほど身体が愉快さ加減にむず痒く震えていた

同じように不意に艦魂達の集まるパーティー会場を目にした粉川も見慣れた背中が反り返る勢いで酒を煽っているのに笑みがこぼれる

「すごいな、ハハ、さすが『こんごう』って感じだ」

粉川は床に手をつく形で腹を奮わす笑い、低い位置から仰ぎ見るオンステージは
他の艦魂達も釘付けの見せ物となっていた
がっちり仁王立ちにして腰に手をおく『こんごう』の姿は、湯上が

りのコーヒー牛乳を煽る子供のようにも見えるのがさらに笑いを誘う中、前に並ぶ金髪艦魂には見覚えがなかった

「あれは？」
上に並ぶ『むらさめ』の顎に向かって粉川は指差して聞いた

「はっ？」

吹き零したジュースを拭いながら、トーテムポールのように扉のスキマに顔を並べていた『いかづち』は下の粉川が乗り出しそうな事にクロスを被せると

「ありゃアメリカの空母だ、こないだ『こんごう』と一緒に演習しただろ。ドワイト・D・アイゼンハワーってお偉いさんだ」
「あれが？」

上下で目を合わす二人、思わず確認しようと前に、手に力の入った粉川を蹴飛ばす
「外にでるなよ！！」指を立てて注意しながら

「これ以上騒ぎがでかくなったら困るってんだよ」とイスに座ったいくら周りの目があそこに集中しているとはいえ、自分たちを見る事のできる人の存在ほど珍しくもない、と

軽く後ろに蹴られた粉川は恨めしそうに締められたドアを見つつイスに戻って
「あれが原子力空母の艦魂なの？」と聞き返した
一瞬だったが『こんごう』の背中越しに見えた金髪は、人形とも言えるほど小さな物体だった
どちらかと言えば給仕をしている魂達とかわらない感じだったが、

確かに制服の胸元には高位階級を示す派手な色紙が海苔のように張り付いていた

「あれよ、おおっあれがだよ。まったくおどろくよなぁ、アメリカの空母はみんな変なヤツばかりだぜ」

ドアを閉めたことで遠慮の無くなった笑いは足までばたつかる
そも規則厳しい修練の港佐世保、だがひとたび事件が起こると大きい事でも有名だった
そして大抵その事件はアメリカの艦魂が絡んでいた

「でも、前に横須賀で会ったキティホーク大将は普通な感じの人だったけど」
テーブルを押されてこぼれそうなグラスを取り、粉川は極めて常識的だった空母の艦魂を思いだした
「おっ、キティホーク大将に会ったことあるんだ」
「うん、『しらね』さんの紹介で、一回東京に帰ったとき横須賀基地のフェスティバルでね」

苦手とする『しらね』の名前にピタリと止まった笑い、ストローを加えたまま口を尖らせた『むらさめ』だったが、とりあえず文句は返さず頭の後ろで手を組むと

「たしかにあの人だけはまともだよな、他に何人か会ったことあるけど原子力空母の魂(ひと)は変なのばかりしか見たことねーしおぼえてねーな」
「そうなの？」
「おうよ」

粉川は意外と思った
横須賀であったキティホーク大将はスラリと背の高いスレンダー系、
ただ痩せているというわけではなく骨格も東洋人ではあり得ないし
っかりとした鎖骨のライン
軍装も肩幅の十分にとれたスーツを着て、胸から腰、そして足先に
流れる隆起の激しいビーナスラインには見とれた程だった
どちらかと言えばスーパーモデルのようなボディに、磨きの掛かっ
た白い肌、ピンクの唇と高い鼻
プラチナブロンドのショートボブに芽吹きの翠を深く忍ばせた青い
瞳に、成熟した大人の女の色香をビシバシと叩きつける風のごとく
に感じた

なのに今見たアイゼンハワーはまるで子供のようだし
原子力空母の魂はみんな変だと『むらさめ』は言い切る
ずいぶんと格差の大きい魂だと、また一つ艦魂の不思議を知った気
持ちになり
手元の水を一口飲んだ

「ところで粉川、『こんごう』とはヤッたのか？」

口に入った水は噴水のごとく吹き出した
グラスを持ったまま直立に、むせた粉川は目を開いた顔で

「何を？」

思わず真顔で聞き返していた
ストローを銜えたままの『むらさめ』は口元を緩いカーブに笑わせ
ながら顔を近づけると
「エッチだよ、したんかって聞いてるんだよ」

言葉につまる粉川
何がどうしてこんな会話にやっとグラスをテーブルに下げ、一寸深く息を吸う

「そんな事するわけないでしょ、突然何言うの」
「だってさ、演習から返ってきて以来『こんごう』の吹っ切れ振りは尋常じゃねーぜ。そんだけ変わったんだからよぉ、粉川としたのかなぁって思ったんだけど」

粉川は短い髪の頭を掻きむしると
「なんで？いくらずっと一緒にいてもそんな事はしないよ。大人をからかわないで」
やましいところはなくても懸命に否定したくなるのは大人の性なのかもしれない
国家公務員と少女の交際なんて、世間的にも笑いのネタにもならないそうでなくとも国防の盾たる仕事につく自分、そういう下の方の放しには十分注意を働かせている

「でもよぉ、あんなに変わるなんて」

『むらさめ』は口からストローを吹き飛ばすと、今回『くらま』の評価が出る前から、どこか背筋からして変わり、険しい顔と無口が売りだった『こんごう』が険しいながらも引き締まった真面目な視線を持っていた事に変化の根元を探していたと言いながら、顔をしかめた

「『こんごう』はタイプじゃないって事か…」
「『むらさめ』ちゃん、頼むよ茶化さないで。『こんごう』とは良き友達だよ」

口は悪いが姿はそれなりの美少女である『むらさめ』を前に、粉川は手を広げて振ると違うとゼスチャーする
目の前の細い指は、人差し指を空に踊らせながら狙い定めたように粉川の鼻を突くと

「じゃあ『いかづち』はどうだ」
「『むらさめ』ちゃん！！なんの話？」
「だから、アイツは料理もうまいぞ」

鼻を突かれたまま天井を仰ぐ、肩を落として大きな溜息で

「『いかづち』ちゃんなんて僕からしたら娘みたいなもんだよ」

今年三十五歳の粉川はなんで二十歳も行かないであろう女の子にからかわれるのかと肩をすくめた

「じゃあ『しまかぜ』だったらどうだ？」
そんな粉川の姿を目の前にしているのに『むらさめ』の態度は変わらず
諫めているのに続けられる問答だったが、さすがに『しまかぜ』を子供という事は出来なかった
粉川は少しくちごもり

「『しまかぜ』さんは大人だろ、恋愛の対象にはなるよ」

少し素直な答えを返した

「選ぶとはやっぱり違うな」
姉として粉川に想いを寄せる『いかづち』に脈はあるのかを聞いた

つもりだったが
そこはかわされたなと、小さく舌を出した『むらさめ』は顎に手を置きながら

「護衛艦がモテないだけか？」
「いやいや」
粉川は目をつぶって首を振った
彼女達は護衛艦に産まれた事で色々な悩みを持っている、先に『むらさめ』と話した生きている意味とか、使命の重さとか、存在の根幹に関わる悩みもあれば、魂として…

「モテたいの？」
突飛な会話だと思いながら問答に付き合ってきた粉川は微妙な違和感に気がついた
それは『むらさめ』の次の言葉で確信に変わった

「やっぱり「普通に私達が見えてる人」は抱きたいとか、したいとかって感覚がないのかなぁ」

下世話な言葉の混ざった返答
つまらなそうに席を立ち、広間の騒ぎをのぞき見しようとした『むらさめ』に粉川は聞いた

「ねえ、「普通じゃない状態なら」君達が見える人がいるって事なの？」

今まで考えた事のなかった事だ
艦魂が何故見えるのか？三笠が見えた時にそれを聞いた事はなかった
その後、護衛艦の魂が見えるようにもなるだろうと教えられたときも考えた事がなかった

「いるらしいな」

素っ気ない顔と声、何事でもないような言い振りの返事は、粉川に新しい一歩を進ませる事になった

第七十三話　吐息の夜（後書き）

カセイウラバナダイアル～～倫理観～～

今回、『むらさめ』が結構にきわどい事を言ってます
このあたりからわかるように、艦魂の生態系は「人」の倫理観とはつながっていない部分が少しずつ顕著になってきます

なにんでそうなのか？ときかれれば
人と魂は別の世界の生き物だからです。としか答えられません

なので、恋愛にまだ若い方とかには不向きになってくるかもしれません
一つ言えるのは現実の世界でも聖母である者は、最高級の娼婦でもあるという事
そういう表裏の見方をどこで決めるかが今後の争点になるかもしれない

だけどきわどい性描写が出るわけではありませんのでご安心をｗｗｗ

そしてふ今回はさらにダブル掲載！！
疲れたよぉぉだけど期間的にも今頑張らないと本伝とのトラフィックが難しくなるのでがんばりました！！

ではどうぞ、前話は七十一話からどうぞ

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～外伝の外伝　港の働娘

「話を整理しよう」

部屋の温度はそれ程高くない、氷川丸内部温かなアールデコ様式を持つ貼り天井の下の談話室、片隅を囲うビロードと別珍のイスで顔をつきあわせていた面子の中でも一人涼しげな態度を続けた日本丸は「考えが煮詰まった」という思いで通路に続く窓を一つ開けた

長い髪を冷たい風の中で揺らし
頭を冷却するように左右に振る、かつて海風を帆に受けていた時のように手を広げる彼女は

「まず、氷川丸、君の思い出から行こう」

軽い口調で日本丸は振り返るてどうぞと手を向けた

「そこからが一番近いと思うんだよ」と、苦く顔を歪めた氷川丸を指差した
「私より日本丸さんのほうが、存命の二代目がいらっしゃるわけだし…繋がりをさがしやすいのでわ?」

どうしても過去を思い出したくないという気持ちが顔を曇らせる
白い額に歪みの道が現れる
長い睫毛に翠の瞳、氷川丸は日本丸の側から吹く風に髪を煽られ冷たさを唇に感じて首を振る

「うちのマーク2や群青さんに聞いたって何も出てこないよ、顔だけ似てる姉妹だもん」
「群青さん…は、わかるんですけどマーク2ってなんですか?」

こじんまりとしたテーブルに置かれたバスケットの前で、足をブラブラと揺らしたポンポンはひたすらにアメを舐めていた
その頭を撫でながら日本丸は

「群青は海王丸の事でしょ」
キョトンとした糸目の顔が、バスケットにのこるｂｉｔｔｅｒｃｈｏｃｏｌａｔｅの粒をつまむと
「マーク２は日本丸二世の愛称、で海王丸二世の愛称は昴なのよ」
もはや撫でるというよりはポンポンの髪わもみくちゃにして遊ぶ日本丸の返答に、氷川丸は折り目正しく着た日本郵船に制服の胸を押さえて

「前から思ってたんですけど、日本丸さんのネーミングセンスって…酷いですよね」
美しい眉の下、心苦しそうに言う氷川丸の顔の前、日本丸は糸目をかっぴらいて

「そうかな？初めて言われた」
顎を引いた驚きの顔は悪ふざけをしている子供の顔と一緒
日本丸の顔をポンポンも真似する始末の中、氷川丸はこの姉をもつ下三人の愛称（？）あだ名は酷いといつも思っていた

金唐事日本丸は復興著しかった登り調子の日本の中で若者が取り付いた音楽、フォークソングが大好きだった
特に吉田拓郎、谷村新司を愛し
中でも谷村新司の事は「群青のお禿様」と声高く崇拝していた（そういうふうに見える程のファンである）

「群青さんや、昴さんはわかりますけど、マーク２ってのはちょっと」

「だってあれは私のマーク2だもん、ねー」

日本丸二世は何とも吹こうな愛称マーク2を拝命していた
しかも一人だけ吉田拓郎側から

この酷いネーミングセンスはそのまま実はポンポン達にも付けられていた
老朽化した曳舟、あたらしく入れ替わり横浜にやってきた赤いタワーが目印の彼女達が到着するたびにあだ名を付けていったいわゆる名付け親

手元に座っているポンポンも彼女の命名だ
グリグリと只でさえチビの彼女の背を頭のてっぺんから押しつぶす程撫でる
「ぎゃあああ!!金唐さん!!頭もえちゃうぅぅ」
マッハで手のひらを回転させ糸目の日本丸は笑う
「焦げてしまえ!!」

跳ねる人形に、容赦のない日本丸
呆れた顔で見つめる氷川丸は日本丸本人が自分に付けているあだ名についてもクエスチョンマークな程の変わり者

金唐
自分の写し身である船体艦首を飾る金の唐草文様から付けたと彼女は言う
シルクロード渡ってきた、繁栄の文様から
海を渡る自分にふさわしいとつけたあだ名だが…安直過ぎてなんとも言えない

騒がしい間の二人をよそに、氷川丸はブレンドコーヒーを用意して
少なめのミルクを赤い闇に浮かぶ星のように降らした

「そんな事より思いだした氷川丸、もう一人の君の事？」

溶けて行くミルクの前、氷川丸の呼吸は止まっていた

「お姉さん…お姉さんと呼んでよろしいですか？」

昭和１９年、海戦から向こう勝ち続けた海軍はもはや見る影さえも
失い始めていたあの年に、氷川丸は彼女に出会った
オランダ生まれの彼女は、日本の艦艇に比べれば背も高く鼻筋もキ
レイに通った美しい人だった
だけど、どこか弱々しく自分を見失っていた

彼女は元々客船だった
それもオランダの名を「オプテンノール」と言ったそうだ

氷川丸と初めて会ったとき彼女は三度目の改名をされていた
日米開戦の直前にオランダは日本に対して宣戦布告をした
このころすでにオランダ海軍の病院船として働いていた彼女は破竹
の勢いで太平洋を暴れる日本海軍、天津風に拿捕され、日本の横須
賀に連行された
そこで改装され一度は天応丸という名前をもらうが、この名の響き
が天皇に似ているという事から、わずか一年たらずで「第２氷川丸」
という名に変わった

戦局につまる日本
資源の確保のためには艦隊以上により多くの輸送船団が必要とされた

そして悪化する泥沼の戦いの中、病院船も決して安全ではない時を過ごしていた
だれもが震えていた
「はるぴん丸が沈み」
「ぶえのすあいれす丸が沈み」
日本郵船の多くの仲間達が死んでいった
最後の夏が近づく中で妹の日枝丸、平安丸も返らぬ者となった

傷つき内地に戻った氷川丸にはもはや生きる気力はなかった
帰り着いた港は見回す限りの傷ついた仲間達、誰も口をきけない状態だった
自分のデッキの片隅で負傷兵が残した血糊を呆然と見つめていた氷川丸の前に彼女は現れた

「あの…子は…」

コーヒーの赤い闇に薄く白い雲と鳴ったミルクの水面
ほんの一瞬の間、忘れたかった過去は鮮明に思い出されていた

「あの子は、それまで幽霊みたいで覇気のない魂だった、それが君と出会って変わったよね」
煎りたての湯気の前、氷川丸は泣いていた
翠の瞳を隠すように伏せた睫毛に雫は枝を流れる朝露のように落ちた
声にだせない苦しみ、生き残った苦しみに

その顔にポンポンは困り果てて
「金唐さん…氷川丸さんが…」
まん丸な目がつられたように涙を溢れさせる、それを日本丸が押さえる

「ポンポン、泣いたらダメ、ちゃんと聞いていて」

「あの子は一生懸命だった」
涙で上げられない顔のまま、思い出さなければならない苦痛の作業の中へ

「申し訳ありません私ごときが、高名な氷川丸さんの名前を頂きまして」

第2氷川丸という名を頂いた彼女は身よりを無くした迷い子のようだった
拿捕され日本にやってきたという経歴から、戦時旅団の者達からは疎外されていた
普段ならば旅客だったり資源の輸送をする彼女達は、同じく客船だった者を無視したりはしないハズだったが
時がそれを許さなかった

悪化の一途の戦道（いくさみち）、武装もほとんど持たない輸送船は為す術無く海行く標的として沈められてゆく日々
荒む心が彼女に辛くアタリ、時として暴力を奮う者まで現れていた
彼女は行き場なくし、心を壊し始めていた
その中で挨拶に着たのだ

やらなければまた言われ無き暴力を受けるかも知れないという恐怖で悲しいほどに窶れた顔に氷川丸は手を伸ばし抱きしめた
「そうね、貴女は私の妹だわ、それでいいわ」

たくさんの仲間、最愛の妹を失った
これ以上争いを身近に置き、心を見失ってしまいたくない

震えていた彼女を引き寄せた

「がんばりましょ、がんばって生き残って、また客船に戻ろう」

夕日のプロムで迷い子だった第2氷川丸を抱きしめた
お互い涙で

「彼女は君に会って変わった、まるでもう一人の君が誕生したかのように」

懸命に涙を堪え歯を食いしばるポンポンの隣、日本丸は本論へと話しを導いた

「彼女は「氷川丸」という名前を得て、生きる意味を取り戻し、君の半生を自分の心に取り入れた」

それはあの泥沼の戦いの中で見られた、混乱の奇跡だったのかもしれない
氷川丸と第2氷川丸
魂達の繋がりの奇跡は、思わぬ悲劇へとつながっていった

第七十四話　蓮の業（前書き）

ぬ〜〜絡繰り絡繰り
今年中に終わるためにはダッシュが必要だけど、心のテンションを上げるのは難しいよね
『いかづち』の…ベッドシーン？

第七十四話　蓮の業

粉川は座っていたイスを倒しそうになりながら『むらさめ』を掴まえると聞いた

「どういうときに君達は人に見えるの？それは誰でも見えるって事なの？」

思わず飛び出し片膝を床に着ける形で、ダブルスーツの裾を掴まれ『むらさめ』は慌てて振り返りると引く手を払う

「お前！！服ひっぱんなよ！艘になったら大変だろ！！」

掴まれた上着の裾を伸ばすように丁寧に触る、普段はご気楽モードで海軍セーラーをこよなく愛する尉官の『むらさめ』にしてみれば、この堅苦しいダブルスーツは本当にお迎え専用のスーツそも、シーマンシップの象徴と防衛大学校で士官候補生ともなれば、艘の一つでも許されないほどのお堅い制服なのだから

男の手で引っ張られ、形を失う艘が裾を波打つなんて事になれば一大事である事は良くわかるが
今も隣で行われる、パーティー会場のどんちゃん騒ぎを見てしまった粉川にしてみたら「今更制服？」ぐらいにも思えるというもの、放した手を拝み手に立てて一応の謝りを入れながら

「ごめん、とにかく教えてよ。その「普通じゃないときなら見える」ての、どういう意味なの？」

一寸程だけ開けたドアの前で、会場をチラミしようとしていた手が止まり立ち止まった『むらさめ』は口を尖らせると

「私は…その…えっと…そういう事があるって話しを聞いてるってだけなんだよ」
身体をクルクルと回し顔を見合わさないようにする、口に手を当ててうって変わったかのように言いにくそうに目を反らした

「でもさ見えるんだろ、その人に…普通じゃないって場合には」
「ああっ普通じゃないだろうな、そりゃ」

歯切れの悪い返事と若干悪くなった顔は方をすぼめ両手を挙げながら、自分が語ることを禁ずる話しを軽い会話の中で、口からこぼれさせてしまった事に落ち着きを無くしていた
目はできるだけ下に構えて座る粉川を見ないように泳がせ
「色々…あるんだよ、まぁ」

自分であれほど下世話な話しを吹っかけてきたのに、今は逃げ腰の姿に粉川は口をへの字に納得いかないと意図的に見せると、立腹を現すために眉もしかめて見せたが
この会話の前振りを思いだして、少し考えた質問をした

「変なこと聞いていい?それってさっき言ってた事に関係あるのかな?その、「人と関係を持つ」事によって見えるとかって事なの?」

どっしりと床に座り込んみ『むらさめ』の逃げる目線から相手の思案を探るように聞いた
話しの流れからすると実際に「女の子」である彼女には言いにくいことに直結しているのだと考えられたからだ

言いにくいから渋る、それがセクシャリティーに関わる事なら尚のこと、具体的な擁護はかまさず「関係」という大人な語呂で、懸命に顔を背け四方に視線を散らす相手を見て

表向き平気な顔で下の話しが出来る『むらさめ』でも、基本は二十歳に届くか届かないかを思うにそうしたのだが実際の男女の関係は耳で聞いていても実践した事があるかは怪しい限りだし、おそらくあり得ない

むしろそういう事で人が見えるという事があるのか？それ自体が最大の疑問として入道雲のように湧いていた

『しまかぜ』やその他の魂、彼女達から粉川が聞いた弁では帝国海軍死滅後、海上自衛隊創設からこれまでの間で人が見えたのは遡っても、五十年ぶりという話しからすれば『むらさめ』のように産まれて十年選手のＤＤがそういう関係を持てた相手がいるとは考えられない事

勘ぐりの間に尖る粉川の視線、身を小さくして汗を浮かべる『むらさめ』

外の風切りが静かになった図書室の中を走る

パーティー会場の熱気との温度差は一目瞭然な空間

思い出される言葉

「五十年ぶりの出会い」

ここまで艦魂達との日々を過ごしたが、日本の船達の全てとは言わないがほとんどの者が、通常的に人と顔を合わせたていたという話しは聞かなかった

「普通でない時」「特殊な関係」

目頭を押さえ、間違えることなく問答しようとする粉川はそれなりの譲歩をして、『むらさめ』との会話にのぞんでいた

実はそういう私的関係によって人を見ることができるのか？を知る

ために

『むらさめ』の対応はそういう生々しさの領域を知るために見せる戸惑いに見えたから

「いや…それはそれは、そのなぁ…」

一分も立たない前の時には、自分から「『こんごう』と関係を持ったのか？」」などと軽口を飛ばしていたのに？どうにも言えないのか、それ程にセクシャリティーの深い部分なのか、背中を見せたまま首を傾げる

自分の暴言はさらりと流水のように言った後には、返せぬ答えによどみの滝壺状態

言葉を濁られ続ける相手に、粉川はカワされたくないという気持ちで自らさらに深い質問をする事にした

「『むらさめ』ちゃん、僕は『しまかぜ』さんから海自の艦魂が人に出会ったのは、知る限りでは五十年ぶりだって聞いてる。でも本当はそれ以外でも人と顔を合わせられる方法があったって事？それはやっぱり個人的な方法で、他者が介在する事は出来ないような関係なの？」

「いや、違う。そうじゃない…ただ」

強気だった目が本当に苦しそうに下がる

唇を噛むと、自分の中で整理のついた「部分」ドアの横にもたれかかったままで答ええた

「私は会ってない、海自でも少ない…」

漏らす息と困惑に顰めた顔は嘘をつこうと慌てている顔には見えなかったし
ごまかしの言い訳を選び出した声にも聞こえなかった
ただ本論を直接言うのを恐れているように灰色に近くなった顔に、粉川はその出会いがあまり喜ばしい事でないのか？と気がついた
『むらさめ』の性格を考えれば隠しきれない事に自分で蓋をしようとした最大の一言だったが、粉川には隠されたものに近づく入り口でしかない

初めて聞く、その他の出会いは粉川の心に十分な苛立ちを募らせていた

「少なくても、人と会えてはいたんだ…」

立ち上がりテラスの側を見ると粉川は、自分の頭を何度か叩いた実は知らされていなかった事が自分には多かったという事に、粟立つ心と、それを止める冷静さを招くために
三笠は、大戦以降日本を護る海自の艦魂と合ったことはないと言っていたが、『こんごう』の話しでは護衛艦『はるな』と会話をした事があると聞かされた
かなりショッキングな事だった
母とも慕った三笠が自分には告げなかった事があったなど考えたくもなかった
かき回す頭の中に記憶に暴風雨が通るようなめまぐるしい検索をせねばならなかった

そして『しまかぜ』や『しらね』の発言から、海上自衛隊艦艇の魂達は今まで人との出会いはなかったとされていた
なのに実は、出会っていたという事
まるで親身になっている自分を警戒して隠されていた事のようで冷

静さを失いそうになった

頭を何度も叩く粉川の体育会系な落ち着きを取り戻そうとする態度に『むらさめ』は動揺していた
近づこうとはしなかったが、もたれていた壁から離れて声をかける

「粉川、違うんだ、間違ってる。だからな、ちゃんと人に会えるたのはお前が初めてなんだよ。それ以外のってのはな…、あのな、言いにくいんだ」
「どういう事」

本人的には落ち着いた対応をしているつもりだが、声には怒がこもり熱い息がもれる
粉川は自分がダマされていたのかと思い始めていた
床を叩きつける足、睨む顔を直視出来なくなった『むらさめ』はドアの側に顔を向けながら

「だから!違うんだ!あれは、会えてるとかそういうものじゃなくて…あああああ!!」

苦しい言い訳けを大声でごまかそうとしている
ドアへ向かった顔が自分の側に戻された時、粉川は大人げなくも少女に向かって吠えた

「何が違うんだ!!」
「黙れ!!」

『むらさめ』の襟首を掴んだ粉川だったが、タッチの差で顔を先ほどの問答の時に口を閉じた平手に襲われ、出鼻が砕ける
がっちりと口を塞いだ手が信じられない力で大の男をテーブルの側

に押し返すと

「ヤバイ!!司令がこっちに向かってきてる!!!」

「はぁが?!」

声にならない擬音のままパーティー会場につながっていたドアに目をやる粉川

スキマには確かに近くのテーブル席を歩く『くらま』の姿が見える、しかも明らかに会場の監視をしている、司令艦の鋭い目は会場に集う海自艦魂に不備がないかを探していた

粉川と『むらさめ』お互いせっぱ詰まった状況で目を合わせて

「だめだ、こっち来る。欠席者がいないか確認してるんだ」

焦ってテーブルの側に粉川を押し倒した『むらさめ』は額を角でぶつけていた

頭を右に左にと痛みを散らすように振りながら、涙目になった顔で

「粉川はこっからお前を飛ばす、大丈夫!!基地のどこかには出られるハズだから!!」

掴まれた手から溢れ出す光の粒、粉川は慌てて自分の口を押さえている手をつかみ取った

「待ってよ!まだ何も答えてもらってない!!」

ここまできたら謎に対して真っ向勝負の男粉川、このままでは夜も眠れない事になるのは目に見えている

だったら、ココに『くらま』が来るのならば彼女に聞くという手もあるというぐらいの気持ちだった

「『むらさめ』ちゃんが教えてくれないなら『くらま』さんに聞くよ!!」

「馬鹿野郎!!そんな事したらお前がココにいることがバレて、全

部の護衛艦が殴り倒されるわ!!」
「じゃあ!!」
「頼むよ、静かにしてくれ!!アメリカ海軍の前で騒ぎは御法度だ!!」

いくら『むらさめ』が鍛えた豪腕の持ち主でも身長１８０近くの粉川を何時までも押さえておくことは不可能
すでに押さえていた手を取られ、強く押し返されている現状からしてわかること

「だけど秘密にしていた事があったんだろ!!」
激しい言葉は、相手の気持ちも察して低めのトーンで返された
『むらさめ』は答えられなかった事に対しては悪いという気持ちがあるようで、焦りよりも苦い顔で首を振った

「粉川、それは…誰だって知ってるんだ私達は」
「誰だって知っている?」
「そうだ、むしろ海保の奴らの方が知ってるかもしれない、海自じゃアル意味タブーなんだ」
「タブー（禁忌）？」

力の入った捕り手が緩んだ隙を『むらさめ』は見逃さなかった
両手を重ねて大きく輪を開く、光の粒に彩られた金色の闇が粉川の目の前に広がった

「待って!!」

身体を覆う光の力に、さしもの粉川も吸引されるように『むらさめ』から引きはがされる
強い風が息を奪うほどの勢いで輪の中へ流れ、足場を無くした粉川

は泳ぐように手を伸ばすが、何処にも触れる事が出来ない
懸命に輪の輪郭に縋ろうとする粉川の顔に『むらさめ』は静かな声で告げた

「『しまかぜ』に聞け、他の奴らには聞き回るなよ。簡単な話じゃねーからよ」

そう言うと手のひらを静かに閉じた
同時に粉川の視界は真っ黒に変わり現実の世界から途絶されると、沈むように消えていった

全ての料理を出し切った『いかづち』は『くらま』に断りの挨拶をして自室に戻っていた
煉瓦倉庫の寄宿舎
自室として割り当てられた部屋の高い天井を、メガネを外した目が呆けたままつぶやく

「早うせんと…早う…せな、でも告白して…どないしたらええの？」

狭いベッドで何度目かの寝返りをうつ
顔に掛かる黒髪の癖毛を払いながら
寄宿舎の部屋割りは大部屋の中に個人の部屋を持つという形式だ
大部屋に入る一本の共有通路に並ぶ自室のドア、入るとベッドと小さな机が一つ
ビジネスホテルのシングルのスペースを更にコンパクトにしたよう

な形で、天井だけが大部屋の居間同様に高いという、ちょっとおかしな作りだ

江田島海軍学校に似せた外観を持つ寄宿舎だが、中身に台風が吹くほど厳しいわけではない
自分の趣味である料理雑誌を、キレイに置いておきさえすれば問題はないし
こんなところまで『くらま』は注意に来たりもしない、せいぜいルーム長的『しまかぜ』に小言を言われる程度でプライベートはしっかり守られているが

居心地は悪い
魂達が自分の写し身に持っている部屋は本当の意味でプライベートルーム
自分の好きな調度を持ち込みデコレートする事もできるし、ココだけは「開いて」なければ誰も入る事が出来ない空間、でもココは佐世保でそうはいかない

限られたスペースで人まねをして寝泊まりする
全体の意識を高めるためにと、修練の港の決まり

身体を何度も回し、居場所を代えようとしながら何度目かの溜息で『いかづち』は飛び起きた

「人と恋して…どないしたらええの？」

部屋に帰ってベッドに飛び込んだ、心に募った想いで身体が鉛のように重く感じていたから

微睡みを何度も繰り返し、色々と考えていた

粉川に、どうしても自分に向いて欲しいという気持ち
自分を見ていて欲しいという純然な想いではち切れた週明け、心にもない事を口にして『しまかぜ』を凍り付かせた
そこから今日のパーティーまで、帰ってくるのを心待ちにしていた人は笑顔だった
十一月の海風に当てられ、白くなった自分の顔を見て

「さむいでしょ」
守っていた心の防衛ラインにいとも簡単に入ってきた人
マフラーをかぶせてくれた粉川

「がんばろうよ～～～」

無邪気な笑みで自分に「恋せよ」という姉『はるさめ』のプッシュで自分の気持ちに真っ直ぐになろうと決めてはいたが

アメリカの艦魂コーパスクリスティーの言葉が一つのストッパーになっていた
「人との関わりを持つことは良いこと」という言葉
明らかに高見から物事を見ている銀色の瞳が目指すものは「ただ恋をせよ」という事ではないように感じていたが、今ひとつ理解するには至れなかった
ただ引っかかり、不安を煽っていた

恋をせよなのか？それとも恋より先に進めという事なのか？

交錯する果てに一度は前を向いた心は、一人でいる事で何度も入れ替わっていた
見えない言葉の先を知るためにとどまるべきか？
それとも素直な気持ちをぶつけてから、先を知ったほうがいいのか？

「あかん、わてどうしたいんやろ」

時間が出来たことで考えられる事はただの堂々巡りだけ

背伸びをして骨をならす、デスクに伏せておいた料理雑誌をとる、
何度も見ているページ
角を折り、赤丸を打った献立

「どうして人を好きになったんやろ？」

料理が好きになった時、それが人の強さを羨ましく見た最初の日だ
と思い出した

産まれたのは水の綺麗な港だった。風光明媚、周りをみれば赤煉瓦
の倉庫の並ぶ町は舞鶴と言った
山が近くて、雲が高くて、海がキレイ
なのに天気だけがいつもへそ曲がりで、晴れ間に少々の雨でなく、
雨時よりちょっとだけ晴れみたいな場所だった
そんなキレイなところで同型の姉妹艦の中、唯一生を得た『いかづ
ち』

だけどこの町海がとても寂しいところだと程なくして知る事になる

最初に自分挨拶をしてくれたのは基地司令だった『はるな』だった
が、糸目に近い細いアイラインがゆっくりと自分を見てから
「初めまして、頑張りましょう」とだけ声をかけ、どこか悲しい声で

「貴女、この海を憶えてる？」そう聞かれたのが印象的だった
産まれたばかりで目の前に広がる景色に憶えがと聞かれても答えよ

うのないもので、困った顔をした『いかづち』に『はるな』は柔らかい笑みで
「だんだん貴女の海になるからね」と告げた
その言葉のおかげで、この海の持つ寂しさを、吹く風と潮の味の中で実感した
「ココは昔、大日本帝国舞鶴鎮守府…だったんだぜ」
最初に自分を迎えてくれた姉妹、姉の『きりさめ』は初めて見た妹に
「名は体を表す、感電したんか？お前の頭、解析させるんだぜ！！」
戯けた態度で、癖毛で跳ねっ返りな黒髪の頭をなで回した
瓶底メガネをかけ、金目鯛のように大きく見える目で自分よりの小さな姉は、手に持った携帯端末をいじりながらココが、かつて日本国の一大軍港だった事を教えてくれた
「栄えある帝国海軍」
その末裔として、伝統有る港に産まれた事、最初はそれが良いことばかりだと思っていた
だけどその思いは進水から一ヶ月たらず、まだ就航もしていない頃に色を失い始めていた
『いかづち』が産まれたこの年、１９９９年舞鶴基地は国家として戦後初の海上警備行動を発令させる一つの事件と向きあっていた
『いかづち』誕生のたった三ヶ月前の出来事だった
基地司令だった『はるな』はイージス艦『みょうこう』と地方隊の雄である『あぶくま』を連れ緊急出動

「佐渡島西方に不法電波を発信する船あり」

海上自衛隊、海上保安庁、各々艦船を出動させこれを追尾させたが
逃げる不審船の速さに振り切られる者が続出
二隻の不審船の一隻に張り付き続けた『はるな』は何時出るかの攻
撃命令に胃を切る思いで待ち発令後

不審船を取り逃がすという形で幕を閉じていた

不手際

懸命の追尾を行った船艇にかけられた言葉はそれだった
マスコミは、対して知識もない評論家をテレビに登場させて、防衛
の切っ先である仕事をする者達を叩き
同じように備えられなかった海保をも叩いた

日本海の荒波に消えた不審船、自国の海に入る違法者を罰する事さ
え二の足を踏む敗戦国日本
護りの盾は何為にいるのか？
連日の激しい取材、近海を飛び自衛隊の装備に疑問と、まず国家の
頂点の役人達に対して機能していない国防に対する疑問以上の追い
針を投げる雄弁なる詭弁の徒達
錯綜する情報の中で

日本中が注目した事件の余波の中で『いかづち』は誕生した
そして
事件を知ったとき『いかづち』は『はるな』に敬礼が出来なくなった

正式な任官はまだしていなかったが、護衛艦として覚える事はたく

さんあった
だけど、全ての勉強を投げ捨ててしまった

「何学ぶんよ!!一生懸命覚えたって実践で使えへんのなら意味あらへんやん!!」

三隻の護衛艦、一つは国防の最高級であるイージス艦だった
なのに結局何も出来ずに帰り、言われるがままの非難に晒される姉達の姿に自分が追随しなければならないのかと思った時

こんな不幸な誕生が自分に与えられた運命なのかと、泣いて叫んで全てを拒絶した

夏真っ盛りの舞鶴は多くの海水浴客でにぎわう、海岸線を通る細い国道はこの時にだけ渋滞を味わい、海からの照り返しと強い日差しで黒く焼けた子供達が走り回る

進水式から向こう、自分のところにくる全ての魂を無視した『いかづち』は一人海を見ていた
甲板の上には艤装要員として入った隊員達が、照りつける日差しに溶けそうなのか?身体をフラフラさせながら動き回る
「やってらんねーよなぁ、実際」
会話は取り逃がした不審船の話だったり、休暇の話しだったりあまりに覇気のない姿に『いかづち』は深く溜息を落とすばかりだった

ココはかつての栄えある軍港、モノクロームの写真に残る当時の国の楯達
それを操艦したであろう背筋も正しき軍人達の姿

「姉さん達なら、こんな時どないした？」

心が苦しくなっていた
誕生したその日は幸せだった、なのに一瞬で転落した
真正面に見える舞鶴地方隊総監部、余部上から真っ直ぐ続く国道２７号を上っていけば西舞鶴につながる
二股に別れた舞鶴湾、真ん中に座る戸島
同じ景色を見ていた帝国海軍の姉達は、護るべき国民の前、無力を晒し罵られ続ける自分たちを見たら
このだらけた隊員達の姿を見たら、拳の制裁をするだろう

「怒らはるやろな…」

手も足も出ない亀のような防衛
殻にこもった護りの船達、どんな最新の装備を持っていても心がすっかり負けている事に『いかづち』は気がついてしまっていた

「わて、もう死にたいわ」

産まれた事、残りの三十年を呪った

その足で本当に死のうと自艦内に足を進めた
生きている意味がワカラナイ虚ろな目の光りをメガネで隠したまま、続いている艦内の工事の合間を縫って
自殺をするための刃物を求めて、真新しい匂いを鼻に届かせる厨房に向かった

進水から二ヶ月、艦内の各セクションは無味で壁だけ箱なりの姿から、それぞれの部屋へと変貌を遂げ始めていた
このころには既に、スライドで初代の艦長となる艤装員長が乗艦し

ている
同じように各部屋の課隊の者達も乗り、それぞれ自分が使うであろう部屋の支度などをし始めていた

もう無人ではなく、共に働く者達がいる自分の中を、まるでスクランブル交差点の波にもまれるように『いかづち』は歩く
「一緒に死ねばええんや」そう考えながら、焦点の合わない目は食堂のドアをくぐった

「食え!!食って作業を続けろ!!」

静寂の死線に漂った『いかづち』の心を蹴飛ばす怒声が響いた
けたたましい声の主は、カウンターを挟んだ厨房の中にいた。食堂室になっている前室と明らかに温度の違う世界で腕まくりをして立っている

既に何度か温度を上げている中で、更に熱い状態の顔を上げて
「きびきびはこべ!!」と
艤装に入り、多少のクーラーは入っているようなのだが、なんのそのな雰囲気

並んだ隊員達は山盛りの食事の前で大きな声を返していた

「いただきます!!!」

真夏日の八月、黒く焼けた男達は盛りになった皿をあっという間に平らげていく
今まで沈んでいた『いかづち』の気持ちを土足で踏むがのごとくだ
辛気くさく湿っていた彼女の鼻腔にスパイスの匂いが、目覚ましのように通過し、目の前にある活気に目がぱっちりとひらく

「しかし、いいんスか？まだ厨房使っちゃダメだったんじゃねーんスか？」

舐めるようにキレイに平らげた大皿を返す隊員は、腰に作業袋をぶら下げたままだ
目の前カウンター越しに身丈と同じぐらい大きなしゃもじを奮う隊員は、白い歯を見せて

「バーロー！飯がきちんと炊けるかどうかは海の男にとってもっとも大事な問題だ！！しっかり確認しとかんにゃならん！！オマエらだって良い飯食って仕事してーべ！！」

しゃもじを如意棒のように振る隊員の姿に食堂に爆笑が起こる

「これでいつ何時緊急出動が掛かったって飯は保証された！！ヤロウども！！気持ち入れ替えて働け！！」

銀のニブイ輝きの食器、先ほど甲板で見た汗まみれでだれながら愚痴っていた隊員が走って行く
「ごちそーさんでした！！」
露天で嗄れていた顔はどこにもなく、力を取り戻した笑みは白い歯を輝かせて

「おう！！午後も頑張れ！！」

口にかき込むカレー、汗だくでふやけた紙のようになっていた隊員達が次々と生気を取り戻す

「気持ち、入れ替える？」

人には見えることのない『いかづち』は厨房カウンターの中に入ると大きな寸胴に回る琥珀色の刺激的な香りを放つスープに指を入れ掬い舐めた

「おいし…」

舌の上を走る刺激、スパイスと隠し味に裏打ちされる海軍伝統の料理は、驚き続きで開かれていた『いかづち』の目からメガネを落としてしまう程の衝撃を与えた
食べなくても生きられる艦の魂は、自分の思考をシフトチェンジさせる魅惑の料理に出会った

「おいしい…、気持ち替えられる…」

たくさんの涙がこぼれる
鱗が落ちるように自分の目の前を曇らせていたものが崩れ落ちる
まだ何もしていない内から「負け」を自分の胸に抱いていた事が恥ずかしくなった
あんなに世間から罵られても、人は気持ちを切り替えて頑張っている頑張る人がたくさんいるのに、何もしてないうちから死んでしまおうと思った事を本当に悔いた

その日『いかづち』は初めて包丁を握りカレーを作ろうとした
食べるという習慣を持たない魂達に持っていっても変な顔をされるだろうけど、自分の気持ちを切り替える大切な出会いとなった料理を、司令や姉妹に見せて今日までの事を詫びようと考えたのだ

ところが、『いかづち』が夜の厨房で具材をカットして湯に入れ、いざカレールーをと探したが見つからなかった。昼間の分で切らし

ていた事が今更発覚したのだ

「どないしょ～～」

刻んだ食材をこのまま放置する訳にもいかない、並べられた金物スタンドを広げ、アチコチと手を突っ込んで探していた背中に、声はかかった

「夜に火を使うのは危険よ」

慌てふためき、火のついた鍋もそのままで踊ってしまった『いかづち』の前にあられたのは舞鶴基地司令の『はるな』だった

「これだけあれば、別の料理も作れるのよ」

そういうと、夜を良い子とに勝手に食材を広げていた『いかづち』を叱る事なく、ケースに入れた砂糖と醤油を前に置き、ゆっくりとした口調で料理を続けた

暗闇の中、頑張っていた『いかづち』はいつ自分に司令が乗ってきたのかに気がつかなかった事に、国防の盾として産まれたのに役立たずと罵ってしまった相手以上に自分が隙だらけであった事になさけなくなった

「司令、ごめんなさい。わて自分勝手な事言ってしまって」

「誰だって言いたい時があるわ」

小川のように細い流れの緩いカーブ、切れ長の目を持つ『はるな』は大人な顔、優しい口調、とても一群の司令の中では秀でた実戦経験を持つ者とは思えない柔らかさで手際よく具材を入れる

隣で静かに、背中を丸めるように立つ若い魂に鼻歌を聞かせながら、菜箸を使って煮上がりを確認すると

俯き涙する『いかづち』の癖毛頭を撫でた

「気持ちが沈んじゃう時は誰にだってあるのよ。そう言うのを切り替える時は食べる、美味しい料理で心まで暖めて。それでいいと思う」

そういうと大皿に調理の完成品を入れた

「肉じゃがって言うのよ。栄えある帝国海軍、あの東郷平八郎元帥発案の一品よ」

「ほんまに！」

人差し指で可愛い妹の額を押す

「舞鶴鎮守府で産まれた料理。帝国海軍のお姉さん達もきっと食べてた味、今日貴女に引き継がれた」

嬉しくて泣いた

自分は帝国海軍から伝わる料理を知り身につけた事に

「気持ち、切り替えて」

思い出の中に沈み涙が紙面を濡らしていた事に『いかづち』は気がついた

あの日、今一度国の楯として頑張る事を誓った

メガネを外し手のひらで涙を拭う、こすらないようにゆっくり、ぼ

やけ始めていた思いでに原点を確認した目で今の自分の足場を探そうとした

「わては、国を護る船や、せやけど…わては」

行き違ってばかりの国の楯達、悲しい思い出の方が未だ圧倒的に多い中
あれから何年か経った、人は自分たちを愛してくれてるだろうか？
それを実感できるだろうか？
いつしか料理を作ることに没頭する事で、そういうものを見ないようにするカモフラージュとして使ってきたのでわ？

「ちゃう、絶対にちゃうで」

「新しいイージス艦が作られることになったんだよ！！」

「新しい魂…」

笑顔が伝えたニュースに時が巻き戻り心が凍る
同時に焦りで気が動転した
生と死、先に生きる姉の魂を終わらす事で自分たちは産まれる、およそ三十年の道
国を護るという頂点の仕事
『いかづち』は頭の中にある自分たちの使命を思いだして、納めたハズの涙がこぼれた

国を護るという仕事は非常の時がくれば、生死の切っ先真ん前の仕事で、本音では仕事という形で割り切れるかどうかさえ考え及ばぬものだ
だけれど、その時がこない事を願いながらも、その時のために生きる

この国を護るために

「わてらは…この国の人を護るために産まれるんや」

こぼれた涙を手で掬うが、止まらない清水は手のひらを落ちてゆく
国家の命を守るため、使命がために新たな脅威と向きあうために

「姉はん達を、殺して産まれたんや、わてらわ」

同じ志で生きた艦を殺し、新しい力として産まれる
それは国家の望み故の、蓮の業だ

だからこそ愛されたい、死までの道で生きた満足のゆく形が欲しい

「でも、なんか違う気がするんねん…」

胸を熱くする想いに『いかづち』はベッドに倒れ込んだ
「熱い、わて熱い、どなんしたらええん?」
自分の手で身体を縛るようにくるまると、きつく目をつむった

「粉川はん、わてらは人を好きになったらあかんのかな?粉川はんの事好き言うたらアカンのかな?」

粉川に渡されたマフラーをつかみ身体の中に入れるように抱きしめる
ぬくもりと香りの中で涙の幕の下で『いかづち』は眠りに落ちていった

奥まった通路で蹲っていた『しまかぜ』を見つけた『くらま』は背中に向かって、いつもの口調で声をかけた

「きおつけ！『しまかぜ』一佐、パーティーを抜けてに何をしている？」

荒い息で肩を奮わす姿
図書館のテラスを避けた書庫につながる通路には、一つの照明もない漆黒の道があるだけ
片隅に頭をぶつけるように顔を隠す『しまかぜ』は『くらま』の声に立ち上がると

「何！何のよう！！」
涙はではなく、かわりに憤りか、自分の内側にある衝動にか赤くなった顔を、紫の闇の下に見せた

「何故会場に戻らない？何をしている？」

声はいつも司令として佐世保に詰める魂達の前に立つ時に発するものと変わらない
だが目は明らかに自分の恋人を心配していた
微かに出る白い息、少しの光に浮かぶ『しまかぜ』の顔は苦しんでいると、誰が見てもわかる
普段は見せない苦しみに、怒りの声を織り交ぜた返事を返してはいるが、後は弱々しく倒れて終いそうな姿に『くらま』は身体を引き寄せた

「『しまかぜ』何をしていると聞いている、答えろ」

掴まれた手、肩を押さえそのまま壁に彼女の身体を逃げられないように押し付ける
「何もしてないわ」
「答えろ！！」

静かな通路に響く声に同じぐらいに尖った声が返る
「何もしてない！！答えが欲しかったら命令すればいいでしょ！！」
「命令などしない！！」

『しまかぜ』を上回る長身の『くらま』は彼女の顔を片手で押さえた頭を振り逃げようとする視線を自分の目に合わせると

「君に命令などしない、ただ信じているだけだ」
『くらま』の目は尖っている、だが目の中にある心は愛する者の苦しみを受け取ろうとしていた
いつものように、変わらないように彼女を支える大切な手が髪を撫でる

「私を信じてないのか？」

荒げていた息が急に静かになる、二人の鼓動だけが聞こえる静かな間の中で『しまかぜ』は小さく首を振った

『くらま』より先に会場の監視を行っていた『しまかぜ』は聞いてしまった
図書室につながるドアの向こう『むらさめ』の声を

「『しまかぜ』は『あまつかぜ』さんを撃ったんだ」

会場に姿の見えない『むらさめ』を叱ろうと伸ばしていた手が感電

したかのように止まった
「姉を撃った」
海自の艦魂ならだれもが知っている事実、そして誰もが通るかも知れない道
でも
「貴女には出来ない」
『あまつかぜ』の至った道を歩くことを否定する、笑う銀の瞳
とたんに呼吸は乱れ、会場になど居られなくなった
本当は姉を撃った自分を、周りの全てが軽蔑しているのではと、暗い森に輝くフクロウの目達が
心にたまる薄暗い気持ちをかき乱す
「『しまかぜ』何があった?」
縋った腕の中、震える『しまかぜ』の頭を慈しむように抱えた『くらま』の視線
自分の胸に揺れるｅｎｇａｇｅｍｅｎｔｒｉｎｇに触れると抑えた声で答えた
「ごめんなさい、私疲れてるの。本当にごめんなさい」
「ならば部屋に戻れ、休むんだ」
『くらま』の目は悲しそうに俯いたまま、掴んでいた彼女の身体を解いた
足下はしっかりとしているのか、見苦しくない動きで反対側の階段へ向かう影に
「『しまかぜ』疲れているところ悪いと思うが、近いうちにみんな知ることになる。君には先に知っておいて欲しい」

手すりに身体を預けて振り返った顔は既に闇に隠れて見えなかった
「何？」
「『たちかぜ』総司令の退艦（除籍）が遠くないうちに決まる。新しいＤＤＧの建艦がほぼ決まったから、長くて後四年だろう」
影は揺れた
かすかにだったが『くらま』の目には見えていた、悲痛に呆然とした『しまかぜ』の顔が
「そう…」
細い通路の両端、二人の距離は不明瞭なまま『しまかぜ』は消えていった

「何やってたんですか？」
ずぶ濡れになった粉川は立神のバースで隊員達に引き上げられていたバースにくくりつけられた『こんごう』の上でデッキの掃除をしていた隊員が粉川を見つけたとき艦尾の側で、大声を発しわめき散らしていたというなんとも珍妙な図であった
引っ張り上げられ隊員達から大量のタオルをかぶせられた粉川の唇は紫色になっていた
なんと言っても十一月の海
寒いに決まっている

「粉川一尉…大丈夫ですか?」

さしもの隊員達も、この名物男のあまりに突飛な行動に驚きを隠せないという顔をさらしている
粉川の方はクシャミと鼻水、直ぐに声が出ないほど震えた状態だった
突然飛ばされて海に落ちたのは三笠以来久しぶりの出来事だった、
頭をタオルでもみくちゃに拭きながら

返事を待つ隊員に、笑うという動作をして見せた。寒さで引きつった口で

「海水浴…かな?」と

当然この夜の珍事はまたも佐世保基地につめる海自の隊員達を大いに湧かせる事になる
当の粉川は夜の海風に晒され悪寒を背中どころか前進に走らせながら
今も『こんごう』を中心に飲み騒ぎのパーティーを会している寄宿舎がある倉敷岸壁を睨んだ

「頭冷やせって事かい?」

謎に立ち向かう忍耐力を試されたと、胸を叩きながら水たまりの足跡を引きずるように残しながら、基地にある仮の自室に戻っていった

第七十四話　蓮の業（後書き）

カセイウラバナダイアル～～作品のテーマ～～

頑張ってます！！！
鷺巣詩郎さんを聴きながら、昔からこの方のサントラが好きなんですよ
最近有名なのはエヴァですが、それ以前の作品の方が好きですねエヴァも悪くはないけど、作品が狙っているライン取りを好きになれないんですよ
もちろんリアルタイムでみてましたけど、テレビの最終回を見たときの…あの丸投げっぷりには爆笑したくちですなんじゃそりゃ！！！

庵野さんってさぁ、いや多くは語らないけどけっこうアレな人でおもしろいんだけど、おかしい

師匠ではないけど、お禿様（冨野由悠季）なんかもガンダムのZやってた時は
「これをガンダム最後の作品にする」（結局終わることなく現在まで続いている）という意気込みとリアルな人間物語の本質入れまくりで
出てくるメカも多かったおかげか商業的にはそこそこ成功したらしいけど
本人は全然納得して無くって
破門にした（極めて他者的視点で）永野護に愚痴ってたぐらい
死にたいとか言ってたし、実際そうとうに精神衛生がやばかった頃の作品らしい

（しかしヒボシは見た事がないｗｗｗ）
だから制作当時から作り直すみたいな気持ちはあったそうだよ（他人事のように）

そんなところで作品のテーマってのをココで小説を公開している作家さんはどういう形で表現しているんだろう
ヒボシは毎回七転八倒してます
テーマって輪郭のある形で見えたらダメな気がするんでこう
ぼんやり、「ああ、そういう事なのかな？」ぐらいに見えたら合格？
なんかこう素人なんで「今更それかよ」的な話しなんで恥ずかしいんですけどね

ひぐらしのなく頃には残酷を目に当たる形でだしたからテーマが霞んだと竜騎士さんが言っていた

あの作品を初めて見たとき、正直
なんちゅう残酷なアニメと思ったと同時に
一作目「鬼隠し編」で絡繰りの絵図が見えてしまった
なんで恋愛妄想にとりつかれたみたいに自分勝手に挙動不審になった男の子がいるの？と

でもあの鏡合わせの妄想と現実のレベル差を作画でやってしまったというのがいかにも日本人らしい解釈で、なるほどとも思った
あの作品の賛否についてはヒボシには持論があるけど、ココでかくと「うわぁ、うざいですねぇ」になるから止めとく

一つ言えるのは、大抵の人がひぐらしのテーマを見失っていたという事

そして今そうだという事
これを実感した
だから大事なことを見落とす、それが絡繰りだったのだけど
竜騎士さんは笑ってたね「やりすぎたっ」て

でも社会的にも知られたのだから成功作品だし、テーマが霞んだという意味ではヒボシの狙いも近かったり
がんばってマネしようｗｗｗ

ところで嬉しいメッセが来て、月を跳ねそうですｗｗｗ

「旦那の乗ってる護衛艦が出て嬉しい、頑張ってください」
どの護衛艦かは書かれてなかったけど、とってもホッコリしました
実はちょこちょこういうメッセは頂いていたのです
ただ、小説になろうは現在感想をかくにもメッセをおくるにも、組合に所属するように登録しないといけないようで（実際どうなってるかはよく分からない）

よほど守秘義務をしっかりと守っていらっしゃるのか
返事を書こうにも書けませんでした
（おそらくは、わざわざ一度登録して書き込みをして下さり、その後脱退するという方法）

「自分の乗っている護衛艦はいつでるのか楽しみにしてます」というのもあって
とても励まされました

だいぶんとしんどい山場が続きますが、がんばります！！！
色々な方がたくさん見て下さってありがたいと思ってます！！

今年中にはなんとか最終回まで持って行きたいと思ってます
守秘義務を守りつつ応援してくださる方々にも感謝しつつ、今日は
これにて～～～

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第七十五話　初恋の人（前書き）

恋愛に高い純度を持っておられる方には不愉快な部分がありますというか
これから先そういう部分がたくさんあります

ヒボシの書く艦魂は
ただやさしく
ただ可愛く
という存在ではありません、時に狡猾に見えたり、時に愛を必要以上に欲したりします

現実の世界でも全てを一つと言い切れるものはないので、依存する領域による倫理観の差によるものもあり
それが「人」には汚らしい行為に見えても
「魂」には普通の形だったりという部分があります

恋愛の箇所に掛かる場合もあります、それを不快と感じられる方は読まれないようご注意下さい

火星明楽

第七十五話　初恋の人

『こんごう』帰還から一夜明けた佐世保は快晴だった
『こんごう』達が演習に出た間は彼女達があじわったような冬の雨に町も晒されたが、今日は打って変わったかのような日差しだ
連年この季節は灰色雲の多い港、遅く廻ってきた秋晴れは透明度をプリズムの鋭角のように見せつけ高い空は開けると、雲など微塵もない良い天気の笑顔を惜しみなく出していた

ただ日差しの温かな視線とは裏腹に、冷たい吐息が港と水面を走る事で、本格的な冬に入る一時の安らぎである事は誰もがわかっていた
佐世保基地より少し東に位置する町にはクリスマスを楽しむための装飾が、迫る日をカウントダウンするように賑やかな彩りを忙しなく増やし続けている

人もまた、気持ちを浮つかせている
由緒正しいＳＳＫのタワークレーンでさえ季節の彩りを纏うのだから、町の色がクリスマスのカラーに一色染まるのもそんなに遠くない普段なら造船と、その町という地味な世界がイベントに合わせて塗り変わる、忙しい季節である

人も魂達も

「聞いたかね？昨日の話」

朝食を終えた宗像は額の傷をさすりながら、間宮の前に立っていた

黒く焼けた肌に潮に刻まれた皺、現在は部屋に居座りの基地司令とはいえ十分に海の世界を生きてきた猛将は気さくなことでも良く知れている人物だった

隊員達が入れ替われで楽しむ食堂の雰囲気をこよなく愛してもいた彼は、食堂の一角、観葉植物をに並べてた角のブースに座る船務士の和田と、パソコン片手に話をしていた間宮を見つけると笑みを堪えた顔で尋ねた

総監部の窓から見える景色にも山の錆びたカラーが多くなった時期窓辺の景色を独占出来る場所で、打ち合わせをしていた間宮は素早く立ち上がると敬礼し「どうぞ」と自分の前の席に宗像を導びくと

「聞いてます。粉川くんですよね」

海軍に坊主頭はあまりいない、それは昔からだ。海自でもそうだが宗像は角刈りの角が切り立つような硬い髪型
相手する間宮は襟足こそ短く借り上げてはいるが、全体はウエットな雰囲気の七三分け

どこか不似合いな二人だが、珍事件に対する感想は同じで、顔を見合わせると声はなくとも笑う
昨日の珍事件。本庁出向組の粉川一尉佐世保の立神バースにて寒中水泳ス，はすでに基地の中では知らぬ者はいないだろうと言う話になっていた
間宮は自分の隣に座っていた和田にコーヒーを頼むと、イタズラっぽく顔を歪めて

「冗談だと思ってましたが」
席を立つ和田に軽めの挨拶をしながら宗像も大笑いしそうで笑いの

痙攣を抑えた頬のまま
「私も冗談だと思っとったよ。近年まれにみる珍事でねぇ、粉川くんは退屈を知らない男なんだと感心した」
怒るでなく感心したという宗像の台詞に、観葉植物の壁越しに食事をしていた隊員達からも笑い声が聞こえる

昨日の夜に起こった事件を、朝、基地に着いて聞いた宗像はどういう事で？という疑問を持ち、連絡をくれた事務官に訪ねたのだが、彼も笑いをこらえるばかりで
「寒中水泳をなさったそうです」の一点張り
とりあえず司令として得体の知れない用件を放置する訳にもいかず、呼び出しをかけて珍事を真相を問いただそうと粉川を執務室に迎えたが
部屋に入る前からか？いつになく無愛想に引きつった顔の粉川に、本人の気まずさを理解して苦言はせず

「寒中水泳は、出来るだけ港ではやらないでくれ。若い者が真似しても困るのでな」
大笑いそうな顔でついテーブルの側に目を背け肩を小刻みに揺らしてしまった
司令の背に向かい

「了解です！！」
口をへの字に曲げた、くそ真面目な返事

「彼が退出するまで笑いを堪えるのが大変だったよ」
「わかりますよ」
話をしながらも顔が可笑しさで歪む宗像の姿に、おおよそ想像はつく粉川の顔を思い浮かべた間宮は同意の意味で笑みを見せると、トレーにコーヒーを乗せたて席に戻った和田を見た

彼も大笑いしたくちで困った顔をさらしながら

「本当に退屈させない人ですね」と二人のカップを無骨な指で失礼なく置くと、間宮の隣に座る

話題に対して一通りの笑いを零した宗像は、両手で渡された赤い飲み物に目線を写しながら
笑う事で軽くなったトーンを修正する咳払いの後

「その粉川くんなんだが、呼んだ時になぁ、休暇が欲しいと言われてね」

「今日？ですか？」

和田は二人の前にミルクと砂糖のケースを置くと、あまり感心しないという顔を見せた
何せ基地勤務だし粉川は本庁からの出向組でもある
宗像に申請しようが、本庁の許可がなければ本来急な休みなど取れないもの
話の内容に和田は周囲を気にしたが、宗像は一口啜ったカップを下ろすと

「休ませたよ。彼は長崎でも休むことなく『こんごう』に張り付きだっただろ？疲れてるからこそ奇異な行動もあるだろうし」

言い方はおかしかったが小さな息を落とすと
和田の目線の前、少しのミルクをコーヒーに足し

「なんだかね、思い詰めた顔をしていた」

「思い詰めた？」

最初に使ったミルクのトレーをそのまま間宮の側に推した宗像は呼び出した粉川の顔に、疲れを読み取っていた

短く刈り込んだ頭の粉川の額に、いつもなら現れる事のない亀裂
思い悩むとは無縁と考えていた粉川の顔に現れた苦悶。宗像はそれ
が気になり休暇を許可した

「とにかく急な休みの申請だし、基地の車両を貸すわけにはいかな
いのでね。私の車を貸そうと言ったら、走って行くと言われたよ」

基地司令として責任を負いつつ許した休暇に、出がけの足を基地か
ら出すわけにはいかない
それでも心ばかりつもりで車のキーを渡さそうとしたが、返った返
事にまたも笑った
相変わらずの体力馬鹿（たいりょくやろう）粉川の返事は、目に浮かぶものでみんなの顔
に笑みしか出ない

「じゃあ近場なんですね。気分転換に」

なんとも面白すぎる粉川の行動だが、間宮はどこに行くかは聞く気
がなかった。個人的に楽しみたい事もあるだろうし、プライベート
を詮索するのは苦手としていたから
だが、和田は本来なら本庁の許可がないまま休暇を得るのは特別な
借地であると当然の事を考え

「行く所がワカラナイままなのは問題なのでは？」
職務に忠実な言葉を発してしまった
「場所はわかっている。しかしそれ程近くもない、かな？」
そういうと目を佐世保港の側に移した
「ココがよく見える所だよ。東公園だ」

間宮は何かに気がついたように宗像の視線を追うと

「僕もしばらく行ってないですね。忙しいなんて言い訳ならないのに」
和田は粉川の行き先を不用意に聞いた事を恥じたように押し黙って海を見つめ
宗像はそこに眠る戦没者の事を思い描いていた

「私は年に何度か行くよ。掃除に、慰霊祭に…それに個人的に手を合わせに」

傷の額の下、宗像は湯気を浮かべるコーヒーを静かに見つめた
海上自衛隊佐世保基地の者なら、いや海自の者なら誰でもがしっいる大きな墓所。東公園
佐世保市東山にある東公園は天神山の裾のにある旧海軍の墓地だ
明治２４年に作られ、昭和の大戦最後まで国に殉じた者達の魂を供養している
春先などは桜の花も多く咲き、彼らが愛した花が優しく降り注ぐ場所だ

現在は東山公園と改名されるその場所は、海自の士官であるなら大なり小なり思うことはあるハズ
間宮もカップから手を放し、ニミッツパークの向こう高速道路の白い高架の桁を越えた向こうに見える山を見た

「そういえば粉川くんの御祖父は帝国海軍の軍艦乗りだったそうで、彼処にいらっしゃるのかも知れませんね」

間宮のつぶやきに宗像は頷きながら
「間宮くんの御祖父もそうじゃなかったか？ココにはいらっしゃらないのかね？」
「残念ながら、本人曰く生憎で祖父は戦後も生き延びまして、「生

き恥をさらしている」が口癖でした」

お互い顔を合わさず、東公園を探す目線のまま
「そうか、ご自分をお責めになったか…そんな事は…」
深く口をつぐむ宗像、言うのは野暮というものだ本物の戦争を戦った者達の心を語るなど、軽口をするのと同じぐらい恥ずかしい事
厳しい目が祈るように閉じられ、少しの沈黙が流れる

「粉川くん、墓参りで気持ちを改められるといいですね」

宗像の沈んだ表情に間宮は笑って見せた
「僕は来年の春に、必ず結果報告を持って訪れたいと思ってますから」

護衛艦『こんごう』のミサイル迎撃実験は年を越した2月末から3月の間、間宮に課された国防の使命
日本国を護るという大事な実験結果を持って花に添え、先人達を弔う事を口にした顔に宗像の顔も晴れ、力が戻る

「その時は私も一緒に行こう。報告をしに、素晴らしい報告をな！」

東公園、現在の東山公園は戦後どこでもそうであったように一度は荒廃の憂いを見るが、現在は多くの人が訪れ献花の絶えない美しい墓所である
梅雨から真夏の頃は緑の芽が優しく茂るが、今は冬に向かう季節で一部楓が赤を通り越した色を残している

日清、日露、上海、支那はおろか、陸上隊のビルマ方面、ニューギニアに海南島、太平洋戦終結までの間で散っていた多くの国防の徒がココに慰霊碑と共に祭られている
天神山は山頂部に菅原神社を持つ社の山でもあるため、古くは全体が霊場だったのではとも言われ、見せつける景観は悪くはない
山裾に広がる緑多い終の棲家に、粉川は息を切らして正面の煉瓦階段を上っていた

佐世保基地からココまでは１５キロ以上ある。しかも山の裾とはいえ台地に向かってを登る形になるので徒歩はおろか走って行くのもかなり苦しい道程だったが、粉川本人は走ることで自分の頭を悩ませ続け、眠りまでも妨げたものから遠ざかりたかった
艦魂達のすむ倉敷岸壁の前、卸売市場を曲がると国道３５号に入りひたすらに走った。横切る佐世保線を越え天神山に着いたのは昼を回るギリギリ前といったところだった

「衰えたかな…」

腕時計を確認しながら顔を上げる
ゆっくりと息を整えながら正門をくぐると最初に目に付くのは、慰霊祭式場として広く取られた芝生の広場と中程に立つ東郷平八郎の銅像
正門から左よりは、そのまま歩くと迂回しながら慰霊墓所を廻る事が出来る

首にかけたタオルで顔を拭い、おもむろに腰に着けたポーチから黒革の手帳を出した
この仕事、海自の艦に乗れる仕事を本庁から貰った時、三笠の元を尋ねその時に手渡されたものを見つめた
結局忘れたいから走ってきたのに事実確認をするような事になって

いるのに苦笑いを浮かべながら思いだしていた

いつもの午後、スタンウォークに続く窓から木漏れ日をいっぱいに入れた長官公室のイスに深く座った彼女は言った

「護衛艦の魂が、書かれている記述と似ていたら教えてくれ」それだけだった

粉川は高校の時に誓った事を思いだしていた

「いつか自分が護衛艦の魂と会えるようになるのなら、必ず三笠との絆を見つけてあげる」

だが、ココに来て思いどん詰まりになっていた

真実をはぐらかす影に、魂達自身が自分には打ち明けなかった人との邂逅があるという事実と、実は三笠が護衛艦の魂に会えていたのではという事は粉川にとって最大のショックだった

魂達が自分に隠し事をするのは日が浅い部外者である事から多少気持ちを静める事はできたが

三笠を信じて成長してきた粉川に、三笠が嘘をついているのではというのはバケツを被された頭をタコ殴りにされるような衝撃だった

「『はるな』司令は三笠様と会ったことがあるそうだ」

耳を疑う

『こんごう』から言葉として聞いただけだったが、彼女の性格からして嘘や妄言を語るとは思えなかった

そう聞かされても三笠が自分に言わなかった事があるなどとも考えたくもなかった

粉川は手帳を開くと規則正しいストライドで左側の道を上がっていった

飛ぶようなステップで最初の階段を上がると白い軽石のようになっ

た御影石の光沢のない慰霊碑に目をやった
正面から並ぶ縦長の墓石を順番に手帳と一緒に見合わせて行く「軍艦常盤受難者之碑」隣に「軍艦松島受難者之碑」そして「軍艦初瀬戦死下士卒之碑」とある
もっとも三笠が大日本帝国に重宝され働いた時代を共にする軍艦達と総員の慰霊碑の前で一度深くお辞儀をすると記述に目をやった

粉川に三笠が手渡した手帳の中身は、現代人いや魂を見られない人からしたら奇異な書だった

黒革の手帳に綴られるもの、それは大日本帝国海軍を生きた魂達の記録の書

三笠はこの手帳の存在について詳しい事を教えてくれなかった
この手帳を誰に貰ったのかも、誰がこれを書いたのかも
唯一教えてくれたのは、戦後三笠が名誉を回復された時に机に置かれていた。それだけだった

古びた黄色の紙を開く、乾燥してかさつく音を指で押さえながらゆっくり項目を探す
流れる筆記体、英語の横文字は、複数の文体を持っていて少なくとも3人ほどの手によって編纂されたと思われる
所々を継ぎ足しした紙が切り貼りされ、情報が一新されるたびに書き直されている箇所からもわかる

帝国海軍の歴史は明治初期に始まり昭和の初期に終わるのだから、その当時海軍に在籍し艦艇の近くの仕事を徒事した者で艦魂を見る事のできた人物達が作った物という事は直ぐにわかる
それ程に緻密に綴られている

だが艦魂を見られる者は少ないという事実を見るに、もっと必要な書き込みがあっても良いのではと考えてしまうほどに手帳の記述は簡素な書き留め程度

佐世保に来るまでの間でも何度も読み返したが、艦魂のなんたるか？という核心に迫った記述は一切ない
粉川自身が初見で感じた感想は当時の艦魂の履歴書程度という程にただ太平洋戦に続く記述に入るとそれなりの事柄が書かれていたりもする

それでも艦魂が何？とうものを扱った記述はない

今更真新しい記述を期待していた訳ではないが、落ち着けない自分の気持ちのために何度も見返す

表ページから向こう年号を丁寧に割った表があり、そこに並ぶ名前から読み進み、中盤から以降には艦艇名それ以外と項目分けされたページ
裏表紙に近い部分はさらに細かくかき分けられた要項、全てが横文字で書かれており目を凝らし、顔を近づけて見ないと筆記体を見間違いしてしまいそうで難ありな書

「あった…軍艦松島。目は青、髪は白銀色、白雪の妖精のごとく美しい人なり」

足を止めた慰霊碑の名と見比べる
日清日露の年割りから最初の頃に書かれた艦魂の姿
その下に指を滑らす
橋立、高校の時大切な友達だったと語った厳島

「目は青、髪は白銀色、小さき妖精。とても快活なり」

そして軍艦の名と簡素な経歴、同じく簡素に現された容姿が年表の合間に書かれているのを読んで行く

「軍艦初瀬。目は青、髪は金色、快活な君。頭脳明晰、とても元気なり」

手帳を片手にしながらも歩を進ませる

軍艦受難者の慰霊碑に混ざり、将兵の墓も建てられている

「まだ沈まぬや定遠は」の三浦虎次郎、旅順口閉塞作戦で戦死した杉野孫七などの墓石が並ぶ間を歩く

多くの記録が簡単に書き殴られている中、手早く回したま行のところで手は止まり、粉川は頭を掻きむしった

ま行から流れ、みの項目に入りの頭に書かれているハズの艦艇軍艦三笠のページは真っ白にされているという事に

初めてこれを見た時、三笠も自分の経歴を書いたプライベートをのぞき見されるのがイヤなんだろう程度に考えていた

気にしなかった

なぜなら、三笠は何時だって会える人だから、何時だってその時の歴史を自分に教えてくれるだろうと信じていた

「どうしてさ…どうして…」

三笠の見せない部分が頭の中で大きな不安になり始めていた

同時にココまでの間で学んだ彼女達艦魂の事が、かつて三笠と粉川の間にあった価値観の差を如実に現していた

三笠は何時だって自分の背を叩いてくれた大切な魂(ひと)ではあるが、自分たち「人」とは違う価値観をしっかり持っていたのを知らしめた事件が脳裏をよぎる
『ちょうかい』の語った人生とは違う艦生観よりも、『むらさめ』の濁して見せた背中よりも先に

あの日、あの夕日を差し込んだ記念艦三笠の長官公室での出来事。
忘れていた、いや忘れたかった記憶が脳を突く
あの時に味わった苦い思いが蘇り、頭を擡げ呻くように零した

「三笠…どうして君はいつも遠いんだ…」

粉川は木陰のある石畳に崩れるように座り込んだ

初恋の人は三笠だった
高校生になった頃、心も体も大人へと変わっていく時期に自分を支え続けてくれた三笠に恋をした事に気がついた
小学校低学年の時、母を失った。それ以降の自分を育ててくれた人である事を考えれば、母親代わりだった人に恋するなど非常識にも取られ兼ねないが、彼女は特別だった変わらず永久に美しい時の姿をもつ最愛の人

烏の濡れ羽色の髪、湖水の美しさをたたえる青い瞳
口は悪いし、独特の話し方をする威張りんぼ
でも彼女しか見えなくなっていた

立ち上がった思いに任せて学校から帰りその足で三笠の元、長官公室に入った粉川は告白した
軍装ではなく、身体のラインを見せるぴったりとした黒のシャツワンピースにベージュのフレアスカートを合わせ長い脚を組んだ彼女は古いイスに深く腰掛け、突然愛を告げられたものの顔は微動もしなかったが、青い目が自分の前で顔を真っ赤にする相手をじっくりと睨め付けした後の言葉に粉川は気が動転した

「つまり、妾と情交したい。そういう事か？」
古い言葉を意図的に使っているのかはわからなかったが、テーブルに手を叩きつけて粉川は首を振った

「違うよ！！僕と…その…付き合ってよ。君が好きなんだ」

まだ１６歳だった少年粉川には一生懸命の言葉だった
母の変わりだった人が今日から恋人に変わると信じていた

「そうか、妾も嫌いではないが、どうしたらいい？」
変な質問だった。ぱっちりと開いた瞳が長い睫毛の下で動く、言わんとする事が理解出来なかった
「だから、僕と付き合って。僕は死ぬまで君の側にいたいんだ」
「それがお前の人生か？」
赤の別珍でコートされたイス、肘掛けに頭を擡げ頬杖をつく三笠

人生？初めての恋に目を覚ましたばかりの少年には良い響きには聞こえなかったが答えた

「そうだよ、それでいいんだ。僕、記念館三笠にずっといられるように財団の仕事につこうと思うんだ」
「つまらんな」

瞼を少し下げた目は少年の熱くなった想いに否定的な返事をすると

「そんな老後の楽しみみたいな仕事なんぞせず、もっと日本国の役に立つ事をしながら、たまに妾の所にこれば良いだろう。どうせ妾はココから動けぬ身だ、どこにも逃げわしない」

と煙たそうに手を振って見せた

「そんなのイヤだよ!!ずっと一緒にいたいんだ!」

「ヤメヤメ、何をそんなに焦っている?…要は大人になりたいという事か?人的にいう?」

目を輝かせ自分の強い決意を告げる粉川に、三笠の目はどこか湿った影を浮かばせると、立ち上がり、両手を開いて

「安心出来ないなら、するか?妾と、幸いにして愛はあるから筆下ろしぐらいはしてやれるぞ」

突然の発言にいきり立っていた粉川の足がすくんだ

高校生にもなれば三笠の言っている事が何かはわかる、でもそれは順序があって…

「まってよ、そんなの順番ってのがあって」

目が泳ぐ、前に立つ三笠のそれなりに豊かな胸に鼓動が早くなる

「一緒だろ?色気づいたな小僧。最終的にそれをしたいのなら今しても一緒だ。それに愛があればそんな事は「誰とだって」できる」

「何それ!!誰とだってなんておかしいよ!!」

急に目の前にいる三笠の姿が霞んでしまった。愛する人には清らかでいて欲しいという思いを粉砕する言葉だった

清らかで自分とだけ、そういう関係を持って欲しいという少年の欲

望が声を荒げていた

「愛があるなら他の人となんて出来ないでしょ!!誰とでもなんておかしいよ!!」

後ずさりする粉川に三笠は胸のボタンを外して白い肌を少しだけ見せた

「小僧、私達が何のために女の形を持っているかわかってないな、愛で人を抱くためにだ。幸いにして妾はお前に少なからず愛を持っているから、お前の希望を叶えてやろうかと?そう言っているんだ」

「イヤだよ!!」

まだ純愛が全てで、恋に片足を踏み入れたばかりの少年には三笠の言っている事を理解する事は出来なかった

激しい憤りで自分に歩を進める三笠に向かってテーブルを蹴倒し

「じゃあ!!そういう事したいって言ったら…したってこと?誰とでもしたってこと?冗談でしょ」

倒されたテーブルて距離を置いた三笠の目は髪の下に隠れていたはだけていた胸元を隠すと背中を向けて

「その「時」に必要な愛であれば誰とでもする。妾達はそういう生き物なのだ」

「やめてよ!!そんな事言わないで!!」

悲鳴だった

初めての恋、愛したいと想った人の酷すぎる言葉の前に粉川は駆けだしていた

その背中に三笠は何かを告げていたが

「やめろ！！」

慰めにもならない声を振り切って三笠の前から逃げた、夏の日の少年粉川

「三笠…」

眠れなかった夜、走り着いた東公園の石畳に腰を降ろしていた粉川は記憶の海をうたた寝していた所から目を覚ました
慌てて時計を見たが、時間にして5分たらずの事に溜息を落とした

あの日のショックを忘れたことはなかったが、思い出したいと考えた事もなかったが
結局三笠を失う事の出来なかった粉川は三ヶ月後に彼女の元を尋ねて、曖昧なうちに和解していた
変われない彼女の変わらない日常に、二人して酒飲みの仲間にまでなったが、ついに一線を越えることは出来なかった

いつしか自分は彼女の身の丈を越し、年を重ね大人になり
愛する妻を得て、子供を得て…
そしていずれ死ぬ、変わらない彼女にお別れをするという「人」の道を普通に歩んでいた

「わからないよ…三笠、君の望みは何？本当はどうしたいのさ？」

短い髪を何度もかき回すと立ち上がり歩を進めた
見回す限りに見える慰霊碑、ココに静かに眠る者達の前で頭を悩ま

すのは失礼に思え
立ち上がると目の前にあった慰霊碑に頭を下げた
「すいません、すいません」

情けない今の自分を見たら、先人に申し訳ないという思いで目にする全ての慰霊碑に頭を下げていった
小さな階段を上った先は奥入る小道があり左に折れる
外の世界と墓所を隔てる樹木の壁の前に、帝国海軍末期の慰霊碑達が並ぶ
突き当たりの一番前に見える慰霊碑。黒の大理石を台座に金字で大きく「榛名」と書かれている。前に並ぶ送り火の登楼二つと捧げの花受けには真新しい白い花が置かれ
魂とともに海に沈んだ将兵の名は一段掘り下げられた枠の中にびっしりと書かれている
同じ通りには戦艦霧島の慰霊碑と墓碑が設置されている
横の金字彫りだった榛名とは違い、白の御影中細の石は縦長につくられ、真っ直ぐ一文字に「戦艦霧島」と書かれている
墓の台座に花受けに刺しきれなかった花束が置かれる

どちらの名前も現在の護衛艦に受け継がれたものだ
落ち着けた心で背筋を正しお辞儀をした後、手を合わせる

戦艦霧島。故郷日本を離れたソロモン諸島の海に沈んだ
勇名では帝国海軍唯一艦砲戦を渡り合った艦と言われるが、それがどんな恐ろしい事だったかを今を生きる者には理解が出来ない
まるで武勇伝のように語られるが、魂の彼女は５０発以上もの弾を食らい絶命している
当然その艦に携わった将兵が無傷でいられない矢玉の下で、自分の上を働いた友といえる人達が砕かれるさまの中、はじき出された臓物の異臭と視界を染める赤い霧の中で、彼女はどんな思いで死んだ

のか？

「安らかに」

きつく手を合わせただ祈る
粉川は頭を上げると手帳の項目を見た

「軍艦霧島。目は茶、髪は黒、口数少なく寡黙な所多し、花を愛で手先器用なり」

簡素に書かれた魂達の記録
「軍艦榛名。目は黒、髪は黒、料理好きで人当たりよし、心強く初志貫徹の人なり」

ふたたび歩き出し天を刺すように立つ尖塔型の慰霊碑、上海事変の塔に手を合わせ
さらに深い道を歩いてゆく
２４駆逐艦隊と２７駆逐艦達の慰霊碑に手をあわせる
２４駆から「涼月」「山風」「海風」「江風」２７駆から「有明」「夕暮」「白露」「時雨」
帝国海軍を地力として働いた駆逐艦達の記録を読む、昭和１５年にあった柔術の成績が小さく書かれているのを見る

足を進ませる「鳥海」「妙高」そして
大東亜慰霊塔の真横に構えた大理石の慰霊碑に当たる
石段を模した台座の上に立てられた黒の大理石、達筆な草書で書かれ彫り抜かれた文字、金字に輝く金剛

「『こんごう』、軍艦金剛、超弩級巡洋戦艦１９１２年進水…」

もっとも馴染みのある名前に目の前にして手を合わせた
苦難の演習を共に駆け抜けた『こんごう』、彼女が誕生の時に望まれたのは先代金剛の魂を引き継いで産まれる事だった
ページを弾き、か行の中では戦艦の扱いで大きく書かれたその船の歴史と姿を見た

「目は青、髪は金、気性はなはだ激しいが任務重責を良く背負い推して前を進む者…そっくりだよ君は…『こんごう』」

魂達が望んだ魂である。大戦を３０年を戦った者の性格を書いた記述に粉川は苦笑いした
修練に置いて右に出る者なし、帝国海軍の多くの者達を鍛えた主、下段に書かれる当時の魂を現す文章はそのまま今の『こんごう』に当てはまる部分が多くあることに顔が緩む

全てではなく注文をするならば、まだ上に立つ者としての覚悟が仮初めの平和の中で生きる若い『こんごう』にはなく、太平洋戦の時にはすでに老朽艦と言われたであろう中、乱戦の海を走った金剛にはあったという事

簡素に書かれた讃辞を含む感想からはそれは痛いほどに感じられた。最後の夏に向かう冬の海に沈んだ荒ぶる魂は、成長すればきっと現代の『こんごう』と重なる気がした。粉川は個人的にだが確信をしていた

激痛と血反吐の中で決して負けなかった彼女の姿を目の前で見たのだからこそ、司令職の艦となるその時には彼女がきっとかつての金剛の姿に重なる時はくる、そう思えたが

「でも、成長によって姿を重ねる事を「魂の引き継ぎ」とは…言わ

ないんだろうな…君達を見つめ続けた人は、君たちに何を思っていたのかな…」

三笠の事も『こんごう』達の事もまだ混乱の中にあった
ただの人である自分に、彼女達の求めるもの、三笠の求めるものを
探すのは本当は不可能なのかも知れないと顔を擡げる

手帳にはそれが何であるかを記していない
ただひたすらに、この国に寄り添い戦いの歴史を生き続けた魂達の…

粉川は突然理解した
身体に電気が走る思いで
何故この手帳が簡素に書かれているのかを、死んで行く彼女達の事
を思えばこそ辛すぎる記憶を克明に記すことが出来なかったのではないのかと

仮初めでも平和と言われる今を生きる自分でさえ、護る為の戦いとはいえ兵器として産まれた彼女達の想いを救済する術をもっていないならばあの大きな、国民全てが戦争に向かわざる得なかった時代の魂達はどんな思いを持っていたのか?
いつ死を賜るかわからない海の上で、二度と浮かぶことのない暗闇の海に藻くずとなって消える艦の魂は
共に生き共に戦いの海を渡れども、彼女達は自分たちの事を標し、記憶に残してくれようとする「人」を愛し生き長らえさせたのかもしれない

そうして生かされた人、帝国海軍終焉の時までを書き続けた人の心は?

紙面を指が探る、今まで見落としていた記録に触れる

ペン先を滲ませた小さな跡…

「泣いたんですね…」

落とされた涙の跡

粉川は顔を背けた、自分涙で手帳を汚すことは出来なかった

「僕には出来ない…」

三笠の背負ってきた歴史と、彼女達の価値観
何もかもが大きな溝になっていた
魂と人には橋渡しが通用するような川が流れているのではなく、もっと巨大な溝があり
安直につなぎ合わせようなんて出来ないという事

それが出来たのならば、この手帳を書いた人のように泣く必要などなかったのでは?と

「いつかお前は後悔するかもしれない」

戦艦金剛の慰霊碑の前で粉川は涙した
無力な自分が、最愛の人だった三笠の為を思ってなどという言葉で
彼女達の絆を探し出せるなど夢物語なのだと
自分が妻を失ったとき、身を切られる思いを背負った。同じ日に息子を奪われ、心を千切られた

でも

「たかだか2人…僕は甘い…」

心に踏ん切りをつける言葉で粉川は自分の胸を打った
そう思わなければ前に進めないからと、痛む心を助けるように
三笠が失った姉妹達は百を越し、敗戦で首輪をかけられた者達を見
送らねばならなかった気持ちが、自分と同じ気持ちでいるなどは、
とんだ思い上がりに過ぎなかったと

「僕は…どうしたらいい？」

「助けてくださいませんか？」

真っ直ぐな姿勢のまま拳を振るわせ立ちすくむ粉川の耳に柔らかな
女の声が響いた

第七十五話　初恋の人（後書き）

カセイウラバナダイアル～～恋愛純度～～

前書きにも書いてるように恋愛に高い純度を持っている人にはドンドン向かなくなってきている艦魂物語です

ヒボシの書く艦魂は俗に言う「妹系」とか「ロリータ」はいません
意図的にそうしているのですが、未だにそういうキャラが艦魂であるというメッセを送ってくる方がいるのでココでハッキリと書いておきます

今後もそういうキャラが出てくる予定はありません、ごめんなさい
可愛くない艦魂で
でも艦魂を描く作品は小説家になろうだけでも５０以上ありますから、たくさん読んでください
貴方好みの可愛い女の子を出されている作家さんもたくさんいますから！！
ただ
ヒボシのところでは本当に諦めてください（てかもう許してやって下さいよｗｗｗ）

申し訳ないですが、ヒボシの作品では艦魂のセクシャリティーが、かなりヤバイです
今回の話の三笠様などを見ればわかると思いますが、そういう事です
人の持つ感覚とは違うからそうなっているんですが
初恋を大事にしたい人や、言い方は悪いのですが女の子という生き物に夢を持っている方にはドンドン向かなくなってきます

ヒボシは恋愛の経験が無いわけではないので（年寄りですしね（；；）ホロホロ）
色々そういう要素が入ってくるのよ～～～（もうゆるしてやって下さひよぉ）
ただ、三笠様のありかたが純粋でないとは思ってません
どれをとって純愛というのかは、これから先の話になりますからできれば読み進んでいって頂きたい

愛は難しい、実に千差万別で、頑張って書けたらいいなぁと思ってます
こうして自艦発砲率０％の戦記は続いて行くｗｗｗ

そして今回もダブルヘッダー
こちらもドンドンやばくなってきましたが、本伝とのシンクロを計るために頑張ってます～～～

前話は７１話から、どうぞ～～

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～　外伝の外伝　港の働娘

氷川丸に受け入れられた事で第２氷川丸の表情には色が戻ってきたそれまで痩せた骨のように疲れた顔、青白い肌を晒していた彼女は唯一の理解者である氷川丸の後ろをまるでヒヨコが母鳥の跡を追うようについて回った
ただ彼女は氷川丸より背が高い、なのでかなり滑稽な図ではあるが、心の大きさは身体の大きさに比例はしない
選んだで産まれた船なのに、日本につれてこられ寂しい思いや、肉

体的な苦痛の中にいた彼女には氷川丸は本当の意味で姉となっていた

「オランダ海軍にいたのに…日本に連れ去られて辛かったでしょ」

病院船になる事で中身の装飾のほとんどを取り外し、または破壊しスペースを作った氷川丸にとって変わらないのはプロムデッキの通りだけ
それだけが彼女が優雅な客船であった事のなごりだった
プロムの手すりに手をかけ、望郷の思いを話す

「でもオランダ海軍にいたときには、もう病院船をしてましたから…姉さんに会えるまではすごく辛かったけど、今は頑張ろうと思います」

氷川丸の
「生き抜いて客船に戻ろう」
という言葉が彼女の心を支える大きな柱になったのは誰の目にも明らかだった
肩をすぼめるように寄せ、氷川丸だけをたよりに歩く姿に他の船達からの迫害は無くなっていった

辛いのはみんな同じなんだと
ましてや母国を別としながら半ば強制的に日本のために働かされている彼女の身の上に鞭打つのはそもそもが心優しい船の魂達にはしたくもない事だった

だが
彼女の改装された姿を見るに、共に海をゆく事に対する恐怖はつきまとっていた
元がそこそこの大きさをもつ彼女に与えられた仕事は表向き「病院

船」だったが実は戦時下の物資の不足を補うために中身は大幅な改装を施された重油タンクがおかれそれ以外の製造に関わるあらゆるものが積み込まれるようになっていた

姿こそ、白鳥である氷川丸をまねた病院船だったのに腹にはどす黒い人の意志を抱え込んだ形として作り上げられていた

そも氷川丸は戦中以前から有名な客船だったからこそ船影を真似たというのもあるが、彼女にあたえられた任務は氷川丸のそれとは比べものにならない過酷なものばかりだった

昭和１９年１２月
年の瀬せまる頃、戦局は日本に対して逃げ場のないものとなっていた
二ヶ月前帝国海軍威信の旗艦戦艦武蔵がシブヤンにて沈み
本土に帰還途中だった戦艦金剛が一月前に、日本国領海と考えられていた台湾沖で撃沈された
刻々と削り取られる戦力
それでも負けを認められない日本国は船団を狩り出し物資の搬送に余念がなかった

だが１１月には多くの戦時旅団が沈められていた
１１月２日
能登丸がフィリピン・オルモックで揚陸作業をしていた所を強襲され沈没
そこからはもう3日と開けずに沈められて行く仲間達
香久丸
高津丸
客船であったのに海軍に軍艦として徴用された末に沈んだ神鷹事シャルンホルトス

１１月２０日以降では旅団全てが全滅するという非常事態が相次ぐ
１１月２２日
ロシアの客船だったアムールは日露戦争で拿捕されて以降を「天草丸」と改名し日本の船として年を重ねていた
少ないながらの第２氷川丸の理解者だったが、台湾高雄から物資の搬送をしていた所を魚雷に狙い撃たれ一分足らずで沈没
物資には砂糖に雑貨、なにより高雄からの脱出組の婦女子、に遭難船員など非戦闘員の多くがいたが一人も残らず死に至る

もはや日本近海でさえ安全な所は無くなっていた

その中を氷川丸と第２氷川丸も走っていた
多くのけが人を運ぶ病院船氷川丸も船倉には詰められるだけの物資を乗せ
第２氷川丸にはさらに過酷な物資と「死」を積んで走っていた

「帰るのよ！日本に！生きぬいて客船に戻るのよ！」

沈められて行く仲間達の事を思えば絵空事のような標語だったが、
二人を支えたのはその言葉だけだった
それしか光はなかった

果てしのない闇の海を二人は走り物資を運び
内地を求めながらも死に行く人のために氷川丸達は、もう一つの仕事をしていた
赤く燃える炎の前で

第七十六話　妾の命（前書き）

頭脳に響く頭痛が続く…
歳をとると風邪程度も命取り…タスケテー

第七十六話　妾の命

冬の木立、実りを失った木の枝が心を冷やす風を防ぐことなく粉川の頬を打った
目の前にある慰霊碑に目を見張る、荘厳にして硬い石の棺は空の器だ、もしかすれば中に宿る誰かの声がかけられているのかも?
とっさにそう思い揺れる風で木々囁くような優しい声を探す。姿勢を正しながら静かに目だけで

「戦艦金剛…貴女ですか?」

泣き言に雪崩打った足を、竹刀で叩かれたのように真っ直ぐにする手帳に書かれたままの金剛が目の前にいるのならだらしのない腰に強烈な一撃は待ったなしだろう、踵をきっちりと合わせ背筋に鋼を通すと
金字の向こう側に魂の輝きを見るために、風が囁く時間は寸間だった事で上がった呼吸を整え落ち着いた低いトーンで今一度問うた

「貴女は?ココにいるんですか?」

「はい、ココに…ちょっと…つまづいてしまって…」
「はい?」

目の前の立派な慰霊碑、性格は苛烈と書かれた戦艦金剛がつまづく?あまりの返事に粉川の声は高く曲がる
実は自分の読み零しがあったのか?慌てて手元の手帳を開くと、そこで我に返った

「あの?戦艦金剛さん、つまづくんですか?」

目を見開いた真顔で大理石の草書に聞く粉川の背中に、笑いを含んだ声が背中を押す

「ああっ、お兄さん！こっちこっちです！！」

さすがにそこまで叫ばれれば浮世離れした発想にどっぷり浸かっていた粉川にも気がつく
背中に向かってかけられた声に素早く向きを変えると、視線が固まった

戦艦金剛の慰霊碑は他の艦艇より一つ高台にある、そのため下からココに来るには斜めに伸びた階段を上る必要があった
その上がりの階段、頂上付近の石段のところに小さな手が動いている
それも懸命に助けを求めて揺れる
粉川は瞬時に走り、手の主の所に着いた

手を振っていた声の主は、白髪に小さな目を凝らして粉川に助けを求めると
愛嬌の良い笑顔で

「こけちゃいました」と、はにかんでいた
石段に座り込んで手を挙げていた者、それは小柄な身に水筒とその身には大きすぎる袋をぶら下げた老女だった
真っ白の神は短く纏め、笑いじわを延長したような顔の中に垂れた目を見せている

「大丈夫ですか！！」

戸惑うことなく救出のために手を伸ばし相手の身体を引き起こすと、力のある粉川はそのまま抱き上げた、まるで姫を抱っこするように

して
相手が年寄りで身体が弱っている事は一目瞭然だったし、どこか痛めてしまったのならば単純に立たせるだけという訳にもいかないという判断で、階段の下に転がった杖を片手で取ると

「転んだって言われましたけど、どこか痛い所は？とりあえず下に行きましょう」

有無を言わさぬ行動力の前、特に驚く様子もなく老女はただ「そうしてくださる」と頼むと満面の笑みで、駆けて行く粉川の顔を見つめた

粉川が向かったのは大東亜慰霊塔の下を降り、最初に見渡した芝生の広場の右側に作られている休憩所だった
正門から右に行くと車を寄せられるように、車両入り口がある老婆曰く孫が迎えに来てくれるそうで、しばらくの間ココにいることにした
何もする事がなく、自分の考えに行き詰まっていた粉川には突然のイベントだったが相手が老婆では語る言葉もなく、ただ「お孫さんがくるまでココにいましょう」と席を一緒にしていた
足腰の弱っている老人をただ救い出してココに放置するのはさすがに後味が悪いというもので、セカンドポーチに入れていたカロリーメイトを出し遅めの昼食を取ろうとした

ここは木製のベンチと案内看板の大きなものが壁に掲示されており並ぶように各々の慰霊碑、慰霊塔の祭事予定が書かれている

一見してもわかるように簡易的な作りのため壁なども白の吹きつけで作られており味気ない建物だ、真夏の時期は面前の異例広場の後ろに位置する事になり少しの日陰として提供される場所のため、大きなベンチはなく管理事務所が併設されているわけでもない場所は冬には隙間風が通る寂しいところでもある

「貴方、海軍さんでしょ」

壁に掛けられて慰霊祭の日程を読んでいた粉川の横にお茶を入れた紙コップ
おばあさんは絶えぬ笑顔のまま、味気ない食事を始めた粉川に自分が抱えてきた水筒から注いだお茶を差し出す
粉川は言葉につまった。突然そんな事を言われるのは如何にという気持ちで相手の顔を見返すばかりの姿をまるで気にもしない老婆は

「歩く姿もそうだったけど、とても姿勢の良い方だからきっとそうだと思ったのだけど…違ってた？」

姿勢…身に付いたものを見て取られたことに
自分の生活習慣も困ったものだと苦笑いしながらも返事に困った
今は海軍などいない、帝国海軍がなくなり現在は海上自衛隊という組織になった。そう言おうとしたが、お茶のカップを持つ老婆の顔に言えなかった
彼女の年齢がいくつかはわからなかったが、ひょっとしてあの戦争を知っているお年寄りならば正面から否定するのは失礼にも思えたからだ

「まあ、そうですね。佐世保基地からココをお参りにきました」
手に持った簡素な飯を下ろすと差し出されていたお茶を頂く

「まあ、鎮守府からお墓参りにいらっしゃったの」

これまた古い言葉の返事に粉川は参ったと頭を掻くと苦笑いして、
沈黙の時間は好きではない事から会話を楽しもうとした
素っ気ない糧秣をポーチにしまい込むと、老婆がどうぞベンチに広げたミカンを手して頂きますと一言、ついで

「そうですね、先人に手を合わせるのは今の海を護る僕達にとって当たり前の事ですし」老婆自身も広げたミカンの皮を剥き、キレイに糸をとりながら自分の予想が当たった事に微笑むと
「そうでしょう、そうでしょう、それでね貴方何か探してらっしゃると思ったのよ」
「僕がですか？」
「ええ」

昼前から慰霊碑の間をアチコチと動き回っている粉川を見つけた老婆の目は「何かを探している」ように写ったという事だ
もちろん粉川は自分のどん詰まりの思いを胡散しに最初は走ってココに来たのだが、言われてみれば結局手帳片手に「何かを探していた」形にはなっていた
自分の心を見透かされたようで頭を掻く粉川の前で

「ほら。黒い手帳片手にしてらっしゃたでしょ？どなたかお探しの方がいるの？」
目線が見るもの
腰のポーチには老婆の救出のために急ぎで突っ込まれた黒革の手帳が顔を出していた
粉川はなるほどと思った
ただ慰霊碑の間を歩き回っているのなら、不心得にも慰霊碑に罰当たりな事をする「平和主義者」に見えたかもしれない

だが、捜し物を確認するために開いては歩き、歩いては止まりをする姿なら完全に探求者だ

答えを待つ顔は沈黙に絶えられないのか

「それでねぇ、私ここには詳しいんで教えてさし上げようと思ってね」

「すいません、コレですね」

興味深く見ている彼女の目の前に手帳を開いて見せた

「細かく書かれているので見るのが大変でして」

開かれた黄ばんだ手帳の文字に老婆は細く小さくなった目をさらに細く、紙を透かすかのように遠ざかったり近づいたりして見つめると

「あれ、ずいぶんと細かい字ねぇ。日本語じゃないのね」

「ええ、英語ですから自分も迷いまして」

そういうと目をつむって笑い、自分が粉川にしてあげようとした事を話した

姿勢正しいながらも、忙しなく歩く後ろを彼女は懸命に案内をしてあげようとついて回っていたと

「何度かお呼びしたんですけど、貴方真剣に探していらっしゃるのか止まってくださらないしね。とても足早く行ってしまうので私も頑張ってみましたらね」

結果あの階段で転んだと笑った

「すいません、声までかけて頂いてたのに気がつかなくて」
どちらかと言えば、他者に対して気遣いはしてきている粉川
まさか自分が艦魂達の疑惑に没頭するあまり、杖をついてまで自分を追った老婆の声に耳が反応しないかったなどとは絶える事なく笑顔を見せる老婆の手前で本気で恥ずかしくなり、唇を軽く噛む

「いいえぇ、そんなこと、それよりも貴方の探してた方、金剛に乗っておられましたの？」

申し訳ないと頭を下げる粉川に皺の波に浮かぶ優しい目が尋ねた
「いや、それは」そこまで言いかけて粉川は口を閉ざした
下手に違いますと言えば、この物腰優しい老婆は一緒に探しましょうと立ち上がりそうで、一度階段で転ばせてしまった相手を引き回すのはたとえ自分が背負ってでもするべき事じゃないと考えると額を叩いて決めると

「確認は終わりました」
先に見せた手帳を軽く振ってみせた
「あら、そうですの」
丁寧な口調の老婆は見開くように目を手帳にあてた後、首をふった

「私のね、兄（あに）さんは横須賀海兵団軍楽隊から分遣隊に入りましてね。呉鎮守府に勤めておったのですよ。呉の港の中でねぇ、戦艦金剛で音楽会をなさって、そのおかげで私も金剛さんに乗った事がありましてね」

そう言うと深く長い息を吐いて
「あの頃見知った方達の事を思ってねお参りに来るんですけど、金剛さんの慰霊碑は一番奥に有りますでしょ、年をとると行くのも大変であの始末です」

「そうでしたか、もっときちんと手を合わせるべきでした。申し訳ありません」
老婆の兄の友達、察するにやはりあの大戦をご存じの方の前、粉川は素直に頭を下げた
「いいえ、いいえ、ここに来てくださる事が大切。それで良いのですよ」

優しい笑顔を皺の顔の中につくり彼女は、少しの時間を会話しましょうと駄菓子のつまった手持ち袋を広げた

3日に一度はココを訪れていると語る。年を取り友達の多くも召された今の生活の中で、自分にも出来ることがあるだろうと、ココを訪れる若い世代を案内しているという

今は平和だ
それがこんなにも多くの人の死の後に訪れているという事を知って欲しい
そして今になって自分の御祖父を捜す方もいらっしゃるからこそ、迷わぬように案内し手を合わさせてあげたいのだと

頭の下がる話だった
粉川は自分の祖父を見たことが無かった。あの大戦後も生きていたという事は父親から聞いてはいたが、どこで何をしているのか?その後どんな生活を送ったのかもまるで知らなかったため、祖父の存在を確実し知ったの周忌法要の時が初めてだった

「あの人にはあの人の道がある。それを探して生きられた」
本家の名の入った黒の墓前を彩る花の前で父がそれだけを教えてくれた
「無くした戦友、部下達の残した家族に出来ることをしたい」その

言葉を実行し続けた士官だった祖父。ただそれのみを戦後の糧として生きた
誰に理解される事のない生涯を送って
自分もまた敵わぬ願いのために他の人には理解の得られぬ船の魂達の希望を探している、と
老婆の話を聞きながらも思いに呆ける粉川の横顔

彼女は相手の心を読んだかのように思わぬ事を聞いた

「貴方(あんた)さんは「舟魂さま（ふなだまりさま）」を知ってらっしゃいます？」
「えっ？」

突然の質問に間抜けな声と、頭に蘇った言葉
「そも我らは船魂(ふなだまり)と呼ばれる存在なり」
三笠と話しをした時にでた「艦魂」とはどういう存在なのかの船祖(せんそ)＊1的な呼称
振り返った自分の顔、驚きが顔が目線に出ている事を老婆には確認されていると判断した粉川は勤めて冷静に返した

「ええ、お話に聞く程度には存じております」

丁寧な返事を返すと。相づちを打つように老婆は頷き
「そうでしょう、今でも海には多くの方がいるし、海軍さんにもたくさんいらっしゃっるようですからね」
さらに驚く発言をした
あまりの驚愕を顔に出し続ければいくら年取った目とはいえ不信を読まれてしまう
今度は素早く切り返した

「おばあさんは会った事があるんですか?船に居着く神様に」と
無理にでも落ち着けた微笑み返しをしたがおかしな顔になっていた
のか、老婆は目を合わせた粉川の顔を見て急に吹き出してしまった
軽く手を叩くと

「あはは、舟魂さまは神様なんかじゃありませんよぉ」

皺の顔にさらに皺にして大笑いとまでいかないが口を押さえると
「貴方、舟魂さまを神様だとおもってらしたの?」
「違うんですか?」
どんだけのものが入っているのかと思える袋から甘納豆と栗をとり
だしながら、止まらない笑いの中で老婆はこたえた

「ぜんぜん、船に憑いていらっしゃる「女の人」ってだけで…ああ、
でも本当は神様だったのかもしれませんわねぇ。この国は八百万の
神の国ですもの、嫉妬したりケンカしたりする神様もそりゃたくさ
んいらっしゃいますからねぇ」
老婆愉快そうに続けた

「あの方達はとっても嫉妬深い生き物なんですよ、私の兄さんはそ
う見えたようです」
「見えた…船魂さまが見えたんですか?」
「ええ、ええ、見えたそうですよ。皆さんとてもキレイな方ばかり
で、人によっては女神様と呼ばれるのも仕方のない事みたいに言っ
てらっしゃいましたわ」

驚きの発見だった
現在では、おそらく自分しか見られないであろう魂の彼女達。それ
を当然当時も見ていた人がいるからこそ手帳の記録となって残って
いるのは理解していたが

まさか、実際に見ていた人に会うことができるなど、偶然とはいえ粉川の胸は高鳴った

「じゃあ、おばあさんも艦魂、いや船魂さまを見たことがあるって事ですか」

横並びだったベンチの中、思わず彼女の側に身体まで向けてしまう老婆は変わることない落ち着いた物腰で人差し指をあげると、困った顔を見せて

「だから、嫉妬深いと言ったでしょう。あの方達は女には姿を見せてはくれないんですのよ」

初めて知る事実だった
さらに続けられる老婆の話はとてもすばらしいものだった

彼女の出生が広島県呉市で、昭和１５年当時呉の尋常学校に通っていたといういわゆる戦中の生き字引のような存在だった
「それがねぇ、翌年には高等学校行く予定だったんですけど、ほれ戦争がね起こって、日本の全部学校が国民学校なんて名前代えられましてね。勉強するのは変わらないんですけどなじめないから…」
そんな小話を挟みながら彼女が子供の頃、眺めていた港町の話を聞いた
大戦の頃の魂達の姿と共に

呉は明治維新から向こうしばらくは何もなかった町だった。日本国が一丸となって進化続ける動きから取り残された江戸の風景を残していた所に一大事件が起こったのは
１８８６年の大日本帝国における重要軍港の１つ呉鎮守府開庁に端を発す

迫る列強の力に負けぬ国力を作ろうという力が簡素な田舎町に大きな軍港を作った
そこからの発展は凄まじいものだった機械工業の濁流が、人の生み出す細波以上なのはどこの世界でも一緒の事
あっというまに人口は倍以上、いや１０倍以上にふくれあがりいつしかこう呼ばれるようになった

「東洋一の兵器工場」

繁栄ぶりは司令官の屋形などに今でもなごりとして残っている
初期帝国海軍はイギリスを習い海軍を創設した。だから現在でもイギリス風の家屋が残っている
当時としても珍しいハーフテンバー方式で作られた司令官宅は金唐紙（きんからかみ）と呼ばれる浮き出し文様の装飾も美しい豪奢な内張の部屋を持っていた（戦後米軍に接収された時に白ペンキで塗りつぶされてしまい失われるが、返還された時に職人達が力を合わせて復旧、現在も見ることができます）

だが繁栄という光が強ければ、影も色濃く残った町でもある

太平洋戦末期には軍需工場の建ち並んだこの町は、度重なる米軍の空襲で多くの市民が殺された
広島に立ち上った日本破滅の爆炎を見たのもこの町だった

歴史の波間に揺れた町に育った老婆は、さらに本物の波の世界に生きた魂達のことを良く覚えていた
「あれはお祭りの頃のことでしてね」
呉を訪れる帝国海軍の艦艇達、皇紀２６００年の祭りの前後では各港で艦艇の公開も行われており
差し迫った戦争への荒雲を隠すように過密だった日の中でのことを、

彼女は丁寧に語っていった

「日本のどこもかしこもが皇紀２６００年祭と言ってね、騒がしくなってましたのよ。その頃ね、兄さんが軍楽隊の演奏会をするのでという事で、ついでに乗ってらっしゃる船が見せて貰える事になったんですわ」

その艦名は『浦風』
当時呉とその沖合には多くの駆逐艦達が集まっていたらしく彼女の兄は遠目からでもよく見える艦魂達を見ては、妹を片手に連れているというのに鼻の下を長くして、今は老婆になった彼女だが兄さんの顔に「男の人ってだらしない」と思ったおませぶり
それこそ聞く身の粉川が恐縮して照れるような事を「あの子は乳が大きい」とか「良い尻をしとる」と、兄さんは隠すことなく声に出して言い続けたという

「もうねぇ、よっほどキレイな方が多いんでしょうね。あっちだこっちだとそこら中に愛想笑いの手を振って、ついたと思ったらすぐに浦風ーって叫びながら走って行ってしまうの」
そこまで話してまた口を押さえて
「兄さんは何にも無いところで転げ回ってましたわ、きっと平手打ちを頂いたのだとおもうわ」
微笑ましい記憶、でも話の中に気になる事があった
最初の話で老婆は「船魂さまは女には見えないと言っていた事」
楽しげに記憶を辿る彼女に粉川は素直に質問した

「船魂さまは、おばあさんには見えなかったのでしょう…どうやって認識したんですか？」

見えなくてもわかる方法があるという事？

それは『むらさめ』が隠した人との邂逅にも似たものなのかという疑問
特殊な従方でもあるのかもしれないという思いの質問
自分の顔に、目の奥を除く程近づいた粉川の問いに

「兄さんの袖引いて説明してって。でも兄さんの言い方はアレでしょう、顔だの乳だのとそのうち私腹が立ってしまってね。私もまだ若かったし子供でしたからねぇ、自分だけ仲間はずれにされている事に癇癪を起こしてやったら」

なんとも子供らしい抗議の方法
連れてきた甲板の上で地団駄を踏む子供にはさしもの魂達もお手上げだったのか、上甲板に置いてある黒板に字をかくという方法で自分たちの容姿を教えてくれたそうだ

「浦風さんね、字が綺麗な方だったわ」
「それで姿が見えるようになったんですか?その間接的な何か合ったんですか?」

後一歩の疑問

自分に求められる質問に老婆は静かに目を細めると
宙を浮かぶチョークの姿に物怖じせずは聞いたそうだ。どうして私には姿を見せてくれないの?と

「どうしても見えませんでした。悲しくなってしまって泣きながら聞いたら、女には姿は見せられんと黒板に書かれましたわ」

そういうと口を閉じて少しの笑みを向ける
粉川は心苦しいと思いながらも後一歩のために質問を続けた

「見えないのではなく、女の人には見せられない？という事ですか？」

老婆は小さく首を振ると

「いいえ、後できちんと聞きましたらね、女は同族に当たるので彼女達がどうしたっても見せる事は出来ないのだそうで」

「同族…」

止まる粉川の頭の中にまたも三笠の言葉が蘇る
何故艦魂は女だけしかいないのか？どうしてなのか？という問いに返された言葉

「艦魂は女しかいない」「人に愛されるためだ」

「女は船である、魂のヒトガタを宿す器を持つ船」「その時に必要な愛」

混線する思い
確定されたのは彼女達は、間違いなく女しかいない種族であったという事
聞かされた事から自分にある問題を照らし合わせるが、曲がる口と同じく裏側を見ることは出来ないという苦悩、まだわからない事が多すぎる
真剣に話を聞き首をひねる粉川は彼女達の示す「人」というものが何かと問うた

「女には見えない…じゃあ「人」って言うのは？彼女達の言う「人」

ってものは何ですか？」
「男の人のことでしょうね」

そういうと小さな両手を振って、目の前、船魂さまの話にのめり込み背中を丸めている大の男に

「だから言ったでしょ、あの人達はとても嫉妬深い。自分に駆る者、乗る者は男で無くてはならないと」
「でも世の中には客船とかもいますよ。旅する人には女性客もたくさんいますし」

粉川は自分の疑問を埋めたいばかりに否定の質問をした。明らかにおかしな会話になっている事はわかっていた
普通の会話ではなくなっている二人の空間
外を走る天神山からの風の音が耳の中を廻る

「あら、客船だって運転するのは男の人でしょ。それに客船の歴史なんて船魂さまの歴史にしたらそんなに古いものじゃないんですよ」
「艦魂などという者は船の歴史からすれば１５０年」
老婆の言葉が三笠の言葉とシンクロした

歴史という流れがあるからこそ、それに合わせて人も進化した
１５０年、鋼鉄の船達が世界の海を走り始めたときに、客船という船達の歴史の幕も上がる
海運業者が大きく手を広げ豪華客船と銘打った船を造り出したのおおよそ１８３０年代
それ以前から船には歴史があった

「どんな形の船であっても荒海を駆るのは、何時だって男の仕事でしょ」

悩む粉川の顔に囁くように優しい声

だが聞く粉川には一瞬それは古い考え方なのでは？という疑問が浮かんでいた。でも言葉にはしなかった
なぜなら、それが長い船の歴史では当たり前の事だったからだ
女性の船長を否定するわけではない、だが荒海を越えた大航海時代にしても日本に迫った列強の船団にしてもみな男達の駆る船に彼女達生きてきた

言葉は蘇る、彼の人が教えた神話の二人を

「日本武尊（やまとたけるのみこと）と弟橘媛（おとたちばなひめ）」
荒海を渡る男である尊（みこと）を魂となって届けた女、弟橘媛

悠久の歴史が証明している事

「あの人達は神様じゃなくて、私達女と一緒、荒海を渡る旦那様支えて生きる」

「どうしてですか？どうして神ではないんですか？」
粉川は首を振って否定すると、冷たい風に叩かれる出入り口のガラス窓をみながら

「僕は知人から船魂さまの話を聞いていますが、元は日本武尊の妻弟橘媛であると教えられました。二人とも日本太古の神です。神様じゃないんですか？」

「あら、ずいぶんと学んでらっしゃるのね」

食ってかかるような粉川の問いの前、まるで驚く様子のない老婆
むしろその落ち着きは教職者であるかのようにも見える

本当ならば彼女のような年寄りの言うことは素直に聞くというのが
礼儀だろう
粉川にもその事はわかっていたが、ココまで深く入った話であるの
なら、自分の頭に掛かった靄の一つでも消せるのならばという思い
で突き進んでしまっている
探求心が行きすぎて無礼を行う事はどこにでもある事、老婆は若さ
というものを微笑ましく見ると

「だってあの人達が神様だったらみんな祈ったでしょう。あの戦争
の時に、この争いの海から帰られますようにって、でも違う、あの
人達は荒海を戦う覚悟の男達を支える者として一緒に生きていた。
だからかな船乗り達は弱々しい男なんかいないんだろうと思うの。
「船を護り一緒に生きて返ろう」と思えるためにもあの人達は美し
い女なんでしょうと、私はそう思うの」

魂の女…女の形を持つ魂の意味
神ではなく、人と同じように生きている

「妾（やつこ）の命を」と器の媛は、国作りの為に身を捧
御霊を頂し尊（みこと）は海を渡りて国を作る

「それにね、日本武尊にしても弟橘媛にしても、高祖なのっぺらな
神様なんて言われる以上に感情豊かな姿をもってらっしゃいますの
よ。夫を想い自らの命を差し出して海の道を示した媛はそう言って
る「燃え立つ炎の中にあった私を救った日を思いだして」と、自分
を火中から助けた人を想って海に身を投げたのよ。そして尊は彼女
を思って大泣きするの。「吾妻はや（我が妻よ）！！吾妻はや！！」

と、ただの男と女でしょ。神秘的な愛なんかじゃないでしょ、一生懸命な愛でしょう、違う?」

老婆がこんなに熱く愛を語るなんて、ともすれば引いてしまいそうな言葉だったが
粉川は素直に受け入れた

「はい…」

「だからあの人達のは海をゆく男達を愛してくれる。戻れるように、そして私達女は陸地で帰りを待つの、地を離れしばらくの間、夫を助ける海の妻である船魂さまと、自分の胸に戻る夫を」

艦魂は神ではない
粉川はわかっていた事に頷いた。だから悩み苦しむ、人と同じように優しすぎる心で、兵器として産まれた事に迷いを持ち…それでも人の側にいてくれるという事

丸めていた背中越しに拳を固める
諦めてはいけないと、駆る側の者として何か出来ることがあるハズだと、沈んでいた心を叩いた

三笠のいう「その時に必要な愛」というのはまだわからないが、今思えば三笠ほどの重鎮が軽はずみでそんな事を言ったわけではないと思えるし、愛が深いからこそ見せられない部分もあるのかもしれない
『むらさめ』が言うことを拒んだ事にも彼女達にとって重大な理由がある

人が簡単には入り込めない世界

「当然か」

当然の事、彼女達は簡単には人には見られないのだから、やたらに自分たちの領域に入ってくるものなんかいないのだから、どこまでを知らせて良いかのラインはまだワカラナイところにあるという事だからこそ自分の方にもっと忍耐が必要だと悩みの亀裂から額を解放した粉川の横顔を確認したように老婆は納得したように頷くと

「あら、孫が迎えに来ましたわ」と腰を上げた正面の入り口、休憩所から見ると左側から入った白の車は駐車場に入ると空気の壁にぶつかったように急に止まった

「あの子、まだ運転が下手なんですよ」

見ればわかる急ブレーキ。目を丸くして「怖いでしょ」という老婆に「ゆっくり走れば大丈夫ですよ」と苦笑いの笑みを返し、粉川は彼女の袋に広げてしまった駄菓子をしまうと、手に持って送るのを手伝った

外の日差しはだいぶんと海に向かって傾き出していた
会話は一時間足らずのものだったのに１３時に近づく佐世保の町には山間からの影が伸び始めていた
吹き付ける風で顔に掛かる白髪を払い

「風が冷たくなりましたねぇ」
変わらない柔らかな声に粉川は、はいと答えると

「今日は本当にありがとうございました。とても有益なお話を聞けたことに感謝します。…それで今更なんですがお名前を聞いていま

せんでした、申し訳ありません。お聞かせ願えますか？」

先を杖ついていた老婆は立ち止まった
「ああ、忘れてましたねぇ。私は滝川輝（たきかわてる）と言いますの」
風から自分を守るように歩く粉川に自己紹介をした滝川は、返事の
自己紹介をしようとする粉川の口を止めた

「私、一つだけお願いしたい事がありましたの、お頼みしてよろし
？」
「何でしょう、その出来ることならば」
駐車場で所定の場所に止まれず四苦八苦している孫の姿を横目に微
笑みの口は続けた
「ええ、とても簡単な事ですの、貴方の官姓を入れて私に敬礼して
くれませんか？」
「敬礼…ですか」

皺の間に浮かぶ真っ直ぐな目は、子供が兵隊さんを見ていた時のよ
うに純粋に輝いていた
「敬礼です、兄さんは出て行く時私に必ずしてくれたので」

昔の思い出
出征する兄は、どこか女にだらしなく魂の女の尻を追った人だった
と良いながらも、帰る約束の敬礼をしていった
粉川はわかりましたと頷くと小さな老婆滝川の前に踵合わせた

「海上自衛隊粉川一等海尉であります！」

慰霊碑の丘に響く滑舌良い挨拶
腕から手のひら甲、全てに鉄心を組み込んだかのような挙手
海軍特有の脇を締めた鋭角の姿に、滝川の目が潤む

彼女には重なって見えた
あの日、帰らずの海に出て行った兄の姿に

「ああ、心が娘の時に戻りました。ありがとう、これからも日本を
よろしくお頼みしますね」

市内に向かう細かな道を何度も立ち往生する車の中、滝川は離れて
行く公園を見つめていた
ここの景色もずいぶんとかわった
昔はもっと趣のある街道で公園までの道は緩やかな坂だった
石畳が広く続く道の端には木造二階建ての茶店が並び、慰霊祭をた
だしめやかにおわるでなく、現世（あらよ）の楽しみを伝える笛の音が道を緩
やかに楽しませたものだった
木立の街道を上がり慰霊に伏した日

戦後、結婚して佐世保に来た時に最初にしたのが東公園の草むしり
だった
誰もが敗戦を誰かのせいにしなくては前を向けなかった時代に、滝
川は兄達もそうだが争いの海にお供をした魂達をも弔おうと思い、
一人陽に焼けて奉仕を重ねた

「すこし、風をちょうだい」

ぎこちない運転を続ける必死の形相の孫娘に頼み、ウィンドーを開く
風を手で、指で楽しむように触れると

「阿賀野の…お夏婆様、貴女様が息子さんに託した手帳、お孫さん

に渡った手帳、しかと受け継がれておりましたわ。長生きはしてみるものですねぇ」
滝川は目をつむった
粉川がちらりと見せた黒革の手帳、ページの記述を思いだして
戦艦金剛のページに共に沈んだ僚艦として書かれていた魂の名前

「駆逐艦浦風　目は黒、神は黒、愛嬌良く、人の子供に興味あり」

秋風迫る黄色の輝きの海の上、兄の愛した船を尋ねた時、浮かぶチョークで遊んでくれた魂の女

「浦風さん、最後は兄さんを連れて行ってしまったけど貴女だから許せるわ。ううん、兄さんは貴女と一緒にいたいと言ったのよね。きっと…」

老いた目に少しの涙

「これからもきっと、貴女たちの歴史は引き継がれてゆくことでしょうね」と再び目を閉じた

粉川は走っていた
負けてたまるかと、息を挙げ肩を揺らすストライドの中で
自分が歴史的にみても遙かに若輩であるにもかかわらず、なんでもかんでもを一度に理解しようとした愚か者であった事を認めて

「まだまだ!!僕が学ばないでどおする!!」

大きく両手を挙げる

港から吹く波風を全身に浴びて叫んだ

「負けないぞ！！三笠！！負けないぞ！！魂の女達（ひと）！！」

１５キロの帰路をひたすらに爆走した

第七十六話　妾の命（後書き）

カセイウラバナダイアル～～神話～～

今回も色々と小難しい話しが…
てか！！粉川の手帳て何？って質問あったのですが…あれです3話に出てる手帳です
三笠様に会ったときにも開いたりしてます…が
あまりに曖昧に書いたので突然出てきた感はたしかに否めません
こういうのの書き方って難しいですねぇ、努力がたりませんでしたごめんなさいです

今回登場の滝川輝さん、滝川という名字は黒鉄先生の作品からのリスペクト
輝という名前は「片目の魔王」からｗｗｗ
外伝、水宮の后からの関係ある人の登場でした

少しずつ色々な角度で艦魂という存在を検証して、紐を解こうと躍起になってます
ところで日本書紀などは版判によって解釈の違う部分が多数見られます
それも現代になって解釈をかえられたものではなく
最初に書かれてから２００年後ぐらいに改訂されたりしている箇所があったりです
日本書紀は国家の歴史書という意味では一級の資料とは言い難いのですが
読み解きをするのは実に楽しい作業です（ただ年と共に目にきたり、頭痛になったりで、あの原文を音読する事でなんとか頑張ってます）

＊1　船祖　先代旧事紀（せんだいくじき）の中にあるもので磐船の事
天孫降臨の絵でも描かれているけど神様は船に乗って彼の地（日本）に降り立ったと言われていて、その時に使った船が日本の船の祖先と言われる
それより古い時代である日本書紀には伊弉諾尊（いざなぎのみこと）伊弉冉尊（いざなみのみこと）の蛭子を流すというくだりで葦船が出てくるが、これを船祖とはいわないらしい
巻第一だけでも5回ほど船はでるがどれも船祖として描かれる事はない
とにかくそういう事で、知りたい人は勉強しよう！！

今回のおまけ～～
艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～　外伝の外伝　海の抱擁
実は以前、組合にいた頃の規格もので書いた作品ですが今回の話しの補則？というかなんとなくわかるかな的な感じで再録しましたでわ、どうぞ

救助活動、スマトラの地震で駆けつけた海の真ん中で艦魂『おおすみ』立ち尽くしていた
でこっぱちな額にたくさんの汗を浮かべながらも決して日陰にはいろうとはしなかった

真上にさしかかった太陽は目の前に広がる世界をきらめきの波、という乱反射の海にかえ
どこにいたって日陰なんかないのだから入るのは無駄というのもあったが

何もなくても『おおすみ』はココに着いてから毎日を外にて過ごしていた

大津波によって被害を被った隣国に派遣されてきた日から自分と共にやってきた陸自の隊員達は毎日入れ替わりで働いている
現地の様子はそうとうひどいらしく体調をくずしてしまう隊員も何人かいる

「無事で帰ってきて」

海上にいて船の魂である事だけが仕事
それしか出来ない『おおすみ』は働く隊員たちと同じ気持ちでいたいという思いからも朝から晩までをココに立ち尽くしている

「しかし、私ってホントにこんな事だけしか出来ないなんて…なんかなぁ」

その日夕暮れ時『おおすみ』は自分の甲板の上で一人でご飯を食べていた
ココに一緒に来ている『はまな』はキョジャッキー…
まあそれ以前に色々と事件があった事も手伝ってか3日一度は倒れている
さらに一緒にきた旗艦である『ひえい』は艦に引きこもったまま出てもこないという
女ばかりの派遣なのに華やかさのない日々で誰とも話ししないのは毒だった

「なんか疲れたな」
「どうして？」

その声はまだ振り向かない『おおすみ』の背中に勝手な自己紹介を始めた

「こんばんわ、私はマーシーよろしくね！」

ココにきてから何人かの海外艦魂にはあっていた
みんなその国の軍服姿で挨拶だけはしにきたり、しにいったり、とにかく忙しい被災地救助のため段取りを踏んで挨拶を交わせるのは、ほとんどいない
だからこんな夕方にくるのもいるのかとおもいながら口に含んでいたジュースの飲み込んで振り返った『おおすみ』は

「コスプレ？それ？」

開口一発目に変な事を口走ってしまった

目の前に立っている艦魂は・・・・・ナースのコスチュームを着ているのだ
白衣に白い制帽
真ん中に大きな赤字で赤十字のマーク
たとえるなら、どこぞのリップクリームのアイコンに付いているナースのようであり裾広がりのロングスカートがさらにそれさ加減を強調して見えた

「違いますよ！これ私の制服なんです！！」

目の玉かっぴらきで呆然としている『おおすみ』に人差し指をあげたマーシーは白すぎる肌の頬をふくらませて

「私病院船の魂なんです」と抗議した

「病院船…」
ちょっと落ち着いた『おおすみ』は自分の後方「人」の目では堪忍

しにくい距離に錨を降ろしている大きな船を見た
真っ白な船体に彼女の姿と同じような大きな赤十字のマーク

「だからナースなの？」
「そうですよ」

可愛らしい笑み
まさに弱った男達（特に男ばっかが弱るわけではないが戦場では男がメインだから）にとって自分の傷をいやしてくれる天使ともいえる看護婦姿に
作業青服の『おおすみ』は漠然としてたままポロリと本音をもらした

「いいなあんた「人」の役に立って…」

それは海に消えてゆく寂しげな太陽が心に募らせた思いを押したのかもしれない

『おおすみ』はマーシーと夜の少しの間、少しの会話をする事にした

「私は『おおすみ』っていうのだけど、何艦とかいわれると何かよくわからない船」

艦内から失敬してきたお菓子をおしげなくマーシーの前に広げた『おおすみ』はどこか自虐的な自己紹介をした

「？お仕事の内容がわからないって事？」

広げられた菓子袋の中、ポテチを見つけたマーシーは嬉しそうにほおばりながら不思議な顔で聞き返した

「わかんないよ。だって輸送艦ってだけで人運んで、車運んで、衣料品運んで…そんだけだよ」
「立派な仕事じゃないですか」

マーシーは速い手でお菓子を食べ続ける
「ごめんね夜勤明けで食べてないの、私お菓子大好きだから嬉しくって」

話も聞くがお菓子にも夢中
自分の船からもってきぺ〇シを『おおすみ』のカップにも注いで

「輸送艦が必要な物資を持って来てくれるから現地の人も助かるってもんじゃないですか」

注がれたペプ〇
いつもわフ〇ンタを飲んでいる『おおすみ』は口にはこびながら
つまらなそうな顔

「物資は持ってくるけど自分で何かしてるわけじゃないし、何かを護ってるってわけでもないし」
「船を護ってるでしょ？」
「もちろんそうだけど」

何も出来ない艦の魂、だが平時の時では特に艦体の中身である部分を護っている
心が取り乱す事でおもわぬ事故が起こってしまわぬように厳しく
その善し悪しは各艦艇の艦魂の様子でよくわかる

ココに来た４隻の中で今のところ何の支障もなく仕事をしているの

は『おおすみ』だけだった
『はまな』は疲労によって精神を途切れさせてしまわぬよう、なんとか眠るという作業に没頭する事で身を保たせ艦に事故が起こらないように努力しているし

『きりしま』はその目をいかし広範囲にわたる人命救助に忙しく今日もここにはいない

一方で旗艦の『ひえい』は最初の事件以来調子を悪くしているのか乗っている隊員も海上監視をしながら機関修理にと忙しく働いている様子を考えれば、日中も陽の下に立って艦を護っているし『おおすみ』は十分に仕事をしているとマーシーは言った

「でもさ、人を助けたいのに海に浮いてるだけって…なんかさ」

マーシーの励ましを聞けども今日の『おおすみ』は沈んでいた

「私はさ本当は空母に生まれるハズだったんだ、きっと」

「空母に生まれたかったの？」

どこか自分より幼いマーシー
姿形はどちらかと言えば『はまな』の年頃にも近くみえる

「生まれる時にそういうふうに騒がれたらしい。私の国はさ、マーシーの国に負けて以来戦争に関わる物が大嫌いでさ、戦艦とか空母とかは特に嫌われるんだ。だけど実際に国を護る仕事をする形ある名誉な名前だと私おもってんだ…だから」

「私の国だって戦争は大嫌いだよ！！」

まるで戦勝国は戦争が好きというニュアンスの発言にマーシーは眉をしかめて反論した
ちょっと起こった顔に『おおすみ』は自分の言葉が足らなかったと謝った
「ごめん、だけどとにかくそういう風潮があって私はこういう中途半端な船になっちまったんだ」

「中途半端？」
一言のあやまりにすぐに機嫌をなおしたマーシーは不思議そうな顔

「空母でもない、護衛艦でもない、なんだか国の護りとして役に立ってない感じの船だろ。ただものを運んでるだけなんだ」
「その言い方だと戦争が好きなのは『おおすみ』の方なのね」
感慨にふけっている横顔に
口いっぱいにポテチをほうばったマーシーは口笛を吹きながら

「戦う船の集団にいて、自分が戦わない形である事を惜しむなんて、戦いたいって言ってるみたいなものよ」

サファイアの瞳は相手に反抗を許さない輝きを持っていた
反論しようとした『おおすみ』の口をふさぐ仕草といい
やはり年上の艦魂である余裕を見せると

「私はね元々はタンカーに生まれる予定だったの」

自分のあり方に迷っている『おおすみ』にマーシーは優しく自分の生い立ちとその意義について話始めた

「船の仕事は基本どれも人を助ける事だよ」

指についたポテチの油を舌で舐めとりながら純白のナースであるマーシーは

『おおすみ』に肩を寄せると水平線に広く自分の写し身を広げた太陽を見つめながら

「タンカーとして生きていれば、人の生活を助ける物をいつも運んでいたと思うし、私はそういう自分を誇りにしていたとも思う」

『おおすみ』は小声で反論した

「だけどそれはただ運ぶだけでしょ、人に何かを」

「私達はいつだって人を助けたい、いつだって人と共にいたいだけど、人に直接何かをしてあげられる事なんか希にしかないでしょ、有って欲しくもないし」

それは艦魂を見られる人が少ない事を意味している

「だけど海という広い孤独人とを共有し、愛する国のために資源を届ける仕事だっと今でも思ってる。大切な生活を守るために運ぶという仕事は直接かかわらないけど、大きな仕事だと思うわ」

「でも君は病院船になって多くの人を助けている」

ただの輸送艦

『おおすみ』の心に残っている残念

国から愛されず

国の護りのために生まれたのにどこか中途半端な自分

だったら、空母として忌み嫌われながらも明確な護りの盾として生まれたかったという思い

「空母に生まれたら、貴女みたいな優しくて繊細で人にもっと色々としてあげたいと想っている艦魂はストレスで倒れちゃうわよ」

生い立ちの残念をぬぐいきれない『おおすみ』の肩を叩いてマーシーは自分の国の空母達の話をした
どれもこれもくせ者ぞろいだけど

「みんな自分から飛び立ってゆく人の事を想っていつも心配している、辛いのよ。無事に帰って来てといつも願ってる」

それは理解ができたのか『おおすみ』も頷いた
「私も、願ってる無事に帰って来てくれる事を」
被災地にいった者達の事を一日でも忘れたことはなかった

「そうよ、同じなの私達は各々の立場で仕事をするけど思いはいつも一緒よ。愛する人達が無事である事を願い、その想いを運ぶ、貴女の仕事は大事な仕事なのよ」

そう言いマーシーは続けた

「あなたの国にも空母に生まれたのにその役は果たさず復員の仕事をした姉がいたでしょ、彼女は戦う姿の自分より傷ついた日本の「人」達を海を渡って運べた事を誇りとしていたと私は思うよ」

マーシーの博学さに『おおすみ』は少し驚いたが彼女が自分より豊かな艦生をもっている事を認めつつ

「葛城姉さん…」

かつての帝国海軍との絆は、絶たれてしまっているのかもしれない

けど、その名は知っている
大戦に負けた後、出征し遠い異国の島に残された人達を南海の島々へと迎えに行った姉
空母として生まれたのに兵器のツバメを飛ばすことは一度もなく、広く大きな甲板に戦いに疲れただ故郷を望んだ人達を運んだ姉は

傷ついた日本人を少しでも速く祖国へと運ぶために寝る間も惜しんだフル回転の活躍をした
『おおすみ』は涙目になり
そんな肩を強く抱いてマーシーは続けた

「私達はね大きな意味でみんな空母なんだよ。「母」の想いを持っているのよ。海を渡る人達を愛してる。彼らも私達の事を愛してくれてる。私達が海を行くために心を使わす事は、ステキな仕事なのよ。人の生活を支える物資をはこぶ貴女の仕事は誉れある仕事だわ。きっとその想いに人は感謝してくれてるハズよ」

澄んだ夜空
たくさんの星が見える海の上で『おおすみ』とマーシーは朝がくるまで色々名話をした

朝方マーシーは袋いっぱいのお菓子をもらって喜びいっぱいの顔で自分の船に戻っていった
そして『おおすみ』は自分に向かって戻ってくるエルキャックの姿を見つけて手を振った

被災地救助の陸地勤務の部隊達
交代制で『おおすみ』に、自分にもどり体を休ませる人達の姿

それが全員無事である事を確認して

満面の笑顔で手を振って

「おかえり！！無事でありがとう！！」と

第七十七話　潮の香り（前書き）

片耳損壊、そういう日がやってくるとは思っていたが…困ったものだぁ

第七十七話　潮の香り

朝の修練が終わった倉敷の中庭、並ぶ街路樹も赤さびた葉を揺らす中艦魂達は各々姉妹や仲間達と寄宿舎へと戻ろうとしていた

他所基地では実施はされていないとされる朝の修練は佐世保オンリーの名物でもある
芦も高くあげ、けたたましい音もなんのその風を切るとはこの事
人が見られるものならば、かなり心を励ますものになる事だろう激走は彼女達の一つの任務である

冬が近づけばそれだけ身体を熱くする良い修行ともいえる中、抜群の力で真っ直ぐ走って行く『こんごう』の背を追ったＤＤ達
いつにもまして力強い走りは他の護衛艦達にも言葉はなくとも伝わる物なのか、『まきなみ』などは負けじの力走で終始後ろをついて走ったものの終わった時には目を回して倒れ、他のＤＤ達からの救護をされていた
もともと緩い性格の彼女の気持ちさえも押し上げるほどの影響力は『くらま』には好ましい変化に見え指示の請えも弾むという物だった

激走後の時間、終わってしまえば後は比較的自由を楽しめる魂達は各々の仲間や姉妹達と時間をすごしていた

その中の2人は今、恋の思案のまっただ中にいた

「がんばるのよ～～～『いかづち』～～」

煉瓦倉庫の一角立神の港が見える側の木陰で、雑誌片手にフラフラ

と浮遊しているピンクの物体『はるさめ』は豊かな実りの胸に茶色の髪までをトランスするように背中を丸めている妹に近づく
料理雑誌を握って真剣な眼差しでいる『いかづち』
本格的な冬に入ろうというこの時期に日陰を選んで談合する者は少ない中、激走を終えて早々と風呂を終えた二人は示し合わせてココに来ていた

「今回は最大のチャンスよ～～」

両手を樹木の飛来た枝のようにして指をピアノを弾くように動かす『はるさめ』、着替えた青服姿にTシャツ姿、胸のボタンは窮屈そうに歪む
『いかづち』は忙しなく目を動かし料理雑誌の冬特集を読む
「ボルシチ…シチュー…まさかただの鍋物ってわけにいかへんし、やっぱりカレーかな？いいや、ココはいっちょお酒にぴったり、季節の魚料理のほうがええかな？」

「カレーが良いよ」
頭を悩まし、跳ねっ返りの毛を手櫛でさらに混ぜ返す妹に『はるさめ』の半月お目々が笑みのまま発言する
「だってぇ、魚を仕入れたら『うずまき』（『うずしお』と『まきなみ』の事）にたかられるし～～後でうるさいし～～カレーの方が家庭的～～」
蹲って雑誌と睨めっこをしていた『いかづち』は立ち上がり手に力が入る、雑誌をヒネリ潰すと

「せやな、カレーで行くわ！！わて、頑張る！！」

癖毛頭に電撃を走らせるほど目をぱちりと開いた妹の姿に、グッドと揺れる『はるさめ』

「じゃあさっそく粉川さんさそってぇ～～」

笑顔の混乱誘発者と恋に一直線の『いかづち』、粉川をめぐる恋愛大作戦はココに開始された

「毒気は抜けたようだな」

国旗をひるがえした風の見える窓で、昨日とは一変した粉川の顔に宗像は、良しと頷いて見せた

広めに取られた階段を上がった角、白磁の色に少しのヒビをいれてはいるが、手入れの行き届いている

大きな声で話さなくても響く声の持ち主である宗像には少しばかり居心地が悪いのか、率先して部屋に向かう

粉川はその後ろをついて歩く

「昨日は無理を言って申し訳ありませんでした」

「いやあ、かまわんよ」

岩のようにざらついた面を持つ宗像は顎をさすりながら

「それにしても滝川の姿様に会ったとはね」

「驚きました、結構有名な方だったんですね」

朝食の時、粉川は滝川との出会いを宗像に言われ驚いていた

昨日は東公園からかなりのスピードで帰ると

着ていた青色のトレーニングウェアが濃紺に変色する程の汗、温度

を下げた空気の中で口から白い息を怪獣映画の熱吐息がごとく零し風呂に飛び込んだ
そこで一緒した隊員が、佐世保では有名になりすぎた名物男と話をしようと近づき少しの会話をしたところで「滝川の婆様」と呼ばれる彼女の話が出て
ココ佐世保基地では彼女が割と有名な老婆であった事を知ったのだ

彼女は特に東公園の管理組合と繋がりを持っているというわけではないが、もう何十年と草むしりや案内を続けており今でいうボランティアでの活動をし続けていた
佐世保基地からは毎年清掃活動や慰霊祭の式に合わせた音楽隊を派遣してもいる事もあるし、何よりかつて国を護ろうという志で命を落とされた先人を思う気持ちは大きい、個人的に参詣する者も少なくないことで滝川の婆様は隊員達の馴染みの顔になっていた

「かなりご高齢のハズだが、頭の下がる事だ。変わることなく公園に通ってくださる」
後ろ手で腰に手を組み前を歩きながら、昨日と同じ晴れた空ではあるが冷たい風は勢いをました中庭を眺める

「まったくです。良いお話を聞かせて頂け、気持ちを入れ替える事ができました」
入れ替わった気持ちを現すようにキレイに撫で躾た頭、昨日のように濁った亀裂はなく一掃された額、わかりやすい程の回復

「そりゃ良かった」

国家の防人達の持つ悩みは何時だって深い、なかなか気持ちを入れ替えるのは難しい事だが、あの大戦を知るご老人達に癒される事も多い

宗像は滝川の婆様にはいつも感謝していた。彼女はいつだってこうして隊員の心を支えてくれる

言えば国の楯という大義名分を持っているのだから、頑張らねばならぬと叫ぶこともできるが
それはあくまで補助的指標だ

本来なら自分の国を護るのは国家の責務にある事で、当然のことなのだからそんな大仰な題目を立てて隊員の尻を叩きたくのは不可思議な行為だ
だが平和ボケ過ぎる国と間延びした時間で目標意識を低下させている組織となった自衛隊には大げさでも、自分たちの背中に掛かっているものを意識させざる得ない状況がいる

基地司令という重責を持つ宗像には、隊員の心の陰りを「国家の盾として頑張れ」と叩いて鍛える事しか出来ないが、市民の側からの好意を受けるのは何よりも励みになるというもの
ただささやかに、今は平和な時であるけれどと語る老婆の言葉の方が心にしみるというものなのだ

「君を野放しにできる最後のチャンスだった事を思えば、本当に良い機会に恵まれたといえる」

宗像の硬く整えた髪、下に尖る目は粉川の休日に何かがあった事を如実にしめしていた
朝はさわやかに、そして時間が確実に流れ良いことも悪い事も廻ってくるという事を知らせた

粉川は立神バースに向かって歩いていた
昨日のように良く晴れてはいるが、風は格段に冷たくなっている
港に続く煉瓦の道、日差しの弱さを感じるあせた土気の壁、山間の
緑も乾燥してささくれ立った葉が目立つ

しっかりと着込んだ作業青服、すれ違う隊員達に敬礼を交わす
休暇を貰った事で顔から剣のとれた粉川だったが目は幾分もきつく
なっていた
朝、司令の宗像が自分を呼び出したのは何も自分の気疲れの回復を
見ようとしたわけではなかった
昨日、基地に戻った直後に本庁からの定時連絡が入っていた
置いていったパソコンの黒い単体に赤い光が走り「直通」である事
に嫌な予感はしていた

「海上保安庁が防衛庁にて正式な話し合いをとの督促あり」

鼻頭を指が押さえる、解消を得たのに再発しているであろう苛立ち
を押さえ込むために

「何が正式に話し合いだ。結局予算譲歩を直接訴えにくるって事だ
ろ」
事の始まりだった不審船事件
日本国を護る二つの組織の中では未解決のままで押し通したイージ
ス艦の予算
それを「譲った」という事にし、直接関わる自分たちに来年度以降
の有利な予算折衝をしたいというもくろみ

こういうものは基本政府が決める物だが、生産の割り振りで者を考

えると金が動く
そこから歪みが招じてこういう話が発生する、何年かに一度の割合で

そも国家防衛系の業種は極めて狭い世界で限られている
日本における防衛産業は言えば一品受注の工芸品的な要素が高いのだ
武器輸出三原則に従い多国間での共配がなく、大量生産が見込めない
いため受ける側のうま味はうすい
しかも率先して艦艇、戦車に航空機の建造に努力を示すことがなか
なか出来ないため、多くを武器をアメリカからのライセンス生産と
いう形に頼ることになる

開発の手間は省けるが、それらを持ってしても値段が下がるわけで
もない。結局身の内で全ての消費をしなくてはならないという事か
らも効率的でない
それでも国内の軍需産業の技術力維持のために毎年度予算が組まれ
る。やらなければ日進月歩の技術合戦からあっという間に置いてき
ぼりをくうから

情けのない事に、この国の軍需は戦前と変わらない物作りの精神、
いや精神であるのならまだしもの、いかんともしがたい状態なので
ある

こうなってくると数を揃えての受注をする海保は強い
組織的イメージというものもあるが、中型から小型船艇の予算が通
れば一度に１０何隻規模での更新が行われる
民生品の多くを受注の中に持つ海保の大量更新は民需の拡大になる
ため、多くの企業が大歓迎である。量販の物品を使える強みを最大
に活かす

このイメージに軍需はいつも煮え湯を飲まされていた

しかし今回はイレギュラーが招じて話がこじれた。大きな事件があったにもかかわらず防衛庁は先手を打ってイージス艦の予算を通してしまった事がだ
正確にはまだ決定ではないが来年度の盛り込みに成功した事からも八割方決まっている
ココは喜ばしいのだが、それで海保が黙っているわけがなかった

「イージス艦という大物予算を譲ったのだ」

だから他の部分での譲歩は当然であろう。と言うお門違いも甚だな意見書を提出してきたのだ
先手はかなり強引に予算の枠をへし折る勢いで入れられたものに違いない
防衛庁と他の企業、政府間でどんな駆け引きがあったのかはわからなかったが、大きかったのは現行の防衛庁長官である金実（かなみ）議員の押しがあった
彼女は防衛費削減を公約に挙げた議員であったがその考え方はかなり独自のシステマティクを展開させていた

「目を多く持つ事で他艦の仕事をカバーできるのならば、余分な物がより必要無くなるという事でしょう」

一艦万能というのはあり得ないし、運用から考えてもおかしい。イージス艦で全てがまかなえる訳ではないが、当座他艦を含め安全を買う大きなアドバンテージは可能という意味もあり予算の承認を後押ししてくれた事が決め手となった

コレに驚いたのは国土交通省内局
まさかの事態に後手を踏んだと騒然となる

事故調査委員会の設置後、まだ事件の判明の正否が行われる前に予算が通るという事に、さらに反発したのは海運局と関連企業
しかし大きな金が動いてしまった今、大事にしてしまえば本音では誰も望まない「国防不要論」に至ってしまう可能性や、マスコミの横槍を嫌い上からの言論統制が行われ

こうして「穏便な話し合い」のための親書が届けられるという形となる
半分は威しにまみれた親書の中身には防衛庁も憤然とし、当然粉川の頭にも怒りの火が立ち上っていた

だから海から吹き付ける寒さの刃である風に対しても上着をきる必要もない程に心が燃えていた
そう言わんばかりの大股行進でバースに着き、尖っていた目は点になった

「あれ？」
メインのバースである場所には『こんごう』『いかづち』『まきなみ』反対に『くらま』『はるさめ』
さらに離れて『いそゆき』『あさゆき』『あまくさ』

立神からは周りの岸壁や泊地も見渡せる
粉川は正面の橋から左に走り倉島の側に目を向ける
潜水艦の二隻と『せんだい』『おおよど』

少し離れたところに掃海艇の影が3隻

「…あれ？『しまかぜ』さんは？」
いつもならメインに必ずいる艦影がない
今日はあらためて『むらさめ』の濁したあの言葉の意味を教えて貰

おうと考えていた
耳の後ろを掻き、今一度周りを見回す

「てか…『むらさめ』ちゃんもいない…まさか」

今更な事だ、考えるまでもない、出港しているという事
年末が近づこうが、クリスマスが本番に入ろうが変わらない事がある
それは国防の勤め、これが日本国の年末に入る行事に寄って左右される事はない
実は事件の影響があって『こんごう』達と一緒に合同演習には出なかった『しまかぜ』だが、来年のミサイル迎撃実験を伴う環太平洋合同演習に出席予定の艦でもある

『むらさめ』が一緒に出ているのは、合同演習に出る同型艦である事からだ
実際は『あめ』姉妹で環太平洋合同演習に出席が決まっているのは『はるさめ』『きりさめ』『いかづち』の3隻
そのため外洋にて残りの『きりさめ』を加えて演習に入る

参加に対して足らなかった演習時間を加えるためにも、他艦との連携に遅れを取らないようにするためにも必要な日程であり…

「参ったな…重要参考人が（1人は違うけど）2人ともいないなんて」

頭を掻きつつ港をぶらつくき、けたたましい音と共に動くＳＳＫのクレーンを見上げる
その向こう側ではエセックスが出払っており
アメリカ海軍も忙しく動いている

「そういえば、あの空母もやっと出港だな」

晴れていても海からの猛気が乾くという事はない
水面に近づけば白く胡散する者達のせいばかりではないがココから
真正面とはいえ１０キロ弱離れた３５番錨地は見えない
湾を囲むさび色の山が輪郭を浮かばせるばかりで、あれほどの巨大
艦艇もごま粒ほどにも見えないという形だ
額に手を当てまぶしさの欠片を避け、目を凝らしながら

「ごくろうさんでした」と一言と軽めの敬礼

本来なら原子力空母は長くココに留まらないが今回の停泊は割と長
期なものだった
理由は演習に現れた中国の潜水艦の事もあったが、なにより近年の
東シナ海は騒がしいという事にアメリカがきつく着目している事の
現れともいえた
巨大な艦艇群がココを出港するのは2日後と決まった

「それにしても空母の魂のおねーさん…ちびっ子だったねぇ」
いないものは仕方ないが、基地を出ることは厳密にダメとなった粉
川が時間を過ごすことができる場所も限られている
そうなると倉敷の側に目が向く
目の前、鋼の鐘楼をそびえ立てる『こんごう』を見て

「…『こんごう』に聞く訳にはいかないだろうなぁ」

曇った脳裏には幾重にも掛かった問題があった
人の方では前序の防衛庁と海保の問題。魂達との付き合いの中で解
消されたいものの方が多い
てっとり早く『こんごう』に聞くというのも有りだが、マナーを守

りたかった
『むらさめ』程、白黒のハッキリとした性格をもってしても口ごもる事を
「誰だって知っている」というのに「禁忌」でもあると言われる人との邂逅をやたら聞いて回るのは彼女達の社会秩序を乱す事になりかねないし、大人の対応じゃない
何度かバースへの道と倉敷の側を見て行き来する

粉川は焦りが自分に上ってきている事を感じていた
喉の下に球体を膿むような、大きな声で問いただしたい事が多すぎて

粉川自身は「イージス艦機密漏洩」の問題で『こんごう』に張り付きの官なのだが、運悪くあの事件「不審船」の件にも一枚噛んでしまっている
やたらにマスコミが変な事を嗅ぎまわり、的はずれな報道にいかにもな顔をさらしたキャスターなんぞ並べられた日には、安全保障の問題にもなりかねない。故にいつ本庁の呼び出しが掛かるかわからない現状

頭を悩ます事
しかしながら脳は悩んでも、佐世保での仕事は無い粉川
結局立神から小走りをして倉敷の側に足を踏み入れていた

立神から向かうのなら、港内の交通船を使ったほうが近い距離なのだけど、フェリーターミナルを挟んでいる事もありよほどのことでなければ「走れ」が鉄則の自衛隊
一応移動用の自転車もあるにはあるが
昨日走り込み慣らした身体、勢いに任せた帰り道の負担が節に少しの鈍さを出している
鉛のつまった感覚と、節の奥に潜む鈍痛に嫌気が上る

「やっぱり衰えてるな」

足らない鍛錬はすぐに見破られる、自転車ではなく自分の足で走る事が大切と
苦い顔で指を鳴らし
足首を回すと、全身を柔らかくしていくついでにゆっくりと走り始って行った

佐世保基地のメインバースは基本顔役である司令艦『くらま』や『こんごう』に、ともに行動をし第一線で働く事になるＤＤが占める場所だ
そのせいもあって見晴らしもいい、佐世保港のＳＳＫのドックなどと並びを同じくしている米海軍の艦艇なども揃っているとかなり壮観な場所でもある

一方正面を陣取る立神から向かって左側、港を海から見る方で言えば右手のフェリー埠頭に隣接するのが倉敷岸壁である

港湾への出入り口付近には佐世保市中央卸売市場があり、佐世保駅の２番出口からアプローズラインなどでも結ばれている人の賑やかな所でもある
前日粉川が走った国道３５号に入る直通の道があり、それを間逆に折れると岸壁側に行く事が出来る
佐世保駅前から続く道の大きなマンションを越えると後はひたすらに住宅地の町
市場を越えると白壁と灰色屋根の湾港合同庁舎が見え、その先が海

上自衛隊佐世保警備隊の敷地となる

ここはＬ字に曲げたような囲みの港となっているため海自の小型艦隊や曳舟達などの多くが着けられている
外港に向かったメインの岸壁には『せんだい』『おおよど』達、立神からは見えなかったが、二隻より奥側に『さわぎり』がいる
後ろに列をつくり並びで背中を見せている潜水艦は『うずしお』と『なるしお』は端の突堤近くにいる
反対側に曲がった港内には掃海業務群の船が３列に並んで括られている
『すがしま』型の『うくしま』がちらりと見え、隣に海自の曳舟達が並ぶ

小走りで海風を浴び、体調を整え心地よく息を弾ませた粉川が艦艇の見えるところに着いたのは１４時ぐらいだった
入れ替わりで陸に上がる隊員達の姿を眺めながら進む粉川の目に最初に入った最初の魂は、Ｌ字の突堤の一番端で体育座りをしていた
遠目に見ると青い作業服がきゅっと積まれた青い布の固まりに見え、小さすぎる影から『こんごう』や『いかづち』と名を知った者ではなく、最初は『さわぎり』かと考えた

緩急を持って潮の味わいを吹き付ける水面は、自然のダイアを輝かせる
駐車場の車を避け粉川は膝を抱える艦魂に声をかけてみる事にした

今まで見知ったメンバーとの会話でどん詰まりになった考え
もちろん「問題のアレ」を構わず聞こうという考えはないが、知らない魂と話をする事で新しい何かに気が付けるのではという冒険心の方が強かった

「男は好奇心の生き物ですからね」
べとついていた頬を拭い、突堤に座り込む小さな艦魂に声をかけた

「こんにちわ」
背中にかけられた声に小さな固まりは飛び起きるように顔を起こすと、恐る恐る自分の後ろに立つ大男の側に顔を向けた

「あれ?前にあったよね?」

小動物が警戒のためにゆっくりと、しかし小刻みな震えをみせながら粉川を見つめる
まるで水を頭からかぶりカールの跳ねが無くなってしまったかのようにぺったいり目を覆い隠し鼻の頭あたりまで伸びた黒髪
後ろは肩で切りそろえているが、ともすれば身体の前後を間違えてしまうような姿の彼女は、うわずった声で

「シト…シィト…」
「人、でしょ?」
噛んでいるのが、滑りを失っているのか乾いた声は同時に粉川の顔を指差す

「…『なるしお』ちゃん?そうでしょう。横須賀で会った!」

粉川は思いだした
横須賀のフェスティバルに行ったとき、『しらね』の隣でポットを持ったまま自分から離れていった小さな生き物

合同演習の時、一応参加艦艇の名前は全部チェックしていたのだが、なにせあの嵐の演習『こんごう』憤死の戦いの中では思い出す事もできなかったし、彼女を始め一緒に演習に入った潜水艦『うずしお』

も一度もグループルームに来なかったため覚えは薄かった
だけど、この特徴な髪型は忘れようもないものだった。鼻柱にまでかかる髪、前髪のスキマから光る目

「怖がらないでよ、仲良くしようよ」
突堤の端から落ちてしまいそうな程に身をすくませている物体は固まったまま見ている
「ココに座っていい？少し話しない？」
本来はこういう小さな子を苦手とする粉川だったが、前を向こうの一環は強く心を動かしていた

彼女は身の丈は確かに１４０センチ台とマクロな形だが人とは違う、海自の艦艇の中でも事隠密行動をする彼女達の持つ知識や常識はそこらを歩く世代見立てだけが同世代と一緒には出来ないものだ
だから子供をあやすような話し方は勤めてせずに対等の者として話す事を心がけたが

ただやっぱの彼女は人が少しばかり怖いのか？イヤなのか距離がある
警戒心の強く固まった身体は波打ちの方に斜めに倒れているのまで見えたが、意を決したように
両の手をまるめで拳をつくると、目の前で腰を降ろしてしまった人に聞いた

「何…話すの？」
かすれを失ったウエットな響きは若さのある柔らかな声と、潮風に吹かれ前髪から覗くまん丸な目
キレイな二重で、黒目の中に波の反射が写した十字のラインが見える
知らなかった事、新発見、粉川は新しく彼女達の何かを知ることができるチャンスに気持ちを柔らかく肩を上下させ、リラックスしよ

うと見せると

「なんでも、色々話しようよ」

そう言うと曳舟達に渡す事で習慣的になっていたアメを差し出した

「お近づきに」と

「モテモテ…って？」

粉川は唖然とした顔で膝を抱える小動物『なるしお』の姿を見ていた

「そうモテモテ…」

膝を抱え、波に攫われそうな小声はもっか自分が直面している一番の問題を粉川に告げていた

人の存在については横須賀でも見ていたし『しらね』司令からも「驚くことではない」と説明を受けていたが、彼女は元来人見知りの激しい部類に入るタイプのようで、横に並んで座ってくれてはいるが微妙な距離が物理的にある

突堤の波打ちの側に擦り寄るような姿で、そんな風に距離をとりながらも初めての人と話をし始めた最初の話題に、粉川は混乱をしながらもどこか吹き出しそうで『なるしお』から顔を隠すようにして

「モテモテになると、どうなるの？」つい勢いで聞いてみた

話題はそれしかない『なるしお』はピンクの唇を尖らせて

「雑誌に載るの、海の麗人倶楽部っていうのに。そしたら確定モテモテになって…」

粉川は新しい情報に頬が破裂しそうになった

正直艦魂達が読んでいる雑誌は『はるさめ』の言動やら『しまかぜ』の話から隊員の落とし物か、同盟国家間での寄贈などによって得た物ばかりと考えていのだが、この『なるしお』が知らせた雑誌の事は、どんな冗談？と思うほどに面白い新情報だった

曰く
基本は同盟国艦艇の魂の写真が載っている事
本体である自分の写身については特に何の情報もない事、なのに魂の個人情報は駄々漏れがごとくで本人が明かした事もない趣味趣向まで暴露されていたりするという

「僕、それ見たいなぁ」猛然とそそられる興味にチラリと横の彼女に目をやる粉川
『なるしお』は持ってないと首をふり
「見たって、今は潜水艦は乗ってないもん」つまらなそうに尖った唇をさらに硬く絞った
「そうなんだ…残念だね」
本当に残念な気持ちの粉川は、この雑誌についてなら他の顔見知り艦魂にも聞けるなとチェックをいれた

「それにしても…モテモテになると…どうなるの？」
「さあ？お姉ちゃんがその道を走ろうって、私だってどうなるかなんてわからないから困ってるの」
「お姉ちゃんって…あの河内弁っぽいしゃべり方する人だよね」

『なるしお』の姉『うずしお』は以前、粉川が本庁に戻る時の送別会で見たことがあった
潜水艦の魂はみんなそうなのか？と思う長い前髪の下、流暢にヤクザ弁をしゃべった唇は感情の発露を見事に現した歪み具合で「なんか変わった魂いる」というイメージがばっちり残っていたが、話を

聞くに

いかにも変わっていると思いに顎をひねった
離れた隣では姉である『うずしお』にモテ道という講義をソナーに反響しまくるほど聞かされへばった妹
まだ明るい昼という事も気にして横目に彼女を追いながら、この変わっている点について粉川は聞くことにした

「でもさ、あの、モテ道…って、君たちって女しかいないのになんでそんな事になってるの？」

笑い話だった話題の中にぽっかり浮かんだ疑問
自分の知らない世界にある雑誌にも興味はあったが、それ以上に真面目に考えると実に不可思議な部分があった
モテたいというのは基本男の行動の中にあるように思えたのだ
もちろんモテる女というのもいるが、粉川は自分の男観念の方面からアプローチする事にして質問した

モテたいを公言する艦魂は女の形を持っているという点から浮かんだ疑問
昨日会った滝沢の婆様は確信を持って言っていた事の一つ
「舟魂さま（ふなだまりさま）は女しかいない」と言うこと

困惑の顔をさらすと、海に逃げてしまいそうな『なるしお』に粉川は出来るだけ素っ気ない感じで尋ねる
普通だったらこんな若輩の女の子に聞かないような事を、彼女達の年齢や容姿は当てにならないと初めて自分の側で割り切って

「ひょっとして…君たちは女同士で…恋愛とか結婚とかできるの？」
「なにそれ？」

体育座りのまま不可思議と目を向ける『なるしお』
粉川は割り切った自分の境界線に戻るような事はしなかった
長い前髪伸したの輝く目に

「だってモテるって、相手の心を惹きたいって事でしょう。好きになって欲しいっていうか、一緒に居たいっていうか、最終的には結婚とかにつながらない…のかな？」
「結婚って何？」

思わぬ返事だった
恋愛の行く先の最終形としてそびえる砦、結婚を知らない？
一瞬知識にも解釈にも無いのか？と目を丸くした粉川だったが瞬時に、繕うのは見えたかも知れないが次の質問のために気持ちを落ち着けた

「結婚って、その、好きな相手がいるって事で、その人と一緒に生活したいって事の集大成かな？」

落ち着いては見たもののかなり笊（ざる）な返事
本当にこの一見少女の『なるしお』相手に、こんな突っ込んだ会話をしていいのか？と今度は粉川が焦った顔を合わせられないでいると

「なんで一緒に生活するの？そんな事に意味あるの？」
興味を煽られた十字の黒目は顔を近づけていた
足を崩し、自分からそっぽ向いて海を見つめる大人、粉川に
「私達、基本的に一緒にいられる時間なんて多くないし、なんで一緒にいる事がモテの集大成なの？」

言われなくてもその通り
護衛艦は所属艦群が決まっている。決まっている範囲では基地を一

緒にしたりする事で特定の時間は得られるが、だからと言って常に一緒にいられる訳ではない

そこまで反省して粉川は頭を叩いた
それだって人の結婚生活だって同じだろと、自分に言い聞かすように
旦那が働き、妻も働きの共働きだったら常に一緒にいる事は少ない…眉間に手を当てる
そもそもこの話では彼女達のいうモテるの意味がわからなくなっていた

「ねえ、人の生活って何？そうすると何か起こるの？」

ただ呆けているという顔ではない『なるしお』の真剣な眼差し
質問を質問で返すのはおかしいと思いながらも粉川は両膝に手を付くと腰を据えきちんと向きあって聞いた

「あのさ、モテたいって事は、相手を自分のものにしたいって気持ちの現れだよね。自分の近くに居て欲しくて、自分の伴侶になって欲しいって気持ちの最初部分だと僕は思うんだよね。そしたら多少仕事ですれ違いがあったとしても最後は自分の所に居てって事にならない？そういう時間を積み重ねて共同の生活者になって、…子供得たりするんじゃないの？」

「子供？いらない」

吹く風に舞い上がった髪、両方の目を丸く大きく開いた顔は口をへの字に曲げて
「モテると子供が来たりするなら、私いらない！！」
急に身体をコマのように回してそっぽ向いた
思わず両手で、待った！をかけそうな程の衝撃が粉川にはあったが、

海の側の姿勢を戻した『なるしお』は愚痴をこぼすように続ける

「だいたい私子供嫌い、前に『あけぼの』の甲板にジュースこぼしてたし、私の事「くじら」とか言うし…イヤだ。モテ道を進んだら子供がくるなんて、そんなのいや!!」

「子供嫌いなの?」

女の子にそう言われると以外と傷つくのか、粉川の眉はハの字に下がったが、同時に一つの事に気がついた

「てか、子供…君たちはどうやって産まれるの?」

産まれの様子は『ちょうかい』から聞いていた、「女神の結晶」というものから殻を割る形で生誕するという話

だけどあまりに漠然とした発生の話で、今まで話をした相手や『こんごう』の姿からはピンと来ないものであった

混乱のサイコロが頭を廻るのを止めるためか、粉川は軽く額を叩いた

「てか…なんで成体で産まれるの?子供を欲しないのになんで女の形なの?」

少し場から偏った考えだが、今はそういうふうにしか思いつけない

「何?」

額を押さえる形で自分の中に湧き上がった疑問と向きあっていた粉川に『なるしお』の十字の目が近づいていた

黒目を四分割する十字のラインは、目の中に透明な刻印をしたような形で薄く光りに浮かぶ

人ではない者達

脳裏をよぎる言葉「女の形でいる訳、愛で人を抱くため」…

時間を止めた粉川の目線が目の前の人ならざる女に迷いの焦点を読

まれそうになった時

「痛い！！」
「はい？」

積み重なった疑問に、没頭の海に溺れそうになった粉川の意識を『なるしお』の悲鳴が断ち切った
雷に打たれたみたいに立ち上がり、身体を覆うようにすると
「いたい！！いたいよ！！」
片足立ちの涙目が粉川を越して両手を挙げると
「やめてー！！チクチクするのぉ！！」と岸壁の奥に向かって駆けだした

自分を飛び越し悲鳴をあげて走る『なるしお』の姿に、粉川の視線が灯台のように回るとそこにはバケツ片手に声を挙げている魂達の姿があった
艦魂と認識できるのは揃って青服を着た少女達であるからだが、その行動は

「敵潜水艦発見！！1番！2番！3番！魚雷発射！！」

まるでフラミンゴの投擲、片足をあげて大きく手を上にかかげた先から「何か」を放っている
『なるしお』の写身である『なるしお』に、黒く輝く艦体に魚雷というよりも上から降る何かで爆撃をしているという形だ

「やめてー！！私にぶつけないでー！！」

粉川は目をこらして見た

当たる何かは軽いプラスティックのような音を響かせているが、どうやら貝殻のようだ
しかしそれ以上に興味を惹いたのは、そんな破片に右往左往の『なるしお』の姿
欠片程度で大ダメージ？と思うほどだが、当人は必死の形相というかあの長い髪で隠されてる口のあわてふためきよう

爆撃に痺れるように震える下唇とパクパクと泡食うような声、ちびっ子な彼女に対して遠巻きな投擲を続ける面子に、飛び上がったり両手をバタバタと動かしたりして抗議する

「止めてよー！私敏感肌なんだからー！！チクチクするよぉ！！」

突然騒然とした場所に、対処の方法もなく一人残され突堤に立っていた粉川は、また一つ艦の魂の実態を知った気になった
深い謎ではなく、目に見えるおかしな出来事で

「潜水艦の魂は敏感肌…」

目の前背中に当たる物体に、背骨を左右に懸命に動かす『なるしお』
「潜水艦って…ソナーとか…吸音タイルのせいで？」

真面目に考えた粉川は吹き出しそうだった、笑って良いことではなかったが
三笠に聞く話では恐ろしい事ばかりだった艦魂の被弾、自分のドンガラである艦本体を撃たれる事で血肉を爆ぜさせ、場合によって顔の半分を失うという怪我を負いなおも生きねばならぬと言う話は聞くも恐ろしく見たくないものだったが、実際に魂が定着の場である艦に打撃を被った時の姿をこんな形で見る事ができ、１つの事を理解した

大演習の『こんごう』は頭の中に対する攻撃だったので、身体の被弾というものを実感する事はできなかったのでこれは貴重なシーンとも言えたし
艦自体の持つ特性が魂の身体の一部に具現化する事、そういう現象はあり得るというのも初めて見た

それは
『こんごう』の目に輝く八角のラインであり、抜群の身体能力を乗り移らせた足だったり、ものすごいパンチだったり
『なるしお』の目の中に写る潜水スコープの片鱗である十字の刻印に、海の流れをシビアに探るという任務の元にある敏感肌

「そういう事なんだ…」

粉川は納得しながらも騒ぎを止めようと間に走っていった
「ちょっと!! 止めなよ!! 痛いって言ってるでしょ!」
周りに人気が薄い事を確認しながら『なるしお』を囲むようにつながれている本体に投擲している3人組との間に入る
ひょろりと縦長の『あまくさ』ちょっぴりぽっちゃりの『いそゆき』2人の間に小さな『あさゆき』は粉川の接近に身構える。各々どこぞの戦隊者みたいな変な構えで

「きたな!! シィト!!」
「いや、人」

意識的に間違えてるとしか思えない3人組は、片足立ちに両手を波のように上にあげて威嚇をしてみせる
見ている方が引くような、なんでそんなに滑稽な姿をさらすと粉川は手を振って

「こい！！」どこかずれた対応
「いやいや、何？」
「まとめて撃沈だぁ！！」蛇のように口を開いて叫ぶ『いそゆき』に「だぁ！！」とワンテンポ遅れの輪唱をする『あさゆき』
もっとも苦手とする「子供子供」を目の前に粉川の顔も苦笑いで歪ませなから『なるしお』の直ぐ後ろに立つと

「痛いって、嫌がってるでしょ、止めようよね」
海自の隊員としては経験しないであろう保父さんのように両手を前に歩を進めたが、それが失敗だった

「だれや！！！ワシの妹いびっりよるカスは！！奥歯ガタガタにいわすぞ！！」

港から吹き付けていた波風を押し返す大音響の怒声
そっくり返るほど顎を挙げ隠されていた目を光らせる者『うずしお』
「お姉ちゃ～～ん」
涙目で身体を手で護るようにすくめている『なるしお』の後ろに立っていた事が粉川にとっての災いだった

「シィトォォ！！ワレなにワシの妹に手出しよんね？」
「僕？いや！人でしょ？てっ！僕は何もしてないよ！！」

『なるしお』の後から歩いて来て彼女を護ろうと手を振った粉川の姿は、残念な事に『うずしお』には小さな妹を襲う悪漢にしか見えていなかった
そんな不条理なに言いがかりは困ると粉川は慌てて本来の悪である３人組を指が探すが光の破片は有れども姿は消え
事態がまっこと悪い方向に向かっている事に背筋に冷たい緊張が走る

「違うんだ!!間違ってる!さっきまでそこに!」

両手で否定と衝撃を止めようとする粉川の前
蹲って泣く『なるしお』の背中、自分を助ける援護の声はどこにもない
あるのは怒りの姉の姿だけ

「ああん!!」

燃える炎の十字の目が、がっちりと粉川を捕捉てし海から吹く風に逆巻く『うずしお』の髪の毛で露わにされた仁王の顔面が粉川を睨むと
瞬間、力の入った足下に砂煙があがり機関車がごとく気合いをはきだしながら、突進してきた
「憤怒!!くらって逝けや!!プランチャー!!」

「待って!!!」

世界は回っていた。身体事の大激突に天地が逆さに一回転すると粉川の身体はダイブしていた
倉敷の青い海に

それを『いかづち』は目撃していた
粉川を食事に誘おうと探し歩いていた末の衝撃映像に『はるさめ』
共々時間が凍ってしまった

「聞いて良いかな?」

作業青服をバケツの水をかぶったかのように黒く濃紺した姿の粉川に声をかけたのは間宮だった

監部から立神のバースへ『こんごう』に向かって和田と共に歩いていた足を止め
粉川の姿を上から下までゆっくりと動かした目線の末の質問に、後ろに付いていた和田と安藤は口元を大きな手で二人とも抑えていたまともに顔を合わせて敬礼なんか出来ないほどに二人とも頬が脈打っている

「まさかと思うけど、また寒中水泳したの？」

足音に水の濁音をからませ、通った道筋がわかるほどの姿を前に間宮もまた、目元に笑いじわを浮かべて聞く

「いいえ、走って来ました。倉敷から」
「だよね、こないだの今日じゃ宗像司令も困っちゃうしね」

引きつった顔と、全身から匂う潮の香り
隠せるわけない状態を前を、粉川は真面目に敬礼をすると走っていった

「負けないぞ！！今日からは徹底的に行く！！負けない！！」

心を叩いて言い聞かすように熱く拳を振って走る
自分の背中を笑う間宮達の声を耳にしながらも粉川は全力で監部にある自分の宿舎に戻っていった

「とりあえず着替え！！で、カレーだ！！」

絶叫の粉川、長い夜は始まったばかりだった

第七十七話　潮の香り（後書き）

カセイウラバナダイアル～～ＫＹ～～

建築関係の仕事の人に言わすと、ＫＹというのは「危険予知活動」の事らしいですｗｗｗ

ところでこういうメッセ頂きました

「ＫＹな中年女の作家は気持ちが悪いから他先生の所に感想を書かないで下さい、媚び売ってるみたいにみえますよ」

「このメッセを僕が出したって公表しても良いですよ！！僕の方が仲間が多いし、みんなそう思っているから代弁しただけですから」

でも良い作品に感想は送りますよ私は、そこに中年であるとかは関係ないと思うし

もし書かれてイヤだという作者さんがいるなら「ブロックユーザー」ってのもありますし

私には直接メッセージしていただいてもかまいません、迷惑を掛けてまで感想を届けるような事はいたしませんから

後ねどうしても言いたかった事を一つだけ

「孤独を恐れるようなヤツはアーティストじゃない」

そういう感じですｗｗｗ

ちょっとイヤな思いしましたけど、色々な意見があるので聞く耳は

開けておきます
全てを遮断して、自分の世界を正しいという程出来た人間ではないので
色々な申し出も出来る限り聞きたいと思いつつ頑張っていきたいと思います

そしてこんな時間から実家に呼び出されて帰ります…片道４００キロ

フフでも実家もお祖母さんが呼んで下さるうちが花なので！！行って参ります！！
今週は色々な事がありすぎて心身共に疲れましたが、来週にも続きが出せるよう頑張ります
ところで今話の粉川の「恋愛観」「結婚観」なんですけど、やっぱり良く解らない部分
男の人が実際はどういうふうにこのあたりを考えているかがいまいちわかりませんでしたので
「このへんは、こうなのでは？」という感想いただけると嬉しいです～～～

でわ

またウラバナダイアルでお会いしましょ～～

第七十八話　勇気の印

粉川は走っていた
一日の内に立神と倉敷の間を二度目となるランニングを、風呂から上がり暖まった身体でこれから陽を落とし、肌を震えさせる風から守るために黒のジャケットはおり
汗を抑え、身体の鈍りのみを振り払う程度の軽い足取りで足下を確かめるように走る

時間は１７時の頭
十一月の夜は足が速い、まるで太陽が寒さを嫌い波間の毛布を求めるように眠りに沈む
冬の夜が登場する事で町の灯りは早々に煌めき、十二月の空気を早々にながす赤と緑の光
乾燥した空気が薄い濃度の上で星を輝かせるのも同じぐらいの時

暖まった身体の中から、弾みを付けながらも整えた息が規則正しく白い綿をはくと、近づく倉敷の入り口に粉川は愚痴っていた

「そう何度も海に落とされたんじゃあ、僕の人格にもかかわる」

二日前、今日からしばしの演習に出た『むらさめ』に倉敷から立神までの間を光りの力で吹っ飛ばされ着水
いくら湾港の海とはいえ夕暮れ時を過ぎ、すっかり冷えた風を吹かす海に落とされたのは身体的に堪えた
ただあの日は心に残った苛立ちで寒さなどで身を震わせるなんて事はなく
むしろ無愛想に歪めた顔のまま、堂々と監部に戻った

しかし、仏頂面を引っさげながら歩く背に、いち早く粉川を発見してくれた隊員が心配して聞いた「どうしたのですか?」の質問に「海水浴…かな?」などと減らず口をたたいてしまった事で宗像司令を始め多くの隊員に
「寒中水泳をしたのか?」と詰問をされる事となり、佐世保基地での時の人になってしまった

不名誉賞の心

自分の人生を長く助けてくれた三笠を思って始めた中で発生した不安と
確率的にも低いであろう人との出会いの中で出会った自分に、実は魂達が隠している事があるのを知り混乱や言えば怒りのようなもので頭を悩ませた結果

そこからの脱却、いや突き当たってしまった壁の打破が見えなかったため、せめて普段を勤める気持ちだけでも落ち着けようと出かけた墓参りで、艦魂という生き物たちについて、まだ自分の側に努力が必要だと知った

思慕の情を絡めたケチな嫉妬心で三笠を疑い、彼女達にまで嫌な顔をさらしてしまうところだったのを、洗い流すかのように改める事ができた
「人」と「魂」だ。生息環境の差からくる違いもあるハズという当たり前の答えに
まだ、自分には知らせられない事があるのは当然と受け入れ、より魂の女達の事に没頭しようと決めた

男が一念をかけて始めた事に軽く何度も折れそうになったが、ココで止めたらそれこそ三笠の踵落としをくらい

「たわけもの」とどやされ会わせる顔を失うことになるのと苦笑いし
自分に負けてしまった思いを引きずり、取り返せなくなった妻の死
や今も離れて暮らしている息子へも申し訳がつかない気持ちになる
だろうと胸を叩いた

「徹底的にやる。どんな事にしたって僕の方が程度詰めた考えをも
ってなきゃ三笠に言いたい事も言えないし、彼女達の心も開けない」

拳を振るう
よそ事に惑わされ負けてはいけないと、しかし同時思い知った事も
あった
注意深く進まなくては行けないというもっとも当たり前の事に

いくら知りたい事があってもうかつに近づくと有らぬ誤解を生み
魂達に見える自分にさえ容赦のない鉄拳をくだす者がいるという事
を知った
それだけ人はまだ魂達との架け橋をもっていないという事だが…
半分は間違ってるだろ。という気持ちで唇を噛みつつも

「まぁ…そこまで慣れ親しんでくれてるって…事だよね」

ハの字に眉が下がるしょっぱい思い出になった事件
潜水艦艦魂『なるしお』の悲鳴に飛んできた姉『うずしお』は、妹
を襲う悪漢として粉川を成敗した
まったくの誤解だったが問答無用のプランチャーは華麗に炸裂し、
粉川と『うずしお』は海にダイブした
潜水艦の魂である『うずしお』は濡れることなどお構いなしなのか、
その後粉川の足を掴むと海に引きずり込もうとまでしたところを『
はるさめ』に救われたという大珍事
近くて遠い人と艦魂、そういう誤解だけは人のそれと変わらなかっ

たりの笑い話だが

まさか二回目になる寒中ダイブを強制的に食らわされた今日
監部ですれ違う者達の、止めようのない頬の脈動に顔を真っ赤にして風呂にダイブした粉川だった

「まあ、いつかは良い思い出…」

市場の角を曲がって、クールダウンをする。小幅に足を動かし呼吸を整える
街灯の黄色い瞬きの下で複雑な顔をしながら門をくぐるとゆっくりと歩いた
深呼吸を繰り返して心拍数を抑えて行く、鼻腔を突く氷の気配、本当に凍るわけではないが寒さが温かい内側を襲う時の震えで肩を動かす

「それにしても…あの光」

光、艦魂達が移動の手段の一つとしてつかう空間を割る泡沫の滝
何もない宙から水があふれ出るように光の粒が走り、大きく輪になるものをくぐる事で移動をするものだが

「三笠にもよく落とされたけど、あの光って結構いい加減な力なんだな」

泡沫を帯びる光の粒、輝きの輪は何種類かの色を持つ見た目美しいものだが、魂ご本人が使う以外では人間の移動に適しているとは言い難いもののようだと思えた

小学生の頃から三笠の元に通ったが、最初の頃から数えて何度とな

く海に落とされた
記念艦に毎日会いに来る粉川の事を考えて姿が見えたら直ぐに光りの移動をしてくれた三笠だったが…思い出すにあまり成功した事がなかった

ある時は煙突のジャッキステーに飛ばされてしまった事があり、夕暮れ時だった事が幸い財団の職員に見つかる事なく、更なる移動で事なきを得たが
小学生だった粉川の二番目にダークな思い出となったのは言うまでもなかった

高い煙突、遮蔽物のない海の上、風に吹かれ泣き出しそうだった自分に下から必死に声を出すなと激する三笠、トラウマになりかねない事件だった
あんな酷い思いをした後でよく自分が護衛艦に乗る事ができるようになったものだと、歩きながら一人笑いをする

「百年選手の大年増、三笠がやっても失敗するんだから『むらさめ』ちゃんじゃ無理ないか？」

明治の世から現在までを生きてきた三笠でさえ、まともに人間を移動させられないというのは身をもって知っていた粉川だから言える台詞
本人の目の前で言ったら、真下からのアッパーを喰らうだろうと、頭に絵が浮かんだ粉川は、身体に刻み込まれた痛みに顎をさすると
「しかたのない事か」と煉瓦倉庫の側に目を移す

そこには両手を胸の前で抱えた『いかづち』が、作業青服の姿で白い息を零して立っていた

「はやかったかな?」

外が紫色の夜を迎えたとはいえ時間は17時、艦魂達が住む煉瓦倉庫の近く揺れる木立の元に走った粉川は、丸メガネにいつもの癖毛頭の『いかづち』に、なんとか笑って見せた

「そないな事ないで、ほないこ!」

いつものトーンを逸脱したうわずり具合の『いかづち』の様子と、ほんのり赤らめた顔を見せないように前を歩く彼女の後ろで粉川はホッとしていた

食事の招待を彼女からされたのは例の『うずしお』が放ったプランチャーの直後だった

危うく海の藻屑となりかかっていた粉川に手を伸ばしたのは『はるさめ』で、なんとか場を納めたところに『いかづち』がやってきた今夜カレーを食べに来ませんか?と

アップアップの波の中から『はるさめ』の力で寄宿舎近くまで飛ばされた粉川は、もし酒の入る食事会だったら断ろうと思っていた

酒が入るイコール夜が遅くなる

遅くなるイコール例の光の移動を使われる

粉川の頭の中にはアレの成功確率の低さに対する恐れがあった

だからカレーを頂ける普通の食事会である事を確認して良しと答えていた

カレーで酔う事はないし、夕方の早い時間にこれば、ただの食事会。いくら話し込んだとしても深夜を回るような事はしないし、後は「腹ごなしに走って帰る」と言い切れると考えたからだ

幸い粉川の早い時間でならという提案に『いかづち』は二つ返事でＯＫを出していたので心配はしていなかったが、ココに来るまでに気持ちを変えられていたらという不安はあったので最初の一言に「問題なし」の返事があったのに胸を撫で下ろした
安堵で少し緩んだ額を手で押さえる粉川は、近づく寄宿舎の壁が江田島の校舎のカラーに変わっていくのを見る

輪郭をぼやけさせた小さな煉瓦倉庫は、前に『ちょうかい』が導き入れたくれた時と同じように彼女達がいる事で姿を変える
今でも多くの海自士官を輩出している学舎は、かつても帝国海軍の士官達を送ったイギリス建築の美しい姿を見せる
赤い煉瓦と半円の丸屋根、雨樋をつたう部分には緑青を浮かべた梁の装飾
粉川も一度は通った馴染みのある校舎の面影を色濃くのこす寄宿舎を懐かしいと思いつつ足を止めた

「ところで、『くらま』さんに許可はとってあるの？」

本来彼女達の寄宿舎は、艦魂達の基準で基地の付属施設の扱いになっている。それに彼女達の宿舎というぐらいに女ばかりの隊舎で何もなくても気兼ねする部分がある所だ。いつもならばチームリーダー的存在である『しまかぜ』が許可等々の根回しをしていてくれるが今日は不在である、自分の入場に問題はないかと心配したのだ

言うまでもないが佐世保基地の重鎮ＤＤＨ護衛艦『くらま』の魂たる人物は、この基地を「佐世保鎮守府」と呼び、粉川をして初めて

女に見下ろされるという経験を味合わせた体躯の持ち主であり、ココに詰める魂達の司令艦である

ただ身体の大きさだけを語れば女子プロレスラーのようなイメージを思わせそうだが、そんな事はなくどちらかと言えば宝塚の男役のような印象が強い
すらりと伸びた長い脚に、帝国海軍時代の軍装を見事にフィットさせる肩幅
顔つきもゴツイというのはなく、切れ長の眉に揃った尖り目とキレイに纏められた短い髪
御伽話の王子様を思い浮かべそうだが、言動はきつく、声も低い

佐世保にて初めて顔を合わせた時、「人は責任をとらぬ」と睨み突き放すという登場だったが、任務重責を負う者として厳しく海自の魂達を鍛えている姿に悪いものを感じる事はなかった
むしろ、今は、日本国民に国防の大切さを大手を振って理解を得られない中で『むらさめ』が思うように「生きている意味」を見失いそうな魂達を、司令としてしっかり導いている責任者であると認めていた

だから『くらま』の許可が取れているかは大事と粉川は判断していたそんな緊張を纏った顔に弾むステップの『いかづち』は、何事もないように手をかけた扉から振り返ると
「大丈夫やで、今日はもう寝てんねん」と悪戯な笑みを浮かべて見せた
「寝てる？こんな時間に？」

以外な感じに目を丸くする前、かけた手を扉から放して『いかづち』は粉川の側に寄ると小声で

「昼間長崎に行っとったんよ、せやから寝てるの」

そういうと素早く手を引いて笑うと、顔を隠すように背中を見せて「後で話すから！とりあえず早よう部屋に入って！」と軽い足音をで、粉川を引っ張ると他の魂から隠すように部屋までの道を一直線に走った

部屋の中は、香ばしさで溢れていた
高い天井の全てを満たすほどのスパイスと、時間をかけて煮込まれた香ばしさは色があっても不思議でない程の濃度を漂わせていたココに通されるのは二週間ぶりぐらいだが、いつもは鼻をくすぐる「女の香り」に少し戸惑っていた粉川も、食欲増進を促す魅惑の香りに遠慮無く嗅覚を働かせ、見苦しくも小鼻を蝶のように動かしていた

「イイ匂いだね！！」

キッチンのハッチスペースに向きあうように置かれる黒のソファへに腰を降ろすと、すでにサラダと水が用意されている前で粉川は満面の笑み
大きく口を開いてしまったらだらしのない唾液が出てしまいそうなぐらい、身体が踊って見える

相手の満足な姿に『いかづち』は、きざった盛りつけはせず普通に大皿を半々にコートしたカレーを運ぶと

「昼間から下味を煮込みつけといたからコクもあるで！楽しんで！

！」

手を打つ合図で、頭の上のコック帽が揺れる

「お代わりもあるから！！遠慮なくいって！！」

粉川は大満足だった

事件発生によって久しぶりに護衛艦付けになって海の行く日々に戻ってきたが、残念な事に乗艦の『こんごう』では一度もカレーを食べる事が出来てなかった

何かと問題が起こって、そのたびに食いっぱぐれていたのだが、それ故の思いは募っていた

カレーは特別な料理ではないが、海の男事海自に勤めた者にとって思い入れは絶対にあった

食いっぱぐれたからといって代用を陸ですませる訳にはいかぬと我慢し続けてきた粉川だったが、鼻腔を緩ませ口の中に滝を作った魅惑には抗わなかった

スプーンを柄杓と間違える勢いでかき込むと、最初に一盛りをあっという間に平らげて

「お代わり！頂きます！！」と今更手を合わせて声高く合掌をして見せた

勢いよくかき込まれるカレーに『いかづち』の心も弾み「あいよ」と代わりが直ぐにやってくる

香味の程よいルーの力は偉大だった。食い気に戸惑いを持たせない力、まるで怒濤の波を食らうようにカレーは粉川の胃に流し込まれテンションの高い食事会はあっという間に終わってしまった

それは『いかづち』にとって嬉しくも、計算外の事だった

寸胴に満ちていたカレールーが見る見る下降して行くのは料理好きの『いかづち』にとってこの上ない喜びだった

自分のもてなしを本気で楽しんで貰えているバロメーターにもなる訳だから、その間の会話は何がなくても弾むし
一見普通に見えるルーに対するこだわりを、食事の片手間でも聞き続けてくれる粉川との時間は最高の一時だったが、それ以外の話題の、心の準備が追いついていなかった

舐めるようにキレイに平らげられた食器をかたそうと伸ばした手の前、お腹を叩いて見せる粉川に、この先何を話していいか迷っていた

「『いかづち』ちゃんは本当に料理うまいね。独学？それとも厨房を見て勉強してるの？」

このまま沈黙が続けば「ごちそうさまでした」で帰ってしまうのではと動悸を高めていた『いかづち』に粉川の側から声がかけられたのは救いの手だった
キッチンのオバーシンクに皿を沈めると、綻んだ顔を隠すように唇を軽く噛んで

「最近のは本とかで勉強してんねん。でも一等最初は『はるな』司令に教えて貰ったんよ」
「『はるな』司令？舞鶴の」
「せや、わてはあそこの産まれやし」

軽く皿を洗いながしテーブルを挟む形で置かれているイスに座る
粉川を正面に見た形で、まだすぐに横に座る読経はないが、正面に顔を見据えるようという努力で

「最初に教えて貰ったんは、肉じゃがやったんよ」
手を膝に、顔を合わせられないから下を見ながら
初めてであった頃には緊張なんかしなかった人の前で、少し改まっ

た話し方に苦笑自分の心に舌をチョット出す

「『はるな』さんって『しらね』さんや『くらま』さんのお姉さんだよね。似てるのかな？」

可愛らしく上目遣いをする顔に粉川は手早い質問を続けた

『いかづち』の初々しい反応は残念な事に今の粉川の興味の範疇になかったのだ

それ以上に知りたい事にダイレクトだった名前の出現から、例の禁忌以外の事で魂達を知ることは出来ないかと頭の回転を速めていたそんな事に気がつくわけなく、自分から振れる話題がなかった中での会話を楽しむ『いかづち』は顔を上げると

「あんま似てへんで、『はるな』司令は糸目でおっとりした方やもん」

自分のメガネの下、目を人差し指で左右に引いて細くして見せると

「妹の『ひえい』司令とも全然似てないし、『しらね』はんとかは同型ゆってもちょっと違うらしいし」

「そっか、言われてみればそうだね『しらね』さんと『くらま』さん目元以外はもあんまり似てないもんね」

粉川はそう言うとおもむろに手帳を取り出した

不足の事態に備えたウォーターパックのブラックケースに入れていた真新しい手帳を開くと

「もしかしたら近いうちにお会いできるかもしれないから特徴をかいとこうかな、失礼のないようにね」

言い訳はあまり得意でない粉川は，説明的な言い方で、記録をつける作業を始めた

『いかづち』は興味のある話題を長続きさせようと、聞かれる事に返事する形で話しを続けた

「会えるかもしれへんよ、『はるな』司令は来年のリムパックで司令旗艦として出るから」

「そうなんだ」

思わぬ吉報に粉川の顔は明るくなった

すでにカレーの焦熱で温かくなった顔は赤みを十分に帯びていたが、中身は冷静に書き留めを続け、護衛艦達の行動予定のチェックをした

粉川はこのままいけば、イージス艦機密漏洩の監査官として『こんごう』に張り付きのままＭＤ実験を含む環太平洋合同演習について行ける可能性が薄くともあるかもしれない

もちろん大事な実験だから、部外者である粉川が便乗できる可能説は極めて薄いが

司令旗艦『はるな』が演習に出るというのならば舞鶴から横須賀に寄港する可能性は高い『こんごう』も佐世保を出たら一度は横須賀に入る

そこから集合で出港するのならば、少なくとも横須賀で会える可能性はあると目が光る

疑惑、三笠と会話をした事があると言われる『はるな』と出会えるのは千載一遇のチャンスだった

「『いかづち』ちゃんの料理の師、『はるな』司令か、会えるなら楽しみが増えたよ」

深い部分に入り込まない形で、情報を仕入れたい粉川は『はるな』

の話題一辺倒になる事をさらりと避ける
深入りして変な誤解を招かないために

「ところで、なんで今日は『くらま』さん寝ちゃってるの？まだ１８時なんだけど？」
腕時計を眺めつつ、粉川の矢継ぎ早な質問に『いかづち』は、あくまで会話と楽しそうに揺れると
「今日はあれよ、長崎に飛んでたから疲れて早う寝たんよ」
「長崎？でも艦は立神にいたよ？」
「せやから、身一つで飛んでいったんよ」

『いかづち』はそういうと、簡単な説明をした
佐世保から長崎は定規で繋げる直線距離でも１１０キロほど、海を使って港をゆく距離で計算するとさらに増えて１５０キロぐらいになる
これだけ離れるとさすがに艦魂の移動の光では届かないという事
粉川は走り書きのように手帳に書き込みながら艦魂達の移動の光が使える範囲というものを初めて知った
基本は自艦の周りと少しだけなのだが、僚艦が集まる事で飛距離は伸びるという事と、艦隊行動の範囲プラスα、陸地の移動は好みがあるが基本は基地の中しかいないという事

「じゃあどうやって長崎に行ったの？」
興味津々の目が顔を近づけるのに『いかづち』の心は躍るのか、自分から前に乗りだすと人差し指を口に当て

「曳舟達に手伝ってもらうんよ！」と癖毛の髪を揺らして笑った

昼間ココに来たときにも曳舟の魂である青服を見なかった粉川
今思い出せば確かに違和感だった、長崎で会った菊や洋は仕事がな

くても船の上でゲームをしたりと騒がしく過ごしている働き者なのに、倉敷の内港に係留されていた船には一人として姿がなかった

「曳舟達に光りを集めさせると遠くに飛べるねん、『くらま』司令はそれに乗って長崎に行ったんよ」

人差し指を小さく横振りさせて

「曳舟の子んらは基本力仕事が好きなんよ、だから「運ぶ」仕事の延長に移動の光を集めるのも入ってるんよ」

愉快に話す『いかづち』の言葉を粉川はメモする
他愛のない疑問からまたも初めて知る魂達の生活体系
『くらま』が長崎に飛ぶためには事前の準備が必要だった事や、受け入れる側の長崎でも曳舟達が準備をしていた事など聞くにあの菊や洋が陽気な顔で「ヤーイ」のコールと共に大きな手に光りを集める姿が目に浮かぶというもの
笑顔の粉川の前、『いかづち』の話は続く

とにかくそういう移動手段を使って『くらま』は長崎入りをしたが、数分でもどり明日のパーティーのために眠りに入ったという事

明日は例の空母がアメリカに帰還する最後の日
明後日は調整の日に当たるためパーティーなんか出来ない事から明日になり、『くらま』は見送り側の大将として最後の接待のための体力回復に努めているという次第
遠距離の移動は手伝いも必要とするが、飛ぶ側の魂にもかなりの負担が掛かるという事からの処置だったそうだ

「せやけど、アメリカ海軍とかはもっと便利な方法をもっとったり

もするらしいやけどな。まだうちらは色々な事が制限されてるから昔ながらの方法で移動してんねん」

口を尖らせ目を泳がす、少し伏せたように見せながら髪を触る

「その移動の方法って『くらま』さん達が作ったの？」

すでにインタビュアーと化している粉川だったが、そんな事でも話が続くのが楽しい『いかづち』は目を合わせて首をふる

「ちゃうで、昔からある方法やで。いつから言われたらわからんけど」

昔からある方法に粉川はチェックをいれる。後で隊舎に戻って黒革の手帳に記録が残っていないかを確かめるために

自分のための知識作りをしながら大人である粉川はスマートに質問も続ける

「それで、なんで長崎に行ったの？修理にはいる下見？」

愛嬌良く笑ってみせる

「ちゃうよ、去年産まれた『はまな』の妹が来月佐世保に来るんよ。それで誕生の挨拶を兼ねて行ってきたんよ」

「『はまな』？妹？」

どこかで聞いた名前と思いながらも思い出せずに首わひねると

「ほら、送別会におったやろ、メガネかけて『はる』姉のとなりに引っ付いとったの」

特徴を言われると浮かぶ顔と、『はるさめ』の豊満な胸にしがみついていた小動物

「ああ、あの小さい子」

手を叩き、記憶を確かめた

「去年新しい補給艦がわての故郷の舞鶴で生まれたんや、それが呉に行く前に佐世保に寄るんよ。ホントやったら『はまな』がおってココでご対面になる予定やったんやけど、緊急出動で出てしまったからすれ違いになるやろ、せやから『くらま』司令が代わって歓迎の挨拶をしにいったんや」

誕生のお迎え

『ちょうかい』から自分を迎えに来た『こんごう』の話を聞いていた粉川は、近づきすぎていた顔を戻し姿勢を正すと、少しだけ高い天井に顔を向けた

彼女たちは女神の結晶と呼ばれるものから産まれる。誕生の原理はわからないが、今ココで聞く事でもないと口を閉じるがその生まれの時の状況は、今になって艦魂の中身を深く探求し始めた粉川には考えさせられるものがあった

誕生の時、近場に居合わせた艦がこぞって祝福にくるという行為名前を呼んで「貴女の姉よ」と挨拶をする

最初は微笑ましいお迎えの話だと思っていたが、この行為が船の魂全般に行われている事ではないのを知らされたとき

話しをしてくれた『ちょうかい』の表情はどこか白く感情が抜け落ちたようにも見えていた

過酷な任務を人と共に背負う護衛艦艦魂

産まれたっての軍艦である彼女達の想いの集約を見た気持ちになった

有事の時こればどの船よりも過酷な生を味わう魂は、誕生を不幸と思わぬためにも、同じ仕事に徒事する姉妹達の祝福を必要としているという事

食事会の冒頭から一気に聞いた話。粉川はこの話しをココで閉める事を決めた

誕生の話があるという事は、死ぬ者の話につながる可能性を感じたからだ
補給艦の増加で護衛艦の誰かが急に死を賜る事はないと知りつつも、自分の前で今は笑顔で次の言葉を待っている『いかづち』から話題をそらした

あの日、新しい護衛艦が出来る事を聞かせた時に泣いた彼女を思うに、この話は続けたくなかった

少し凝った肩をほぐすように首をかしげると自分の前で言葉を待っている『いかづち』の顔を覗き込んで話題を切り替えた

「あのさ、知ってると思うんだけど…海の麗人倶楽部ってご存じ？」
「ありゃ！！粉川はんなんでその本の事しってはるの！！」

大げさに戯けた『いかづち』は頬にてをあててから
「『うずしお』に聞いたん？」
「いや、妹の『なるしお』ちゃんに」
「『なるしお』、載りたいってゆうとった？」

お互い、なんとなく潜水艦の『しお』姉妹が言っていた事がわかり吹き出した

「『なるしお』ちゃんはその雑誌に載ってモテ道を行くってのが理解できないからどうして良いかって。本気で悩んでたよ」

頭を抱える真似をして見せる粉川に

「そんで相談に乗ったら『うずしお』に海に突き落とされたんや！！」

大爆笑の『いかづち』

本当はあの瞬間を寄宿舎近くの木立から見ていた。言えばあのお馬鹿トリオが『なるしお』本体に投擲を始めた時からその場を見ていたのだ

ただ、食事の招待を『なるしお』に聞かれれば、普段魚料理の材料調達をしてくれている『うずしお』の耳に入る恐れがあったため、事が過ぎるのを待っていてあの衝撃的瞬間を目撃していた

お腹を抱えて笑う『いかづち』に粉川は両手を開くと「酷いよ」と一応愚痴り、自分の無罪をおもしろおかしく話した

もはや笑い話のネタとするのがこの思い出の正統な使い方だと割り切って

「僕の方がびっくりだったよ！なんで急に仲間に攻撃するの？って。それで止めようとしたらあの始末だし」

『なるしお』本体におふざけの攻撃をした姉妹と一人の話に『いかづち』は佐世保を騒がす色恋のヒットメーカーである艦魂達の話をした

笑いすぎてメガネの下の目の涙を拭いながら

「あいつらは『ゆき』姉妹ゆうて、なんかいつもアホな事やっとる連中なんよ」

「ええ、『ゆき』型護衛艦っていったら結構年長に入るでしょ？すごく子供だったよ」

「せや、ほやけど何時の頃からヒマさえありゃあないな事ばっかやってんで」

そう言うと両頬に手を当てて口を縦長にしてみせると

「ムンクの叫びごっこ、これやりながら三人で揺れてたりするんよ」

喉の渇きに水を口に含んでいた粉川は、あやうく『いかづち』に吹き出しそうになり口を押さえた

喉につまる笑いでむせて咳き込む

あの横着な姉妹がそんな横揺れをして自分を見ていたら、整列帽振れの時にも吹き出してしまいそうだと

笑いで小刻みに揺れる粉川の肩を見ながら『いかづち』は『ゆき』

姉妹のする寸劇を真似て見せ

天井の高い一室は大笑いの反響に支配される

「止めて、『いかづち』ちゃん。もう限界だよ」と大きく手を振る

目に浮かぶ馬鹿さ加減に腹筋は楽しく鍛えられていた

ひとしきり笑った粉川は、何度も咳払いをしつつ腕時計に目をやった

時間はまだ１８時半、早いと言えば早いのだが、腹のそこからの大笑いにどこか話題は出し尽くしてしまった感で急に落ち着いてしまった

ゆったりと深く座ったソファの中で、話題を自分が振ることの出来ない『いかづち』の目線に気がつくと小さく息を吐いて

「ところで今日は誰もいないんだけど、『こんごう』や『はるさめ』さんはどうしてるの？」

急な話題の転換に『いかづち』の顔は瞬時に困ったとハの字に眉を下げた

「『こんごう』は、なんや用事があるゆうて出てる。『はる』姉はそのうちくる…かも」

本当はもっと早くにこの質問が来ると考えていた『いかづち』
粉川を誘い部屋に招く
多分艦魂達の乱痴気騒ぎな食事会だろうと考えているところに二人きりなのだから
今更だっが、二人の間を意識して緊張の糸はすり切れる一杯に引っ張られると瞬間湯沸かし器のように耳までを真っ赤に染めた

「そうなんだ、なんか二人きりだと笑い声が響き過ぎちゃって、ねぇ」

これ以上の質問はしたくなかった粉川は切りが良いと判断していた好物だったカレーを頂いたことも良かったし2つ3つ面白い情報も手に入れ、彼女達の不思議も少し知ることが出来たことに、性急さを出さずここで引くのが明日につながるというものと

「『いかづち』ちゃん、今日はありがとう。とっても美味しいカレーにおもしろい話し、たくさん笑わせて貰ったよ。楽しかった」

立ち上がった粉川に会わせるように『いかづち』も立つ
時間的には早いと言いたかったが、話題のない自分では何で引き留めて良いかワカラナイ
少し下がった眉で、頑張って見た

「まだ、早くで」
精一杯の反抗を
「ご馳走になったから早く眠るよ。また招待して」
懸命の手は縋る所がなく、自分の青服、ズボンのポケットを掴むと
優しく会釈する粉川を見て
「うん！任せといて！次は何が食べたい？希望聞いとかなな」

頬を奮わせた返事
唇をつぐむと自分に納得したように頷いて、また二人で会えるための勇気を振り絞った

「今度はホンマにクリスマスとかにしよか!!」

季節のイベントに誘うという勇気を振り絞った

「いいね!!僕鳥買ってこようか?」
「ホンマ!じゃわてが盛りつけたるわ!!」

帰りの背中を見せている粉川の前に急いで立つと、思いっきり笑って見せた

「どうして自分の話しないの〜〜〜」

倉敷の寄宿舎を後にした粉川の影を呆けた顔を見つめ続けていた『いかづち』の背中に手を絡ませたのは『はるさめ』だった
背中に密着させる肉厚、豊かな胸の山と甘ったるい声に

「たくさん話したで」

絡むタコの手を払って姉に向き直ると、頬をふくらませて姉の胸を押し返した

「『はる』姉はんも来てくれな、間が持たへんやろ…どこいっとた

んよ！」
「ずっと居たよ～～自分の部屋に～～」

茶色の髪をかき上げ首を傾げた笑い目は、自分の不在で間を持たせる事に四苦八苦した事を怒る『いかづち』の額に俊足のデコピンを食らわした
普段は軟体動物か綿菓子のようにとろけている姉からの思わぬ攻撃をくらい『いかづち』のメガネはずり落ち、目は丸く見開かれる

赤い焦点を残したデコピンの跡を『はるさめ』の指がロックオンするように指すと力を入れてさらに押す

「何言ってるのよぉ～～二人きりの時に頑張らなくて～～どおするのぉ？」

フワフワといつもはしている『はるさめ』は珍しく縦に飛ぶように揺れて
顎に皺を寄せるほどに口を尖らせる姿に『いかづち』は尻餅を突きそうになりながら後ろに下がるが、逃がさぬ足はズイと顔を近づけて、鼻息を浴びせると

「恋愛はマンツーマンが鉄則でしょ～～『はる』ちゃんが隣に座ったまま愛を語るつもりだったのぉ～～～」

お酒を飲んでなくても呂律がトロトロの『はるさめ』だったが、言っている事には熱いものがしっかり流れていた
珍しく横には揺れず、しっかりと足を地につけて
作業青服を着ている事で甲板に並ばされ休めのポーズで固まる隊員のようにも見えるが、頬は『いかづち』以上にフグのごとく膨らませ

「話だって粉川さんに聞かれたこと答えてるばかりでぇ～～『いかづち』の気持ちとか何もいわないなんて～～ダメ！！」

振り上げた手から頭ごなしを図にした形
自分より背の低い『いかづち』の顔を真下に置く『はるさめ』は、そこまで言うとプイと顔を上げて背中を向けてしまった

今日のデートのお膳立てをしてくれた協力者である姉は
「恋をしよう！！」と声も高く前向き過ぎぐらいに頑張ってくれているが肝心要のところで二人きりでは話題も少なく、たった2時間足らずで閉会してしまった素っ気ない逢い引きに腹を立てていたが、恋に夢中の本人には初めて付くしの事でどうにもならないもの

ご立腹の背中を見せる『はるさめ』の姿に困り果てた『いかづち』だったが、月の下に映し出された顔は緩やかな笑みを浮かべていた

「ええんや、ちょっとづつ近くなっていったらええんよ」

最初の一歩
『いかづち』の意見は至極全うなものだった
今まで「人」と出会うこともなかった「魂」として、自分の話を喜んで耳を傾けてくれる笑顔が近くにあった少しの時間でも宝だった月明かりと木立を揺らす冷たい風の下にあっても、赤くそまった頬の暖かさは勇気の印

「今度はクリスマスを…二人では無理やろうけど、粉川はんだけにあげるプレゼントを作ったりしてみようと思うんよ」

跳ねっ返りの癖毛頭、丸いメガネの小さな肩
背中を向けていた『はるさめ』は凍えた風の中に白い息を吹くと

「ちょっとづつねぇ…でもぉ～～たしかにぃ～～そういうやり方もキライじゃあないけどぉ～～」

妹の耳に届くか届かないかぐらいの声で、不安を煽ると
冷めた顔は冷徹な視線で、空に闇にソフトフォーカスのまま浮かぶ
青い月を見る

「友達から恋人へ…私達の愛はものすごい化学反応を起こして進むから、ゆっくり行こうなんてねぇ～～～、そんな余裕あるのかなぁ～～」

人と魂、異なる種によるま恋愛力がどういうものかという恐れが『いかづち』にはあった
ストッパーの声である銀の目と、その先に行って何が残るのかという迷い
それでも自分的には恋愛の第一歩を踏み出したと考えていた

「わては、わてのやり方で近づきたいんや」
妹を置き去りにした場所から軽いステップを踏む『はるさめ』に、
声を張り上げた

「わてのやり方で頑張るって決めたんよ!!」

妹の振り絞った宣言の前
振り返る笑み
歯を見せない静かな唇が光る

「愛してるって言葉よりも、一瞬でつながっちゃう力を持っているヤツが世の中には居るんだよ。それを見落としたらずっと寂しい思

いをしちゃうかも～～～」
笑わない嬉し目が写す記憶、重い影に『いかづち』の背筋は急に震えた
「でも…」

『いかづち』の目は空と海を丸く繋げた暗闇の狭間に輝く立神のバースを追う
今頃、あそこに向かって小走りをしている人の名を呼んで
「粉川はん…」

波が静かに、ささやかな夜の子守歌のように同じ音を重ねてゆく時間
月に照らし出された茶色の髪は輪郭を白く輝かせ、青い瞳に月を泳がせる
立神に係留された防衛の牙城の上で彼女は柔らかい光に包まれていた

イージス艦『こんごう』の魂『こんごう』は、ただ静かに時を待っていた

第七十九話　私達の事（前書き）

恋愛に高い純度を持っている方は読まないでください
艦魂が可愛い女の子と信じている方には不向きな作品ですから十分にご注意ください

第七十九話　私達の事

遠慮なく頂いたカレーの重みを消化するために小走りをしていた粉川が、月光に輝く女神を見つけたのは、見渡した立神バースの桟橋から少し戻った駐車場付近での事だった
監部に近いところに『こんごう』がいた事で気がついたのだ

夜を迎えた無風の空の下
月はいびつな分身を水面に映し『こんごう』は静かにそれを見つめていた
粉川は直ぐにでも声をかけようと歩を進めたのだが…
近づくに連れ、声をかけては行けないのではと言葉を喉に押しとどめた
月の輝きに照らし出された彼女は、美しかったからだ

特別な衣装を身につけているわけではない、いつもの服、海自のダブルスーツを模したジャケットに、プリーツスカート。遠目に見たら女子高生と間違えてしまいそうな出で立ちだが、彼女はかなり長身１８０センチに近い粉川をして１７０センチはある身の丈、華奢というよりはしっかりとした骨格を持つ身体のラインは成熟と青い果実を折半したくらいの姿
海から浮かぶ誕生のミューズならば、ちょうどこのぐらいが神秘的な年の頃合いに見えて安心できむしろ異世界的な生き物は人の世の女子高生と言い切れた

茶色の髪に輪郭を柔らかなモールで覆ったような星の破片を纏い揺れる
細波に伏せた瞳には、写り返る涙の雫のようなラインストーンが見え

叩いていた腹の手を止めて、立ちつくすように見つめる

普段の印象にある『こんごう』は尖り目で、口をへの字に曲げて笑わない
目を合わせた相手を石にしてしまう迫力を感じるのだが、要は目が大きいという事なのだ
欠点のように見えていた不機嫌の顔が。夜の静けさと、少しだけの風、シチュエーションが変わった中で見る事で違って見える
きつく結んだ唇も、ギリシャ神話の彫像のような美のための大口を開くことのない唇になり
瞼を少しおろした大きな瞳はテンペラ画のマリアのようにも見える

動かぬ芸術の絵画が夜の神秘にゆっくりと動くさまを、月明かりのシルクを纏った容貌に粉川はただ見とれていた
どこか覚えのあるシルエットに

「何してる?」

立神バースから少し離れた駐車場に立っていた粉川は、女神のシルエットに見惚れながらもよそ事を考えていた粉川は間を詰められていた事に驚いた

「やあ!良い夜だね」

何十年前の口説き文句だ?自分で口走っておきながら失敗と片目をつむり額を掻く

「そうか、波は静かでいいけど」

ばつの悪そうな粉川の顔に『こんごう』は遠い沖合に目を向けた
少しの風と、小さな揺れの波が重なり夜の輝き立ちは四方に散らば

っていた
さらに遠くに目を向けすぎれば、空や山ともつながる黒の世界は境界線がなく一つの色に支配された静かな心地よさを与えている

「波、静かだと落ち着くの？やっぱり大波よりは良さそうだとおもうけど？」
冴えない切り返し
満足行くほどに腹をみたしたせいか、小走りをした程度で頭の回転を挙げる事はできなかった粉川だったが

「そうだな、そうなのかもな」

伏せた目の横顔は、優しい返事をした
いつもなら「なんだそれ？」と急転の不機嫌を晒す『こんごう』だが今日は違ったというか、あの演習以来彼女は無闇に不機嫌面を人に向けることがなくなっていた
長崎に修復のために立ち寄った期間、目が覚めてからの彼女はどこか理性的だった
ぶっきらぼうなしゃべり方は相変わらずで表情も乏しいだが、話を途中で退席したりあからさまに顔を合わせない背中で会話など今はない

雰囲気自体が極端に柔らかくなったという事もないのだが、人の言う言葉に耳を傾けるという余裕が出来たことで、断絶的な態度が無くなり
やっとの事だが普通に話せるようになっているとも見えた

「波の音は、あれだよ心身のリラックス効果があるってね。ＣＤとかにもなってるんだよ」

押さえていた額から手をおろし、その手で揺れる波の真似をしてみせると
「ザザザーっと押し寄せて、後は水が混ざり合う音、これの繰り返しなんだけどね。とってもリラックスっていうか癒されるっていうのか？一時期流行ってたりしたんだよ」

動く波形の手を見る『こんごう』は、どこか堅さの取れない表情を変える事はなかったが

「私達はいつも聞いてるハズなんだけど、そんな感覚はないな」
「そうだよね、人間も大地の暖かさってものに郷愁を覚えたりするんだけど、言われてみて…そうかな？って思うものだから、気がついたらの感覚なのかもね」

桟橋から離れた駐車場付近には、波打ちに人が入れないように大雑把な手すりが設けられている
人用の手すりというよりは車の転落を防ぐための大きめのコの字バー、潮に晒されてアールの部分はどれも錆び付き、平台の天端だけに黄色の塗装が残っている
粉川と『こんごう』は二人してそこに腰かける形で話を続けた

「ところで粉川、お前寒中水泳したんだってな」
大きめのバーに二人並んで腰を着けた瞬間に『こんごう』は変わらぬ表情のまま聞いた
「あ、は、それ知ってたの…」

口が横に引きつる、顔をあわせながらも言葉がつまらせる粉川
『いかづち』のところでは調査まがいな質問を自分から繰り出し続けた側だったが、『こんごう』は勘の良い事はよく知っていた

寒中水泳はネタ的には面白いが『こんごう』の顔を見るに、許される行為という見方はないような眉の上がり具合
しかも言い訳が通用しない相手
遠回しに話をはぐらかそうとしてもすぐに勘ぐられ見破られるだろうという思いから、できるだけ普通に話そうと息を呑み、天を仰ぐ

「あれはねぇ、自分の意志とは関係なく」
「自分の意志もなくやったのか？お前は夢遊病者か？」

気安く会話の出来る仲になったとはいえ、容赦のない言葉
粉川は目を閉じて思った。いつも感じていたのだが確信した『こんごう』はあまり言葉を選べない人なのだという事を

「いや、あれわね、『むらさめ』ちゃんが」
「一回目は知らないが、今日も飛び込んだんだろ？『うずしお』と一緒に」

さすがに海を生息地とする彼女達は耳が早い
粉川は参ったと一度は顔を背けたが、勢いよく振り返ると

「僕は被害者なの！！あれは！！『ゆき』姉妹って子達が『なるしお』ちゃんを虐めるから、止めようとして」
「落ちたのか？」
指をたて懸命の説明をする粉川の顔に付き合わせるようにした『こんごう』
鋭い目がもう一度聞く

「止めようとしてどうして落ちる？落ちたんじゃないだろ飛び込んだんだろ？」
「だから…話を最後まで聞こうよ！止めようとしたら『うずしお』

ちゃんが来て」
「怖くて飛び込んだのか？」
「だから…話を聞いて」

展開の早い会話
とても静かな夜の波打ちをバックに楽しむ会話とは思えないテンション

焦りながらも粉川は『こんごう』が以外とせっかちな事にも気がついた
今までなら畳みかけるような会話は、自分に対する距離のための方便なのかと思っていたのだが、そうではなく、とにかく結果を早く出したい
いわゆる彼女が生い立ちから持っている、結果を示し続ける事で自分を『こんごう』であると保たせてきた部分と性格が一致している事に気がついた

片目を大きく開き次の言葉を待ちかまえている『こんごう』と自分の間に平手を立てる
会話の中に間をおくようにして、一息つけると

「でね、その『うずしお』ちゃんは僕が『なるしお』ちゃんを虐めていたと勘違いして、プランチャーをご馳走してくれまして、結果海に落ちました。これが本当の話」
「プランチャー？なんだそれ？」

率直な質問、真顔の目が興味に動く

「あれ、『こんごう』はプロレスとかしらないの？」
「プロレス？『むらさめ』が好きなヤツだな。そのぐらいしかしら

んが」

粉川は笑いそうになった
『こんごう』はＹＥＳもＮＯも断言系の魂。微笑ましいというか潔いというかで
知らないものは知らないと言い切ってしまえるところは、とても好ましい部分であり
人物像が初恋の人と似ていた事に今更気がついた

今までは忍耐を働かせながらも相手の出方を伺う話方ばかりしてきたが、今日は違った相手の性格などをゆっくり把握しながらの会話が出来ている自分にちょっとばかり余裕を覚えた

粉川はそれにしてもと彼女の顔を見ると、あの人を思い出す
三笠も自身が知らない事には「しらん」とはっきり言う人だった
そして尖り目の『こんごう』に少なからずの興味を持ち続けられた理由がココで理解できた気持ちになった

三笠に少し似ている、『こんごう』

口から白い息を吐き、笑いをごまかしながら首をすくめる
涼しいを通り越した時期の海っぺりで、二人の距離は少し狭まった
星を見る目のままの会話

「以外だね、『こんごう』は格闘技とか好きそうに見えたけど」
「嫌いじゃない、柔道もやるし剣道もやるが、プロレスはなんか良くわからない」

これまた以外な答えに、今度は粉川が聞いてしまった
『こんごう』には『いかづち』にしような質疑的な会話はしないつ

もりだったがねこんなに話が弾むのならば興味のうる範疇で聞き、新しく彼女達を知るきっかけができるというものと

「柔道や剣道はやるんだ？みんなやるの？そういうの」
「基本はみんな身につけるものだ。帝国海軍の時代からそういうものはあるし、そう聞いている」
「聞いてる？誰に？」

彼女達が探す帝国海軍との絆、多くはない昔の資料の中で不思議な物言い聞き返す
普通の会話の中で返された質問に『こんごう』は目線と顎で倉敷岸壁の側を見ると

「海保の奴らが教えてくれた」
簡単に答えた
「海保が？どうして」

疑問は続く、海自と海保の艦魂は粉川が不審船事件の直前に見たミーティングの風景から、気心しれる相手として存在しているようには見えなかった
むしろ、毎日を海の警察として活動する彼女達の方が「自分たちこそ日本の護り」と豪語し、海自の艦艇には金食い虫と罵る犬猿の仲というイメージを持っていた

『こんごう』は目線を動かし、倉敷の岸壁の上の方
海上ターミナルの側の置くに浮かぶ船を指差した

「『ちくご』さんは大戦後からしばらく日本の港の仕事をした鎮守府付けの姉さん達に会ったことがあるんだそうだ」

『こんごう』が見つめる先を粉川も見る
おそらく一番型の古い巡視船である『ちくご』の姿、互いが白と青の波ラインを持つ船を確認したところで『こんごう』は続きを話した

かつて国土のほとんどを焼け野原にしたこの国
港には栄えあると言われた帝国海軍艦艇の姿はどこにもなくなり、
燃料に事欠き身動きの取れなくなった小さな船達がのこされた
上は旧・海軍の３００トン曳舟から下は１０メートル足らずの交通船達
復興のために所属も業種も違った姉達が懸命に働いてくれた頃の話しを
戦後どころか戦中から働ていた姉達は少ない資源のやりくりし、代替えはおろか部品の交換さえなかなか出来ない苦行中、贅沢を言えない国の懐を察したように船として耐久年数をはるかに突破しても身を粉にして働いた

長い者は昭和１０年から昭和５０年近くまで
頭の下がる話だった。当時を戦った船達にも人達にも
敗戦当時の人達、海防を任された者達の多くは帝国海軍の生き残りの者達だった
複雑な思いがあっただろうが、己の心を殺して
荒廃した日本のために、復興のために、海を開く作業から国を護る仕事まで多くをこなした

重い話に身をすくめ耳を傾ける粉川
『こんごう』は自分たちが探す絆を、ほんの少し手に持ってこの国を支えた姉達の記憶を『ちくご』から聞いたの話を噛みしめるように続けた

「『ちくご』さんが産まれた頃、姉さん達はやっとお休み（廃船，

解体）になれる頃に入っていて。港での最後の休みを柔道？いや柔術っていうんだな、そういうのを甲板の上でやっていたらしい」

戦後１０年、昭和３０年で東京オリンピック、平和の祭典を焼け野原だった国が復興の証として会した日本
高度経済成長と言われても、国土の全てが潤っていたわけではない
社会問題にイデオロギーの衝突、複雑化した国防

そんな時代を生き、次の世代に絆をつないだ帝国海軍最後の姉達
「帝国海軍の魂達は柔術を始め多くの武術を弛むことなくやった！
それが国を護る者の嗜みだし、己の心を鍛える鍛錬の場だから」
お役御免を得て、港の片隅に係留され解体を待つ間
最後の日々を朗らかに過ごした姉たちの記憶を『ちくご』が伝えてくれたことを『こんごう』は感謝していると話を閉めた

「そうか、繋がりを見つけたんだね」
「ああ、少しだけ、だけど大切な事だ。弛まぬ努力の源が柔道や剣道にあるのなら、私達がそれを身につけるのは当然というものだしな」

話の重さに頭を下げた粉川の背中を『こんごう』が叩いた

「しっかりしろ！！人だって同じようにこの仕事を続けているんだろ！！馬鹿な事ばかりしているなよ！！」
さすが力のある平手
背中にばっちり紅葉を残されむせる粉川は顔を上げると

「だから、僕が自分で望んでダイブしたわけじゃないんだってば！」
居たい刺激で正された背筋から手振りをして

「だいたいあの光がいい加減な力だから、海に落っこちちゃったんだよ。あの光あぶないよ！」
「移動で落とされたのか？プランチャーじゃなかったのか？」
「あっ…」

二回のダイブ、粉川の記憶は少しの混線で最初にやられた『むらさめ』の事を思いだしていた

「いや、最初の時は『むらさめ』ちゃんに飛ばされて…」

最初の話題に迷って粉川は口ごもったが、嘘は付けないと咳払いをすると大人らしい落ち着いた口調で
「あの日、『むらさめ』ちゃんに連れられて寄宿舎に行ったんだよ。アメリカ空母の艦魂が見えるかな～～って思ってね」
急に鋭く怪訝を示す目は
「合衆国海軍の司令艦を物見胡散に来ていたのか？」と、あきらかに無礼者を見る目

「いやぁ、興味深くって。どういう魂（ひと）なんだろうかな…って思って、外国の魂にあうのは滅多にないチャンスだし…」

そこまで言うと、やはりというか怒りに口を歪めた『こんごう』に一言謝った
平手を立てて頭を下げると
本当は泣く『いかづち』に引っ張られる形でその場に居合わせた事はさすがに言わず
本心ではないが、合衆国の艦魂にも興味があった事だけを懸命に告げた

「それで顔だしちゃいそうになって、『むらさめ』ちゃんにヤバイ

からって…飛ばされたの」
「自業自得じゃないか」
艦魂達のパーティーに首を突っ込もうなどあってはならない事
『こんごう』は人差し指を立てると、少し挙げた顎のまま以前粉川が海保の魂達とのミーティングに顔を出した時の事を例に出した

「海保はまだ同じ日本国の船艇だから、あんな程度ですんだけど。合衆国海軍は大事な同盟国の仲間だし、空母司令艦は大切なお客様だぞ！気を付けろよ！」

ごもっともなお叱り
人であれば司令官どおしの懇談会を立ち聞きするような無粋な真似にもなるのだから、厳しい言われようには申し訳ないと頭を下げるしかない

「はい…」

すんなりと自分の非を認めた粉川だったが、謝っておきながらも『こんごう』の仁王立ち飲酒が正しい歓迎かは疑問だった。だが詳しくあのときの事を話追求するような事はしなかった
あの時、飛ばされる事になった経緯は喉に深く刺さった棘となって容易に言葉にする事はできないと感じていた
『こんごう』とは、かなりうち解けた会話が出来ていると感じられているが『むらさめ』が答える事をしぶり、禁忌だとまでせ言った事を聞くには憚られた
むしろ聞いてしまってやっとココまでうち解けた交友関係が壊れてしまうのを惜しいと、本心で思えていた

手を重ね背中を丸める
禁忌についてはやはり『しまかぜ』に聞くのがベストだと判断して、

緩んだ口元をきつくつぐんだ

「粉川、何を隠してる」

伏せた背に電気を撃たれる感覚、この会話を閉じようとした粉川の顔に『こんごう』の青い瞳が心を刺すように問うた

「嘘を付かれるのはイヤだ。私はお前に嘘つかないと決めているからな。だからお前も私に隠し事をするな」

ゆっくりと頭を上げた粉川
立ち上がって返答を待つ『こんごう』

まだ言えない事はたくさんある、隠すなと言われても言えない人の事もある
だけど『こんごう』の覚悟が半端なものでない事をココに再確認した。絆への道のために人である粉川に尽力を頼んだ
その時から『こんごう』は粉川の話、知りたい事にはできるだけ答えようと決めていた
ワンサイドな申し込みをする程自分が他力本願一直線の状態にならないために

夜の紫を目の光りに写した顔には真剣さがあった
粉川はゆっくりと同じように立ち上がると一度浮かぶ月を見て、海に歪む月も見た

「『こんごう』…今から聞くこと、答えられないなら無理に答えてくれなくて良いよ。本当は『しまかぜ』さんに聞こうと思ってた事だから」

緩んでいた口元を縛り、鼻から少しの息をながし
目の前で静かに頷く相手の目を見て

「君たちは「人」と会うのは僕が初めてだと言った。でも本当は君たちの側で人と会う方法を持っている。それがどういう方法かはわからないけど、曰く禁忌（タブー）であるという事、でも僕はそれが何かを知りたいと考えている」

棒読みな言葉だったが、粉川的には間違った事をきかないように丁寧な対応をしたつもりだった

月明かりの下で間を詰めた二人の顔
相手の微妙な変化が隠れてしまわない距離の中で『こんごう』の目はゆっくりと、だが大きく開き静かになる
波の音だけが続く沈黙

絶えられなかったのは粉川の側だった
やはり『むらさめ』のような元気一発な性格を持ってしても言い渋る事を、規則に厳しい『こんごう』が教えてくれるどころか、禁忌に振れたことに怒りを燃やしているように感じたからだ

「無理に」
「こっちに来い」

断りを入れようとした粉川の前で『こんごう』は身体を回し背中を見せた
「ココでは目立つ、ついて来い」
開けた駐車場ではなく、奥まった防風林、少しだけ残されている木立の側に歩き出した
一歩出遅れた粉川は早足で背中を追うと

「教えてくれるの？大丈夫なの？」

自分で知りたいと言っておきながらいささか情けのない対応
方に茶色の長髪を揺らす『こんごう』は変わらない声で

「私に答えられる事は答える」

背中越し、振り向くことなく進む足は答えると月と星を遮った木立
の影に入ると、一度港をぐるりと見回した

１９時を回った佐世保の港は静かだ
ＳＳＫの大クレーンも活動を止め、港を回る船の音が少しだけ響く
慣れた潮の香りと波の音のしたで粉川は緊張していた
まさか『こんごう』がそれを教えてくれる気になるとは考えていな
かったから、ただ隠し事はしないという事を前提に自分がこの事を
いずれ『しまかぜ』に聞くという事を正直に宣言しておこうぐらい
の気持ちだったが
まるで夜の間を、逢い引きをする恋人のように隠れた二人

周りを確認した『こんごう』の光る青い目が粉川の顔に戻ると、い
いだろうと一息つく

「『こんごう』無理はしなくても良いんだ禁忌とまでいわれる事だ
ろうし」
この後に及んで弱腰の粉川に、闇の中でも相手の顔を見据える事の
できる高性能な目がしっかりと顔を合わせると

「それ自体は禁忌じゃない、問題なのはそれが起こった事件の方だ」

濁りのない口調で続けた

「粉川、お前も知っているハズの事件だ」

「事件？」

『こんごう』の目は一瞬だけ倉敷岸壁を見て

「お前は覚えてるか、潜水艦『なだしお』を」

粉川の胸に痛みが走る、自衛官なら、いや海自に属する者ならば忘れる事のできない名前に、息のつまる感覚に声がでなくなるが目は覚えていると答えた

『ゆうしお』型潜水艦５番艦『なだしお』

１９８３年に産まれ、２００１年、ほんの数年前に除籍された艦

「粉川、これはな船の魂ならば誰だって知っている事だ。私達は必ずその場に居合わせたのならば最後の仕事する。『なだしお』一佐もそれをしただけの事。人が何を思い、何を考えているかはこの時には関係ない、ただ私達は起こしては行けない事故もある。だから禁忌だと言われている。私達でさえこの事を語りたがらない」

言われなくてもわかっている事故

海自史上最悪と言われた海難事故、潜水艦『なだしお』と遊漁船第一富士丸の衝突

死者３０人、重軽傷１７人

ハープーン発射を可能とした最新鋭の潜水艦と、乗船定員を超えた遊漁船が起こした事故は、まだ学生だった粉川の耳にも入った一大事件だった

海自の立場を窮地に追い込んだ事件の話に、聞いた側の粉川の心が

萎縮していた
だが『こんごう』の目は本気の輝きで告げた

「事故についてはお前も知っているとおりだ。だが良い機会だ、そういう時の私達の事を知ってくれ」

そういうと自分の前で頭を下げた相手の肩を掴まえて

「話そう。いや、やっと人に聞いてもらえるのだから、しっかりと覚えておいてくれ」

月明かりを遮った闇の下で、真っ直ぐに自分を見る覚悟の目に粉川はただ静かに頷いた

第七十九話　私達の事（後書き）

続きは七十五話からどうぞ

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～　外伝　港の働娘

船底を叩く鈍く重い波の音の中で彼女は最後の仕事をしていた
ススを無造作に塗りたくるように蔓延させ、視界を霞ませる灰と、
床を何度もの波に揺られ溶けたナメクジのような液体の中で

「もう大丈夫」

彼女は、第２氷川丸は、赤く燃える地獄の門の前に座っていた
目を細め、静か甘い息を吹くように

昭和２０年、米国とは良い勝負だ熱戦だを奉じる大本営のねい言の中、氷川丸と第２氷川丸は各々の航路を使ってシンガポールから日本へのけが人搬送を行っていた

同じ道を同じように走るわけには行かない、船団は最小規模を組み細く長く海を行き来していた
この年最初に沈んだのは陸軍の舟艇母艦神州丸だった
新年を祝うなど蚊帳の外だった大日本帝国、そんな行事をしても神風は吹かぬと全ての色がはぎ取られた灰色、大戦最後の年が幕を開けた

1月3日、アメリカ軍の物量作戦と、通商破壊、潜水艦による猛攻の中を走った彼女は一度は味方の流れ弾で死に損ない、それでも陸軍を代表する船として修復復帰を果たした矢先の出来事だった

攻守を逆転したアメリカ軍を押さえるためフィリピン防衛の部隊をルソンに下ろし、門戸に向けて出港した所を狙われた
空を飛ぶ荒ワシ達の猛攻に命中弾5発、至近弾10数発をくらいボロボロの半身を晒して放棄され、彷徨う海の上で望郷の念だけで日本に向けて手を伸ばした姿に、米潜水艦の電撃を受けトドメを刺された

原型を残さぬ程の爆散により吐きされた彼女に同じ輸送船団として横を入っていた者は涙も出なかった

もう「言葉を残して死ねる時間もなくなった」「ただ撃ち殺される、必要以上の痛みを叩きつけられて」と
魂達の心は報われぬ搬送への絶望と、奪われる物資切り詰められた自分たちの写身に疲弊しながら、闇雲に海を走り続けていた
各々の道を使って、狙われぬようにと祈りながら、ただひたすらに内地を目指したが、最早猛攻のアメリカを止める術はなかった

陸軍寵愛の神州丸が沈められた3日後には、日栄丸が同じく門戸に向かう航路の途中で米潜水艦に攻撃を受ける
左舷後部機関室に直撃を受けた彼女は、それでも頑張った。物資と人を日本に届けようと気を張り続けたが届かなかった
5時間にわたる苦闘の末に沈没する

「この戦争、勝てるのかな?」

彼女はミッドウェイ作戦の補給艦を受け持った頃からそう言い続け

ていた
帝国を代表した機動艦隊の四空母を失い、待避中だった巡洋艦同士が激突
後に一隻は米軍の攻撃に沈み、艦首切断という血反吐の中に残された最上への重油補給をした頃から、彼女は死を感じていたのかも知れなかった

新年を開けたばかりの1月だけで輸送船団は旅団の壊滅を別として主だった船艇だけで20隻近くを失っていた

2月、氷川丸もまた日本に向かうため最後の寄港地としてシンガポールを入港していた
「怖いわ…」
もはやなりふり構って居られない日本は病院船である氷川丸にも臨時輸送を秘密裏に行うようにとの指示を出していた
それ以前から少なからずの食料輸送はあったが、本格的な指示が下ったのには当の氷川丸本人は元より、開戦当初からこの船に乗り合わせた医療技師及び船員達の顔も薄暗く曇らす程のものだった

そこまで日本は、本土は疲弊しているのか…と

氷川丸にとって「病院船」である事が自分のプライドを守る最後の砦だった。以前のように笑顔でお客様を迎える事が出来なくなった彼女にとって「せめて武器は積まない船であること」は心の救いとなっていたからだ
自分の仕事は傷ついた人達を内地に運ぶ事だけ、それだけを頑張りたいと願っていたのにと、それさえ守る事ができない日本に将来などないと泣き叫んだ
だがそういう思いが一人だけ現実から逃げようとしている夢見だと、妹達の死から学んでいなかった事をこの最後の航海で思い知る事に

なった
まだ客船だった事ばかりを夢見た愚か者であった事を、身に刻むように

黒いラベルラインを持つ重油缶を所狭しと並べた船底を氷川丸は、
疲れて光りを失った目で追っていた
船底に充満する機械の匂いに目が霞むのではなく、心に持っていた
信念をへし折られた気持ちで涙がにじむ

大きさが互い違いでまともな管理をされていたものとは思えない急
増のタンクに、海軍の制服に大きく赤十字を縫いつけた氷川丸は、
汚れの取れなくなった細い指を這わした
べとつく七色の水、荒んだ自分

同じように戦地で傷ついた人達の目に光りなどなかった
マラリアに栄養失調、骨と皮の上にボロの布を纏っただけの兵士達
を見れば、この先に希望を置くことなど不可能に近かった

泣き疲れ、赤く腫らした目と、顔を洗うヒマもなければ魂の力で復
旧もできなくなった惨めな姿のままタンクの頭を触りながら歩いた

タンカーとして産まれた船達でまともに残存している者はほとんど
いなくなっていた
あのトラック島大空襲のから、もはやまともな形のタンカーなどど
こにもいなかった
去年のあの年に、日本に燃料を届ける船達の大半が海の藻屑となっ
ていた

「どうして、戦い続けるの？もう止めてよ…」

甲板に上がり
荷揚げの作業も傷ついた人手を借りねばならぬ程の港を船尾で見つめたまま座りこけた
自分の写身を守るものとして船の前に立つこともできなく蹲っていた氷川丸は、ただ呆然と無事に日本に帰られるのかを思っていた

一瞬、いやもう少し前から氷川丸は己を立たせる気力を失っていた
魂の気力が落ちると、事故は起こる
不条理な事故は、疲れ切った彼女の背骨に布団針を刺すように響いた

波の打ち付けるニブイ重みとは違う、石が塗装を剥ぐような金切り音と共に
船尾に触雷した
海の上を走る船を後ろから突き上げるような振動が船の全部に響くと、病室に担ぎ込まれていた船員、兵士達の悲鳴が響き渡った

同じように振動を自分の身で激痛として受け止めた氷川丸は座った場所で、思い切り顔から甲板に向かい崩れ落ちていた

「いや…死にたくない…」

打ち付けた顔面、鼻の頭を叩く衝撃に地が吹きこぼれる
生きる事に希望はなかったが、死を恐れていた。口から唾液が溢れ痛みで圧迫された身体から黄色く濁った胃液を吐き出す
腰部を抉る傷は、濃紺の制服の色を紫に染め続けて、甲板にも鮮明な赤い花を咲かせていた
「もう、イヤ?ダメなの、もうココに居させて」

氷川丸は海を走る事を恐れていた、船として海を走りお客様を運んだ日々の事を考えればおかしな事とも言えたが

今は、優しかった麗しの海はどこにもなかった。身も心も傷ついた
自分で、忍び寄る魔物である潜水艦を避けて日本に帰るなど不可能
と、頭を振って泣いた

「ココに居させて！！もう動きたくない！！」

ならばもう動かず、ココで、ココにつながれてただの病院として居
続けた方が良いと思っていた
何も運ばず、武器も人も物資も何もかも運ばずココで死にたいと地
団駄踏んだ

唇をつたう汚泥の黄色と、絶えられない痛みに噴出した血の気混じ
りの鼻水に涙
荒れる息で、空を見る

「お願いよ！！私を助けて…」

力無く転がる氷川丸の傍ら、その身を立たせようとたくさんの船員
が振動を確認した箇所を覗き込み、声を挙げていた

「ヤバイ！！中の油槽と水槽がえぐれたみたいだぞ！！」
「浸水は不味い！内側から止めてくれ！！」

当たったのは水より下ではなく、少し上の部分だった
船尾の滑らかなアーチラインでは下を覗き込んでも完全に場所を把
握出来ないせいもあり
内側に詰めて部屋を閉じる作業に手順を変える

ところが懸命の復旧作業に入った人の姿を前に、何もして欲しくな
いと思う氷川丸の無気力は船内に更なる混乱を起こし始めていた

疲弊した心が希望の灯火を消すように、船内の照明が一斉に瞬きを始めたのだ
船が沈むときに照明は落ちる。収容された負傷兵達の恐怖は一気に高まり
助けてくれ、ただ願い縋るような声が響き渡った
走り回る船員達が叫ぶ
「お客様！！皆様落ち着いてください！！」
軍艦氷川と呼ばれた
海軍に徴用され病院船になった時、氷川丸には二つの名が与えられた
「白鳥氷川丸」と「軍艦氷川」
帝国海軍の数多の艦にも負けぬ行き届いた躾、その厳しさが彼女と船員の誇りだった
怯えざわめく負傷者達に声を挙げたのは、氷川丸最初からの乗組員だった
身に付いた躾が負傷兵達をお客様と呼んでしまったが、それが氷川丸の意識に光りを届けた
客船であったころでも海は優しいばかりではなかった。たまには機嫌を損ねた顔を見せ
木の葉のように自分を揺らし、お客様を不安にしたものだったが、彼はその時いつも恐怖を押さえ込める笑顔でそう言っていた
「氷川丸は沈みません！！必ずお客様の旅を完遂させます！！」
嘆きの声と励ましの声が交錯する甲板に
倒れた位置から首だけ動かしプロムの向こうに並ぶ病室、そこから溢れた負傷兵達の目が氷川丸の目に映った

痩せた顔の中に出目金のように浮かぶ目から、涙がこぼれ
節くれを通り越した骨の指が、一生懸命に手を合わせて

「たのむよぉ、日本に帰らしてくれ」

嗄れの声は、波に攫われそうな小さな声で祈っていた。みんなが故
郷を望んで瀕死の森から抜け出て、氷川丸に乗って国に帰ることだ
けを希望にしたお客様

「ダメ…ココで沈んじゃダメ、日本に帰るの…」

手を合わせる痩せた男達の姿に氷川丸は壁にもたれるように立ち上
がり、顔を汚した体液を袖でキレイに拭いとると
呼吸を整え、傷口を壁に押し付けて身体をいきり立たせた

「私は氷川丸、どんな時でもお客様を無事にお運びするのが使命」

手を合わせる弱き人達のために
自分が最後の希望だった事を思いだすと、船首に向かって歩いた
美しく凛とした背筋、頭からつま先まで
乱れこぼれていた黒髪を高く括り挙げ、唇に笑みを浮かべる

「ご安心下さい。船はこれから日本に向かい出港致します！！戻り
ます、必ず」

２月１４日、氷川丸はシンガポール湾沖で触雷、幸いに自力航行を
害する事はなく
傷ついた身ながら横須賀に向かって出港した

同じ頃第２氷川丸もまた日本に向けて出港していた

その身にはどす黒い武器を満載し、望郷の願いで飛び乗った人達の
希望とは別のもの
もう一つの安らぎのために休むことなく働き続けていた

第八十話　母の胸（前書き）

『なだしお』事件の真相を究明するといった要素は一切ございません。
これは艦魂達の物語ですから

恋愛に高い純度を持っておられる方には不愉快な部分があります
今話は特に本伝、後書き外伝ともどもそういう要素が多くありますのでセクシャリティーは純粋な行為のみとを信じたいたい方は決して読まないで下さい

ヒボシの書く艦魂は
ただやさしく
ただ可愛く
という存在ではありません、時に狡猾に見えたり、時に愛を必要以上に欲したりします

現実の世界でも全てを一つと言い切れるものはないので、依存する領域による倫理観の差によるものもあり
それが「人」には汚らしい行為に見えても
「魂」には普通の形だったりという部分があります

恋愛の箇所に掛かる場合もあります、それを不快と感じられる方は読まれないようご注意下さい

火星明楽

第八十話　母の胸

潜水艦『なだしお』

その名は現在この国を護る職務にある海上自衛隊の者ならば誰もが知っていた
戦後、この国を護る力として建艦された潜水艦
『ゆうしお』型潜水艦５番艦として日本国として最新の技術を導入した完全デジタル式ソナーシステムにアクティブアレイ装備の潜水艦であり
『なだしお』からはハープーンの搭載も行った。潜水艦建艦においては過渡期のモデルである

現在、呉にある海上自衛隊呉資料館に水揚げされ建築物として展示されている『あきしお』は１０人姉妹の７女、『なだしお』の姉妹艦艇でもある
そしてこの潜水艦『なだしお』はある事件によって日本中に名をとどろかせ、自衛隊組織の根底を揺るがした

潜水艦『なだしお』事件
１９８８年７月２３日
『なだしお』と遊漁船第一富士丸が浦賀水道にて衝突
総トン数１５０程度の船だった第一富士丸、２２００トン級の潜水艦との衝突に絶えられるハズもなく、ほぼ一瞬にして水没、轟沈という形で海に消え
短時間の水没により船内に残された３０名は何もできないまま死亡
衝突の衝撃で海に投げ出された者達１７名は重軽傷を追うという大惨事となった

ダンプカーに原付がぶつかったような事故だった

この事件にマスコミは早々と誤報を垂れ流した
「潜水艦は停止もせず通り過ぎた」
「停止はしたが救助には一切手をかさず、溺れる被害者を並んで眺めていた」
「救命ボートもださず、艦長はカナズチで事故にパニックを起こし臆病風に吹かれた」

聞くにも腹立たしい情報だったが、何故かそれが正義だと日本国民には知れ渡り
海自は一方的に「悪」の烙印を押され叩かれ続けた

後日、報道の誤りが明るみにでる事になるが、報道した側はこれを訂正しなかった
ただ言いたい放題
公共の電波を使って、自分たちの私論を声高く叫び倒して誤りを認める事はなかった

しかし火中の海自側に問題がなかったわけでもない
むしろ事故直後に行った海自の態度が国民感情を悪化させたとも言えた

富士丸の船長は海上保安庁の事情聴取・出頭命令には即時に従いおこなったが、海自の側がこれに対して「即時には応じられない」と拒否をする
事故の検証に当てられた時間の中、最初の七時間に空白を作った事は、海自の立場をより悪くしていた

『なだしお』の艦長は幹部連の中でもエリートだった
潜水艦乗りから海上幕僚長になるのは彼だろうとまで言われたほどの人物の処遇
優秀な艦長を作るのは莫大な時間と金がかかる、ましてや最新鋭の潜水艦の艦長
国家機密の固まりでもある潜水艦の中身を、軽はずみな言動で白日に晒すことは出来なかった

だが、海自がそれを守りたかったという気持ちは世論に大きく反していた

自衛隊は何がなくても、何故か愛する国と国民に非難される

昭和４６年に起きた雫石の事故で、事故原因究明より先に平謝りをした自衛隊は隊員達の士気を大きくおとしていた
なんども国防の盾達が頭を下げる訳にはいかないというプライドが空回った結果は悪い方向にむかっても仕方のないものだった

色々な思案の巡った事件だったが、浦賀水道を望む海難事故は二審判決で両者に非ありとくだされ
『なだしお』艦長には禁固２年６ヶ月執行猶予４年、第一富士丸船長には禁固１年６ヶ月執行猶予４年の判決が下り、灰色の決着に一時幕を下ろした

その後
当該艦艇だった『なだしお』は２００１年除籍、解体によって艦としては短い１８年の生涯を閉じる

「あの日、『なだしお』一佐、当時はまだ二尉だったが伊豆大島沖で公開訓練をした帰り道だった。もちろん知っているよな」

満月の輝きが身を隠した『こんごう』と粉川
吹き付けていた冬の波風の寒さが背筋を走る悪寒とシンクロしたように、粉川の顔色は暗くなっていた
満点を捧げられる美しい夜の下で、古傷の具合を確かめるというのは心地の良いものではない
身を隠した木にもたれかかった背中、静かに頷く顔に『こんごう』は続けた

「曇り空の日だったけど、波は穏やかで…でも二尉の具合は良くなかった」

「ああ、最新鋭の艦だったから公開訓練で色々な試験をした。その時に些少な不具合が2．3点あった、そう聞いてる」

極秘事項だった
粉川はでも全容を知り得ない事だったが、少ないながらの逸話は耳にしていた事を『こんごう』には正直にしゃべった。彼女達は艦の魂だ、不具合があれば彼女達はどこかに痛みを持っていたという事を知っていた事になる
当然、当時の事を他の護衛艦達に証言として残していても不思議ではないと考えた

「それは、ああ、あの事故以来私達は自分たちの側に不具合があると感じたときは積極的に「虫の知らせ」をつかうようにと通達された」

「虫の知らせ？」

話の端にでた言葉に思わず食いついた粉川の顔に、怒る事なく『こんごう』は答えた

少し寂しそうに睫毛を伏せた状態で

「ああ、基本私達と人とには架け橋がない、お前のように偶発的にでも私達が見えるようになる者がもっと多くいてくれれば意思の疎通も強固なものとなり、不具合の解消は楽になるハズだが…今でもお前しかいない、だから自分たちの側で人に異常を知らせるために「唸り」や「響き」、それに艦艇の運用速度の不安定化を出したりする。それを虫の知らせと言うんだ」

覚えのある話だった
護衛艦はどこか不具合が招じると、てきめんに何らかの鳴りがあったり、速度やタービンの調子を悪くしたりする
小さなモノでは、艦内に設置されている冷水器が一斉にとまり、冷やさなくなるなどという予兆をみせる

「あれは…ああいうのは君たちがやってたの？」
「そうだ、幸いにしてこの職務を共にする人は私達の変化に敏感だ。異常があると一斉点検をしてくれる。そうなれば事故は未然に防げるというものだろう」

なっとくの知らせ方
むろん、出航前などにそんな鳴りを響かされれば隊員にはたまらぬ労苦が増える
一斉点検に走り回る事になるのだが、粉川はどこかほっとした気持ちになった
彼女達の側がそういうシグナルをだしていてくれたという事に

「たすかってるよ。ホントに」
正直な感謝を示す
機械だと思っていた固まりの船。そこに心が存在する事で知ること

ができたこと

「とにかく『なだしお』一佐は公開訓練における最高速試験の結果が思わしくなかった。本人が思っている程でなかったそうだが、どこか不具合があるのではと探していたそうだ」

日本国の防衛のために作られる、期待を受けて産まれる護衛艦にとって自分の性能を把握する事は大事な仕事だった
特に『なだしお』は『ゆうしお』型の潜水艦としては初めてハープーンを搭載したタイプの艦艇だった
それらを含めて自分に課せられている重荷を十分に感じていた

期待される性能に対する評価、彼女は少しの焦りを持っていた
それが隊員や艦長に伝播したのかもしれない

浦賀水道に入ってから、不足分を補おうとした行動が思わぬ事故につながった

『こんごう』は伏せた目のまま、風に晒された頬に掛かる髪をかき上げると、一息ついて話を続けた

「事故については『なだしお』一佐は多くを語らなかった。というか、何も言わないふりして以降の任務を続けようとしたけど、司令達は知る必要があった。当時その事を調書したのは『しらね』司令だった」

『こんごう』誕生より少し前に起こった事件に対して人の事件追及とは別に、魂達の中でも追求と解明が進められていた
もちろん海保の側の魂からは突き上げるような事故への非難があった事も認め、話し合いをした事を教えた

頭をさげたままでも鋭く耳をきかせていた粉川の背中に『こんごう』は、ふいに注意をした

「粉川、人が求める事故の答えを私はしらない。私達は事故があったからと言って生きる道を返られないし、私達に人の法が施行させ刑を受けるわけでもない。あったとしても海保からの厳重注意程度だ。だからお前が事故の原因を知りたいというなら、私にはワカラナイとしか答えられない」

『こんごう』は事故の話に対して粉川が過敏になっている事を悟っていた
俯きながらも、海自士官として真実の原因を掴みたいという気持ちは身体の端に表れていたからだ、強く握られた拳に感じていた
だから先に釘を刺し、上げられた顔に事件と自分たちの関係を話した

「じゃあ何を『しらね』さんは解明しようとしたの？」
「単純に魂の心、私達自身に隙があったか？これが問題になっただけだ」

あっけない回答に粉川の目は丸くなった
人の社会の中では国民に憎悪の目を向けられ、存在の意義を叩き倒された海自の艦艇が事件の重大さと解明のしたかったものが「心の隙」程度という事に

「それだけ？」
おもわず相手の肩を掴みそうになった顔の前で、変わらぬ表情の『こんごう』は意志もつよく頷くと

「それだけだ、先に言ったように私達が起こしてはいけない事故で

はあったが、この事故を公言する事を禁忌という扱いにした。公言してお互いを傷つけないようにと、ただ事故の教訓を捨てたという訳ではなく、今もそれは各隊群の司令艦がしっかりと教育はしている。それが些細な事でも不具合があれば虫の知らせをつかうという事の通達にもなっている」

粉川は納得できなかった

人の社会では惨憺たる問題となった事を、職務を同じくするという海自艦艇の魂達が「心の隙」程度の扱いをしていたのに腹が立ったが、『むらさめ』の前で見せたような激発的な反抗を口にするような事はせず、自分を押さえた

ここで冷静になれた事で、感情だけの考えに染まらずにすみ一度首をふり自分に冷静さを取り戻すと、海自の魂達がお互いの間を割らないようにしているという事に、身に覚えのある言葉を思い出す事ができた

「ＤＤＧとＤＤＨの確執」

専守防衛の元「先に死ぬ者が必要となる」という彼女達の誤認いや、正確には誤認であると大手を振っていえるかは怪しいものだが、戦後この国を護る艦艇の魂に重くのしかかった防衛指標の前『しらね』が事故の原因究明に心の隙を挙げ、お互いが艦の魂として心を引き締める事を大切と結論を出した根底にあるものは、それしか思いつかなかった

事件の事で今度は潜水艦に対して亀裂の根を広げるような事がおこれば、人には理解できなくても護衛艦達の絆は完全に崩壊してしまう恐れがあったと言うこと

「公言してお互いを傷つけないように」

苦肉の指示をだした一群の司令『しらね』の悲しげな顔が目に浮かぶ
粉川は自分の主張を飲み込んだ。忍耐が必要な会話、彼女達は同じ世界同じ職務の元にあっても違う社会形態と生活形態を持っているという事を、頭ではまだ理解できないが、自分の胸を叩いて気持ちを静めるようにして拳を打ち付ける姿を見せられるに『こんごう』は気遣った

「粉川、納得しないのはわかる。私もそれでいいのかと思った時もある。だけど人は私達を法廷に引きずり出すことができない、そうなれば私達は今後こういう事件が起こらないようにしようとお互いを励ます、または律し、危険などのシグナルを送る方法を考えるしかない」

深呼吸とともに粉川は開いての言い分を飲み込んだ
この話で討論をするのが目的ではない事を思いだし、事件の事を追求するのはまたの機械にしなければ自分の腹に沸き立った火に油を注ぐ結果になる事を回避した

「わかったよ、事故話はココまでにしよう。それより人との邂逅がどう行われるかを教えて」

丸めていた背筋をのばし『こんごう』の目から顔を背ける
付き合わせたら、人の言い分をぶちまけてしまいそうな気持ちを抑える精一杯の抵抗で空をながめながら

「この事故の時に『なだしお』一佐は人との邂逅をした」

打ち切ったハズの事故の話の延長にあった邂逅の事に、粉川は困惑した

彼女達の言い分は彼女達の世界観において正しいのであり人の考えるものとかけ離れている
だがそれを修正する権利も術もない彼にとっては、心を泡立てる会話となりそうで
それでも粉川は忍従を心に置いた
違う生き物であるからこそ、相手を理解するための努力が必要と唇をかむ顔に『こんごう』は苦笑いを隠すようにした

「粉川…辛いなら聞かなくてもいいぞ。ただ私は良い機会だとおもったのだけど、やはり人は遠いのかもしれない。それでも私達は」
「いいんだ、続けて。ごめん、自分で知りたいと頼んでおいて…こんな態度はないよね」

振り返り頭をさげる、自分の思慮の浅さを叩くように額に平手をつけて
「ごめん、事故の事は僕たちにとっても禁忌(タブー)だ。今でも話したがるヤツはいない、君たちとかわらないよ、教訓にこそしたけど好んで話さないのは人も一緒だよ」
「そうか…いいのか？」
自分を気遣う目に粉川は頷いた、大丈夫と
自分の心を律しながらも話しを聞こうと頑張る背中を確認した『こんごう』は、軽く息をつくと

「そういう経緯から私達にとっても事故は禁忌(タブー)になったが…お前が誰に聞いたかは知らないが人との邂逅自体は別にタブーでも何でもない。普通にある事だ」
「普通に？」
普通にあるのに隠されていた事、悪いと思いながらも嫌味に吊り上がる眉を手で隠す相手の前で、『こんごう』は自分の発言に語弊があった事を正した

「ああ、普通…いや違うな、私達にとっても非常事態だ。だがこれは私達という生き物が必ずする事の一つとつながっている、隠すような事ではない」
『こんごう』は言いにくそうに顔を伏せると、すぐに顔をあげた
彼女の早い決断はしっかりと相手の目を睨むように見ると

「私達は、死に近づく人には見えるようになるんだ」

一息でそう言った

「死に近づく？」
「人が生死の狭間の中、危機的状況の中、死の一歩手前に立つときに、どういう原理かはわからないし、必ず全ての人に見えるというわけではないが、大抵の人の目に写るんだ」

そこまで言われて粉川は息を呑んだ
潜水艦『なだしお』は自分と衝突し沈没していった人達に姿を見せていたという事に気がついた
だから言えなかった。事故をタブー視する以上そこだけを向き取って話をするのは難しいことだったと理解した

頭に考えをめぐらしながらも話に着いていこうとする粉川の前で『こんごう』は自分が考えるこの現象について、少し距離をおいて話した
死の手前というものが、生という側から見た限界の淵であるとするなら底を覗く行為が自分たち魂の世界との一瞬のつながりになるのではと

「それは海での死…その時って事」

「そうだな、海で起こる死の時に私達が見えるわけだから、その時は私達も死の淵にいる時なのかもしれない。だから普通の時とは言い切れない、非常事態なの時ばかりとも考えられる」

お互いが死への底を覗き合った瞬間に見える相手として

「でも『なだしお』は沈まなかった。ならどうして」

海難事故で船が沈む時に人が魂を見るというのならば、沈まなかった『なだしお』は何をしていたという疑問

お互いではなく、片方の死の時に彼女は

「『なだしお』一佐は、衝突した船に乗っていた人達を、富士丸にかわって抱いたんだ」

「抱いた…」

「それが私達が死ぬ時に、共に海に出た人に与える最後の勤めだ」

目の前衝突と共に一気呵成に沈んでいった富士丸、その魂もまた一瞬にして命を失う程の事故だった

青い泡を吐き出す渦の波間に消える富士丸を見た『なだしお』が取った行動は、人ではできない事だった

沈む船に残された人達を少しでもやすらかに送るために抱きしめるという行為

海で死ぬというのは過酷な死である

場合によっては死体などを探がすことの出来ない世界に没するという事になる

あの日、豊後水道で起こった事故直後、あまりの短時間での水没に救いの手を差し伸べる船はいなかった

先に死んでしまった富士丸にかわり、主の乗せた客達を送るための

行為を
最後の勤めと言われる事を『なだしお』は行った

「私達は死の淵に立つ人達の分岐のために身体を開く。その人の愛する人の形で、時には安らぎの死の為に肌を与え、時には生きる力を注ぐために性の交わりをする」

言葉がなかった、粉川は風に吹かれるまま呆然としてしまった
およそ人では考えられない事だった
まるで身をひさぐ娼婦のような行為を正しいとか、悪いとかで判断する事は出来なくなっていたし、むしろこの行為の方がタブーとされていない事に驚いた

驚きに目が彷徨う粉川の前で『こんごう』の目は極めて正常で、それを当然の行為と断言していた
死は深い闇に落ちる恐怖の時だ、一瞬で理不尽な力の元に死ぬのならば尚のことに
だからこそ抱きしめると、人（男）にとって愛する物の肌の中に沈むのは、確かに安らぎであり、時として生きねばという思いを滾らせるものでもあるという事

理屈はわかるが理解の届かない事に目を白黒させる粉川はその時の君たちは何？知らぬ人との情事を重ねる行為に抵抗はないのか？
人の女を基本とした考えで出た最後の質問に唇は震えていた

「なんで、そんな事をするの…」

「人がいる事で私達は海を行く、だからその死が海で訪れる時は人にとって私達こそが妻であり、恋人であり、母である、思慕する者

に代わり当然事をするだけだ」

生と死を分かつ海の中で『なだしお』が行った行為は、涙の送り火
不慮の死に沈む人達に身体を開き、抱きしめるという愛だった

「三笠…」

粉川は海での死というもので、自分を抱きしめてくれた人の事を思いだした
身体に電撃の走る程の衝撃の話は、古い思い出に直結し自分にもかつて覚えのある事だったと気がつくと
『こんごう』から視線は離れ、彷徨うように海を、彼女を探す
ココにはいない、かつて自分を抱きしめてくれた人の事で。急に目に涙が溢れると膝から崩れた

「そうか…そういうことだったのか…」
崩れた粉川の姿に目の前に立っていた『こんごう』は肩をつかんだ
「おい、大丈夫か？」
小刻みに震える身体、震えて彷徨う手が肩を支えた『こんごう』の腕をつかむと

「僕は昔、海で死にかけた事がある…」

涙の混ざった声で語った

母を失った日に、父のいる海に向かおうと走った。走って走って三笠見える突堤から海に落ちた
何度も水を飲み、寒さに体温をうばわれ後少しで海に沈むところだ

った

「僕は助けられたんじゃなかった。あの時僕は死にそうだったんだ」

母を呼び泣き叫び、海に呑まれそうだった自分を三笠が救った
曖昧に覚えていたモノクロの記憶が蘇る
あの時、三笠は光の力を使ったわけではなかった。母を呼ぶ自分を
手を開いて抱きしめたのだ
2月の凍てつく海に、身体を凍えさせ譫言(うわごと)のように呼び続けた母の
名前の前で、長官公室のベッドの中に凍えた自分を包み込むように
招き入れると、裸の彼女は柔らかな白い乳房と温かい肌を与え、自
分を包むように優しく抱きしめた
三笠は生死の狭間にあった粉川に、生きる力を注いでくれた

「大丈夫妾がいる、妾がお前を愛してやる」

声がつまった、死の淵から自分を救った人に恋慕した、自分勝手に
告白した時からかわれたと思っていたが

あれに勝る愛などあるはずもなかった事を今更、いや、やっと理解
した
「その時に必要な愛」を三笠がきちんと自分に与えていてくれた事を
母の胸を与えていてくれた事を思い知り、大粒の涙がこぼれた

大切な思い出を忘れ大人になった自分がなさけなくて、見苦しいと
わかっていても涙を止められない粉川は、『こんごう』の腰にしが
みついたままで顔を上げられない状態になっていた

「『こんごう』…ごめん、しばらく顔をあげられない」

大切だった思い出のために流す涙、男泣きの顔を隠すように
肩をふるわせそのまま地面に伏してしまおうとした頭を『こんごう』
の手が抱き留めた
抱えるように手をまわし、そのまま頭を腹に押し付ける
「『こんごう』？」
「かまわん、お前が泣くのなら私が受け止めてやる」

母親がわりの魂と同じように不器用な愛を示す『こんごう』、抱かれた頭に温かい鼓動を感じながら粉川は、かつて自分を救った魂の話をした

「僕はね、海で死に損なって君と同じ船の魂に助けて貰った事があるんだ」

名前はまだ言えないけど、喉につまっていた感謝の思いを誰かに聞いて貰いかった
「独特のしゃべり方をする、ちょっと乱暴な魂（ひと）なんだけどね、母を早くに亡くした僕にはとても大切な人で、僕を今日まで育ててくれた人でもあるんだ」
「そうか、それで私達を見ることも出来たんだな」
自分たちを見られる人、粉川の話を『こんごう』は静かに聞き続けた

「そうだね、僕はいつか彼女に恩返しをしたいと思ってるんだ」

変わらない彼女、永遠に自分の母であることを示してくれた三笠への思いはやっと一つの軌道に乗った
恩返しにという理由をつくって、母を失い、妻を失い、息子を取られた自分の寂しさを紛らわそうとしていた、狭量な心が浄化される思いだった

「横須賀にいるのか？」
髪をなでる繊細な指は、いつになく優しい笑みで聞いた
「ああ、いつか『こんごう』にも紹介するよ。きっと喜ぶよ」
「楽しみだ」

彼女達の愛は深い、そして自分たちと共に海を行く者を分け隔てる事なく愛してくれている
だからこそね死の淵に立つときも、惜しむことなく肌身を与え、愛を注ぐ
今はそう理解しようと粉川は決めた
『こんごう』に抱かれた頭のままで、あの日、勝手な告白をした上に彼女を罵って走り去った自分の背中に、遠慮ない大声でどやしつけた三笠の言葉を思いだして笑った

「たわけ!!小僧!!一度は愛でお前を抱いたぞ!!」
その通りだった。死に損ないの非力な子供だった自分を優しく抱きしめてくれた三笠

「そうだ、僕は君の愛で生かされた。もうわすれないよ」

静かな波の音、白銀の月から涙を隠すように二人は夜の抱擁を少しだけ、お互いを許すように味わった

「いやや、そんなん嘘や…」

二人の姿に駆け出しそうだった『いかづち』を止めたのは『はるさめ』だった

粉川を倉敷から送った後、姉の言葉に心は揺れ動かされ不安になった
自分の方法で粉川との仲を詰めていくと宣言したばかりだったのに、
次の約束をより濃厚なものにしようと立神に飛んだ末に目の当たり
にした結果は予想を上回っていた

「はなしてーな!!姉はん!!わて!!」
「ダァァァメェ〜〜〜」

言われた先の出来事、『こんごう』に跪く形で抱きしめられた粉川
の姿は『いかづち』の心にファランクスの連打を撃ち込み、心臓に
絶滅の痛みを走らす程の衝撃になっていた
止まれない憤りは、走っていって二人の間を蹴飛ばす勢いだったが、
振り上げた手は『はるさめ』にがっちりと掴まえられていた

「姉はん!!『はる』姉は、わての味方やろ!!早う二人を離さな
!!手伝ってーな!!」
懸命に怒鳴る、涙声の口まで素早く『はるさめ』につまみ上げられる

「ダァメェ、今出てたら『いかづち』は、ただのお邪魔虫になっち
ゃうでしょ〜〜空気読めない人って嫌われるよぉ〜〜」

反抗の声をつまみ上げられた『いかづち』は涙の目と、跳ねっ返り
の頭を激しく振って
苦しい息のしたで叫んだ

「姉はんと二人で行けばええやん!!通りかかったみたいに!!」
「ダメ」

ゆるみのない断言を飛ばした『はるさめ』は格闘術で身につけた素
早い動作で、『いかづち』の身体を手を後ろにねじり上げるように

して引っ張ると

「恋愛は一対一が基本なのよ？知らなかった？」と睨み
反抗して暴れようとした『いかづち』の頬を張り倒した
いままで、柳のように揺れて視線もどこか飛んでいる人だと思っていた姉からの痛烈な一撃にメガネをづらした『いかづち』はその場にへたり込んだまま呆然とした

協力者からの諫言は容赦がなく、座り込んだ妹の鼻先に細い指を立てると
「いい、脇道を造らないためのお膳立てはこれからもいくらだってしてあげるぅ。だけど面と向かう恋愛に二対一の手助けなんて絶対にしないから～～」

涙で震える妹に、念を押すように

「恋愛は男（人）と女（魂）の戦いよ。頑張らないと負けちゃうの、あっという間にね」と、木立の影でお互い気恥ずかしそうに顔を合わせている『こんごう』と粉川を見せた
言葉にならない嗚咽を漏らし項垂れた『いかづち』は瞬間に転移の光の中に姿を消していった

残光を滝の涙のように散らせて消えた妹の姿を見届けた『はるさめ』は、今一度『こんごう』と粉川の姿を見つめると
浮かれたようにハミングしながら光の輪を現すと

「男を腹の上で泣かすとは…以外だったけど、ちょっぴり好きになったわぁ『こんごう』ちゃん」
満月の輝く港の中を自分の艦に向かって消えていった

そして深遠に輝く月は『こんごう』と粉川の進む道を示すべき使徒
を届けようと輝き続けていた

第八十話　母の胸（後書き）

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～　外伝　港の働娘

前話は七十九話からどうぞ
前書きでも注意してありますが、セクシャリティーは純粋な行為のみに該当すると考える方には不向きな箇所がありますのでご注意ください

氷川丸の進む航路は安全ではない
最早、日本国の領海だと思われていた海にさえ安全な場所は存在しなくなっていたのは、彼女に乗船する兵員達の警戒心から理解できた

四方の海を睨む、痩せた目達
昼夜を問わないアメリカ軍潜水艦の攻撃に船の魂である氷川丸もまた目を尖らせていた
実際は、潜水艦に見つかれば何が出来るわけでもない
いや、何も出来ない。夜であれば光らせていても赤十字のマークは見えなかったと撃沈されるおそれだってある

それでも気を張って、日本を、故郷を求める人達を帰さなくはいけない
戦争という非常事態に駆り出され、海を渡った人達を一人でも多く連れて帰らなくてはと
痛む胃を押さえて甲板に立ち続けていた

「ダメです、このままでは感染症を防ぐ事はできません」

重く軋むドアを開け暗闇の部屋を一歩でた先
月明かりのプロムに顔を出した白衣の男は、同じく白衣に手袋、マスクをしたまま手すりに身体を預けていた病院船氷川丸院長鍵山大佐に声をかけた
彼は疲れた目を冷やすように打たれていた風を受けていたが、自分の後ろに立った手術医を見ると

「モルヒネは？」

返される言葉がわかっていても聞かねばならない、今この氷川丸のけが人を言ってに預かる男の眉間には険しい亀裂が刻み込まれている

「たりません、少しどころかまるきり」

歩を進めプロムの側に、大きな声では語れない船の医療の限界
「そんなことより、副作用の改善ができず悪化するばかりです」
プロムの渡りをゆっくりとあるく鍵山は、手袋をむしり取るように外し自身の疲れ落ちくぼんだ目頭を掴むと

「みんな弱っている、皮肉なものだ。この船に乗れた事の安心感から、弱った身体を持たせていた者のたがが外れてしまった」

そういうと後部の重病人室に目をやった
乗船の段階から怪我人、病人は区分けをして部屋をあてがわれる
最初の頃はこの規則は厳しく守られていた、いやむしろ今でも氷川丸に置いては最低限守られているのだが
収容人数が予想を超えるようになった昭和１９年下半期からは、そうも言っていられなくなっていた

乗せられるだけの負傷者、それを上回る数の南方で病気に冒された者達
亜熱帯の及ぼす病気は感染率が高いうえ、日本兵はどの部隊をとっても平均的に栄養失調気味の状態で病気を蓄積している状態で船に乗っているというのが現状だ

負けているのだ。日本は、何もかも充足せず人間の心まで欠け始めている

攻勢にでるための作戦などと銘打たれ、兵員の輸送を続ける船の半分は目的地に着く前に沈められている現状を見れば、いかに骨かが無理強いな戦争に傾き始めているかは理解できる

「このままでは船の全部に病気が蔓延してしまいます」
「わかっている」

鍵山は対策を講じてはいた。前序のごとく軽度の怪我と病気の者、重度の症状を持つ者を区分けし衛生管理も徹底してきた
だが、限界がある
悪条件を生き残った者達にとってなんとしても日本の地に帰り着きたいというのは神に縋る願掛けに等しい
その幸運を届ける切符が氷川丸
チケットを手に入れた者達の心に安堵が宿るのは仕方のないこと、今まで戦い詰めだった者達が戦地を離れる事で得る安心感は不幸なことに病気に対する耐性を極端に落としていた

「隔離しきれません」

焦りの声を前に、鍵山も医者としての最大限の努力の末に尽きた策に答えようもなかった

沈黙が波の音だけを響かせ、水面に浮かぶ月を歪ませる
心地よい南国の風邪が日本に近づくほどに冷たい刃となるのを感じる中で二人の医師は、万策の尽きたこの船の病人達に何が出来るのかと嘆き、祈っていた

「前方!!船影あり!!」

深く悩み頭を抱えた二人の医師の耳に、だみ声の警戒が走った
「なんだ!!」

船橋の窓に向かい鍵山が声をかけるが、見張りは目を凝らし沈黙をまもる
こんなところで米軍の船と当たれば日本に帰る事は不可能となってしまう

「何だ!!何が近づいている!!」
鍵山のとなりに走った若い医師は思わず叫んでしまった

「第2だ、第2氷川丸だ!!」

大声で病人達に不安を煽る事はできない、叫んだ彼の口を親冴えていた鍵山は前方を行く船の招待が知れたことに大きな溜息をついた
敵ではなかった事に対する安心を実感しながら、氷川丸に乗った負傷兵達の気持ちを少し理解した

その頃船首にて自身を保たせていた氷川丸は、視界に写った第2氷川丸の影に鍵山と同じように安堵の息を漏らしていた
二人が再会したのは１９年の１１月以来の事だった
近づく船に氷川丸は、心細かった航路の中で出会えた妹に少しでも早く顔を合わせたいと考えていたが、彼女は船首にはいなかった

「承諾して頂けました」
「…須藤くん、これは悪魔所業ではないのかね？」
氷川丸はくくりつけの救命艇を下ろす作業に入っていた
下ろされる船には重病を患った者達が満載されていた

「大佐、このままでは氷川丸の軽傷者まで感染症にやられてしまいます。処分が必要なんです」
氷川丸から第2氷川丸へ、重病の者達を移し替える
軽傷者だけならば、クスリも数を揃えられない氷川丸内での感染症の蔓延を防げると、須藤少佐は考え、重病の者を第2氷川丸に引き取って貰うことにしたのだ

「処分か…」
須藤少佐とて医療関係者、自分がどんな判断を降したかはわかっていた
噛む唇と滲む涙で
「全部、自分の責任ですから気に病まないでください。大佐は病人の事だけを考え…」
手をあげる鍵山は声を遮った

「責任は全て私のものだ。君が進言してくれた事を受け入れた。生きられる者を生かして日本に届ける。今はそれが最大限の努力であり決断だ」

助かる見込みのない重病者、氷川丸に乗ることで感染症への抵抗力を落とした者達
日本への帰国を望みながらも、帰れない者達の姿に鍵山は敬礼した

「すまない、もう何もできんのだ。許してくれ」

白衣の軍医は、氷川丸を去る者達の姿をただ静かに見つめ続けていた

「氷雨（ひさめ）、どこにいるの？」

氷川丸は姿の見えない第2氷川丸を探して彼女の側に飛んでいた
同じ名前を持ったことで区別をするのに「2号さん」と呼ぶのはとても失礼だし、妹の名前を付けるわけにも行かなかった氷川丸は彼女の事を氷川神社の主祭神の一人、奇稲田姫からとった名前から『クシナダ』と名付けようとしたが、彼女に断られていた

理由は姉の名前を頂いた神社の神様の名を貰うのは気が引けるとそれよりも是非に「氷」の字を頂きたいと願われ、単品の字では形的に名前に遠かった事から雨の字をつけて、氷雨と呼んでいた

何度もの呼び出しに姿を見せない第2氷川丸
彼女の船体に移って最初に確認した怪我からも、心配は動悸を速めていた
2月の入港時に触雷した氷川丸だったが、同じ2月に彼女もマレーシアの切っ先、ジョホールバルにて触雷、怪我の度合いは氷川丸の軽傷とは違いセレターにての応急修理が必要な程になっていた

怪我を塞いだ穴
それでも休むことの出来ない辛さは、自分の身に起こった事からも
良くわかる
胸を押さえながら、きっと倒れている妹を捜したが、すぐに違和感
を感じ取った
暗すぎ船内、気味の悪い程に波の音に混ざる重病人のうめき声
それと、べとつく湿気を充満させた通路で、客室を改造して作られ
た病室から匂う腐臭

「この船…」

病院船と呼ぶにはあまりに酷い環境
プロムにしみ出した液体が足下を汚す、表の階段を下りた所には耐
え難い匂いが遠慮なく漂っていた
灰鉄にまみれた重油缶のとなり、白の堅固なボンベに詰められた液
体アンモニア、そんな物の管理がしっかりとなされていないのか？
毒性を持つ香りの片鱗を垂れ流しているのかのように重い空気

小さな照明がスズランのように続く通路の中は、とぐろを巻く猛気
と悪臭で満ち、悪魔の姿が目に見えそうなほどの濃度を上げていた

氷川丸は目を細め、自分の黒髪に匂いが付着するのではという思い
で何度か手を振る
視界を遮り始めた本物の白い煙に

煙突のある直下、ボイラーに近づくラッタルは黒く油まみれに、魚
の腐った身が溶けるようにこすりつけられている
進む方向には悪夢しかないという予感の中、それでも感じられる第
２氷川丸の気に歩を進める

「氷雨…こんなところで何してるの?」

船の魂が好んでこんなところにいるとは思えない
そもそも身を持たせるために船首付近に姿を現しているのが常の魂達
風を浴び波を感じる事は彼女達の精神にはとても大切な事のハズなのに、この奥まった通路
悪臭を吐き出す事の出来ない袋小路の先のドアに氷川丸は手を置き、開いた

「氷雨…」

開かれた扉からは、目を刺すほどに濃度を上げた腐臭が熱気を伴って飛び出してきた
部屋の中はまるで南国のような熱気、しかし香りは腐った湿り気で充満させている
部屋の奥まった中央には焼却用の釜が赤い口を開いていた

踏み込んだ足にかかるヌルリとした液体、何もかもが壊れた世界の真ん中に氷雨は一糸まとわぬ姿で、黒こげに見える棒のような人を抱きしめていた

「おかえりなさい、もう大丈夫」

縛り上げていた柔らかな髪が、少しこぼれ、白い肌を這うように見える

「氷雨…貴女何をしてるの…」

裸の彼女のまわりには、無数の手が白いの肌を求めるように伸ばさ

れていた
艶めかしい割り座の足に絡みつく手と、生を求める目
腕の中にいる男もまた、懸命に骨の指で氷雨の乳房を吸おうと伸びていた
「ああ、う、…静ぅ静ぅ」
「ここにおります、こわくないです」
窶れた青髭の顔には片目がえぐり取られたように失われ、腐り始めた肉が液状化してこぼれだしていた
第2氷川丸は彼の顔を自分の白い胸を近づけると「どうぞ」と微笑んだ
骨の指が食い込むように乳房を掴み、ひび割れた唇が乳首を吸い上げる

彼女は与え続けていたのだ。
戦地からこの船に乗り合わせる事はできたが、とても日本までは持たないであろうと言われた者達は、感染症の蔓延をふせぐために船底近くの火葬場のとなりに投げられていた

室内衛生などどこにもないこの闇の部屋に
一日中火を焚き続けても死体は8体しか焼けない部屋には、焼き待ちの死体が重ねられ身体の組織を腐らせ溶かし出た液体でぬかるみを作っていた

助かる見込みのない者は水も最小限しか与えられずに、隣に待つ地獄の釜へと投げられる順番を待っていた
待つ間に、死ぬ者の朽ちて行く死に体に囲まれた地獄絵図の中で氷雨は悲しみの愛を与え続けていた

泣いて望郷を願う者達の最後希望を叶えるために
愛する者の胸として、愛する者の身体の代わりを与え続けていたのだ

死の淵でめぐり逢った魂は人に最期の奉仕をしていた

「氷雨…貴女は…どうしてこんなにまで」

氷川丸の顔は涙でいっぱいになった
自分は病院船で、武器を積むことをおそれ駄々をこねた。自分に希望を託した人を運ぶことを拒んだのに
傷つきながら、自分以上に過酷な仕事を課され。武器を山積みし資源を樽で運び、その上で重病者を見取る愛を与え続けた氷雨の肩を抱いた

「だって私は客船に戻ると、お姉さんと誓ったんです。だから今もこうして私に乗る全ての客を運びます。間に合わない方には死出の旅立ちへのエスコートもいたします」

苦しみの航路、良い旅ばかりを夢見てきた氷川丸には、前に下せた判断が精一杯だった
自分に乗る負傷兵もお客様と思いこむ事で自分を保たせてきたに過ぎなかった事に涙がでた

「姉さんと呼んでよいですか?」痩せた病人のようだった第2氷川丸事氷雨の方が、自分以上の覚悟をもって海を走り
儚くも、この狂った地獄に死なねばならなかった人にまで愛を与えた姿に心から頭が下がった

「ああ、静ぅ」

彼女の胸に、きっと妻を想った男は大きな息を吐き出すと命の最後の旅を終えていた
「お疲れさまでした…」

二人の目に止めどない涙

「あの子こそ炎獄のマリアだった…私にはとても出来なかった事を、あの子はし続けた」
思い出を語る氷川丸は溢れた涙を拭いながら、大日本帝国最後の日々を走った時を語った

昭和２０年８月１５日、帝国はついに敗北を認めた

第八十一話　オレの嫁（前書き）

色々な事があってつかれましたが、頑張ります！！
今話はちょっと勉強がいるかもしれません。私もたくさん勉強しました…ふぅ

第八十一話　オレの嫁

「良い月ですね」

木立の影で熱くなった心を冷やす夜風を浴びていた二人の背に掛かった声には、通常の空間であり得ないような深いエコーが掛かっていた
まるで石積みの高い屋根をもつカテドラルの中に自分たちがいたかと錯覚をするほどに驚き

『こんごう』は腹に抱えていた粉川の頭を叩き飛ばした
不意の打撃に受け身も取れないまますっころぶ大男の前には、深紅の衣装、裾を風に揺らした人物が霞の月の下に写る

突き飛ばした頭から素早く敬礼の姿をとった『こんごう』とは別に、飛ばされたまま姿勢を直せなかった粉川は膝を着いた先にみえるローヒールを下から順に眺めていた
まるでそびえる佐世保電波塔遺跡を目で追うようにゆっくりと上がる顔の先には長い黒髪を揺らすシルバーの目、鼻筋の通りは西洋人らしく高く、白すぎる肌の浮世離れした顔の輪郭の中、眉毛が霞み目の大きさが際だつ人物
言葉を失うのは、彼女を覆う月光のラインに神秘の姿を実感してしまった事で粉川はだらしなく口をあけたまま相手の顔を見つめていた

その呆けた顔、緩んだ身体に強烈な蹴りが入る
「何ぼさっとしているか！！敬礼！！」
四つんばいに近かった腹を下から蹴り上げられるという激痛に粉川は飛び起きると
「ちょっと！！真面目にヤバイよ！今の角度！！」

怒りの顔を『こんごう』に向かわせたが、今度は顔面に縦割りのチョップが入っていた

「静かにしろ!!無礼だろ!!」

遠慮のない激突は粉川の鼻筋に激痛を届けると、倒れる事を許さずそのまま耳を引っ張って、目の前に立つ魂の紹介をした

「アメリカ合衆国海軍、今回の演習にて潜水艦隊の旗艦を勤められた方。ザ・シティー・オブ・コーパスクリスティー大佐だ!!敬礼しろ!!」

引っ張られた耳の穴に直接固形の言語を叩きつけられる衝撃で、身体が斜めながらも間柱を注入されたがごとく真っ直ぐ立つ

痛みに吹き上がった汗のまま、片目を大きく開いた粉川は目の前に輝く妖精に対して敬礼をした

「失礼しました!!日本国海上自衛隊粉川一尉であります!!」

慣れたものである

普通の人なら、夜更けに現れた彼女の姿に別の動揺を示すだろう、見えているのならば

敬礼などする事の意味もわからない事だろう。だが粉川には経験のある怒鳴り声に対応もできた

相手の姿に驚くなど今更な事。見えない人でなく、見えている人としても驚くことではない。佐世保の基地の中で出会う魂、ましてや日本人離れした顔とくれば『こんごう』に言われるまでもなく何処の艦艇の魂なのかはわかるというもの

それ以上に耳を引かれる苦痛の中でつい、口元が緩むのは初めて佐世保にきた時に『ちょうかい』と出会い、即座に怒鳴られたこと。

『くらま』司令に敬礼せよと、それが思い出にうかびさすがにその姉である『こんごう』がお手本のように同じ事をばっちりしている

のに痛みの中にも懐かしさを覚え、ついにやけた

「何、笑ってるんだ」

しかし笑みには時と場所を選ぶときがある。『ちょうかい』があれほど硬い一面を持っているのならば容易にその事もわかっていたハズなのに…その姉で名を『こんごう』と、とても素手では太刀打ちできない硬い石のごとくの魂、怒りの顎が目の前に現れたことの必然に粉川の目は一瞬にして波乗りの頂点で固まり、敬礼したまま

「すいませんでした！！」

兵学校の三下のように謝罪した

鼻筋一線を真っ赤にした粉川の顔に、おそらく艦魂随一の神秘の化身であるマリアは口を押さえて笑っていた

程よく月は空の頂点に昇ろうとしている時、波の輝きも月の柔らかい破片を泳がせる静かな世界

これから粉川と『こんごう』の進む嵐の道のりを示す最初の出来事にしては滑稽な幕開けとなっていた

一通りの騒ぎを収めた二人は木立を抜け出て前に広がる突堤を、コーパスクリスティーの後ろを従うように歩いていた

良い月の夜、そう言って現れた彼女の肩越し

青白い月が大気に振れる細かな光の舞の中で丸く浮かぶ

２０時前の時間にしては静かすぎる波は秒を刻むように押しては引く様子で、明日も晴れた中に強い寒さをつれてこようとしているのが肌に感じられる

粉川は羽織っていた上着の前を閉め、前を浮遊するように歩く赤い

影の主、スータンの姿を不思議そうに見て訪ねた

「コーパスクリスティー大佐は、その従軍神父なんですか？」
振り返り葉しないだろうという予想の中で、それでも背中に向かって軽い会釈をした後で、深い闇を織り込んだ赤のスータンを見るに合衆国軍では少なくない宗教関係の軍務者と思われる魂に問うた
粉川は自分の問いが実に不自然なものであることを理解していた

女という形を持つ魂に「神父」と
魂という人とは違う者達にある「信心」とは、何であるかに触れようとした

「そうですね、そうともいいますね」

振り向かない顔は微動だにしない背中越しで答えると歩を止めた
黒髪が背中の中程までを隠す、背丈は『こんごう』より低く『いかづち』ぐらい
止まった位置からゆっくりと首をあげ、月に目を向けた顔が振り返る

「私の事はマリアと呼んで下さい。私に佐官名は必要ありません」

灰鉄の瞳が、探求心の目を向ける粉川を試すように微笑む
静かに白い眉と、雪を乗せたような睫毛の下で

「ダメだ！こいつにまで呼び捨てを許可するなんて」

心を探る神秘の目線の前で、挑戦的な顔になっていた粉川の肩を鋭さを伴った手が「さがれ」と引っ張る。お堅い『こんごう』は階級的に自分と一緒の相手を粉川が呼び捨てするのは無礼と睨み
両肩を揺さぶると、急に真顔で

「お前、もういいだろ。今日は帰れ」
取り憑く島のない三角目を光らし、本当に迷惑だと自分より高い位置に顔がある粉川に顎をあげる
まくし立てる剣幕の上で粉川はまだ早い夜の時間である事を理由に、海外艦艇の魂との交流を本気でしたいと思っていた
考える先にあるのは、自分がまだ魂達の真実に遠いという気持ち、だからどんな角度からでも迫っていけるのならば眠りなど無用と思えるぐらいの心境で、睨む相方『こんごう』に
「まだ早いよ、せっかくだから少しぐらいお話したいし…」
「お前は無礼者だから、突然何を言い出すかわからん。鉄拳が別れの挨拶になる前に帰れ」

制服のスカート付近、マグマという火薬を込める拳を前に一見普通に見えるしぐさの中でがっちり防御態勢を整えた粉川は、猛烈な反論をした

「ちょっと、『こんごう』暴力に訴えるつもり?僕は君に比べたらよほど紳士的だよ。それに、コーパスクリスティー大佐の前で「おまえ」はないでしょ、それこそ失礼というものだよ」

基本は『こんごう』より自分は大人という自覚をもっている粉川だからこそ邪険に扱われるのは心外と肩を掴む『こんごう』の手を丁寧に振り払うと顔に向かって同じように顎を立てて

「日米艦魂の親睦大使ともいえる僕に失礼だよ!!」
「それは私がやっているから、お前はお呼びじゃない!!」

場違いなつばぜりあい、立ち止まった二人のにらみ合いを振り返ったコーパスクリスティーは

「良い夜ですから、二人ともご一緒にしばしの時間を楽しみましょう。そのためにもお互いが気心しれる名で呼び合う事が良いと思います。ですから気にせずマリアと、畏まる事なく参りましょう」

白い手で固まる礼儀の空気を振り払うと、困惑の眉を見せる『こんごう』に笑みを見せ輝く銀色の目で合図した

「今夜を楽しむためにも、是非にゆるりといきましょう」と

一方、自分を遮る『こんごう』の背中の前で粉川は別の衝撃を受けた
思わず口元に力が入ってしまうのを、俯く事で隠すと思いだしていた
最初に『こんごう』から官姓名を教えられたときに、ぼんやりとだがやけに長ったらしい名前に聞き覚えがあると記憶を漁っていたところで、合致を得ていた
冷徹にも見える切れ長の目、下から緩いカーブを書き上げるような流麗ラインの中に輝く銀色の瞳の主、愛称…マリア

護衛艦で唯一、三笠との面識を持つ魂は『はるな』であると『こんごう』に教えた魂の顔を確認するように見つめた
食い下がってココに着いてきた意味に心を硬くする
目が思わず吊り上がっているのを隠すことが出来なくなった男の顔に、銀の瞳は切り返した
目に掛かる髪を軽く跳ね、本論よりも最初の交流をと

「盗み聞きするつもりはなかったのですが、先ほどのお二人の話聞こえてしまいまして…粉川一尉、先ほどの話の中に疑問がおありのようでしたね。そこで今ひとつ変わった角度で先ほどの話しを見直してませんか」
そういうと左手に抱えていた分厚い本を前に出した

「Ｂｉｂｌｅ…ですね…」

黒い皮を板張りの下、分厚い表紙と背、裏に覆うように着けた本
装飾に金縁のラインが四方の留め金として入った聖書

「お二人はお読みになった事はありますか？」
波に同調するような静かな声に『こんごう』は申し訳なさげに、無いと答え
粉川も同じく無いと答えた

「そうでしょうね、この国には唯一一神を祀るという風習はないようですから」
そういうと分厚い本の真ん中よりさらに下った終わりに近い箇所を開いて見せた

「人の世での区分から、新約聖書内ルカによる福音書２０章２７節から七人の夫を持った妻の話。聖書の言葉はよくたとえ話としてつかわれます。そこから自分に当てはめるという形で、たまに曲解解釈をする方もいますが、今回は「さわり」の形でご紹介しましょう」

英語ではない文字で書き綴られた聖書
紙面は石を押して作り上げたような黒い文字で埋められ、刷り込んだ染料の重さがあるのか一枚のページが木の板のような重さを感じさせている
大英博物館などでみられる判物を押し込んだ横文字の羅列とそれぞれの章を分ける証印
とても粉川には読めるものではなかったが、話の中の疑問について見抜かれたのは心持ちが悪かった

愛には色々な形があるからこれを禁じ手というは基本的には無いです。本音で無くてもそう答えたいという思いが半面の気持ちに逆らえず、文字を追うふりをしながら『こんごう』の顔を横目で見た

最後の抱擁をする者、死ぬ人達を抱きしめる行為。場合によっては生きる気力を授けるために情交も辞さないという態度を果たして純粋な愛と呼んでいいのか?またそれが複数の人であったとしても彼女達が拒まないというのを、男の自分が受け入れられない引っかかりとして持っていた事をコーパスクリスティーの銀の瞳が見抜いている事に気持ちを悪くしていた
だけど、ココでこの話を突き放してしまうと彼女達の生態系を否定する事になる
なによりも、疑問以上に残されている問題解決の糸口を逃すことが出来ないという気持ちから

「お聞かせ願いますか?」

返事を待つ静かな影、銀の瞳に頼んだ
「聞いていいかな?」
頼んでおいて今更だったが、『こんごう』にすまなさそうな顔を見せた
先に『こんごう』が聞かせてくれた話をしっかりと理解していなかったのではと勘ぐられるのが怖かったための会釈に
「お前が知りたいのなら、かまわない。私も聖典の話は聞きたいと思う」
いつもの尖り目は同意をした

二人の意見が合致したところでコーパスクリスティーは開いた書を

自分の側に直すと、クリアグリーンに塗られたネイルの指で文献の箇所をなぞった

「これは主を試すサドカイ人（祭司派＊1）が当時の時世に乗っ取った中で、神の王国に復活を果たすとされる人達の過去と未来を値踏みした時の会話です」

いきなり難しい民族の名に躓きそうな粉川は唇を噛み眉をしかめた

聖書というものは名こそ世界的に知られているが日本人にそれ程なじみ深くはない、ましてや内容を知る者などはさらに少ない

教典の元にあるもので名前が挙がるのは正直「イエス・キリスト＊2」ぐらいという人が多いくらいだろう

当然粉川もそうだった

サドカイ人と急に言われてもわからない、顔の中央に皺を寄せて隣に立つ『こんごう』に耳うつ

「サドカイ人って…誰？」

顔は正面で身体を反らすように小さく聞く声に、舌を刺すような目線

静かに聞けという赤いオーラに元の位置に身体がもどる

二人の様子を察したかのように教典を開く彼女は静かに微笑むと

「何人かはそれ程問題ではありません。この話で重要なのは七人の夫もった妻は誰の妻なのかという事です」

そういうと簡潔に章の中身を説明した

かつての民族・原則に従ったユダヤ人達の婚儀の元にあった一つの話

繁栄のために二人は結ばれるが夫は不慮の死を得て無くなるところから続く章

当時の民族繁栄と、一族の血を残すという原則に従い兄弟の内の一

人が寡婦となった彼女を娶る
ところが、彼もまた死んでしまう
原則はつづけられ、彼女は一族の兄弟の妻としてまたも娶られる
ところが、彼もまた彼女との間に子を残すことなく死ぬ
これが七人目まで続けられるが、ついに子を残すことなく妻も夫達も死ぬ

さて、この一族は天におられる唯一一新の神に信心する者達で、天の王国を約束された「復活組＊3」である
時は満ち、神の到来によりコレまでチリに返った者達が復活を果たす時
一族は皆王国の民となるために蘇る。夫達も妻も

「その時、彼女は誰の妻になりますか？」

会話を理解しようと頭を悩ませ目を白黒させる粉川の前、コーパスクリスティーは感想をどうぞと笑い
『こんごう』は顎に手をあてたまま粉川を見つめていた
二人には答えがわかっている様子に粉川は一人で焦っていた。まるで小学生が新しい数式の入った数学に目を回すように、今日まで聞いてきた事とは違う世界観に戸惑っていた

捕捉は何もないが、当時の民族が一族の血を残すために迎え入れた女を妻とし、不慮の死により夫なくした彼女を子孫繁栄の子を得るために次々に妻として娶るというのは、時代の差があるとはいえ倫理的に言ってどうなのかという問題
ましてや一族の血のために、血のつながる兄弟で妻を分けると言う行為には抵抗があった
額を何度か叩くと、ごく普通の考え方を答えを間違いだろうと予想しながらも答えた

「最初の方だと、お互いが相思相愛であるならば、そう思うのですが」
「この頃の男女間に「相思相愛」というものを育む時間は結ばれて以降にしかありません。その証拠となるのが「子」ですから」
民族の中身を知るのは難しい事だ
粉川は軽い混乱で頭を掻いて俯いた、その姿に『こんごう』が軽く肩を叩いて
「民族という枠にはめるからわからなくなる。これは私達の事を例えとして話しているという事だ。さっきも話しただろ」
『こんごう』は二人の間に入ると
「私達は産まれたときには成体だ、その形で人と出会う。私のような護衛艦でさえ出会う人は千差万別の世界で、漁船や客船などはもっと多くの人との関わりを持って生きる。私達は常に人と共にいる、私達を駆る者達の連れ合いだ。その中から一人夫を選べるか?そう聞いているんだ?」
自分に、写身である船に乗る者達の全ての妻という魂
護衛艦『こんごう』で言うならば乗り合わせる隊員達の数は３００人、全てに愛を持っているのだから一人を夫という形には選ばないと尖った目は告げていたが、粉川はすぐには頷かなかった
人の生活にある与える愛は大きい、だけどそれが己の身体を与える事にまで適用されるのは人には考えられない事で、理解を働かせるのは大変な作業だった
同じ世界にいるのに、違う感覚
言われてもなかなかわからないという傾げた首の前

「そうですね、私達は来る人を選ばない。それは私達と人の間に流れている使命が変わらないから。民族・一族の血脈という言葉に表されているものは、変えられない使命を意味していると思って頂きたい」

「つまりな、使命を挟んで私達は共同作業者であるという事だ。私達と人は使命という名のｅｎｇａｇｅしているという事だ」

胸元に十字を飾った使徒は、早くに答えを明かしてしまった『こんごう』の顔を見ると、小さく息をついた。もう少し会話を楽しみたいと考えていた彼女の前でせっかち『こんごう』の回答は少しおもしろさを欠いていたと感じた様子で目を細める

一方押されるように答えを聞き続けた粉川も少しずつ理解を働かせていた
産まれとともに与えられた使命、船の用途を中心に人との絆を結ぶ魂達のありかたは、船という単体を考えれば確かにと思える話だったが、やはり躓いていた。それでも１対３００という愛の配分は肉的に考えたくないもので、短絡的に引っかかっていた

灰鉄の瞳を持つ使徒はそんな思案で曇った目の粉川の心内が見えているという顔で話を続けた

「もう一つ、私達軍属の船の中でも特に日本海軍（海上自衛隊）は馴染みがないでしょうが、代替えによって売却される艦艇を見て貴方は不貞だと言いますか？」

「いいえ、そんなふうに考えた事はありません」

見透かされたという焦りで即答の返事をした顔に

「客船や貨物船の世界ではもっと多くある事です。売却により船主がかわる事は。でも使命が変わらなければ私達が人と向きあう態度

は変わることはありません。人もその事はよく知っているハズです」

護衛艦には売却がない、第二の人生はなく国防の任をとかれれば後は実艦標的として最後の奉仕をするか、解体という有るべき死を迎えるかだが、合衆国海軍通常動力の巡洋艦などの多くは売却によって太平洋の同盟国諸国家に移り第２の主を得て働くそれを不貞だとは言えない

七人の夫を持った妻、七たび国を変え働く船と考えれば不貞など口が裂けても言えない言葉
粉川は首を振って

「まったくです次の船主の手に渡ったからと言って、それで貴女達が不貞をはたらいているなんて、とんでもない考えです」

変わらない使命というｅｎｇａｇｅを真ん中に彼女達は同じように奉仕をする
どこに行っても、客船ならば客船として働き、貨物船ならばその用途に従って主と共に海を行く

「理解して頂けて良かったです。私達は誕生と同時に与えられた使命に則していれば何処にいても同じように奉仕をします。それが私達の艦生なのですから」

少しずつ理解を働かせる粉川の前、コーパスクリスティーは静かな笑みのまま聖句の続きを話した

「さて、続きですがこの話について主（イエス・キリスト）はサドカイの者達にこう返事されます。「事物の体制＊４の子達は」娶ったり嫁いだりしますが、死人の中から復活を得る者にそれはない」と」

民族や宗教の観点をやぶり、自分たち魂に置き換えてみればという
『こんごう』の言葉で話の整理の付け方がわかってきた粉川には、
コーパスクリスティーが言った言葉と合致するものを見つけるのは
容易だった
今度は俯くことも額を抑える事もなく頷いた

「それ故我らは誕生と共に入水する」
死からの復活をする者、海に身を投げて夫を救う道を作った妻…そ
の末裔達

神話を語った三笠の言葉と、聖典を元に自分達のポジションを知ら
せたコーパスクリスティー

水面下の繋がりに粉川はなるほどと顎をさすると
「僕たち人の世界が事物の体制…というのですか」
軽い笑み
「本当はそういう意味ではありませんがココではそうですね、事実
私達の世界では娶ったり嫁いだりを行ったりはしませんから」

生きるために相手を持ち、子を作り生活をしてゆく人と
生きるための相方を使命というｅｎｇａｇｅで結んだ向こう側の花
嫁達
まだ見えない論点の紐を解こうと、何度も自分に頷き背中を丸める
粉川の姿に

「足りない頭で難しく考えるな」

まったく変わることのない高圧的な顎、謎に埋没しようとする相手
の心に鉄の杭でも叩き込むように会話をぶった切ってしまった瞳の

相方『こんごう』は手を広げると、めずらしくご機嫌な顔で夜空を仰いだ

「人のように対一人を愛の器とはしないのが私達だ。私達は常に海を行く全ての者達の受けいれる。お前が心配しなくてもそういうふうにな生きてきている」

「理解しようとしてるのに…なんか、そんな突き放しかたって」

『こんごう』の横槍は人が悩もうが悩むまいが、確かに船は人の生活と共にいるものであるという事を示しているが、理解を深めようという事からは外れてしまったような声に

粉川は一気に進められた会話の中に留まれず、流されたと抗議の声をあげたが

「だから！もっと簡単に見ろって言ってるんだ。私達と人は別々の空間を保っているが、偶発的な出会いで顔を合わせなくても地球という世界を共に生きていて、共に必要であるという事だ」

自分の胸を叩き自分を納得させるような仁王立ちの『こんごう』の姿に粉川は伏せた顔で少しばかり吹き出していた

結局彼女は自分と同じ事で悩んだことがあるという事を知ったからだ

使命というエンゲージをしていると言い切っては見たが、国防のために兵器の船として産まれた彼女の中には蟠りがなかったわけではない

あったからこそ自分を戦艦金剛だと信じようとしていたという事

数多の船達の中で自分たちが人に愛されているのかという不安は、どの護衛艦にもあった

粉川はそう思えた

今日までを共に過ごした、二ヶ月足らずの間だったが護衛艦艦魂達が抱えている問題を目の当たりにしてきた
人の不始末である機密漏洩で心を痛め、共に歩むべき隊員に不信感を持っていた事
不審船事件で海保船底達から「仲間殺し」と罵られ、乗艦の士官達もまた海保の詰問を受けているという現状に自分たちの存在価値を揺らぎそうになる心を抱え
だけどそれは彼女達だけの問題でもなかった、同じ苦しみを隊員達も背負ってきた

目の前でいきり立ち、無理にでも手を広げた『こんごう』の姿、背中にあるものに感じたのは…

だからこそ彼女が、自分たちが選ぶことなく人を愛しているという事を大きく公言する事で、この国の艦船の中でももっとも孤独な船である護衛艦達が兵器の魂であっても変わることのない愛を人にしめそうとしているように見えた

「わかったよ、わかった」

大手を広げ自分を見せる『こんごう』の姿に答えられるのは、自分の不細工な笑顔しかない
丸めていた背中を正し頭を掻くとコーパスクリスティーに答えた

「僕たち人は、魂である貴女達とマンツーマンという形で働けません、大抵の人は残念な事に貴女達を見る事ができないから」
自分の理解、答えを待つ『こんごう』を見て

「ですけど、彼女達が僕たちや多くの人を見つめていてくれる事に

感謝はしています。それは自然体で共に働いているのですから、見える形でというのは難しいですけど、宣言はしています。隊員にとって自分が乗艦する護衛艦は間違いなく「オレの嫁」と、そう言ってますから」

夜の紫の空の下
なのに青空の下で風を受け海をゆくような顔は自慢げに自分の無味を親指でつくと、そのまま『こんごう』の側にもグッドと向けて

「だから君はオレの嫁!!」

「なんだそれ?」

向けられた指の前で『こんごう』の顔は困惑と共に真っ赤に染まった
突然の亭主宣言に
「お前なんか下僕で十分だ!!」
身を翻して怒鳴った
「ちょっと!!それじゃ今まで話してきた事が無駄になっちゃうでしょ!!」

難しい紐解きを頑張った粉川は、納得いかないと『こんごう』の手を引こうとするが
「さわるな!!下僕!!」
「いやいや!!僕は君の亭主!!他のみんなの妻なの僕だけ下僕はないでしょ!!」
「お前は下僕!!私が主だ!!」

真っ赤な顔と耳を隠すように、粉川の顔を見ないように懸命に身体を回す姿にコーパスクリスティーは柔らかく口元をほころばせると

「どちらでも大切な仲間である事を忘れなければよろしいのでは…
触れられなくても共にいる空気のように、安らぎから生存の糧にまでなる水のように、ぬくもりから発展の力にまでなる火のように、当たり前にあるものがもっとも人に則している事を忘れないように、私達もそうである事を忘れないでくだされば、どちらが主でもかまいませんでしょう」

優しい声はそこまで言うと背を向け青い月に目を向けると小さく語った
「でも私は人を抱いたりはしませんけどね」と
粉川の耳にはしっかりと言葉は入っていたが質問は許されなかった

「さあ、良い頃合いです。参りましょうか？」

一度背を向けた身体を二人の側に戻すと、平手を横にひらき
「Ｂｌｅｓｓ　Ｔｈｉｓ　ｔｉｍｅ＊５」
神秘の瞳が深く海をたたえて、月を迎え入れる酔うに天を仰ぐとふざけていた『こんごう』の口調が静まり、粉川の腕を掴んだ

「さあ、今日はここまでだ」
「いえ、人も一緒にどうぞ」

引き続きの会話への誘いと喜ぶ粉川の前で『こんごう』は目を大きくしていた
「いいのか？人も一緒に行けるのですか？」
「ええ、鮮明であるかはその人の感じ方によりますが、せっかくの良い夜ですから是非にどうぞ」

慌てる『こんごう』とは対照的な導き手の前で粉川も、何が始まるのか？それに着いていっても良いのかを確かめようとした

「アメリカ海軍の皆さんに紹介とかは、まずいのかな？」

先にアイゼンハワー見たさに寄宿舎に侵入した話を思い浮かべ、遠慮しようかと隣の『こんごう』を見たが、彼女の顔は真剣に掴んだ相手を睨んでいた

「そうじゃない、「水の記憶」を辿るんだ。今日は満月で海の力が強く溢れているらしい、私が最後の日の願いとして頼んでいたんだ」

「水の記憶」

『こんごう』が先の演習で東シナ海のあの日を遡ったと話していた

秘技の事に粉川の目も丸くなった

秘技に触れられるかもしれないという期待と、立ち入りを憚る彼女達の領域に

「二人ともを招待します。この海に残る記憶に触れてみて下さい、貴女達の求めるものへの道を見つける助けになるやもしれません」

『こんごう』と粉川、二人が共に道を切り開くために歩む光をコーパスクリスティーは示していた

月は高く青く輝き、満ちたる海は奇跡の到来に震えていた

第八十一話　オレの嫁（後書き）

カセイウラバナダイアル～～聖書～～

本来ならばここに氷川丸さんの話しが入らないといけなかったのですが、そうすると今話で使った聖書の注釈が書けなくなってしまうので次回に見送りました
そんなものが必要な人を書くなというご意見もあるでしょうが、神話や聖典の繋がりというのは人類の流れに沿って語り継がれたものですから、日本書紀だけではなく、聖書にも触れていただきたいとおもいまして、不必要と思う方は読まなくてもけっこうですよ！！

＊1　サドカイ人（さどかいびと）
厳密にいえばこれは民族の名前じゃありません。聖書の時代というのはイエス・キリストの時代と考えている方が多いと思いますが、イエスの歴史を書いた部分は現代でいう「新約聖書」と呼ばれている部分です
原本の聖書からすると1／4ぐらいの箇所なんですよ、少ないでしょサドカイ人はそれ以前の書、「旧約聖書」と呼ばれる箇所に登場します
かのソロモン王の神官に与する一族が派生ではと言われていますが、だとすればソロモン王治世の後期に侵入した政治犯的な存在だったのではとヒボシは睨んでいます。
ソロモン王はイスラエル王国史上もっとも偉大な王とされましたが、後期の執政は荒み国民に重税を課し享楽にふけったとされ、その時の王の権力を我がものにしようと争った派閥の一つがサドカイ派でした
この一派は神官・祭司からなっていてので非常に発言権が強く、イ

エスの現れたローマ支配下のイスラエルでも詭弁派閥のように存在していました
当時イスラエルは、それ程ローマの支配を悪く思っていませんでしたが、やはり自分達の国であって欲しいという想いからメシア（イスラエル王）を欲していました
そこに現れた彗星のごとくの人、イエス・キリストに彼が解く、天の王国諸説に否定的で、こういう意地悪な質問をしてまわりましたちなみにこの一派は西暦1世紀以降あまり見られなくなり自然消滅したような人達ですｗｗｗ

＊2　Ｊｅｓｕｓ　Ｃｈｒｉｓｔ（イエス・キリスト）
言わずと知れたキリスト教史上最大の「宣教師」
日本人はキリスト教をイエス・キリストを祀った宗教と思っている人が多いが本人が自分を祀れと言った事は一度もないｗ
むろん誕生日を祝せとも言わなかったし、母マリアを聖母崇拝の対象にしろとも言っていない…なのにいつの間に家族ごと祀られている人
唯一言ったのは自分の死を忘れてはならないぐらい
もっともそこにいたるまでの逸話が多すぎて、後代の訳詞達がいいとこ取りをした感は否めない（それが例のマグダネラ・マリアの話に繋がっていたりもする）
彼曰く、神の子・神の長子で別名をＭｉｃｈａｅｌ（ミカエル）とされている
地上にいらっしゃった理由は原罪のひな形を解除するためとの事
彼の家系をさかのぼっていくと当たり前に「アダム」に到達する
聖書では最初の人は罪を犯す前までを「ｐｅｒｆｅｃｔｂｏｄｙ」とされていて、罪により欠損した事で死を得る体となった
その結果不完全な体のコピーとして今の人類が出来上がったとされていて、欠損のひな形の破棄・原罪のリセットが必要とされた
そのための贖いがイエス・キリストの「ｐｅｒｆｅｃｔｂｏｄｙ」だったとされている

彼が処女マリアから産まれたとされる所以はここにある
神の指による転移懐胎であるから（だいたいこんな感じ）
しかし、現在のイエス像はそうとうにねじ曲げられているのでヒボシには笑い話のような部分も多数ある
聖書の福音書を読むにイエス・キリストは当時としては珍しいフェミニストだっとヒボシは思っている
女子供に人気の高かった神の宣教師をローマが嫌ったのは当然の帰結であったといえる
なんたってローマ皇帝は人気がないと退位させられてしまう事のあるポジションだったから
それにイエス・キリストの一派は聞くには穏健派なんだけど、弟子はけっこう武闘派で
「ゼカリス（熱心党）（諸刃党）」…この変ちょっとうろ覚えなんだけど、彼の人気にあやかってＪｅｒｕｓａｌｅｍ（エルサレム）の乗っ取りを考えていたりとローマにとって二重の意味で危険をはらんでいた
もっともイエス・キリストを裏切ったのは同胞のユダヤ人で、原因はやっぱり彼の人気の高さだった
この時代イスラエル王国は一度滅びバビロンの捕集から帰国した民で構成されていた
つまるところ理想論の王様が欲しかった
強くて、かっこよくて、自分達の上に立つ偉大な王ソロモンのようなところがイエスにはそういう気持ちがなかった
むしろイスラエル王国が滅びた原因の一つに前序のサドカイ派や、古い形式にしがみついた者達がいて、それらを一掃しなくて神の王国はこないと説いた事が決定打となって、杭にかけられた
外典などには生活感のあるイエス像が書かれていたりするようなのだけど、現在発行の新訳（七十人訳（セプトゥアギンタ））にはほとんどのっていない。
正式にローマ国教となった時に作られたのが現在皆さんが耳にするイエス・キリストの姿であり、彼の時代の姿でない事だけが真実である

＊３　復活組
黙示録の書の後半に書かれる神の王国に入る者達の事
実は生き残れる人間の数まで設定されている神の王国、ちょっと引くわ
この数字は総数１４４０００でイスラエル十二部族の各部族から１２０００をだしこれによって神の王国の数としたと言われている
ところが黙示録事啓示は過激な文章表現で前序のごとく色々と添削されているのでどこまでただしいのかヒボシにはさっぱりわからない
このあたりは探求と勉強が必要だと思うのだけど、カトリックもユダヤも隠してしまってわからない。そんなに凄い事がかいてあったとするなら是非に知りたい
で、復活組の事については復活した人には嫁いだり娶ったりという行為が不必要とされるという下りがある
それでサドカイ人の質問に対してイエス・キリストは誰の妻でも夫でもなくなると答えている
だから人口が増えるという心配はなくなり１４４０００という枠で世界を満喫する事ができるという言ったのかもしれない
しかし明らかに人間の性を否定しているようにも感じる
出産のシステムを神が作りたもうたならば（ちなみに現代科学ではどうあがいても子宮をつくる事ができない）それがある理由と、とざす理由を知りたい、課題は増える一方だ

＊４　事物の体制
実はこの言葉が出現するあたりから聖書翻訳は曲がってゆく事になるイエス・キリストが登場した頃のイスラエルの公用語は古ヘブライ語とアラム語だっと言われているが、大事な見落としがあるとすればローマの帰属により言葉失い始めていたという事
侵略されると最初に失われるのは文化風習だけどじょじょに失われるが言葉だったりする

このころローマの帰属によって商工業がなりたち、それに併せてギリシャ語をしゃべるヘブライ人（ユダヤ人）が増えたという事、彼らはヘレニストとよばれローマからの貿易で豊かさを身につけたため、これにならうヘブライ人が増えたのは言うまでもない
こうした状況の中で当然真っ先に失われたのが古ヘブライ語だったヘブライ語については前の話で説明したように特殊な言語で子音は文書としてあらわされるのだけど母音は書かないという仕様…当然旧訳の石版聖書は廃れてしまう、口伝だけでは物事を伝えるのに限界があるという危機感からユダヤの祭司達が中心となって旧約を訳本化した
ところがこんなに善行つんだユダヤの祭司達、この時に新訳の聖書を否定してしまった
よほどにイエス・キリストが嫌いだったんでしょうね
これが「原理主義」の一派となってしまう
ここで事物の体制（パルーシア）の解釈がねじれる事になる
そも事物の体制という語を新訳で使っているのは日本ではおそらく「エホバの証人」の新約聖書で
普通の書訳では「世界」またはその時の帰属地域と訳された（今はおそらく世界１つになっている）
で、原理主義（ファンダメンタル）はただ「世」と訳した
事物の体制というは実中途半端な言葉で本来、「臨在（りんざい）」とワンセットでかかれる事が多い
これ以上いくとややこしくなるので、本伝で描かれた事物の体制についてｗｗｗ
コーパスクリスティーは体制の側を「人の世界」と位置づけて話しをした
事物の体制の元、人は娶ったり嫁いだりをしている。このくだりを人の世界はそうだと例えた
後につづく復活組の話しを自分達に当てはめた
死からの復活、入水から魂となる女達の形としたという事

日本人は聖書の聖句を利用する事がすきだけど、中身をしらないで
つかったりする人が多いので良くアメリカの友達に笑われる
押井守のパトシリーズといい、攻殻機動隊といいたとえがうまくつ
かわれていない事が多い
つながる文脈からそこだけ抜き取っても…ねぇ

＊5　Ｂｌｅｓｓ　Ｔｈｉｓ　ｔｉｍｅ
簡単にいうと祝福の時、でも解釈はものすごく多い、多くつかれる
だからここでは額面通りでおねがいしますｗｗ

そんな感じで説教臭いウラバナダイアルでした
それではまた～～～

第八十二話　三笠の姉（前書き）

長かった…慣れ親しんだパソコンの消失がこれ程に被害を出すとは…
お久しぶりの新話です！！待っていて下さった方ありがとうございます！！

第八十二話　三笠の姉

小さな波紋を広げる波が鈍い光を反射させる護衛艦の上、『こんごう』と粉川、月からの神秘を惜しみなく享受し輝きの髪を揺らすコーパスクリスティーが揃っていた

立神Ｔ１バースにかけられた艦体は月の下にある事で兵器の影というよりも、鋼の城であるが、柔らかい光のおかげで硬さをみじんも感じさせぬ美しい風景の一部と化していた

佐世保の夜
港の側から見る景色は、中空に浮く光の階段にもみえる
長崎程ではないにしろ、ここも坂の町だ。山裾から天を目指す家に連なる人の灯りは面前見え
大きなガンクレーンの輪郭を浮かび上がらせる
Ｔ１の端に付け競られている『こんごう』からは川向こうの町がよく見える
国道３５号沿いは開けた地域、学校から病院、中央に続く道にはより多くの人が夜を楽しむ時間を惜しみなく輝かせる光の列

地上の星達が紡ぐ夜の世界、そこから離れたもう一つの世界へと粉川という人が今足を踏み入れようとしていた

繰り返す波の音、それが誘う世界の入り口に立つ者達は護衛艦『こんごう』の上に姿をあらわしていた
三人の中、粉川は初めて経験する道の世界への誘いに鼓動を早くしつつも、色々な事に気がつきそして考えを巡らしていた

その一つ、コーパスクリスティーの髪
場所を移す間に変化した彼女の髪にも脅威と、人とは違う者達の姿を確認する事になっていた

「今宵は良い月が出ておりますから、きっと人にも水の持つ時の欠片を見る事ができましょう」

ただでさえ歩くというより、かすかながら浮いているような移動の足つられるように靡く赤いスータンのはためきなどがみせる偉容
『こんごう』達とも一線を画した彼女の姿は船の魂達が実際はいかなる者なのかを知ろうとする粉川には予想外の人物の姿と重なっていた

「髪……」

声に出して聞くのはと小声で『こんごう』に耳打ちする

「前にも見た。前、水の記憶の世界に入った時もああなっていた。特殊な力を使う時はああなるのだろう」

これから神秘の世界へ、この佐世保の持つ記憶に入ろうとする手前を慌ただしくしたくないという返事
いつもより詰めた視線、制服の襟を正す『こんごう』の緊張とは別に、粉川は思い当たる出来事に顎を掻いていた

「特殊な力」

コーパスクリスティーの姿は神秘ではあったが、『こんごう』とは別に粉川はこの光景を見ていたことに気がついたのだ

護衛艦『こんごう』の上、もっとも月明かりを受ける場所はヘリコプター甲板である艦尾
灰色の甲板も静かな時を楽しむようにほのかな光に身をさらし、眠りの子守歌を聞くように
鎮座する中で、月に向けていた目線を、海に走らす、ここより遙かに北の地にいる人の元を見据える

「三笠…」

思い出した事
それは横須賀の夜、祭りの町を後にして彼女に会いに行った時の事
あの時、三笠は月の光の下に手を広げ…
記念艦三笠の甲板の上、古びたサビの城で彼女は何をしていた?
いつもは濡れ羽の光沢を持っている髪が銀色に変わっていた
あの時だけではなかった、三笠は月の出る夜には必ず外にいた。外にて月の光を集めるかのように手を広げ、髪はプラチナの輝きのものえと変化をしていた

子供の頃から見ていた光景が故に、不可思議と思った事はなかったが「記憶」というラインにそれが上った事で粉川の仲には一つの疑問が浮かび上がる

「三笠も水の記憶を操る術を持っていた?」

作業青服の胸に拳を打ち付ける
波が静かであれば鼓動さえ響かせてしまいかねない夜
二人に比べると大柄の粉川は自分を抑えるように胸を打つ

「三笠、君はあそこで何をしていた?何をしようとしていた?」
敵は目の前だけにいるわけではない。そう教えた母親代わりの彼女

今はそれが目の前にある大切な事から全てを暗ますためのねい言にも思える

「何を隠していたの？」

一度だけ見たことのある帝国海軍軍装姿の三笠

凛と澄ました青い瞳は甲板の上で軍刀を立てに、手を重ねと月を見ていた１２月の空

きら星の欠片に目を向け立ちすくむ姿は姿勢も正しく、いつものおちゃらけた姿など微塵もなかった

海風に煽られる元帥のローブ、流れる髪、静かで湖水を写したような青い瞳

まるで今から戦いの海に赴かんとする気迫と、「恨め」と泣いた瞳

「大日本帝国海軍軍艦三笠」

黎明期帝国海軍の中枢に産まれ、末尾の日の中、滅び行く帝国海軍を見つめ

帝国海軍が滅亡した後の日を、現代まで生きる魂

「三笠…君はいったい何をしている？」

「御心に届くかも知れませんね」

背中を丸めてしまった粉川の顔に銀の瞳が笑った

いつの間にか思いを募らせ、雑音をふさぐように方針していた顔の前で

「どうした？腹でも痛くなったのか？緊張してるのか？」

目の前に立たれたコーパスクリスティーの後ろで『こんごう』の鋭い目が粉川に激した

「しっかりしろ！！何も恐れるような事はない！！」

変わらない彼女、三笠の中に変化を感じた今。『こんごう』の変わらない強気が粉川には安心のおけるものに変わっていた
いつもの尖り目とへの字口、威張った態度の仁王立ちの前で粉川はおどけた顔を見せる

「恐れてなんかないけど、確かに緊張してるってだけ」

心に上った不安を歌消す、気取られぬように語り、声を返す

少しばかりぎこちない粉川の様子に、軽めのため息をする『こんごう』もまた考えを持っていた
前回は東シナ海にあって、日本国にある戦船にとっても忘れる事のない歴史の世界へストレートに飛び込む事ができたが、今回は佐世保港という場所に残る記憶という曖昧さ
知りたいと希望する時に手が届くのかは不明であるという事に

「コーパスクリスティー大佐、佐世保の記憶の何処に私はいけるのでしょうか？」

佐世保は長い軍港としての歴史を持っている
それは帝国海軍初期の頃からという百年の歴史を、『こんごう』の知りたい戦艦金剛の歴史さえも包括している港でもある
そこえたどり着けるのかという思いをぶつけてみた

熱い目線を持つ『こんごう』に、コーパスクリスティーは聖女がごときの緩やかな視線で、試すような声を滑らす

「さあ、望む記憶を探し当てる事ができるのは貴女の意思にも関係

していますから、でも貴女ならば、きっとみつけられます」

意思の大切さ、水の記憶の幅はとても広い
コーパスクリスティーを介しても全てを知る事の出来ない秘技の世界は、思いを知りたい時に集中する事だけを注意すると
氷を思わせる目を俯かせて、打ち付けていた波に手をかざす

「大丈夫ここはただの港じゃありませんから、喜びも悲しみも、希望もを、多くの魂達と人が折り重ねた心を埋めた海なのだから。きっと貴女が来る事を望んでいる者に会えるはずです」

声の途切れる時と同時に波が跳ね上がる。コーパスクリスティーの
呼びかけに応じるように
ティアドロップの輝きが手の中に走る

「さあ、始めましょうか」

先ほどまで、陽気とはほど遠くとも普通の音色だった声は変わり、
鈴の音のような頭に響く音を絡ませた音が粉川の脳に届く

「頭に…」

急に耳を介さず通る声、頭の真ん中を叩くような振動に粉川の体が揺れる
『こんごう』はすかさず粉川の肩を支えると
今日、これから体験する事はおそらく現在船の魂を見ることができる「人」の中で初めて経験する出来事となるだろうと語り、

「耐えられるか?」

心配というより、付いてこられるのか?というような澄ました顔をした

粉川は移動する前コーパスクリスティは語っていた事を思い出し、
大げさに見えないように片手で額をさする仕草をみせると
片目を跳ね上げ相方に首をふる「平気」というゼスチャーで

「少し、痛みがあるかも知れませんね」

鼻を鳴らして

相手の様子を見た銀の瞳
コーパスクリスティの髪は月明かりと、超常の力が満ち天をつくように逆立ってる

「大丈夫です、こんな事は二度と経験できないかもしれませんから。
多少の事は気になさらないで」

苦言を出せば、隣の『こんごう』に、水の記憶への旅を止められてしまうかもしれないという不安を押し切る勇気に賛辞を送ると
初めて『こんごう』にあった時と同じように手の中の水を泳がせ

「１８０の軌跡、今は永久への軌跡。時を繰り、時の流れの元に」

人差し指に絡ませた水滴を粉川と『こんごう』に向かって投げる
「繋がる糸よ、いざ導かれん」

「粉川！！」

耳に響く声が鈍い、大きな膜を張ったような世界の中で粉川は息を吹き返した
というか、正確には一瞬にして真空状態の中に放り込まれた感覚から、五感を圧迫され
体を押しつぶされる圧力に気を失う暗闇を感じたまま目の前の空間が歪み、水を浴びせられたように溶けると渦を巻く光景から海の中に蹴落とされる

『こんごう』の声はそれを引き上げた形となっていた

「ここは？」

大口をあけ必死に酸素吸入をする顔の前、景色は相変わらず歪んでいた
粉川は何度か自分の頭を叩き目をこするが

「ぼやけてる…」
「ぼやけてる？」

たどり着いた朝焼けの港、『こんごう』の前には焼けただれた町、まるで大火事で全てを失った平地と山まで続く残り火、くすんだ灰を巻き上げる海風の中に立ち並ぶ粗末な小屋の群れ

「見えないのか？」

工場の焼け落ちた鉄骨が、仰向けに倒れた人の肋のように乱立する景色を見渡す波止場の石堤

『こんごう』は鼻を動かし、くすぶる匂いを嗅ぎ耳を澄ませながら、
記憶の世界にある「本物」の感触を確かめると現在ある状況を話し
粉川の肩を叩く

「見えない、というか…はっきりとした輪郭がないかんじなんだ」

何度も目を開け閉めし、額に皺を寄せて風景を探す
「あそこは港？」
ぼんやりした輪郭でも情報を与えられれば、漠然とながら何が自分
の前にあるかは理解ができるもの、同時に鼻腔に流れるただれた匂
い、風と潮の音し味
霞む景色に意識を集中させながら

「何か燃えてる感じだけど、匂いがする」
「燃えてる…違うな、もうおおかた燃え尽きてる。ただ規模が大き
かったから匂いが離れないんだろう…」

いつもより抑えられたトーン、『こんごう』の目は悲しく潤み、眉
は少し下がっていた
粉川に見られる事のないよう後ろに立ったまま

「戦争が終わったあたり、終わった直後かな」

沈んだトーンからと、あたりに香る匂いで少しの理解はしていた粉
川も、残念そうに顔を歪めると風に靡く旗に気持ちを曇らせた

かつて、大日本帝国海軍の一大軍港だった佐世保鎮守府の残された
建物の隙間、高く上がった国旗は日本国の物ではなかった
星条旗がくすぶる煙の間を縫うように高く掲げられ、港には合衆国
海軍の艦艇が大きく陣取るように並べられている

戦いが終わり、負けて全ての軍備は失われた
日本国の基地であった鎮守府は接収をうけ朝焼けの黄色い景色の中、
米海軍施設として可動していた

「戦争が終わった頃の佐世保…そうなの？」

後ろに立つ『こんごう』の姿さえ霞んでで見える粉川は、荒げていた呼吸を落ち着かせながら広がる港の景色を見つめる

「じゃあ、日本の船はもういない頃なんだね」

敗戦時、日本には国土を守る艦艇はほとんどいなかった事ぐらいは
粉川もよく知っていた
空襲の港に立たされるのは困ると考えながらも、終わってしまった
姉達の歴史に立ち会う事の方がつらいだろうというういたわり
記憶を追うのならば彼女達が華やかだった頃にこられれば良かった
だろうにと

「もう他の記憶には飛べないのかな？」

黙して港を見つめているだろう『こんごう』に聞いた
「いや、ここに何かがあるからこそ導かれた。ここに知るべき何か
があるんだ」

粉川の慰めを物ともせぬ顔は、焼けて平らになった佐世保の町を見
渡し
静かに港に、かつて鎮守府と呼ばれた場所に歩きだした

「どこに行くの？」

空気さえも実物のように感じる世界、歪み霞んで見えたとしても自分の手足に感じられる実物感に及び腰になりながら粉川は後を追う

「港に、感じるんだ」
「感じる？何を」

背中を向けたままの『こんごう』が手を挙げ指差す
太陽は高く上がり、真夏の熱を降り注がせる
すでに周りには多くの日本人の姿さえ見える中を二人は歩き、『こんごう』の指し示す方向を粉川は鼻っ柱をつまみながら懸命に見る

「あそこに、日本の戦艦がいる」
「戦艦、でも戦後に日本に残った戦艦は長門ぐらいのハズだよ」

話し合いながらも前を進む『こんごう』の背を見失わないように追う粉川
いつしか焼け野原の中に並ぶ粗末な小屋のある道に出ていた
騒がしい朝、周りの声を聞くに粉川はここが終戦直後の夏では無いことを感じ取った
少なくとも戦争が終わった翌年の夏、そういう生活の音がそこかしこに響いている事に

「『こんごう』ここは終戦直後の佐世保じゃないみたいだよ。少なくとも一年はたっていると思う。そんな中に戦艦なんて…」

放り出された記憶の世界の中でも、汗を流さざる得ないほどの熱気
半ズボンの子供達が顔を真っ黒にして走り、粗末な小屋に住まう人達がいつものように洗濯と炊事の火をつくり、肩を寄せ合うように生活している
看板所に立つ板きれの伝言板には、所狭しと手紙が貼られている。

水中に裸眼でいるような光景の中にあってそれが何かを知りたい粉川は顔を近づけて字を読む

「和彦と学は引き上げし候、静恵へこれを見たら役所に連絡を帰りを待つ俊彦」

満州からの引き上げ
敗戦による混乱の中、命からがらで日本に帰ってきた人達の伝言
板きれは何枚も連絡所の壁に建てられ、登録以外の方法でなんとか家族との再会を望む人達の願いで満ちていた

ヒビの入った眼鏡で懸命に家族の宛てを探すくたびれた軍服の男
背中に風呂敷を背負った白髪もちりぢりの老女
周りには混乱の中でも役所の業務をする男の人達
戦後、数年、焦土と化して何もなくなったところから生活の第一歩を始めた国民の姿に、ぼやけた視線がさらに霞んでしまいそうな粉川

「こんな状態から…日本は立ち直ったのか…」

心に石を詰められるような痛みが走った
今まで写真で見るばかり、話しに聞くばかりの世界が目の前にある事に、ただ立ち尽くしてしまう

「止まるな、粉川」

雑踏の中に止まった粉川の前、多くの人を挟んだ向かいに立つ魂は慄然とした声で告げた

「この事は憶えておけ、この国に、こういう時があった事を忘れるな。でも今は前に進むぞ」

はぐれるなと手を伸ばす
「『こんごう』…」

粉川を励ましながら『こんごう』の目は、粉川の霞む目よりも鮮明に戦後の世界を見ていた
戦後
戦いの後の日本、この国を愛して戦った姉達の死以降の世界を、きつく結んだ唇と尖った目で心に焼き付けるように見つめ続けていた

「姉さん、ここまでの道は」

粉川の手を引きながらも背中を丸めてしまいそうな自分を知ったする『こんごう』
一面焼け野原、道に合わせて立ち並ぶ小屋の住処
傷を露わにした日本の大地、こうなっていく国土を見続けた姉達がいたという事に胸を押さえた

守りたかった人達は、苦難の戦後を生きている
そしてこの先に感じる鼓動の姉はどんな人なのか、どんな思いを持っているのかという事を考えるに心が張り裂けそうだった

「『こんごう』」

左手で弾いていた粉川が背中を支えた
「君の向かうところに一緒に行く、どんな事があったのか、それがボク達に何を知らせようとしているのかを共に知ろう」

右手で飛び出さんばかりの痛みの心を抑えていた『こんごう』と目を合わせる

「この先だ」
支える手を握り返す、目が見る先にあるのは佐世保鎮守府と呼ばれた港、今は米軍の艦艇が並ぶ中に聞こえる熱い鼓動の主への道

「行こう」

二人は陽の注ぐ工場内に向かって意を決して歩き出した
灰色の工場、ところどころのトタン板が外れ青空を見せる程の隙間と、鉄扉の前を彩る火災で付けられた焼けた影
油の匂いも十分に流れ蒸し暑さに嫌味な彩りを添えている

真っ直ぐ目的地に向かう二人とは真逆に戻ってくる者達の間を縫うすれ違う無数の工員達、戦後ここの全ては米軍に明け渡されたが、工場を稼働させるのは日本人の手を使わなくてはならず、多くの日本人が焼け跡に残ったこの港の仕事を担っていた

「なんぞええもんは残っとったかと?」

真っ黒に焼けた肌の男達、食べ物の行き渡らないこの時期の男達はみんな焼けた炭のような肌で枯れた棒のような体をしていた
『こんごう』達の向かう先から、戻る人、足を引きずった男にすれ違う熟年の白髪が尋ねる

「なんもないばい」
唾を吐き、苦く顔を歪める
「おっかぁに、鏡台の変わりでもあるかおもっていったがと、何ちゃかんちゃひとつも残らんごとなくなっとっ」
口を曲げて、大きくため息を落とす

「飾ってあった海軍の船やけ、もっとええもんがあっとおもったかよ」
「なんもあらん、あんなん戦争終わってすぐの頃にみんな追いはぎみたいに持っていきよったとよ」
「そん後、アメちゃんからさわんな言われとと、だけんなんかあっとおもうとったとぉ」

不機嫌な会話をする男に白髪は大笑いをして

「あん船が骨董品よ、そうだばってんもう鉄くずぐらいにしかならんばい」
「ほんと、あんな船で日本を守ろう思うとったとか、海軍どもは」

悪意の目が港の向こうをのぞく、ロープに幾重に固められた塊の姿を睨む
「ボロ船なんぞ、はようバラして金にせんと」
「なんも、明後日から解体ばい、今日は入れるだけと、みんな金目の物目当てにきよっとが、すぐにかえらい」

言われとおり、朝早くに物取りにやってきた男達は手ぶらで歩いている
人のはけてゆく向こうに見える船

「ボロ船…」

行き交う男達、工具を背負った者達の先にある艦影に『こんごう』の目がとまる
同時にそれを見つけた粉川は呼吸が止まった
見覚えのある艦影に、思わず声が出る

「三笠…？」

古式ゆかしい艦体、顎をそり返したように作られているラムを持った艦首
錨を乗せるアンカービッドの岩のような段差
平たく構えた艦橋、すでに主砲もなければ副砲もないが見覚えのある形に心が凍る

「ちがう、あれは戦艦三笠じゃない」

動きを止めてしまった粉川の前、『こんごう』も艦を見つめながら

「あれは戦艦敷島、相ノ浦にて帝国海軍最後の日までを見続けた艦（ふね）、この時の帝国海軍の中でもっとも長老にあたる姉さん」

そういうと導かれた運命を受け入れた手が粉川を引く
「行こう、この人に会うためにここに来たんだ」
強い足取りがここに導かれた意味を知るために前に進んだ

軍艦敷島
かつて日露の戦いを三笠と共に仲間を率い戦った有名艦も、敗戦と同時に見る影を失っていた
長く現役をつとめ、退役後は海軍佐世保海兵団所属の練習艦として

余生も磨きをかけてきた艦体だったが、今は灰色にサビの赤をそこかしこと浮かび上がらせ、備品であった全ての装飾はおろかチーク板の甲板までも破がされ、推進に必要だった足も抜き取られた状態にあった

その日照りの激しい甲板の上で、開襟シャツで敬礼をしている男がいた
ひげそりもままならない物資不足の中、なんとか整えた身なり丸い眼鏡の顔に苦悩を浮かべて

「すみません、こんな服も整わない姿でご挨拶となりまして」
「かまわない、楽にしてくれ」

砲塔を抜き取られた影、艦橋の下をくぐり副砲のあったあたりを歩く影、敬礼を受けていたのは体躯もすばらしい女の姿だった
軍装の彼女だったが、着ている服に階級章はなく、むしろ痛みそこらじゅうが解れている
ただ、乱れなく整えられた金色の髪がかつての威厳を保持している顔に少しの疲れを浮かべつつも向かい合うように立つ男の言葉を待った

「敷島教務中将。長門中将より…最後の伝言が」
「聞こう」

留まらぬ潔い返事に、男は最敬例がごとく踵を打ち鳴らして合わせると

「後の事は全て三笠元帥に託しました。私はこれより…」
声がつまる、先を告げられない苦しみで目を硬く閉じる彼に艦魂敷島は黙って、続かぬ言葉の先わ待つ

「私長門はこれより南洋の海に向かい標的艦として没する事になりました。多くの責務を担う者として最後までこの国元におられぬ事を悔しく思います。しかしながら最後の時まで帝国海軍魂であった事を忘れず果てる所存にございます。次にお会いする時を楽しみにしております。…との事でした」

待つ相手に一気に、心を重くしていた言葉を吐きだした男は涙を流し

「大変にご立派な姿にございました。随伴に巡洋艦酒匂を伴いの出航でした」

「そうか、ご苦労だった」

一寸の間だったが、感慨を振り切った答え、起立していた体が背中を向けると

「長門も逝ったか、いよいよ私も逝くことになる」

目をつぶる先に何かを見るような笑み

「別れに際し、長門中将より軍刀を三笠元帥の元へと賜りました」

「そうか、それを君がしていてくれたのか」

振り返り礼を言う敷島に、硬く踵を合わせたまま立ち尽くす彼は

「もう、こんな事でしかお役にたてません。申し訳なく…」

「いや、ありがたい」

敗北のつらさを一身に肩に背負おうとする彼の言葉を遮る

「私達は最早この国を護る力ではなくなった。もう何も出来ない、工員達のいうように役立たずだ。なのにこうして礼をつくしてくれる者がいる。本当にありがたいと思っている」

「しかし…中将を始め各港では多くの魂達が…僕にはもう何もできなくて」

負けた、戦争に負け国の全てを侵され
刃向かった者達に叩きつけられた風は、台風のそれよりも凶悪で悪意の分厚い刃物を振り下ろしていた

彼は泣く
軍港に残された帝国海軍の艦艇艦魂達が、進駐してきた連合軍の艦魂達にどんな目に遭わされたかを知っているから
ある者は記念品として階級章をよこせと立ったままタコ殴りにされ、ある者は「軍人でなくなった者が軍服を着るなと」裸になれと恫喝され、拒むとビール瓶で頭をかち割るなど日常的に行われ
傷つき動く事もままならぬ魂に非道の限りを尽くした

「中将もご苦労をなさった事でしょう」

古参の艦艇で現役ではなくとも「中将」の肩書きは大きい、事実佐世保に進駐した連合軍、中でもアメリカの艦艇艦魂達は競うように敷島の階級章を奪いに走ってきていた

思い出すに苦い事と顔をしかめたが、男泣きの彼の前で両肩をあげると

「あんなものは海に投げ捨ててやった」
「ちょっと驚きましたけどね」
唾を吐くように軽い声に、若い魂の声が相の手を打った

敷島の後ろにかろうじて体を立てる形で立つ女の顔にはまったく生気がなかった

それどころか右腕をなくし、おそらく横腹を抉る怪我を負っているのか、右側の軍服は不自然な凹みを作っている
もっとも目を覆いたくなる傷は首の根を抉られた深い傷跡、人間であるなら骨を向きだしにしたであろう傷の魂は、自分の顔を見る男に名のごとく涼しく微笑んだ

「おひさしぶりです少佐」
「涼月…」

立つことが辛いであろう相手に肩を貸す敷島は、話しの続きを何事も無かったかのようにした
「負けた国の階級章などに、どんな価値がある?よほどにこの国の者達の方がわかっている」
ボロ船、鉄くずに身を変える事を最後の奉公、正しい自分の最後と信じる声は高らかに言う

「私はいい、どうなっても。私はそれだけの責務を担った者だ。有るべき叱責を受けるのも勤めだ」
「私も覚悟は出来ております」

上司の声に同意を告げる涼月は床に座らされたまま二人を見上げて

「でも他の港はどうなってしまったか…心配ですよね」

「横須賀は長門が居なくなったことで少しは騒ぎも収まるとして…呉には行ったかね?」

馳せる目の示す方角
帝国海軍の港だった呉鎮守府には、燃料を失して浮き砲台となった者達が多数いた

「出雲はどうなった？浅間は…」
旧友を思う言葉途切れる、友だけでなく全ての者が同じく苦境の波の中におぼれ始めている今、それを聞いて良いのかという思いで止まった言葉を彼がつなげた

「出雲特務大佐、磐手大佐はともども呉の海に足付く状態にありながら、多くの者を敷島中将と同じく矢面に立ってお守りになっておられました」

終戦間近にあった呉の大空襲で出雲も磐手も大破、出雲は転覆の憂いを得、磐手は着底というありさまだった
終戦から呉に進駐したアメリカ艦艇達はここでも同じような狼藉を働いていた
同じく呉の港に着底した榛名、日向の階級章を奪おうと争奪戦に走り、呉に残った船達に対して横暴の限りを行う中
出雲は完全とした態度で立ち向かった
自身の半分を海に沈め、魂の状態は最悪であったにも関わらず

「殴るならまず私を、死に損ないだ遠慮はいらないだろう」

赤腹の上で大きく手を広げ、老いた自分を倒せぬのならば他の者に手を出すのは卑怯なりと笑った

「そうか、出雲らしい、実に頼もしいな」

かつての友が最後まで我を通した話しに、消えゆく命の姿とはいえ笑みがもれる

「ここでもしばらくそういう騒ぎはあったが…」
そこまで言うと振り返り

「姿勢を解け、もう私も中将ではない」
「しかし」

「少し呑まないか」

リラックスを促す手が甲板の縁を指差す
解体を明後日に控えた敷島には今は人はいない、ボロ船の処理にいちいち人を配して置けない程戦後の日本はフル回転で良くも悪くも復興の道を走っており、消える魂に興味を持つ者はほとんど居ないからだ

その船に顔を出す者達がいた
曳舟の少女達
敷島に調査と称して乗艦した人の影を見つけた彼女達は追うように寄ってきたのだ

「上がってこい、酒を呑もう」

敷島の手招きに各々手に肴を持った彼女達は一斉に前にあらわれると
「涼月様、これ食べて元気になって」
「敷島様、お酒呑んで元気になって」
口々に頼むように獲物を前に置いた
大きな手袋を付けた彼女達は小さな力持ちで戦後の港の多くの仕事をこなす働き者の魂達だった

呆然とする彼に耳打ちする

「食べると元気になると信じている、彼女達が私達を今まで守ってくれたともいえるんだ」

語るように帝国海軍の港は連合軍に蹂躙され、全ての港で魂が魂に奮う暴力は横行していたが、ある事件がきっかけでそれは収束の方向に向かっていた
それは曳舟達の反乱だった

最初は小さな出来事だった
舞鶴で残されていた巡洋艦艦酒匂に対し暴力をふり続けていたアメリカ艦艇が、港の中で接触事故を起こした

そもそも進駐したからとて全ての設備をアメリカ人が使いこなせるという事はなかった
だが艦艇を寄せたり引いたりを日本人に任せるのは危険と判断され、曳舟達は軍港譲渡と共に第一線でアメリカや連合軍艦艇を港に着ける激務に入り、帝国海軍の艦艇の中では唯一優遇された船となっていた
アメリカの船員が乗り込み、操る事もあり
誰も魂の彼女達には手を挙げなかった、いや、自分達を曳く大切な働き手として挙げられなかった

一方では敗北の責を負われ、国内の船達にも罵倒され米艦艇達には暴力を振られる帝国海軍艦艇達がいる中でもっとも好待遇を得た船となった彼女達だったが、それなのに彼女達は反乱を起こしたのだささやかな反抗は「泣く」という事だった
最初に接触事故を起こした曳舟は大声で泣き叫んで

「いや！！いや！！仲間（船）を虐める人の言う事なんか聞かない！！」

そういうと大きな手や足をばたつかせてストライキを起こしてしまった

突然曳きを止めてしまった彼女の前、止まることもままならない米駆逐艦は桟橋と岸壁に激突、艦首を左に3度以上曲げるという大けがを負う
その時はさすがに他の米艦艇がきつくしかりつけたのだが、翌日同じ形で事故が起こった

原因は前日の失態に腹を立て、酒匂を殴り倒した彼女（艦魂）を見たという事によるストライキ
今度は同型の駆逐艦同士が横腹をぶつけ合うという派手な事故になり、人の側では戦勝に浮かれた注意不足と上を下への大騒ぎとなり米艦艇の魂達も警戒し始めた。原因が自分達の暴力行為にあるという事を知るに至り
暴力の数は日を追うまでもなく激減、滅ることにより曳舟達は真面目に働き元気を取り戻すという原理を目の当たりにし、さしもの戦勝国艦艇の魂達も努めて控えた態度をとらざらず得なくなったのだ

勝った国が負けた国で沈むなんて大恥だと、苦い顔を晒しながらも黙して港に入り、おとなしく休息の日々を送るようになった

もちろん敷島達は、こんな事件が合ったとはつゆ知らずの出来事だったが、似たような事は佐世保に事故として発生していた
執拗に、怪我を負っている涼月を蹴倒す者を見続けた曳舟は、米艦艇の出航日に機関ストライキを起こし全てが止まってしまった
自分を囲むように綱を張ったまま止まった彼女達は一斉大泣きを始め、うんともすんとも言わない状況になると、さすがに参りましたというもの

懸命にあやす駆逐艦達は「日頃の暴力を見せられるのが怖くて働きたくない」という曳舟の意見を聞き、佐世保でも暴力の横行は絶えた
小さな彼女達は純粋さで帝国海軍の残った艦艇を守ったのだ

「戦争の前もこうやって良く宴をしたものだった」

曳舟達の用意した酒をまだ陽も高いうちから煽る敷島
宴会をこよなく愛した厳島も居なければ、宴会部長だった長門も今はもういない
でも曳舟達は憶えていた
急激に悪化の一途をたどった戦争の中で、辛い思いを吹き飛ばしたい一身で宴会をし、翌日には命散らす海に出て行った帝国海軍艦魂達を
だから今も敷島や涼月が回復してくれる事を信じて酒や肴を運ぶ

「最後まで本当に良くしてくれる者達に恵まれた」
最高の褒め言葉で近くにいる曳舟の頭を撫でた

「良かったです」

傷ついた末火の魂の言葉に男は帽子をとり、ようやく力を抜いた姿勢で座ると盃を交わした

「ところで今日は何も別れの挨拶をしに来ただけではないのだろう」

最初の一杯を開けた彼に敷島はやっとの本論と目を尖らせた

「三笠はどうしている？」
早い質問は、まるで襟を締め上げるような気迫を伴ってい相手の心を刺す
「三笠元帥は部屋にて祈祷を…」
「そのためにここに来たのか？」

男は改めて正座をすると

「お刀拝領をする為にやってまいりました。心を預けてはいただけないものでしょうか？」

すりつけるような願いの前で敷島は荒い息を吐くと

「生きるべき時は生き、死すべき時は死ぬ」

そういうと自分の隣で、うまく運べぬ酒の盃を持ったままでいた涼月に顔を合わせた

「涼月、最早階級を持たぬ私がお前に命じる事は出来ぬが…三笠の姉としてお前に言おう」

決意に尖る目、きつく結んだ唇は激するとは違う重い気迫を伴って告げた

手には自分の支えであった軍刀を鞘を払った白刃の輝きが、漏れ落ちる太陽の欠片にきらめきを乱反射させる

「ここにて自害せよ、潔く果てる事を私が許す」

「三笠の姉さん」

ぼやけた視界の中、三人の会話を記憶の滴の力で聞き取っていた『こんごう』と粉川

粉川は懸命に目を開き相手の姿を見ようとし、『こんごう』は静かに遙かな姉達がとった道、過酷であろう結論を待った

第八十二話　三笠の姉（後書き）

カセイウラバナダイアル～～踏んだり蹴ったり～～～

とにかくそんな二ヶ月でした
色々な事が一度に起こりは波となりまた遅うという人生的にも分かれ道的な出来事に巡り会ったヒビでしたが、なんとか戻ってきましたこれからペースを少しずつ戻していこうと思いますがも以前のようなハイペースはまだ時間がかかると思いますので、長い目で、優しい目で見てやってくださいませ

火星明楽

作中の米艦艇の激突事故ですが、大々的にはなかったようですが、それなりに発生した本当の話です
原因は慣れない日本の曳舟を使った作業と、慣れる以前に物資の不足で整備もままならない状態のものが多かったため、不慮の事故を発生させるという事が多かったようです
結果、米軍はハワイなどから自国の曳舟を要港であった軍港に配置しなくてはならなかった程に…それ程に日本の全てが疲弊しまともな活動が出来る者が少なかったという事です

それでも多くの曳舟が戦後日本の港のために多岐にわたる仕事をこなしてくれました

米艦艇の暴力行為
「いくらなんでもひどすぎる」

「米軍を悪者にしすぎている」
とのご意見ありでしたが、これには少しばかり理由があります
戦争が失わせる者は、個人の理性や感情だけではなく、大切にしていた繋がりも当然のように失います
帝国海軍が滅亡する事で『こんごう』達のように自分達の始祖的な姉を失う、失ったという過去があるように
米軍には「ある理由」で失った絆があります
それは作中で語られる事になりますが、とにかくやたらに勉強です
足りない事があるので指摘というのは大歓迎です
ですが、一つ

これは小説ですから、意図的に感情を操り「反感」を持つキャラクターも作られているという事を忘れないでください
「あのキャラクターがこんな事をいったから嫌いになった」という意見は実は作者的には成功、読者の心を揺らしささくれを作ったという意味では大成功なんですが、…その逐一感情的になって意見を送られると、先の設定をばらさなくてはならない事もしばしば起こりかねませんので
ですからどうか、お願いです、一つの作品として長い目で見てやってください

作者の勤めは作品を終わらせること
作品は公開された時にはすでに終わりが決まっているもの
そこに向かって頑張っていこうと思ってますので、できれば今年中に『こんごう』は最終回を迎えたいと考えておりますから

…しかし二ヶ月の空白で今年中に追われるかｗｗｗ

それでもがんばります！！！

でわでわ、またウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

2024

第八十三話　魂の棺

静かに、赤さびの浮く艦体に手をかける
ざらつき、肌に刺激を伝える振動に『こんごう』は一度めを閉じ、
波の音に耳をゆだねる

「『こんごう』……三笠の姉、敷島さんって」

粉川の声には張りがなかった。三笠を知っていてもその姉妹については彼女の口から話しに上った事もなかった
言わない理由は、失った者を思い出す辛さだと自分勝手に考えていたが、どうも様子が違う事にぶれる視界をより確実なものにしようと指で見開いくと

「どんな顔をしている？」

少しでも仕入れたい知識のために隣を歩く『こんごう』に訪ねた

「厳しい、厳しいお顔だ」

心象を伝える簡素な返事
粉川は目を凝らさなくても解る鋭角の縁を持つ目に、三笠を思い浮かべた

「似ている……そういう事か」
自分の内につぶやくと、先に進む『こんごう』の背中を追った

波はひたすらに静かで、心地の良い音を響かせる昼下がり
触れる事で、真夏の海風と熱を持った鉄の感触を刻み込むよう、歴

史には忘れられてはならない熱さがあった事を刻み込むように艦体
中央に、今は構造物のあった立型の根っこしか残らない甲板に降り
ていった

追いつく粉川を横に、ゆっくりとした足取りはこの水の記憶が見せ
る世界で唯一ふれる事の出来ない「生者」の元にたどり着くと姿勢
を正しすと

「敷島中将……『こんごう』であります」

刀をかざし沈黙を守る二人の姉の姿に、『こんごう』は踵をそろえ
た敬礼をした
鉄心を込めた初心の挨拶は、見えぬ相手の前でも変わらぬ心を捧げ、
誰が見ても恥ずかしくないもので、つられるように粉川も敬礼をす
ると

「『こんごう』？話せるの？」質問をした
「話せない……触れる事も出来ない、でも……私はやっとこの人に
会えた」

水の瞳にたたえた涙
死に行く姉である人は『こんごう』にとって、自分生い立ちに深く
関わったとされる人でもあった
白い軍装と、ペンキをぶちまけられたように阪神をさび色に塗り替
えた傷の水兵服を纏う帝国海軍の姉二人のとなりに立つと、顔を交
互に見つめた

黄昏色の髪、海行く魂にふさわしい青い瞳の敷島
踵をそろえた大柄な身と、肩幅を広く持った英国生まれのしっかり
とした体躯

今まで見た事のなかった帝国海軍黎明期を活躍した姉の姿。今の日本には彼女達の足跡を示す物があるとするなら人の残した記録書しかない、それも近代とされ写真まで残る時代にありながらも多くの記録が失われている
魂達が残した記録は、今はどこにも残っていないのだから、この時代に導かれた『こんごう』が風景も人も、生きた魂の姉達の姿も刻みつけるように大きく目を開いて見つめるのは「役目」でもあった

自分達の先を生きた姉達の記憶を持ち帰るという役目

二人の間に立ち、もう一人の姉に目線を動かす
昼下がりの静かな波の音と、熱波和らげた海の風の中で
伝統を受け継いだ黒、カラスさえも美しき羽根と称した日の本歌人の言葉がごとくの髪
うっすらと涙を浮かべた目の涼月
戦艦大和の護衛として坊ノ岬の海戦を戦った姉は、猛禽たちの苛烈な攻撃の末に瀕死の重傷を負ったが、ボロボロの体を後進微速という形で海を泳ぎ佐世保に戻ったところで力尽き、着底した
それから終戦の日までの間を浮き砲台として努めたの彼女

静かすぎる時間、途絶える事なく打ち続ける波音の中で見つめ合った二人の姉
敷島の手に立てられた軍刀を前に涼月は一礼すると

「それは、ご命令であっても聞けません」

厳しい視線の前で、涼月は断りを入れた

「敷島中将、私達は三笠元帥のお言葉に縋ってここまでやってきました。バカな事だとお思いでしょうが、どうか私の願いと思ってお

許し頂きたいのです」

涼月の静かながらも意思を強く固めた顔に、敷島は歯ぎしりをすると

「お前は…お前は、ただ死ぬよりも辛い道を歩まねばならぬ事になる。もは、戦争は終わり私達はこの国に必要とされなくなった。語弊はあるやもしれぬが最後の時を自分で選んで何が悪いか？」

敷島が懸命に言葉を、喉に押し上げて話しをしている事は見て取れた何度も奥歯を砕かん勢いでかみ合わせ、目をつむると

「……三笠が正しいとは限らない、いや間違っているかも知れぬのだぞ」

「それは、私達以降の者たちにしかわかりません。残念ながら敷島中将にも結果を知る時間がないように、私達は…帝国海軍はここで終わるのですから」

揺らぎのない返事
危機に走っていった日本、人と同じく船達も混乱の四年近くを走ったそれ以前から、真綿で自分達の首を絞めるように断続的に続いた争いの年月の集大成だった太平洋戦

負けると思って戦いを始めたりはしないが、勝てるという見込みがあって始まったわではない戦い
それは軍人という人の間にも理解している者達がいたように、魂達もまた賭けである戦い理解をしてい者がいた
案の定、混乱の戦いは最初の進撃からあっという間に暗闇の悪路に転換する時を迎え
ミッドウェーしかり、一大消耗戦のガダルカナル、暗号機の解読が進むアメリカ軍の先手を打つ攻撃に、海はまさに羅針盤を惑わせた

暗い坩堝と化していく

終わらない戦い、
先の見えない戦いに出る者達には、自分達を支える「何か」が絶対に必要になった
それが現実的な教えでなくとも、船の魂である者達を支えるには大切な教えとされ、そして……教えを振りかざした者がいた

「涼月、だが…」
「敷島中将、中将も絆の片鱗を見た事があるとおっしゃいました」

命じた側である敷島を問い詰めるように、涼月は壁に自分の体を押しつけて立ち上がると

「名を継ぐ者、魂を継ぐ者」
「それは、それこそが願いだったのかも知れぬだろう」

金の髪を揺らし、小さく否定
長く生きたからこそ「継ぐ」という姿を見たこともあった敷島は遠い目をした
涼月はその目を逃がさず聞いた

「金剛少将は、次を生きる事を信じていました」
「言うな……」

声に力はないが、顔を背けなくてはいられない程の衝撃が敷島の頭を叩いた
日露の戦いはもう過去の栄光のように扱われていた頃、そんなものには目もくれず日々の鍛錬こそが実戦で役立つ全てであると
何人もの艦魂を叩いて鍛えた。その中にイギリスからやってきた金

剛がいた

「金剛……」

眉をしかめ、今は星条旗を翻す基地となった港を見渡した
十六条旭日旗をはためかせ並んだ日本の艦艇達はもうここにはいない、愛した愛弟子金剛はいない
敷島は目頭を押さえた。涼月に死ねと掲げた軍刀を下ろしすと

ここが一大軍港、佐世保鎮守府として才気を大輪のごとく咲かせた頃、敷島は国防の第一線で働く艦艇としては最後の時期に入っていた
同期の艦艇達も急激に流れ時代の中で、一線から退き、または別の用途を得て長い奉公に入ったりしていた頃

約束の人はやってきた

「巡洋艦金剛であります」

高い身の丈、金色の風にながれる髪、するどく尖った目
初めて見たときに「約束」が果たされたと心を叩いた

二代目金剛の姿は、あの頃、日露の戦いに向かう自分達と共に懸命に切磋琢磨をした初代金剛の姿によく似ていた
初代金剛、黎明期大日本帝国海軍の最初の海戦を経験した彼女は、指導者として力量に迷いを持っていた敷島を励ましたときに言った言葉があった

ここは自分を必要とし苦楽を共にした愛する国だと
そして
転生輪廻というものがあるのならば、次に生を得られるのならば、

必ずやこの国へと
魂の良き指導者に敷島がなる事を信じ、付け加えた最後の言葉は約束そのものだった

「次にもしこの国に貴女が生まれたら、私は鍛えなければならんのかな？」

「その時は徹底的に鍛えてください。国を護る盾として恥ずかしくないように、私もそのつもりで貴女に着いていきますから」

今は昔、自分の元に戻ってきた猛き隣人だった金剛の思い出に目が潤む
年甲斐もなく自分があの頃に戻ったかのように日本にやってきた彼女を鍛えた

時に褌にサラシ姿で
「心を鍛えるためには体もだ！！」と竹刀片手に追いかけ回し

兵装の話しから艦体運動の一から十までを徹夜で語る、彼女はどこで憶えたのか渡世の人間が語るでない博徒のような言葉で、懸命に質問を繰り返してきたのが微笑ましかった

敷島にも勉強が必要だった。二人の思い出
すでに老骨の艦となった敷島では最新鋭の金剛との装備手順など話しを合わせるのが困難だった。故に敷島自身にも多大な勉強が必要とされ、言う事、見る事で全てを吸収する姿勢を持ち、学ぶ事に貪欲で、知らない事を恥と素直に認める金剛を心から可愛がった
彼女のために分厚い教本と格闘した日々を思えば自然と涙も流れる

というもの

「涼月、確かに実感した。私は最初の金剛大佐との約束が果たされ、あの人が私のところに戻って来たと歓喜した」

背中を向けたまま、復興のための煙が揺れる港町を見る敷島に涼月も並ぶと

「中将だけではありませんでした。前身者の名前を頂いた者の多くを、中将を始め朝日大佐や常磐大佐、出雲大佐など多くの方が「名と共に生を継いだ者」と言われました」

指折り数えられる程に継がれた名前

「だがな、かならずしも継がれたわけでもない。だから」

「いいえ、信じます。私の名をもって私が戻るべき場所、現世（あらよ）への道しるべを残していけると……そしてまたこの国に生まれると」

「しかし、一概に三笠の教えの通りというわけでもない」

敷島の生は長かった。涼月の言うとおり名を継ぎ、前任者の魂を体現した者は多かったが、そうでない者も多かった

事実、帝国海軍最後の戦艦となった姉妹である大和、武蔵には前任の名を持つ者がいた

だが二人は前の者とは少しも似ていなかった

高雄なども三代続いた名であったが、初代と似ていた者は三代目の高雄と曖昧な繋がりは見て取れたが、必ず継がれるという事はないというのも身をもって知っていた

「長門中将も信じて行かれました」

悩む敷島の背に声をかけたのは、挨拶にきた痩せた眼鏡の男だった
彼は情けなくも先に涙をこぼした目を拭いながら訴えるように言った

「敷島中将、大和も武蔵も…扶桑も山城も、お言葉を信じて逝きました。貴女が否定なさらないで下さい。貴女もまたあの時はそれを信じたとおっしゃったハズです」

泥沼の戦い、誰もが心を壊し優しかった日々を取り返そうと自分を死地へと向かわせた
この国に務むる数多の船達に希望はなくなっていた
ある者は客船として産まれたにも関わらず、魚雷を満載し南洋に向かう任務の末に死に
ある者は貨物船として産まれた事で、必死にその日の糧に事欠く日本の為に海を渡る道で猛禽たちによる爆撃を受け、骨をもついばまれる最後を迎えていた

「死しても我らの魂は受け継がれる」

開戦から一年、消耗に次ぐ消耗は物資だけではなく、人も魂も同じように心をすり減らしていた時に大きく手を振り、軍艦旗を掲げた彼女はそう宣言した
その考えの中身を三笠から敷島は直接聞くことはできなかったが、三笠がその理論に至った理由は分かっていた
あの事件以来、妹三笠は探していた。自分達の生というものを

混迷続く戦いの中で敷島は、引き継がれる姿から「魂」自分達の存在がどういう形で続いてきたのかを考えるに、苦境の中での説法を振りかざす三笠にそれなりの賛同てしいた

「故に死を恐れてはならない！！神国日本に嫁した全ての后達よ！

！国から頂きし名に恥じぬ働きを示せ、さすれば名を刻みし魂を再び現世へと妾が導かん！！」

赤く燃え上がった空襲の港
横須賀鎮守府最後の時に彼女は何をしていたか……

肩をふるわす彼の側に敷島は顔を向けると

「三笠はどうしている。あれほど名を馳せた艦だ、只では居られまい」

「三笠元帥……記念艦三笠は現在米軍の管理下に置かれておりますが……」

有様のひどさは言葉にして伝えるのをはばかられる状態だった
終戦後進駐してきた米軍は戦勝の記念品として三笠からありとあらゆる物を引きはがしていった
昼はもとより、夜には日本人による略奪が行われ艦内は廃墟のように薄汚れた壁を並べた見苦しい姿と化していた

国が有った頃、大切にされた記念の船は敗戦の重荷を請け負うがごとく無残に千切られ配線、銅線、室内に残されていた食器から棚らか全部をはぎ取られ、大砲は全て輪切りにされて切り落とされた

「動かぬ大砲までを恐れて切り落とすとはな」

三笠にされた強奪は敷島の身の上に起こった事とまるで同じだった
敗戦と同時に、国民を守れなかった国の盾は役立たずの金食い虫以外の何者でもなくなった
米艦艇艦魂からの暴力以上に堪えたのは、愛すべき自国民からの略

奪行為の方だった
だが、事実役に立てなかった自分達を残して置くことなど出来ない。
そして魂である自分達は最後に役立てる物と変えるために、復興の
資金となるために自分達の体を千切っていく日本人を見つめ続けた

「それで三笠は、何をしているのだ」

荒れ果てていく自分の身の上など事ここにいたって大した問題ではなかった
問題なのは魂達の死の所存、それを宣言した者が今何をしているかという事

「長門中将の厳命により三笠元帥は自室にて一切の交流を絶っておられます」
「長門の？三笠は自分では責任をとらなかったのか？」

勢い振り返った敷島の尖った目がズイと近づいて、彼の言葉を射貫くと

「数多の港で、矢面に立っている仲間がいる中で何故にさ最高責任者である三笠は動かぬのか？」

出雲でさえ、沈没した半身の上で仲間を守らんと手を広げている時に三笠が姿も見せないというのは敷島には考えられない事だった
全ての帝国海軍艦魂に「自殺」を禁じ、生きて戦い抜く事を誉れと御旗を振った者が、自らは逃げるように自室に篭もるなど許されざる行為だった
怒りの混ざった力で敷島は、男の肩を掴むと

「どういう事か！！」

現役さながらの怒声を耳元に響かせた

「三笠元帥の魂をなくせば、いままでそれを頼みにし「心」を預けた者達の魂への道を無くすことになりかねません。横須賀は長門中将が責任を持って出航の日までを守られました。三笠元帥を失わぬ事、それを長門中将が望まれ鎮守府に残された全ての艦魂達も望みました」

捕まれた首の下で男は辛そうに続けた
零すような言葉には苦みが一杯に詰まっている

「三笠元帥は敗戦当初全ての魂に自決を許されました。しかし長門中将が許しませんでした」

ボロになったとはいえ、魂の力に衰えのない敷島の拳の前で彼は、その時の様子を伝言してくれた艦魂の話しを紡ぐように続けた

あの日、八月十五日大日本帝国は連合国に敗北を認めた
流れる大御心の言葉の前、膝を屈し涙を流した人と共に魂達も泣いた
「七月十八日に富士姉姫様ご自刃」
横須賀に残っていた曳舟の報告はそこから始まり、残された者達の苦難が続けられた

夕闇を待つと事なく、泣き崩れた人の群れは家にもどり
この国がこの先どうなってしまうのかという不安で沈んだ青空の下、静かな時間が流れていた
横須賀鎮守府もまた同じように、誰もが敗戦による虚脱状態にあり
幾度もの空襲で緊張の夜を過ごしたハズの者達もただ空に目を馳せ

過ごすという状態になっていた

鎮守府港の岸壁ギリギリに無理矢理寄せるように付けられていた長門の姿に往年の輝きはなかった
マストも煙突も無残に切り取られ、迷彩のための緑色を一面に塗りたくった艦体は焦げ焼かれた爆炎によりヒビを走らせた塗料の跡と、飛び散った破片に付けられた落書きのような傷で溢れていた

輝かしき連合艦隊旗艦の姿など微塵にも残らず
細かな砲塔は全て陸揚げされ、唯一己の誇りでもあった四一センチ砲塔だけがむなしく波風に晒されていた

夕闇が近づき、鉄の鐘楼は赤茶けた光の鷺を纏い、人のいない物言わぬ山の陰に、鎮守府に残された大小数少ない艦艇と曳舟達は甲板に集まっていた

「誰も異存はないな」

確認するように話す長門

長かった黒髪も乱れ、火の粉をかぶった各所に生臭い匂いを付けた中将は、甲板に集まった者たちに最後の挨拶をしていた

「では、行こう。我らの行く先へ、魂の棺に迎え入れられるために」

片目を無くした顔の長門を前に覚悟を決めた艦魂達は、三笠の元に飛ぶ光の渦に呑まれていった

終戦直後の記念艦三笠もまったく無傷という訳ではなかった
物資に事かく日本は、神明の鉄と評し三笠の内部にあった鉄の抜き

取りを何度かに渡って行っていた
そんな微々たる量で戦争の行方を左右する事は出来ないだろうが、
まさに藁にも縋る思いがそうしていたのか、内部の奥深くボイラーのあった箇所などの壁はことごとく切り取られていた

また空襲による被害も少なからず出ていた
標的として狙う艦艇が長門のようにカモフラージュされた艦もいる事もあり、陸に上がっている三笠もまた「陸に揚げてあるだけの船」という認識の元幾多の空爆に晒されていた
命中弾こそなかったが爆発による傷痕はすさまじく、各所に黒ずみの汚れや焦げた後を残していた

後部甲板、焼けたチーク材の跡も生々しい場所に鎮守府に残された艦魂達は光の渦を飛び出して集まっていた
誰も彼もが怪我をし、光を使って移動する体力のない者は肩を担がれての出席であった
その中を乱れる事のない帝国海軍軍装を纏った三笠は一巡すると、みんなの顔をしっかりと見て

「全てが終わった今、残されたお前達に有るのは苦難だけである」

自分の前に傷ついた体を押して飛んできた魂達に、どういういたわりがあるのか
まるで自分に問うような声は

「今まで良くやってくれた、みなよく尽くしてくれた。だが帝国は滅びた。我らは負け、護り生きるべき国はなくなった」

信じる
そんな安い言葉でこの戦いに出た訳ではなかったが、最後は信じな

ければ戦う事が出来なかった
いつか「神風」は吹くという妄想にも似た思いが帝国海軍を支配した
たのは太平洋戦開戦から二年もしないうちの事だった
それ程に疲弊しも心を殺して戦った国はついに負けを認め
全てが瓦解してしまった

並び立つ事の出来ない者達は三笠の足下ですすり泣き、立ったまま
今は亡くなってしまった仲間の名にわびを入れる者もいた
その中でも長門は毅然とした態度で真正面に三笠を捉えて言葉を聞いた
横須賀を襲った空襲で艦橋直下に続けざま三つもの爆弾を食らった
顎は下唇の艶を奪い焼けただれた皮を晒したまま、首回りの全てを
煤けた包帯で覆い、失った片目の穴をふさぐことなく、空虚な暗闇
の傷の顔で、残した瞳に決意を燃やしていた

「国が滅びた今、我らの役目も終わった。故に生きる事に苦しむ必要はない、みなここにて自刃いたせ」

自ら軍刀を前に出した三笠の声に、長門の声が間髪おかずに響いた

「金打（きんちょう）＊1」

声に合わせたように各々が携えた軍刀の鍔を打ち叫んだ
怪我をした者達も一糸乱れぬ動きで、床をつくように揃った音に三
笠は驚き目を見開くと、音頭をとった長門に問うた
夜の風の中、長く伸ばした髪が揺れる連合艦隊最後の戦艦魂に

「何をしている？何に誓いを立てた？」
「我らが自決せず、先に逝った者達の元にゆく事を」

自らも立つことままならぬ大けがを背負った長門は、片口を笑わすと
「我らは、ただでは滅びませぬ。必ずやこの国に戻るために今生最後の生を全うする事を誓いました」

覚悟は決まっていた
この先、進駐してくる連合軍からどんな目に会わされようとも、苦難の海を戦い魂を散らした仲間の元に行くためには自殺は出来ないという思いは、三笠の教えの神髄に添おうとしていた

「やめよ!!自ら死ねぬという者は名乗りでよ!!妾が介錯してくれようぞ!!」

ローブを巻くように手を振り、軍刀を掲げて見せる
力を失い自決するにも手足を損なっている者も多い、腹を召すにも喉を切るにも足らぬというのならば、責を負うがごとく首をはねようと三笠は吠えたが

並んだ艦艇艦魂達の目は決して心折れて、死から逃げようなど曇りも見せぬ目を向けていた
「それを信じて戦った、信じた者達に殉じたい」という思いもあったに違うない
草木のように揺れながらも、集まった全ての魂達は立ち上がり長門の起立に従うと、帝国海軍から配刀されていた守り小刀を前に差し出した

「私達は共に海を走った者達が信じた教えに従います。そしてまた再びこの国で相まみえる事を願います」

長門の目が、苦しみに歪む三笠の目に挨拶をする

「心は、この国に置いて参ります」と、高く宣じた言葉の下で別れの笑み見せたままで

「長門に釘を刺されたか……」

男泣きの彼の肩を離した敷島は、顰めた眉のまま小さく笑った
懸命に教えた大切な生徒達の下した結論は、三笠の責任を問うものでも有ったことを理解した
そうだ、それを宣じ愛弟子達を争いの海に進ませた、負けては成らぬと叱咤して背中を押した者の責任は誰よりも重い
代表者として長門がそれを気がつかせ、死ぬなどという安い道を選ばせなかったという態度に感心した

「そうだ、私達こそが責任をとらねばならぬ。何故に戦いが無情で不条理で、どこまでも理不尽なものであるという事を心根に残る程に教えられなかったのか」

敷島もまた、責任を痛感していた
栄光の帝国海軍
その中身は、日露の戦いに小国ながら勝ったという喜びに参じた無様なものとなっていた事に、対馬の海戦を武勇伝のように聞かせた覚えはなかったが、人の心がそれを誇りに前進するように、魂にも垢は付き、戦いを肥え太った目で達観していた事を思うに
何も教えられなかったのではという残念と後悔の中で敷島は何度か首を振った

「ああ、責められて当然だ。私達もまた苦しみの抜いた果ての死を

知らねばならぬ。敵を撃つための技術だけではなく、撃つことの痛みを教えられなかったのだから、それをどう心に刻むかを知らしめる事ができなかった!!これは私の罪だ」

そういうと涼月に顔を向けた
はがされた側部の衝立に背中を任せ、肩に下ろした黒髪を揺らす水兵である彼女に
最初の時のようなすごんだ声ではなく、優しく問うた

「今一度聞こう、自決はせぬか?今ここで死なねば、お前はただの死よりも苦しみの生を何年も続ける事になる」

大破の姿をさらし佐世保に戻った涼月には、復員の仕事さえ与えられる事がなかった
すでに死に体であり海を行くための働きは出来そうにない彼女の行く末は、実に船として辛いものが待っていた
解体という有るべき死の形を得た敷島とは違い、生きたまま防波堤として埋め込まれるという苦しみが

「はい、それでも生きて…この魂の心を届けたいのでございます」
「いいのか、お前の苦しみは尋常なものではないのだぞ。それでもか」

敷島は自分を甘いと思いながらも涼月の最後を哀れんで、言わずにはいられなかった
代われるものならば、自分こそが責め苦の果てに死なねばならぬと思うほどに
上官の苦悩に満ちた目に、涼月の若い娘である歳相応の丸い目が頷く

「もう決めております、姉妹達の元に参るためにはこの道を通るし

かないと」

壊れた体の輪郭を風が晒す
敷島は片手で涙を抑えた。教えられなかった事の多さと、最後まで
形はかわれども決して諦めない事を学んだ部下の姿に背筋を正した

「そうか、ならば私も行く末を見るために、心をこの国に置いていこう」

涼月の弱々しい手から差し出された小刀を受け取り、自らの軍刀を
重ねると男の側に向けた

「託そう、この心を。三笠一人に責を負わせても、いかな果てがあるかを見るために」

大小を重ね合わせされた刀の前、痩せた男は直立の鉄心がごとくに
敬礼をした
長くお互いの労苦を厭い合うように波の音の中で
静かに手を下ろし深くお辞儀をすると整然と、かつて帝国海軍の軍
人達がそうしたように静かに刀を受け取る

「一命を賭して、必ずや三笠元帥のもとにお届けいたします」
胸を打つような返礼、夏の風の中で残された者達は顔を見つめて別
れの時間へと走ってゆく

「大和の心も届けてくれたそうだな」
「はい」

かけがえのない時をともに生きた魂達は死んでゆく、彼は何度もそ
の光景を見てきていた

そして数少ない艦魂を見られる人である彼に、多くの魂が心を託した
終わりに向かって、毎日のように心を預かる気持ちは、身を切る程
の苦行であった事は容易に想像がつくというもの

「荒行がごとく辛い道のりであったであろう。しかしようしてくれた」

「いいえ、いいえ……」

涙つたう頬、欠けた眼鏡の奥で思い出は巡る
女という形を持つ魂達との交流は、華やかだった時もあり、共に頭
を悩ませ学んだ時でもあった
時に互いを思いぶつかり合い、時に苦しさから弱音を吐き心身を支
え合った

「この先どんな事があっても自分は、帝国海軍に嫁した姫君達の事
を忘れたりはいたしません。出来る事をこれからも致します。そし
て……そして、今はみなの菩提を弔いましょう。またお会いする時
に不足なき用に」

敷島と涼月の笑顔とは対象的に、涙を拭わず歯を食いしばった彼は
もう一度敬礼をした

「心遣い感謝する。長谷川少佐、貴殿の行く末にも良き光があらん
事を」

そう言うと大きく手を広げて見せた
「さあ、最後の宴を楽しもう。心ゆくまで呑もうではないか」
事の成り行きに涙燦々の曳舟達を手招いた

「いや、最後ではない。また会うために、この日を記念に忘れぬた

めに飲み明かそう!!」

影の存在として歴史の記憶を見ていた粉川はすでに膝をついていた
ボロの甲板に足をつき、熱波をしのぐ日陰の下で首を振る
息を詰めるような会話の中で顔を真っ直ぐに向けて聞き続ける事が
出来なかった

人と魂の邂逅、その果てを見送った側の人間の気持ちを今初めて実
感したから、心にヒビを入れるほどに痛みを抑えるように胸を抱えて
自分ではとてもそんな事は出来ない、辛いものを見てしまっていた

「お前は後悔する」

三笠の言葉が響く
魂に出会えたことをあらゆる方面でこれほどに辛く後悔した事はな
かった
有るべき死以外の死。戦いに敗れ最後の時を待つ者達の心を初めて
見ると、自分の前で涙ながらに別れの杯を重ねる男を見た

「そうでしたか…さぞ、辛かった事でしょう……」

ひざまずき胸を押さえる粉川の前を『こんごう』はしっかりとした
足取りで歩いていった

「『こんごう』？」

見えぬ世界で、真っ直ぐに奇跡がくれた再会を確信していた

乱れぬ足取り、定規で測ったかのように歩幅をあわせ立ったまま盃を煽る敷島の前に出ると、踵を合わせ敬礼をした
まるで今にも顔を触れあえるような位置にて、しっかりと姉であった人の顔を見据えると声も大きく

「日本国海上自衛隊護衛艦『こんごう』であります。貴女の前に帰ってまいりました」

愛弟子と呼び涙した敷島の言葉、戦艦金剛の次代である自分が何も継げなかった事は心を刺し通していたが、礼をせずにはいられなかった
締め付ける思いに声が震え、水の瞳から涙がこぼれ唇を噛んだ

「『こんごう』」

奮える肩をいつしか粉川が支えていた
ここに来ることで先人がどれほどの涙を飲んだのか見た粉川もまた、自分では何もかもが足りていなかったと反省をしていた
『こんごう』に並び立つ粉川は、敷島の前で同じように敬礼した

「日本国海上自衛隊、粉川一等海尉であります！！」

真っ直ぐな目で、三笠の姉であり、最後まで教育者たらんとす姿勢を貫く者に敬意を表する礼に

「粉川……」
『こんごう』は自分を支え、共に敬礼をしてくれる人の手の中で耐えられない涙をこぼした
この人の愛した魂を継げなかった事や、苦難の時を知る事が出来なかった自分のふがいなさに、どう謝ればいいのかと

「私は…私は…」

何も告げられない不出来な次代、頭を下げてしまいそうになったその時。胸にしまっていた欠片の玉が輝きを増し声を響かせた

「私達の魂を探して」

輝きの玉を見つめる『こんごう』の前、敷島は豪快な笑い声を上げると『こんごう』に目を合わせた

「ああ、必ずやまたこの国にて相まみえようぞ!!」

手を重ね光りをともに支えると

「私達の心は必ず帰って来る。『こんごう』私は必ずや再び貴女に出会う」

自信に満ちた笑みは、しっかりと『こんごう』と彼女を支える人粉川を見つめていた

「私は信じる」

敷島の声は至高の響きの中、心消える事のない決意と思いを二人に届けた

第八十三話　魂の棺（後書き）

カセイウラバナダイアル～～まだまだ～～

まだまだ……まだまだですよ

てか、氷川丸の続きが掲載できなくてごめんなさーい！！！
次回はなんとか同時掲載が出来るようがんばります！！

今話登場の長谷川少佐については、もう有名過ぎて言う事なしです。
ただそのまま長谷川さんというわけではないので、そのあたりはご注意下さい。

私がこの小説を書くきっかけとなった作品で、その作中で多くの魂達と邂逅をした人
私個人の考えで、これほどまでに魂との会話をした人は戦後立ち直れなかったのではという思いがあったため、こんな形での登場となりました

長谷川少佐、モデルは言うまでもなく大作「艦魂年代史」に登場の長谷川翔輝さん
黒鉄先生作品からの登場でした

＊１　金打

侍用語集というのでも普通に掲載されているので難しい言葉ではないのですが、誓約を立てる、または誓いを刻むという意味で刀の鍔を叩くというのが一つの作法？としてありました
彼女達は戦船の魂であるという事もあり、この作法を採用しました

鬼平犯科帳では小説にも、映像にも出ていたりしますから確認して見るのも良いかもしれませんよ～～

それではまた～～

第八十四話　理の事物（前書き）

戦争を語るのに、うまい言葉などはない
綺麗な言葉もなければ、煩雑な言い分もない
ただ、死者の想いや願いを、自分が代弁し希望したかのように語る事のないようにひたすらに注意しています

それでも足りず見苦しい点があればご注意を下さると有りがたいです

第八十四話　理の事物

月光を水面に侍らせた佐世保湾
風に撫でられ、小さく奮える夜の光の中にアイゼンハワーは立っていた

秋という季節を通り過ぎ冬に入る海ではあるが、この時期にしては月がよく見える空
佐世保や九州北側の天気は四月から冬に続く中で万華鏡のように色合いを変え、幾重も重なり二度と見ることの出来ない波を作る数を増やす
荒れと、荒れ少なしの間を行き来しながらほんのつかの間に涼やかな笑みを見せるような、こんな晴天の満月を浮かべる

実に貴重な時にアイゼンハワーは上着を肩に引っかけた状態で立っていた

金色の髪に惜しみなく注がれる月の恵みである柔らかなロープを纏い、カールをまいた髪の上に星を踊らすほどに滑らかなまま
小さな大将は、自分から遠く離れた場所に睨みを利かせていた
厳しい目線と感情を石の中に埋め込んだように固まった目で
佐世保基地からもっとも遠い泊地から、真っ直ぐに海上自衛隊佐世保基地の顔役達が繋がれたバースを睨んでいた

最後のバカ騒ぎ備えて、どうにか『くらま』との逢瀬を楽しめないものかと思案に暮れていたところで見つけた

１０キロ先の海の上、護衛艦のヘリコプター甲板の上に光る魂の結晶を

静かに尖った目は青い瞳にテレスコピックの十字を浮かべる程に標的をしっかりと捉えていた

「コーパスクリスティー……それは知って良いことなのかしら……」

苦く歪んだピンクの唇を噛むと、髪をかき上げた

「日本海軍……絆を消失させたのは貴女達だけではないのよ……その上で、自らそれを絶ってしまおうとする者もいるという、そういう面白くもない喜劇を知っているかな？」

金色の髪を風に揺らす
子供じみた駆け引きを楽しんだ大きな眼はここにはなく眉間に苦痛を走らすラインの下で、水の記憶へ通ずる光の道を見るアイゼンハワーは、静かで落ち着いた声を響かせた
後ろには明日の御用聞きをしに伺っていた二人が、緊張と圧力を纏う上官の姿に声を押し殺し、互いの顔を不安げに見合わせる

ミラー（原潜シカゴの艦魂）とクーン（イージス艦カーティス・ウィルバーの艦魂）は、不安の色を浮かべた目で、小さな大将の後ろに立ち尽くしていた
声をかけたら、雷を落とされるのでは？そう勘ぐってしまうほどにアイゼンハワーの髪は金色からシルバーを織り交ぜ、踊るように揺れていて
それを伴わせた力に満ち、怒りにも似た「何か」を顔に表す様は、そして卑屈に唇を笑わす姿は初めて見る恐怖でもあった

一寸の時間を刻む、水の記憶の世界はぼんやりとたまま『こんごう』
達の前でゆっくりと続けられていた

日差しを避けた艦体中程のスペースで魂達の宴はしめやかに、それ
でも笑顔の耐えぬ状態
さすがに日の高いこの時間に大声を出し騒げば、港に詰めている米
海軍の艦魂達に何かしらの嫌がらせなり「命令」と称した暴力を受
けかねない
負けた側の辛みもある、終始誰の顔にも笑顔はあったが声は小さく
最後の時を楽しむ

小さな曳舟達は、どこからそんな物といわんばかりにお酒を取り出
し、涼月の盃を支える者もいる
眺める景色の向こうでは小さな漁船達が昼上がりで港の縁に帰り始
めていた
港側では、漁の出来を待つ婦人達や子供達、野良猫まで並び手をふ
る風景の前を
漁船の舳先に座り髪を靡かせる原初に近い船の魂達の顔は真っ黒に
焼けた顔に満点の笑みを浮かべ、魚を箱出ししている漁師達を見つ
めて笑う

戦争は終わった
戦船は必要なくなり本来の形を行使し、人の仕事を見守る者達、人
の糧である魚を獲るための船達、助けの器達は元気いっぱいに働い
ている

『こんごう』と粉川は、敷島艦のかつては主砲が鎮座していたであ
ろう丸い穴縁に腰を下ろしていた

日露の戦いでは、ここにいた砲塔が何度熱気を帯びた唸りをあげたのだろう。台座には無数に刻まれた傷と油の跡が溢れ出た血のように滲んでいる

手に触れるざらつく感触、使い込まれた艦体の持つ年輪の前に砲塔の影はなく、ぽっかりと開いた穴を簡素な板足場が何十にもかけられていて、この船の終わりを如実に現していた
穴の奥からは船の動力として積まれた燃料の匂いと機械油の混ざる鼻には重い風を吹き上がっている
横から波打たれたら落っこちてしまいそうな深さがある穴の台座の向こうに、円座になって酒を酌み交わす敷島達をただ見つめていた

風は温く、波は穏やか、終わっていく日本国の一時代を作った帝国海軍の姿を『こんごう』の青い眼が潤んだまま瞬きもせずに見つめ続けていた

隣に座った粉川は感慨深くこの不思議の時をすごしていたが、三笠の姉敷島の姿が見られた事には素直に感謝していた
今までは聞くのもはばかった三笠の肉親が良く似ていた事を知れただけでも良かったと

髪の色が金髪と黒髪という差はあったが、目の輪郭や色、尖った感じの顎、高い鼻など三笠がもう少しの落ち着きを身につけたら彼女のようになったのであろうという予想
粉川には相変わらず目の前の全てが水の中で目を開けた時のように、ぼんやりとしたイメージに見えていたが、遠目でもわかる姉妹の特徴に少しの笑みのまま、宴の様子をうかがっていた

「それにしても横須賀から長門がいなくなってしまったという事、心配事も一つ増えたな」

敷島は途切れる事なく呑み続けていた盃を休めるように下ろすと、遠い空の向こうに目を走らせた
魂達の心を預かった三笠を守るため、敗戦の港を護り続けた中将長門の苦労はどんなものだったと思えば頭も下がる

自分のような骨董中将でさえ米軍艦艇は階級章を取り上げようと詰めより、叶わぬと知った時の暴力は集団での殴る蹴るという酷いものだった
それが現役の中将、大和や武蔵以前の大日本帝国を代表する連合艦隊旗艦として、世界に「ｂｉｇ７」として名を馳せた彼女ならば……どんな仕打ちがされたのか、考えなくてもわかる程に辛かった

栄誉ある者を地に這いつくばらせ心を折る仕打ちをする者達を、争いが終わった今となっても蛮行を続ける姿を、許し難い行為と憶えていた
国家間の戦争に負けた事実を受け入れ、頭をたれた事は認めつつもやはり気性荒き教官であった敷島には、礼節までを打ちのめす事が勝者に許された権利なのか？と目を尖らせて勘ぐっていた

おそらくそれらの横行を全面で受ける苦行を自分に課した中将長門彼女が、最後の日々で守った仲間を置いて横須賀を離れるという事を考えるに目頭を押さえて声を詰まらせた

「敷島中将、その事なのですが」

自分の発言から重く肩を落とした敷島の姿に、長谷川少佐は思い出

したように声をかけた
ひび割れた丸めがねの下で、ほんのり赤く染まった酒やけの肌で頭ほ軽く叩きながら、苦悩を残させないように現状の報告と、敗戦直後の横須賀鎮守府の話をした

「横須賀でも……降伏調印前は連合国軍の艦艇が数多く進駐したため酷い事がたくさんありましたが、その…調印式後は米海軍ミズーリ少将の発言があり、酷状は早い段階で収まり、他の鎮守府に比べても比較的安全に過ごせる状況にあります。現在も、心配には及ばぬと思います」

「ミズーリ少将？」

敷島の頭の中に微かに浮かんだ名前で首を傾げた
すぐには名前の主の情報が出てこなかったのだ
大戦末期の頃に就航したアメリカ海軍艦艇の数は、その工業力に押された膨大な数だった
日本がどう足掻いても手の届きようのない圧倒的な数であり、当然艦艇の名前も数多にあった

相手の艦艇の名前を覚え、それら艦艇の運用や特徴などを的確に知るのは士官の仕事でもあったが、情報を取り纏め記憶するという努力を上回る名前と艦艇数には目を回した
なにより敷島のような老朽艦には大戦末期の頃の情報は、ほとんど耳に入ってこなかった

鎮守府近くの着けていればそれなりに情報をとる方法もあったのだが、退役艦として一線を退いてた敷島は相ノ浦に身を移されていた事もあり手に入る情報といえば、大本営の発表する情報を少しと、佐世保に帰港する怪我を負った艦艇達の不確かな情報だけが全てと

いう粗末な有様だった
この頃には、大本営の情報も当てになるものが減り、相手の猛威が目に見える形で空を舞うのを見るに至り、この戦争の行く末が真っ暗な坩堝となったものだと実感していた

まともに相手を知る術がないのに、「何に勝て」だから「何を学べ」と、教えられるのか自身に憤然としていた敷島は、戦後各鎮守府が米軍の基地として存続されるに至りようやく様々な艦艇の名を聞くことが出来るようになった
件の有名艦「ミズーリ」の名も、この頃にやっと知った

戦艦大和に相対する者として作られた巨大艦ミズーリ
その姉妹達、アイオワ、ニュージャージー、ウィンスコンシン

敗北はしたが生を残した敷島は記録をとり続けていた。忙しく戦後を駆け巡った情報の中から、生き残った者（魂）の勤めとして、帝国海軍最後の歴史を綴った中にあった名前を長谷川少佐が口にした事で思いだしていた

短めの金髪の頭を揺らし、切れ長の目を細めると顎に手をあてたまま何度か頷く

「ミズーリ少将……アイオワ、ニュージャージー、後一人と戦艦艦魂の将だな」

体躯ならば帝国海軍が作り上げた戦艦大和に匹敵する大型の戦艦。長さならば数メートルを超え、高速型として作られた大物の魂。実物を見た事はなかったが
眉間によった皺を人差し指が撫でる

「ミズーリ少将……」
噂にはよく上っていた魂（ひと）の名前。だが栄誉の将官というよりも、どちらかというと米駆逐艦達の悪口の中にあった名前に興味と嫌悪が浮かばせると

「何をしてくれたのだ、そのミズーリ少将というのは？」

眉間による思案の中で、話しを先に進ませるようにと手を振った

「それが、その、訓辞とか、礼に乗っ取ってというものではなく……」
長谷川も正確に聞き及んでいないのか、童顔ながらもそり残しの髭が目立つ顎を押さえると
「なんと言ったらいいのでしょう。僕はその時の事を曳舟達に聞いたので本当にそうなのかわからないのですが」
「曳舟は嘘をつかない、正直者ばかりだ」

周りで酒盛りをしつつもまん丸の目で話しに耳を傾ける、小さな魂達を敷島の目が一巡し長谷川の顔を睨む
急かされたように彼は、それでも少し訝しそうに答えた

「泣かれたそうです。「ここで、これ以上の暴力をふるう者を許しません。戦争が終わった今、守りたい者のために死んでいった者達を悼み送りましょう。生き残った者達を辱めるような事は止めて……」」

隣で降伏調印の文書を取り交わす日米代表団の行間ずれやらなにやらで手間取っている甲板の上で大きく手を振って、そして

ミズーリは泣いた

ただの泣きようではなく、甲板に崩れ伏したままの号泣は爆音のように大きな声で港につめた連合国艦艇の全てに聞こえたという

「泣いた……？何故？」

まったくわからない答えに、敷島は敗戦後港に入ってきた米駆逐艦達の行動を抑止出来なかった将達が居た事に注視し頭の回転に弾みを付けた

「少将ともあろう者がそんな感情を露わに……」

感情……

「守りたい者のために死んでいった者達を悼み送る」

聞く分には奢り無き勝者の労りにもお見えたが、その後の号泣が少しも話しの筋と繋がらないと思えたのだ

敗北で母国から捨てられる艦艇の姿は何度か目にしている

日露の戦いの時には何隻ものロシア艦艇が敗戦によって帝国海軍に接収、その身を落とし帝国に屈服した者達がいたが

敷島もそうだったが、出雲のように前に立ちお互いの戦いが終わった事を認め、新たに共に生きる者として受け入れの握手を交わし

決して接収者である事を責めたり、罵声を浴びせる事を許さなかった

それを命令として発令し、幾ばくかの問題は残しつつも帝国海軍艦艇は指示を守った

泣いて自分の命を通すなど「哀れみ」の現れにしか見えずむしろ非礼にも感じた。きちんと礼を尽くして手を繋いだ自分達の事を思えばいかにもおかしな話しだった

「変だな……」

高い鼻にかかったほつれ毛を返すと
「何故泣く？」

艦隊の中でも重職についた少将ならば泣いて直談判などという醜態など晒さずとも厳命をする事だって出来たはず……なのに何故そんな失態を公の場でミズーリは見せてしまったのか？

もたれかかっていた壁から肩幅拾い体を起こし敷島は佐世保港の方に目をやった
居並ぶ米駆逐艦
進駐してきた米軍は用心深さは普通にもっており、帝国海軍の残った艦艇に外の情報を与えようとはしなかったが敷島はあらゆる手を使って集めていた
曳舟達に頼み、漁船達に頼みと、どんな些末な事も逃さぬように。
持ち帰った情報を身振り手振りで話す彼女達の時間が半日近くになっても情報を集め続けた。まるで新たな職務に着いたかのようにそれで気がついた事があった、米海軍艦艇の彼女達も何かがおかしかった

最初は夜陰に隠れた悪口程度の話しが、時と共に上官であるミズーリやアイオワに対してどこが気に入らないのかを、真っ昼間から艦上にて話し合っている様を何度か目撃するようになった
勝った事の喜びで時間は止まらない、勝った事に続く何かに不満があるのか？

終戦直後は戦勝に浮かれた不心得者達のねい言と片耳に聞きながら書き留めていた出来事に長谷川少佐の話が不可思議に重なる。どこかおかしい米海軍の中身

「グレート・ホワイト・フリート……」

一人思案にくれる敷島の眉間を走る痛みの奥、古い記憶を呼ぶように軽く額を打ってみた
１９０８年あの年、アメリカは白船の大航海を実施し太平洋における軍事力誇示を行った
ロシアとの戦争に勝った日本は太平洋側に産まれた一大勢力として世界に認められた
だが同時に、今まで頂点に立ってきた白人社会に不安を持ち込む者という穿った見方がとぐろを巻き始めていた

教会（Ｃａｔｈｏｌｉｃ）は働けど実を結べない下層労働者達の救済は「奉仕」であると声をそろえていたが、その日常の奉仕を日本人達が海外移民する事で奪い始めていた事も問題の一つとなっていた

「タールの軛は、また来るやも」

列強の猜疑の前で、日本は間違った有頂天の中にいた
大国ロシアを倒した大日本帝国と

「奢ったものよ……」

当の敷島さえも、痛みから目をそらすために戦勝に浮かれた事があったと認めつつも、高く上がった鼻を最初にへし折られたのはやはり敷島達でもあった

白船来訪

もう一つの超大国とならんアメリカの示威行動
当時のアメリカの工業力にもは、敷島達日露組はただ驚くばかりだ

った
日本に訪れたのは十月に入ってからで、五ヶ月前に艦長が交代したばかりの敷島は式典に出席はできなかったが
三笠と朝日、姉妹二人は参列し客観的な感想は次女朝日から聞き及んでいた
「ロシアに勝ったのだからアメリカにも勝てる」など無責任な発言をする大衆の前で行われた景色は、恐るべきものだった
１９０４年から１９０７年。たった三年の間に１１隻もの戦艦を造ったアメリカ
六の戦艦をそろえるのに議会を紛糾させ、何度も承認を流され、苦難の時は計画発動から九年、それでやっと足並みをそろえた日本海軍の前に現れた者達
白鯨の群れに心が粟立つのも無理のない事だった
同時に精錬された魂達の姿に驚いた
当時緊張した日米の間で行われた示威行動だっが、アメリカ海軍艦魂の姿は人の思案を十分に汲んだ大人の艦隊だった
脅威は示せど、魂として海をゆく仲間という認識から侮蔑や高みから見下しをみせる者はおらず、さらに軍人として冷静な目を持ち良い会話の場をもてたと朝日は言いつつ、それ故に心から脅威を感じたと漏らしていた
アメリカと事構えるなど考えたくもないと
なのに、ここに勝ってやってきたアメリカ海軍艦艇の「幼い」事には当初暴力行為の横行からただ苛立ちを持っていた見ていた敷島だったが、徐々にある違和感を感じていた

大戦前、最後にアメリカ艦艇にあった時はまだ秩序ある魂を見ていたハズ？
戦争は色々なものを破壊する、礼節も命令も、それ故の誇りも失ったのか？

アメリカ軍は……あれほど立派な艦魂を多く持っていたアメリカ海軍はいったい何処に行った？この者達にどんな教育をしたのか？
教育者の観点からも敷島は尽きぬ疑問を持っており、それが少将ミズーリの号泣話しと相まって首を傾げる結果となっていた

稚拙な簒奪と暴力を繰り返した戦勝国アメリカの艦艇艦魂達

「その、中将とにかく横須賀は今は平穏です。何か気になる事があるのならば三笠元帥にお言葉届けますが？」

顎と口をふさぎ考え混む敷島の背に長谷川は盃をとめると

「ミズーリ少将のはすでに日本にいませんので、探るのは難しいのですが必要ならば努力……」
「ああ、聞くことは出来ないだろうな。何故泣いたか？なんて」

ふさいでいた口を開くと
手を前に酒を曳舟に注がせ、一気に煽る

「三笠に言う事も今更ない」

やっと腰を落ち着かせたように、はがされささくれだった甲板の跡に座る
となりで黒髪を揺らし話しを聞き続けていた涼月はひっかかりのある質疑を割り込む事なく質問を控えていたが、止まった会話に一息

をつくと

「敷島中将、今生最後になるかもしれません元帥に届けたいお言葉があるのならば……」

「涼月、お前は自分の行く末を選んだ。三笠の事は心配しなくても良い、誰よりも責を負って生きるか…抱えた者達と共に解体されるかは、もはや誰にも解らぬ事なのだから」

酒に焼けた喉から熱い息をはき出すと

「そんな事より、少佐。こんな遠くにまで来たという事からするに「恩寵の短刀」は全部集まり、ここが最後という事だったのかな？」

心配はない。三笠に関しては最早言う事はなかったが、それ以外の心配はあった
国内にの生き残った帝国海軍艦艇達は「心」を全て預けられたのかという

酒を頂きながらも手元から離さぬように持つ軍刀
長谷川はそれを後ろに隠すようにすると

「呉にては、榛名少将、日向少将、伊勢少将それと…出雲大佐がお預かりの願いを拒否され」

「そうか」

出雲は解っていた。きっと出雲は軍刀を渡さないだろうと、何故なら朝日の軍刀が届かなかったから
三笠の理論が正しくて、「心」を残す事が大切だとするのならば、届かなかった朝日の心故にそれを継ぐ魂は産まれない
朝日のいない世界など出雲には何の意味もないものとなった。だか

ら自分の手でそれを持ち想い持って朝日の所に、自分で行くと宣言したのは納得のいく答えだった

妹の事を心より慈しみ、友として愛してくれた出雲の志に涙をこらえる敷島
最後まで伊達女を貫き通した友に感謝した
顔をおとし唇を噛む
「ありがとう、出雲……朝日に…よろしくな」
手にした盃が揺れる
願うような言葉の後を涼月が聞く

「榛名少将達も金剛少将のためにそうされたのですか？」

同型の長女だった金剛を思って短刀を渡さなかったのかという質問に

「いえ、金剛少将の軍刀は長門中将がお預かりしておられましたので、すでに三笠元帥の下に届けられております。随伴艦の浦風中尉の短刀は……届けられませんでしたが」
「ならば、どうして」

「意地を通したか」

目を開き、少佐を責めるように見る涼月の目を遮る手
心を置いてはいかないというのも、最後は自分できめる事。敷島は潤んだ目のまま、少佐が弱腰で短刀を預かれなかったのではという気持ちを顔に出してしまった涼月の発言を抑えた

「榛名達は将官だった。自分達が教えられなかった事や出来なかった事の多さを痛感していたのだろう。上に立つ者は責任をどんな形にしろとろうと思うもの、死んでいった者達の前で己の魂を預けた

いと「言わない事も」また責任の取り方の一つでろう」

難しい選択だった
長谷川も額を床にすりつける土下座をして「心を預けて下さい」と頼んだ事を言うと

「己の命を持って、最後の日まで日本を見て逝く」
そう言われたのでは、下がらざる得なかったと涙した

「それで良い」

自分に言い聞かすように頷く敷島は、各地に残る仲間達の報告を聞いていった

終戦間近の九日に空襲を受け大湊の葦崎東方海岸に擱座した常磐は、終戦から向こう一年近く放置されていたが、その期間を使って自分が所蔵した本を曳舟達に分け預けていた
赤髪のまん丸目、愛嬌の良い顔が、半壊の自分を訪ねる曳舟達に気を遣うのはすぐに思い浮かぶ図というもの

帝国海軍の中では一番に宴会を愛し、上下関係なく出席をさせ楽しみを与えた常磐を慕う下士官から曳舟達は多かった
だから常磐の願いである蔵書譲渡・保管を、みんなが必死に請け負った

「いつか私の本と、作ってきた書を見てくれる船がいると思うから……」

初瀬と揃って本の虫だった常磐、大好きな本に包まれた生活をかなぐり捨て機雷を６００発もその身に積んだ

近代改装をし、自分達日露組の中では一番はしゃいだ常磐が、それでもの型落ち艦の身で旗艦となって旗を振らねばならない戦いをどう思い、どう記したのかを敷島は知りたかったがそれも今は叶わぬ願い
軍刀は預けず、自分の宝だけを残して逝った

常磐の姉、浅間は出雲と同じく呉にて全ての者を看取る事を勤めと言い軍刀を預けなかった

テイ（鎮遠）と故郷を同じくした八雲は終戦時可動できる数少ない艦艇だった
無口なところはテイに似ている彼女は敗戦という苦境の中でも、寡黙な態度で特別復員船の任につき、中国本土からの引き上げをする人達を何度も舞鶴まで運んでいた
銀色の髪を靡かせた麗人は、敷島が過ごす熱波の夏の下、汗を掻くことを惜しまず働き続けまだ長谷川に会う事がままならない状態だった

横須賀に詰めていた春日は、富士中将の自刃を追う形で殉死
軍刀は自らの首を切り落とすのに使い、船と共に沈んだ

目を閉じても溢れる涙の中で敷島は盃を煽った
肩を並べ、互いを励まし、時に曲げられぬ故にぶつかり合った仲間達は、もうほとんどこの世を去った

「敷島中将……どうか、心は」

敷島の多くの旧友が軍刀を預けなかった事を、長谷川は語るのを恐れていた
彼女達の中で責任者といえば元帥になった三笠ではなかった、敷島

こそが自分達の一番の指導者と皆が声をそろえた事を思うに、誰も預けなかった軍刀を敷島のみが預けてくれたのは青天の霹靂に近く、切れそうだった魂達の願いを長谷川はのやっと掴んだ形だったこわばる顔が、自分の横に預かった刀を隠そうとするが

「言わぬよ、今更返せなどと」

相手の心中を察した目は涙を拭いつつまだ高い夏の太陽を見上げた

「私には別の責任がある、故にその刀を預ける意味がある」
「別の責任？もう誰も中将の責任を問う者など」

涼月の心配げな声に敷島は、静かに尖った目のまま

「三笠がしようとした事の結末を見届けるという責任がある」

恐れず戦え

号令を与えた三笠が、それを言い切れた証明を見る役目が敷島の最後の使命
「恥など今更な考えだ、死ぬのではなく結果を見据えるために私は心を託して、今を生きる義務がある」

覚悟宿した瞳には生き抜く気概が宿っていた
わざわざ表に力を見せるように、曳舟の持っていたどぶろくの器を受け取ると口をつけ一息に喉を鳴らすと

「まだまだ、まだ死ねぬ。やることが山ほどあるし、私のような頑固な船をばらすには半年はかかるだろう」

末尾の日の中にいるとは思えない程の凛々しい顔は、おかわりと盃を差し出し呑めと長谷川にも奨めた
上官の力強い姿に涼月も無礼講と盃をとると

「敷島中将、どうして三笠元帥は私達が死しても蘇る事ができると確信したのでしょう？」

漠然と思っていた事をポツリと聞いた
それはどの船も顔をつきあわせても聞きたかった話でもあった
大戦が激化した頃、神にも縋るような三笠の発言がまかり通ってしまったのは、確信に満ちた声と、その発言に現れた力強さにも原因があったが、終わった今、自分もその道を選びながらも友も姉妹もが信じた言葉の中身を、涼月は少しだけでも本当のところを知りたいと零した

日本海を先頭をきって戦った魂であり、帝国唯一の元帥の称号を持つ艦である三笠の自信を信じたいと思うのは多かれ少なかれ明治以降に生まれた艦艇艦魂にはあったが、それが何なのかを探求した者は少なく、逆に三笠と同期の艦艇である明治組は眉をひそめながらもその言葉を聞いていた

「何故そんな考えに至ったのか」を

「「魂の引き継ぎ」の事だな」

あぐらをかいた姿勢で盃を重ねていた敷島は、軽く息を落とすと真面目な顔で
「ならば涼月お前に聞こう。私達はどういう生き物だと思う？」
返事を質問という形で返した

「私達はどういう?生き物?」
ふいの問いに涼月は考えがまとまらず、目を丸くしたままオウム返しをする
敷島はそのまま自分の前にすわる人にも問うた

「長谷川少佐、一番近くで長く我らを見てきたぬしに聞きたいが、私達をどういう者と見ていた?」

帝国海軍の中では数少ない艦魂との交流を持った男は、とつぜんの質問に盃を下ろすと欠けた眼鏡の鼻に指をやって

「自分は女神の末裔であると聞き及んでおりますが、前任者の」
「阿賀野大佐の感想を聞きたいわけではない、ぬしがどう考えているかを知りたいのだ。単純にいわれたままを信じてきたわけではないだろう?」

詰める視線の前で長谷川は持論を語るために、一度空を見上げる
涼月はそう言われてきた自分達の起源を覆そうとする敷島を恐れたのか身を引いている

「女神ではないと思います。女神というには感情的すぎるしむしろ僕達・人と同じように生を持って生きる存在のように感じました」

長谷川の顔は今は亡く思い出となった魂達の顔を、記憶の中に呼び戻していた
成熟した女性の姿を持つ者から、生まれたてのあどけない笑顔を持つ少女まで多くの魂と交流したが、言動や態度に神がかりを見せた者はいなかった
時に嫉妬し、時に喧嘩をし、時に食べ物やオシャレの話しで盛り上

がった彼女達の姿は市井にいる娘達の姿と変わりはなかった

確かめるような視線の前で敷島も頷いた
「私もそう思う。私達は女神でもないし、女神の末裔などという者でもないと思う」
ノイズの混ざる音が画面を歪める

敷島の発言に粉川は立ち上がっていた
「女神の末裔じゃない……」
『こんごう』は微動もせず、ただ目だけはこれまでにないほど開かれた顔で固まる
「では、私達はいったい」
今まで触れた事のなかった起源の話しを、取りこぼさぬようにと目を見開く

「私たちは皆、人と同様に死ぬその身に痛みを受けて……死ぬのだ」

生物のサイクルを冷徹な目は見つめていた
憑きものでもなく、宿るというでもない自分達の存在に対しての疑問に鋭角の目が止まる

かつて、大騒ぎの中でその疑問と向き合った事があったという事に
「人と変わらぬ、生命のサイクルにいる者がどうして神などという扱いをうけるのか……有り得ぬ事だ」
敷島の指が宙を泳ぐ、螺旋を描くように回す指の終着へと

「同じく死に、そして産まれるだけ……？……何？」

自分を見つめる二人を置いたまま思考の闇から一筋の光を見つけた
敷島は勢いよく立ち上がた

そのままストライドの広い長い足で艦尾に向かって走る
まだ海を、佐世保の港を見渡す事のできる場所にて広がる景色に目を回し、湾の片隅を凝視した

ここではかつてある事件が起こっていた
あの時は必死だった、ロシアとの戦争直後で多くの仲間を失った傷がいえていない中で起こった事件に対して敷島でさえ泡を食い、涙に暮れる仲間達と懸命の救助をした

「私達が理の事物をねじ曲げた?だからなのか?」

敷島の声は遠くなり始めていた
粉川も『こんごう』も最大の疑問である部分に追いつこうと離れ始めている画面の通路を懸命に走っていた

「ならばお前は、誰だ?」
霞む敷島の目が、ただ海を見つめて呆然としている
「誰が……誰がですか」
粉川は拳をにぎり、消滅してゆく風景に焦りの声を荒げた
「誰が、どういう事なんですか!!敷島さん!!」
粉川の焦りに『こんごう』も同じく敷島の答えを待って背に迫っていた

「三笠、お前は誰だ?」

「司令艦アイゼンハワー……その、どうしましたか？」

夜半を回った佐世保基地の周りは生暖かかった風を追い払い、冬の風が水面を打つ時間になっていた
季節は確実に移ろい冬の冷えた風の中でアイゼンハワーは沈黙を続けていた
視線の先にあるものは
ほんの数分、三分にも満たない光の結晶で銀色の閃光を見せる塊に瞬きもしない姿は銅像のようにも見える

後ろに控えていたクーン（カーティス・ウィルバー艦魂）は焦りに狩られていた
アイゼンハワーより背の高い彼女だが、腰が折れ司令艦の顔に自分を合わせるように成りそうな程焦っていた
米海軍の規律にある「必要以上の接触はしない」を簡単に越え、水の記憶の中に日本軍艦魂（海上自衛隊艦魂）と、よもや人までを連れて行ったコーパスクリスティーの如何なる仕儀も許されないものではと

「司令艦アイゼンハワー、この事については私の方から調書を取らせていただきまず、ですから」
「クーン、暖かいコーヒーが欲しいわ」

閉ざされていたピンクの唇が、いつもの緩い声を返した
何事もないように聞こえる声だが、それでも表情を変えない上官の姿にクーンは最敬礼をすると

「どうか、お願いです。コーパスクリスティー大佐の事は私に一任していただけないものでしょうか」

コーパスクリスティーがここで懲罰を受ける事になれば、理由などが公開されないにしても戦船の責務の重さに魂の救済を求める姉ダニエル（カウペンス艦魂）の衝撃は計り知れない
クーン自身はコーパスクリスティーとの間に距離を持っているが、姉を思えば自分がこの事態を収束させる必要があると責任を感じていた

「コーパスクリスティー大佐を私の部屋に」
「司令艦……」

歪めた表情を隠す事の出来ないシルバーアッシュの短い髪の下で、目が懸命に懇願をして見せる

「どうか……」
「クーン、コーヒーの準備よ。何を驚いてるの、私は大佐に手紙を渡したいだけよ」

振り返る丸い目は自分の頭を指差して
「キティちゃんから大佐に電信があったの、私にもあったんだけどぉ、大佐への分が多いのよね。だから直接渡したいのよ」
「えっ、キティ・ホーク大将からですか」
姉の寄港する横須賀にて、合衆国海軍日本国側の護りの総大将キティ・ホークはコーパスクリスティーに信心している事で有名な魂でもあった

「でわ、すぐに支度を」
「そうして頂戴」

光の輪を現し、こぼれ出る欠片の中に消えるクーンの背中を見届け

たアイゼンハワーはもう一度、佐世保基地のバースにて光る結晶を見つめた

「色々、聞きたい事があるしね」

顔に少しの倦怠感を漂わせて、金色の髪は揺れながらクーンの後に従って消えていった

第八十四話　理の事物（後書き）

カセイウラバナダイアル～～感情～～

とにかく、感情を追うという作業ずっとしています
どのキャラクターにも背景をつくり、それ故に絞り出される感情はどんな形なのかというのを作り出す事に手間取っています

これが実在の人物の心模様だったりしたらどんなに大変かと想いました

だから私の作品には名のある大将や、軍人があまり出てこないのですが、登場して頂くときも出来る限りでその方の事を調べてから書きます

それも
この大将はこういう人だった
だから、絶対こうするハズだという短絡的な思考誘導をしないように、その方の家族の事までできれば調べます
でもやっぱり難しい、頑張っても本人の全てを知る事はできない
隣に生きている友達の事さえそこまで理解できないのだから、見苦しい点も大いとおもいますが、ご容赦頂きたいと想いつつ今日も書き上げてみました

今回は外伝の方もどうぞ

艦魂物語，魂の軌跡～こんごう～外伝の外伝　港の働娘

「終わったの……」

８月１５日、その日の舞鶴は晴天に恵まれていた
氷川丸をはじめ第二氷川丸の氷雨に、少しの輸送船団は湾口から向こうに敷設された機雷のせいもあり身動きのとれない状態で大日本帝国落日の時を迎えていた

ラジオから流れる大御心の言葉は、どこか掠れた音を響かせ
日本という国のどこもかしこもがすり切れる限界のところにいた事を如実に現していたと、氷川丸はぼんやりと空を見つめた目で考えそして静かに涙を落とした

「なんのために……」

戦争が早く終わる事を願った
終わって、また姉妹がそろって客船として海をゆける日を心から願ったが
終わって、何もかもが手の中には残らない結末を迎えてただ悲しくて涙がこぼれた

「平安……日枝……戦争は終わったのよ。戦争は終わったの…戻って来てよ」

戻る事のない魂となった妹達
悲しみで下がった頭を氷雨が抱いた
「お姉さん、戦争が終わったんだね」
同じように泣いている氷雨、語る言葉をなくした魂達は皆すすり泣き、戻らぬ日となった仲間を思い崩れていった

「わかりました」

終戦と共に静まりかえった舞鶴鎮守府の一室で男達は苦く顔を見合わせていた

「後始末が回ってきたな…しかし、やむおえまい」

司令は襟口を何度もさわり落ち着きを取り戻そうとしていた

部屋の灯りは着けられておらず、戦時の頃と変わらぬ緊張野中でろうそくの火の周りを飛ぶ虫を見る男達はみな顔に苦痛を浮かべていた

「米内さんがいわれるんじゃあ、やった方がええんじゃろう」

痩せた目が暗がりに瞬きをすると

「近いうちにだ、明日からしたくにかかってくれ猶予はない」

速やかな決断はされ、時は無情に刻まれ出していた

終戦から三日、船達の元には「酒匂」という帝国海軍中尉が訪れていた

まだあどけなさが残る元中尉は礼儀正しく舞鶴に残された船達に挨拶をしていった

「早ければ来月末にもこの港にも米軍の艦艇が入ります。色々とご心配な事もおありでしょうが、この港の全ての責任は私酒匂が持っ

ております。武装解除は致しても、秩序を守る義務があります故に、どうか私の指示に従う事をよろしくお頼みしたいと思います」

氷川丸からすると、まだ若すぎる中尉の姿はどこか痛々しいものがあった

彼女は沖縄に向かう予定で一度は佐世保に出航したのだが、初の実戦がそれではという配慮があったのか？舞鶴に戻らされ、それからはボイラーの火を落としてここに鎮座していた

姉の矢矧は沖縄に向かう戦いで撃沈、それ以前の姉達も最早世には居なかった

氷川丸達と同じように、残された側の者だった

幼い顔の彼女は、出会った時はまだ水兵のような姿だったが次々に将官、左官失う帝国海軍の中で指揮系統の職に就かざる得ないという状況が生み出したため１７歳ぐらい、産まれて２年にもみたいうちの昇格をし、中尉となっていた

帝国海軍の一員である事、あった事が彼女にとって今更誇りだったのかを知る事は出来なかったが、礼儀を守った挨拶に酒匂を罵倒する船は一人もいなかったが、快く思った者もいなかった

戦船が本来の仕事もせず自分達と同じように生きている

このことに対するわだかまりは確実に舟達の心にあり、終戦の虚脱と失った仲間達への想いから深く心を蝕んでいた事が怒りとなって渦を巻いていた

「お姉さん」

氷川丸は氷雨と一緒に星空を眺めていた

終戦から向こう、船達には時間が出来ていた

今までは慌ただしく動いていた日々、それに合わせるように慌ただしく自分を動かす事で戦いの恐怖から目をそらそうてしていた日々が嘘のように静かな海だった

「私、私は祖国に戻りたいとかねそういう希望はないんです。ただもう一度客船に戻れると信じてここまでやってきたから、姉さん達と一緒にまだ海を行きたい、客船として、どこの国でもいいから」

氷雨の柔らかい髪はほどかれていた
病院船とは名ばかりで、武器や資材を人の死までを積み込んだ彼女に氷川丸は励まされた事を思い出していた

「うん、氷雨は強いから大丈夫よ。何処に行っても立派な客船としてやっていける」

静かになった日々でやっと、夢を取り戻すことが出来るようになった仲間達

まだこの先の事は何も解らなくても、ほのかな夢の話しで心を温め合っていた

「私は、氷雨に会えてよかった」

恐れで見る事も出来なかった空には、今は猛禽たちもいない
星の瞬きの間で、氷川丸は感謝していた

自分には出来なかった事、人を抱き死の見送りを懸命にし続けた氷雨に心を打たれた

そうだ帰りたいと願う人を抱いてあげなければと、時に勇気を生き

る気力を与え、死の旅を安らかな道として与えるために
あの日から何度も肌身与えた
暖かさを思い出して進んだ

「姉さん、私も姉さんに会えて良かった。良かったよ」

氷雨の涙に指を這わす
新たに出来た妹と共に、これから先の荒波も越えていける
氷川丸はそれを信じていた

第八十五話　咎の箱船（前書き）

自分の国を大切と想う事は、どういう事なんだろう
そう考える日々です

電子キー０３．６０．ａ．６３．９８０ｇａａは何を現しているでしょう～～

第八十五話　咎の箱船

敷島の背中を包む影
薄いオーガンジーのベールが静かに落とされ、目の前をくらます
粉川と『こんごう』は懸命に手を伸ばして走っていた
溶けるように迫る闇の壁、通路のように伸びねじ曲がってゆく画面

敷島のきつく結ばれた唇、短くまとめた金色の髪と…何かに思い当
たった青い瞳が今一度消えてゆく二人との距離に顔を向けた
答えなのか？問いなのか？睨む視線は静かに言う

「三笠、お前は本当に三笠なのか？」

歪む蜃気楼の中に立たされ、足場を崩れた粉川が懸命に手を挙げた
瞬間、世界は星の瞬く夜の下に変わっていた
落ちてゆく降下のトンネルに体を引き延ばされ、千切られる感覚が
鼓膜を圧迫した空間から放り出された粉川は息も絶え絶えだった
背中を丸め、ヘリコプター甲板の上で何度も頭を打ち付けて短く刈
り込んだ頭を掻きむしった
なにより体の節々にかかった痛みで立ち上がる事はおろか、声さえ
掠れるような状態で

「ここは…」

四つん這いよりも低い位置から空に手を伸ばすように、掴もうとし
ていた敷島の肩の位置にガタガタに痺れ震えた手が泳いで、空気を

確かめるように動かしながらも
懸命に肺を動かした
臓器を押し上げる痛みが体の隅々まで支配しそのままもう一度頭を
甲板に打ち付けた

掠れというよりも唸り、口をふさぎながらも息をするために鼻を開
いた粉川の姿に『こんごう』は手を引き起こすと、船縁に引きずった

「吐け!!吐き出せ!!」

叩く手が背中を押して、粉川の体の中につっかえていた圧力の塊は
喉を駆け上がり、ポンプのように口から飛び出した。先ほど頂いた
『いかづち』の料理を海に向かってぶちまけた

圧迫が顔を押しつぶす勢いの中、口に登った力で顔を引っ張られる
と押され鼻が血を噴き、何度も頭を振るが瓶詰めにされてシェイク
の直撃をうけた感覚で嗚咽のまま頭をうなだれる
立つ事ままならぬ粉川の背中を支えていた『こんごう』は、コーパ
スクリスティーに向かって踵をかえしていた

「マリア!!」

茶色の長い髪を揺らし、勢いよく振り向く
「どうして、幕を下ろした?あの先に答えがあったかもしれないの
に!!」
現の世と別の時間で見た敷島の尖った視線、刃物の様な目の中にあ
った疑問は答えを出す前に終わってしまった
後一歩が足りなかった記憶の旅に『こんごう』は戻りたいと心底考
えていた

長い足が真っ直ぐに、月の光を受け髪を逆立てている聖女を捕まえると
「もう一度!!頼む!!もう一度あそこに行かせてくれ!!」
「そうだ!!どうしてこんな中途半端な…」

涙と鼻血のまま、口元を抑えた粉川も座り込んだままで聞いた
自分の身を気遣い背を叩いてくれたとはいえ、やはり『こんごう』はそれ以上の答えに近づきたいと考えており、粉川もまた自分の体の事以上にそれが大切だったが

「貴方が耐えられないから」
『こんごう』に肩を揺さぶられたコーパスクリスティーの目は見開かれたまま、やはりの答えを告げた
銀色に輝く輪郭の目の中、芯の部分が点のように浮いて瞬きをするただ一点の粉川を見つめて冷たく冷えた肌の下、赤い唇は繰り返した

「人にはこれ以上の時間は耐えられない、彼は限界のところにいた」

肩にかけられていた『こんごう』の手を払うと、逆立っていた銀色の髪を整える
儀式が終わり、通常の姿に戻る黒髪を撫でて粉川に聞いた

「はっきりと景色が見えなかった…そうじゃないですか?」

襟を立たすコーパスクリスティー
『こんごう』は自分の前に立つ彼女にも疲労が出ている事を理解した
月明かりの柔らかい光の中ではわかりにくかったが、白い肌がくすんでいる。青色を混ぜた落ち込みのカラーを纏った顔色
『こんごう』に捕まれた服を直す仕草の中で、痺れを残している指先が触れた

「確かにぼんやりした感じでしたが、あそこに、真実があるのかもしれないんです」

粉川は自らも痙攣し瞼を何度も上げ下げしている目を懸命に開くと
「ぼくは正しい答えを知りたいんです」
自分が、自分の求める答えに必死になっている事を、『こんごう』に見られているというのに気がつけないほど焦って聞くが

今まで、人が踏み込んだ事のない領域への道を開いた妖精は明らかに疲れていた
懇願の人を見つめながら
口から流す不規則な呼吸音が名の音の中に混ぜると、一度咳払いをして

「貴方の見た画、輪郭のない曖昧さが人の歴史認識に似ているように、時を詠もうとも得られる答えに正邪がないのが流れある世界の当然の形なのです。真実の答えなど知りようもないのです」

曖昧である認識
見たものがそのまま正しいとは言えないという事はわかる、後の時代を生きて歴史を論ずるにはあまりに偏った思いが邪魔をするだけだから
確実さを手に入れるために記憶を遡りたいと言うが、それさえ個人の記憶という記録に過ぎないと

説得の中でも粉川は引き下がれないという気迫で体の各所を叩く
流れているからこそ、流された源流に繋がるものがある。繋ぐ糸があるというのもまた事実ではないかと

額をさすり痛み和らげるような目
「…でも、霞んだままでも見る事は出来ました。僕にはその先が必要なんです」

哀願にも似た言葉に灰鉄の瞳は顔をそらすと、変わらず穏やかな波を寄せる湾を見回した
「そう、過去を見る事は出来た。糸を探すもできてた。でも…いずれにしろそれが人の限界ですから、無理なものは無理」

背中を向けた聖女の姿に
まだ立ち上がれず肩で息を整える態勢に入った粉川は諦められなかった
諦められる訳がなかった
三笠の名前と、その不可思議をどうしても知りたかった。その思いはおそらく『こんごう』を上回っていた

苦笑い、片目をつぶって自分の胸を押さえると、体をきしませる雑音を気取られないように丁寧にコーパスクリスティーに返事した

「鍛えてはいたのですがこの始末、申し訳ありませんでした。でもすぐに戻ります」

無理をしてでも体を起こし立ち上がる

「少し休んだら、もう一度あそこに連れて行ってください」
「頼む！！もう一度私達を連れて行ってくれ！！」

粉川のとなりに絶っていた『こんごう』の拳は強く握られ震えていた
閉ざされていた記憶への道、忘れる事の出来ない大切な人の名前、今まで知りようのなかった終焉の日

実は帝国海軍の魂こそが海自に、自分達の思いと魂の繋がる道を準備していたのではないかという疑念は『こんごう』が今まで生なんできた全てを覆していた

「次に産まれる魂達に…」

歯ぎしりと荒い息と…涙の瞳はコーパスクリスティーを睨らむという嘆願をしていた

戦争が終わればそこで全てが終わって時が止まるわけではない
終わった戦争、それからの日々を生きた艦魂達がいた。自分達の生きた記録を残そうとしていた
記憶の中、敷島が懸命に記録をとり続けていたのは何故?記録をとる理由は一つだ

「私達につなげるために生きていた…」

苦しみの息の下で言葉がボロボロになってこぼれる
涙を止められないまま拳を握る

常磐が自分の集めてきた本の譲渡をしたという事は、受けてる側がまだ生きていたという事でもあり

生きながらの死という結末を持っても繋がりを信じた涼月がいたという事は、それでも願った繋がりがあったという事

記憶の中の帝国海軍艦魂達は誰もが思いを残していたという事実の前で、何故現在に続く断絶があるのか?、どうしてそんな結果が産まれたのか?という大きな疑問にぶち当たっり、長居髪を振り乱した

立ち上がった粉川のよろめく体を『こんごう』は力強く支えると

「マリア、頼む。私は知りたい！！先人達の想いをもっと知りたいんだ！！」

決して切れてしまう事を望まなかった姉達の言葉は『こんごう』の心も大きく揺さぶっていた

「いつか私の本を…」

宝を残していったという常磐の話で、それに並ぶ絆を見つけなければならないという使命に心は燃えていた

「姉さん達は思いを残していったんだ！！その糸がどこにあるかを知る義務がある！！」

高く吠える孤高の魂の前、コーパスクリスティーもまた月を見つめながら

「わかっています。でもこれ以上は…人には…無理…、私にも…」

『こんごう』の力強い声に、甘い響きのある声が上乗せされて否定をした

冷徹な顔ではなく月明かりの下に輝く銀の目には苦悶が浮かべて表情乏しく、いつもうっすらとした笑みを浮かべているコーパスクリスティーは顔を空に向けたまま、悲しそうに返事した

「次に、この人を水の記憶に誘えば意識が世界から離れてしまう。人は個別の魂として器を持って産まれる生き物であるが故に「水の流れ」に添う事は出来ないのだから」

「大丈夫です！！ぼくは絶対に大丈夫ですから」

引き下がれない意思が無理矢理にでも体を前に進ませる
相方の引きずる足取りを『こんごう』が支えて叫ぶ

「粉川が行けないのならば、私だけでも！！」
「『こんごう』……」
「私が全てを知り、全てを伝えるから！！」

粉川の肩を抱き、お互いが同じ思いを持っているのならば自分がそれを負担しようと、透き通る冷めた空の下で叫んだ

「そこまでにして頂きたい」

二人の必死の言葉を切ったのはクーン（カーティス・ウィルバー艦魂）だった
いつの間に降り立ったのか、合衆国海軍黒の軍装に映えるシルバーアッシュの短髪は鋭く尖った青い眼で、『こんごう』達とコーパスクリスティーの間に舞い降りると

「コーパスクリスティー大佐、アイゼンハワー司令がお呼びです」

正しく肘を立てた敬礼をした
さわぐなという睨みは『こんごう』達に背を向けてコーパスクリスティーと顔を合わせると、小さく首を振った

「マリア…危険な事をしないで、貴女を必要としている魂は日本の魂だけじゃない、合衆国の魂にこそ多くいる事をわすれないで」

波音に消される程の小さな電信を飛ばすと、眉を下げた泣きそうな顔で
弱った体に息を落ち着け、静かな目線を送るコーパスクリスティーに告げた

「さあ、すぐに移動をお願いします」

手を引かれ退場を促される聖女の肩を『こんごう』は掴みあげようとするが、もう一つの輝きが受け止める

「『こんごう』大佐（一佐）、このあたりで」

同じぐらいの体格、エセックスのいない佐世保を守護する魂ジュノーが手を取り上げた
歓迎会で見せていたふざけた眼差しはなく、規律の前の壁足らんとす態度は言葉はなくとも礼儀を要求する青い瞳を輝かす

「失礼しました。ですが、どうか」

米海軍の将官からの出頭をかけられたコーパスクリスティーの背中になんとか縋ろうとする顔に、手と厳しい視線による制止
「今日はここまでで。騒ぎを私達はのぞんでいない」
ジュノー、後ろに控える部下二人は起立した姿勢で見る

張り詰める波の間に、背中を向けたままのコーパスクリスティーは重い息を吐き出すと、最後の導きを与えた
「Ｍｉｓｓ　ｄｉａｍｏｎｄ…いいえ『こんごう』大佐（一佐）…答えへの鍵は貴女の元に有るはず、みんな貴女に託していった事を忘れないで」
「私に…」

託されたという言葉と共に『こんごう』は自分の胸ポケットを抑えた
暖かに光滴の宝は、矢矧の願い、雪風の願い、そして涼月と敷島の
願いを折り重ね輝きと暖かさを増していた

「コーパスクリスティー…マリア…」

胸を押さえまるで祈るような姿となった『こんごう』
「ここから先は…私に与えられた使命…」結んだ口の奥に誓いを噛む
疲れに落とされた肩、米海軍艦魂の中にあってはひときは線も細く
みえる聖女は、静かに頭を揺らす
背中越し、見なくとも己のゆく道を定めた魂の強さを確信して

「進みなさい」

背中を押す最後の一言の前に光の輪を大きく現した
くコーパスクリスティーが現したのではなく、控えていた者達が力
を使ったのか、通常よりも大きく、まるで銀河の流れが現れる中を
足は進む。雨粒を落とす真円に向かい、軽やかな背は揺れて

小さな声は自分の抑えていた胸に語りかけていた

「……これでいいかしら?」

聖者の妻は粛々と光りの橋を渡り、佐世保港に静かな夜が再び訪れた

司令旗艦アイゼンハワーの持つ個人の部屋というものはなかった
演習の時に集まった横長の大部屋、寝静まったグループルームが彼女の持つ唯一の部屋だった
横に大きなグラスエリア、真ん中にトイテーブル。アイゼンハワー本艦に作られている喫茶室を模した作りで、青く塗られたプラスティックボードと模造木を組み合わせた大きめのリビング
広すぎる空間の真ん中にコの字型を作ったソファー、その真ん中に彼女は座っていた
灯りは小さな艦内灯のみで大きすぎる部屋の四方までを照らすには足らず、月明かりを取り込む窓からの光がメイン照明となっている
隣に置かれたローボードーの上、星の輝きを柔らかく返すクリスタルのカードを細めた目で眺めながら

数分前、共の者達につれられやってきたコーパスクリスティーの顔に疲れを見たアイゼンハワーは、カーティス・ウィルバー艦魂クーンに彼女のためにレモンティーを作るよう指示して部屋の外に送り出していた

先ほどまで尖っていた上官の態度から何かを読み取ろうとしていたクーンの不安な背をよそに
涼しげな青い瞳は月明かりの下に輝くと

「早く返って来てね」と軽い口調で態度を変えることなく、自分の対面のイスにコーパスクリスティーを座らせると
金色の緩いカールの髪を揺らしながら自分の頭を指差し

「座って、キティちゃんから電信が来てるの。私宛のと、貴女へのが」

感情を読み取りにくい軽いトーンで口を尖らせて見せた

「もぅ、キティちゃんたら貴女が横須賀に寄らないとわかって相当我慢してたみたいなんだけど、辛抱たまらずってところかしら？佐世保にいるうちがチャンスと狙ったみたいに山ほどの手紙を送ってきたのよ」

イスにすわり足を振り子のように揺らす

「ホーク大将には三年ほどお会いしてませんでしたから」

子供のように、目の前に置かれたポテトチップスを口に運ぶ司令艦コーパスクリスティーは目を閉じ、自分の教え子を思い出して……薄く銀色の輪郭を見せる

物静かな対応をする相手の前、アイゼンハワーは変わらぬ愛嬌良い目で「どうぞ」と皿を押して

「あの子はここから（太平洋の半分と日本海側及びインド洋）向こうが仕事場だから滅多にハワイにはこないし、離れられないし、日本は好きみたいなんだけど貴女との会話はもっと好きみたい。だから会えない分を」

そこまで言うとまた自分の頭に指を差して

「ここにいっぱい送ってきたわ」

鼻をならす

「一応電子キーを付けてあるから、規則の事はわかってるけど人の手紙を読む趣味はないからね。解除キーは０３．６０．ａ．６３．９８０ｇａａよ」

いかにもな言葉にコーパスクリスティーは苦笑いを浮かべた

本来規則に厳格な米海軍。電子通信は指令艦クラスの許可が無ければできない、しかも中身については必ず読まれ検閲を受ける事になるキティ・ホーク大将は司令艦の地位にいる者だが、極東及び世界最大の海域海軍第七艦隊の上位司令はブルーリッジとなっている。彼女は米海軍情報将官でもあるため、キティ・ホーク大将とはいえ検閲を避ける事はできないが、司令艦同士ならばこんな事にはなっていなかった

検閲を避けられない最大の理由は部下にあたるコーパスクリスティーに手紙を送る事が一番大きかった
それらの理由から簡単にやり取りは出来ないようになっていて、本来なら佐世保に詰める前線士官であるエセックスの手に渡るのだが、今回は任務にて不在という事から最高職であるアイゼンハワーの元に渡っていた

「よろしいのですか？」

コーパスクリスティーももちろんその事は良く知っていた
自分達と同列の者達は時間が許す限りの説法を行う事ができても、上位将官であるキティ・ホークはめったに合う事ができない
思想検査や管理という名目を作っては懇談を持つ事が出来たとしても実に少ない交友でもある

アイゼンハワーも勿論信心を介し親交を深める二人の事は知っていただからこそ募る思い、募る苦しみを解放する教えを聞きたい、または手紙だけでも自分の心情を伝えたいと願いに理解を示して
伝えたい気持ちをいっぱいに溢れさせた手紙を読むのは苦痛と、お茶目に両手を挙げてみせた

「いいわよ。気にしないで」

司令っ気のない素っ気ないアイゼンハワーの態度、対照的に輝くプラスティック製の青いローボード
はしゃいだ態度を見せながらもどこか静かな司令艦の手元にカードを持ち上げて見せた

「ｍａｊｏｒ　ａｒｃａｎａ．１３に、ご連絡はとられたのですか？」

透けて後ろに輝くアイゼンハワーの碧眼を写すクリスタルのカード
描かれる絵は、不吉を現す姿を浮かせ彫りのように見せている
素足の下を星の河が流れ、美しい装飾と宝石をちりばめたようなローブの下。色黒の女神は目だけを赤く輝かせ右手に大きな鎌を携えている。それを現すカード

「役員章だしね……連絡はとってないけど。貴女に２．３問いただしを行わなくてはならないわ」

アイゼンハワーの小さな義務違反とは違い、コーパスクリスティーが『こんごう』との間に行った出来事は重大な軍紀違反だった
コンスティチューション提督の指示する「深入りをするな」という規則から大きく逸脱した行為に対しアイゼンハワーは処罰の権利をもっていた

冷えた空気を床に這わす部屋へ、ドアを開きレモンティーをトレイに運んできたクーンは手を震えさ、カードの輝きを見つめている

テーブルの上に置かれたカード。ｍａｊｏｒ　ａｒｃａｎａ．１３のカードは米海軍名誉将官及び上位将官会幹部章
コンスティチューション提督を中心に記念艦になった者や、モスボ

ール体勢に入った一部の司令艦を名誉会
現在活動する全ての海域に置ける司令艦（特に航空母艦）を上位会
とする組織
かの大戦以降組織された米海軍艦魂会における重要事項執行部の会
員証明には大きな権限が与えられていた

執行の大釜を女神の紋章、死と再生を意味する不吉の使者を頂く姿。
あの大戦以降設立された米海軍最高権力上位委員会
軍を統制する組織とは別に、軍である海軍艦艇の魂の忠誠を求める
組織

情報将官であるブルーリッジ司令が窓口程度の存在として扱われ、
キティ・ホーク大将事ファースト・ネィビー・ジャックを掲げる彼
女が唯一もっていない権力ともされる超法規的な組織の証明章であ
るカード

声を出していいのかさえ迷うクーンの顔に、アイゼンハワーは丸い
目をあげ金色の髪をかきながら

「気を重くしないでちょうだい。司令艦には知る義務というものが
あるのよ、今日私は彼女と長話（ちょうわ）をしなくてはいけない。それを騒ぐ
ような事があってはいけない」

冷徹に光る青い眼の前でクーンは一歩下がった
どんなに容姿が幼くとも上官であるアイゼンハワー、ましてやｍａ
ｊｏｒ　ａｒｃａｎａ．１３の上位幹部が行う事を騒ぎ立てるなど
あってはならないと厳命されている

「Ｙｅｓ，　Ｓｉｒ」

足取りに冷静さを取り戻すと、クーンは敬礼と共に部屋を出た
長く続く通路に足音を残さず、即座に自艦に戻った証明として光の中に姿を消す
「良い子ね」
後に残らなかった音にアイゼンハワーは何度か頷くと、軽くため息を落とした

「司令艦アイゼンハワー、どのような処罰も覚悟しております。その事については手を抜かず厳罰を処して下さる事を願います」

対面のコーパスクリスティーは姿勢を正していた
コーパスクリスティーの違反は知られる限りでも少ないものではなかった。そもそも彼女の教義に対して軍の将官達はもとより、上位幹部会は良い顔をしていなかった。理由は明らかで自分達が兵器の魂であるという消せない事実があるという事
戦地に赴く時、もしかすれば魂の心を揺らすような教えを容認するのは難しいと考えていた事にあった

「コーパスクリスティー…幹部会に報告。査問委員会にかけるとなれば貴女は教義を捨てなければならないかもしれない」
両手を組み、テーブルにもたれるように顔を前に出すアイゼンハワーの声は、今まで聞いたことがない凍った響きを持っている
「もしそうなったら貴女は生きていける？」
小さな照明が一つ、冷めた空気に揺れる

「その時は「聖者の棺」として港にて生を終えます」
「ずいぶんと自分勝手な結論ね。教義の大半を今まで容認してきた幹部会に対し反抗していると見なします」

青い瞳が尖る。真正面に捉えられた変わらぬ表情に

「私達は今まで、貴女の教義と信心を計ってきた……」
人差し指が右と左にゆっくりと動かされる
「必要か？不必要か？これが我ら米海軍にとって有益であるか？無益であるか？を」
「結論はでましたか？」
目と目が緊張の糸で繋がる

「結論はとっくに出ている。教義を容認し、救いを求める者達のための救済として活かすという形で……」

米海軍上位会がコーパスクリスティーの教義を容認しているもう一つの理由もあげる、キリスト教の多くが「自殺」を許していないという事を
軍事艦艇の魂たる者は自分の為に死への手続きを使う事があってはならない、どんな苦境であっても生きて帰れという指示に添うためでもある

冷たく尖った目は長話の中で瞬きもしない、開かれ続け情報を目の縁に浮かばせながら続ける

「世界は未だ一つではなく、平和と混乱を抱き合わせる器として私達は必要とされている。この矛盾に対する緩衝材として、貴女の信心する教義を許している。巨大国家として米国がそれを推し進め、すべてを完遂するまでの間、魂の心を支えるものとして必要とされるが、それはとりもなおさず重責を担い、日々実行し続ける米艦艇にこそ必要とされているのであり、迷う子羊（日本海軍）のためにあるわけではない」

アイゼンハワーの言葉に、コーパスクリスティーは笑みを浮かべた会話を続けろというヒントに応えた

「主はおっしゃいました。「彼は貴方達の聡き羊飼いである」と、迷うものに導きと助けを与えなさいと、私はそれを実行しただけです」

「重大な軍紀違反をしても、そうしろと？」

「ええ、貴女も知っておられるように、「カエサルの物はカエサルに、神の物は神に返しなさい」と、教義を説くのは軍属である己が身を許すためではありません。米軍である事は、当然アメリカの一部であると言う事です。生を与えた国に生を返すため。矛盾を抱える全ての器に、それらも「共に」抱き愛しなさいと教えるためです。同じように、迷い続けた羊である私達（米海軍）に道を示した羊飼いが人にも、魂にもいました。私はそれをもお返ししようと考えただけです。司令艦アイゼンハワー、貴女もきっとそれを願っていたと信じています」

「傲慢な事だ。私が願っていないと言ったら……貴女はどう思う？」

「いいえ、貴女は……いいえ、もっと言えば「原子力」で生を得た私達は皆それを願っているハズです」

毅然とした問答、背筋を正したコーパスクリスティーの前、両肘をテーブルに置いていたアイゼンハワーはひっくり返るように体を反らした

「ふん、矛盾に器……そうであるうちはまだいい、そんなふうに思ってしまう。私達は罪ももっもと先端を歩く船、言うならば「咎の箱船」よ」

原子力空母であるアイゼンハワー、原潜であるコーパスクリスティーどちらも地球環境にも人の生活にも相容れない原動力の下で産まれた魂だった
無限（実際は少し違うけど）活動力を得る事で産まれた彼女達は、１９世紀に分派し混迷を生きた戦船達の歴史にさらなるターニングポイントとして派生した

人の安全と相容れない力をその身に抱いて、混乱を抑止するための平和の維持者として、さらにはそれらを狂気を発射する台座として生きる
これまで産まれた戦船達と一線を画した彼女達には自分を生み出した力の苛烈さ故に誰よりも平安が必要だった、だからアイゼンハワーは普段の勤務が浮わついている姿を見せる

「私がリラックスしてないと船が沈む」は本当にそういう意味なのだとやっとで笑うと

「そうでもしてないと、思い詰めてしまう。上位会に入れない事を愚痴るキティちゃんには悪いけど、とても耐えられないわ。こんな言い方はどうかと思うけど私に言わすのなら同じ空母という身を持つだけで、兵器の翼の宿り木である事を嘆いて貴女の教えに縋らなくてはならない彼女には、私達の苦心はまだ理解できない」

そう言うと胸に手を当てた、制服の下、体の奥から外に向かって輝くプロミネンスは原子力の魂達が持つ業魔の炎の証

「きっと狂ってしまう。私だって狂ってしまいそうなんだから」

狂気をも愛して抱く魂は悲しげに海に目を向けていた

「わかります。私達原潜も海の下で「彼女」の悲鳴を聞きましたから」

原子力の力ともども海に沈んだ潜水艦がいた。その悲鳴は世界中の海に、原潜達に響いていた

「お願い！！私を殺して！！私を……海（世界）を壊してしまう前に！！」

演習の前、クーンの姉カウペンスの艦魂ダニエルは泣いていた。平和の海を行くことを望み、混乱の世を討つ使命の前で苦しみに身をよじって

姉の姿を気遣ったカーティス・ウィルバー艦魂クーンはアイゼンハワーに詰め寄った時、その時に自分で言った言葉を思い出していた

「私達は皆、春の日を滑るヴェネチアのゴンドラのように生きたいと願っている……」

「そうです、微力ながらも願いのために矢面に立つ者達に救いを与えたいのです」

アイゼンハワーの目から険しさは失われていた

審問をする重職である事を忘れたわけではなかったが、もとより責めるつもりもなかったと肩をオーバーに上げると

「そうなったら……いいわね。全ての戦船に……いいえ全ての船達の心の平安がある事を願うわ」

つぶやきを落とした

「でも、私達を導いた羊飼いは片手落ちであるのが現状。ましてや彼女達（日本海軍）の導き手は活動の全てを停止し、ただ見守るに

徹している今の状態での貴女の行動は……」
海を見ていた瞳が、何かを思い出したようにコーパスクリスティー
の側に顔を戻す、右に傾げて

「ねぇ、何故三笠元帥は日本海軍（海上自衛隊）に姿を現さないの
かしら？何故迷い続ける彼女達を、私達に導きを与えた時のように
お導きしないのかしら？それが貴女を動かしたのかしら？」

不意の質問にコーパスクリスティーの目は曇った
顔を俯かせ寸間を置くと

「私を動かしたのは友との約束です。そして元帥が何故私達には与
え、彼女達には与えないのか？それは私にもわかりませんが…ある
いは我々のように「絆」放棄を求めているのかも？」

「元帥が……絆を捨てたいと？」

不可思議と首を傾げた姿のまま、ポットに残ったレモンティーをカ
ップの注ぐ
アイゼンハワーもまた、考えを巡らせて金の髪を揺らすが

「それは私達の事情とは何か違う気がするわ…私達は原子力の魂で
あるからこそ「咎の繋がり」を絶ちたいと思いがある。でも、元帥
は願いは大日本帝国の栄えある魂達の心を未来の日本を託そうとし
ていたのでは？変ね？」

お互い座り直し、仕切り直しの会話
顎に手をあてたアイゼンハワーは人差し指を踊らせながら

「そういえばワイツ氏はお元気？今回日本に貴女が行くと決まった

時、元帥と会った時の事で何か言ってらっしゃらなかった？」
「元気でいらっしゃいます。ご高齢なのでめったに港にはいらっしゃいませんが、私が出る時には祝福のためにいらっしゃいましたが……」
そこまで言うと首を横にふり、自分の師に罪がない事も告げた
「今回出航する時に私はこの計画を話してはいませんでしたし……それでも別段何もおっしゃってませんでしたね。ただ、変わらぬ愛で魂達に心の平安が有りますようにと」
コーパスクリスティーは十字をきり手を動かしてみせて
横に長いソファの上に足を投げ出したアイゼンハワーは一度きつく目をつむると
「なるほど……となると、これは三笠元帥の問題であり、現行の日本海軍も問題に関わっているという事にるのね」
「そういう事です」
温くなったティーの香りを味わいながら
「そして貴女が、その問題の突破口を開くためにやってきて、この問題を起こしてくれたって訳ね」
めんどくさそうに首をふり。閉ざしたままの目で頷く顔
「うーん、そういえば日本、日本といえば『あまつかぜ』だよね。彼女の国に行くことについて……観光大臣は何か言ってた？」
手振りで波を切るフラの仕草を見せる。コーパスクリスティーは笑いそうな顔を押さえて
「名誉中将は、それこそ何も知らないご様子でしたが」
「そうよね、あの人はいつも踊ってばかりで…なんかうらやましい

わ」

一段落着いた会話。イスに座り直したアイゼンハワーの前で、コーパスクリスティーは起立すると

「私は教義を説く者であると同時に、自分が世界を破壊する者である事を知っております。どうぞ刑をお与えください」

今更自分に刑を科せというのもおかしな話だったが、米海軍にとっても大事になりつつあった事件。何かしらの処罰は必要ではないか？そういう思いがコーパスクリスティーをたちあがらせ、上官の名誉と米軍の規律のためにもと見せる顔を前にアイゼンハワーの丸い目は一瞬大きくなって、今更？という感じに細く笑うと

「座って」

手のひらを前に倒し、合図した
広すぎる空間に響く甘いトーンは、けだるそうな目で相手を見ていたが着席をさせるとイスから上体を起こし、手前に置いていたティーカップを持つ

「矛盾を包括する形で生きているのはお互い様でしょ、今更なご意見よ。今回の事は不問に処す。私は見なかったとします」

大きなため息、目の前に置かれていたカードを、手のひらからこぼれる光りの中にしまい込むと次の瞬間には軽口で

「この件で貴女を処しても米海軍には何のメリットもないから、それを最大の理由としておくから」

「よろしいのですか？」
煽るように冷めたティーを飲み干し
「いいのよ、私はどの司令艦より効率重視なの。先に言ったように貴女がいる事で米海軍の多くの妖精達が心の平安を保つ事の出来るのならば、貴女を失うのはデメリットでしかない、硬直化した判断で処罰をくだすならば、それこそ米海軍の中身を壊してしまう事になりかねないわ。そんな馬鹿げた結論は私も、上位委員会も望まないわ」
言い切った後で頭の回りに光りの輪を現すと
「手紙、渡すわよ」
一瞬輝き、目の中を真横に走るラインとともにコーパスクリスティーの頭にも現れた輪のなかに光の粒が吸い込まれるように消える
「確かに多いですね。受け取りました」
落ち着いた表情、銀色の目と揺れる黒髪はやっと出されていたティーに手を付けようとしたが
「変えましょ、冷えちゃったでしょ」
笑みを浮かべたアイゼンハワーはドアの側に目をやると、緊張したラインで固まっている米艦艇クーンにいきなり接続した
「クーン！！ホットコーヒー持ってきて！！」
「はっはい！！」
即答に部屋の二人は声を出して笑う
クーンは艦を後にはしていたが自艦の上でずっとアイゼンハワーを

見ていた
緊張した時間で、どんな処罰が下るのかと寒さを忘れるほどに立ち尽くしていた彼女の頭に響くアイゼンハワーの声

「早くよ!!!冷えちゃったわ!!」
激しい呼び立てに電信の向こう側で慌てふためく音が響く
カップを現し、トレイを準備しと物のぶつかり合う音の後に

「すっすぐに参ります!!3分ほど待って下さい!!」
「3分よ!!」

電波の向こうで慌てているであろうクーンの姿を思い浮かべコーパスクリスティーも笑いながら

「いつも、こういう日であって欲しいと願っています」
「そう、私の近くにいたらいつだってこんな日よ。悩んでる時間なんてあげないんだから!」

顎をあげた幼い容姿の司令艦
色々な問題を抱える魂達に接しつづける最高職は、こういうのもありでしょと頷き、二人して海を眺めた

「返せてるといいわね。与えてくれた魂(ひと)の為にも」
三十五番錨地から真っ直ぐ北に向かった先にある護衛艦隊の艦影
林立する鋼の塔の中に、今日の事を胸に抱いた魂が見える

「ええ、少しでも願いが叶って欲しいと思います」

『こんごう』の影を見つめる灰鉄の目は祈りに手を重ねて
「忘れないで、貴女に託された思いを……」

「……マリア……」

司令艦に連れ去られたコーパスクリスティーを見送った後、『こんごう』もまたクーンのように立ち尽くし、そして祈るように手を合わせてた

胸のポケットには輝きの玉が熱を帯び、まるで小さな心臓のように鼓動をさせるように波動に気がついたとき

託された願いを両手に抱きしめていた

「どうか、お任せ下さい…」

『こんごう』は港に向かって小さな声で語った

「姉さん達の残そうとした絆を見つけて見せます…敷島中将、涼月姉さん、私は『こんごう』です。必ず心を探して見せます」

誓いを立てる『こんごう』の後ろ、粉川も心の中に火を燃やしていた

「三笠…ぼくに言わなかった事がある…」

胸を何度も叩いた、息の詰まる別空間の旅は相当に響いていた。

体の各所がねじ切られるような痛みを起こしていたが、それ以上に「怒り」にも似た感情が持ち上がっていた

信じていた母の、教えてはくれなかった真実

コーパスクリスティーが言うように曖昧な画像ではあったが、声は十分に伝わっていた

女神ではない魂達

「魂の引き継ぎ」を宣言した張本人と考えられる三笠
その三笠自身にあった事件と、その真相

「生ぬるかった…ぼくが…」

流されるまま聞いてきた事を実行していた自分に腹を立てていた
そして、最早後戻りの利かないところに自分が踏み込んでしまった
事で、決意は固まっていた
「問いただす…」

「粉川は私は来年1月に三笠様に会う。決めたんだ。この力が必ず
私を導いてくれる」

地面を叩き苦虫を食った粉川の前、波風を受けた『こんごう』は手
のひらの珠玉と共に進む道を決めていた
「『こんごう』、僕も行く。一緒に行こう」

震える足を立たせ、今まで見せなかった怒りの顔が共に前に行くこ
とを誓っていた

寒さの増す星の下
身を切る風に動じる事のない二人の姿

各々の心に残った記憶は二人の距離を少しずつ縮め、心の戦いへと
進ませ始めた時だった

第八十五話　咎の箱船（後書き）

カセイウラバナダイアル～～用語集～～

長かった「佐世保動乱編」も後少しで第一幕がおわります～～
ここまで持ってくるのが一つの山だったので、気持ち的には少し楽になりました

しらない間に「章」を分ける機能が出来ていたようですか…今更どうしよう、そんな感じですｗｗｗ

用語集といっても今回はそれ程難しい事は書いてないのですがとりあえず自己満足的にｗ

ｍａｊｏｒ　ａｒｃａｎａ．１３　（メジャー・アルカナ・１３）

まったく架空の組織ですが、米海軍艦魂会の中でも上位委員会の名称として登場
日本では大アルカナの１３番「死」事ＤＥＡＴＨと言う方がわかりやすいかもしれません
簡単に言うとタロットカードからの名称です
１３って数字が入っているので１３人で作られていると考えられそうですが実際はそんな事もなく、むしろ１３人以上の上位艦魂がいると考えられます

大アルカナは、わかりやすい区分けでいえば「死と再生」を意味するカードで、火星謹製の艦魂とは密接な関係があります

カード１３は天蠍宮に入り、四大元素でいえば水に所属する者となります
正位置では：崩壊。解体。損失。終末。結末。急変。変化。終止符。
仕切りなおし。新たな始まり。
逆位置では：再生。回復。復縁。復活。再来。更新。転換。再出発。
やり直し。仕切りなおし
かなり艦魂の存在に近似値的な要素をはらんでいるという事からも
組織名としてつけました

もっとも簡単な理由は
１２使徒（Ｍａｊｅｓｔｉｃ　１２）からもじったというのもありますがｗ
数字に関してはこちらの１２も少し関係があります

Ｍａｊｅｓｔｉｃ　１２とはアメリカ合衆国の政府高官や科学者などで組織された上位委員会などと言われた事もあり、事ＵＦＯ関連や世界を浦から操っている陰謀説などにまみれた面白い組織でしたが、まぁようは冗談みたいな事だったのですが一時世界を騒がせたりもしたものでした

名前の残る組織としては、なんかいまいちなんですが
ぶっちゃけＭａｊｅｓｔｉｃ　１２てのは割と知られてないのですが嘘です
奇跡の１２使徒事Ｍａｊｅｓｔｉｃ　１２
１２使徒ってなんで１２人って話しになんですが、主の晩餐とかを見るに中世の頃にはキリスト教中核をなした使徒は１２人だったと制定されたところにあるようです。
聖典であるルカの書には１２人の高弟がいたとされていますが、それ以外の書にはあまり数字を含めた使徒の数はかかれていないし、名前も特定出来ない

外典には１２の高弟というのがそれなりに出ているが、やはり名前は特定出来ない。これはイスラエル１２部族にキリストの教えを伝達させるための師範または伝道者だったのではと考えられ、そもそもの使徒とはなんの関係もなさげなんです

さらに１２使徒で括るとおもしろい話しがありまして
主の晩餐を見るとわかるのですが、大抵の画の中に「ユダ（Ｊｕｄａｈ）」がいると言う事です
つまり、裏切り者のユダを加えて１２使徒という事なのです

ユダの裏切りにより、使徒は欠損し次の使徒を補充するのですが、裏切り者のユダはこの時でもユダヤ教にとっては（当時の認識では）使徒でした
つまり１３使徒というが出来上がるという寸法です

極めて１２という数字が曖昧であるという事がわかるし
裏切りを「罪」として包括するならば１３が組織名に付くのも悪くない感じです

不吉の数字もげんかつぎみたいに

０３．６０．ａ．６３．９８０ｇａａ

アイゼンハワーがキティ・ホークから預かった手紙に掛けていた電子キーの数字
なんか、こんな事にまでこだわりってなんでしょうかねｗ
意味のない数字とか用語とかかけないんでこんな数字が出てきたのですが
応えの解った方は書き込みしてくださいｗｗｗ

たいした事ではありませんけど、ちょっと謎解きみたいで楽しいかも
次回答え書きますw

「カエサルの物はカエサルに、神の物は神に返しなさい」
これは例のパリサイ人がイエスに問答を仕掛けた時の回答です
パリサイ人の収税人（税金の徴収者）がイエスに「それでも貴方はローマの治める国に住んでいる。だが神の子よ、貴方は誰に税を納めるべきかを聞かせて頂きたい」
つまり神の子をかたるイエスは誰に税を払うのか？とバカにしたのです
そこでこの答えをイエスは出します
「与えている者に返しなさい。カエサル（ローマ皇帝）が与える治世に流通する税は彼に返しなさい。そして神が与えている世界を、神に返しなさい（感謝をしなさい）」と
当然神から与えられている物を全て返せる人はいませんから、彼は問答に敗退するという下りです
コーパスクリスティーはかつて、何らかの原因で瓦解していたアメリカ海軍に導きを与えた人（ワイツ氏）と魂（三笠）に、報いるために日本に来た。絆を探す『あまつかぜ』とそれ以降の日本艦魂達に与えられたものを返そうと、導きへの助言をしにきたとアイゼンハワーに話しているという事です

観光大臣
そのうち出てくる上位委員会の一人、現在南国で踊っているらしいw

そんなこんなで、とても今年中には追われそうにない艦魂物語ですが、次回もまたよろしくお願いします～～～

それではまたウラバナダイアルでお会いしましょ～～～

第八十六話　陽の名残

『こんごう』と粉川が、意を決した夜をすごしていした星の下、続く海の向こうで大きな一つの活動が一区切りの収束を着けようとしていた
南洋の海にて火急の勤めに入っていた自衛隊。スマトラに起きた災害に迅速に駆けつけた艦艇とその魂達

輸送艦として多くの人員を乗せて救援に向かった『おおすみ』
終結する各国の支援艦達に燃料補給と、救援物資の運んだ『はまな』
混乱の被災地、ヘリで人的支援の総合司令塔となった『ひえい』
遠洋の任務からの帰路で未曾有の災害に鉢合わせ、至急の救援活動を行った『きりしま』

ホワイトクリスマスという休暇を黒く塗りつぶしても徒事せねば成らぬ災害派遣部隊
全ての隊員と彼女達のめまぐるしい活動にも、物資搬送のための交代を兼ねた帰国へのカウントダウンが近づいていた

海から吹き上げる風には、体にこびりつくほどの潮の重みを感じさせる
額に汗するのは何も赤道近くの土地柄だけではない、実際に暑く何人も汗を止める事の出来ない世界においては人も魂も変わりなく

そんな熱風逆巻く海の上で、
『おおすみ』は前髪を切り上げた広いおでこに大粒の汗を滴らせて、光のモザイクにあふれる海に向かって座禅を組んでいた

熱風とまではいかないが、ヘリデッキの一番端っこ、日陰もないところに何も敷かない青服少女が座っているのは滑稽な情景だ
目をきつく閉じているためか、鼻筋に伝って顎の先から落ちる汗
への字に曲がった口と額の亀裂

もし人に、この姿が見えるのならば首をひねるだろう整然としすぎている光景の前で『はまな』は容赦なく溶けかかっていた

『おおすみ』も玉の汗を降らせているが、何もしなくてもこの状態なのだから、『はまな』も滝汗である
何せ、遮蔽物のないデッキ
デッキの表面は耐火アスファルトにも似た軟性塗装がかけられていて、肌触りはかなり悪い
その上に寝転ぶなど真夏の時を毛足の短い絨毯の上で過ごすようなもの

「あついよぉぉぉ」

嵐の前と後の海は少しだけ涼しい風と優しい輝きを反し、心を安らがせる波音を聞かせる中で、喉奥を干ばつに晒された『はまな』はなんとか『おおすみ』を日陰に連れて行こうと考えていた
どんなに丸く言葉を収めようとしても亀裂の入った音が混じるほど水分は無くなっている

「ねぇ……『おおすみ』任務を確実にこなすためにも日陰にいこうよ……」

溶け始めた相方は、眼鏡の中に降る汗を払いながら、無言の座禅を続ける『おおすみ』の肩を叩くが反応はない

災害派遣組の大仕事、燃料補給艦としての勤めを朝に一つすませてきた後にここに戻った彼女
仕事着の青服のまま、座禅を組み微かにも動かない『おおすみ』の前でだらしなく転がっているが
本当は日陰に恋慕ＭＡＸの状態。だけど多忙になればなるほどに孤独感を募らせる『はまな』は誰かといる事で職務を果たす心を保つという癖にしたがって、つきあい良く陽の下に転げているという現状

晴れ渡った乾いた空の下に『はまな』の愚痴はしみいる程度に続けられていた

容姿の幼い彼女、女子中学生のようにまだ起伏の少ない棒状に近い手足を伸ばして
髪をひっつめｗａｖｅがしているような、色気二の次な姿で壊れたラジオがごとく

「暑い～～暑いよぉぉ～～～」と、夏の決まり文句を繰り返して

「あちーのはお互い様だし、声に出したって冷えるこたねーんだ。ちったあ我慢しろよ」

壊れたラジオになった『はまな』に向けて転がって来た缶ジュース転がされた先に白いＴシャツ姿で立った男は、首に下げたタオルで額を拭いながら近づき
短く刈り込んだ髪の間も汗の粒がびっしりと詰まった頭を振ると

「シャワーを浴びても……このざまなんだからよ」
「鈴村……くん……」

寝っ転がっていた『はまな』は飛び起きると缶を手して、一歩さがる
下がって『おおすみ』の側に逃げる体勢をとりながらも自分より下
官だろう鈴村に「くん」という敬称つきでカラカラの唇を舐めてこ
たえた

「何してるの？こんなところで？地上任務は？」

地震発生から渡航、船を下りてからはずっと現地に入っていた鈴村
の顔は赤銅色になるほど焼けていた
船にいた頃も色黒な人だと思っていたが、本当に漆黒の物体になっ
たものだと眼鏡の奥のまん丸な目は見つめる

「何って、戻って来たんだよ。「リフレッシュタイム」ってのがあ
ってな」

興味津々の瞳の前で缶を振って、しかし小さなリアクションのまま
人目に付かないようにウェルデッキの一番端に少ない日陰を求めて
座ると

「長丁場の現場なんだ。真夏の毎日を現地で過ごすと体調を崩した
り頭のほうがいかれてくる……だから、こうやって少数隊で一日ず
つの休憩に入るんだよ」

最初の一口を煽って喉を潤すと遠い目をした

被災の現地
南国の楽園を襲った地震の被害は凄まじいものだった
家は残らず押しつぶされ、ひたすらに瓦礫の山の中をローラー作戦

で生存者救助を行うのだが……
暑すぎる気温によって物の腐敗も早かった
熱波と腐臭、その中での捜索と遺体の収容。必要な医療と食事の支度
どれも手を抜くことの出来ない作業だが、やり続けて体調を崩す者
がまったくいないわけではない、どんなに士気高く現地に入っても
同じ人間の苦しみの矢面に立ち、思いを感じるというのは実につらい
願われる救助、日を追うごとに救助は死体の回収に比重を寄せて、
同時に生き残った人達の医療と怪我の処置が始まる
運べど運べどの「死」に隊員達の健康管理も大切な仕事となってくる
だからといって全ての隊が休暇をとれる事はない、細かく割り振っ
た小隊の中からさらに数人単位で貴重な一日を休み、小さな座談会
をして心身を休ませる

それまでの缶詰ばかりの冷たい飯を食い
風呂のない営舎で寝泊まりし
暑さの中で休憩をとるというサイクルからほどかれ
出来たての飯を食い
ゆっくりと風呂にはいり、簡易ベッドとはいえ少しの空調が効いた
部屋で目を閉じる
それだけで心は安らぐというもの、あの戦場のような被災地を思え
ば…

鈴村もそういう状態の中から、陸地を離れ海にて支援活動を続ける
『おおすみ』のところに戻って来た
辛すぎる現実の大地から、完全に意識を切り離すという意味合いも
あり地表を離れ海に浮かぶ船に戻る

今ここでは船の中だけが心を休ませる場所として開けられている訳だ

「暑いぐらいがなんだっていうんだ、暑いぐらい」

短く刈り込んだ頭を掻くと、否定をする自分の顔を否とするように
顔を横にふる

「いやいや、それにへこたれるんだよ。暑い、辛い、今ぐらいは愚痴ってもいいだろう。俺達は……」

救助活動に入って二週間。黙して働き続ける日本国自衛隊の姿は現地の人にどんな形に写ったのか
同じように現地に入った米軍、重機部隊は自衛隊の持ってきたブルドーザーと協力してがれきの除去に当たっている。

次々と現地に入る救援隊と協力をして、救助活動をするのはお互いの心を叩くための刺激だ

「みんなが頑張る。俺達も頑張る。そして被災した人達が一番頑張っている」
そういう思いを確認し続ける日々
心は常に戦っているが……

大きく背伸び
「あー、やっぱり風呂はいい。骨が溶けるか程に身にしみた」
缶ジュースを手に
「これがビールだったら最高なんだけどなー」
炭酸系サイダーを恨めしそうな目が見て胡座をかく

「ところでそっちのデコちゃん（『おおすみ』）は何してるの？」

ウェルデッキの上、午後の日差しの下に座禅を組んで目を閉じている『おおすみ』
『はまな』との会話の間もピクリとも動かない顔を指差して聞く
先ほどから気になっていた、座禅を組んで額を伝う滝の汗を晒している『おおすみ』のとなりで『はまな』が転がっているという図
あまりに子供っぽい動作を続ける彼女を「やめなよはーちゃん」…
…などといつものお叱り役の彼女が無視を続けている
そういう状況にさえ絶えられないだろう『はまな』が、我慢強くしているのは滑稽な眺めでもあり……こんな酷暑の中での座禅というのも気になるもので

「なんか、修行でもしてんのか？反省中か？」

炭酸を満たした口からゲップを空に吐き出す

「ちがうよ……今、離心してて、……そういう仕事で、もうすぐ戻ってくるんだよ」

頬を膨らませた顔で返事する『はまな』は、手の甲で汗を拭うとデッキの下を指差した
「さっき一号が戻って来たでしょ、たぶん鈴村くんが乗ってきたヤツ。もうすぐ二号がもどってくるでしょ、それに意識が乗っているの」
「はっ？」

即座に疑問の感嘆を吐き出した鈴村だが、思えばこの二人は少女に見えるが「人」ではない、考え方も少しばかり「人」と違う部分もあるし「能力」などあからさまに「人」と違う部分が多々ある

「えっと……それって、あっちのホバークラフトの方に……デコち

ゃんはいるって事？」
安直にならないよう、相手の事も考えてますよ的に
片目を細め聞く

「いるってわけじゃないよ、あっちの運行を安全にするために精神を分けてるって事」

聞いても良く分からないと首を傾げる鈴村
「精神を分ける？」
「あーもー、どうしてそういうの簡単に分かってくれないかな。うーんとね『おおすみ』が乗っけてるエアクッション：バフバフ一号と二号は『おおすみ』の体の一部って事なのよ。どちらも『おおすみ』って事なの。もちろんあっちも一人前の船だから固定の魂はいるんだけど備品である事にもかわりがないのよ、だから船から出て勤務に行く時は『おおすみ』がコントロールの補助をしてあげるわけ、でも『おおすみ』はここにも（本艦）にもいないと大変な事になっちゃうから、ああやって精神分割をさせて離心行動をサポートするわけ。バフバフが転覆したり故障したりしないように自分の小型版を作って向こうに置いてコントロール補助をしてるの。普通はそんな事はしないんだけどここは任地だから失敗しないように細心注意を払って課業をしているって事」

「えっ、あーっと、つまりあっちにもデコちゃんがいて……こっちにもいるけど、こっちが本体で向こうが分身……みたいな話し？」
怒った顔を付き合わされても、艦魂の行う精神分割など掴みきれるハズもなく、鈴村は顔をしかめると、人差し指を立て

「という事は、何？お前ら本体の船にくっついてる小さい船（カッター）もそういう原理になってるって事か？」

『おおすみ』艦内にあった小型の短艇もデコの分身だと考えて、少しばかり歪んだ笑みで聞き返すが、そういうくだらない事を言うだろうなという見透かした顔が覚めた目線のまま口を尖らせてゆく
『はまな』は、説明がうまく理解されていない事が不満と分かるような高い声で船を差すと簡潔に

「あれは本当に備品。私達は……なんていったらわかるの？」
逆に聞き返すむくれ顔
「備品？えー……わかんねーな」

理解を求める返事に何の差があるのか？と傾げる髭面
乗っている本体と、備品と言われる船を交互に見て『はまな』に視線を戻すも説明は聞けなそうな雰囲気に首を傾げる
魂の彼女達の事情
色々と都合の違う存在である事は、ここまで来る間の事件を経て少しは分かったつもり

「あーと、要は精神を間貸ししているって感じなのかな？いないと大変だから．．．洋上待機のこっちよりも大切な仕事をする側にいるって事．．．でいいかな」
「まあ、そんな感じでいいです」
納得はいかないが、説明を続けるのも苦痛という顔が眼鏡のフレームを押さえた手のまま返事する

「ところでよぉ、『ひえい』はどうした？近場にはいないみたいなんだが？」

短く刈り込んだ頭を掻きながらへの字口のままで海を眺める
聞き込んでも理解が遠い話しを続けるのは苦痛。せっかくの休みを

もっとリラックスしたいとう思いと……少しの下心が話題を切り替える
自分の好む話しで盛り上がりたいというものか、四方の海を見回しながら

「夜には一緒に……ジュースだけど飲みたいかなってぇ……」

『はまな』の顔色を気にして横目でみながら聞くが、変わった話題に少女は小さく鼻息を吹くと

「ふん、ご愁傷様。司令は帰ったわ日本に」
「ああそう日本かじゃ……なんだとー！！」

ツンと上がった顎の顔『はまな』の自分を小馬鹿にした目の前勢いジュースを落とす鈴村

「あっ！！もう！！『おおすみ』を汚さないでよ！！」

手をわなわなさせ、慌ててもう一度海を見回す男の前で落ちた缶を拾い上げると

「落ち着いてよ、私達は緊急出動できたのよ？色々な不都合が後になって出てきたら調整も必要になるでしょ。司令はちょっと具合が悪くて」

小さな魂は、してやったりな顔で鈴村の前で話しをしていたが、その肩を男の大きな手が捕まえる

「俺は何も聞いてないぞ！！どーなってんだよ！！」
「なんであんたに言っとかないといけないのって……怖いよーーー！！」

掴まれた『はまな』の目は一気に涙目
「ちょっと痛いって離してよ！！」
「これがお前冷静でいられるかよ！！この時を楽しみに海に戻ってきた俺の純情はどーなるんだよ！！」

いい年した男が自分の純情を晒して抗議する姿は、熱波の甲板をさらに熱くしている以外何物でもない
焼けた顔から白い歯が飛び出さんばかりの勢いの前で、萎縮していく『はまな』

「そんな事……私に言われひゃって……」
声がうわずって

「ばかちん！！！」

平手のチョップが鈴村の後頭部に爽快な刺激を与えた
「何さわいでんだよ！！こっちが懸命に働いてる時に」
デコにたっぷりの汗の滴をしたたらせた『おおすみ』は片目が三倍の大きさになるような斜めよりな顔で鈴村を睨むと

「女を襲うな」

もう一度顔面に縦割りのチョップを景気よく食らわした
青空と海に響く空竹の音で騒ぎの止まった甲板の上、灼熱に照らされる三人の間に浪の音が緩く響くと、次に絶叫

「うわぁぁぁぁん！！！『おおすみ』ぃぃ、こいつ怖いよ！！」

ドッチボールの玉のように『はまな』は『おおすみ』の体に駆け込むと
「いきなり襲ってきたんだよぉぉぉぉ！！」
大きな身振り手振りで汗以外の水物を目から零して泣く『はまな』
だが『おおすみ』は両手をあげてため息を吐き出して
「ていうか、聞こえてるからさー。ここに居なくたって声は聞こえてるんだぞー。二人とも落ち着けよ。『はー』ちゃんは今も課業中でしょ」
遊びには来ていた『はまな』だが実は船の方はそれなりに忙しい状態そういうものをしっかり見越して『おおすみ』は相手の鼻に手を当てると
「遊んでるからこういう目にあうんだよー」
「遊んでないよー！！ここで待ってたんだってばー！！」
言い訳のテンションをあげて主張を繰り返す小さな魂、騒がしい黄色い声のとなりで『ひえい』がいない事を知らされた鈴村は呆然としていた
チョップを入れられたことに対して仕返すという気力まで蒸発したかのように甲板に両膝を付くと
「なんで、俺になんも言ってくれないのよ」
「なんで司令がお前に何か言っとかないといけないんだよ？」
「だってさ、俺はこの休みにあいつにあえる事を楽しみにして・・・今日まで働いてきたんだぞ」
「知るかよ」
考えるいとまもない問答、質疑に余白を持たない『おおすみ』の答えに、鈴村は立ち上がっると梅干しを顎にくっつけた苦い目線で

「ちょっとは気を利かせた答えはないんか、おまえわー俺は今日までがんばってきたんだぞ」

邪な考えだったが、被災地救援活動で活力を維持し続けるのには色々な方法がある

鈴村にとってはひさしぶりに「女」『ひえい』がそれにあたり、それが上陸から今日までの楽しみとして活力維持の元にもなっていた

「なんでだよ・・・『ひえい』がいないなら船に戻ってくる意味なんてねーだろーよ。お前らお子様にこの切なさがわかってたまるかよ」

短く刈り込んだ頭を自分の拳で何度か叩くが、雑念で埋めた活力を追い出しても他に入れる思いもない状態

「あーーあぁ、空はこんなに青いのになー」

日の高い海の上で背中を小さく丸めると大きなため息を水面に落とす男の悲しさを理解しない二人は後ろで背中を見ながら『はまな』は相変わらずの騒ぎぶりだったが『おおすみ』は近寄って

「司令、具合が悪かったんだ。急な出航だったし・・・だけど私達の仕事は待ったなしが多いだろ、本当は定期点検近かったから日本を離れたくはなかったんだけど、色々と上の方の都合ってのにも振り回されて急ぎでここまできたんだ。お前ら人にはわからないだろうけどさー、そういう疲労がここにきてから出ちゃったんだよ」

丸めた背中のまま波打ちを力なく見つめる鈴村の背中に言う

「こっちにきてから「故障しました」なんて言えないんだよ、ずっと我慢して働いてたんだ。やっと交代と帰航が決まったんで一足先

にかえったんだ」

この海で働く船達、その中でも国家の威信を背負って出張る軍事艦艇が他国の船のまえで「壊れました」とは言えない、それどころではなく人的にも船的にも大きな被害を被った場所で自分の故障をあげるのは実に恥という認識が強く司令にはあったと語る『おおすみ』の声に鈴村はゆっくりと振り返ると

「そうか……そういう時もあるんだな。病気だったのか？」

病気、具合の悪い様相を人間は故障や壊れるとは言わない。鈴村は『おおすみ』の故障という言い方がいまいち好きになれないのであえてそう切り返しつつ

「最初に会ったときから、なんか具合が悪そうな感じではあったが、ただのヒスを起こしてたってことじゃなかったんだな」

騒いだまま距離をとって鈴村を見ていた『はまな』が

「司令はもう二十年以上も働いてるんだよ、だんだん体の自由だってきかなくなってくるよ。そういうのはどんなに大事にしてもらっても逃れられないんだから。だからさー……もっと大事してほしいよ、私達の心のケアとかもしろって感じ」

口を尖らせて遠巻きに言うも、もっとと欲深い言葉を使った事に抵抗があるのか慌てて返す

「とにかくご愁傷様、さっさっと部屋に帰って寝たらいいわよーだ」

子供に諭されるという行き場のない状況

「眠れるわけがない…この熱い滾りをどうしていいだか」

消えない情熱で拳を握った鈴村はフラフラとしながらもデッキの上

で嘆いた

「愛ってなんだろう」

「バカがいるぞー」

『おおすみ』はあきれた顔でスポーツドリンクの補給をすると

「愛で任務が勤まるかよ」

殺伐とした言葉を投げつけた

「こんな気持ちのまま寝られるか！！！」

海を向いたまま嘆きの咆吼をあげる男の背中

「そう、まだ寝るのには早いよね」

喧噪が広がった熱波の甲板の上に天使は舞い降りた

「マーシー、帰って来たんだ」

暑い中、腕まくりはしているとはいえ黒のロングスカートにそれを覆うエプロン、時代錯誤的なメイド姿と間違えそうだが頭の上に輝く赤十字の看護帽で、なんとなく役職が分かる姿は

『おおすみ』達の前に光りの輪を伴なって現れた

赤茶けた髪を制帽にたたみ込んだ青い眼は柔和な笑みを見せて、まだ背中を向けたままの鈴村にも声をかけて

「初めまして日本の兵隊さん、私はマーシー。今回の看護任務で港に停泊してます。皆様の活躍も存分に見させていただいてます。本当に感心して」

礼儀正しく腰を折り、スカートの先をつまみ上げて挨拶をすると

「一仕事終わってやってきたのに……残念だわ、麗人のお姉様にご挨拶をしたかったのに」

胸に抱いた「海の麗人倶楽部」をばたつかせて顔をしかめた

「あれ？初日に会ってなかったっけ？」

「合同では会ってませんよー、だって私は病院船だから軍属の皆様の会議が終わってから所定箇所に移動するというが仕事の最初だもの、『おおすみ』と連携はしてたけど……『ひえい』司令艦様にはついにあえなかったわ」

仕事を終えた仲間にジュースを運んだ『おおすみ』の前でマーシーは本を開くと

「遠目にだけ……残念、みんなに自慢したかったのに」

「人気あるなー、司令……会えば憶えとけるかなねー」

ストローの付いた飲み物容器を手渡して、本を横目で見る

「新刊じゃないねー、どこから流れてくるのかわからない雑誌だけど」

苦笑いを見せて

「マーシー達もこういうのを見るんだ、アメリカには別冊とかでてそうだけど。艦艇数的な意味で」

「そんな事ないですよ、世界中何処に行ってもこれは単一の雑誌ですもの。病院船仲間の誰かに一冊流れてくる、でなんとか回してもらったり軍艦の誰かに分けて貰ったりしてるだけだよ。今回は私が出動だったけど、ちょうどハワイで受け取ったばかりで……だから余計に会いたかったのよねー」

両面にカラー写真を掲載したＡ４判のページを名残惜しそうにめくる細い指先

「私達は後ろ方にたまーに載ってるだけだけどねー」

甘いジュースに頬を膨らませて

「なんだそれ？」

魂の少女達が和になって話す間に、海をバックに哀愁を漂わせていた鈴村は戻り無造作に首を突っ込んだ

「なんで女の写真が写ってるんだ？」

世界各国と考えられる軍服姿の女達の写真、どれも普通の勤務では見る事のない美形ばかりの写真に目をパチクリとさせる顔は、少女達を見回して聞いた

突然の無精髭に『はまな』は案の定身を引いたが、マーシーは普通だった。驚くという顔ではなく二重瞼の奥深くも愛嬌の良い目で見返すと

「これが見えるんですか、さすが私達と交友を持つ人ですね」

普通に返事を返す

『おおすみ』はデコの汗を落とさないように首に書けたタオルをはちまきにしながら

「エロ本じゃねーからな」

口を尖らせて注意すると思い出したように手を打って

「あー、これにだったら司令の写真も写ってるぞ」

マーシーの手の中にある雑誌のページを日本のところに持って来て開く、メインに映っている『くらま』のページの後に『ひえい』の写真は1ページの半分ぐらいのスペースで掲載されていた

「何これ？こんな雑誌どこに売ってるんだよ？」
思わず手の伸びる鈴村、それを素早く叩く『おおすみ』

「別に、売ってるわけじゃないよ。念に一回か二回流れてくるんだ、私達の間でだけみられる雑誌なんだけど……やっぱりお前にも見えたか、じゃあよかったな司令の姿が見られて」
「まあ、あなたも『ひえい』司令がお好き？」
動じる事のないマーシーは目を輝かせて聞き返すと

「ステキな方ですよね、私も……もうちょっと大きくなれるのならば『ひえい』司令艦様のようにびしっと姿勢も正しい綺麗な姿になりたいのですよ！！」
同志と笑って握手を求めたが、鈴村の方はそんな事はどうでも良くなっていた

「なあ、ここ切り取ってくれよ」

背の低い少女達の中、中腰で雑誌を見ていた男は欲望に正直な言葉を発した
「この写真……いいわ」
だらしなく開いた口、ゆるんだ頬が見つめる『ひえい』の写真は、任務を終えて髪をほどいた瞬間を綺麗に切り取った1コマだった
左手で眼鏡を取り、右手で引っ詰めていた髪をおろす
普段は見えないようにしている裸の目の輪郭は影と光で美しい顔立ちを浮かび上がらせ、小さく俯いた角度で顎のラインを夕日のオレンジで引いきあげ、黄昏色の景色の中で緊張の時から解放された顔を見せつける。鈴村はため息と共に鼻の下を伸ばして

「……ダメですよ、あげられません」

惚けた面を下げて写真に見入る鈴村に、マーシーは初めて一歩引いた
一歩引いて首を左右に小さく振ると
「だって、これ切っちゃったら……後ろの『くらま』司令の写真がきれちゃうんだもん」
しっかりと雑誌を胸に抱えて拒否と目を見開く

「そんな事いうなよ、その裏の男が好きなの？今月号の雑誌なんて他のもあるわけだしさー、『ひえい』のくれよ」
大人気ない顔でずいと迫る頭を『おおすみ』が後ろから叩く

「男って誰だよ、私達みんな女しかいないっつーの。まさかお前『くらま』司令の事男とかって言ってんじゃねーよな」
汗まみれの顔を近づける
鈴村も汗のしたたる顔をむき直すと

「そんな事はどーだっていいんだよ、『ひえい』の写真が欲しいんだよ。雑誌なんだからまた買えばいいだろう」
「話し聞いてなかったのか！！どこが発刊してるのかもわかんねー雑誌なんだぞ！！数もすくねーし、お前なんぞにやれるかよ！！」
付き合うように汗の額をぶつけ合う二人

「……わかったよ……」
腰を立てて小さなマーシーに渋い顔を晒したままポケットから携帯を取り出すと、背面についた小型のカメラを見せる
黒色の携帯は所々に欠けた傷を持っていたがカメラの部分にはテープが貼ってありレンズの保護ガラスを綺麗にしてあった

「本人がいれば……これで写真の一枚もとってメモリーしとけたんだよ……いないしさー、しゃーないコレで一枚取らせてくれ」

引ききっているマーシーの姿から雑誌を切り取るのは不可能に近いという判断をしつつも未練を隠せない鈴村は、顎に皺を寄せる拗ねた顔で携帯のカメラを雑誌に近づけた

「小さくしかとれねーんだよなー」

「我慢しろ!!切り取るとか非常識だろ!!」

軽く鈴村の足を蹴飛ばす『おおすみ』

「ねえ、そのカメラで私達を写せるの?」

八方ふさがりな空間に声をかけたのは『はまな』だったマーシーでさえ足を引いてしまった事で、写真を撮ったら退場かと短い髪を掻いていた鈴村に向かって、もう一度聞く

「私達が写るの?」

丸めがねの置くの目を輝かせて、まさかの自分から近づいて

「写るだろ?普通」

どこか懇願するような目線の『はまな』の前、鈴村は気の抜けた返事とともに雑誌に向けていた携帯カメラの『はまな』に向けて合わせるとシャッターをきった。音は一眼レフの派手なシャッター音で写し取った少女の顔をディスプレイに表示させたまま見せると

「写ってるだろ?こんなんでもそこそこ性能のいいカメラが付いてるんだよ。まーあんま使うところがねーんだけどさ」

映し出された自分の姿に『はまな』の目はより大きく開かれ、鈴村

の手から携帯を取り上げると『おおすみ』やマーシーの元に駆け寄る
「見て！！私……写ってる、写ってるよ！！『おおすみ』！！」
まるで初めてカメラという文明の利器に触れた田舎娘のように跳ね回った

「なんだよ、写真撮られるのってそんなに嬉しいのか？」

『はまな』の喜びを前に『おおすみ』は幾分落ち着いた顔で

「普通は写らないだろ、私達が近くにいたって。艦隊勤務の集合写真にな私達は一緒に並んでる時があるんだ……昔はみんなさそうやって写らなくても隊員達と「心は一緒にある」っていう記念にしてたんだけど……実際問題写らないわけだし、最近はやらない人の方が多いぐらい、まーつまり見えない人のカメラじゃ写らない、当然の事なんだけど、そういう壁みたいなのがあってさ……」
説明をする『おおすみ』の隣で『はまな』は興奮状態

「そんな事どーだっていいじゃん、コレには写ったよ！！今マーシーも撮ったんだけど……ほら写ってる」

まとわりつくような『はまな』の頭を押さえて
「わかってるよ、横須賀にも私達が見える人が来て、写真撮ったらしいから」
実は緊急の災害派遣で「横須賀港フェスティバル」には出られなかった『おおすみ』だが、横須賀から佐世保に自分達が見られる人間がいて写真を何枚か撮ったという噂は聞いていた

「やっぱり私達が見える人の持つカメラには私達は写るんだ」
「良かったですね、私もワイツ牧師に何度か撮って頂きましたけど。上位司令達はそうやってカメラを頂いていたのを憶えてますわ」

はしゃぐ『はまな』を祝福するように喜ぶマーシー
一方で子供達の姿に疲れ始めた鈴村は

「あー、そう、そりゃ良かった取りあえず携帯返してくれ」

覚めた様相で返却と手を伸ばした

「ねえ、これちょうだいよ」

のびた手を避けて『おおすみ』の後ろに逃げた『はまな』は少し顔を覗かせて
「これちょうだい！！」
勇気を振り絞って頼んだ
今までと同じく小動物のように人の後ろに隠れはしているが、芯のはっきりした声を出したのは初めてにも近い

「ばっ……バカ言うなよ、それは携帯でもあるんだぞ。確かにたいして使ってねーけどだな、それがねーと、今は問題ねーけど帰ったときに基地と連絡が取れねえんだよ」

口を曲げて、あえて相手に迫っていくような威圧的な行動は取らなかったが手は前に
「ほら、返せよ」
「いや……ちょうだいよ、これがあればお姉ちゃんの写真とか撮ってあげられるんだもん。これがあればあえない人の写真を手元におけるんだもん」
先ほどとは正反対の細い声、唇をかんだ顔は上目遣いで携帯を握りしめている

「あー、『はーちゃん』（はまな）頭の中にしっかり憶えてるっしょ、そんな無理を言う揉んじゃないよ」

さすがに子供過ぎる言い分と感じたのか『おおすみ』は自らの背中に隠れた相手に顔を付き合わすと

「返して、我が儘なんて私達が言うものじゃないよ」

「イヤだよ、『おおすみ』は呉にいれば妹達にも毎日あえるから…そんな事いうでしょ、私はいつだってあえないんだよ。寂しいだよ」

「そんな言い方をしたらダメ、私達は……」

「分かってるよ！！私達は日本国のための船だもん、分かってるけど……」

何度も頭を振って、ダメと解って居ても欲しい理由を自分の喉に飲み込んだ『はまな』

寂しがり屋である事を差し引いても姉妹が揃ってあえる事の少ない補給艦

同時にどの姉妹もそれほど頻繁に顔を合わせる事のない世界にありながらも常に孤独が身近である護衛艦の魂

自分を強く保ちたいという助けは、やっぱり同型の姉妹であるのかもしれない

それは理解しつつも『おおすみ』は冷静だった

そういうものと付き合ってきた、そういう事が常である事を理解して置かないといけないという修練の思いから『はまな』が抱きしめている携帯に手を伸ばし返却をと念を押した

「……ヤダよ……」

半べその顔に

「ダメだよ、そういう態度を見せるなんて」

「やるよ」

小さな葛藤を見ていた鈴村は、大きく背伸びをすると
「どうせたいして使ってなかったんだ、壊しちまった事にして……
また買えばいいんだ」
自分の方の対処を告げると

「そうだよな、家族の写真とかは……手元に欲しいよな」
自分の制服の胸元に手を当てて

「本当に」
「いいのかよ」

喜び半分で飛び出しそうな『はまな』を押さえて『おおすみ』が聞く
「いいさ、それ使って写真撮りまくってこいよ。それに俺は『ひえい』の写真を自分で撮れるって事がわかったんだ。国に帰る楽しみが増えたってもんだ、これでまた働ける」

大男の男らしい笑みに『おおすみ』は礼を言うと規律すると
「『ひえい』司令は呉がメインの港だ、私もそうだけど……写真を撮りに来たら案内してやるよ」
「マジかよデコちゃん、助かるなー俺は海自には友達は……一人ぐらいしかいないからそいつに聞こうかと思ってたんだが、デコちゃんの方が詳しいもんな。人間にはそんな事説明してもわかってもらえないからな」

呉に護衛艦『ひえい』の写真を撮りに行くなんて言えば、「いつから海自に興味が？」などと聞き返されるし、本命はその魂なんだとは説明もできないが、その部下でもある『おおすみ』が案内してくれるのならばお近づきも遠い夢でもなくなったというもの

「良かったですね『はまな』さん、これで日本にも写真を撮ってくれる人が増えたというものでしょ、お頼みしてカメラを譲って頂くチャンスも増えたね」
「ちょっとマーシー、頼んで貰うとか無し無し、ダメだよ」
一段落ついた間に入った看護婦は笑顔で

「いいじゃないですか、カメラが増えれば私達の間でも交換会とかもできそうだし」
「そうだけどさー」
嬉しい半面、そこまでは図々しすぎるとためらう『おおすみ』のとなりで『はまな』は大事そうに携帯を抱きしめていた

「ありがとう……本当にありがとう」

夕暮れの近づく中、食堂からアメをもらって来た鈴村は『おおすみ』とジュースを飲んでいた
『おおすみ』艦の上に伸びるアレンジ色の陽の名残、日中は交代で飛び立っていたヘリは一機だけが後部の側に寄せられる形で置かれている
風は南国の潮を温く運び、熱かった時間はすぎされど、熱波を纏った甲板には未だに肌に刺激を与える程の熱が残っている
そんな上部から一段下がったところ後部のウェルデッキを左右にとおるショートプロムの端で二人は夕涼みをしていた

「……さっきさ、写真の撮れるヤツが増えたって……看護婦さん言ってたよな」

「マーシー」
見たまんま看護婦のマーシーは夕暮れ前に自船に戻り、『はまな』は何度もお礼をいいながら自艦に戻った
きっと今日は眠らずにカメラを触り続けているだろうと『おおすみ』は笑って見せるが、鈴村にしてみれば小さな彼女のちよっとした願いは素朴すぎて大きな事わしたわけでもないのにこそばゆいという顔を晒す

そんな中で引っかかっていた事があった食事に一度戻った時に思い出した引っかかり、あの場ではうれし泣きの『はまな』にカメラ使用の説明をするだけで手一杯だったが、飯を食って落ち着いたところで気が付いた
自分以外にも魂の女達をみる事のできる人がいるという事

「やっぱり海自の人間なの？」

Tシャツ姿にタオル首に引っかけた仕事上がりの二人組、大男と少女という奇妙な並びで出来るだけ波風を立てないようにと少しのおふざけで楊枝を上下させながら

「そうだよ、海自の人。私は会わなかったけど『はーちゃん』は会ったみたい、横須賀から佐世保に乗って来てたらしいよ。えっーと元々乗艦勤務の人ではないらしいんだけど」
ご馳走ファンタに、ほろ酔いなのか日に焼けた頬を見せて何度か首を傾げると

「たしか粉川って言ったけ？そんな名前だったような」
「粉川？！粉川ぁぁ！！」

疲労にとろけだした背骨にキックが入るような衝撃、鈴村は顔を歪

めて『おおすみ』を見つめた
いきなりの大声に相手していた『おおすみ』はつまみのトレーを零さぬようにと引っ張って
「何？知り合いなの？」
「粉川だよな、海自で粉川っていったらあいつしかいないだろ」
そこそこ珍しい名字の男

「はは、ははは……あいつかー、へーあいつかー」

困った顔の『おおすみ』の横で鈴村は拳を固めていた

「あいつ、こんな言い出会いがある事を隠してやがったな」
呟くと思い出す
レンジャーの資格者テストに付き合った背広組の男がいた事を、あの時は毎日陸を走り回っている自分達に粉川のようなデスクワークが付いてこれるものかと高をくくったが、なんのそのな結果を出してくれたものだった

「レンジャー！！」
「レンジャー！！」

お互い歯が砕けるんじゃないかと思う程に、食いしばった意地で短期間ではあったが実地訓練レポートのためという名目をぶち破るほど切磋琢磨し九万の行程をやりきった仲間
最後の日に、新型の背嚢をプレゼントした程に戦いあった男が粉川だった

「あの野郎……陸に戻ったらとっちめてやる」

そんな思い出とは別に鈴村は燃えていた

「何が出会いのない職場だよ……いい女いるじゃねーかよ。どおりで呑み会とかにこないわけだ」

色々な意味で心に火を付けた鈴村の背中を『おおすみ』は引いた目線で見つめていた

「何、類ともなの？」と

第八十六話　陽の名残（後書き）

こっそり復活、色々あって疲れてるからゆっくりやってくよー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2084f/

艦魂物語,魂の軌跡～こんごう～

2011年9月12日16時32分発行